埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第422集

羽　生　市

屋 敷 裏 遺 跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第１分冊）

２０１６

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1　屋敷裏遺跡遠景（東から）

巻頭図版 2



1　屋敷裏遺跡空中写真（１面）（合成）



2　屋敷裏遺跡空中写真（２面）（合成）

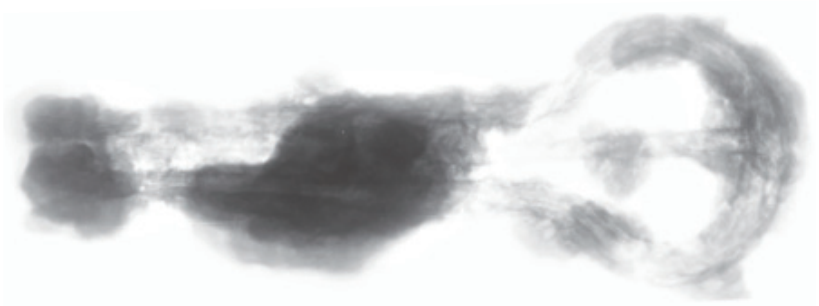


1　屋敷裏遺跡出土古墳時代前期の土師器

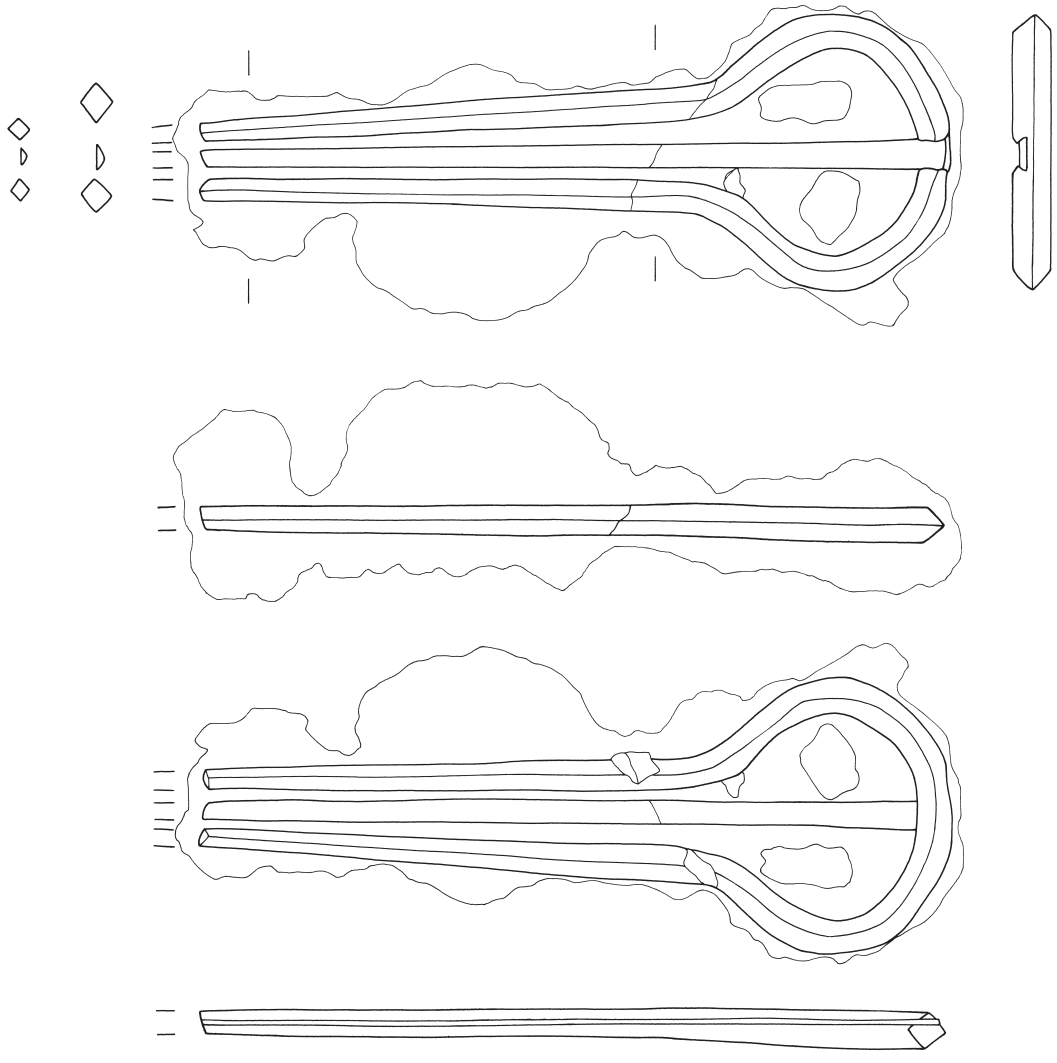


2　屋敷裏遺跡出土古墳時代後期の須恵器

巻頭図版４







1　屋敷裏遺跡の口琴

序

埼玉県北東部を流れる利根川は、坂東太郎の名で知られる関東随一の大河です。古来、農業や舟運など、流域の人々の生活に多くの恵みを与えてきました。現在でも都市用水や農業用水の主たる水源として、首都圏の社会と経済活動を支えています。

一方、利根川の堤防がひとたび決壊すれば、首都圏の中枢機能に甚大な被害をもたらす恐れがあります。国土交通省では、このような災害にそなえ、安心・安全な地域づくりのために、様々な施策を実施しています。堤防拡幅による首都圏氾濫区域堤防強化対策事業もその一つです。

事業地内の加須・羽生地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回発掘調査を行った屋敷裏遺跡もその一つです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代から古墳時代、平安時代の大規模な集落跡、鎌倉時代の墓や多数の土壙、井戸跡、溝跡などが見つかりました。古墳時代の住居跡からはほぼ完形の須恵器が、平安時代の住居跡からは金属製では国内最古級の口琴と言われる楽器が出土したことから、当時の物流を担う中心的な遺跡であることが分かりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、羽生市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成２８年３月

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　樋　田　明　男

例　言

１．本書は羽生市に所在する屋敷裏遺跡第１・２次調査の発掘調査報告書である。

２．遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

屋敷裏遺跡第１次（ＹＳＫＵＲ１次）

羽生市名 613 －１他

平成 23 年４月 11 日付け教生文第２－２号

屋敷裏遺跡第２次（ＹＳＫＵＲ２次）

羽生市名 789 －１他

平成 25 年９月 26 日付け教生文第２－ 37 号

３．発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

４．各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 23・25 年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須地区・羽生地区）における平成 23 年度埋蔵文化財発掘調査」（平成 23 年度、第１次）

「利根川上流河川改修事業における平成 25 年度埋蔵文化財発掘調査」（平成 25 年度、第２次）

整理・報告書作成事業（平成 26・27 年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における平成 26 年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における平成 27 年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

５．発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３に示した組織により実施した。

発掘調査は、第１次を平成 23 年４月５日から平成 24 年３月 31 日まで富田和夫、吉田稔、山本靖、村田健二、橋本脩平が、第２次を平成 25 年 10 月１日から平成 26 年３月 25 日まで村山卓、中村倉司が担当した。

整理報告書作成事業は、平成 26 年４月１日から平成 28 年３月 31 日まで実施し、大谷徹、岩瀬譲、福田聖が担当した。報告書は、平成 28 年３月 23 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 422 集として印刷・刊行した。

６．発掘調査における基準点測量は（株）サクラプランニング、（株）ジオプランニングに委託した。

７．発掘調査における自然科学分析は、（株）パレオラボ、（株）加速器分析研究所に委託した。

８．発掘調査における空中写真は（株）東京航業研究所、（株）新日本エグザ、（株）シン技術コンサルに委託した。

９．発掘調査における写真撮影は富田、吉田、山本、村田、橋本、村山、中村が行い、出土遺物の写真撮影は福田が行った。巻頭図版用の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

10．出土品の整理・図版作成は大谷、岩瀬、福田が行い、細田勝、黒坂禎二、吉田稔、村山の協力を得た。

11．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、Ⅳ－１の遺構を黒坂、遺物を細田が、Ⅳ－２を吉田が行い、その他を福田が行った。

12．本書の編集は福田が行った。

13．本書にかかる諸資料は平成 28 年４月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

14．発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、羽生市教育委員会、関係機関の皆様からご教示・ご協力を賜りました。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。

内山敏行　折原　覚　佐々木義則　直川礼緒
藤野一之　松本太郎　矢口孝悦

凡　例

1.遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

Ｅ－６グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝22540.000ｍ・Ｙ＝-21360.000ｍ、北緯36° 12′ 10.593″・東経139° 35′ 44.8705″である。

2．調査に際して使用したグリッドは、国家標準平面直角座標に基づく10×10ｍの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。

3．グリッドの名称は、北西隅を基点に、北から南にＡ～Ｊ、西から東に１～10とし、表記は両者を組み合わせて、Ｂ－５グリッドとした。

4．本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＢ…掘立柱建物跡
ＳＤ…溝跡　ＳＫ…土壙　ＳＥ…井戸跡
Ｐ…ピット・柱穴

5．本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。例外については、その都度縮尺を明示した。

全測図　1/300
遺構図　1/60・1/30
遺物実測図・拓影図・合成図　1/4・1/3・1/2

6.遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

須恵器は断面を黒塗りした。また、彩色された土器はその範囲に網（赤彩10%、黒色処理30%）をかけて示し、施釉陶器は釉の範囲を網（緑釉20%）で示した。

7．遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高（単位ｍ）を表す。また、遺構の計測値はｍ単位で表記した。

8.遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、ロクロ土師器、磁器、中世土器、かわらけと表記した。
・遺物計測値は土器をcm、石製品をmm、重さをｇ単位とした。
・土器計測値の（　）は復元推定値を示す。
・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石
Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子
Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子　Ｊ：針状物質
Ｋ：黒色粒子　Ｌ：その他　Ｍ：チャート
・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。
・色調は新版標準土色帖（1995年後期版）によった。
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
・備考には出土位置、注記No.、煤の付着、生産窯、年代等を記した。

9.本文中における遺物の色調は観察表とは別に、産地同定の参考とするため主観的な色調を示した。

10．本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の１/50000地形図、羽生市発行の１/2500都市計画図を編集の上、使用した。

11．文中の引用文献等は、（著者　発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目　次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

（第１分冊）

Ⅰ　発掘調査の概要……1

１．発掘調査に至る経過 …… 1

２．発掘調査・報告書作成の経過……2

３．発掘調査・報告書作成の組織……3

Ⅱ　遺跡の立地と環境……4

１．地理的環境 ……4

２．歴史的環境 ……6

Ⅲ　遺跡の概要 ……14

Ⅳ　１次調査の遺構と遺物 …… 45

１．縄文時代…… 45

（１）住居跡……45

（２）ピット群……56

（３）土壙……67

（４）ピット……72

（５）包含層……73

２．弥生時代…… 87

（１）住居跡……87

（２）方形周溝墓……87

（３）土壙……91

（４）グリッド出土遺物……97

３．古墳時代…… 99

（１）住居跡……99

（２）掘立柱建物跡 …… 332

（３）土壙…… 334

（４）井戸跡…… 342

（５）溝跡…… 342

（６）円形周溝状遺構 …… 353

（７）畠跡…… 353

（８）グリッド出土遺物 …… 355

４．平安時代……360

（１）住居跡…… 360

（２）掘立柱建物跡…… 404

（３）土壙…… 404

（４）井戸跡…… 409

（５）畠跡…… 412

（６）グリッド出土遺物…… 416

（第２分冊）

５．中近世……417

（１）土壙…… 417

（２）井戸跡…… 421

（３）溝跡…… 424

（４）ピット…… 428

（５）グリッド出土遺物…… 432

Ⅴ　第２次調査の遺構と遺物…… 435

１．縄文時代……435

２．古墳時代……435

（１）住居跡…… 435

（２）包含層…… 448

３．平安時代……466

（１）住居跡…… 466

４．中近世……471

（１）土壙…… 471

（２）井戸跡…… 472

（３）溝跡…… 472

（４）ピット…… 478

（５）グリッド出土遺物…… 478

Ⅵ　自然科学分析……479

１．火山灰分析 …… 479

２．珪藻分析…… 485
３．花粉分析……491
４．粒度分析……496
５．薄片観察……499
６．樹種同定……503
７．年代測定（１）……505
８．年代測定（２）……508
Ⅶ　調査のまとめ ……511
写真図版

挿 図 目 次

（第１分冊）

第１図　埼玉県の地形……4
第２図　周辺の地形……5
第３図　周辺の遺跡（旧石器～古墳前期）……７
第４図　周辺の遺跡（古墳後期～中近世）……８
第５図　基本土層…… 15
第６図　屋敷裏遺跡調査地点位置図 ……16
第７図　屋敷裏遺跡全体図（区割り）……18
第８図　屋敷裏遺跡全体図（両面表示）……19
第９図　屋敷裏遺跡１面全体図 …… 20
第10図　屋敷裏遺跡２面全体図 …… 21
第11図　屋敷裏遺跡全体図（縄文）…… 22
第12図　縄文分割図（１）…… 23
第13図　縄文分割図（２）…… 24
第14図　縄文分割図（３）…… 25
第15図　屋敷裏遺跡全体図（弥生・古墳前期）
……26
第16図　弥生・古墳前期分割図（１）……27
第17図　弥生・古墳前期分割図（２）……28
第18図　弥生・古墳前期分割図（３）……29
第19図　弥生・古墳前期分割図（４）……30
第20図　弥生・古墳前期分割図（５）……31
第21図　弥生・古墳前期分割図（６）……32
第22図　屋敷裏遺跡全体図（古墳後期）……33
第23図　古墳後期分割図（１）……34
第24図　古墳後期分割図（２）……35
第25図　古墳後期分割図（３）……36
第26図　古墳後期分割図（４）……37
第27図　屋敷裏遺跡全体図（平安以降）……38
第28図　平安以降分割図（１）……39
第29図　平安以降分割図（２）……40
第30図　平安以降分割図（３）……41
第31図　平安以降分割図（４）……42
第32図　平安以降分割図（５）……43
第33図　平安以降分割図（６）……44
第34図　第90号住居跡（１）……46
第35図　第90号住居跡（２）……47
第36図　第90号住居跡出土遺物（１）…… 47
第37図　第90号住居跡出土遺物（２）…… 48
第38図　第90号住居跡出土遺物（３）…… 49
第39図　第91・94号住居跡（１）……50
第40図　第91・94号住居跡（２）……51
第41図　第91号住居跡出土遺物（１）…… 52
第42図　第91号住居跡出土遺物（２）…… 53
第43図　第94号住居跡出土遺物……54
第44図　第92号住居跡……55
第45図　第92号住居跡出土遺物……55
第46図　第93号住居跡……56
第47図　第93号住居跡出土遺物…… 56
第48図　第１号ピット群…… 59
第49図　第１号ピット群出土遺物 …… 59
第50図　第２号ピット群…… 60
第51図　第３号ピット群…… 61
第52図　第４号ピット群…… 61
第53図　第５号ピット群…… 62
第54図　第６号ピット群…… 63
第55図　第７号ピット群…… 64
第56図　第８号ピット群…… 64

第57図　第９号ピット群…… 65
第58図　第10号ピット群……66
第59図　第11号ピット群……66
第60図　第52～57・60・65・66号土壙…… 68
第61図　第67～83号土壙…… 69
第62図　第84～96号土壙…… 70
第63図　１次土壙出土縄文土器…… 71
第64図　第57号土壙出土石器…… 72
第65図　１次縄文ピット（１）……73
第66図　１次縄文ピット（２）……74
第67図　１次縄文包含層…… 75
第68図　１次グリッド出土縄文土器（１）……78
第69図　１次グリッド出土縄文土器（２）……79
第70図　１次グリッド出土縄文土器（３）……80
第71図　１次グリッド出土縄文土器（４）……81
第72図　１次グリッド出土縄文土器（５）……82
第73図　１次グリッド出土縄文土器（６）……83
第74図　１次グリッド出土縄文土器（７）……84
第75図　１次グリッド出土縄文石器…… 85
第76図　第40号住居跡……88
第77図　第１号方形周溝墓…… 89
第78図　第１号方形周溝墓と方台部…… 90
第79図　方形周溝墓と土壙の配置…… 91
第80図　第１号方形周溝墓出土遺物…… 91
第81図　第５・６・22～26号土壙……92
第82図　第１・21号土壙…… 93
第83図　１次土壙出土弥生遺物（１）……95
第84図　１次土壙出土弥生遺物（２）……96
第85図　１次グリッド出土弥生遺物…… 98
第86図　第１・２号住居跡（１）…… 100
第87図　第１・２号住居跡（２）…… 101
第88図　第１・２号住居跡（３）…… 102
第89図　第１号住居跡出土遺物（１）…… 103
第90図　第１号住居跡出土遺物（２）…… 104
第91図　第１号住居跡出土遺物（３）…… 105
第92図　第２号住居跡出土遺物…… 107
第93図　第４号住居跡……108
第94図　第６号住居跡（１）…… 109
第95図　第６号住居跡（２）…… 110
第96図　第６号住居跡（３）…… 111
第97図　第６号住居跡（４）…… 111
第98図　第６号住居跡出土遺物（１）…… 112
第99図　第６号住居跡出土遺物（２）…… 113
第100図　第６号住居跡出土遺物（３）…… 114
第101図　第６号住居跡出土遺物（４）…… 115
第102図　第６号住居跡出土遺物（５）…… 116
第103図　第６号住居跡出土遺物（６）…… 117
第104図　第７号住居跡……121
第105図　第７号住居跡出土遺物…… 122
第106図　第９号住居跡……124
第107図　第９号住居跡出土遺物…… 125
第108図　第10号住居跡（１）…… 128
第109図　第10号住居跡（２）…… 129
第110図　第10号住居跡（３）…… 130
第111図　第10号住居跡出土遺物（１）…… 131
第112図　第10号住居跡出土遺物（２）…… 132
第113図　第10号住居跡出土遺物（３）…… 133
第114図　第12号住居跡（１）…… 135
第115図　第12号住居跡（２）…… 136
第116図　第12号住居跡出土遺物（１）…… 137
第117図　第12号住居跡出土遺物（２）…… 138
第118図　第13号住居跡（１）…… 140
第119図　第13号住居跡（２）…… 141
第120図　第13号住居跡出土遺物（１）…… 142
第121図　第13号住居跡出土遺物（２）…… 143
第122図　第13号住居跡出土遺物（３）…… 144
第123図　第13号住居跡出土遺物（４）…… 145
第124図　第14号住居跡…… 150
第125図　第14号住居跡出土遺物…… 151
第126図　第15号住居跡…… 152
第127図　第15号住居跡出土遺物…… 153
第128図　第18号住居跡…… 154
第129図　第18号住居跡出土遺物…… 155
第130図　第20号住居跡（１）…… 157

第131図　第20号住居跡（２）…… 158
第132図　第20号住居跡出土遺物…… 159
第133図　第21号住居跡（１）…… 160
第134図　第21号住居跡（２）…… 161
第135図　第21号住居跡出土遺物（１）…… 162
第136図　第21号住居跡出土遺物（２）…… 163
第137図　第22号住居跡…… 166
第138図　第22号住居跡出土遺物…… 167
第139図　第23号住居跡…… 169
第140図　第23号住居跡出土遺物（１）…… 170
第141図　第23号住居跡出土遺物（２）…… 171
第142図　第23号住居跡出土遺物（３）…… 172
第143図　第24号住居跡（１）…… 175
第144図　第24号住居跡（２）…… 176
第145図　第24号住居跡（３）…… 177
第146図　第24号住居跡出土遺物（１）…… 178
第147図　第24号住居跡出土遺物（２）…… 179
第148図　第24号住居跡出土遺物（３）…… 180
第149図　第24号住居跡出土遺物（４）…… 181
第150図　第24号住居跡出土遺物（５）…… 182
第151図　第24号住居跡出土遺物（６）…… 183
第152図　第25号住居跡…… 189
第153図　第25号住居跡出土遺物…… 190
第154図　第26号住居跡…… 191
第155図　第26号住居跡出土遺物…… 192
第156図　第27号住居跡…… 194
第157図　第28号住居跡…… 196
第158図　第28号住居跡出土遺物…… 197
第159図　第29号住居跡（１）…… 199
第160図　第29号住居跡（２）…… 200
第161図　第29号住居跡出土遺物（１）…… 201
第162図　第29号住居跡出土遺物（２）…… 202
第163図　第30号住居跡…… 204
第164図　第30号住居跡出土遺物（１）…… 205
第165図　第30号住居跡出土遺物（２）…… 206
第166図　第32号住居跡…… 208
第167図　第32号住居跡出土遺物…… 208
第168図　第33号住居跡出土遺物…… 209
第169図　第33号住居跡…… 210
第170図　第34号住居跡…… 212
第171図　第34号住居跡出土遺物（１）…… 213
第172図　第34号住居跡出土遺物（２）…… 214
第173図　第35号住居跡…… 215
第174図　第35号住居跡出土遺物…… 215
第175図　第36号住居跡…… 216
第176図　第36号住居跡出土遺物…… 216
第177図　第37号住居跡…… 217
第178図　第37号住居跡出土遺物…… 218
第179図　第38号住居跡出土遺物…… 218
第180図　第38号住居跡…… 218
第181図　第39号住居跡…… 219
第182図　第39号住居跡出土遺物…… 220
第183図　第43号住居跡…… 222
第184図　第43号住居跡出土遺物（１）…… 223
第185図　第43号住居跡出土遺物（２）…… 224
第186図　第43号住居跡出土遺物（３）…… 225
第187図　第54号住居跡…… 229
第188図　第54号住居跡出土遺物…… 230
第189図　第58号住居跡（１）…… 232
第190図　第58号住居跡（２）…… 233
第191図　第58号住居跡出土遺物…… 234
第192図　第59号住居跡…… 235
第193図　第61号住居跡…… 236
第194図　第61号住居跡出土遺物…… 236
第195図　第62号住居跡…… 237
第196図　第62号住居跡出土遺物…… 238
第197図　第63号住居跡…… 239
第198図　第63号住居跡出土遺物…… 240
第199図　第64号住居跡（１）…… 241
第200図　第64号住居跡（２）…… 242
第201図　第64号住居跡出土遺物（１）…… 243
第202図　第64号住居跡出土遺物（２）…… 244
第203図　第66号住居跡…… 248
第204図　第66号住居跡出土遺物（１）…… 249

第205図　第66号住居跡出土遺物（２）…… 250
第206図　第66号住居跡出土遺物（３）…… 251
第207図　第67号住居跡（１）…… 254
第208図　第67号住居跡（２）…… 255
第209図　第67号住居跡出土遺物（１）…… 256
第210図　第67号住居跡出土遺物（２）…… 257
第211図　第67号住居跡出土遺物（３）…… 258
第212図　第68号住居跡…… 261
第213図　第68号住居跡出土遺物…… 261
第214図　第69号住居跡…… 263
第215図　第69号住居跡遺物分布…… 264
第216図　第69号住居跡出土遺物（１）…… 265
第217図　第69号住居跡出土遺物（２）…… 266
第218図　第70号住居跡…… 268
第219図　第70号住居跡出土遺物（１）…… 269
第220図　第70号住居跡出土遺物（２）…… 270
第221図　第72号住居跡…… 272
第222図　第72号住居跡出土遺物…… 272
第223図　第73号住居跡出土遺物…… 273
第224図　第73号住居跡…… 274
第225図　第74・83号住居跡…… 275
第226図　第74号住居跡出土遺物（１）…… 276
第227図　第74号住居跡出土遺物（２）…… 277
第228図　第75号住居跡出土遺物…… 278
第229図　第75号住居跡…… 279
第230図　第76号住居跡…… 281
第231図　第76号住居跡出土遺物（１）…… 282
第232図　第76号住居跡出土遺物（２）…… 283
第233図　第77号住居跡…… 286
第234図　第77号住居跡出土遺物…… 287
第235図　第78号住居跡…… 289
第236図　第78号住居跡出土遺物（１）…… 290
第237図　第78号住居跡出土遺物（２）…… 291
第238図　第79号住居跡…… 294
第239図　第79号住居跡出土遺物（１）…… 295
第240図　第79号住居跡出土遺物（２）…… 296
第241図　第80号住居跡…… 299
第242図　第80号住居跡出土遺物（１）…… 300
第243図　第80号住居跡出土遺物（２）…… 301
第244図　第81号住居跡…… 304
第245図　第81号住居跡出土遺物…… 305
第246図　第82号住居跡…… 307
第247図　第82号住居跡出土遺物…… 308
第248図　第83号住居跡出土遺物…… 309
第249図　第84号住居跡…… 310
第250図　第84号住居跡出土遺物（１）…… 311
第251図　第84号住居跡出土遺物（２）…… 312
第252図　第85号住居跡…… 315
第253図　第85号住居跡出土遺物（１）…… 316
第254図　第85号住居跡出土遺物（２）…… 317
第255図　第85号住居跡出土遺物（３）…… 318
第256図　第86号住居跡…… 321
第257図　第86号住居跡出土遺物…… 322
第258図　第87号住居跡出土遺物…… 324
第259図　第87号住居跡…… 324
第260図　第88号住居跡…… 326
第261図　第88号住居跡出土遺物…… 327
第262図　第89号住居跡…… 329
第263図　第89号住居跡出土遺物…… 329
第264図　第95号住居跡…… 330
第265図　第95号住居跡出土遺物…… 331
第266図　第１号掘立柱建物跡……332
第267図　第３号掘立柱建物跡……333
第268図　第３号掘立柱建物跡出土遺物…… 334
第269図　第２・８～11・20・28・32・34・35・37・38・42・44～46号土壙…… 336
第270図　第51・58号土壙…… 337
第271図　第３・４・12～15・18・19号土壙……338
第272図　第16号土壙…… 339
第273図　１次古墳土壙出土遺物……340
第274図　第１～３・６・７号井戸跡…… 343
第275図　第２・３・６号井戸跡出土遺物…… 343
第276図　第６号溝跡……345

第277図　第８号溝跡……345
第278図　第９号溝跡……346
第279図　第 10 号溝跡全景…… 346
第280図　第 10 号溝跡…… 347
第281図　第 12・34 号溝跡…… 348
第282図　第６・８・10・12 号溝跡出土遺物…349
第283図　第 29 号溝跡…… 350
第284図　第 29 号溝跡出土遺物…… 351
第285図　第１号円形周溝状遺構……352
第286図　第１号畠跡……354
第287図　第１号畠跡出土遺物……355
第288図　第２号畠跡……355
第289図　１次グリッド出土古墳遺物（１）… 358
第290図　１次グリッド出土古墳遺物（２）… 359
第291図　第３号住居跡……360
第292図　第３号住居跡出土遺物……361
第293図　第５号住居跡……362
第294図　第５号住居跡出土遺物……362
第295図　第８号住居跡……363
第296図　第８号住居跡出土遺物……364
第297図　第 11 号住居跡…… 366
第298図　第 16 号住居跡…… 367
第299図　第 16 号住居跡出土遺物…… 367
第300図　第 17 号住居跡…… 368
第301図　第 17 号住居跡出土遺物…… 369
第302図　第 19 号住居跡…… 370
第303図　第 19 号住居跡出土遺物…… 371
第304図　第 31 号住居跡…… 371
第305図　第 31 号住居跡出土遺物…… 372
第306図　第 41 号住居跡…… 373
第307図　第 41 号住居跡遺物分布…… 374
第308図　第 41 号住居跡出土遺物…… 374
第309図　第 42 号住居跡…… 375
第310図　第 42 号住居跡出土遺物…… 376
第311図　第 44 号住居跡…… 378
第312図　第 44 号住居跡出土遺物…… 379
第313図　第 45 号住居跡…… 380
第314図　第 45 号住居跡出土遺物（１）…… 381
第315図　第 45 号住居跡出土遺物（２）…… 382
第316図　第 46 号住居跡…… 383
第317図　第 46 号住居跡出土遺物…… 384
第318図　第 47 号住居跡…… 385
第319図　第 47 号住居跡出土遺物…… 386
第320図　第 48 号住居跡…… 388
第321図　第 48 号住居跡出土遺物…… 389
第322図　第 49 号住居跡…… 389
第323図　第 49 号住居跡出土遺物…… 390
第324図　第 50 号住居跡…… 391
第325図　第 50 号住居跡出土遺物…… 391
第326図　第 51 号住居跡…… 392
第327図　第 51 号住居跡出土遺物…… 393
第328図　第 52 号住居跡…… 335
第329図　第 52 号住居跡出土遺物…… 396
第330図　第 53 号住居跡…… 397
第331図　第 53 号住居跡出土遺物…… 398
第332図　第 55 号住居跡出土遺物…… 399
第333図　第 55・71 号住居跡…… 400
第334図　第 71 号住居跡出土遺物…… 401
第335図　第 56 号住居跡…… 402
第336図　第 56 号住居跡出土遺物…… 402
第337図　第 57 号住居跡…… 403
第338図　第 57 号住居跡出土遺物…… 403
第339図　第２号掘立柱建物跡……405
第340図　第 27・29 ～ 31・33・36・39 ～ 41・43・47・48 号土壙……407
第341図　１次土壙出土平安遺物……408
第342図　第４・５・10・13 ～ 15 号井戸跡… 410
第343図　第４・５・15 号井戸跡出土遺物……411
第344図　第３・４・６号畠跡……413
第345図　第３・４・５号畠跡出土遺物…… 414
第346図　第５号畠跡……415
第347図　１次グリッド出土平安遺物…… 416
（第２分冊）
第348図　第 49・50 号土壙…… 418

第349図　第49号土壙出土遺物（１）…… 419
第350図　第49号土壙出土遺物（２）…… 420
第351図　第８・９・11・12・16～18号井戸跡
……421
第352図　第８・９・16号井戸跡出土遺物……422
第353図　第21号溝跡…… 425
第354図　第11・25・32号溝跡…… 426
第355図　第26号溝跡…… 427
第356図　第11・32号溝跡出土遺物……428
第357図　１次中近世グリッドピット（１）… 429
第358図　１次中近世グリッドピット（２）… 430
第359図　１次中近世グリッドピット（３）… 431
第360図　１次中近世グリッドピット（４）… 432
第361図　１次グリッド出土中近世遺物…… 433
第362図　２次グリッド出土縄文石器…… 435
第363図　第97号住居跡（１）…… 436
第364図　第97号住居跡（２）…… 437
第365図　第97号住居跡出土遺物（１）…… 438
第366図　第97号住居跡出土遺物（２）…… 439
第367図　第98号住居跡…… 443
第368図　第100号住居跡……444
第369図　第100号住居跡出土遺物……444
第370図　第101号住居跡出土遺物……445
第371図　第101号住居跡……446
第372図　第102号住居跡……447
第373図　第102号住居跡出土遺物……448
第374図　２次土器包含層……449
第375図　２次トレンチ……449
第376図　第１号土器集中……450
第377図　第１号土器集中出土遺物（１）…… 451
第378図　第１号土器集中出土遺物（２）…… 452
第379図　第２号土器集中……455
第380図　第２号土器集中出土遺物（１）…… 456
第381図　第２号土器集中出土遺物（２）…… 457
第382図　第３号土器集中……459
第383図　第３号土器集中出土遺物（１）…… 460
第384図　第３号土器集中出土遺物（２）…… 461
第385図　包含層土器出土状況……462
第386図　２次グリッド出土古墳遺物（１）… 463
第387図　２次グリッド出土古墳遺物（２）… 464
第388図　２次グリッド出土古墳遺物（３）… 465
第389図　第96号住居跡…… 467
第390図　第96号住居跡出土遺物…… 468
第391図　第99号住居跡…… 479
第392図　第99号住居跡出土遺物…… 470
第393図　第61～64号土壙……471
第394図　第64号土壙出土遺物……472
第395図　第19号井戸跡…… 472
第396図　第46号溝跡…… 474
第397図　第46号溝跡出土遺物…… 475
第398図　第47・48号溝跡…… 476
第399図　第47・48号溝跡出土遺物…… 477
第400図　２次中近世グリッドピット…… 478
第401図　２次グリッド出土中近世遺物…… 478
第402図　基本土層４φ篩残渣中および住居跡覆土
中軽石の屈折率測定結果…… 482
第403図　基本層序堆積物中の粒子（4 φ篩残渣）
中の顕微鏡写真……483
第404図　住居跡覆土中の白色軽石と顕微鏡写真
……484
第405図　基本層序および住居跡覆土堆積物中の珪
藻化石分布図……489
第406図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真… 490
第407図　試料採取場所の柱状図……494
第408図　屋敷裏遺跡から産出した花粉化石… 495
第409図　基本層序堆積物と住居跡覆土の頻度およ
び累積頻度分布図……498
第410図　堆積物薄片中の粒子の偏光顕微鏡写真
……502
第411図　炭化材……504
第412図　暦年較正結果……507
第413図　暦年較正年代グラフ…… 510
第414図　屋敷裏遺跡の変遷図…… 515

表 目 次

（第１分冊）

第１表　周辺の主要遺跡…… 9
第２表　第90号住居跡出土石器観察表…… 49
第３表　第91号住居跡出土石器観察表…… 53
第４表　ピット群一覧表…… 57
第５表　１次縄文土壙一覧表…… 67
第６表　第57号土壙出土石器観察表…… 72
第７表　１次縄文ピット一覧表…… 72
第８表　グリッド出土縄文石器観察表…… 86
第９表　１次弥生土壙一覧表…… 93
第10表　第１号住居跡出土遺物観察表…… 106
第11表　第２号住居跡出土遺物観察表…… 107
第12表　第６号住居跡出土遺物観察表…… 117
第13表　第７号住居跡出土遺物観察表…… 123
第14表　第９号住居跡出土遺物観察表…… 126
第15表　第10号住居跡出土遺物観察表…… 134
第16表　第12号住居跡出土遺物観察表…… 139
第17表　第13号住居跡出土遺物観察表…… 146
第18表　第14号住居跡出土遺物観察表…… 149
第19表　第15号住居跡出土遺物観察表…… 153
第20表　第18号住居跡出土遺物観察表…… 155
第21表　第20号住居跡出土遺物観察表…… 156
第22表　第21号住居跡出土遺物観察表…… 164
第23表　第22号住居跡出土遺物観察表…… 168
第24表　第23号住居跡出土遺物観察表…… 173
第25表　第24号住居跡出土遺物観察表…… 184
第26表　第25号住居跡出土遺物観察表…… 189
第27表　第26号住居跡出土遺物観察表…… 193
第28表　第28号住居跡出土遺物観察表…… 198
第29表　第29号住居跡出土遺物観察表…… 203
第30表　第30号住居跡出土遺物観察表…… 207
第31表　第32号住居跡出土遺物観察表…… 208
第32表　第33号住居跡出土遺物観察表…… 209
第33表　第34号住居跡出土遺物観察表…… 214
第34表　第35号住居跡出土遺物観察表…… 215
第35表　第36号住居跡出土遺物観察表…… 216
第36表　第37号住居跡出土遺物観察表…… 218
第37表　第38号住居跡出土遺物観察表…… 218
第38表　第39号住居跡出土遺物観察表…… 221
第39表　第43号住居跡出土遺物観察表…… 226
第40表　第54号住居跡出土遺物観察表…… 228
第41表　第58号住居跡出土遺物観察表…… 231
第42表　第61号住居跡出土遺物観察表…… 236
第43表　第62号住居跡出土遺物観察表…… 238
第44表　第63号住居跡出土遺物観察表…… 240
第45表　第64号住居跡出土遺物観察表…… 245
第46表　第66号住居跡出土遺物観察表…… 252
第47表　第67号住居跡出土遺物観察表…… 259
第48表　第68号住居跡出土遺物観察表…… 262
第49表　第69号住居跡出土遺物観察表…… 267
第50表　第70号住居跡出土遺物観察表…… 270
第51表　第72号住居跡出土遺物観察表…… 273
第52表　第73号住居跡出土遺物観察表…… 273
第53表　第74号住居跡出土遺物観察表…… 277
第54表　第75号住居跡出土遺物観察表…… 279
第55表　第76号住居跡出土遺物観察表…… 284
第56表　第77号住居跡出土遺物観察表…… 288
第57表　第78号住居跡出土遺物観察表…… 292
第58表　第79号住居跡出土遺物観察表…… 296
第59表　第80号住居跡出土遺物観察表…… 302
第60表　第81号住居跡出土遺物観察表…… 306
第61表　第82号住居跡出土遺物観察表…… 308
第62表　第83号住居跡出土遺物観察表…… 309
第63表　第84号住居跡出土遺物観察表…… 312
第64表　第85号住居跡出土遺物観察表…… 319
第65表　第86号住居跡出土遺物観察表…… 323
第66表　第87号住居跡出土遺物観察表…… 324
第67表　第88号住居跡出土遺物観察表…… 328
第68表　第89号住居跡出土遺物観察表…… 330
第69表　第95号住居跡出土遺物観察表…… 331

第70表　第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表……334
第71表　１次古墳土壙一覧表……335
第72表　１次古墳土壙出土遺物観察表…… 341
第73表　第２・３・６号井戸跡出土遺物観察表……343
第74表　１次古墳溝跡一覧表……344
第75表　第６・８・10・12号溝跡出土遺物観察表……349
第76表　第29号溝跡出土遺物観察表…… 352
第77表　１次古墳畠跡一覧表……353
第78表　第１号畠跡出土遺物観察表…… 354
第79表　１次グリッド出土古墳遺物観察表… 356
第80表　第３号住居跡出土遺物観察表…… 361
第81表　第５号住居跡出土遺物観察表…… 362
第82表　第８号住居跡出土遺物観察表…… 365
第83表　第16号住居跡出土遺物観察表…… 368
第84表　第17号住居跡出土遺物観察表…… 369
第85表　第19号住居跡出土遺物観察表…… 371
第86表　第31号住居跡出土遺物観察表…… 372
第87表　第41号住居跡出土遺物観察表…… 374
第88表　第42号住居跡出土遺物観察表…… 377
第89表　第44号住居跡出土遺物観察表…… 379
第90表　第45号住居跡出土遺物観察表…… 381
第91表　第46号住居跡出土遺物観察表…… 384
第92表　第47号住居跡出土遺物観察表…… 387
第93表　第48号住居跡出土遺物観察表…… 389
第94表　第49号住居跡出土遺物観察表…… 390
第95表　第50号住居跡出土遺物観察表…… 391
第96表　第51号住居跡出土遺物観察表…… 394
第97表　第52号住居跡出土遺物観察表…… 396
第98表　第53号住居跡出土遺物観察表…… 398
第99表　第55号住居跡出土遺物観察表…… 399
第100表　第71号住居跡出土遺物観察表…… 401
第101表　第56号住居跡出土遺物観察表…… 402
第102表　第57号住居跡出土遺物観察表…… 403
第103表　１次平安土壙一覧表……406
第104表　１次平安土壙出土遺物観察表…… 409
第105表　第４・５・15号井戸跡出土遺物観察表……411
第106表　１次平安畠跡一覧表……412
第107表　第３～５号畠跡出土遺物観察表…… 414
第108表　１次グリッド出土平安遺物観察表… 416
（第２分冊）
第109表　１次中近世土壙一覧表……417
第110表　第49号土壙出土遺物観察表…… 419
第111表　第８・９・16井戸跡出土遺物観察表……423
第112表　１次中近世溝跡一覧表…… 424
第113表　第11・32号溝跡出土遺物観察表……428
第114表　１次中近世ピット一覧表…… 430
第115表　１次グリッド出土中近世遺物観察表……434
第116表　２次グリッド出土縄文石器観察表……435
第117表　第97号住居跡出土遺物観察表…… 440
第118表　第100号住居跡出土遺物観察表…… 444
第119表　第101号住居跡出土遺物観察表…… 445
第120表　第102号住居跡出土遺物観察表…… 448
第121表　第１号土器集中出土遺物観察表…… 452
第122表　第２号土器集中出土遺物観察表…… 458
第123表　第３号土器集中出土遺物観察表…… 461
第124表　２次グリッド出土古墳遺物観察表… 465
第125表　第96号住居跡出土遺物観察表…… 468
第126表　第99号住居跡出土遺物観察表…… 470
第127表　２次中近世土壙一覧表……471
第128表　第64号土壙出土遺物観察表……471
第129表　２次中近世溝跡一覧表……473
第130表　第46号溝跡出土遺物観察表…… 473
第131表　第47・48号溝跡出土遺物観察表… 477
第132表　２次中近世ピット一覧表…… 478
第133表　２次グリッド出土中近世遺物観察表……478

第134表　テフラ分析を行った試薬とその詳細……479
第135表　テフラ試料の湿式篩分け結果…… 480
第136表　４φ篩残渣中の軽鉱物組成…… 480
第137表　珪藻分析を行った試料とその詳細… 485
第138表　堆積物中の珪藻化石産出表（１）… 488
第139表　堆積物中の珪藻化石産出表（２）… 489
第140表　分析試料一覧表……491
第141表　産出花粉化石一覧……492
第142表　粒度分析を行った試料とその詳細… 496
第143表　基本土層堆積物および住居跡覆土の湿式篩分けによる粒度分析結果……496
第144表　各試料の粒度分析結果……497
第145表　粒度分析の統計指標……497
第146表　分級度、歪み度、尖度の評価…… 497
第147表　薄片観察を行った試料とその詳細… 499
第148表　薄片中の微化石類と砂粒組成の特徴……501
第149表　堆積物薄片中の砂粒の特徴一覧表… 501
第150表　樹種同定結果……503
第151表　測定試料および処理……505
第152表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……506
第153表　放射性炭素年代測定結果（１）…… 510
第154表　放射性炭素年代測定結果（２）…… 510

写 真 図 版 目 次

巻頭図版１　１　屋敷裏遺跡遠景（東から）
巻頭図版２　１　屋敷裏遺跡空中写真（１面）
　　２　屋敷裏遺跡空中写真（２面）
巻頭図版３　１　屋敷裏遺跡出土古墳時代前期の土師器
　　２　屋敷裏遺跡出土古墳時代後期の須恵器
巻頭図版４　１　屋敷裏遺跡の口琴

図版１　１　屋敷裏遺跡空中写真（１面）（南東から）
　　２　屋敷裏遺跡空中写真（２面）（南東から）
図版２　１　屋敷裏遺跡遠景（１）（北西から）
　　２　屋敷裏遺跡遠景（２）（南東から）
図版３　１　屋敷裏遺跡遠景（３）（北東から）
　　２　屋敷裏遺跡遠景（４）（南から）
図版４　１　Ａ・Ｂ区近景（１面）（１）
　　２　Ａ・Ｂ区近景（１面）（２）（東から）
図版５　１　Ａ区近景（２面）・Ｂ～Ｄ区近景（１面）（１）
　　２　Ａ区近景（２面）・Ｂ～Ｄ区近景（１面）（２）（東から）
図版６　１　Ｂ～Ｄ区近景（２面）（１）
　　２　Ｂ～Ｄ区近景（２面）（２）（東から）
図版７　１　Ｅ区近景（１面）（１）
　　２　Ｅ区近景（１面）（２）（東から）
図版８　１　Ｅ区近景（２面）（１）
　　２　Ｅ区近景（２面）（２）（東から）
図版９　１　Ａ・Ｂ区全景（１面）（南東から）
　　２　Ａ区全景（１面）（１）（南東から）
　　３　Ａ区全景（１面）（２）
　　第 20 号住居跡付近（南東から）
図版 10　１　Ｂ区全景（１面）（１）（南東から）
　　２　Ｂ区全景（１面）（２）（北西から）
　　３　Ｄ区全景（１面）（北西から）
図版 11　１　Ａ・Ｂ区全景（２面）（北西から）
　　２　Ａ区全景（２面）縄文包含層付近（南から）
　　３　Ｂ～Ｄ区全景（２面）（１）（南東から）
図版 12　１　Ｂ～Ｄ区全景（２面）（２）（東から）
　　２　Ｂ区全景（２面）（１）（北から）
　　３　Ｂ区全景（２面）（２）（南東から）
図版 13　１　Ｂ・Ｃ区全景（２面）（１）（北西から）
　　２　Ｂ・Ｃ区全景（２面）（２）（北西から）
　　３　Ｂ・Ｃ区全景（２面）（３）（南東から）
図版 14　１　Ｃ区全景（２面）（南東から）
　　２　Ｄ区全景（２面）（１）（西から）
　　３　Ｄ区全景（２面）（２）（南東から）
図版 15　１　Ｄ区全景（２面）（３）（北西から）
　　２　Ｅ区全景（１面）（１）（南東から）
　　３　Ｅ区全景（１面）（２）（南から）
図版 16　１　Ｅ区全景（１面）（３）（北西から）
　　２　Ｅ区全景（１面）（４）（南から）
　　３　Ｅ区全景（１面）（５）
　　第 99 号住居跡付近（北東から）
図版 17　１　Ｅ区全景（２面）（１）（北から）
　　２　Ｅ区全景（２面）（２）（南東から）
　　３　Ｅ区全景（２面）（３）（西から）
図版 18　１　第１号住居跡（南東から）
　　２　第１号住居跡遺物出土状況（カマド）
　　３　第１号住居跡遺物出土状況（１）（東から）
　　４～８　第１号住居跡遺物出土状況（２）～（６）
図版 19　１～５　第１号住居跡遺物出土状況（７）～（11）
　　６　第３号住居跡（西から）
　　７・８　第３号住居跡カマド（１）・（２）

図版20　1・2　第３号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
3　第４号住居跡（南東から）
4　第５号住居跡（南東から）
5　第６号住居跡（南東から）
6～8　第６号住居跡カマド（１）～（３）
図版21　1　第６号住居跡カマド（４）
2・3　第６号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（１）・（２）
4　第６号住居跡Ｐ４遺物出土状況
5～8　第６号住居跡遺物出土状況（１）～（４）
図版22　1～8　第６号住居跡遺物出土状況（５）～（12）
図版23　1　第６号住居跡遺物出土状況（13）
2　第７号住居跡（南東から）
3　第７号住居跡カマド
4　第７号住居跡遺物出土状況
5　第８号住居跡（南西から）
6～8　第８号住居跡カマド（１）～（３）
図版24　1　第８号住居跡カマド袖断面
2　第８号住居跡遺物出土状況
3　第８号住居跡カマド煙道部
4　第９号住居跡（南東から）
5　第９号住居跡カマド
6　第９号住居跡カマド袖断面
7　第９号住居跡カマド煙道部
8　第９号住居跡遺物出土状況（１）
図版25　1～6　第９号住居跡遺物出土状況（２）～（７）
7　第10号住居跡（南東から）
8　第10号住居跡土層堆積状況
図版26　1　第10号住居跡カマド２
2～7　第10号住居跡カマド２遺物出土状況（１）～（６）
8　第10号住居跡Ｐ２遺物出土状況
図版27　1　第10号住居跡Ｐ３遺物出土状況
2　第10号住居跡Ｐ４遺物出土状況
3～5　第10号住居跡遺物出土状況（１）～（３）
6　第11号住居跡（南から）
7　第12号住居跡（北東から）
8　第12号住居跡カマド
図版28　1　第12号住居跡カマド袖断面
2　第12号住居跡貯蔵穴
3～5　第12号住居跡遺物出土状況（１）～（３）
6　第12号住居跡右側壁崩落部完掘状況
7　第12号住居跡右側壁崩落部状況
8　第13号住居跡（南東から）
図版29　1　第13号住居跡土層堆積状況
2　第13号住居跡カマド
3～6　第13号住居跡カマド遺物出土状況（１）～（４）
7・8　第13号住居跡カマド袖内遺物出土状況（１）・（２）
図版30　1　第13号住居跡カマド袖内遺物出土状況（３）
2～8　第13号住居跡遺物出土状況（１）～（７）
図版31　1　第13号住居跡遺物出土状況（８）
2　第14号住居跡（北東から）
3　第14号住居跡カマド
4　第14号住居跡カマド袖断面
5～8　第14号住居跡遺物出土状況（１）～（４）
図版32　1　第14号住居跡遺物出土状況（５）
2　第15号住居跡（南東から）
3・4　第15号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
5　第16号住居跡（南西から）
6　第16号住居跡カマド
7　第17号住居跡（南西から）

8　第17号住居跡カマド

図版33　1　第17号住居跡Ｐ１遺物出土状況

2　第18号住居跡（南東から）

3　第18号住居跡炉跡１断面

4　第18号住居跡炉跡２断面

5・6　第18号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況（1）・（2）

7・8　第18号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）

図版34　1　第19号住居跡（南西から）

2　第20号住居跡（北東から）

3　第20号住居跡Ｐ１

4～7　第20号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）

8　第21号住居跡（南から）

図版35　1・2　第21号住居跡カマド（1）・（2）

3　第21号住居跡カマド袖断面

4　第21号住居跡貯蔵穴

5～8　第21号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）

図版36　1　第22号住居跡（南東から）

2　第22号住居跡カマド

3～5　第22号住居跡遺物出土状況
（1）～（3）

6　第23号住居跡（南から）

7・8　第23号住居跡カマド（1）・（2）

図版37　1　第23号住居跡カマド（3）

2～6　第23号住居跡カマド袖断割
（1）～（5）

7・8　第23号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）

図版38　1　第24号住居跡（南西から）

2・3　第24号住居跡炉跡（1）・（2）

4　第24号住居跡Ｐ１遺物出土状況

5～8　第24号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）

図版39　1～3　第24号住居跡遺物出土状況
（5）～（7）

4　第25号住居跡（南西から）

5～8　第25号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）

図版40　1　第26号住居跡（南西から）

2～4　第26号住居跡遺物出土状況
（1）～（3）

5　第27号住居跡（南東から）

6　第28号住居跡（南東から）

7・8　第28号住居跡炉跡（1）・（2）

図版41　1～3　第28号住居跡遺物出土状況
（1）～（3）

4　第29号住居跡（南東から）

5　第29号住居跡カマド

6　第29号住居跡カマド脇灰溜り

7　第29号住居跡貯蔵穴

8　第29号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

図版42　1　第29号住居跡土壙１焼土溜り

2・3　第29号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）

4　第30号住居跡（南東から）

5～8　第30号住居跡カマド
（1）～（4）

図版43　1　第30号住居跡カマド（5）

2・3　第30号住居跡出入口（1）・（2）

4～8　第30号住居跡遺物出土状況
（1）～（5）

図版44　1・2　第30号住居跡遺物出土状況
（6）・（7）

3　第31号住居跡（南西から）

4　第32号住居跡（南西から）

5　第33号住居跡（南西から）

6　第33号住居跡炉跡

7　第33号住居跡遺物出土状況

8　第34号住居跡（北東から）

図版45　1～5　第34号住居跡遺物出土状況（1）～（5）
6　第35号住居跡（北東から）
7　第36号住居跡（南西から）
8　第37号住居跡（南東から）
図版46　1　第38号住居跡（南西から）
2　第38号住居跡遺物出土状況
3　第39号住居跡（北西から）
4　第40号住居跡（南東から）
5　第41号住居跡（北西から）
6　第41号住居跡カマド1
7　第41号住居跡カマド2
8　第41号住居跡遺物出土状況（1）
図版47　1～3　第41号住居跡出土遺物状況（2）～（4）
4　第42号住居跡（南西から）
5　第42号住居跡カマド
6～8　第42号住居跡遺物出土状況（1）～（3）
図版48　1　第43号住居跡（東から）
2～5　第43号住居跡遺物出土状況（1）～（4）
6　第44号住居跡（南から）
7　第44号住居跡カマド
8　第44号住居跡突出部断面
図版49　1　第45号住居跡（西から）
2　第45号住居跡カマド
3～5　第45号住居跡遺物出土状況（1）～（3）
6　第45号住居跡口琴出土状況
7　第46号住居跡（北西から）
8　第46号住居跡カマド（1）
図版50　1　第46号住居跡カマド（2）
2・3　第46号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
4　第47号住居跡（北西から）
5　第47号住居跡カマド
6　第47号住居跡遺物出土状況
7　第48号住居跡（北西から）
8　第48号住居跡カマド
図版51　1　第49号住居跡（南西から）
2　第49号住居跡遺物出土状況
3　第50・51・52号住居跡（北西から）
4　第50号住居跡（北西から）
5　第51号住居跡（北西から）
6　第52号住居跡（北西から）
7　第53号住居跡（南西から）
8　第53号住居跡カマド（1）
図版52　1　第53号住居跡カマド（2）
2～5　第53号住居跡遺物出土状況（1）～（4）
6　第54号住居跡（北西から）
7・8　第54号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
図版53　1～3　第54号住居跡遺物出土状況（3）～（5）
4　第55号住居跡（南西から）
5　第56号住居跡（南西から）
6　第56号住居跡遺物出土状況
7　第57号住居跡（南西から）
8　第58号住居跡（南東から）
図版54　1　第58号住居跡貼床
2・3　第58号住居跡炉跡1（1）・（2）
4～6　第58号住居跡炉跡2（1）～（3）
7・8　第58号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
図版55　1　第58号住居跡遺物出土状況（3）
2　第59・60号住居跡（西から）
3　第59・60号住居跡床面
4　第59号住居跡炉跡1～3
5　第61号住居跡（南東から）
6　第61号住居跡炉跡

7・8　第62号住居跡遺物出土状況（1）・（2）

図版56　1　第62号住居跡遺物出土状況（3）
2　第63号住居跡（南から）
3　第63号住居跡炉跡
4～6　第63号住居跡遺物出土状況（1）～（3）
7　第64号住居跡（東から）
8　第64号住居跡炉跡

図版57　1～8　第64号住居跡遺物出土状況（1）～（8）

図版58　1～3　第64号住居跡遺物出土状況（9）～(11)
4　第66号住居跡
5　第66号住居跡炉跡
6～8　第66号住居跡遺物出土状況（1）～（3）

図版59　1　第67号住居跡（西から）
2　第67号住居跡炉跡
3～8　第67号住居跡遺物出土状況（1）～（6）

図版60　1　第67号住居跡遺物出土状況（7）
2　第68号住居跡（南から）
3　第68号住居跡炉跡
4・5　第68号住居跡遺物出土状況（1）・（2）
6　第69号住居跡（南から）
7　第69号住居跡炉跡
8　第69号住居跡遺物出土状況（1）

図版61　1～8　第69号住居跡遺物出土状況（2）～（9）

図版62　1・2　第69号住居跡遺物出土状況(10)・(11)
3　第70号住居跡（南から）
4　第70号住居跡炉跡
5～8　第70号住居跡遺物出土状況（1）～（4）

図版63　1～7　第70号住居跡遺物出土状況（5）～(11)
8　第71号住居跡（南西から）

図版64　1　第72号住居跡（北西から）
2　第73号住居跡（北西から）
3　第73号住居跡遺物出土状況
4　第74号住居跡（南西から）
5　第74号住居跡炉跡1
6　第74号住居跡炉跡2
7・8　第74号住居跡遺物出土状況（1）・（2）

図版65　1　第75号住居跡（南西から）
2　第75号住居跡炉跡1・2
3　第75号住居跡炉跡3・4
4　第76号住居跡（北西から）
5～8　第76号住居跡遺物出土状況（1）～（4）

図版66　1～4　第76号住居跡遺物出土状況（5）～（8）
5　第77号住居跡（南から）
6　第77号住居跡炉跡
7　第77号住居跡炉跡完掘
8　第77号住居跡遺物出土状況（1）

図版67　1～5　第77号住居跡遺物出土状況（2）～（6）
6　第78号住居跡（南西から）
7　第78号住居跡遺物出土状況
8　第79号住居跡（南から）

図版68　1～3　第79号住居跡炉跡1（1）～（3）
4　第79号住居跡炉跡2
5　第79号住居跡炉跡3
6　第79号住居跡炉跡4
7　第79号住居跡炉跡5
8　第79号住居跡遺物出土状況（1）

図版69　1～8　第79号住居跡遺物出土状況（2）～（9）

図版70　1・2　第79号住居跡遺物出土状況
(10)・(11)
3　第80号住居跡（南西から）
4・5　第80号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）
6　第81号住居跡（南東から）
7・8　第81号住居跡炉跡（1）・（2）
図版71　1　第81号住居跡貯蔵穴
2～5　第81号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）
6　第82号住居跡（南東から）
7　第82号住居跡貯蔵穴
8　第82号住居跡遺物出土状況（1）
図版72　1～4　第82号住居跡遺物出土状況
（2）～（5）
5　第83号住居跡遺物出土状況
6　第84号住居跡（南東から）
7・8　第84号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）
図版73　1～6　第84号住居跡遺物出土状況
（3）～（8）
7　第85号住居跡（北西から）
8　第85号住居跡遺物出土状況（1）
図版74　1～5　第85号住居跡遺物出土状況
（2）～（6）
6　第86号住居跡（南西から）
7　第87号住居跡（南西から）
8　第88号住居跡（南西から）
図版75　1　第89号住居跡（南東から）
2　第90号住居跡（北西から）
3　第90号住居跡炉跡1
4　第90号住居跡土壙1
5・6　第90号住居跡遺物出土状況
（1）・（2）
7　第91号住居跡（南西から）
8　第91号住居跡炉跡
図版76　1　第91号住居跡埋甕1
2・3　第91号住居跡埋甕断割状況
（1）・（2）
4・5　第94号住居跡埋甕出土状況
（1）・（2）
6　第92号住居跡（北東から）
7　第92号住居跡埋甕出土状況
8　第93号住居跡（北西から）
図版77　1　第95号住居跡（南から）
2・3　ピット群全景
（1）・（2）（北西から）
4　第1号ピット群（北から）
5　第2号ピット群（北東から）
6　第3号ピット群（北から）
7　第4号ピット群（北から）
8　第5号ピット群（北から）
図版78　1　第6号ピット群（北西から）
2　第7号ピット群（南から）
3　第8号ピット群（南西から）
4　第9号ピット群（南西から）
5　第10・11号ピット群（南東から）
6　第10号ピット群（南東から）
7　第11号ピット群（南東から）
8　第1号掘立柱建物跡（南西から）
図版79　1　第2号掘立柱建物跡（南東から）
2　第3号掘立柱建物跡（南東から）
3　第1号方形周溝墓（1）（西から）
4　第1号方形周溝墓（2）（北西から）
5　第1号方形周溝墓（3）（北から）
6　第1号土壙（北から）
7　第1号土壙土層断面（南から）
8　第2号土壙（南西から）
図版80　1　第5・6・22～26号土壙（南東から）
2　第5号土壙（北から）
3　第6号土壙（東から）
4　第8号土壙（南東から）
5　第16号土壙（東から）

6・7　第16号土壙遺物出土状況（1）・（2）
8　第19号土壙（東から）
図版81　1・2　第21号土壙断面（1）・（2）
3　第22号土壙（北西から）
4　第23・24号土壙（北東から）
5　第23号土壙（北東から）
6　第24号土壙（北から）
7　第26号土壙（北から）
8　第27号土壙（南西から）
図版82　1　第28号土壙（南西から）
2　第29号土壙（南から）
3　第30・31号土壙（南西から）
4　第34号土壙（北西から）
5　第35・36・37号土壙（南から）
6　第38・44号土壙（北西から）
7　第49号土壙（南東から）
8　第49号土壙遺物出土状況（1）
図版83　1　第49号土壙遺物出土状況（2）
2　第51号土壙（北から）
3　第52号土壙（西から）
4　第53号土壙（北東から）
5　第54号土壙（北から）
6　第55号土壙（東から）
7　第56号土壙（北から）
8　第57号土壙（北西から）
図版84　1　第58号土壙（南東から）
2　第60号土壙（北から）
3　第1号井戸跡（南東から）
4　第2号井戸跡（南東から）
5　第3号井戸跡（西から）
6　第4号井戸跡（南東から）
7　第5号井戸跡（南西から）
8　第7号井戸跡（東から）
図版85　1　第8号井戸跡（南から）
2　第9号井戸跡（北から）
3　第10号井戸跡（南から）
4　第11号井戸跡（南から）
5　第12号井戸跡（南から）
6　第13号井戸跡（東から）
7　第14号井戸跡（北から）
8　第15号井戸跡（北西から）
図版86　1・2　第15号井戸跡遺物出土状況（1）・（2）
3　第16号井戸跡（南から）
4　第17号井戸跡（北から）
5　第6・9号溝跡（南東から）
6　第10号溝跡（南東から）
7　第21号溝跡（東から）
8　第29・32・34号溝跡（東から）
図版87　1～6　第29号溝跡遺物出土状況（1）～（6）
7　第32号溝跡（南東から）
8　第1号円形周溝状遺構（1）（北東から）
図版88　1　第1号円形周溝状遺構（2）（東から）
2　第1号畠跡（第13～20号溝跡）（西から）
3　第4号畠跡（第1～5号溝跡）遺物出土状況
4　第2号畠跡（第22～24号溝跡）（北西から）
5　第6号畠跡（西から）
6　A区基本層序（G－8）
7　B区基本層序（I－9南側）
8　D区基本層序（南壁東端）
図版89　1　第96・98号住居跡周辺（西から）
2　第96号住居跡（北西から）
3～6　第96号住居跡カマド1（1）～（4）
7　第96号住居跡カマド2
8　第96号住居跡カマド2燃焼部
図版90　1　第96号住居跡P3
2・3　第96号住居跡床下遺構

（1）・（2）
4　第 96 号住居跡床下炭化物層
5　第 96 号住居跡旧壁溝
6・7　第 97 号住居跡
（1）・（2）（南から）
8　第 97 号住居跡炉跡
図版 91　1～8　第 97 号住居跡遺物出土状況
（1）～（8）
図版 92　1　第 97 号住居跡遺物出土状況（9）
2～4　第 97 号住居跡炭化物検出状況
（1）～（3）
5　第 98 号住居跡（西から）
6・7　第 98 号住居跡炉跡（1）・（2）
8　第 99 号住居跡（北西から）
図版 93　1　第 99 号住居跡カマド
2～8　第 99 号住居跡遺物出土状況
（1）～（7）
図版 94　1　第 100 号住居跡（北西から）
2　第 100 号住居跡遺物出土状況
3　第 101 号住居跡（北東から）
4　第 101 号住居跡炉跡
5　第 101 号住居跡炉跡１
6　第 101 号住居跡炉跡２
7　第 101 号住居跡土壙（南から）
8　第 101 号住居跡遺物出土状況（1）
図版 95　1～3　第 101 号住居跡遺物出土状況
（2）～（4）
4　第 102 号住居跡（北西から）
5・6　第 102 号住居跡炉跡（1）・（2）
7　第 61 号土壙（南西から）
8　第 62 号土壙（南東から）
図版 96　1　第 63 号土壙（北西から）
2　第 64 号土壙（北東から）
3　第 19 号井戸跡（1）（東から）
4　第 19 号井戸跡（2）（南から）
5　第 19 号井戸跡下部断面
6　第 46 号溝跡（1）（北東から）
7・8　第 46 号溝跡
（2）・（3）（南西から）
図版 97　1　第 46 号溝跡（4）（北東から）
2　第 46 号溝跡（5）（南西から）
3　第 46 号溝跡西側
4　第 46 号溝跡西側断面
5～8　第 46 号溝跡遺物出土状況
（1）～（4）
図版 98　1～5　第 46 号溝跡遺物出土状況
（5）～（9）
6・7　第 47・48 号溝跡
（1）・（2）（南西から）
8　第 47・48 号溝跡（3）（北東から）
図版 99　1～3　第 48 号溝跡遺物出土状況
（1）～（3）
4～8　第１号土器集中（1）～（5）
図版 100　1・2　第１号土器集中（6）・（7）
3～8　第２号土器集中（1）～（6）
図版 101　1～8　第２号土器集中（7）～（14）
図版 102　1～6　第３号土器集中（1）～（6）
7・8　第３号土器集中（7）・（8）
（Ｒ－ 21 グリッド８・９トレンチ）
図版 103　1～7　第３号土器集中（9）～（15）
（Ｒ－ 21 グリッド８・９トレンチ）
8　第３号土器集中（16）下位周辺
図版 104　1・2　第３号土器集中
（17）・（18）下位周辺
3　Ｅ区遺物包含層炭化物検出状況
（Ｓ－ 22 グリッド）
4　Ｅ区遺物包含層
（Ｓ－ 21・22 グリッド）
5・6　Ｒ－ 22 グリッドピット
遺物出土状況（1）・（2）
7　Ｓ－ 22 グリッド遺物出土状況
8　Ｅ区基本層序
図版 105　1～7　第１号住居跡（第 89・90 図）
図版 106　1～6　第１号住居跡（第 89・90 図）

図版107　1　第１号住居跡（第90図26）
2　第２号住居跡（第92図１）
3～8　第３号住居跡（第292図）
9　第６号住居跡（第98図９）
図版108　１～４　第６号住居跡（第98図）
図版109　１～４　第６号住居跡（第98・99図）
図版110　１～10　第６号住居跡（第98・99図）
図版111　１～４　第６号住居跡（第99・100図）
図版112　１～９　第６号住居跡（第99・100図）
図版113　１～６　第６号住居跡（第100・101図）
図版114　１～４　第６号住居跡（第101・102図）
図版115　１～６　第６号住居跡（第101・102図）
図版116　１～３　第７号住居跡（第105図）
４～８　第８号住居跡（第296図）
図版117　１～３　第８号住居跡（第296図）
４・５　第９号住居跡（第107図）
図版118　１～７　第９号住居跡（第107図）
図版119　１・２　第９号住居跡（第107図）
３～５　第10号住居跡（第111図）
図版120　1　第10号住居跡（第111図４）
図版121　１～５　第10号住居跡（第111・112図）
図版122　１～６　第10号住居跡（第112図）
図版123　１～４　第12号住居跡（第116図）
図版124　１～６　第12号住居跡（第116図）
図版125　１～５　第12号住居跡（第116図）
６・７　第13号住居跡（第120図）
図版126　１～５　第13号住居跡（第120図）
図版127　１～９　第13号住居跡（第120・121図）
図版128　１～６　第13号住居跡（第121・122図）
図版129　１～５　第13号住居跡（第121・122図）
図版130　１～４　第13号住居跡（第122・123図）
５・６　第14号住居跡（第125図）
図版131　１・２　第14号住居跡（第125図）
３～５　第15号住居跡（第127図）
6　第16号住居跡（第299図４）
7　第18号住居跡（第129図４）
図版132　１～５　第18号住居跡（第129図）
６・７　第20号住居跡（第132図）
図版133　１～５　第20号住居跡（第132図）
図版134　１～３　第20号住居跡（第132図）
４～７　第21号住居跡（第135図）
図版135　１～５　第21号住居跡（第135図）
図版136　１～７　第21号住居跡（第135・136図）
図版137　１～６　第22号住居跡（第138図）
図版138　１～４　第23号住居跡（第140図）
図版139　１～６　第23号住居跡（第140・141図）
図版140　１～３　第23号住居跡（第141・142図）
４・５　第24号住居跡（第146図）
図版141　１～７　第24号住居跡（第146図）
図版142　１～５　第24号住居跡（第147図）
図版143　１～７　第24号住居跡（第147・148図）
図版144　１～６　第24号住居跡（第148・149図）
図版145　１～７　第24号住居跡（第149・150図）
図版146　１～８　第24号住居跡（第150・151図）
図版147　１～８　第24号住居跡（第151図）
図版148　１～３　第24号住居跡（第151図）
４～７　第25号住居跡（第153図）
図版149　１～３　第25号住居跡（第153図）
４～６　第26号住居跡（第155図）
7　第28号住居跡（第158図９）
図版150　１～９　第28号住居跡（第158図）
図版151　１～３　第28号住居跡（第158図）
４～７　第29号住居跡（第161図）
図版152　1　第29号住居跡（第161図22）
２～５　第30号住居跡（第164図）
図版153　１～４　第30号住居跡（第164図）
図版154　１～４　第30号住居跡（第165図）
図版155　1　第30号住居跡（第164図９）
２・５　第32号住居跡（第167図）
３・４・６　第33号住居跡（第168図）
７～９　第34号住居跡（第171・172図）
図版156　１～６　第34号住居跡（第171図）
図版157　１～４　第34号住居跡（第171・172図）
５～７　第36号住居跡（第176図）

図版158　１・２　第38号住居跡（第179図）
３～７　第39号住居跡（第182図）
図版159　１～４　第39号住居跡（第182図）
５～７　第41号住居跡（第308図）
８～10　第42号住居跡（第310図）
図版160　１～３　第42号住居跡（第310図）
４～６　第43号住居跡（第184図）
図版161　１～８　第43号住居跡（第184･185図）
図版162　１～７　第43号住居跡（第185図）
８・９　第44号住居跡（第312図）
図版163　１・２　第45号住居跡（第314図）
３～５・９～11
第46号住居跡（第317図）
６～８　第47号住居跡（第319図）
図版164　１・２　第47号住居跡（第319図）
３　第50号住居跡（第325図７）
４～８　第51号住居跡（第327図）
図版165　１　第52号住居跡（第329図２）
２・３　第53号住居跡（第331図）
４～７　第54号住居跡（第188図）
図版166　１～３　第54号住居跡（第188図）
４～７　第55号住居跡（第332図）
８　第56号住居跡（第336図１）
図版167　１～３　第58号住居跡（第191図）
４～６　第62号住居跡（第196図）
７　第63号住居跡（第198図２）
図版168　１　第63号住居跡（第198図３）
２～７　第64号住居跡（第201･202図）
図版169　１～７　第64号住居跡（第201･202図）
図版170　１～３　第64号住居跡（第202図）
４～８　第66号住居跡（第204図）
図版171　１～９　第66号住居跡（第204･205図）
図版172　１～10　第66号住居跡（第205･206図）
図版173　１　第66号住居跡（第206図46）
２～９　第67号住居跡（第209図）
図版174　１～９　第67号住居跡（第209･210図）
図版175　１～３　第67号住居跡（第209･210図）
４・７　第68号住居跡（第213図）
５・６・８・９
第69号住居跡（第216･217図）
図版176　１・２・４・５
第69号住居跡（第216･217図）
３・６～９　第70号住居跡（第219図）
図版177　１・２・４・７・８
第70号住居跡（第219･220図）
３　第73号住居跡（第223図４）
５・６　第74号住居跡（第226図）
９・10　第72号住居跡（第222図）
図版178　１～３　第74号住居跡（第226図）
４　第75号住居跡（第228図１）
５・６　第76号住居跡（第231図）
図版179　１～８　第76号住居跡（第231･232図）
９　第77号住居跡（第234図11）
図版180　１～３・７　第77号住居跡（第234図）
４～６・８・９
第78号住居跡（第236・237図）
図版181　１・２・４・６～10
第78号住居跡（第236図）
３・５・11
第79号住居跡（第239・240図）
図版182　１～４・６・７
第79号住居跡（第239・240図）
５・８　第80号住居跡（第242図）
図版183　１～６　第80号住居跡（第242･243図）
図版184　１・２・６～８
第80号住居跡（第243図）
３～５・９～10
第81号住居跡（第245図）
11　第82号住居跡（第247図４）
図版185　１～３　第82号住居跡（第247図）
４・６～８　第84号住居跡（第250図）
５　第83号住居跡（第248図１）
図版186　１・２・４　第84号住居跡（第250図）
３・５～８

第85号住居跡（第253・254図）
図版187　1～6　第85号住居跡（第253･254図）
図版188　1～9　第85号住居跡（第254･255図）
図版189　1～3　第86号住居跡（第257図）
4～6　第88号住居跡（第261図）
7　第89号住居跡（第263図6）
8・9　第90号住居跡（第36図）
図版190　1・2　第90号住居跡（第36・38図）
3　第92号住居跡（第45図1）
4　第91号住居跡（第41図1）
5・6　第97号住居跡（第365図）
図版191　1～6　第97号住居跡（第365･366図）
図版192　1～6　第97号住居跡（第366図）
7　第99号住居跡（第392図4）内面
図版193　1～6　第99号住居跡（第392図）
7　第100号住居跡（第369図3）
図版194　1・2　第101号住居跡（第370図）
3　第2号土壙（第273図1）
4　第16号土壙（第273図8）
5　第21号土壙（第83図3）
6・7　第23号土壙（第83図）
図版195　1～3　第49号土壙（第349・350図）
図版196　1　第26号土壙（第84図30）
2　第27号土壙（第341図1）
3　第60号土壙（第63図17）
4　第11号溝跡（第356図1）
5～7　第29号溝跡（第284図）
図版197　1・4・5　第29号溝跡（第284図）
2　第46号溝跡（第397図13）
3･10　第1号土器集中（第377･378図）
6　第48号溝跡（第399図4）
7　第4号畠跡（第345図2）
8・9　第46号溝跡（第397図）
図版198　1～5　第1号土器集中（第377図）
図版199　1～3　第1号土器集中(第377･378図)
4～6　第2号土器集中（第380図）
図版200　1～6　第2号土器集中(第380･381図)
図版201　1～5　第2号土器集中（第381図）
6～8　第3号土器集中（第383図）
図版202　1～6　第3号土器集中（第383図）
7　縄文グリッド（第70図55）
図版203　1　弥生グリッド（第84図24）
2～7　古墳グリッド（第289図）
図版204　1～7　古墳グリッド（第290図）
8～12　中近世グリッド（第361図）
図版205　1～3　中近世グリッド（第361図）
4～6　2次グリッド（第386図）
図版206　1～6　2次グリッド（第386・387図）
図版207　1～9　2次グリッド（第387図）
図版208　1～3　第90号住居跡（1）～（3）
（第37・38図）
図版209　1　第91・93・94号住居跡
（第41・43・47図）
2　第56号土壙（第63図）
3　縄文グリッド（1）（第68図）
図版210　1～3　縄文グリッド（2）～（4）
（第68・69図）
図版211　1～3　縄文グリッド（5）～（7）
（第69・70図）
図版212　1～3　縄文グリッド（8）～（10）
（第71・72図）
図版213　1～3　縄文グリッド（11）～（13）
（第72・73図）
図版214　1～3　縄文グリッド（14）～（16）
（第73・74図）
図版215　1　縄文グリッド（17）（第74図）
2　第1号ピット群（第49図）、
縄文グリッド（第70・72図）
3　第1・22～24土壙（第83図）
図版216　1　第24号土壙（第83図16）
2　第23・24号土壙（第84図）
3　第24・26号土壙（第84図）
図版217　1　第1号方形周溝墓（第80図）、
弥生グリッド（第85図）

２　弥生グリッド（第 85 図）
３　第 12 号住居跡（第 117 図）
図版 218　１～ 10　第１号住居跡（第 90 図）
11 ～ 14　第６号住居跡（第 102 図）
15・16　第 23 号住居跡（第 142 図）
17・18　第 29 号住居跡（第 161 図）
19・20　第 39 号住居跡（第 182 図）
21　第 43 号住居跡（第 186 図 61）
22　第 53 号住居跡（第 331 図 10）
23・24　第 64 号住居跡（第 202 図）
25・30　第 67 号住居跡（第 211 図）
26 ～ 28　第 77 号住居跡（第 234 図）
29　第 82 号住居跡（第 247 図９）
図版 219　１　第 28 号土壙（第 273 図 12）
２　古墳グリッド（第 290 図 45）
３　第 67 号住居跡（第 211 図 65）
４　第 16 号井戸跡（第 352 図９）
５・６　第１号住居跡（第 90 図）
７　第７号住居跡（第 105 図 18）
８　第 13 号住居跡（第 123 図 87）
９　第 28 号住居跡（第 158 図 18）
10 ～ 12　第 29 号住居跡（第 162 図）
13　第 90 号住居跡（第 38 図 28）
14　第 57 号土壙（第 64 図１）
15 ～ 20　縄文グリッド（第 75 図）
21　２次グリッド（第 388 図 33）
22　第 91 号住居跡（第 42 図）、
縄文グリッド（第 75 図）
図版 220　１　縄文グリッド（第 75 図）
２　第 47 号住居跡（第 319 図 13）
３　第１・７・24・29 号住居跡
（第 90・105・151・161 図）
４　第 46 号溝跡（第 397 図 18）
５　第 45 号住居跡（第 315 図 18）
図版 221　１　第 45 号住居跡（第 315 図 18）
口琴Ｘ線写真
図版 222　１　住居跡出土鉄製品（第 90・102・
105・107・113・123・142・299 図）
２　住居跡（第 314・321・331 図）、
掘立柱建物跡（第 268 図）、
溝跡（第 282・397 図）、
井戸跡（第 343・352 図）、
畠跡（第 345 図）出土鉄製品
３　住居跡出土遺物（１）
（第 92・98・135・136・138・155 図）
図版 223　１　第８号住居跡（第 296 図）
２　住居跡出土遺物（２）
（第 149・182・184・186・317 図）
３　住居跡出土遺物（３）
（第 191・196・312・327 図）
図版 224　１・２　第 45 号住居跡
（１）・（２）（第 314 図）
３　第 64・66 住居跡（第 201・205 図）
図版 225　１　住居跡出土遺物（４）
（第 209・210・213・216・217・
220・231・232・236 図）
２　住居跡（第 239・254・263 図）、
土壙（第 273 図）、
溝跡（第 282・350・397 図）
出土遺物
３　掘立柱建物跡（第 268 図）、
井戸跡（第 352 図）、
溝跡（第 399 図）出土遺物
図版 226　１　古墳グリッド（第 289・290 図）
２　古墳（第 290 図）・
中近世（第 361 図）グリッド
３　第２土器集中（第 380 図）、
２次グリッド（第 386・387 図）

Ⅰ　発掘調査の概要

１．発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成 24 年度から 28 年度の 5 カ年計画『埼玉県 5 か年計画―安心・成長・自立自尊の埼玉へ―』の中で「安心を実感する埼玉」を掲げ、「大規模災害への備え」を戦略のひとつとしている。

現在、国土交通省では首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、久喜市・加須市・羽生市を流れる利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を推進している。

これに対し、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の保護について、平成 16 年度から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該事業について、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長から、平成 17 年 1 月 20 日付け利上沿第 18 号で、県教育長あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

これに対して、平成 17 年 3 月 17 日付け教生文第 1780 号で工事予定地内所在の埋蔵文化財包蔵地及びその取り扱いについて回答した。その後、試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無について回答した。（平成 23 年 1 月 18 日付け教生文第 1865 号、平成 23 年 6 月 16 日付け教生文第 503 号、平成 23 年 9 月 29 日付け教生文第 1219 号、平成 24 年 6 月 26 日付け教生文第 575 号）

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所と生涯学習文化財課は、所在する埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

その後、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所・生涯学習文化財課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。その結果、第 1 次調査を平成 23 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日、第 2 次調査を平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 3 月 25 日まで実施した。

文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長から提出され、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から勧告した。文書番号は平成 23 年 3 月 18 日付け教生文第 4 - 1404 号、平成 24 年 2 月 16 日付け教生文第 4 - 1337 号である。

また第 92 条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの通知番号は、平成 23 年 4 月 11 日付け教生文第 2 - 2 号（第 1 次調査）、平成 25 年 9 月 26 日付け教生文第 2-37 号（第 2 次調査）である。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

名称（No.）	種別	時代	所在地
屋敷裏遺跡 (70 - 078)	集落跡	古墳	(第１次調査) 羽生市名 613 - １他 (第２次調査) 羽生市名 789 - 1 他

２．発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

屋敷裏遺跡の調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策工事に先立ち、平成 23 年度 (第１次)、25 年度 (第２次) の２回実施した。調査面積は 9,733.5 ㎡（第１次調査 7,779 ㎡、第２次調査 1,954.5 ㎡）である。

第１次調査

第１次調査は平成 23 年４月１日から平成 24 年３月 31 日まで実施した。当初、Ａ・Ｂ区対象の 10 月までの調査予定であったが、遺跡範囲の拡張に伴い、調査区と期間が延長された（Ｃ・Ｄ区）。

平成 23 年４月８日に囲柵、12 日に発掘事務所の設置を行った。

重機による表土除去作業は、調査区がＡ～Ｄ区に分かれ、遺構の検出面が複数であることから、平成 23 年４月、６月、８月、10 ～ 11 月、平成 24 年１月の計５回実施した。

並行して４月 14 日から遺構確認作業を行い、補助員による作業を開始した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、表土除去作業終了後に、それに合わせる形で、平成 23 年５月、８月、10 月、11 月、平成 24 年２月の計５回実施した。

遺構確認作業の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中近世の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壙など多数の遺構が検出された。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

作業の終了した調査区については、平成 23 年 10 ～ 11 月、平成 24 年３月に重機により埋め戻しを行い、平成 24 年３月 19 日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

第２次調査

第２次調査は平成 25 年 10 月１日から平成 26 年３月 25 日まで実施した。

平成 25 年 10 月１日に囲柵、15 日に発掘事務所の設置を行った。

重機による表土除去作業は、遺構の検出面が複数であることから、平成 25 年 10 月、12 月の２回実施した。

10 月 17 日から遺構確認作業を行い、補助員による作業を開始した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、表土除去作業終了後に、平成 23 年 10 月、12 月の計２回実施した。

確認作業の結果、古墳時代、平安時代、中近世の竪穴住居跡、溝跡、土壙などの遺構が検出された。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

その後、３月に重機により埋戻しを行い、18 日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

（２）整理報告書作成

整理報告書の作成作業は平成 26 年４月１日から平成 28 年３月 31 日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗、注記から開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て遺構ごとに印刷用の挿図を作成した。平成 27 年 11 月には図版用の遺物写真を撮影した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は照合し、修正を加えてスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

１月下旬までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、３回の校正を経て、平成 28 年３月 23 日に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、３月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

３．発掘調査・報告書作成の組織

平成 23 年度（発掘調査）

理事長	藤野龍広	**調査部**	
常務理事兼総務部長	根本　勝	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	劔持和夫
総務部副部長	金子直行	調査監兼調査第一課長	富田和夫
総務課長	矢島将和	主査	吉田　稔
		主査	山本　靖
		専門員	村田健二
		主事	橋本脩平

平成 25 年度（発掘調査）

理事長	中村英樹	**調査部**	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	劔持和夫
総務部副部長	富田和夫	調査監兼調査第一課長	細田　勝
総務課長	藤倉英明	主事	村山　卓
		主事	中村倉司

平成 26 年度（報告書作成）

理事長	樋田明男	**調査部**	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	富田和夫
総務部副部長	瀧瀬芳之	主幹兼整理第二課長	大谷　徹
総務課長	藤倉英明	主査	岩瀬　譲
		主査	福田　聖

平成 27 年度（報告書作成）

理事長	樋田明男	**調査部**	
常務理事兼総務部長	木村博昭	調査部長	金子直行
総務部		調査部副部長	細田　勝
総務部副部長	瀧瀬芳之	調査監兼整理第一課長	黒坂禎二
総務課長	安田孝行	主査	福田　聖

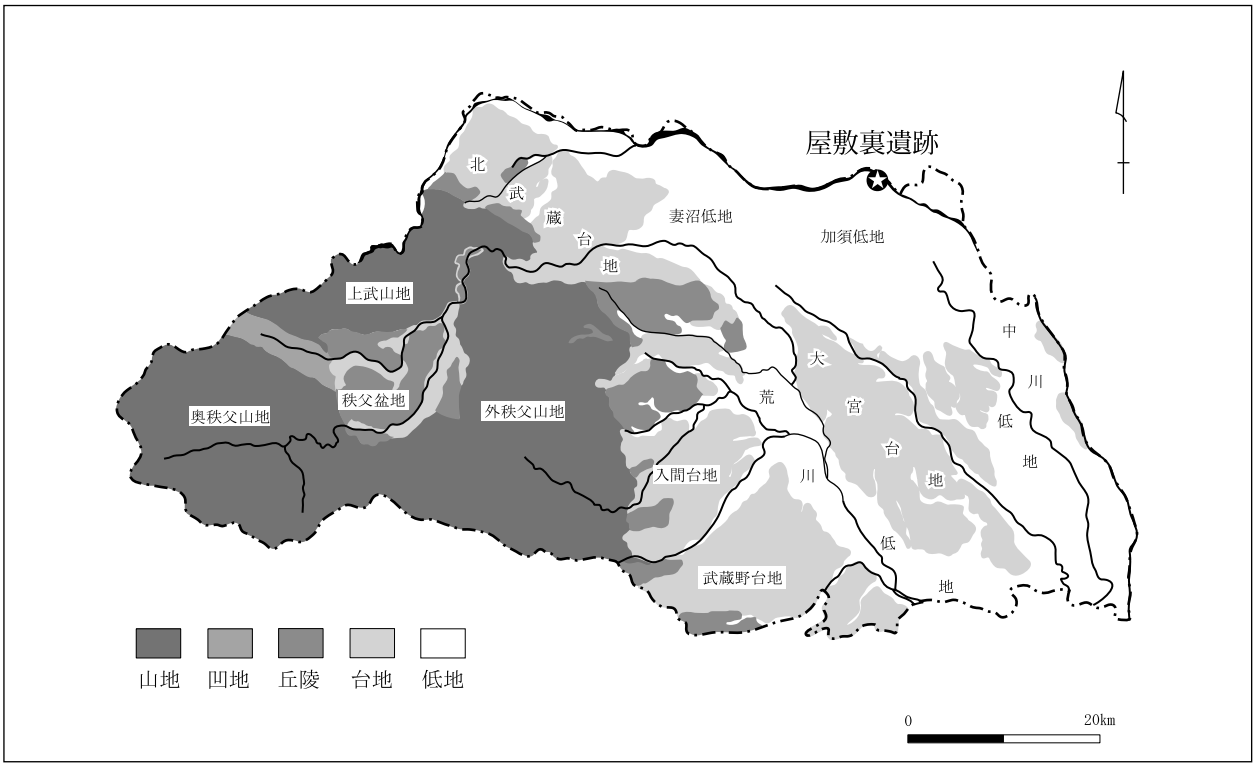
Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

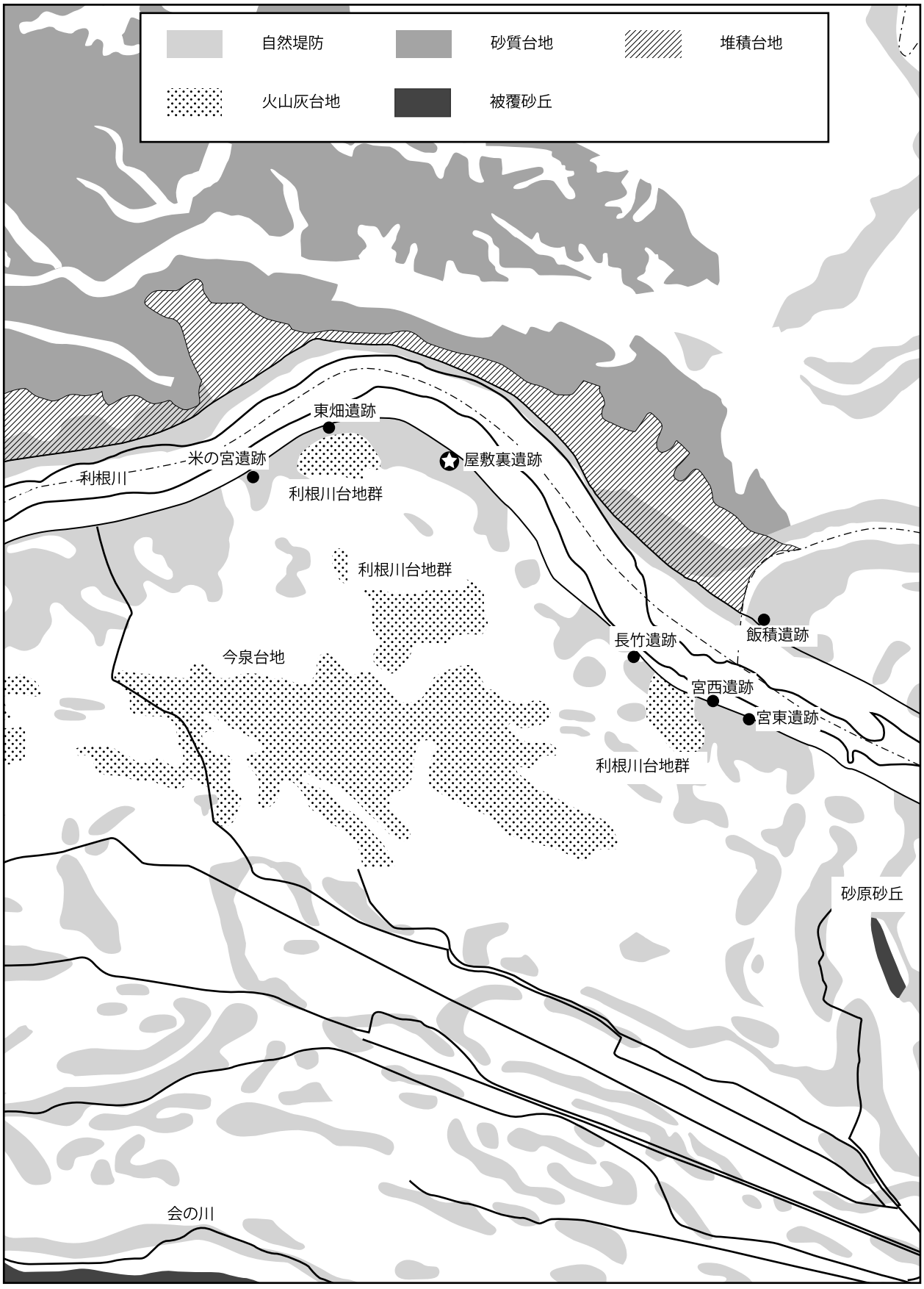
屋敷裏遺跡は東武伊勢崎線羽生駅の東北東 6.7 ㎞にあたる羽生市名に所在する。羽生市は埼玉県の北東端に位置し、利根川を挟んで群馬県板倉町、明和町に接している。東武伊勢崎線、秩父鉄道といった県北部、県東部の主要鉄道、東北自動車道、国道 125 号バイパスが通る県北東部の交通網の要である。

羽生市は、北側を流れる大河、利根川とともに発展してきた。地味豊かな水田が広がる米どころとして知られるとともに、自然堤防の土壌が綿作や藍作に適していたことから綿栽培が盛んで、数百軒の紺屋が営まれていたという。遺跡の所在する名周辺は加須低地の利根川に沿って形成された自然堤防にあたり、水田の中に屋敷林が混在する景観が広がっている。

加須低地は、埼玉平野の北東に位置し、利根川中流域低地の東半に当たる。東側を中川低地、西側を妻沼低地と接し、北側は利根川を越えて館林台地、南側は大宮台地と接している。加須低地は、河川による開析谷に沖積層が堆積した一般的な沖積低地とは異なり、関東造盆地運動により、沈降した台地上に河川堆積物が堆積することによって形成された低地である。基盤は大宮台地から館林台地にかけて連続するローム台地の、大宮－館林台地である。羽生市付近は最も沈降の度合いが強く、古墳時代後期の小松１号墳は、地下３ｍのローム面に構築された埋没古墳として著名である。沈降前の利根川は現在の荒川筋を流れており、この造盆地運動によって現在の利根川の方向へと遷移したとされている。しかし、その流路は安定せず、多くの蛇行する流路跡とそれに伴う自然堤防が形成された。本流筋としては、会の川、合の川、北川辺蛇行流路、浅間川が考えられ、それ以外にも細かな流路が推定されている。



第１図　埼玉県の地形


自然堤防
砂質台地
堆積台地
火山灰台地
被覆砂丘
東畑遺跡
米の宮遺跡
屋敷裏遺跡
利根川
利根川台地群
利根川台地群
今泉台地
長竹遺跡
飯積遺跡
宮西遺跡
宮東遺跡
利根川台地群
砂原砂丘
会の川

第２図　周辺の地形

その結果、加須低地では、関東造盆地運動によって沈降した台地が残丘状に残る埋没台地と自然堤防、更に大河の証しである河畔砂丘が微高地として分布することとなった。

屋敷裏遺跡は、現在の利根川右岸に形成された北西－南東方向の長さ約 300 m、幅 120 mの自然堤防上に立地し、利根川の堤防に接している。Ａ～Ｃ区はその基盤にローム土が認められ、沈降した埋没台地の上に河川堆積物が堆積した自然堤防と考えられる。南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約 1.5 mである。遺構の覆土や地山はシルト質で、粘性が強い。

２．歴史的環境

屋敷裏遺跡の所在する加須低地周辺は、台地の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、現在発見されているよりも多くの遺跡が存在すると思われる。本事業に伴う調査で、多くの遺跡の存在が明らかになり、今後更に多くの遺跡の発見が見込まれる。

本項では現在知られる埋没台地、自然堤防、河畔砂丘、邑楽台地、藤岡台地の旧石器時代から近世の遺跡について概観し、現段階における屋敷裏遺跡周辺の歴史的環境について述べたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、いずれも後期旧石器時代後半に属する。

加須低地では、いずれも埋没台地上に立地する。羽生市谷田遺跡 (17)、内谷遺跡 (46)、大道遺跡 (矢口 2009) からは、ナイフ形石器、剥片が出土している。

利根川以北の邑楽台地では、館林市大袋遺跡 (105) で尖頭器、掻器、細石刃が出土している。藤岡台地では、栃木市城山遺跡 (74) でナイフ形石器、削器が出土している。

縄文時代草創期から早期の遺跡は現在のところ利根川以南では知られておらず、いずれも北側の邑楽台地、猿島台地に分布するのみである。

草創期の遺跡としては、分布図で示した更に東側となる野木町清六Ⅲ遺跡 (上原 1999) で、その可能性のある石器群が出土しているが、土器は伴わない。

早期から前期の遺跡としては板倉町岡西遺跡 (79) で、早期から前期の大量の土器が出土しており、宮田裕希枝により集落の存在が推定されている (宮田 2001)。

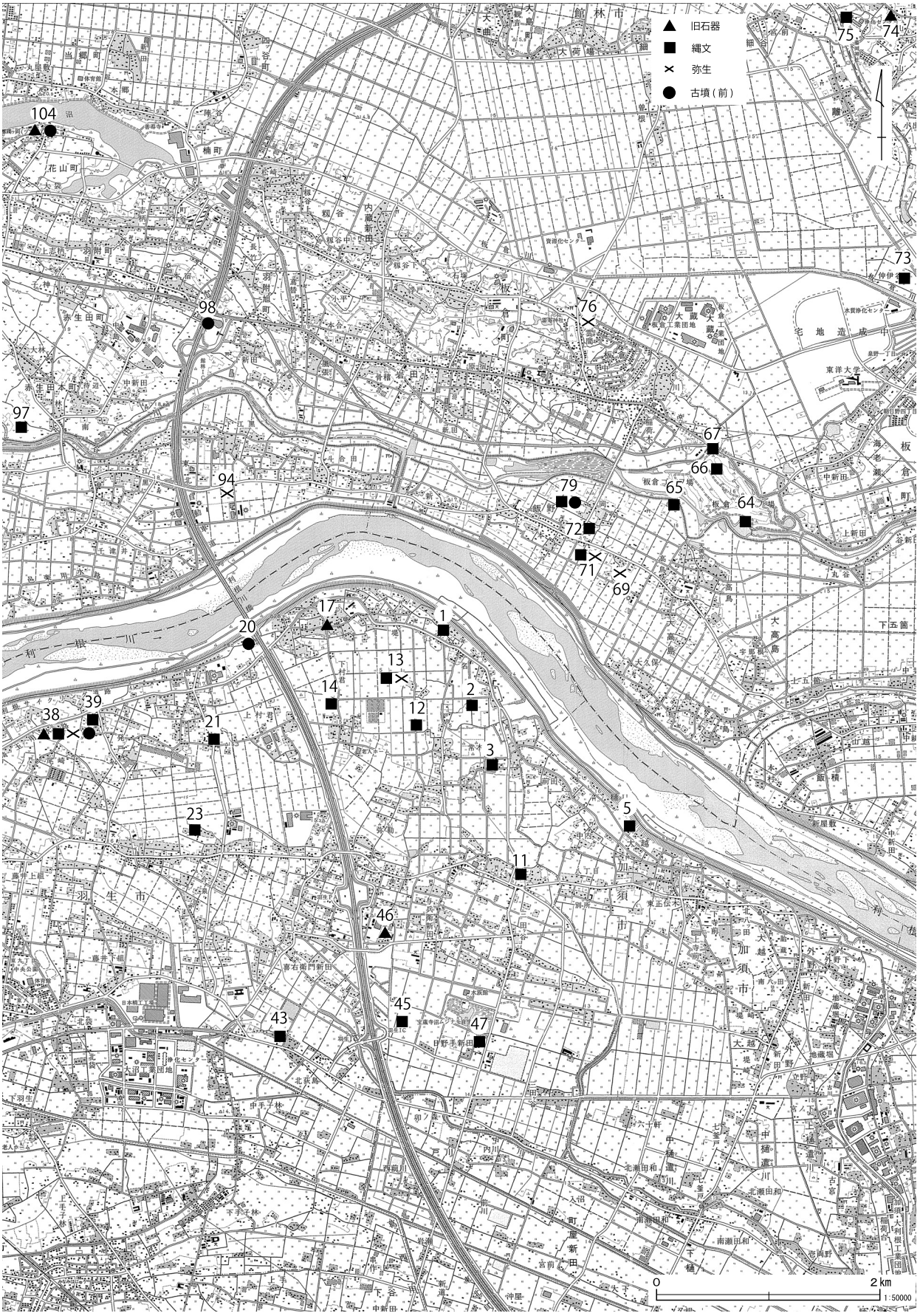
早期末の本遺跡周辺では、海進による奥東京湾の形成とともに地点貝塚がみられるようになった。邑楽台地の谷田川北岸板倉町小保呂第１(64)、第２貝塚 (66) で、マガキ、ヤマトシジミを中心とする貝層が検出されている。分布図の端になるが板倉町寺西貝塚 (73)、一峯貝塚、離山貝塚では、茅山式のヤマトシジミを中心とする貝層が検出されている。

いずれも淡水産のヤマトシジミを主体とし、鹹水産のマガキなどが含まれることから、縄文海進時の遺跡周辺は、加藤隆則が指摘するように河口に近い、砂泥性の湾であったと考えられる（加藤 2007)。

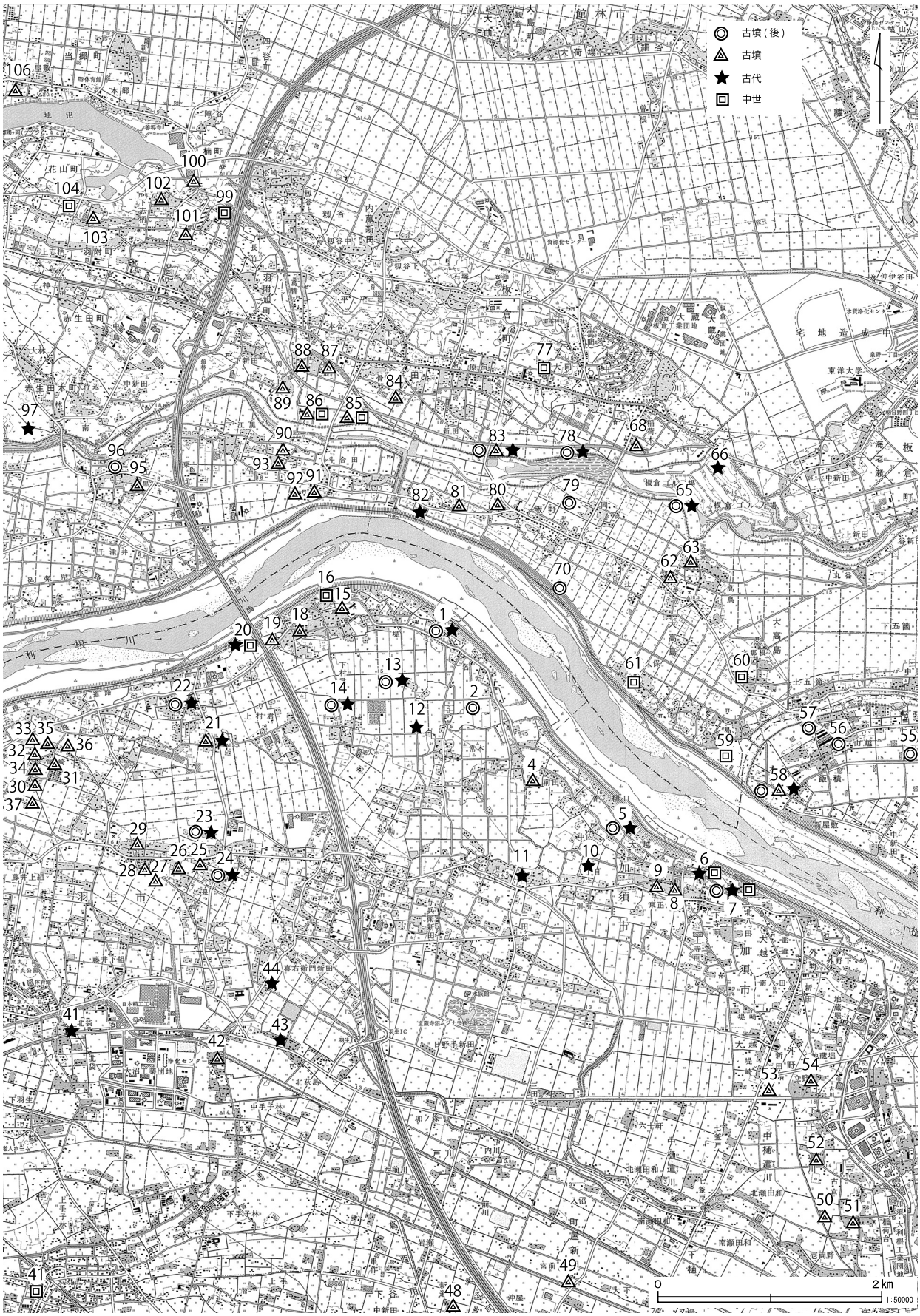
貝塚の形成は前期に継続し、分布図外東側になる藤岡台地では栃木市篠山貝塚、古河市原町西貝塚で、関山・黒浜式期の貝層が検出されている。

集落としては、原町西遺跡で環状集落が、栃木市藤岡神社遺跡（75、手塚 1997・1999・2001）で住居跡６軒が検出されている。この他に加須低地の埋没台地上に立地する砂田遺跡 (14)、鍋田遺跡 (12)、堀口遺跡 (３) などで前期の土器が採集されている。

海退の影響からか、前期後半から中期にかけての遺跡の分布は稀薄で、本遺跡以外には板倉遺跡 (67)、藤岡神社遺跡で阿玉台式期の集落が認めら



第３図　周辺の遺跡（旧石器～古墳前期）



第４図　周辺の遺跡（古墳後期～中近世）

第１表　周辺の主要遺跡（第３図）

1	屋敷裏遺跡	23	大口遺跡	45	弥勒人馬遺跡	67	板倉遺跡	89	淵ノ上古墳
2	本宮遺跡	24	外之内遺跡	46	内谷遺跡	68	藤ノ木古墳	90	薬王寺古墳
3	堀口遺跡	25	観音塚古墳	47	惣達遺跡	69	登戸遺跡	91	富士嶽古墳
4	浅間塚古墳	26	稲荷山古墳	48	下谷遺跡	70	城遺跡	92	稲荷塚古墳
5	長竹遺跡	27	西原遺跡	49	鶴ヶ塚古墳	71	辻遺跡	93	愛宕様古墳
6	宮西遺跡	28	天神塚古墳群	50	浅間塚古墳	72	岡村遺跡	94	斗合田遺跡
7	宮東遺跡	29	熊野塚古墳	51	稲荷塚古墳	73	寺西貝塚	95	江黒古墳
8	八幡塚古墳	30	尾崎古墳群第２号墳	52	御室塚古墳	74	城山遺跡	96	上江黒遺跡
9	稲荷塚古墳	31	尾崎古墳群第３号墳	53	石子塚古墳	75	藤岡神社遺跡	97	宮内遺跡
10	別所遺跡	32	尾崎古墳群第４号墳	54	穴咋塚古墳	76	雲間遺跡	98	赤生田道満遺跡
11	三田ケ谷本村遺跡	33	尾崎古墳群第５号墳	55	麦倉遺跡	77	宝福寺遺跡	99	白旗城跡
12	鍋田遺跡	34	尾崎古墳群第６号墳	56	山越遺跡	78	花和田遺跡	100	町谷１号墳
13	天王遺跡	35	尾崎古墳群第８号墳	57	須賀遺跡	79	岡西遺跡	101	町谷２号墳
14	砂田遺跡	36	尾崎古墳群第９号墳	58	飯積遺跡	80	松ノ木古墳	102	下志柄古墳
15	永明寺古墳	37	遍照院古墳	59	島悪途遺跡	81	中古墳	103	富士山古墳
16	東畑遺跡	38	発戸漆畑遺跡	60	宇那根中世墓	82	新村下遺跡	104	大袋城跡
17	谷田遺跡	39	発戸遺跡	61	大久保中世墓	83	沼田南遺跡	105	大袋遺跡
18	稲荷塚古墳	40	葛瀬氏館	62	大塚山古墳	84	道明山古墳	106	山王山古墳
19	御廊塚古墳	41	北谷遺跡	63	稲荷神社古墳	85	八反遺跡		
20	米の宮遺跡	42	天神塚古墳	64	小保呂第１貝塚	86	長良遺跡		
21	上村君沖遺跡	43	高橋遺跡	65	伊勢ノ木遺跡	87	筑波山古墳		
22	風張遺跡	44	内野遺跡	66	小保呂第２貝塚	88	船山古墳		

れるのみである。藤岡神社遺跡の集落は加曾利ＥⅠ式期の環状集落へ継続する。

板倉遺跡では遺構は不明瞭だが、中期・後期の大量の土器が出土している。

後期は低地域への進出が顕著になるとされているが、本地域においても同様に利根川沿いの低地域において、それまでとは一転して遺跡が増加する。

本遺跡と同じく、利根川上流河川改修事業で調査された加須市長竹遺跡（５）では、関東地方でも屈指の環状盛土遺構が埋没した姿で発見され、コンテナ数千箱に上る膨大な遺物が出土した（矢部・上野・赤熊・黒坂 2014）。盛土遺構の中やその周辺からは、住居跡、掘立柱建物跡、土壙、埋甕、遺物集中などが検出されている。

この中には盛土中に構築されていた、焼土を床一面に敷いた後期末葉から晩期初頭の住居跡も含まれている。同様の遺構は藤岡神社遺跡でも発見されたが、長竹遺跡のそれには大型の建物跡が２棟含まれており、最大では一辺が 12 ｍにも及ぶ。他にも、整然と並び、その多くに土器が副葬された 60 基以上の晩期墓壙群なども調査されており、環状盛土遺構の性格や盛土形成の実態の解明に今後欠かせない遺跡と考えられる。

分布図の南側になるが、羽生市町屋本村遺跡では、調整池掘削時に大量の後晩期の遺物が出土している。

本遺跡南西側３㎞には、土面の出土で有名な羽生市発戸遺跡 (39) がある（栗原 1970）。不時発見だが、加曾利Ｂ～安行Ⅲ式の土器石器が多く出土し、環状盛土遺構の可能性を黒坂禎二が指摘している (矢部・上野・赤熊・黒坂 2014)。

利根川北岸の邑楽台地には、山内清男が採集資料を紹介し、学史上著名な板倉町板倉遺跡 (67、山内 1941) があり、中期から晩期の夥しい量の土器が出土している。岡村遺跡からは後期初頭の住居跡４軒、土壙墓２基が検出されている。

その北東の藤岡台地には前期から継続する藤岡

神社遺跡が所在し、後期の称名寺式から安行式の住居跡、埋甕、土壙墓等が検出されている。安行式の住居跡の一軒は長竹遺跡同様に焼土が床面一面に敷かれた状態で検出されており、両者の関係が問題になる。また、遺構数に比して膨大な出土遺物があり、土器、石器以外に、多量の垂飾品、耳飾り、腕飾、土偶、土版、ミニチュア土器などが出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡は小規模になり、ほとんど様相が不明になる。邑楽台地では谷田川左岸の沼田南遺跡から、後期の上稲吉式の住居跡３軒が検出されている（宮田ほか 2001）。中期前半の板倉町雲間遺跡 (76) は、墓域もしくは集落域として推定されている。

利根川以北では、いずれも板倉町の辻遺跡 (71)、登戸遺跡 (69)、斗合田遺跡 (94) が、利根川の南側では羽生市発戸漆畑遺跡 (38)、天王遺跡 (13) が採集地として知られている。辻遺跡 (71) は、昭和 20 年代の土地改良の際に再葬墓が検出されているとのことだが、大半は湮滅しており、詳細は不明である。これらの遺跡も、本遺跡の様相を鑑みれば、今後の調査で集落域や墓域が明らかになる可能性が充分考えられる。

古墳時代

古墳時代前期の関東地方は、低地で遺跡が増加するが、本遺跡を除いて周辺ではほとんど遺跡が知られていない。唯一利根川河川改修事業関係で、米の宮遺跡から住居跡が検出されているのみである。分布図の西側になるが、大道遺跡では、住居跡 24 軒が調査されている（矢口 2009）。現段階で本遺跡と並ぶ最大級の遺跡である。

邑楽台地北側の古城沼南岸に当たる大袋遺跡 (105) からは、前期後半の住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟が、分布図の西側になるが、近接する館林市大袋城跡からは、前期後半の住居跡５軒が検出されている (川島 1995)。台地の東端、岡西遺跡 (79、宮田・古橋 2001) からは、住居跡７軒が検出されている。

谷田川右岸の明和町上目黒遺跡からは、古墳時代前期から平安時代の住居跡 13 軒が検出されている。村道整備のための細いトレンチ状の調査であるため詳細は不明だが、かなり大規模な集落の存在が予想されている (立川 1996)。

館林市赤生田道満遺跡 (98) では、方形周溝墓３基が検出されている。

前期古墳は、邑楽台地の赤城塚古墳が径 30 m 程度の円墳ながら、三角縁仏獣鏡、剣、玉が出土したことで知られている。

屋敷裏遺跡周辺で、遺跡数が本格的に増加するのは中期に入ってからである。

利根川以北の谷田川流域では、左岸の板倉町沼田南遺跡 (83) で５世紀中葉の住居跡７軒が検出されている。住居跡埋没土の上層に大量の洪水砂が認められ、６世紀代の水害の規模が窺える。

八反・長良遺跡 (85・86) では、６世紀中葉の住居跡 10 軒が調査されている (中里 2007)。

板倉町花和田遺跡 (78) では、古墳時代中期から平安時代の住居跡 35 軒が検出されている (宮田ほか 2001)。時期ごとでは、５世紀後半４軒、６世紀第１四半期３軒、第２四半期６軒、第３四半期２軒、第４四半期２軒、７世紀前半２軒、後半１軒、９世紀前半１軒、中葉２軒と土壙墓 21 基が検出されている。一時期当たりの軒数は少ないが、継続的な拠点集落になっていたと考えられる。やはり６世紀中葉の多量の洪水砂が認められ、遺構分布との関連が推定されている。６世紀後半の住居跡からは、臼玉 132 点が出土している。特に第 45 号住居跡では、カマド内から念珠状に出土しており、注目される。

右岸では板倉町伊勢ノ木遺跡 (65)、岡西遺跡 (79) で後期の住居跡２軒、上流域では前述の明和町上江黒遺跡、利根川左岸では城遺跡 (70)、新村下遺跡 (82) が知られている。

これらの集落はいずれも、古墳時代中期、後期から集落が形成され、奈良・平安時代まで継続している。屋敷裏遺跡では、古墳時代前期の大規模な集落から、中後期以降は小～中規模ながら、上述の遺跡と同様の展開を示しており、谷田川、利根川流域の遺跡分布の南端とすることができる。

この遺跡群が谷田川左岸の板倉町道明山、筑波山、船山、淵ノ上の各古墳、右岸の稲荷神社古墳、大塚山古墳から江黒古墳にかけての一連の古墳群、屋敷裏遺跡西側の村君古墳群の造営に密接に関係すると考えられる。

利根川と、近世に締め切られた合の川の合流点付近の自然堤防に立地する北川辺町飯積遺跡（58）は、５世紀後半から 10 世紀前半まで 244 軒の住居跡が検出されている拠点的な集落である（鈴木・岩瀬・加藤 2007、加藤 2007)。時期ごとでは、５世紀第３四半期３軒、第４四半期 19 軒、６世紀第１四半期 28 軒、第２四半期 16 軒、第３四半期 16 軒、第４四半期９軒、７世紀第１四半期 13 軒、第２四半期５軒、第３四半期５軒、第４四半期 22 軒の住居跡が検出されている。飯積遺跡では、５世紀後半段階でカマドが導入され、６世紀第１四半期に隆盛を迎えるが、洪水によって縮小傾向が強まる。７世紀末には、住居跡が方形大型の古墳時代的な住居跡から、長方形小型の奈良・平安時代のそれへと変化し、再び隆盛を迎える。

周辺では、飯積遺跡以外にも北川辺町須賀遺跡(57)、麦倉遺跡 (55)、山越遺跡 (56) で古墳時代後期の土器が採集されている。利根川以南では、利根川河川改修関係で調査中の長竹遺跡、加須市宮東遺跡（７）で中後期の住居跡が検出されている。現在の利根川の南北ではあるが、飯積遺跡を中心とした分布が窺える。屋敷裏遺跡周辺同様に、この遺跡群が大越古墳群造営に密接に関係すると考えられる。

また遺跡分布図の北東側になるが、野木町野木Ⅲ遺跡、清六Ⅲ遺跡では、古墳時代の住居跡が 147 軒検出され（上原 1998)、その南側に野渡古墳群が造営されている。

古墳群

利根川南側の埋没台地上には、群集墳が分布している。屋敷裏遺跡の西側の羽生市村君古墳群は、全長 73 ｍの永明寺古墳 (15)、御廟塚古墳 (19)、稲荷塚古墳(18)の現存する３基のほか、浅間塚跡、上村君八幡塚跡などの小円墳が存在したと伝えられている。

永明寺古墳は、礫槨から緑泥片岩とともに耳環、鉄鋸、衝角付冑、挂甲小札、九窓鍔付太刀片、刀子片、馬具（雲珠・鞍・轡・壺鐙・鉄地金銅張鋲留金具）が出土し、６世紀前半の築造とされている（栗原・塩野 1969、瀧瀬・野中 1996)。御廟塚古墳からは緑泥片岩の破片、轡が出土したと伝えられている。稲荷塚古墳は径 20 ｍ、高さ 1.5 ｍの墳丘があり、円筒埴輪、形象埴輪が出土している。

羽生市尾崎古墳群は、鷲宮神社古墳、遍照院古墳、浅間塚古墳が現存する。この３基以外にも、耕作中に地表下１ｍほどから埴輪や主体部の石材が何か所からも出土することから、埋没古墳群が存在する地としてよく知られている。

今泉古墳群はその南東に位置し、稲荷山古墳 (26)、天神塚古墳 (28)、熊野塚古墳 (29)、観音塚古墳 (25) が現存する。稲荷山古墳は明治 26 年 (1893 年) に横穴式石室が検出され、刀、鎧、甲がまとまって出土したと伝えられている。天井石と考えられる緑泥片岩がその跡地に立てられている。

加須市大越古墳群は、長竹遺跡の南側、宮東遺跡の西側に造営されている。稲荷塚古墳（９)、浅間塚古墳（４)、八幡塚古墳（８）の３基が現存し、人物埴輪、円筒埴輪が伝えられている。

加須市樋遣川古墳群は御室塚古墳 (52)、稲荷塚古墳 (51)、浅間塚古墳 (50) の３基の円墳が現存

している。また西方に当たる消滅した宮西塚古墳からは、方格四獣鏡、ガラス玉、馬具(轡・辻金具・杏葉)、太刀片が出土し、６世紀中葉頃の築造とされている。

以上の低地に分布する古墳群は、６世紀から７世紀代に築造されたと考えられており、当地域の集落遺跡の急速な形成と軌を一にしている。

一方、邑楽台地では、前述のように谷田川左岸の台地縁辺に道明山(84)、筑波山(87)、船山(88)、淵ノ上(89)の各古墳が造営されている。いずれも角閃石安山岩を用いた胴張型の横穴式石室を主体部とする前方後円墳で、６世紀後半から７世紀初頭の築造と考えられている。全長53.5ｍの筑波山古墳からは鉄刀、銀象嵌亀甲繋鳳凰文円頭太刀、瑪瑙勾玉、水晶切子玉、金環、銀環が出土している(宮田1989)。淵ノ上古墳からは、金銅製耳環、直刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、馬具（鐙）が出土し、家形埴輪が伴っている（黒澤・岡屋1993)。

やや離れた沼田南遺跡では、６世紀の古墳の周堀を部分的に検出している。藤ノ木遺跡(68、宮田ほか2001)では、土壙墓状の埋葬施設を持つ円墳３基が検出されている。特に第３号墳の溝中土壙からは馬歯が出土し、その埋葬が推定されている。いずれも伴出遺物がなく年代は不明である。

また、右岸には現状では微高地状となっている台地縁辺にも、多くの古墳が分布している。板倉町大高島の稲荷神社古墳(63)、大塚山古墳(62)が最下流にあたり、上流へ向かって松ノ木古墳(80)、中古墳(81)、富士嶽古墳(91)、稲荷塚古墳(92)、愛宕様古墳(93)、薬王寺古墳(90)、斗合田古墳(94)、江黒古墳(95)が知られている。中古墳では、藤ノ木３号墳同様に溝中土壙から馬歯が出土している。

これらの古墳は、いずれも６世紀後半から７世紀初頭の築造の円墳とされており、左岸の淵ノ上古墳をはじめとする前方後円墳群との階層差が想定される。

古城沼の北岸には、全長42ｍの前方後円墳山王山古墳(106)があり、南岸には富士山古墳(103)、下志柄古墳(102)、町谷１・２号墳(100・101)などの後期古墳が造られている。

以上のように、後期古墳は古墳時代の主要な河川を臨む台地縁辺部に立地しており、古墳群の造営集団の河川との深いかかわりが窺える。

一方横穴墓は、分布図の東側になる海老瀬台地上に、板倉町離山横穴墓群、頼母子横穴墓群が知られるのみである。

生産遺跡としては北西20㎞に、太田市菅ノ沢窯跡群が知られ、製品が多くの古墳から副葬品として出土している。屋敷裏遺跡にも製品が供給されている。

古代

本遺跡周辺の奈良時代の遺跡は、ほとんどが古墳時代から継続して営まれている。概して住居跡は小型化し、分布は分散的である。

飯積遺跡では、７世紀末から８世紀初頭15軒、８世紀前半12軒、後半６軒、９世紀前半３軒、後半３軒の住居跡が検出され、８世紀前半までは規模が維持され、その後極端に縮小化が進む。

一方、長竹、宮東、加須市宮西(６)の各遺跡では、集落の規模が平安時代に大きくなる。

中でも長竹遺跡は現在も調査中だが、これまでに数十軒単位の住居跡が検出されており、古代の大規模集落として再評価できる。

本事業の調査でも多くの古代集落の存在が明らかになった。屋敷裏遺跡では26軒のまとまった集落跡が検出された。宮西遺跡、宮東遺跡、米の宮遺跡、樋ノ口遺跡で住居跡が検出されている。

邑楽台地では、谷田川左岸の沼田南遺跡で７軒、八反・長良遺跡で５軒の住居跡が検出されている。他にも伊勢ノ木遺跡、小保呂第２貝塚遺跡(66)が知られているが、古墳時代に比して遺跡数、規模ともに縮小傾向が強い。これらの遺跡は供膳

具にロクロ土師器を用いており、下総台地、中川低地と連続する様相を示す。

生産遺跡としては本遺跡の北側 10 ㎞ほどの三毳山窯跡群が７世紀末から生産を始める。本遺跡でも製品が認められる下総国三和窯は９世紀からの生産が認められる。

加須市水深遺跡では、８世紀中葉から９世紀にかけての土師器焼成坑 65 基が検出されている。

中世

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流していた。国境や郡境もこれらの河川がもとになる。

遺跡周辺は太田荘に属し、利根川以北は上野国邑楽郡の佐貫荘に当たる。大越近辺は実態は不明だが、小山朝政の墓所があり、その影響下にあったと考えられる。

太田荘は、おおよそ大落古利根川の流域一帯に広がる広範囲な荘園で、北は羽生市から南は岩槻市にまで及ぶ。平安時代末期に成立した八条院領荘園の一つである。前述の会の川によって鎌倉時代後期以降は南北に分けられ、遺跡周辺は「太田荘北方村君之郷」に属している。

吾妻鏡には鎌倉幕府による太田荘の堤防修復や荒地開墾の記事が見られ、低地開発が本格化したと考えられる。羽生市域もその対象であったかは定かでないが、その可能性は高い。

本事業に伴う一連の調査によって、その開発の一端が、明らかになりつつある。

屋敷裏遺跡周辺では、本事業に伴って中近世の遺跡が数多く調査されている。

本遺跡より西１㎞の羽生市東畑遺跡では、戦国時代から江戸時代の掘立柱建物跡、道路跡、井戸跡などが検出されている。

本遺跡西側 1.7 ㎞には室町時代の米の宮遺跡 (20) がある。大規模な区画溝、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡などが検出されている。

永明寺には延慶２年 1309 年）８月銘釈迦主尊の板碑２枚、正中３年 (1326 年) 銘の阿弥陀三尊板碑１枚がある。同寺は鎌倉時代の銅像阿弥陀如来立像、貞治６年 (1367 年) の胎内墨書がある木造薬師如来坐像が伝えられ、同寺が鎌倉時代まで遡る寺院であったのは確実であろう。

また、下村君松ノ木観音堂からは建治２年 (1276 年) 阿弥陀主尊の板碑が見られる。

村君、名周辺より３㎞ほど南東の加須市大越周辺は、鎌倉武士として有名な小山朝政 (1345 年没) の墓所がある徳性寺、鎌倉街道中道の枝道と言われる古道が通り、近世では河岸が設けられるなど陸路と河川交通の結節点となっていた。

本事業関係で調査された宮東遺跡からは、畠跡、井戸跡、土壙、溝跡などが検出されている。

宮東遺跡の 1.2 ㎞西の宮西遺跡では、15 ～ 16 世紀代を中心とする井戸跡、地下式壙、土壙、溝跡等が検出されている。

以上のように、村君、名、大越の周辺では、一連の調査によって中近世の遺構、遺物が多く検出されている。『吾妻鏡』で見られた太田荘の本格的な低地開発が、遺跡の様相、中世からの古刹永明寺や周辺の板碑、鎌倉武士の墓所の存在からも充分に窺えると言えよう。

対岸の利根川北岸、板倉町では文和四年（1233 年）銘の板碑が出土した宇那根中世墓 (60)、14 ～ 15 世紀の大久保中世墓 (61)、14 世紀中葉の古瀬戸蔵骨器、経石が出土した宝福寺遺跡 (77) などが知られている。

分布図北西の館林市には、戦国期の長尾氏、北条氏の居城として知られる館林城がある。館林市内には、他にも大袋城跡 (104)、白旗城跡 (99)、青柳城跡が分布している。

屋敷裏遺跡周辺の中世の集落も、こうした館林市域の多くの城と無関係とは思われない。今後遺跡周辺との関係が問題になると考えられる。

近世

近世の屋敷裏遺跡周辺の様相は、若干下流域に

なるが、中川低地の水害防止と開拓、江戸への舟運の整備を目的とした江戸幕府による利根川の３度の瀬替えを置いては語れない。

文禄３年（1594）、忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発し、元和７年(1621) に大利根町佐波から猿島郡釈迦沼までを開削、２度の拡幅、増掘を経て、天保９年に合の川と浅間川が完全に締め切られた。下流の大越には黒田河岸と鈴木河岸が設けられ、北埼玉地域の物資の集積地となり、明治まで大いに賑わったという。

館林城は、徳川家康の関東入府以降は利根川を掌握する重要拠点として、幕府の重鎮の居城となり、榊原氏、松平氏、徳川氏、太田氏、井上氏、秋元氏の徳川七家が城主となった。館林は、榊原康政によって日光脇往還に沿って造られた城下町となり、繁栄する。屋敷裏遺跡周辺も少なからずその影響を受けたと思われる。

旧堤村は、当初羽生城の大久保氏による知行であったが、後に幕府の直轄地となり、旗本の富田氏、藤枝氏などの代官が赴任している。遺跡に近い弥勒新田の元和７年（1621 年）の検地では、下田五町、上畑三反、中畑八反、下畑四町が併記され、田畑が相半ばする景観が広がっていた様子が窺える。自然堤防、埋没台地、後背湿地という地形的な特徴が、地目にも反映されたと考えられる。

Ⅲ　遺跡の概要

屋敷裏遺跡は羽生市名に所在する。現在の利根川の堤防下まで遺跡の範囲が広がり、北側を利根川が東流している。遺跡周辺は一面の田園風景が広がり、埋没台地、自然堤防の微高地上は屋敷林となっている。

基本土層は地点によって大分様相が異なるため、あえて統一しなかったが、各時代の遺構掘り込み面、包含層の対応関係を整理した。低地であるため土砂の流入が多く、ローム層まではＡ区で 2.5 ｍ、Ｂ区で 2.0 ｍ、Ｃ区で 1.8 ｍ、Ｄ区で 2.7 ｍ程の厚さがある。現代の耕作面はほぼ平坦に整えられていることから、Ｃ区の標高が最も高く、Ａ区・Ｄ区方向へ低くなっている。縄文時代の包含層はＡ～Ｃ区に認められ、Ｄ・Ｅ区からは検出されていない。

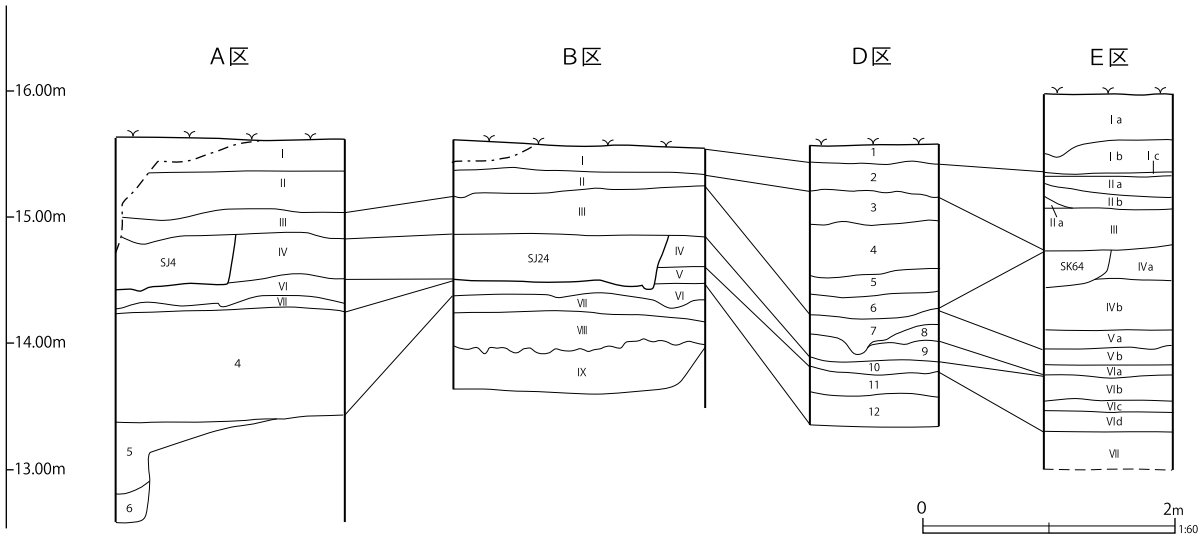
最上層（Ⅰ層）はＤ区が現在の道路敷や宅地に伴う盛土が見られたほかは水田の耕作土と考えられる。Ⅱ層は明褐色土もしくは灰褐色土で、遺物がなく、近代に相当すると考えられる。

Ⅲ層は灰褐色土もしくは明褐色土で天明三年(1783) 年の浅間山噴火に伴う浅間Ａ軽石が多量に含まれている。近世の包含層である。

Ⅳ層はシルト質の暗灰色土、暗灰褐色土で、古代から中世の遺物が包含されている。Ｂ区ではほとんど発達しておらず、Ｅ区では層厚が１ｍ近くあり、細かに分層できた。Ⅴ層は炭化物を含むシルト質の暗灰色土で古墳時代から古代の地山である。Ⅵ・Ⅶ層は縄文時代から古墳時代への漸移層で、地点ごとに異なる。包含層の認められないＤ・Ｅ区では標高が低くグライ化している。ⅧからＸ層は粘性の高い黒褐色土で、包含層である。

Ⅺ～ⅩⅢ層は埋没台地のローム土で、立川ローム相当層として対応可能である。今回の調査では遺物は出土していない。武蔵野台地の標準層に対比するとⅪ層がソフトローム（立川Ⅲ層）、ⅩⅡ層がハードローム（立川Ⅳ層）、ⅩⅢ層は第１暗色帯（立川Ⅶ層）である。

確認面の標高はおよそ 14.0 ～ 15.0 ｍである。調査区は北西側、南東側へ向かって傾斜しており、Ａ区とＥ区で１ｍほどの標高差がある。



A区
Ⅰ　灰褐色土　浅間Ａ多量　粘質土
Ⅱ　明褐色土　やや砂質　鉄分やや多
Ⅲ　明褐色土　やや砂質　灰色粘質土、白色火山灰が混入
Ⅳ　暗灰色土　粘質土　シルト質
Ⅵ　明褐色土　シルト質　鉄分多
Ⅶａ　灰色細砂層　５㎜以下の礫若干含む
Ⅶｂ　褐色細砂層　Ⅶａ層が酸化
4　黒褐色土　縄文土器を含む
5　黒褐色土　シルト質　ソフトロームをブロック状に含む
6　黒褐色土　シルト質　ソフトロームを密に含む

B区
Ⅰ　灰褐色土　表土（現耕作土）　シルト質
Ⅱ　灰褐色土　シルト質
Ⅲ　暗灰褐色土　粘質　炭化物少量　鉄有り
Ⅳ　暗灰褐色土　粘質　鉄分沈着
Ⅴ　暗灰色土　やや粘質強い　鉄分沈着
Ⅵ　黒褐色土　シルト質　炭化物少量
Ⅶ　暗黄褐色土　粘質　ハードローム
Ⅷ　暗黄褐色土　粘質　ブラックバンド対応層
Ⅸ　黄褐色土　粘質　下位ローム

D区
1　黒色土　表土層　上面に砕石が敷設
2　暗灰褐色土　粘性強　水田の耕作土か
3　黒褐色土　炭化物粒子少量　粘性弱
4　黒褐色土　３層にくらべ黄色味がやや強い　炭化物粒子少量
5　黒褐色土　４層にくらべ黄色味があり粘性有　炭化物粒子・暗黄褐色ブロック少量
6　暗褐色土　５層より黄色味が強くなる　炭化物粒子・暗黄褐色ブロック多量
7　黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒子少量
8　暗褐色土　炭化物粒子少量
9　暗黄褐色土　古墳前期の遺構上面に堆積した層　炭化物粒子微量
10　黒褐色土　古墳時代前期の文化層・包含層　この層の上端から古墳前期の遺物が出土する
11　暗黄褐色土　古墳前期の地山層　粘性強　上面が古墳前期の遺構確認面
12　暗黄褐色土　11層と酷似　水位の影響を受けグライ化　粘性強

E区
Ⅰａ　黄褐色土　黒色土中に黄褐色土多量　浅間Ａ有
Ⅰｂ　黒褐色土　黄褐色土小ブロック・炭化木・焼土小ブロックを明瞭に混入する
Ⅰｃ　暗褐色土　炭化材を多量に含む　白壁（化粧土）を少量混在する
Ⅱａ　暗黄褐色土　黒褐色土多量　浅間Ａ・焼土粒子多量　炭化材を少量
Ⅱｂ　黒褐色土　Ⅱａ層を多量にブロック状に混入　浅間Ａ多量
Ⅲ　黒褐色土　白色粒子（火山灰か）　焼土粒子微量
Ⅳａ　暗黒褐色土　均質な層　白色粒子（角閃石安山炭の粒子か）微量
Ⅳｂ　暗黒褐色土　Ⅳａ層より粘質強
Ⅴａ　暗茶褐色土　酸化した砂質土　雲母含む
Ⅴｂ　茶褐色土　酸化　砂粒子混入
Ⅵａ　暗茶褐色土　酸化鉄を斑に混入
Ⅵｂ　青灰色土　酸化鉄を斑に混入
Ⅵｃ　青灰色砂質土　砂質土主体
Ⅵｄ　青灰色土　しまり強　炭化物微量
Ⅶ　青灰色土　Ⅵｄとの分層は遺物の有無のみ

第２図　遺跡周辺の地形区分

本遺跡の調査は平成 23・25 年度、２次に亘って実施した。

調査区は西から東に向かってＡ～Ｄ区（第１次）に便宜的に分割し、第２次調査区をＥ区とした。

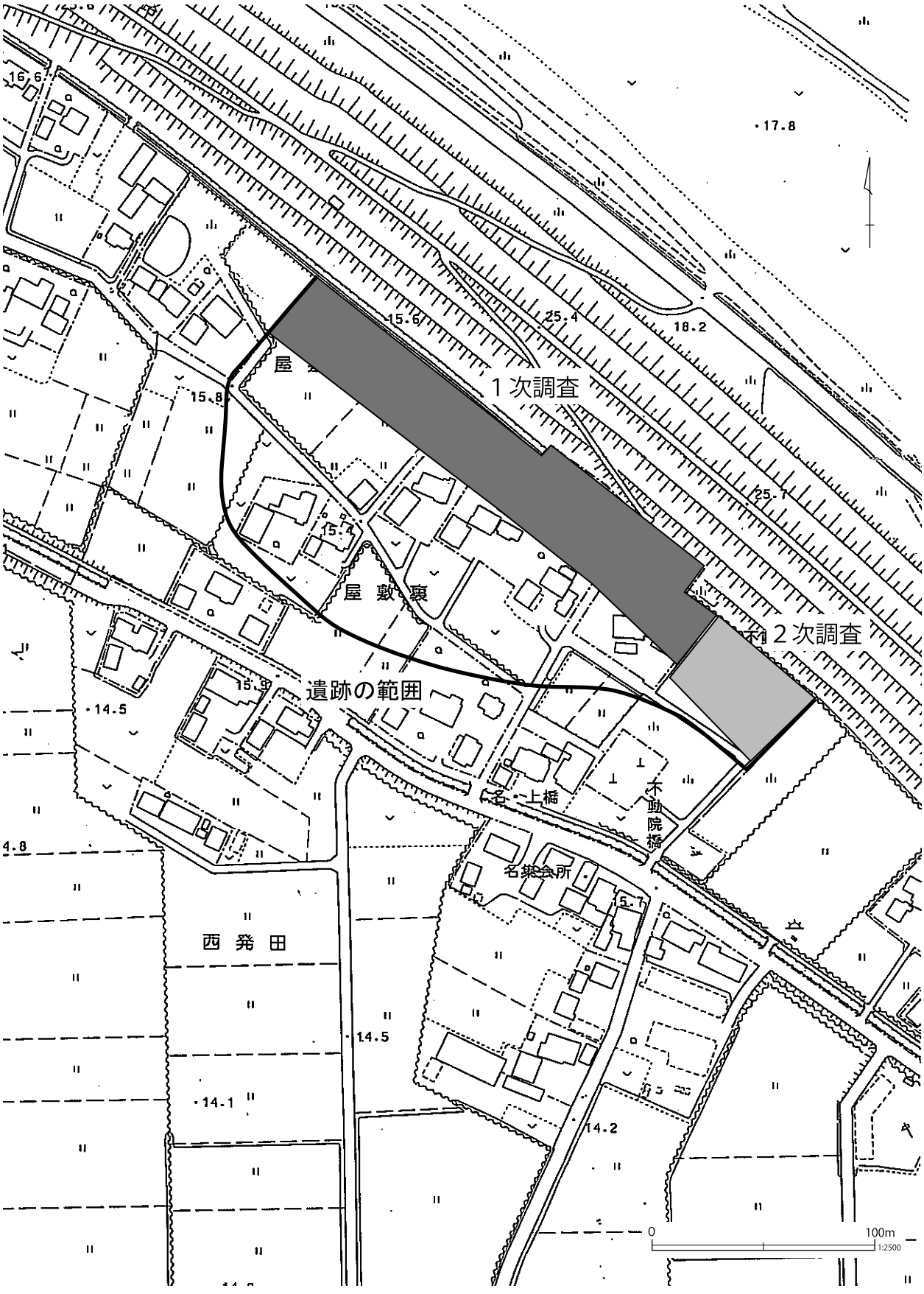
第１次調査では第一面に弥生時代、古墳時代～平安時代及び中近世の遺構が、第二面に縄文時代の遺構と遺物包含層が検出された。但し、第一面は場所によって２枚から３枚の文化層が存在し、遺構の確認作業は非常に困難であった。

検出された遺構は竪穴住居跡 94 軒、掘立柱建物跡３棟、方形周溝墓１基、円形周溝状遺構１基、井戸跡 18 基、土壙 57 基、溝跡 12 条、畠跡６箇所、ピット群 11 箇所、ピット多数である。

縄文時代の遺構はＢ・Ｃ区に確認された埋没ローム台地上を中心に分布し、Ａ区の台地肩部には遺物包含層が形成されていた。なお、Ｄ区には遺物包含層は検出されなかった。

縄文時代中期後半の住居跡は１軒検出された。円形の平面形で、約 40 ㎝の掘り込みを持ち、炉跡と柱穴を検出した。覆土中から大破片の土器が出土した。後期初頭から前半の住居跡は４軒検出された。第 91 号住居跡は柄鏡形で、埋甕と炉跡がある。他にも壁溝と柱穴が円形に巡るピット群が 11 箇所検出されたが、炉跡や埋甕が確認できず、住居跡と断定できなかった。

弥生時代の遺構は、Ｂ区から中期後半の住居



第６図　屋敷裏遺跡調査地点位置図

跡１軒、方形周溝墓１基、土壙９基が検出された。住居跡は平面形態が隅丸方形で、中央に炉跡と４本主柱穴を備えていたが、ほぼ同位置に古墳時代後期の住居跡が重複していたため遺存状態は悪い。方形周溝墓は住居跡の南東部に近接して造られていた。方台部は一辺約 10 ｍの方形である。周溝は四隅が切れる平面形で、ほぼ中央部に大型壺形土器を収めた土壙（ＳＫ 25・26）が検出されており、中心埋葬施設の可能性がある。

古墳時代前期は本遺跡の中心となる時期で、竪穴住居跡 44 軒、掘立柱建物跡１棟が検出された。Ａ～Ｄ区のほぼ全面に分布し、特にＢ区～Ｄ区にかけて密集度が高い。年代差の少ない住居跡相互の重複例が多く、居住箇所が限定されていた様相が窺える。一辺７ｍ～８ｍの比較的大型の住居跡が多いのも特徴で、床面には炉跡と４本主柱穴、貯蔵穴が設置されるのが基本形態である。第 24 号住居跡からは多量の遺物が出土し、特に覆土上層からはほぼ完形の壺や甕がまとまって出土した。

古墳時代前期の出土遺物はＳ字状口縁台付甕が主体で、型式的には石田川式の範疇に含まれる。外来系土器では東海系が中心だが、北陸系、北近畿系や山陰系など日本海側に由来する土器が出土している。

古墳時代中期の住居跡は、Ａ区とＢ区から各１軒、計２軒が検出された。他は土壙１基が検出されたのみで、古墳時代前期から大幅に縮小する。Ａ区第 18 号住居跡は、炉跡と貯蔵穴、柱穴をもち、貯蔵穴からほぼ完形の高坏が出土した。Ｂ区第 28 号住居跡からは、小型坩が数点出土した。

古墳時代後期は住居跡 19 軒、掘立柱建物跡１棟、土壙３基、井戸跡４基、円形周溝状遺構１基、畠跡２箇所が検出された。住居跡はＡ～Ｃ区にかけて分布し、特にＡ・Ｂ区に集中する傾向がある。カマドは北、東、西の各方向に敷設されている。基本的に４本主柱穴で貯蔵穴が設置されている。

特筆されるのは、約 20 ｍ離れた２軒の住居跡（Ａ区第 10 号住居跡と第 13 号住居跡）から出土した須恵器脚付長頸壺が、接合した点である。脚部分が前者、壺部分が後者から出土し、破片同士が接合した。この脚付長頸壺は高さ約 40 ㎝、円形や方形の透穴（すかしあな）で加飾された優品である。また、近接する第９号住居跡からは須恵器脚付短頸壺と丸底壺が出土している。これらは、本来古墳の副葬品として製作されたものと推定され、住居跡からの出土は極めて稀である。

古墳時代後期の出土遺物は、土師器が主体である。特に黒色処理された坏身模倣坏、有段口縁坏が多い。前者には漆が用いられている場合もあり、下野地域との密接な関係が推定される。須恵器は前述の脚付長頸壺をはじめに、太田金山窯産、東毛産が大部分である。

平安時代は住居跡 24 軒、掘立柱建物跡１棟、土壙 12 基、井戸跡６基、畠跡４箇所が検出された。Ａ区～Ｄ区まで調査区全域に散在的に分布している。住居跡は２～３軒の群が認められる。Ｄ区 50 ～ 52 号住居跡は、その中で重複し、ある程度宅地として固定化した様相を推定することもできる。住居跡は一辺３～４ｍの小型のものが多く、カマドのある辺に張り出しを設ける例がみられる。柱穴は不明瞭なものが多い。

10 世紀前半の第 45 号住居跡からは、鉄製の口琴が須恵器坏、ロクロ土師器坏、土師器甕の破片とともに出土している。現段階では国内で最も古い例の一つである。Ｃ区中央付近の第５号井戸跡は、灰釉陶器片が出土している。

平安時代の出土遺物は、ロクロ土師器、土師器が主体である。ロクロ土師器の胎土には複数の種類があるが、ほとんどが角閃石を多く含んでおり、利根川流域のいずれかで生産されたと考えられる。須恵器には三和窯産が認められ、土師器甕には常陸系の甕があり、遺物の面からは国境の集落である印象を強く受ける。他に灰釉陶器や緑釉

陶器、口琴も含めた鉄製品が出土し、多様な他地域との関係が認められる。

中近世では、土壙３基、井戸跡 12 基、溝跡８条が検出された。D区第 49 号土壙からは、常滑焼の大甕と小型の壺が潰れた状態で出土し、僅かに骨片が確認されており、火葬墓に伴う蔵骨器と考えられる。また、D区を中心に、近世と思われる井戸跡が検出された。

中近世の出土遺物は、かわらけ、中世陶器、近世陶磁器、砥石等の石製品、煙管等の鉄製品が出土している。

屋敷裏遺跡第２次調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡５軒、土器集中３箇所、包含層１箇所、平安時代の竪穴住居跡２軒、中近世の溝跡３条、井戸跡１基、土壙４基などが検出された。

古墳時代前期の住居跡はいずれも調査区外にかかっているため、全体の規模は明らかにできなかったが、一辺４～５ｍの方形と考えられる。このうち４軒の住居から炉が検出されており、第 101 号住居からは、２箇所の炉と１箇所の貯蔵穴が確認された。

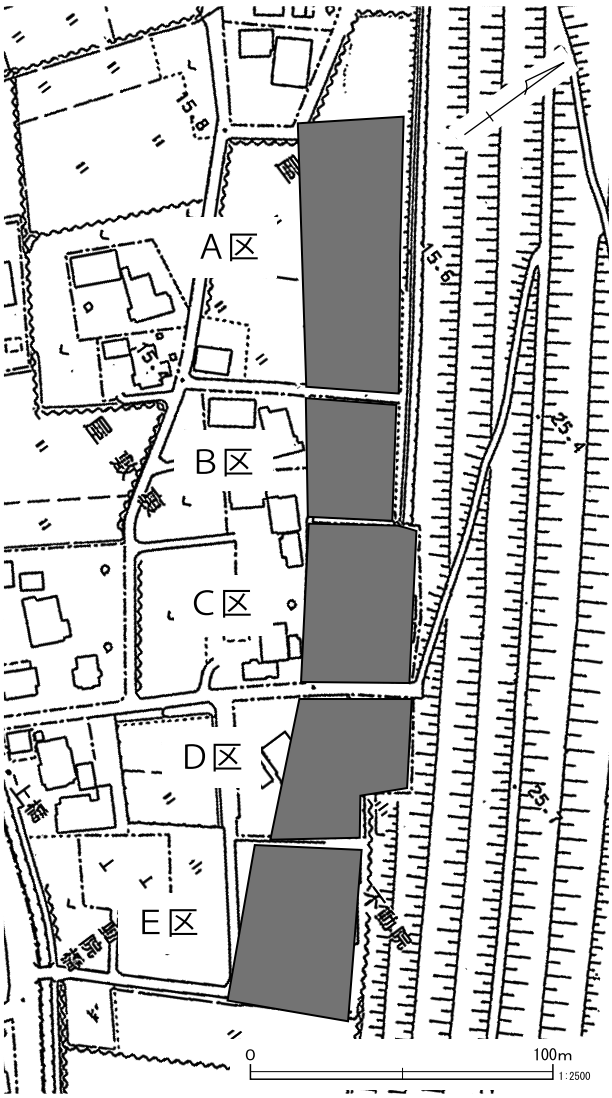
第 97 号住居からは、多量の土器が出土しているほか、長さ 20～30 ㎝の炭化材が床面中央部を中心に遺存しており、焼失住居の可能性がある。

また、調査区北東部の旧地形は低くなっており、遺物包含層が形成されていた。

３箇所の土器集中では、複数個体の土器が狭い範囲からまとまって出土した。いずれも調査区北東部の遺物包含層中からみつかっており、浅く窪んだ地形が埋没する過程で形成されたものと考えられる。

古墳時代前期の出土遺物は、第１次調査区と同様だが、特に土器集中からは、口径 30cm を超える特大サイズの遺存率の高い甕が出土しており、注目される。

平安時代では２軒の住居跡が検出された。平面形は長方形で、４×３ｍの規模である。第 96 号



第７図　屋敷裏遺跡全体図(区割り)

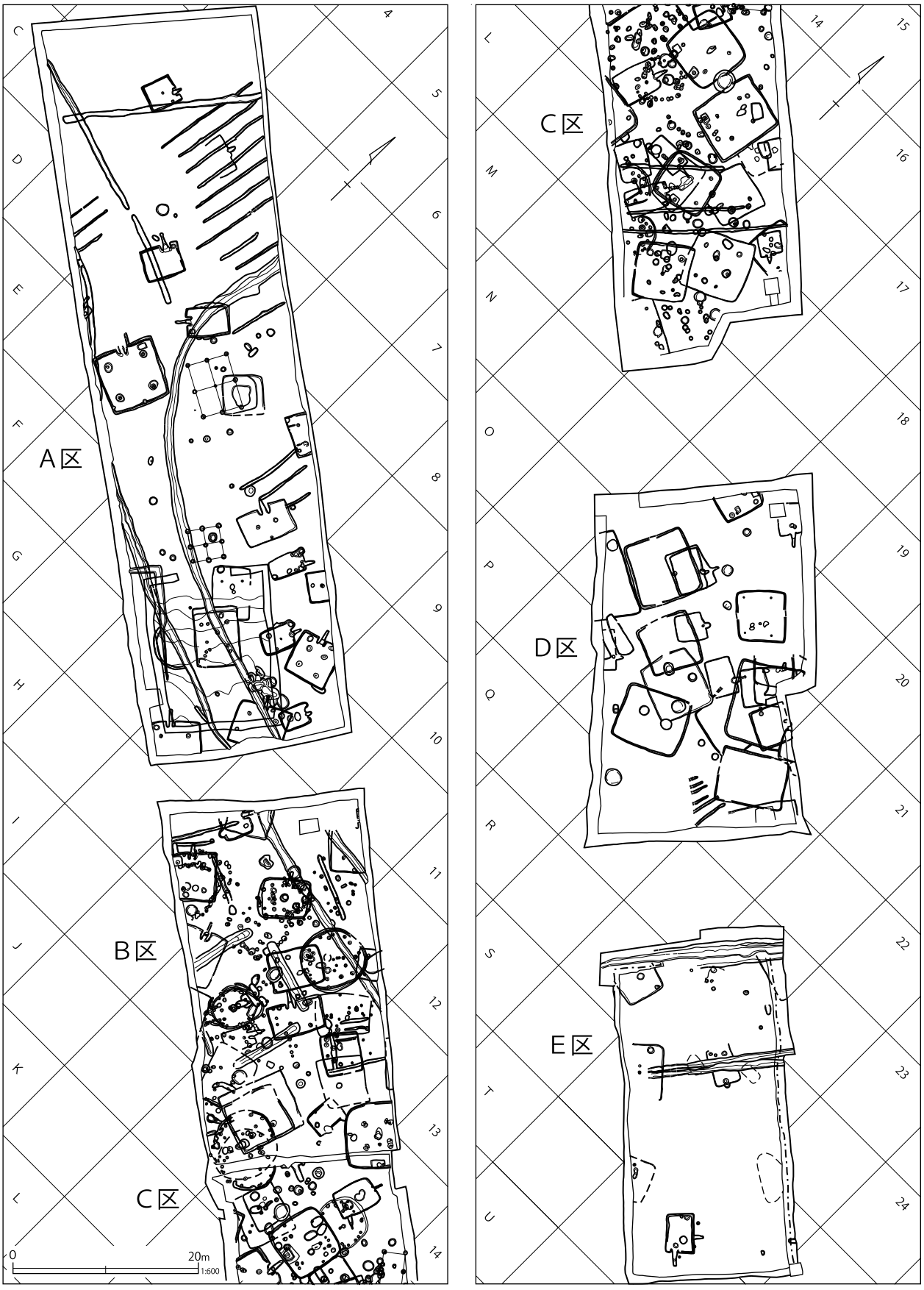
住居跡は、カマドや床面の状況から建替え・拡張が想定される。

平安時代の出土遺物は第１次調査同様にロクロ土師器、土師器が主体である。

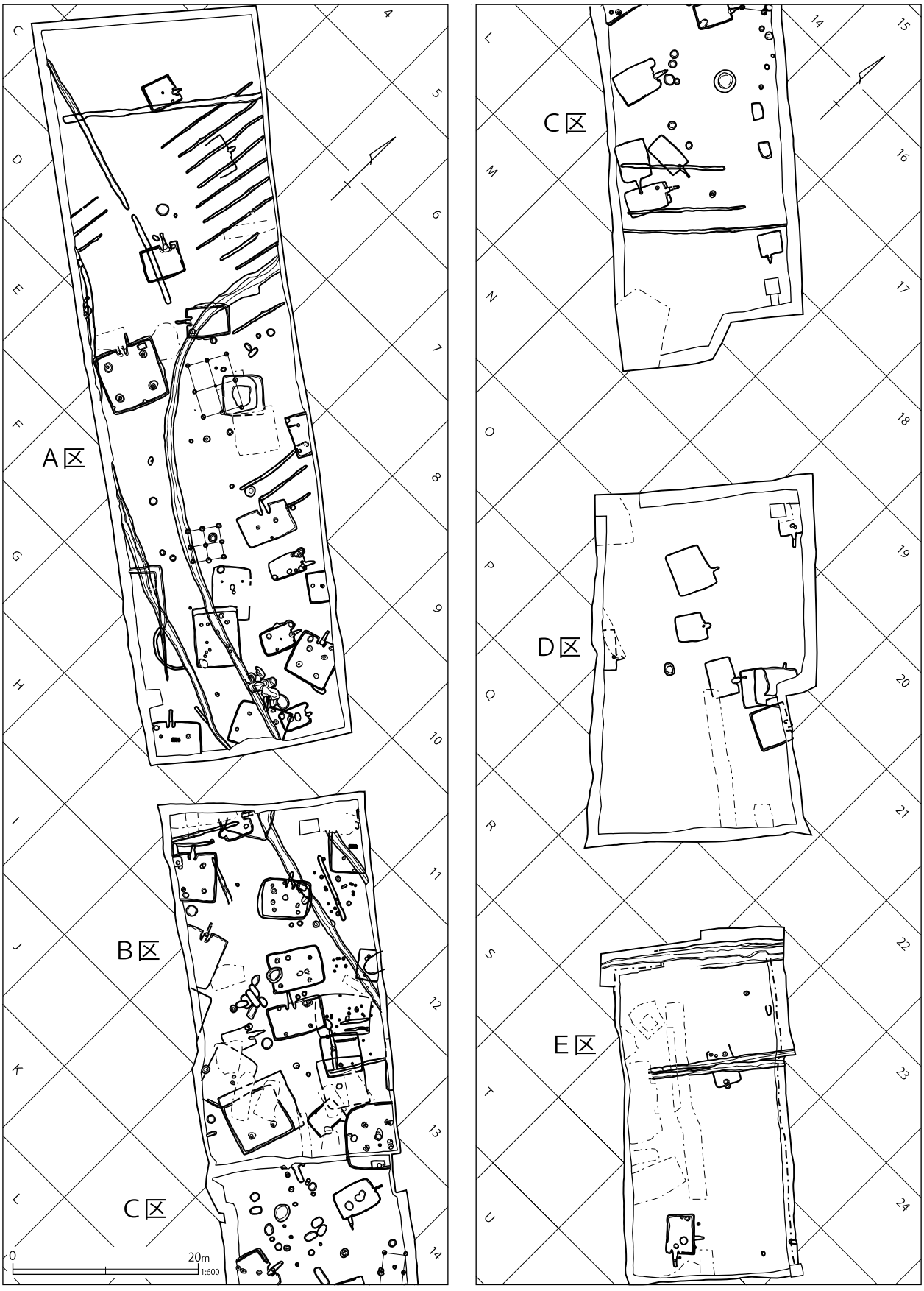
中近世では溝跡３条､井戸跡１基が検出された。調査区北西部で検出された第 46 号溝跡は規模が大きく、屋敷の区画溝等の機能が考えられる。

中近世の出土遺物は、かわらけ、中世陶器、近世陶磁器、砥石等の石製品、煙管等の鉄製品が出土している。

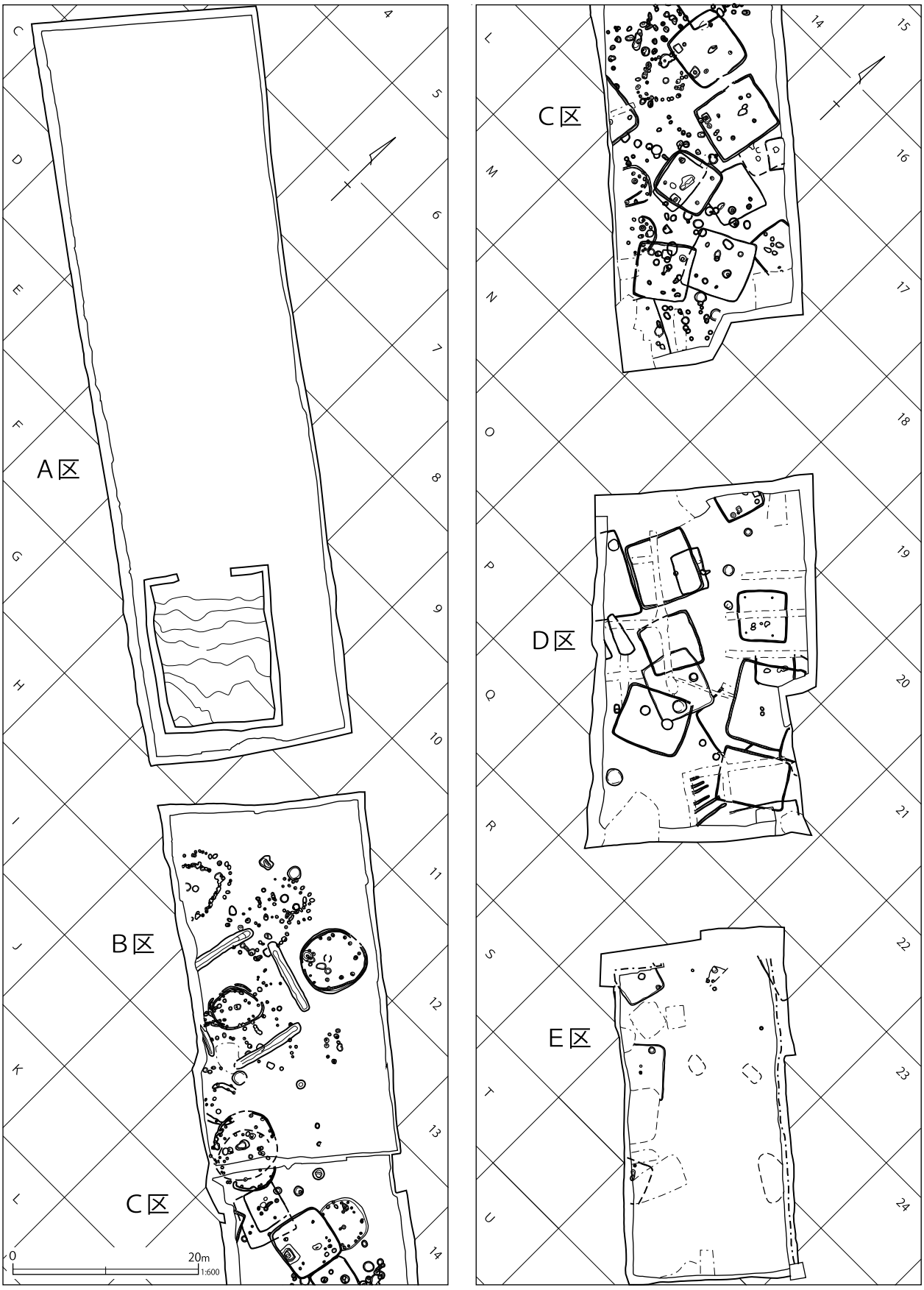
中近世の溝跡はいずれも地籍に沿った方向に延びており、現代までその区割りが継続している。屋敷裏の字もその景観に由来するのであろう。



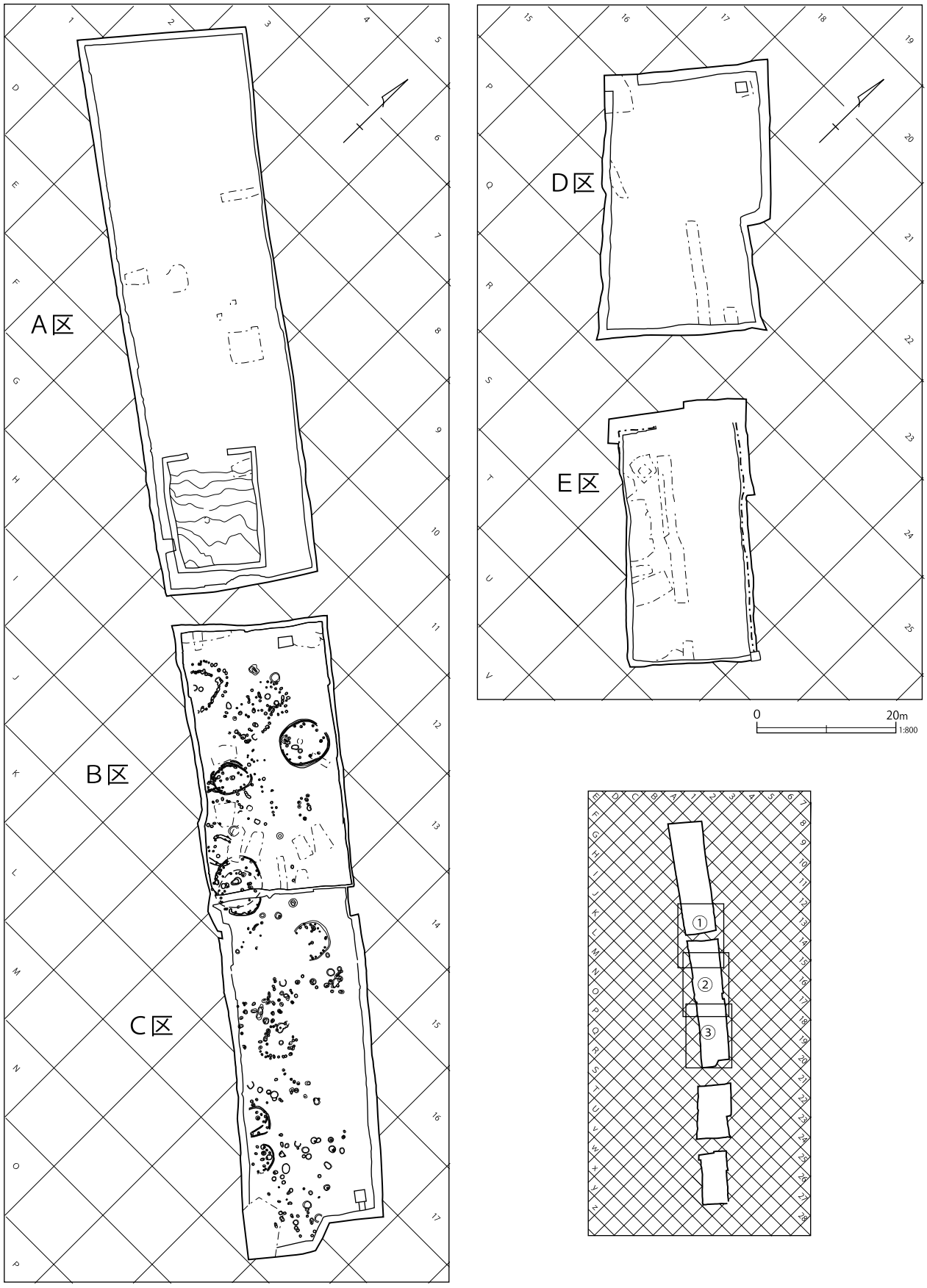
第８図　屋敷裏遺跡全体図(両面表示)



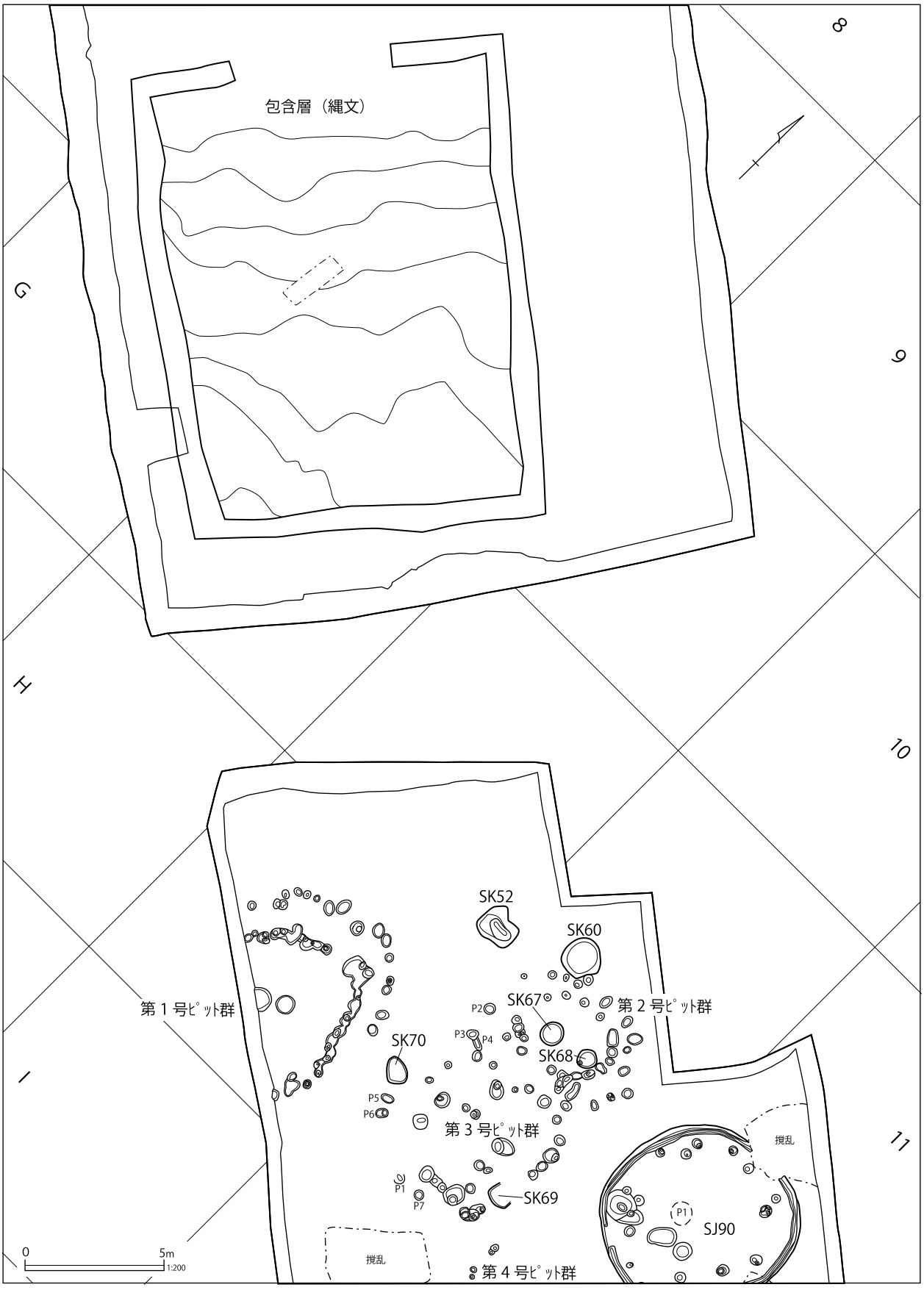
第９図　屋敷裏遺跡１面全体図



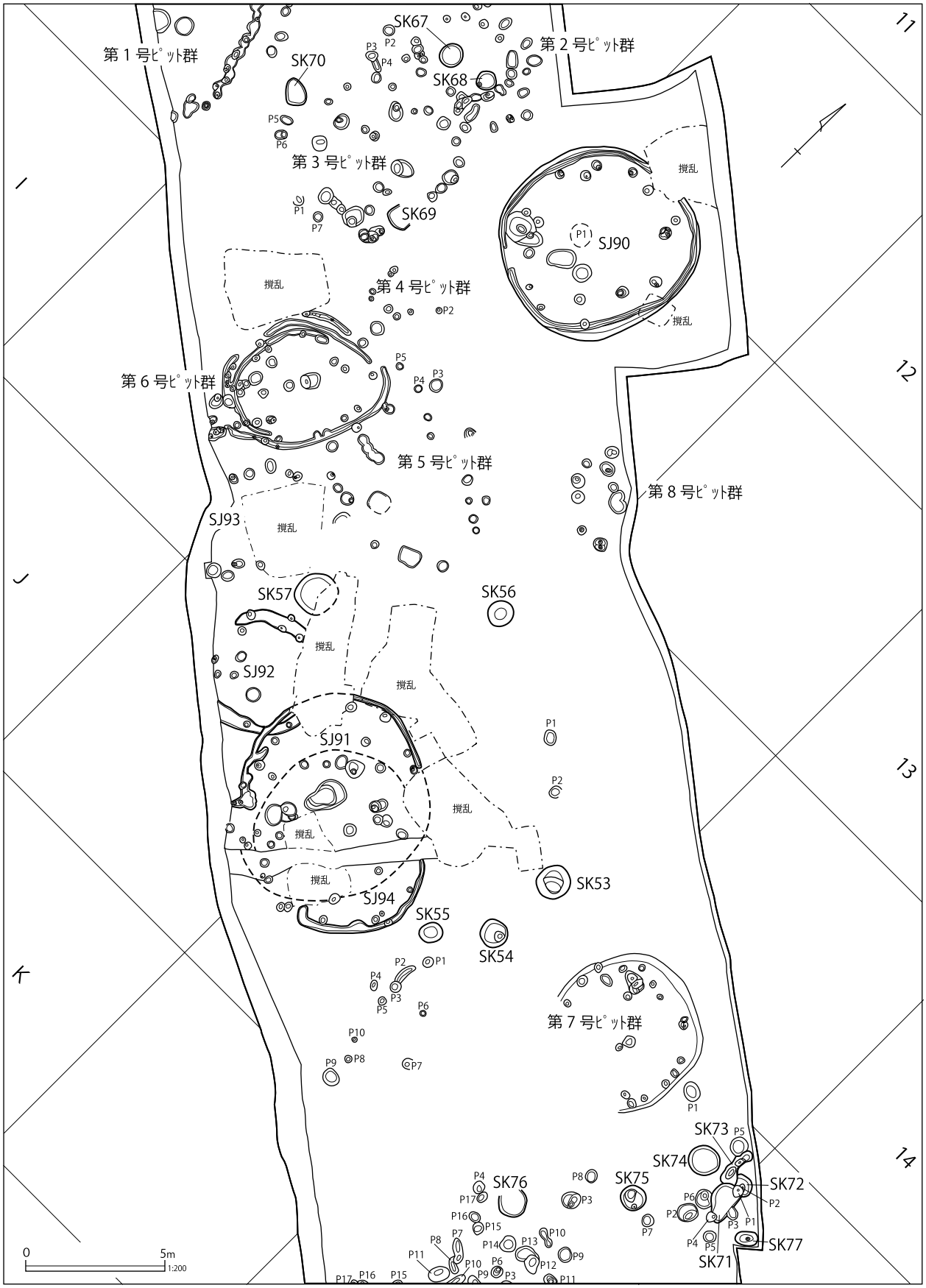
第10図　屋敷裏遺跡２面全体図



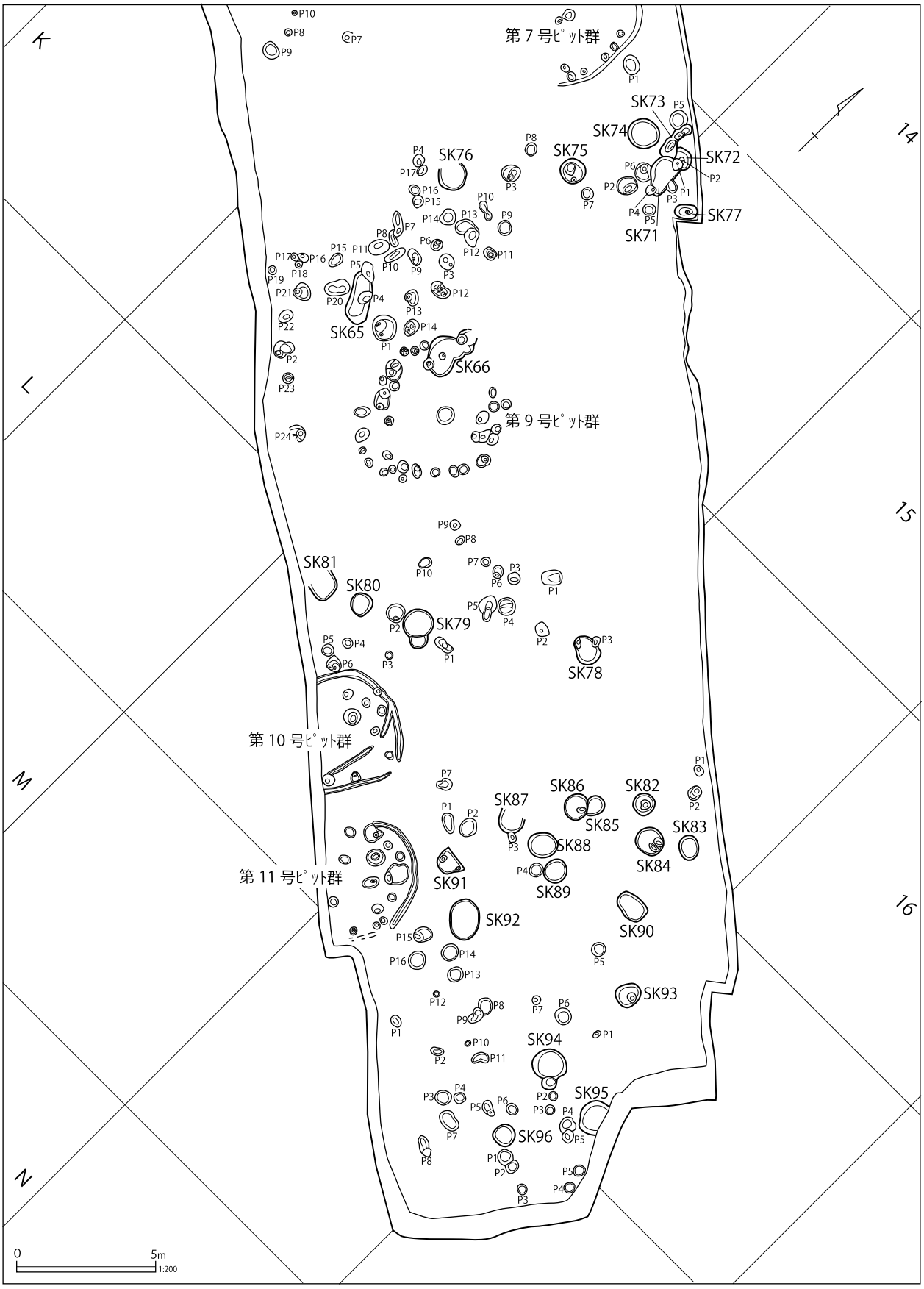
第11図　屋敷裏遺跡全体図（縄文）


包含層（縄文）
8
9
10
11
G
H
I
SK52
SK60
第 1 号ﾋﾟｯﾄ群
第 2 号ﾋﾟｯﾄ群
SK67
SK70
SK68
P2
P3
P4
P5
P6
第 3 号ﾋﾟｯﾄ群
P1
P7
SK69
撹乱
撹乱
SJ90
P1
第 4 号ﾋﾟｯﾄ群
0
5m
1:200

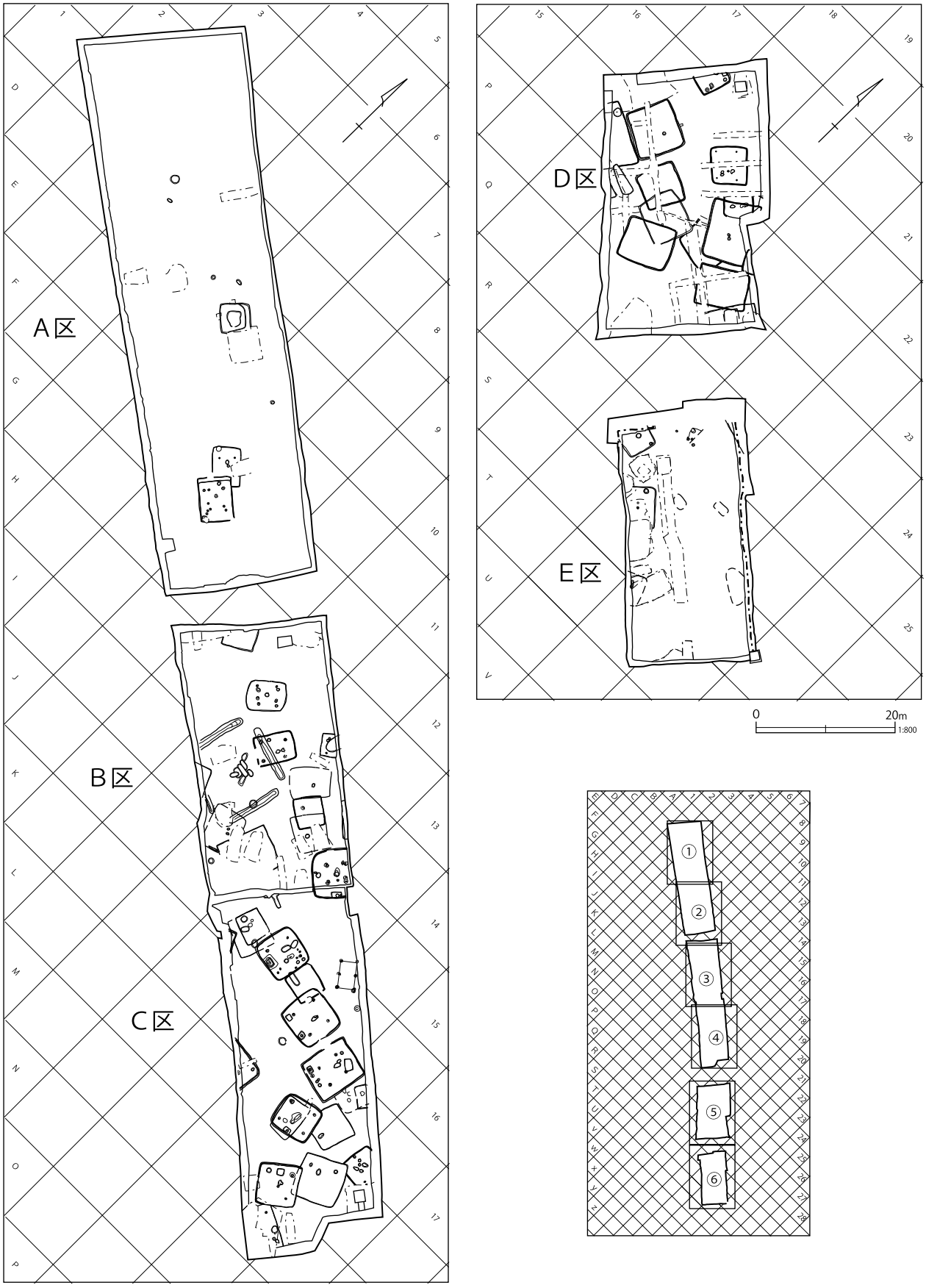
第12図　縄文分割図（1）


第 1 号ﾋﾟｯﾄ群
第 2 号ﾋﾟｯﾄ群
第 3 号ﾋﾟｯﾄ群
第 4 号ﾋﾟｯﾄ群
第 5 号ﾋﾟｯﾄ群
第 6 号ﾋﾟｯﾄ群
第 7 号ﾋﾟｯﾄ群
第 8 号ﾋﾟｯﾄ群
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SJ90
SJ91
SJ92
SJ93
SJ94
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
撹乱
11
12
13
14
イ
ウ
エ
0
5m
1:200

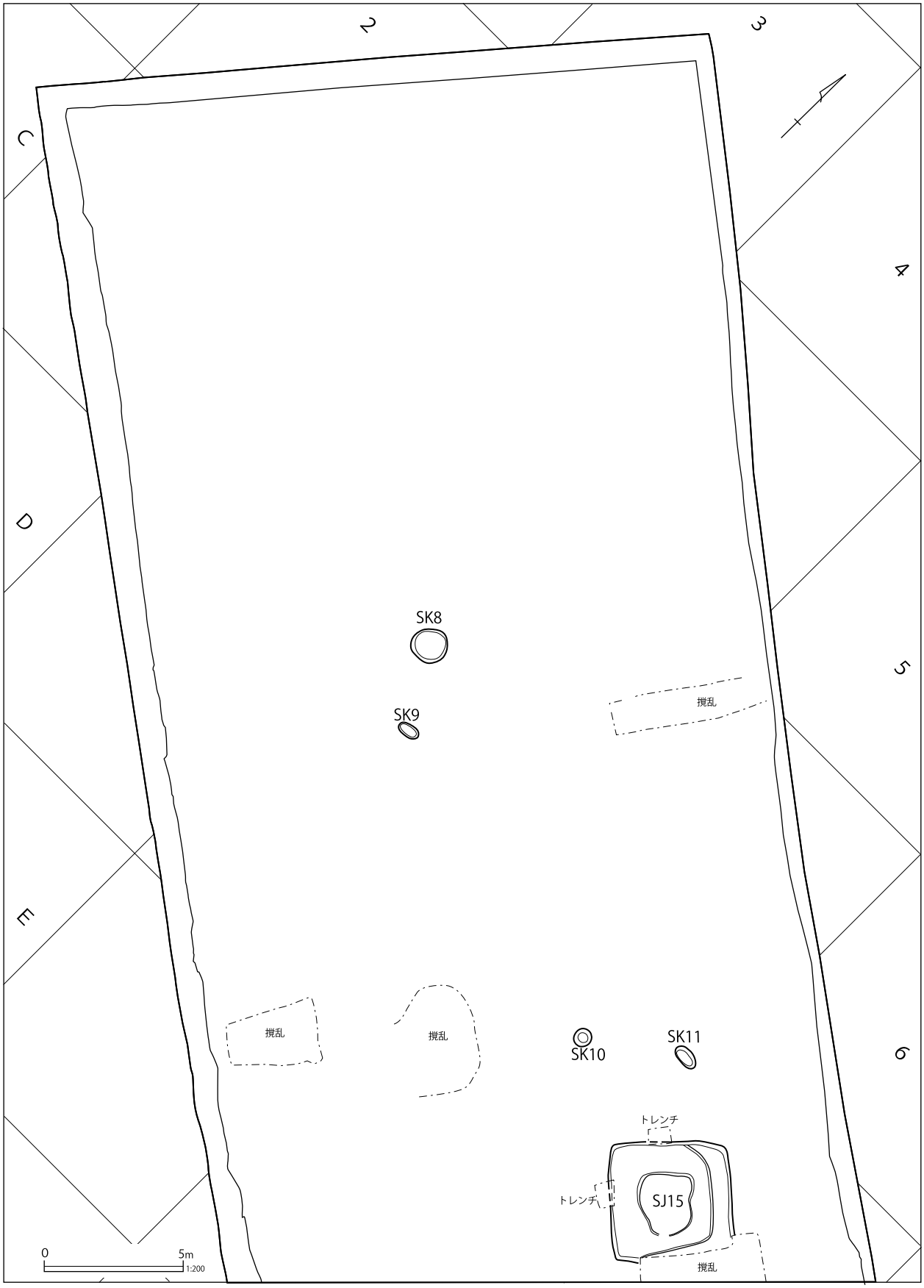
第13図　縄文分割図（2）


K
L
M
N
14
15
16
第 7 号ﾋﾟｯﾄ群
第 9 号ﾋﾟｯﾄ群
第 10 号ﾋﾟｯﾄ群
第 11 号ﾋﾟｯﾄ群
SK65
SK66
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90
SK91
SK92
SK93
SK94
SK95
SK96
0
5m
1:200

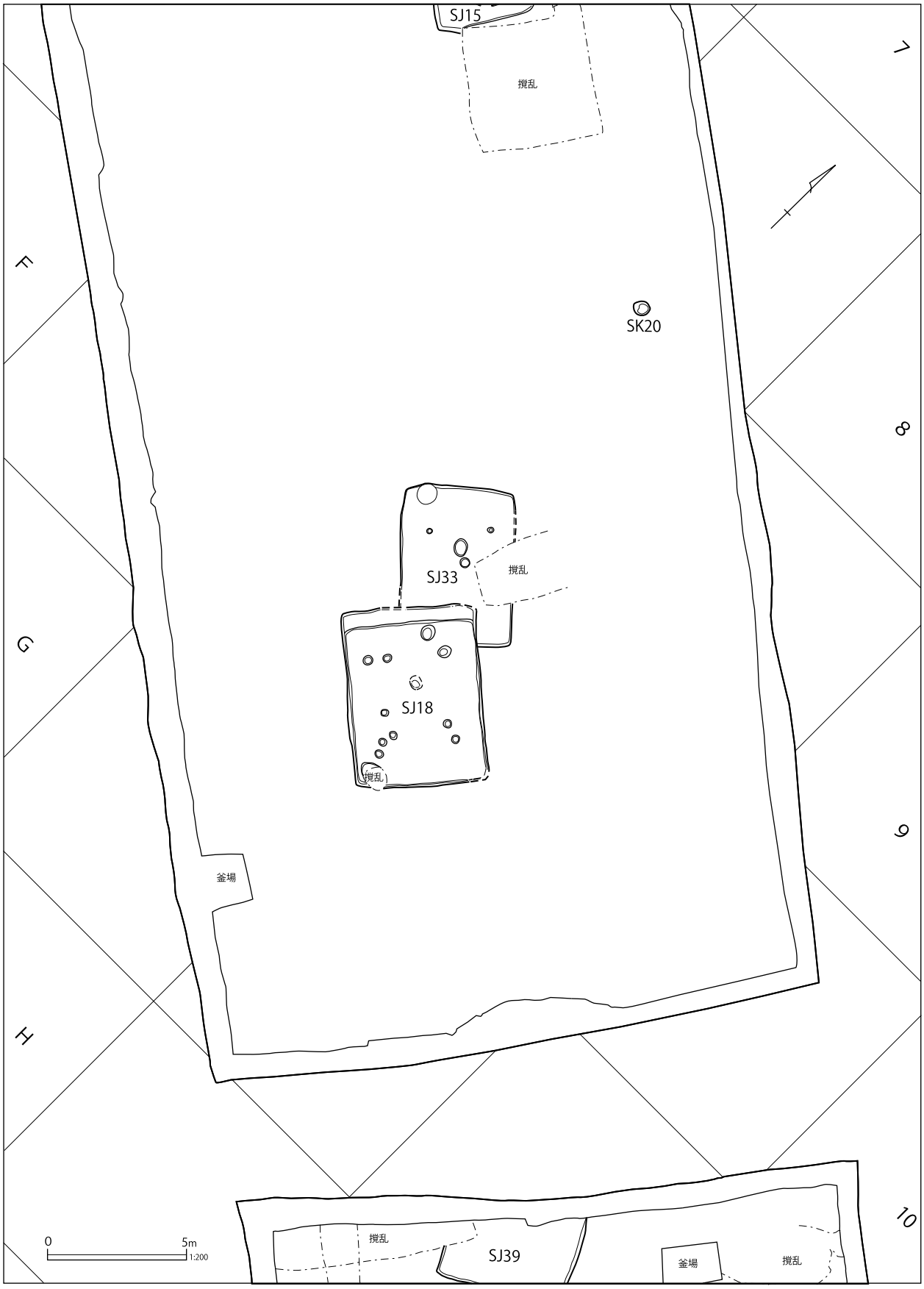
第14図　縄文分割図（3）



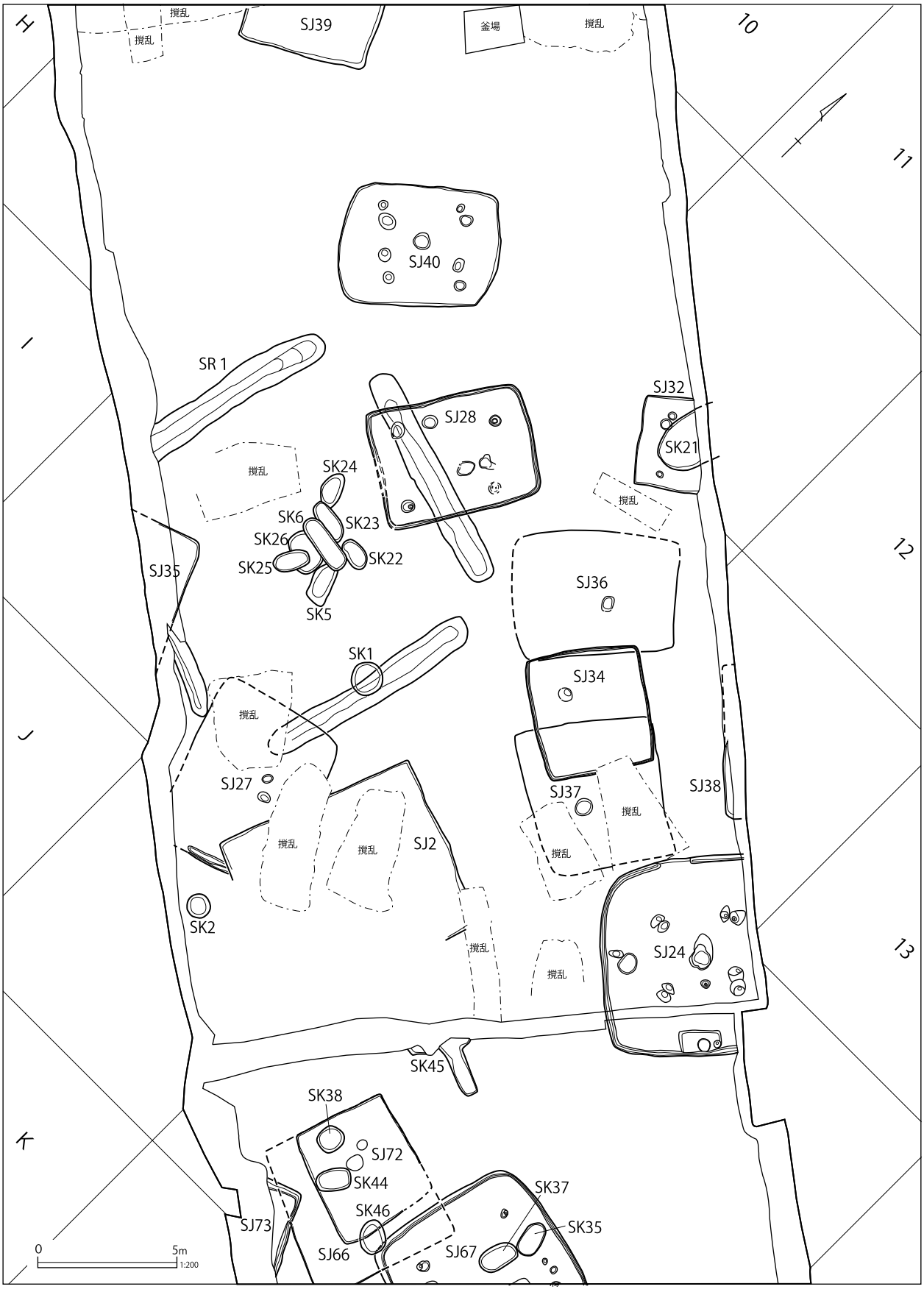
第15図　屋敷裏遺跡全体図（弥生・古墳前期）



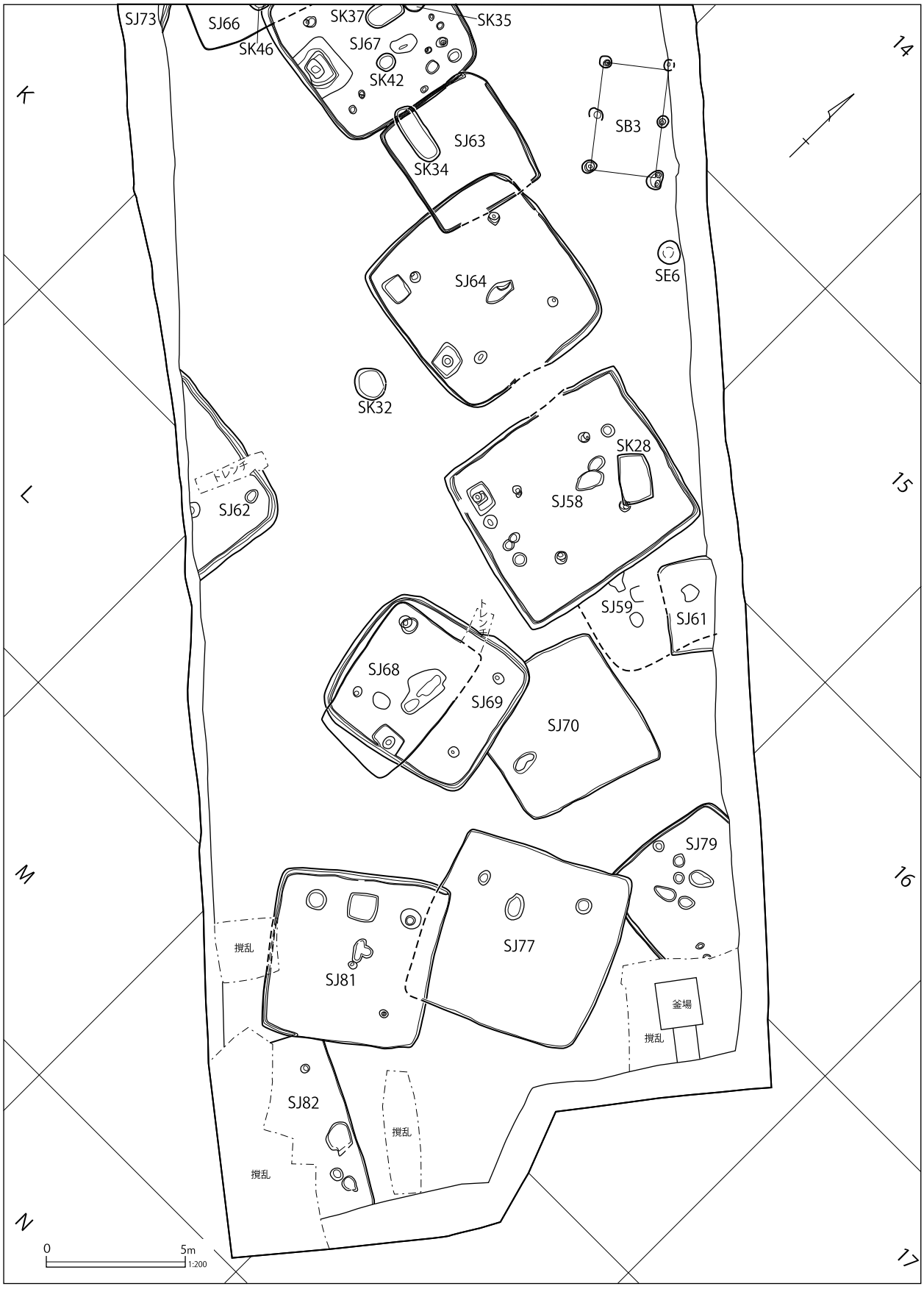
第16図　弥生･古墳前期分割図（1）



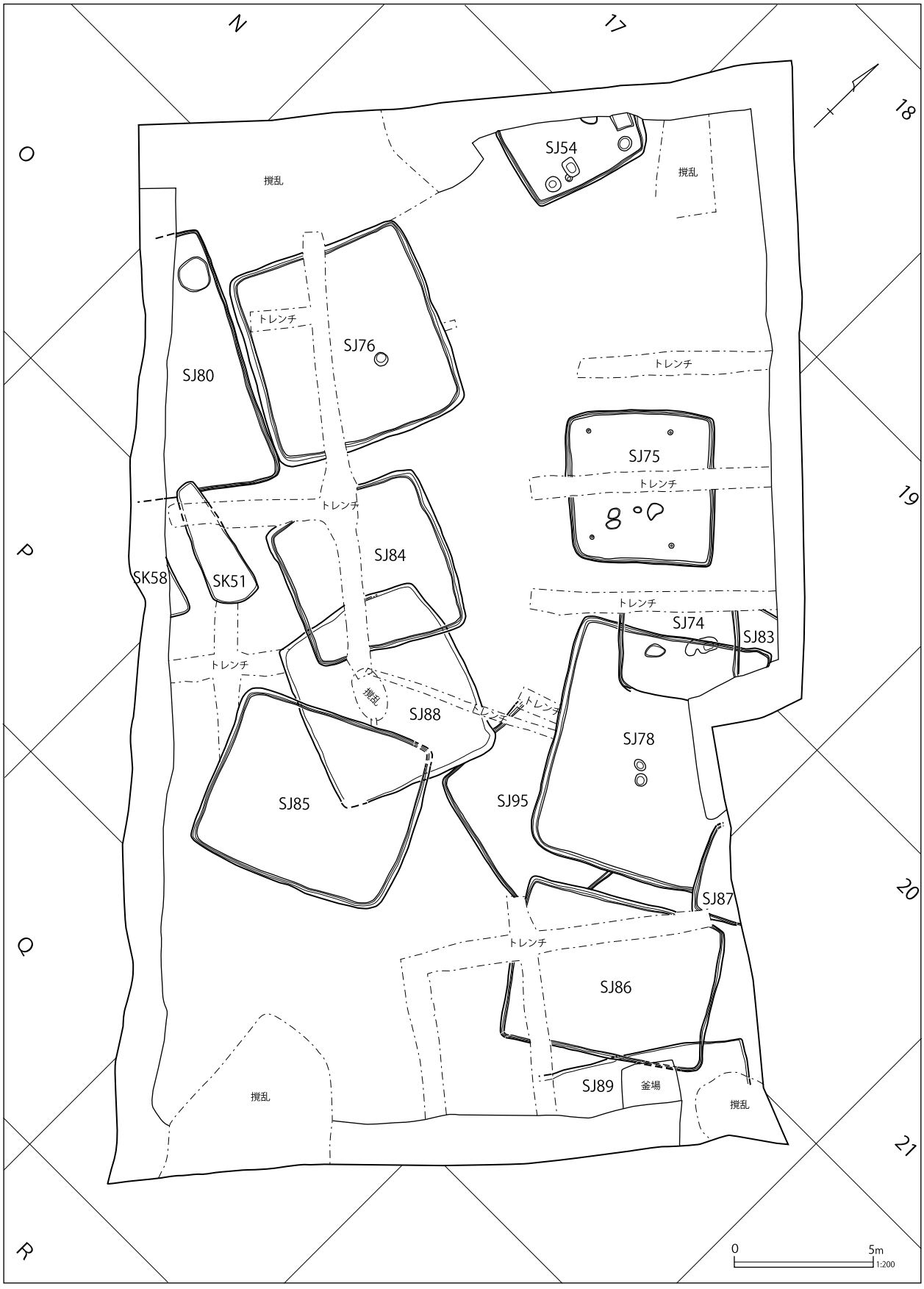
第17図　弥生･古墳前期分割図（2）



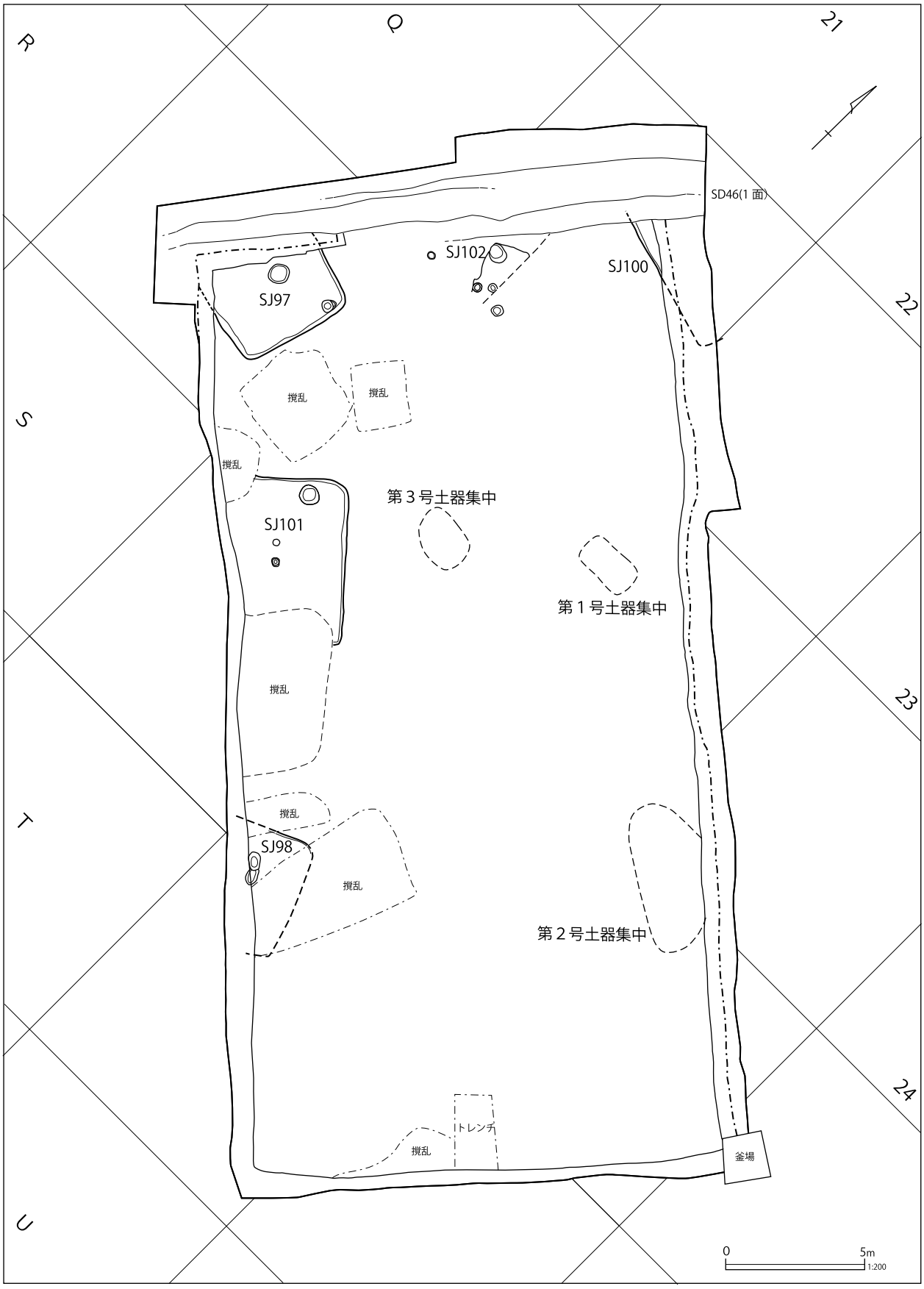
第18図　弥生･古墳前期分割図（3）



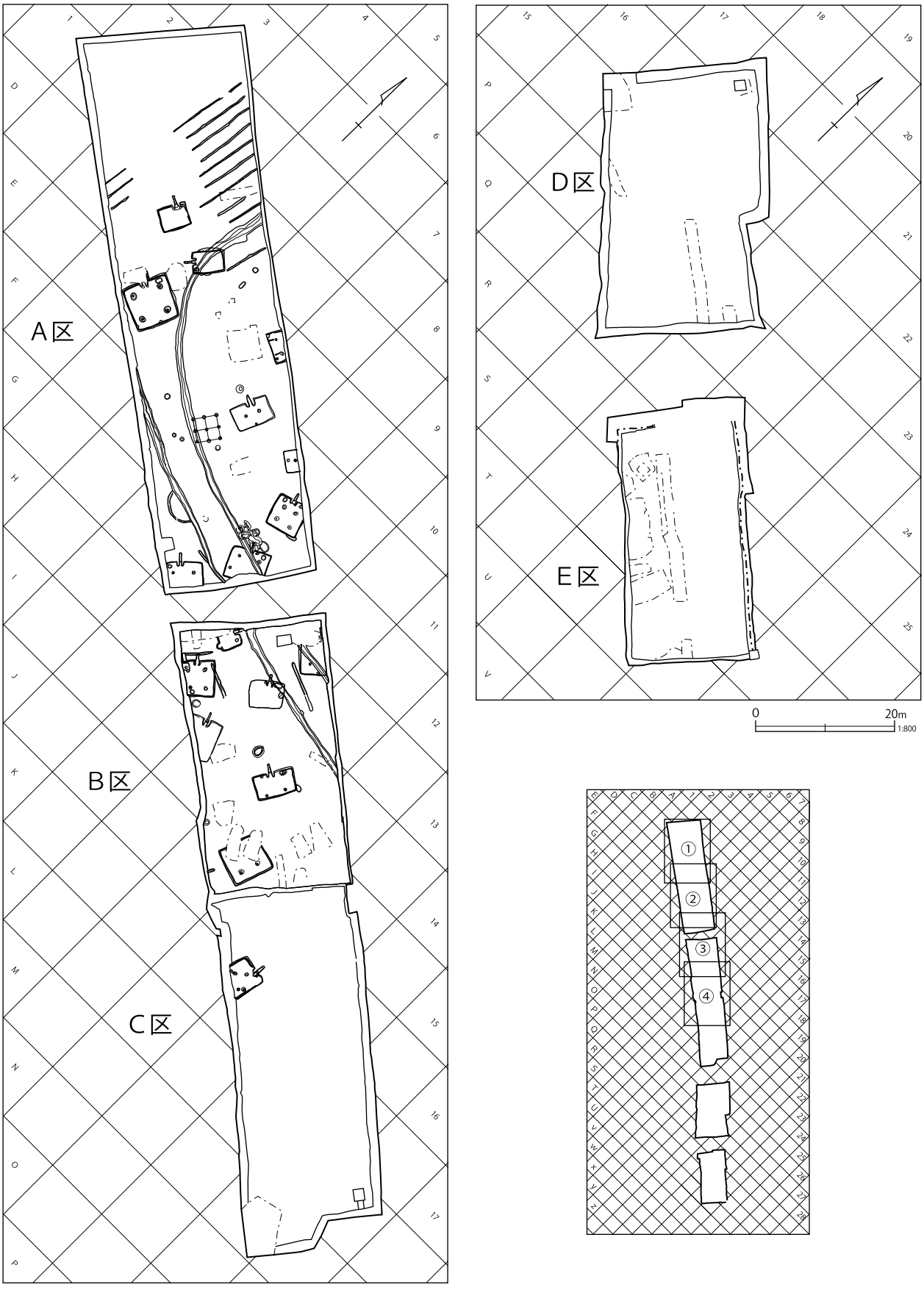
第19図　弥生･古墳前期分割図（4）



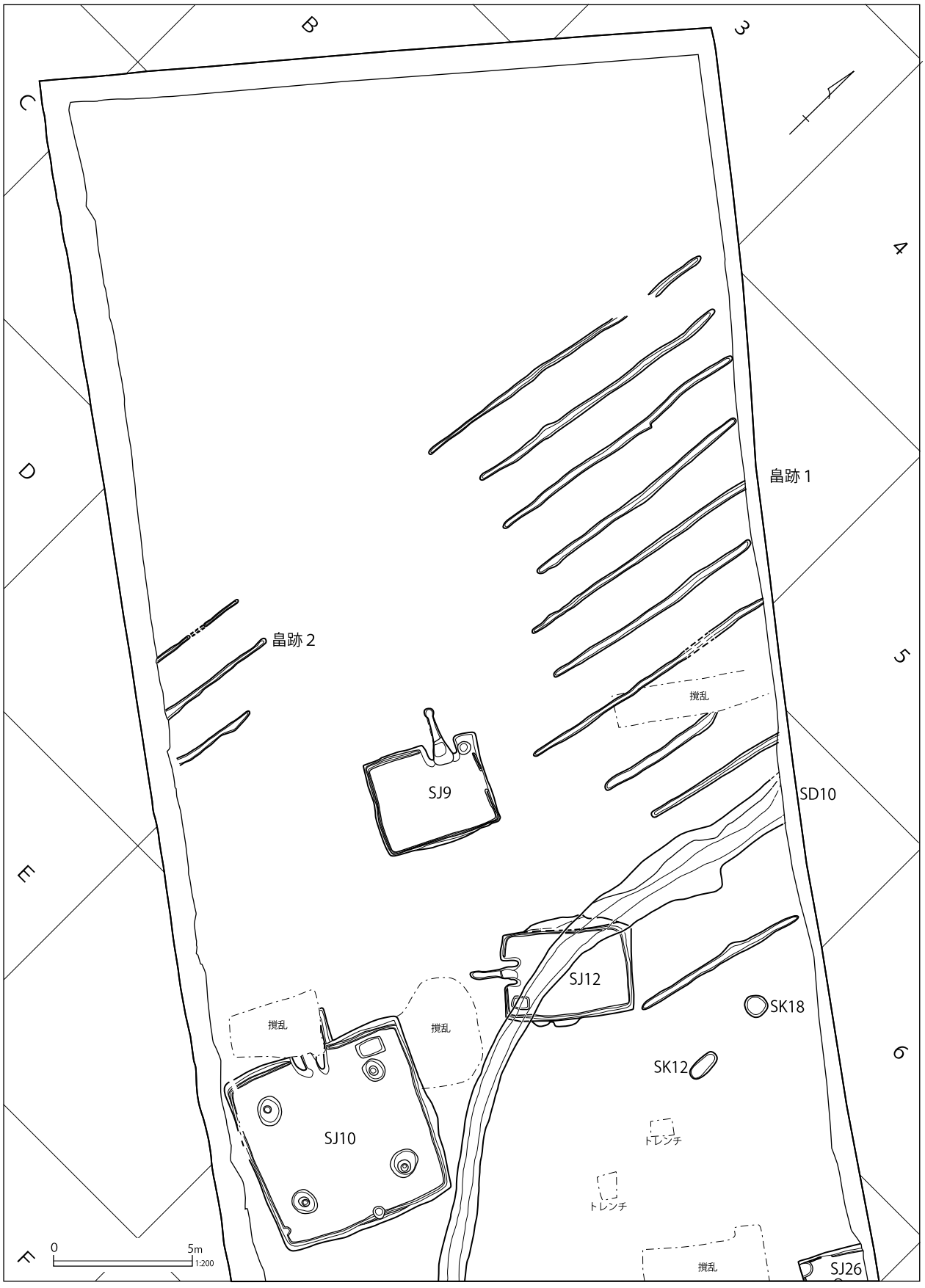
第20図　弥生･古墳前期分割図（5）



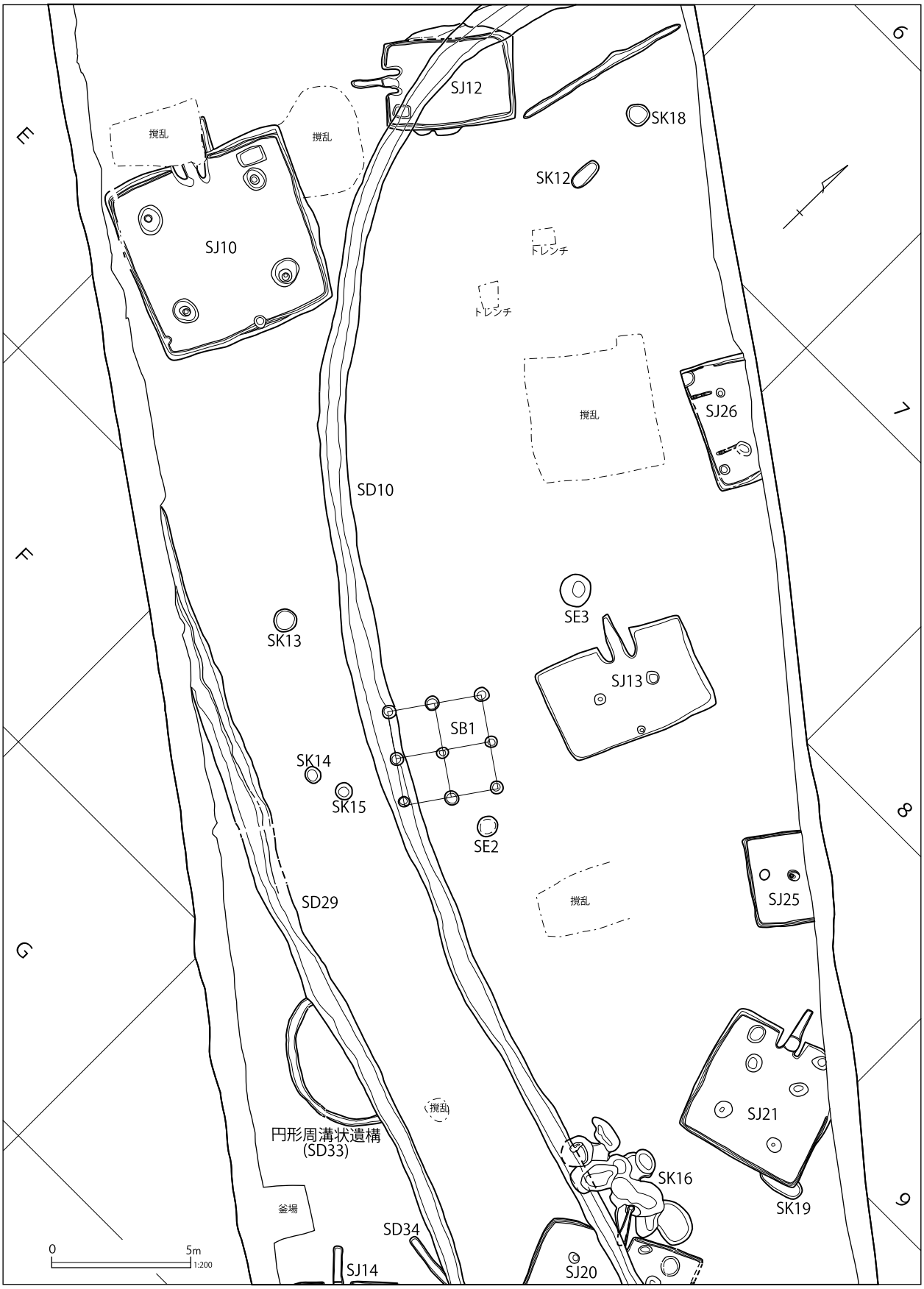
第21図　弥生･古墳前期分割図（６）



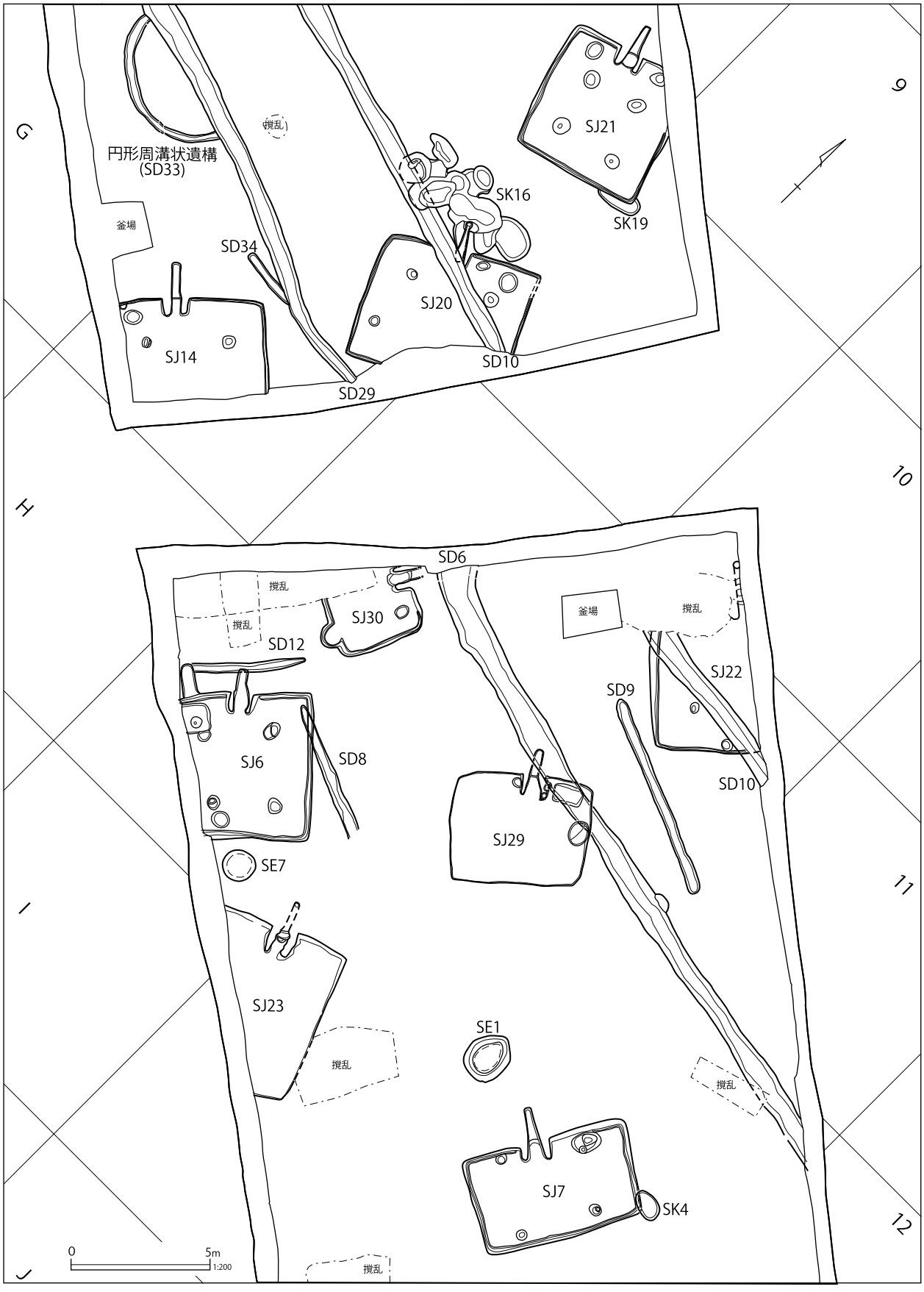
第22図　屋敷裏遺跡全体図(古墳後期)



第23図　古墳後期分割図（1）



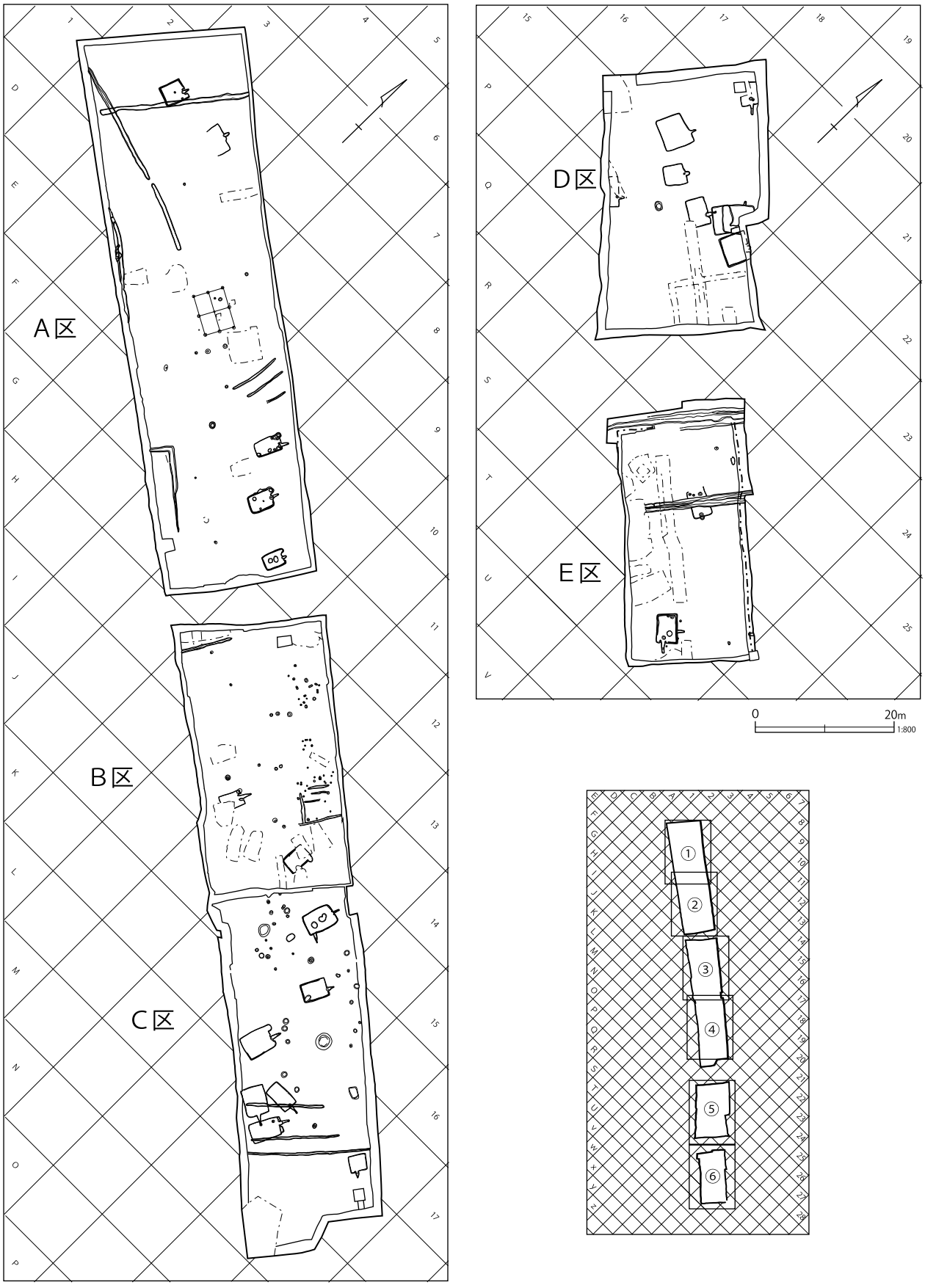
第24図　古墳後期分割図（２）



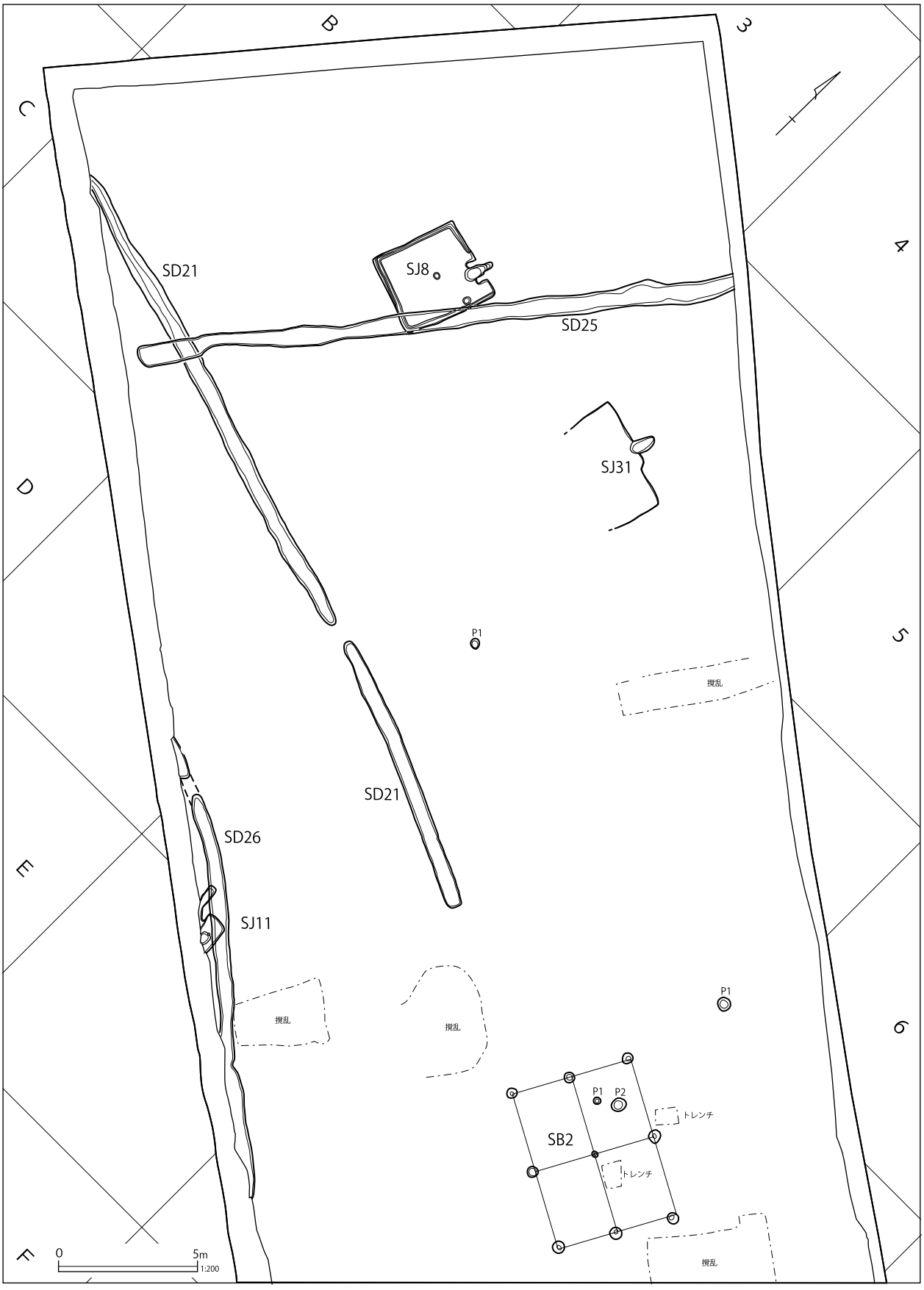
第25図　古墳後期分割図（3）



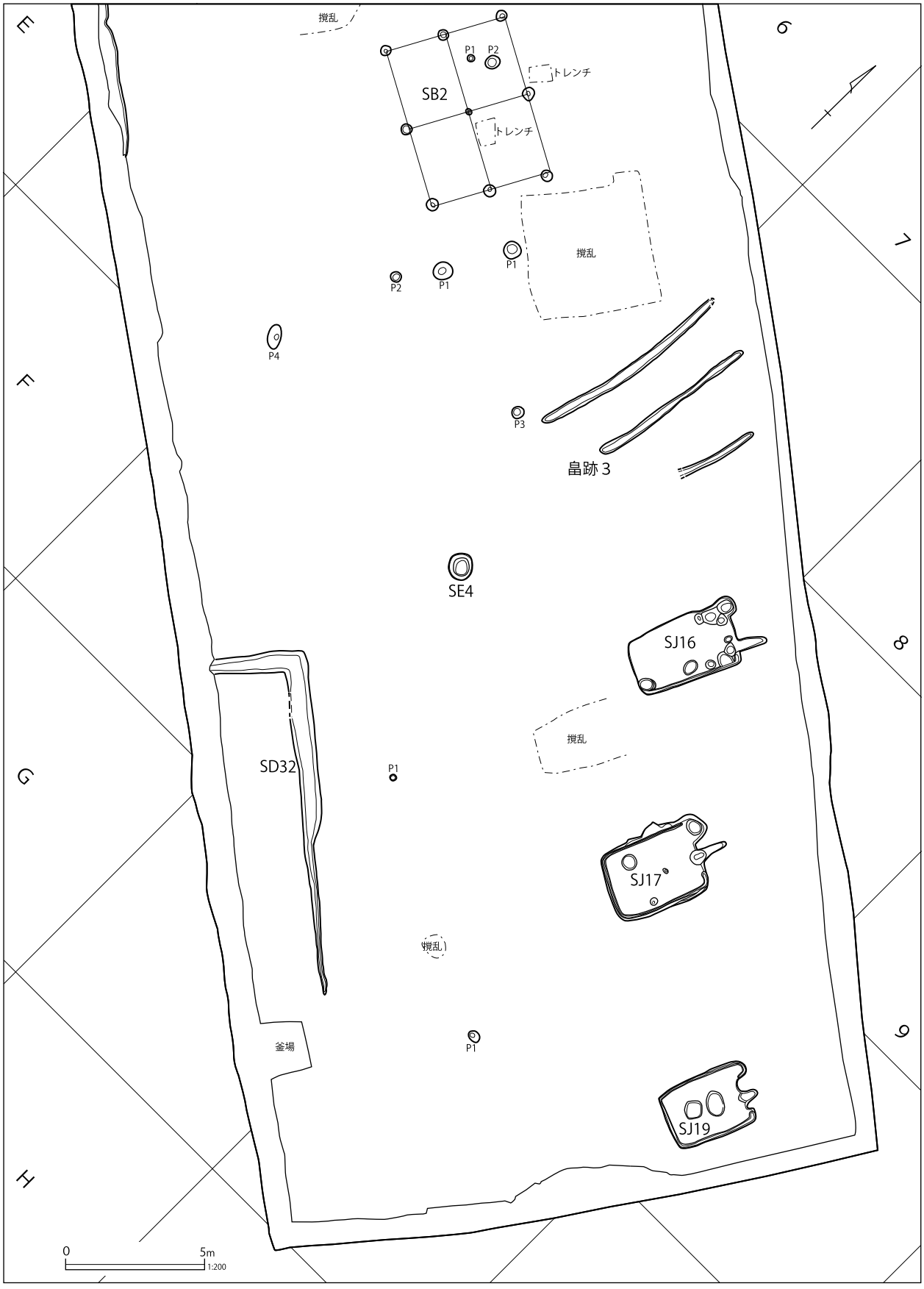
第26図　古墳後期分割図（4）



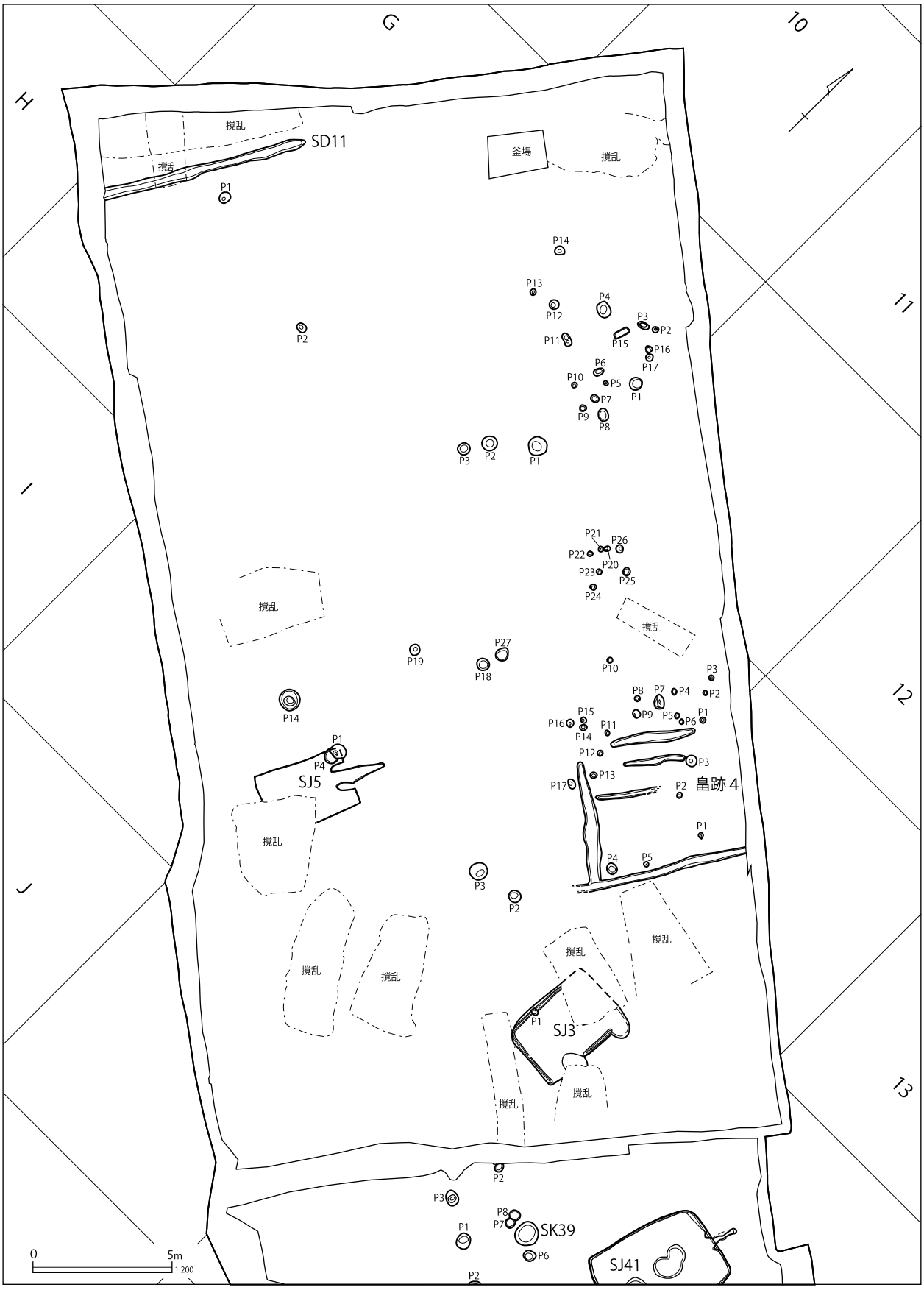
第27図　屋敷裏遺跡全体図(平安以降)



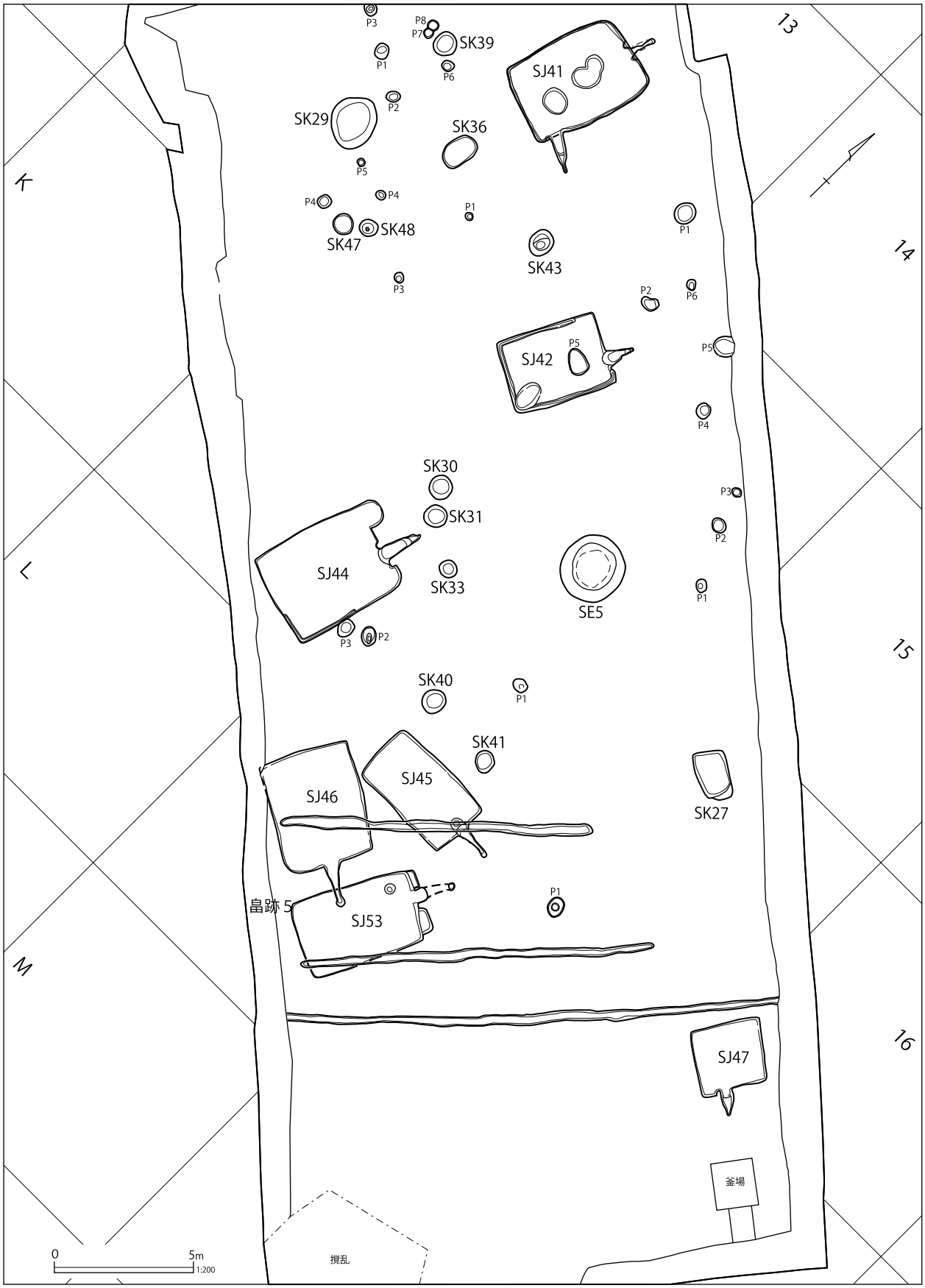
第28図　平安以降分割図（1）



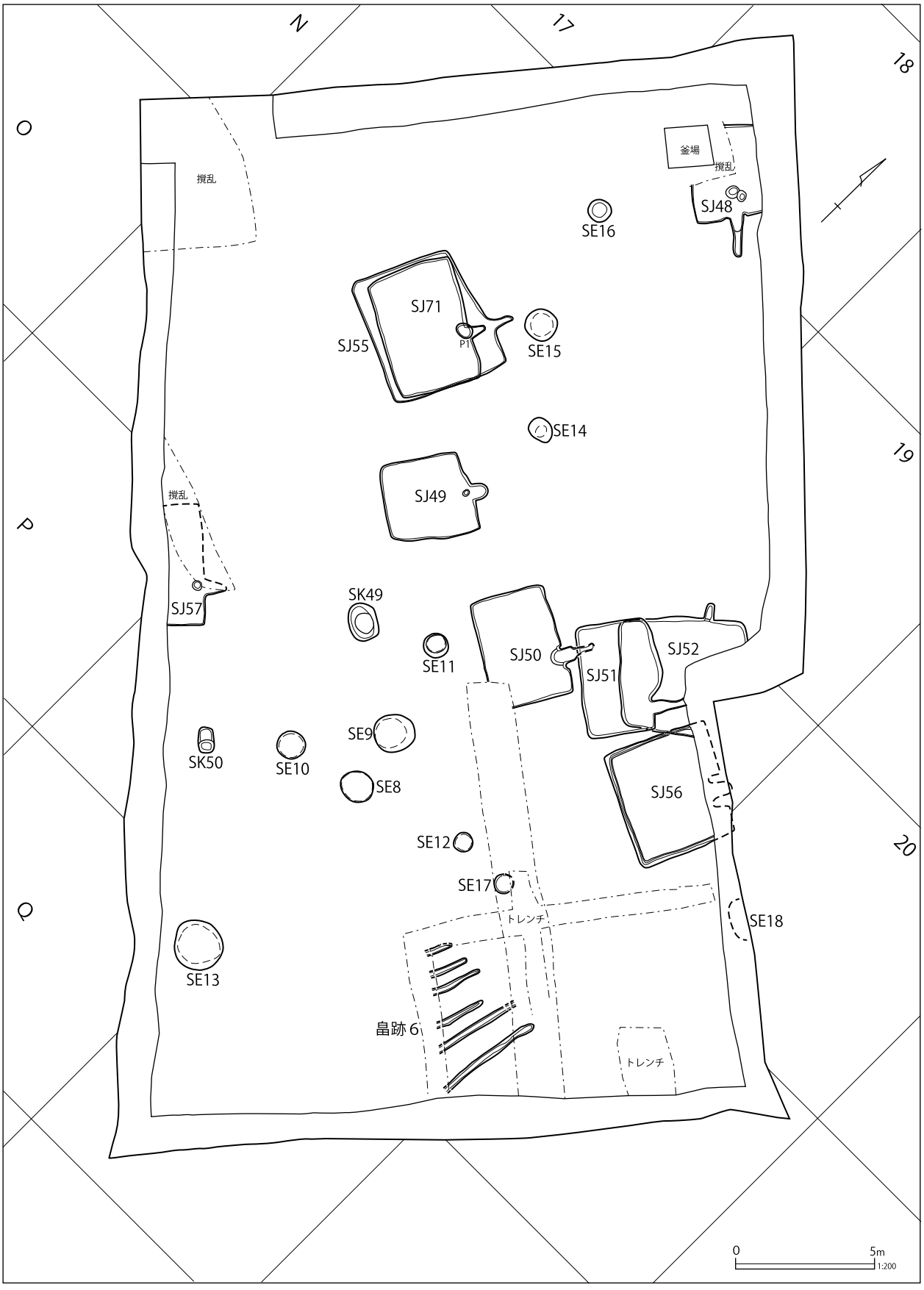
第29図　平安以降分割図（２）



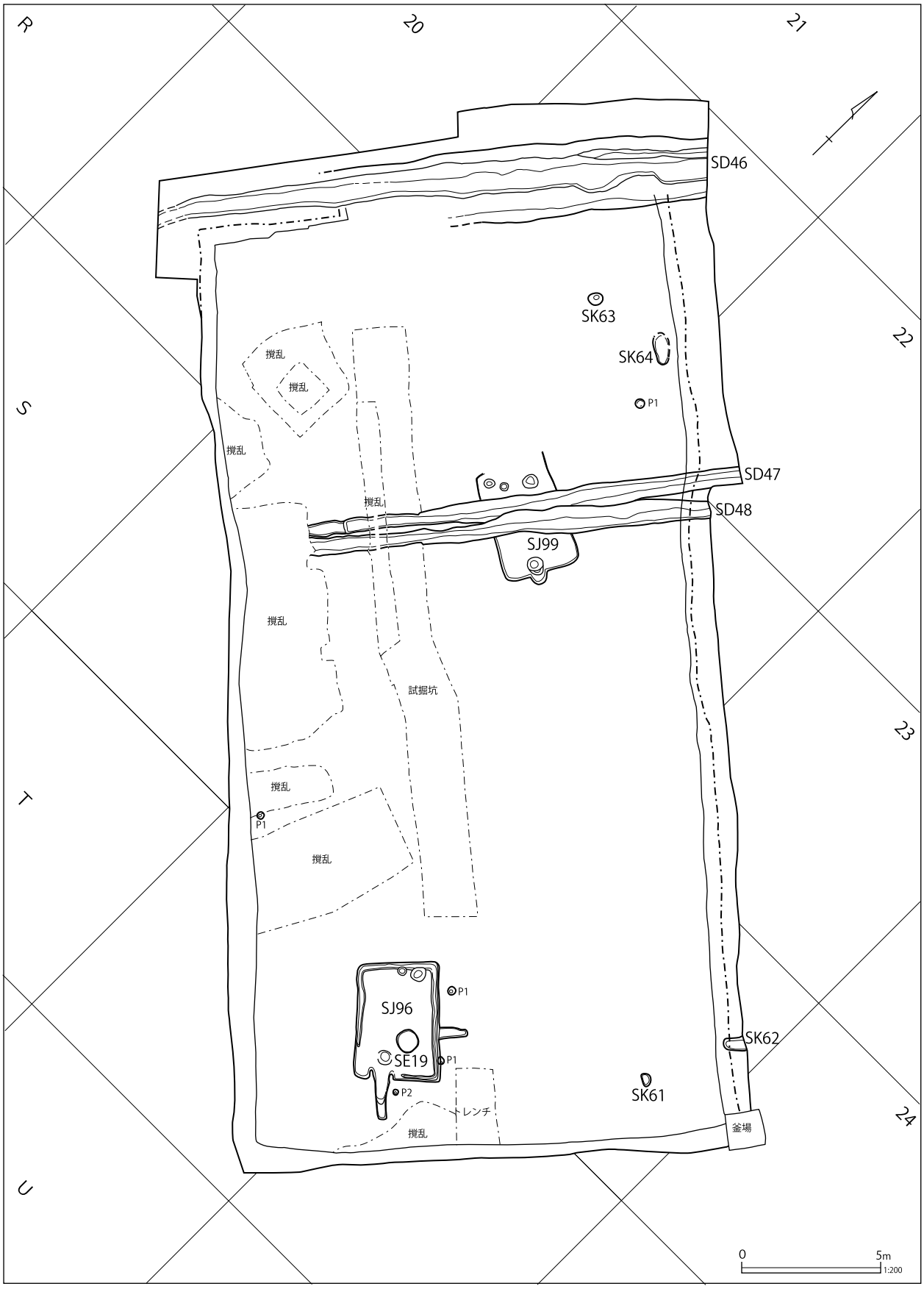
第30図　平安以降分割図（3）



第31図　平安以降分割図（4）



第32図　平安以降分割図（5）



第33図　平安以降分割図（6）

Ⅳ　１次調査の遺構と遺物

１．縄文時代

（１）住居跡

今回の調査では、Ｂ区の北側から縄文時代中期後半の住居跡１軒、後期初頭から前半の住居跡４軒が検出された。Ａ区は斜面で包含層になっているため住居跡の分布箇所が当時の台地の肩に当たると考えられる。

第 90 号住居跡（第 34 ～ 38 図）

Ｂ区西側のＧ・Ｈ－ 11 グリッドに位置する。周辺を第１～６ピット群が取り囲む。

平面形は円形で、やや東西が短めである。主軸方位はＳ－ 32°－Ｅ、規模は長軸 7.00 ｍ、短軸 6.70 ｍ、確認面からの深さは 0.3 ｍである。壁の傾斜は直立し、東西方向はやや緩やかである。覆土はソフトロームやローム小ブロックを含む暗褐色土を主体とした自然堆積である。下層はロームの混入量が多い。

床面は平坦で、中央の南寄りに長軸 1.05 ｍ、短軸 0.75 ｍ、深さ 0.10 ｍの炉跡１が検出された。またその東側に長軸 0.70 ｍ、短軸 0.65 ｍ、深さ 0.10 ｍの炉跡２が検出された。炉跡２は焼土を含む黄褐色土で埋め戻されており、炉跡２から１へと造り替えられたと考えられる。炉跡１は焼土、炭化物を多く含む覆土で、７層は被熱により硬化している。

炉跡１の西側からは、長軸 1.55 ｍ、短軸 1.05 ｍ、深さ 0.85 ｍの土壙１が検出された。12 層は埋戻し土と判断され、炉跡２に伴う土壙が埋め戻され、炉跡１に伴い掘り直されたと考えられる。

柱穴は径 0.20 ～ 0.45 ｍ、深さは 0.15 ～ 0.35 ｍ規模のものが 16 本検出された。径 0.35 ｍ、深さ 0.25 ｍ以上のものが多い。主柱は特定できないが、２本１単位ともとれる分布を示す。Ｐ１は柱穴状の掘り込みが見られ、入口施設と考えられる。

遺物は土器・石器 364 点が出土した。中層以上からの出土がほとんどで、いずれも埋没時の投棄、流入と判断できる。

第 36 図１は幅狭い口縁部文様帯をもち、波頂部直下の渦巻きから区画文が延びている。胴部は口縁部の沈線に接して沈線による懸垂文が垂下し、沈線間は地文が磨り消されている。地文はＬＲ縄文である。

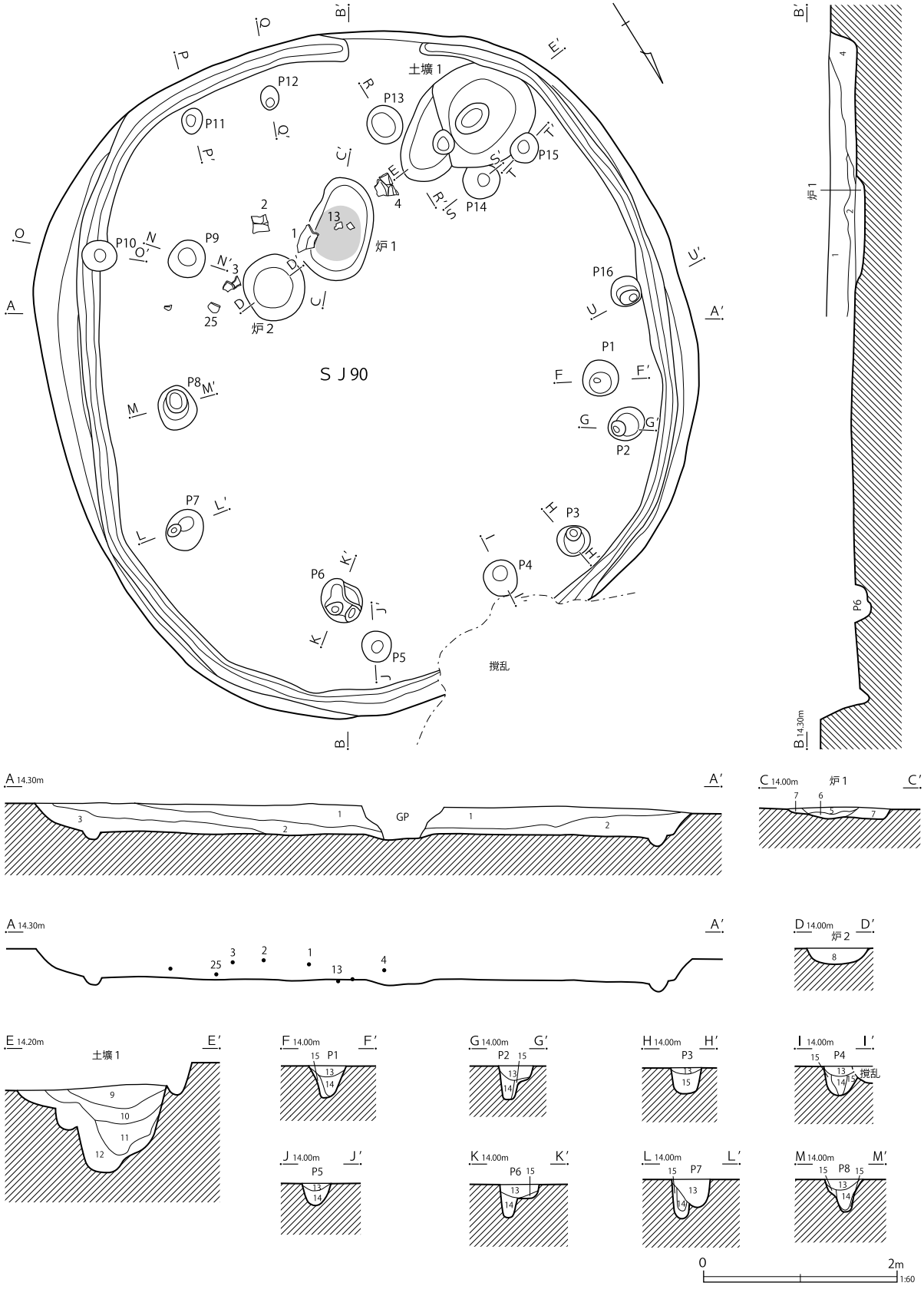
２は連孤文系土器で、３単位の緩い波状口縁をもつ深鉢形土器である。口唇部には二条の沈線間に円形刺突が施されている。胴部を横走する沈線によって文様帯が区画され、口頸部と胴部には連孤文が施文されている。胴部のモチーフが不明瞭だが、地文が磨り消されている可能性がある。地文は縦走する条線である。

３は口唇直下から平行沈線が垂下する深鉢形土器で、地文は縦走する粗い条線である。沈線間の地文は磨り消されている。

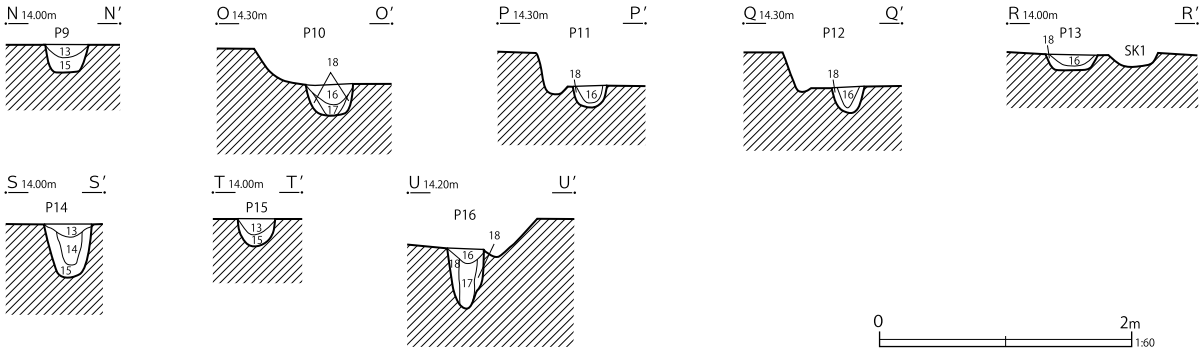
４は推定４単位の緩い波状口縁をもつキャリパー形の深鉢形土器である。口唇直下の渦巻き文から、波底部下の長方形の区画文を跨ぐように沈線が延びている。口縁部と胴部を区画する隆帯が見られず、胴部は口縁部文様を描く沈線に接して懸垂文が描かれている。口縁部のモチーフ間と懸垂文間に RL 縄文が施文され、磨り消しが施されている。５・６・８は同一個体であろう。

７も磨り消しを有する深鉢形土器で、２・５・６・８に比べてやや小型である。口縁部と胴部は扁平化した隆帯によって区画され、隆帯に接して沈線が垂下している。地文は RL 縄文である。

９・10 は連孤文系の土器で、磨り消しを伴っている。いずれも波状口縁で、口唇無文部下を６は２条、７は１条の沈線が横走する。沈線間には円形の刺突文が施されている。６の地文は多条の



第34図　第90号住居跡（1）



ＳＪ90
1　明褐色土　　ソフトローム少量混入　粘性なくサラサラしている
2　明褐色土　　ローム小ブロック・焼土少量混入　よくしまる
3　暗黄褐色土　ソフトローム・ローム小ブロック多量　炭化物少量混入　しまりあり
4　暗黄褐色土　ソフトローム・ローム小ブロック多量　炭化物少量混入

炉１
5　赤褐色土　　シルト質　焼土粒子多量　炭化物粒子少量
6　赤褐色土　　シルト質　焼土ブロック多量
7　暗赤褐色土　粘土質　焼土粒子多量　被熱　硬化

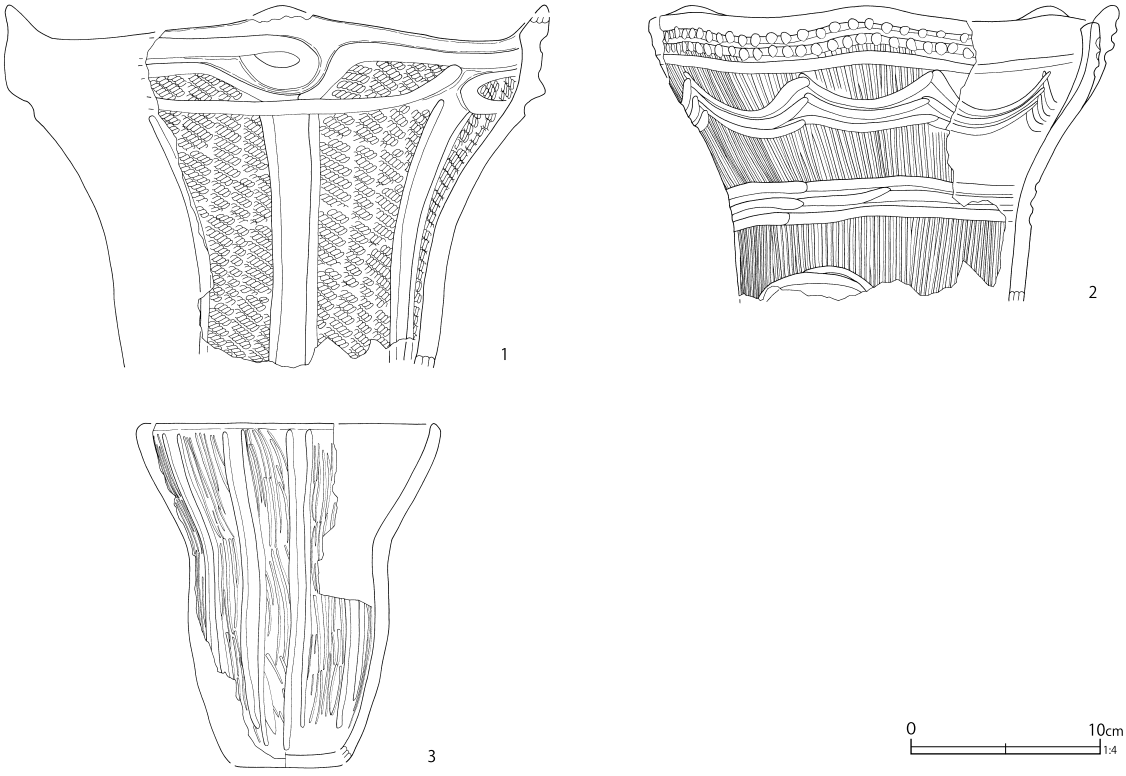
炉２
8　黄褐色土　　粘土質　焼土粒子・焼土ブロック少量

ＳＫ１
9　暗褐色土　　シルト質　焼土粒子少量　炭化物粒子多量
10　暗褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量
11　暗黄褐色土　粘土質　炭化物粒子少量　焼土ブロック少量　ローム小ブロック多量
12　黄褐色土　　粘土質　ロームブロック多量

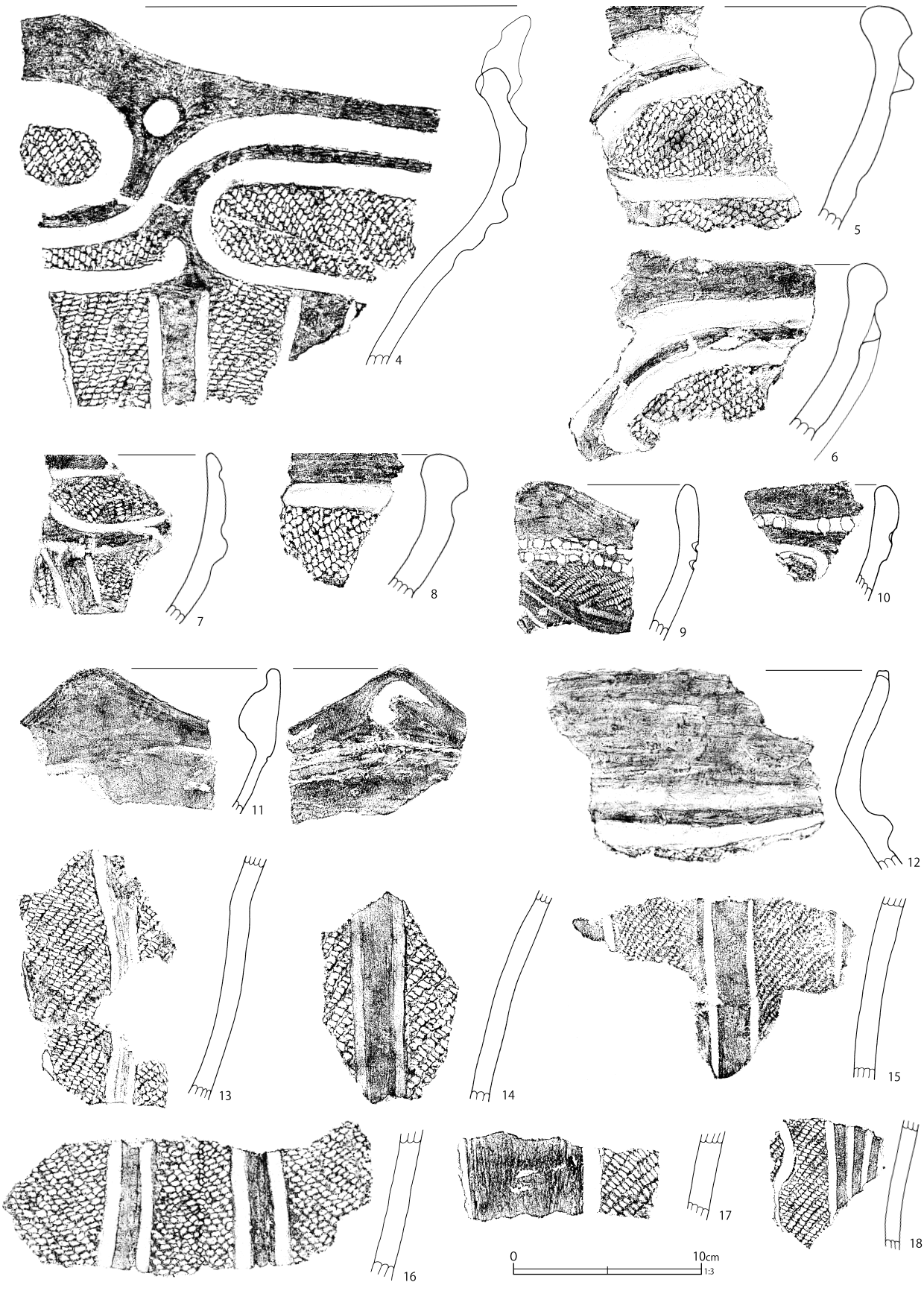
Ｐ１～９・14・15
13　暗黄褐色土　粘土質　炭化物粒子少量　しまり欠く
14　暗黄褐色土　粘土質　暗褐色土ブロック多量
15　黄褐色土　　粘土質　ロームブロック多量

Ｐ10～13・16
16　暗褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量　しまり欠く
17　暗黄褐色土　シルト質　炭化物粒子少量　ローム小ブロック少量
　　しまり欠く
18　黄褐色土　　粘土質　ロームブロック多量

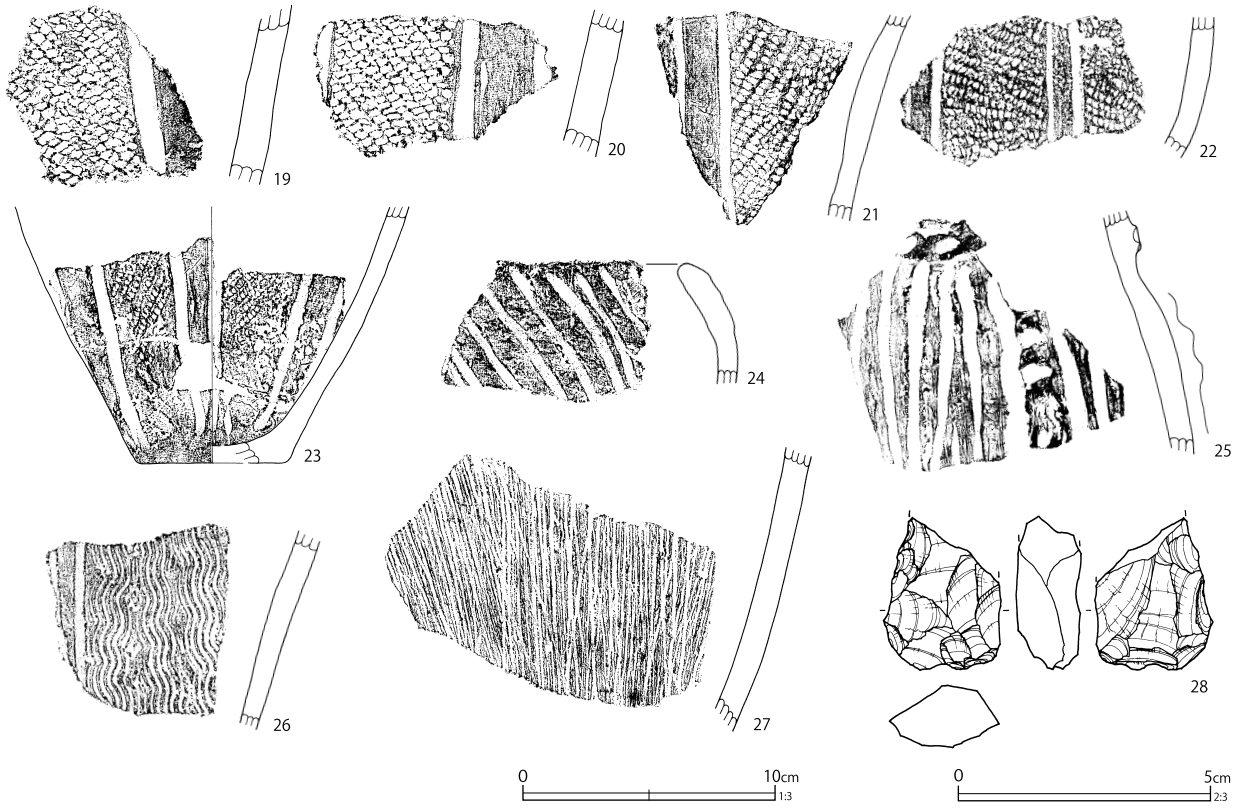
第35図　第90号住居跡（２）



第36図　第90号住居跡出土遺物（１）



第37図　第90号住居跡出土遺物（２）



第38図　第90号住居跡出土遺物（３）

第２表　第90号住居跡出土石器観察表（第38図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
28	スクレイパー	チャート	[3.0]	2.4	1.2	9.3	SJ90	219-13

ＬＲ縄文である。

11 は山形の波状口縁を持つ鉢形土器であろう。波頂部内面が肥厚し、「ノ」の字状の沈線文が描かれている。12 は両耳壺であろう。口唇無文部が強く外反し、無文部下に文様が描かれるものと推定される。

13 ～ 22 に加曽利Ｅ式の胴部破片を一括した。いずれも沈線間に磨り消しが施されている。地文は全て RL 縄文である。23 は底部破片である。

24 ～ 26 は曽利系土器である。24 は口唇部に斜行沈線文が施されている。25 は文様帯の区画部分と胴部に隆帯が貼付され、胴部の隆帯間に沈線による懸垂文が描かれた土器である。隆帯上には刺突が施されている。26 は縄文に代わって、蛇行する櫛歯文が描かれた土器である。27 は櫛状工具による条線が垂下する深鉢形土器の胴部であろう。

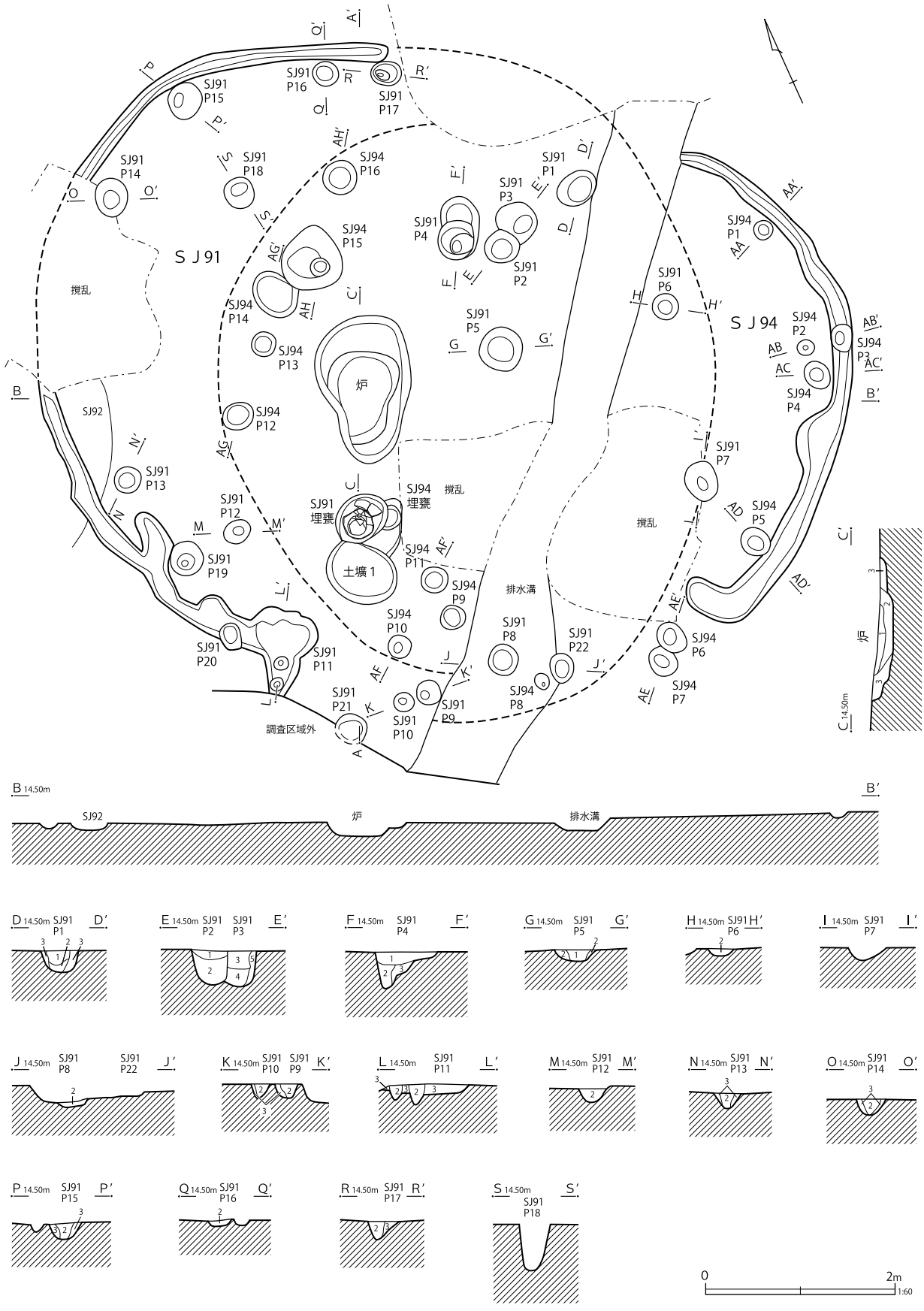
90 号住居跡から出土した石器は１点のみである。28 はチャート製のスクレイパーで上半部が欠損する。厚手の剝片が利用され、縁辺が加工されて刃部となっている。刃部の角度から掻器と考えられる。

本住居跡は、出土遺物から縄文時代中期後半に構築されたと判断した。

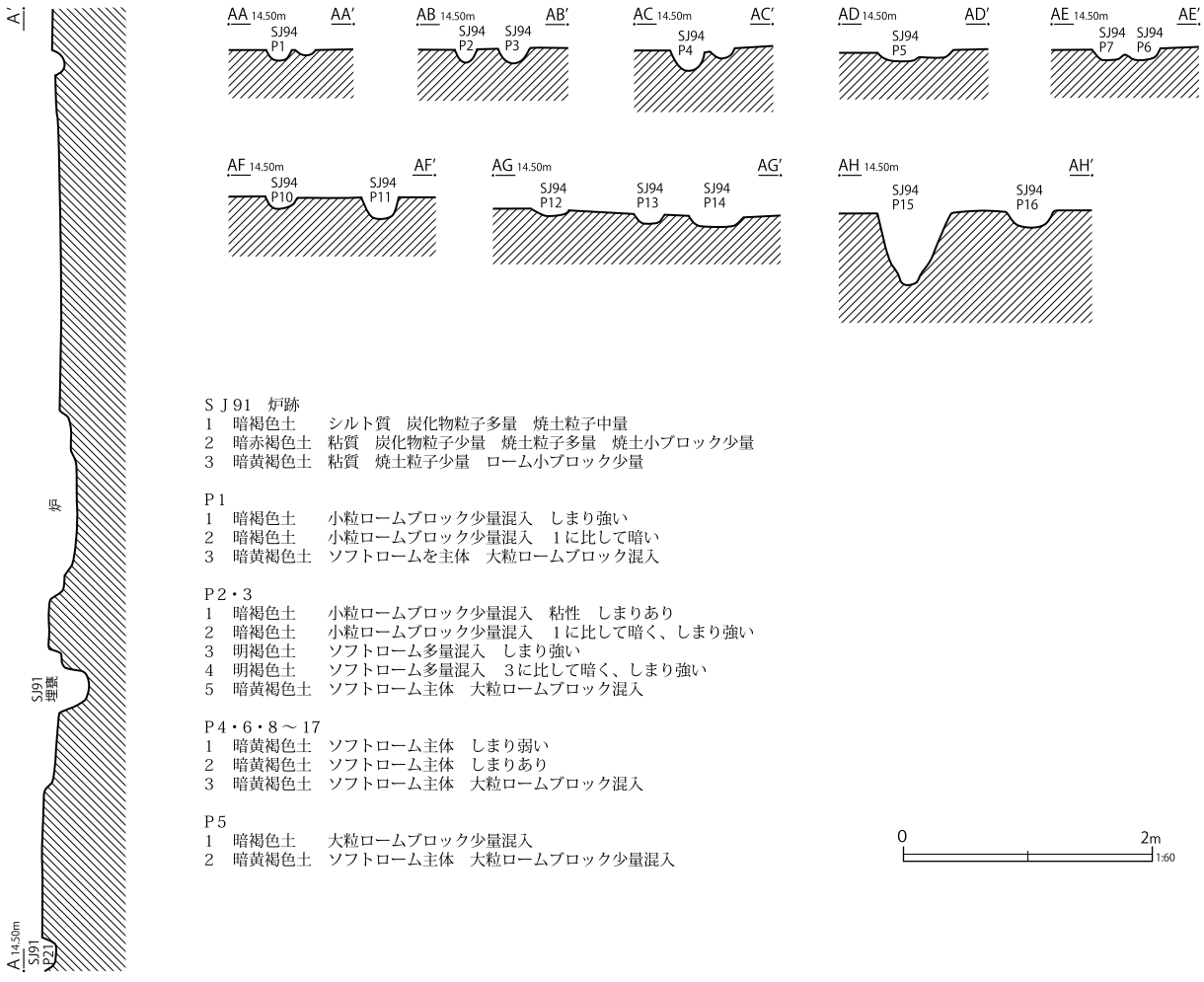
第 91 号住居跡（第 39 ～ 42 図）

Ｂ区のほぼ中央、Ｉ・Ｊ－11・12 グリッドに位置する。第 94 号住居跡と重複するが、本住居跡が新しいことを埋甕の前後関係で確認している。

南に張り出しを従える柄鏡形住居跡で、主体部



第39図　第91·94号住居跡（1）



ＳＪ91　炉跡
1　暗褐色土　　シルト質　炭化物粒子多量　焼土粒子中量
2　暗赤褐色土　粘質　炭化物粒子少量　焼土粒子多量　焼土小ブロック少量
3　暗黄褐色土　粘質　焼土粒子少量　ローム小ブロック少量

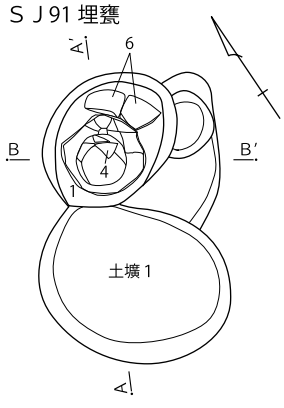
Ｐ1
1　暗褐色土　　小粒ロームブロック少量混入　しまり強い
2　暗褐色土　　小粒ロームブロック少量混入　1に比して暗い
3　暗黄褐色土　ソフトロームを主体　大粒ロームブロック混入

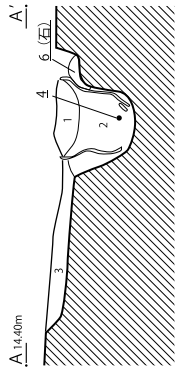
Ｐ2・3
1　暗褐色土　　小粒ロームブロック少量混入　粘性　しまりあり
2　暗褐色土　　小粒ロームブロック少量混入　1に比して暗く、しまり強い
3　明褐色土　　ソフトローム多量混入　しまり強い
4　明褐色土　　ソフトローム多量混入　3に比して暗く、しまり強い
5　暗黄褐色土　ソフトローム主体　大粒ロームブロック混入

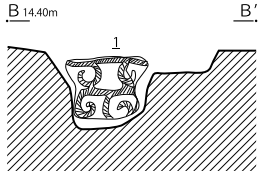
Ｐ4・6・8～17
1　暗黄褐色土　ソフトローム主体　しまり弱い
2　暗黄褐色土　ソフトローム主体　しまりあり
3　暗黄褐色土　ソフトローム主体　大粒ロームブロック混入

Ｐ5
1　暗褐色土　　大粒ロームブロック少量混入
2　暗黄褐色土　ソフトローム主体　大粒ロームブロック少量混入

ＳＪ91 埋甕

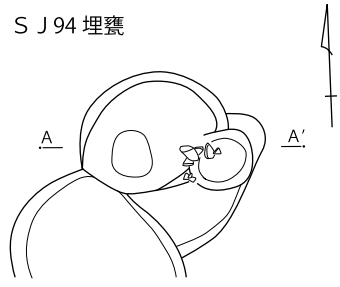


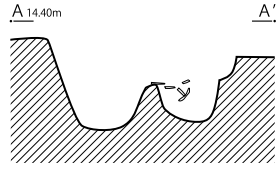


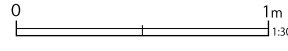


ＳＪ91　埋甕
1　暗黄褐色土　炭化物粒子少量　ローム粒子多量
2　暗黄褐色土　ローム小ブロック多量　ややしまりに欠ける
3　暗黄褐色土　ローム粒子多量

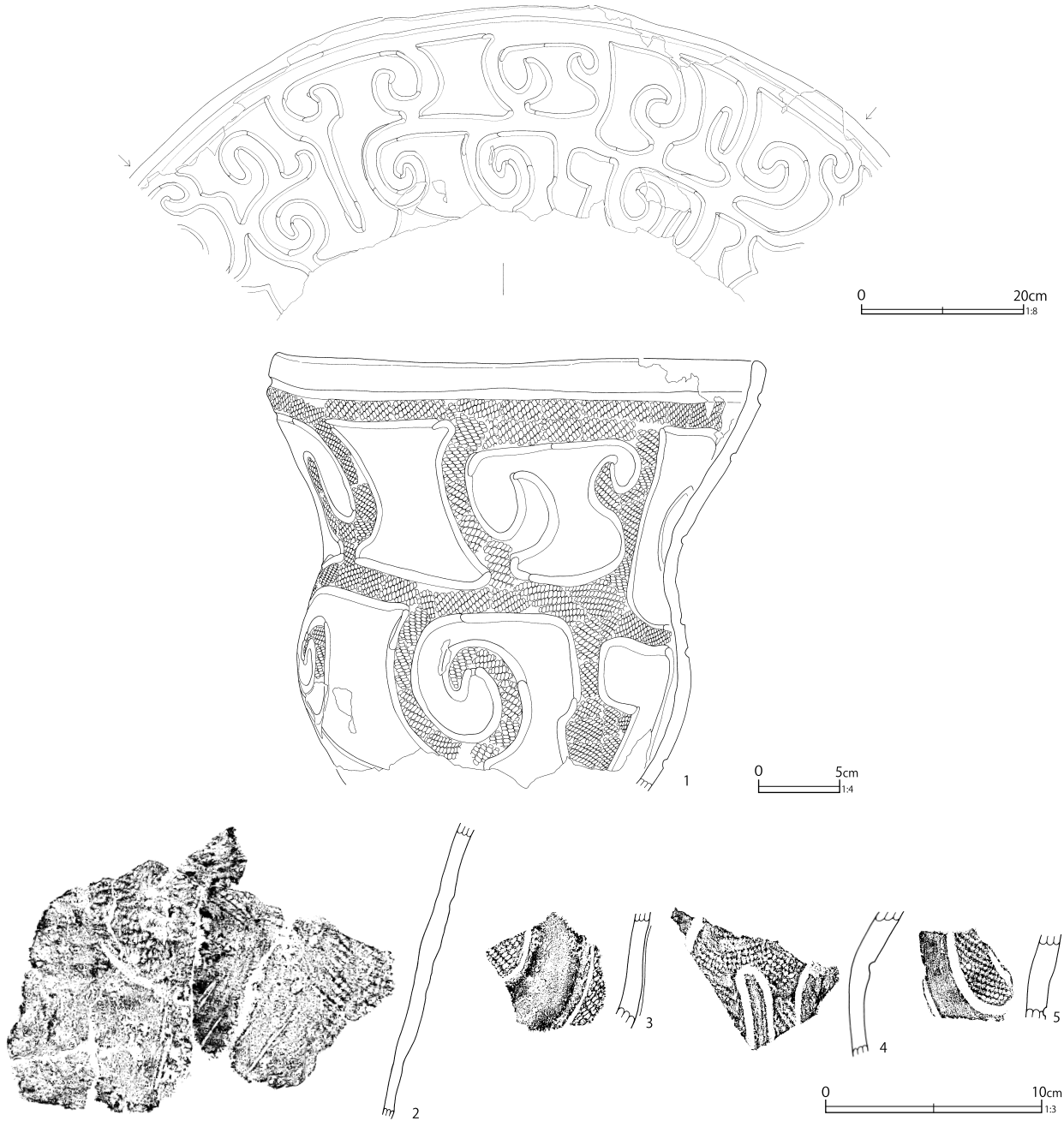
ＳＪ94 埋甕







第40図　第91･94号住居跡（2）



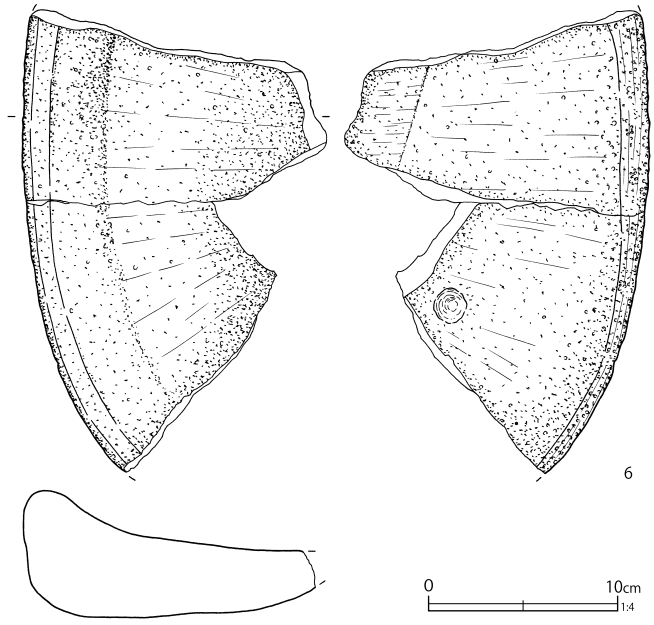
第41図　第91号住居跡出土遺物（１）

の平面形はやや不整な円形になるようである。柄部の南側は調査区域外にかかる。全体規模は確定しがたいが、柄部の軸と炉跡からみた主軸Ｎ－24°－Ｅ方向で7.35ｍ分を検出できた。

検出できた竪穴は浅く、覆土は確認できなかった。上層の文化層から確認を行ったため、元々ほとんど覆土がない平地式建物であった可能性が高い。

床面はほぼ平坦で、主体部（住居部）の中央にはっきり掘り込まれた地床炉がある。長軸1.55ｍ、短軸1.00ｍ、深さ0.15ｍの皿形で、長軸0.95ｍ、短軸0.75ｍの範囲の焼土を含む暗褐色土を取り除くと、掘り方に暗黄褐色土が充填されていた。

埋甕は炉の南側0.4ｍの位置に、長径0.60ｍ、短径0.45ｍの掘り込みに深鉢（第41図１）の



第42図　第91号住居跡出土遺物（２）

第３表　第91号住居跡出土石器観察表（第42図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(ｇ)	備考	図版
6	石皿	安山岩	[24.6]	[16.1]	6.7	2348.8	SJ91　埋甕№１	219-22

上半部が埋置されていた。

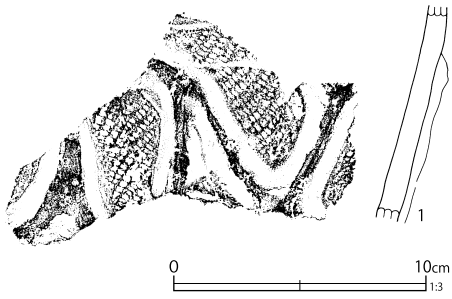
壁周溝は、幅 0.15 ｍ、深さ 0.05 ｍで、遺構の東側が重複のため判然としないが、全周すると考えられる。

柱穴は第 94 号住居跡のものと重複し、多く分布するが、その配置から 21 本を本住居跡に帰属するものとした。径 0.20 ～ 0.65 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.50 ｍと幅があり、径 0.25 ～ 0.35 ｍ、深さ 0.20 ｍのものが多い。検出した柱穴の位置関係から主柱を求めると、西側のＰ 18・12・20、東側の２・３・５に加えて、攪乱内に１本の計６本を想定するのが案分比や柄の長さを決定づける規格線を導くのに合理的だが、多柱型としてＰ 16 から順に 14・13・20・８・攪乱内１本・１・17、計８本も主軸に対して均等な線対称の配置となる。

張り出し部は主体部と段差なく、Ｐ 11・９が連結部の対ピットとなるだろう。連結部や張り出し先端の埋甕は、掘り方も含めて検出できなかった。

遺物は土器・石器 139 点が出土した。第 41 図１の称名寺式土器は、胴上部が内湾気味に開く深鉢形で、胴括れ部を横走する平行沈線を境に文様が上下に二分される。括れ部の横走する沈線は全周せず、口唇無文部下を廻る平行沈線から垂下する「Ｊ」字文を境に途切れている。描かれる文様は「Ｊ」字文で、上下２段に描かれるが、方向が一致する部分と逆向きとなる部分があるほか、枠状の区画内に正対するように描かれた部分もある。また、胴下部にはスペード状のモチーフが描かれるなど、変容が著しい。モチーフを描く沈線間には、ＬＲ縄文が充填されている。口径 29.8 ㎝、現存高 26.5 ㎝である。

２は加曽利Ｅ式の胴部破片で、縄文施文部以下にヘラ状工具によるナデが施されている。３は曲線的な平行する微隆起線に沿って沈線が描かれる



第43図　第94号住居跡出土遺物

ことから、いわゆる関沢類型の胴部破片の可能性がある。４・５は称名寺式の胴部破片であろう。

第 91 号住居跡から出土した石器は１点のみである。６は石皿破片で、残存部位から長楕円形であった可能性がある。縁辺部が突出する丁寧な作りである。裏面はほぼ平坦で､窪みが観察される。

本住居跡は、平面形態と出土遺物から、縄文時代後期初頭の住居跡と判断できる。

第 94 号住居跡（第 39・40・43 図）

Ｂ区のほぼ中央、Ｊ－11・12 グリッドに位置する。中央を南北に排水溝によって壊され、さらに攪乱が入る。第 91 号住居跡と重複するが、本住居跡が古いことを埋甕の前後関係で確認している。

重複や攪乱のため判然としないが、平面形は大略 6.7 ｍ× 5.6 ｍの東西方向がやや長い不整な円形になるようである。またＰ６・７、Ｐ 10・11 が柄部の対ピットと推定できることから、柄鏡形を呈すると考えられる。

南側を柄部として算出した主軸方位はＮ－ 24°－Ｅである。検出できた竪穴は浅く、覆土は確認できなかった。第 91 号住居跡同様に上層の文化層から確認を行ったため、元々ほとんど覆土がない平地式建物であった可能性が高い。

床面はほぼ平坦で、排水溝や攪乱によって炉、埋甕は壊されており、検出できなかった。

埋甕は第 91 号住居跡と重複する土壙内から、埋甕と考えられる破片が出土しているが、破片が小さく、確証はない。

柱穴は、第 91 号住居跡のものと重複し多く分布するが、その配置から、16 本を本住居跡に帰属するものとした。径 0.20 ～ 0.65 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.55 ｍと幅があるが、ほとんどは径 0.25 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.15 ｍの小型で浅めのものが多い。遺構の中央がほとんど壊されているため主柱の配置は明らかでない。多柱型として、Ｐ 16 から順に 14・12・５・４・１は主軸に対して均等な線対称の配置となる。

遺物は土器 2 点が出土した。第 43 図１は隆帯による渦巻き文が施文されるいわゆる「架懸文」の胴部破片である。断面カマボコ形の隆帯両側には沈線が施されている。地文は縄文ＬＲである。

本住居跡は、出土遺物から縄文時代中期後半期の所産と判断した。

第 92 号住居跡（第 44・45 図）

Ｂ区のほぼ中央、Ｉ・Ｊ－ 11 グリッドに位置する。北東側は大きく攪乱によって壊され、西側は調査区域外にかかる。幅広の周溝が巡るが、西側は開口している可能性が高い。

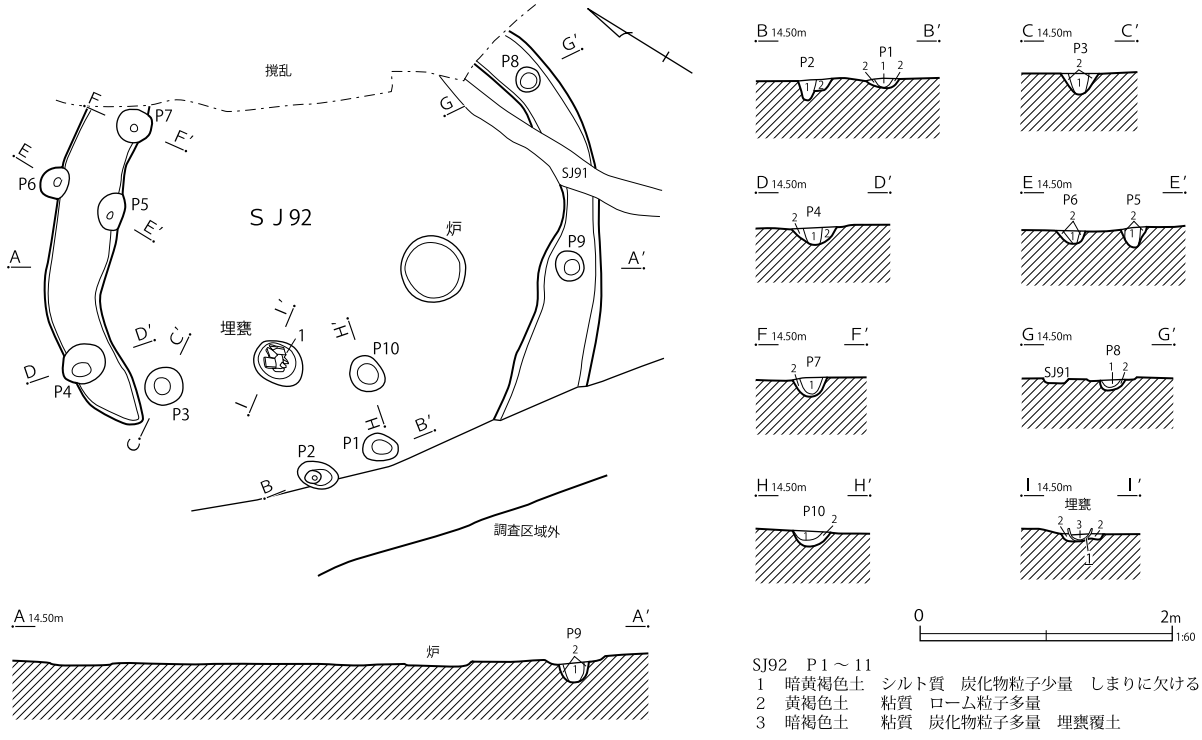
第 91 号住居跡と重複するが、本住居跡が古いことを土層観察で確認している。

重複や攪乱のため判然としないが、平面形は大略径 4.35 ｍの不整な円形になるようである。Ｐ１・３が対ピットと推定できることから、柄鏡形を呈する可能性がある。

西側を柄部として算出した主軸方位は、Ｎ－ 24°－Ｅである。検出できた竪穴は浅く、覆土は確認できなかった。やはり上層の文化層から確認を行ったため、元々ほとんど覆土がない平地式建物であった可能性が高い。

床面はほぼ平坦で、中央南寄りに地床炉が設けられていた。径 0.50 ｍ、深さ 0.05 ｍの皿形である。覆土は確認できなかった。

埋甕は長軸 0.45 ｍ、短軸 0.30 ｍ、深さ 0.10 ｍの掘り込みに深鉢が据えられていた。



第44図　第92号住居跡

主柱は明らかでなく、多柱型としての配置も不明瞭である。径 0.20 ～ 0.45 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mと幅があるが、ほとんどは径 0.20 ～ 0.30 mのものである。

遺物は土器 27 点が出土した。第 45 図 1 は器面にヘラ状工具によるナデ整形が施された深鉢形土器である。

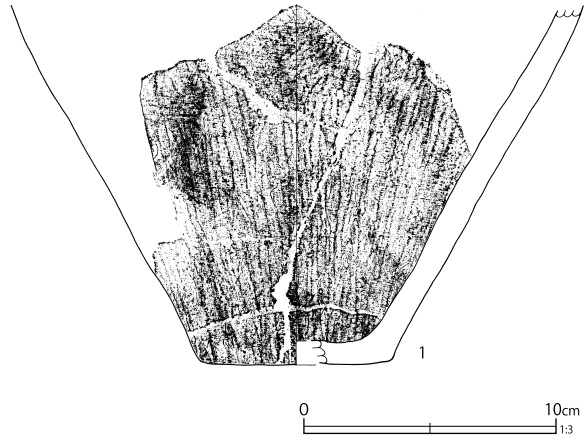
本住居跡は、出土遺物から縄文時代後期前半期の所産と判断した。

第 93 号住居跡（第 46・47 図）

Ｂ区の中央やや西側、Ｉ－10・11、Ｊ－11 グリッドに位置する。南西側は調査区域外にかかる。

遺構の東側のピットは、確認時に精査したが発見できなかった。

竪穴が確認できなかったため判然としないが、平面形は長軸が調査区域外にかかるため、4.50 m以上になると推定され、短軸は 3.50 mほどの不整な楕円形になるようである。

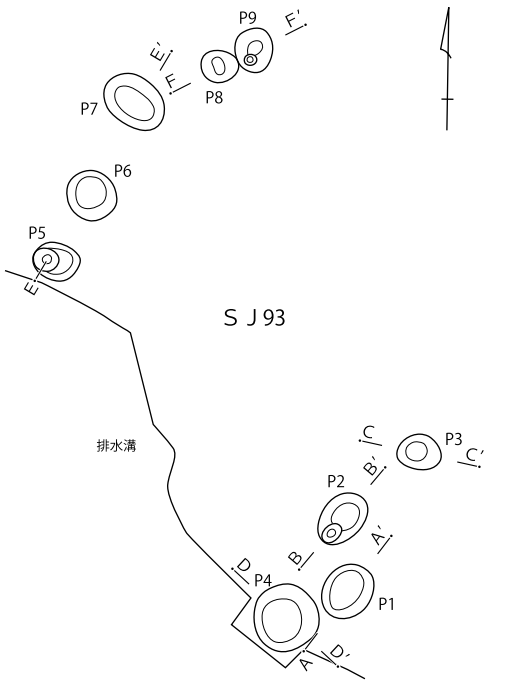


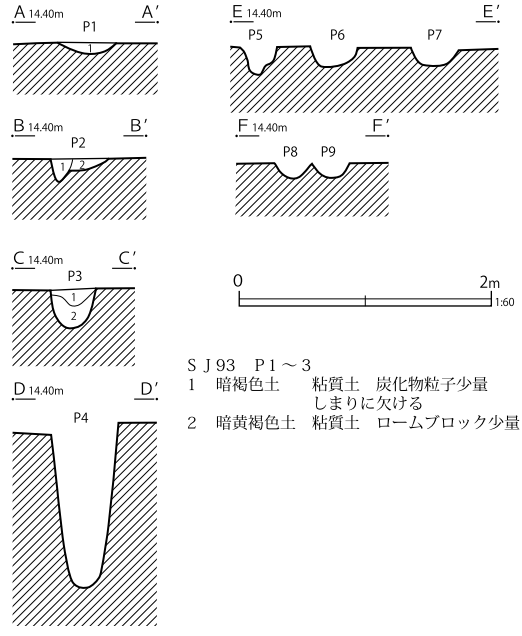
第45図　第92号住居跡出土遺物

東西両ピット群の平行軸として算出した主軸方位はＮ－ 29° －Ｅである。

床面はほぼ平坦で、炉、埋甕、壁周溝は検出できなかった。

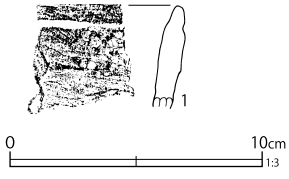
主柱は明らかでなく、多柱型とすると、Ｐ２－５、Ｐ３－６が、両柱穴列を軸方向とした場合の線対称位置になる。径 0.30 ～ 0.50 m、深さ





S J 93　P 1 ～ 3
1　暗褐色土　　粘質土　炭化物粒子少量
　　しまりに欠ける
2　暗黄褐色土　粘質土　ロームブロック少量

第46図　第93号住居跡



第47図　第93号住居跡出土遺物

0.10 ～ 0.30 mと径が大きめで、浅い傾向がある。Ｐ４のみ径 0.50 m、深さ 1.29 mと規模が大きい。

遺物は土器２点が出土したのみである。住居跡から出土した遺物は少なく、１例のみ図示できるに過ぎない。第 47 図１は口唇直下に沈線が横走する土器で、堀之内１式と考えられる。

本住居跡は、出土遺物から縄文時代後期前半期の所産と判断した。

（２）ピット群

まとまった配置を持つピット群を 11 基検出した。確認時から住居跡と考えた調査をすすめたが、埋甕や炉跡を検出できなかったため、ピット群として報告する。

第１号ピット群（第 48・49 図）

Ｂ区の西側、Ｈ－９グリッドに位置する。南西側が調査区域外にかかり、遺構の約半分が斜めに検出された。ピットの総数は 39 基で、二重に巡っている。内側は調査範囲で長軸 6.0 m、短軸 4.8 mの範囲で分布し、外側は約 0.5 mから 1.0 mの間隔を置いて北側のみを囲繞している。

全体配置の平面形は隅丸方形に近く、配置から想定できる軸方位はＮ－ 26°－Ｗである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は土器７点が出土したのみである。第 49 図１は口唇に孔を持つ突起を有し、突起部分が内屈する土器である。２～４は堀之内Ⅱ式の深鉢形土器で、２は口唇内面に沈線が廻る。３は口唇下を廻る隆起線上に刻みが施された土器で、単沈線による鋸歯状ないしは三角状のモチーフが描かれた土器であろう。４は沈線により菱形ないしは格子目状のモチーフが描かれ、沈線間にはＬＲ縄文が充填されている。

本ピット群は柱穴配置や出土遺物から縄文時代後期前半に建てられたと判断した。

第２号ピット群（第 50 図）

Ｂ区の西側、Ｇ・Ｈ－ 10 グリッドに位置する。ピットの総数は 33 基で、東西の長い長楕円形に

二重に巡っている。内側は長軸 3.8 m、短軸 3.0 mの範囲で分布する。外側は約 0.2 mから 0.8 mの間隔を置いて東側のみを囲繞している。

全体配置の平面形は長楕円形で、配置から想定できる軸方位はN－26°－Wである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第３号ピット群（第 51 図）

B区の西側、H－10 グリッドに位置する。ピットの総数は 28 基で、南北に長く二重に巡っている。内側は長軸 5.3 m、短軸 3.7 mの範囲で分布する。外側は約 0.2 mから 1.0 mの間隔を置いて西側のみを囲繞している。この外側の一群は西側の別のピット群である可能性も考えられる。

全体配置の平面形は隅丸長方形もしくは五角形で、配置から想定できる軸方位はN－26°－Wである。仮にP 18－24－25－5のラインを中軸線とすると、P 17－19、P 15－21、P 18－24 が線対称とになる可能性がある。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は、柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

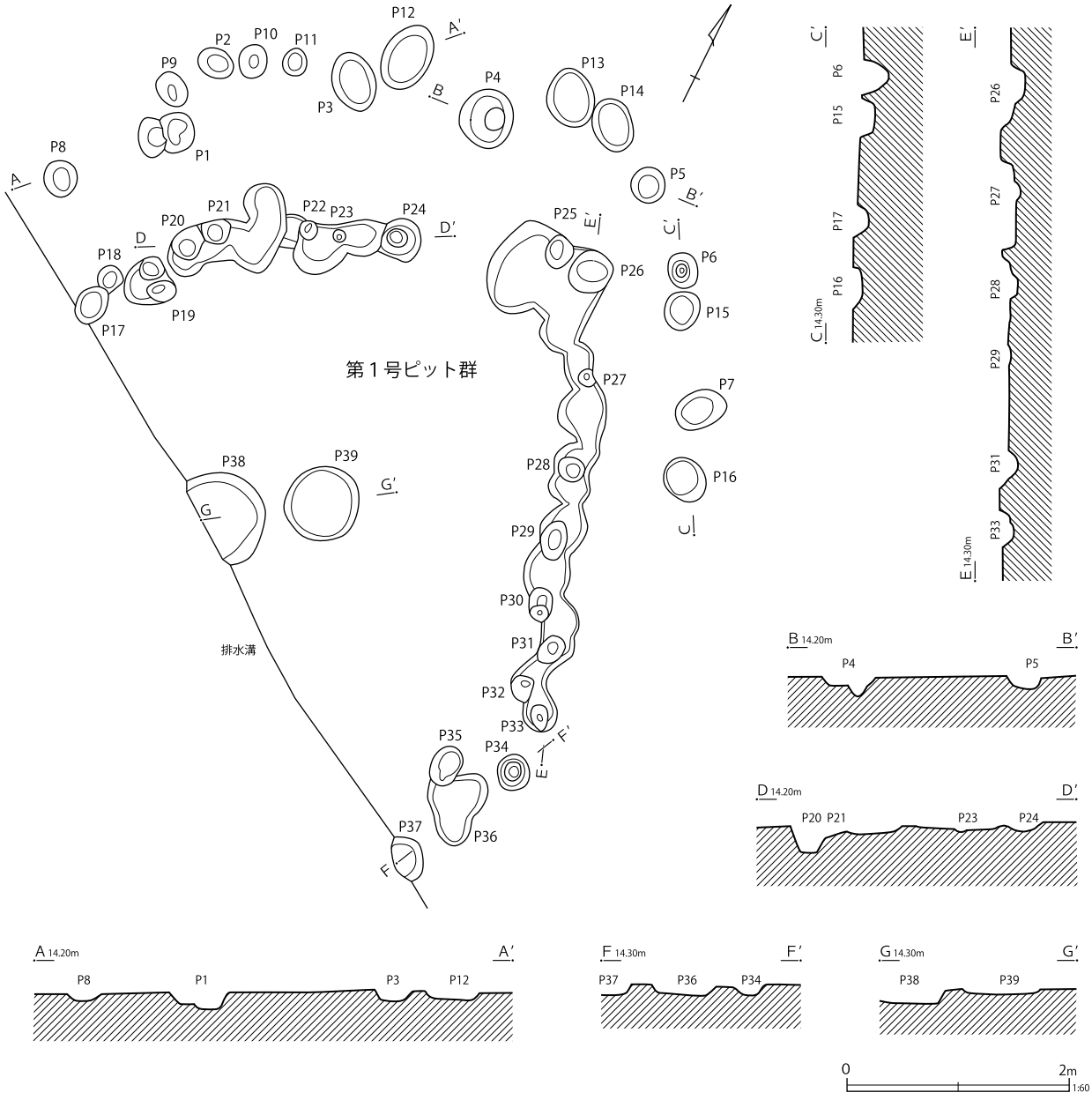
第４号ピット群（第 52 図）

B区の中央、H－10 グリッドに位置する。東西 1.8 m、南北 2.7 mのやや南北に長い範囲に８基が分布する。並びからは南北方向への志向性が感じられる。

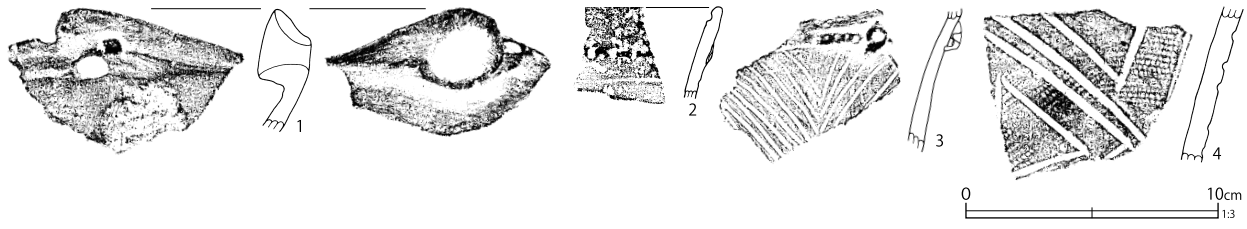
第４表　ピット群一覧表（第 48・50 ～ 59 図）　　単位：m

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
ピット群１（B区）					N－26°－W
H－9	P1	0.50	0.35	0.20	
H－9	P2	0.33	0.25	0.11	
H－9	P3	0.53	0.37	0.15	
H－9	P4	0.55	0.47	0.17	
H－9	P5	0.32	0.30	0.09	
H－9	P6	0.33	0.25	0.23	
H－9	P7	0.46	0.32	0.08	
H－9	P8	0.31	0.29	0.08	
H－9	P9	0.32	0.25	0.13	
H－9	P10	0.32	0.25	0.18	
H－9	P11	0.25	0.20	0.08	
H－9	P12	0.60	0.42	0.07	
H－9	P13	0.55	0.43	0.06	
H－9	P14	0.50	0.35	0.07	
H－9	P15	0.35	0.30	0.13	
H－9	P16	0.42	0.35	0.08	
H－9	P17	0.38	0.27	0.07	
H－9	P18	(0.20)	0.20	0.09	
H－9	P19	0.45	0.45	0.17	
H－9	P20	0.30	0.27	0.18	
H－9	P21	0.26	0.20	0.18	
H－9	P22	0.15	0.14	0.04	
H－9	P23	0.10	0.10	0.14	
H－9	P24	0.35	(0.35)	0.11	
H－9	P25	0.30	0.23	0.06	
H－9	P26	0.40	0.35	0.12	
H－9	P27	0.15	0.13	0.22	
H－9	P28	0.25	0.20	0.30	
H－9	P29	0.35	0.25	0.24	
H－9	P30	0.27	0.20	0.18	
H－9	P31	0.27	0.20	0.15	
H－9	P32	0.23	0.20	0.13	
H－9	P33	0.23	0.15	0.15	
H－9	P34	0.32	0.28	0.09	
H－9	P35	0.35	0.26	0.08	
H－9	P36	0.60	0.53	0.06	
H－9	P37	0.43	(0.27)	0.70	
H－9	P38	0.86	(0.55)	0.10	
H－9	P39	0.68	0.63	0.04	
ピット群２（B区）					N－43°－E
G·H－9	P1	0.35	0.30	0.06	
G·H－9	P2	0.30	0.25	0.11	
G·H－9	P3	0.35	(0.25)	0.12	
G·H－9	P4	0.40	0.32	0.09	
G·H－9	P5	0.36	0.30	0.12	
G·H－9	P6	0.30	0.30	0.80	
G·H－9	P7	0.21	0.19	0.05	
G·H－9	P8	0.28	0.25	0.10	
G·H－9	P9	0.30	0.30	0.10	
G·H－9	P10	0.26	0.20	0.10	
G·H－9	P11	0.32	0.30	0.13	
G·H－9	P12	0.40	0.34	0.14	
G·H－9	P13	0.32	0.25	0.20	
G·H－9	P14	0.35	0.32	0.06	
G·H－9	P15	0.32	0.27	0.11	
G·H－9	P16	0.50	0.33	0.10	
G·H－9	P17	0.46	0.30	0.07	
G·H－9	P18	0.55	0.40	0.06	
G·H－9	P19	0.38	0.23	0.08	
G·H－9	P20	0.42	0.32	0.07	
G·H－9	P21	0.63	0.43	0.11	
G·H－9	P22	0.38	0.34	0.06	
G·H－9	P23	0.35	0.26	0.08	
G·H－9	P24	0.46	0.40	0.05	
G·H－9	P25	0.47	0.32	0.35	
G·H－9	P26	(0.40)	0.28	0.06	
G·H－9	P27	0.80	0.53	0.11	
G·H－9	P28	0.30	0.30	0.07	
G·H－9	P29	0.75	0.30	0.08	
G·H－9	P30	0.40	0.32	0.06	
G·H－9	P31	0.37	0.25	0.07	
G·H－9	P32	0.30	0.25	0.15	
G·H－9	P33	0.40	0.38	0.08	
ピット群３（B区）					N－26°－W
H－10	P1	0.55	0.35	0.19	
H－10	P2	(0.57)	0.36	0.18	
H－10	P3	0.43	0.38	0.32	
H－10	P4	0.40	0.32	0.03	
H－10	P5	0.76	0.70	0.18	
H－10	P6	0.35	0.32	0.10	
H－10	P7	(0.40)	0.35	0.08	
H－10	P8	0.60	0.47	0.06	
H－10	P9	0.56	0.50	0.10	
H－10	P10	0.60	0.52	0.16	
H－10	P11	0.28	0.20	0.08	
H－10	P12	0.25	0.25	0.12	
H－10	P13	0.40	0.34	0.10	
H－10	P14	0.28	0.28	0.06	
H－10	P15	0.70	0.50	0.25	

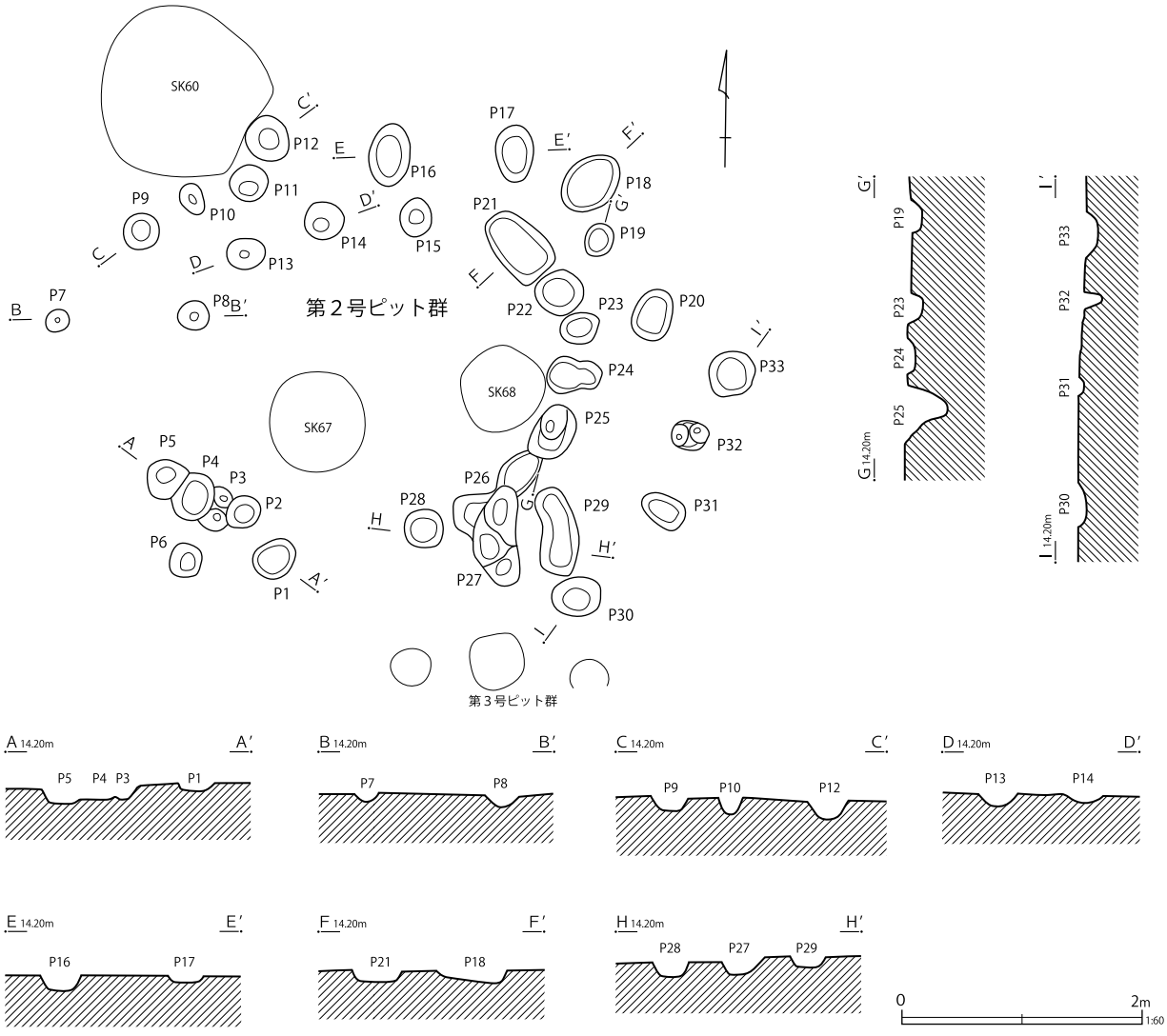
グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
H−10	P16	0.20	0.20	0.03	
H−10	P17	0.33	0.33	0.08	
H−10	P18	0.50	0.48	0.13	
H−10	P19	0.32	0.32	0.07	
H−10	P20	0.40	0.35	0.10	
H−10	P21	0.55	0.52	0.20	
H−10	P22	0.40	0.35	0.07	
H−10	P23	(0.33)	0.33	0.15	
H−10	P24	0.85	0.55	0.15	
H−10	P25	0.38	0.38	0.05	
H−10	P26	0.30	0.20	0.10	
H−10	P27	0.30	0.27	0.10	
H−10	P28	0.35	0.35	0.22	
ピット群4（B区）					N−17° −W
H−10	P1	0.55	0.47	0.05	
H−10	P2	0.30	0.30	0.10	
H−10	P3	0.26	0.25	0.12	
H−10	P4	0.22	0.20	0.08	
H−10	P5	0.17	0.17	0.05	
H−10	P6	0.23	0.20	0.05	
H−10	P7	0.20	(0.15)	0.09	
H−10	P8	0.30	0.25	0.12	
ピット群5（B区）					N−12° −E
I−11	P1	0.25	0.25	0.22	
I−11	P2	0.40	0.32	0.14	
I−11	P3	0.65	(0.26)	0.17	
I−11	P4	0.40	(0.30)	0.13	
I−11	P5	0.24	0.24	0.05	
I−11	P6	0.32	0.26	0.05	
I−11	P7	0.30	0.30	0.07	
I−11	P8	0.24	0.23	0.06	
I−11	P9	0.40	0.40	0.08	
I−11	P10	0.80	0.65	0.06	
I−11	P11	0.30	0.26	0.10	
I−11	P12	0.50	0.46	0.06	
I−11	P13	0.35	0.28	0.08	
I−11	P14	0.30	0.25	0.09	
I−11	P15	0.43	0.38	0.04	
I−11	P16	0.32	0.30	0.12	
I−11	P17	1.27	0.40	0.16	
I−11	P18	0.45	0.35	0.12	
I−11	P19	0.30	0.24	0.04	
I−11	炉	(0.65)	—	0.06	
ピット群6（B区）					N−29° −E
I−10·11	P1	0.33	0.33	0.15	
I−10·11	P2	0.28	0.26	0.17	
I−10·11	P3	0.27	0.20	0.05	
I−10·11	P4	0.25	0.23	0.10	
I−10·11	P5	0.27	0.22	0.10	
I−10·11	P6	0.35	0.30	0.15	
I−10·11	P7	0.33	0.33	0.15	
I−10·11	P8	0.26	0.26	0.13	
I−10·11	P9	(0.65)	0.45	0.20	
I−10·11	P10	(0.28)	0.30	0.20	
I−10·11	P11	0.53	0.48	0.34	
I−10·11	P12	0.22	0.20	0.08	
I−10·11	P13	0.66	0.37	0.18	
I−10·11	P14	0.55	0.45	0.08	
I−10·11	P15	0.35	0.32	0.11	
I−10·11	P16	0.26	0.20	0.15	
I−10·11	P17	0.40	0.37	0.14	
I−10·11	P18	0.25	0.20	0.10	
I−10·11	P19	0.28	0.28	0.14	
I−10·11	P20	0.50	0.25	0.09	
I−10·11	P21	0.32	0.27	0.12	
I−10·11	P22	0.29	0.26	0.10	
I−10·11	P23	0.70	0.55	0.13	
I−10·11	P24	0.38	0.38	0.20	
I−10·11	P25	0.15	0.10	0.03	
I−10·11	P26	0.27	0.25	0.12	
I−10·11	P27	0.15	0.10	0.05	
I−10·11	P28	0.20	0.15	0.03	
I−10·11	P29	0.50	0.40	0.05	
I−10·11	P30	0.20	0.17	0.04	
I−10·11	P31	0.14	0.12	—	
I−10·11	P32	0.12	0.10	—	
I−10·11	P33	0.20	0.17	0.05	
I−10·11	P34	0.25	0.20	0.12	
I−10·11	P35	0.27	0.18	0.10	
I−10·11	P36	0.10	0.10	0.07	
ピット群7（C区）					N−42° −W
I·J−13	P1	0.50	0.42	0.14	
I·J−13	P2	0.26	0.23	0.15	
I·J−13	P3	0.86	0.55	0.29	
I·J−13	P4	0.30	0.30	0.15	
I·J−13	P5	0.27	0.20	0.11	
I·J−13	P6	0.43	0.35	0.13	
I·J−13	P7	0.35	0.27	0.16	
I·J−13	P8	0.52	0.33	0.08	
I·J−13	P9	0.30	0.22	0.08	
I·J−13	P10	0.24	0.23	0.06	
I·J−13	P11	0.25	0.23	0.08	
I·J−13	P12	0.22	0.18	0.09	
I·J−13	P13	0.45	0.30	0.13	
I·J−13	P14	0.25	0.25	0.07	
I·J−13	P15	0.30	0.25	0.12	
I·J−13	P16	0.30	0.25	0.13	
I·J−13	P17	0.23	0.21	0.13	
I·J−13	P18	0.33	0.25	0.19	
I·J−13	P19	0.35	0.30	0.25	
ピット群8（C区）					N−60° −W
H−11·12	P1	0.50	0.50	0.25	
H−11·12	P2	0.32	0.32	0.31	
H−11·12	P3	0.45	0.45	0.29	
H−11·12	P4	0.50	0.47	0.22	
H−11·12	P5	0.35	0.30	0.15	
H−11·12	P6	0.52	0.45	0.23	
H−11·12	P7	0.55	0.45	0.24	
H−11·12	P8	0.35	0.32	0.18	
H−11·12	P9	0.82	0.60	0.15	
ピット群9（C区）					N−37° −E
K−13·14	P1	0.36	0.35	0.18	
K−13·14	P2	0.38	0.36	0.14	
K−13·14	P3	0.36	0.33	0.15	
K−13·14	P4	0.55	0.40	0.31	
K−13·14	P5	0.58	0.40	0.36	
K−13·14	P6	0.45	0.35	0.31	
K−13·14	P7	0.55	0.45	0.26	
K−13·14	P8	0.42	0.37	0.12	
K−13·14	P9	0.45	0.32	0.20	
K−13·14	P10	0.34	0.30	0.14	
K−13·14	P11	0.52	0.30	0.22	
K−13·14	P12	0.27	0.27	0.12	
K−13·14	P13	0.45	0.40	0.16	
K−13·14	P14	0.30	0.25	0.19	
K−13·14	P15	0.48	0.28	0.21	
K−13·14	P16	0.29	0.29	0.15	
K−13·14	P17	0.35	0.28	0.14	
K−13·14	P18	0.25	0.23	0.15	
K−13·14	P19	0.60	0.40	0.27	
K−13·14	P20	0.32	0.32	0.37	
K−13·14	P21	0.60	0.45	0.14	
K−13·14	P22	0.40	0.40	0.20	
K−13·14	P23	0.28	0.22	0.20	
K−13·14	P24	0.33	0.25	0.18	
K−13·14	P25	0.80	0.60	0.30	
K−13·14	P26	0.40	0.35	0.09	
K−13·14	P27	0.32	0.30	0.16	
K−13·14	P28	0.35	0.30	0.18	
K−13·14	P29	0.40	(0.32)	0.26	
K−13·14	P30	0.35	0.35	0.15	
K−13·14	P31	0.40	0.25	0.16	
K−13·14	P32	0.65	0.62	0.16	
K−13·14	P33	0.25	0.23	0.14	
K−13·14	P34	0.37	0.28	0.30	
K−13·14	P35	0.35	0.32	0.11	
ピット群10（C区）					N−33° −E
L−14	P1	0.40	0.32	0.27	
L−14	P2	0.36	0.28	0.21	
L−14	P3	0.40	0.30	0.24	
L−14	P4	0.32	0.27	0.27	
L−14	P5	0.35	0.29	0.20	
L−14	P6	0.40	0.35	0.29	
L−14	P7	0.45	0.42	0.18	
L−14	P8	0.60	0.57	0.26	
L−14	P9	0.30	0.26	0.21	
ピット群11（C区）					N−90° −E
L−14·15	P1	0.43	0.35	0.08	
L−14·15	P2	0.70	0.67	0.10	
L−14·15	P3	0.32	0.30	0.10	
L−14·15	P4	0.36	0.33	0.11	
L−14·15	P5	0.33	0.31	0.10	
L−14·15	P6	0.44	0.34	0.16	
L−14·15	P7	0.30	0.25	0.08	
L−14·15	P8	0.27	0.25	0.13	
L−14·15	P9	0.28	0.25	0.21	
L−14·15	P10	0.38	0.36	0.17	
L−14·15	P11	0.60	0.37	0.16	
L−14·15	P12	0.98	0.78	0.18	
L−14·15	P13	0.70	0.60	0.19	
L−14·15	P14	0.40	0.30	0.10	



第48図　第１号ピット群



第49図　第１号ピット群出土遺物



第50図　第２号ピット群

全体配置の平面形は五角形になる可能性が高い。Ｐ１・２を結んだ軸線の軸方位はＮ－17°－Ｗである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は、柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第５号ピット群（第53図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－11グリッドに位置する。西側は第６号ピット群に接している。

径6.3ｍの不整な円形にピット19基が巡り、部分的に二重になっている。部分的に直線状の配置と見られる部分もあり、五角形の配置となる可能性も考えられる。南寄りには南北0.7ｍ、深さ0.05ｍの床面が硬化した炉跡状の掘り込みがある。

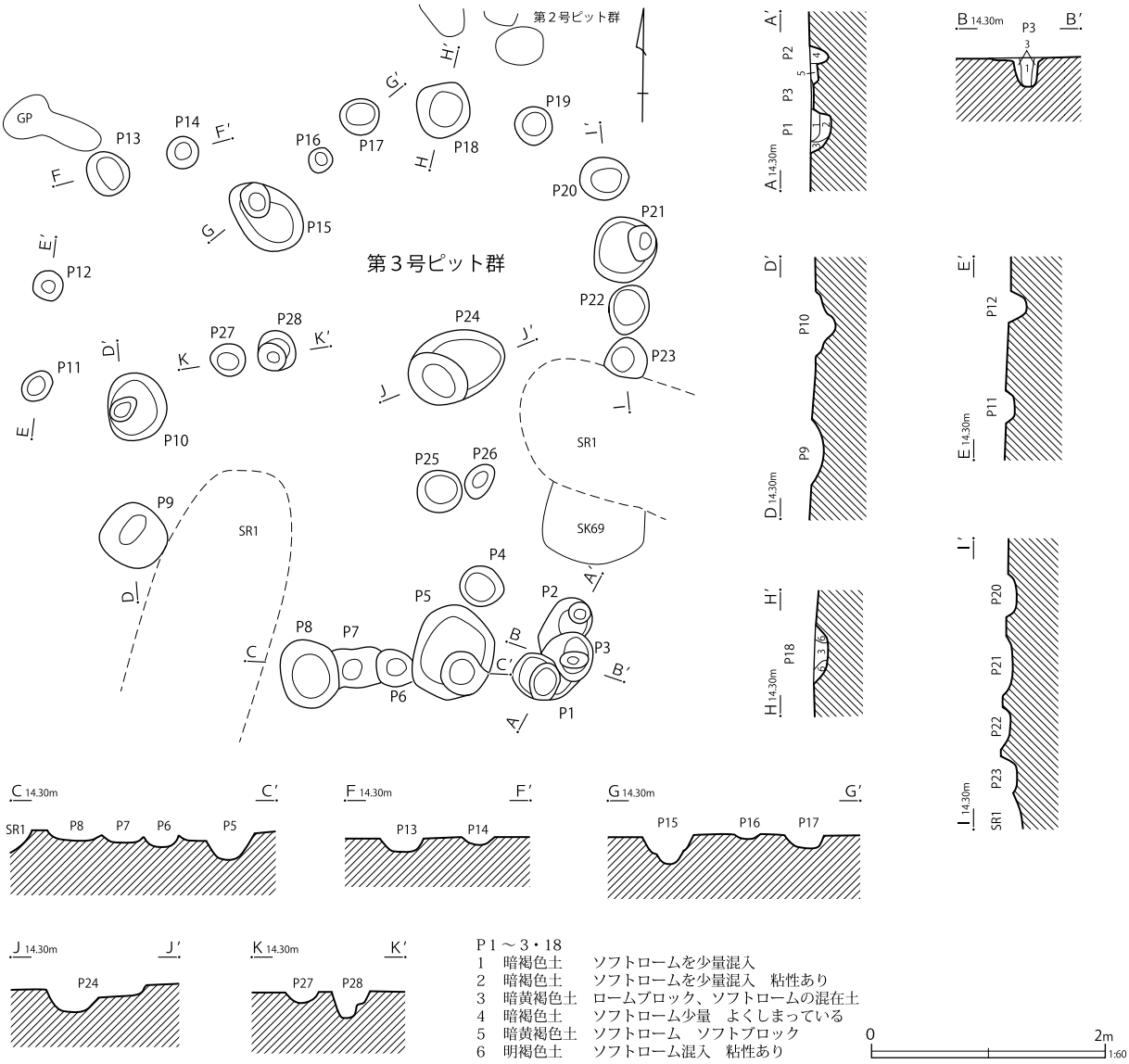
Ｐ３－４－炉跡のラインを主軸として想定できる軸方位はＮ－12°－Ｅである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第６号ピット群（第54図）

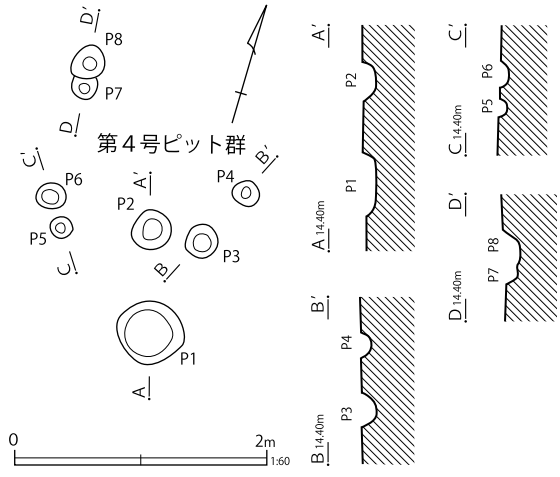
Ｂ区の中央、Ｉ－10･11グリッドで検出した。東側は第５号ピット群に接している。南側は調査区域外にかかる。



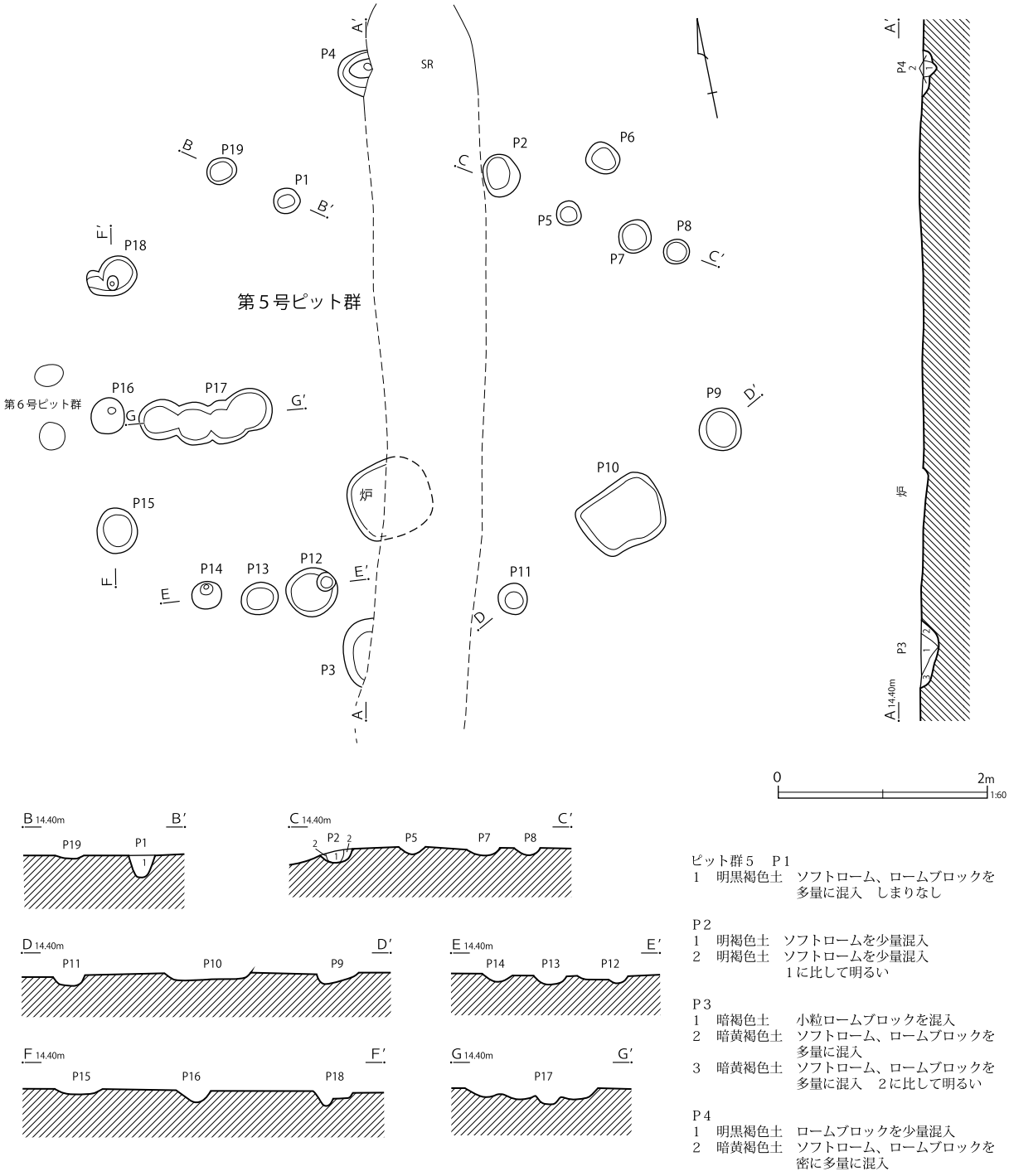
第51図　第３号ピット群

全体の分布は南北に細長く、仮に南側を張り出しとすると柄鏡形住居状の平面形を呈する。P 29 より北側が長楕円形の主体部、南側を柄部と見ることができようか。柄部の全体規模は確定しがたいが、柄部の軸とP 22 ～ 24・P 15 を通る主軸N－29°－E方向で6.80 m分を検出できた。東西はP19 － 25 間で 3.8 mである。

検出した柱穴の位置関係では、P 1－2、P 20－4、P 16・14－P 5・6、P 13－7、P 29－8、P 11－9が主軸に対して線対称の配置となる。



第52図　第４号ピット群



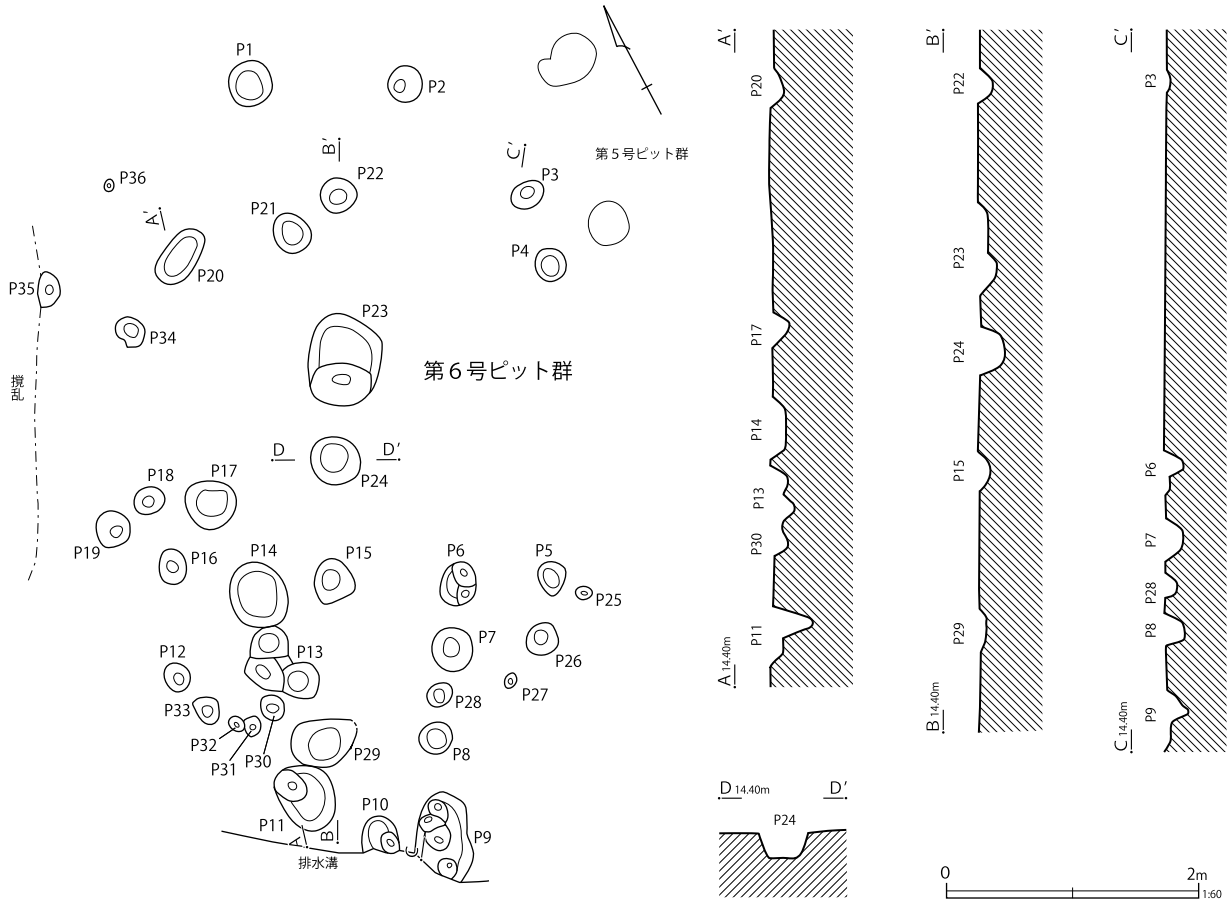
第53図　第５号ピット群

遺物は出土しなかった。

本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第７号ピット群（第 55 図）

Ｂ区東側Ⅰ・Ｊ－13 グリッドに位置する。南側は古墳時代前期の第 67 号住居跡に壊されている。大略東西 5.1 ｍ、南北 3.5 ｍの範囲に 19 基が分布する。



第54図　第６号ピット群

全体配置の平面形は隅丸方形になる可能性が高い。Ｐ１－６－11 を結んだ軸線の軸方位はＮ－83°－Ｗである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は、柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第８号ピット群（第 56 図）

Ｂ区中央東側、Ｈ－ 11・12 グリッドに位置する。大略南北 4.0 ｍ、東西 2.4 ｍのやや南北に長い範囲に９基が分布するが、全体の配置が半円状を呈するため、更に分布が東側の調査区域外に広がる可能性がある。Ｐ１・６は柱の当たりが２箇所認められることから、建て直しの可能性がある。

Ｐ２－６－７を結んだ軸線の軸方位は、Ｎ－25°－Ｗである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

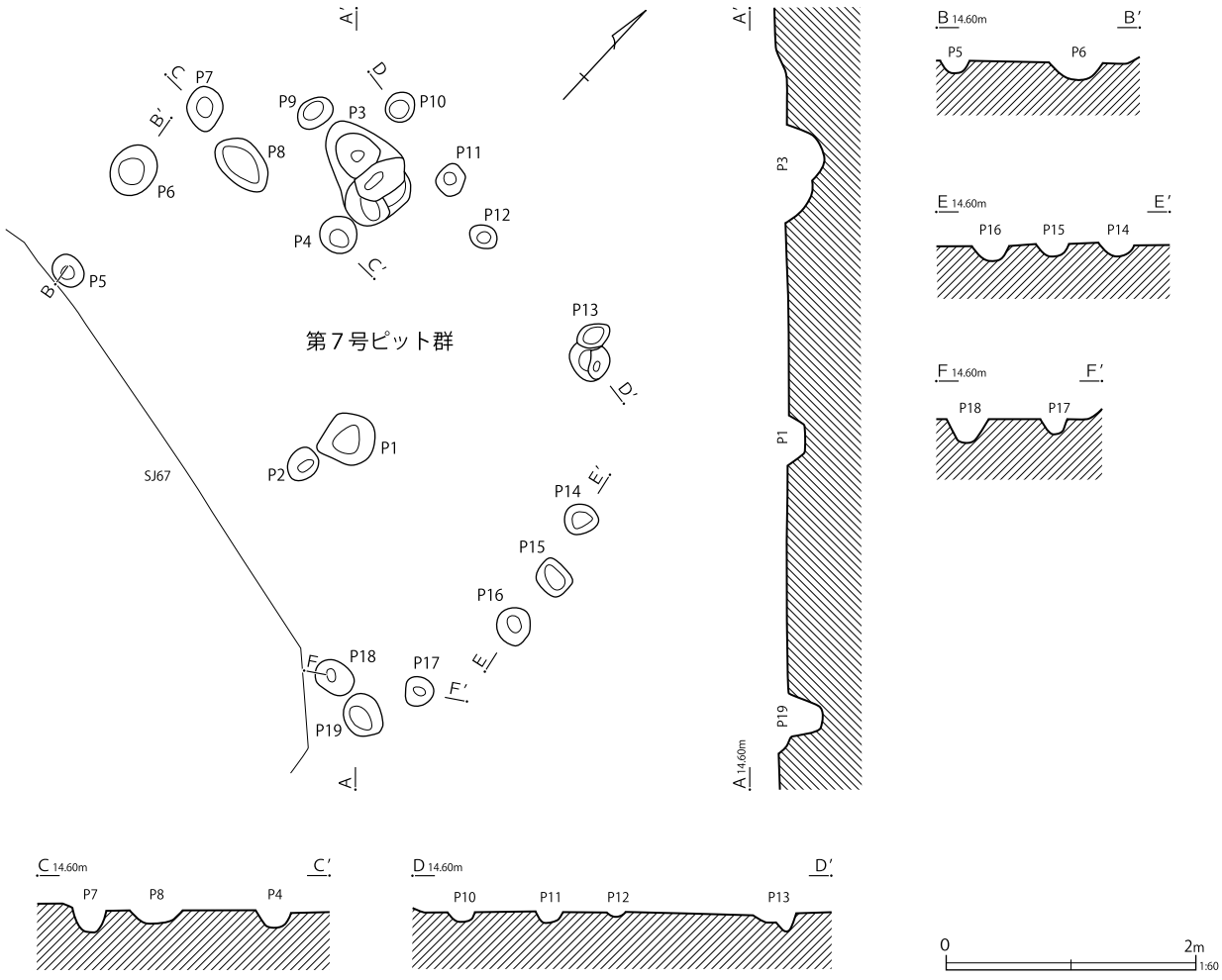
遺物は出土しなかった。

本ピット群は、柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

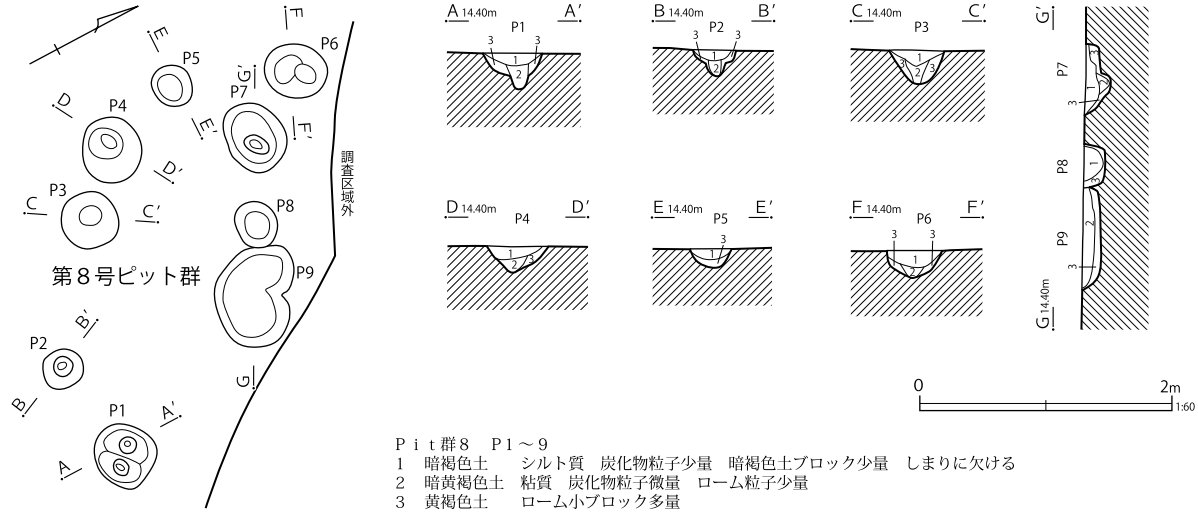
第９号ピット群（第 57 図）

Ｃ区中央、Ｋ－ 13・14 グリッドに位置する。ピットの総数は 35 基で、Ｐ 32 を中心に円形に二重に巡っている。やや直線的に見える部分もあり、その点を重視すれば多角形とすることもできよう。大略内側は径 4.5 ｍの範囲で分布する。外側は約 0.2 ｍほどの間隔を置いて全体に囲繞している。Ｐ 19・21 は張り出し部の可能性がある。

Ｐ１－２－ 32 － 20 のラインを主軸とすると、想定できる軸方位はＮ－ 37°－Ｅである。個々のピットの規模､深さについては第４表に示した。

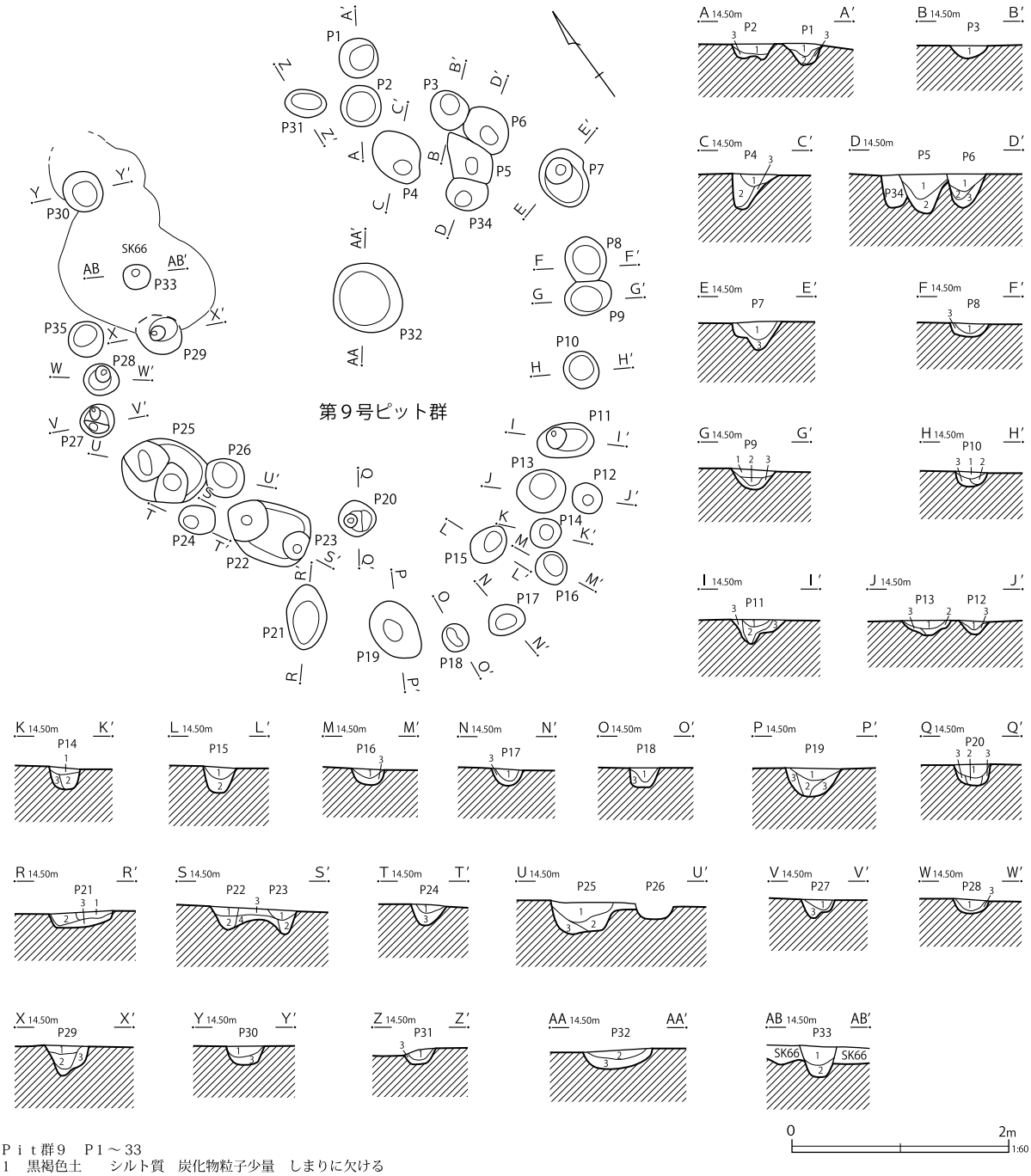


第55図　第７号ピット群



Ｐｉｔ群８　Ｐ１～９
1　暗褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量　暗褐色土ブロック少量　しまりに欠ける
2　暗黄褐色土　粘質　炭化物粒子微量　ローム粒子少量
3　黄褐色土　　ローム小ブロック多量

第56図　第８号ピット群



Ｐｉｔ群９　Ｐ１～33
1　黒褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量　しまりに欠ける
2　暗褐色土　　粘質　暗褐色土小ブロック少量　ややしまりに欠ける
3　暗黄褐色土　粘質　ローム小ブロック多量
4　黄褐色土　　粘質　ローム粒子多量

第57図　第９号ピット群

遺物は出土しなかった。

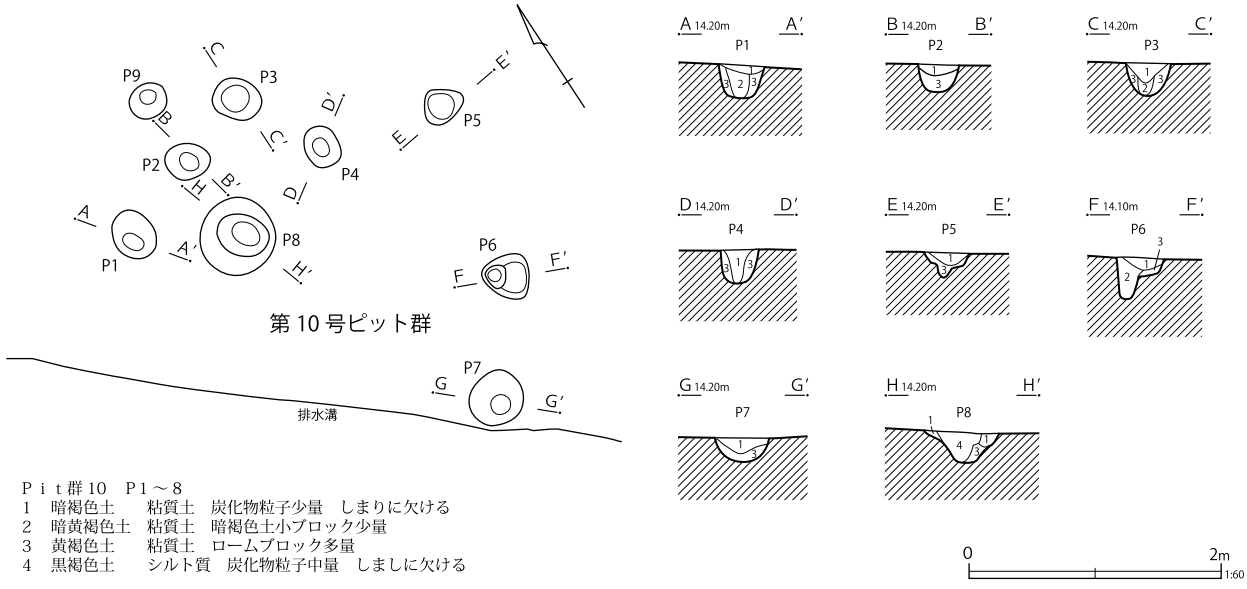
本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

第 10 号ピット群（第 58 図）

Ｃ区の東側、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。南北 4.0 ｍ、東西 3.2 ｍの範囲にピット９基が配置されている。東側は弧を描いており、全体配置の平面形は半円形である。配置から想定できる軸方位はＮ－ 71°－Ｅである。個々のピットの規模、深さについては第４表に示した。

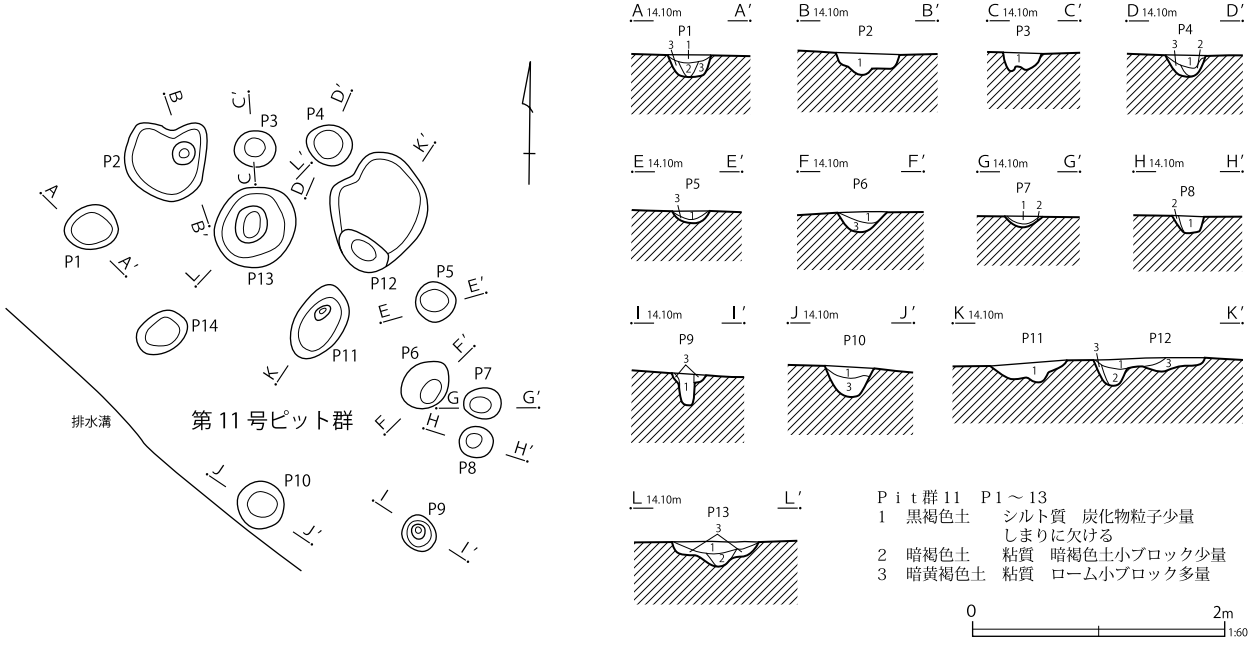
遺物は出土しなかった。

本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半か



Ｐｉｔ群 10　Ｐ1～8
1　暗褐色土　　粘質土　炭化物粒子少量　しまりに欠ける
2　暗黄褐色土　粘質土　暗褐色土小ブロック少量
3　黄褐色土　　粘質土　ロームブロック多量
4　黒褐色土　　シルト質　炭化物粒子中量　しましに欠ける

第58図　第10号ピット群



Ｐｉｔ群 11　Ｐ1～13
1　黒褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量
　　しまりに欠ける
2　暗褐色土　　粘質　暗褐色土小ブロック少量
3　暗黄褐色土　粘質　ローム小ブロック多量

第59図　第11号ピット群

ら後期に建てられたと判断した。

第 11 号ピット群（第 59 図）

C区の東側、L－14・15 グリッドに位置する。北西－南東方向 4.0 m、北東－南西方向 3.0 mの範囲にピット 14 基が配置されている。全体配置の平面形は南西側の排水溝側に開く半円形である。配置から想定できる軸方位はN－41°－Eである。個々のピットの規模、深さについては第4表に示した。

遺物は出土しなかった。

本ピット群は柱穴配置から縄文時代中期後半から後期に建てられたと判断した。

（3）土　壙

縄文時代の遺構検出面からは、土壙39基が検出された。その内遺物が出土しているのは第56・57・60号土壙のみである。

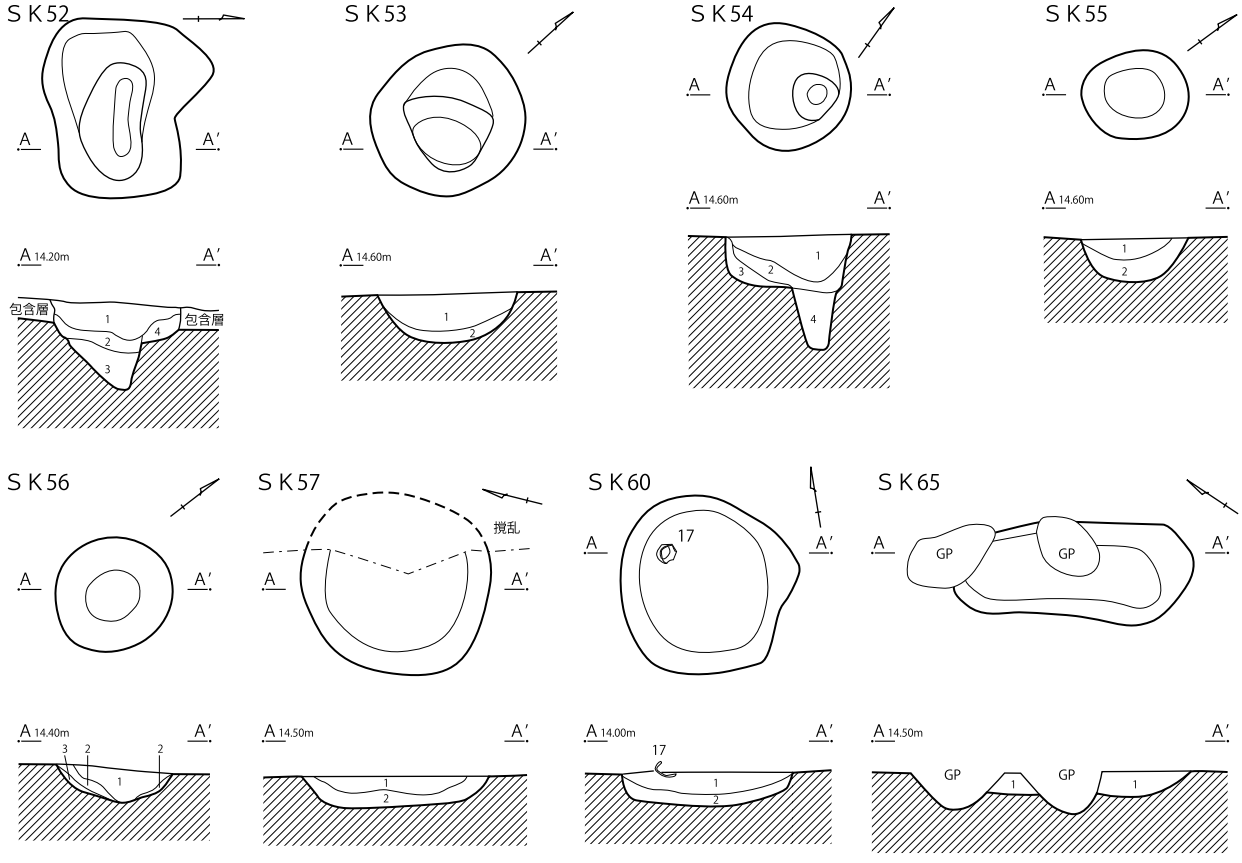
検出位置、規模、長軸方向、重複関係については第５表に示した。

第５表　１次縄文土壙一覧表(第60～62図)

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
52号土壙	縄文	G－9･10	－	N－89°－E	1.43	0.85	0.68	不整形	不整形		B区
53号土壙	縄文	I・J－12	－	－	1.10	1.10	0.04	鍋底型	円形		C区
54号土壙	縄文	J－12	－	－	1.00	1.00	0.40	箱形	円形		C区　Pitあり
55号土壙	縄文	J－12	－	N－38°－E	0.85	0.70	0.33	鍋底型	楕円形		C区
56号土壙	縄文	I－11	－	－	0.90	0.90	0.27	鍋底型	円形	中･後期土器	B区
57号土壙	縄文	I－11	－	－	1.50	(0.80)	0.25	皿形	円形	中期土器　石器	B区
60号土壙	縄文	G－10	－	N－S	1.40	1.40	0.25	皿形	円形	土器底部	B区
65号土壙	縄文	K-13	－	N－36°－W	1.90	0.80	0.20	皿形	不整形		B区
66号土壙	縄文	K-13	－	N－7°－E	(1.95)	1.10	0.15	皿形	不整形		B区
67号土壙	縄文	H-10	－	－	0.90	0.80	0.05	皿形	円形		B区
68号土壙	縄文	G･H-10	－	－	0.70	0.70	0.15	皿形	円形		B区　Pitあり
69号土壙	縄文	H-10	－	N－83°－W	0.80	(0.60)	0.10	箱形	不明		B区
70号土壙	縄文	H-10	－	N－50°－W	1.00	0.75	0.10	皿形	不明		B区
71号土壙	縄文	J-13･14	－	N－25°－W	1.50	0.95	0.15	皿形	不整形		B区
72号土壙	縄文	J-13･14	－	N－53°－W	0.80	(0.60)	0.10	皿形	不整形		B区
73号土壙	縄文	J-13	－	－	1.00	0.60	0.30	不明	不整形		B区
74号土壙	縄文	J-13	－	－	1.10	1.10	0.15	皿形	円形		B区
75号土壙	縄文	J-13	－	－	0.90	0.90	0..20	不明	円形		B区　Pitあり
76号土壙	縄文	J-13	－	－	1.00	0.90	0.15	皿形	円形		B区
77号土壙	縄文	J-14	－	N－52°－E	0.80	0.50	0.20	逆台形	楕円形		B区　Pitあり
78号土壙	縄文	K-14･15	－	N－80°－W	1.05	0.80	0.07	皿形	不整形		C区　Pitあり
79号土壙	縄文	K･L-14	－	N－43°－W	1.40	1.00	0.15	皿形	双円形		C区
80号土壙	縄文	L-14	－	－	0.75	0.75	0.20	箱形	円形		C区
81号土壙	縄文	L-14	－	N－10°－E	1.00	(0.80)	0.15	皿形	不明		B区
82号土壙	縄文	K-15	－	－	0.75	0.75	0.20	不明	円形		C区
83号土壙	縄文	K-15	－	N－50°－W	0.90	0.70	0.15	皿形	楕円形		C区
84号土壙	縄文	K･L-15	－	－	1.00	1.00	0.10	皿形	円形		C区　Pitあり
85号土壙	縄文	L-15	－	N－2°－E	0.80	0.65	0.13	皿形	楕円形		C区
86号土壙	縄文	L-15	－	－	0.95	0.85	0.07	皿形	円形		C区　Pitあり
87号土壙	縄文	L-15	－	N－65°－E	0.90	(0.70)	0.10	皿形	不明		C区
88号土壙	縄文	L-15	－	N－50°－E	1.10	0.90	0.15	皿形	楕円形		C区
89号土壙	縄文	L-15	－	－	0.85	0.80	0.23	逆台形	円形		C区
90号土壙	縄文	L-15	－	N－89°－W	1.15	0.80	0.05	皿形	楕円形		C区
91号土壙	縄文	L-15	－	N－89°－W	1.00	0.65	0.10	皿形	不整形		C区　Pitあり
92号土壙	縄文	L-15	－	N－36°－W	1.45	1.05	0.10	皿形	楕円形		C区
93号土壙	縄文	L-15･16	－	N－5°－E	0.90	0.83	0.05	皿形	円形		C区　Pitあり
94号土壙	縄文	L-15･16	－	N－48°－W	1.50	1.20	0.10	皿形	不整形		C区　Pitあり
95号土壙	縄文	L-16	－	N－6°－W	1.27	(0.80)	0.07	皿形	不明		C区
96号土壙	縄文	M-16	－	－	0.75	0.75	0.06	皿形	円形		C区

調査区全体から検出しているが、B区西側のG・H－10・11グリッド、B・C区境のI・J－12グリッド、C区中央のJ・K－13グリッド、C区西端のK・L－14・15グリッドの四箇所に大きく集中する。

平面形は円形もしくは楕円形である。南北方向が長軸となるものが多い。規模は長軸0.70～1.20ｍ、深さ0.20～0.30ｍのものが大部分で



SK52
1　暗褐色土　ソフトローム少量混入　粘性なくサラサラ
2　暗褐色土　ソフトローム・ロームブロックが多く混入　しまりあり　1層に比して明るい
3　明褐色土　ソフトローム・ロームブロックが多く混入　よくしまっている　2層に比して明るい
4　暗黄褐色土　ソフトローム・ロームブロックの混土

SK53
1　明黄褐色土　ロームブロック・ソフトロームが密に混じる　よくしまっている
2　明黄褐色土　ロームブロック・ソフトロームが密に混じる　1層に比して暗い

SK54
1　明黄褐色土　ソフトローム・大粒ロームブロックの混土　しまりあり
2　明黄褐色土　ソフトローム・大粒ロームブロックの混土　1層に比して暗い　しまり強い
3　暗黄褐色土　ソフトローム・大粒ロームブロックが多く混入　しまり強い
4　暗黄褐色土　ソフトローム・大粒ロームブロックの混土　しまり強い

SK55
1　暗黄褐色土　大粒ロームブロック・ソフトロームが密に混じる　しまりあり
2　暗黄褐色土　大粒ロームブロック・ソフトロームが密に混じる　1層に比して暗い

SK56
1　暗褐色土　シルト質　焼土粒子少量　炭化物粒子含む　ややしまりなし
2　暗黄褐色土　粘質　炭化物粒子・ローム粒子少量含む
3　黄褐色土　粘質　ロームブロック多量含む

SK57
1　暗褐色土　シルト質　焼土粒子・炭化物粒子少量含む　しまりなし
2　暗黄褐色土　粘質　炭化物粒子・ロームブロック少量含む

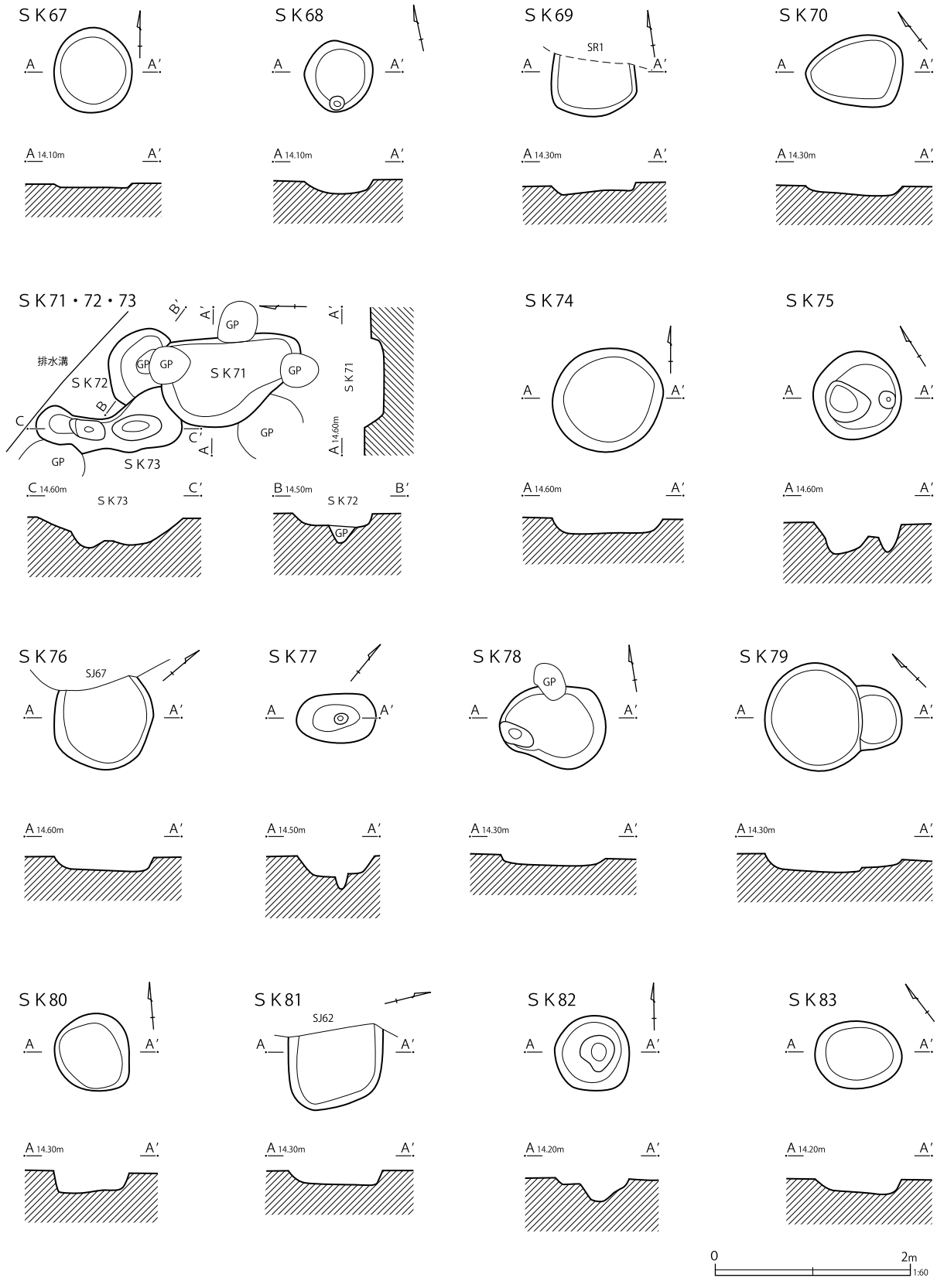
SK60
1　暗黄褐色土　シルト質　炭化物粒子少量　しまりなし
2　黄褐色土　粘質　ローム粒子多く含む

SK65
1　黄褐色土　粘質土　ロームブロック多く含む

SK66
1　暗黄褐色土　粘質　ローム小ブロック多く含む
2　黄褐色土　粘質　ローム粒子多く含む

0　2m　1:60

第60図　第52～57･60･65･66号土壙



第61図　第67 ～ 83号土壙

ある。覆土はロームを多く含む明褐色土、暗褐色土、もしくはロームを密に含む黄褐色土でしまりがある。

以下、特徴的なもの、遺物が出土しているものを中心に記す。

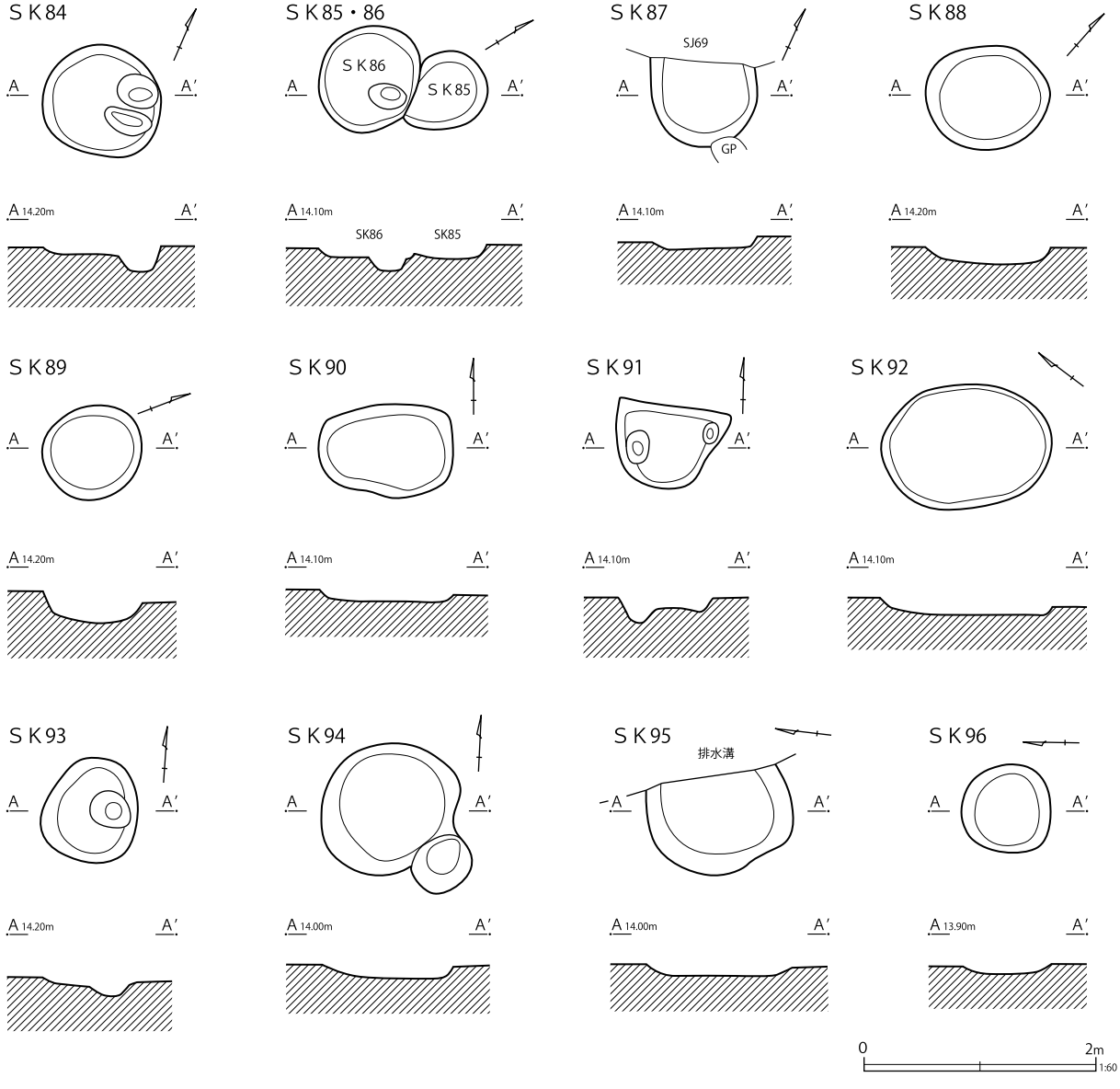
第 54 号土壙（第 60 図）

B・C区境のＪ－ 12 グリッドから検出された。径 1.0 m、深さは 0.40 mである。断面は箱形で、底面に径 0.35 m、深さ 0.40 mのピットが掘り込まれている。覆土はローム土によって構成された黄褐色土である。遺物は出土していない。

第 56 号土壙（第 60・63 図）

B区の中央、Ｉ－ 11 グリッドから検出された。径 0.90 mの円形で、深さは 0.27 mである。断面は鍋底形である。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む暗褐色土、暗黄褐色土で、自然堆積と考えられる。遺物は土器 34 点が第１層中から出土した。

第 63 図１・２の磨消懸垂文を持つ加曽利ＥⅢ式土器と、３～ 11 の堀之内Ⅰ式土器が出土した。堀之内式土器は縄文を持たず、沈線のみで文様が施文されるもので、３～６には称名寺式土器のモ



第62図　第84 ～ 96号土壙

チーフの系統が看取される。7は胴部が強く張る鉢形土器であろう。8～10は無文の胴下部、11は底部破片である。

第57号土壙（第60・63・64図）

B区のほぼ中央、Ⅰ－11グリッドから検出された。遺構の東側は調査区域外にかかる。検出範囲で、南北方向1.50 m、東西方向0.80 mの半円形で、深さは0.25 mである。断面は皿形である。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む暗褐色土、暗黄褐色土で、自然堆積と考えられる。遺物は覆土から土器13点、石器1点が出土した。

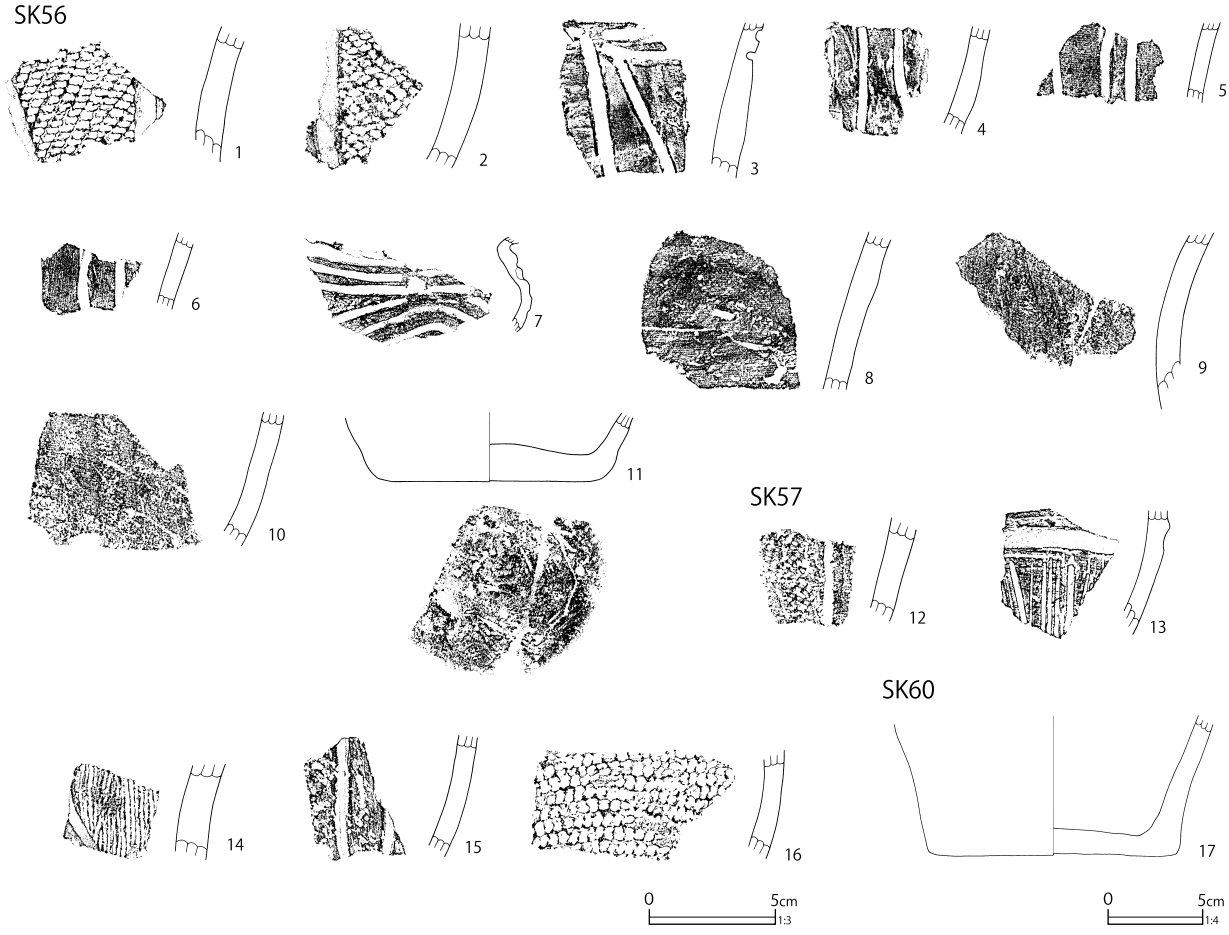
第63図12は磨消懸垂文を有する加曽利EⅢ式土器である。13は口縁下部から胴上部の破片で、口縁部文様帯の区画以下には櫛状工具による縦位の条線が施文されている。14は条線地文上に沈線文が施文されることから、連孤文系の土器であろう。15は磨消懸垂文の胴部破片である。16は縄文のみで中期後半の破片であろう。

第64図1はチャート製のスクレイパーである。厚手の剝片を素材として、縁辺が加工されて刃部としている。刃部の角度から掻器と考えられる。

第60号土壙（第60・63図）

B区西端のG－10グリッドから検出された。径1.40 m、深さは0.25 mである。断面は皿形である。覆土はローム土によって構成された黄褐色土である。最上層から深鉢の底部が出土した。

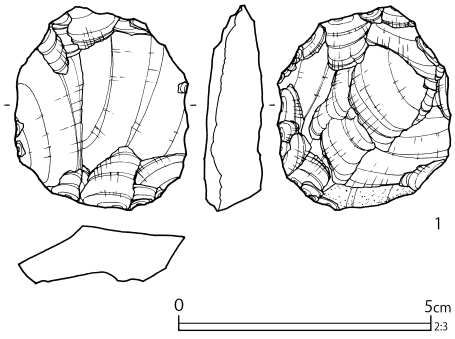
出土した遺物は、第63図17の底部破片のみである。



第63図　1次土壙出土縄文土器

第６表　第57号土壙出土石器観察表(第64図)

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	スクレイパー	チャート	4.1	3.4	1.1	17.5	SK57	219-14



第64図　第57号土壙出土石器

(4) ピット

第一次調査区からは、二面調査時に 124 基のピットが検出された。一面では検出できず、二面でのみ確認できたものを縄文時代に帰属すると考えた。B・C区のみに分布し、C区北西側のJ・K－13 グリッド、C区南東側のK～M－15、L・M－16 グリッドに集中する傾向が見られる。

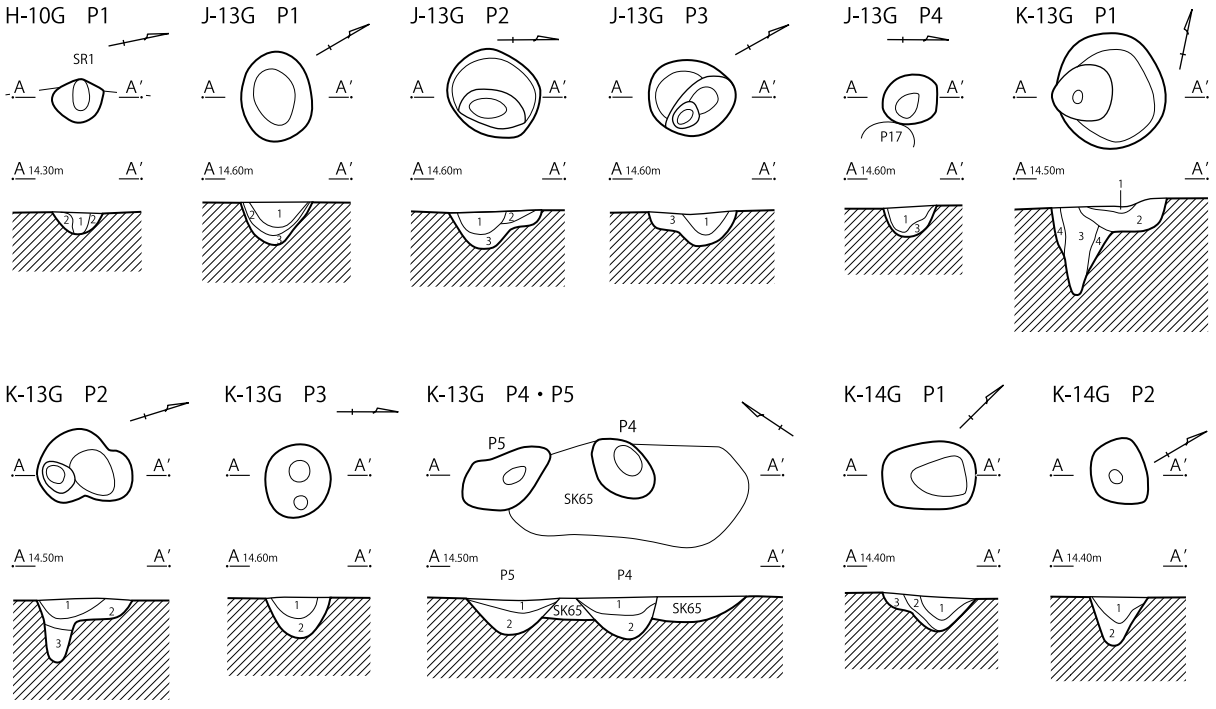
基本的な平面形は円形もしくは楕円形で、一部不整形である。規模は長径 0.22 ～ 0.95 m、短径

第７表　１次縄文ピット一覧表(第 65・66 図)

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
H－10	1	0.45	(0.35)	0.15	
	2	0.40	0.40	0.10	
	3	0.42	0.37	0.10	
	4	(0.45)	0.22	0.09	
	5	0.47	0.30	0.06	
	6	0.44	0.33	0.13	
	7	0.47	0.45	0.06	
H－11	1	(0.82)	－	(0.35)	
	2	0.22	0.21	0.11	
	3	0.50	0.45	0.08	
	4	0.27	0.27	0.05	
	5	0.28	0.27	0.07	
I－12	1	0.55	0.43	0.09	
	2	0.48	0.43	0.15	
J－12	1	0.42	0.37	0.13	
	2	(0.83)	0.30	0.19	
	3	0.42	0.40	0.11	
	4	0.37	0.25	0.13	
	5	0.30	0.29	0.09	
	6	0.24	0.20	0.10	
	7	0.40	(0.35)	0.18	
	8	0.27	0.25	0.10	
	9	0.64	0.52	0.21	
	10	0.20	0.17	0.12	
J－13	1	0.70	0.55	0.33	
	2	0.73	0.70	0.34	
	3	0.67	0.60	0.32	
	4	0.45	0.40	0.22	
	5	0.65	0.63	0.14	
	6	0.70	(0.55)	0.26	
	7	0.45	0.42	0.17	
	8	0.47	0.42	0.14	
	9	0.55	0.49	0.12	
	10	0.72	0.30	0.14	
	11	0.50	0.40	0.28	
	12	0.70	0.55	0.27	
	13	0.14	0.55	0.15	
	14	0.57	0.55	0.18	
	15	0.47	0.40	0.14	
	16	0.45	0.35	0.08	
	17	0.42	0.30	0.14	
J－14	1	0.42	0.38	0.26	

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
J－14	2	0.25	(0.15)	0.14	
	3	(0.45)	(0.40)	0.09	
	4	(0.40)	0.34	0.29	
	5	0.45	0.40	0.14	
K－13	1	0.95	0.90	0.81	
	2	0.73	0.58	0.51	
	3	0.58	0.53	0.31	
	4	0.60	0.40	0.33	
	5	0.80	0.42	0.29	
	6	0.45	0.40	0.17	
	7	0.90	0.33	0.12	
	8	0.60	0.27	0.09	
	9	0.65	0.38	0.19	
	10	0.82	0.30	0.21	
	11	0.75	0.51	0.33	
	12	0.75	0.50	0.29	
	13	0.60	0.47	0.25	
	14	0.63	0.47	0.16	
	15	0.60	0.40	0.12	
	16	0.42	0.30	0.22	
	17	0.32	0.24	0.16	
	18	0.28	0.25	0.08	
	19	0.31	0.30	0.11	
	20	0.90	0.55	0.19	
	21	0.66	0.63	0.25	
	22	0.55	0.40	0.15	
	23	0.40	0.40	0.24	
	24	0.65	(0.45)	0.26	
K－14	1	0.75	0.55	0.30	
	2	0.53	0.44	0.39	
	3	0.43	0.43	0.19	
	4	0.65	0.63	0.14	
	5	0.94	0.65	0.28	
	6	0.46	0.38	0.11	
	7	0.35	0.35	0.12	
	8	0.36	0.28	0.14	
	9	0.36	0.34	0.13	
	10	0.50	0.37	0.22	
K－15	1	0.38	0.30	0.43	
	2	0.53	0.43	0.52	
	3	0.40	0.28	0.16	

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
L－14	1	0.71	(0.32)	0.32	
	2	0.65	0.65	0.16	
	3	0.30	0.26	0.06	
	4	0.38	0.35	0.12	
	5	0.43	0.43	0.14	
	6	0.60	0.52	0.31	
	7	0.55	0.45	0.17	
L－15	1	0.75	0.42	0.10	
	2	0.72	0.60	0.06	
	3	0.38	0.26	0.15	
	4	0.50	0.50	0.12	
	5	0.50	0.50	0.08	
	6	0.60	0.55	0.09	
	7	0.31	0.30	0.31	
	8	0.65	0.50	0.14	
	9	0.63	0.42	0.19	
	10	0.23	0.19	0.26	
	11	0.65	0.37	0.18	
	12	0.22	0.20	0.17	
	13	0.58	0.53	0.09	
	14	0.65	0.58	0.12	
	15	0.70	0.52	0.14	
	16	0.66	0.60	0.14	
L－16	1	0.32	0.20	0.15	
	2	0.35	0.32	0.05	
	3	0.35	0.33	0.05	
	4	0.65	0.57	0.14	
	5	0.48	0.42	0.12	
M－15	1	0.44	0.35	0.08	
	2	0.46	0.28	0.07	
	3	0.60	0.52	0.19	
	4	0.43	0.40	0.09	
	5	0.60	0.36	0.13	
	6	0.40	0.38	0.07	
	7	0.82	0.53	0.14	
	8	0.80	0.35	0.16	
M－16	1	0.56	0.54	0.07	
	2	0.50	0.38	0.13	
	3	0.38	0.36	0.12	
	4	0.38	0.38	0.06	
	5	0.45	0.40	0.08	



H－10G　P１
1　暗褐色土　　ソフトローム少量　よくしまっている　粘性あり
2　暗黄褐色土　ソフトローム・ソフトブロック多量混入

J－13G　P１～４
1　黒褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量　しまりに欠ける
2　暗褐色土　　粘質　暗褐色土小ブロック少量
3　暗黄褐色土　粘質　ローム小ブロック多量

K－13G　P１
1　暗褐色土　　粘質土　炭化物粒子少量　しまりに欠ける
2　暗黄褐色土　粘質土　ローム小ブロック多量
3　暗黄褐色土　シルト質　炭化物粒子・暗褐色土小ブロック少量
4　黄褐色土　　粘質土　ローム小ブロック少量

K－13G　P2・4・5
1　黒褐色土　　粘質土　炭化物粒子中量　しまりに欠ける
2　暗黄褐色土　粘質土　暗褐色土小ブロック少量
3　黄褐色土　　粘質土　ロームブロック多量

K－13G　P３
1　黒褐色土　　粘質土　炭化物粒子中量　しまりに欠ける
2　黄褐色土　　粘質土　ロームブロック多量

K－14G　P1・2
1　黒褐色土　　シルト質　炭化物粒子少量　しまりに欠ける
2　暗褐色土　　粘質　暗褐色土小ブロック少量
3　暗黄褐色土　粘質　ロームブロック少量

0　2m
1:60

第65図　１次縄文ピット（１）

0.15 ～ 0.90 m、深さ 0.06 ～ 0.81 mで、様々である。径 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mのものが最も多い。

覆土はローム土、炭化物を含む暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土である。K－13 グリッドP１・２は、柱状に一段深く掘り窪められており、柱穴の可能性がある。遺物は出土していない。

（5）包含層

A区南端のF・G－7・8グリッドには、B区の埋没ローム台地の北側斜面に当たり、包含層が形成されている。

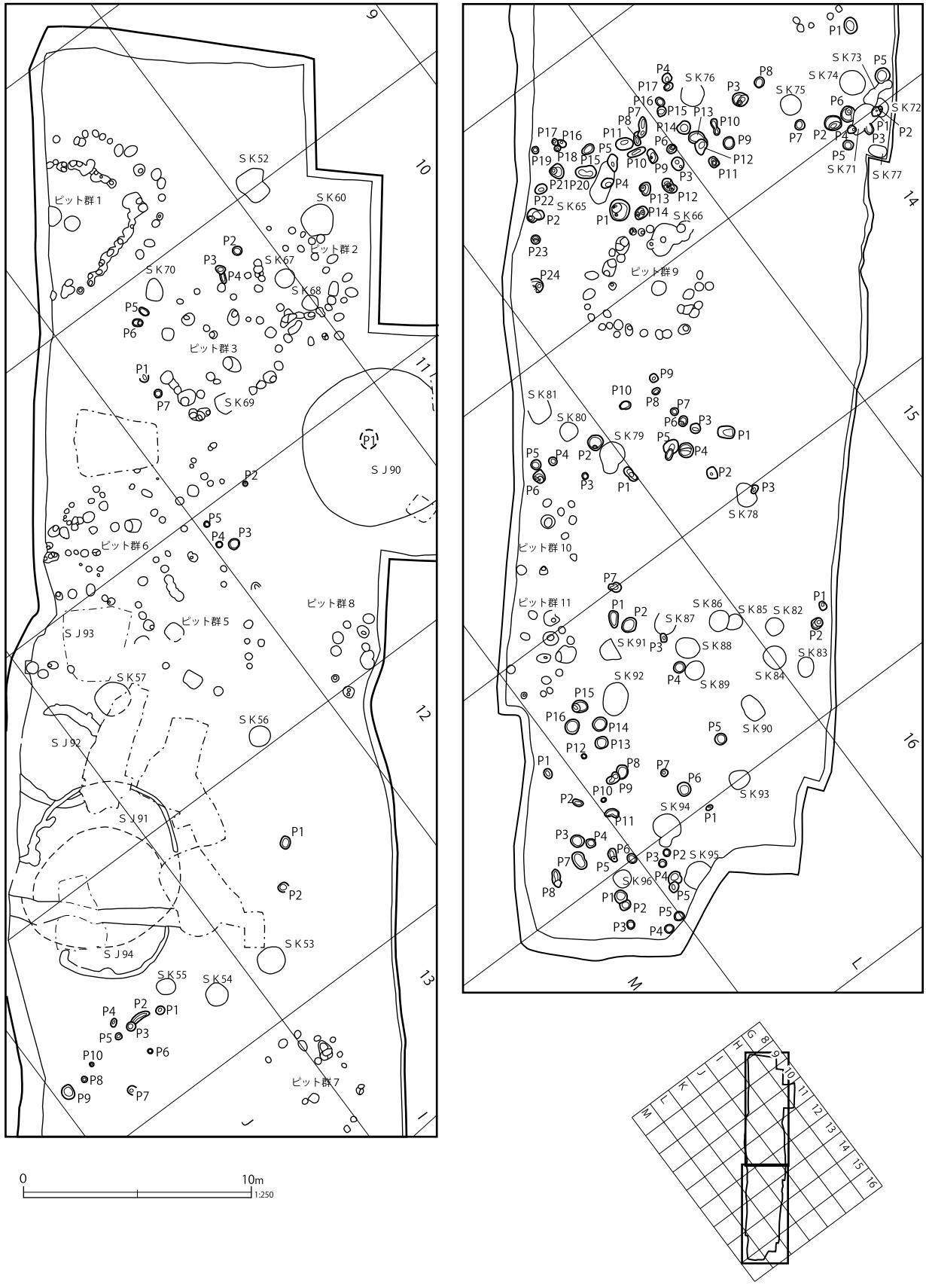
包含層からは、中期後半から後期前葉にかけての土器が出土した。ここでは、以下の分類に従って出土土器の概要について触れたい。

第Ⅰ群（第 68・69 図）

加曽利ＥⅢ式段階の土器群を本群とした。様相から以下のように分類される。

１類（第 68 図１～ 25、第 69 図 26 ～ 29）

磨消縄文をもつ加曽利ＥⅢ式土器を一括して本類とした。１～ 10 に口縁部を、11 以下に胴部破片を掲載した。１は隆帯で渦巻き文が描かれ、両側には長方形の区画文が配される土器である。２・３も同様の構成を持つ土器であろう。１～４、９、10 は平縁である。５～８は波状口縁で、５には口唇部に縄文が施文されている。他は口唇部



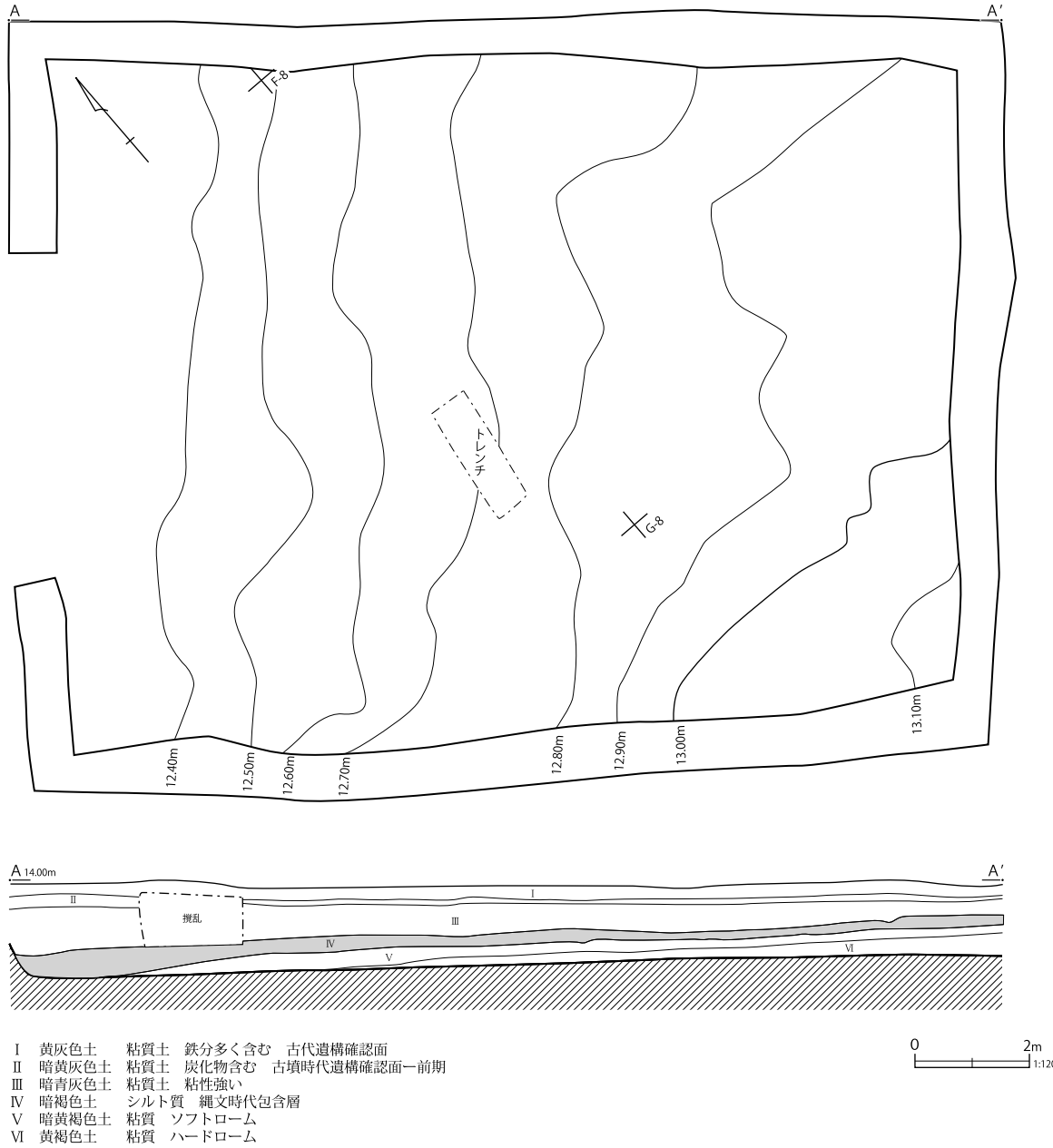
第66図　１次縄文ピット（２）

が素文である。７・８は口唇内面に屈曲部分が認められ、文様も沈線で描かれていることから、後出的な様相が窺える。10 は小破片だが、吉井城山類の可能性がある。

11 以下に胴部破片を一括した。いずれも磨消懸垂文を有する破片である。11・12 は口縁部から胴部にかかる破片で、口縁部文様体区画の隆帯が扁平化する傾向が窺える。19 は地文に縄文と櫛歯状工具による条線が施文されている。22 には沈線による蛇行懸垂文が施文されている。26 は逆U字状の文様が描かれている。

２類（第 69 図 30 ～ 33）

胴部一帯型の文様構成の土器を本類とした。30 は緩い波状口縁で、口唇無文部直下に刺突列



第67図　１次縄文包含層

が廻る。文様は逆U字状の沈線文で、沈線間の縄文が磨り消されている。33も同様の文様と推定される。31・32は口唇無文部が沈線で区画されている。

３類（第69図34）

連孤文系と考えられる土器を本類とした。34は口唇無文部直下に２列の円形刺突列が廻っている。

４類（第69図35～39）

口唇無文部以下に櫛歯状工具による条線が施文される土器を一括して本類とした。無文部の区画には35の隆帯と36の沈線のほか、区画線を持たない37がある。39は形状から鉢形土器と考えられる。

５類（第69図40・41）

曽利系土器を本類とした。同一個体の可能性があり、口頸部と胴部を区画する隆帯に接して、胴部を縦走する隆帯で構成される土器で、隆帯上に刺突が施される。文様は口頸部が斜行沈線、胴部が縦走する沈線である。

第Ⅱ群（第69図）

中期終末の土器を本群とした。

１類（第69図42・43）

42は口唇無文部と胴部が微隆起線によって区画されている。43は幅広い磨消懸垂文を持つ胴部破片であろう。

２類（第69図44）

瓢形と考えられる土器を本類とした。胴下部に相当し、横走する隆帯に施して、曲線的な隆帯が配されている。地文は持たない。

第Ⅲ群（第69図、第70図）

後期初頭の称名寺式土器を本群とした。

１類（45）

口唇無文部が微隆起線で区画され、沈線で文様が描かれた土器である。他と様相が異なることから、関沢類型の可能性がある。

２類（第69図46～54、第70図55～60）

Ｊ字文を基本にスペード文などが描かれた土器で、磨り消し縄文を有する土器群である。51・52・55は同一個体の可能性がある。55は文様の下端が解放されており、新しい様相を示している。

３類（第70図61～67）

文様間の縄文に代わって列点が施された土器を本類とした。列点には縦長のものや円形のもの窓がある。

４類（第70図68～74）

称名寺式終末と考えられる土器を本類とした。68は大型の突起で、内面に円形刺突を挟んだ孤状の沈線が対に描かれている。69は突起外面に刺突と孤状の沈線が施されており、内面にも沈線が認められる。

70～74は沈線で文様が描かれ、沈線間に充填要素を持たない土器である。文様も簡素化された傾向が窺える。

第Ⅳ群（第70～第73図）

後期前葉の堀之内Ⅰ式土器を本群とした。

１類（第70図75～78、第71図84・85）

縄文地文上に単沈線で文様が描かれた土器や、それに類すると思われる土器を本類とした。いずれも口唇直下に沈線が廻り、75・76は胴部一帯、77は胴部が区画されている。84には蛇行懸垂文が、85には端部が屈曲する沈線文が描かれている。

２類（第71図79～83、86～108）

縄文地上に比較的密な沈線文が描かれた土器を本類とした。文様にはバラエティーが認められ、79のような縦方向の沈線文や、80のような孤状の密な沈線文が描かれる土器があるが、胴下部の沈線が垂下する破片では、文様の詳細を把握しかねる。文様構成には、97のように胴下部が区画される土器や、99のように縦走する隆帯で器面が区画された土器も存在する。

３類（第71図109～113、第72図114）

地文のみの粗製土器を一括して本類とした。

４類（第 72 図 115～125、127～131、133～138）

地文をもたず、沈線のみで文様が描かれる土器を本類とした。115・116 は緩い波状口縁で、波頂部直下の貫通孔を境に沈線が廻っている。115 は円形刺突間に孤状の沈線が廻り、第Ⅲ群３類との連続性が窺える。117 ～ 123 は口唇直下に円形刺突が廻り、胴部に沈線文が描かれている。124 は横長の刺突が施されている。125 は円形刺突に接して垂下する平行沈線で器面が縦区画される土器で、２類 99 に類似した構成と考えられる。127 ～ 130、134 は口唇直下に沈線が廻る土器である。文様の詳細は定かではないが、135 のように縦区画間に斜行沈線文が描かれた土器や、137 の単沈線で簡素な文様が施されたものや、138 の格子目文が施されたものなどのバリエーションが存在する。131 は口唇上に沈線が施されている。

５類（第 72 図 126・132）

注口土器を本類とした。いずれも胴上部から口唇部の破片で、132 は注口土器に付される把手部分で、端部が渦巻き状で蛇行する隆帯が貼付されている。

６類（第 72 図 139）

密な沈線で文様が描かれた土器を本類とした。縦区画間に斜行する沈線文が施されたものと推定される。

７類（第 72 図 140 ～ 146）

櫛歯状工具による文様が施された土器を本類とした。140 は器面を廻る沈線で無文部と胴部が区画されている。141・142 は条線で区画されている。胴部文様の詳細は不明瞭だが、大きく蛇行し垂下する条線文が施されるようである。

８類（第 73 図 147 ～ 154）

無文の土器を一括して本類とした。深鉢形土器のほか、153 の浅鉢形土器も認められる。152 は口唇内面に沈線が施されることから、或いは第Ⅴ群に伴う可能性もある。

第Ⅴ群（第 73 図、第 74 図）

堀之内Ⅱ式土器を本群とした。

１類（第 73 図 155 ～ 183、第 74 図 184 ～ 212）

底部から直線的ないしはやや外反気味に開く深鉢形で、胴部に三角・菱形状の文様が描かれた土器を一括して本類とした。多くは口唇無文部の区画はないが、182・183 のように口唇直下に刻みが施された微隆起線を有するものもある。文様は平行沈線で描かれ、文様間には縄文が充填される。空白部が素文のものや、密な沈線で充填されたものもある。

２類（第 74 図 213 ～ 215）

注口土器を本類とした。屈曲した算盤玉状の胴部を持ち、胴下部は無文である。鋸歯状の文様が施され、接点は渦巻き状に表現されている。

３類（第 74 図 216・217）

底部を一括した。216 は形状から第Ⅴ群１類の底部と推定される。217 はやや古い様相が窺え、第Ⅳ群に該当する可能性もある。

グリッド出土石器（第 75 図１～ 14）

１は、チャート製の石鏃である。無茎で基部がわずかに抉られている。薄手の剝片を素材として１次剥離面を残して加工されている。

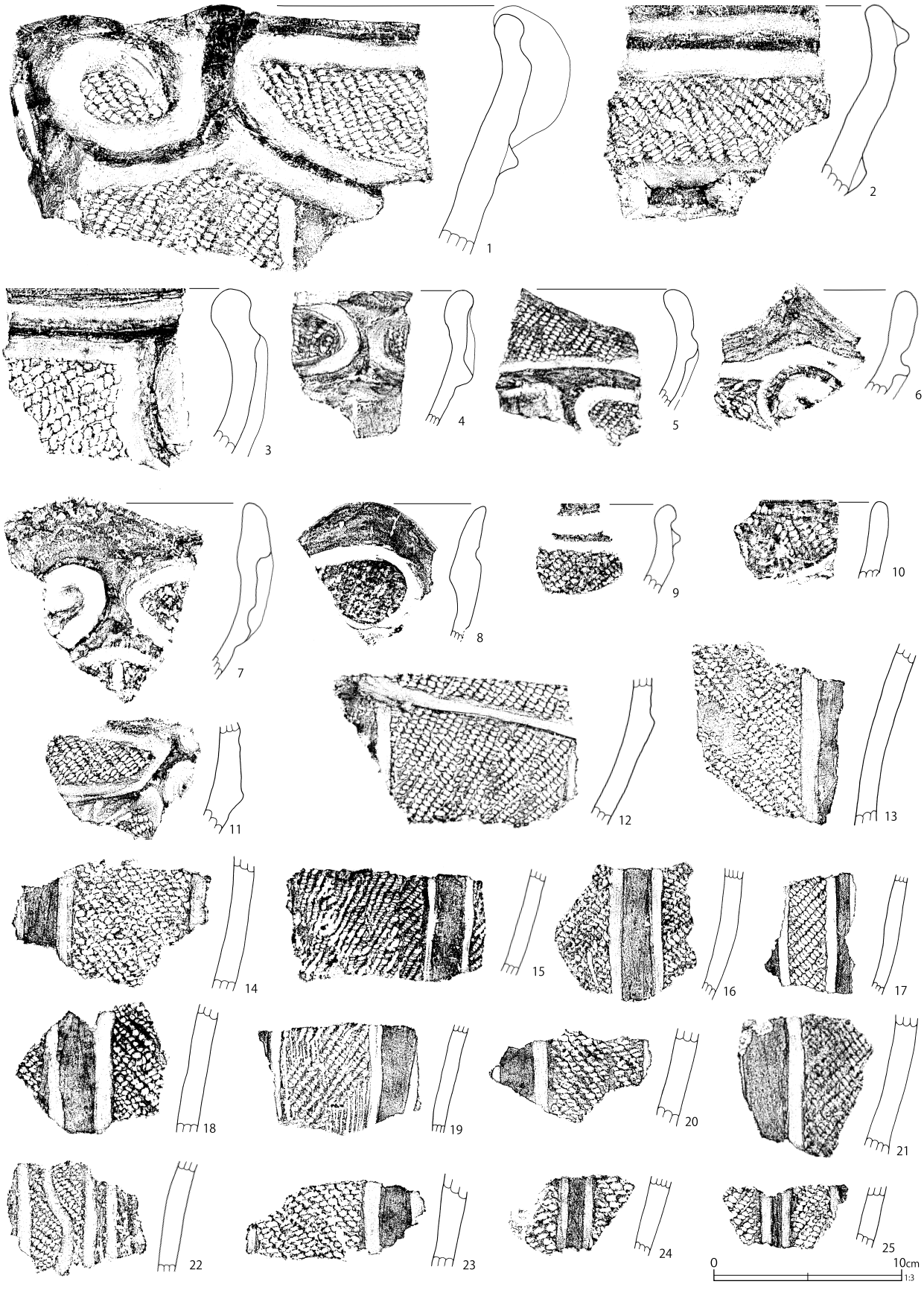
２は、黒曜石の小型の剝片である。

３は黒曜石製の小型の剝片である。背面は礫面で覆われている。

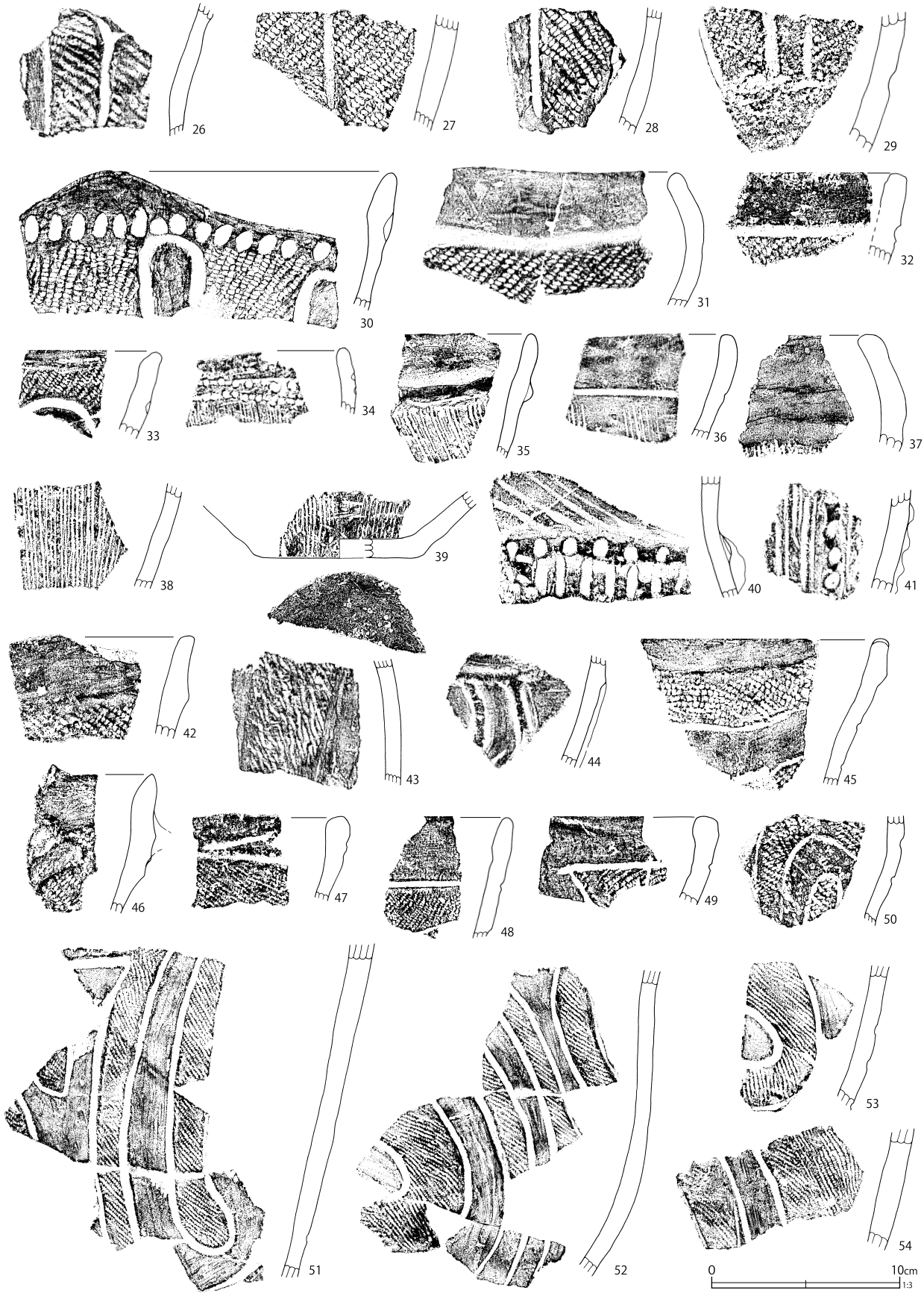
４は黒曜石製の石核である。原礫面が残された拳大の礫を素材とする。平坦面を打面とし、数度剥離されている。最終作業面から石核側に湾曲した剝片が剥離していることがわかる。下端部に微細剥離痕が見られ、スクレイパーとしても再利用された可能性もある。

５は、黒曜石製の剝片である。表面は礫面で覆われ、その形状から原礫は板状剥片と考えられる。

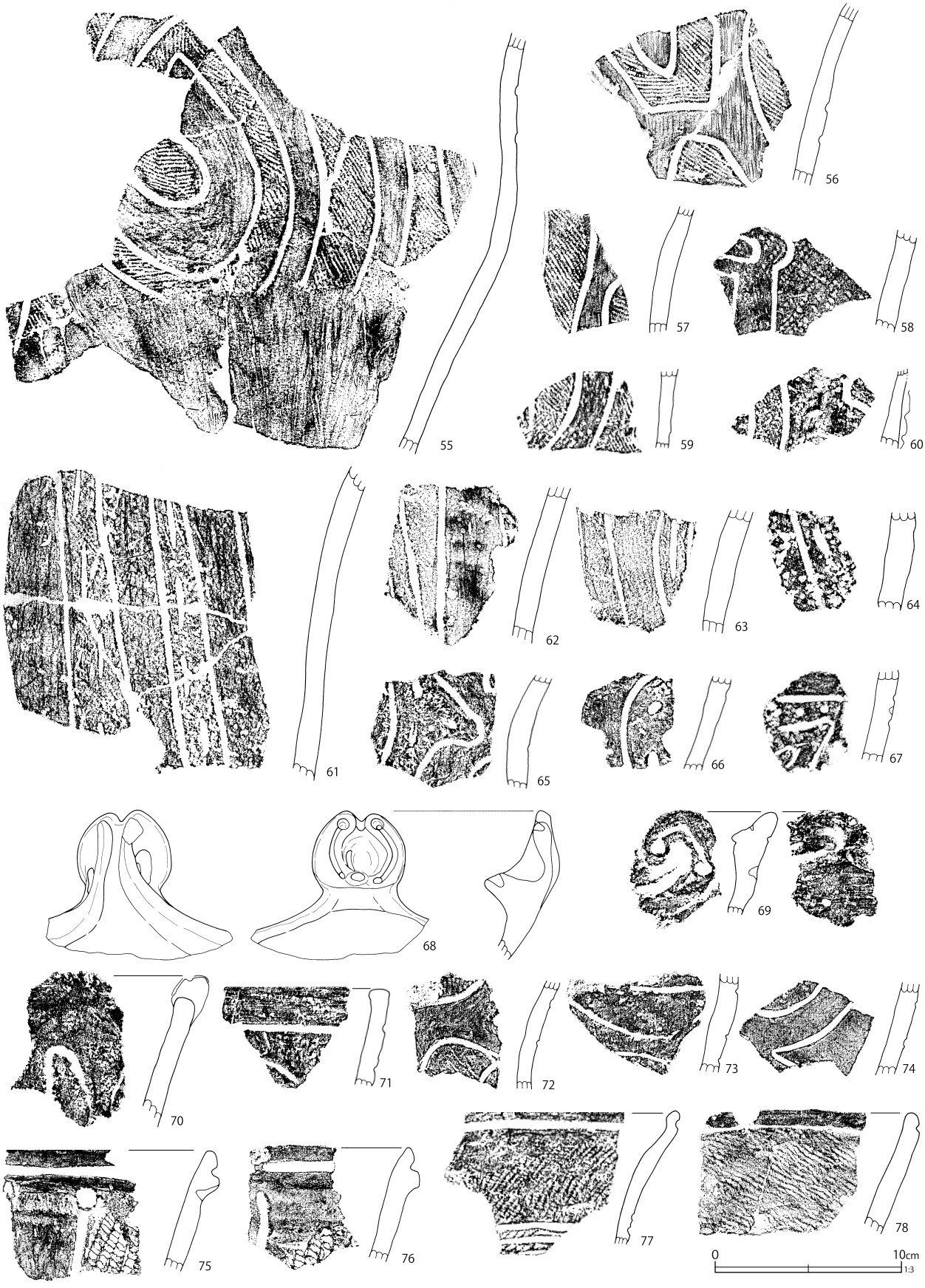
６は、黒曜石製の石核である。裏面側の作業面が細長く平行した稜線が複数見られるため細石刃核の可能性もあった。最終作業面はその反対側で



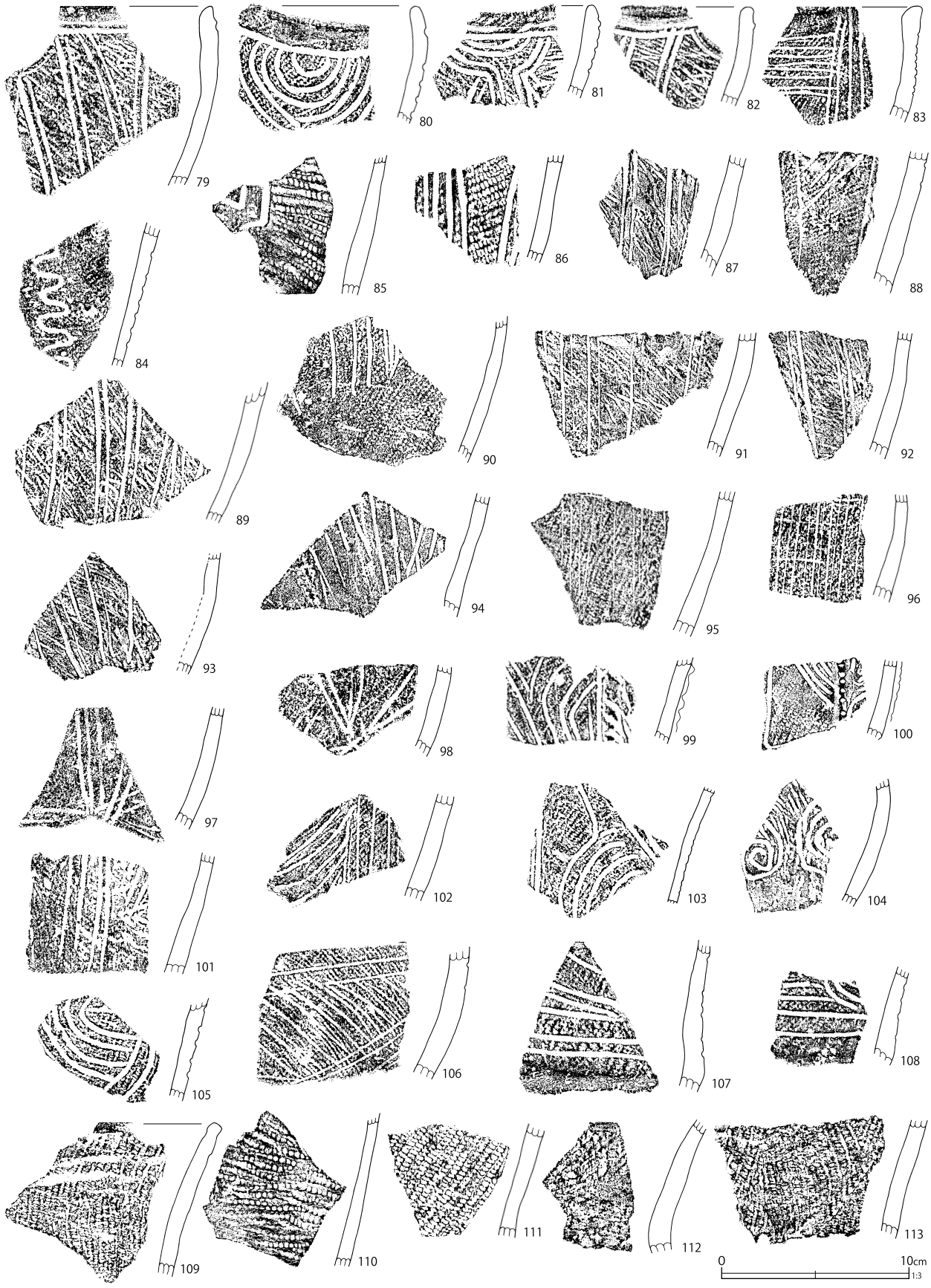
第68図　１次グリッド出土縄文土器（1）



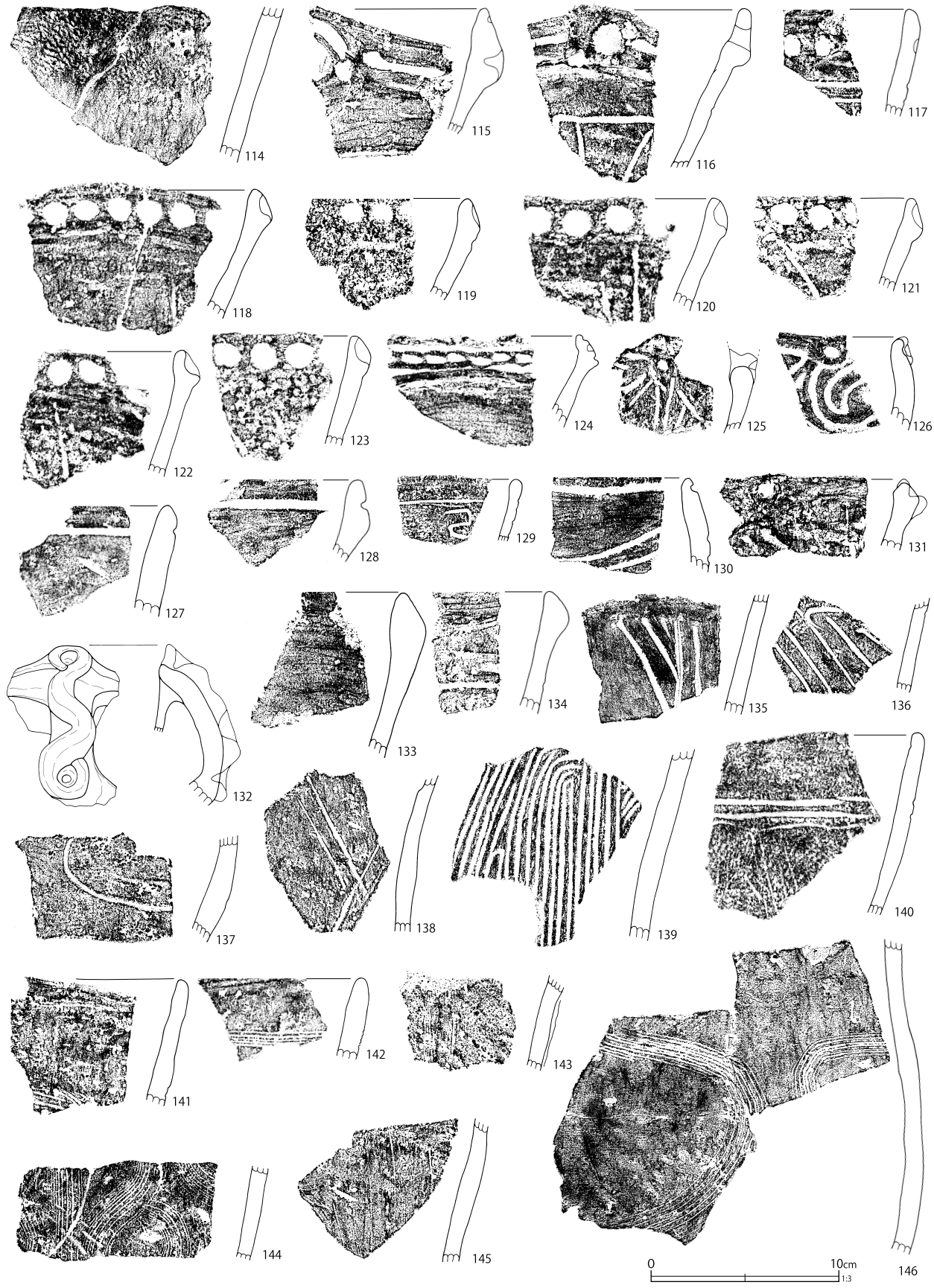
第69図　１次グリッド出土縄文土器（２）



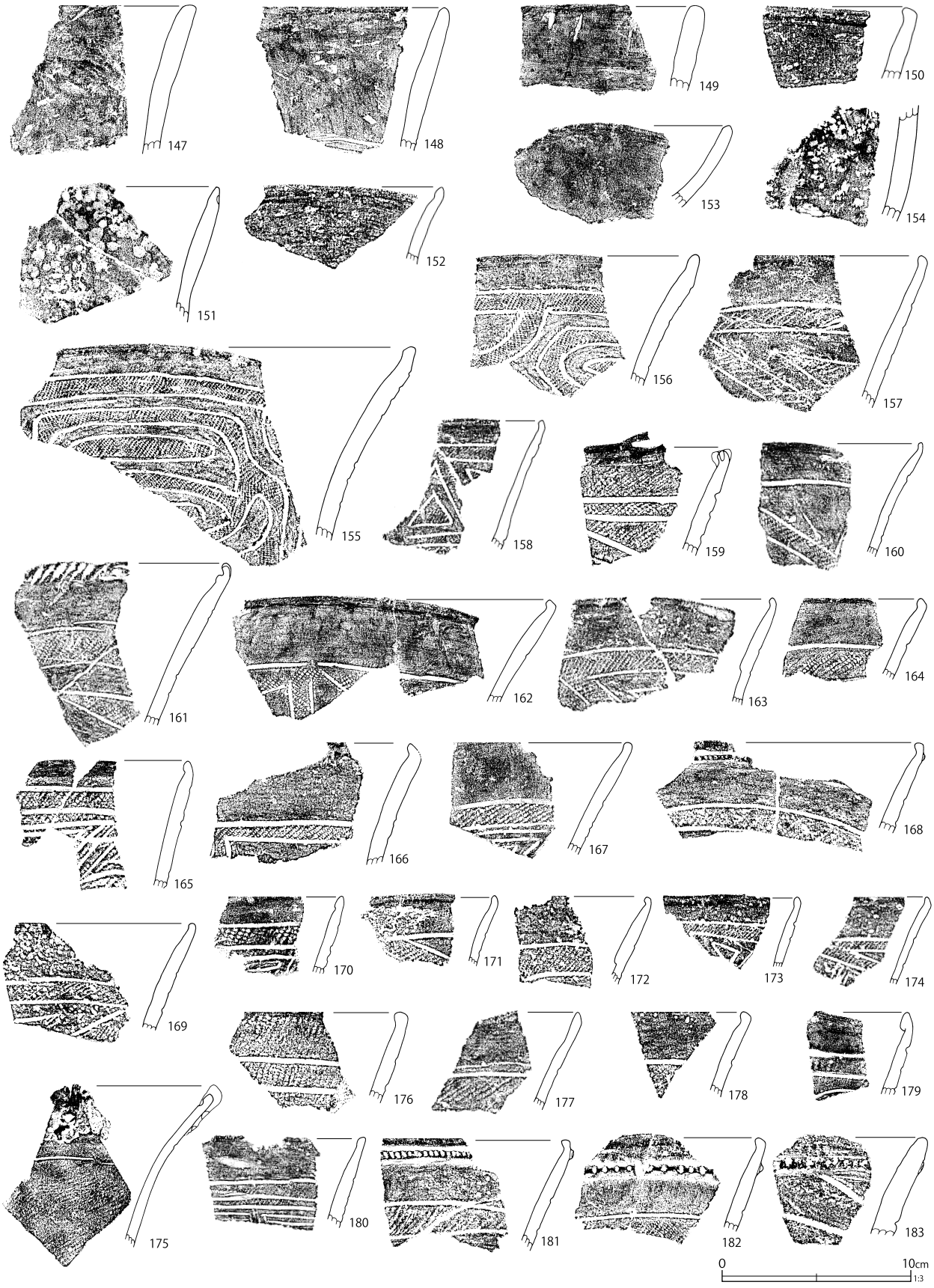
第70図　１次グリッド出土縄文土器（３）



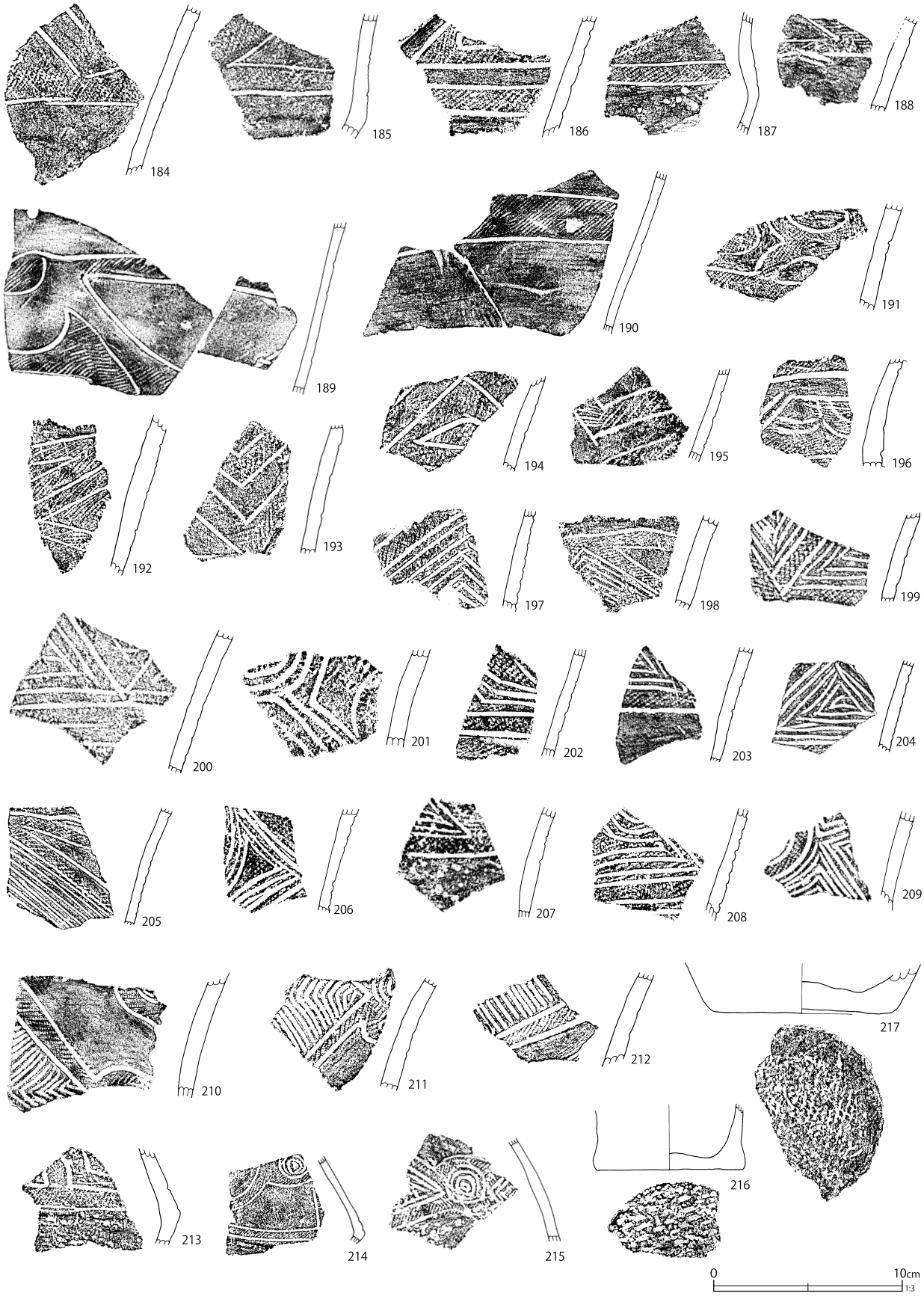
第71図　１次グリッド出土縄文土器（４）



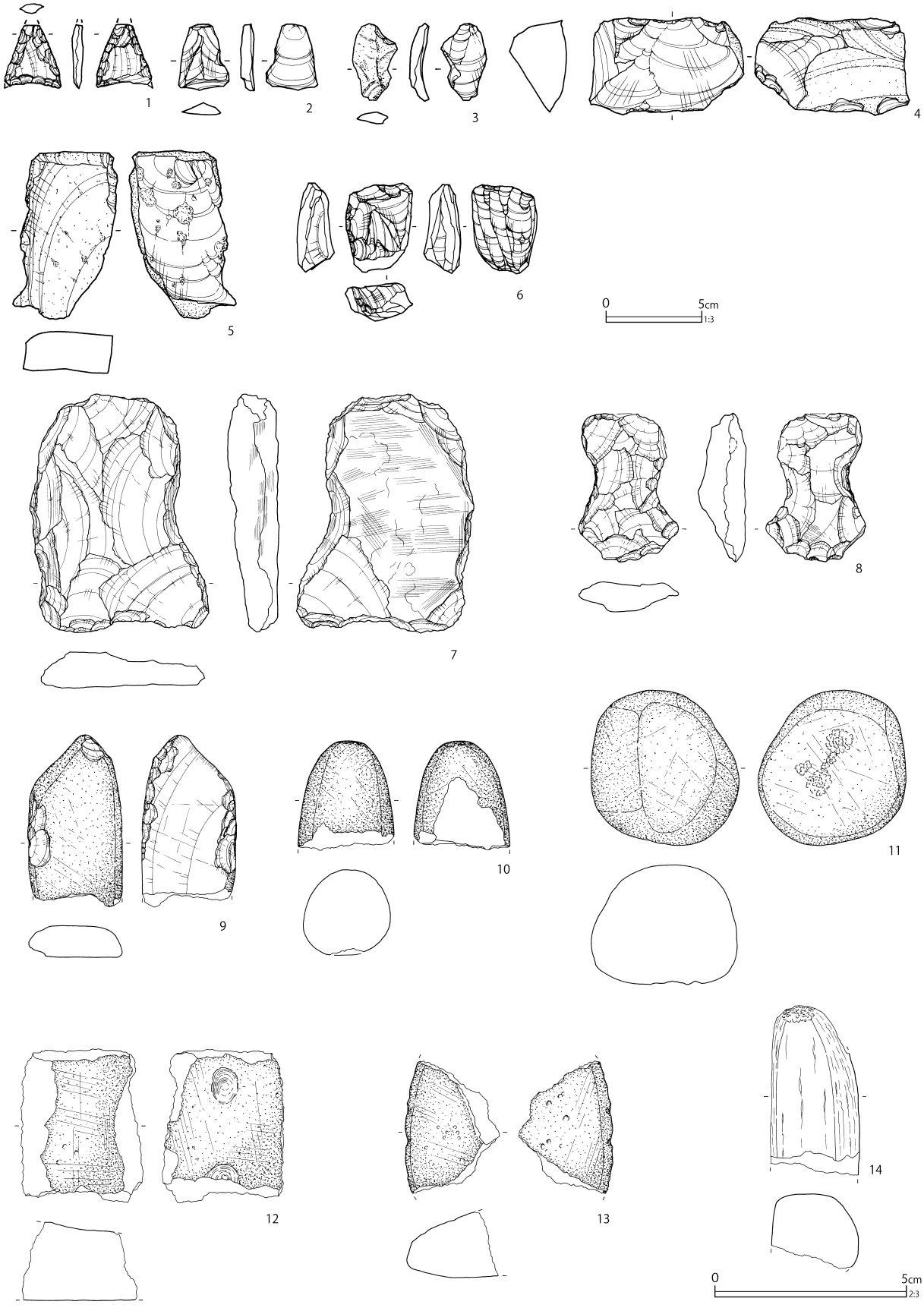
第72図　１次グリッド出土縄文土器（５）



第73図　１次グリッド出土縄文土器（６）



第74図　１次グリッド出土縄文土器（７）



第75図　１次グリッド出土縄文石器

第８表　グリッド出土縄文石器観察表（第75図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	石鏃	チャート	[1.6]	[1.4]	0.3	0.6	SJ７　№１	219-15
2	剝片	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.7	SJ67	219-16
3	剝片	黒曜石	2.0	1.2	0.5	0.7	SJ67	219-17
4	石核	黒曜石	2.5	4.0	1.8	16.2	SJ67	219-18
5	剝片	黒曜石	4.4	2.8	1.8	16.2	SK28　№１	219-19
6	石核	黒曜石	2.3	1.7	1.0	3.6	K-14	219-20
7	打製石斧	緑泥片岩	12.4	9.4	2.7	393.3	SE９	220-1
8	打製石斧	頁岩	7.9	5.2	2.5	89.2	J-12	220-1
9	礫器	頁岩	[9.1]	4.9	1.7	118.0	G-９⑲	220-1
10	敲石	安山岩	[5.8]	[5.0]	4.8	171.6	F-８①	219-22
11	磨石	安山岩	8.2	7.7	6.3	550.4	SJ43　№106	219-22
12	石皿	安山岩	[8.1]	[6.3]	[4.3]	322.3	F-８○24	219-22
13	磨石	安山岩	[6.9]	[4.9]	[3.5]	129.8	G-７⑨	219-22
14	敲石	片岩	[9.0]	4.6	[4.2]	217.8	F-８⑧	220-1

複数の方向から、数度剥離されて廃棄されている。こちらの稜線は並行しないことから、細石刃核とは判断できず、石核と判断した。

７は、緑泥片岩製の打製石斧である。石皿片が再利用され、平面形状は分銅形である。装着部と刃部が部分的に使用によって摩耗している。

８は、頁岩製の打製石斧である。平面形は分銅形である。抉り部は敲打で潰されている。使用痕は装着部に部分的に見られる。

９は、頁岩製の礫器である。分割礫を素材とし、縁辺が部分的に加工されて、刃部とされている。刃部は使用によって部分的に摩耗している。下半部を欠失する。

10 は、安山岩製の敲石である。上端部が敲打により潰れている。平坦面が使用により摩耗している。下半部を欠損する。

11 は、安山岩製の磨石である。自然礫がそのまま利用されている。平坦面は中央部が敲打で凹み、磨面は平滑になるまでに摩耗している。

12 は、安山岩製の石皿である。大部分が欠失し、元の形状は判らなかった。裏面に漏斗状の凹穴が見られる。

13 は、安山岩製の磨石である。大部分が欠失し、一部のみが残存する。平坦面は使用により摩耗している。

14 は、片岩製の敲石である。上端部が敲打で潰れている。上端部のみが残存する。

２．弥生時代

弥生時代の遺構は、A区から緩やかにのぼりC区に向かって緩やかに下る地形の最も標高の高いB区から、弥生時代中期の住居跡１軒、方形周溝墓１基、土壙８基が検出された。遺物の出土はC区にわずかに分布するものの、ほぼ重なっていた。

（１）住居跡

第 40 号住居跡（第 76 図）

B区のやや西側、G・H－９・10 グリッドに位置する。古墳時代後期の第 29 号住居跡がはめ込まれたように重複している。

平面形は隅丸方形である。床面のほぼ中央に炉跡が設けられている。長軸の軸方向はN－ 50°－Eである。規模は長軸方向 5.70 m、直交軸方向 4.30 mである。深さは 0.40 mである。覆土はロームを多量に含む暗褐色土で、自然堆積である。第１層には、テフラの可能性のある白色粒子が認められた。床面はほぼ平坦である。貼床、掘り方等は認められなかった。

床面からは地床炉、柱穴を検出した。炉跡は不整円形で径 0.60 m、深さ 0.10 mで、覆土は焼土を混じる褐色土であった。

当初東側の土壙状の掘り込み（ＳＫ１）を本住居跡に伴う施設と考えたが、覆土の色調や含有物が重複する第 29 号住居跡のものに近く、古墳時代後期の甕が出土していることから第 29 号住居跡に帰属すると考えられる。

同様に当初第 29 号住居跡の柱穴としたＰ１～８は、位置関係と覆土にほとんど含有物が含まれないことから本住居跡に伴うものとした。概ね径 0.5 m前後、深さ 0.35 ～ 0.40 mで、覆土はロームブロックを含む褐色土である。

遺物は古墳時代の第 29 号住居跡によって壊されたため、出土しなかった。

（２）方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第 77 ～ 80 図）

H・I－10・11 グリッドに位置する。西溝の南端、南溝の西半が調査区域外になり、東溝の南端が攪乱によって壊されている。

長軸である東西方向を軸方向とした場合の主軸方向はN－ 11° －Eである。全体の平面形は歪んだ方形で、溝幅が一定なため、方台部も直線的な同形となる。規模は、周溝内側下端間（方台部）で東西 11.25 m、南北 10.70 m、周溝外側上端間で東西 12.75 m、南北 11.85 mである。

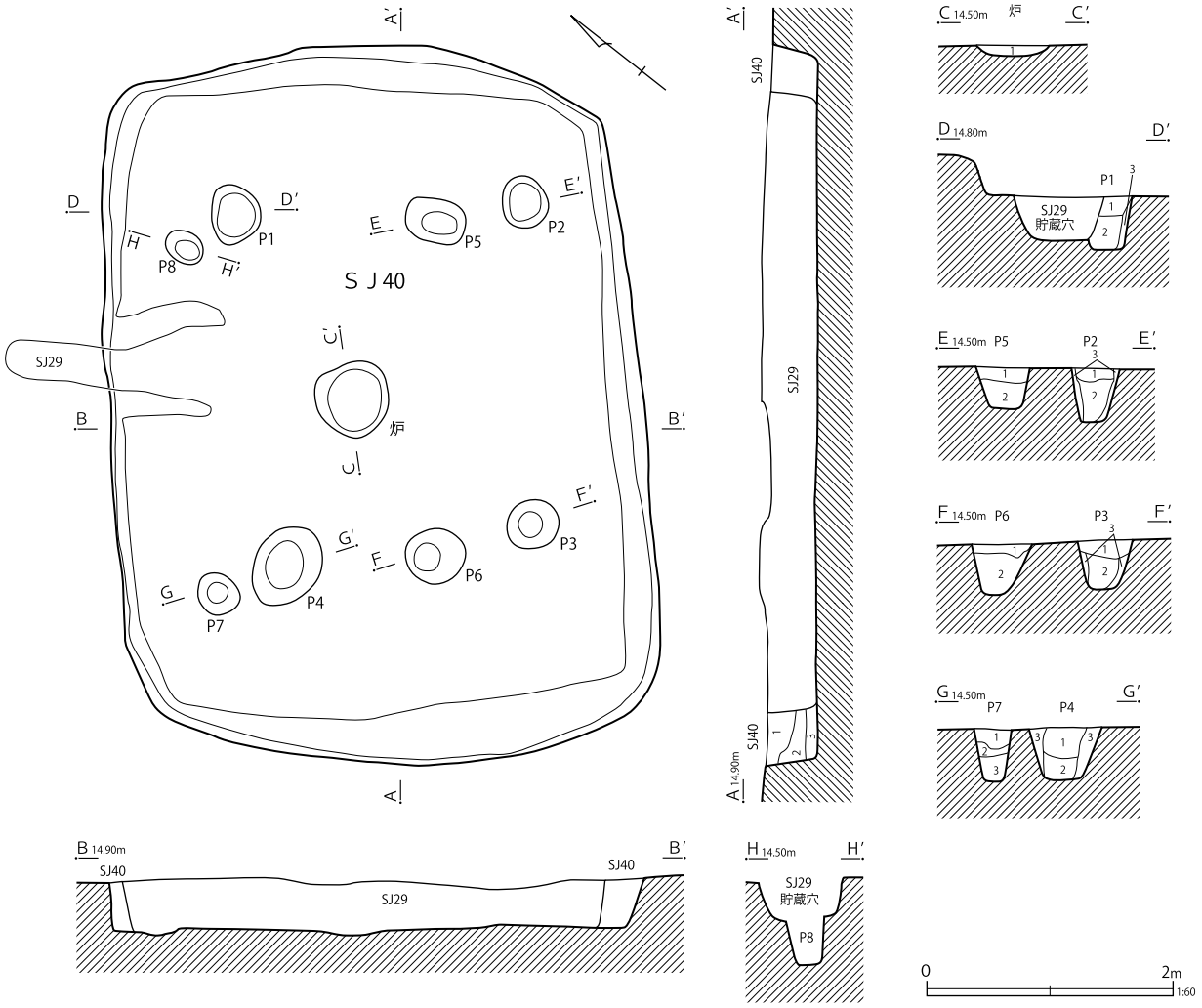
方台部の中央やや北寄りからは、第５・６・22 ～ 26 号土壙が検出されている。第６号土壙は、第５・22・23・26 号土壙の埋没後に構築されており、最も新しい。また、第 25 号土壙も 26 号土壙を壊して構築されている。一方、第 24 号土壙は第 23 号土壙に壊されており、より古い土壙と考えられる。

第 23 ～ 26 号土壙からは弥生土器が出土している。特に第 26 号土壙からは完形の壺が破砕された状態で出土しており、壺棺等の埋葬施設の可能性が高い。その他の土壙も連続して構築された埋葬施設の可能性が考えられる。

周溝は四隅切れである。周溝の規模は北溝が長さ 8.35m、幅 1.00 ～ 1.20 m、深さ 0.35 ～ 0.55 mである。東溝は南端を欠くが長さ 7.90 m、幅 0.95 ～ 1.15 m、深さ 0.40 ～ 0.55 mである。西溝の南端は調査区域外になる。調査区内の長さは 7.30 m、幅 1.00 ～ 1.25 m、深さ 0.20 ～ 0.50 mである。南溝は一部のみが検出されている。調査区内の長さは 3.50 m、幅 0.65 ～ 0.70 m、深さ 0.30 ～ 0.45 mである。

覆土は第３層がロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で、方台部盛土流入土の可能性がある。第１・２層は自然堆積だが、第１層は焼土、炭化物が多く、その由来が問題である。

出土遺物は、第 80 図１の甕が東側周溝内から



ＳＪ40
1　暗褐色土　ソフトロームを多量に混入
2　暗褐色土　ソフトロームを多量に混入　鉄分・炭化物を混入
3　暗褐色土　ソフトローム多量　炭化物少量

炉
1　褐色土　　粘性が強い褐色土を主体　焼土を少量混入

Ｐ1
1　褐色土　　褐色粘質土主体　しまり強い
2　褐色土　　褐色粘質土主体　１層に比して明るい
3　褐色土　　褐色粘質土主体　１・２層に比して暗い

Ｐ2
1　褐色土　　ロームブロック・ソフトロームを多量に混入（柱痕か）
2　褐色土　　ソフトロームを焦慮混入　しまり強い　１層に比して暗い
3　暗褐色土　粘性の強い褐色土（地山？）を多量に密に混入
　　１・２層に比して暗い

Ｐ3
1　褐色土　　表面に褐色粘質土を多量に混入　しまり強い
2　褐色土　　褐色土（地山？）を多量に混入　粘性強い　１層に比して暗い
3　明褐色土　ソフトローム・褐色粘質土（地山か）を密に混入　しまり強い

Ｐ4
1　褐色土　　小粒のロームブロックを少量混入　よくしまっている　柱痕か
2　褐色土　　１層に比して暗い　砂質の褐色土を混入　柱痕か
3　明褐色土　ソフトロームを多量に混入　よくしまっている

Ｐ5
1　褐色土　　ソフトロームを少量混入
2　褐色土　　１層に比して明るい

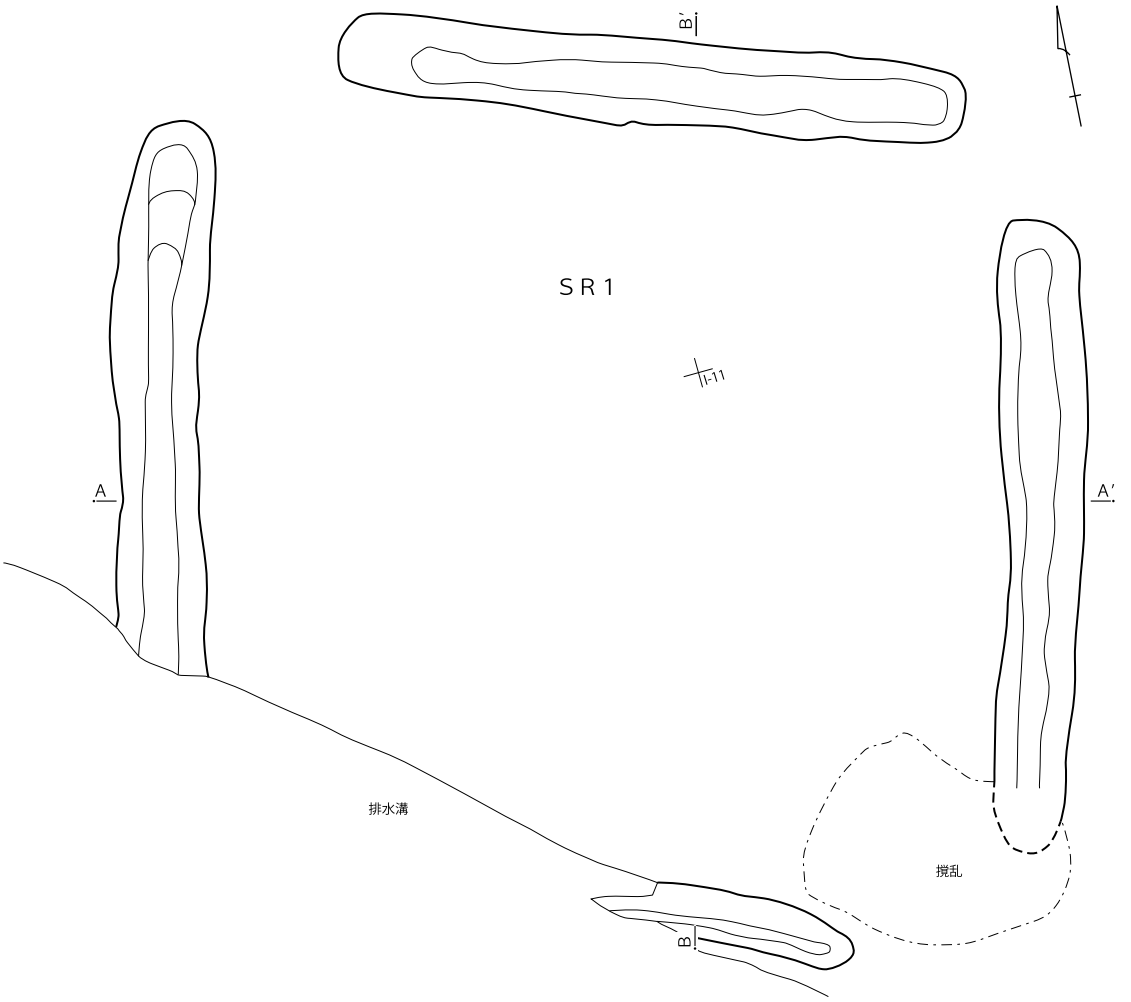
Ｐ6
1　褐色土　　ロームブロックを少量混入　よくしまっている
2　褐色土　　１層に比して暗い　よくしまっている

Ｐ7
1　明褐色土　ローム粒子・ロームブロックやや多
2　褐色土
3　暗褐色土

第76図　第40号住居跡

出土した。

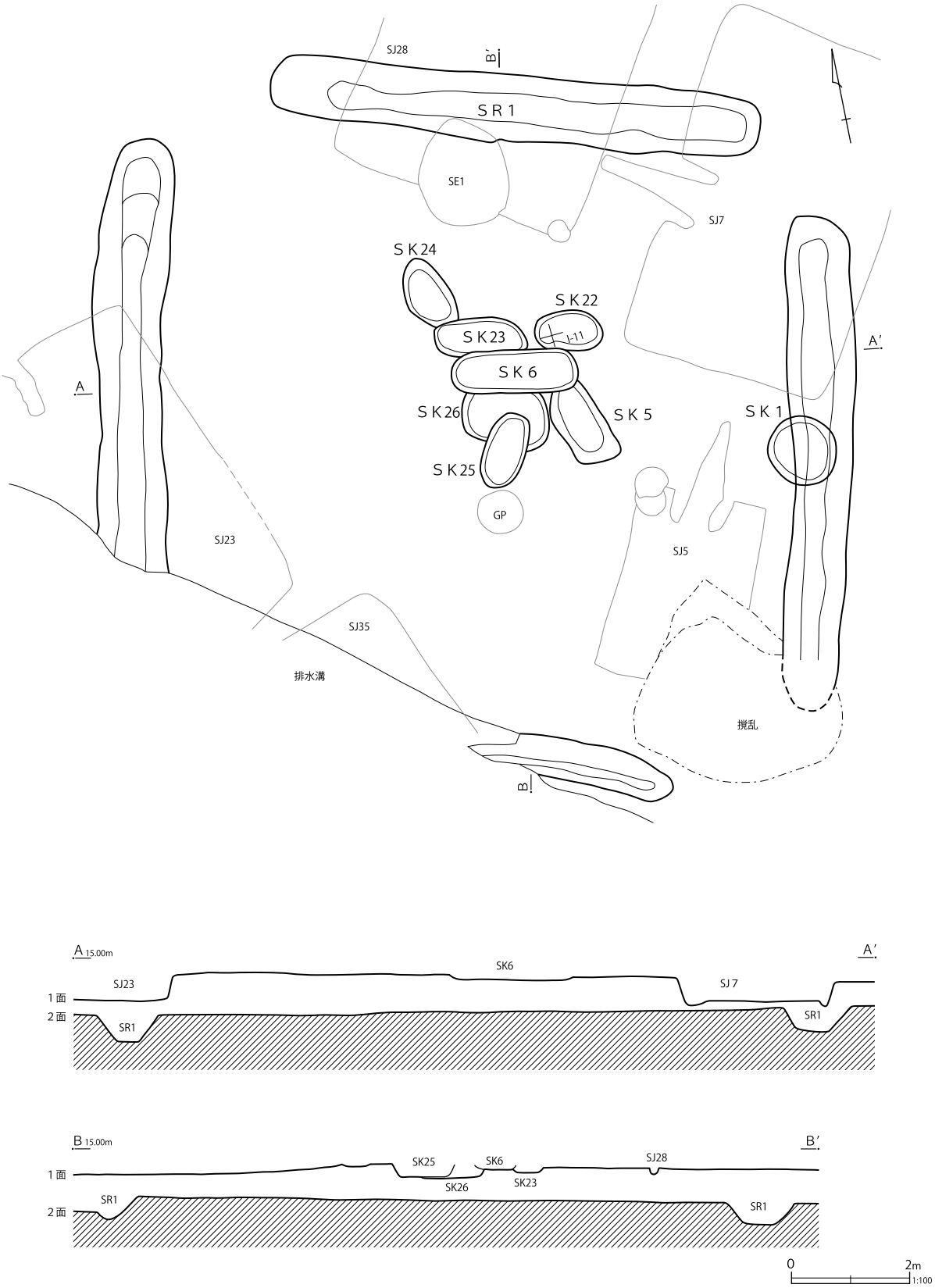
第80図１は栗林式の甕胴下半部である。横羽状条痕文が施文されている。焼成は堅致である。周溝を壊して構築されていた第１号土壙出土の甕（第83図１）と同一個体である。



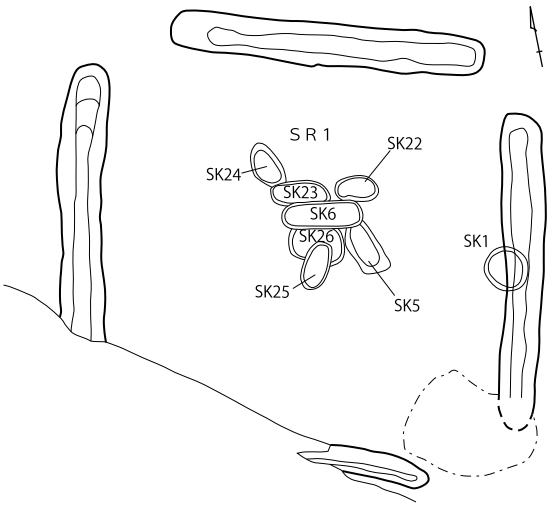
SR1
1　黒褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子多量　しまりに欠ける
2　灰黄褐色土　　炭化物粒子・暗灰色粘土ブロック少量　ややしまりに欠ける
3　にぶい黄褐色土　ローム小ブロック多量　暗灰色粘土少量

0　2m
1:100

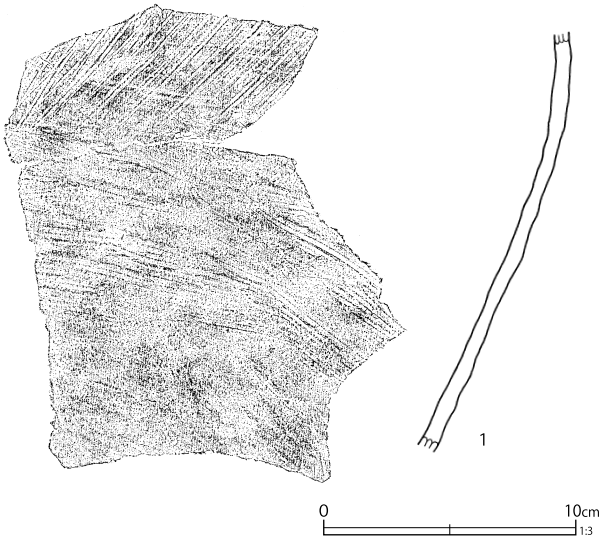
第77図　第１号方形周溝墓



第78図　第１号方形周溝墓と方台部



第79図　方形周溝墓と土壙の配置



第80図　第１号方形周溝墓出土遺物

（３）土　壙

弥生時代の土壙は９基が検出された。Ｂ区のＨ・Ｉ－10・11グリッドに集中して分布する。第21号土壙が調査区北壁際に位置していた他は、第１号方形周溝墓の方台部に位置していた。

第１号土壙（第82・83図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－11グリッドに位置していた。第１号方形周溝墓東溝と重複し、東溝より新しかった。径1.15ｍ、深さ0.45ｍの略円形であった。軸方向はＮ－35°－Ｗであった。断面形は逆台形、覆土はローム土、炭化物、焼土を混入する暗褐色土で、埋め戻しの可能性がある。

遺物は少なく、弥生時代中期の壺、及び第83図１の甕が出土した。

第５号土壙（第81図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－10・11グリッドに位置していた。第６号土壙と重複し、本土壙が古い。長軸1.62ｍ、短軸0.78ｍ、深さ0.27ｍの不整楕円形であった。軸方向はＮ－17°－Ｗであった。断面形は皿形であった。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色土で自然堆積であった。

遺物は少なく、弥生時代中期の壺、甕の破片が出土したが、図示し得る資料はなかった。

第６号土壙（第81図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－10・11グリッドに位置する。第５号土壙と重複し、本土壙が新しかった。長軸2.11ｍ、短軸0.73ｍ、深さ0.12ｍの長楕円形であった。軸方向はＮ－83°－Ｗであった。断面形は皿形で、覆土は炭化物、ロームブロックを含む暗褐色土で自然堆積であった。

遺物は少なく、弥生時代中期の壺、甕の破片が出土したが、図示し得る資料はなかった。

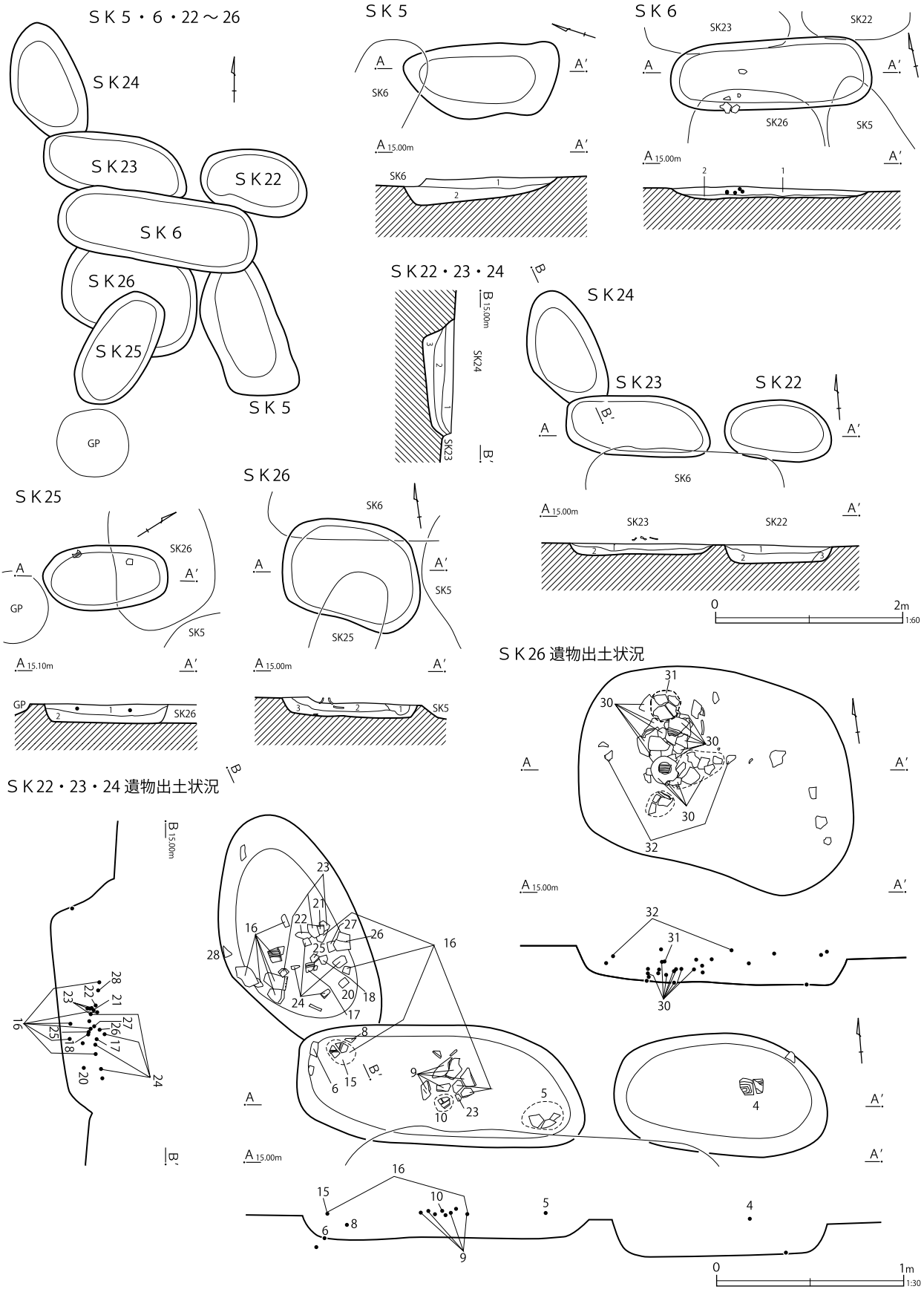
第21号土壙（第81・83図）

Ｂ区の中央の北壁際、Ｇ－11グリッドに位置していた。遺構の北側は調査区域外にかかっていた。第32号住居跡と重複し、本土壙が古かった。調査区内で、長軸2.00ｍ、短軸1.70ｍ、深さ0.23ｍの楕円形で、長軸の方向はＮ－10°－Ｅであった。断面形は逆台形であった。覆土は焼土、炭化物を含む暗褐色土で、自然堆積であった。

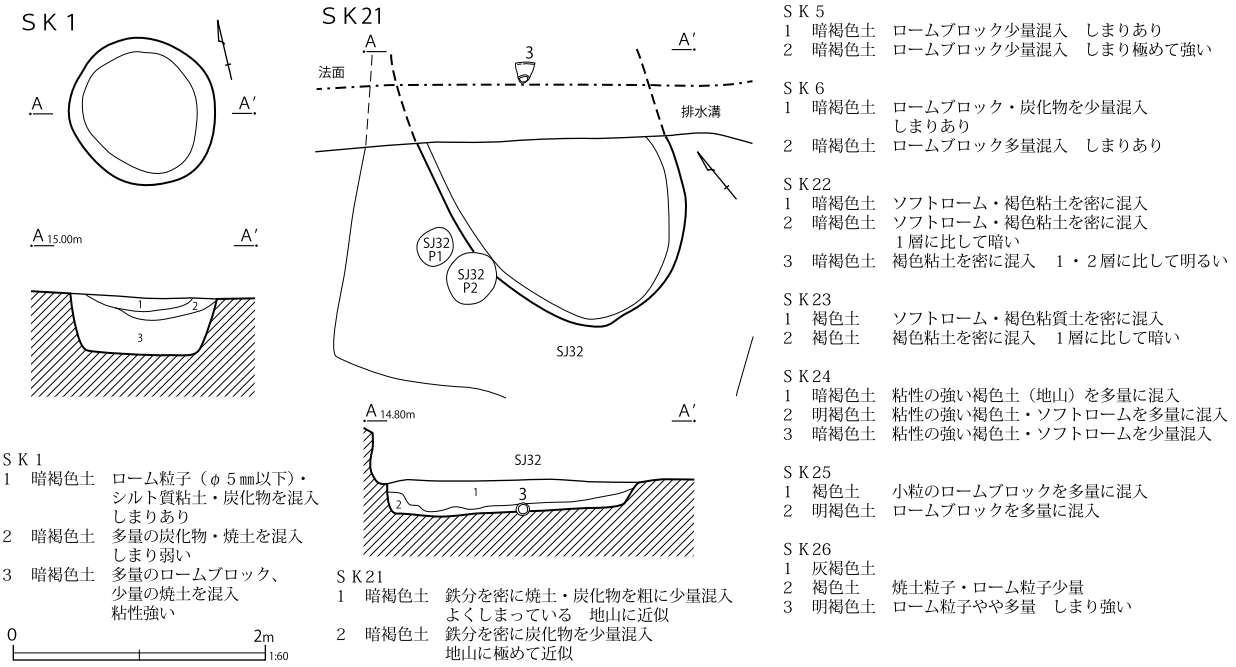
遺物は少なく、第83図２・３の弥生時代中期の壺の破片が出土した。

第22号土壙（第81・83図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｈ・Ｉ－10・11グリッドに位置していた。第６号土壙と重複し、本土壙が古かった。長軸1.12ｍ、短軸0.64ｍ、深さ0.20ｍの楕円形で、長軸の方向はＮ－80°－Ｗであった。断面形は皿形であった。覆土はローム



第81図　第５・６・22 ～ 26号土壙



第82図　第１･21号土壙

第9表　1次弥生土壙一覧表(第81･82図)

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壙	弥生	I−11	−	−	1.15	−	0.45	逆台形	円形	壺　甕	B区
5号土壙	弥生	Ⅰ−10･11	SK6(新)	N−17°−W	1.62	0.78	0.27	皿形	楕円形	遺物は古前(S字)№1	B区
6号土壙	弥生	Ⅰ−10･11	SK22(旧) SK23(旧) SK26 (旧) SK5(旧)	N−83°−W	2.11	0.73	0.23	皿形	楕円形	壺	B区
21号土壙	弥生	G−11	SJ32(新)	N−10°−E	2.00	1.70	0.12	逆台形	楕円形	弥生壺	B区
22号土壙	弥生	H･I−10･11	SK6(新)	N−80°−W	1.12	0.64	0.20	逆台形	楕円形	壺	B区
23号土壙	弥生	H･Ⅰ−10	SK24(旧) SK6(新)	N−80°−W	1.51	0.63	0.12	皿形	楕円形	弥生壺 五領S字甕 壺	B区
24号土壙	弥生	H−10	SK23(新)	N−19°−W	(1.21)	0.75	0.31	鍋底形	楕円形	遺物なし	B区
25号土壙	弥生	Ⅰ−10	SK26(旧)	N−31°−E	1.31	0.69	0.20	逆台形	楕円形	壺　甕	B区
26号土壙	弥生	Ⅰ−10	SK25(新) SK6(新) SK5(新)	N−69°−W	1.48	1.06	0.20	逆台形	楕円形	壺　縄文あり	B区

ブロック、褐色粘土を含む暗褐色土で自然堆積であった。

遺物は少なく、第 83 図４の弥生時代中期の壺の破片が出土した。

第 23 号土壙（第 81・83 図）

B区の中央やや東側、H・Ⅰ−10 グリッドに位置していた。第６・24 号土壙と重複し、第６号土壙より古く、第 24 号土壙より新しかった。

長軸 1.51 m、短軸 0.63 m、深さ 0.12 mの不整な楕円形で、長軸の方向はN−80°−Wであった。断面形は皿形で、覆土はロームブロック、褐色粘土を多く含む褐色土で自然堆積であった。

遺物は少なく、第 83 図５～15 の弥生時代中期の壺の他に、古墳時代前期のS字状口縁台付甕が出土したが、本土壙の時期は弥生時代中期と認定した。

第 24 号土壙（第 81・83・84 図）

B区の中央やや東側、H−10 グリッドに位置

していた。周辺に第５・６・22・23・25・26 号土壙が集中して分布していた。第 23 号土壙と重複し、本土壙が古い。

平面形は不整な楕円形で、長軸の方向はＮ－19°－Ｗであった。規模は長軸 1.21 ｍ、短軸 0.75 ｍ、深さ 0.31 ｍであった。断面形は鍋底形であった。覆土はロームブロック、粘性の強い褐色粘土を多く含む明褐色土、暗褐色土で自然堆積であった。

遺物は多く、第１層を中心に出土している。第 83 図 16・17、第 84 図 18 ～ 29 の弥生時代中期の壺・甕の他に古墳時代前期のＳ字状口縁台付甕が出土したが、本土壙の時期は弥生時代中期と認定した。

第 25 号土壙（第 81 図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－10 グリッドに位置していた。周辺に第５・６・22 ～ 24・26 号土壙が集中して分布していた。第 26 号土壙と重複し、本土壙が新しかった。

平面形は不整な楕円形で、長軸の方向はＮ－31°－Ｅであった。規模は長軸 1.31 ｍ、短軸 0.69 ｍ、深さ 0.20 ｍであった。断面形は皿形であった。覆土はロームブロックを多く含む明褐色土、褐色土で、自然堆積であった。

遺物は少なく、上層から弥生時代中期の壺の破片、古墳時代前期のＳ字状口縁台付甕が出土したが、図示し得る資料はなかった。

第 26 号土壙（第 81・84 図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－10 グリッドに位置していた。周辺に第５・６・22 ～ 25 号土壙が集中して分布していた。第６・25 号土壙と重複し、本土壙が最も古かった。

平面形は不整な楕円形で、長軸の方向はＮ－69°－Ｗであった。規模は長軸 1.48 ｍ、短軸 1.06 ｍ、深さ 0.20 ｍであった。断面形は皿形であった。覆土はローム粒子、焼土粒子を多く含む明褐色土、褐色土で、自然堆積であった。

遺物は第 84 図 30 の完形の壺が覆土の上層を中心に細かく破砕された状態で出土した他に、同図 31 ～ 33 の壺・甕が出土した。

土壙出土遺物

第１号土壙（第 83 図１・２）

１は栗林式の甕の胴部である。櫛歯状工具による横羽状文が施文されている。焼成は堅致である。第１号方形周溝墓出土遺物１と同一個体である。

２は底部である。立ち上がりの形状から壺と考えられる。

第 21 号土壙（第 83 図３）

３は壺頸部である。口縁部は欠失している。口縁部直下に波状沈線文が施文されている。

第 22 号土壙（第 83 図４）

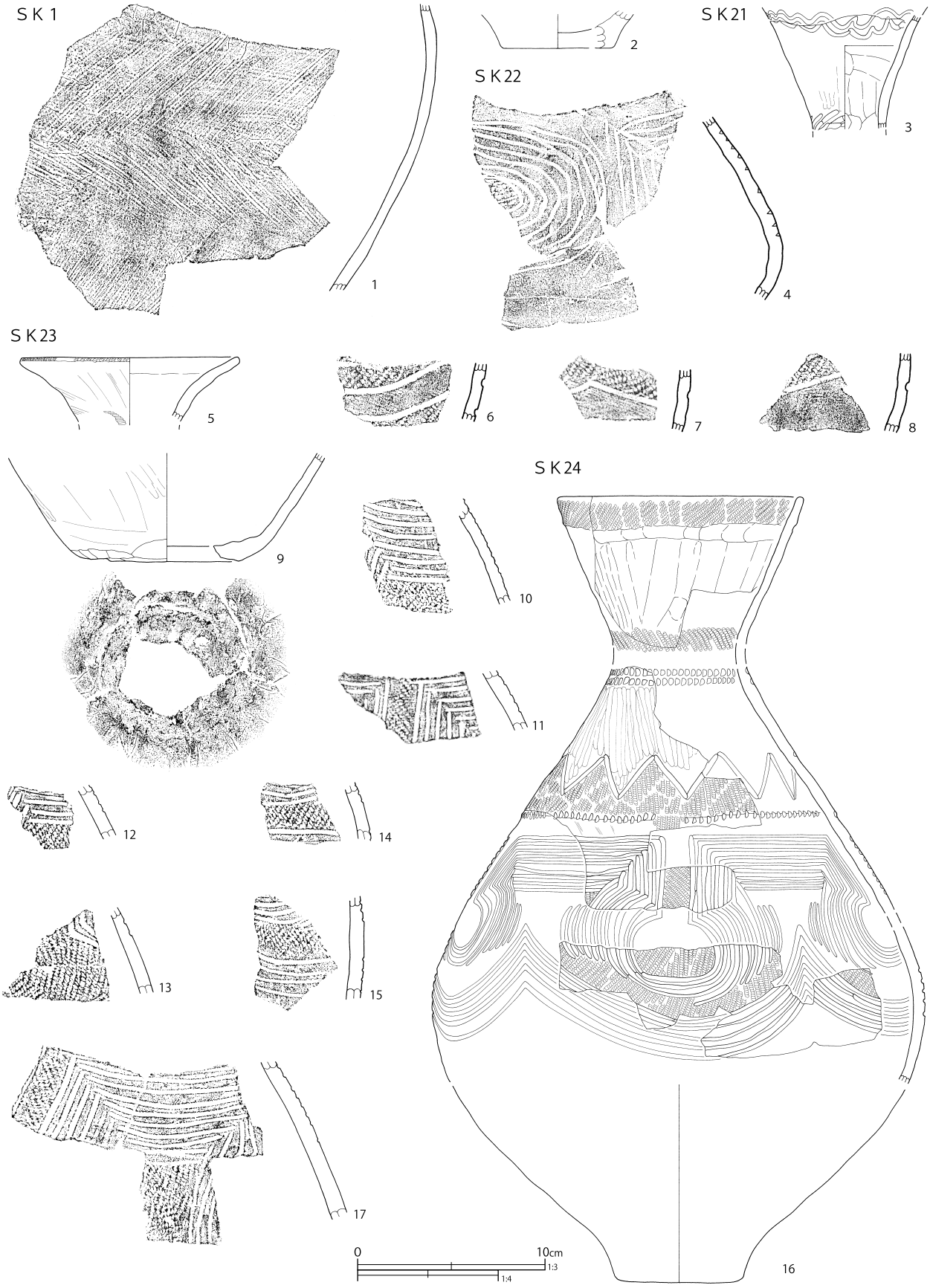
４は東毛地域の壺胴部である。胴部最大径で屈曲する。沈線で重四角文と同心円文が施文されている。文様間上部には「Ｖ」字形文が挿入されている。色調は灰白色で焼成は堅致である。

第 23 号土壙（第 83 図５～ 15）

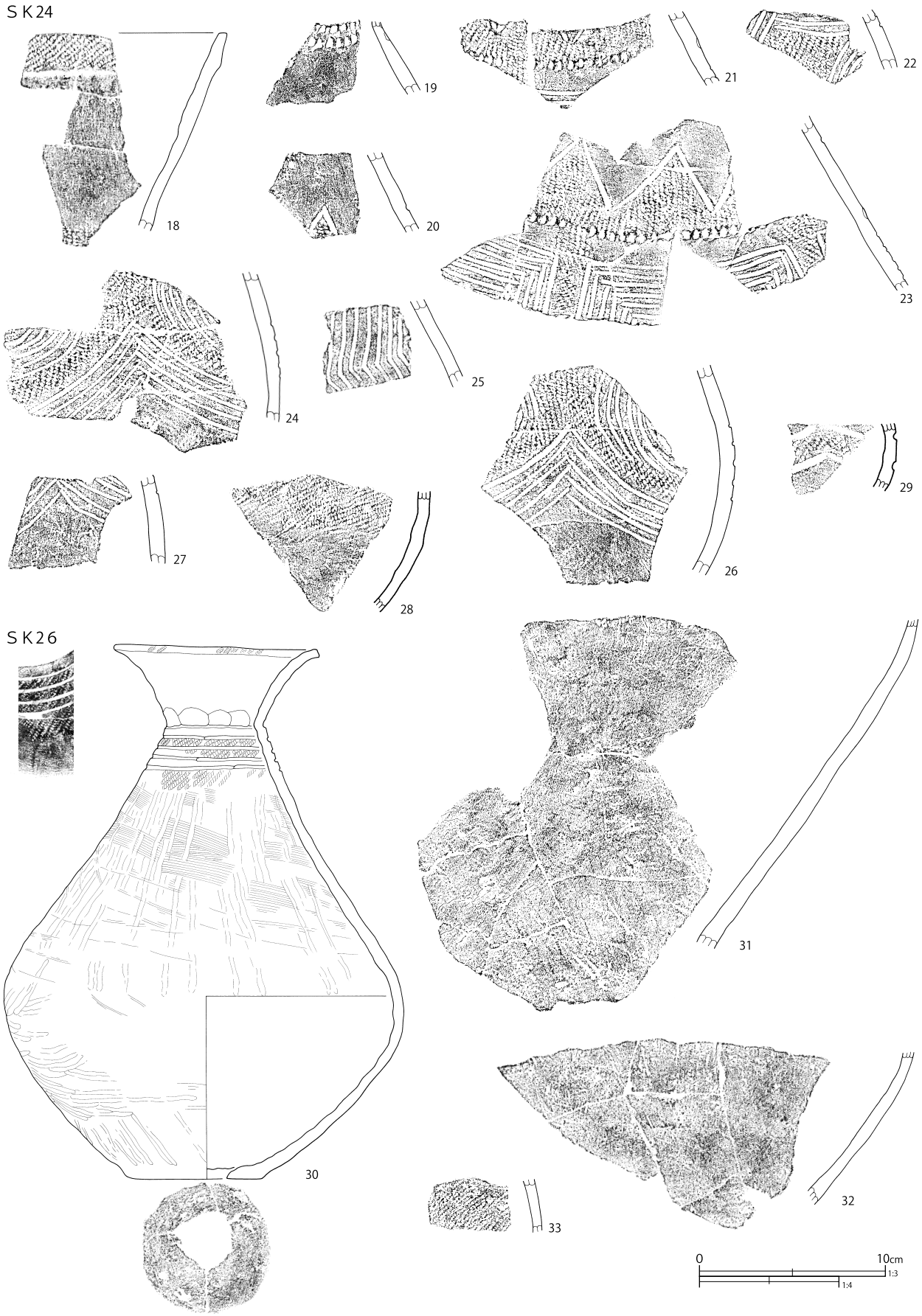
５は栗林式の壺口縁部である。朝顔形に開く口縁端部に縄文が施文されている。頸部に縄文の押捺が認められる。６・７・８は栗林式の壺胴部である。いずれも沈線による下向き弧線文内にＬＲ縄文が充填されている。７はハケ調整が認められる。９は大型の壺底部である。焼成前の穿孔が開けられている。10 ～ 15 は、第 24 号土壙出土 16 の北島式の壺と同一個体または、類似土器である。10・11・12 は「コ」の字文が施文されている。区画間はＬＲ縄文で充填施文されている。13 はフラスコ形文が施文されている。文様内は充填縄文である。14・15 はフラスコ形文の下端と下向き弧線文が施文されている。文様間は充填縄文である。

第 24 号土壙（第 83 図 16･17、第 84 図 18 ～ 29）

16 は北島式の壺である。すべての部位を接合することができなかったため復元図である。胴下半部は第 26 号土壙出土土器（第 84 図 31・32）



第83図　１次土壙出土弥生遺物（１）



第84図　１次土壙出土弥生遺物（２）

が同一個体と思われる。

口縁部はやや外反して開く折返し口縁である。折り返し部にＬＲ縄文が施文されている。頸部はＲＬ縄文による無区画帯縄文と、２段の刺突列が施文されている。頸・胴部境界は、ＬＲ充填縄文による上向き鋸歯文と段を持つ１段の刺突列が施文されている。なお、充填縄文部分には、わずかであるが赤彩痕跡が認められる。胴部はフラスコ形文と「コ」の字文の組み合わせによる連繋文が４単位施文されると思われる。区画間はＬＲ縄文で充填施文されている。連繋文の下部には下向きの弧線文がフラスコ文と「コ」の字文の間に貫入して施文されている。17 ～ 27 は 16 と同一個体の壺である。18 は口縁部、19・20 は頸部、21・23 は頸・胴部境界、22 ～ 27 は胴部である。25 はフラスコ形文屈曲部である。27 は下向き弧線文頂部である。28 は甕胴部である。胴部最大径より上位にＬＲ縄文が施文されている。29 は栗林式の壺胴部である。最大径部分より下位にかけて沈線区画の下向き弧線文が施文されている。区画内はＬＲ縄文が充填されている。

第 26 号土壙（第 84 図 30 ～ 33）

30 は完形の栗林式の壺である。口縁部は大きく外反し、端部に縄文が施文されている。頸部は５条の平行沈線が巡り、ＬＲ縄文が粗雑に充填されている。胴部上半は横位ハケ調整後、縦位の粗いミガキが施されている。下半部は横位のミガキが施されている。底部は大きな焼成前穿孔が設けられている。31・32 は壺胴下半部で同一個体である。大きく外湾しナデ調整が施されている。第 24 号土壙出土壺（第 83 図 16）の胴下半部の可能性がある。33 は甕胴部である。ＲＬ縄文が横位に施文されている。

（４）グリッド出土遺物

Ｂ区Ｇ～Ｉ－９～ 12 グリッド範囲及び、井戸跡、Ｃ区第 66・67 号住居跡覆土より纏まって出土した。

弥生時代の住居跡、方形周溝墓、土壙等の遺構が集中している範囲とほぼ重なっていた。遺物の時期は第 66・67 号住居跡出土遺物（第 85 図 12･18･19･20）に古い様相が認められるものの、他の遺物は遺構の時期と重なっていた。

１は、折返し口縁の壺である。折返し部にＬＲ縄文が充填施文されている。２は壺頸部である。刺突列の下位に無区画のＲＬ帯縄文が施文されていた。３は２と同一個体の可能性のある壺頸部である。ＲＬ帯縄文が施文されているが、下端に沈線文の一部が施文されている。４は壺の頸・胴部境界である。段を持つ刺突列にＬＲ縄文が施文されている。第 24 号土壙の北島式壺（第 83 図 17）と同一個体の可能性がある。５は壺頸・胴部である。頸部は刺突列区画内にＲＬ縄文が充填施文され､下位に段を持つ｡胴部は重四角文と「Ｖ」字形文が施文されている。第 22 号土壙（第 83 図４）と同一個体と思われる。６は壺胴部である。フラスコ形文が施文されている。７・８は同心円文が施文されている壺胴部である。８は同心円文の左に「Ｖ」字文が施文されている。９・10 は、重三角文が施文されている壺胴部である。９は細かいＬＲ縄文が交互に充填施文されている。10 もＬＲ縄文が充填施文されている。11 は壺頸部である。粗いＬＲ縄文が施文されている。12 は壺胴部である。平行沈線文が施文され、上端にはわずかであるが縄文の施文が認められる。13 ～ 16 は栗林式の壺胴部である。13 は横位条痕施文下に２段の沈線区画ＬＲ充填縄文が施文される上向き鋸歯文が施文されている。14 は屈曲部に沈線区画のＬＲ縄文が充填施文されている。15 は区画沈線内に横位条痕文が充填施文され、さらに山形文が描かれている。16 は区画沈線内にＬＲ縄文が充填施文されている。17 ～ 20 は条痕文系の甕である。18・19 は口端部平坦面が作出されている。17 は口端部内面に指頭押捺が認められる。いずれも胎土に角閃石を含み焼成堅致であ



第85図　１次グリッド出土弥生遺物

る。21 は甕胴部である。櫛歯状工具による粗い斜格子文が施文されている。22 は有文甕である。地文にカナムグラを用いた擬縄文が施文されている。また、３条の沈線で文様が描かれている。23 は甕胴部である。６本１単位の櫛歯状工具による櫛描波状文が施文されている。23 は頂部の振幅が大きいので弥生時代後期の所産の可能性がある。24・25 は底部である。24 は壺、25 は甕の底部であろう。

３．古墳時代

（１）住居跡

第１号住居跡（第 86 ～ 91 図）

Ｂ区の東側、Ｉ・Ｊ－ 11・12 グリッドに位置する。第２号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。大きな撹乱によって遺構の北側と東側を壊されている。西側の撹乱の位置にカマドが設けられていたと考えられ、主軸方位はＮ－ 70°－Ｗと推定される。

平面形は方形である。規模は、主軸方向 5.75 ｍ、直交軸方向 6.25 ｍである。深さは 0.35 ～ 0.45 ｍで、床面はやや凹凸がある。覆土は焼土・炭化物を多く含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

柱穴は２本検出された。Ｐ１が径 0.80 ｍ、深さ 0.65 ｍ、Ｐ２が径 0.65 ｍ、深さ 0.55 ｍである。双方とも北側がやや崩れ、柱抜き取り痕と考えられる。覆土は暗褐色土でしまりを欠く。壁周溝は全周設けられていた。幅 0.20 ～ 0.35 ｍ、深さ 0.10 ｍほどである。

遺物は多く、南東コーナーと西壁沿いの中層を中心に、古墳時代後期の須恵器坏、甕、甕、土師器壺、甕、高坏の破片がやや多く出土した。

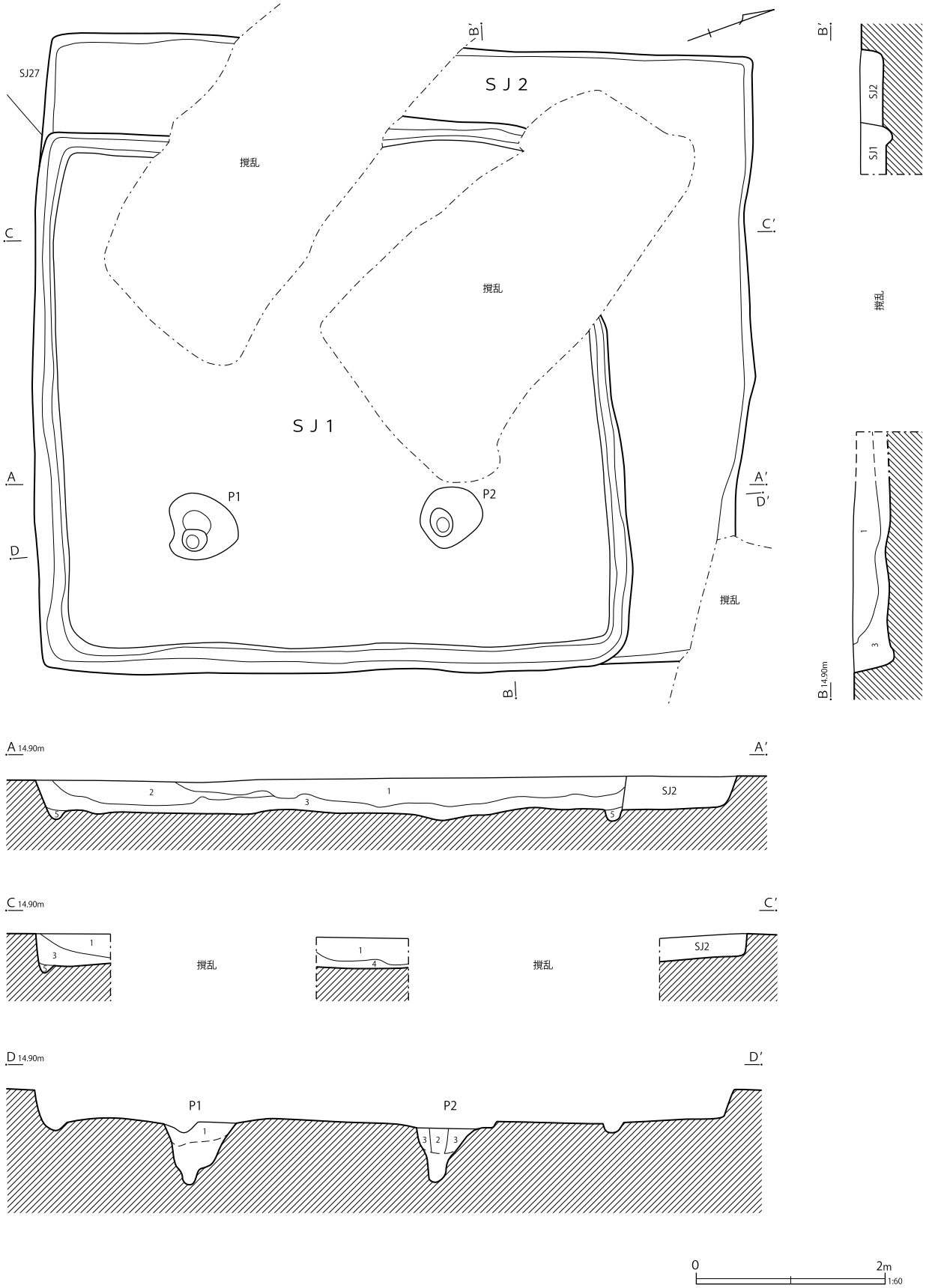
１～４は須恵器である。いずれも太田金山窯産である。１は須恵器の甕の胴部である。上位に最大径がある球形で、径 1.5cm の穿孔が施されている。中位に上下を沈線で画された刷毛目工具の小口による列点文が施されている。下位はヘラケズリで底面に「三」のヘラ記号が認められる。２・３は坏蓋で、やや扁平である。端部は内傾する面を持つ。２は口縁部と体部が沈線によって画されている。器肉が厚く、重量感がある。金山窯産。３は口縁端部がやや外側に摘み広げられている。４は坏である。体部外面は黒色を呈している。内面の口縁部と体部の境目には、ロクロナデの際の爪が入っている。

以下は土師器である。５～ 11 は模倣坏である。５～９は有段口縁坏である。いずれも内外面黒色処理されている。６は胎土に白色針状物質を含む。７の外面はヘラ磨きである。８はシャープな作りで、口縁部がやや長い。９は口径がやや小さめである。10･11 は坏蓋模倣坏である。10 は大型で、外面が赤彩されている。見込みが強く指で押さえられている。11 は小型で器肉が厚い。灰白色を呈する。12 は壺である。口縁部が短く直立する。胴部は外面横位のヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。13 ～ 20 は甕である。いずれも長胴甕で外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。18 はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されているが、２次被熱を受けており、甕として使用されたと考えられる。19 の底面には砂が残り、20 の底面には木葉痕が認められる。21 ～ 23 は所謂砲弾型の甑である。21 は把手が片方のみ遺存している。遺存部位の下端は、擬口縁状にきれいに整えられている。21・23 は内面にヘラ磨きが施されている。24 ～ 27 は古墳時代前期のものである。25 は脚部が大きく開き、小型高坏になると考えられる。26 の体部は内外面ヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。底面はヘラケズリである。

以下は土製品である。27 は小口径羽口である。外面は還元、発泡し、断面は層状に赤化している。28 ～ 37 は土錘である。いずれも一部が遺存するのみである。ほぼ法量が揃っており、完形ならば径２cm 前後、長さ６～７cm の大きさと考えられる。29 はガジリがあり、孔内に絞り目が残る。

38 ～ 41 は鉄製品である。38 は両関の刀子である。刃関はなだらかで、背関は段を持っている。39 は片刃、平刃造りの鉄鏃である。鏃身関部は角関で平坦である。40 は棒状品で、断面形は長方形である。上下の幅が異なる。41 は刀の柄である。茎尻を欠失する。なだらかな両関で、断面形は逆台形である。

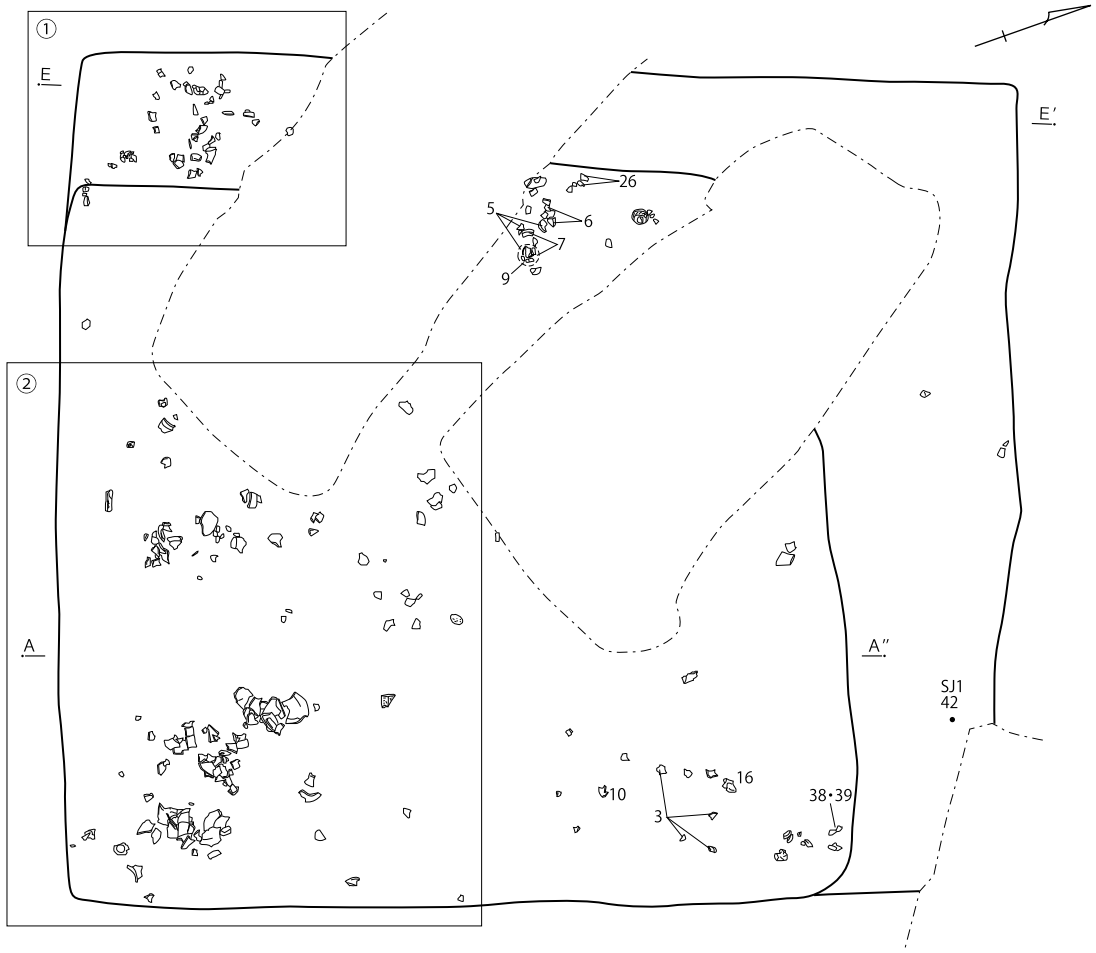
以下は石製品である。42 は滑石製の臼玉であ



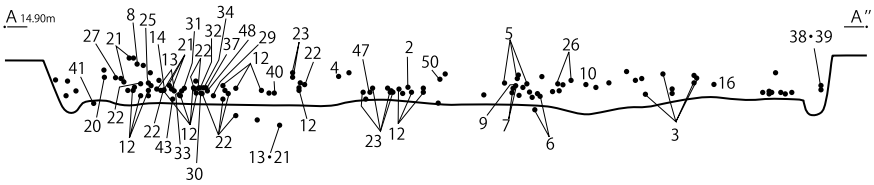
第86図　第１・２号住居跡（１）

ＳＪ１
1　暗褐色土　白色粒子　焼土粒子やや多量
2　暗褐色土　焼土粒子　少量
3　褐色土　黄褐色土ブロック少量　焼土粒子・炭化物粒子少量
4　褐色土　焼土・炭化物多量
5　褐色土　ローム粒子やや多量

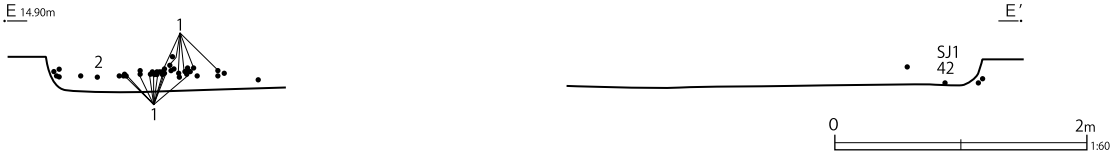
Ｐ１・２
1　暗褐色土　ソフトローム少量混入　粘性・しまりなし
2　暗褐色土　ソフトローム少量混入　しまりなし
3　暗褐色土　ソフトローム少量混入　２に比して明度あり　しまりなし



ＳＪ１断面遺物分布



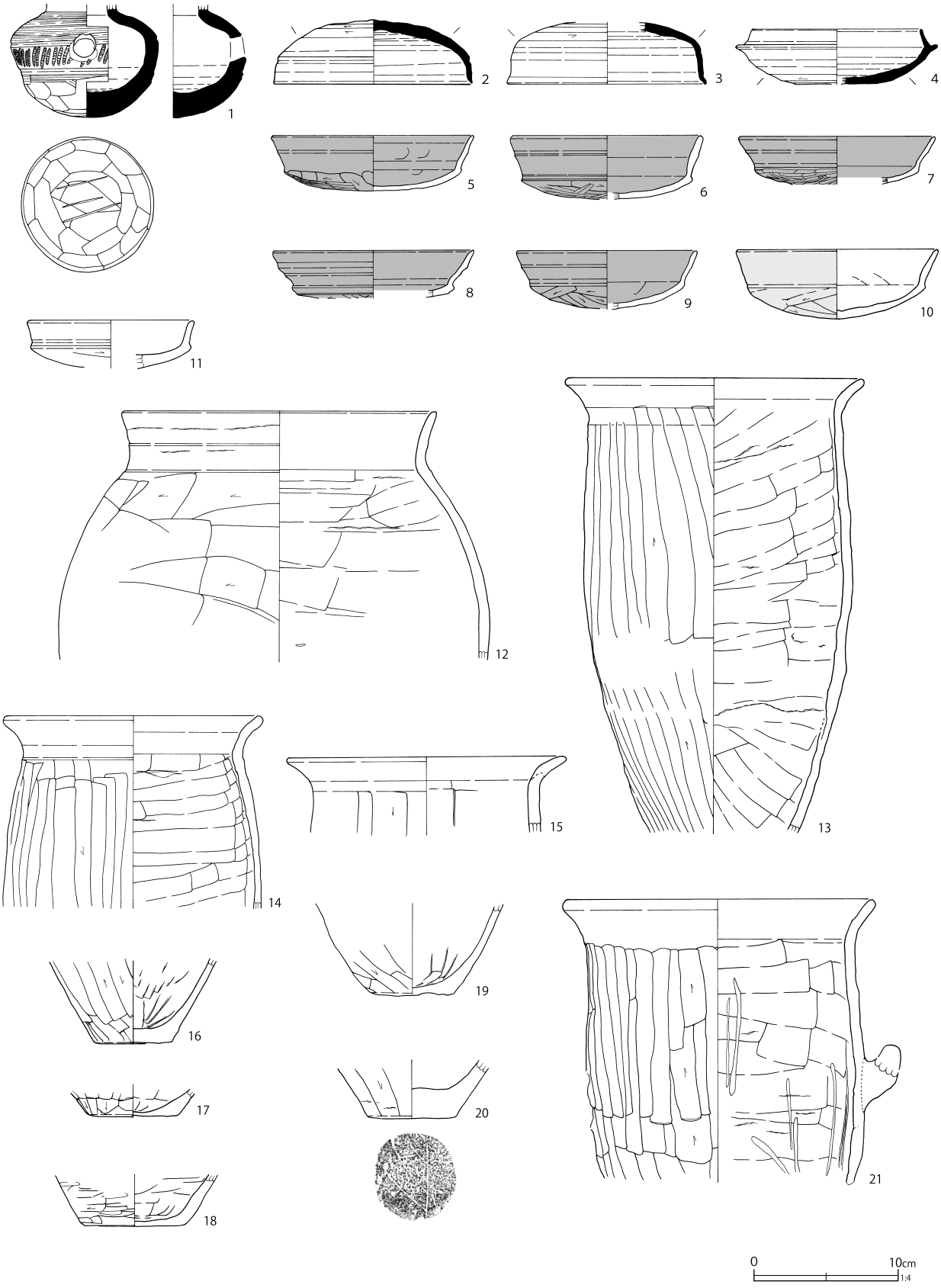
ＳＪ２断面遺物分布



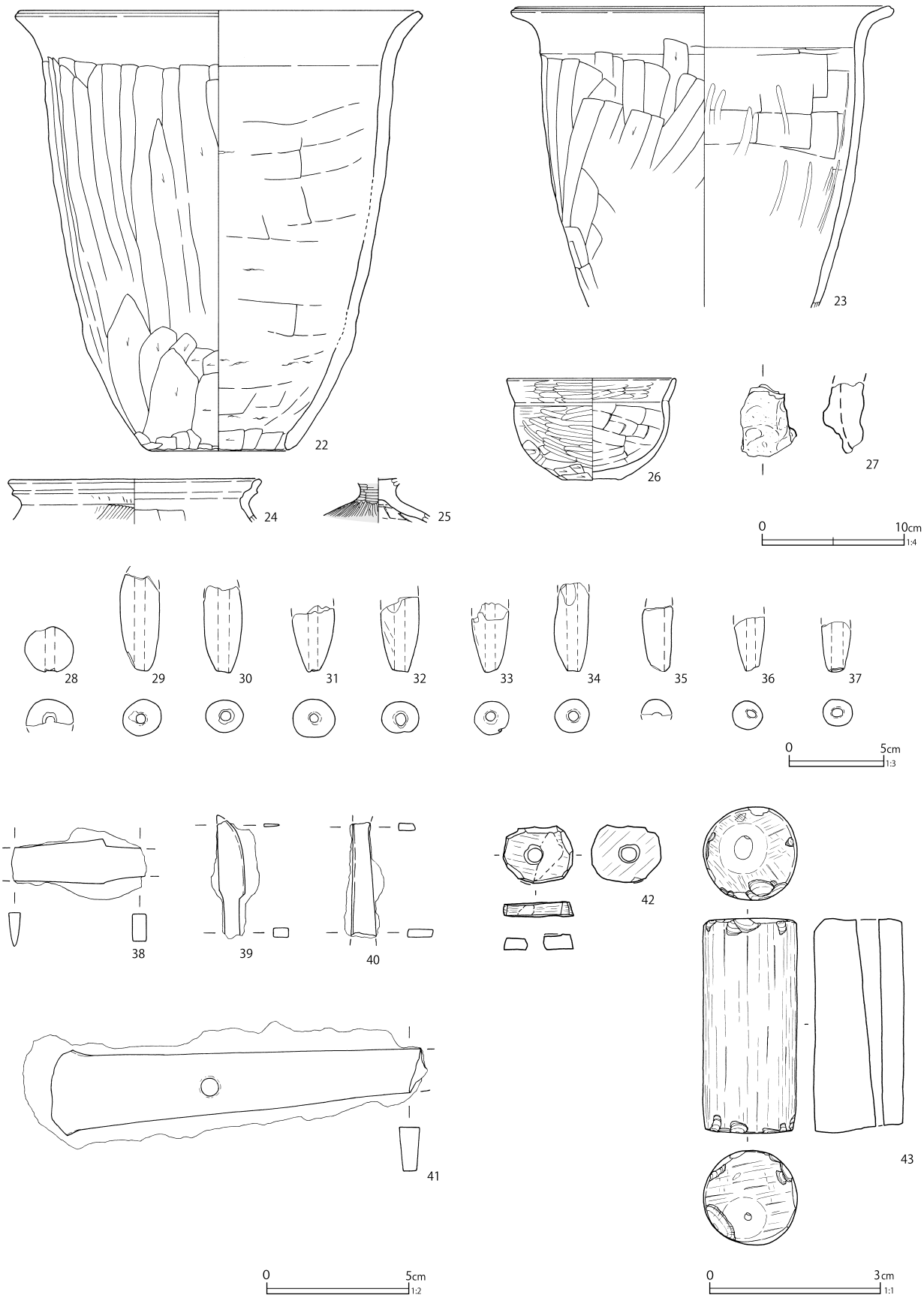
第87図　第１・２号住居跡（２）



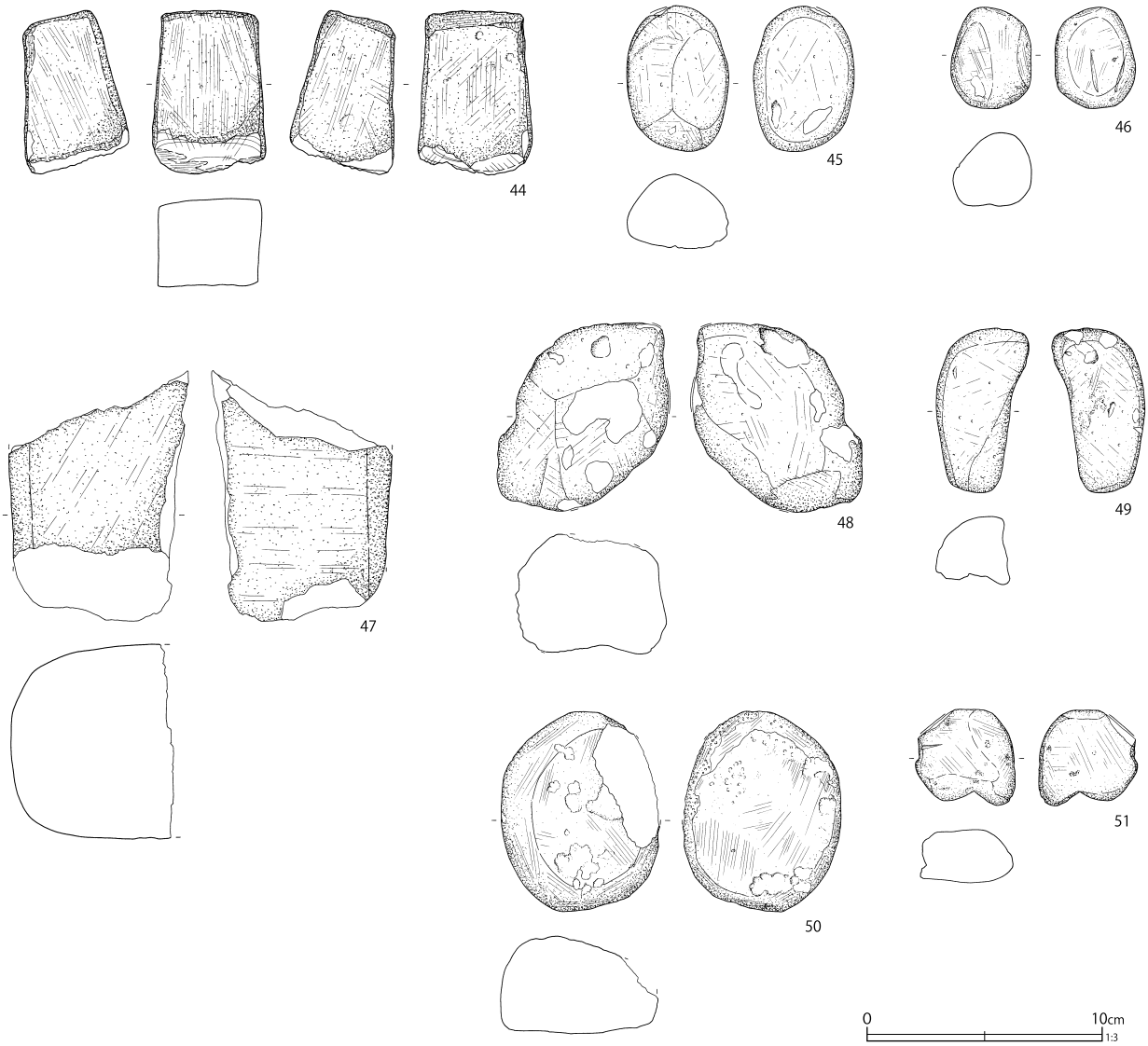
第88図　第１・２号住居跡（３）



第89図　第１号住居跡出土遺物（１）



第90図　第１号住居跡出土遺物（２）



第91図　第１号住居跡出土遺物（３）

る。緑色の軟質な石材である。多角形を呈し、表裏両面から穿孔されている。43 は、碧玉製の大型の管玉である。深緑の硬質な石材である。多角柱の段階で穿孔後、円柱に整形されている。穿孔は片側穿孔で、孔の周辺は僅かに凹み、光沢が見られる。側面は粗目の研磨痕が残る。

44・47 は、安山岩製の砥石である。44 は砥面が６面で、欠損面も砥面として使用されている。47 は、平坦面が使用によって平滑に摩耗しており、被熱により一部が赤色化している。

45・46・48 ～ 51 は、軽石製の砥石である。いずれも使用痕は、僅かに擦痕が見られる程度である。46・51 は刃物痕が残る。48・49 は欠損面が再利用され、不定形である。50 は裏面の欠損面も砥面として利用されている。

本住居跡の時期は６世紀第２四半期、屋敷裏Ⅴ－１期である。

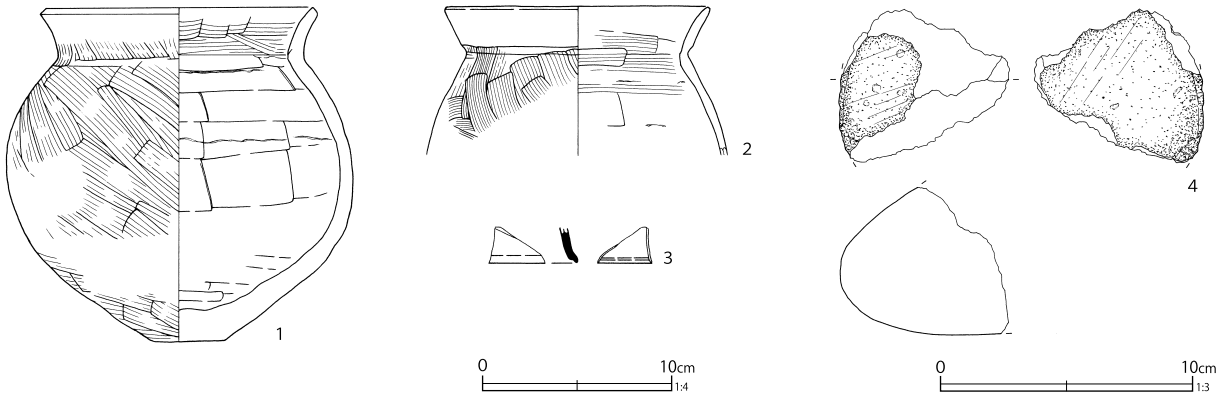
第２号住居跡（第 86 ～ 88・92 図）

Ｂ区の東側、Ｉ・Ｊ－ 11・12 グリッドに位置する。第１号住居跡が東壁と南壁を合わせるように重複し、大部分が同住居跡によって壊されている。大きな撹乱が遺構の北側と東側に入る。第１号住居跡同様に西側の撹乱の位置にカマドが設けられていたと考えられ、主軸方位はＮ－ 70°－

第10表　第１号住居跡出土遺物観察表（第89～91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	－	[7.9]	－	ＥＨＩＫ	95	普通	灰	底部外面ヘラ記号「三」 最大径10.2cm №52	105-1
2	須恵器	蓋	13.8	4.4	－	ＢＣＥＨＩＫ	80	普通	灰	東毛産か №37 SJ7№32～34 貯蔵穴と接合	105-3
3	須恵器	蓋	(13.6)	[4.2]	－	ＨＩＫ	15	良好	灰	№11・13～15	
4	須恵器	坏	(11.8)	3.7	－	ＣＥＩＪ	30	良好	灰	東毛産 №64	105-4
5	土師器	坏	(14.0)	2.8	－	ＣＩＫ	40	普通	灰黄褐	内外面黒色処理 有段口縁坏 №52・53・56	105-5
6	土師器	坏	(13.1)	[4.3]	－	ＣＥＩＪＫ	30	普通	橙	内外面黒色処理 有段口縁坏 №49・51	
7	土師器	坏	(13.6)	[3.4]	－	ＣＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面黒色処理 有段口縁坏 №54・56	
8	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	－	ＣＨＩ	15	普通	褐灰	内外面黒色処理 有段口縁坏 №78	
9	土師器	坏	(12.4)	[4.0]	－	ＣＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	内外面黒色処理 有段口縁坏 №56	
10	土師器	坏	7.0	4.8	－	ＡＣＨＩＫ	60	普通	明赤褐	外面赤彩 №16 SJ2と接合	105-6
11	土師器	坏	(11.4)	[3.3]	－	ＣＩ	20	普通	灰白		
12	土師器	壺	21.8	[17.2]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	№26・35・36・100～103・105・113～115・117～119	105-2
13	土師器	甕	(20.5)	[31.8]	－	ＡＣＥＨＩＬ	70	普通	明赤褐	外面黒斑あり 内外面煤付着 №89・90・130	106-1
14	土師器	甕	(17.6)	[13.3]	－	ＣＤＥＨＩ	30	普通	にぶい赤褐	№75	106-3
15	土師器	甕	(19.2)	[5.2]	－	ＣＩＫ	20	普通	灰褐	外面煤付着	
16	土師器	甕	－	[5.8]	5.4	ＣＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	外面黒斑あり №９	
17	土師器	甕	－	[1.9]	(6.4)	ＣＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐		
18	土師器	甕	－	[3.5]	7.4	ＡＣＥＩ	50	普通	橙	外面煤付着	
19	土師器	甕	－	[6.2]	5.8	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	外面煤付着	106-6
20	土師器	甕	－	[4.0]	6.2	ＣＨＩＫ	70	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕 №80	
21	土師器	甑	21.4	[19.7]	－	ＤＥＧＨＩ	95	良好	橙	№73～76・79・130	106-2
22	土師器	甑	(28.0)	31.0	9.4	ＣＥＦＧ	70	普通	にぶい橙	№65・69～71・75・77・86～88・128	106-4
23	土師器	甑	(26.2)	[21.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	№27・28・30・31・40・66・67	106-5
24	土師器	台付甕	(17.6)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
25	土師器	高坏	－	[3.1]	－	ＡＣＥＩＫ	70	普通	橙	外面・坏部内面赤彩 №125	105-7
26	土師器	鉢	(13.9)	7.1	(4.2)	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	№41・43	107-1
27	土製品	羽口	長さ[3.0] 幅[3.8] 重さ15.5ｇ			Ｉ	20	普通	橙	№122	220-3
28	土製品	土錘	径2.45×[1.4] 高さ2.4 孔径0.5 重さ6.5ｇ			ＡＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	土玉	218-1
29	土製品	土錘	長さ[5.2] 最大径2.1 孔径0.5 重さ20.0ｇ			ＨＩＪＫ	80	普通	橙	№107	218-2
30	土製品	土錘	長さ[4.6] 最大径2.0 孔径0.6 重さ15.5ｇ			ＡＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	№108	218-3
31	土製品	土錘	長さ[3.6] 最大径2.2 孔径0.45 重さ10.2ｇ			ＨＫ	30	普通	浅黄橙	№112	218-4
32	土製品	土錘	長さ[4.0] 最大径1.9 孔径0.5 重さ11.1ｇ			ＡＨＩＫ	50	普通	橙	№110	218-5
33	土製品	土錘	長さ[3.2] 最大径1.8 孔径0.5 重さ8.5ｇ			ＨＩＫ	40	普通	橙	№106	218-6
34	土製品	土錘	長さ[4.7] 最大径1.8 孔径0.5 重さ13.4ｇ			ＨＩＫ	80	普通	橙	№109	218-7
35	土製品	土錘	長さ[3.5] 最大径1.5 孔径[0.5] 重さ4.7ｇ			ＨＩＫ	50	普通	にぶい橙		218-8
36	土製品	土錘	長さ[2.9] 最大径1.5 孔径0.4～0.5 重さ5.4ｇ			ＨＩＫ	30	普通	褐灰		218-9
37	土製品	土錘	長さ[2.7] 最大径1.5 孔径0.55×0.4 重さ4.3ｇ			ＨＫ	30	普通	にぶい黄橙	№111	218-10

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
38	鉄製品	刀子	長さ[4.8] 刃幅1.5 背幅0.4 重さ18.1ｇ							№1	222-1
39	鉄製品	鉄鏃	長さ[4.1] 刃幅0.9 厚さ0.1 重さ7.3ｇ							№1	222-1
40	鉄製品	棒状品	長さ[4.0] 幅1.0 厚さ0.3 重さ4.4ｇ							№97	222-1
41	鉄製品	刀	長さ[13.5] 刃幅(3.0) 背幅0.7 重さ144.3ｇ							№131	222-1
42	石製品	臼玉	長さ1.0 幅1.2 厚さ0.3 重さ0.4ｇ 孔径0.2～0.3 滑石							№22	219-5
43	石製品	管玉	長さ3.8 幅1.7 厚さ1.6 重さ19.0ｇ 孔径0.1～0.4 碧玉							№127	219-6
44	石製品	砥石	長さ7.1 幅4.9 厚さ4.4 重さ169.1ｇ 安山岩								
45	石製品	砥石	長さ6.2 幅4.4 厚さ3.2 重さ41.3ｇ 軽石								
46	石製品	砥石	長さ4.4 幅3.4 厚さ3.2 重さ24.7ｇ 軽石								
47	石製品	砥石	長さ[10.6] 幅[7.8] 厚さ8.3 重さ913.3ｇ 安山岩							№84 被熱により一部赤色化	
48	石製品	砥石	長さ8.1 幅7.3 厚さ5.1 重さ103.8ｇ 軽石							№68	
49	石製品	砥石	長さ7.1 幅3.9 厚さ3.2 重さ29.2ｇ 軽石								
50	石製品	砥石	長さ8.6 幅6.7 厚さ4.2 重さ121.8ｇ 軽石							№25	
51	石製品	砥石	長さ4.1 幅4.2 厚さ2.4 重さ15.7ｇ 軽石								



第92図　第２号住居跡出土遺物

第10表　第１号住居跡出土遺物観察表(第89-91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	14.2	17.6	3.8	ＣＩＫ	70	普通	にぶい橙	内外面煤付着 №5・6・10・12・20～29・33・34	107-2
2	土師器	甕	(14.0)	[7.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	明赤褐	布留甕模倣か №37	
3	須恵器	蓋	－	[1.4]	－	ＩＫ	5	良好	灰		222-3
4	石製品	磨石	長さ[6.1 幅[6.7] 厚さ[5.9] 重さ220.7ｇ 安山岩								

Wと推定される。

平面形は方形である。規模は、主軸方向6.45ｍ、直交軸方向7.45ｍである。深さは0.35ｍで、重複していない範囲の床面は平坦である。覆土は焼土、炭化物、黄灰色粘土を含む暗黄灰色土で、自然堆積である。床面に貼床、掘り方等は認められなかった。炉跡、柱穴、貯蔵穴等の施設についても検出できなかった。

遺物は南西コーナーを中心に、古墳時代前期の壺、広口壺、台付甕の破片が少量出土したのみである。その他に古墳時代後期の須恵器坏蓋、近世の瀬戸焼皿が混入している。

１は平底の甕である。球形の胴部にくの字に短い口縁部が接合する。口縁部上外面刷毛目後横ナデ、胴部は外面刷毛目、内面ヘラナデ。底面はヘラケズリ後ナデが加えられている。２次被熱のた

め、外面下半赤変。２は甕の上半である。やや長胴気味の胴部に平坦な口縁部が取り付く。口縁部は刷毛目後強く横ナデが加えられ、布留式の甕の影響と考えられる。３は古墳時代後期の須恵器坏蓋である。端部が外反する。上野産。４は、安山岩製の磨石である。大部分が欠失している。

本住居跡の時期は古墳時代後期、屋敷裏Ⅴ－１期である。

第４号住居跡（第 93 図）

Ｂ区の東側、Ｊ－11 グリッドに位置する。住居跡の本体は南側の調査区域外になり、煙道の一部を検出できたのみである。北カマドで、主軸方位はＮ－ 28°－Ｅである。

検出された煙道部は長さ 1.05 ｍ、幅 0.35 ｍで、床面はあまり焼けず、両壁面、奥壁が良く焼けていた。覆土は第１層がカマド天井部の崩落土、第２層が床面の堆積土と考えられる。

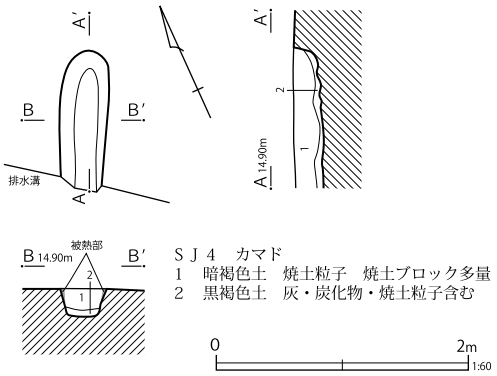
出土遺物はないが、遺構の形態と覆土の様相から古墳時代後期の遺構と判断した。

第６号住居跡（第 94 ～ 103 図）

Ｂ区の西側、Ｈ－９グリッドに位置する。遺構の南西側は調査区域外にかかる。北カマドで、カマドは造り替えられている。主軸方位をカマド１の軸方向とすると、Ｎ－ 45°－Ｗになる。

平面形は柱穴の位置から不整な正方形と推定される。規模は、主軸方向 5.20 ｍ、直交軸方向は調査区内で 4.70 ｍである。深さは 0.40 ｍで、床面はやや凹凸がある。覆土は焼土、炭化物、黄褐色を含む暗褐色土で、自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは２箇所検出された。カマド２→１の造り替えである。カマド１は北西壁中央で検出された。燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部が突出する。袖を含む長さは 1.50 ｍ、幅 0.55 ｍ、深さ 0.30 ｍである。覆土は第３層がカマド天井部流出土、第５層がカマド天井部崩落土、第６層が灰層である。左右両壁面はよく焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。袖は明褐色土の貼り付けによって構築されていた。



第93図　第４号住居跡

カマド２は中央より西側で検出された。燃焼部に相当する箇所に壁周溝が通り、焚口部には貯蔵穴が設けられている。壁から突出している煙道部は、長さ 1.10 ｍ、幅 0.50 ｍ、深さ 0.10 ｍである。左右両壁面はよく焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。覆土は第 15 層が埋戻し土、第 16 層が灰層である。

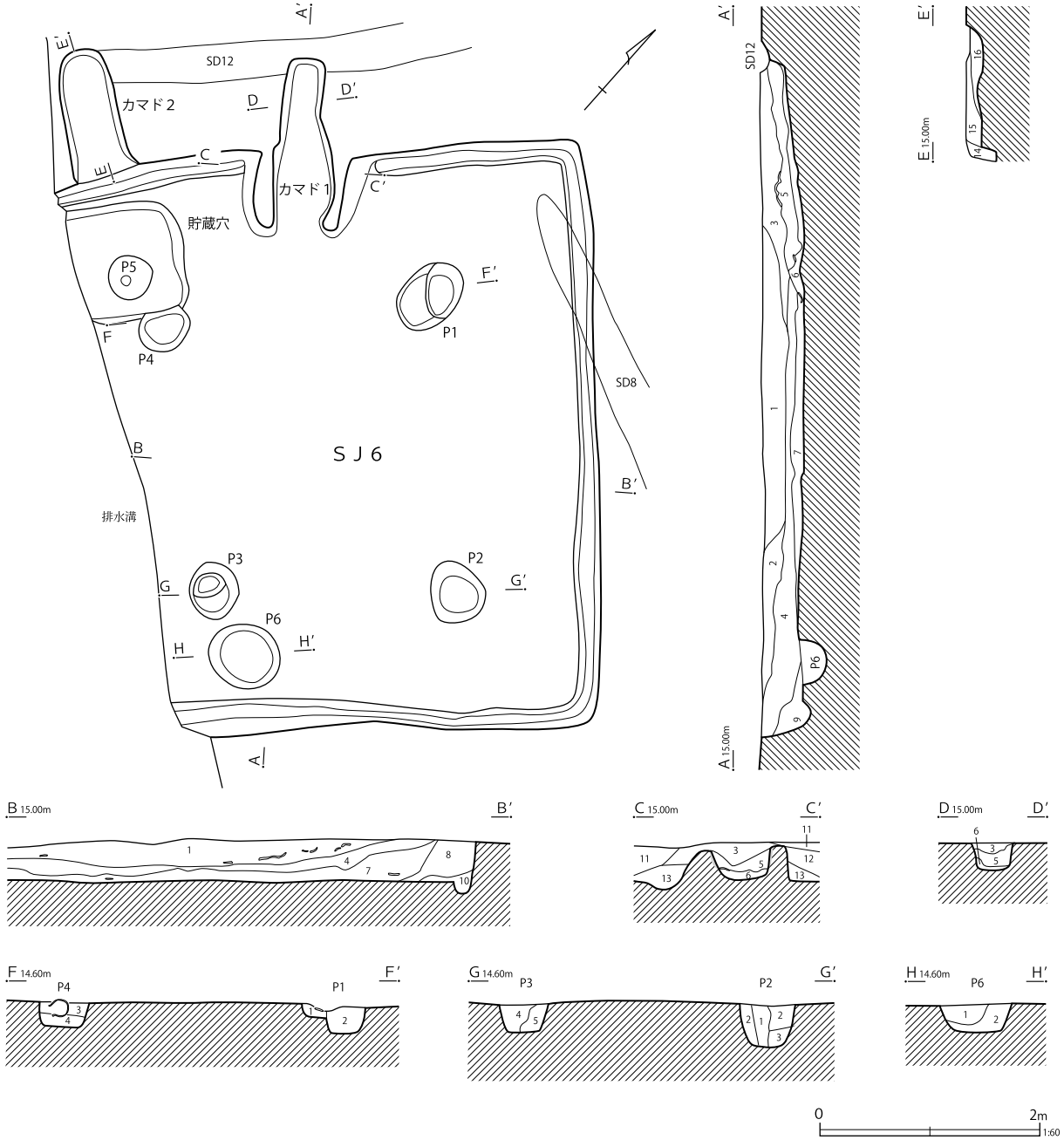
貯蔵穴はカマド２の前方に設けられていた。一辺 1.05 ｍ、深さ 0.35 ｍの方形である。覆土は黄褐色土、明褐色土を含む褐色土、暗褐色土である。

柱穴は６本検出された。規模は径 0.40 ～ 0.70 ｍ、深さ 0.20 ～ 0.35 ｍである。覆土は第１層が柱痕、第２・３層が掘り方埋土、第４層が灰白色粘土を含む暗褐色土である。

壁周溝は幅 0.15 ～ 3.0 ｍ、深さ 0.05 ｍで、全周する。

遺物は多く、床面と上層を中心に出土した。古墳時代後期の須恵器坏、壺、甕、土師器坏、鉢、高坏、壺、小型壺、甕、甑、ミニチュア、支脚、土錘が出土している。他に古墳時代前期の台付甕、壺、鉢が混入している。

１・２は須恵器である。１は坏である。底部は回転ヘラケズリだが、不規則なヘラケズリと「寸」のヘラ記号が認められる。全体に黒色を呈し、ず



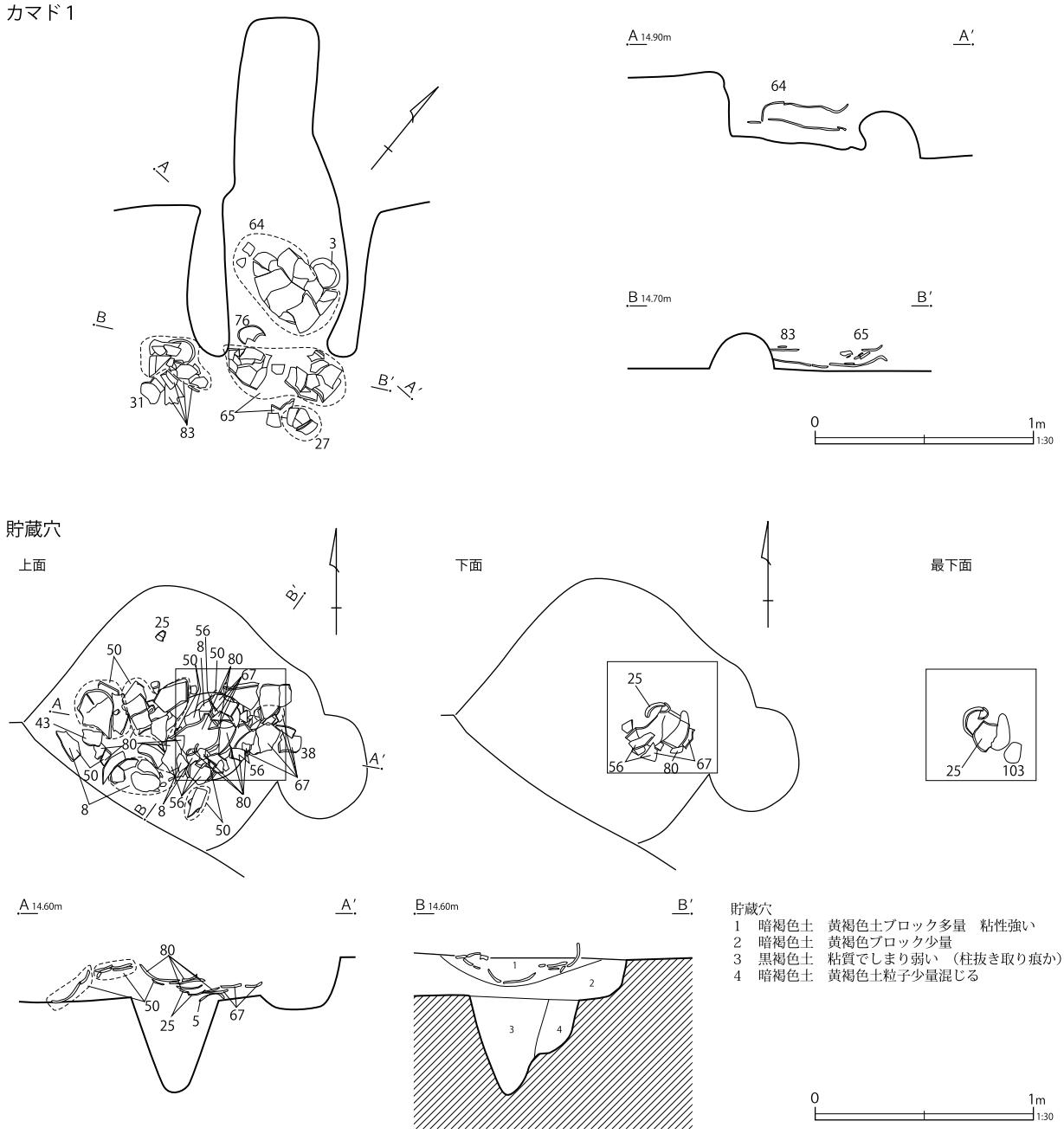
ＳＪ６
1　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子多量
2　暗褐色土　炭化物粒子少量
3　褐色土　焼土粒子・炭化物粒子・明褐色土粒子やや多
4　褐色土　黄褐色土粒子・焼土粒子微量
5　褐色土　焼土ブロック極めて多　炭化物含む
6　黒褐色土　灰層　灰・炭化物・焼土含む
7　暗褐色土　炭化物・黄褐色土含む
8　暗褐色土　黄褐色土やや多
9　暗褐色土　黄褐色土ブロック少量
10　黒褐色土　焼土粒子多量　炭化物粒子やや多
11　褐色土　焼土粒子・明褐色土粒子少量
12　褐色土　明褐色土粒子やや多
13　暗褐色土　焼土粒子多量　炭化物粒子やや多
14　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子少量
15　暗褐色土　明褐色土粒子・炭化物やや多
16　黒褐色土　焼土粒子・灰・炭化物粒子

Ｐ1・4
1　暗褐色土　灰白色粘質土を多量に混入　よくしまる
2　暗褐色土　灰白色粘質土・炭化物・黄褐色土を多量に混入　よくしまる
3　暗褐色土　白色粘質土を多量　黄褐色土・鉄分を含む　粘性なし
4　黒褐色土　シルト質の黒褐色土主体　鉄分を含む

Ｐ2・3
1　暗黒褐色土　炭化物・黄褐色土ブロックを多量に混入　粘性あり（柱痕）
2　暗黄褐色土　黄褐色土を密に多量に混入　粘性あり
3　暗黄褐色土　黄褐色土を密に多量に混入　粘性・しまり極めて強い
4　暗褐色土　灰白色粘質土・黄褐色土ブロックを少量混入　粘性なし
5　暗褐色土　灰白色粘質土・黄褐色土ブロックを少量混入　粘性あり

Ｐ６
1　褐色土　黄褐色土やや多
2　暗褐色土　明褐色土ブロック少量

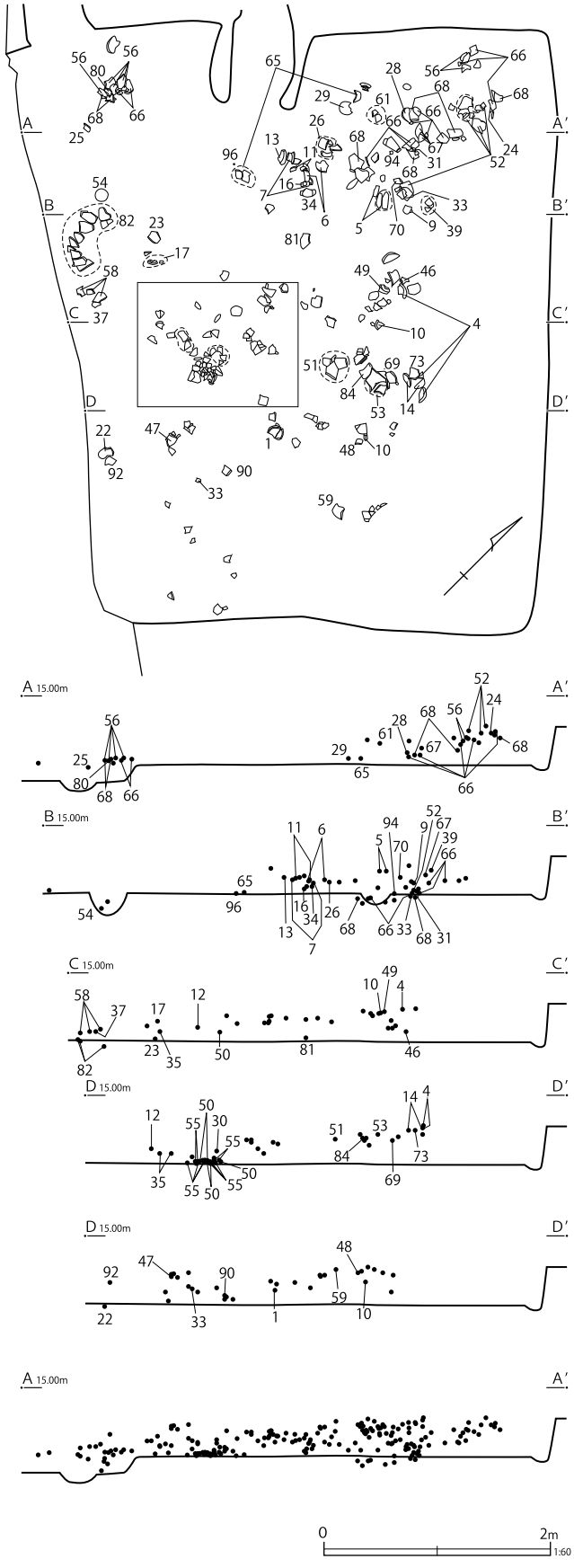
第94図　第６号住居跡（１）



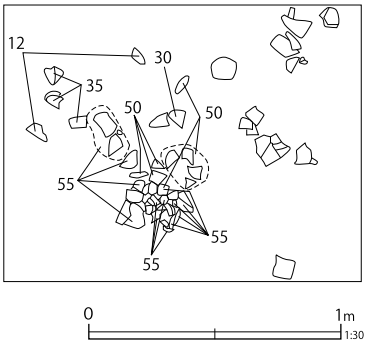
第95図　第６号住居跡（２）

っしりと重い。金山窯産。

以下は土師器である。３～７・９～42は坏、８は大型坏である。３～７・９～21は坏身模倣坏で、３・５・９・11・13・16・17・18・20は内外面黒色処理されている。13は漆塗り、16はその可能性がある。その他は炭素沈着である。18～20は口縁部が直線的で厚く、体部との境に沈線が入れられている。６・20は胎土に白色微粒子を多く含む。７は外面に黒斑が認められる。10はヘラ磨きが加えられている。８は大型の坏である。器肉が厚い。22～24は内湾口縁坏である。22・23は口縁部が直立して面を持ち、須恵蓋模倣坏に近い印象を受ける。24は鉢に近い。風化が著しく、調整は不明瞭である。25～28・

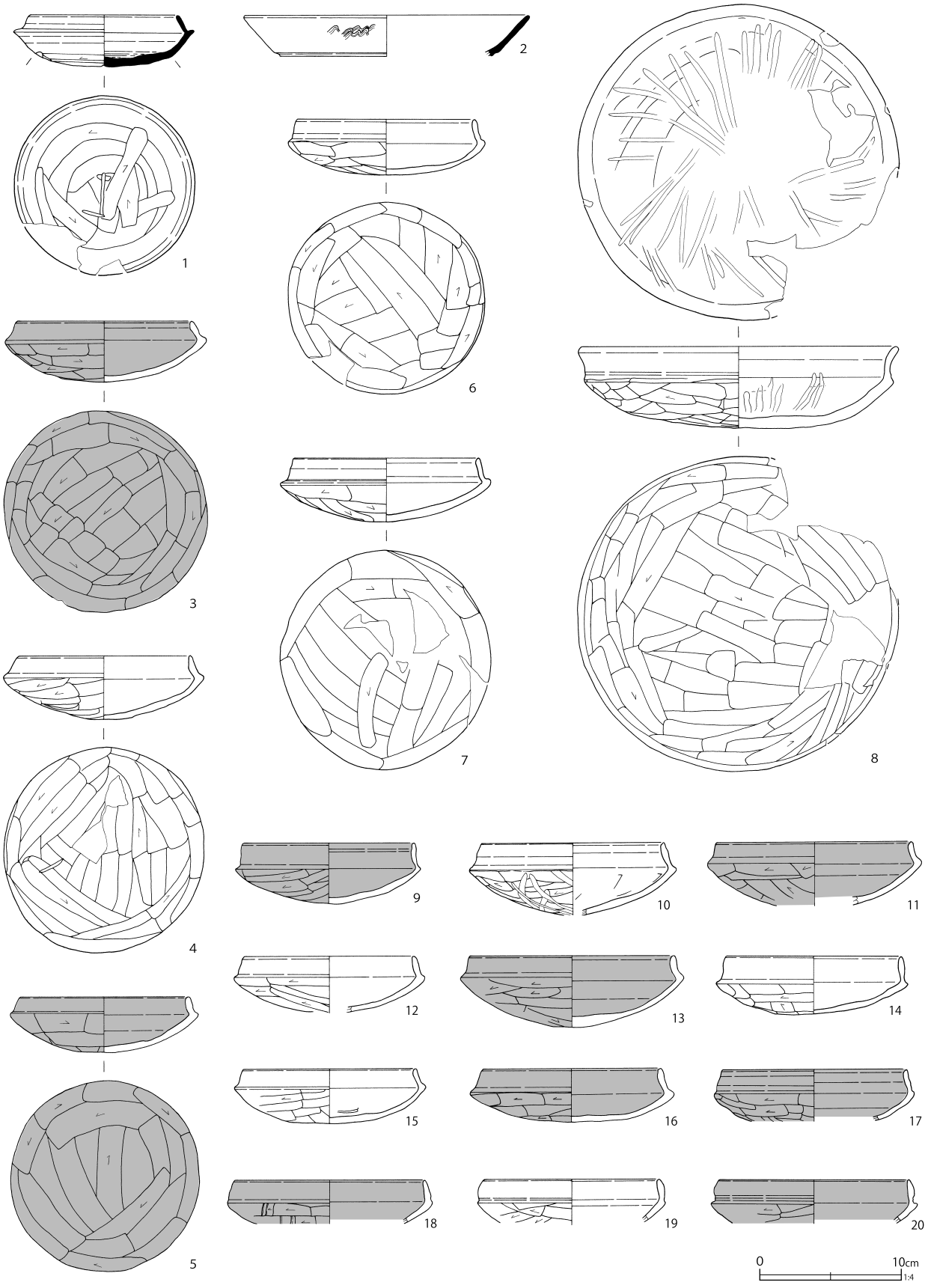


第96図　第６号住居跡（３）

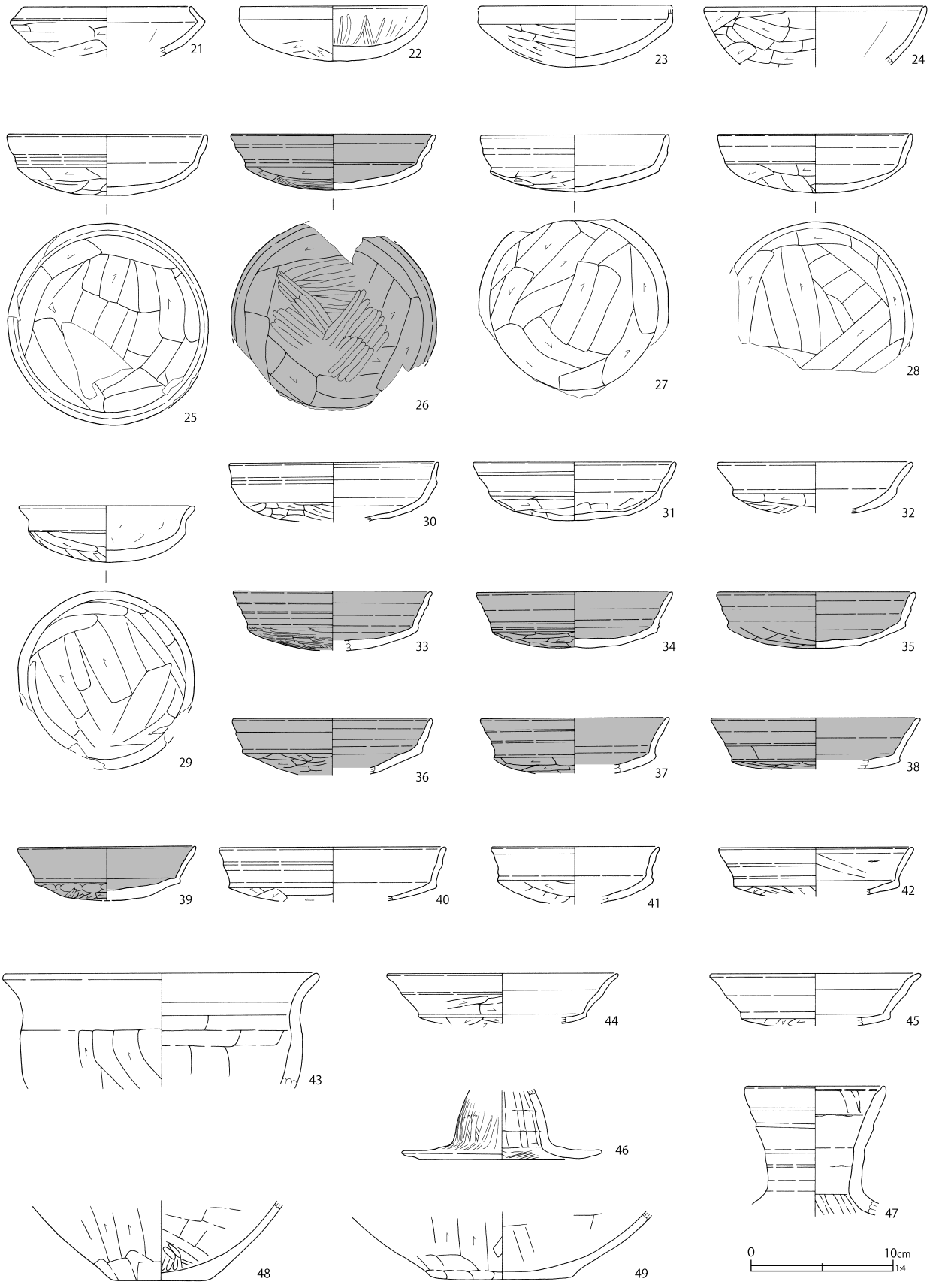


第97図　第６号住居跡（４）

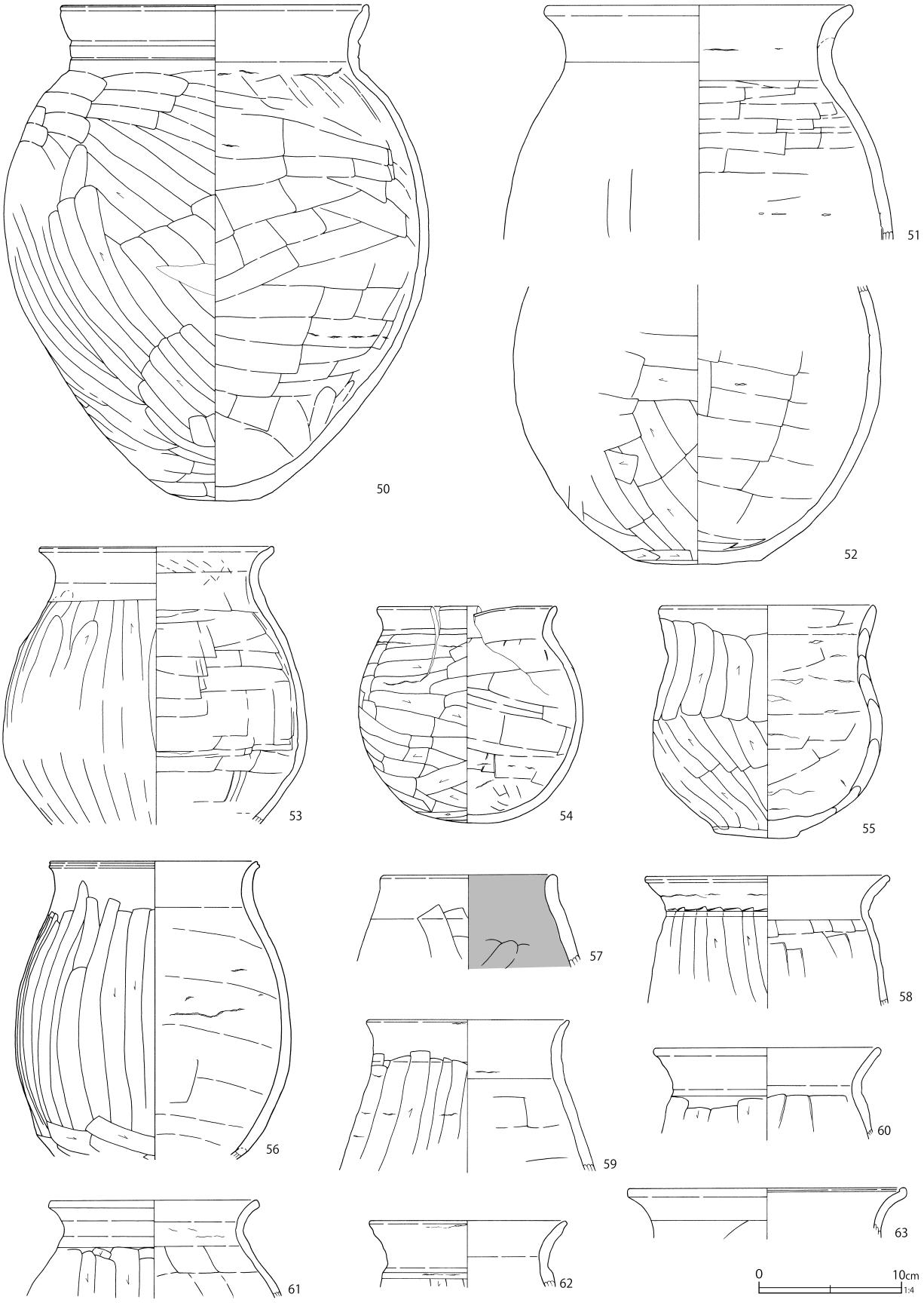
30・31・33 ～ 38・40・42・44・45 は有段口縁坏である。26・33 ～ 38 は、内外面黒色処理されている。25 は口縁部下段に沈線状に横ナデが施され、須恵蓋模倣坏に近い。28 は口縁部と体部の境目が不明瞭である。27 は胎土に白色微粒子を多く含む。33 は体部外面にヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。34 の内面は見込み部分に漆が塗られており、光沢がある。ヘラ磨きの可能性があるが単位を認識できない。37 は素地が白橙色を呈する。40 はやや大振りである。42 は全体に光沢のある橙色である。45 は内外面２次被熱が認められる。29・32・39・41 は坏蓋模倣坏である。いずれもやや小振りで、41 を除いて口縁部が大きく外反する 39 の体部はヘラケズリ後指オサエ、更にナデを施し、ヘラ磨きが加えられている。内外面黒色処理。43 は大型の鉢である。甑の可能性もあるが、器肉が厚く、胴部下位が丸く収まると考えられるため、鉢としておきたい。内外面に黒斑が認められる。46 は柱状脚の高坏である。下位が膨らみ、裾部は外反しながらほぼ水平に開く。柱状部外面は見目後ヘラ磨き、内面指ナデ。粘土の積み上げ痕が明瞭である。47 は提瓶や長頸壺の口縁部を模したと考えられる小型壺である。ロクロナデ状に丁寧に横ナデが施されている。48・49 は壺の底部である。外面、底面ヘラケズリ。48 は見込み部分にヘラ磨き状のナ



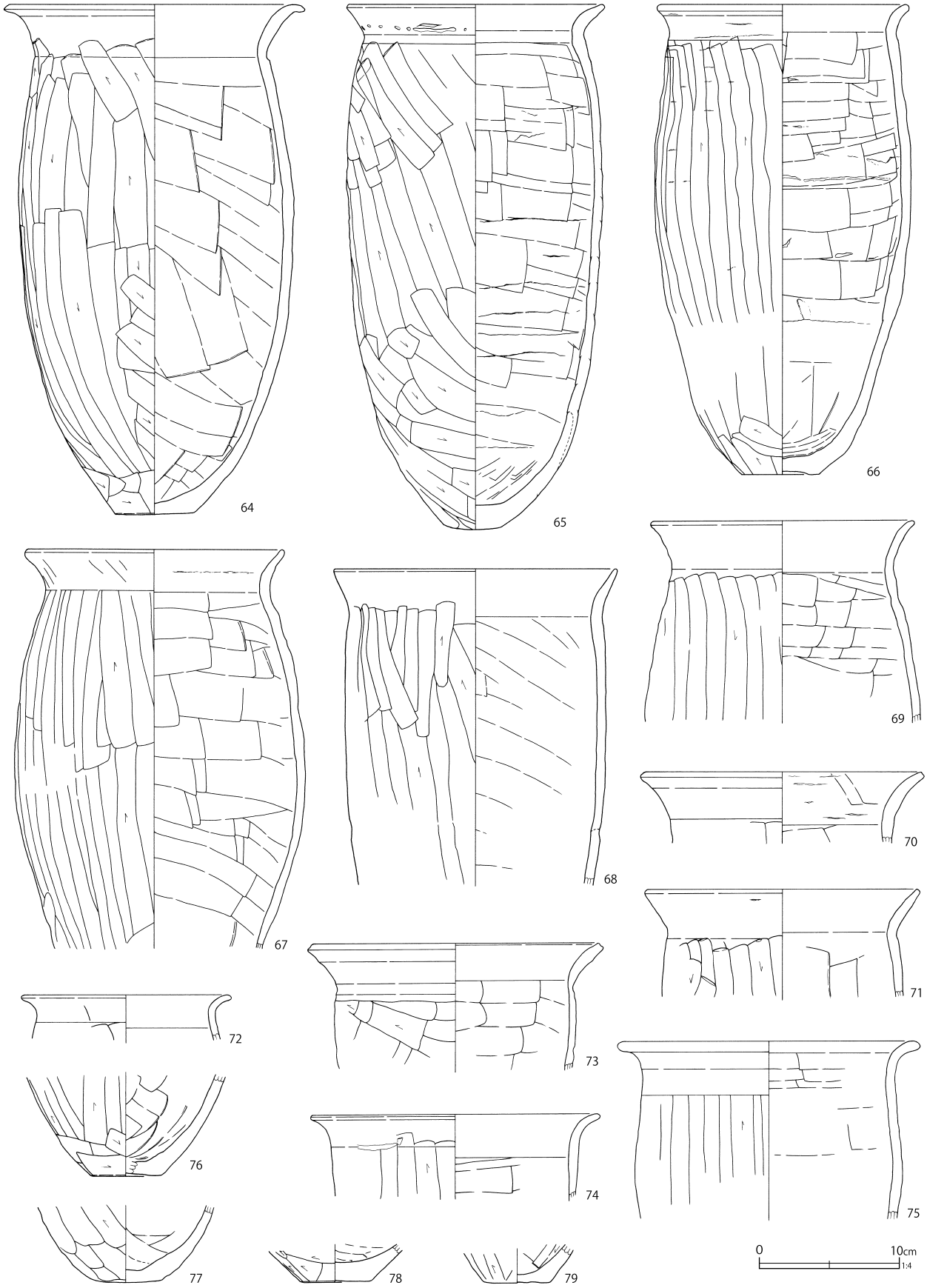
第98図　第６号住居跡出土遺物（１）



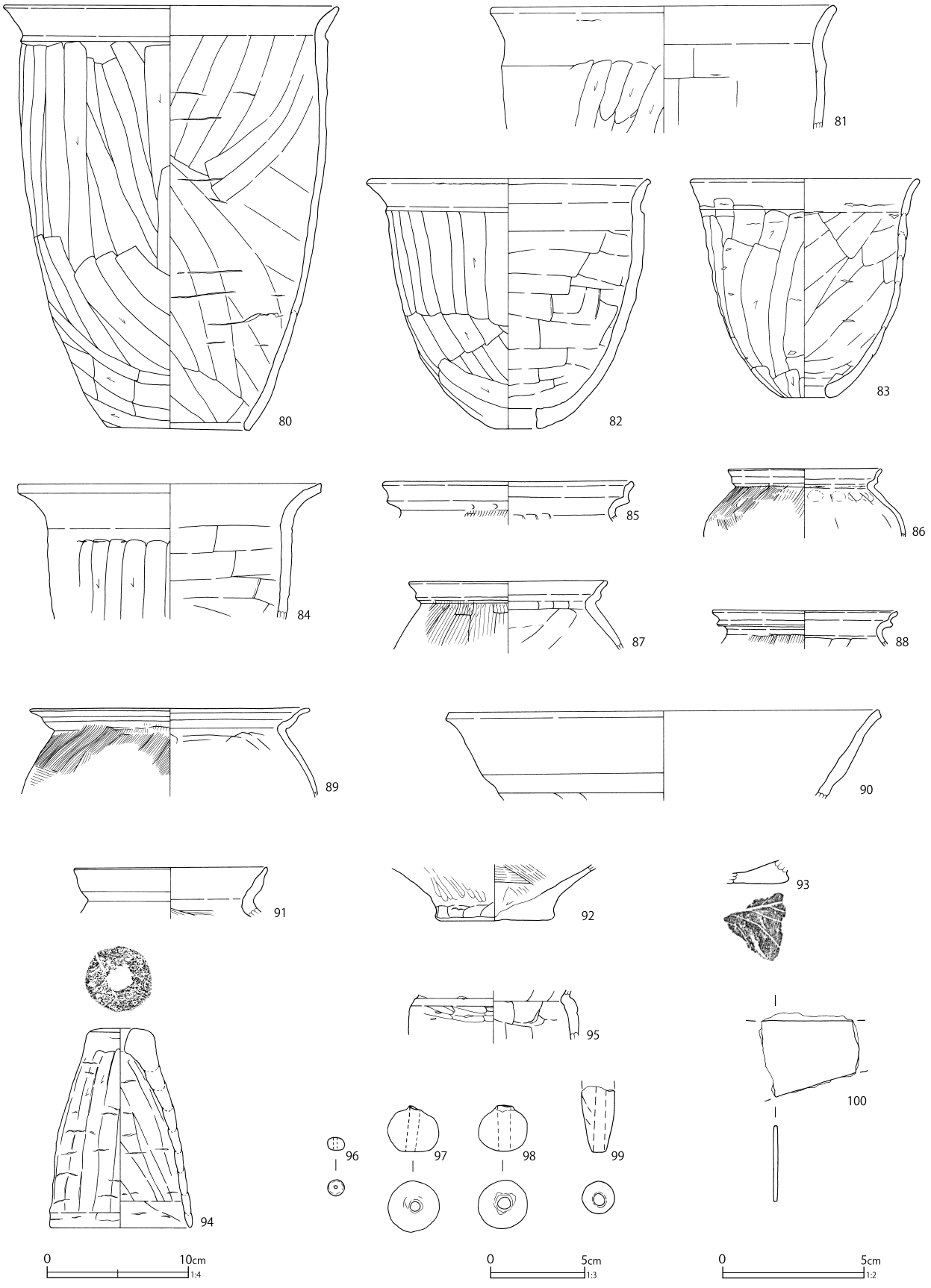
第99図　第６号住居跡出土遺物（２）



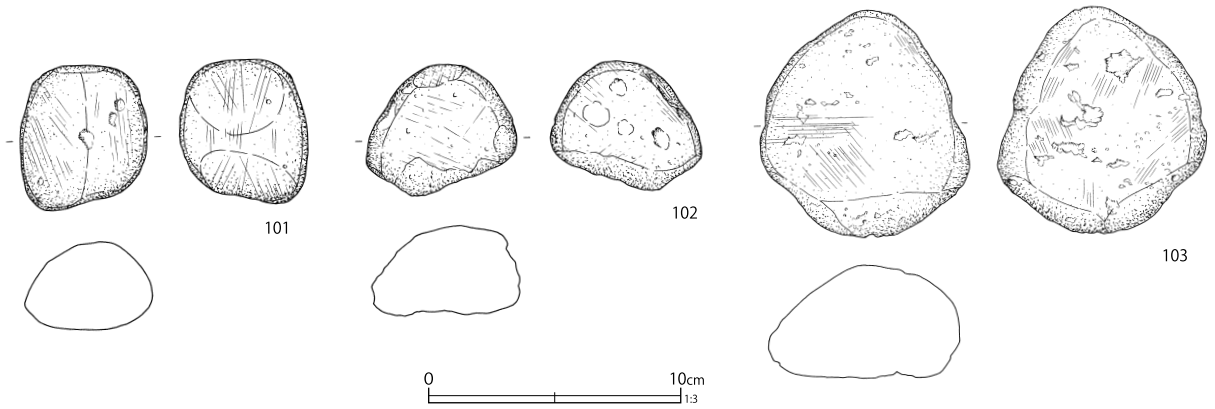
第100図　第６号住居跡出土遺物（３）



第101図　第６号住居跡出土遺物（４）



第102図　第６号住居跡出土遺物（５）



第103図　第６号住居跡出土遺物（６）

第12表　第６号住居跡出土遺物観察表（第98～103図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	10.3	3.7	－	ＨＩ	85	普通	灰	東毛産か　外面底部にヘラ記号　№111	108-1
2	須恵器	壺	(20.0)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩ	5	普通	灰黄	焼成不良の須恵器か	222-3
3	土師器	坏	12.4	4.3	－	ＡＣＥＧＨＩ	95	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理　漆塗り　カマド１№12	108-2
4	土師器	坏	12.2	4.5	－	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	橙	内外面黒色処理か　№54・132・134	108-3
5	土師器	坏	11.9	3.9	－	ＡＣＨＩＫ	100	普通	橙	内外面黒色処理　貯蔵穴№47・48	108-4
6	土師器	坏	12.3	3.9	－	ＡＣＨＩＫ	95	普通	にぶい橙	№159・161	109-1
7	土師器	坏	13.1	4.4	－	ＡＣＤＨＩＫ	95	普通	橙	外面黒斑あり　№162・169	109-2
8	土師器	大型坏	22.4	4.8	－	ＡＣＥＨＩ	90	普通	褐灰	暗文坏　6C2/4　内外面黒斑あり　№194・204　貯蔵穴№25・35　貯蔵穴	109-3
9	土師器	坏	12.1	4.2	－	ＣＨＩＫ	70	普通	褐	内外面黒色処理　№46	107-9
10	土師器	坏	(12.9)	[5.0]	－	ＡＣＨＩＫ	30	良好	にぶい赤褐	№59・118	110-1
11	土師器	坏	(13.9)	[4.4]	－	ＣＥＩＫ	30	普通	黒	内外面黒色処理　№165・167	110-2
12	土師器	坏	(12.2)	[3.9]	－	ＡＣＨＩＪＫ	30	普通	にぶい褐	№176・183	110-3
13	土師器	坏	(14.4)	5.0	－	ＡＣＩＫ	25	普通	黒褐	内外面黒色処理　№170	110-4
14	土師器	坏	12.5	4.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	明赤褐	№133・135	110-5
15	土師器	坏	(12.2)	3.8	－	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	内外面黒色処理か	110-6
16	土師器	坏	12.6	3.7	－	ＡＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　漆塗りか？　№164	110-7
17	土師器	坏	(13.0)	[3.6]	－	ＣＨＩＫ	25	普通	暗赤灰	内外面黒色処理　№178	110-8
18	土師器	坏	(13.4)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
19	土師器	坏	(12.9)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
20	土師器	坏	(13.6)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	橙	内外面黒色処理	
21	土師器	坏	(11.9)	[3.5]	－	ＡＣＨＩ	25	普通	にぶい赤褐		110-9
22	土師器	坏	(13.3)	3.8	－	ＣＥＨＩＫ	70	普通	浅黄橙	№151	110-10
23	土師器	坏	－	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	№177	
24	土師器	坏	(15.6)	[4.1]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	橙	№14	
25	土師器	坏	13.8	4.3	－	ＡＣＨＩＫ	85	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　№192　貯蔵穴№11・46・47　P4	109-4
26	土師器	坏	14.2	4.0	－	ＡＥＨＩＫ	80	普通	にぶい褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№158	111-1
27	土師器	坏	13.2	4.0	－	ＡＣＨＩＫ	85	普通	明赤褐	有段口縁坏　カマド１№7	111-2
28	土師器	坏	(13.6)	4.1	－	ＡＣＥＨＩＫ	65	普通	明赤褐	有段口縁坏　№29	112-1
29	土師器	坏	12.2	3.9	－	ＡＣＨＩＪ	90	不良	にぶい黄橙	内外面煤付着　№156	111-3
30	土師器	坏	(14.8)	[4.1]	－	ＡＣＥＩＫ	20	普通	褐灰	有段口縁坏　№79	
31	土師器	坏	12.2	4.0	－	ＡＣＥＨＩ	70	普通	灰白	有段口縁坏　№25　カマド１№1	112-2
32	土師器	坏	(13.7)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	灰黄褐		
33	土師器	坏	(13.9)	[4.1]	－	ＡＣ	45	普通	褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№141・201	112-3
34	土師器	坏	(13.9)	3.7	－	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	にぶい赤褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　漆塗り　№160	112-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
35	土師器	坏	14.0	3.9	－	ＡＣＨＩＫ	75	普通	にぶい褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№180～182	112-5
36	土師器	坏	(14.0)	[3.9]	－	ＣＨＩＫ	20	普通	橙	有段口縁坏　内外面黒色処理	
37	土師器	坏	(13.3)	[3.8]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№200	
38	土師器	坏	(14.8)	[3.5]	－	ＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　貯蔵穴№4	
39	土師器	坏	(12.4)	3.7	－	ＡＨＩＪＫ	40	普通	褐灰	内外面黒色処理　№44	
40	土師器	坏	(16.0)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	明赤褐	有段口縁坏	
41	土師器	坏	(11.9)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙		
42	土師器	坏	(13.8)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＪＫ	35	普通	にぶい赤褐	有段口縁坏	112-6
43	土師器	鉢	(22.2)	[8.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	外面煤付着　内外面黒斑あり　貯蔵穴№8	
44	土師器	坏	(16.4)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙	有段口縁坏	
45	土師器	坏	(14.8)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	褐	有段口縁坏	112-7
46	土師器	高坏	－	[4.8]	(14.3)	ＡＨＩＪ	15	普通	にぶい褐	脚内部黒色　№52	
47	土師器	壺	(9.8)	[8.9]	－	ＡＥＨＩＫ	55	普通	橙	№104	112-8
48	土師器	壺	－	[5.4]	6.9	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	№117	
49	土師器	壺	－	[4.8]	(10.4)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内面煤付着　№55	
50	土師器	壺	(21.3)	40.0	5.4	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№78・81～83・94・100　貯蔵穴№7・9・15・21・27・29・32・35・37・43・45	111-4
51	土師器	壺	(21.4)	[16.3]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№122	112-9
52	土師器	壺	－	[19.5]	9.0	ＡＨＩＫ	50	普通	灰黄褐	№9・12・15・43	113-2
53	土師器	壺	16.3	[19.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	№128	113-3
54	土師器	小型甕	12.4	15.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	橙	外面黒斑あり　№195　P4	113-4
55	土師器	小型甕	15.0	16.2	5.8	ＣＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	外面煤付着　輪積痕明瞭　№85・86・88～92・94・95・97・99・101・102	113-5
56	土師器	甕	14.3	[20.9]	－	ＣＤＥＦＨ	80	普通	にぶい橙	№3・5・185・188・189・191　貯蔵穴№10・16～18・24・31・39　カマド　貯蔵穴	113-1
57	土師器	甕	(12.0)	[6.4]	－	ＦＨＩＫ	15	普通	灰	内面黒色処理	
58	土師器	甕	(17.1)	[9.1]	－	ＡＣＥＦＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№197～199	
59	土師器	甕	(14.2)	[10.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	25	普通	明黄褐	№139	
60	土師器	甕	(15.8)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	明赤褐		
61	土師器	甕	(14.6)	[6.8]	－	ＡＣＤＥＨＩ	20	普通	橙	№155	
62	土師器	甕	(13.8)	[4.7]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐		
63	土師器	甕	(19.6)	[3.4]	－	ＣＥＨＫＬ	10	普通	橙		
64	土師器	甕	20.1	36.5	5.7	ＡＣＤＥＩＫ	95	普通	にぶい褐	内外面煤付着　カマド1№11	114-1
65	土師器	甕	18.0	37.6	3.5	ＡＣＤＥＨＩ	90	普通	浅黄橙・橙	内外面煤付着　№154・173　カマド１№８・９　カマド１	114-2
66	土師器	甕	(17.4)	33.6	5.5	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	赤	内外面煤付着　№2・6・7・20・23・28・30～32・37・186・187	114-3
67	土師器	甕	18.0	[28.5]	－	ＡＤＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№21・22・193　貯蔵穴№1～4・6・20・21・23・24・30・39・42	115-1
68	土師器	甕	20.0	22.6	－	ＤＥＦＧＨ	40	普通	にぶい黄橙	№8・17・27・33・39・190・191	115-2
69	土師器	甕	(18.8)	[14.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	25	普通	黒褐	外面煤付着　№129	113-6
70	土師器	甕	(20.0)	[5.0]	－	ＡＣＦＨＩ	15	普通	にぶい橙	輪積痕明瞭　№41	
71	土師器	甕	(19.4)	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
72	土師器	甕	(14.6)	[3.1]	－	ＢＣＤＦＨＩ	5	普通	にぶい赤褐		
73	土師器	甕	(20.6)	[9.0]	－	ＡＣＥＧＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№131	
74	土師器	甕	(20.6)	[6.1]	－	ＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
75	土師器	甕	(20.7)	[12.6]	－	ＡＣＨＩ	25	普通	明赤褐	外面煤付着	
76	土師器	甕	－	[7.1]	(5.2)	ＡＣＤＩＫ	40	普通	にぶい橙	68と同一個体の可能性あり　カマド1№10	115-3
77	土師器	甕	－	[5.3]	5.4	ＡＣＤＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	
78	土師器	甕	－	[2.6]	(5.2)	ＡＣＤＦＫ	40	普通	にぶい赤褐		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
79	土師器	甕	－	[2.3]	4.7	ＡＣＨＩＫ	80	普通	灰褐		
80	土師器	甑	23.4	30.0	10.0	ＡＣＤＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№189　貯蔵穴5・7・12・13・18～20・26・28・31・33・34・40	115-4
81	土師器	甑	(24.4)	[8.6]	－	ＣＦＨＩ	10	普通	にぶい黄橙	№171	
82	土師器	甑	19.4	17.8	(3.0)	ＡＣＤＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　単孔砲弾形　№196	115-5
83	土師器	甑	16.0	15.3	3.9	ＣＥＨＩＫ	90	普通	明赤褐	内外面煤付着　カマド１№2・3・5・6	115-6
84	土師器	甑	(21.5)	[9.4]	－	ＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	№127	
85	土師器	台付甕	(17.7)	[2.8]	－	ＡＣＨＩＪＫ	10	普通	灰黄褐		
86	土師器	台付甕	(10.8)	[4.8]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄		
87	土師器	台付甕	(14.0)	[4.8]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙		
88	土師器	台付甕	(13.0)	[2.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐		
89	土師器	台付甕	(19.6)	[6.2]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	にぶい黄橙		
90	土師器	台付甕	(30.6)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	山陰系口縁Ｓ字甕　外面煤付着　№140	
91	土師器	甕	(14.0)	[3.2]	－	ＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	５の字口縁甕　内外面煤付着	
92	土師器	壺	－	[3.9]	8.2	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	№150	
93	土師器	甕	－	[1.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄	底部木葉痕	
94	土製品	支脚	－	14.0	10.0	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	上径4.8㎝　孔径1.6～1.8㎝　№34	114-4
95	土師器	ミニチュア	－	[2.6]	－	ＡＤＨＩ	15	良好	黒	内外面・断面とも黒色	
96	土製品	土玉	径0.85×0.8　高さ0.7 孔径0.2　重さ0.5g			ＡＨＩ	100	普通	黒褐	№174	218-11
97	土製品	土錘	径2.7×2.7　高さ2.4 孔径0.5　重さ16.8g			ＡＩＫ	100	普通	黒	土玉	218-12
98	土製品	土錘	径2.6×2.5　高さ2.4 孔径0.6　重さ15.8g			ＡＣＨＩＫ	100	普通	黒	土玉	218-13
99	土製品	土錘	長さ[4.5]　大径1.7 孔径0.6×0.5　重さ8.1g			ＨＪＫ	50	普通	にぶい褐		218-14
100	鉄製品	のべ板状品	長さ[3.5]　幅2.7　厚さ0.2　重さ11.2ｇ								222-1
101	石製品	砥石	長さ4.4　幅3.9　厚さ2.8　重さ22.4ｇ　軽石								
102	石製品	砥石	長さ4.2　幅4.8　厚さ3.1　重さ20.4ｇ　軽石								
103	石製品	砥石	長さ8.4　幅7.7　厚さ4.5　重さ112.0ｇ　軽石							貯蔵穴№49	

デが施されている。49 は白みがかった橙色である。50 ～ 53 は壺である。口径に比して胴部径が大きく、胴部に張りがあるものを壺とした。51 は胴部上位に最大径があり、口縁部が直立気味で頸部がある。口縁部は横ナデによって仕上げられ、中位に段を持つ。胴部は横もしくは斜め方向のヘラケズリである。内面はヘラナデが施されている。51 は外面が剥離している。52 の底面はヘラケズリである。53 は胴部下位に最大径があり、その部分に大きな接合単位がある。外面のケズリは何度も重複して施され、内面のヘラナデは胴部下位の接合部分が強くナデつけられている。54・55 は小型甕である。54 は丸底で、上半分が裂けた状態で焼成されている。外面に大きな黒斑が認められる。55 は器肉が分厚く、粘土帯の接合痕が明瞭に開裂として認められる。風化著しく、２次被熱で赤化している。

57 ～ 79 は甕である。62・72 は小型である。57 は口縁部が短く直立する独特の器形で、内面が黒色処理されている。鉢の可能性も考えられる。他は口縁部がくの字状になる長甕である。口縁部には横ナデ、胴部には外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデが施される。底部は外周横方向ヘラケズリ、底面ヘラケズリ、内面は胴部から連続するヘラナデだが、66 は見込み部分のみにヘラナデが重ねられている。69 は素地が黒褐色を

呈し、74 は胎土が密である。75 は風化著しく調整が不明瞭である。砲弾形に近い器形とも考えられ、甑の可能性が考えられる。76 は 68 と胎土、色調が共通しており、同一個体の可能性がある。80 ～ 84 は単孔の甑である。所謂砲弾形で、口縁部横ナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向もしくは斜方向のヘラナデである。82・83 は小型で、82 は孔が歪み、その周辺の風化が進んでいる。83 の口縁部は指頭による凹凸が著しい。

85 ～ 93 は古墳時代前期のものである。85 ～ 89 はＳ字状口縁台付甕である。86・88 はやや小型である。87 は頸部内面にヘラが強く当たり、面ができている。88 は硬質で、胎土に大粒の角閃石を含む。90 は所謂山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。口縁端部は面を持ち、全体に横ナデが施されている。91 は小型の５の字状口縁甕である。口縁部内外面横ナデ、胴部外面は風化のため不明、内面は刷毛目である。93 は底面に木葉痕が認められる。

94 は支脚である。上面には径 1.6 ～ 1.8cm の穿孔が認められる。外面縦方向ヘラケズリ、内面縦方向ヘラナデ。端部には横ナデが施されている。

95 はミニチュアの壺と考えられる。坩等の器種とするには調整が乱れており、ミニチュアと考えた。

96 は小型の土玉である。ヘラケズリ後ヘラ磨きが施され、光沢がある。97 ～ 99 は土錘である。97・98 は所謂土玉で、法量が揃っておりセットと考えられる。99 は上半を欠失する。全体に斜めのナデが施されている。100 は延板状の鉄製品である。用途不明である。

101 ～ 103 は、軽石製の砥石である。いずれも使用痕は、僅かに擦痕が見られる程度である。101 は風化が進んでいる。103 の平坦面は使用により摩耗している。

本住居跡の時期は６世紀第２四半期、屋敷裏Ⅴ－１期である。

第７号住居跡（第 104・105 図）

Ｂ区のほぼ中央、Ｈ・Ｉ－ 11 グリッドに位置する。第４号土壙と重複し、本遺構の方が古い。西カマドで、主軸方位はＮ－ 59°－Ｅである。

平面形はやや東辺の長い長方形である。規模は、主軸方向 3.50 ｍ、直交軸方向 3.10 ｍである。深さは 0.30 ～ 0.35 ｍで、床面はやや凹凸がある。覆土は酸化鉄を多く含む褐灰色土、灰色土で自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは北西壁のやや南寄りで検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が壁から大きく突出している。袖を含む長さは 1.95 ｍ、幅 0.45 ｍである。焚口部の手前は段状に５cm ほど浅くなり、再び下がってカマド本体となる。カマド自体の深さは竪穴とほぼ同様である。覆土は第６層が天井部崩落土、第７層が灰層と考えられる。火床面、壁面は良く焼けており、煙道奥壁も焼土化している。袖は地山の削り出しである。

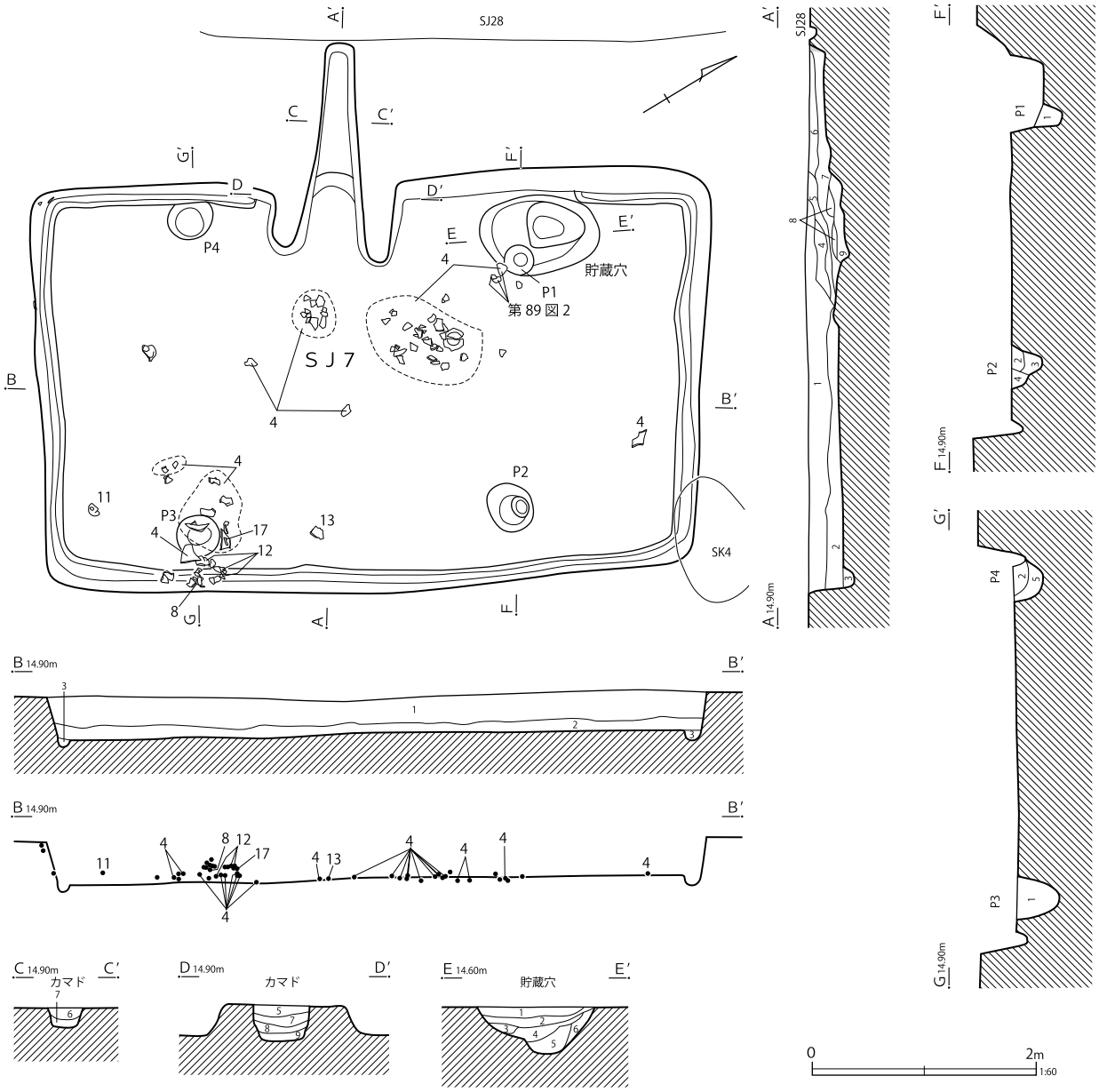
貯蔵穴は、カマド右側のスペースのほぼ中央に造られていた。南北方向に長い楕円形で、長径 1.05 ｍ、短径 0.75 ｍ、深さ 0.40 ｍである。覆土は炭化物、焼土、灰を含む暗褐色土、黒褐色土、褐色土の自然堆積である。遺物は出土していない。

柱穴は４基確認した。規模は径 0.25 ～ 0.40 ｍ、深さ 0.20 ～ 0.35 ｍである。覆土は黄褐色土を多量に含む暗褐色土、明褐色土である。Ｐ１・３の周辺からは遺物が多く出土している。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.30 ｍ、深さ 0.10 ｍで、貯蔵穴に接する箇所からカマド左側袖まで巡り、ほぼ全周する。

遺物は少なく、カマド手前とＰ１・３周辺から集中して出土した。床面近くからの出土が多い。古墳時代後期の坏、甕、壺、小型壺の破片が出土し、古墳時代前期の二重口縁壺、刷毛目甕、高坏、鉢が混入している。

１～７は古墳時代後期の土師器である。１・２は坏身模倣坏、３は坏蓋模倣坏である。１は器肉

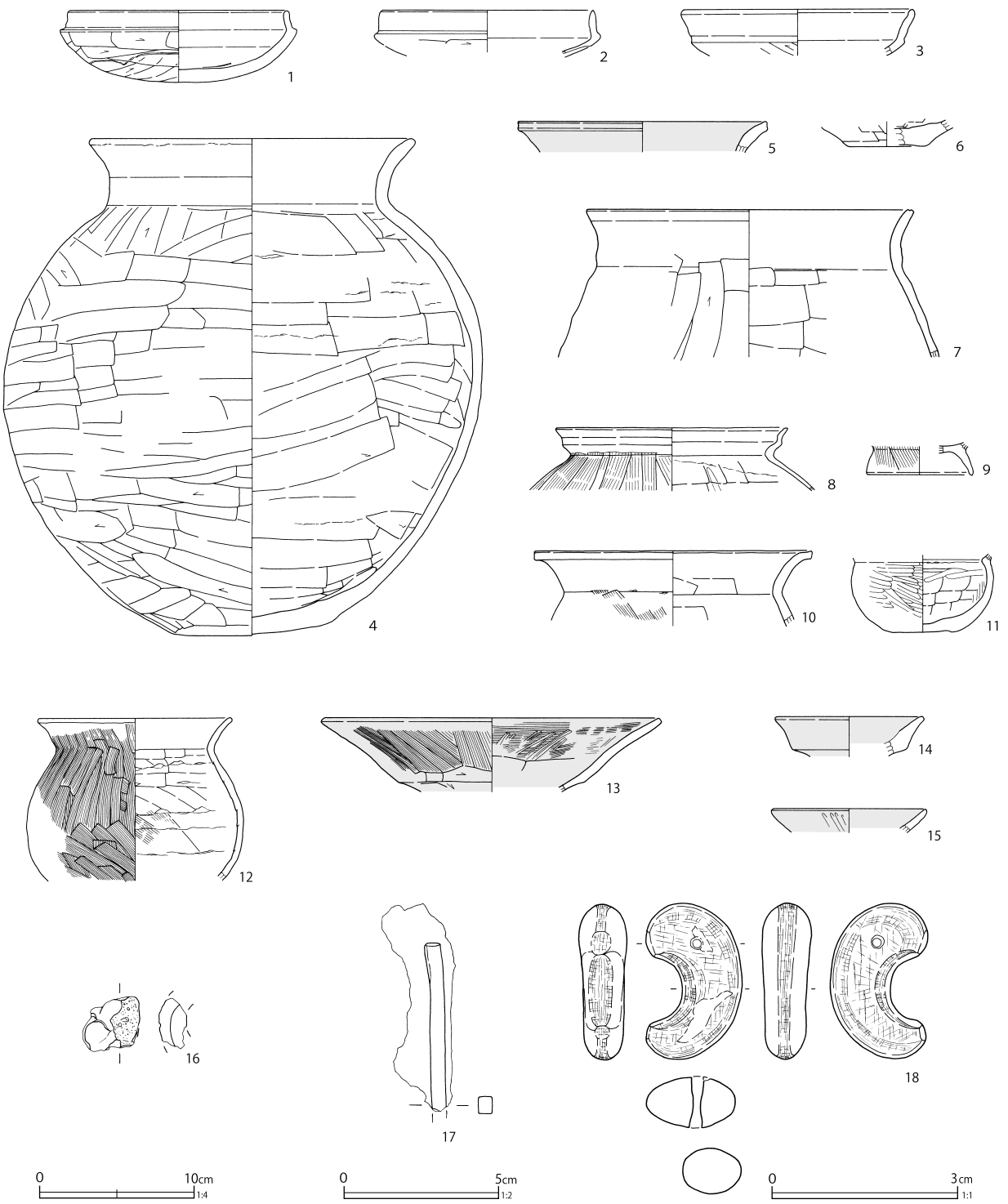


ＳＪ７
1　褐灰色土　粘土質　酸化鉄多量　しまり強い
2　灰色土　　粘土質　酸化物を含むも１層より少なくなる　１層より粒子かなり細かい　しまり１層よりかなり強くなる
3　暗褐色土　粘土質　酸化物多量　粒子細かい　しまり強い
4　褐灰色土　粘土質　酸化物多量　しまり強い　流入土
5　褐灰色土　粘土質　酸化物少量　しまり強い　流入土
6　褐灰色土　粘土質　焼土をブロック状に含む　酸化物少量　しまり強い
7　暗褐色土　粘土質　灰層　焼土・灰をブロック状に含む　酸化物多量　しまり強い
8　赤褐色土　粘土質　焼土層　天井部被熱面と考えられる　しまり強い
9　黒灰色土　シルト質　灰層　焼土を一部に含む　しまり強い

貯蔵穴
1　暗褐色土　炭化物・焼土を少量混入　しまりあり
2　黒褐色土　灰・焼土ブロックを多量に混入
3　黒褐色土　炭化物・焼土を少量混入　しまりあり
4　黒褐色土　灰・焼土ブロックを混入
5　褐色土　　焼土を少量混入　しまり極めて強い
6　褐色土　　炭化物を少量混入　しまり極めて強い

Ｐ１～４
1　暗褐色土　大粒の黄褐色土ブロックを混入
2　暗褐色土　黄褐色土少量　しまりあり
3　暗褐色土　黄褐色土密に含む
4　明褐色土　黄褐色土密に多量に含む
5　暗褐色土　シルト質　粘性・しまり強い

第104図　第７号住居跡



第105図　第７号住居跡出土遺物

が厚く、重量感がある。暗褐色である。坏部外面に整形時の粘土の捩れが、見込み部分にヘラの痕跡が認められる。２の外面は風化が著しい。内外面黒色処理されている可能性がある。４～６は壺である。口縁部内外面横ナデ、胴部外面、底面ヘラケズリ、内面はヘラナデ。５は若干外反する口縁端部である。風化が進み調整は不明瞭だが、内外面に赤彩の痕跡が残る。７は甕である。口縁部

第13表　第７号住居跡出土遺物観察表（第105図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.1)	4.6	－	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	№４	
2	土師器	坏	(13.5)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面黒色処理か	
3	土師器	坏	(13.8)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい褐		
4	土師器	壺	20.5	32.1	10.3	ＡＣＥＨＩＪ	85	普通	にぶい黄橙	№5・6・8～11・13～15・33・36・38～48・50～52	116-1
5	土師器	壺	(15.9)	[2.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	赤	内外面赤彩	
6	土師器	壺	－	[1.6]	(5.0)	ＢＥＨＩＫ	40	普通	灰褐		
7	土師器	甕	(21.0)	[9.5]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	内面煤付着　貯蔵穴	
8	土師器	台付甕	(14.8)	[4.1]	－	ＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№27	
9	土師器	台付甕	－	[2.3]	(6.6)	ＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	(17.8)	[4.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	淡橙		
11	土師器	鉢	－	[5.0]	3.7	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	№31	116-2
12	土師器	甕	(12.6)	[10.5]	－	ＡＣＨＩＪＫ	30	普通	にぶい橙	外面煤付着　№16・18・20	116-3
13	土師器	高坏	(21.8)	[4.7]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面赤彩　№53	
14	土師器	器台	(9.2)	[2.6]	－	ＡＣＨＩ	30	普通	赤	内外面赤彩　内面黒斑あり	
15	土師器	器台	(9.8)	[1.5]	－	ＥＩＫ	10	普通	赤	内外面赤彩	
16	土製品	羽口	長さ[3.7]　幅[3.5]　重さ12.9ｇ			ＡＩ	20	普通	黄橙		220-3
17	鉄製品	棒状品	長さ[5.4]　幅0.5　厚さ0.6　重さ19.1ｇ							№12	222-1
18	石製品	勾玉	長さ2.5　幅1.6　厚さ0.8　重さ3.8ｇ　孔径0.1　滑石								219-7

内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。

８～15は古墳時代前期のものである。９は台付甕の脚台部だが、極端に低平である。天井部には砂が付着する。10は口縁部が大きく外反する甕の口縁部で、端部が直立する面を持つ。11は鉢としたが坩になる可能性がある。底面は若干凹む平底である。12は小型の刷毛目甕である。13は内外面ヘラナデ後刷毛目、更にヘラ磨きが加えられているが、風化著しく明瞭に単位を認識できなかった。14・15は器台である。内外面赤彩。ヘラ磨きが施されているが、風化のため部分的にしか認識できなかった。

16は小口径羽口である。外面は還元、発泡し、断面は層状に赤化している。使用頻度が高かったようで､傷みが著しい｡17は棒状の鉄製品である。先端が若干曲っている。断面は方形である。18は滑石製の勾玉で、深緑色を呈する。入念に整形され、抉り部分は最後に仕上げられている。穿孔は0.1㎝程と極小で、両面穿孔である。

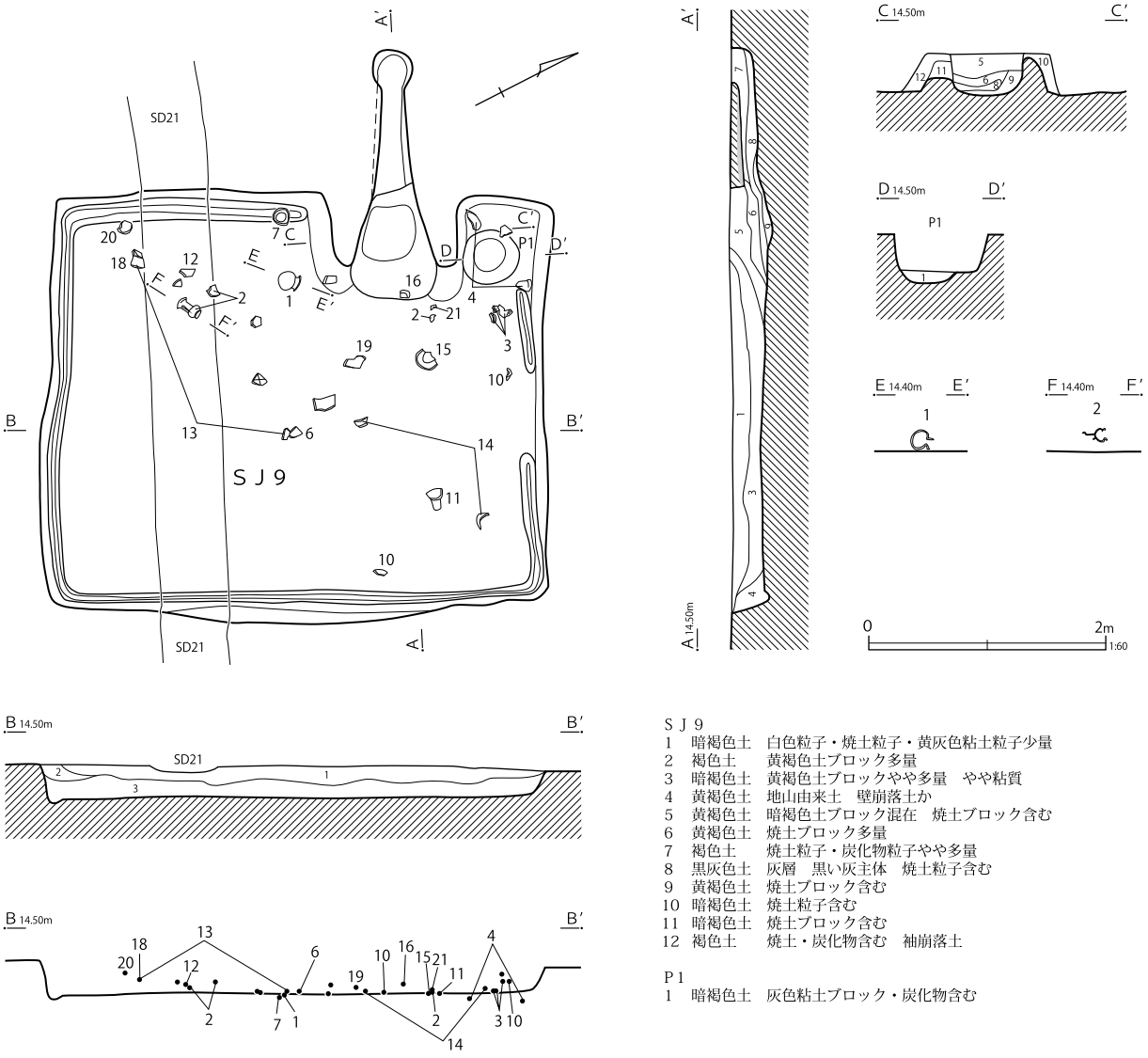
本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－３期である。

第９号住居跡（第106・107図）

Ａ区のほぼ中央、Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置する。第21号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。西カマドで、主軸方位はＮ－62°－Ｅである。

平面形は南北に長い長方形である。規模は、主軸方向3.65ｍ、直交軸方向4.30ｍである。深さは0.25ｍで、床面はほぼ平坦である。カマドの手前の部分が良く踏み固められていた。覆土は白色粒子、焼土粒子、地山由来の黄褐色粘土を含む褐色土、暗褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは北西壁の中央やや北寄りで検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が壁から大きく突出している。天井部が一部遺存しており、奥壁部分はピット状を呈する。袖を含む長さは2.10ｍ、幅0.65ｍである。焚口部から燃焼部にかけて５㎝ほど皿状に掘り窪められ、黄褐色土（第９層）が充填された上に、火床面が形成されてい



ＳＪ９
1　暗褐色土　白色粒子・焼土粒子・黄灰色粘土粒子少量
2　褐色土　黄褐色土ブロック多量
3　暗褐色土　黄褐色土ブロックやや多量　やや粘質
4　黄褐色土　地山由来土　壁崩落土か
5　黄褐色土　暗褐色土ブロック混在　焼土ブロック含む
6　黄褐色土　焼土ブロック多量
7　褐色土　焼土粒子・炭化物粒子やや多量
8　黒灰色土　灰層　黒い灰主体　焼土粒子含む
9　黄褐色土　焼土ブロック含む
10　暗褐色土　焼土粒子含む
11　暗褐色土　焼土ブロック含む
12　褐色土　焼土・炭化物含む　袖崩落土

Ｐ1
1　暗褐色土　灰色粘土ブロック・炭化物含む

第106図　第９号住居跡

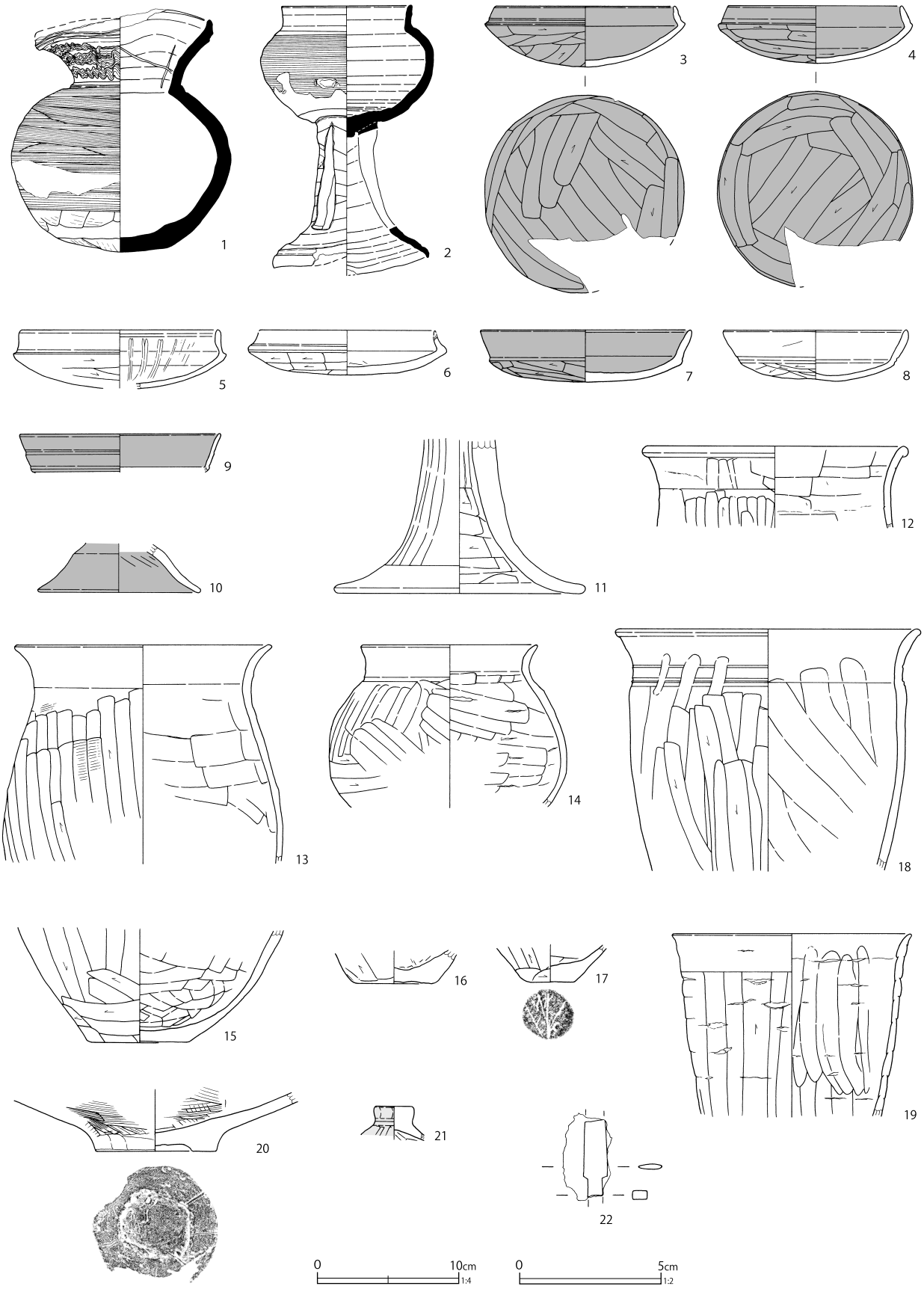
る。覆土は第５・６層が天井部崩落土、第７層が煙道からの流入土と考えられる。第８層は灰層である。両側壁、煙道壁面、煙道天井は焼土化していたが、火床面、煙道床面はあまり焼けていなかった。袖は基底部が削り出しで、その上に暗褐色土の貼り付けによって壁を立ち上げていた。煙道は高さが 0.15 ｍほどで、断面形は長楕円形である。煙出部は煙道から段を持たずに移行する。径 0.35 ｍほどのピット状を呈し、奥壁は真っ直ぐ立ち上がっている。

Ｐ１は径 0.45 ｍ、深さ 0.10 ｍで、カマド右側のスペースを埋めるように造られている。ごく浅いが、位置的には貯蔵穴の可能性がある。覆土は炭化物、灰色粘土を含む暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

壁周溝は幅 0.10 ～ 0.20 ｍ、深さ 0.05 ｍで、北東壁中央、Ｐ１付近で途切れている。

遺物は少なく、遺構の北側を中心に、床面から若干浮いた状態で出土した。カマドの左側からはほぼ完形の須恵器の脚付短頸壺、小型丸底壺が出土しており注目される。古墳時代後期の土師器坏、甕、壺、高坏、土師器の甕の破片が出土し、古墳時代前期のタタキ甕が混入している。

１・２は須恵器である。１は丸底壺である。全



第107図　第９号住居跡出土遺物

第14表　第９号住居跡出土遺物観察表（第107図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	丸底壺	12.2	16.5	－	ＣＤＩ	95	普通	灰	№28	117-4
2	須恵器	脚付短頸壺	9.3	19.5	11.5	ＣＤＧＩＫ	95	良好	灰	№7・15・16	117-5
3	土師器	坏	12.6	4.3	－	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	暗褐	内外面黒色処理　№4・9・10	118-1
4	土師器	坏	12.2	4.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	85	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　漆塗り　№1・3	118-2
5	土師器	坏	(13.7)	[4.1]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	明赤褐	内外面煤付着　暗文状ミガキ	
6	土師器	坏	－	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	橙	内外面煤付着　底部外面黒斑あり　№20	
7	土師器	坏	14.6	3.6	－	ＡＣＨＩＫ	95	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　№30	118-4
8	土師器	坏	(12.7)	[3.5]	－	ＡＣＤＨＩＫ	60	普通	橙		118-5
9	土師器	坏	(7.0)	[2.7]	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面黒色処理　有段口縁坏	
10	土師器	高坏	－	[3.4]	(11.2)	ＡＣＤＥＨＩＫ	50	普通	褐灰	内外面黒色処理　№5・22	118-6
11	土師器	高坏	－	[10.9]	(17.2)	ＣＨＩＫ	40	普通	橙	№23	118-3
12	土師器	甕	(18.0)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着　№13	
13	土師器	甕	(21.8)	[15.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№12・19	118-7
14	土師器	甕	12.4	[11.5]	－	ＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№24・25	119-1
15	土師器	甕	－	[8.0]	6.8	ＡＣＧＨＩＫ	45	普通	にぶい黄橙	№27	119-2
16	土師器	甕	－	[2.4]	6.0	ＡＣＤＨＩ	80	普通	にぶい赤褐	№8	
17	土師器	甕	－	[2.6]	3.4	ＡＤＥＨＩ	50	普通	褐灰	木葉痕	
18	土師器	甑	(20.8)	[17.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№12	
19	土師器	甑	(16.6)	[12.9]	－	ＣＤＥＩ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№26	
20	土師器	壺	－	[4.2]	8.8	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	№11	
21	土師器	蓋	－	[2.4]	－	ＣＥＨＩＫ	60	普通	浅黄橙	外面赤彩　つまみ径2.6㎝　№6	
22	鉄製品	鉄鏃	長さ[2.6]　刃幅0.9　厚さ0.2　重さ5.4ｇ								222-1

体に黒色を呈し、器肉が厚く、ずっしりと重い。金山窯産。口縁部は歪みが著しく、端部を一部欠く。５条一単位３段の波状文が施され､内面に「＋」のヘラ記号が認められる。胴部は平行タタキ後上位から中位までカキ目が施されている。内面はロクロナデのみで、当て具痕等は見られない。２は脚付短頸壺である｡低平な胴部に長い脚部が付く。口縁部は短く直立する。カキ目が全体に施され、下半は不規則にナデ消されている。脚部は長脚１段透かしである。端部は直立し、いずれもその境目に沈線が巡らされている。胴部、脚部とも内面はロクロナデである。横向きに置かれて焼成されたと考えられ、口縁部から脚部の片側に釉がかかっている。

以下は土師器である。３～９は坏である。３～６は坏身模倣坏である。３・４は内外面黒色処理され、４は漆塗りと考えられる。５は不明瞭だが内面に放射状のヘラ磨きが施されている。６は口縁端部を欠き、見込み部分にはヘラの当たり痕が残る。７・８は坏蓋模倣坏である。７は風化が進み、剥離が著しい。内外面黒色処理。８はやや小振りである。９は有段口縁坏である。内外面黒色処理。10・11 は高坏である。10 はやや径の小さい脚部である。内外面ヘラナデ後横ナデ、黒色処理。11 は大型の脚部で器肉が厚い。外面ヘラケズリ後裾部横ナデ、内面ヘラナデ後裾部横ナデである。12 ～ 17 は甕である。12・13 が長甕、14 が丸甕である。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。14 の外面は光沢があり、布や皮を用いたナデ、ナデ磨きが施されていると考えられる。15 ～ 17 は胴部下半から底部である。16･17 は長石粒を多く含み、下野産の可能性がある。17 の底面には木葉痕が認められる。18・19 は砲弾形の甑である。19 は口径がやや小さく、暗褐色を呈する。粘土帯の積上げ痕が多く残る。胎土に長石粒を多く含み、下

毛産の可能性がある。20・21は古墳時代前期のものである。20は輪台状の底部から大きく開く壺の底部である。内外面刷毛目、底部外周、底面ヘラナデ。21は北陸系の蓋である。内外面ヘラナデ、外面赤彩が施されている。

22は鉄鏃である。両刃で両丸造である。鏃身関は平関で平坦である。頸部の断面形は長方形である。

本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－３期である。

第10号住居跡（第108～113図）

Ａ区の中央、Ｄ・Ｅ－４・５グリッドに位置する。西側に撹乱がかかり、カマド周辺が壊されている。西カマドで､カマドは造り替えられている。主軸方位をカマド１の軸方向とすると、Ｎ－56°－Ｗになる。

平面形は一辺6.9ｍの正方形である。深さは0.40ｍで、覆土は含有物の少ない暗褐色土、自然堆積である。貼床､掘り方等は検出できなかった。

カマドは２箇所検出された。１→２の順で造り替えられている。カマド１は西壁中央の若干北寄りで検出された。造り替えにより煙道部のみの検出に留まる。煙道部は長さ1.30ｍ、幅0.30ｍ、深さ0.30ｍである。覆土は第14層が天井部の崩落土と考えられる。両側壁がよく焼けていた。

カマド２は西壁ほぼ中央で検出された。撹乱に燃焼部の奥と煙道が壊されており、詳細は不明である。袖を含む現存長は0.90ｍ、幅0.40ｍである。覆土は第16・17層がカマド天井部崩落土、第18層が灰層と考えられる。壁面は若干焼けていたが、火床面はあまり焼けていなかった。袖は黄灰色粘土の貼り付けによって造られていた。焚口部は芯材として３・４の長甕が設置されていた。袖の中からは甕の破片と小型壺（16）が出土している｡右袖奥の小型壺は口縁を一部欠くのみで、意図的に埋置された可能性がある。

貯蔵穴はカマド２右袖と北壁の間に設けられていた。長辺1.00ｍ、短辺0.65ｍ、深さ0.20ｍの長方形である。覆土は炭化物と黄褐色土粒子を含む褐色土、暗褐色土で、第１層は黄褐色土ブロックが多く、埋戻しの可能性がある。

柱穴は５本検出された。南西隅の壁周溝にもピット状の張り出しがあり、この位置にも何らかの柱が建てられた可能性が考えられる。Ｐ１～４は径0.80～1.05ｍ、深さ0.35～0.40ｍで規模が大きい。主柱穴と考えられる。いずれにも柱の当たりが一段深くなっているが、覆土は自然堆積であり、柱抜去後に埋没したと考えられる。Ｐ５は径0.40ｍ、深さ0.20ｍで、覆土は灰色粘土を多く含み、埋戻しの可能性がある。位置的に入り口部の施設である可能性が高い。

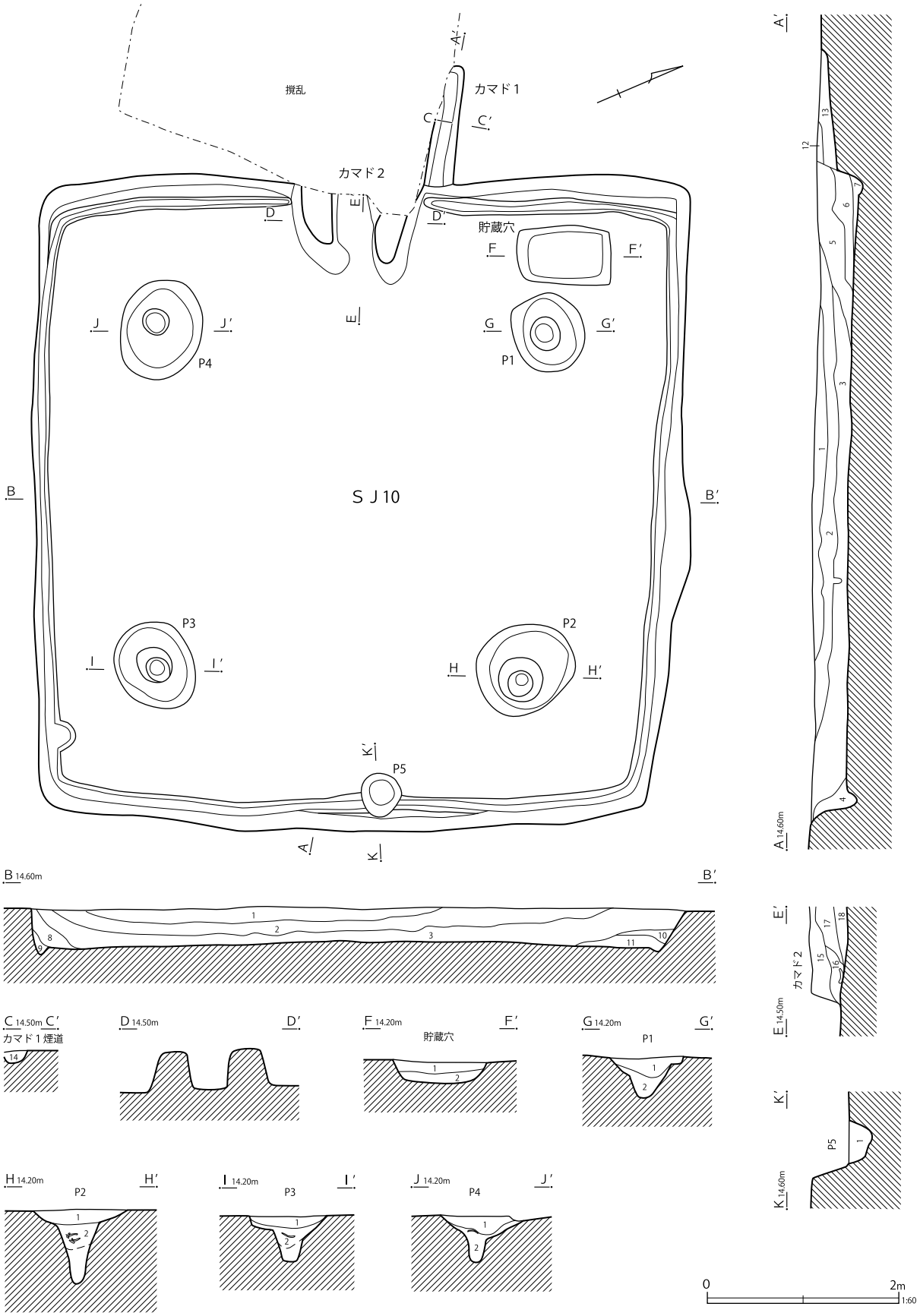
壁周溝は幅0.15～0.40ｍ、深さ0.20ｍで、全周する。

遺物は少なく、遺構全体から、床面、もしくはそれより若干浮いた状態で出土した。

本住居跡からは、南壁東半の床面近くから須恵器脚付長頸壺の脚部（４）、有蓋高坏（３）が出土しており、注目される。前者は第13号住居跡出土の胴部、口縁部と接合する。

古墳時代後期の土師器坏、甕、壺、小型壺、甑の破片が出土している。

１～４は須恵器である。１は坏である。口縁部は断面三角形を呈し、短く厚い。東毛産。２は提瓶である。胴部から蓋にかけての破片である。胴部は平行タタキ後カキ目が施され、更に回転ヘラケズリが加えられている｡蓋の内面は指オサエで、指紋が多く残る。蓋の外面上位と胴部の内面に灰と自然釉がかかり、上下が判別できた。東毛産。３は有蓋高杯である。浅めの杯部に長脚２段の脚部が付く。脚部は外傾する面を持つ。胎工は緻密で､暗褐色を呈し､東毛以外の産地も考えられる。４は脚付長頸壺である。直線的に開く口縁部にやや扁平な胴部、長脚の脚部が付く。全体にカキ目が下から上に施されている。壺の部分はカキ目の



第108図　第10号住居跡（1）

ＳＪ10
1　暗褐色土
2　明褐色土　遺物は全く含まない　黄味が強く地山に近似　同心円状に分布
3　暗褐色土
4　暗褐色土　粘性強い　壁崩壊土含む
5　暗褐色土　焼土ブロック少量
6　暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量
7　黒褐色土　灰層
8　暗褐色土　４層に近似　壁の崩落土含む
9　褐色土　　壁周溝覆土
10　褐色土　　壁の崩落土
11　暗褐色土　４・８層に近似
12　暗褐色土　焼土ブロック少量
13　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物極めて多量

カマド１煙道
14　暗褐色土　焼土ブロック多量（煙道天井部崩落土）

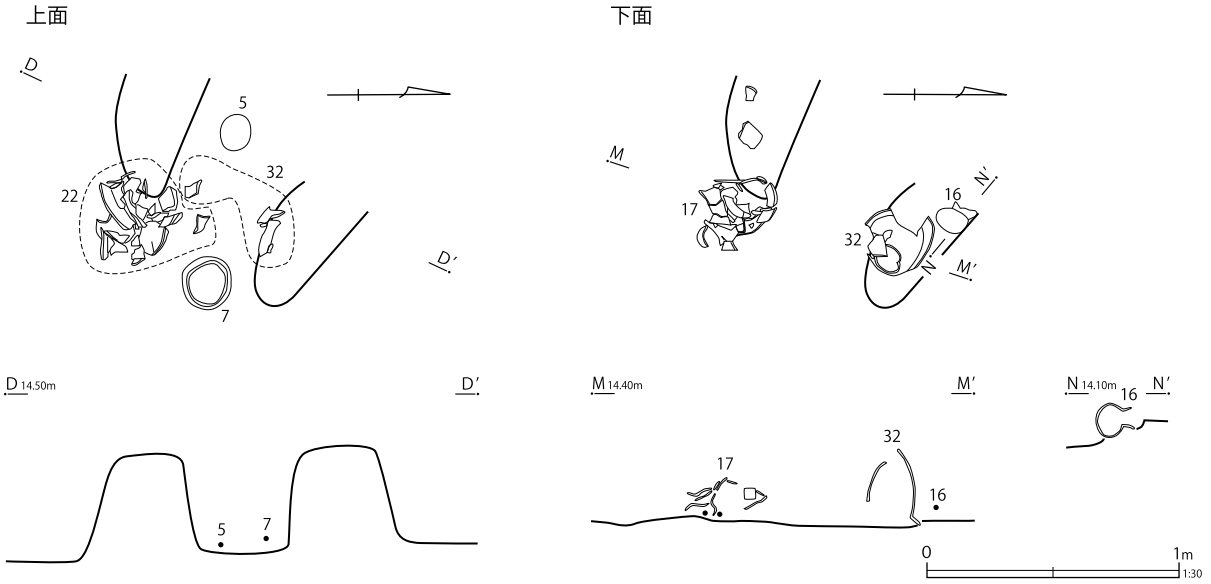
カマド２
15　暗褐色土　焼土粒子少量含む
16　暗褐色土　やや粘質　焼土少量含む　天井部崩落土
17　暗褐色土　焼土ブロック多量　天井部崩落土
18　黒褐色土　焼土・炭化物粒子極めて多量　灰層

貯蔵穴
1　暗褐色土　炭化物粒子多量含む　黄褐色土小ブロック含む　埋め戻し土か？
2　褐色土　　黄褐色土粒子やや多量　砂質土

Ｐ１～４
1　暗褐色土　炭化物粒子多量　焼土粒子やや少量含む
2　褐色土　　明褐色土ブロック含み、やや砂質

Ｐ５
1　暗褐色土　灰色粘土主体　粘性強い

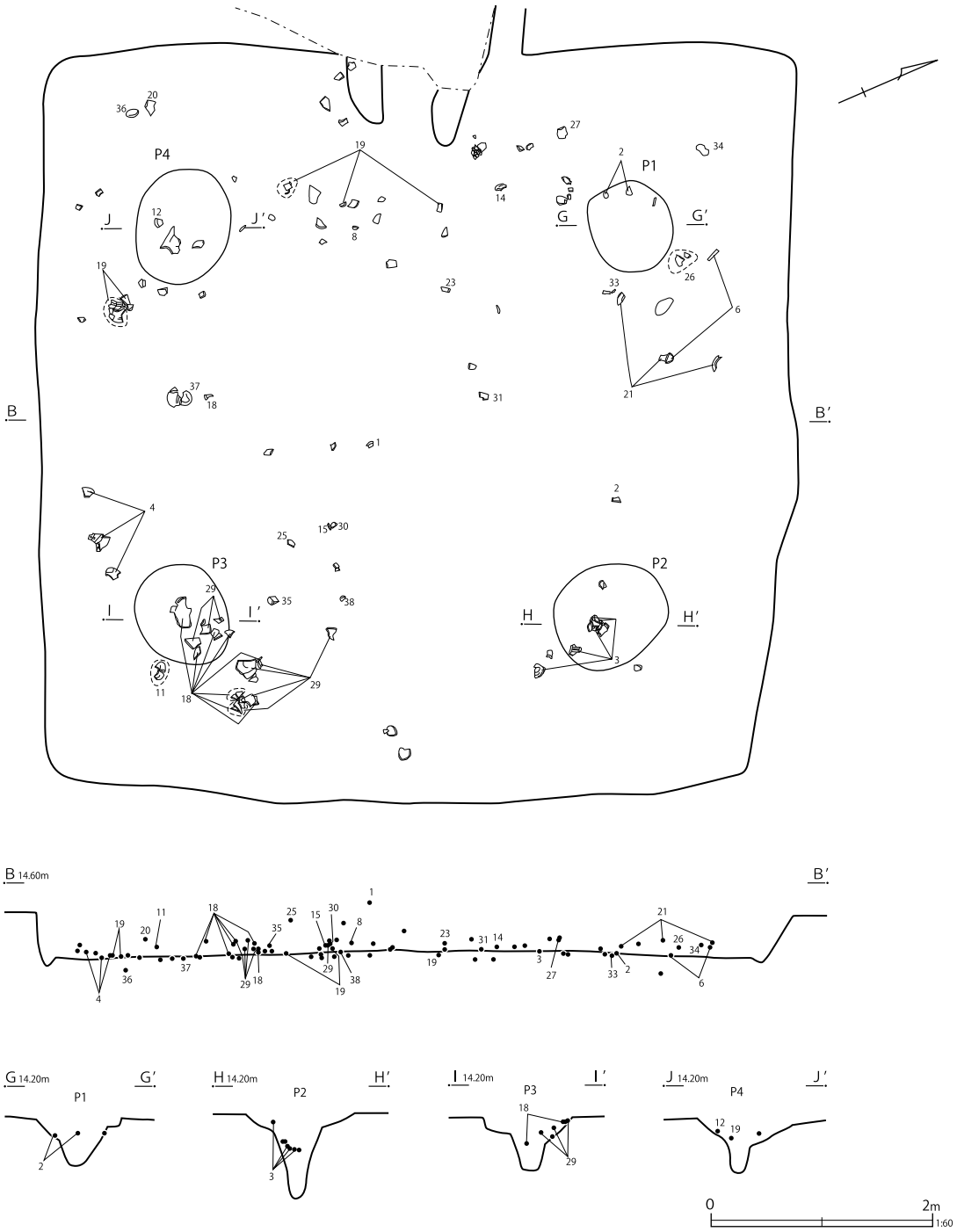
カマド２遺物分布



第109図　第10号住居跡（２）

上に不規則な指ナデが認められる。内面は見込み部分に青海波文が認められる。脚部との接合箇所には外面に突帯が、内面には粘土紐が貼付されている。脚部は長脚４段で、最上段に円形、２段目に長方形、３段目に三角形の透孔が三方に空けられている。各段の境目は、二条の沈線によって突帯状に作り出された区画帯によって画されている。端部は摘みあげられ、内面が凹線になっている。内面には粘土帯の積み上げ痕が認められる。

以下は土師器である。５～10は坏身模倣坏である。全体に口縁部が短く、扁平な器形である。５は内外面、10は内面が黒色処理されている。５～７は器肉が厚く、ずっしりとした重量感がある。５・６は内面に放射暗文が施されている。11・15は坏蓋模倣坏、12～14は有段口縁坏である。11は内面、12は内外面が黒色処理されている。11は器肉が厚く、黄橙色を呈す。13はヘラケズリにヘラ磨きが加えられている。14は口縁部が短く、扁平度合いが強い。色調は白みがかった浅黄橙色である。16は小型壺である。胴部下半が厚く、内面が強くナデつけられている。２次被熱を受け、底部に煤が厚く付着している。17・18・29は壺である。口径に比して胴部径が大きく、胴部が張るものを壺とした。17は小型甕の可能性があるが、器形に丸みがあり、下半に横方向のヘラケズリが多く認められるため壺とし



第110図　第10号住居跡（3）

ておきたい。17 の外面は縦方向、18 は斜方向、29 は横方向のヘラケズリが施されている。17・29 は底面ヘラケズリ。18 は風化が著しい。

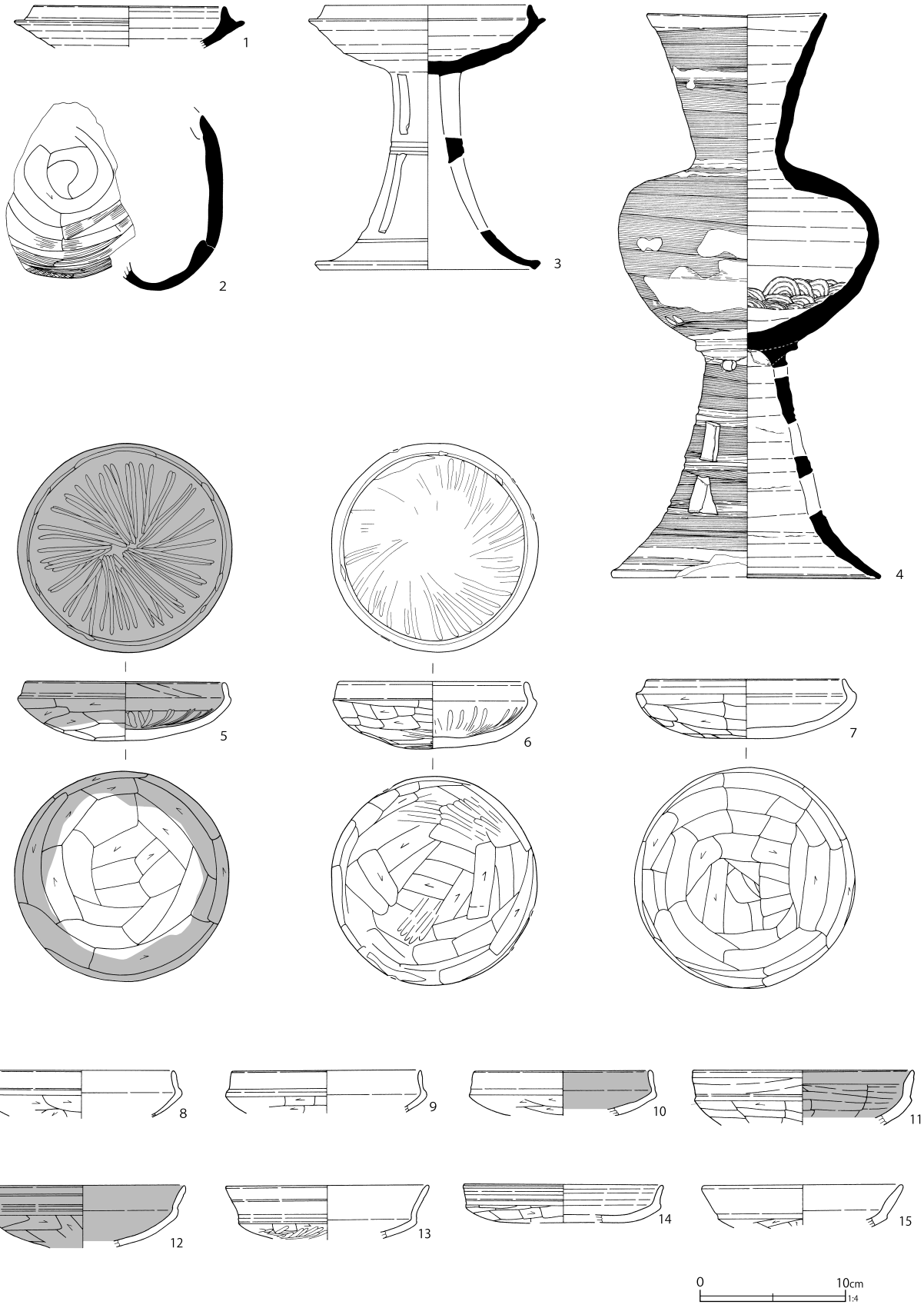
19 ～ 28・30 は甕である。20 のみが口径が胴部径に比して明らかに小さいが、その他は口径と胴部径がほぼ等しい長甕である。

32 は単孔の所謂砲弾形の甑である。

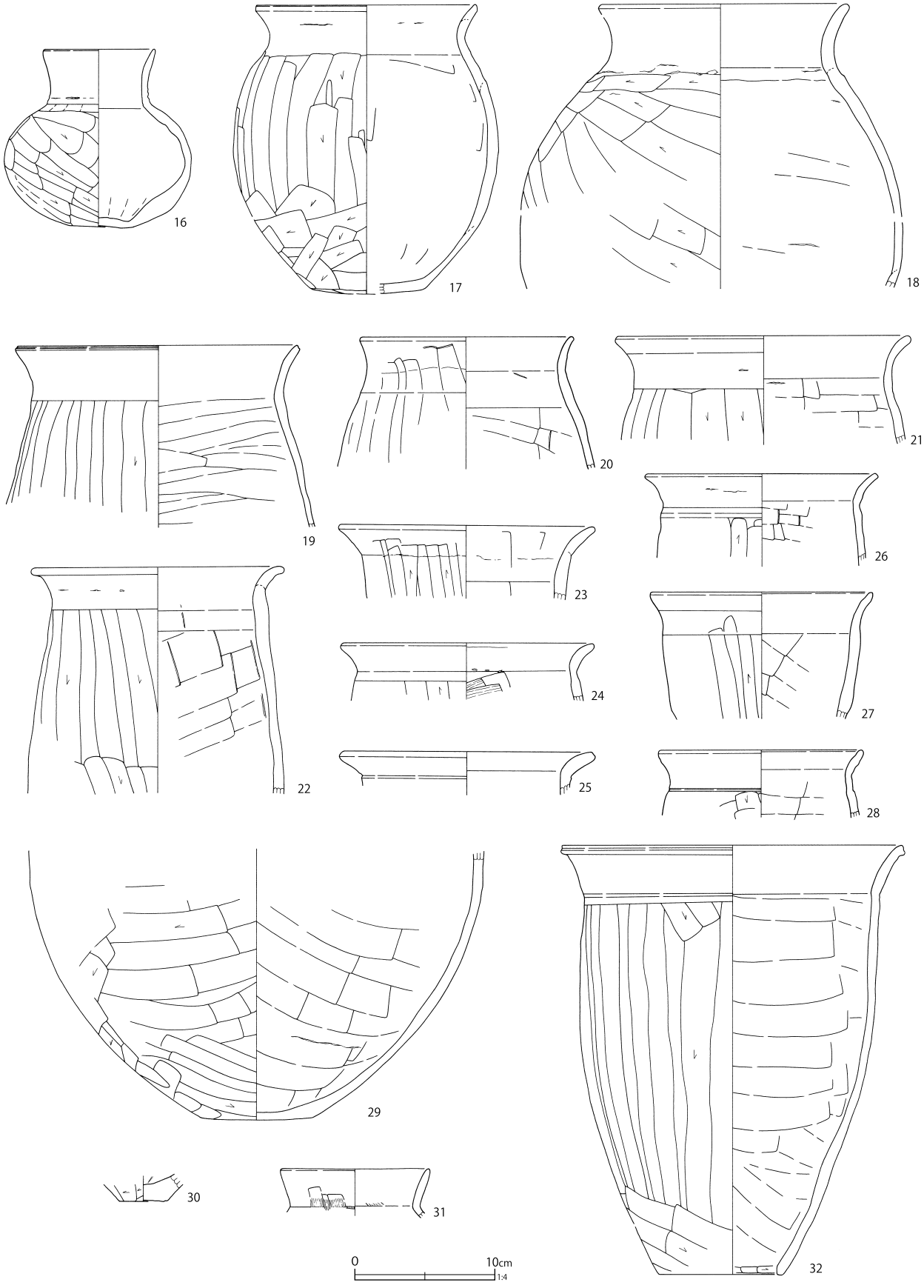
31 は古墳時代前期の小型の甕である。内外面とも刷毛目後横ナデが施されている。

33 は延べ板状の鉄製品である。上下を欠失し、用途不明である。

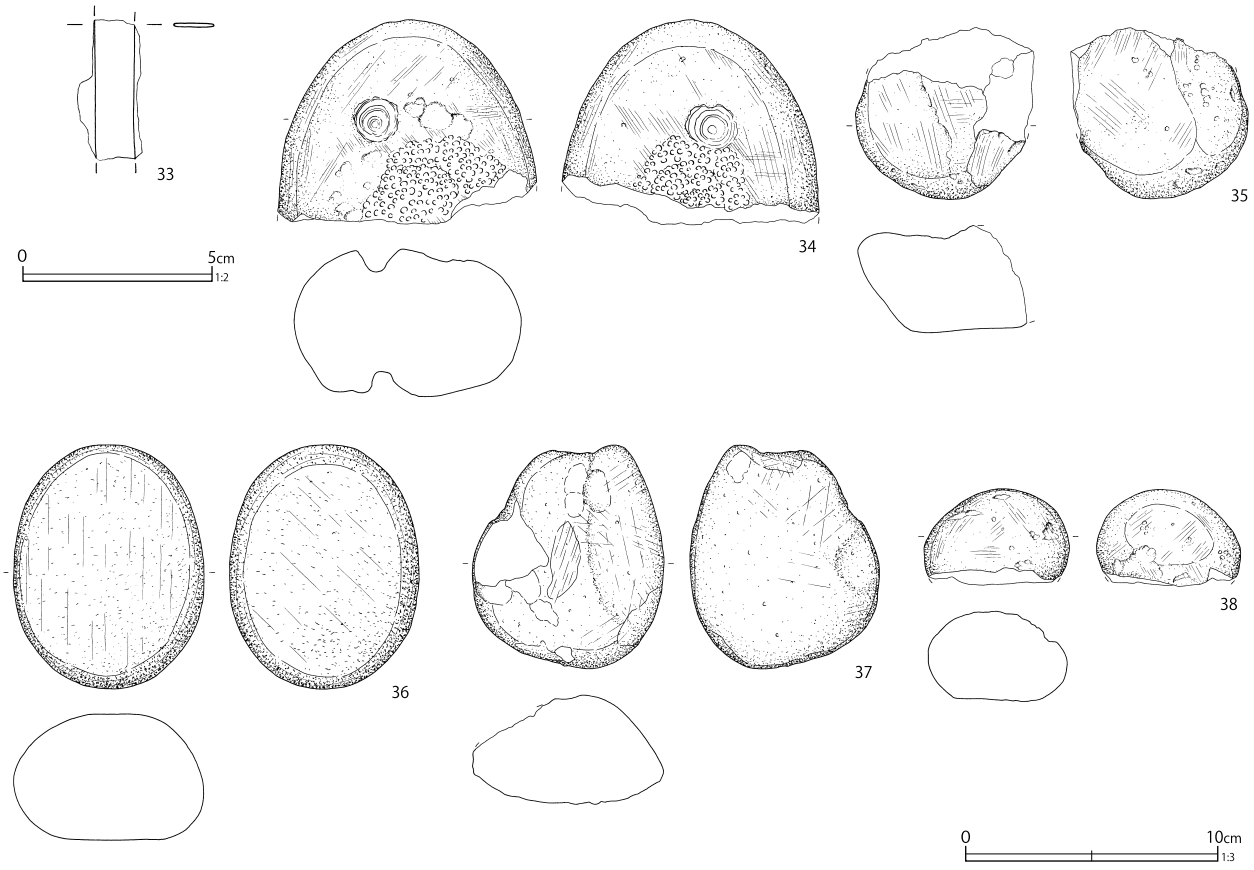
34 ～ 38 は石製品である。いずれも軽石製の砥



第111図　第10号住居跡出土遺物（1）



第112図　第10号住居跡出土遺物（２）



第113図　第10号住居跡出土遺物（３）

石である。平坦面が使用面で摩耗している。34・35・38は部分的に欠失している。34は表裏面に貫通しない穴が開けられており、穿孔途中と考えられる。

本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－２期である。

第12号住居跡（第114～117図）

A区のほぼ中央、C・D－５グリッドに位置する。第10号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。南カマドで、主軸方位はS－41°－Wである。

平面形は長方形で、地山が砂質のため周囲が崩落して不整形になっている。規模は、主軸方向4.75ｍ、直交軸方向3.10ｍである。深さは0.45ｍで、床面はやや西側が下がっている。覆土はロームブロック、焼土、炭化物を含む明褐色土、暗褐色土で自然堆積である。東壁沿いの９層は焼土を多く含む。

カマドは北南西壁のほぼ中央で検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が壁から大きく突出している。袖を含む長さは1.80ｍ、幅0.40ｍ、深さ0.35ｍである。焚口部はごく浅い皿状に深くなっており、奥壁は段を持って煙道となる。覆土は第５層が天井部崩落土、第６・７層が灰層と考えられる。壁面は若干焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。袖は基底面近くしか遺存しておらず、黄灰色粘土の削り出しであった。

貯蔵穴は、カマド左側のスペースのほぼ中央に造られている。北東－南西方向が長い長方形で長辺0.65ｍ、短辺0.50ｍ、深さ0.20ｍである。覆土は鉄分が多い褐色土、暗褐色土で、上層は埋戻しの可能性がある。貯蔵穴の中から須恵坏模倣坏、ミニチュアが納められた状態で出土した。

第15表　第10号住居跡出土遺物観察表（第111～113図）

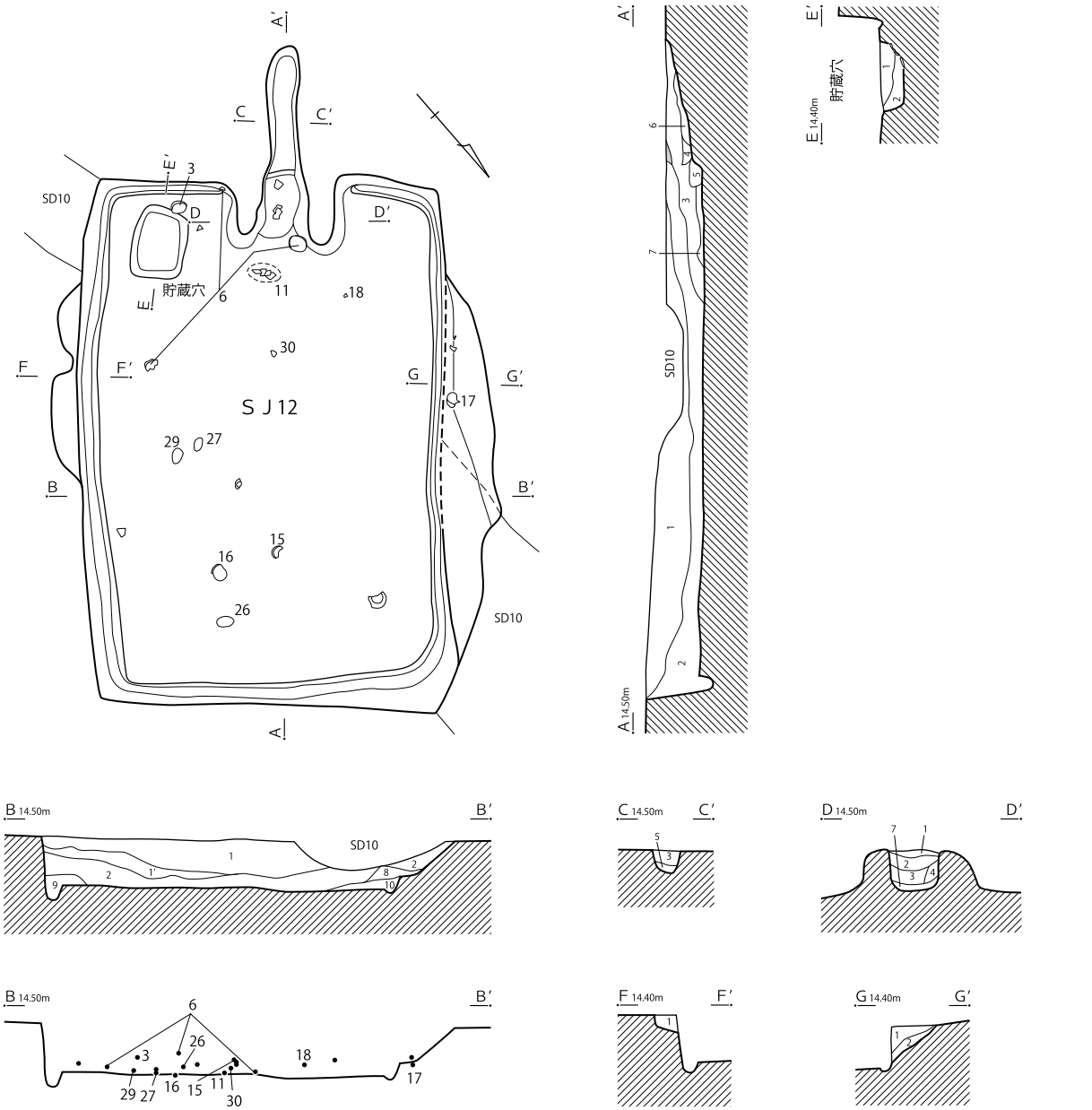
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.4)	[2.8]	－	ＥＨＩ	10	普通	灰白	№52	
2	須恵器	提瓶	－	[12.0]	－	ＡＣＤＩ	30	良好	灰	東毛産か　厚さ(6.9)㎝　復元径14.0㎝ 内外面一部自然釉　№２・３・59	119-3
3	須恵器	高坏	(14.2)	18.1	(14.4)	ＤＥＩ	60	良好	黄灰	三方透し　№62・87・90・92・93　P2	119-4
4	須恵器	脚付長頸壺	11.9	39.0	18.3	ＣＤＧＩＫ	95	良好	灰	№83～85　SJ13№36・37・67と接合	120-1
5	土師器	坏	13.5	4.1	－	ＡＣＨＩＪＫ	95	普通	にぶい橙	暗文坏　内外面黒色処理　カマド２№1	119-5
6	土師器	坏	13.0	4.6	－	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	浅黄橙	暗文坏　内外面煤付着　№７・10	121-1
7	土師器	坏	13.4	4.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	橙	カマド２№２	121-2
8	土師器	坏	(12.7)	[3.2]	－	ＡＣＨＩ	10	普通	橙	№31	
9	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙		
10	土師器	坏	(12.1)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内面黒色処理	
11	土師器	坏	(15.2)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内面黒色処理　№82	
12	土師器	坏	(14.0)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№102	
13	土師器	坏	(14.0)	[3.6]	－	ＡＣＥＫ	10	普通	橙	有段口縁坏	
14	土師器	坏	(13.8)	2.5	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	有段口縁坏　№20	
15	土師器	坏	(13.8)	[2.8]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	橙	№70	
16	土師器	小型壺	7.9	12.6	4.2	ＣＨＩＫ	95	普通	にぶい橙	外面煤付着　カマド２№５	121-3
17	土師器	壺	15.6	[20.5]	(8.0)	ＤＦＨ	80	普通	にぶい黄橙	カマド２№３　カマド２	121-4
18	土師器	壺	(17.6)	[20.3]	－	ＣＤＨ	60	普通	にぶい黄橙	№49・73・77・79・80・81・86　P3№95・99	121-5
19	土師器	甕	20.0	[12.9]	－	ＡＤＥＨＩ	60	不良	にぶい黄褐	№24・32・36・44・45　P3№101　カマド2	122-1
20	土師器	甕	(15.3)	[9.3]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	にぶい赤褐	№14　カマド２	
21	土師器	甕	(21.0)	[7.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい赤褐	№９・11・58	122-2
22	土師器	甕	17.5	[16.1]	－	ＡＣＤＨＩＫ	70	普通	橙	内外面煤付着　カマド２№３	122-3
23	土師器	甕	(18.2)	[5.2]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	灰褐	内外面煤付着　№27	
24	土師器	甕	(18.0)	[3.1]	－	ＥＦＨＩＫ	15	普通	灰褐		
25	土師器	甕	(17.9)	[3.1]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	橙	№71	
26	土師器	甕	(16.5)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	橙	№６	122-5
27	土師器	甕	(16.0)	[9.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№１	
28	土師器	甕	(14.6)	[4.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		
29	土師器	壺	－	[19.2]	8.0	ＡＣＨＩＫ	30	普通	灰白	外面黒斑あり　№66・74・76・78・79 Ｐ3№94・96・98	122-4
30	土師器	甕	－	[1.9]	(3.5)	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい褐	№69	
31	土師器	甕	(10.6)	[3.5]	－	ＡＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	№54　貯蔵穴	
32	土師器	甑	24.0	29.8	8.5	ＣＥＦＧＨ	80	良好	灰黄褐	カマド２№４	122-6
33	鉄製品	のべ板状品	長さ[3.7]　幅1.0　厚さ0.1　重さ3.8ｇ							№57	222-1
34	石製品	砥石	長さ[8.2]　幅10.2　厚さ6.2　重さ196.7ｇ　軽石							№５	
35	石製品	砥石	長さ[6.8]　幅[7.0]　厚さ[5.0]　重さ86.0ｇ　軽石							№72	
36	石製品	砥石	長さ9.8　幅7.5　厚さ5.1　重さ184.9ｇ　軽石							№103	
37	石製品	砥石	長さ9.0　幅7.5　厚さ4.6　重さ115.7ｇ　軽石							№48	
38	石製品	砥石	長さ[3.9]　幅5.8　厚さ3.8　重さ35.4ｇ　軽石							№67	

壁周溝は幅0.10～0.25ｍ、深さ0.10ｍで、全周する。

遺物は少ないが、カマド手前と貯蔵穴周辺から集中して土師器坏、甕、甑（３・７～10・12）が出土した。床面近くからの出土で、住居廃絶時に片付けられたと推定される。

出土器種は古墳時代後期の須恵器坏、土師器坏、甕、壺、鉢、短頸壺、ミニチュアが出土しており、完形率が高いのが特徴である。

１は須恵器坏である。口縁部がごく短く、口縁



SＪ12
1　暗褐色土　　ローム・鉄分含む
1′暗褐色土　　１層に近いがより粘性強い　緻密な土
2　明褐色土　　ローム・鉄分・焼土・炭化物含む　１層に比して明るい　地山に極めて近似
3　明褐色土　　焼土をブロック状に含む　煙道部の赤変した部分を混入（天井部崩落土）
4　暗赤褐色土　煙道部の赤変個所（天井部崩落土）
5　赤褐色土　　焼土（天井部崩落土）
6　黒灰色土　　灰層
7　黒灰色土　　灰層
8　暗褐色土　　壁崩落土
9　赤褐色土　　焼土多量
10　明褐色土　　２層に近い　より地山に近似

貯蔵穴
1　褐色土　　地山との識別が困難である　全体に鉄分多量
2　暗褐色土　全体に鉄分多量

ＳＪ12（Ｆ－Ｆ′）
1　暗褐色土　炭化物粒子多量

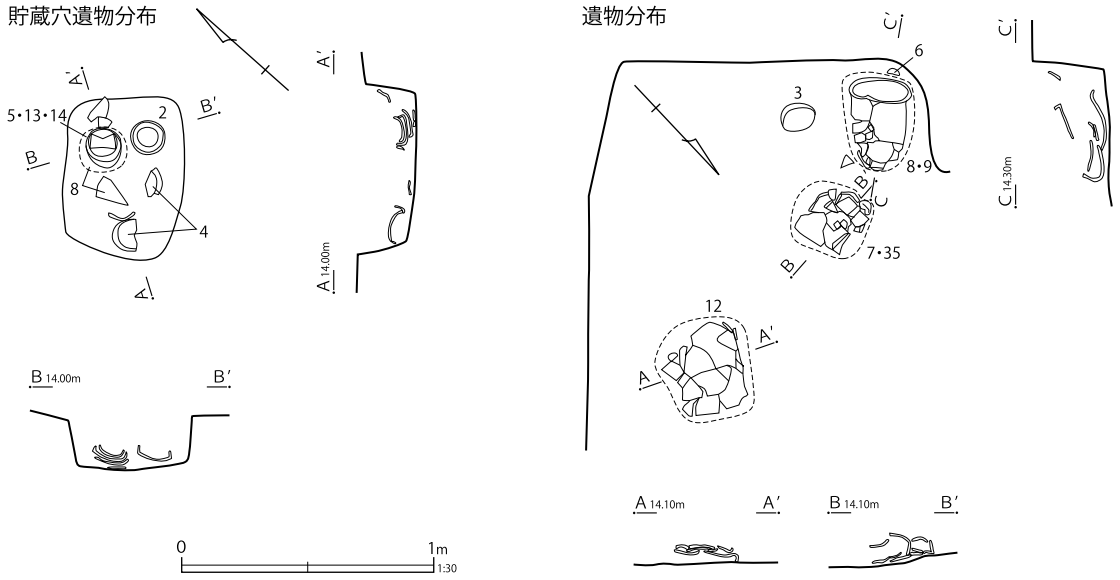
ＳＪ12（Ｇ－Ｇ′）
1　暗褐色土　炭化物粒子多量
2　明褐色土　砂質

0　2m
1:60

第114図　第12号住居跡（１）

部と体部の内面境目に爪が入る。東毛産。

以下は土師器である。２・３・５は坏身模倣坏で、４は有段口縁坏である。いずれも内外面が黒色処理されている。４・５は漆塗りである。内面に放射暗文が施されている。６は鉢である。本来は甕として製作された個体を転用したと考えられ、擬口縁を加工して口縁部としている。外面の上半は風化が進んでいる。底面はヘラケズリである。内



第115図　第12号住居跡（２）

面のヘラナデは工具痕が明瞭である。

７～11は甕である。底面はいずれもヘラケズリである。７は小型で歪みが著しく、内面のヘラナデ痕が明瞭である。８～11は口径と胴部径がほぼ等しい長甕である。８は内面に横方向のヘラナデ後更に縦方向のナデを加えている。９は歪みが著しく、２次被熱により斑に赤化し、煤が付着している。内面は全体にコゲが付着する。10は見込み部分にコゲが付着する。

12は単孔の所謂砲弾形の甑である。内面はヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。

13～16は手捏ね土器である。いずれも粘土塊から成形され、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、ナデによって整えられている。13・14・16は坏形、15は鉢形である。13は口縁部が歪み、縦方向にヒビが多く入る。器肉が厚く重量感がある。底面無調整。植物種子の圧痕が見られる。14は見込み部分が強くナデ込まれている。底面ヘラケズリ。15は外面全体がヘラケズリ、内面はヘラナデである。外面全体に赤彩が施され、内面は口縁部までは確認できるが全体に施されているか不明瞭である。16は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。17は古墳時代前期の小型壺である。外面ヘラケズリ後ヘラ磨き、胴部中位以下は判然としない。内面は肩部指オサエ、胴部はヘラナデである。

19～25は焼成された不整形の粘土である。ここでは扁平土製品と呼称する。19は不整楕円形で、指でにぎった痕跡が明瞭に残る。21は多角柱状だが、裏側は平坦である。他は不規則に凹みがあり、指で摘んで捏ねたような印象を受ける。

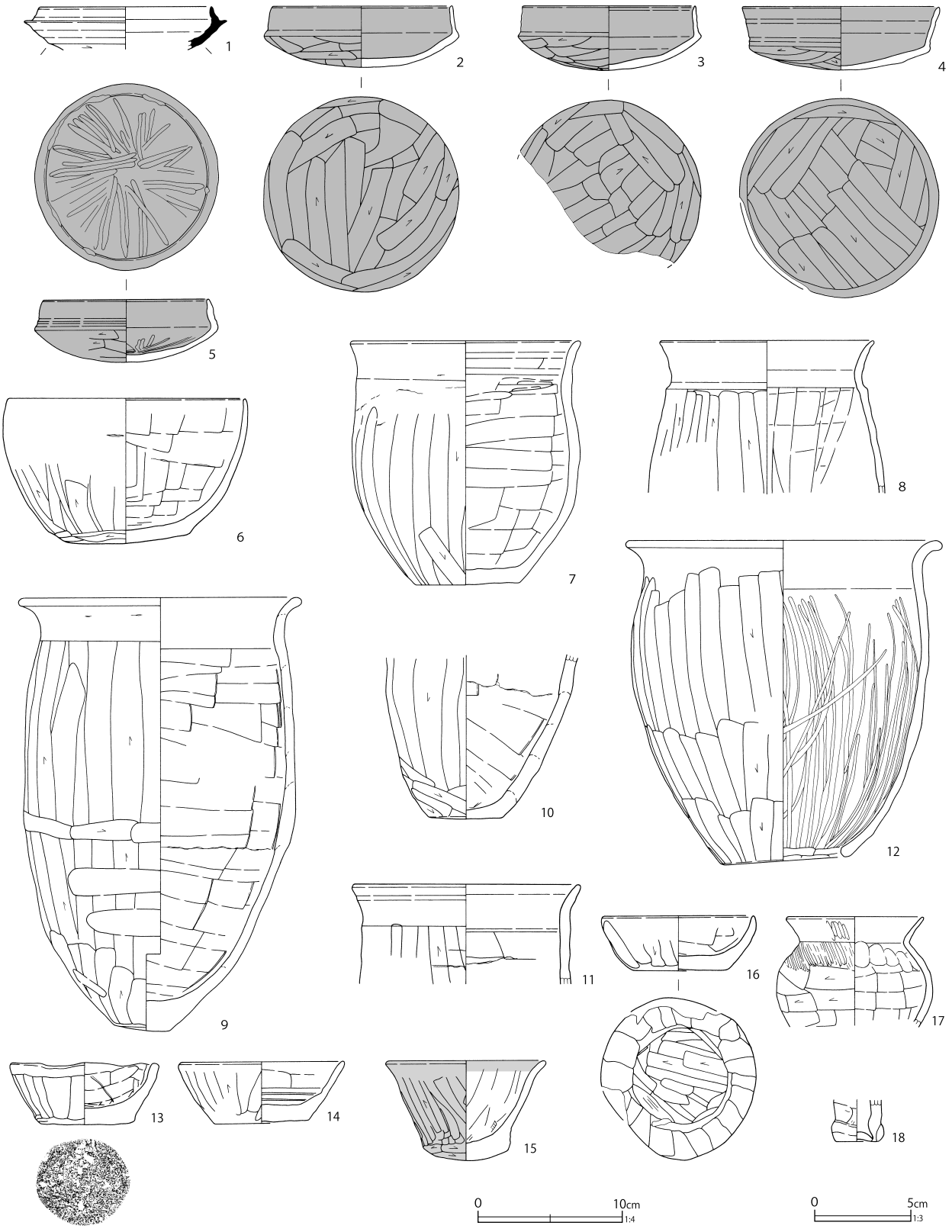
26～33は、軽石製の砥石である。大中小のサイズがあると考えられる。27～30は部分的に欠失している。平坦面が使用面で、使用痕はあまり発達していない。26・29には凹み石状の使用痕、「Ｖ」字状の刃物痕が認められる。

本住居跡の時期は６世紀第３～４四半期、屋敷裏Ｖ－１期である。

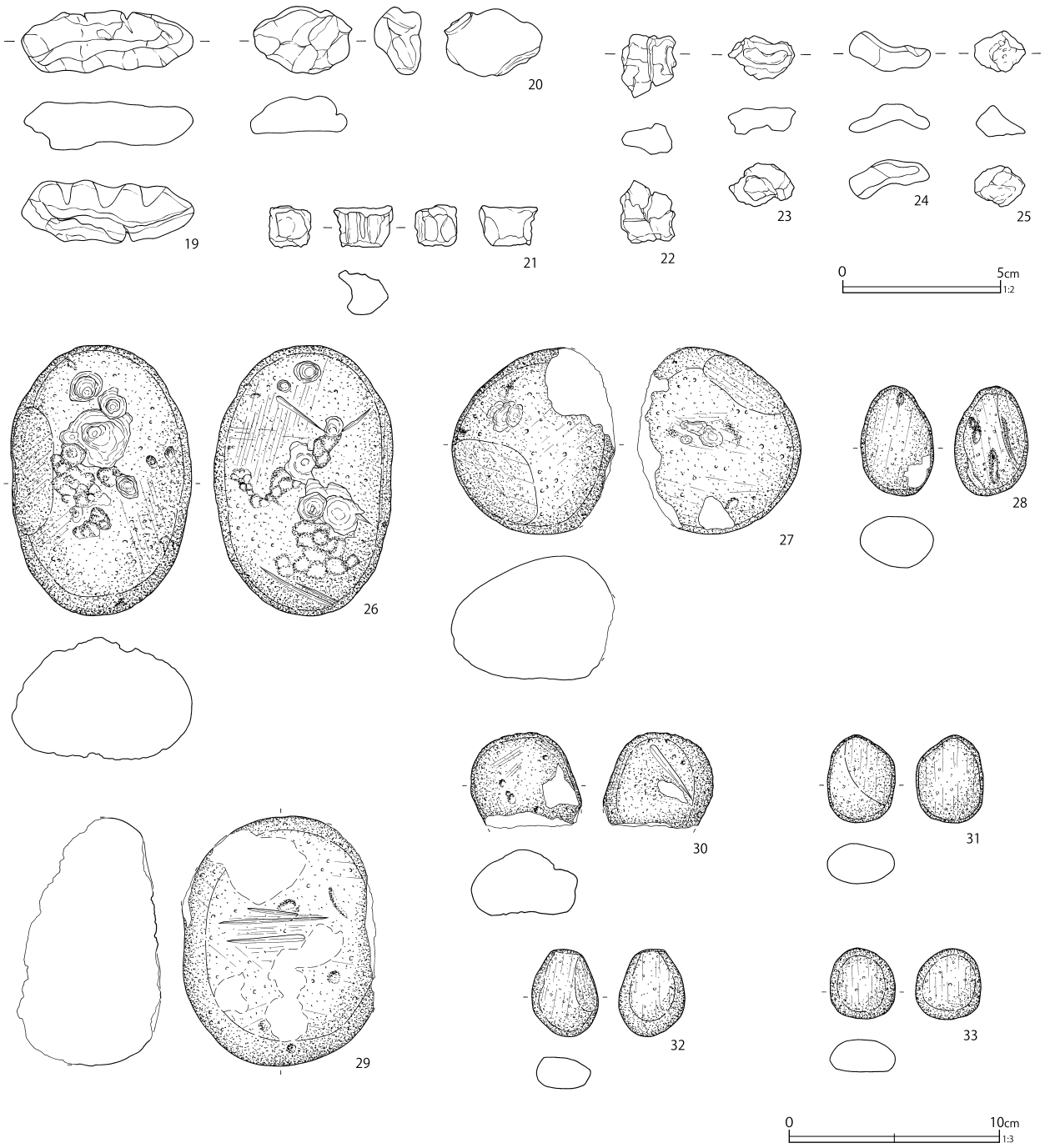
第13号住居跡（第118～123図）

Ａ区の中央、やや東側Ｅ－７グリッドに位置する。畠跡３と重複し、本遺構が古い。西カマドで、主軸方位はＮ－69°－Ｗである。

平面形は主軸方向3.62ｍ、直交軸方向6.58ｍの横長の長方形である。深さは0.45ｍで、覆土



第116図　第12号住居跡出土遺物（1）



第117図　第12号住居跡出土遺物（２）

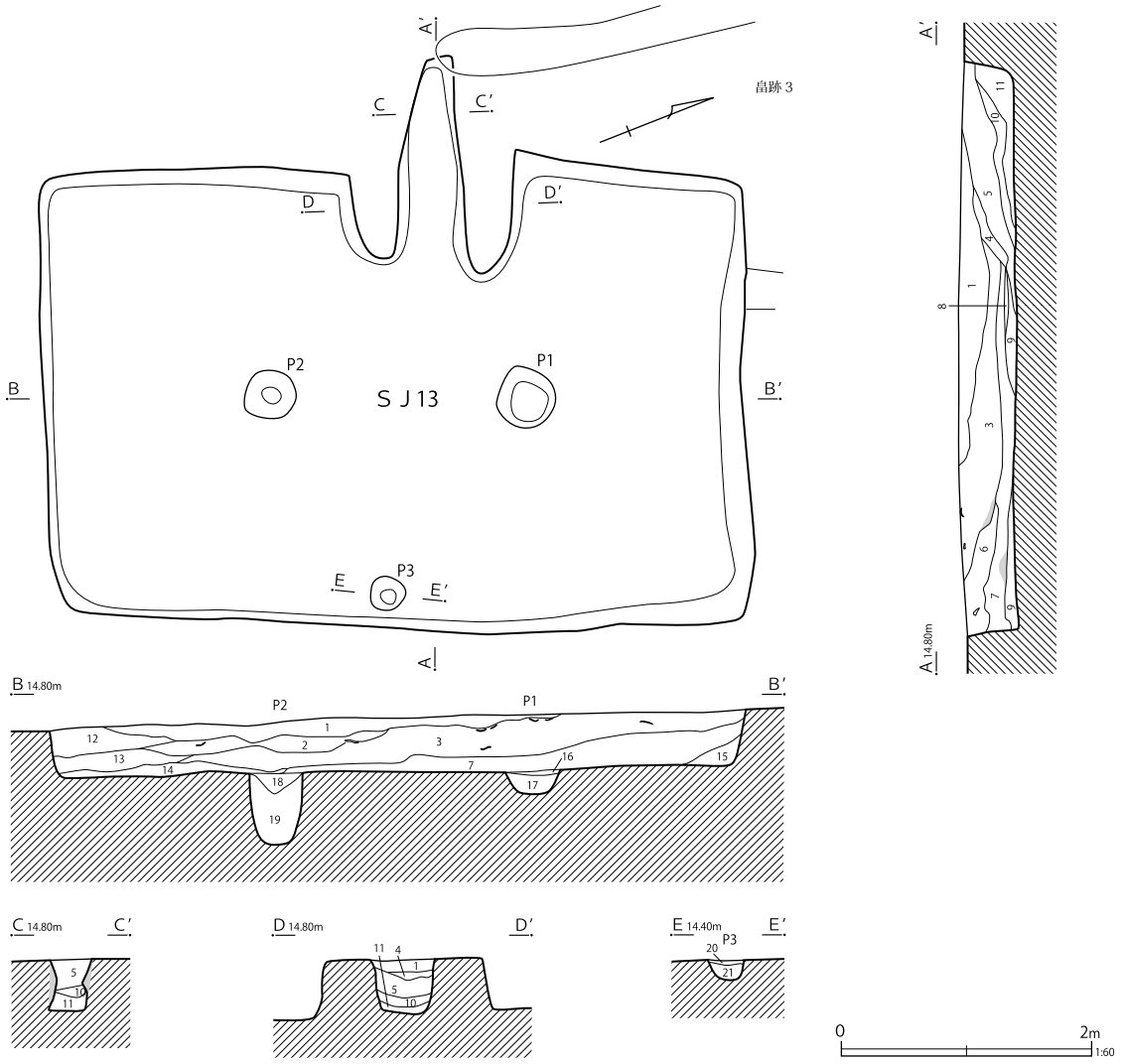
は地山に極めて近く、識別が困難であった。炭化物、焼土、灰、灰白色粘土、明褐色粘土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土、黒褐色土で自然堆積である。第８層の粘土層の由来は不明だが、カマド手前の多量の遺物と同時に堆積しており、何らかの関係が考えられる。貼床、掘り方等は検出できなかった。第７号住居跡の様相と相似する。

カマドは西壁中央の若干北寄りで検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が短く突出する。袖を含む全体の長さは1.20 m、幅0.55 mである。覆土は第５・10層がカマド天井部崩落土、第11層が灰層である。両壁面が焼けているが、火床面

第16表　第12号住居跡出土遺物観察表（第116・117図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.0)	[3.0]	－	ＩＫ	10	普通	灰白	東毛産か	
2	土師器	坏	12.5	4.2	－	ＡＣＨＩＫ	95	普通	橙	内外面黒色処理　貯蔵穴№27	123-1
3	土師器	坏	12.0	4.4	－	ＡＨＩＫ	50	普通	明赤褐	内外面黒色処理　風化著しい　№８	123-2
4	土師器	坏	13.6	4.3	－	ＡＣＨＩ	97	普通	浅黄橙	有段口縁坏　内外面漆塗り　貯蔵穴№23・26	123-3
5	土師器	坏	11.5	4.3	－	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	内外面漆塗り　暗文　貯蔵穴№29	123-4
6	土師器	鉢	16.0	9.9	8.7	ＡＣＤＥＨＩＫ	65	普通	橙	№９・22　カマド№４	124-1
7	土師器	小型甕	15.6	16.9	7.2	ＣＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	孔径部歪み大きい　№20	124-2
8	土師器	甕	(15.0)	[10.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	№21　貯蔵穴№25・31	124-4
9	土師器	甕	18.8	30.3	4.0	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№21	124-3
10	土師器	甕	－	[11.3]	5.1	ＡＣＤＦＨＩＫ	45	普通	にぶい褐	内外面煤付着　見込みコゲ　№35	124-5
11	土師器	甕	(15.6)	[6.8]	－	ＡＣＤＧＨＩＫ	10	普通	橙	№５	
12	土師器	甑	21.0	22.7	8.3	ＣＤＥＨ	90	普通	にぶい黄橙	№19	124-6
13	土師器	坏	10.1	4.2	6.8	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	橙	口縁部歪む　底面植物圧痕あり　貯蔵穴№28	125-1
14	土師器	坏	11.9	4.0	6.5	ＡＣＤＨＩＫ	75	普通	灰褐	底部内外面黒斑　№30	125-2
15	土師器	坩	(10.9)	6.8	－	ＡＥＨＩＫＬ	60	普通	灰白	外面・内面一部赤彩　№15　SD10・D-5と接合	125-3
16	土師器	坏	10.6	3.6	7.0	ＡＣＨＩＫ	80	普通	橙	№14	125-5
17	土師器	小型壺	(9.4)	[9.6]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	灰白	№36	125-4
18	土師器	ミニチュア	－	[2.2]	2.2	ＡＣＨＩＫ	80	普通	灰黄	№６	
19	土製品		大きさ5.5×2.0 厚さ1.5　重さ12.8ｇ			ＡＥＨＩ		普通	にぶい黄橙		217-3
20	土製品	粘土塊	大きさ3.3×2.2 厚さ1.3　重さ7.2ｇ			ＡＣＥＩ		普通	橙		217-3
21	土製品	粘土塊	大きさ1.9×1.3 厚さ1.4　重さ3.0ｇ			ＣＨＩＫ		普通	灰黄褐		217-3
22	土製品	粘土塊	大きさ2.0×1.7 厚さ1.0　重さ2.2ｇ			ＨＩＫ		普通	褐		217-3
23	土製品	粘土塊	大きさ2.1×1.4 厚さ1.4　重さ2.0ｇ			ＣＥＨＩＫ		普通	にぶい黄橙		217-3
24	土製品	粘土塊	大きさ2.6×1.3 厚さ0.9　重さ1.4ｇ			ＡＣＨ		普通	にぶい黄橙		217-3
25	土製品	粘土塊	大きさ1.3×1.1 厚さ1.0　重さ1.1ｇ			ＩＫ		普通	にぶい褐		217-3
26	石製品	砥石	長さ12.8　幅8.7　厚さ6.6　重さ269.6ｇ　軽石							№16	
27	石製品	砥石	長さ8.9　幅[7.8]　厚さ5.9　重さ177.0ｇ　軽石							№10	
28	石製品	砥石	長さ5.3　幅3.5　厚さ2.4　重さ19.8ｇ　軽石								
29	石製品	砥石	長さ12.0　幅[9.2]　厚さ[7.4]　重さ387.4ｇ　軽石							№11	
30	石製品	砥石	長さ[4.6]　幅5.3　厚さ3.6　重さ24.6ｇ　軽石							№７	
31	石製品	砥石	長さ4.2　幅3.2　厚さ2.0　重さ9.4ｇ　軽石								
32	石製品	砥石	長さ4.2　幅3.1　厚さ1.9　重さ10.1ｇ　軽石								
33	石製品	砥石	長さ3.4　幅3.1　厚さ1.6　重さ7.4ｇ　軽石							カマド	

はあまり焼けていなかった。袖は黄灰色粘土の貼り付けによって造られていた。燃焼部の中央付近に芯材として136・137の長甕が設置されていた。袖の上部からは須恵器坏蓋（１）、土師器甕（51）、甑の破片（76）が出土している。長甕との同時性は不明だが、袖の延長線上から須恵器脚付長頸壺



ＳＪ13
1　褐色土　　炭化物少量　地山に極めて近い
2　明褐色土　炭化物少量　黄灰色粘土を全体に含む
3　明黒褐色土　炭化物・焼土・灰を密に混入　様々な遺物を混入
4　褐色土　　炭化物少量　地山に近似
5　明褐色土　焼土ブロック少量　炭化物少量　地山に極めて近似　天井部崩落土
6　褐色土　　炭化物少量　地山に極めて近似
7　褐色土　　炭化物多量　地山に極めて近似
8　黄灰色粘土　粘土層
9　褐色土　　炭化物多量　地山に極めて近似
10　暗褐色土　焼土多量　炭化物・灰を含む
11　黒褐色土　灰層　焼土少量　煙道部の崩落土を含む
12　褐色土　　炭化物少量　地山に極めて近似
13　褐色土　　灰白色粘土ブロックを混入
14　褐色土　　地山に極めて近い　床面との境に炭化物あり
15　褐色土　　明褐色土ブロック多量

Ｐ1
16　褐色土　　炭化物少量混入
17　暗褐色土　地山に近似　（底面は砂層）

Ｐ2
18　暗褐色土　炭化物・鉄分少量含む
19　暗褐色土　地山に近似　よくしまっている

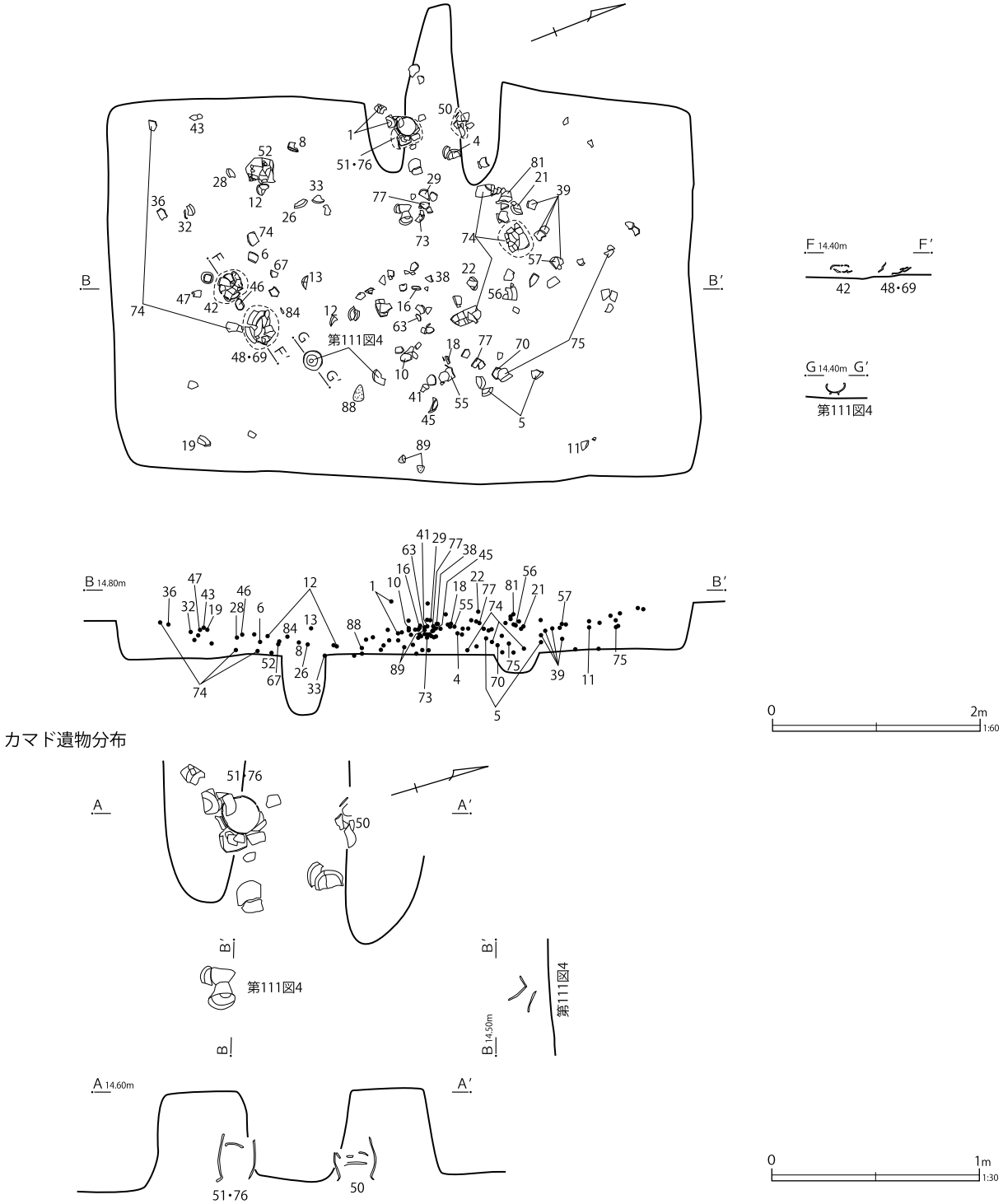
Ｐ3
20　灰褐色土　灰白色粘土を多量に混入
21　明褐色土　地山に近似　しまりあり

第118図　第13号住居跡（１）

の破片が出土していることから、住居廃絶後、カマドが壊れた後にもたらされたと推定しておきたい。

柱穴は３本検出された。床面中央のＰ１・２が主柱穴、東壁中央のＰ３が入り口部の施設と考えられる。Ｐ１は径 0.45 m、深さ 0.20 m、Ｐ２は径 0.45 m、深さ 0.55 mで位置的に主柱穴と考えられる。覆土は自然堆積であり、柱抜去後に埋没したと考えられる。Ｐ３は径 0.30 m、深さ 0.15 mで、覆土は灰白色粘土を多く含み、埋戻しの可能性がある。

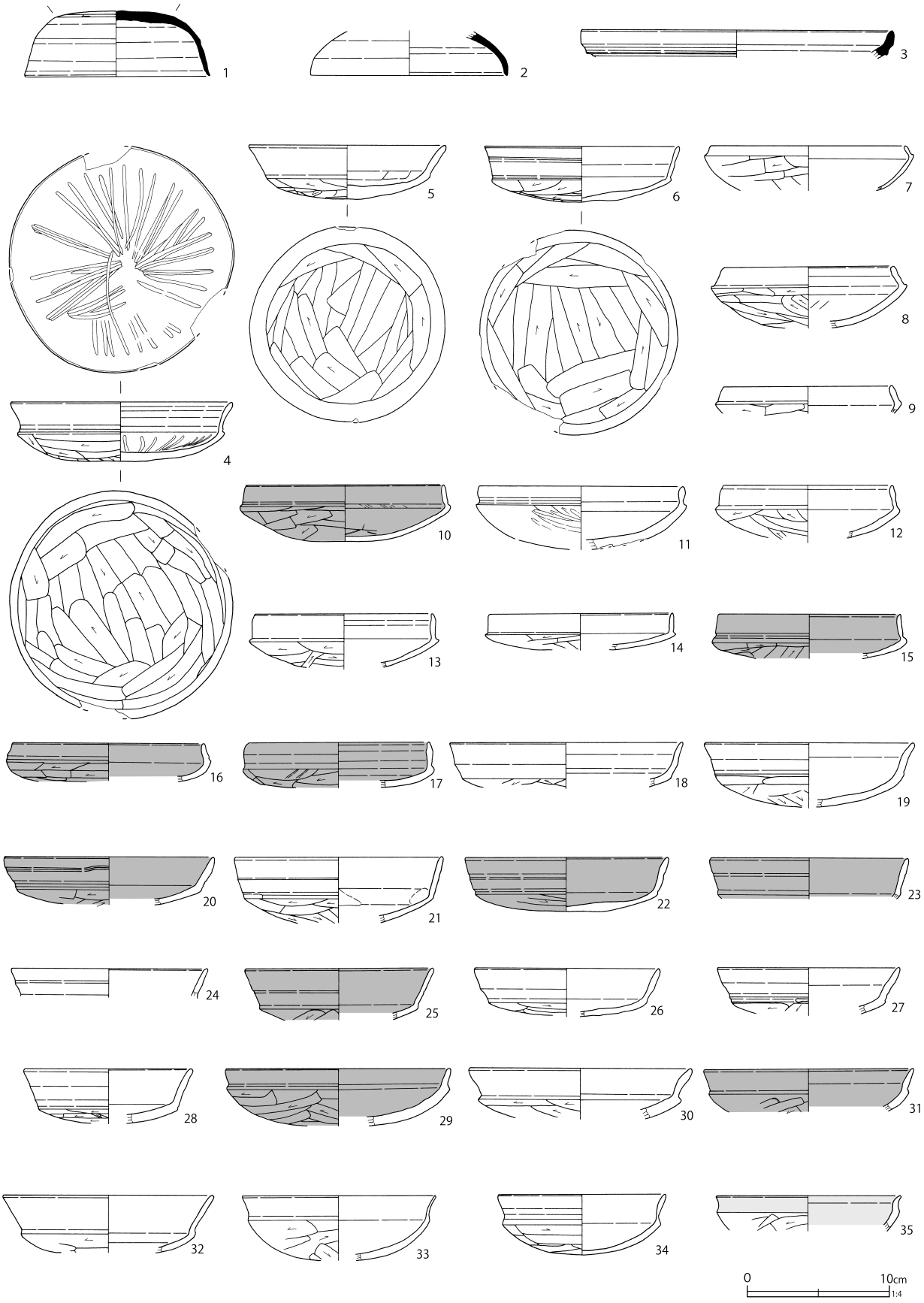
遺物は多く、遺構全体から出土している。床面



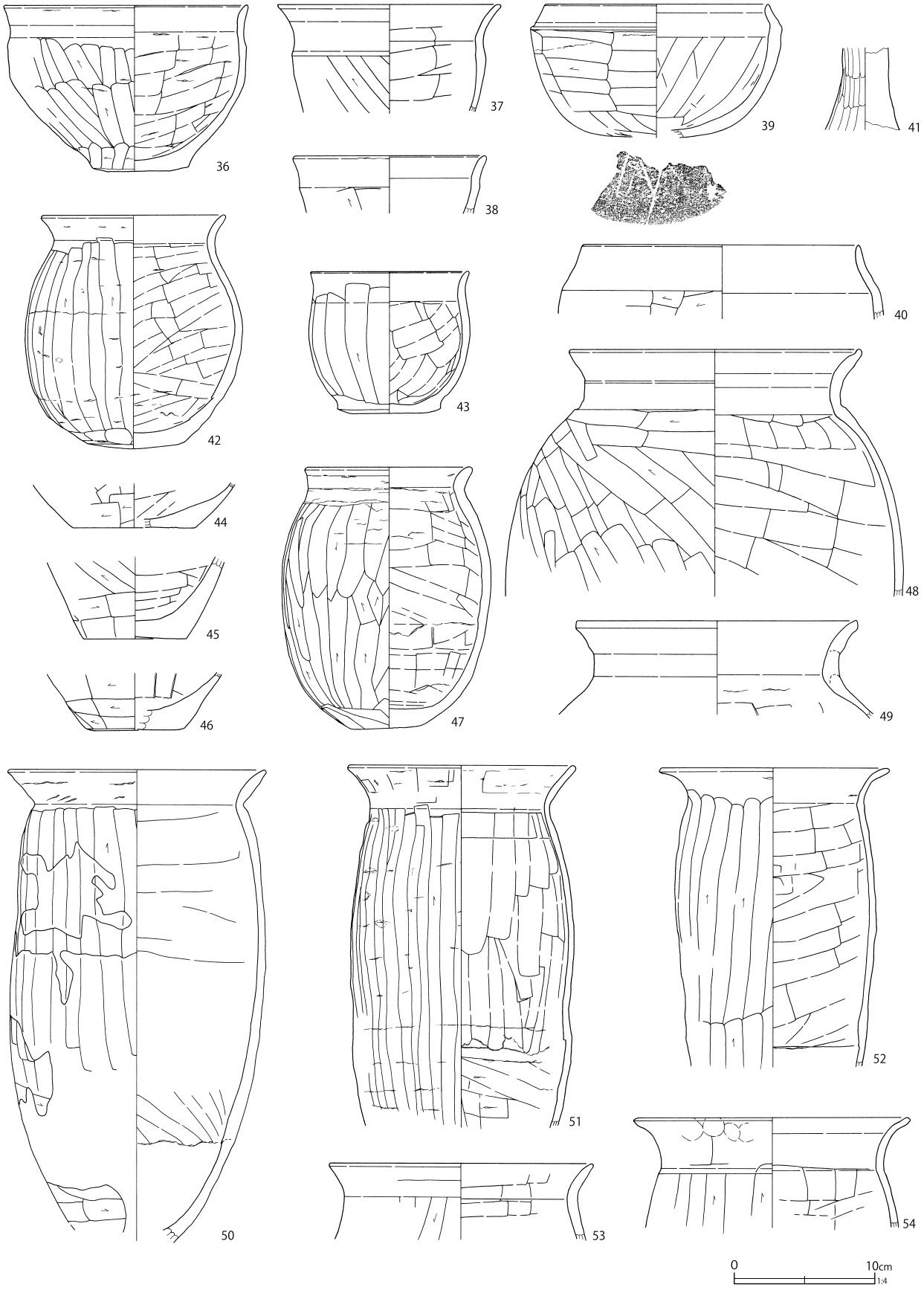
第119図　第13号住居跡（２）

から出土するものと、第２・３層を中心とする上層から出土するものがある。後者は断面でレンズ状の分布となり、住居埋没時にもたらされた可能性が高い。前述のカマド周辺の遺物も同様の埋没過程にもたらされたと考えられる。

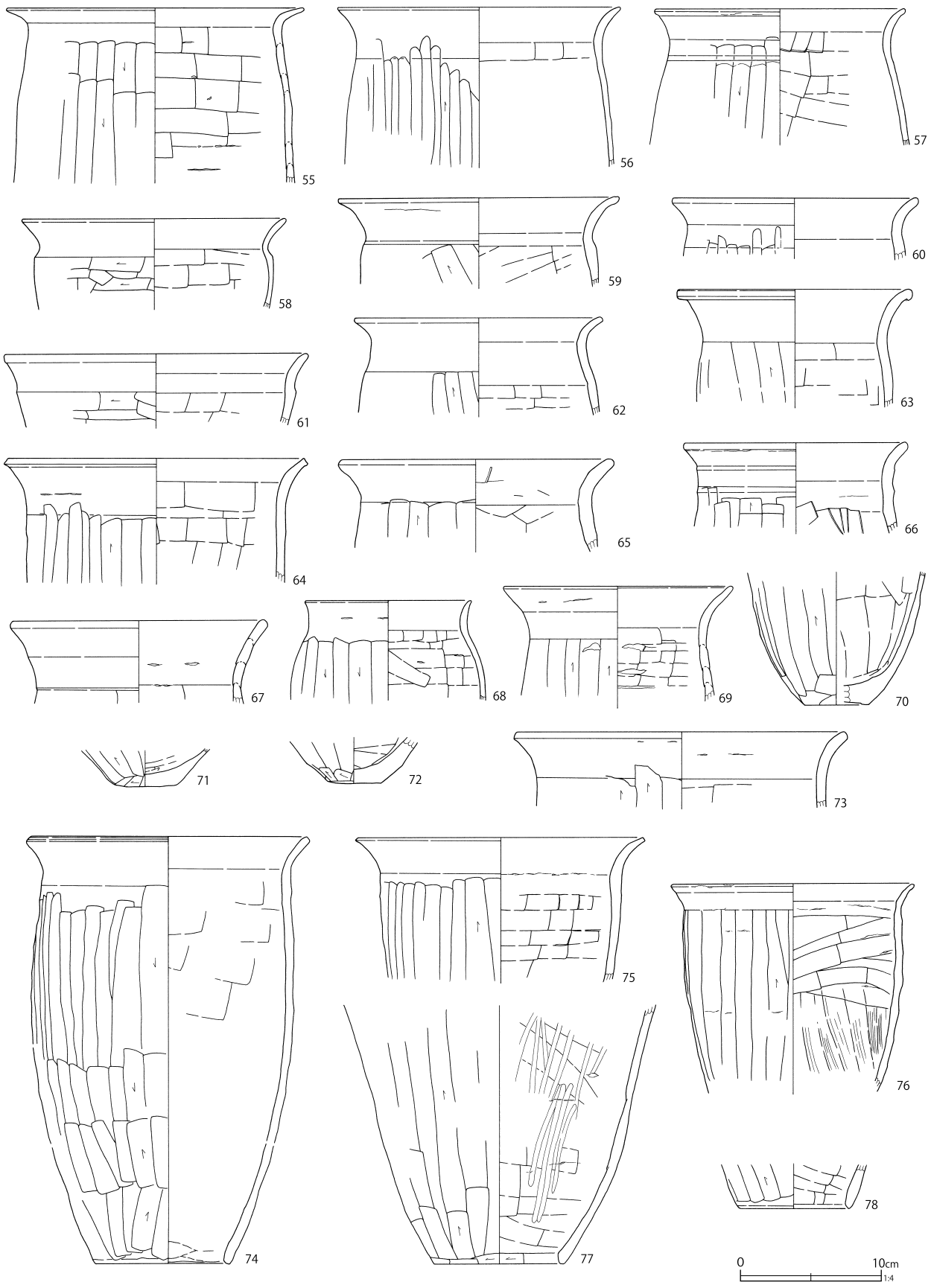
本住居跡からは、カマド手前から須恵器脚付長頸壺（第 111 図４）の脚部、住居中央東側から胴部が出土しており、注目される。第 10 号住居



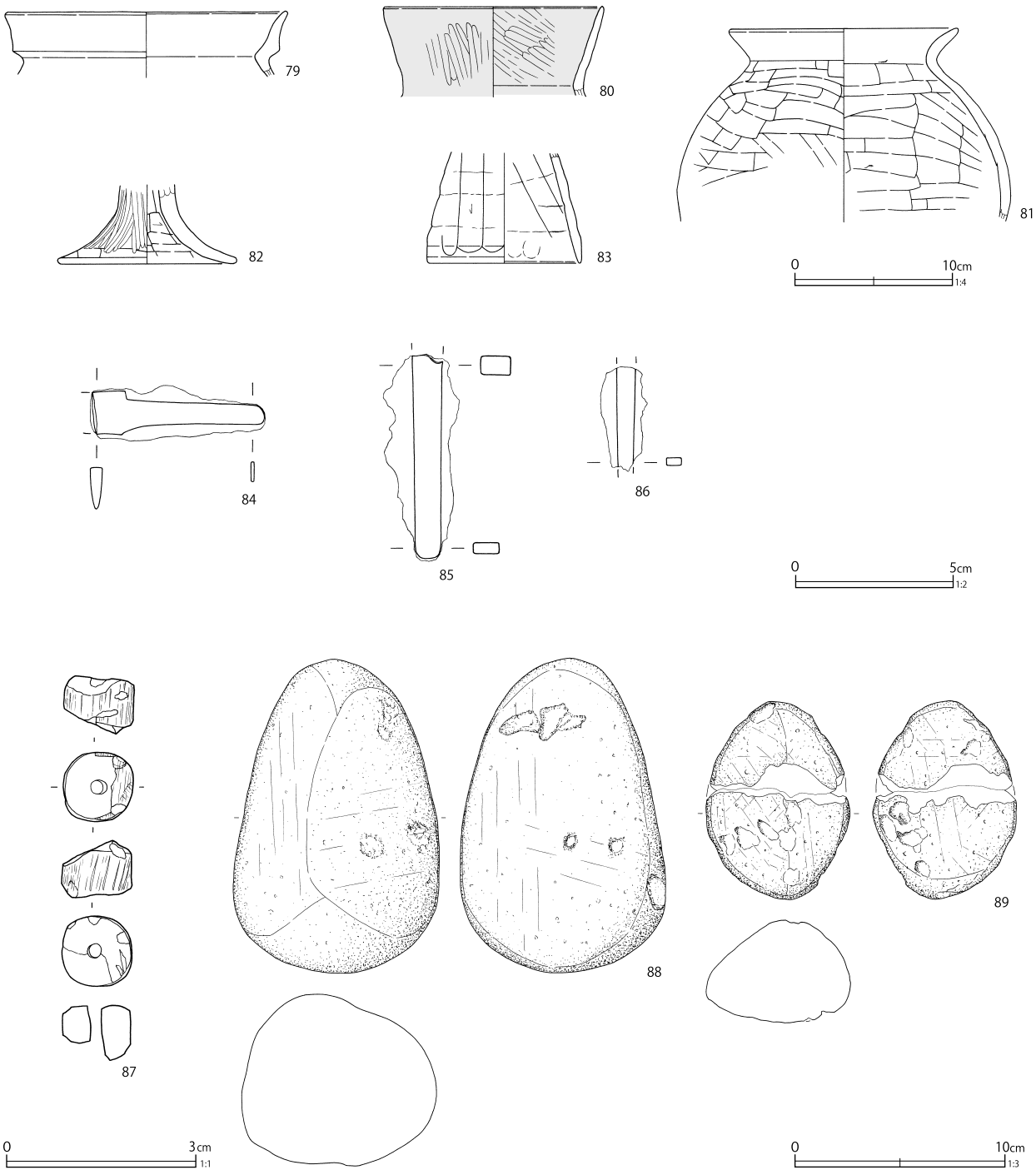
第120図　第13号住居跡出土遺物（1）



第121図　第13号住居跡出土遺物（２）



第122図　第13号住居跡出土遺物（３）



第123図　第13号住居跡出土遺物（４）

跡出土の脚部と接合する。

出土器種は古墳時代後期の須恵器坏、脚付長頸壺、土師器坏、甕、壺、小型壺、高坏、鉢、支脚、鉄滓である。古墳時代前期の甕、壺、貝巣穴泥岩が混入している。

１～３は須恵器である。１・２は坏蓋である。１は口縁端部が摘み上げられ、若干外側に広げられている。天井部回転ヘラケズリ。東毛産。２は１に比し低平で、口縁部は直立する。東毛産。３は壺の口縁部である。外面下段に横ナデによる段を持つ。内面が黒ずむ。東毛産。

以下は土師器である。４は大型坏である。坏蓋

第17表　第13号住居跡出土遺物観察表（第120～123図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	13.1	4.6	－	ＡＣＤＨＩ	80	普通	灰白	東毛産か　№129・130	125-6
2	須恵器	蓋	(12.0)	[2.0]	－	ＨＩ	5	良好	灰白	東毛産か	
3	須恵器	壺	(22.0)	[1.9]	－	ＦＨＩＫ	10	普通	灰褐	東毛産か	
4	土師器	坏	15.7	4.2	－	ＡＣＥＨＩ	95	普通	褐灰	暗文坏　内外面黒色処理か　№131	126-1
5	土師器	坏	14.0	3.5	－	ＡＣＨＫ	100	普通	橙	№99・103	126-2
6	土師器	坏	13.8	4.0	－	ＡＣＥＨＩ	85	普通	浅黄	有段口縁坏　№13	126-3
7	土師器	坏	(13.6)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
8	土師器	坏	(12.2)	[4.3]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい赤褐	№23	
9	土師器	坏	(12.0)	[1.9]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	漆塗りか？	
10	土師器	坏	(14.0)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　№41	125-7
11	土師器	坏	(14.3)	[4.4]	－	ＡＨＫ	30	普通	にぶい橙	№104	126-4
12	土師器	坏	12.0	4.0	－	ＣＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	№19・35	126-5
13	土師器	坏	(12.1)	[3.6]	－	ＡＣＩＫ	40	普通	橙	№15	127-1
14	土師器	坏	(13.0)	[2.5]	－	ＡＣＩＫ	20	普通	にぶい褐		
15	土師器	坏	(13.0)	[3.2]	－	ＣＤＨＩｋ	25	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
16	土師器	坏	(13.4)	[2.4]	－	ＡＨＩ	10	普通	褐灰	内外面黒色処理　№53	
17	土師器	坏	(12.8)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　漆塗りか？	127-2
18	土師器	坏	(16.4)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　№95	
19	土師器	坏	(14.8)	[4.5]	－	ＣＤＨＩＫ	50	普通	橙	有段口縁坏　内外面黒色処理か　№１	
20	土師器	坏	(14.8)	[4.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
21	土師器	坏	(14.6)	[4.6]	－	ＡＣＤＨＩＫ	30	普通	にぶい褐	有段口縁坏　№73	127-3
22	土師器	坏	(10.4)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　漆塗りか？　№81	127-4
23	土師器	坏	(14.0)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	灰黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理	
24	土師器	坏	(13.8)	[2.0]	－	ＡＨＩ	15	普通	黒褐	有段口縁坏	
25	土師器	坏	(13.2)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
26	土師器	坏	13.0	3.3	－	ＡＣＩＫ	45	普通	灰黄褐	有段口縁坏　内外面黒色処理の可能性あり　№24	127-5
27	土師器	坏	(12.8)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	有段口縁坏	
28	土師器	坏	(11.7)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　№18	
29	土師器	坏	(15.8)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	45	普通	灰黄褐	内外面黒色処理　№61　カマド	127-6
30	土師器	坏	(15.6)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
31	土師器	坏	(14.8)	[3.0]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	黒褐	内外面黒色処理　漆塗りか？	
32	土師器	坏	(14.8)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰褐	内外面黒色処理か　№17	
33	土師器	坏	(13.8)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	外面煤付着　№25	
34	土師器	坏	11.8	4.2	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	浅黄		
35	土師器	坏	(12.9)	[2.5]	－	ＡＣＤＨＩＫ	15	普通	赤	比企型坏　外面一部・内面赤彩	
36	土師器	鉢	(14.4)	11.8	7.0	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	外面煤付着　№16	127-7
37	土師器	鉢	(16.0)	[7.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	橙		
38	土師器	鉢	(13.8)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	褐灰	№54	
39	土師器	鉢	15.9	[9.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	浅黄橙	底部木葉痕　内外面煤付着　№74・79・80・124	127-8
40	土師器	鉢	(19.8)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
41	土師器	高坏	－	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい褐	№46	
42	土師器	小型甕	12.8	16.6	6.9	ＡＣＤＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	№7	128-1
43	土師器	鉢	(11.3)	10.0	7.4	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	№22	127-9
44	土師器	壺	－	[3.3]	(8.8)	ＡＣＨＩＫ	10	普通	褐灰		
45	土師器	甕	－	[5.8]	7.4	ＡＣＥＨＩ	80	普通	橙	№98	128-2
46	土師器	壺	－	[4.0]	(7.2)	ＡＣＤＨＫ	45	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№６	
47	土師器	小型甕	10.5	18.6	5.0	ＡＣＥＨＩ	100	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№９	128-3

48	土師器	壺	20.7	[17.5]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	灰白	№５	128-4
49	土師器	壺	(20.0)	[6.9]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
50	土師器	甕	18.0	33.9	－	ＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№137	128-5
51	土師器	甕	15.7	[26.0]	－	ＣＥＨＩＫ	80	普通	明赤褐	内外面煤付着　№136	129-1
52	土師器	甕	16.0	[21.4]	－	ＡＣＤＥＩＫ	55	普通	褐灰	内外面煤付着　№20	129-2
53	土師器	甕	(18.9)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
54	土師器	甕	(19.2)	[7.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
55	土師器	甕	(21.0)	[12.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	明赤褐	№97	
56	土師器	甕	(20.0)	[18.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№87	
57	土師器	甕	(17.8)	[19.6]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	橙	内外面煤付着　№109	
58	土師器	甕	(18.8)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	内外面煤付着	128-6
59	土師器	甕	(20.0)	[6.3]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
60	土師器	甕	(17.9)	[4.4]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	灰褐	内外面煤付着	
61	土師器	甑	(21.8)	[5.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	浅黄橙		
62	土師器	甕	(17.5)	[7.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	橙		
63	土師器	小型甕	(16.3)	[8.5]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	にぶい橙	口縁部内外面のみ赤彩か　№49	129-3
64	土師器	甕	(10.6)	[8.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	浅黄橙		
65	土師器	甕	(19.0)	[6.5]	－	ＡＣＥＩＪＫ	20	普通	赤褐	外面煤付着	
66	土師器	甕	(15.6)	[6.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
67	土師器	甕	(18.2)	[5.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	№12	
68	土師器	甕	(11.8)	[7.1]	－	ＣＥＨＩＫ	25	普通	橙		
69	土師器	甕	(16.2)	[8.2]	－	ＣＤＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内面煤付着　№５	
70	土師器	甕	－	[9.4]	(4.6)	ＣＥＨＩＫ	25	普通	灰褐	№102	
71	土師器	甕	－	[2.5]	4.4	ＡＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
72	土師器	甕	－	[3.2]	3.9	ＡＣＨＩ	50	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
73	土師器	甑	(23.5)	[5.4]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	№116	
74	土師器	甑	19.5	(30.5)	(9.5)	ＣＤＥＨ	60	普通	にぶい黄橙	№４・14・21・77・78・85	129-4
75	土師器	甑	(20.5)	[10.2]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	にぶい黄橙	№101・114	129-5
76	土師器	甑	17.0	[14.8]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	№136	130-1
77	土師器	甑	－	[18.3]	9.4	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	外面煤付着　№64・90	130-2
78	土師器	甑	－	[3.1]	(7.8)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	単孔甑	
79	土師器	甕	(18.0)	[4.1]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	５の字口縁甕模倣	
80	土師器	壺	(14.0)	[5.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	
81	土師器	甕	(14.5)	[12.2]	－	ＡＣＥＨＩＪ	20	普通	にぶい橙	№69	130-3
82	土師器	高坏	－	[5.0]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	褐		130-4
83	土師器	支脚	－	[7.0]	(9.8)	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	外面煤付着	
84	鉄製品	刀子	長さ[5.4]　刃幅0.9　背幅0.4　重さ10.4ｇ							№10	222-1
85	鉄製品	棒状品	長さ[6.5]　幅1.0　厚さ0.6　重さ20.1ｇ							カマド	222-1
86	鉄製品	棒状品	長さ[3.3]　幅0.6　厚さ0.3　重さ3.9ｇ								222-1
87	石製品	臼玉	長さ1.1　幅1.1　厚さ0.8　重さ1.4ｇ　孔径0.2　滑石								219-8
88	石製品	砥石	長さ14.9　幅9.9　厚さ8.2　重さ531.9ｇ　安山岩							№38	
89	石製品	砥石	長さ9.6　幅6.9　厚さ5.0　重さ88.2ｇ　軽石							№39・40	

模倣坏で、内面に放射暗文が施されている。５～35は坏である。７～17は坏身模倣坏である。全体に器高が低く、中でも14～17は更に低くなっている。７～10・12・16は口縁部が内傾し、その他は直立する。10・15～17は内外面黒色処理されている。11は器肉が厚く、内外面とも剥離が著しい。外面ヘラケズリ後ヘラ磨き。16は内湾口縁坏に近い。16・17はその他のものに比して、口縁部が厚く、体部との境目が曖昧であり、他系統のものである可能性がある。５・18

～ 28 は有段口縁坏である。深身の 19・21・28 の他は器高が低い。18 ～ 23 は口径 14 ～ 15cm、19 ～ 28 は口径 12 ～ 13cm でやや小型である。20・22・23・25 は内外面黒色処理されている。19 は全く異なる色調の二片が接合している。22 は風化のため、ヘラケズリがほとんど見えない。６・29 ～ 34 は坏蓋模倣坏である。やはり大小が認められる。29･31 は内外面黒色処理されている。35 は比企型坏である。口縁部内外面、体部内面が赤彩されている。

36 ～ 40・43 は鉢である。各々器形が異なり、甑などの他器種が含まれる可能性があるが、甕より小型で、器肉が厚く、胴部下位が丸く収まると考えられるものを、ここでは鉢としておきたい。ただし全ての個体に２次被熱による赤変、煤の付着が見られることから、用途としては甕として用いられたと考えられる。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底面ヘラケズリが施されている。36 は内面に粘土積み上げ痕が顕著に認められる。39 の底面には木葉痕が認められる。40 の口縁部には貫入状の細かいヒビが入っている。

41 は柱状脚の高坏である。中実で、上下を欠く。外面ヘラ磨き。

42・47 は小型甕である。口縁部が短く胴部中位に張りがある。器肉が厚く、粘土帯の接合痕が明瞭に認められる。68 は薄手でこれらとは異なるが、小型甕の可能性がある。

43 は鉢で、箱形に近く、底部が大きい。底面ヘラケズリ。器面全体がざらざらしている。

44 ～ 46・48・49 は壺である。44 ～ 46 は壺底部である。外面、底面ヘラケズリ。甕底部に比して器肉が厚く、底径が大きくて箱形を呈する。外面、底面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。46 は２次被熱を受けている。

48・49 は壺である。口径に比して胴部径が大きく、胴部に張りがあるものを壺とした。口縁部は直立して開く。口縁部は横ナデで、中位に段を持つ。胴部外面の調整は、48 が横方向のヘラケズリ、49 が風化のため不明である。内面はヘラナデが施されている。

50 ～ 72 は甕である。いずれも口縁部がくの字状になる長甕である。50 は外面に所々粘土が貼付され、不明瞭なヘラケズリが施されている。54 の外面には指頭痕が明瞭に残る。口径の大きい 55・61・64 は下半が欠失するため不明だが、甑である可能性がある。調整は口縁部には横ナデ、胴部には外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデが施されている。ヘラケズリには様々な幅の工具が用いられている。58・61・67 は肩部に横方向のヘラケズリが加えられている。底部は外周横方向ヘラケズリ、底面ヘラケズリ、内面は胴部から連続するヘラナデが施されている。63 は口縁端部のみが赤褐色を呈しており、赤彩の可能性がある。

73 ～ 78 は単孔の甑である。所謂砲弾形で、調整は口縁部横ナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向のヘラナデが施されている。76 の内面下半は上半の工具と異なり、小口ナデである。77 は疎らなヘラ磨きが施されている。

79 ～ 83 は古墳時代前期に帰属する。79 は北陸地方の５の字状口縁甕を模倣したと考えられる甕である。内外面赤彩。80 は壺である。内外面ヘラ磨き、赤彩が施されている。81 は所謂ナデ甕で、胎土に白色針状物質を含む。82 は柱状部から大きく開く高坏である。柱状部外面ヘラ磨き、内面ヘラケズリ、裾部は内外面ヘラナデが施されている。83 は支脚である。粘土帯の積み上げ痕が明瞭に認められる。外面縦方向ヘラケズリ、内面縦方向ヘラナデが施され、端部には横ナデが加えられている。

84 ～ 86 は鉄製品である。84 は刀子の刃部から茎にかけての破片である。両関で刃関はなだらか、背関は段を持っている。目釘孔はなく、茎尻

は丸く収められている。85・86は棒状品である。85は端部が丸く収められている。上下で厚みが異なる。用途は不明である。86は両端を欠失している。断面形はいずれも長方形である。

87は滑石製の臼玉である。白色で軟質な石材を使用する。円柱状に整形後輪切り状に切断され、最後に穿孔されている。穿孔方向不明。側面に粗い整形痕が認められる。

88は、軽石製の、89は安山岩製の砥石である。いずれも平面形は楕円形で僅かに擦痕が見られる。

本住居跡の時期は6世紀第2～3四半期、屋敷裏Ⅴ－3期である。

第14号住居跡（第124・125図）

A区の東端、G－8グリッドに位置する。調査区の隅にあたり、遺構の南東側と南西側は調査区域外にかかる。北西カマドで、主軸方位はN－47°－Wである。

検出範囲での平面形は方形である。規模は主軸方向3.65 m、直交軸方向5.20 mである。深さは0.20 mで、床面は平坦である。覆土は炭化物、焼土、灰、灰色粘土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは北西壁で検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く突出する。袖を含む全体の長さは1.90 m、幅は0.35 mである。覆土は第6層がカマド天井部崩落土、第7層が灰層と考えられる。両壁面、煙道部壁面が焼けていたが、火床面はあまり焼けていなかった。奥壁から段を持って煙道部に至り、段の手前側に長甕が伏せた状態で出土しており、支脚の代わりと考えられる。袖は褐色土の貼り付けによって造られていた。地山に近い基礎の褐色土に、ブロック状の褐色土が積み上げられている。

貯蔵穴は、カマド左側のスペースに造られている。北東－南西方向が長い楕円形で長径0.65 m、短径0.50 m、深さ0.25 mである。覆土は炭化物、灰を含む黒褐色土、褐色土で、上層は埋戻しの可能性がある。中から土師器甕の破片が出土した。

柱穴は主柱穴と考えられる2本を検出された。P1は径0.45 m、深さ0.55 m、P2は径0.35 m、深さ0.60 mである。覆土は第1層が柱痕で、覆土の様相からは柱を抜去せずに、柱根が残された可能性がある。

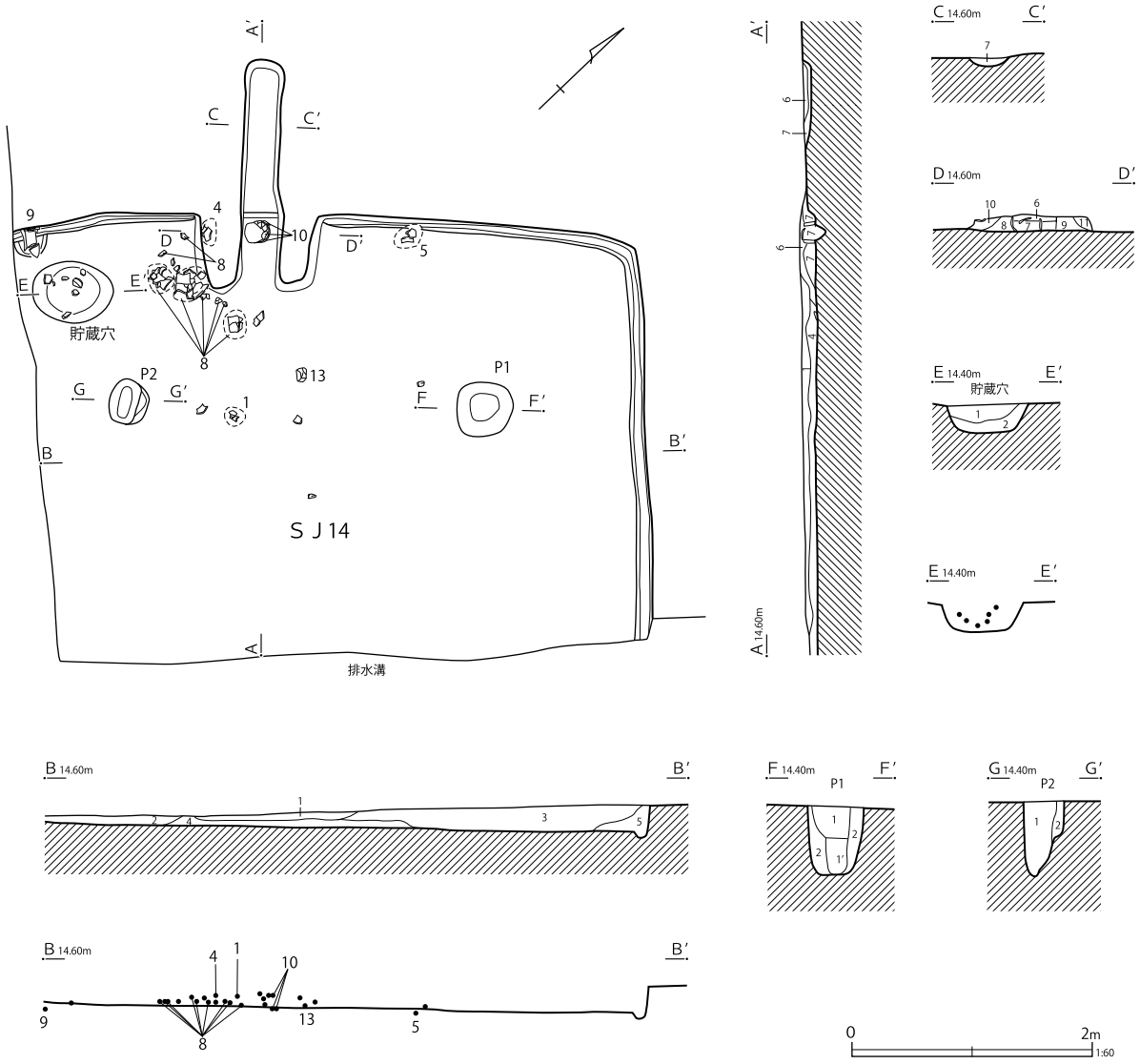
遺物は少量だが、カマド周辺を中心に出土した。大部分が床面直上からの出土である。カマド使用の土器を中心に廃棄した結果と考えられる。

出土器種は古墳時代後期の土師器坏、甕の破片が出土している。

掲載した遺物はいずれも古墳時代後期の土師器

第18表　第14号住居跡出土遺物観察表（第125図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	[3.6]	－	ＣＤＩＪ	10	普通	にぶい赤褐	№17	
2	土師器	坏	(12.4)	[2.1]	－	ＣＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	坏	(12.0)	[1.4]	－	ＡＣＩＫ	25	普通	橙		
4	土師器	坏	(15.9)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	有段口縁坏　№4	
5	土師器	坏	(13.8)	[4.9]	－	ＣＥＨＩＫ	40	普通	明赤褐	内外面黒色処理か　№22	130-5
6	土師器	壺	(20.0)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
7	土師器	壺	(18.0)	[3.4]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		
8	土師器	甕	17.8	[25.1]	－	ＣＥＦＧＨＫ	60	普通	にぶい赤褐	№3・5・7～10・12～14	130-6
9	土師器	甕	(20.4)	[11.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	№1	131-1
10	土師器	甕	14.6	[12.1]	－	ＣＤＥＨＩＫ	90	普通	灰黄褐	内外面煤付着　カマド№24・27・28	131-2
11	土師器	甕	(25.0)	[7.5]	－	ＡＩ	15	普通	褐灰		
12	石製品	磨石	長さ11.7　幅7.1　厚さ5.4　重さ688.8ｇ　砂岩								
13	石製品	砥石	長さ11.2　幅7.5　厚さ5.1　重さ149.2ｇ　軽石							№20	



ＳＪ14
1　暗褐色土　灰・炭化物・焼土粒子多量
2　褐色土　　焼土粒子・炭化物多量
3　明褐色土　砂質土　地山に近い
4　褐色土　　砂質土　炭化物粒子やや少量
5　褐色土　　灰色粘土ブロック多量
6　褐色土　　焼土ブロック極めて多量
7　黒色土　　灰層　焼土・炭化物粒子混じる
8　褐色土　　内側赤化　地山に近似（袖）
9　褐色土　　地山に近似（袖）
10　褐色土　　地山に近似　褐色土ブロック多量（径５㎝）
11　褐色土　　地山に近似　褐色土ブロック多量（径５㎝）

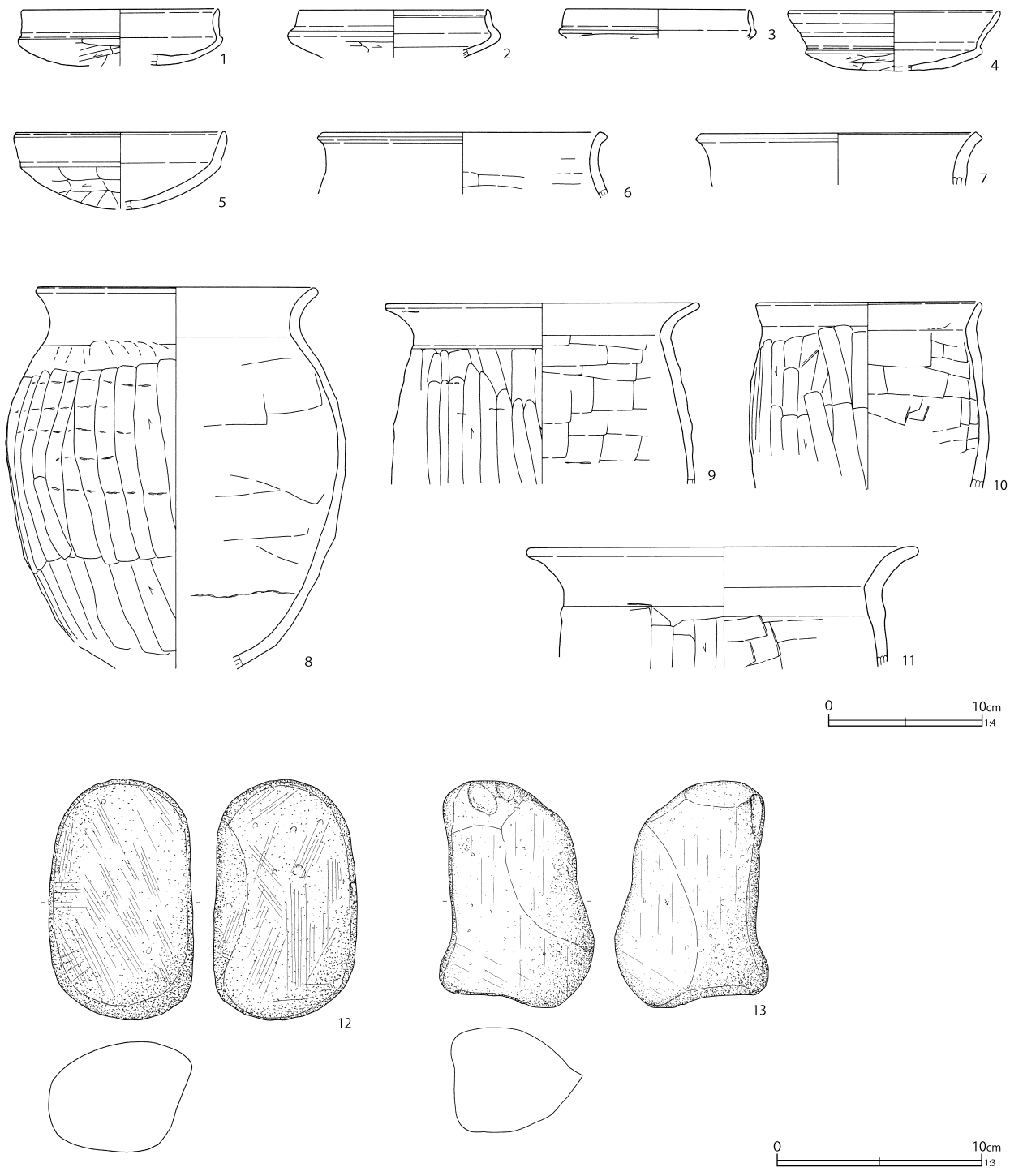
貯蔵穴
1　黒褐色土　黒色灰・焼土多量
2　褐色土　　炭化物・黒色灰少量

Ｐ１・２
1　暗褐色土　黒色土　炭化物含む　しまりなし　柱痕
1’暗褐色土　黒色土ブロック含む　しまり全くなし　柱痕
2　褐色土　　炭化物・明褐色土含む

第124図　第14号住居跡

である。１～５は坏である。１～３は坏身模倣坏である。全体に器高が低く、口縁部は直立もしくはやや外反する。３は更に扁平な器形になると考えられる。４は有段口縁坏である。上位の段は沈線状である。内面は剥離している。５は坏蓋模倣坏である。厚手で内外面黒色処理されている可能性がある。６・７は土師器の壺、８～11は甕である。６・７は厚手で、横ナデ調整、端部が四角く、面を持ち、８以下の甕とは異なるため壺としておく。

８～10は甕である。いずれも口縁部がくの字状になる長甕だが、各々形態が異なる。８は胴部

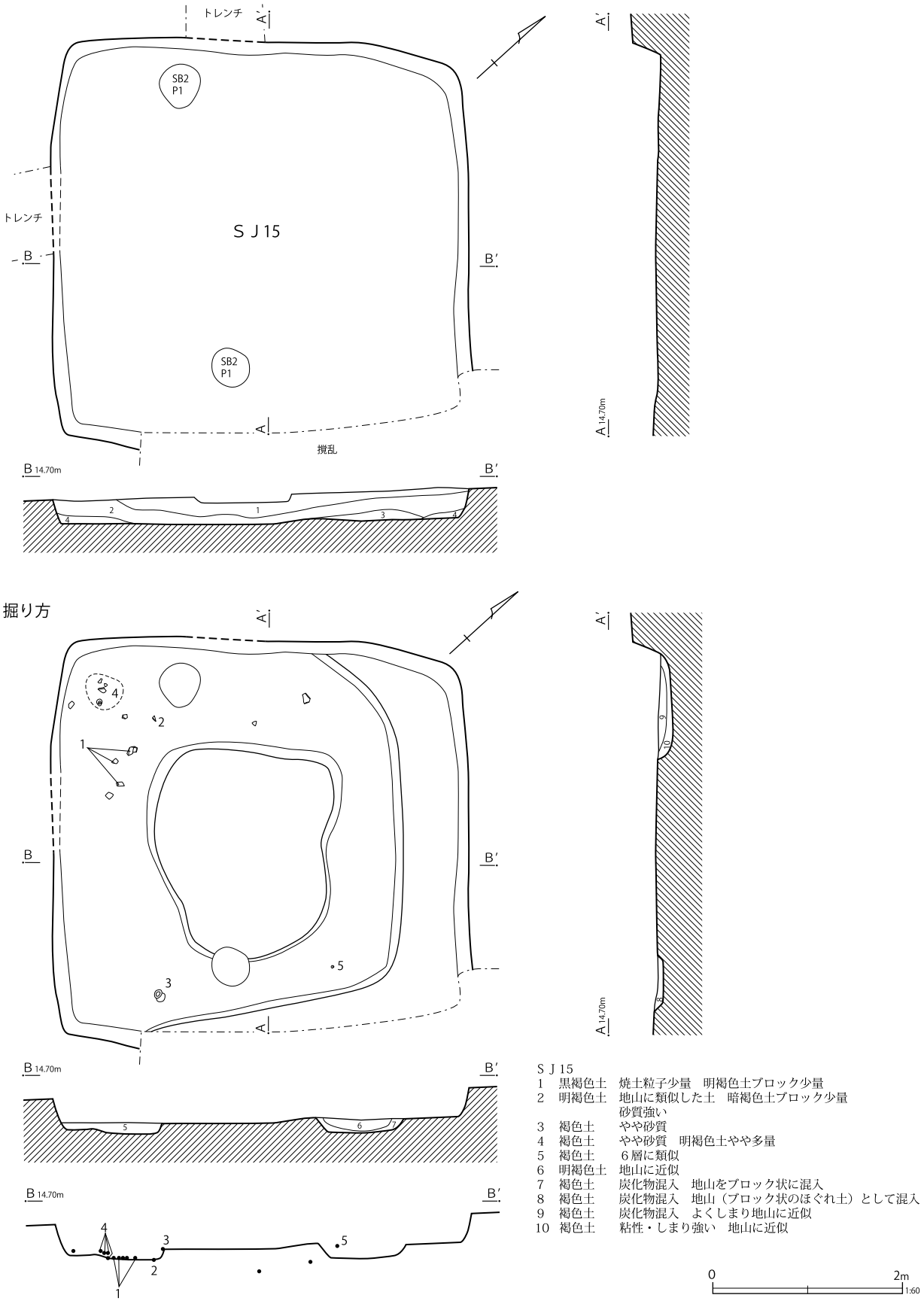


第125図　第14号住居跡出土遺物

中位に最大径があり、口縁部の屈曲が弱い。粘土の接合痕が明瞭である。10 は小型甕になる可能性が高い。口縁部が大きく外反する９・11 は、11 が厚手で大型である。甑の可能性がある。

12 は軽石製の磨石である。平坦面は使用により平滑になっている。13 は軽石製の砥石で、使用により不定形になっている。僅かに擦痕が見られる。

本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－３期である。



ＳＪ15
1　黒褐色土　焼土粒子少量　明褐色土ブロック少量
2　明褐色土　地山に類似した土　暗褐色土ブロック少量
　　砂質強い
3　褐色土　やや砂質
4　褐色土　やや砂質　明褐色土やや多量
5　褐色土　６層に類似
6　明褐色土　地山に近似
7　褐色土　炭化物混入　地山をブロック状に混入
8　褐色土　炭化物混入　地山（ブロック状のほぐれ土）として混入
9　褐色土　炭化物混入　よくしまり地山に近似
10　褐色土　粘性・しまり強い　地山に近似

第126図　第15号住居跡

第 15 号住居跡（第 126・127 図）

Ａ区の中央、Ｄ－５・６グリッドに位置する。古墳時代前期の遺構分布の西端にあたり、これより西側には遺構が造られていない。遺構の東側は撹乱によって壊されている。

平面形は隅丸正方形で、各辺はやや丸みを帯びている。北西－南東方向を主軸とした場合の軸方向はＮ－ 48°－Ｅである。規模は、一辺 4.2 ｍである。深さは 0.30 ｍである。覆土は黒褐色土、明褐色土、褐色土で、自然堆積である。床面はほぼ平坦である。中央を島状に残し、幅１ｍ、深さ 0.3 ｍの掘り方が巡らされ、地山をブロック状に含む明褐色土、褐色土が充填されている。

炉跡、ピット等は検出できなかった。

遺物は少なく、いずれも掘り方内からの出土である。古墳時代中期の壺、甕、高坏、ミニチュア、土錘が出土している。

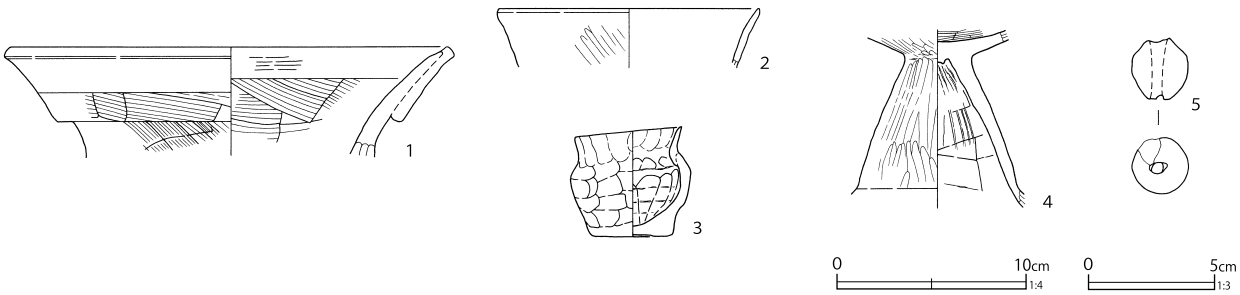
１は複合口縁壺の口縁部である。大型で、器肉が厚く、焼成が良い。内外面刷毛目後端部に横ナデが加えられている。複合部と内面、口縁部の下地では刷毛目工具が異なっている。２は小型壺の口縁部である。内外面横ナデ。外面のみヘラ磨きが施されている。３は手捏ねの所謂壺形である。全体に指オサエ、指頭ナデが施されている。底面は薄い輪台状の底部でナデが施されている。４はやや短めの柱状部が直線的に開く高坏である。坏部、柱状部ホゾ接合。柱状部内面は絞り目がヘラナデによってナデ消されている。５は土錘である。所謂土玉で若干の光沢がある。

本住居跡の時期は５世紀前半、屋敷裏Ⅳ－１期である。

第 18 号住居跡（第 128・129 図）

Ａ区の東側、Ｆ－７・８グリッドに位置する。第 10 号溝跡と重複し、本遺構が古い。遺構の北側は撹乱によって壊されている。炉１・２が遺構の北西にあるため、北西－南東方向が主軸と考えられる。主軸方向はＮ－ 48°－Ｗである。

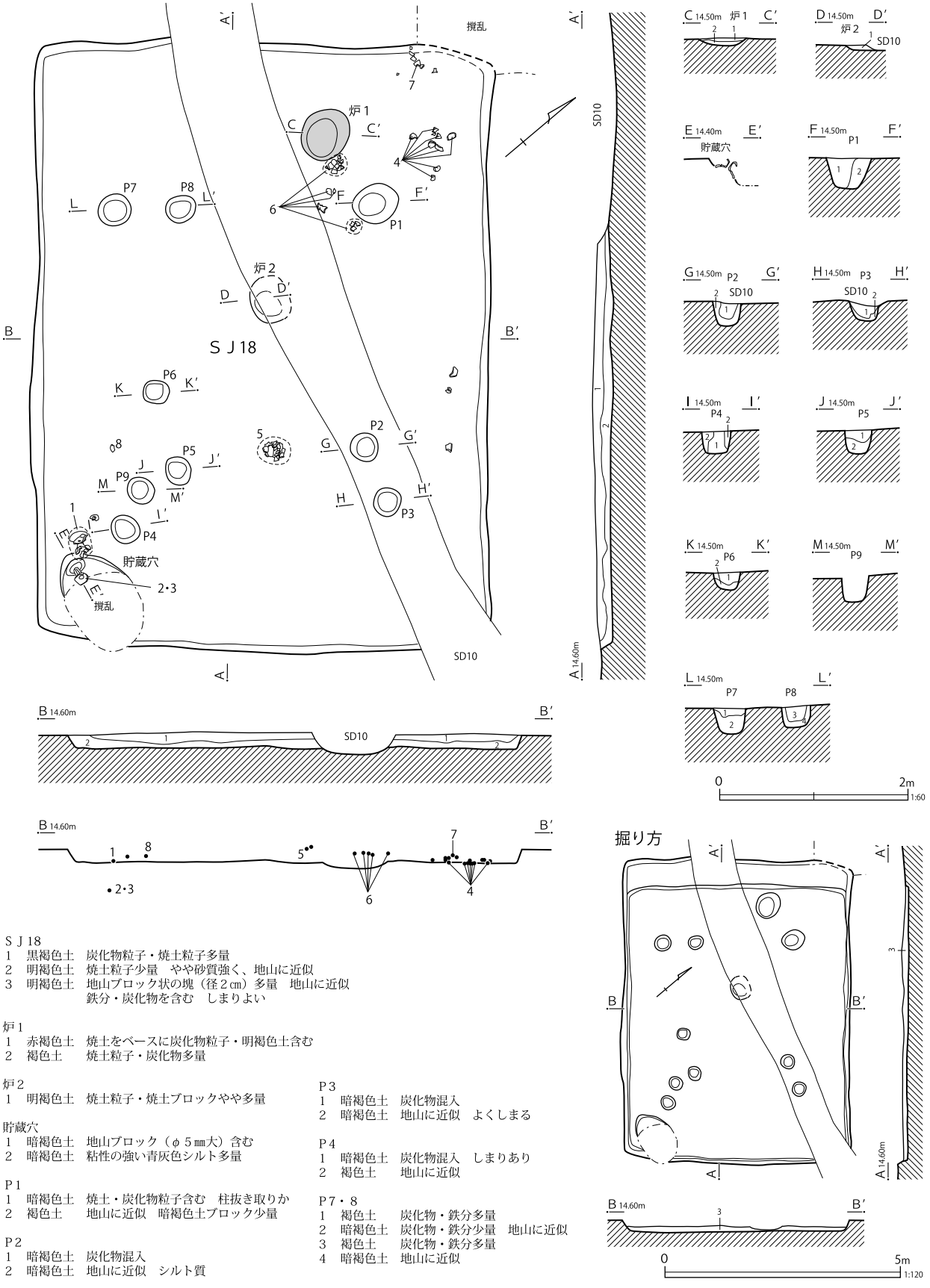
平面形は長方形で、各辺は直線的である。規模は、主軸方向 6.50 ｍ、直交軸方向 4.80 ｍである。深さは 0.15 ｍで、覆土は焼土、炭化物を含む黒褐色土、明褐色土で、自然堆積である。床面はやや凹凸がある。床面全体が貼床で、地山ブロック、



第127図　第15号住居跡

第19表　第15号住居跡出土遺物観察表（第127図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(23.2)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	良好	浅黄橙	黒斑あり　№10・11・13	131-4
2	土師器	小型壺	(13.8)	[4.0]	－	ＡＣＩＪＫ	10	普通	褐灰	№９	
3	土師器	手捏ね	5.6	5.5	4.2	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	壺型　№１	131-5
4	土師器	高坏	－	[9.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	№３～６	131-3
5	土製品	土錘	径2.25×2.2　高さ2.4 孔径0.7×0.4　重さ9.8g			ＡＩ	95	普通	明赤褐	土玉　№２	



SＪ18
1　黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒子多量
2　明褐色土　焼土粒子少量　やや砂質強く、地山に近似
3　明褐色土　地山ブロック状の塊（径２㎝）多量　地山に近似
　　鉄分・炭化物を含む　しまりよい

炉１
1　赤褐色土　焼土をベースに炭化物粒子・明褐色土含む
2　褐色土　　焼土粒子・炭化物多量

炉２
1　明褐色土　焼土粒子・焼土ブロックやや多量

貯蔵穴
1　暗褐色土　地山ブロック（φ５㎜大）含む
2　暗褐色土　粘性の強い青灰色シルト多量

Ｐ１
1　暗褐色土　焼土・炭化物粒子含む　柱抜き取りか
2　褐色土　　地山に近似　暗褐色土ブロック少量

Ｐ２
1　暗褐色土　炭化物混入
2　暗褐色土　地山に近似　シルト質

Ｐ３
1　暗褐色土　炭化物混入
2　暗褐色土　地山に近似　よくしまる

Ｐ４
1　暗褐色土　炭化物混入　しまりあり
2　褐色土　　地山に近似

Ｐ７・８
1　褐色土　　炭化物・鉄分多量
2　暗褐色土　炭化物・鉄分少量　地山に近似
3　褐色土　　炭化物・鉄分多量
4　暗褐色土　地山に近似

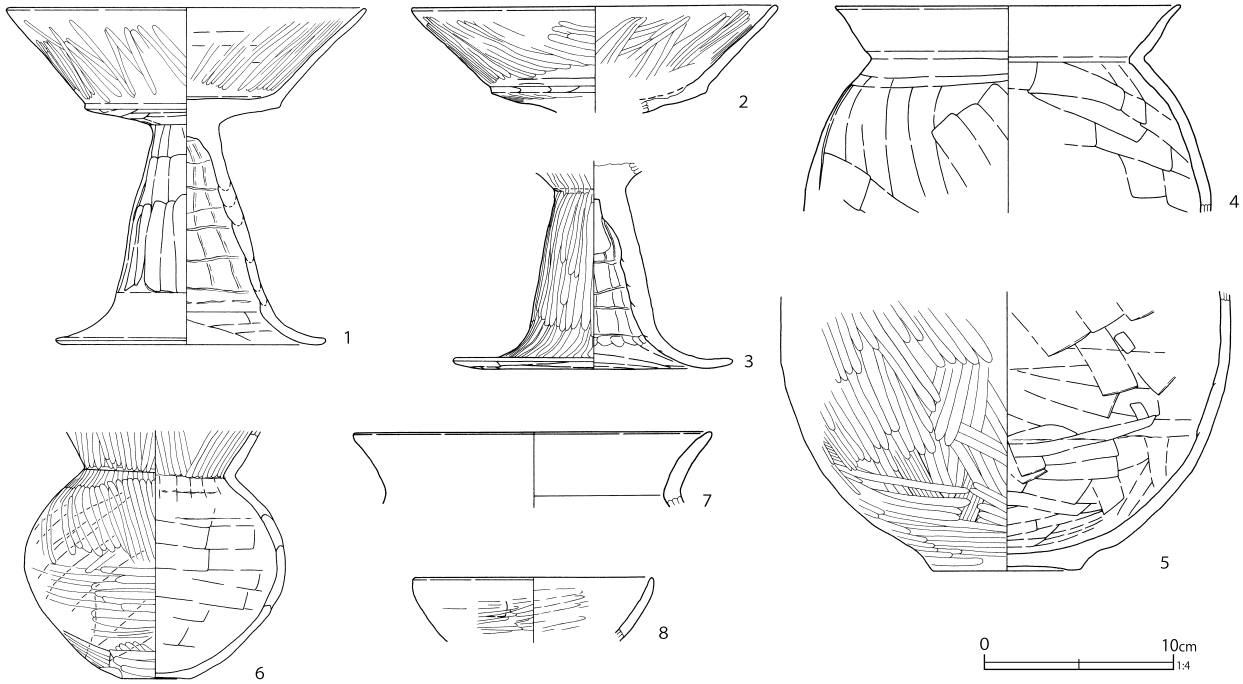
第128図　第18号住居跡

炭化物、酸化鉄を含む硬質の明褐色土が充填されていた。掘り方は北西側に60cmほどの段があり、床面からの深さは0.15 mほどである。底面はほぼ平坦であった。

床面からは地床炉、貯蔵穴、柱穴が検出された。炉跡は２箇所検出された。炉１は床面北西側のやや北寄りにある。不整円形で長径0.55 m、短径0.50 m、深さ0.08 mで、覆土は上層が良く焼けていた。炉２は床面のほぼ中央にある。不整円形で長径0.50 m、短径0.40 m、深さ0.06 mで、覆土は焼土を多く含む明褐色土である。

貯蔵穴は南コーナー際で検出された。東西方向が長い楕円形と考えられるが、大部分を撹乱によって壊されており、詳細は不明である。遺存している範囲の規模は、東西0.30 m、南北0.30 m、深さ0.30 mである。覆土は地山ブロックを含む暗褐色土で埋戻しの可能性がある。貯蔵穴内から土師器高坏（２・３）が出土している。南側床面にも高坏（１）が横転した状態で出土しており、当初は貯蔵穴際に置かれていたものと考えられる。

ピットは９基検出された。規模は径0.25～0.45 m、深さ0.25～0.30 mである。覆土は焼土、炭化物、酸化鉄含む褐色土、暗褐色土である。柱



第129図　第18号住居跡出土遺物

第20表　第18号住居跡出土遺物観察表(第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	19.2	17.7	14.5	ＡＥＨＩＫ	80	普通	明赤褐	№５	132-1
2	土師器	高坏	19.5	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	90	普通	明赤褐	貯蔵穴№31	132-2
3	土師器	高坏	－	[10.8]	15.0	ＡＣＨＩＫ	90	良好	明赤褐	貯蔵穴№31	132-3
4	土師器	甕	(18.4)	[10.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄褐	内外面煤付着　№15～17・22・24～27　掘り方	131-7
5	土師器	壺	－	[14.7]	7.8	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№９	132-4
6	土師器	小型壺	－	[13.0]	3.7	ＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい赤褐	№10～14	132-5
7	土師器	甕	(18.8)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	灰白	№20	
8	土師器	鉢	(12.7)	[3.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№７	

抜取痕や柱痕と考えられる土層が認められるものはＰ１・２・４・８だが、配置が整わず主柱穴として特定できない。

遺物は少ないが、北コーナー周辺、Ｐ２－５間、前述の貯蔵穴際からまとまって出土した。古墳時代中期の壺、甕、高坏、鉢が出土している。

１～３は高坏である。坏部は下段に段を持ち、内外面ヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。ホゾ接合で、３は扁桃腺状に膨が突出する。脚部はラッパ状に開く長脚で、下位にやや膨らみを持つ。外面は１がヘラナデ、３がヘラ磨きである。内面は絞り目と粘土の積み上げ痕にナデが加えられている。裾部は水平に開き、１の外面は横ナデ、３の外面はヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。内面はいずれもヘラナデである。４･７は甕である。４の胴部は内外面ヘラナデ。５は壺である。外面、底面刷毛目後ヘラ磨き。内面はヘラナデである。粘土帯の接合箇所にヘラナデが重ねられている。

６は小型壺である。外面、底面木口ナデ後ヘラ磨きが施されている。口縁部内面ヘラ磨き、胴部内面ヘラナデである。

８は小型の鉢である。内外面ヘラナデ後ヘラ磨きだが、風化のため不明瞭である。

時期は５世紀前半。屋敷裏Ⅳ－１期である。

第 20 号住居跡（第 130 ～ 132 図）

Ａ区の東端、Ｆ－８・９、Ｇ－８グリッドに位置する。第 20 号住居跡、第 16 号土壙、第 10 号溝跡と重複し、土壙より新しく、住居跡、溝跡より古い。調査区の端にあたり、遺構の南東側は調査区域外にかかる。北カマドで、主軸方位はＮ－26°－Ｗである。

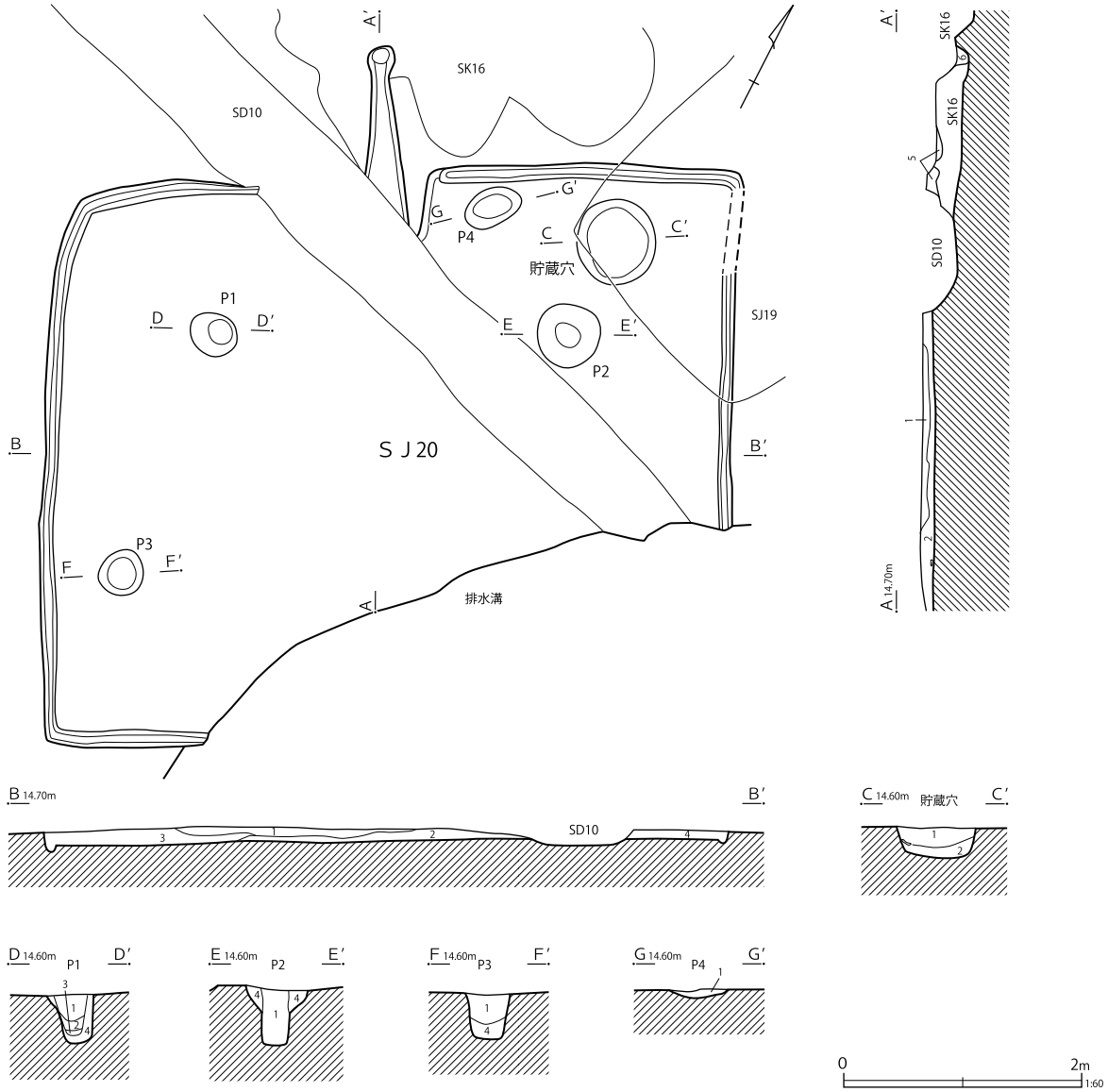
平面形は、東西方向がやや長い長方形である。規模は主軸方向 4.75 ｍ、直交軸方向 5.75 ｍである。深さは 0.15 ｍで、床面は若干西側が低くなっていた。覆土は炭化物、焼土、灰を含む褐色土、明褐色土、黒褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは北壁中央で検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く突出する。第 10 号溝跡との重複のため、燃焼部、煙道は明確に把握できず、溝状に認識できたのみである。袖を含む全体の検出できた長さは 1.50 ｍ、幅は 0.30 ｍである。覆土は第５層が灰層、第６層が煙出し部の掘り込みと考えられる。被熱範囲は不明瞭で、煙道部壁面が焼けているのを確認したのみである。袖は明褐色土で、地山削り出しの基底面のみが検出された。

貯蔵穴は、カマド右側のスペースのほぼ中央に造られていた。径 0.70 ｍ、深さ 0.25 ｍの略円形

第21表　第20号住居跡出土遺物観察表（第132図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	[1.9]	－	ＣＤＥＨＩＫ	5	良好	黄灰	東毛産か	
2	土師器	坏	(12.6)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№21	132-6
3	土師器	坏	－	[3.0]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	25	普通	橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№10	
4	土師器	坏	(24.0)	4.3	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	橙	内外面黒色処理　№19	132-7
5	土師器	坏	(13.9)	4.3	－	ＡＣＩＫ	50	普通	にぶい褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№12	133-1
6	土師器	坏	14.1	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙	№22・24	133-2
7	土師器	坏	(14.8)	4.1	6.6	ＡＣＥＨＩＪＫ	60	普通	浅黄橙	底部木葉痕　№20	133-3
8	土師器	甕	(19.5)	34.0	(5.0)	ＤＦＨ	40	普通	にぶい黄橙	№３・４	133-4
9	土師器	甕	19.1	33.5	6.1	ＣＤＥＦ	70	普通	にぶい黄橙	№１・６	133-5
10	土師器	甕	20.0	[22.4]	－	ＣＥＦＧＨ	40	良好	にぶい黄橙	№３・４・６・７	134-1
11	土師器	甕	－	[8.7]	(6.0)	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№３・６	134-2
12	土師器	壺	(18.0)	28.2	8.3	ＣＥＦＨ	70	良好	灰黄褐	№２	134-3
13	土師器	甑	(20.8)	[8.4]	－	ＡＣＤＨＩＫ	15	普通	明褐灰	内面煤付着　№８	
14	土師器	甕	(15.2)	[3.9]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№６	
15	石製品	砥石	長さ[6.0]　幅[5.0]　厚さ[3.4]　重さ34.8ｇ　軽石								



S J 20
1　褐色土　　砂質土　灰・焼土少量
2　黒褐色土　灰・炭化物・焼土粒子多量
3　明褐色土　砂質土　地山に近い土　焼土粒子少量
4　明褐色土　３層に近似　焼土粒子少量
5　黒灰色土　灰層　灰主体　焼土粒子多量
6　暗褐色土　焼土粒子少量含む　奥壁側側壁被熱

貯蔵穴
1　暗褐色土　明褐色砂質土ブロック多量
2　暗褐色土　炭化物・焼土粒子少量含む

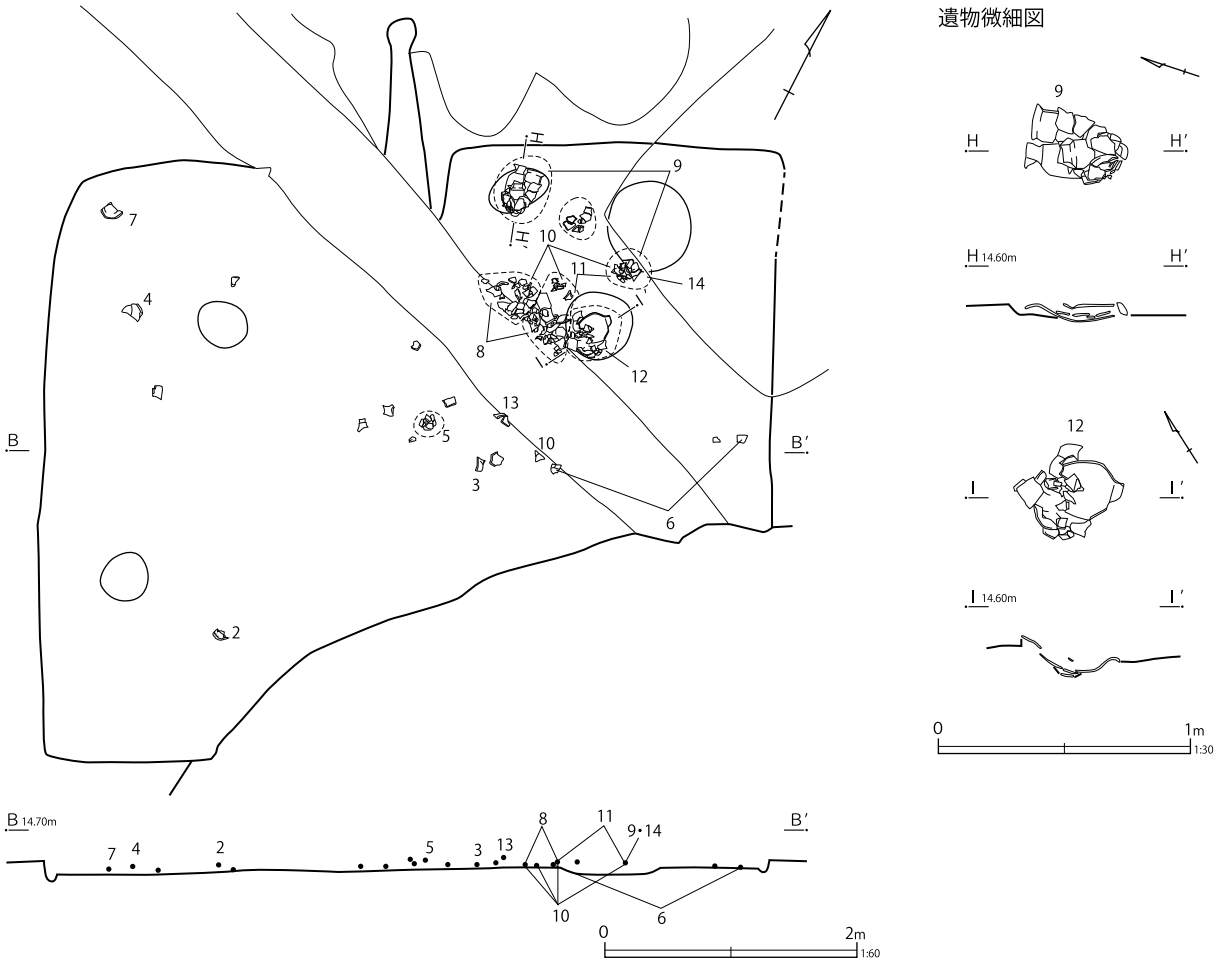
P 1～4
1　褐色土　　炭化物・鉄分多量　しまり弱い
2　明褐色土　炭化物・焼土少量　しまりあり
3　明褐色土　２層に比してしまり強い
4　明褐色土　地山に近似　しまり強い

第130図　第20号住居跡（1）

である。覆土は上層が明褐色砂ブロックを多く含む暗褐色土、下層は焼土、炭化物を含む暗褐色土で、上層は埋戻しの可能性がある。

柱穴は４本が検出された。Ｐ１～３は規模、断面形、覆土が相似しており、配置の上からも主柱穴の可能性が高い。上端径 0.4 ～ 0.55 m、下端径 0.20 ～ 0.25 m、深さは 0.35 ～ 0.55 mである。覆土は第１・２層が柱痕で、３層が柱の当たり、４層は柱掘り方の充填土と考えられる。Ｐ４からは９の甕が、横転した状態で、嵌まり込んで出土した。

遺物は少量だが、完形に近いものが多く、カマドの右側からＰ２周辺を中心に出土した。大部分が床面直上からの出土である。



第131図　第20号住居跡（２）

出土器種は古墳時代後期の土師器坏、壺、甕の破片、鉄滓、軽石、貝巣穴泥岩が出土している。

１は須恵器の坏である。口縁部の上半のみである。端部は丸く収められている。東毛産。

以下は土師器である。２～７は坏である。２・４は坏身模倣坏である。口縁部は直線的で、やや内傾している。４は内外面黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。

３・５は有段口縁坏である。内外面黒色処理されている。５は一部被熱し赤化している。

６は小針型の坏である。器面は風化が著しい。

７は東関東系の所謂半球形の坏である。器肉は厚く、底面には木葉痕が認められる。口縁端部のみに横ナデが施されている。

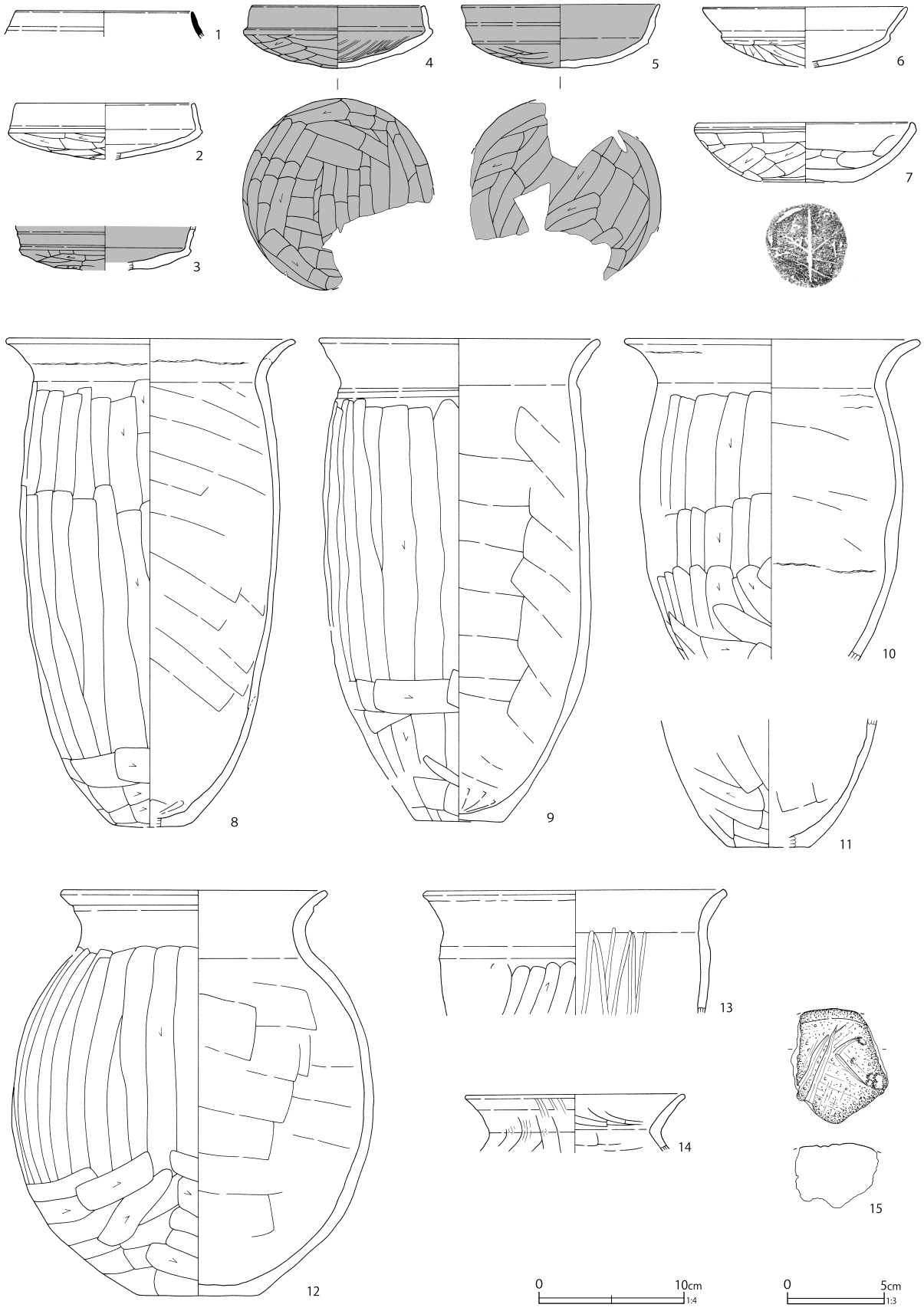
８～11は甕である。いずれも口縁部がくの字状になる長甕である。使用頻度が高く、胴部の下半は被熱により赤化し、ボロボロである。調整は、口縁部横ナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ、底部外周横方向ヘラケズリ、底面にはヘラケズリが施されている。

12は壺である。口径に比して胴部径が大きく、胴部に張りがある。口縁部は直立して開く。横ナデによって仕上げられ、上位に段を持つ。調整はほぼ甕と同様である。

13は砲弾形の甑である。内面にはナデ後粗いヘラ磨きが施されている。

14は混入の古墳時代前期の甕である。外面刷毛目後横ナデ、内面ヘラナデ後横ナデが施されている。

15は軽石製の砥石である。断面「V」字状の



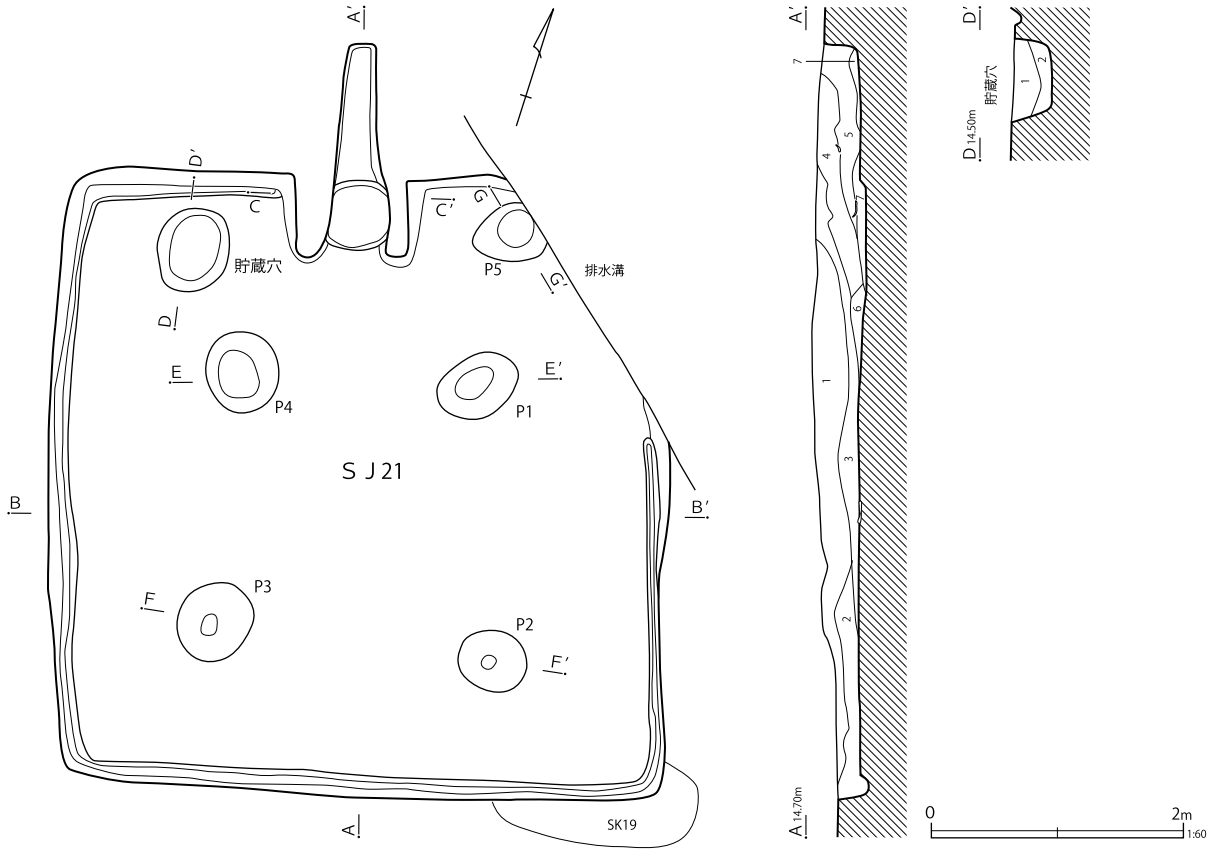
第132図　第20号住居跡出土遺物

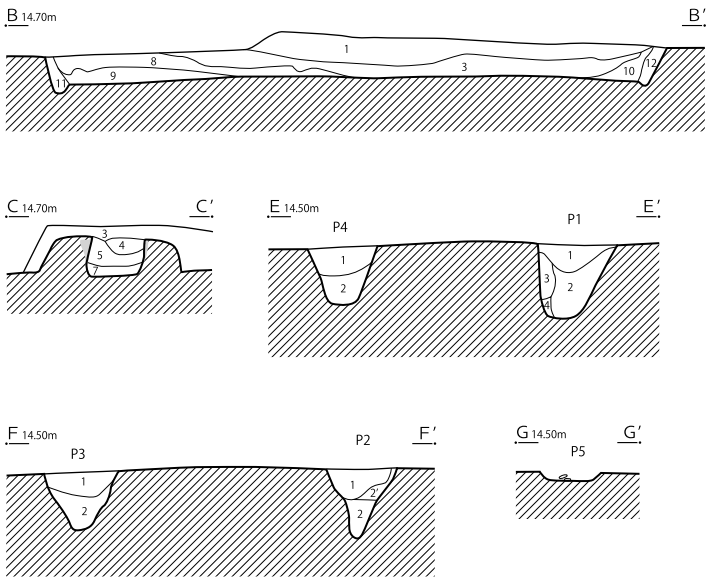
刃物傷が多く認められる。大部分が欠失している。

本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－３期である。

第 21 号住居跡（第 133 ～ 136 図）

Ａ区の東端、Ｅ・Ｆ－８・９グリッドに位置する。調査区の端にあたり、遺構の北西側は調査区域外にかかる。第 19 号土壙と重複し、本住居跡が新しい。北カマドで、主軸方位はＮ－ 16° －



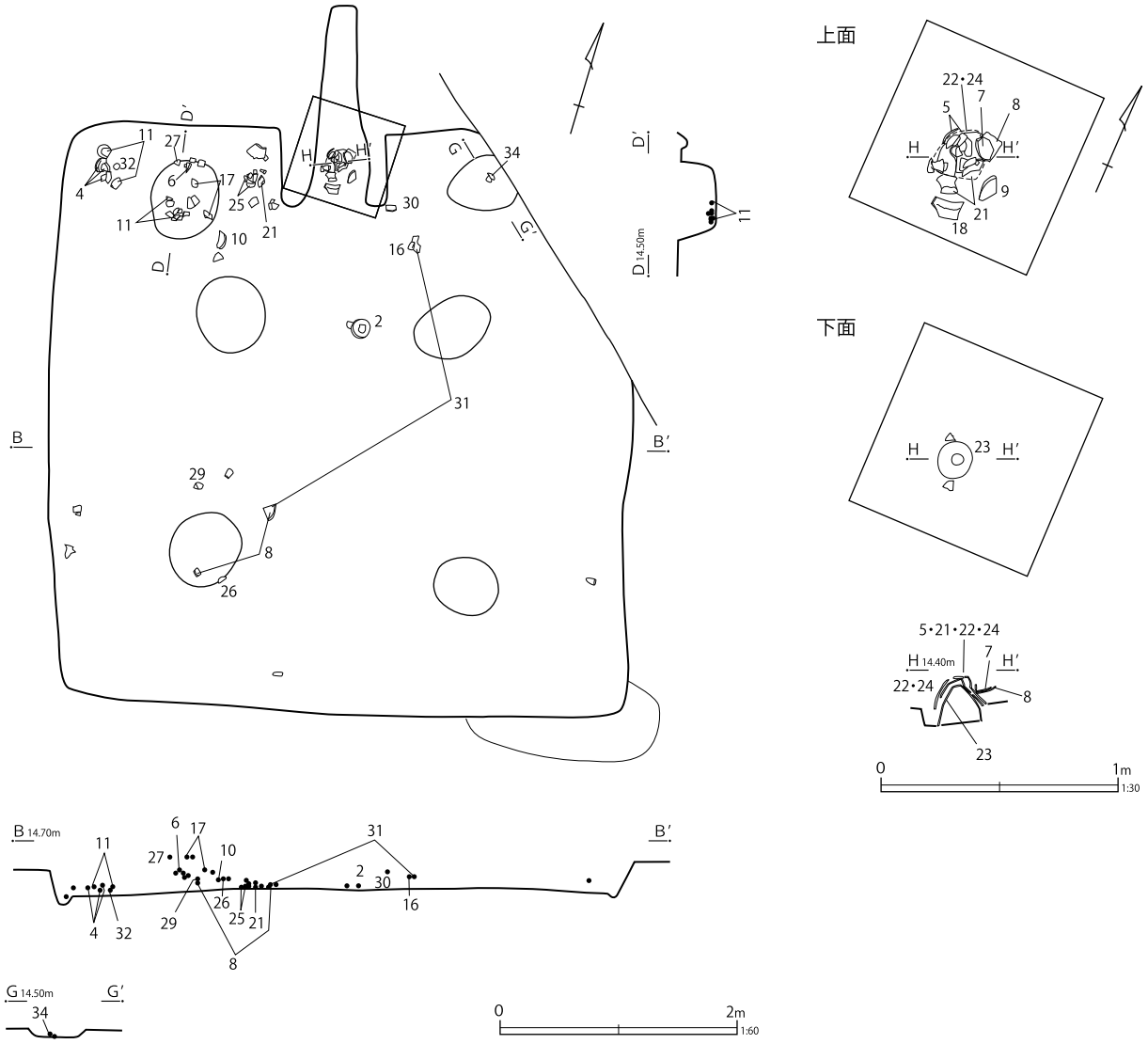


ＳＪ21
1　褐色土　炭化物・鉄分少量　地山に近い
2　暗褐色土　炭化物多量　褐色土ブロック（径３㎝）を密に含む
3　明褐色土　褐色土ブロック（地山）を密に多量に含む
4　明褐色土　焼土多量
5　明褐色土　焼土ブロック　灰含む
6　明褐色土　カマド燃焼部の赤化した部分を含む
7　黒色土　灰層　焼土・炭化物含む
8　明褐色土　地山ブロック（径３㎝大）を密に含む
9　明褐色土　地山ブロック（径３㎝大）・炭化物・焼土多量
10　明褐色土　地山ブロック（径３㎝大）　極めてしまりが強い
11　明褐色土　地山に近い　粘性をもちブロックは含まない
12　明褐色土　地山に近い　粘性をもちブロックは含まない
６～ 10 まで極めて地山に近い

貯蔵穴
1　明褐色土　焼土・炭化物を混入
2　明褐色土　地山に近似　よくしまる

Ｐ１～４
1　暗褐色土　粘質　炭化物粒子・焼土粒子含む
層下面に食物繊維の広がり（敷物状）が堆積している
2　褐色土　炭化物・焼土少量　ボロボロの土質　しまりなし
柱抜取り
2’褐色土　２層よりも明るい色調
3　明褐色土　やや砂質　掘り方
4　灰褐色土　やや砂質　掘り方

第133図　第21号住居跡（１）



第134図　第21号住居跡（２）

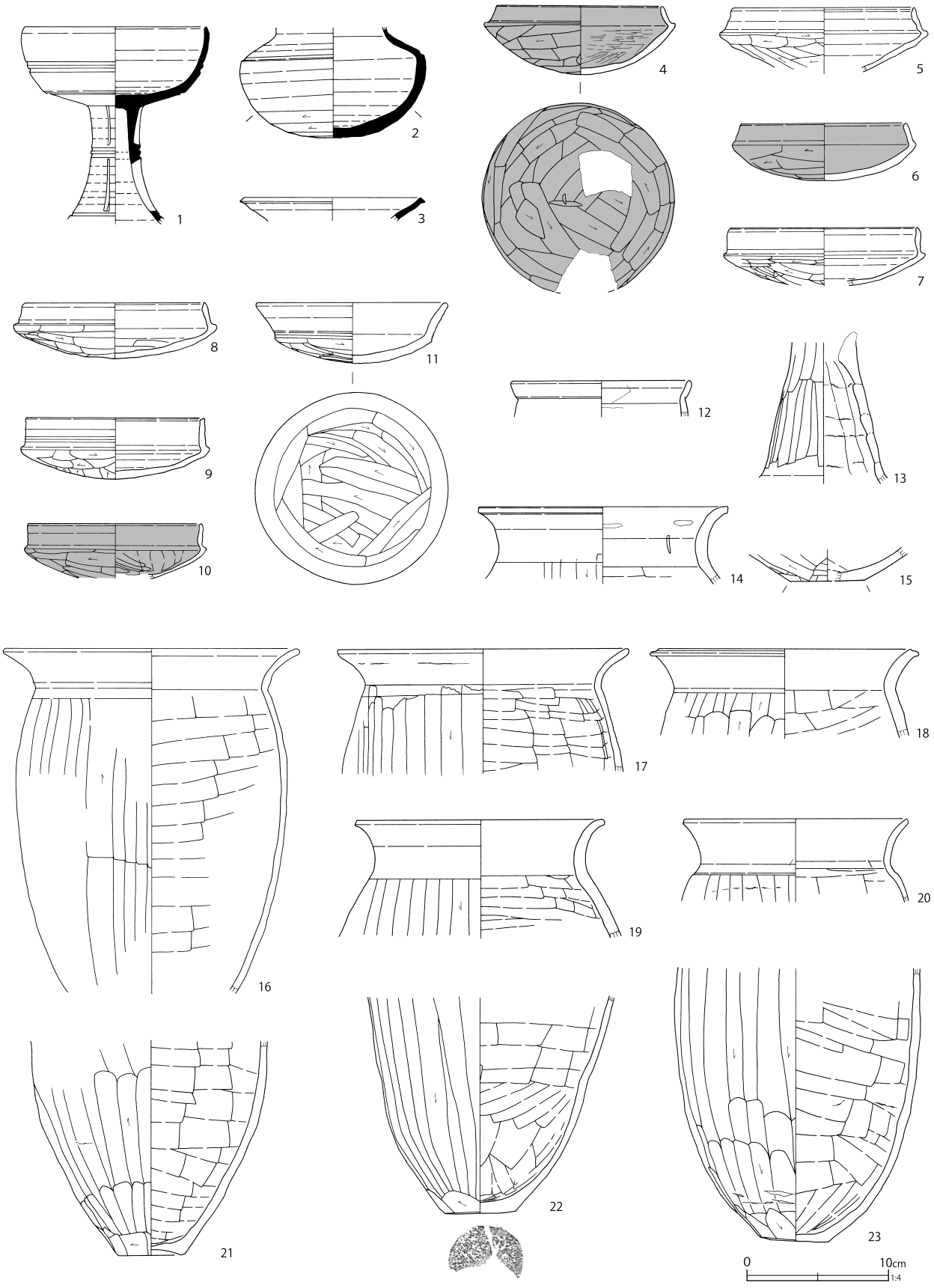
Ｅである。

平面形は主軸方向 4.90 ｍ、直交軸方向 4.85 ｍの方形である。深さは 0.25 ｍで、床面は若干中央が高くなっていた。覆土は炭化物、鉄分を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

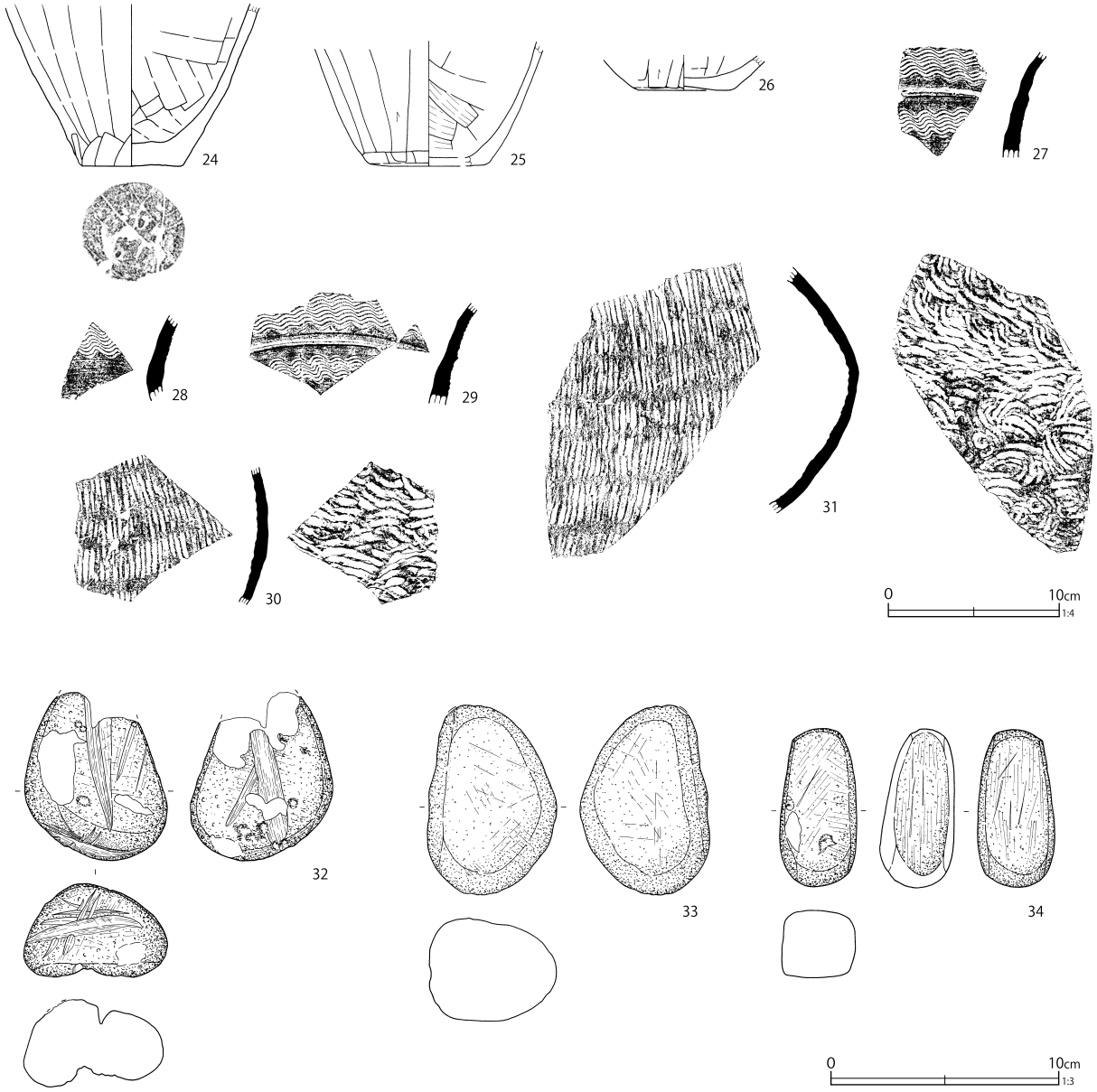
カマドは北壁中央で検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く突出する。袖を含む全体の長さは 1.70 ｍ、幅は 0.45 ｍである。覆土は第４～６層がカマド天井部崩落土、第７層が灰層と考えられる。両壁面、煙道部壁面が焼けていたが、火床面はあまり焼けていなかった。燃焼部は径 0.55 ｍ、深さ 0.05 ｍの浅い土壙状を呈し、そのまま煙道部に至る。燃焼部からは支脚代わりに伏せられた甕と、それに重なるように別個体の甕が出土した。袖は地山を削り出して造られていた。外側は乾燥により変色していた。

貯蔵穴は、カマド左側に造られていた。南北方向が長い楕円形で長径 0.70 ｍ、短径 0.65 ｍ、深さ 0.32 ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む明褐色土で、上層から土師器高坏（11）が出土している。

柱穴は主柱穴と考えられる４本（Ｐ１～４）とカマド右側に浅いＰ５が検出された。Ｐ１～４は



第135図　第21号住居跡出土遺物（1）



第136図　第21号住居跡出土遺物（２）

径 0.55 ～ 0.65 m、深さ 0.45 ～ 0.60 mである。覆土は第１層が柱抜き取り後の流入土、第２層が柱抜き取り痕、第３・４層が柱掘り方の充填土と考えられる。Ｐ５は浅い不整楕円形の皿状で、長径 0.55 m、短径 0.50 m、深さ 0.06 mである。Ｐ４の底面からは高坏（13）が出土している。

遺物は少量だが、カマドの左側を中心に出土した。大部分は上～下層の覆土中からである。

出土器種は古墳時代後期の須恵器無蓋高坏、坏、甕、土師器坏、高坏、甕、壺の破片である。古墳時代前期の甕が混入している。

１～３は須恵器である。１は無蓋高坏である。中位にナデによって突帯が作り出されている。長脚２段で透孔は３方である。断面が紫色を呈している。東毛産。２は小型の壺の胴部で、上端が極端に薄くなるため短頸壺と考えられる。丸底で胴部下半から底面まで回転ヘラケズリが施されている。重量感がある。太田金山窯産。３は瑞の口縁端部と考えられる。内面に灰がかかる。器肌、断面とも赤紫色を呈する。東海産の可能性が高い。

第22表　第21号住居跡出土遺物観察表(第135･136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高坏	(12.6)	[13.9]	－	ＨＫ	25	良好	赤灰	無蓋高坏	134-4
2	須恵器	短頸壺	－	[7.7]	－	ＡＣＥＩＫ	90	良好	灰白	№10	134-5
3	須恵器	甕	(12.6)	[1.6]	－	ＩＪＫ	5	良好	褐灰	東海産	222-3
4	土師器	坏	11.8	4.8	－	ＡＣＤＨＩＪ	90	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理　漆塗り　№15～17	135-1
5	土師器	坏	(13.0)	[4.4]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	明赤褐	№48・49	
6	土師器	坏	(13.8)	4.0	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	黒褐	内外面黒色処理　漆塗り　№21	
7	土師器	坏	(13.4)	[4.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	30	普通	明褐灰	カマド№43	
8	土師器	坏	(12.8)	[3.9]	－	ＡＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	№３・８・44	134-6
9	土師器	坏	(12.8)	4.3	－	ＡＣＤＨＩＫ	60	良好	橙	内外面煤付着　№55	134-7
10	土師器	坏	(12.4)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	明赤褐	内外面黒色処理　漆塗りか？　№28	135-3
11	土師器	坏	13.4	4.2	－	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	橙	№14・19　貯蔵穴№１・４	135-2
12	土師器	鉢	(12.6)	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	外面煤付着　Ｐ１	
13	土師器	高坏	－	[10.6]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい赤褐	Ｐ４	135-4
14	土師器	甕	(17.8)	[5.4]	－	ＡＣＦＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	カマド	
15	土師器	甕	－	[2.2]	(5.3)	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	外面黒斑あり　カマド	
16	土師器	甕	(20.3)	[24.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	外面煤付着　№39　カマド	135-5
17	土師器	甕	(20.8)	[8.7]	－	ＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№23・24　カマド	136-1
18	土師器	甕	(18.0)	[6.2]	－	ＡＣＤＨＩＫ	20	普通	橙	№54　カマド	136-2
19	土師器	甕	(17.4)	[8.3]	－	ＡＣＤＥＨＩ	30	普通	にぶい黄橙	カマド	
20	土師器	甕	(16.0)	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	にぶい橙	外面煤付着	
21	土師器	甕	－	[15.0]	4.7	ＡＣＥＦＨＩＫ	60	普通	にぶい赤褐	外面煤付着　№33・48・52　カマド	136-5
22	土師器	甕	－	[15.3]	5.2	ＡＣＥＨＩ	95	普通	灰褐	底部木葉痕　カマド　№48・50	136-6
23	土師器	甕	－	[18.5]	5.0	ＡＣＤＥＨＩＪＫ	80	普通	灰褐	外面・外面底部煤付着　№51カマド	136-7
24	土師器	甕	－	[9.6]	6.0	ＣＥＨＩ	50	普通	赤褐	内外面煤付着　底部木葉痕　カマド№48・50	136-3
25	土師器	甕	－	[7.3]	(7.0)	ＡＤＩＫ	25	普通	にぶい褐	外面煤付着　№34・36	136-4
26	土師器	甕	－	[2.0]	6.0	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	橙	№２	
27	須恵器	壺	－	[6.1]	－	ＡＣＥＩＫ	5	良好	灰	№13	222-3
28	須恵器	壺	－	[5.0]	－	ＡＥＩＫ	5	良好	灰		222-3
29	須恵器	壺	－	[5.9]	－	ＡＥＩＫ	5	良好	灰	№６	222-3
30	須恵器	壺	－	[8.0]	－	ＤＥＨＩＫ	5	良好	黄灰	31と同一個体か　№12	222-3
31	須恵器	壺	－	[14.4]	－	ＡＤＥＨＩＫ	5	良好	黄灰	30と同一個体か　№８・11	222-3
32	石製品	砥石	長さ[7.3]　幅6.3　厚さ4.1　重さ60.7　軽石							表裏に多数の刃物痕あり　№18	
33	石製品	砥石	長さ8.4　幅5.6　厚さ4.8　重さ259.6　安山岩								
34	石製品	砥石	長さ7.0　幅3.3　厚さ3.3　重さ42.6　軽石							№41	

以下は土師器である。４～11は坏である。４～10が坏身模倣坏、11が有段口縁坏である。口縁部は直線的もしくは若干反りがあり、やや内傾している。４・６・10は内外面黒色処理されている。いずれも漆塗りである。４・10は内面にヘラ磨きが施されている。５・７・９は内面のナデが明瞭である。５は体部の上位に段がある。６は風化が著しい。

12は鉢である。複合口縁状で、頸部はくの字である。風化のため調整不明。

13は高坏である。ホゾ接合で、脚が脱落している。脚部はラッパ状に開く長脚で、下位にやや膨らみを持つ。外面ヘラケズリ、内面は絞り目と粘土の積み上げ痕が明瞭に認められる。

14～26は甕である。いずれも口縁部がくの字状になる長甕である。胴部は上位に最大径がある。調整は、口縁部横ナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ、底部外周横方向ヘラケズリ、底面にはヘラケズリが施されている。14は器肉が厚く多孔質で全体に白みがかかってお

り、他の甕とは産地が異なる可能性がある。21は全体に赤変、風化が進み、接合できない破片が多く認められる。22・24は底面に木葉痕が認められる。23は全体が大きく歪んでいる。24の底面は凹凸、ヒビ割れが多い。23は全体が大きく歪んでいる。

27～31は須恵器の甕の破片である。27～29は口縁部で、波状文が施文されている。27・29はナデにより突帯が作出されている。波状文の条数は27・28が４条、29が６条である。いずれも上野産と考えられる。30･31は壺の胴部破片で、同一個体の可能性がある。平行タタキ後螺旋状のナデが施されている。内面には青海波文がみられると考えられる。北関東系と考えられる。

32・33は、軽石製の砥石である。表裏面に断面「V」字状の刃物痕が多く見られる。34は、安山岩製の砥石である。平坦面は使用により摩耗している。

本住居跡の時期は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－１期である。

第22号住居跡（第137・138図）

Ｂ区の西端、Ｆ・Ｇ－10グリッドに位置する。調査区の端にあたり、遺構の北東側は調査区域外にかかる。西コーナーには大きな撹乱が入り、カマドと北東壁が大きく壊されている。第10号溝跡と重複し、本住居跡が古い。北西カマドで、主軸方位はＮ－54°－Ｗである。

遺構の半分以下の検出であるため確実ではないが、カマド中心の線対称とすると全体の平面形は正方形と推定される。規模は主軸方向4.85ｍ、直交軸方向3.75ｍ、深さは0.45ｍである。床面は若干凹凸がある。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは調査区際で検出された。周辺が大きく壊されており、詳細は不明だが、断面Ｃベルト南側、第11層付近が焚口と推定されるため、燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く突出すると推定される。煙道の先端部は天井が遺存し、煙出部はピット状になる。袖を含む全体の長さは2.00ｍ、幅は0.20ｍ分が検出された。覆土は第５層がカマド天井部流失土、第10層がカマド天井部崩落土、第11層が燃焼部炭化物層、第８層が流失した灰層と考えられる。袖壁面、煙道部全体が焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。袖（15層）は地山を削り出して造られていた。燃焼部から煙道にかけて径0.90ｍ、深さ0.20ｍの浅い土壙状の掘り込みがあり、床が一段高くなって煙道になっている。煙道は高さ0.15ｍで、奥壁は垂直に立ち上がる。煙出し部は径0.25ｍの円形である。

柱穴は２本検出された。Ｐ１は位置的に主柱穴の可能性がある。長径0.40ｍ、短径0.30ｍ、深さ0.35ｍで、覆土は第１層が柱根、第２・３層が柱掘り方の充填土と考えられる。第１層はしまりを欠き、空洞（破線部分）ができており、柱根が抜取られずに腐食したものと考えられる。Ｐ２は位置的には入り口部の施設の可能性があるが、柱痕は不明瞭である。径0.40ｍ、深さ0.45ｍで、覆土は自然堆積である。

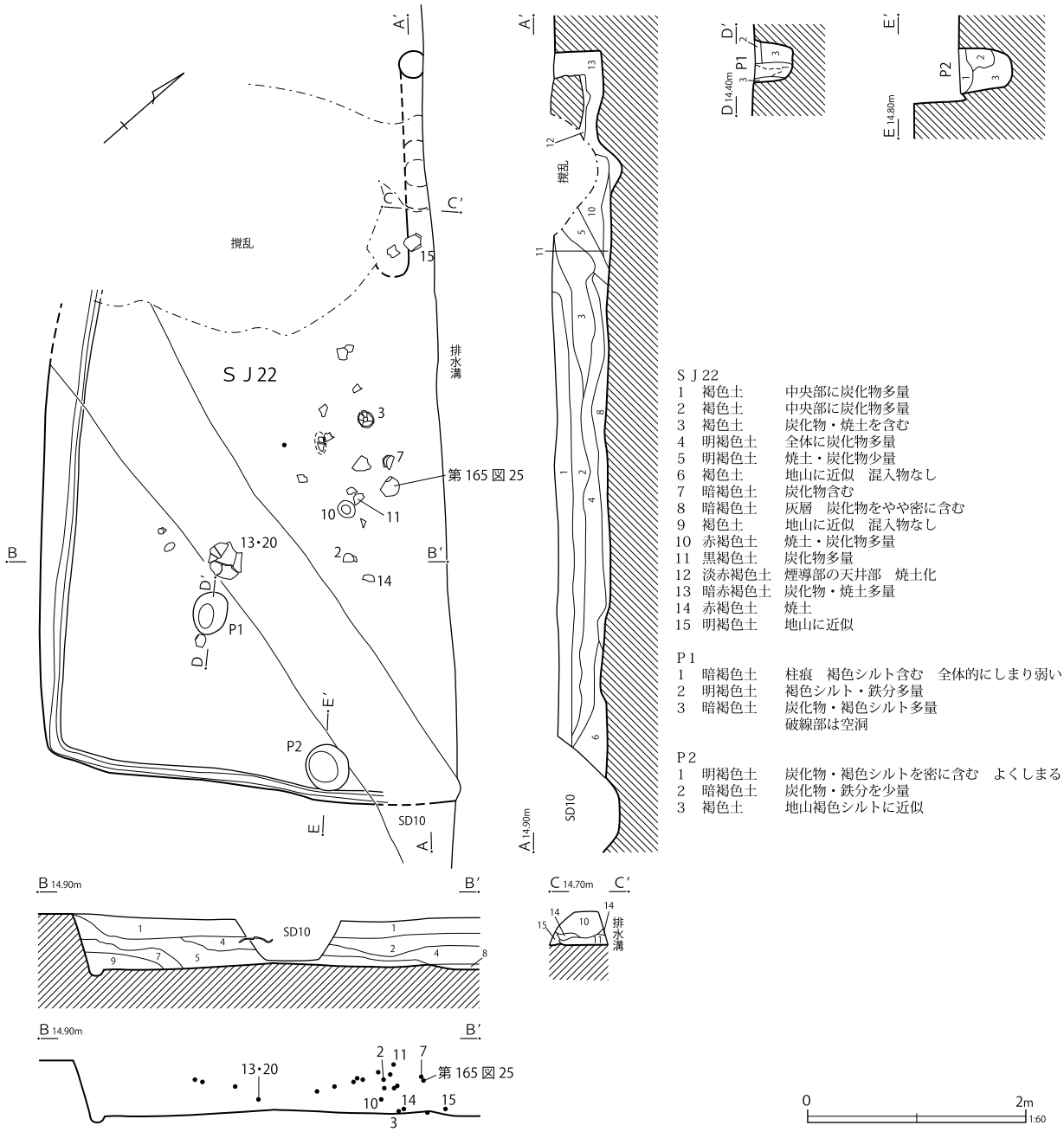
遺物は少量で、大部分が中層から上層の出土である。カマドの左側を中心に出土した。

出土器種は古墳時代後期の須恵器無蓋高坏、土師器坏、高坏、小型壺、甕、壺の破片が出土している。混入品として弥生時代中期の甕、古墳時代前期の甕、壺、高坏、近世の瀬戸美濃鉄釉碗が出土している。

１は須恵器高坏の口縁部である。中位に３条１単位の波状文が２段施されている。断面がサンドウィッチ状である。東毛産。

以下は土師器である。２は鉢である。外面全体と底面はヘラケズリである。内面木口ナデ。

３～９は坏である。３～５が坏身模倣坏、６・７が有段口縁坏、８・９が坏蓋模倣坏である。坏



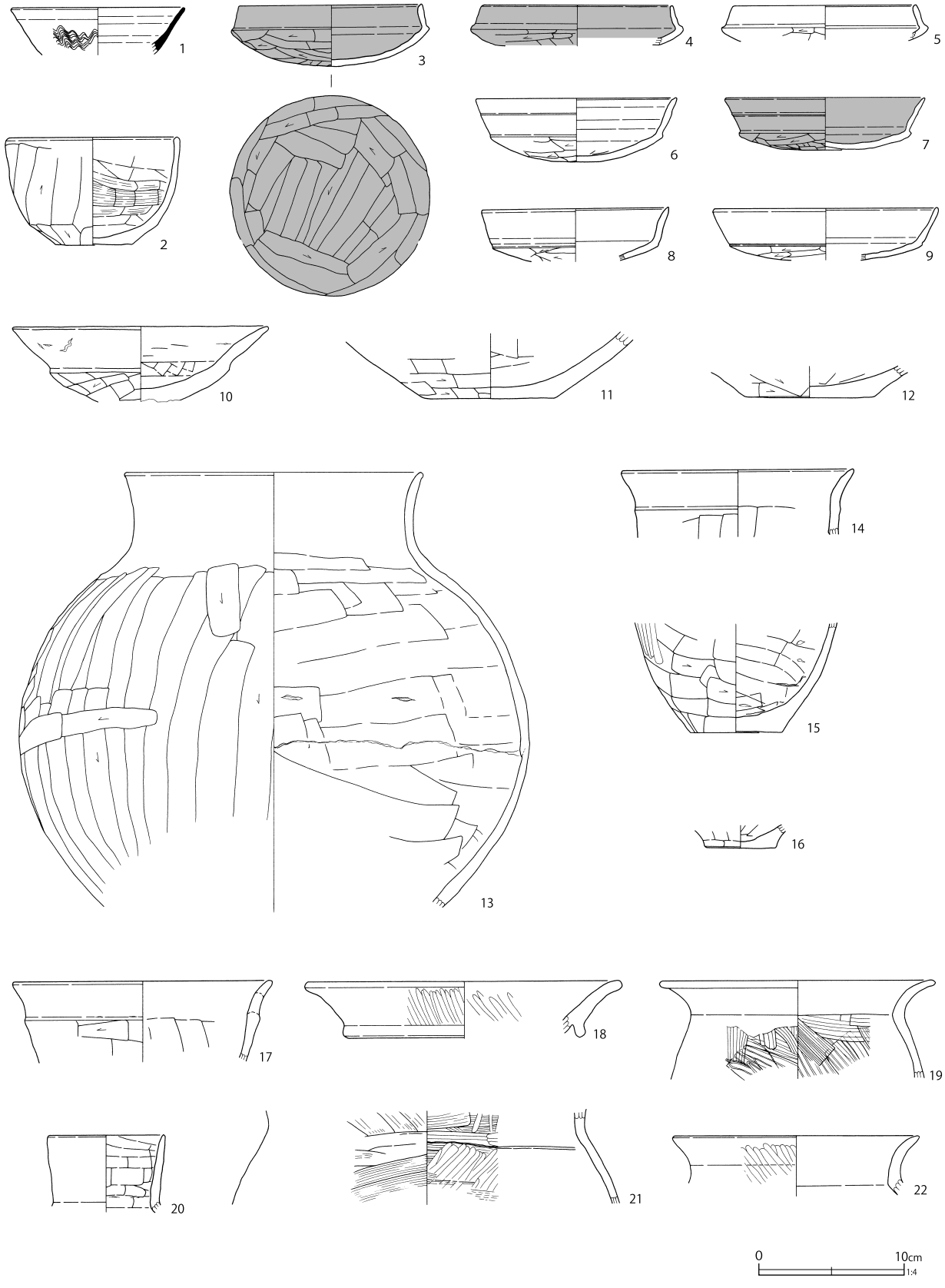
第137図　第22号住居跡

身はやや浅めである。３・４・７は内外面黒色処理されている。３・７は漆塗りである。坏身模倣坏は口縁部が短く、直線的である。５の内面の口縁部と体部の境目は、所謂爪が入った状態で、沈線状になっている。９はやや大型で、内外面に黒斑が認められる。

10 は高坏の坏部である。大型で器肉が厚い。脚部は圧着するタイプで、外れている。

11 ～ 13 は壺である。11・12 は底部である。外面横方向ヘラケズリ、底面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。13 は口縁部が直立し、端部が丸く収められる。胴部中位に大きな接合痕が認められ、外面にはその部分のみにヘラケズリが加えられている。

14 ～ 16 は甕である。胴部下半は横方向のヘラケズリである。15・16 の底面はヘラナデが施さ



第138図　第22号住居跡出土遺物

第23表　第22号住居跡出土遺物観察表（第138図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	ハソウ	(11.9)	[3.2]	－	ＡＢＥＩＫ	10	良好	灰	末野産	222-3
2	土師器	鉢	(11.7)	7.3	5.3	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№15	137-1
3	土師器	坏	12.8	4.2	－	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	橙	内外面黒色処理　漆塗り　№４	137-2
4	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	灰褐	内外面黒色処理	
5	土師器	坏	(12.8)	[2.4]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙		
6	土師器	坏	(13.9)	[4.3]	－	ＡＣＨＩＪＫ	15	普通	にぶい橙	有段口縁坏	
7	土師器	坏	(13.9)	3.5	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　漆塗り　№５	137-3
8	土師器	坏	(13.0)	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	橙		
9	土師器	坏	(15.6)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	橙	内外面黒斑あり	
10	土師器	高坏	17.6	[5.1]	－	ＡＣＤＥＨＩＪＫ	90	普通	橙	№21	137-4
11	土師器	壺	－	[4.4]	(8.6)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	浅黄橙	№８	
12	土師器	壺	－	[2.2]	(9.0)	ＡＣＩＫ	35	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
13	土師器	壺	(20.0)	[29.9]	－	ＣＤＨ	40	普通	にぶい橙	№20　SD10と接合	137-5
14	土師器	甕	(16.0)	[4.4]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	灰褐	№16	
15	土師器	甕	－	[7.5]	6.4	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい褐	内外面煤付着　カマド　№２	137-6
16	土師器	甕	－	[1.6]	(4.8)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐		
17	土師器	甑	(17.6)	[5.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		
18	土師器	壺	(21.6)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	二重口縁壺	
19	土師器	甕	(18.8)	[6.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
20	土師器	坩	(8.0)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩ	30	普通	にぶい橙	№20　SD10と接合	
21	土師器	甕	－	[6.4]	－	ＡＣＤＥＨＩＪＫ	5	普通	褐灰		
22	土師器	甕	(16.8)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐		

れている。

17 は甑である。やや小さめの砲弾形になると考えられる。調整は胴部外面横方向ヘラケズリ、内面ヘラナデである。

18 ～ 22 は古墳時代前期に帰属する混入品である。18 は二重口縁壺の口縁部、19・21・22 は甕である。19 はタタキ目状の刷毛目に、目の細かな刷毛目を重ね、更にナデが加えられている。21 は特大の甕の口縁部である。外面刷毛目、内面刷毛目後ヘラ磨き。22 は横ナデ後外面はヘラ磨きが加えられている。

20 は小型壺の口縁部である。外面風化のため調整不明。内面はヘラナデが施されている。

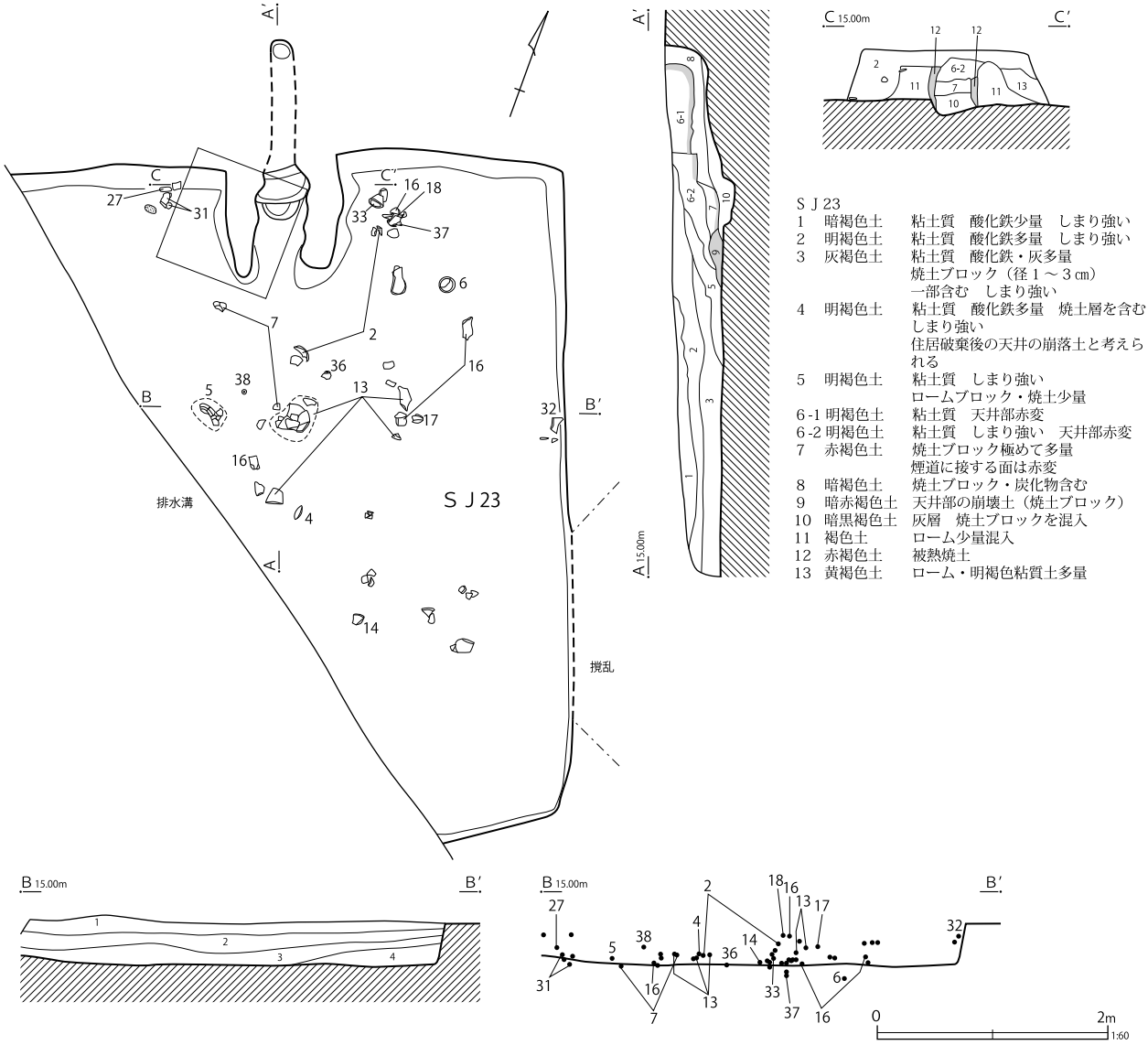
本住居跡の時期は６世紀第３四半期、屋敷裏Ⅴ－１期である。

第 23 号住居跡（第 139 ～ 142 図）

Ｂ区のほぼ中央、Ｈ・Ｉ－９・10 グリッドに位置する。調査区の端にあたり、遺構の南西側は調査区域外にかかる。東壁の南側は一部撹乱によって壊されている。北カマドで、主軸方位はＮ－23°－Ｅである。

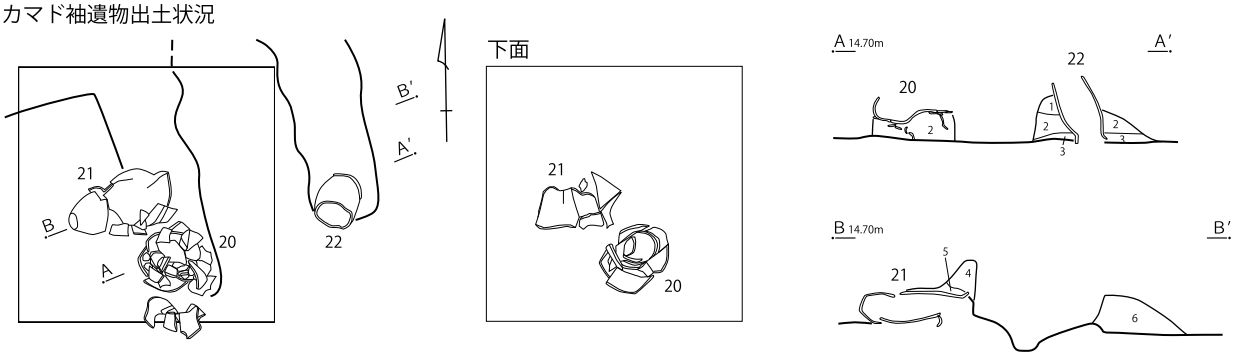
平面形は長方形と推定され、調査範囲の規模は主軸方向 6.05 ｍ、直交軸方向 4.75 ｍである。深さは 0.40 ｍで、床面は若干凹凸がある。覆土は酸化鉄を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土、灰褐色土の自然堆積で、部分的に焼土、炭化物をブロック状、縞状に含む。屋根などの部材の一部であろうか。貼床、掘り方等は検出できなかった。

カマドは北壁中央で検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く突出する。煙道部分は天井が遺存しており、煙出しはピット状になっている。袖を含む全体の長さは 2.10 ｍ、幅は 0.45 ｍである。覆土は第６・７・９層がカマド天井部崩落土、第 10・11 層が灰層と考えられる。燃焼部は天井の焼土が残った状態で潰れていた。両壁面、煙道部壁面が焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。袖の焼土範囲から燃焼部は奥行 1.00 ｍ、幅 0.40 ｍ、高さ 0.30 ｍの大きさが考えられ



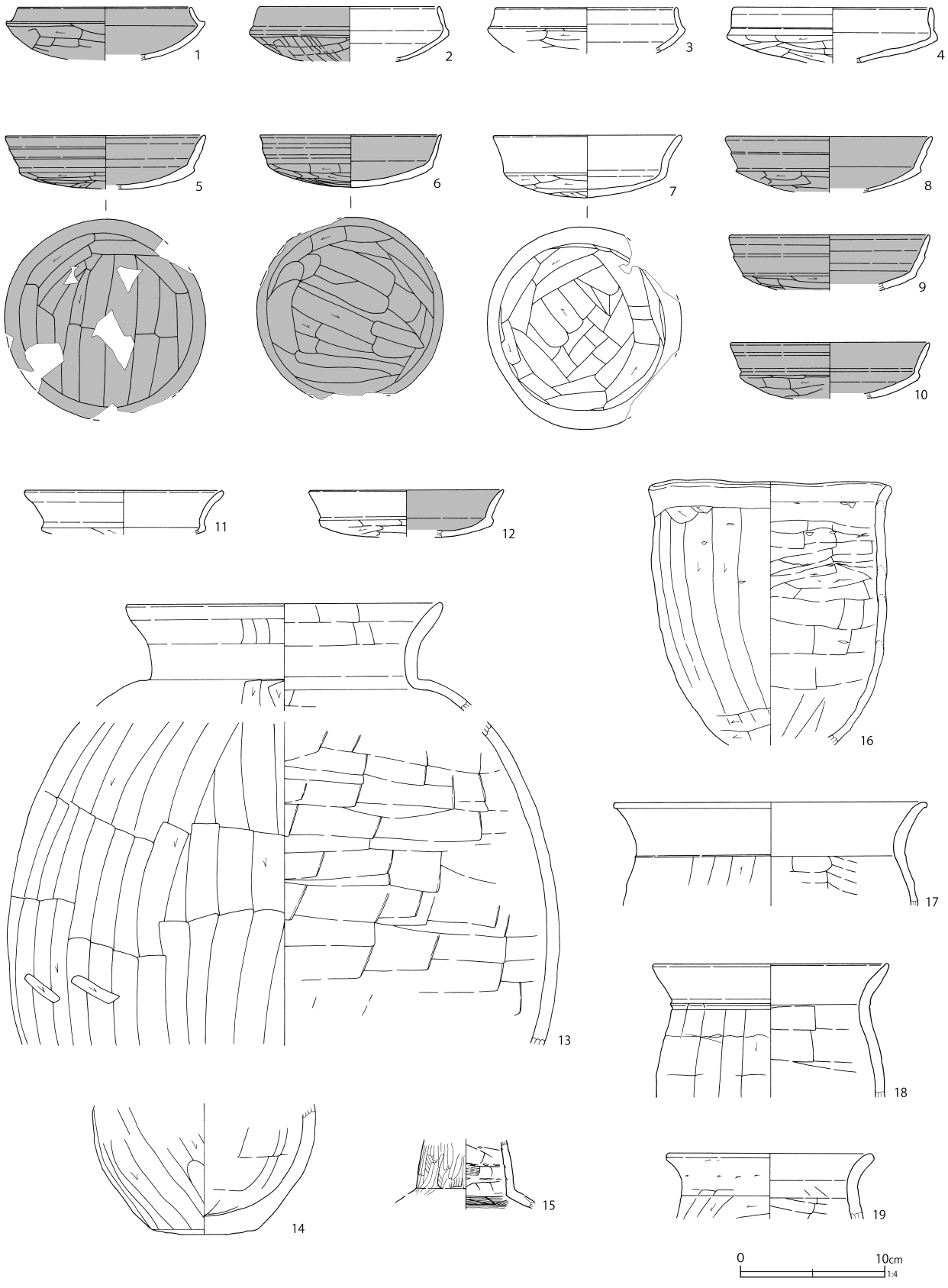
ＳＪ23
1　暗褐色土　粘土質　酸化鉄少量　しまり強い
2　明褐色土　粘土質　酸化鉄多量　しまり強い
3　灰褐色土　粘土質　酸化鉄・灰多量
焼土ブロック（径１～３㎝）
一部含む　しまり強い
4　明褐色土　粘土質　酸化鉄多量　焼土層を含む
しまり強い
住居破棄後の天井の崩落土と考えられる
5　明褐色土　粘土質　しまり強い
ロームブロック・焼土少量
6-1 明褐色土　粘土質　天井部赤変
6-2 明褐色土　粘土質　しまり強い　天井部赤変
7　赤褐色土　焼土ブロック極めて多量
煙道に接する面は赤変
8　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物含む
9　暗赤褐色土　天井部の崩壊土（焼土ブロック）
10　暗黒褐色土　灰層　焼土ブロックを混入
11　褐色土　ローム少量混入
12　赤褐色土　被熱焼土
13　黄褐色土　ローム・明褐色粘質土多量

カマド袖遺物出土状況

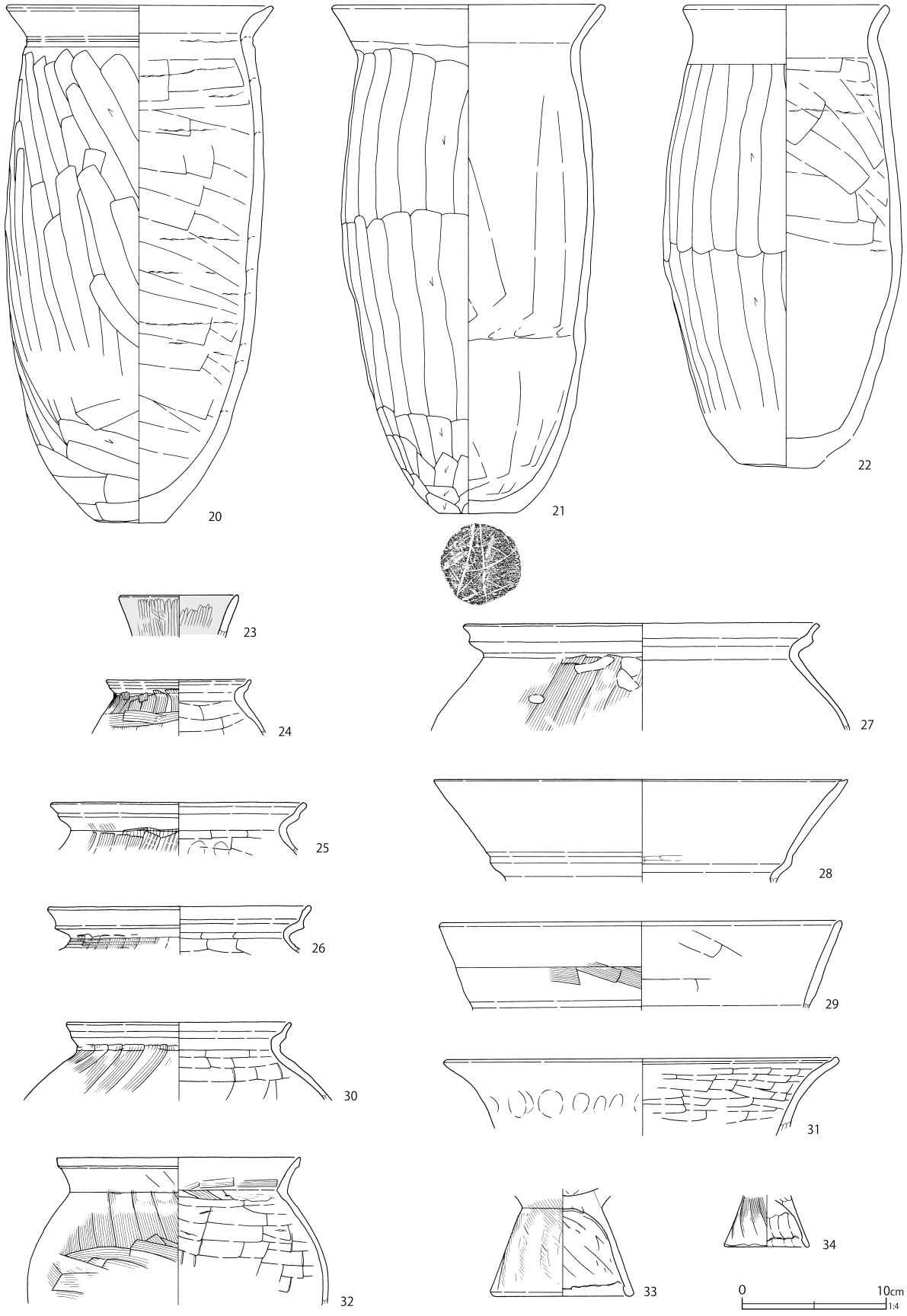


ＳＪ23　カマド
1　褐色土　焼土粒子・炭化物含む　黄褐色粘質土混じる
2　黒褐色土　焼土・灰多量　黄褐色粘質土粒子多量
3　暗褐色土　灰色粘質土多量
4　赤褐色焼土　袖の壁崩落土
5　明褐色土　粘質土　カマド袖崩落土
6　褐色土　ローム少量混入

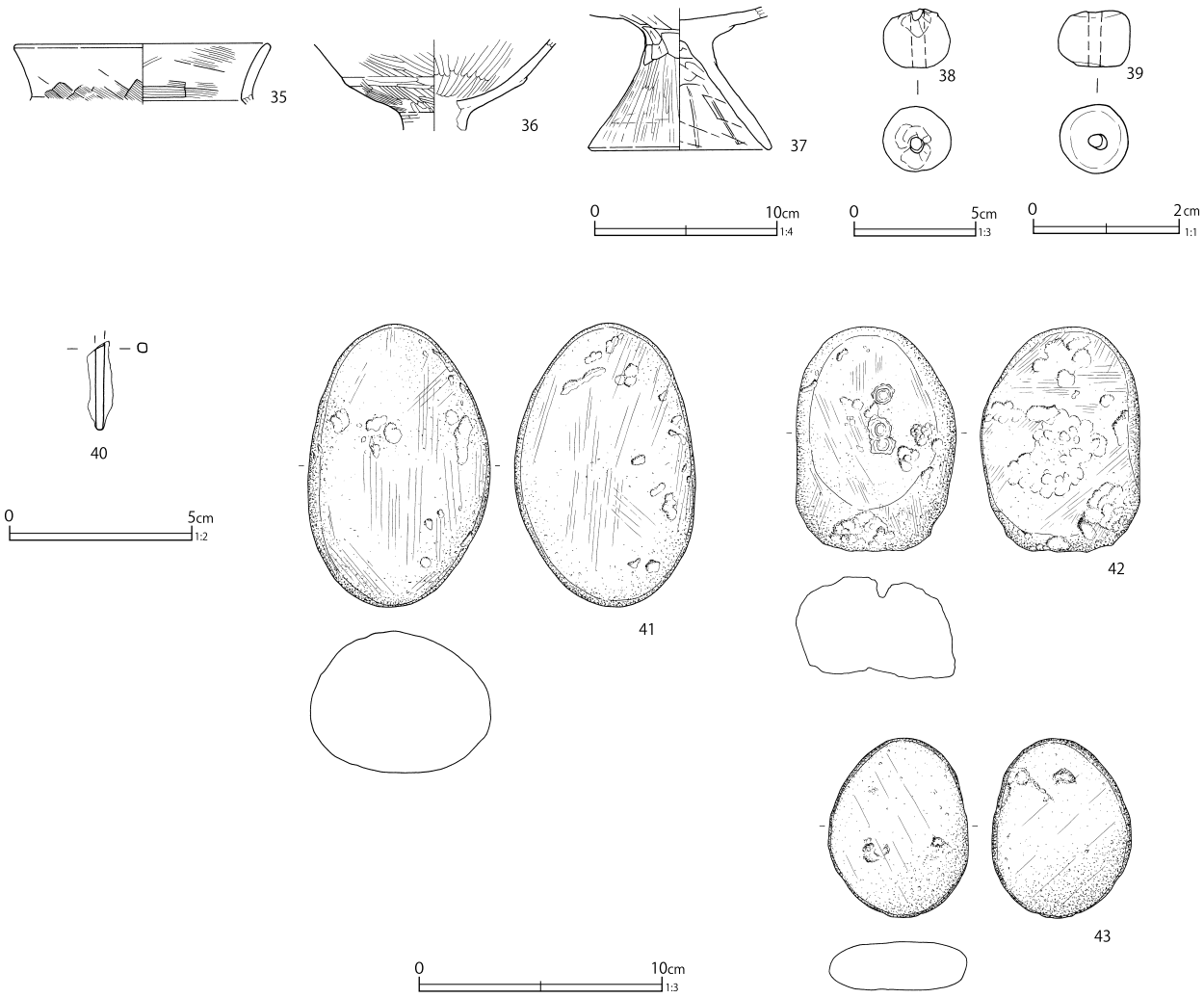
第139図　第23号住居跡



第140図　第23号住居跡出土遺物（1）



第141図　第23号住居跡出土遺物（２）



第142図　第23号住居跡出土遺物（３）

る。袖は粘土を含む褐色土、黒褐色土、暗褐色土の貼付けによって造られており、20 ～ 22 の甕が芯材として用いられていた。燃焼部奥は径 0.45 m、深さ 0.10 mの土壙状になっており、灰溜り状に灰層が被覆していた。煙道はこの部分から緩やかに傾斜して奥壁に至る。煙道は高さ 0.15 m で、奥壁はやや丸みをもって垂直に立ち上がる。煙出し部は径 0.20 mの円形である。

遺物は少量だが、住居跡全体から、床面と第３層を中心に出土した。

出土器種は古墳時代後期の土師器坏、高坏、小型壺、甕、壺の破片、羽口、土玉、鉄製品が出土している。縄文土器、古墳時代前期の甕、壺、大型器台、天目茶碗が混入している。

１～ 22 は古墳時代後期の土師器である。１～ 12 は坏である。１～４が坏身模倣坏、５・６・８～ 10 が有段口縁坏、11・12 が坏蓋模倣坏である。１・５・６・８・９・10 は内外面黒色処理されている。２は外面、12 は内面の黒色処理が確認できる。本来は内外面の処理と考えられる。１の内面の口縁部と体部の境目は所謂爪が入った状態で、沈線状になっている。２はヘラケズリ後ナデが加えられている。４の見込みには指紋が認められる。

13・14 は壺である。13 は口縁部と胴部が接合しないため、各々の部位で実測した。口縁部は直

第24表　第23号住居跡出土遺物観察表（第140～142図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理　カマド	
2	土師器	坏	(12.6)	[3.7]	－	ＡＣＨＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面黒色処理　№23・39	139-1
3	土師器	坏	(12.6)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＪ	15	普通	灰黄褐		
4	土師器	坏	(13.8)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№12	
5	土師器	坏	13.7	4.2	－	ＡＣＥＨＩＪ	85	普通	灰黄褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№25	138-1
6	土師器	坏	12.3	3.1	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№55	138-2
7	土師器	坏	13.2	4.3	－	ＡＣＤＨＩＫ	80	普通	浅黄橙	カマド№19・26	138-3
8	土師器	坏	(14.4)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
9	土師器	坏	(14.0)	[3.8]	－	ＡＥＩＫ	30	普通	灰褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
10	土師器	坏	(13.8)	[3.9]	－	ＡＣＨＩＪＫ	15	普通	にぶい赤褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
11	土師器	坏	(13.8)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	橙		
12	土師器	坏	(13.6)	[3.2]	－	ＣＥＨＩＫ	10	普通	橙	内面黒色処理	
13	土師器	壺	(21.8)	[29.6]	－	ＡＣＤＨＩＫ	30	普通	淡黄	№13・18・20・27・30	138-4
14	土師器	壺	－	[8.9]	7.5	ＡＣＨＩ	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№７	139-2
15	土師器	高坏	－	[4.8]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面黒斑あり	
16	土師器	甕	16.6	[18.2]	－	ＣＨＩＫ	70	普通	明赤褐	内外面煤付着　№15・28・35・42	139-3
17	土師器	甕	(21.8)	[7.1]	－	ＡＥＨＩＫ	10	良好	にぶい黄橙	№29	
18	土師器	甕	(16.4)	[9.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	橙	№41	139-4
19	土師器	甕	(14.0)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩＪ	20	普通	橙	内外面煤付着	
20	土師器	甕	18.0	36.3	5.0	ＣＤＥＨ	90	普通	にぶい橙	カマド№２	139-5
21	土師器	甕	18.3	35.1	5.4	ＣＤＥＨ	90	普通	にぶい黄橙	カマド№３	140-1
22	土師器	甕	13.6	32.3	5.4	ＣＥＦＨ	90	普通	にぶい橙	カマド№４	140-2
23	土師器	小型壺	(8.2)	[2.8]	－	ＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
24	土師器	台付甕	(10.0)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
25	土師器	台付甕	(17.6)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内面煤付着	
26	土師器	台付甕	(18.3)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
27	土師器	台付甕	(24.5)	[7.3]	－	ＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	№47	
28	土師器	台付甕	(29.0)	[7.1]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄褐	山陰系口縁Ｓ字甕　カマド	
29	土師器	台付甕	(28.0)	[6.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕	
30	土師器	台付甕	(15.8)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
31	土師器	甕	(27.4)	[5.1]	－	ＡＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№48・50	
32	土師器	台付甕	(17.0)	[10.1]	－	ＡＣＤＥＨＩＪＫ	25	普通	にぶい橙	№33	
33	土師器	台付甕	－	[7.4]	10.1	ＡＣＥＨＩＪＫ	95	普通	灰白	№44	139-6
34	土師器	台付甕	－	[3.6]	(5.8)	ＡＨＩＫ	45	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
35	土師器	甕	(14.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい褐		
36	土師器	高坏	－	[4.9]	－	ＡＢＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	柱状脚　№21	
37	土師器	高坏	－	[7.8]	10.2	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	浅黄橙	№53	140-3
38	土製品	土錘	径2.75×2.7 高さ2.4 孔径0.6 ～ 0.5 重さ15.3g			ＡＣＥＨＩ	100	普通	灰	土玉　№24	218-15
39	土製品	土錘	径0.95×0.95 高 さ0.7　孔 径0.15 重さ0.7g			ＡＣＥＩＫ	90	普通	黒	土玉　赤彩あり	218-16
40	鉄製品	鉄鏃	長さ[2.3]　幅0.3　厚さ0.3　重さ1.2ｇ							茎部か　カマド	222-1
41	石製品	砥石	長さ11.6　幅7.6　厚さ5.8　重さ204.1ｇ　軽石								
42	石製品	砥石	長さ9.4　幅6.6　厚さ4.3　重さ123.2ｇ　軽石								
43	石製品	砥石	長さ7.4　幅5.7　厚さ2.1　重さ44.4ｇ　軽石								

立後、中位から外反。頸部は明瞭である。胴部は縦長で、外面は縦方向ヘラケズリ、内面は横方向ヘラナデが施されている。14 は小型の壺である。器肉が厚く、胴部は丸みを帯びている。

15 は高坏である。柱状脚で下半にやや膨らみがある。外面全体刷毛目後ヘラ磨き、内面刷毛目後ナデ。

16 ～ 22 は甕である。16 は口縁部が短く、外反度が弱い。相当火を受けており、傷んで、全体に歪む。

以下は口縁部が長めの甕である。17 は径が大きく、18・19 は小さめである。18 は頸部が強くナデ込まれている。20・22 は使用頻度が高かったようで、胴部の下半は２次被熱により赤化し、ボロボロである。調整は、口縁部横ナデ、胴部外面縦もしくは斜め方向ヘラケズリ、内面横もしくは斜め方向ヘラナデ、底部外周横方向ヘラケズリである。底面は 20・22 はヘラケズリが施され、21 は木葉痕が認められる。21 の木葉痕は二重に付けられている。

23 ～ 34 は古墳時代前期に帰属する混入品である。23 は内外面赤彩、ヘラ磨き。小型壺としたが坩の可能性もある。24 ～ 27・30 はＳ字状口縁台付甕である。24 は小型、27 は大型である。25 は刷毛目が硬めでヘラケズリに近い。28・29・31 は所謂山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。28 は口縁端部が内傾する面を持つ。風化が著しい。内面に僅かにヘラ磨きが残るため、本来は全体に施されていた可能性がある。29 は外面刷毛目後横ナデ、内面ヘラナデ後横ナデ。31 は指頭痕が残る。外面横ナデ、内面はヘラナデが施されている。32 の甕は、口縁端部が直立する面を持つ。33・34 はＳ字状口縁台付甕の脚台部である。34 は小型である。33 の接合部には砂を混ぜた粘土が用いられている。外面刷毛目が等間隔でナデ消される。内面指ナデ。端部は内側に折り返されている。35 は小型の刷毛目甕である。36 は柱状脚の高坏の接合部でホゾ接合、脚が脱落している。37 はハの字状に開く高坏の脚部である。接合部ヘラケズリ、脚部外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面は絞り目にナデが加えられている。38・39 は土錘である。所謂土玉で、38 は上面の孔の周囲の粘土が剥離している。39 はごく小さい。上下の面は工具によって整えられている。若干赤が残り、赤彩されている可能性がある。40 は径 0.3cm のごく細い棒状の鉄製品である。

41 ～ 43 は軽石製の砥石である。平坦面に僅かに擦痕が見られる。42 は凹穴が認められる。

本住居跡の時期は６世紀第１～２四半期、屋敷裏Ⅴ－２期である。

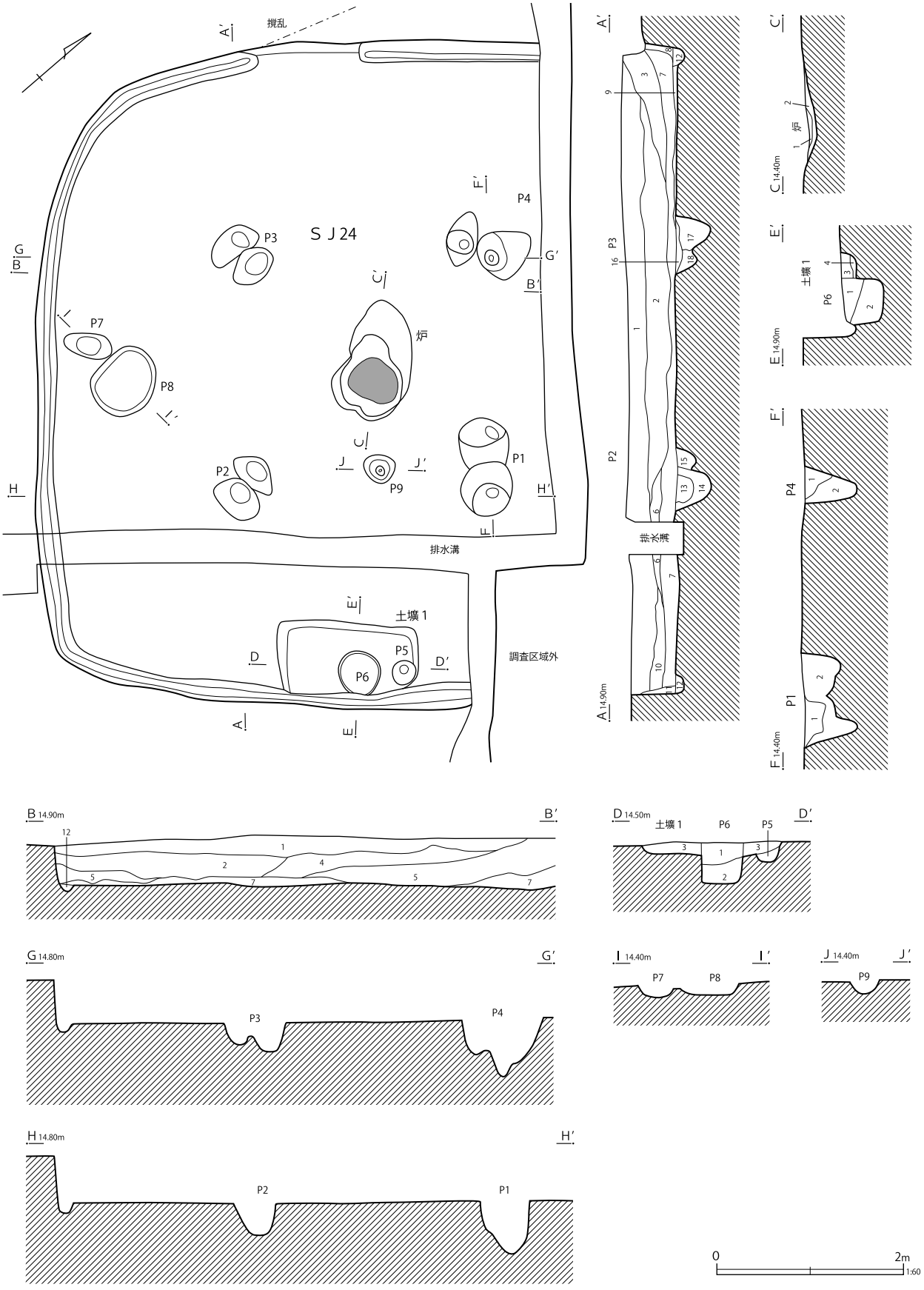
第 24 号住居跡（第 143 ～ 151 図）

Ｂ区の東端、Ｈ・Ｉ－12、Ｉ－13 グリッドに位置する。遺構の北東側が調査区域外にかかる。土壙１が入口部の施設であることから、北西－南東方向、Ｎ－ 48°－Wが主軸方位と考えられる。

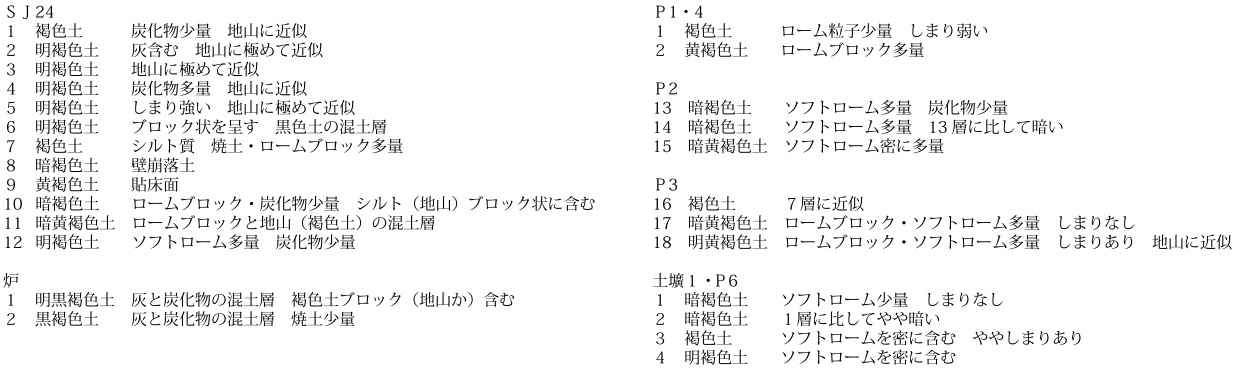
平面形は隅丸方形で、各辺は丸みを帯びている。規模は、主軸方向 7.20 ｍ、直交軸方向 5.40 ｍである。深さは 0.50 ｍで、覆土は焼土、炭化物、灰を含む褐色土、明褐色土の自然堆積と考えられるが、第６・７層はブロックを多く含み、埋戻しの可能性がある。床面は若干凹凸があった。第９層は貼床と考えられるが、住居跡の西側に認められるのみであった。

床面からは地床炉、貯蔵穴、柱穴、土壙、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。不整楕円形の大きな掘り込みの中が一段窪んでいる。外側は長径 1.25 ｍ、短径 0.80 ｍ、内側は長径 0.90 ｍ、短径 0.65 ｍ、深さ 0.10 ｍである。覆土は灰と炭化物を中心とした混土層である。掘り込みの底面がよく焼けていた。

ピットは９基検出された。Ｐ１～４は主柱穴である。複数の柱痕が認められ、建て替えが行われたと考えられる。規模は長径 0.5 ～ 0.6 ｍ、短径 0.3 ～ 0.5 ｍ、深さ 0.30 ～ 1.10 ｍである。柱は



第143図　第24号住居跡（1）



第144図　第24号住居跡（２）

抜き取られており、覆土はローム土を含む褐色土、黄褐色土である。Ｐ７は長径0.55ｍ、短径0.25ｍ、深さ0.10ｍ、Ｐ８は長径0.80ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.10ｍで、掘り込みが浅い。

土壙１は南東壁の中央で検出された。Ｐ５・６と一体で入り口部の施設と考えられる。長辺1.50ｍ、短辺1.30ｍ、深さ0.10ｍの長方形で、ローム土を多く含む褐色土によって充填されていた。断面ではＰ５が土壙１より古く、Ｐ６が新しいが、位置的には土壙１に付随すると考えられ、両者の関係が問題になる。Ｐ５は径、深さとも0.45ｍ、Ｐ６は径、深さとも0.45ｍである。

壁周溝は北西壁で一部途切れるほかは全周していた。幅0.15～0.25ｍ、深さ0.10ｍである。

遺物は多く、概して最上層の第１層と床面直上から出土した。古墳時代前期の壺、台付甕、高坏、大型器台、小型器台、鉢が出土しており、特に北陸、山陰系の土器が多い点が注目される。

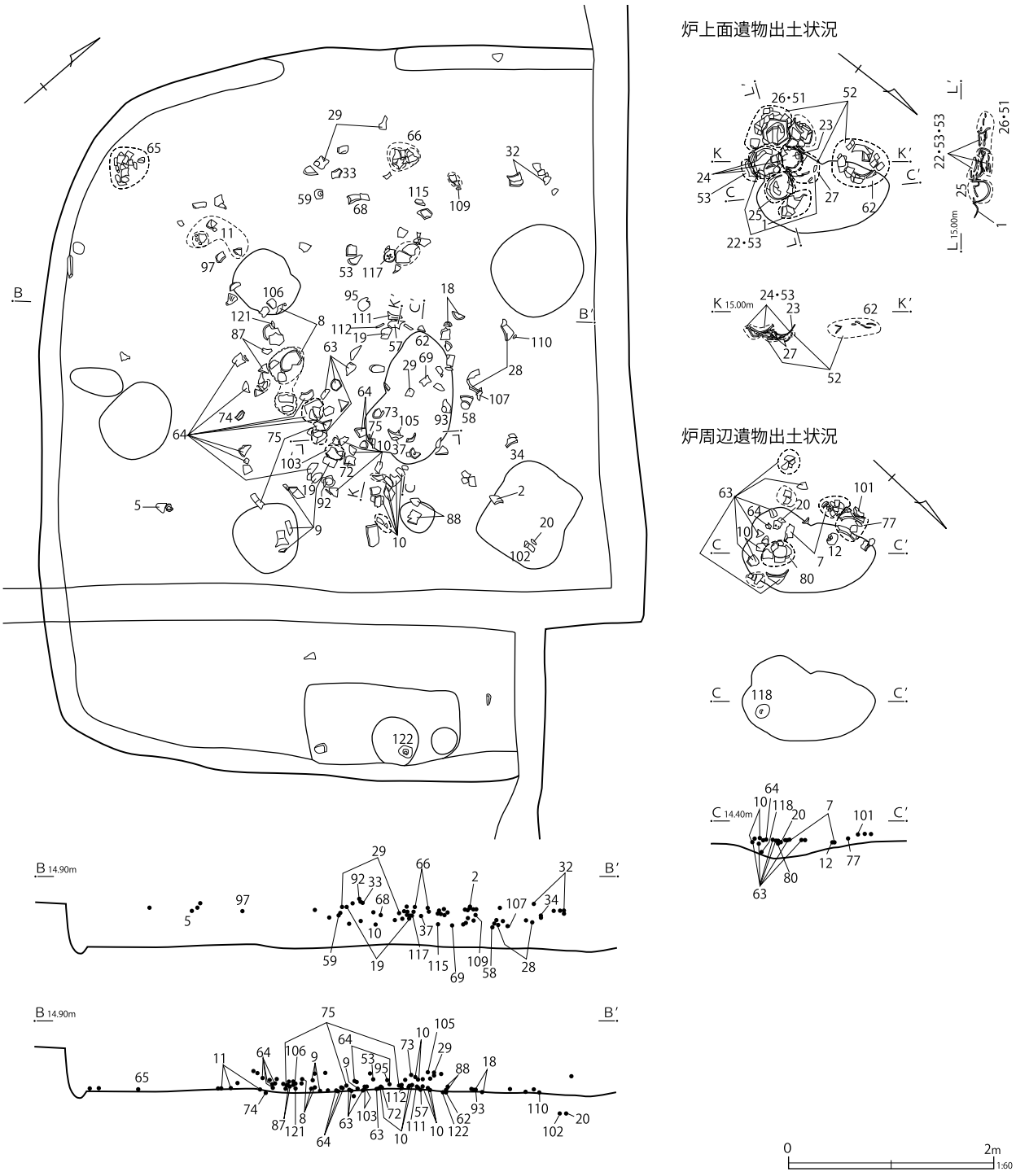
１～15は壺である。1・2は単口縁の壺である。１は口縁部が短く、端部が外反する。頸部はあまり締まらず、胴部は長胴である。外面は刷毛目後ヘラ磨きで、頸部には刷毛目後ヘラナデが加えられている。２は径が大きく、厚手で相当大型になると考えられる。風化が進む。鈍い色調を呈している。３は端部の外面に粘土が貼付される複合口縁で、横ナデ後ヘラ磨きが施されている。４・５は端部に粘土が貼付され、断面が三角形になる口縁部である。５は小型で頸部が細く器台の可能性も考えられる。６は頸部の破片で突帯が貼付される。外面に断面Ｖ字形の刃物痕が認められる。７はナデ肩の頸部から胴部上半である。頸部の屈曲は緩やかで、内面には指ナデが加えられている。８～10は胴部である。８は外面、底面、胴部の上位まで赤彩されており、特異である。９の外面は粘土が１枚着せられ、刷毛目状にナデつけられている。見込み部分には砂粒が多く認められ、輪台状の底部の中に本体とは異なる粘土が充填され、胴部本体と接合されている。10は底部が小さくなっている。11～15は底部である。12～14は輪台状の円板に粘土がはめ込まれて成形されるため突出している。12は見込み部分に非常に細かいヘラ磨きが施されている。底面は剥離し凹凸である。13・15の見込み部分にもヘラ磨きが施されており、鉢などの他器種である可能性もある。14のヘラナデは強く、ヘラケズリに近い。

16～18は小型壺である。16の瓢壺はヘラナデ後横ナデによって仕上げられている。17は細頸壺の可能性がある。

19は坩である。底面は平底だが不規則に窪み、ヘラ磨きが施されている。

20・21は鉢である。21は５の字状口縁の鉢である。器面全体に光沢があるが単位は不明瞭である。幅広の工具や所謂ナデ磨きの可能性がある。

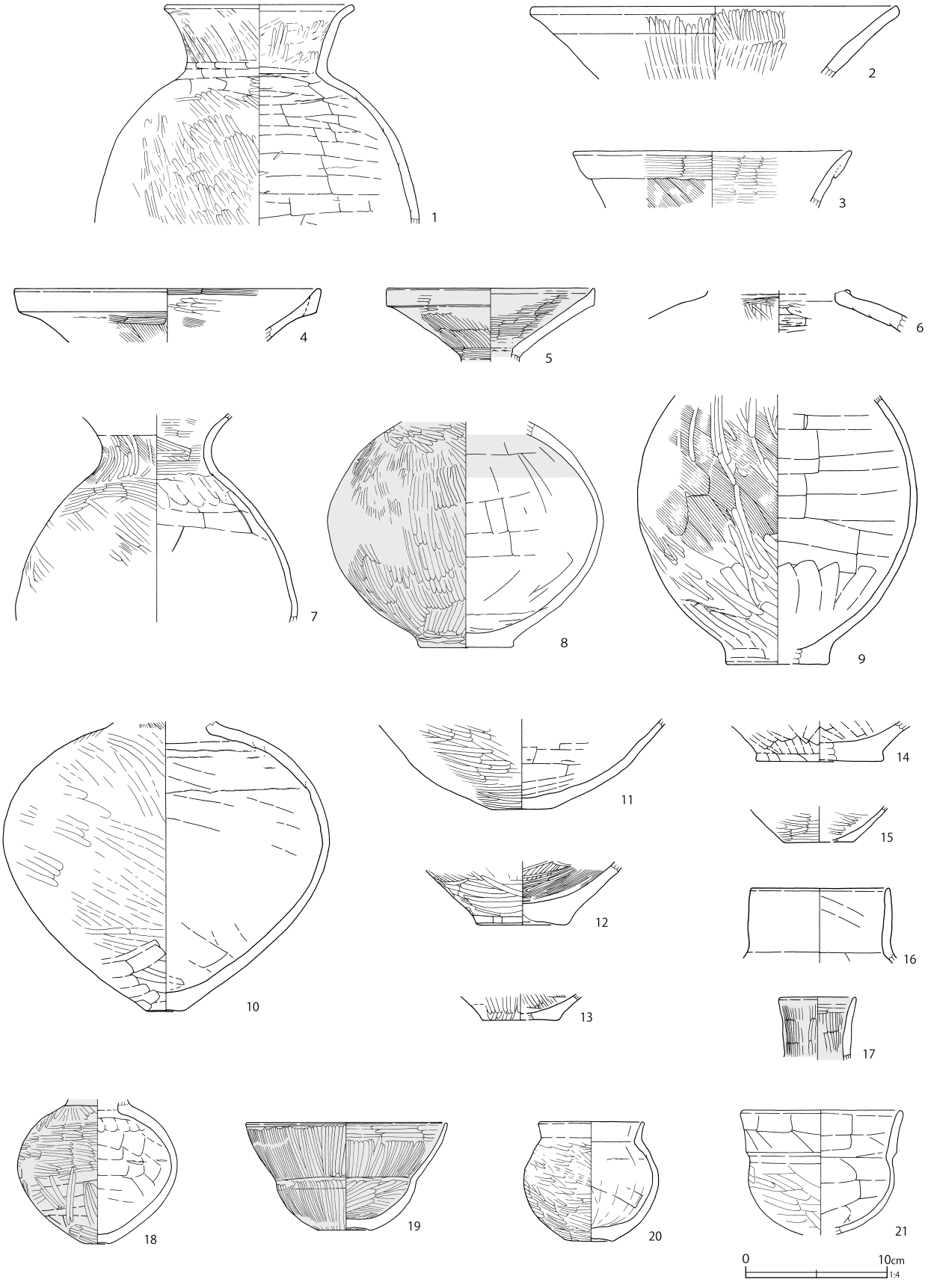
22～50はＳ字状口縁台付甕である。法量には



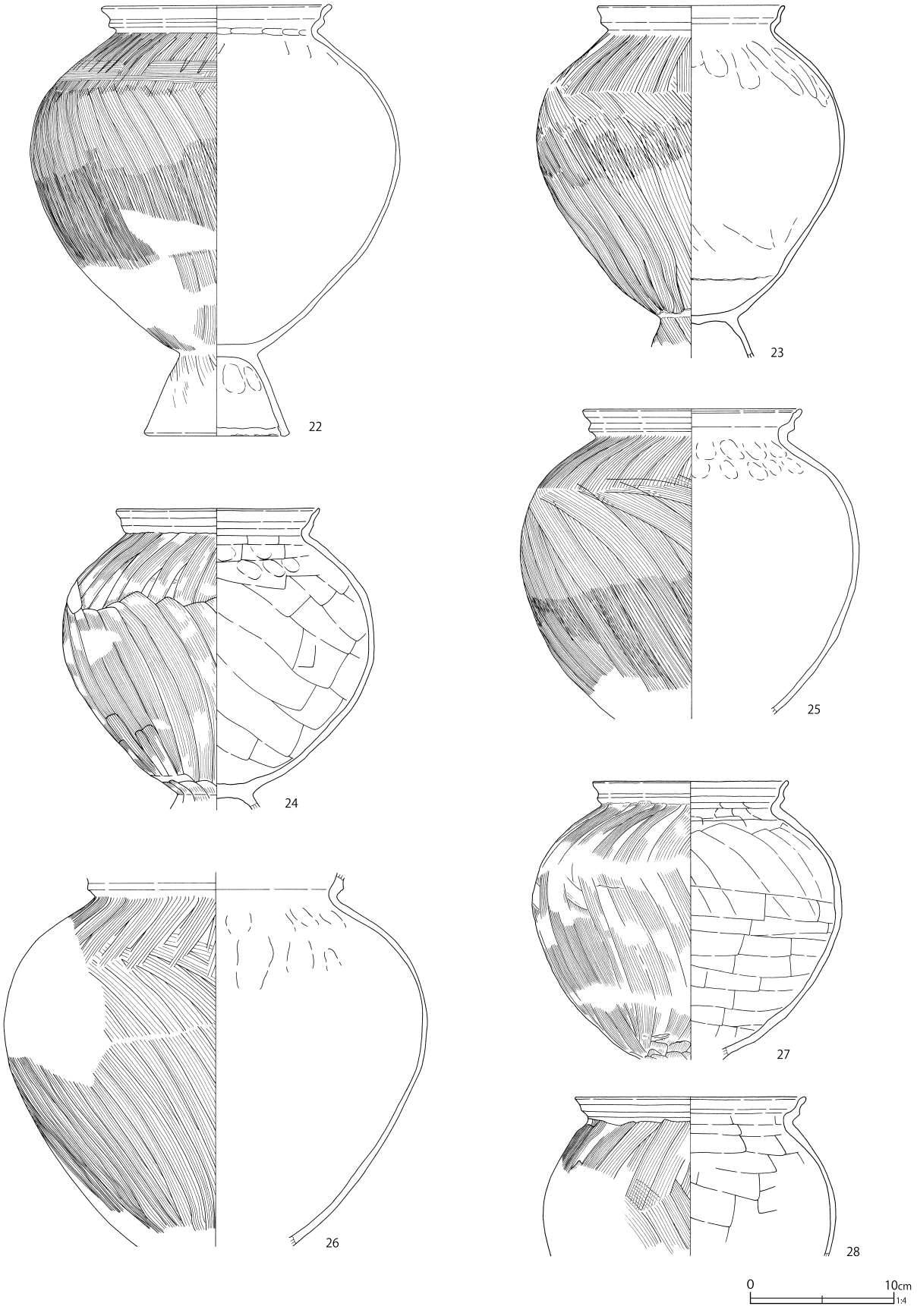
第145図　第24号住居跡（３）

大中小があるが、口径 16cm 前後の中型の個体が大部分である。口縁部内外面横ナデ。上段は外側に広げられて、端部は丸く収められている。29 は上段が短く、受け口状である。46 はＳ字ではなく、５の字甕の可能性がある。

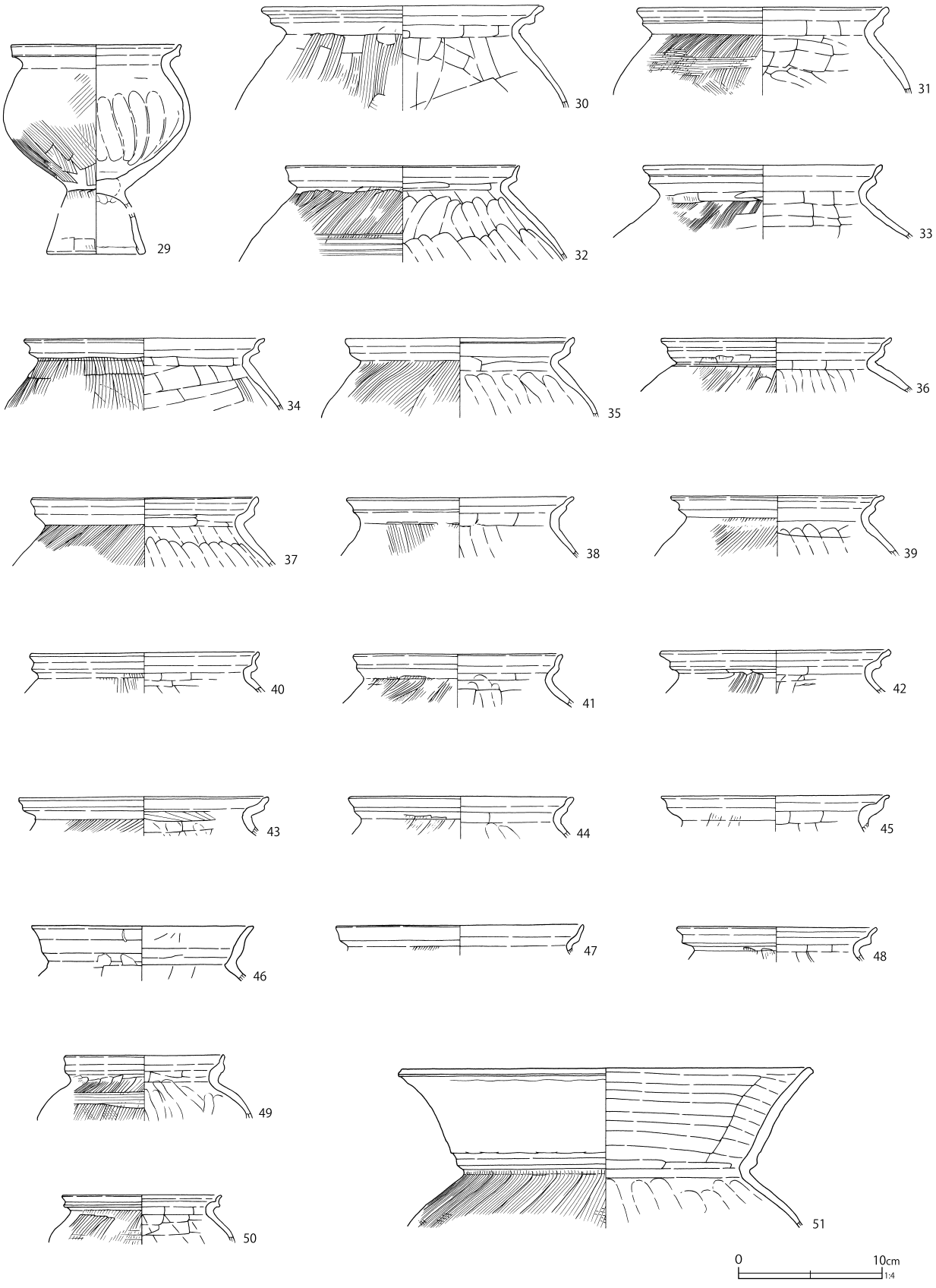
頸部には、口縁の上段が取り付けられた際の粘土が不規則に被せられており、下地の刷毛目やヘラケズリ、ヘラナデが見えている。22 はこの部分が棒状の工具でナデつけられている。上段をナデつける際に頸部に爪が入り、沈線状になってい



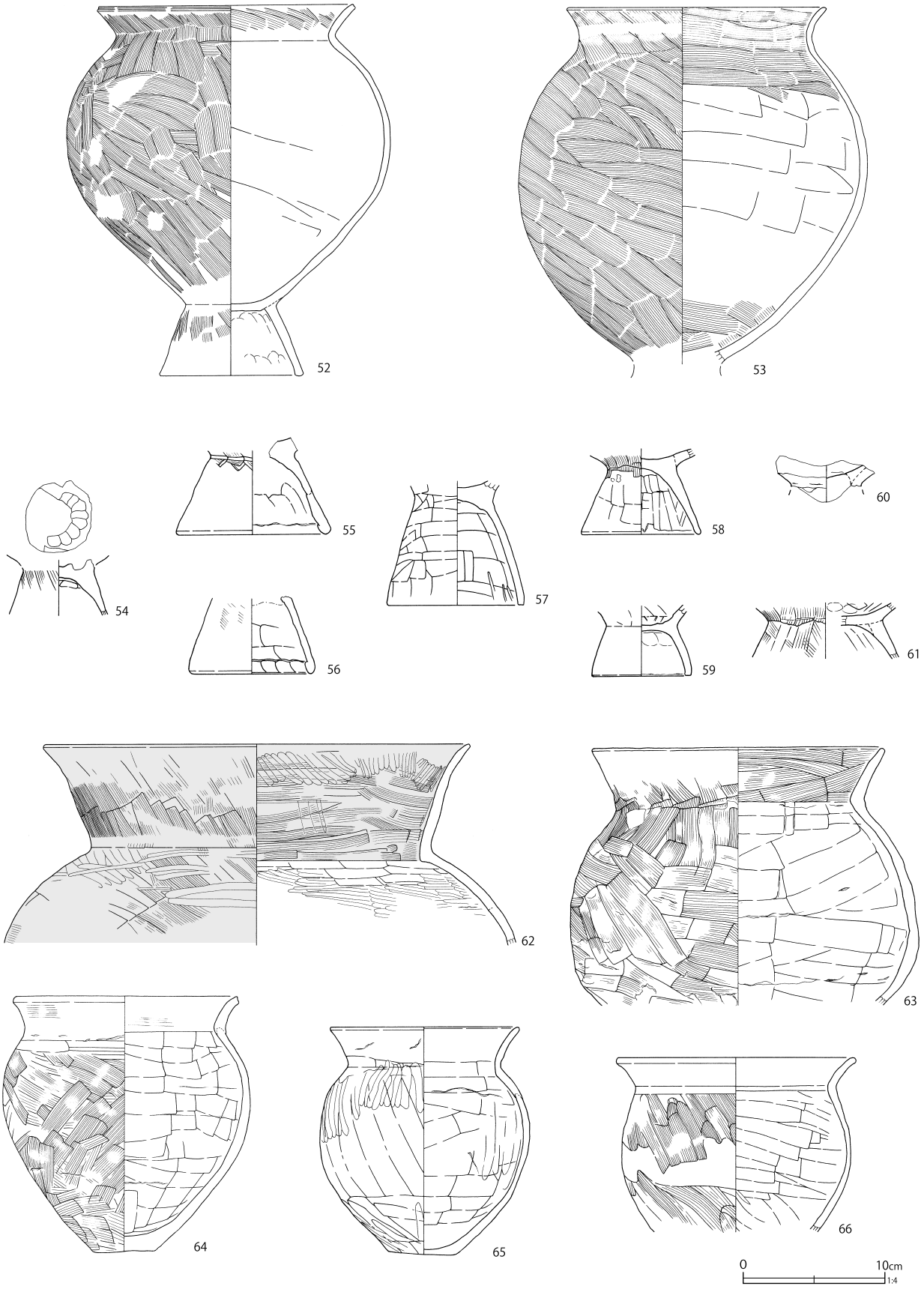
第146図　第24号住居跡出土遺物（1）



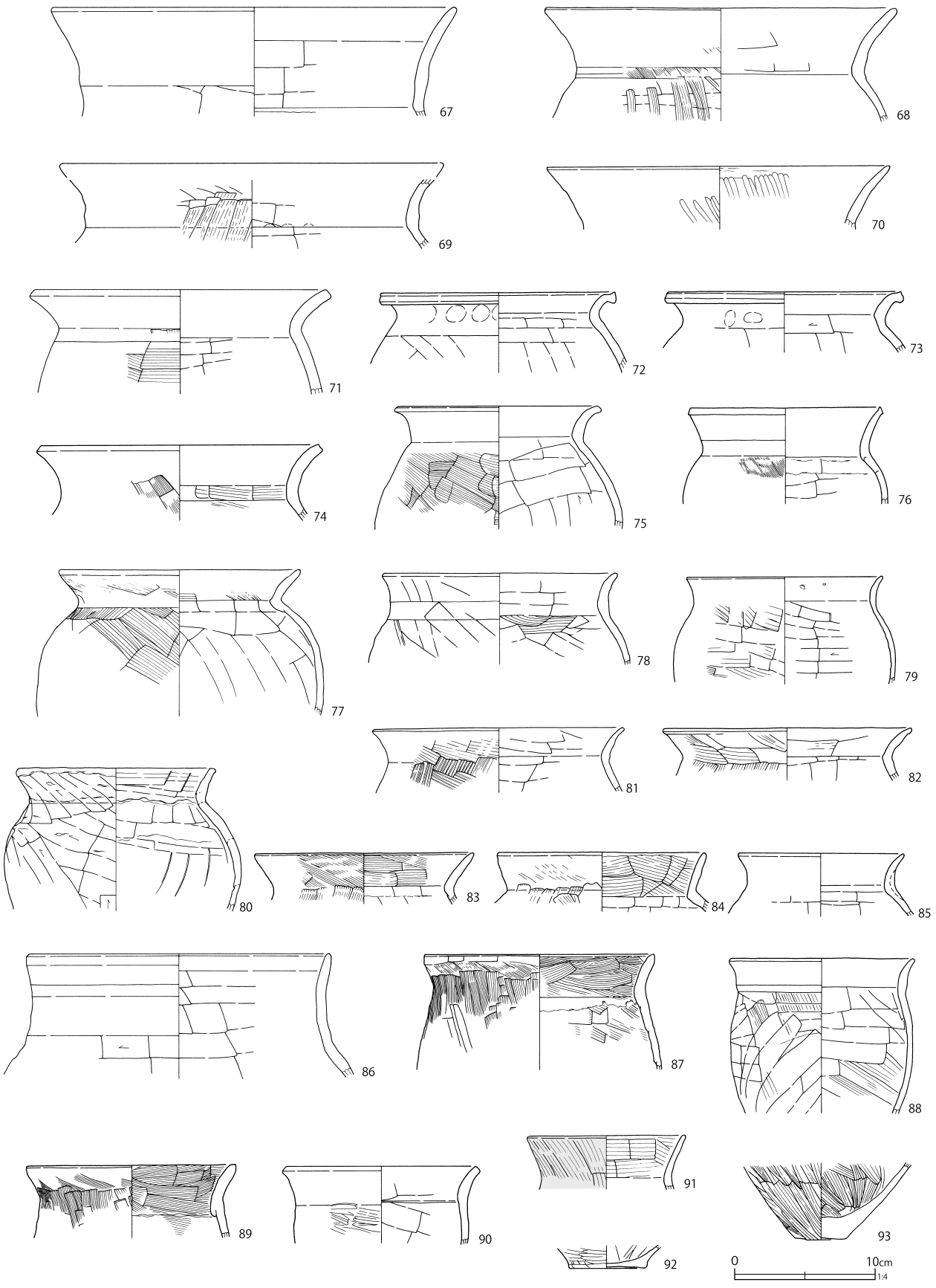
第147図　第24号住居跡出土遺物（２）



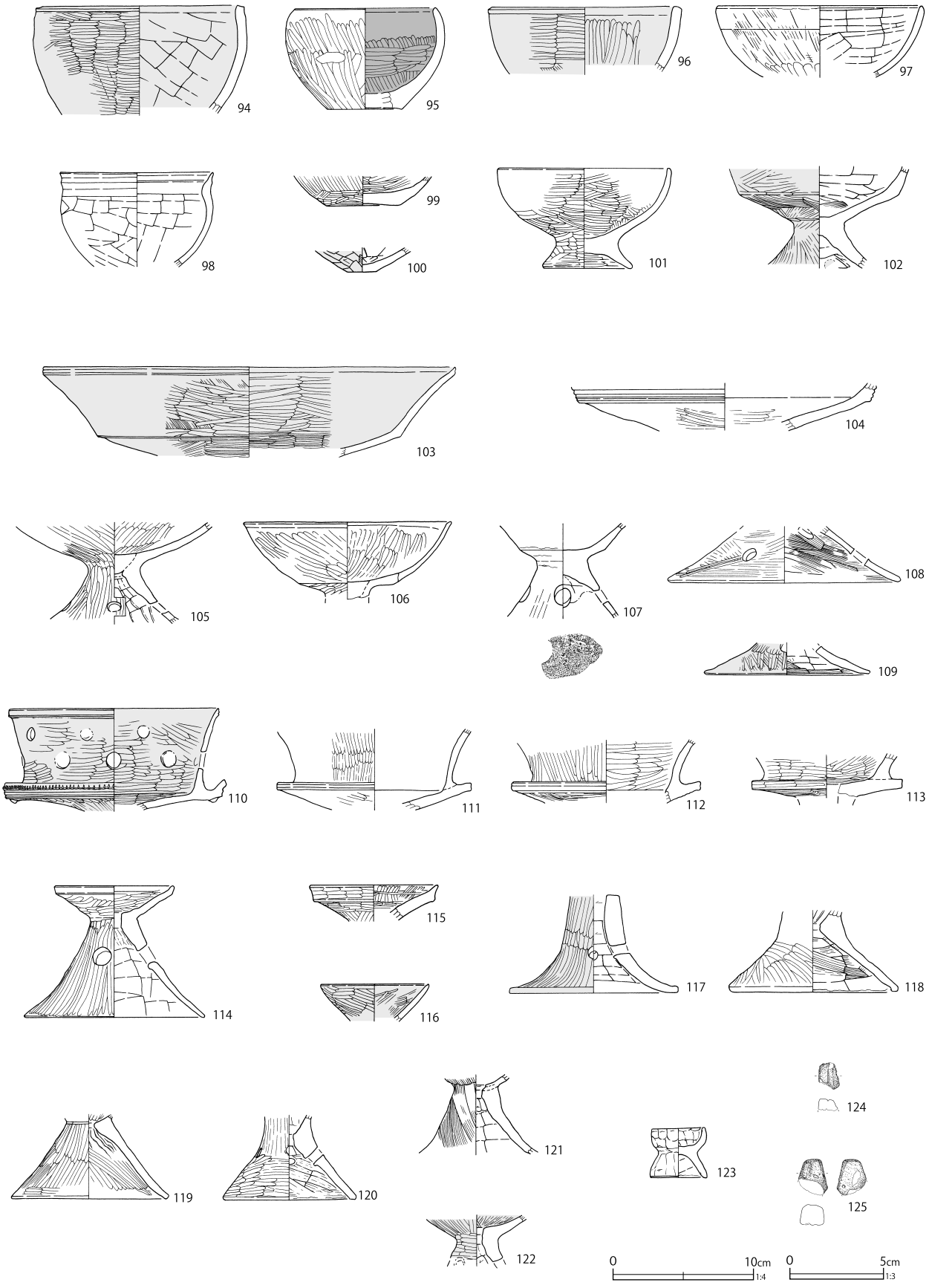
第148図　第24号住居跡出土遺物（３）



第149図　第24号住居跡出土遺物（4）



第150図　第24号住居跡出土遺物（５）



第151図　第24号住居跡出土遺物（６）

第25表　第24号住居跡出土遺物観察表（第146～151図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(13.3)	[15.3]	－	ＡＣＥＨＩＪ	40	普通	明赤褐	№２	140-4
2	土師器	壺	(25.9)	[5.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	№113	
3	土師器	壺	(19.9)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄		
4	土師器	壺	(21.6)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		
5	土師器	壺	(14.9)	[5.1]	－	ＡＨＩＫ	15	良好	にぶい黄橙	内外面赤彩　№78	
6	土師器	壺	－	[3.0]	－	ＡＣＥＩ	5	普通	にぶい黄橙	突帯付壺	
7	土師器	壺	－	[14.7]	－	ＡＢＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	№176・190	140-5
8	土師器	壺	－	[15.9]	6.5	ＡＣＨＩ	50	普通	明褐灰	外面・内面肩部赤彩　№46・51・60	141-1
9	土師器	壺	－	[18.9]	(7.2)	ＡＥＧＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	№66・69・70・83	141-2
10	土師器	壺	－	[20.4]	2.7	ＤＥＦＨ	75	普通	にぶい黄橙	№85・88・90・91・150～153・157・159・178・181	141-3
11	土師器	壺	－	[6.3]	(4.6)	ＢＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	№37・38・39	
12	土師器	壺	－	[4.4]	(6.8)	ＡＣＥＩ	30	普通	にぶい橙	№187	
13	土師器	壺	－	[1.8]	(5.5)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい赤褐		
14	土師器	壺	－	[2.8]	(9.1)	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
15	土師器	壺	－	[2.5]	(5.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄		
16	土師器	小型壺	(9.8)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	浅黄		
17	土師器	細頸壺	(5.4)	[4.4]	－	ＡＢＣＥＩＫ	40	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
18	土師器	小型壺	－	[10.1]	1.9	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	外面赤彩　№96・116	141-4
19	土師器	坩	(14.3)	7.5	3.6	ＡＣＨＩ	60	普通	にぶい黄橙	底部外面以外赤彩　内外面黒斑あり　№73・148	141-5
20	土師器	鉢	(7.2)	8.4	2.9	ＢＣＤＨＩＫ	60	普通	灰白	内外面煤付着　№175・202	141-6
21	土師器	鉢	(11.2)	[8.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	５の字鉢	141-7
22	土師器	台付甕	15.5	30.1	(9.5)	ＣＥＨ	60	普通	灰黄褐	№7～9・11	142-1
23	土師器	台付甕	(13.0)	[24.5]	－	ＣＥＧＨ	60	良好	灰黄褐	№5	142-2
24	土師器	台付甕	(14.0)	[21.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№5・7・10	142-3
25	土師器	台付甕	15.0	[21.5]	－	ＣＥＦＨＩ	80	良好	黒褐	№６	142-4
26	土師器	台付甕	－	[26.0]	－	ＣＤＨＫ	55	普通	にぶい褐	№３　H・I-12Gと接合	142-5
27	土師器	台付甕	13.4	[19.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№８・９	143-1
28	土師器	台付甕	16.0	[11.0]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№108・132	143-2
29	土師器	小型台付甕	(11.8)	[14.5]	(6.8)	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	受口状口縁　№13・105・134	143-3
30	土師器	台付甕	(19.6)	[7.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	内面煤付着	
31	土師器	台付甕	(17.5)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＪ	20	普通	灰褐	内外面煤付着	
32	土師器	台付甕	(16.5)	[6.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№139・142	143-4
33	土師器	台付甕	(16.6)	[5.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	№15	
34	土師器	台付甕	(16.8)	[4.8]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	浅黄橙	外面煤付着　№114	143-5
35	土師器	台付甕	(16.0)	[5.5]	－	ＡＢＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	内外面煤付着	143-6
36	土師器	台付甕	(16.0)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
37	土師器	台付甕	(15.8)	[4.7]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	内外面煤付着　№163	143-7
38	土師器	台付甕	(15.9)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
39	土師器	台付甕	(14.8)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	褐灰	外面煤付着	
40	土師器	台付甕	(16.0)	[2.8]	－	ＡＢＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
41	土師器	台付甕	(14.6)	[3.6]	－	ＡＣＥＨＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
42	土師器	台付甕	(16.0)	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
43	土師器	台付甕	(17.5)	[2.7]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	橙		
44	土師器	台付甕	(15.8)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
45	土師器	台付甕	(15.9)	[2.6]	－	ＡＣＨＩ	10	普通	にぶい橙		
46	土師器	甕	(15.6)	[3.7]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい橙	５の字甕　外面煤付着	
47	土師器	台付甕	(17.3)	[2.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	褐灰	内外面煤付着	
48	土師器	台付甕	(14.0)	[2.4]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
49	土師器	台付甕	(11.0)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙		144-3
50	土師器	台付甕	(11.1)	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	外面煤付着	
51	土師器	台付甕	28.6	[11.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁S字甕　№3　H・I-12Gと接合	144-4
52	土師器	台付甕	17.8	26.2	9.7	ＣＤＥＨ	85	良好	褐灰	№1・3・8・11	144-1
53	土師器	台付甕	(18.1)	[25.1]	－	ＣＤＥＨ	85	良好	にぶい褐	№7～11・23	144-2
54	土師器	台付甕	－	[3.9]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	内外面煤付着	223-2
55	土師器	台付甕	－	[6.7]	(10.4)	ＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		
56	土師器	台付甕	－	[5.4]	(8.4)	ＡＣＨＩＫ	30	普通	灰黄褐		
57	土師器	台付甕	－	[8.6]	(9.6)	ＡＣＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	外面・脚部内面煤付着　№119	144-5
58	土師器	台付甕	－	[6.0]	(8.4)	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№110	144-6
59	土師器	台付甕	－	[4.9]	6.9	ＡＣＨＩＫ	75	普通	褐灰	内外面煤付着　№16	145-1
60	土師器	台付甕	－	[3.2]	－	ＡＣＩＫ	75	普通	にぶい橙		
61	土師器	台付甕	－	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
62	土師器	甕	(30.0)	[14.2]	－	ＡＣＩＫ	90	普通	にぶい橙	外面・内面口縁部赤彩　№1・117	145-2
63	土師器	甕	20.7	[18.1]	－	ＡＣＤＥＨＩＪ	70	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№123～125・154・172・180・181・183・185・191	145-3
64	土師器	甕	15.7	17.9	4.2	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№56・57・61～63・75・126・161・168・170・173	145-5
65	土師器	甕	(13.2)	16.0	4.7	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	№82	145-6
66	土師器	甕	(16.6)	[12.2]	－	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№135・136	145-7
67	土師器	甕	(28.9)	[7.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
68	土師器	甕	(24.7)	[8.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№17	145-4
69	土師器	甕	－	[4.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№104	
70	土師器	甕	(24.6)	[4.4]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
71	土師器	甕	(21.0)	[7.4]	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
72	土師器	甕	(16.8)	[5.6]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№155	
73	土師器	甕	(16.8)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№165	
74	土師器	甕	(20.0)	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	内外面煤付着　№59	
75	土師器	甕	14.4	[8.7]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	№65・162・169	146-1
76	土師器	甕	(13.7)	[6.8]	－	ＡＢＣＥＩＫ	15	普通	褐灰	内外面煤付着	
77	土師器	甕	17.0	[10.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	浅黄橙	シャモットか　内外面煤付着　№188	146-2
78	土師器	甕	(16.6)	[6.5]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	橙		
79	土師器	甕	(14.0)	[7.5]	－	ＡＣＥＦＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
80	土師器	甕	13.5	[10.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	良好	にぶい黄橙	内外面煤付着　№177	146-3
81	土師器	甕	(17.9)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
82	土師器	甕	(17.8)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		
83	土師器	甕	(15.6)	[3.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
84	土師器	甕	(14.9)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰褐	内外面煤付着	
85	土師器	甕	(11.8)	[4.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰褐	外面煤付着	
86	土師器	甕	(21.6)	[8.8]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	橙	内外面煤付着	
87	土師器	甕	(16.5)	[8.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№50・52	
88	土師器	甕	(13.0)	[11.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	50	普通	浅黄橙	№195・196	146-5
89	土師器	甕	(15.0)	[5.1]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
90	土師器	甕	(13.6)	[5.4]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
91	土師器	小型甕	(11.2)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面赤彩	
92	土師器	甕	－	[1.6]	5.4	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№71	
93	土師器	甕	－	[5.4]	3.7	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№111	146-4
94	土師器	鉢	(14.0)	[7.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	良好	橙	不明瞭だが内外面赤彩	
95	土師器	鉢	(10.0)	7.1	(5.4)	ＡＣＨＩＫ	40	普通	橙	内面黒色処理　№34	146-6
96	土師器	鉢	(13.4)	[4.6]	－	ＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
97	土師器	鉢	(14.6)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＪ	20	普通	橙	外面煤付着　№40	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
98	土師器	鉢	(11.0)	[6.7]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	Ｓ字鉢　内外面煤付着	
99	土師器	鉢	－	[2.1]	(5.2)	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	外面黒色処理か	
100	土師器	鉢	－	[1.7]	2.0	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	外面赤彩	
101	土師器	低脚坏	(12.0)	7.1	6.2	ＡＢＤＨＩＫ	40	普通	浅黄橙	№189	146-7
102	土師器	高坏	－	[7.3]	－	ＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	外面・内面一部赤彩　№201	146-8
103	土師器	高坏	(29.6)	[6.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	40	普通	橙	内外面赤彩　№156・160	
104	土師器	高坏	－	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
105	土師器	高坏	－	[7.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	№171	
106	土師器	高坏	(14.8)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	橙	№45	
107	土師器	高坏	－	[6.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	脚部内面に布痕　№109	
108	土師器	高坏	－	[4.0]	(16.5)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙		147-5
109	土師器	高坏	－	[2.2]	(11.7)	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	外面赤彩　№138	
110	土師器	器台	(15.0)	[7.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	内外面赤彩　№133　Ｐ２	147-1
111	土師器	器台	－	[5.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№120	147-2
112	土師器	器台	－	[4.4]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	明黄褐	№121	147-3
113	土師器	器台	－	[3.0]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		147-4
114	土師器	器台	8.4	9.3	(12.8)	ＡＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	№12？	147-6
115	土師器	器台	(9.0)	[2.5]	－	ＡＢＣＨＫ	40	良好	にぶい橙	№20	
116	土師器	器台	(7.7)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
117	土師器	器台	－	[6.9]	12.1	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	外面赤彩　№25　SJ34と接合	147-7
118	土師器	器台	－	[5.8]	11.8	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	№194	147-8
119	土師器	器台	－	[6.0]	10.9	ＣＨＩＫ	75	普通	赤	内外面煤付着	148-1
120	土師器	器台	－	[6.1]	9.3	ＡＨＩＪ	90	普通	にぶい黄橙		148-2
121	土師器	器台	－	[5.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	№47	
122	土師器	器台	－	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	外面・器受部内面赤彩　№199	
123	土師器	手捏ね	(3.8)	3.5	(4.0)	ＡＣＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	器台形	148-3
124	石製品	砥石	長さ[2.8]　幅[2.1]　厚さ[1.4]　重さ3.3ｇ　軽石							刃物痕あり	220-3
125	石製品	砥石	長さ[3.9]　幅[3.0]　厚さ2.4　重さ8.2ｇ　軽石								220-3

る。

胴部は薄く、外面は羽状の刷毛目が施される。概して一般的な刷毛目工具というよりも櫛目に近い。22は更に棒状工具によって斜めのナデが入れられている。29・30の刷毛目はややランダムである。33は深くて太い刷毛目である。肩部に横位の刷毛目が入るのは22・31・32・49・50のみである。内面は肩部に指オサエが残る。全体としては基本的に下位から上位への大きな単位のナデが施され、一部にヘラナデが加えられているものがある。27の下半はヘラケズリに近いヘラナデが施されている。

脚台部は筒形の状態で穴の開いた胴部に直接付け、砂を多く含む粘土を充填して接合されている。その結果断面形が箱形を呈している。外面は刷毛目が等間隔にナデ消されている。下位のナデは不明瞭である。22の刷毛目は胴部のものより目が粗い工具が用いられている。端部は折り返されている。

51は所謂山陰系口縁Ｓ字甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。Ｓ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。接合箇所はやや不連続になっている。口縁部は外面横ナデ、内面ヘラナデが施されている。それより下位は他のＳ字状口縁台付甕と同様である。

52・53は単口縁の刷毛目台付甕である。52の頸部はくの字状で、胴部の刷毛目はやや乱れている。脚台部は低く、箱形で、Ｓ字甕のような接合方法である。53は全体に歪んでいる。

54はＳ字状口縁台付甕の接合部である。見込

み部分の粘土が剥がれ、接合の際に付けられた指頭痕が明瞭に残る。55・56はS字状口縁台付甕の脚台部である。57～61は、ホゾ接合の台付甕の脚台部である。59は箱形を呈し、S字状口縁台付甕である可能性がある。60はホゾ接合の臍である。61はかなり大型になると考えられる。

62・63は甕の上半部である。62は特大で、内外面赤彩が施されている。刷毛目ベースで、ヘラ磨きが多用されている。63は刷毛目甕である。口縁部が長く、胴部の下位に最大径があり、やや下膨れである。胴部外面は所々に粘土が足され、刷毛目が施されている。

64～93は甕である。64～66は全形の知れるものである。頸部はくの字状を呈し、端部は64が面を持ち、65・66は丸く収められる。胴部は64・66が刷毛目、65がナデ後太い工具によるヘラ磨きである。66の中位には粘土が一枚被せられている。底面は64が無調整、65がヘラナデである。内面はヘラナデが施され、65はヘラ磨きが加えられている。

67～70は大型の口縁部である。67は長く直立気味に立ち上がる。ヘラナデ後横ナデが施されている。68・69はヘラナデと刷毛目が施された後に横ナデが加えられている。70は横ナデ後ヘラ磨きが施されており、壺の可能性がある。

71・74は厚手で、大きく外反する。72・73は大きく外反し、水平になった端部が肥厚している。北陸西部、北近畿地方の影響か。75・76は外反し、端部に面を持つ。77は直線的で、頸部の下に段があり、口縁部との組み合わせ成形が明らかである。この段を境に、内外面とも調整が不連続である。80は口縁部に凹凸があり、頸部も同様に凹凸がある。胴部は開裂が多く、それを押さえるように、ヘラケズリ、もしくはそれに近いヘラナデによって仕上げられている。

86は直立する大型の口縁部である。口縁部ヘラナデ後横ナデ、胴部外面ヘラケズリ。やや違和感があり、古墳時代前期ではない可能性もある。

87～90は肩の張らない器形で、87を除いてやや小型である。いずれも下半分を欠失している。88は全体に薄手で、口縁端部が丸く収められている。刷毛目後ヘラナデ。89の頸部以下の内面は一枚剥がれており、下地の刷毛目が確認できる。91は更に小型である。外面が赤彩されるため、鉢の可能性もある。92・93は底部である。92は径が大きく、薄手のため甕としたが、壺底部の可能性もある。

94～100は鉢である。94は大型で端部に面を持つ。外面刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラナデだが、光沢がありヘラ磨きの可能性がある。95は内面が全体に黒く、黒色処理の可能性がある。97は下半が焼けている。98は所謂S字鉢で、ヘラナデが強めである。99は底部がやや突出している。

101は低脚坏である。山陰地方の模倣品である。坏部内外面ヘラナデ後ヘラ磨き、脚部は横ナデ後ヘラ磨きである。

102～109は高坏である。102は内面の下位に稜があり、深身である。稜より下位は刷毛目、上位はヘラナデが下地の調整で、工程が分かれると考えられる。ホゾ接合で、脚部内面の一部に赤彩が見られる。103・104は北陸地方から北近畿にかけて分布する所謂有稜高坏の模倣品である。大型で、下位の稜から大きく開く。103は口縁端部、104は稜の部分に横ナデによって凹線状の加飾が施されている。106は浅いやや小型の坏部で小型高坏の可能性がある。107は風化のため調整がほとんど見えないが、脚部の内面に布圧痕が見られる。108・109は脚部である。108は三孔の穿孔が上下に見られ、千鳥になっている。

110～113は大型器台で、北陸地方の装飾器台の模倣品である。いずれも鍔状になる下段に上段が乗る形態で、全体にヘラ磨きが施されている。110は鍔の先端に更に粘土を貼付する形で、本来

の形態が意識されている。鍔は下端を欠くが、横ナデによる凹線が施され上端は刻み目が加えられている。穿孔は千鳥状である。

114 ～ 122 は器台で、所謂小型器台である。121 を除いて器受部内外面、脚部外面の調整はヘラ磨き、脚部内面は 118・120 が刷毛目、119 がヘラ磨き、他はヘラナデである。114 は全形が知れるものである。小さめの器受部に末広がりの脚部が付く。端部は直線的である。115・116 は器受部である。115 は端部が直立して面を持つ。116 は丸く収められる。117 ～ 122 は脚部である。117・120 は透孔が 4 孔で、径が小さい。117 は柱状部の内面がヘラケズリである。118・120 は上位が開き、ヘラナデが施されているが、この部分が器受部ではないと考えられる。118・120 は脚端部が下向きである。

123 は高坏形の手捏ねである。全体に指ナデで、坏部の端面には指頭痕が残る。

本住居跡は 4 世紀前半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

第 25 号住居跡（第 152・153 図）

A区の東側、E－８グリッドに位置する。遺構の北東側が調査区域外にかかる。炉が南西壁際にあることから、南西－北東方向、S－ 37° －E が主軸方位と考えられる。

平面形は方形で、各辺は直線的である。規模は、検出範囲で主軸方向 2.10 m、直交軸方向 3.35 m である。深さは 0.30 m で、覆土は地山の明褐色粘土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面はほぼ平坦である。貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは地床炉、ピット、壁周溝が検出された。炉跡は南西壁手前の中央で検出された。径 0.40 m、深さ 0.05 m で、焼土層が検出されている。

ピットは中央に 1 基が検出された。長径 0.45 m、短径 0.35 m、深さ 0.25 m である。第３層は粘性を欠く褐色土で、柱根の可能性がある。

壁周溝は調査範囲内では全周している。幅 0.08 ～ 0.15 m、深さ 0.10 m である。

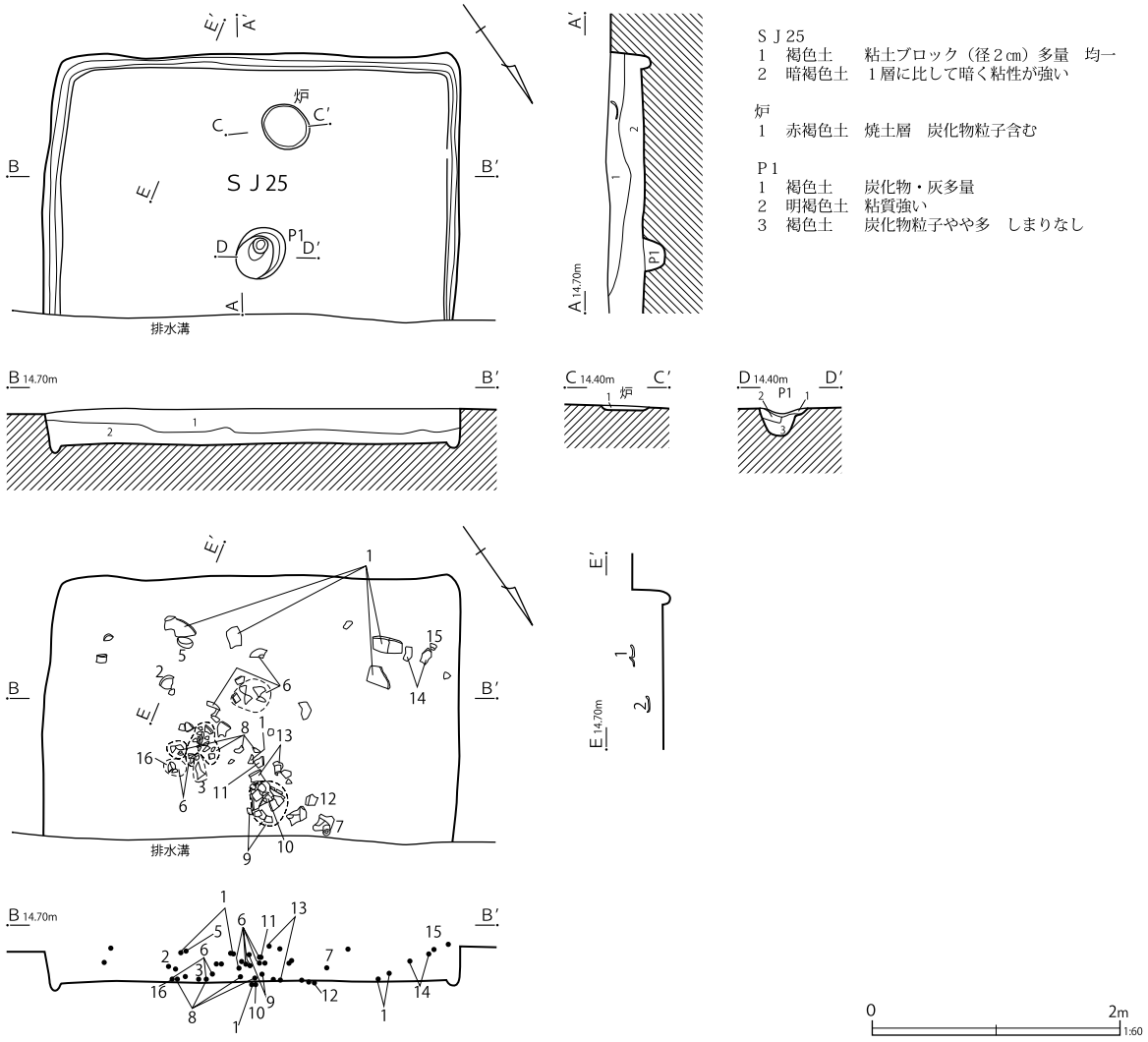
遺物は多く、大きく上層の第１層と床面直上から出土した。古墳時代後期の須恵器坏蓋、長脚２段高坏、土師器壺、甕、高坏、大型甑の破片が出土し、古墳時代前期の所謂千種甕の破片が混入している。

１～３は須恵器である。１は大型の壺である。丸底の胴部に大きく開く長い口縁部が取り付く。口縁部は中位にナデによる突帯が作り出されている。波状文は６条１単位で、その上下に配されている。胴部は外面平行タタキ、内面青海波文によって成形されている。外面は更に螺旋状のナデが入れられ、底部にはカキ目が施されている。上野産。２は坏蓋である。口縁部と体部の境に沈線が入れられている。体部は回転ヘラケズリ後底面にヘラナデが加えられている。太田金山窯産。３は瓶類の口縁部である。多孔質で白色微粒子を多く含む。末野産か。

以下は土師器である。４・５は坏である。４は径がやや小さめで厚手である。風化が進み、器面がざらついている。５は、内外面黒色処理されている。

６～８は大型の高坏である。接合はいずれも圧着による。６の坏部は光沢があり、単位は確認できないが、ヘラ磨きの可能性がある。外面は坏部下半から柱状部ヘラケズリ、裾部は横ナデが加えられている。柱状部の内面は粘土の接合痕が残り、ヘラナデが加えられている。７は外面全体、坏部内面に丁寧なナデが施されている。柱状部内面絞り目。８の調整は６と同様である。端部が下方向に摘み上げられている。９～ 13 は甕である。９の外面には所々ナデが加えられ、胎土に酸化鉄を多く含む。11 はやや小型で、内面にヘラの当たりが顕著に認められる。12 は横ナデが強く、段状になっている。

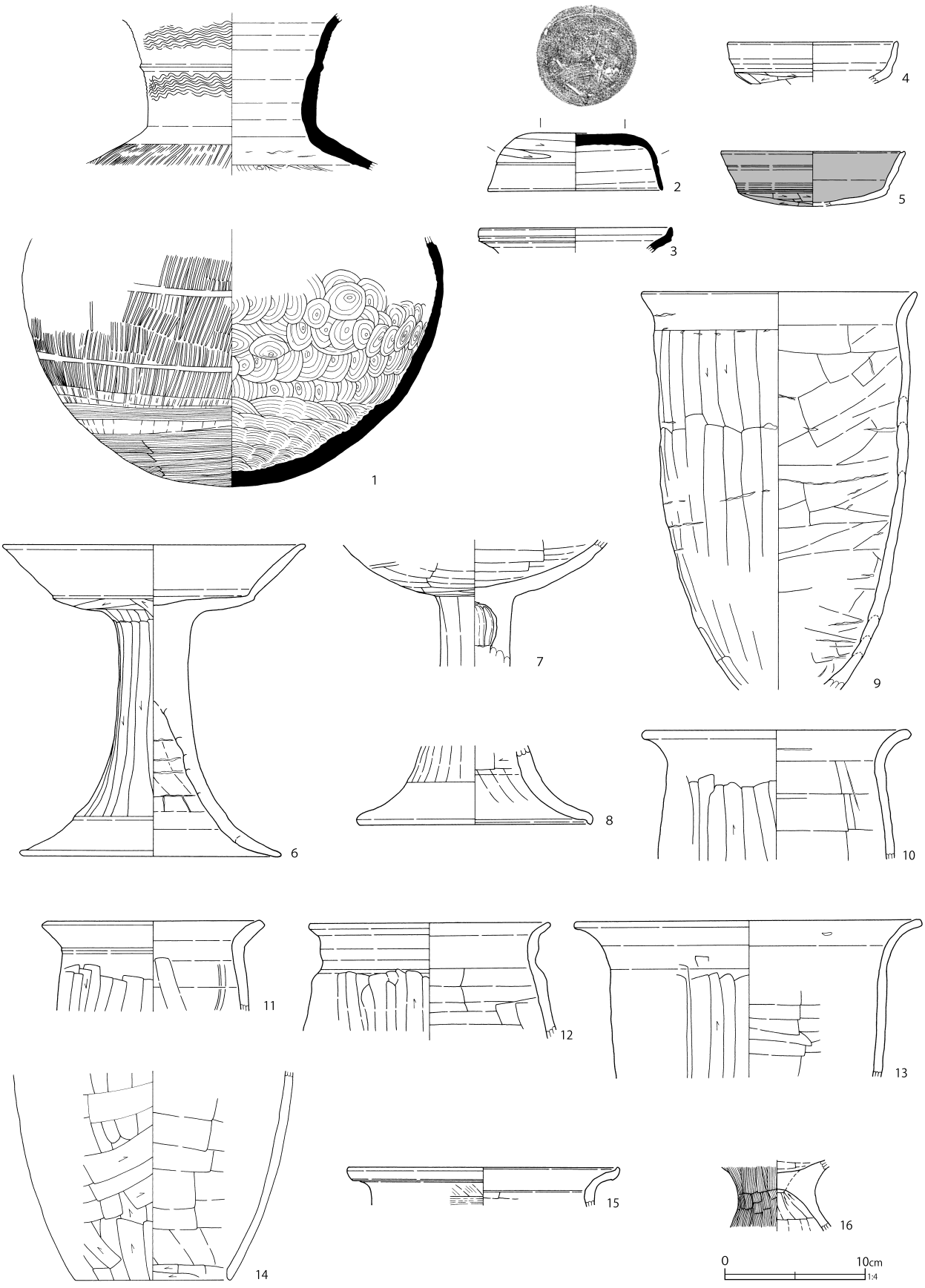
15・16 は古墳時代前期に帰属する混入品である。15 は甕の口縁部で、端部が肥厚する。16 は台付甕の接合部である。脚台部の天井部が絞り目状に皺になり、放射状のナデを加えている。重量



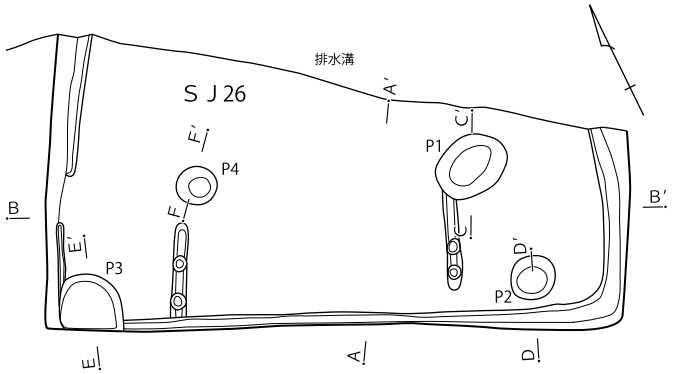
第152図　第25号住居跡

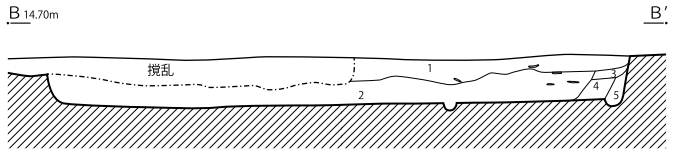
第26表　第25号住居跡出土遺物観察表（第153図）

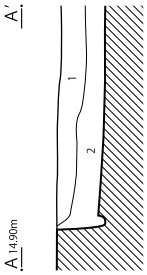
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	－	[29.6]	－	ＡＣＥＩＫ	30	普通	灰白	東毛産か　№６・７・10・11・28　Ｐ１	148-6
2	須恵器	蓋	12.5	4.1	－	ＡＥＩＫ	70	良好	灰	東毛産か　№15・74	148-4
3	須恵器	瓶	(13.6)	[1.7]	－	ＥＩＪＫ	15	良好	黄灰	末野産か　№20	
4	土師器	坏	(12.0)	[2.9]	－	ＡＣＤＨＩＫ	5	普通	浅黄橙	有段口縁坏	
5	土師器	坏	(13.0)	3.8	－	ＡＣＤＨＩＫ	40	普通	明赤褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№12	148-5
6	土師器	高坏	(21.0)	22.5	18.0	ＡＣＨＩ	80	普通	橙	№９・19・21・22・42～44・46	148-7
7	土師器	高坏	－	[8.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	橙	№33	149-1
8	土師器	高坏	－	[5.5]	(16.9)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	橙	№18・21・25・29	149-2
9	土師器	甕	19.0	[28.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№30・31	149-3
10	土師器	甕	(19.6)	[9.2]	－	ＡＣＦＨＩＫ	20	普通	橙	外面煤付着　№47	
11	土師器	甕	(15.1)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	№27	
12	土師器	甕	(17.0)	[8.3]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	№34	
13	土師器	甑	(24.6)	[11.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№38・48	
14	土師器	甑	－	[14.8]	(11.0)	ＡＣＨＩ	10	普通	橙	単孔砲弾形　№４・５	
15	土師器	甕	(19.4)	[2.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	№３	
16	土師器	台付甕	－	[5.0]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№19	

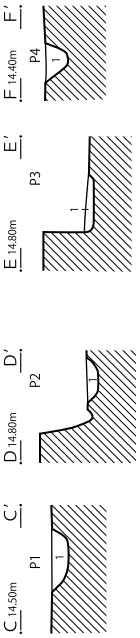


第153図　第25号住居跡出土遺物









ＳＪ26
1　褐色土　　炭化物多く含む
2　暗褐色土　褐色土ブロック（シルト質）含む　地山に近似
3　黒褐色土　炭化物多量
4　黒褐色土　炭化物多量　褐色土ブロック（径３㎝、地山に近似）を含む
5　明褐色土　壁の崩壊土か（地山に近似）

0　2m
1:60

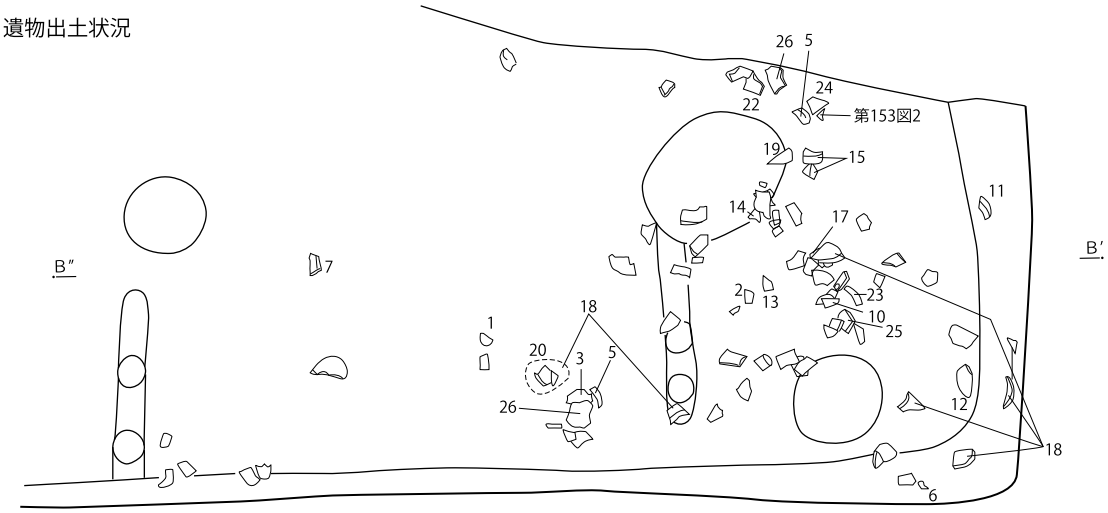
Ｐ１
1　黒褐色土　炭化物多量

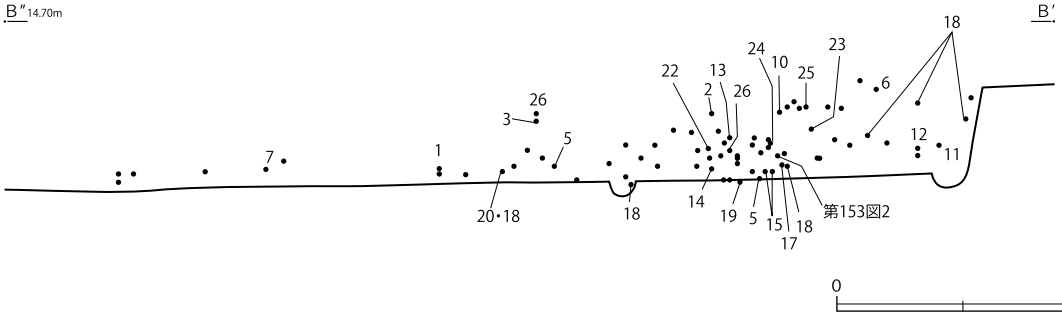
Ｐ２
1　褐色土　　炭化物多量　地山に近似　しまりなく軟質

Ｐ３
1　褐色土　　炭化物多量　軟質

Ｐ４
1　暗褐色土　明褐色土ブロック（径１㎝大、地山）少量　しまりあり

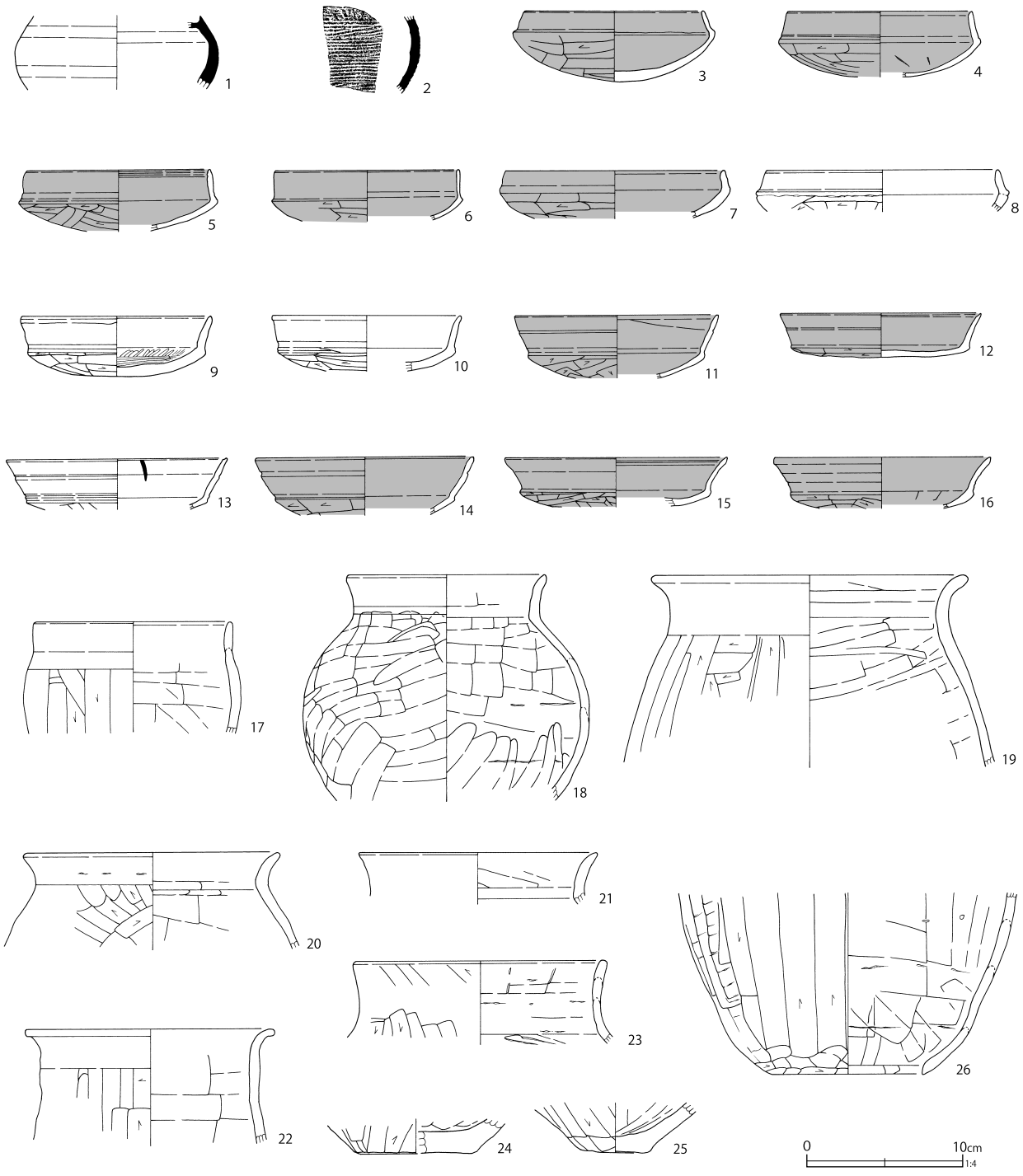
遺物出土状況





0　1m
1:30

第154図　第26号住居跡



第155図　第26号住居跡出土遺物

感があり、ずっしりしている。

本住居跡の時期は６世紀第３四半期、屋敷裏Ⅴ－２期である。

第 26 号住居跡（第 154・155 図）

Ａ区の東側、Ｄ－６・７グリッドに位置する。遺構の北側が調査区域外にかかる。北カマドである場合の軸方位は、Ｎ－ 30°－Ｅになる。

検出範囲の平面形は方形で、各辺は直線的である。規模は、検出範囲で主軸方向 2.25 ｍ、直交軸方向 4.65 ｍである。深さは 0.35 ｍで、覆土は炭化物、地山の褐色土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積と考えられる。

第27表　第26号住居跡出土遺物観察表（第155図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	短頸壺	－	[4.7]	－	ＥＩＫ	10	良好	灰	太田産か　№70	
2	須恵器	提瓶	－	[4.9]	－	ＨＩＫ	5	普通	灰	東毛産か　№20	222-3
3	土師器	坏	(11.4)	4.2	－	ＡＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理　№６	
4	土師器	坏	(11.8)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰褐	内外面黒色処理	
5	土師器	坏	(11.8)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	灰褐	内外面黒色処理　№10・75	
6	土師器	坏	(11.8)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄褐	内外面黒色処理　№48	
7	土師器	坏	(14.0)	[3.0]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	灰褐	内外面黒色処理　№４	
8	土師器	坏	(14.9)	[2.6]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
9	土師器	坏	(12.2)	3.8	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	浅黄橙		
10	土師器	坏	(12.0)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙	№57	
11	土師器	坏	(13.1)	[4.0]	－	ＡＣＩＫ	30	普通	暗褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№41	149-4
12	土師器	坏	(13.0)	[2.8]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	褐灰	有段口縁坏　内外面黒色処理　№44	149-5
13	土師器	坏	(14.2)	[3.3]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	橙	有段口縁坏　墨書か　№22	
14	土師器	坏	(14.0)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№32	
15	土師器	坏	(14.4)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	浅黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№53・67	
16	土師器	坏	(14.0)	[3.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	灰黄褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
17	土師器	鉢	(12.4)	[7.1]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着　№63	
18	土師器	甕	(12.8)	[14.5]	－	ＡＣＨＩ	45	普通	灰褐	内外面煤付着　№11・36・45・46・51・68　P1	149-6
19	土師器	甕	(19.7)	[12.2]	－	ＡＣＨＩＫ	20	良好	にぶい赤褐	外面煤付着　№52	
20	土師器	甕	(16.2)	[6.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№11	
21	土師器	甕	(15.3)	[3.2]	－	ＡＣＩＫ	20	普通	にぶい橙		
22	土師器	甕	(15.8)	[7.3]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№77	
23	土師器	甕	(15.8)	[5.3]	－	ＡＣＨＩＪＫ	25	良好	褐灰	内外面煤付着　№59	
24	土師器	甕	－	[2.1]	(7.9)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	№73	
25	土師器	甕	－	[3.2]	4.6	ＡＣＤＥＧＨＩＫ	60	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№56	
26	土師器	甑	－	[11.6]	(9.8)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№５・76	

床面は平坦で、貼床、掘り方は認められなかった。

床面からはピット、間仕切り溝、壁周溝が検出された。ピットは４本検出された。その位置からＰ１・４は主柱穴の可能性が高いが、深度がなく、確実ではない。Ｐ１は長径 0.55 ｍ、短径 0.40 ｍ、深さ 0.15 ｍの楕円形、Ｐ４は径 0.30 ｍ、深さ 0.15 ｍの円形である。覆土は炭化物、明褐色土を多く含む黒褐色土、暗褐色土である。Ｐ２・３はコーナーにある。Ｐ２は径 0.35 ｍ、深さ 0.10 ｍの円形、Ｐ３は径 0.45 ｍ、深さ 0.05 ｍの半円形である。覆土は炭化物を含む褐色土である。

間仕切り溝はＰ１・４から南側へ壁と垂直方向に延びる。幅 0.10 ｍ、深さ 0.03 ～ 0.05 ｍである。所々に深さ２～３cm 程度の窪みが見られる。

壁周溝は西側で一部途切れるほかは、全周している。幅 0.10 ～ 0.30 ｍ、深さ 0.05 ｍである。

遺物は多く、大きく上層の第１層と床面直上から出土した。前者が特に多い。古墳時代後期の須恵器坏、提瓶、土師器坏、壺、甕、大型甑の破片が出土している。

１・２は須恵器である。１は短頸壺の胴部である。内面に灰がかかる。太田金山窯産。２は提瓶の胴部である。５条１単位のカキ目が全体に施されている。外面に灰がかかる。太田金山窯産。

以下は土師器である。３～ 16 は坏である。３～８が坏身模倣坏、９・10 が坏蓋模倣坏、11 ～ 16 が有段口縁坏である。３～７・11・12・14 ～ 16 は内外面黒色処理されている。４は坏部内面に工具痕が見られ、５の端部はナデによる細かな凹凸が見られる。６は薄手で非常に軽量である。７・８は径が大きく厚手である。７の内面は全体が剥離している。９の体部内面にはヘラ磨きが施されている。11 の口縁部内面にはナデの抜け痕が見られる。13 の内面には墨書のような細い黒

色箇所が見られるが、その部分が凹んでおり、確実ではない。15・16 は口縁部が大きく外反し、15 の内面には刷毛目状のナデ痕が、16 の外面は多段になっている。

17 は鉢だが、外面に煤が付着し、甕の可能性もある。

18 ～ 25 は甕である。18 は中型で胴部が丸くなると考えられる。胴部内外面ヘラナデ。その他は長甕である。口縁部の屈曲は弱く、胴部中位に最大径があると考えられる。法量に大中小が認められる。23 の内面には開裂痕が多く、胎土に白色針状物質を含む。24・25 の底面はヘラケズリである。

26 は大型の単口縁の甑である。径が大きく、組み合わせの甕も相当大型と考えられる。開裂痕が多い。

６世紀第１～２四半期､屋敷裏Ⅴ－３期である。

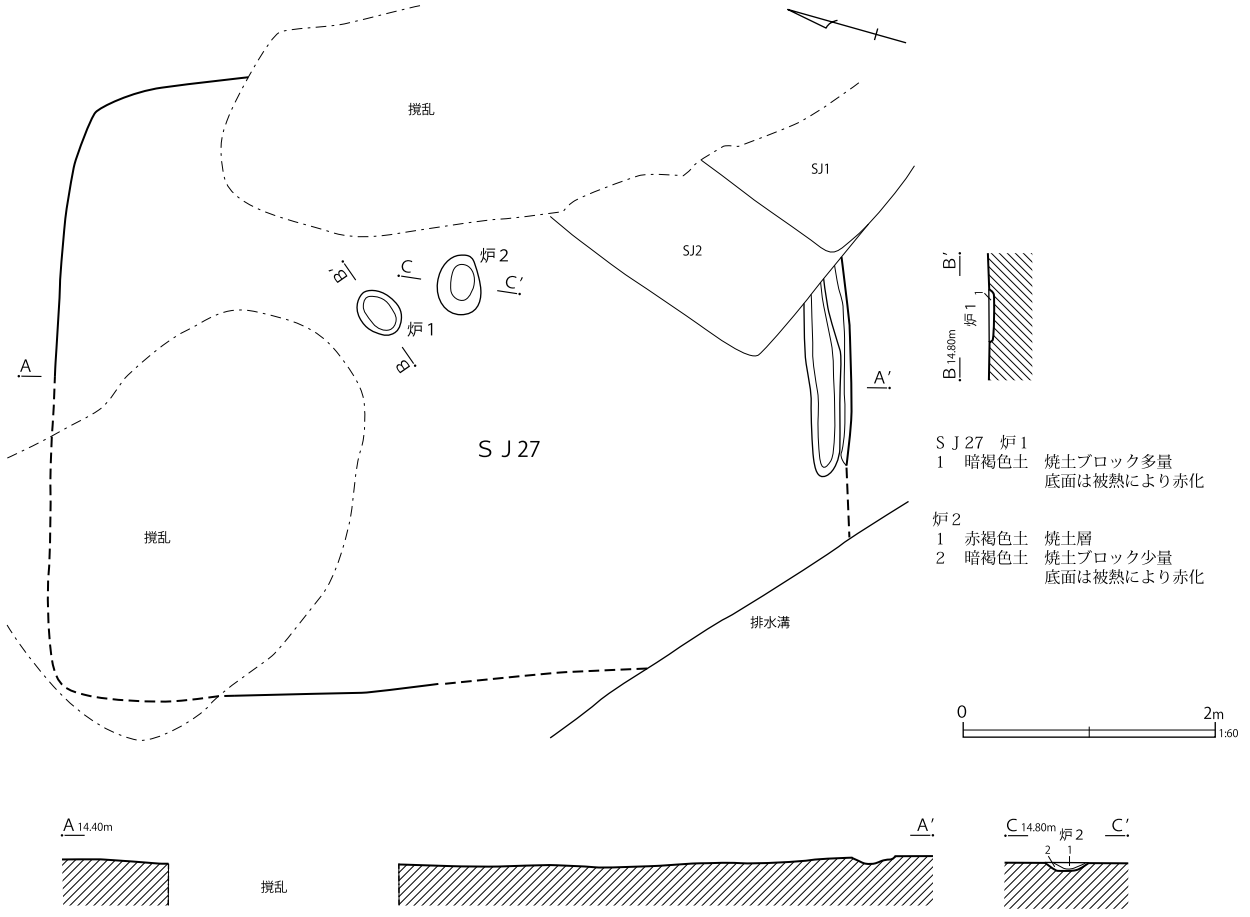
第 27 号住居跡（第 156 図）

Ｂ区の東側、Ｉ・Ｊ－ 11 グリッドに位置する。調査区の端に当たる。北側と東側に大きく撹乱が入り、更に古代の第１・２号住居跡と重複するため､炉跡と南側の壁周溝が検出できたのみである。

北側と西側の立ち上がりは地山の変色によって確認したのみで、南壁の一部を除き、掘り込みを検出できなかった。本遺構の下層に第１号方形周溝墓があるが、本遺構確認面では掘り込みは確認できなかった。

主軸方位は炉跡２基が遺構の東側にあることから、東西方向、Ｎ－ 74°－Ｅと考えられる。

平面形は隅丸方形で、各辺は直線的である。規



第156図　第27号住居跡

模は、主軸方向4.90 m、直交軸方向6.35 mである。確認時に既に床面まで掘削していたため、覆土は確認できなかった。貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは地床炉、壁周溝が検出された。炉跡は中央東寄りから２基検出された。炉跡１は長径0.40 m、短径0.30 m、深さ0.05 mである。炉跡２は長径0.50 m、短径0.35 m、深さ0.05 mである。双方とも覆土は暗褐色土と焼土の混土層で、底面が良く焼けていた。

壁周溝は南側の一部が検出された。幅0.20～0.25 m、深さ0.03～0.05 mである。

遺物は床面から、古墳時代前期の甕、高坏の破片がごく少量出土したのみである。

本住居は４世紀中葉、屋敷裏Ⅲ－４期である。

第28号住居跡（第157・158図）

Ｂ区の中央、Ｈ－10･11グリッドに位置する。第１号井戸跡と重複し、本遺構が古い。炉跡が東側にあることから、北東－南西方向、Ｎ－16°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸長方形で、各辺は直線的である。規模は、主軸方向5.75 m、直交軸方向4.30 mである。深さは0.05 mである。覆土は焼土、炭化物を含む明褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面は若干凹凸があり、東側が低くなっていた。貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは地床炉、ピット、壁周溝が検出された。炉跡は中央よりやや東側に縦に２基並ぶ形で検出された。炉１は長径0.70 m、短径0.50 m、深さ0.05 mである。炉１・２とも同規模で、いずれも第１層が火床面と考えられる。

ピットは５本検出された。Ｐ１の位置がずれるが規模や柱痕、底面の当たりの存在から、Ｐ１～４が主柱穴と考えられる。規模は、径0.45～0.55 m、深さ0.45～0.60 mである。第１・２層が柱抜き取り後の流入土、第３層が柱痕、第４層が柱掘り方の充填土と考えられる。Ｐ５は長径0.55 m、短径0.47 m、深さ0.35 mの楕円形である。覆土は焼土、炭化物、褐色粘土、ローム土を含む暗褐色土で、上層は粘土、ロームが多く、埋戻しの可能性がある。

壁周溝は幅0.10～0.15 m、深さ0.05 mで、全周している。

遺物はやや多く、上層から出土するものが多い。３～８の坩はいずれも完形に近く、Ｐ１・３の周辺から出土している。古墳時代中期の土師器壺、甕、高坏、大型坩、坩、手捏ねの破片が出土し、古墳時代前期のＳ字状口縁台付甕の破片が混入している。

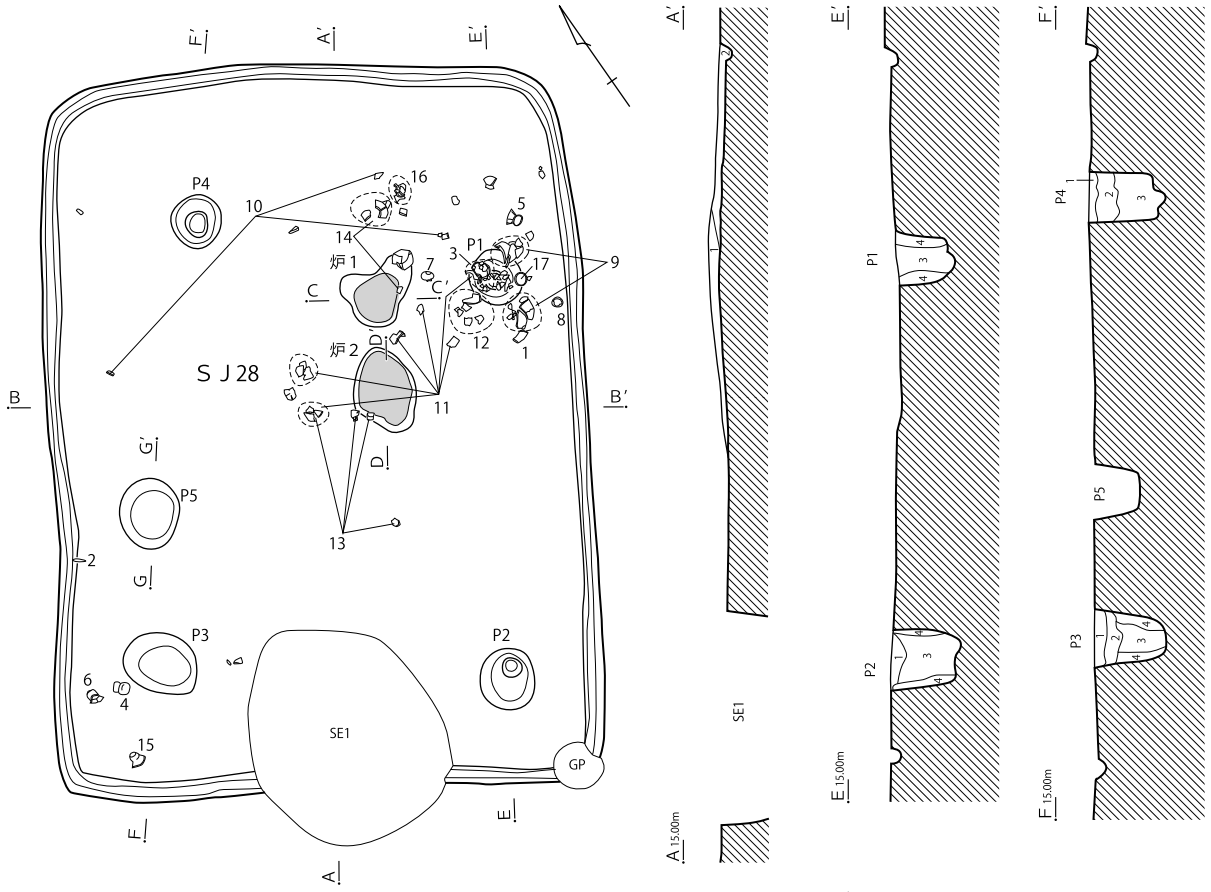
１・２は複合口縁壺の口縁部である。１の口縁部は短く、大きく外反する。口縁部の外周に粘土が貼付されて複合部とされている。頸部は締まらない。外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きの前に横ナデが加えられている。２は口縁端部に縄の押捺があるが、意図的かは不明である。

３は小型壺である。球形の胴部に若干内湾する口縁部が付く。剥離が著しい。

４～８は坩である。４・５・７・８は、扁平な体部にやや長い口縁部が付く。４はやや球形度合いが強く、底部が明瞭でない。外面の調整もヘラケズリで、他と異なる。５・７・８は器形、調整ともほぼ同様である。底面は小さく、若干凹んでいる。口縁部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ後ヘラ磨き。体部内面ヘラナデである。６は体部が菱形で、底部が大きく、口縁部がやや短い。内外面刷毛目後横ナデ、体部外面刷毛目後、底面ヘラナデが施されている。

９～11は甕である。器肉が厚い。口縁部は外反し、長胴で、頸部はあまり締まらない。胴部はヘラケズリだが、頸部に刷毛目が加えられている。内面はヘラナデで、９の見込み部分にはヘラ磨きが施されている。10の頸部内面には刷毛目が施されている。

12～16は高坏である。坏部は下位に稜を持っ



ＳＪ28
1　明褐色土　　やや砂質　焼土粒子少量
2　暗褐色土　　焼土粒子やや多量　炭化物粒子含む

炉1
1　赤褐色土　　焼土層　表面は硬化し、ブロック状
2　褐色土　　熱を受け、粘性なくパサつく

炉2
1　暗赤褐色土　焼土
2　暗褐色土　　焼土ブロック少量

Ｐ1～4
1　褐色土　　焼土・ロームブロック含む
2　明褐色土　焼土・炭化物粒子やや多量
3　暗褐色土　柱痕　ややしまり弱い　焼土粒子・炭化物粒子少量
4　褐色土　　暗褐色土ブロック含む　掘り方

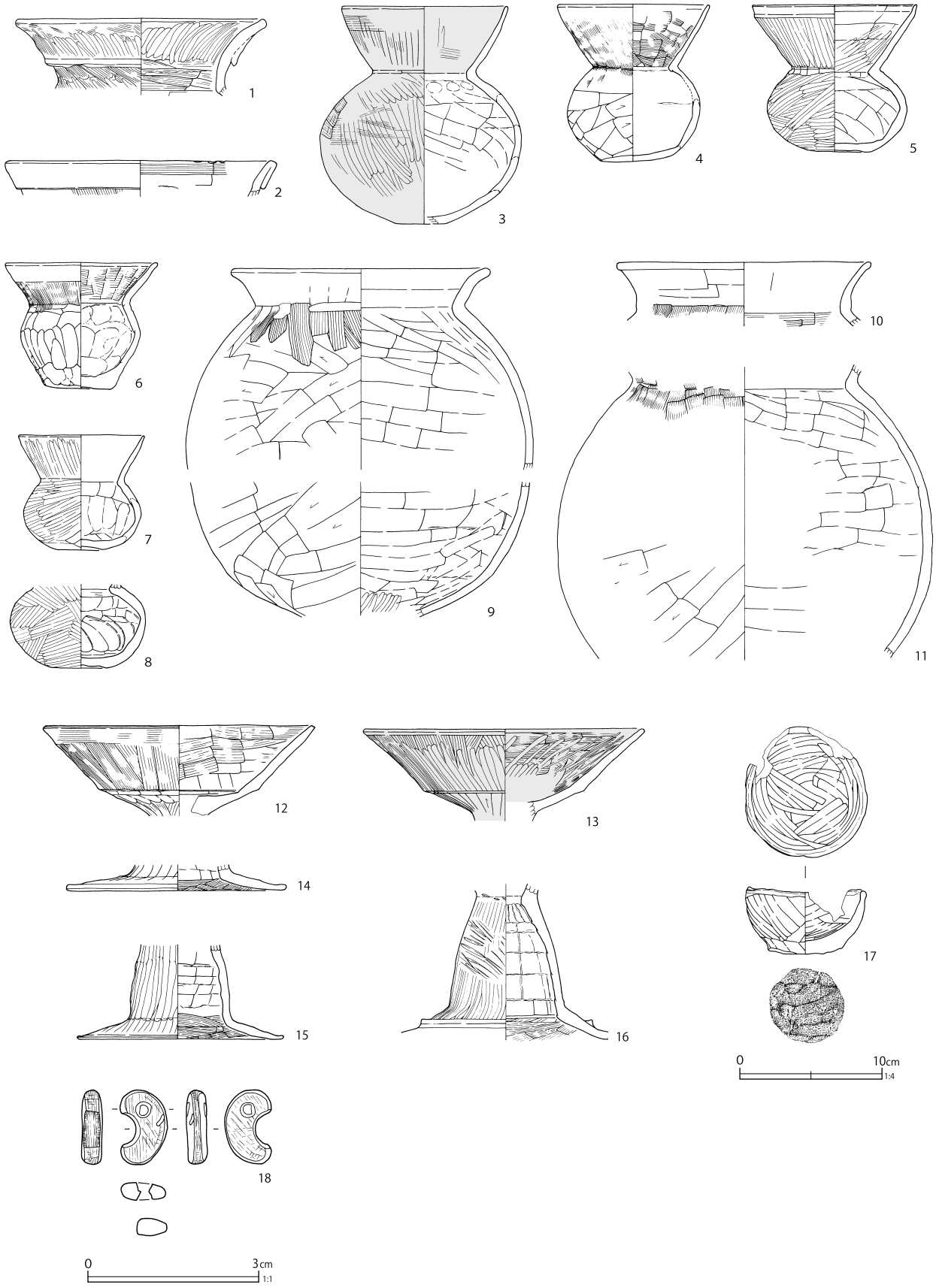
Ｐ5
1　暗褐色土　褐色粘土（地山）多量　粘性・しまり強い
2　暗褐色土　褐色粘土・ソフトローム多量　粘性・しまり強い
3　暗褐色土　褐色粘土・炭化物・焼土少量　粘性・しまり強い

第157図　第28号住居跡

て直線的に開き、脚部は中膨れの柱状である。裾部は16が段を持ち、その他は水平に開く。坏部は12が刷毛目後ナデ、13が刷毛目後ヘラ磨きである。柱状部は外面ヘラ磨き、内面絞り目や粘土の積み上げ痕にナデが加えられている。16の外面には断面Ｖ字の刃物痕が認められる。

17は手捏ねである。調整はナデ、もしくはヘラナデで、器面は凹凸が著しい。底面ヘラケズリ。

18は、小型の勾玉である。緑色の滑石製である。入念に整形されており、抉り部分は最後に仕上げられている。穿孔は両面穿孔で、孔内で互い違いになっている。



第158図　第28号住居跡出土遺物

第28表　第28号住居跡出土遺物観察表（第158図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.4)	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	明赤褐	№27	
2	土師器	壺	(18.3)	[2.4]	－	ＣＥＨＩＫ	15	普通	明赤褐	№５	151-3
3	土師器	小型壺	(11.6)	15.3	(3.5)	ＡＥＨＩＫ	70	普通	橙	外面・口縁部内面赤彩　№30	150-1
4	土師器	坩	10.6	11.0	5.1	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	にぶい橙	№２	150-2
5	土師器	坩	11.4	10.3	3.4	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙	内外面黒斑あり　№37	150-3
6	土師器	坩	10.5	8.9	4.8	ＡＣＥＨＩ	90	普通	橙	№１	150-4
7	土師器	坩	(8.8)	8.0	3.2	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	内面煤付着　№17	150-5
8	土師器	坩	－	[5.8]	3.8	ＡＣＨＩ	80	普通	黒褐	外面黒斑あり　№29	150-6
9	土師器	甕	(13.9)	[23.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	55	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№28・35	149-7
10	土師器	甕	(17.6)	[4.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい黄橙	№６・21・24	
11	土師器	甕	－	[15.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№10・12～14・25・30	151-1
12	土師器	高坏	(18.8)	[6.2]	－	ＡＥＨＩＪＫ	30	普通	にぶい黄橙	№26	150-8
13	土師器	高坏	(19.6)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面赤彩　№8・10・42・9	
14	土師器	高坏	－	[1.8]	15.5	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	暗褐	№15・18	
15	土師器	高坏	－	[6.6]	(14.4)	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	№４	150-9
16	土師器	高坏	－	[10.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい褐	№19	151-2
17	土師器	手捏ね	8.2	4.7	5.3	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	明赤褐	№33	150-7
18	石製品	勾玉	長さ1.3　幅0.8　厚さ0.4　孔径0.15～0.25　重さ0.5ｇ								219-9

本住居跡は古墳時代中期、５世紀前半から中葉、屋敷裏Ⅳ－１期である。

第 29 号住居跡（第 159 ～ 162 図）

Ａ区西側、Ｆ－８・９グリッドに位置する。第 40 号住居跡、第６号溝跡と重複し、本住居跡が新しい。第 40 号住居跡とほぼ同一の位置、軸方向で嵌まり込んだ状態である（第 76 図参照）。北カマドで、主軸方位はＮ－ 41°－Ｅである。

平面形は横長の長方形である。規模は、主軸方向 3.90 ｍ、直交軸方向 5.10 ｍである。深さは 0.40 ｍで、床面はほぼ平坦である。覆土は灰、炭化物、焼土、ロームブロックを含む暗灰褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土である。全体に灰、炭化物が多い。床面全体に薄い炭化物層が広がっていた。床面は若干凹凸があり、床面中央がやや凹んでいる。貼床、掘り方は検出できなかった。

カマドは北壁の中央で検出された。燃焼部は壁の中に収まり、煙道は長く突出している。袖を含む規模は長さ 1.20 ｍ、幅 0.40 ｍである。袖は明褐色土、暗褐色土、褐色土の貼り付けである。

燃焼部の覆土は第２・２′層が天井部崩落土、第３層が灰層と考えられる。火床面より、カマド袖内側、燃焼部奥壁の方が良く焼けていた。

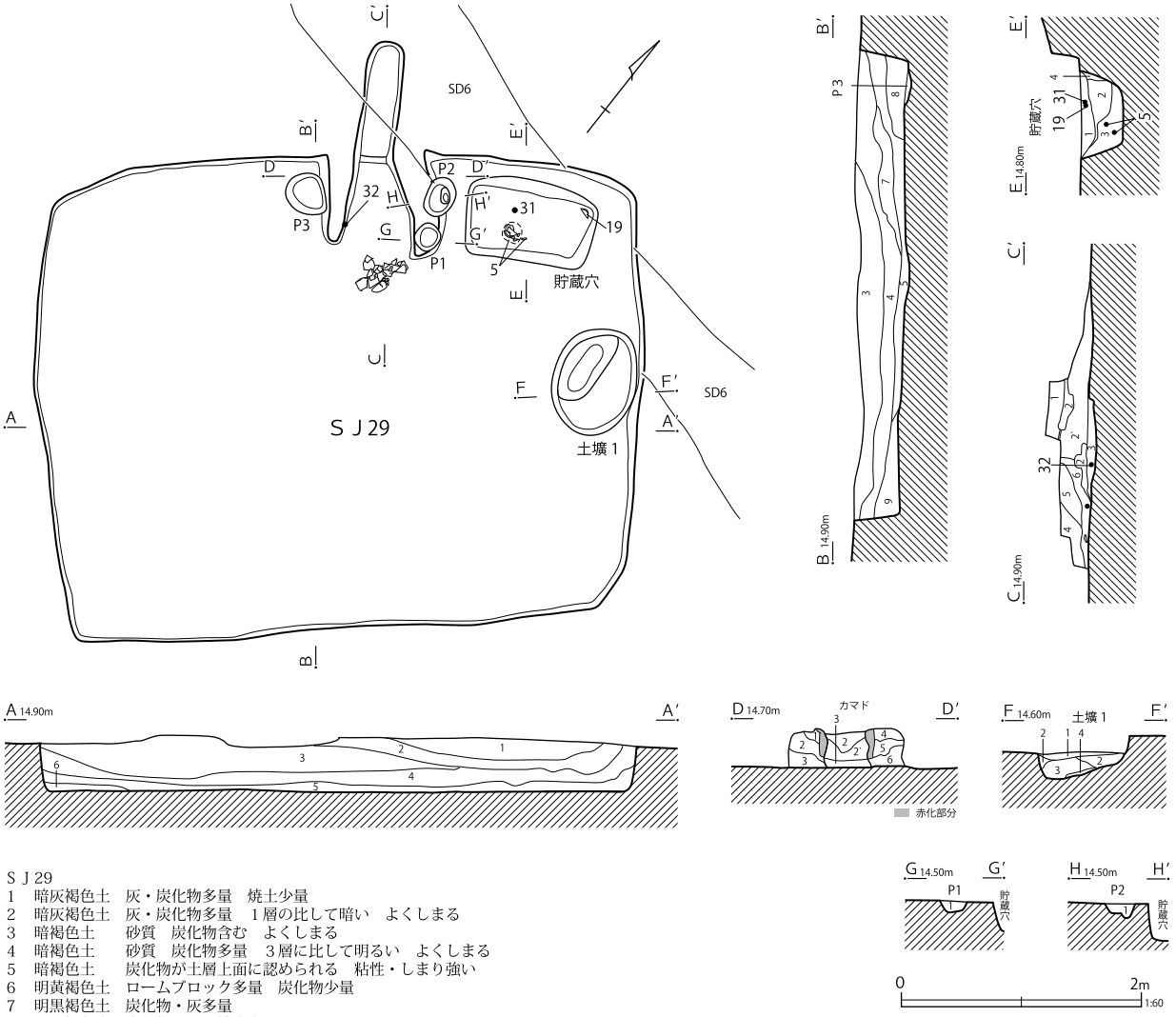
貯蔵穴は、カマド右側と壁の間に造られていた。長軸方向 1.05 ｍ、短軸方向径 0.60 ｍ、深さ 0.35 ｍである。覆土は焼土、褐色粘土、ロームブロックを含む褐色土、明褐色土、黒褐色土で、上層から土玉（31）、下層から土師器坏（５）が出土した。

ピットは３基検出された。いずれもカマドに接して造られており、カマド関連の施設と考えられる。規模は径 0.25 ～ 0.35 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.15 ｍである。覆土は焼土化したローム土、炭化物を含む黒褐色土である。Ｐ３は所謂灰溜りで、焼土、炭化物、灰が覆土となっていた。

土壙１は北東壁の中央で検出された。長辺 0.90 ｍ、短辺 0.70 ｍ、深さ 0.35 ｍの楕円形である。覆土は焼土ブロックを多く含む黒褐色土、明褐色土、暗褐色土で、埋め戻しである。

遺物は多く、古墳時代後期の須恵器坏、土師器坏、壺、甕、土製勾玉、羽口が出土した。古墳時代前期の壺、甕、小型甕、大型器台、駿河地方の大廓式壺の破片が混入している。

１～ 11 は坏である。全体に器形が低平で、口



ＳＪ29
1　暗灰褐色土　灰・炭化物多量　焼土少量
2　暗灰褐色土　灰・炭化物多量　１層の比して暗い　よくしまる
3　暗褐色土　砂質　炭化物含む　よくしまる
4　暗褐色土　砂質　炭化物多量　３層に比して明るい　よくしまる
5　暗褐色土　炭化物が土層上面に認められる　粘性・しまり強い
6　明黄褐色土　ロームブロック多量　炭化物少量
7　明黒褐色土　炭化物・灰多量
8　明黒褐色土　炭化物・灰・焼土多量
9　明黒褐色土　炭化物・焼土・ロームをブロック状に含む

カマド
1　明褐色土　地山天井部崩落土
2　赤褐色土　焼土ブロック
2’　暗褐色土　焼土ブロック多量　天井部崩落土
3　黒色土　灰層　焼土粒子・炭化物粒子多量
4　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子やや多
5　暗褐色土　炭化物粒子多量
6　褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量

カマド袖
1　明褐色土　焼土・炭化物含む　全体的に火熱を受けパサパサに変質
2　明褐色土　焼土・炭化物含む　褐色土（地山近似）主体
3　褐色土　焼土・炭化物少量　褐色土（地山近似）主体
4　明褐色土　焼土・炭化物含む　１層に近似
5　明褐色土　焼土・炭化物含む　粘性の強い褐色土（地山に近似）主体
6　褐色土　３層に近似

貯蔵穴
1　黒褐色土　褐色粘土・焼土・ロームブロック含む
2　明褐色土　褐色粘土主体　ロームブロック少量
3　明褐色土　褐色粘土主体　黒褐色土含む
4　褐色土　褐色粘土主体　ロームブロック少量　しまり強い

土壙１
1　黒褐色土　焼土ブロック少量
2　黒褐色土　焼土ブロック多量
3　明褐色土　粘土主体　焼土ブロックやや多
4　暗褐色土

Ｐ１
1　黒褐色土　赤化したロームブロック・炭化物多量

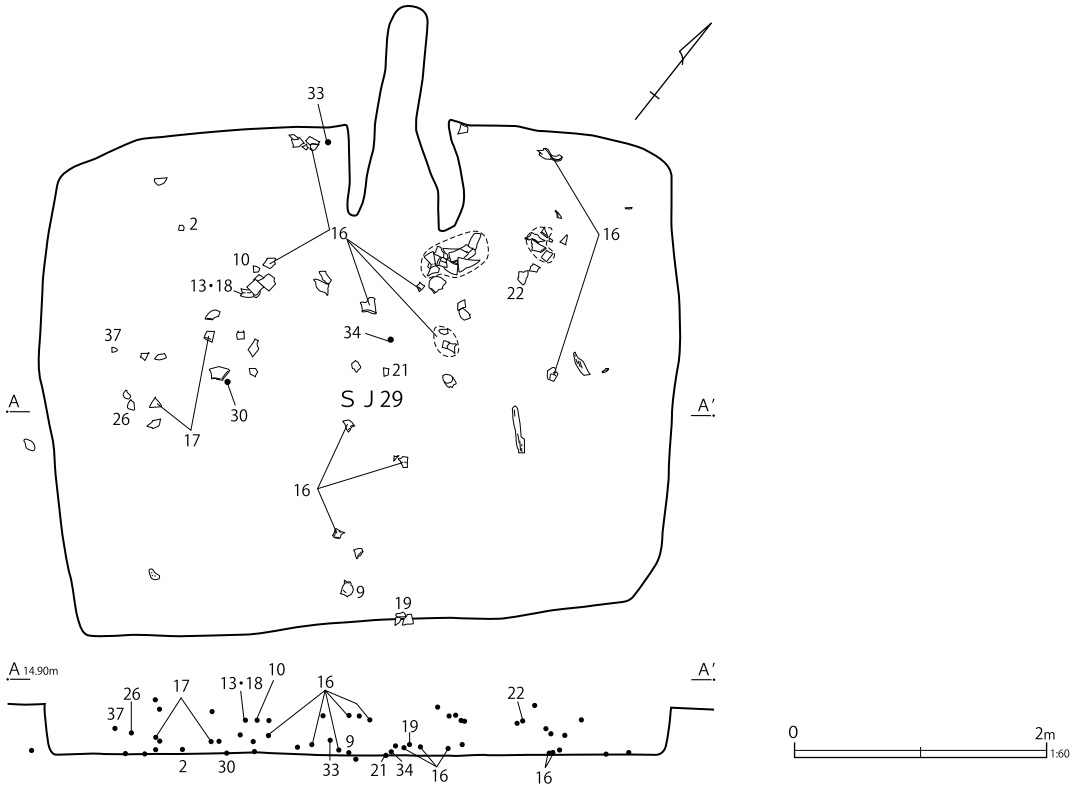
Ｐ２
1　黒褐色土　赤化した褐色土・ロームブロック・炭化物多量

第159図　第29号住居跡（１）

径には大小がある。１～４が坏身模倣坏、５が小針型坏、６～９が有段口縁坏、10が坏蓋模倣坏である。１・２・４・７・８・10は内外面黒色処理されている。６は内面のみに黒色処理が認められる。４は風化が進む。７の口縁部外面にはナデの抜け痕が見られる。11は灰白色を呈し、厚い。下野系の可能性が考えられる。

12～15は壺の口縁部から肩部にかけての破片で、胴部にやや張りがある。法量に大中小が認められる。12・13は口縁部が半ばまで直立した後開き、頸部に横方向のヘラケズリが施されている。

16は長甕で、全体に大きく歪んでいる。口縁



第160図　第29号住居跡（２）

部横ナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面斜め方向ヘラナデである。底面はヘラケズリである。

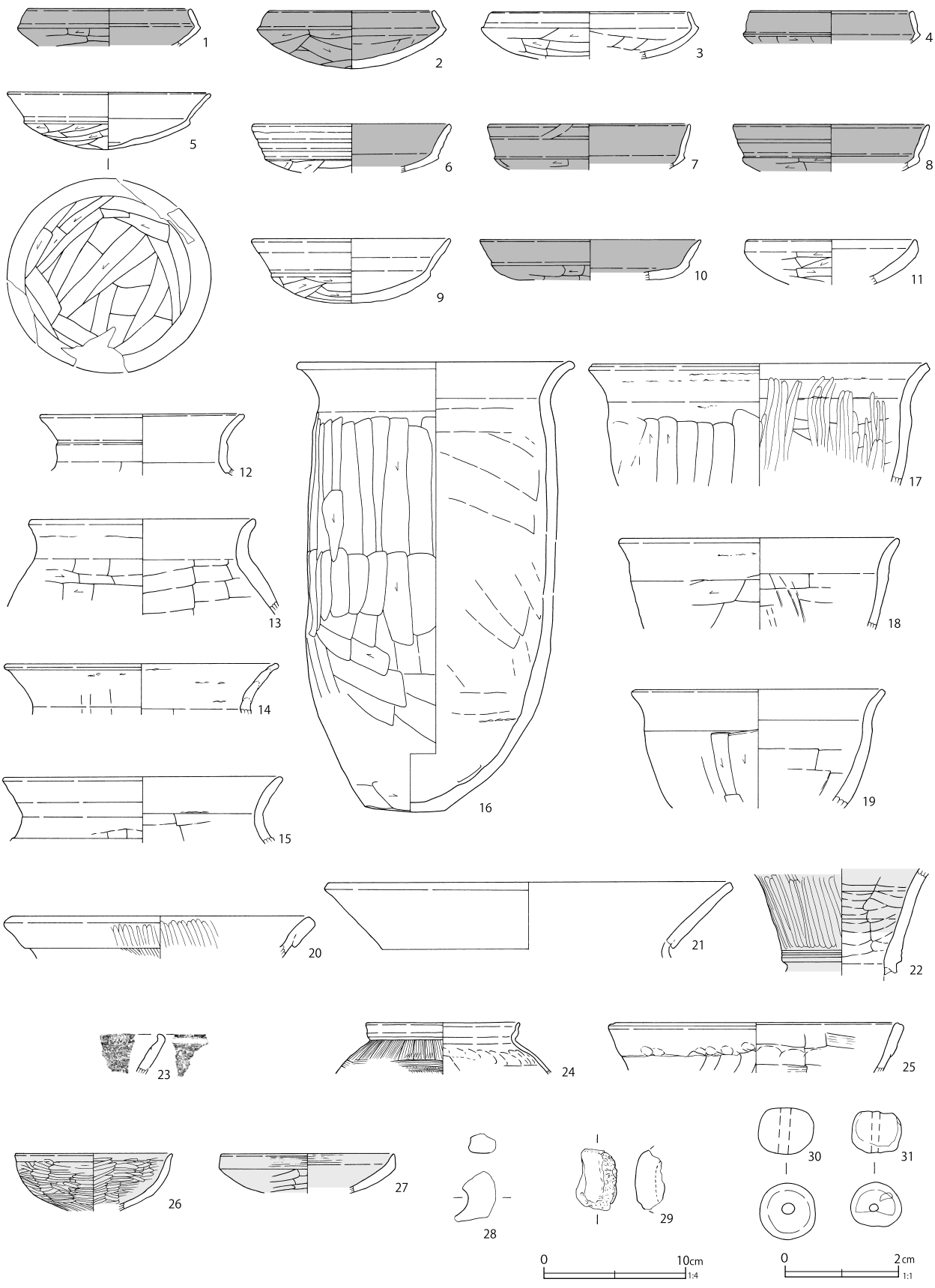
17 は甑である。砲弾形になるが、胴部は底部へかけて斜めにすぼまり、大型の鉢である可能性もある。径が大きく、組み合わせの甕も相当大型になると考えられる。粗いヘラ磨きが施されている。

18・19 は鉢である。大型で、器肉が厚い。口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。煤が付着するため甑としての使用も考えられる。

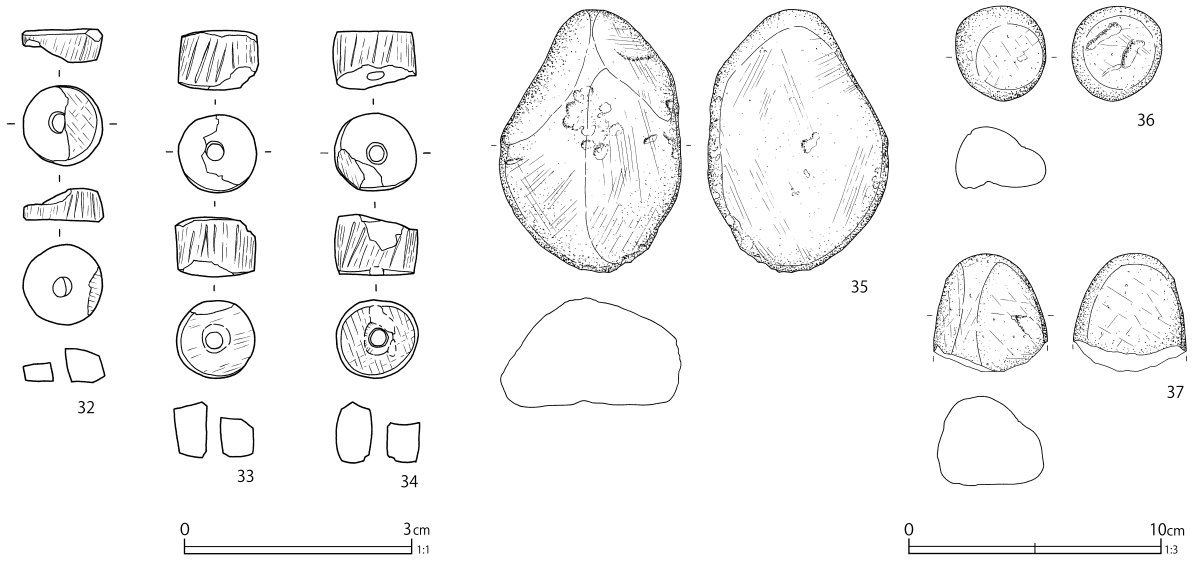
20 ～ 27 は古墳時代前期の混入品である。20 ～ 23 は壺である。20 は複合口縁壺、21 は二重口縁壺、22 は北陸から北近畿系の装飾壺である。23 は口縁内面に凹線が入り、他地域の系統と考えられるが故地は不明である。24 はＳ字状口縁台付甕である。やや小型で肩部には横方向の刷毛目が入る。25 は鉢形の甑である。複合口縁で複合部の下端は指頭によって潰されている。胴部外面はヘラナデである。内面は刷毛目後複合部の下端に対応する箇所に指オサエが加えられている。26 は鉢である。端部が埦状に外反する。内外面にヘラ磨きが密に施され、赤彩されている。27 は器台の器受部と考えられるが、径が大きく他器種の可能性もある。色調はほとんど白に近い。内外面に刷毛目が残り、外面にはヘラケズリが施されている。28 は多孔の甑の底部である。孔の部分のみが遺存し、周辺は欠失している。風化著しく、調整は不明である。

29 は小口径羽口である。外面は還元、発泡し、断面は層状に赤化している。粘土が精選されており、含有物が確認できない。

30・31 は土製の玉である。通常の漁具としての土玉と異なり、ガラス玉を模倣しているような形態である。全体にナデ調整で、双方とも黒褐色である。30 は若干赤が残り、赤彩されている可能性がある。31 は表面が発泡しており、多孔質



第161図　第29号住居跡出土遺物（1）



第162図　第29号住居跡出土遺物（２）

になっている。

32 ～ 34 は滑石製の臼玉である。石材は褐色を呈し、軟質である。円柱形に成形後輪切り状に切断、穿孔後平坦面が研磨されている。側縁には粗目の整形痕が見られる。片側穿孔である。

35 ～ 37 は、軽石製の砥石である。いずれも平坦面に僅かに擦痕が見られる。

本住居跡は６世紀後半､屋敷裏Ⅴ－３期である。

第 30 号住居跡（第 163 ～ 165 図）

Ｂ区西端、Ｇ・Ｈ－９グリッドに位置する。遺構の西側は排水溝、調査区域外にかかる。第 11 号溝跡と重複し、本住居跡が古い。北カマドで、主軸方位はＮ－ 26°－Ｅである。

平面形はカマドが壁の中央と仮定すると、横長の隅丸長方形と推定される。南壁の南東コーナー寄りに、東西 0.90 ｍ、南北 0.50 ｍの半円形の突出部がある。全体の規模は､遺存している範囲で、主軸方向 3.30 ｍ、直交軸方向 2.20 ｍである。深さは 0.45 ｍで、床面はほぼ平坦である。覆土は第４層が焼土、灰を多く含み、埋戻しの可能性がある。焼土、明褐色土、ローム土、灰色粘土を含む明褐色土、暗褐色土の自然堆積と考えられる。貼床、掘り方は検出できなかった。

南東部の突出部は、性格は不明だが覆土に灰色粘土を多く含み、何らかの施設であったと考えられる。

カマドは北壁で検出された。燃焼部は浅い土壙状を呈し、壁内に収まっている。煙道は突出すると考えられるが、排水溝際で、先端部は検出できなかった。検出できた長さは袖を含んで 1.20 ｍ、幅 0.40 ｍである。覆土は第 10 層が燃焼部天井部崩落土、第８・９層が煙道部天井部崩落土、第 11 層が灰層と考えられる。火床面、両壁面、煙道部壁面が焼けているが、火床面の焼土化の範囲は補強芯材の甕の間にとどまる。袖は粘土を含む暗褐色土が貼付けられ、14・16・17 の甕が芯材として用いられていた。燃焼部は長さ 0.95 ｍ、深さ 0.10 ｍの土壙状になっており、灰溜り状に灰層が被覆していた。煙道はこの部分から段を持って延びる。先端部は撹乱されていた。

ピットは１基検出された。長径 0.50 ｍ、短径 0.40 ｍ、深さ 0.15 ｍの浅い皿形である。覆土は焼土、炭化物、灰を多く含む。周辺から完形に近い甕が出土しており、カマドを壊した際に廃棄し

第29表　第29号住居跡出土遺物観察表（第161・162図）

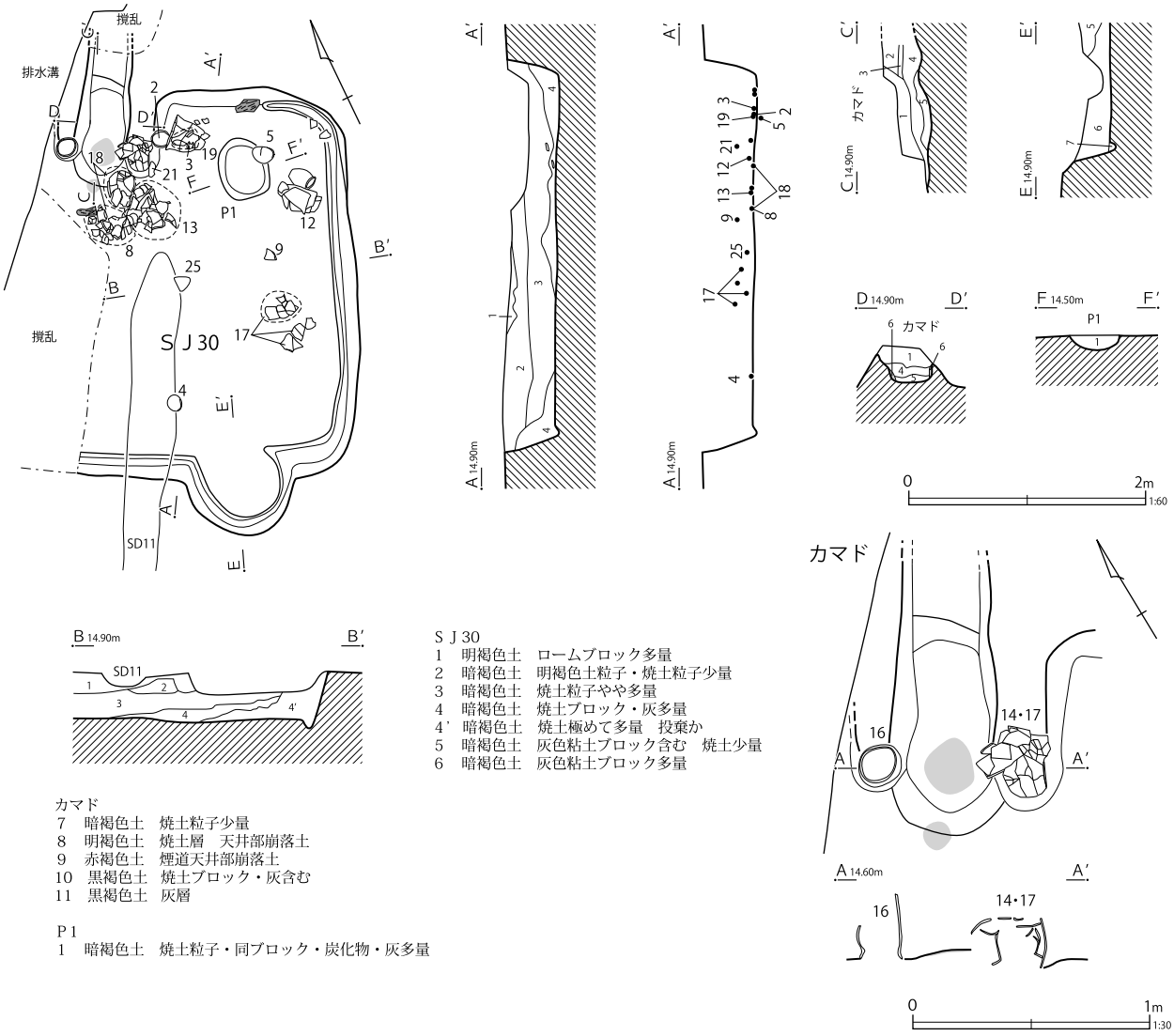
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.6)	(2.6)	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理	
2	土師器	坏	(11.8)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい褐	内外面黒色処理　№28	
3	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙		
4	土師器	坏	(11.5)	[2.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理	151-4
5	土師器	坏	14.0	4.0	－	ＡＣＨＩＫ	85	普通	橙	貯蔵穴№３	151-5
6	土師器	坏	(14.0)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内面黒色処理	
7	土師器	坏	(14.3)	[3.1]	－	ＡＣ	5	普通	橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　貯蔵穴	
8	土師器	坏	(13.9)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	暗褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
9	土師器	坏	(14.0)	4.5	－	ＡＣＨＩ	75	普通	橙	有段口縁坏　№２	151-6
10	土師器	坏	(15.6)	[2.8]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	褐灰	内外面黒色処理　№26	
11	土師器	坏	(11.8)	[3.1]	－	ＡＣＩ	10	普通	淡赤橙		
12	土師器	壺	(14.4)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
13	土師器	壺	(15.8)	[6.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№24	
14	土師器	壺	(19.2)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		
15	土師器	壺	(19.7)	[4.6]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
16	土師器	甕	19.0	32.0	5.6	ＣＥＦＨ	60	良好	灰黄	歪み大きい　№４・６・８・27・30・33・35・36・40・48　貯蔵穴№２　Ｐ９　カマド	151-7
17	土師器	甑	(23.8)	[8.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　№13・20	
18	土師器	鉢	(19.5)	[6.4]	－	ＡＣＨＩＪＫ	10	普通	にぶい赤褐	№24	
19	土師器	鉢	(17.4)	[8.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	5	普通	暗赤褐	内外面煤付着　№５	
20	土師器	壺	(21.0)	[2.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	橙		
21	土師器	壺	(28.6)	[4.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	二重口縁壺もしくは有段高坏　№２炉	
22	土師器	壺	－	[7.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№41	152-1
23	土師器	壺	－	[2.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	Ｐ６	
24	土師器	台付甕	(10.8)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		
25	土師器	甕	(20.0)	[3.5]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
26	土師器	鉢	(11.2)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№14	
27	土師器	器台	(12.2)	[2.8]	－	ＡＣＨＩ	15	普通	浅黄橙	内外面赤彩	
28	土師器	甑	縦[2.7]　厚さ[1.0]			ＨＩ	100	普通	にぶい黄橙	多孔甑	
29	土製品	羽口	長さ[2.9]　幅[4.3]　重さ16.1g			ＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		220-3
30	土製品	土錘	径1.0×0.95　高さ0.8　孔径0.2　重さ0.8g				100	普通	黒	土玉　下面赤彩あり　№10	218-17
31	土製品	土錘	径0.9×[0.8]　高さ0.7　孔径0.13　重さ0.4g				80	普通	黒	土玉　貯蔵穴№1	218-18
32	石製品	臼玉	長さ1.1　幅1.1　厚さ0.4　孔径0.2～0.3　重さ0.5g　滑石							カマド№2	219-10
33	石製品	臼玉	長さ1.0　幅1.0　厚さ0.8　孔径0.2～0.4　重さ1.3g　滑石							№53	219-11
34	石製品	臼玉	長さ1.1　幅1.1　厚さ0.8　孔径0.2～0.3　重さ1.3g　滑石							№34	219-12
35	石製品	砥石	長さ10.5　幅7.2　厚さ4.8　重さ155.2g　軽石							カマド	
36	石製品	砥石	長さ3.8　幅3.6　厚さ2.5　重さ14.8g　軽石								
37	石製品	砥石	長さ[4.7]　幅4.5　厚さ3.7　重さ35.8g　軽石							№17	

た可能性がある。

壁周溝は幅 0.10 ～ 0.25 m、深さ 0.05 m で、全周する。他の住居跡と異なり、南東コーナーの突出部にも周溝が巡っている。

遺物はやや多く、カマドとＰ１近辺の床面近くから出土したものが多い。古墳時代後期の、土師器坏、壺、甕の破片が出土し、古墳時代前期の壺、甕、鉢が混入している。

１は須恵器坏蓋である。器肌がなめらかでやや光沢がある。東海産の可能性がある。



SJ30
1　明褐色土　ロームブロック多量
2　暗褐色土　明褐色土粒子・焼土粒子少量
3　暗褐色土　焼土粒子やや多量
4　暗褐色土　焼土ブロック・灰多量
4'　暗褐色土　焼土極めて多量　投棄か
5　暗褐色土　灰色粘土ブロック含む　焼土少量
6　暗褐色土　灰色粘土ブロック多量

カマド
7　暗褐色土　焼土粒子少量
8　明褐色土　焼土層　天井部崩落土
9　赤褐色土　煙道天井部崩落土
10　黒褐色土　焼土ブロック・灰含む
11　黒褐色土　灰層

P1
1　暗褐色土　焼土粒子・同ブロック・炭化物・灰多量

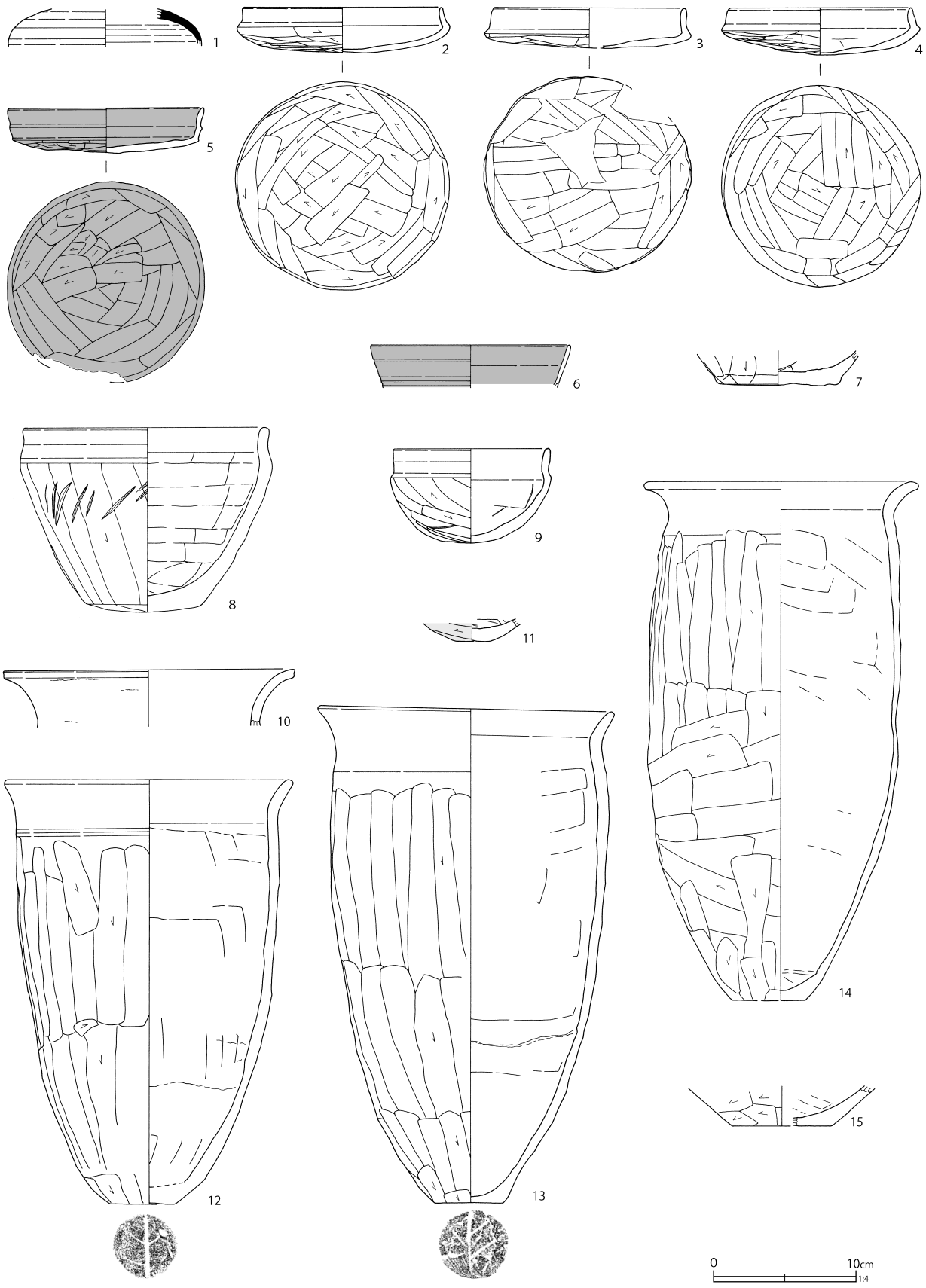
第163図　第30号住居跡

以下は土師器である。2～6は坏で、全体に口径が大きく、器形が低平である。口径には大小がある。2～4が坏身模倣坏、5・6が有段口縁坏である。5・6は内外面黒色処理されている。2もその可能性があるが確実でない。6は外面に光沢があり、胎土に針状物質を含む。

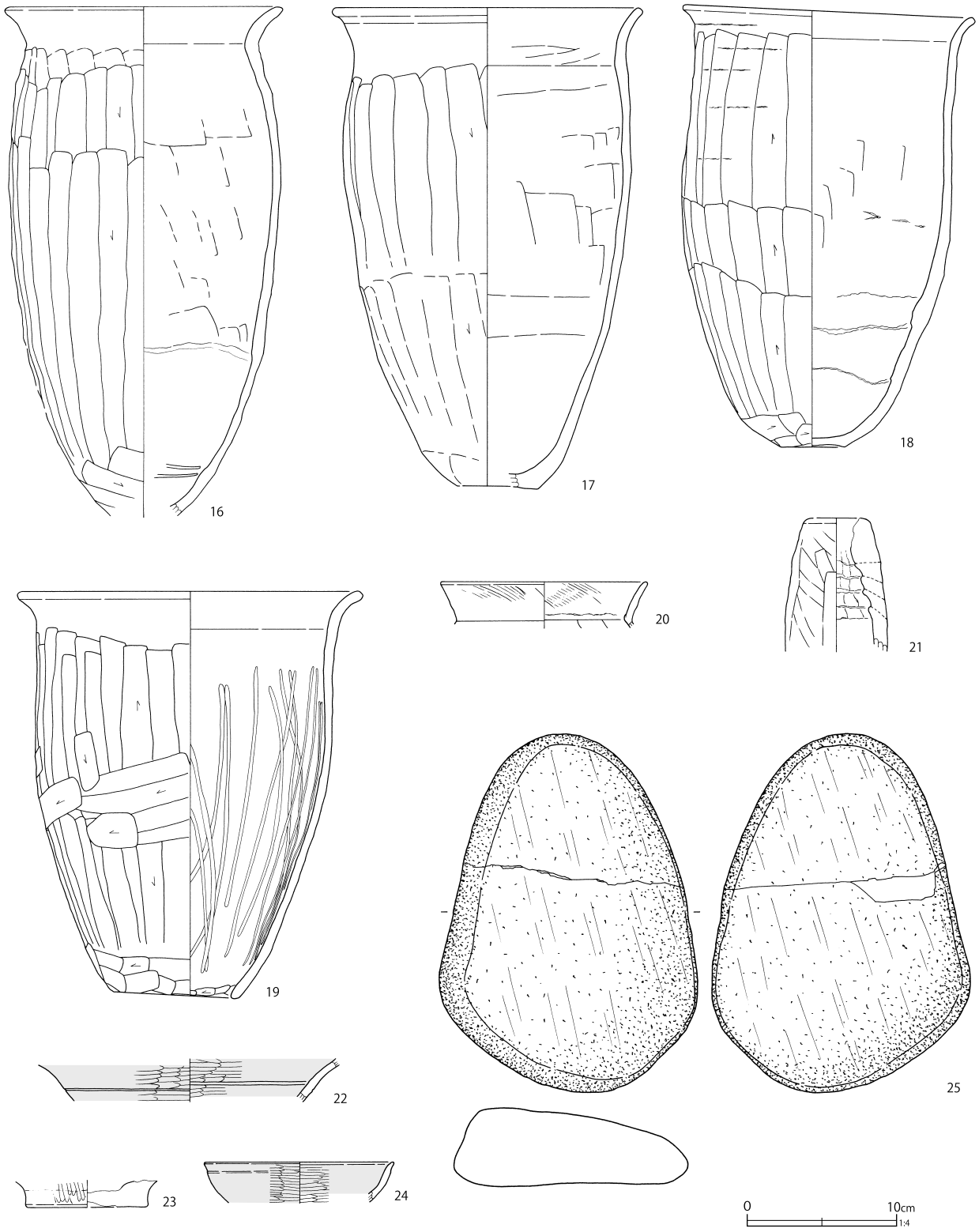
7は壺の底部である。外面、底面にはヘラケズリが施されている。8・9・11は鉢である。8の外面には刃物痕が入る。傷みが著しく、ボロボロである。9は凹凸が著しい。11は小型で、外面が赤彩されている。

10・12～18は甕である。10はヘラ磨きが施されている可能性があるが判然としない。壺の可能性があるが、内外面に煤が付着し、甕として使用されている。15はやや広がりのある底部で、壺の可能性がある。他は長甕である。12・13は底面に木葉痕が認められる。12は見込み部分が剥落、14は同じ個所に強いヘラナデによる段が認められる。16は口縁部の横ナデが強く、端部直下が凹んでいる。17は口縁部が大きく歪んでいる。18は粘土の積み上げ痕が多く残り、底部がごく薄くなっている。

19は甑である。所謂砲弾形で、外面は中位に横方向のヘラケズリが加えられている。内面粗いヘラ磨き。底面の孔の部分には細かなヘラケズリが入れられている。



第164図　第30号住居跡出土遺物（1）



第165図　第30号住居跡出土遺物（２）

第30表　第30号住居跡出土遺物観察表（第164･165図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	－	[2.6]	－	ＡＩＪＫ	15	良好	灰	西毛産か	
2	土師器	坏	13.7	2.7	－	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	№14	152-3
3	土師器	坏	13.2	2.9	－	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理の可能性あり　№20	152-4
4	土師器	坏	12.6	3.2	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	100	普通	にぶい赤褐	№１	152-5
5	土師器	坏	13.8	3.1	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	灰褐	有段口縁坏　内外面黒色処理　№11	153-1
6	土師器	坏	(14.1)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＪ	15	普通	黒褐	有段口縁坏　内外面黒色処理	
7	土師器	壺	－	[2.4]	(8.4)	ＡＣＩＫ	30	普通	褐灰		
8	土師器	鉢	17.0	12.8	8.1	ＣＨＩＫ	75	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№16　Ｐ１	152-2
9	土師器	鉢	(11.0)	6.5	－	ＡＣＥＧＨＩＫ	65	普通	にぶい褐	下半全体黒斑　№７	155-1
10	土師器	甕	(20.4)	[3.9]	－	ＡＣＤＥＨＫ	10	普通	明褐灰	内外面煤付着	
11	土師器	鉢	－	[1.6]	2.5	ＡＥＨＩＪＫ	80	普通	浅黄橙	外面赤彩	
12	土師器	甕	19.5	30.0	4.5	ＣＤＥＦＧＨ	80	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕　№８	153-2
13	土師器	甕	20.2	35.2	4.8	ＣＥＦＧ	80	普通	灰黄褐	底部木葉痕　№17	153-3
14	土師器	甕	18.4	36.6	(5.0)	ＣＤＥＦＨ	70	普通	明赤褐	カマド№22・23	153-4
15	土師器	甕	－	[2.8]	(7.0)	ＡＣＩＫ	30	普通	浅黄		
16	土師器	甕	17.9	[34.3]	－	ＣＥＦＧＨ	80	普通	にぶい褐	カマド№21	154-1
17	土師器	甕	20.1	32.4	(5.3)	ＣＤＥＨ	80	普通	にぶい黄橙	№３・４・５・22　カマド	154-2
18	土師器	甕	19.2	29.9	4.2	ＣＤＥ	80	普通	にぶい黄橙	全体に歪みあり　№16・18	154-3
19	土師器	甑	22.4	27.4	7.5	ＣＥＨＩＫ	95	良好	にぶい黄橙	№13	154-4
20	土師器	甕	(13.8)	[3.0]	－	ＡＥＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
21	土製品	支脚	－	[8.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№15	
22	土師器	壺	－	[2.8]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	赤	内外面赤彩	
23	土師器	壺	－	[1.8]	(8.0)	ＡＥＦＨＩＫ	25	普通	灰白		
24	土師器	鉢	(12.7)	[2.6]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
25	石製品	石皿	長さ24.1　幅17.3　厚さ5.7　重さ1024.4ｇ　閃緑岩							№２　SJ22№６と接合	

20・22～24は古墳時代前期の混入品である。22は薄手の壺の口縁部で、内外面の中央に段が入る。非常に丁寧なヘラ磨きが施されている。24も同様に密なヘラ磨きが施されている。

21は支脚である。外面はヘラケズリに近いヘラナデが施され、内面は積み上げ痕がナデつけられている。被熱による傷みが著しい。

25は閃緑岩製の石皿である。第22号住居跡出土の破片と接合するが、出土状況から本住居跡に帰属すると考えられる。皿部は平坦で、摩耗している。

本住居跡は６世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅴ－３期である。

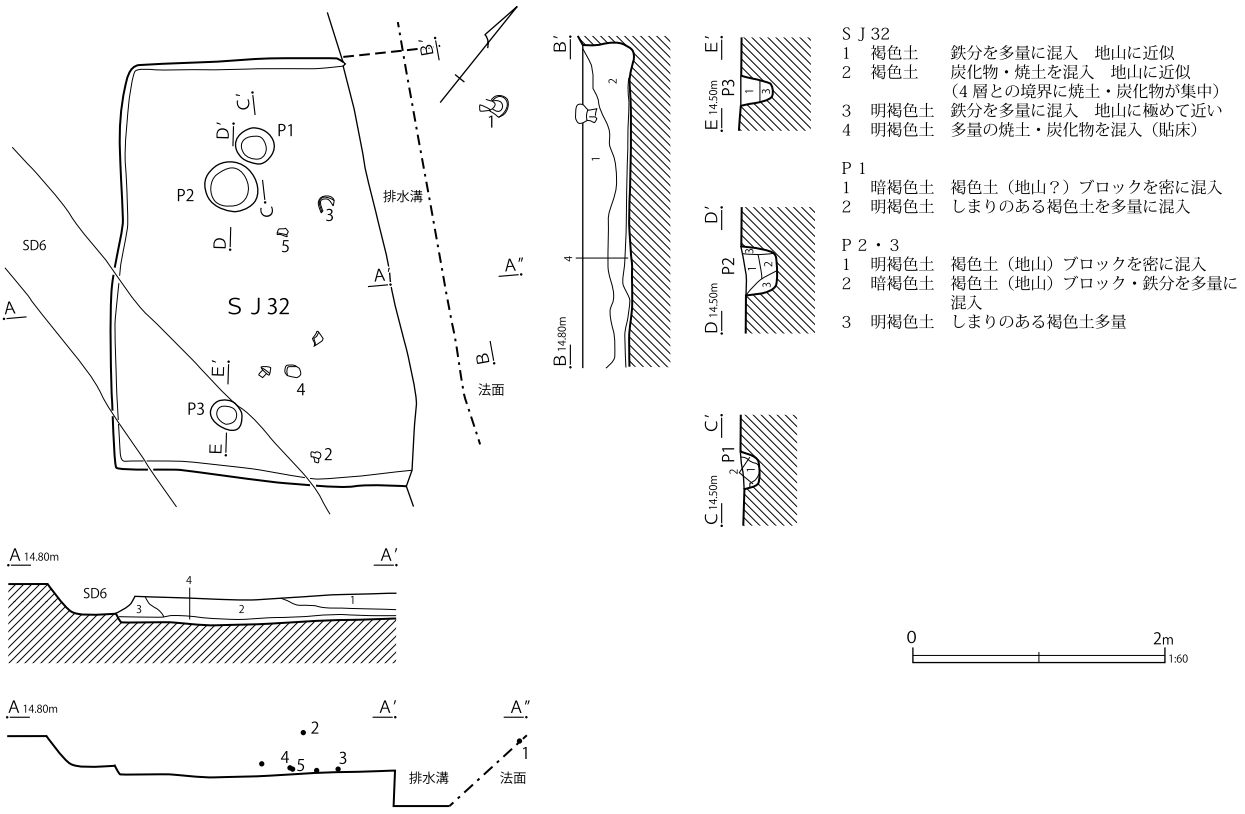
第32号住居跡（第166・167図）

Ｂ区の中央、Ｇ・Ｈ－11グリッドに位置する。第６号溝跡と重複し、本遺構が古い。北東側は調査区域外にかかる。検出範囲の長軸方向を主軸とすると、Ｎ－38°－Ｗが主軸方位となる。

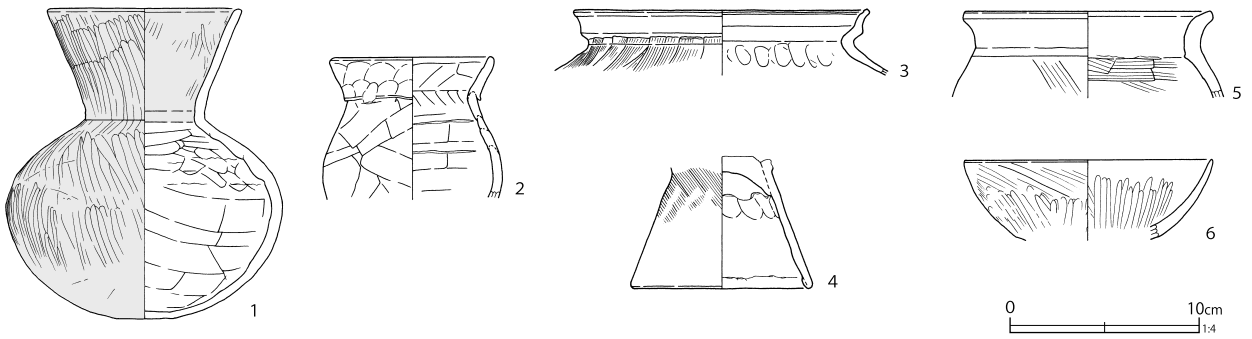
調査区内の平面形は方形で、各辺は直線的である。規模は主軸方向3.40ｍ、直交軸方向2.40ｍである。深さは0.20ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む明褐色土、褐色土で、自然堆積と考えられる。床面は若干凹凸があり、明褐色土の厚さ２～３cmの薄い貼り床が施されていた。

床面からはピットが検出された。炉跡は検出されず、調査区域外にあると推定される。

ピットは３本が検出された。Ｐ１は規模が小さく、径0.30ｍ、深さ0.15ｍで、地山土をブロック状に多く含み、埋戻しと考えられる。規模は異なるがＰ２・３は壁に対して平行に並んでおり、主柱穴である可能性が高い。Ｐ２は長径0.45ｍ、短径0.35ｍ、深さ0.25ｍ、Ｐ３は長径0.25ｍ、短径0.20ｍ、深さ0.25ｍ、第１・２層が柱抜き取り後の流入土、第３層が柱掘り方の充填土と考



第166図　第32号住居跡



第167図　第32号住居跡出土遺物

第31表　第32号住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	10.0	16.2	3.0	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	外面・口縁部内面赤彩　№７	155-2
2	土師器	小型壺	(8.2)	[7.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№１	
3	土師器	台付甕	(15.6)	[3.3]	－	ＡＥＨＫ	50	普通	にぶい黄橙	№６	
4	土師器	台付甕	－	[6.9]	(9.2)	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	橙	内外面煤付着　№２	155-5
5	土師器	小型甕	(13.0)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	褐灰	北陸系か　№５	
6	土師器	鉢	(13.0)	[4.2]	－	ＡＣＥＩ	30	普通	灰白		

えられる。

遺物は少なく、住居中央寄りの床面から若干浮いた状態で出土している。古墳時代前期の土師器壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、鉢の破片が出土している。

１・２は小型壺である。１は底部が小さく、丸

底に近い。口縁部は長く、頸部はあまり締まらない。外面全体ヘラ磨き、胴部内面ヘラナデ。風化が著しく、調整は不明瞭である。２はナデ肩の小型壺で、口縁部接合の際に接合に不具合があり、開裂痕が認められ、指オサエが多く残されている。胴部外面ヘラナデが施されている。

３・４はＳ字状口縁台付甕である。４の脚台部は胴部との接合部に砂を混ぜた粘土が充填されている。５は小型の甕である。口縁部が厚く、大きく外反する。北陸系か。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面刷毛目が施されている。

６は鉢としたが、高坏の坏部の可能性もある。外面刷毛目後ヘラ磨き、内面ヘラ磨きである。

本住居跡は４世紀後半、屋敷裏Ⅲ－４期である。

第 33 号住居跡（第 168・169 図）

Ｂ区の中央、Ｅ・Ｆ－７グリッドに位置する。第２号井戸跡と重複し、本遺構が古い。炉が北西側にあることから、北西－南東方向、Ｎ－ 44°－Ｗが主軸方位と考えられる。

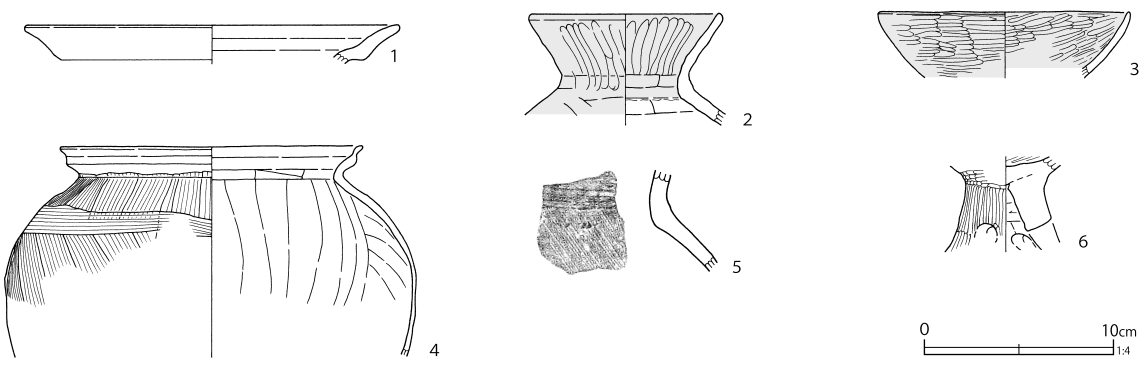
平面形は隅丸長方形で、各辺は直線的である。規模は、主軸方向 5.65 ｍ、直交軸方向 4.05 ｍである。深さは 0.30 ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面は全体に炭化物が分布し、若干凹凸であった。貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは炉跡、ピットが検出された。炉跡は中央よりやや西側に縦に２基並ぶ形で検出された。建て替えの可能性がある。炉１は長径 0.65 ｍ、短径 0.45 ｍ、深さ 0.05 ｍで、焼土層が検出された。炉２は径 0.33 ｍ、深さ 0.10 ｍで、焼土層が検出された。炉１は１層上面、炉２は第２層が火床面と考えられる。

ピットは２基検出された。規模は小さいが、位置的に主柱穴である可能性が高い。Ｐ１は径 0.20 ｍ、深さ 0.15 ｍ、Ｐ２は径 0.20 ｍ、深さ 0.30 ｍである。覆土は褐色土、明褐色土である。

遺物はやや少なく、２層中から、古墳時代前期の壺、台付甕、高坏の破片が出土している。

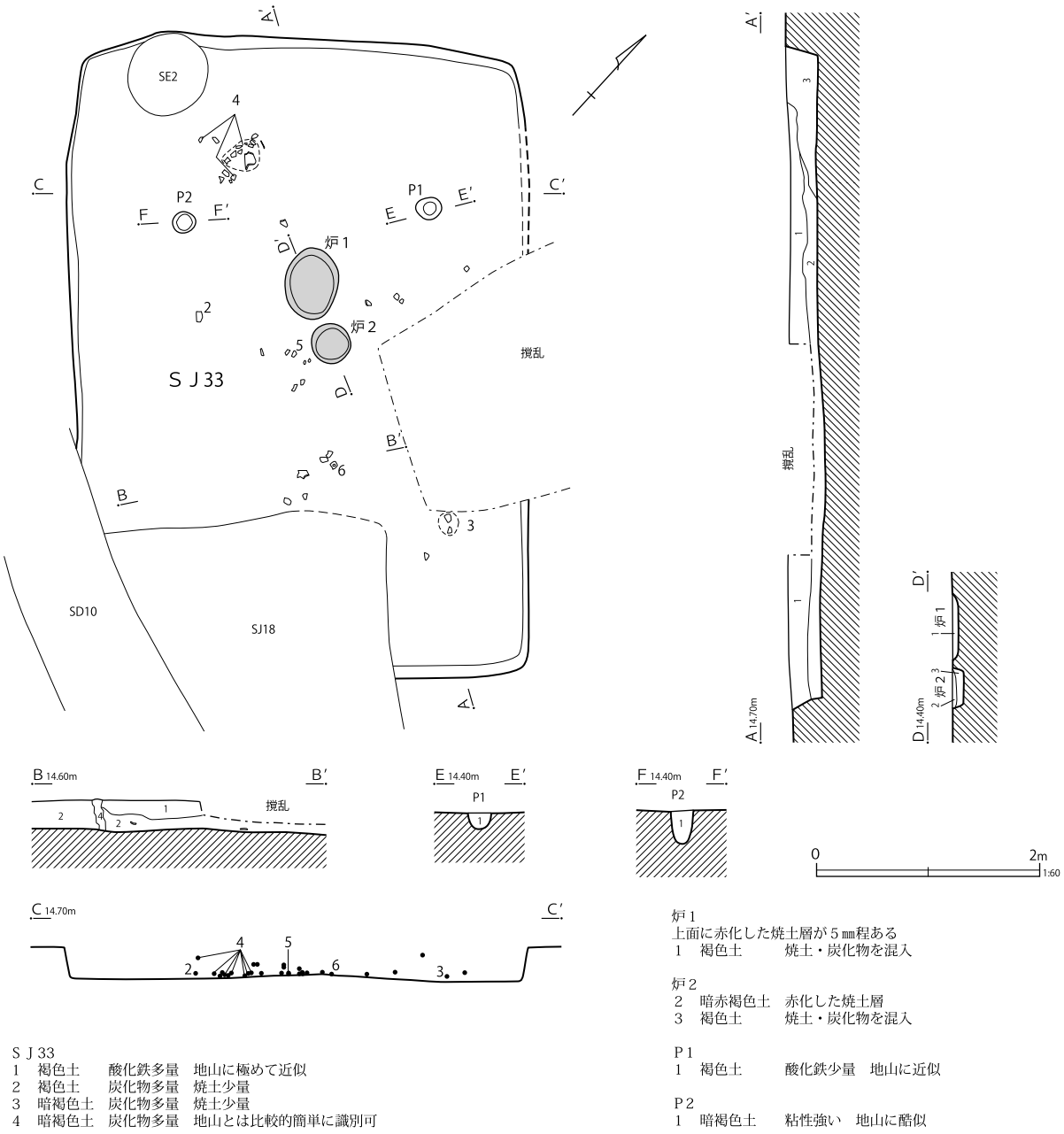
１は二重口縁壺の口縁端部と考えられる。外面は暗褐色を呈し、内外面横ナデが施されている。



第168図　第33号住居跡出土遺物

第32表　第33号住居跡出土遺物観察表（第168図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(19.4)	[2.0]	－	ＣＥＨＩ	5	普通	灰黄褐	外面煤付着	
2	土師器	壺	(10.0)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№16	155-3
3	土師器	鉢	(13.2)	[3.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	内外面赤彩　№27	
4	土師器	台付甕	(16.0)	[11.0]	－	ＡＣＥＧＨＩＫ	20	普通	明黄褐	内外面煤付着　№１・４～７・10・12	155-4
5	土師器	甕	－	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩ	5	普通	浅黄橙	外面煤付着　№19	
6	土師器	高坏	－	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	№23	155-6



ＳＪ33
1　褐色土　　酸化鉄多量　地山に極めて近似
2　褐色土　　炭化物多量　焼土少量
3　暗褐色土　炭化物多量　焼土少量
4　暗褐色土　炭化物多量　地山とは比較的簡単に識別可

炉１
上面に赤化した焼土層が５㎜程ある
1　褐色土　　焼土・炭化物を混入

炉２
2　暗赤褐色土　赤化した焼土層
3　褐色土　　焼土・炭化物を混入

Ｐ１
1　褐色土　　酸化鉄少量　地山に近似

Ｐ２
1　暗褐色土　　粘性強い　地山に酷似

第169図　第33号住居跡

２はやや小型の直口縁壺である。口縁部内外面ヘラ磨き、胴部内外面ヘラナデが施されている。

３は鉢としたが、高坏の坏部の可能性もある。内外面丁寧なヘラ磨きが施されている。

４はＳ字状口縁台付甕である。胴部外面の刷毛目はヘラケズリに近い。横刷毛は胴部の刷毛目とは異なっており、幅のやや狭い工具により２周施されている。

５は甕の頸部で、径が大きく厚手の個体と考えられる。口縁部は強い横ナデ、肩部には細かい刷毛目が施されている。大型の単口縁甕の口縁部と考えられる。

６は高坏で、２個一対の透孔が３単位開けられ、特異である。外面ヘラ磨き、内面ヘラケズリ。

本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第 34 号住居跡（第 170 ～ 172 図）

Ｂ区の東側、Ｈ・Ｉ－11・12グリッドに位置する。第36・37号住居跡、第４号畠跡と重複し、各遺構より本住居跡が古い。撹乱によって南東壁が壊されている。炉が西側にあることから、北西－南東方向、Ｎ－44°－Ｗが主軸方位と考えられる。

平面形は長方形で、各辺は若干丸みを帯びている。規模は、主軸方向4.50ｍ、直交軸方向4.05ｍである。深さは0.15ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土、明褐色土で、自然堆積と考えられる。床面は若干凹凸があった。貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは炉跡、壁周溝が検出された。炉跡は中央より西側から検出された。長径0.55ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.15ｍで、第１層上面が火床面、第２層が掘り方と考えられる。

壁周溝は幅0.05～0.15ｍ、深さ0.05ｍで、全周する。

遺物はやや多く、西コーナーと遺構の南東側を中心に、床面と上層から出土した。特に南東側に集中する。器種は古墳時代前期の壺、台付甕、甕、高坏、坩である。いずれも完形率が高い。

１は複合口縁壺である。口縁部は短めで外反する。口縁部外周に粘土を貼付し、強く横ナデが加えられて複合部が作出されており、下端は不明瞭である。頸部の括れはやや強く、胴部は球形胴である。調整は下地の刷毛目にヘラ磨きが加えられている。ヘラ磨きは粗密がある。

２～９はＳ字状口縁台付甕である。基本的な調整は第24号住居跡出土のものと同様である。２は頸部近くに横刷毛が、幅狭の工具により施されている。４は胴部刷毛目の重複方向が異なっており、上位と下位で、ひっくり返して刷毛目を施した可能性がある。内面下半には幅広のヘラナデが施されている。器肉が厚く、他のＳ字状口縁台付甕とは印象を異にする。

11は坩である。内外面ともヘラ磨きが施されているが、風化のためほとんど確認できない。器肉が非常に薄く軽量である。底部には内側からの焼成後穿孔が施されている。

10・12は長胴の甕である。口縁部は直線的、端部は尖り気味である。頸部は括れが強い。全体が刷毛目調整で、工具には広狭がある。12の口縁部内面はヘラ磨きである。

13は球形胴の甕である。口縁部はくの字で端部は丸く収められている。内外面とも刷毛目後横ナデ。胴部内面は非常に亀裂が多い。外面の上半には粘土が一枚着せられ、横方向の刷毛目が施されている。下地の調整はヘラケズリである。

14は鉢である。器種は広口壺とも言い得る。球形胴でくの字接合、外面全体と口縁部内面は刷毛目後ヘラ磨きが施されている。底面もヘラ磨きである。胴部内面ヘラナデ。

15・16は高坏である。15は直線的にハの字状に開く。内外面ヘラ磨きが施されている。16はハの字状に開き、端部のみが更に外側に広げられている。透孔は４孔である。脚部内面には絞り目が残り、ヘラ磨きに近い丁寧なヘラナデによってナデ消されている。

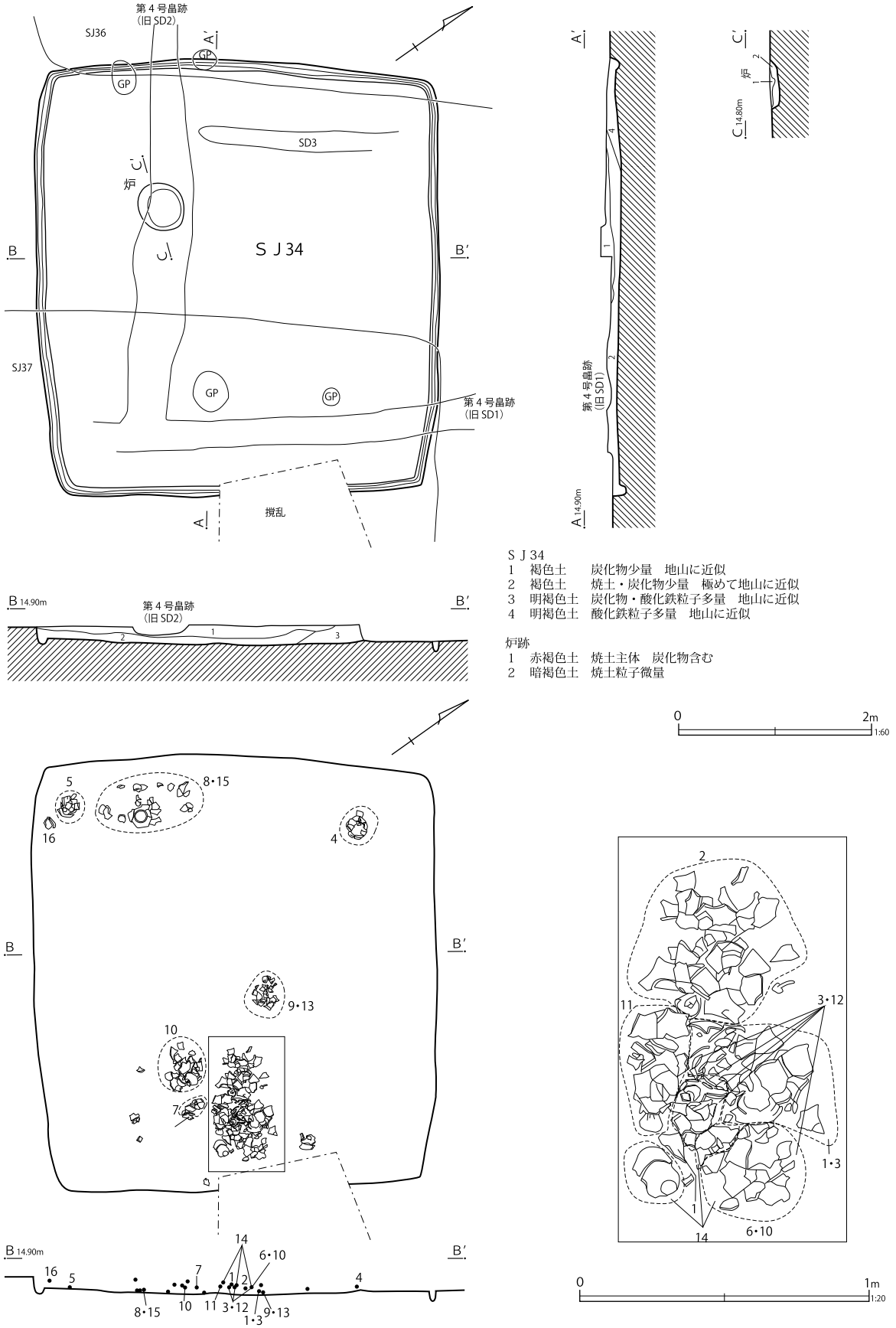
本住居跡の時期は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第35号住居跡（第173・174図）

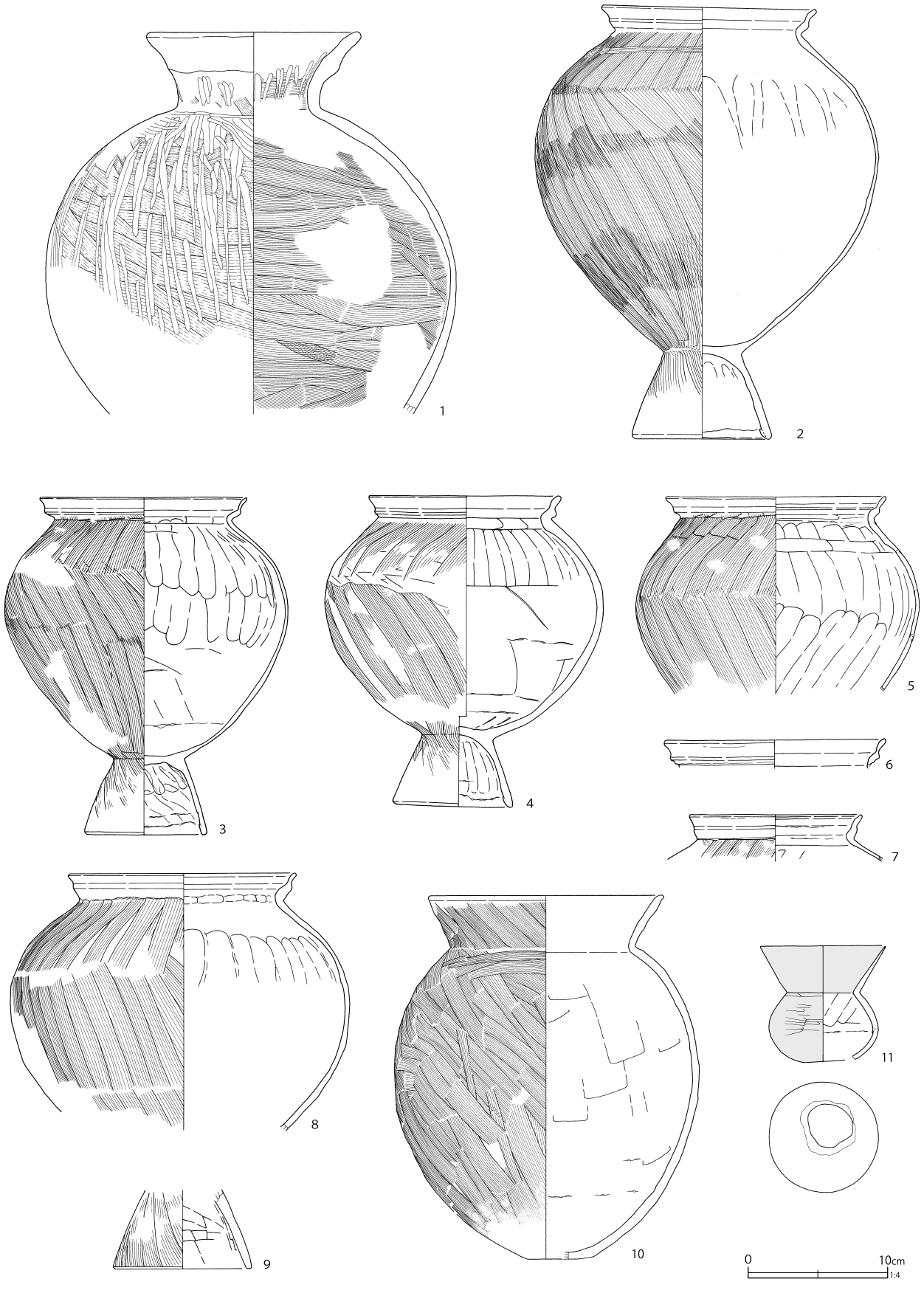
Ｂ区の中央南側、Ｉ－10グリッドに位置する。遺構の大部分が南側の調査区域外にかかり、北コーナー周辺が検出できたのみである。検出範囲の長軸を主軸とすると、南北方向、Ｎ－25°－Ｗが主軸方位となる。

検出範囲の平面形は隅丸方形で、各辺は若干丸みを帯びている。検出できた規模は、長軸方向3.00ｍ、直交軸方向1.65ｍである。深さは0.35ｍである。覆土は焼土、炭化物、褐色土ブロックを含む褐色土、暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積と考えられる。

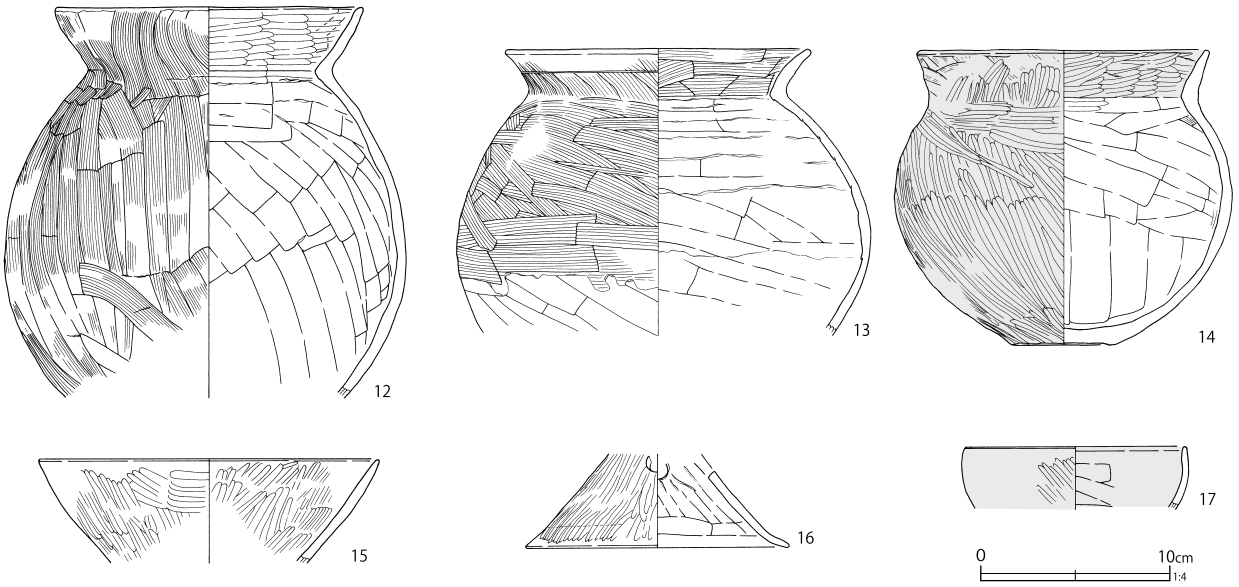
床面は若干凹凸があり、全体に炭化物が薄く広



第170図　第34号住居跡



第171図　第34号住居跡出土遺物（1）



第172図　第34号住居跡出土遺物（２）

第33表　第34号住居跡出土遺物観察表（第171･172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	15.0	[27.3]	－	ＤＥＫ	75	普通	にぶい黄橙	№20・21	156-1
2	土師器	台付甕	15.0	31.2	9.4	ＣＤＥＨ	80	普通	黒褐	№11	156-2
3	土師器	台付甕	(14.6)	24.5	8.5	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№21～23・26	156-4
4	土師器	台付甕	13.2	22.6	8.2	ＡＣＨＩＫ	85	普通	にぶい黄橙	№４	156-5
5	土師器	台付甕	15.8	[14.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№２	156-3
6	土師器	台付甕	(15.8)	[2.1]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№26	
7	土師器	台付甕	(12.4)	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№18	
8	土師器	台付甕	16.2	[18.3]	－	ＥＨＩ	80	普通	にぶい黄橙	№３	156-6
9	土師器	台付甕	－	[5.6]	9.6	ＡＣＨＩ	80	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№５	155-7
10	土師器	甕	16.6	26.0	(5.0)	ＣＤＥＨ	80	普通	灰黄褐	№16・26	157-1
11	土師器	坩	(9.0)	[8.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	外面・口縁部内面赤彩　底部穿孔　№24	155-9
12	土師器	甕	16.2	[20.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№22・23・26	157-2
13	土師器	甕	15.8	[15.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№５	157-3
14	土師器	鉢	(15.1)	15.5	5.6	ＡＣＤＥＩＪＫ	70	普通	灰褐	内外面煤付着　外面・口縁部内面赤彩　№19・25・26	157-4
15	土師器	高坏	(17.9)	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰褐	№３	
16	土師器	高坏	－	[4.9]	13.8	ＡＣＨＩＫ	65	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№１	155-8
17	土師器	鉢	(11.8)	[3.3]	－	ＥＨＫ	5	普通	にぶい橙	内外面赤彩	

がっていた。貼床、掘り方は認められなかった。

遺物は少なく、古墳時代前期の壺、甕、高坏の破片が中層から出土した。

１はＳ字状口縁台付甕である。小破片のため詳細は不明だが、器肉が厚くしっかりした印象を受ける。２は端部に面を持ち、断面形が四角形になる。黒褐色を呈する。３はかなり大型の高坏の接合部である。坏部がほぼ水平に開くことから北陸系の有稜高坏の可能性がある。

本住居跡は３世紀後半､屋敷裏Ⅲ－４期である。

第 36 号住居跡（第 175・176 図）

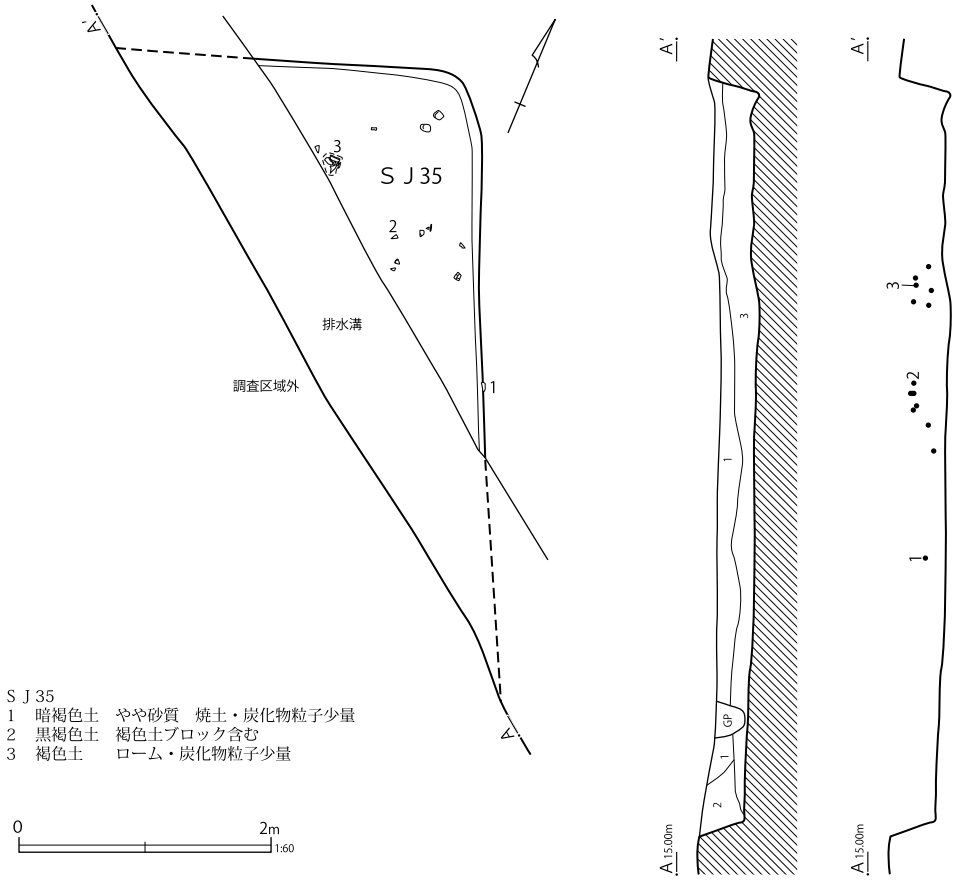
Ｂ区の中央、Ｈ－ 11・12 グリッドに位置する。掘り込みを確認できず、炉跡の存在と地山の変色から住居跡の範囲を推定した。推定範囲の長軸を

主軸とすると、北東－南西方向、Ｎ－47°－Ｅが主軸方位となる。第７・34号住居跡、第４号畠跡と重複するが、各遺構の覆土中に本住居跡の痕跡が見られなかったため、本住居跡より新しいと判断した。

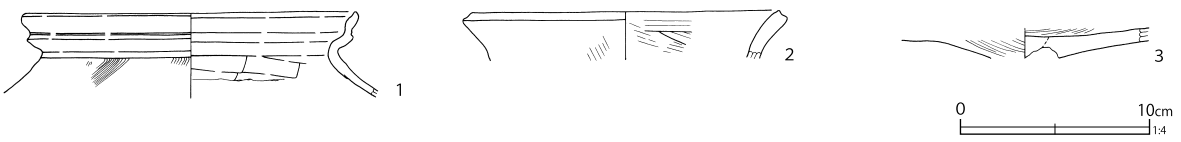
平面形は隅丸不整方形で、各辺は若干丸みを帯びている。規模は主軸方向5.60ｍ、直交軸方向4.50ｍである。

炉跡は床面のほぼ中央で検出された。長径0.55ｍ、短径0.40ｍ、深さ0.05ｍで、第１層上面が火床面、第２層が掘り方と考えられる。

遺物は少なく、古墳時代前期の壺、台付甕の破



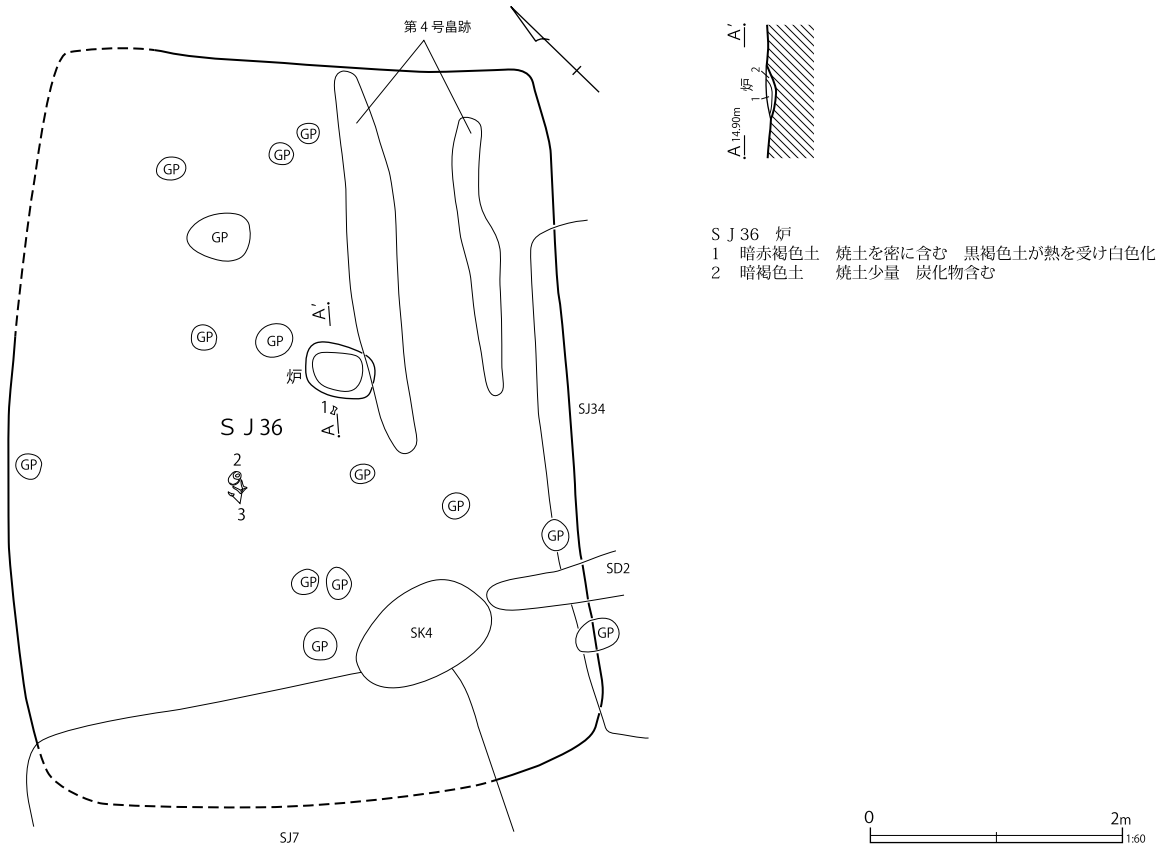
第173図　第35号住居跡



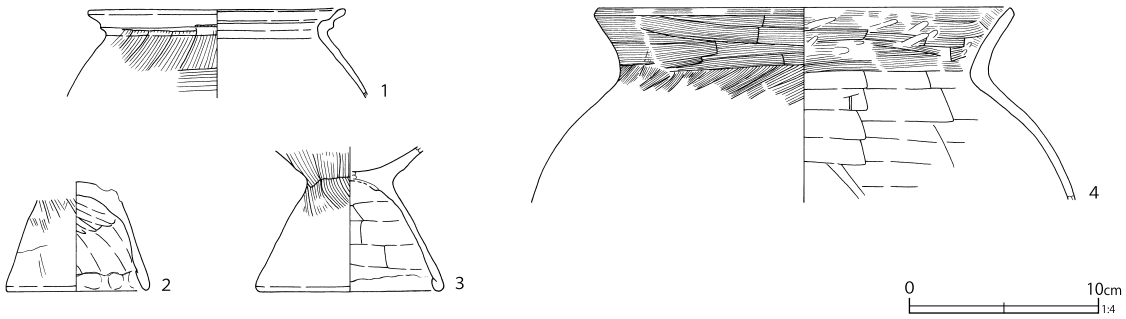
第174図　第35号住居跡出土遺物

第34表　第35号住居跡出土遺物観察表（第174図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(17.6)	[4.4]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　№15	
2	土師器	甕	(16.4)	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	黒褐	内外面煤付着　№7	
3	土師器	高坏	－	[1.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙	№２	



第175図　第36号住居跡



第176図　第36号住居跡出土遺物

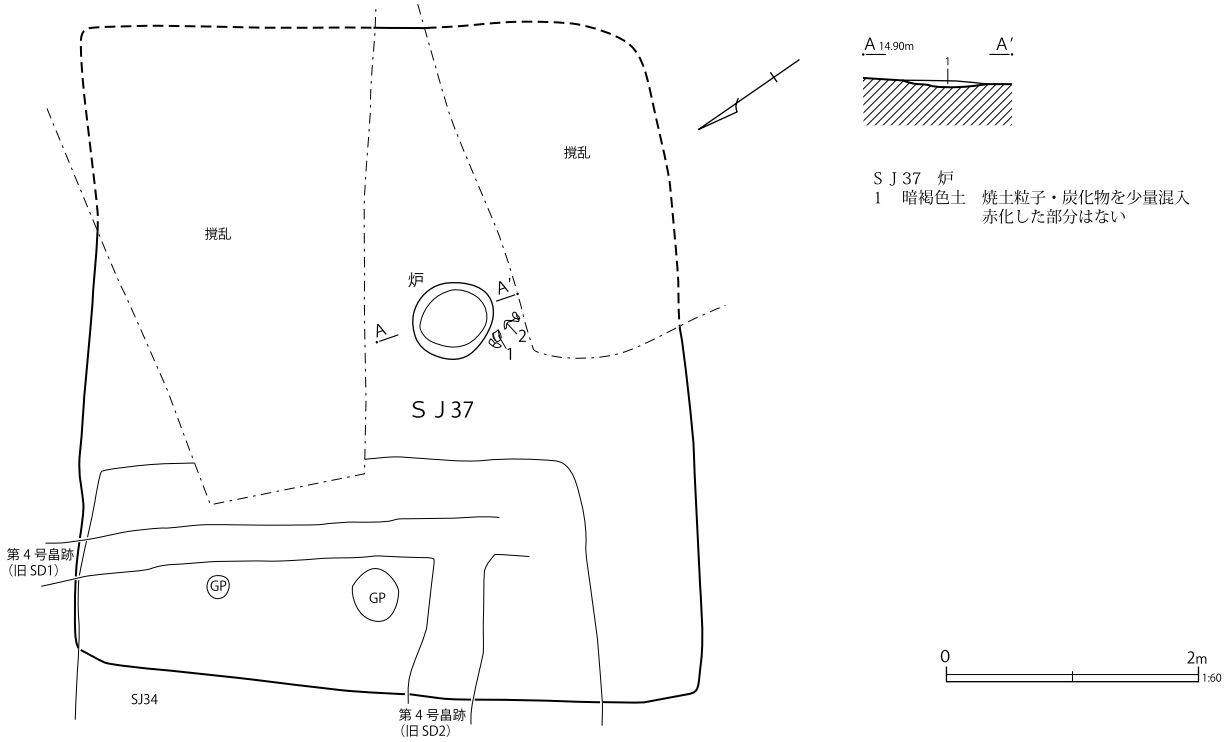
第35表　第36号住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(13.6)	[4.7]	－	ＡＣＧＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№３	
2	土師器	台付甕	－	[5.7]	7.7	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	淡赤橙	№１	157-5
3	土師器	台付甕	－	[7.6]	(9.6)	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№２	157-6
4	土師器	甕	(22.0)	[10.2]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№６	157-7

片が出土した。

１・２はＳ字状口縁台付甕である。１の横刷毛は、器面全体に施される刷毛目よりも目が粗い。２は小型の脚台部である。接合部には砂を混ぜた粘土が充填されており、天井部はヘラで強くナデつけられている。

３は刷毛目台付甕の脚台部である。筒形に成形され、裾が折り返されており、Ｓ字状口縁台付甕



第177図　第37号住居跡

が強く意識されているが、天井部の粘土には砂が混じらず、胴部から連続した刷毛目が施されており、刷毛目台付甕としておきたい。

４は大型の甕である。口縁部はくの字で端部は面を持つ。口縁部内外面とも細かい刷毛目が施されている。胴部は外面の刷毛目がきれいにナデ消されている。内面ヘラナデ。黄白色を呈する。

本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第 37 号住居跡（第 177・178 図）

Ｂ区の東側、Ｈ・Ｉ－11・12 グリッドに位置する。掘り込みを確認できず、炉跡の存在と地山の変色から住居跡の範囲を推定した。遺構の東側は２箇所の大きな撹乱によって壊されている。推定範囲の長軸を主軸とすると、北西－南東方向、Ｎ－36°－Ｗが主軸方位となる。第 34 号住居跡、第４号畠跡と重複するが、各遺構の覆土中に本住居跡の痕跡が見られなかったため、本住居跡より新しいと判断した。

平面形は隅丸不整方形で、各辺は若干丸みを帯びている。北東壁の方がやや短いと推定される。規模は、主軸方向 5.30 ｍ、直交軸方向 4.85 ｍである。

炉跡は床面のほぼ中央､北西寄りで検出された。長径 0.65 ｍ、短径 0.60 ｍ、深さ 0.05 ｍで、火床面はなく、第１層は掘り方と考えられる。

遺物は少なく、古墳時代前期の壺、台付甕、甕の破片が出土した。

１は壺である。器形としては甕だが、全体にヘラ磨きが施され、きれいに仕上げられており、壺と考えたい。

２は甕の口縁部である。２次被熱により傷みが著しい。

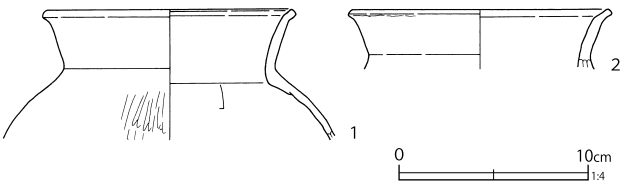
本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第 38 号住居跡（第 179・180 図）

Ｂ区の東側、Ｈ－12 グリッドに位置する。大部分が調査区域外にかかり、検出できたのは南コーナーから南西壁にかけての一部にすぎない。検出できた南西辺の方向、北西－南東方向を主軸とすると、Ｎ－41°－Ｅが主軸方位となる。第４号畠跡が重複し、本住居跡より新しい。

第36表　第37号住居跡出土遺物観察表(第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(13.0)	[6.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№２	
2	土師器	甕	(13.6)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№３	



第178図　第37号住居跡出土遺物

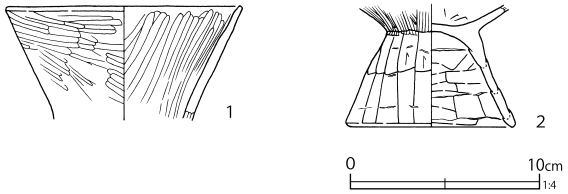
検出範囲の平面形は隅丸方形と推定される。北側法面で確認できる規模は、主軸方向5.05 m、直交軸方向0.80 mである。調査区内では主軸方向2.80 mの範囲が確認できたのみである。

炉跡、柱穴、壁周溝等は検出できなかった。

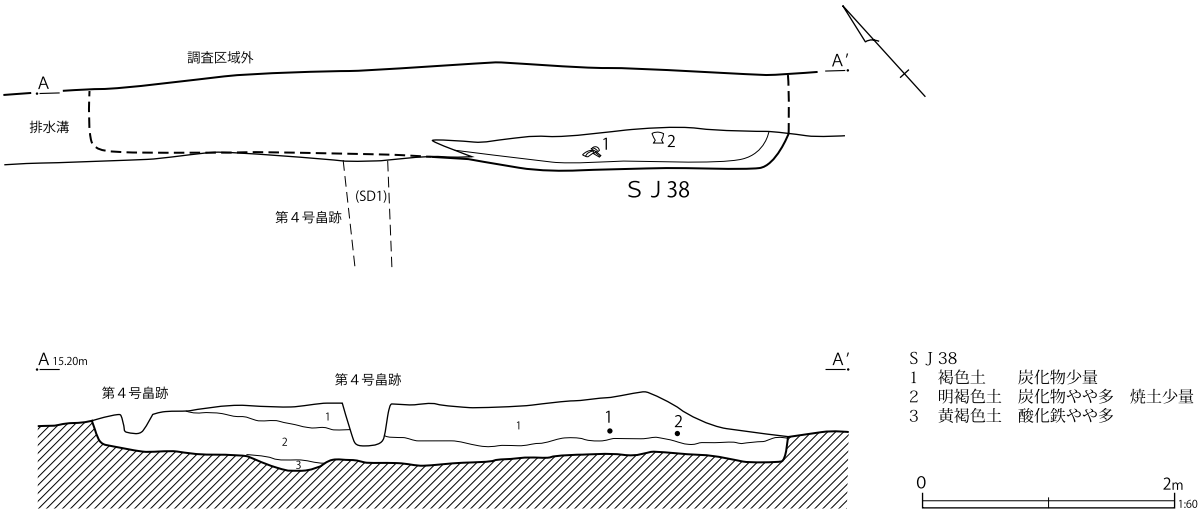
遺物は少なく、中層から古墳時代前期の壺、台付甕の破片が出土した。

１は小型壺の口縁部である。直線的に長く延びるため、大型坩等の可能性がある。２は小型の台付甕の脚台部である。筒形に成形された脚台部に胴部が取り付けられている。端部が折り返されており、Ｓ字状口縁台付甕が強く意識されている。外面の調整がヘラケズリで、天井部の充填土に砂が混ぜられておらず、Ｓ字状口縁台付甕とは異なり、模倣の一つの形と考えられる。

本住居跡は４世紀後半､屋敷裏Ⅲ－４期である。



第179図　第38号住居跡出土遺物



第180図　第38号住居跡

第37表　第38号住居跡出土遺物観察表(第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(12.4)	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	45	普通	にぶい橙	№1	158-1
2	土師器	台付甕	－	[6.4]	8.6	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	№2	158-2

第 39 号住居跡（第 181・182 図）

Ｂ区の西端、Ｇ－９グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。第 30 号住居跡、第６号溝跡と重複し、各遺構より本住居跡が古い。撹乱によって南西壁が壊されている。長軸方向を主軸方向とすると、北東－南西方向、Ｎ－ 34°－Ｅが主軸方位と考えられる。

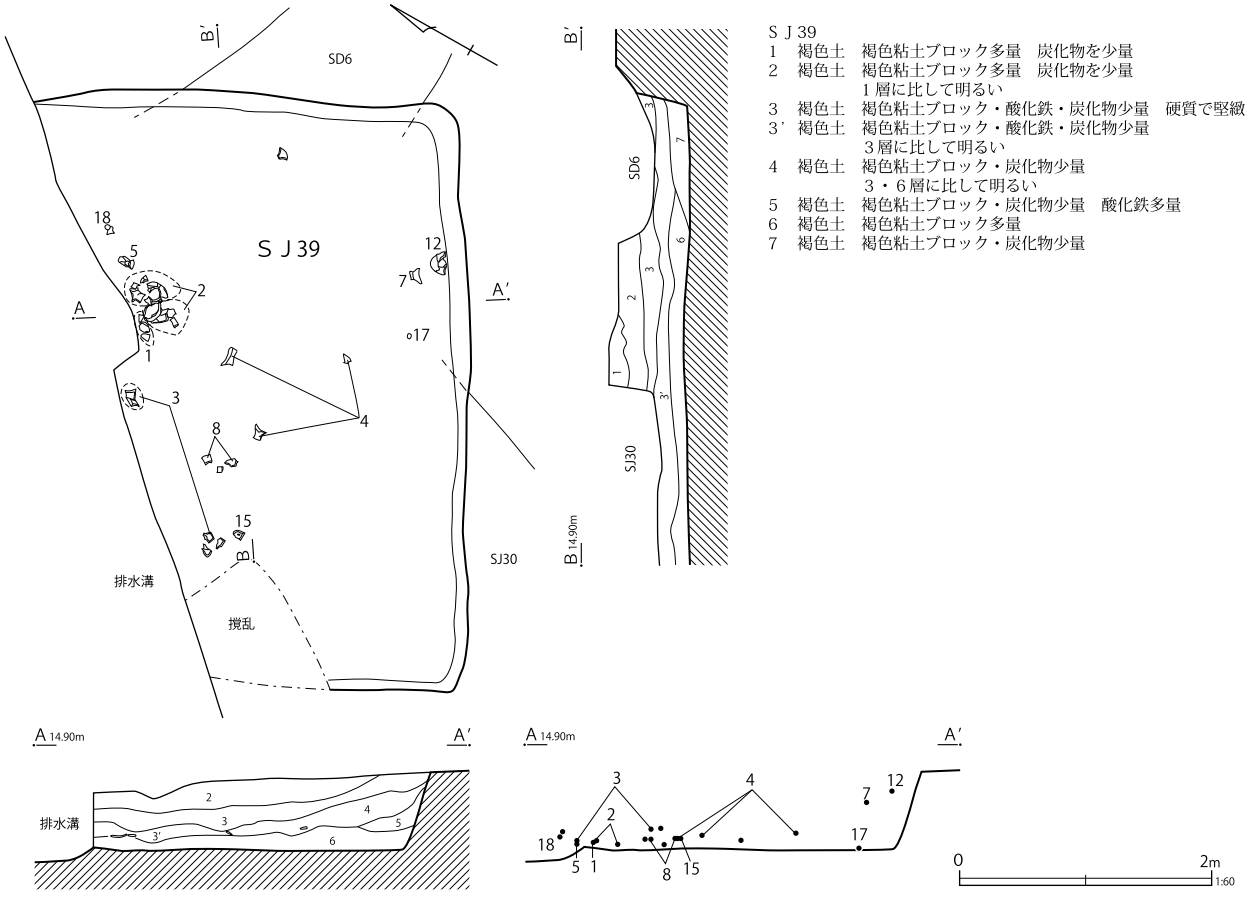
推定される平面形は方形で、各辺は若干丸みを帯びている。規模は、主軸方向 4.15 ｍ、直交軸方向は検出範囲で 3.25 ｍである。深さは 0.60 ｍである。覆土は炭化物、褐色粘土を含む褐色土で、自然堆積と考えられる。床面には薄い炭化物層が広がっていた。若干凹凸があり、貼床、掘り方、炉跡、柱穴は認められなかった。

遺物は少なく、住居跡全体から、第６層を中心に出土した。器種は古墳時代前期の壺、台付甕、甕、高坏、坩、鉢、蓋、土玉である。いずれも完形率が高い。

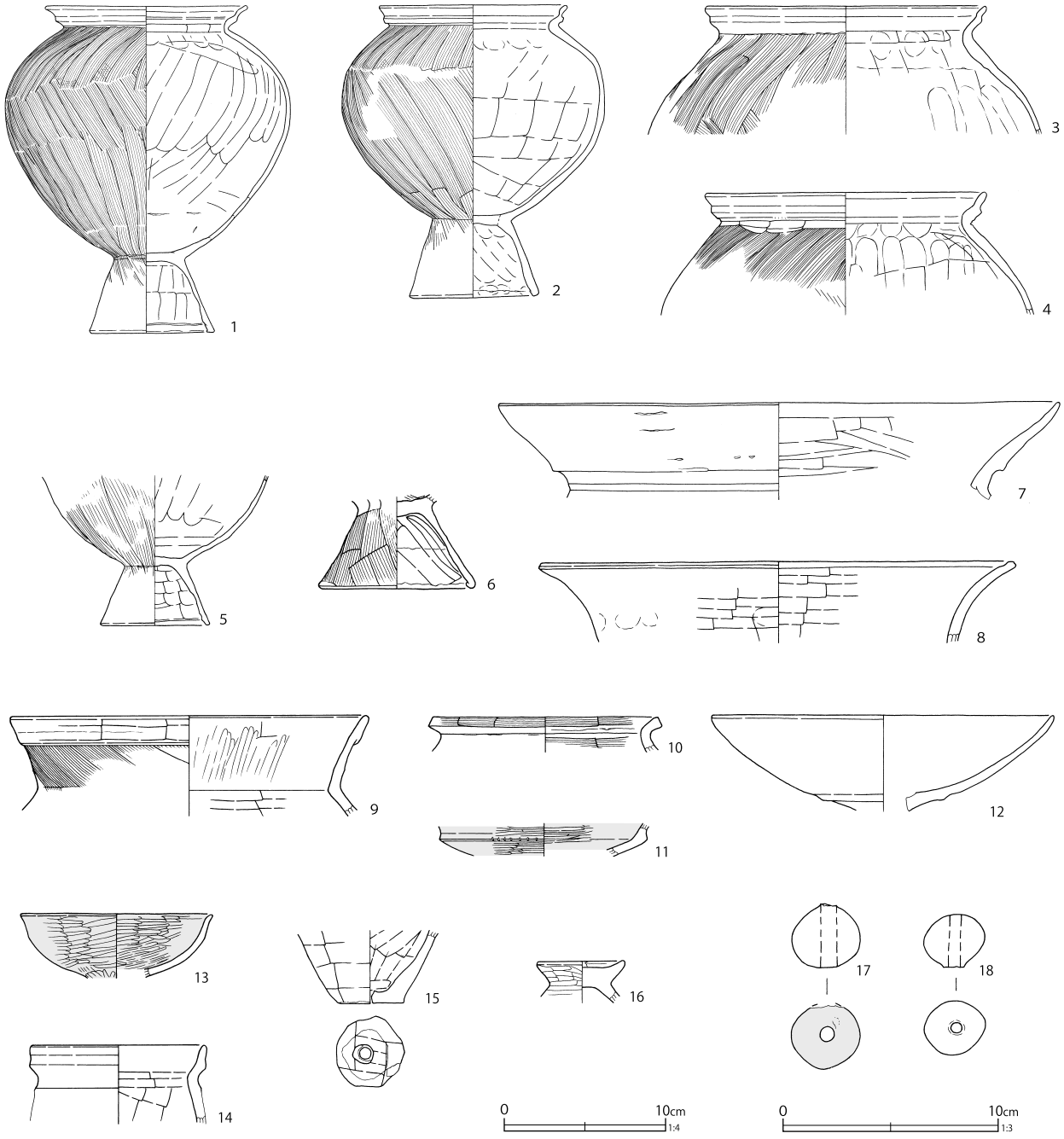
１～５はＳ字状口縁台付甕である。１・２はやや小型である。基本的な調整は第 24 号住居跡出土資料と同様である。双方とも接合部に充填される粘土は砂が少ないが、胴部、脚台部両側で変色しているのが確認できる。３・４はやや大型である。４の下段の刷毛目は上段のそれと異なり目が粗い。５は胴部下半から脚台部の破片だが、著しく薄く、軽い。接合部は砂を混ぜた粘土である。

６は刷毛目台付甕の脚台部である。全体に黒褐色を呈し、よく使い込まれている。ホゾ接合で、天井部は放射状に強くナデ込まれている。

７・８は大型の甕の口縁部である。７は複合口縁になっており、ヘラ磨きが加えられるため壺の可能性がある。複合部は口縁外周に粘土が貼付さ



第181図　第39号住居跡



第182図　第39号住居跡出土遺物

れて作出されている。頸部から外れた状態である。８は大きく外反し、連続するヘラナデによって端部内面に凹みが見られる。全体に指オサエが残る。

９は複合口縁の広口壺である。風化が著しい。

10 は口縁部の厚い小型の甕で、北陸系と考えられる。

11 は北陸系の有稜高坏と考えられる。屈曲部にごく浅い刻み目が施されている。

12 は高坏である。坏部が浅く、ホゾの部分からきれいに外れている。風化し、極めて脆い。

13・14 は鉢である。13 は鉢としたが、高坏の坏部の可能性がある。内外面ヘラ磨きである。14 は５の字口縁の鉢である。在地の粘土が用いられており、模倣品である。器肉が厚い。風化の

第38表　第39号住居跡出土遺物観察表（第182図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(12.4)	20.2	7.7	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№15	158-5
2	土師器	台付甕	11.6	18.0	8.0	ＡＣＥＨＩＫ	85	普通	黒褐	内外面煤付着　№20・21	158-6
3	土師器	台付甕	(17.4)	[7.9]	－	ＡＣＨＩＪＫ	50	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№11・14	158-7
4	土師器	台付甕	17.3	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	灰黄褐	外面煤付着　№４・５・13	158-3
5	土師器	台付甕	－	[9.2]	(6.6)	ＡＢＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	胴部煤付着　№16	158-4
6	土師器	台付甕	－	[5.8]	9.5	ＡＢＥＨＩＫ	75	普通	暗灰黄	内外面煤付着	159-1
7	土師器	台付甕	(34.6)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	山陰系口縁Ｓ字甕　№２	159-2
8	土師器	台付甕	(29.4)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕か　№６・８	
9	土師器	広口壺	(22.0)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰白		
10	土師器	甕	(14.0)	[2.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	高坏	－	[2.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	223-2
12	土師器	高坏	(21.2)	[5.8]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№１	
13	土師器	鉢	(11.8)	[3.9]	－	ＡＨＩＫ	15	普通	浅黄橙	内外面赤彩	
14	土師器	鉢	(10.6)	[4.7]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	15	普通	橙	５の字鉢	223-2
15	土師器	甑	－	[4.5]	4.2	ＡＣＥＩＫ	70	良好	にぶい褐	孔径８㎜　№９	159-3
16	土師器	蓋	－	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	85	普通	浅黄橙	つまみ径5.3㎝	159-4
17	土製品	土錘	径3.1×[2.9] 高さ3.0　孔径0.7 重さ23.6ｇ			ＥＫ	95	普通	明赤褐	土玉　赤彩　№３	218-19
18	土製品	土錘	径2.8×2.5　高さ2.5 孔径0.5　重さ15.7ｇ			Ｋ	100	普通	にぶい黄橙	土玉　№18	218-20

ため調整は不明瞭である。

15は底部中央に、径８mmの小穴が焼成前に開けられている。甑としたが、他器種の可能性がある。

16は北陸系の蓋である。外面全体にヘラ磨きが施され、赤彩さている。

17・18は土錘である。所謂土玉で、全体ナデ調整である。17は赤彩が施されている。

本住居跡は３世紀後半､屋敷裏Ⅲ－２期である。

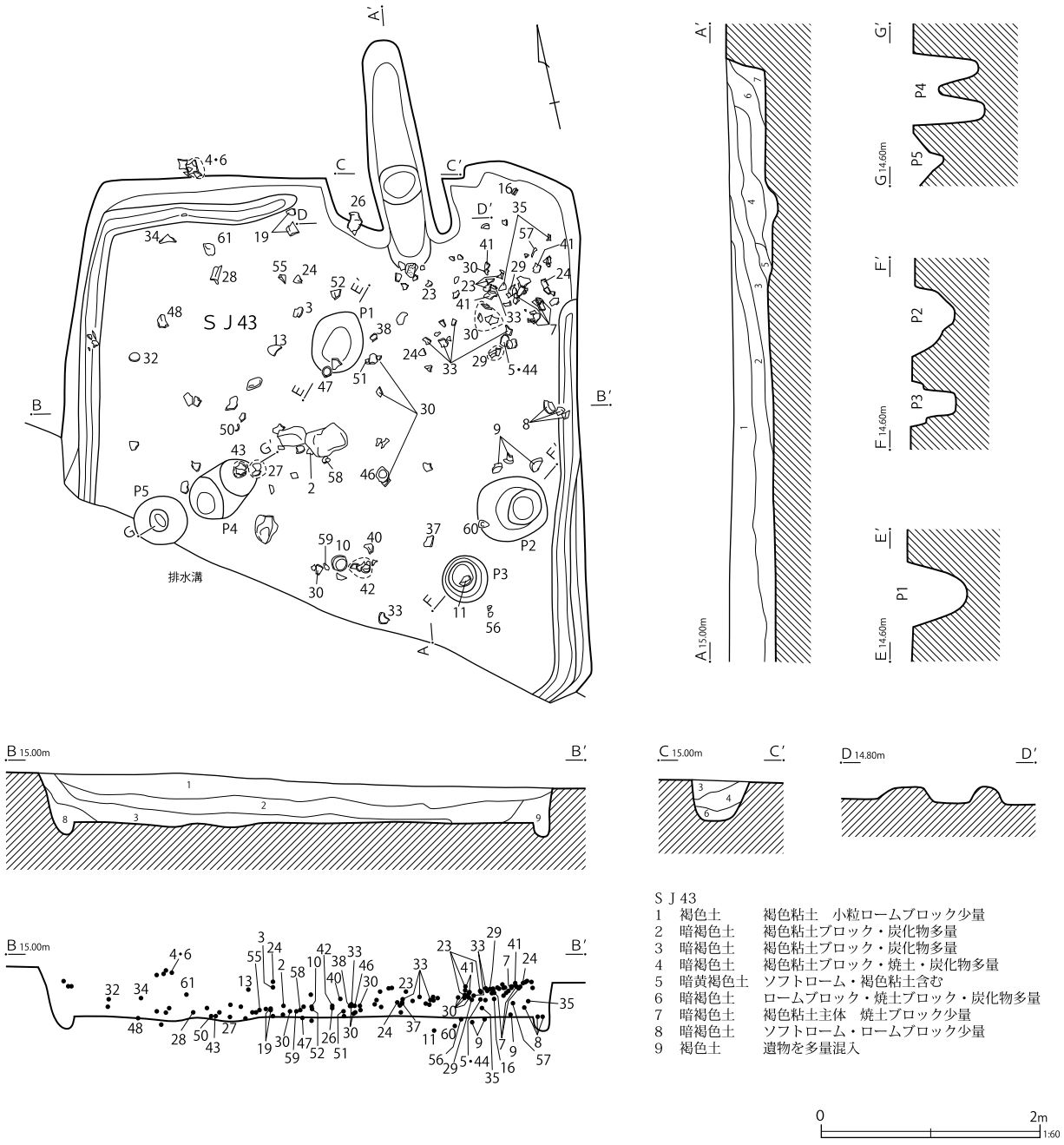
第43号住居跡（第183～186図）

Ｃ区西側、Ｊ･Ｋ－12･13グリッドに位置する。遺構の南側は､調査区域外にかかる。北カマドで、主軸方位はＮ－10°－Ｅである。

平面形は、南東コーナーが部分的に検出できたことから、南北方向がやや長い長方形と推定される。全体の規模は、主軸方向5.00ｍ、直交軸方向4.65ｍである。深さは0.45ｍで、床面は遺構の西側でやや凹凸がある。覆土は炭化物、ローム土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土の自然堆積である。貼床、掘り方は検出できなかった。

カマドは北壁中央やや西寄りで検出された。燃焼部は浅い土壙状を呈し、壁内に収まっていた。煙道は長く突出する。検出できた長さは袖を含んで2.00ｍ、幅0.50ｍである。覆土は第４・５層が燃焼部天井崩落土、第６・７層が煙道部からの流入土と考えられる。両壁面が焼けているが、火床面はあまり焼けておらず、灰層も明瞭には検出できなかった。燃焼部は浅い土壙状を呈し、奥壁はピット状になって煙道部に至る。ピット状部分の底面には炭化物が認められた。袖は粘土を含む褐色土の貼付けによって造られていた。煙道は幅0.40ｍ、深さ0.35ｍで、ピットから段を持って延びる。

ピットは５基検出された。Ｐ１・２・４は径0.60ｍ、Ｐ３・５は径0.45ｍで、深さはＰ１・４が深く0.55ｍ､Ｐ２・４は0.3～0.4ｍである。Ｐ２・３は底面に柱の当たりがあり、柱穴と考えられる。Ｐ２と竪穴本体の線対称位置にあるＰ５も同様の可能性がある。Ｐ４も底面に複数の落ち込みがあり、これらが柱穴であるならば建て替え



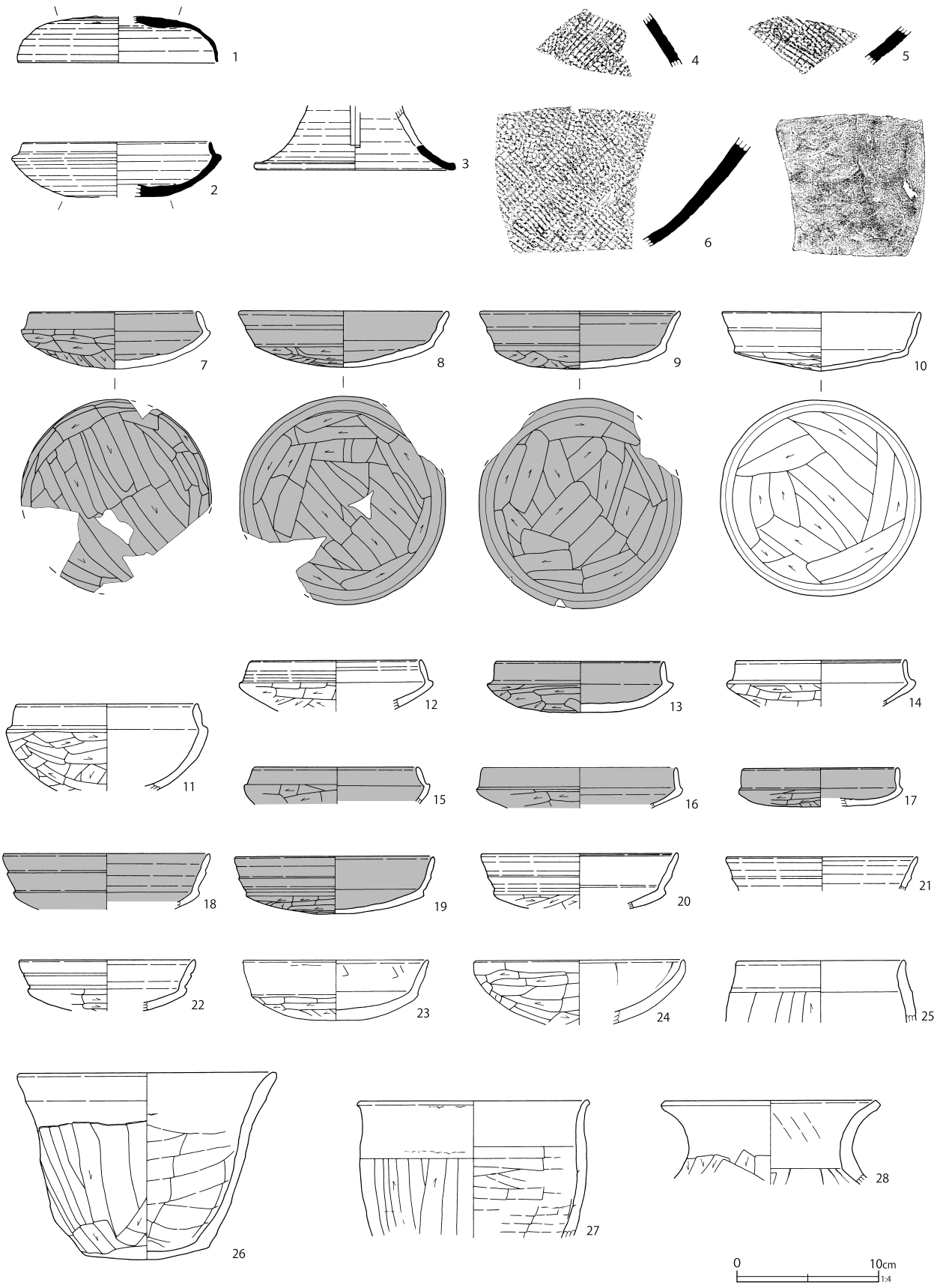
第183図　第43号住居跡

が想定される。

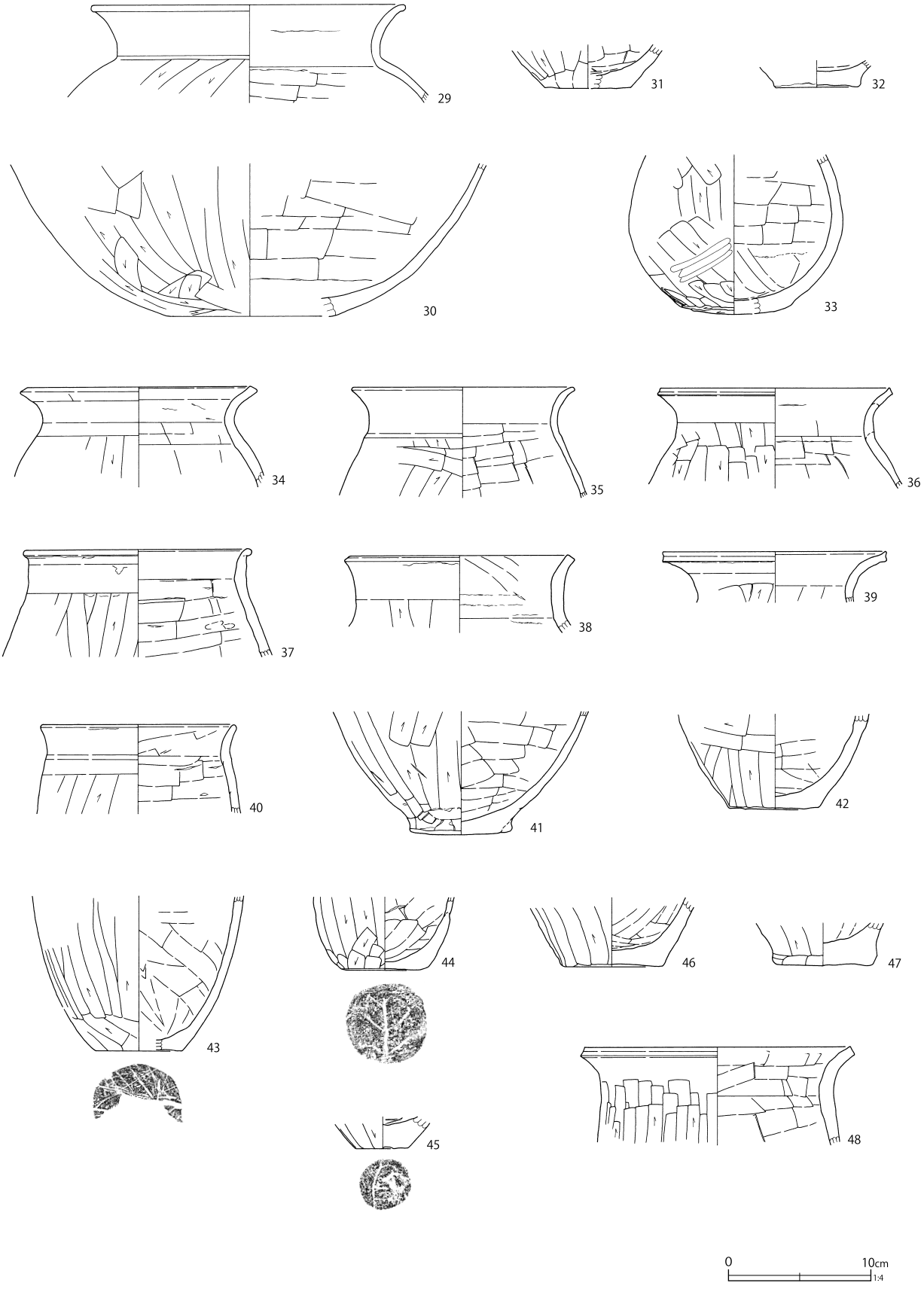
壁周溝は幅 0.15 ～ 0.30 m、深さ 0.15 m で、北東コーナーを除き全周する。

遺物は多く、北東コーナー近辺の最上層と第２層､床面から中層に分けられる。古墳時代後期の、須恵器坏、坏蓋、土師器坏、壺、甕、高坏、鉢、羽口の破片が出土し、古墳時代前期の甕、高坏、平安時代の灰釉陶器が混入している。出土状況が示すように土器の時期も２分され、上層出土の土器は６世紀末、中～下層出土の土器は６世紀前半と考えられる。中央の台石等と考えられる大型の礫も上層からの出土で住居の窪みに廃棄されたと考えられる。

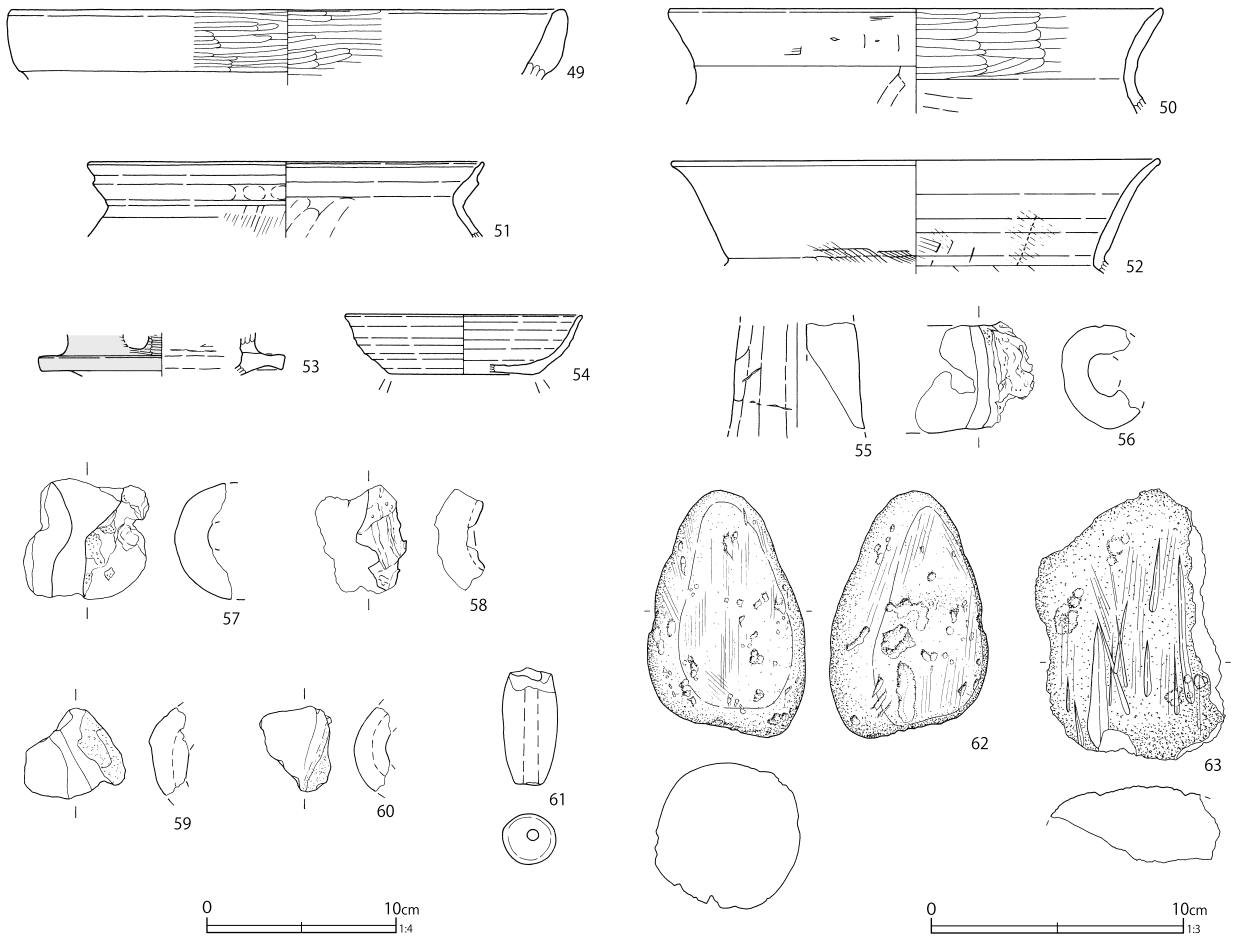
１～６は須恵器である。１・２は坏蓋と坏身である。両者とも口径が大きく、やや低平である。１は黒褐色で、粘土が緻密である。東毛産か。２



第184図　第43号住居跡出土遺物（1）



第185図　第43号住居跡出土遺物（２）



第186図　第43号住居跡出土遺物（3）

はやや多孔質で灰白色を呈する。西毛産か。3は高坏の脚部である。透孔は4方向で長方形である。端部は外反して丸く収められている。太田金山窯産。4～6は大甕の胴部破片である。いずれも外面格子タタキ、内面は当て具痕が丁寧にナデ消されている。4・5は断面が小豆色で厚さもほぼ一致し、同一個体の可能性がある。4には外面に灰がかかる。6は重量感があり、全体に青みがかっている。太田金山窯産。

以下は土師器である。7～24は坏である。全体に器形が低平で、口径が大きい。7・11～17が坏身模倣坏、18～22が有段口縁坏、23が坏蓋模倣坏、24が半球形坏である。7～9・13・15～19は内外面黒色処理されている。15は漆塗りの可能性がある。10・12は短い白色針状物質を含む。11は器高が高く、半球形である。14・16の内面は口縁と体部の境に爪が入る。23は器面が滑らかで他の個体とは異なる印象を受ける。

25～27は鉢である。26・27は大型である。器形は様々で、25は口縁部全体が内傾。26は肥厚して外側に開き、27はほぼ直立する。25はやや粗い粘土が使われている。26の外面には煤が厚く付着するため、甕としての使用も考えられる。

28～32は壺である。28・29は口縁部で、短く大きく外反する。29・30は同一個体と考えられ、胴部破片が複数あるが直接接合しない。底部（30）は大きく、丸底に近いと推定される。胴部外面の調整はヘラケズリ、内面はヘラナデで、31も同様である。32は底部外周のヘラケズリがナデ消されており、壺としておきたい。底面ヘラケズリ。33は小型で球形胴である。器肉が厚い。ヘラケズリの丸底である。外面は部分的にヘラ磨

第39表　第43号住居跡出土遺物観察表（第184～186図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(14.0)	[3.2]	－	ＥＨＩＫ	30	普通	灰	太田産か	
2	須恵器	坏	(13.4)	[3.8]	－	ＤＥＨＩＫ	20	普通	灰	末野産　№92	
3	須恵器	高坏	(14.2)	[4.6]	－	ＥＨＩＫ	25	良好	灰	太田産か　№87	160-4
4	須恵器	甕	－	[3.7]	－	ＡＩＫ	5	良好	灰	６と同一か　自然釉　№２	223-2
5	須恵器	甕	－	[2.6]	－	ＡＩＫ	5	良好	灰	５と同一か　№43	223-2
6	須恵器	甕	－	[7.7]	－	ＥＩＫ	5	良好	灰	西毛産か　№２	223-2
7	土師器	坏	12.0	4.0	－	ＡＣＤＨＫ	60	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　№27・33・34・37	160-5
8	土師器	坏	14.5	4.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№102～104	160-6
9	土師器	坏	14.0	4.1	－	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№99～101	161-1
10	土師器	坏	13.6	4.2	－	ＡＣＤＨＩＪ	100	普通	橙	有段口縁坏　№112	161-２
11	土師器	坏	(12.7)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	橙	№139	161-3
12	土師器	坏	(11.9)	[3.4]	－	ＡＣＨＩＪＫ	20	普通	橙		
13	土師器	坏	(11.8)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面黒色処理　№88	
14	土師器	坏	(12.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙		
15	土師器	坏	(11.5)	[2.6]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理	
16	土師器	坏	(13.7)	[2.8]	－	ＡＣＦＩＫ	10	普通	黒褐	内外面黒色処理　№10	
17	土師器	坏	(10.9)	[2.7]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面黒色処理か	
18	土師器	坏	14.6	[3.9]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	褐灰	有段口縁坏　内外面黒色処理　カマド	
19	土師器	坏	14.0	4.0	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　№８・９	
20	土師器	坏	(13.8)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	良好	にぶい橙	有段口縁坏	
21	土師器	坏	(13.4)	[2.4]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	明黄褐	有段口縁坏	
22	土師器	坏	(12.2)	[3.5]	－	ＡＣＨＩ	10	普通	にぶい橙	有段口縁坏	
23	土師器	坏	13.0	4.2	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙	№50～52・70	161-4
24	土師器	坏	(14.7)	[4.5]	－	ＡＨＩＫ	35	普通	橙	№20・67・85	161-5
25	土師器	鉢	(11.7)	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	にぶい褐		
26	土師器	鉢	(17.8)	[13.2]	8.9	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	暗赤褐	外面煤付着　№138　カマド	161-6
27	土師器	鉢	(15.9)	[9.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	良好	橙	№130	
28	土師器	壺	(15.0)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	№119	161-7
29	土師器	壺	(21.6)	[6.9]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	31と同一個体　№29・44	161-8
30	土師器	壺	－	[10.7]	(12.0)	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	30と同一個体　№45～47・55・78・80・115・118	
31	土師器	壺	－	[3.0]	(6.0)	ＡＣＨＩ	30	普通	褐	内外面煤付着	
32	土師器	壺	－	[1.8]	5.8	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	橙	№121	
33	土師器	小型壺	－	[11.2]	8.5	ＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	№40・49・62・63・66・117	162-1
34	土師器	甕	(15.6)	[7.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№６	
35	土師器	甕	(15.6)	[7.7]	－	ＣＨＩＪＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№13・56	
36	土師器	甕	(16.1)	[6.9]	－	ＡＣＤＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
37	土師器	甕	(15.6)	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙	№108	
38	土師器	甕	(15.2)	[5.3]	－	ＡＤＥＦＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	№77	
39	土師器	甕	(15.8)	[3.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
40	土師器	甕	13.4	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№109	
41	土師器	甕	－	[8.5]	7.0	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい褐	№17・48・54	162-2
42	土師器	甕	－	[6.6]	6.3	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	灰黄褐	外面煤付着　№110	162-3
43	土師器	甕	－	[10.8]	6.2	ＡＣＨＩＪＫ	30	良好	褐灰	底部木葉痕　外面煤付着　№131	162-4
44	土師器	甕	－	[5.1]	6.1	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕　№43	162-5
45	土師器	甕	－	[2.1]	3.7	ＡＣＤＨＩ	70	普通	にぶい赤		
46	土師器	甕	－	[4.8]	7.0	ＡＣＨＩＫ	70	普通	橙	外面煤付着　№96	162-6
47	土師器	甕	－	[3.0]	7.0	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	橙	№83	162-7
48	土師器	甑	(18.8)	[6.8]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	灰黄褐	№120	

第30表　第30号住居跡出土遺物観察表（第164・165図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
49	土師器	壺	(29.3)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
50	土師器	甕	(26.2)	[5.5]	－	ＡＣＨＩ	15	普通	褐灰	内外面煤付着　№129	
51	土師器	台付甕	(21.0)	[4.0]	－	ＡＣＨＩ	5	良好	にぶい橙	№79	
52	土師器	台付甕	(25.7)	[6.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　外面煤付着　№84	
53	土師器	器台	－	[2.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	外面赤彩	
54	ロクロ土師	坏	(12.5)	3.1	(7.3)	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		
55	土製品	支脚	－	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	№86	223-2
56	土製品	羽口	長さ[6.3]　幅5.8 内径2.2×[1.5] 外径5.4×[4.1] 重さ58.1g			ＩＫ	60	普通	にぶい黄橙	№107	223-2
57	土製品	羽口	長さ[6.6]　幅6.3 内径[0.2]×[1.2] 外径6.1×[3.0] 重さ80.3g			ＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	№15	223-2
58	土製品	羽口	長さ[4.8]　幅[5.7] 重さ45.5g			ＩＫ	30	普通	橙	№95	223-2
59	土製品	羽口	長さ[5.3]　幅[4.8] 重さ19.2ｇ			ＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
60	土製品	羽口	長さ[3.7]　幅[4.5] 重さ31.1ｇ			ＨＩＫ	20	普通	灰黄		
61	土製品	土錘	長さ4.6　最大径2.2 孔径0.5　重さ19.9g			ＡＪ	70	普通	にぶい橙	№114	218-21
62	石製品	砥石	長さ9.9　幅6.3　厚さ6.2　重さ148.4ｇ　軽石							№105	
63	石製品	砥石	長さ[10.8]　幅[7.5]　厚さ[3.2]　重さ164.7ｇ　安山岩							Ｖ字状刃物痕あり　№７	

きが加えられている。

34～47は甕である。全形の分かる資料はない。口縁部は外反、直立気味の二者がある。39は径が小さく外反度が強い。41～47は胴部下半から底部にかけての破片である。41は底部がやや突出し、壺の可能性がある。43・44の底面には木葉痕が認められる。43は2枚が重ねられている。45の底面はヘラケズリである。

48は甑である。器肉が厚く、砲弾形になると考えられる。外面は幅の狭い工具による縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデである。

49～53は古墳時代前期の、54は平安時代の混入品である。49は大型の壺である。複合口縁で分厚く、内外面ヘラ磨きが施されている。50～52は甕、台付甕である。50・52はかなりの大型である。50は口縁部が短く、外面ヘラナデ後横ナデ、52は口縁部が長く、内外面とも刷毛目後横ナデが施されている。51はＳ字状口縁台付甕である。焼成が良く、硬質である。53は装飾器台の器受部と考えられる。小破片のため、透孔の個数は不明である。円形ではなく、やや縦長になると推定される。鍔は水平に延び、端部は広い面を持つ。内面は剥離している。

54は平安時代のロクロ土師器の坏である。利根川流域の粘土である。底部の外周は回転ヘラケズリ。底面は手持ちヘラケズリである。

55は支脚である。風化しており、ほとんど融けている。上下を欠失している。外面に灰色を呈する箇所が認められる。

56～60は小口径羽口である。外面は還元、発泡し、断面は層状に赤化している。内面は酸化状態である。粘土は精選され、白色、赤色、黒色の微粒子が認められるのみである。

61は土錘である。太目で小口は平坦である。ナデ調整で、指紋が付着している。

62は軽石製の砥石である。平面形は楕円形で僅かに擦痕が見られる。63は、安山岩製の砥石である。断面「Ｖ」字状の刃物痕が多数見られる。

大部分が欠損し、表面の一部のみが残存している。

本住居跡の時期は下層出土の遺物が示す６世紀中葉、屋敷裏Ⅴ－２期と考えられる。

第 54 号住居跡（第 187・188 図）

Ｄ区の西端、Ｍ・Ｎ－ 17・18 グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。炉が北側にあることから、南北方向、Ｎ－ 19° －Ｅが主軸方位と考えられる。炭化材が大量に出土しており、焼失家屋と考えられる。

平面形は検出範囲の炉跡の位置から方形、もしくは長方形と推定される。北東コーナーが丸みを帯び、各辺の中央がやや張ることから隅丸方形の可能性がある。規模は主軸方向 4.80 ｍ、直交軸方向は検出範囲で 3.05 ｍである。深さは 0.40 ｍである。覆土は焼土、炭化物、灰色粘土を含む暗褐灰色土、暗黄褐色土、黄灰色土である。粘土質で自然堆積と考えられる。床面には全体に繊維状の炭化物が分布し、その上から土器が出土したことから、敷物と考えられる。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は認められなかった。

床面からは炉跡、土壙、ピットが検出された。炉跡は中央よりやや北側で検出された。長径 0.60 ｍ、短径は検出範囲で 0.25 ｍ、深さ 0.03 ｍで、焼土層は検出されていない。

土壙は２基検出された。貯蔵穴の可能性があるが、位置的に不適当であるため、土壙とした。土壙１は北壁手前、北東コーナー寄りで検出された。長軸長は検出範囲で 0.60 ｍ、短軸長 0.65 ｍ、深さ 0.10 ｍで、長方形になると推定される。土壙２は東壁手前中央で検出された。長軸長は検出範囲で 0.65 ｍ、短軸長 0.45 ｍ、深さ 0.20 ｍの隅丸長方形である。覆土は共通し、灰色粘土を含む暗褐色土、黄灰色土である。

ピットは北東コーナー、南東コーナー付近から３基検出された。いずれも位置的に主柱穴ではないと考えられる。Ｐ１は径 0.50 ｍ、深さ 0.30 ｍ、Ｐ２は径 0.55 ｍ、深さ 0.30 ｍである。覆土は黄灰色土で、Ｐ１は炭化物を含まず、Ｐ２は多く含むため埋没時期が異なると考えられる。Ｐ３は小型で、径 0.25 ｍ、深さ 0.12 ｍである。覆土は暗褐色土、黄灰色土である。

本住居跡からは大量の炭化材が出土している。床面上の炭化物（図中網部分）、土器の上に分布することから柱材、梁材等の構造材と考えられる。

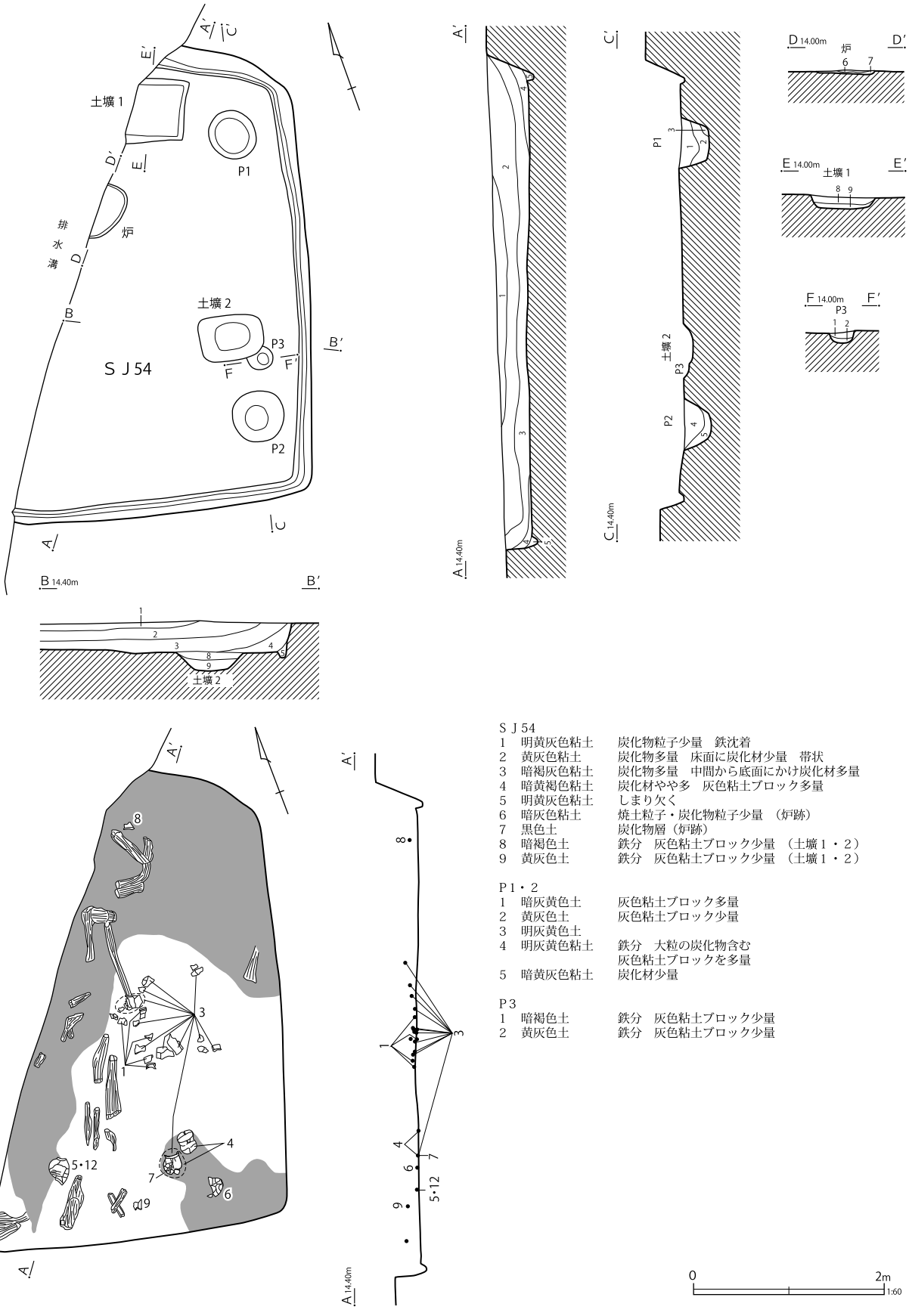
壁周溝は幅 0.13 ～ 0.25 ｍ、深さ 0.07 ｍで、検出範囲では全周している。

遺物はやや少なく、床面を中心に、古墳時代前期の壺、甕、台付甕が出土している。完形率が高い。

１は二重口縁壺である。口縁部は長く、直線的に開く。上段と下段に大きく分かれ、内面には両

第40表　第54号住居跡出土遺物観察表（第188図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	17.6	[8.8]	－	ＡＣＨＩＫ	95	普通	にぶい黄褐	口縁端部黒斑あり　№12・13・15・16・19	165-5
2	土師器	台付甕	－	[5.9]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	外面煤付着	
3	土師器	甕	16.2	21.8	5.5	ＤＦＨＩ	85	良好	にぶい黄褐	№３・７・９～11・14・18・20～23	165-4
4	土師器	甕	16.0	21.2	5.2	ＡＣＤＥＨ	90	普通	黒褐	№２・３	165-6
5	土師器	甕	13.0	21.9	6.6	ＣＤＥＨ	80	普通	にぶい黄褐	内外面煤付着　№６	165-7
6	土師器	甕	14.8	16.6	6.1	ＡＢＣＥＩＫ	80	普通	赤褐	内外面煤付着　№１	166-1
7	土師器	甕	15.0	[15.1]	－	ＡＨＩＫ	80	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№３	166-2
8	土師器	甕	(15.7)	[8.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№24	166-3
9	土師器	甕	(17.8)	[5.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№４	
10	土師器	甕	－	[2.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	褐灰		
11	土師器	壺	－	[2.6]	(8.3)	ＡＣＩＫ	15	普通	黒褐	外面黒斑あり	
12	土師器	鉢	(9.6)	[5.3]	－	ＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№６	
13	土師器	鉢	(13.7)	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	明赤褐		



S J 54

1	明黄灰色粘土	炭化物粒子少量　鉄沈着
2	黄灰色粘土	炭化物多量　床面に炭化材少量　帯状
3	暗褐灰色粘土	炭化物多量　中間から底面にかけ炭化材多量
4	暗黄褐色粘土	炭化材やや多　灰色粘土ブロック多量
5	明黄灰色粘土	しまり欠く
6	暗灰色粘土	焼土粒子・炭化物粒子少量　（炉跡）
7	黒色土	炭化物層（炉跡）
8	暗褐色土	鉄分　灰色粘土ブロック少量　（土壙１・２）
9	黄灰色土	鉄分　灰色粘土ブロック少量　（土壙１・２）

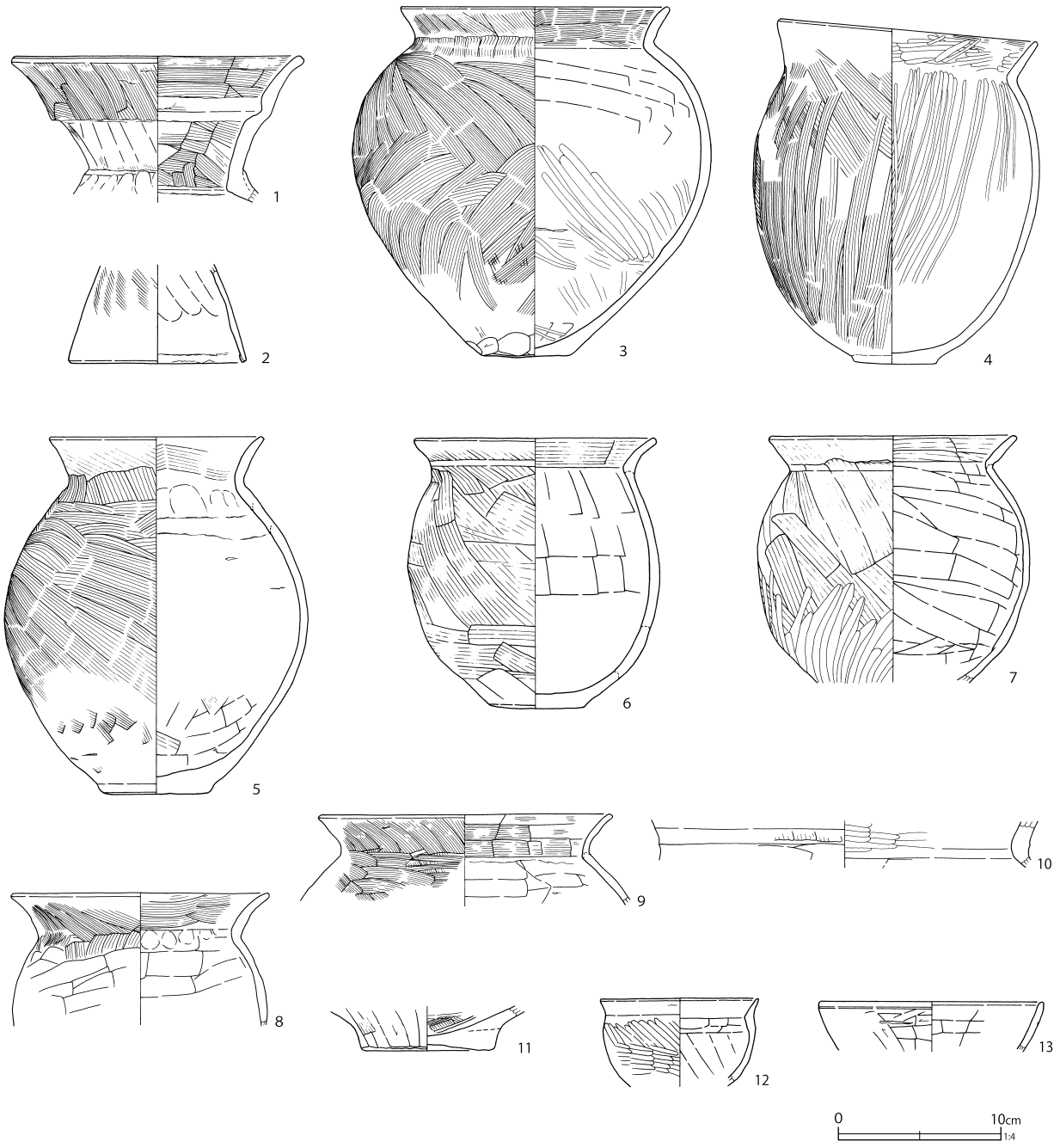
P１・２

1	暗灰黄色土	灰色粘土ブロック多量
2	黄灰色土	灰色粘土ブロック少量
3	明灰黄色土	
4	明灰黄色粘土	鉄分　大粒の炭化物含む 灰色粘土ブロックを多量
5	暗黄灰色粘土	炭化材少量

P３

1	暗褐色土	鉄分　灰色粘土ブロック少量
2	黄灰色土	鉄分　灰色粘土ブロック少量

第187図　第54号住居跡



第188図　第54号住居跡出土遺物

者を接合した際の明瞭な段が認められる。刷毛目をベースに外面下段にはヘラナデが、内面の接合箇所には強いナデが施されている。頸部には薄い突帯が貼付され、指頭痕が明瞭に残る。

２はＳ字状口縁台付甕の脚台部である。脚端部は折り返し、内面には強い指ナデが認められる。

３～10は甕である。３～６は平底で、胴部が長い。口縁部は短く、直線的で、端部は丸く収められている。外面の調整は刷毛目が基本で、口縁部には横ナデが加えられている。４はヘラ磨きが加えられている。胴部内面はヘラナデを基本とするが、３・４はヘラ磨きが加えられている。３の磨きは棒状工具が用いられており、不明瞭である。底部は若干突出するが、輪台状の接合痕は明瞭に

は認められない。底面は５が木葉痕の可能性があるが、他はヘラケズリである。３は更にナデが加えられている。７は底部を欠失するがほぼ同様の器形、調整である。胴部下半には幅広のヘラ磨きが施されている。８・９は口縁から胴部上位の破片である。外面、口縁部内面は刷毛目調整で、口縁部には横ナデが加えられている。８の胴部はヘラケズリである。頸部内面は指頭圧痕が顕著に残る。被熱により傷みが著しい。10 は大型の甕である。口縁部外面は刷毛目後強めの横ナデが施されている。内面はヘラ磨きである。

11 は壺の底部である。外面、底面ヘラケズリ。内面は刷毛目ベースで部分的にヘラ磨きが施されている。

12・13 は鉢である。12 は口縁部が短く開く。風化が進む。13 は埦状で、外面はヘラケズリである。２次被熱を受けている。

本住居跡は４世紀前半､屋敷裏Ⅲ－３期である。

第 58 号住居跡（第 189 ～ 191 図）

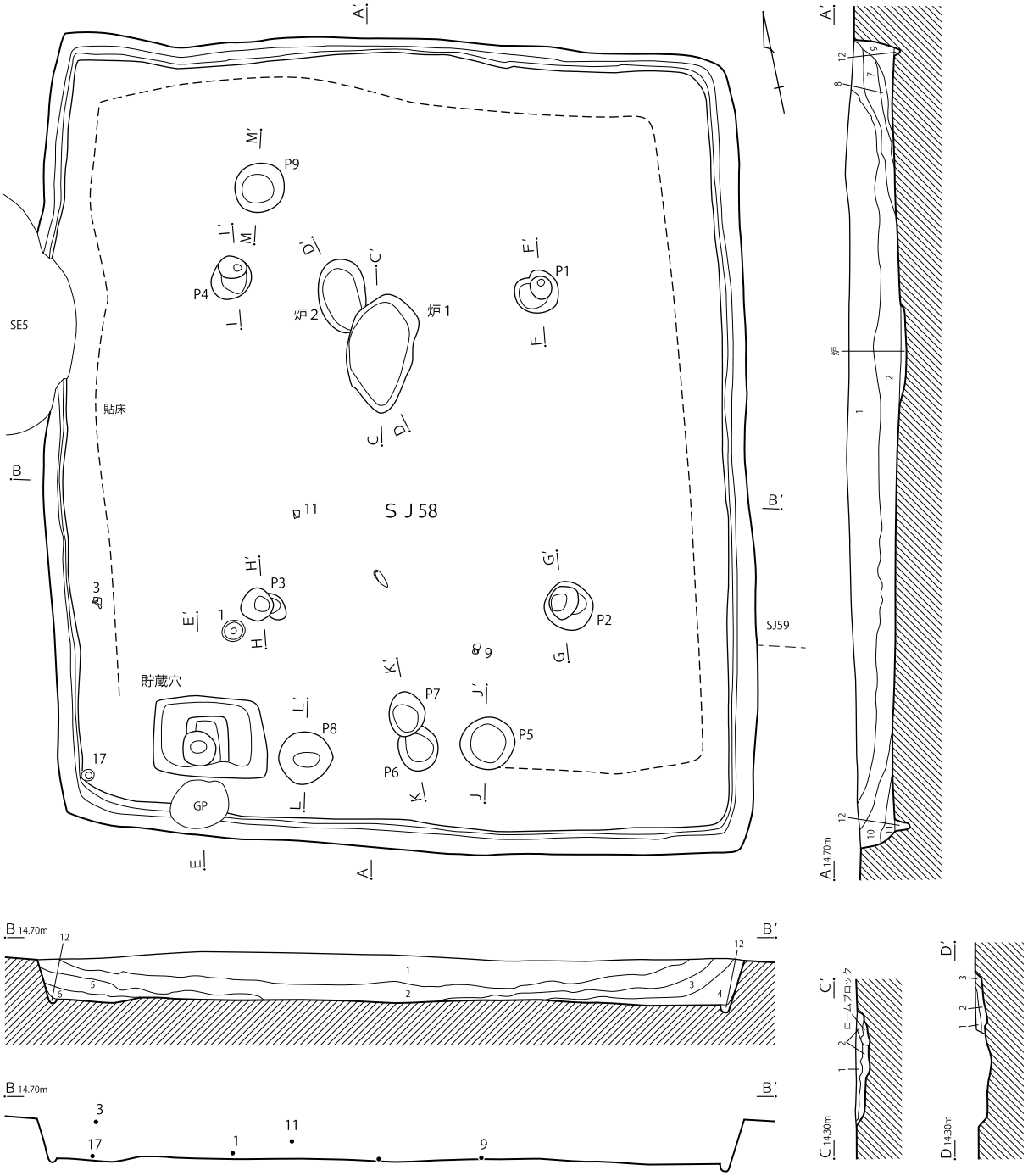
Ｃ区の中央、Ｊ・Ｋ－ 14・15 グリッドに位置する。第 59 号住居跡、第５号井戸跡と重複し、住居跡より新しく、井戸跡より古い。炉跡の位置から、南北方向、Ｎ－ 11° －Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は南北方向がやや長い長方形で、各辺は直線的である。規模は、主軸方向 7.65 ｍ、直交軸方向 6.55 ｍ､深さ 0.45 ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土、褐色粘土、灰白色粘土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土で、レンズ状堆積である。床面は若干凹凸があった。壁沿いの破線の範囲内はロームブロックが多く認められ、貼床の可能性が高い。掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、貯蔵穴、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡のほぼ中央で２箇所検出された。炉跡１が古く、炉跡２が新しい。炉跡

第41表　第58号住居跡出土遺物観察表（第191図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[9.7]	－	ＡＣＥＩ	80	普通	赤褐	外面・口縁部内面赤彩　№４	167-1
2	土師器	小型壺	(10.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩ	15	普通	にぶい橙	内外面赤彩	223-3
3	土師器	台付甕	(16.9)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№１	
4	土師器	台付甕	(12.3)	[5.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	橙		223-3
5	土師器	台付甕	(18.0)	[2.0]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰褐		
6	土師器	台付甕	(16.1)	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	外面煤付着	
7	土師器	台付甕	(16.0)	[2.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
8	土師器	台付甕	(15.0)	[2.5]	－	ＡＢＣＨＩＫ	10	普通	灰黄褐		
9	土師器	台付甕	－	[5.8]	(8.4)	ＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	外面黒斑あり　№６	167-2
10	土師器	台付甕	－	[4.7]	(8.4)	ＢＥＨＩＫ	30	普通	浅黄橙	貯蔵穴	
11	土師器	台付甕	－	[5.1]	(8.0)	ＡＣＥＩＫ	30	普通	にぶい橙	№２	
12	土師器	台付甕	－	[4.3]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙		
13	土師器	台付甕	－	[2.3]	(10.5)	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	積上痕明瞭	
14	土師器	甕	－	[6.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	外面煤付着	223-3
15	土師器	甕	(18.0)	[3.2]	－	ＢＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面・口縁部内面赤彩	
16	土師器	高坏	(23.8)	[2.0]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	明赤褐		
17	土師器	高坏	12.3	9.0	8.8	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	にぶい橙	№５	167-3
18	土師器	器台	－	[2.6]	(11.0)	ＡＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	内外面赤彩	
19	土製品	土錘	径[2.5]×[1.8] 高さ2.6 孔径0.7～0.5 重さ8.1g			ＡＩ	50	普通	灰黄褐	土玉	
20	石製品	砥石	長さ7.4　幅6.5　厚さ4.2　重さ181.3g　安山岩							Ｖ字状の刃物痕あり	

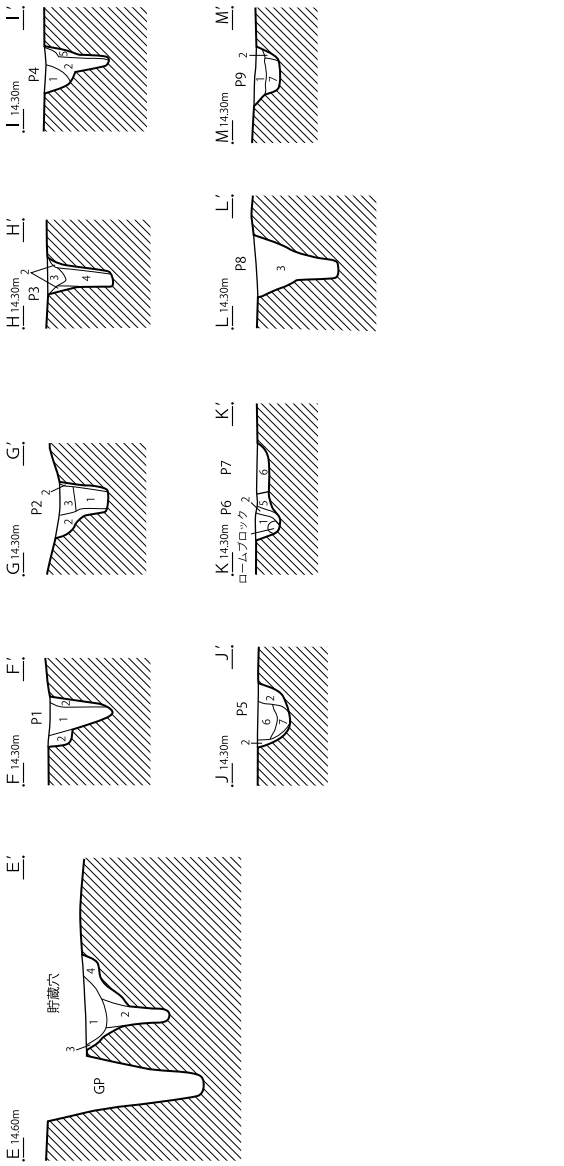


SJ58
1　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック・炭化物少量
2　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック多量　焼土・炭化物少量
3　褐色土　　灰白色粘土ブロック多量
4　暗褐色土　ソフトローム少量　しまり・粘性あり
5　暗褐色土　ソフトローム少量　しまり・粘性あり
6　暗褐色土　ソフトローム密に多量
7　明褐色土　褐色粘土ブロック・ロームブロック多量
8　明褐色土　ロームブロック・ソフトローム多量
9　暗黄褐色土　ロームブロック・ソフトローム多量
10　褐色土　　灰白色粘土密に多量
11　褐色土　　灰白色粘土少量　粘性あり
12　褐色土　　灰白色粘土少量　粘性あり　11層に比して暗い

炉1
1　赤褐色土　赤化した焼土層
2　褐色土　　被熱したロームブロック・焼土多量

炉2
1　褐色土　　炭化物少量
2　暗赤褐色土　赤化した焼土層
3　暗褐色土　ソフトロームとの混土層

第189図　第58号住居跡（1）



貯蔵穴
1　褐色土　　ロームブロック多量　しまりなし
2　褐色土　　ロームブロック多量　しまりなし　1層に比して明るい
3　褐色土　　ロームブロック・ソフトローム多量　しまりあり
4　暗黄褐色土　ロームブロック・ソフトローム密に多量

ＳＪ58　Ｐ1～9
1　褐色土　　ソフトローム多量　しまり弱い
2　暗黄褐色土　ロームブロック・ソフトローム多量　しまりあり
3　褐色土　　ソフトローム少量　しまりなし
4　褐色土　　ソフトローム少量　粘性・しまりなし　1層に比して暗い
5　暗黄褐色土　ソフトローム・ロームブロック多量　よくしまる
　　2層に比して明るい
6　暗褐色土　　炭化物・ロームブロック多量
7　暗褐色土　　大粒のロームブロック多量



第190図　第58号住居跡（2）

1は不整楕円形で長径1.10 m、短径0.62 m、深さ0.10 m、炉跡2は楕円形で長径0.70 m、短径0.45 m、深さ0.10 mである。いずれも掘り方にロームブロックを混ぜた褐色土が充填され、上層に焼土層が形成されていた。地山も被熱していた。炉跡1からは甕の破片が出土している。

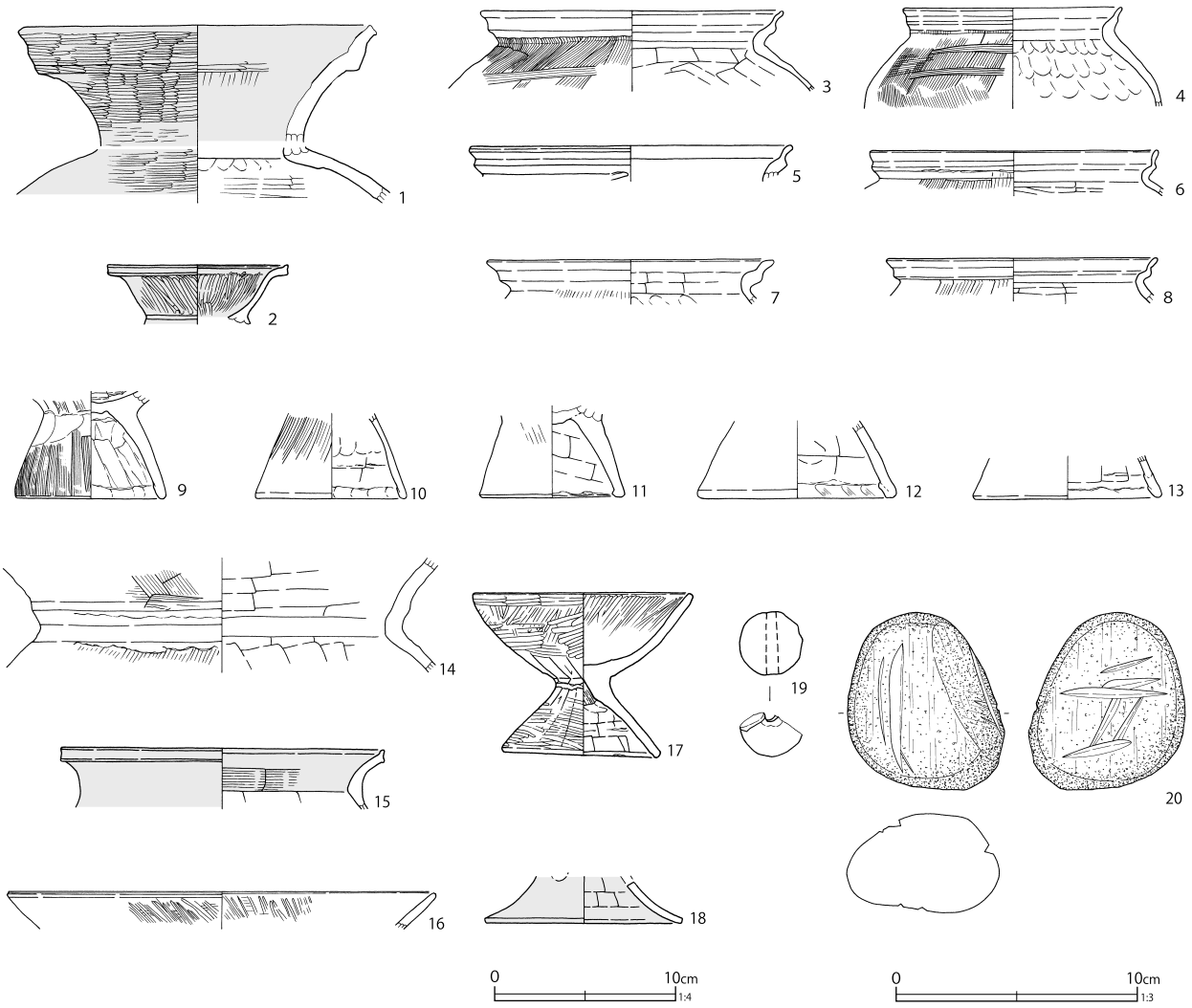
貯蔵穴は南壁の西寄りで検出された。中心が柱穴状を呈しており、あるいは第24号住居跡のような入口部の施設の可能性も考えられる。長辺1.05 m、短辺0.77 m、深さ0.15 mの長方形の掘り込みの片側に方形の掘り込みを設け、更に柱穴状に深さ0.67 mまで掘り下げられていた。覆土はローム土を多く含む褐色土である。台付甕、小型壺の破片が出土している。

ピットは9基検出された。規模は長径0.38～0.52 m、短径0.30～0.49 m、深さ0.10～0.53 mである。Ｐ1～4が主柱穴、Ｐ5・6は入り口部の施設と考えられる。複数の柱痕が認められ、建て替えが行われたと考えられる。柱は抜き取られており、覆土はローム土を含む褐色土、暗黄褐色土である。Ｐ5・9は掘り込みが浅く、補助的な柱穴と考えられる。Ｐ8は深く、同様の深さの貯蔵穴内に認められる柱穴との関係が考えられる。Ｐ6からは甕胴部、Ｐ9からは大型壺、甕の破片が出土している。

壁周溝は幅0.18～0.28 m、深さ0.05～0.13 mで全周している。

遺物はやや多く、床面直上を中心に出土した。古墳時代前期の壺、台付甕、高坏、大型器台、小型器台、鉢、土錘が出土している。

1は二重口縁壺である。口縁部は長く、大きく外反する。内面の剥離が著しく、口縁端部も欠失している。同一個体と考えられる胴部破片が出土しているが直接接合しない。外面は全体に横方向のヘラ磨きが密に施されている。内面は剥離のため不明。胴部内面はヘラナデである。2は小型壺の口縁部で、上位が大きく水平に開き、端部は直



第191図　第58号住居跡出土遺物

立する。

3～13は台付甕である。3～8はS字状口縁台付甕である。3、4は胴部上位までの破片である。いずれも肩部に横刷毛が巡らされている。4は端部の屈曲が弱く、胴部内面に指オサエの痕跡が顕著である。5～8は口縁部の破片で、いずれも丁寧な横ナデによって仕上げられている。内面の下段にはヘラナデが見られる。9～13は脚台部である。9・11はホゾ接合で、外面の刷毛目の様相からも刷毛目台付甕と考えられる。その他は端部の破片で折り返されている。S字状口縁台付甕である。

14は大型の甕である。口縁部は長く延びると考えられる。胴部と口縁部は各々異なる工具による刷毛目が施されている。接合箇所には粘土が貼付され、強くナデつけられている。15は短く外反する口縁部で、端部は直立する。横ナデが施され、外面、口縁部内面が赤彩されている。広口壺の可能性がある。

16・17は高坏である。16は端部のみで、大型である。刷毛目に粗いヘラ磨きが施されている。17は完形である。小振りだが、坏部中位に調整の変換点がある。脚部はハの字状で、端部は開かない。ホゾ接合である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデがベースで、ヘラ磨きが加えられている。18は器台の脚部である。透孔は個数不明。

粘土は精選されている。風化によって溶けており、調整不明。

19は土錘である。所謂土玉で、約３分の１が遺存している。風化のため調整不明。

20は安山岩の砥石である。平坦面は使用によって摩耗し、表裏にＶ字状刃物痕が多数みられる。

本住居跡は４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

第59号住居跡（第192図）

Ｃ区の中央、Ｋ－15グリッドに位置する。第58・61号住居跡、第27号土壙と重複し、いずれよりも古い。遺構の北側は調査区域外にかかる。削平を大きく受けており、炉跡の位置と地山の変色から住居跡の範囲を推定した。検出範囲の長辺と炉跡の位置から、南北方向、Ｓ－16°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸方形と推定される。規模は、検出範囲で主軸方向5.00ｍ、直交軸方向3.55ｍである。床面は若干凹凸がある。貼床、掘り方は検出されなかった。

炉跡は住居跡のほぼ中央で３箇所検出された。新旧関係は不明である。炉跡１は不整楕円形で長径0.55ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.02ｍ、炉跡２は隅丸方形で長径0.55ｍ、短径は検出範囲で0.35ｍ、深さ0.10ｍ、炉跡３は不整形で長径0.67ｍ、短径は検出範囲で0.55ｍ、深さ0.08ｍである。いずれも焼土層が形成されていた。炉跡１・２からは壺、台付甕の破片が出土した。

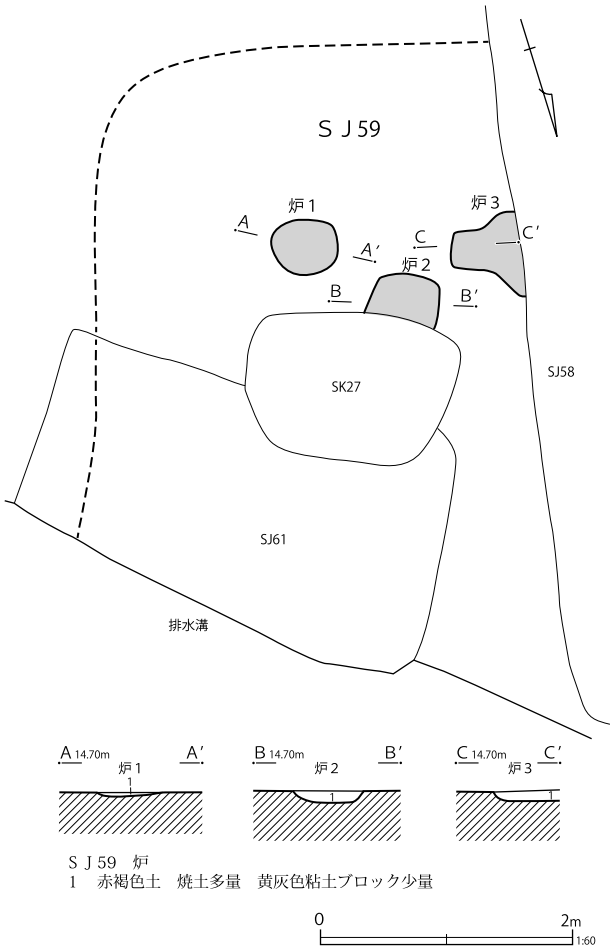
遺物は少なく、古墳時代前期の壺、台付甕の破片が出土している。実測個体はない。

本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第60号住居跡　　欠番

第61号住居跡（第193・194図）

Ｃ区の中央、Ｊ・Ｋ－15グリッドに位置する。第59号住居跡、第27号土壙と重複し、前者より新しく、後者より古い。遺構の北東側半分は調査区域外にかかる。炉跡の位置から、北西－南東方向、Ｎ－52°－Ｗが主軸方位と考えられる。



第192図　第59号住居跡

平面形は、炉跡の位置から北西－南東方向がやや長い長方形と推定される。各辺は直線的である。規模は主軸方向3.43ｍ、直交軸方向は検出範囲で1.98ｍ、深さ0.30ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、部分的に炭化物が分布していた。

貼床、掘り方は検出されず、炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。不整方形で長軸0.62ｍ、短軸0.57ｍ、深さ0.05ｍである。掘り方にロームを混ぜた褐色土が充填され、上層に焼土層が形成されている。地山も被熱する。

遺物は少なく、床面直上を中心に、古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏が出土している。

１は坩の口縁部である。器肉が薄い。

２・３は甕である。２は口縁部が屈曲して外反する。やや厚めで、色調は白い。３は輪台状の底部である。外面はヘラケズリ後刷毛目が施され、更にヘラ磨きが加えられている。内面ヘラ磨き。底面ヘラナデ。

４は器台の脚部である。器面は滑らかで胎土は精選されている。内外面ともヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。外面赤彩。

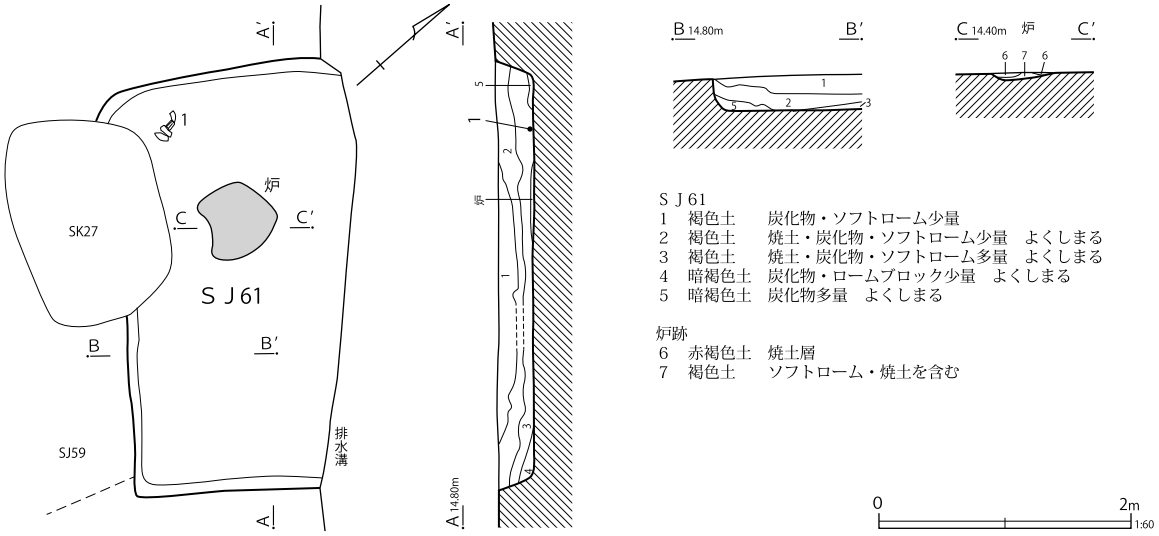
５は古墳時代後期の甕底部である。外面は真っ黒に煤けている。外面、底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。

本住居跡は４世紀前半､屋敷裏Ⅲ－３期である。

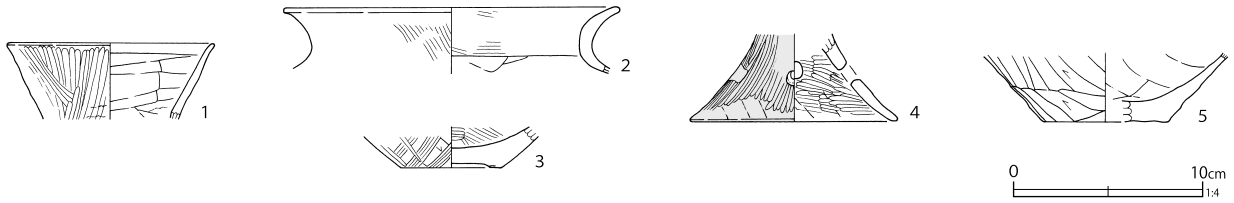
第 62 号住居跡（第 195・196 図）

Ｃ区の中央、Ｋ・Ｌ－13・14 グリッドに位置する。遺構の南西側の大部分が調査区域外にかかる。炉跡は調査区域外になると思われる。検出範囲の長軸を主軸とすると、東西方向、Ｎ－80°－Wが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸方形と推定される。各辺は直線的である。規模は、検出範囲で主軸方向 6.51 ｍ、直交軸方向は 3.68 ｍ、深さ 0.45 ｍである。覆土は炭化物、ローム土を含む褐色土、暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があ



第193図　第61号住居跡



第194図　第61号住居跡出土遺物

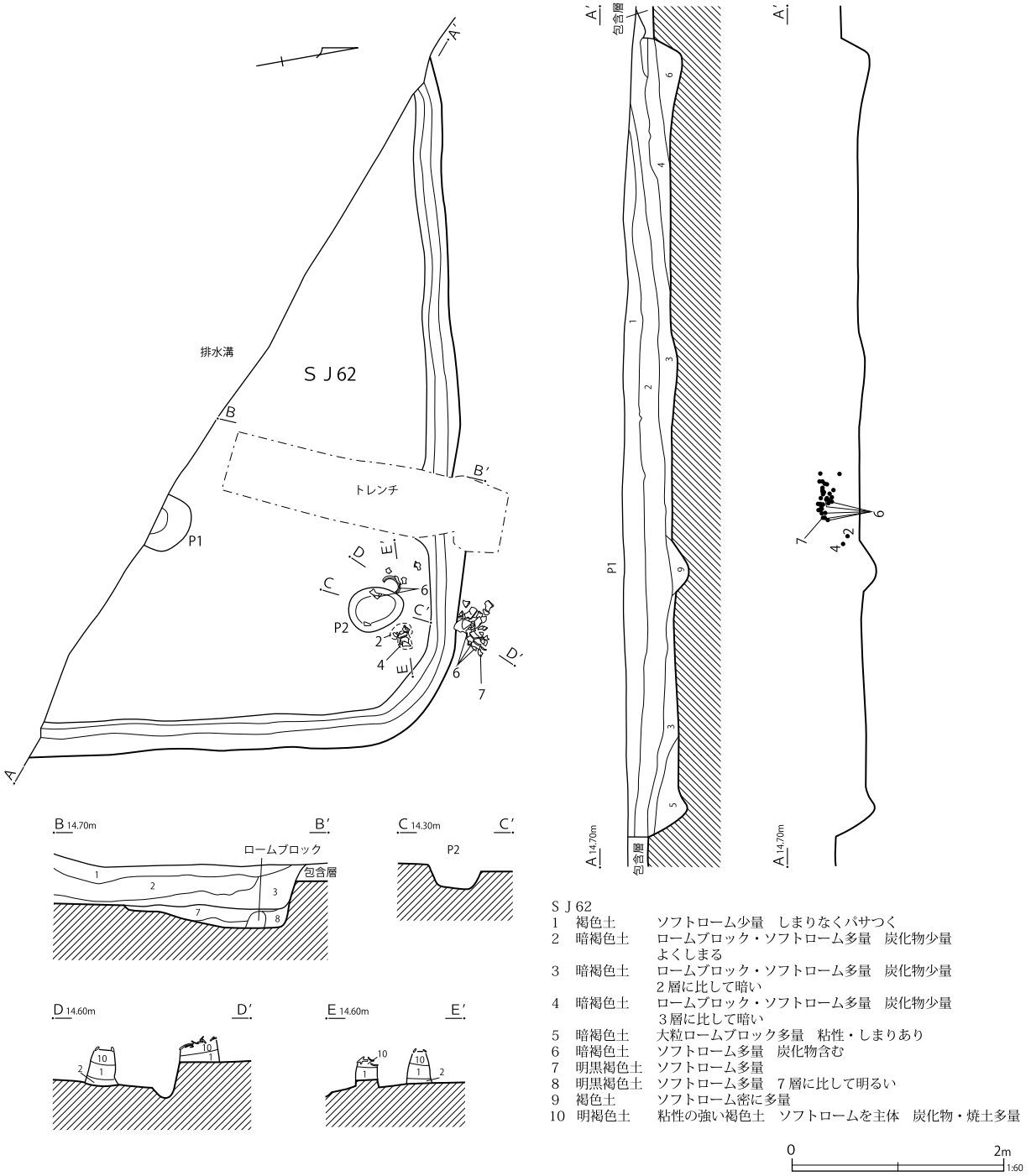
第42表　第61号住居跡出土遺物観察表（第194図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坩	(10.9)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐		
2	土師器	甕	(17.4)	[3.5]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	灰黄褐		
3	土師器	甕	－	[2.1]	(5.4)	ＡＣＥＩＫ	30	普通	にぶい橙		
4	土師器	器台	－	[4.5]	(10.9)	ＡＥＨＩＫ	25	普通	明赤褐	外面赤彩　№1	
5	土師器	甕	－	[3.6]	(6.7)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	

り、部分的に炭化物が分布していた。面的には捉えられなかったが、第７層が貼床、第８層が掘り方と考えられる。

ピットは２基検出された。Ｐ１は掘り込み面が３層上面にあり、本住居跡との関係は不明瞭である。規模は径 0.55 m、深さ 0.15 mである。Ｐ２は北東コーナー手前で検出された。規模は長径 0.55 m、短径 0.40 m、深さ 0.20 mである。

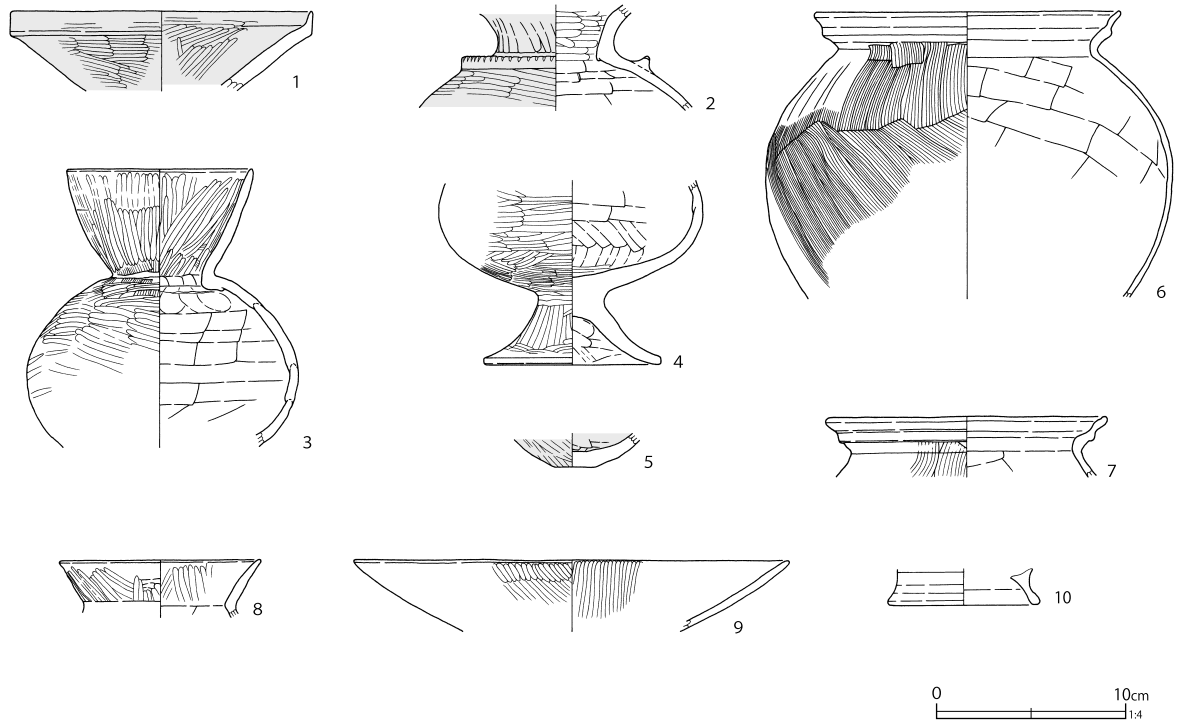
遺物はやや多く、覆土全体から出土している。特に北東コーナーの最上層に北側から一括して流れ込んだ状態で出土したものが多い。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、土玉



ＳＪ62
1　褐色土　　ソフトローム少量　しまりなくパサつく
2　暗褐色土　　ロームブロック・ソフトローム多量　炭化物少量　よくしまる
3　暗褐色土　　ロームブロック・ソフトローム多量　炭化物少量　２層に比して暗い
4　暗褐色土　　ロームブロック・ソフトローム多量　炭化物少量　３層に比して暗い
5　暗褐色土　　大粒ロームブロック多量　粘性・しまりあり
6　暗褐色土　　ソフトローム多量　炭化物含む
7　明黒褐色土　ソフトローム多量
8　明黒褐色土　ソフトローム多量　７層に比して明るい
9　褐色土　　ソフトローム密に多量
10　明褐色土　　粘性の強い褐色土　ソフトロームを主体　炭化物・焼土多量

0　2m　1:60

第195図　第62号住居跡



第196図　第62号住居跡出土遺物

第43表　第62号住居跡出土遺物観察表(第196図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	器台	(16.0)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	灰白	内外面赤彩	223-3
2	土師器	壺	－	[5.5]	－	ＣＤＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	畿内系二重口縁壺か　外面赤彩　№２	223-3
3	土師器	小型壺	(9.8)	[14.6]	－	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい橙		167-5
4	土師器	脚付壺	－	[9.6]	(9.4)	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	脚付長頸壺　№１	167-4
5	土師器	鉢	－	[2.8]	2.1	ＡＥＨＩＫ	55	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
6	土師器	台付甕	16.2	[15.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	外面煤付着　№３・４・24・25・30	167-6
7	土師器	台付甕	(15.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№23	
8	土師器	鉢	(10.6)	[3.0]	－	ＡＣＩＫ	20	普通	暗灰黄		
9	土師器	高坏	(23.1)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	明赤褐		
10	土師器	高台付坏	－	[1.8]	7.7	ＡＣＨＩＫ	95	普通	橙		

である。他に縄文時代中期の深鉢、弥生時代中期の甕、平安時代のロクロ土師器の高台付坏が混入で出土している。

１は土師器の器台である。大型で、口縁部が直立する。壺の可能性もあるが、北近畿地方の大型器台の模倣品と考えた。２は壺の頸部で、突帯が貼付されている。突帯には棒状工具による刻み目が施されている。畿内系二重口縁壺か。

３は小型壺である。口縁部がやや内湾し、やや崩れた瓢壺と考えられる。口縁部内外面、胴部外面刷毛目後ヘラ磨き、内面ヘラナデ。頸部内面は粘土紐が貼付され、指頭痕が残る。

４は脚付壺である。北陸系の装飾壺の模倣と考えられ、長頸になる可能性がある。外面丁寧なヘラ磨き。

５・８は鉢である。５は底部で、外面、底面ヘラ磨き、内面ヘラナデ、内外面赤彩。８は暗褐色を呈する。横ナデ後内外面ヘラ磨き。

６・７はＳ字状口縁で台付甕である。端部は摘まれ、内面が凹線状になる。両者とも刷毛目後横ナデが施されている。６の内面は風化がすすむ。

９は高坏で、やや浅めである。

10は平安時代のロクロ土師器高台付坏で、接合面できれいに高台が剥がれている。利根川流域産。

本住居跡は3世紀後半､屋敷裏Ⅲ－2期である。

第63号住居跡（第197・198図）

C区の中央、J－13グリッドに位置する。第64・67号住居跡と重複し、いずれよりも新しい。明確な炉跡は見られず､長軸方向を主軸とすると、S－78°－Eが主軸方位と考えられる。

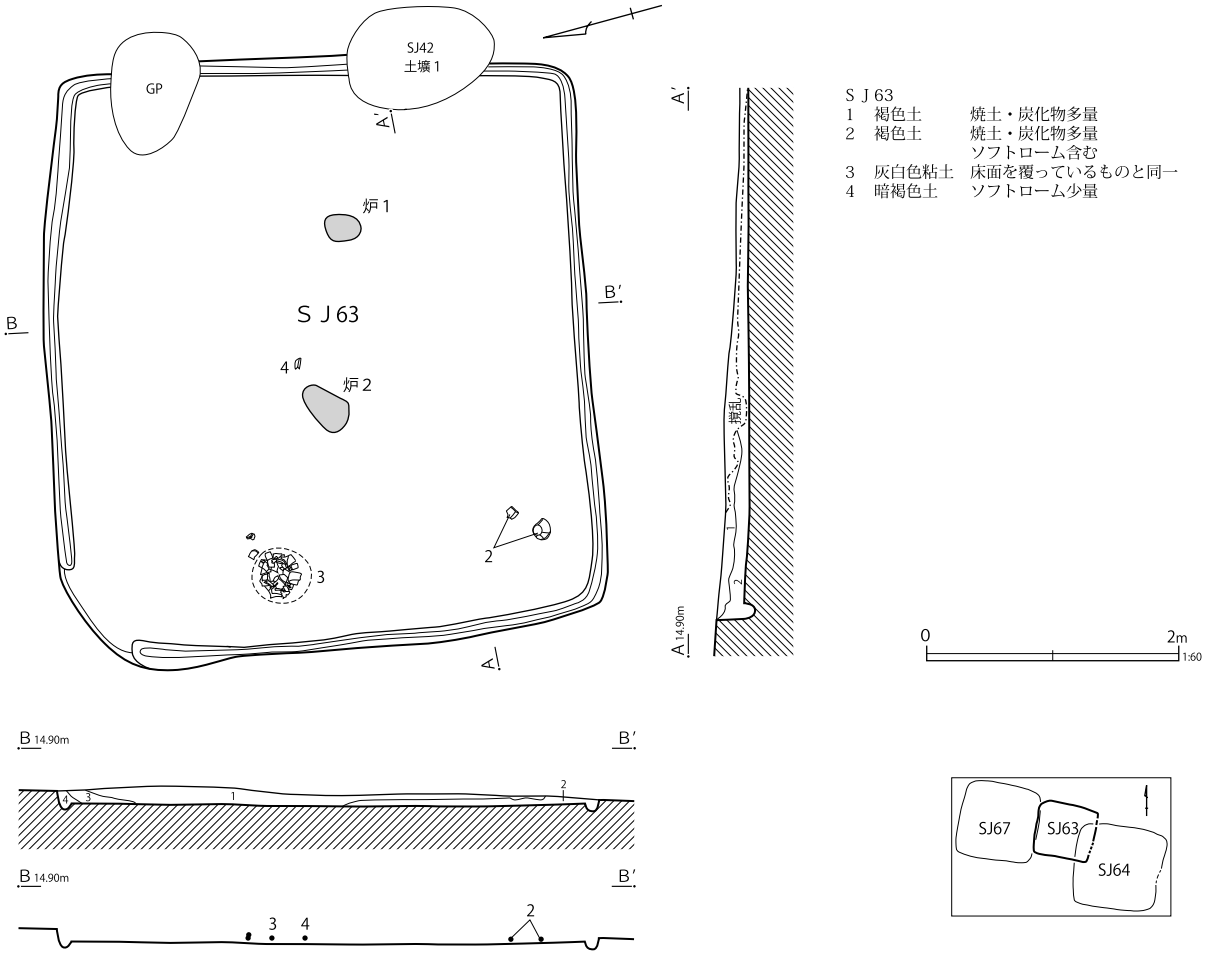
平面形は東西方向がやや長い長方形で、北西コーナーのみが丸みを帯びるが、他の各辺は直線的である。規模は、主軸方向4.70 m、直交軸方向4.35 m､深さ0.10 mである。覆土は焼土､炭化物、ローム土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面はほぼ平坦で、全体に灰白色粘土が分布し、貼床の可能性が高い。掘り方は検出されなかった。

炉跡は住居跡のほぼ中央で2箇所検出された。焼土層が残るのみで掘り込みが見られない。新旧関係は不明である。炉跡1は不整楕円形で長径0.30 m、短径0.18 m、炉跡2は楕円形で長径0.40 m、短径0.25 mである。

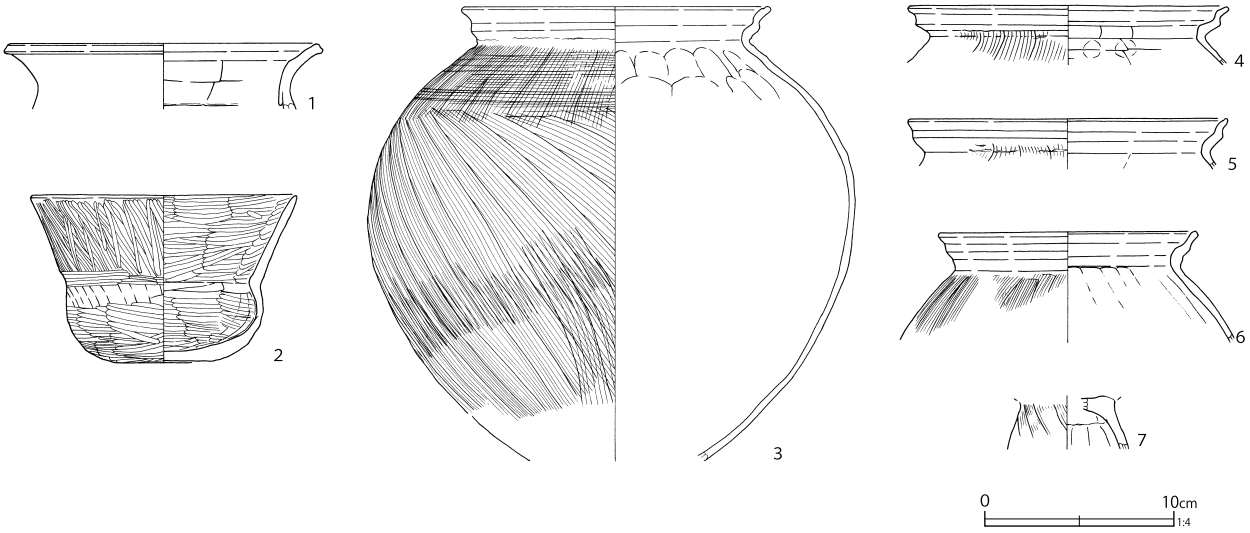
壁周溝は幅0.08～0.22 m、深さ0.05～0.08 mである。北西コーナーを除き、全周している。

遺物は少なく、遺構の西側を中心に古墳時代前期の壺、台付甕、坩が出土した。1の台付甕は西壁際で潰れた状態で出土した。2の坩は第67号住居跡出土の破片と接合する。

1は土師器壺の口縁部である。甕と同様の口縁部だが、接合方法が甕と異なるため広口壺と考え



第197図　第63号住居跡



第198図　第63号住居跡出土遺物

第44表　第63号住居跡出土遺物観察表（第198図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.3)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩ	10	良好	にぶい橙	二重口縁壺	
2	土師器	坩	13.9	8.8	5.0	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	№５・６　SJ67と接合	167-7
3	土師器	台付甕	16.1	[23.9]	－	ＣＤＨ	80	良好	にぶい黄橙	№１	168-1
4	土師器	台付甕	(16.8)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№４	
5	土師器	台付甕	(16.8)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	台付甕	(13.6)	[5.9]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
7	土師器	台付甕	－	[2.8]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		

た。外面横ナデ､内面ヘラナデ。２は大型の坩で、平底である。体部は低平で、口縁部は長く直線的に開く。内外面ヘラナデ後ヘラ磨き。底面ヘラ磨き。

３～７はＳ字状口縁台付甕である。３は口縁部がやや小さく、胴部中位が張る球形に近いプロポーションである。胴部の刷毛目は３段で櫛目に近い｡頸部から肩部まで横刷毛が施されているが、疎らでやや不明瞭である。器肉が薄く、軽量である。４～６は口縁部から胴部上位の破片である。５は口縁部上端から被せた粘土が浮いて開いている。６は外面の横ナデが頸部より下まで及んでいる。７は接合部で、天井部に下位から粘土が充填され、ナデつけられている。

本住居跡は３世紀後半､屋敷裏Ⅲ－２期である。

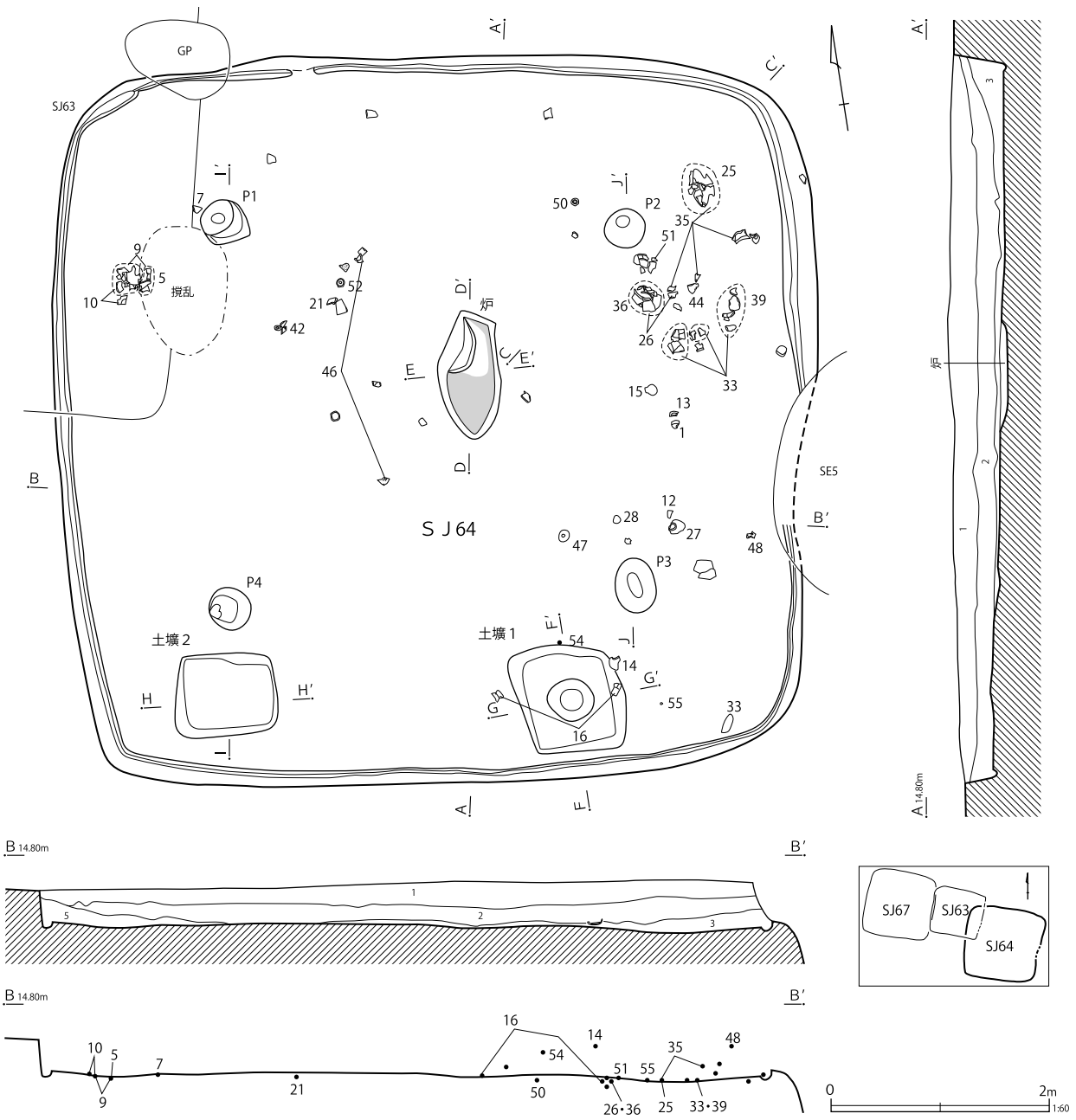
第 64 号住居跡（第 199 ～ 202 図）

Ｃ区の中央、Ｊ・Ｋ－ 13・14 グリッドに位置する。第 63 号住居跡、第５号井戸跡と重複し、いずれよりも古い。炉跡の位置から、南北方向、Ｎ－７°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸方形で､各辺は丸みを帯びている。規模は、主軸方向 6.68 ｍ、直交軸方向 7.00 ｍ、深さ 0.50 ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、土壙、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。不整形で長径 1.15 ｍ、短径 0.55 ｍ、深さ 0.15 ｍである。掘り方は炭化物が充填され、上層に焼土層が形成されていた。

土壙は南壁沿いで２箇所検出された。土壙１は中心が柱穴状を呈しており、あるいは第 24 号住居跡のような入口部の施設の可能性も考えら



ＳＪ64
1　褐色土　　ロームブロック・炭化物少量
2　褐色土　　ロームブロック・炭化物多量
3　明褐色土　炭化物・焼土多量
4　明褐色土　炭化物多量
5　明褐色土　大粒のロームブロック・ソフトローム多量
6　暗褐色土　焼土・炭化物多量
7　暗褐色土　ロームブロック・ソフトロームを混入

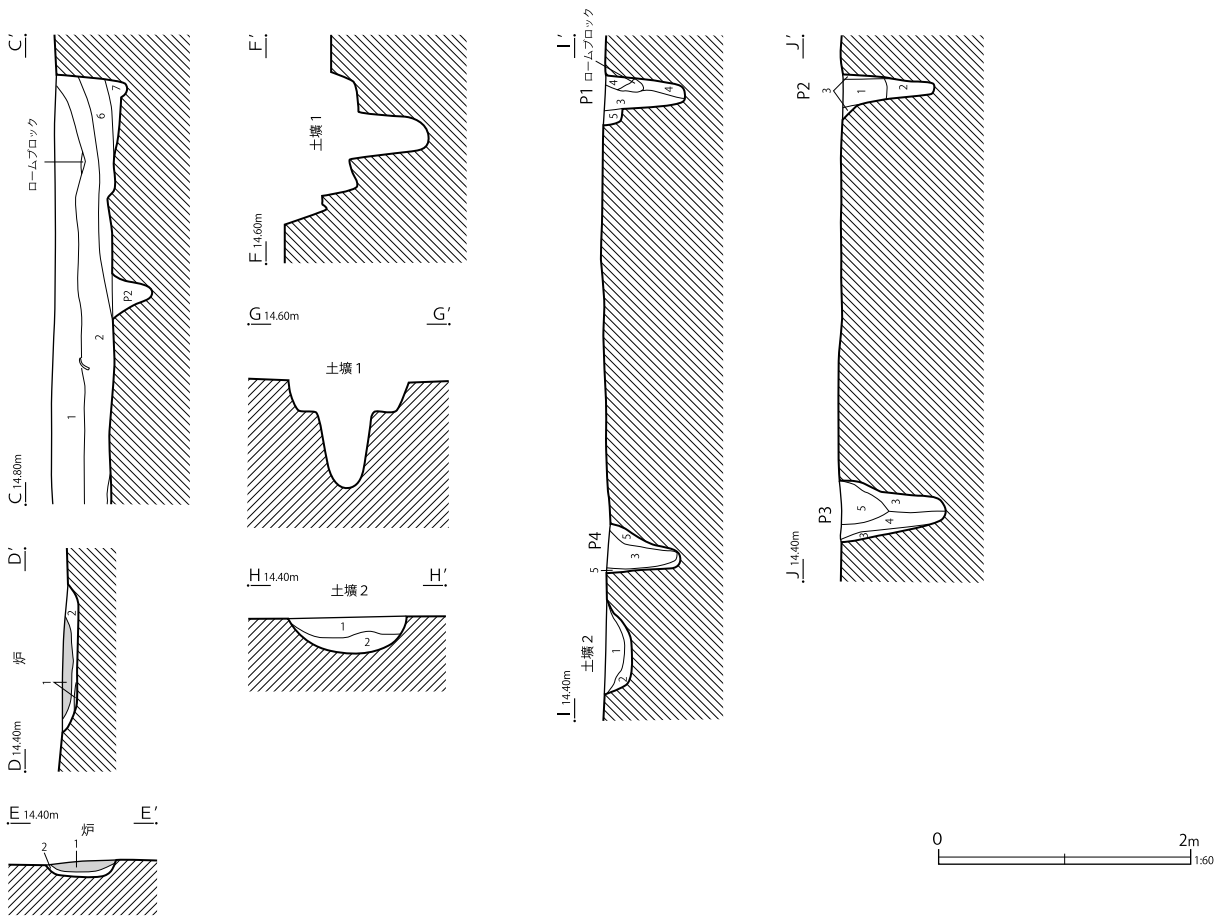
炉
1　赤褐色土　赤化した焼土範囲
2　黒褐色土　炭化物多量

土壙２
1　褐色土　　ソフトローム多量　粘性強い
2　暗褐色土　大粒のロームブロック多量　粘性あり

Ｐ１・４
3　褐色土　　小粒ロームブロックを密に多量　しまり弱い
4　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック多量　よくしまっている
5　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック多量　１層に比して明るい

Ｐ２・３
1　黒褐色土　　小粒ロームブロック・ソフトローム多量　しまりなし
2　暗黄褐色土　小粒ロームブロック・ソフトロームの混在土
3　褐色土　　ソフトロームを密に混入　しまりあり
4　黒褐色土　　大粒ロームブロック・ソフトロームを混入　しまりなし
5　褐色土　　大粒ロームブロック多量　よくしまっている

第199図　第64号住居跡（１）



第200図　第64号住居跡（２）

れる。長短辺 1.00 m、深さ 0.20 mの方形の掘り込みに、柱穴状に径 0.38 m、深さ 0.85 mまで掘り下げている。覆土は不明である。土壙２は長辺 0.95 m、短辺 0.55 m、深さ 0.30 mの方形である。覆土はローム土を多く含む褐色土、暗褐色土である。貯蔵穴の可能性がある。

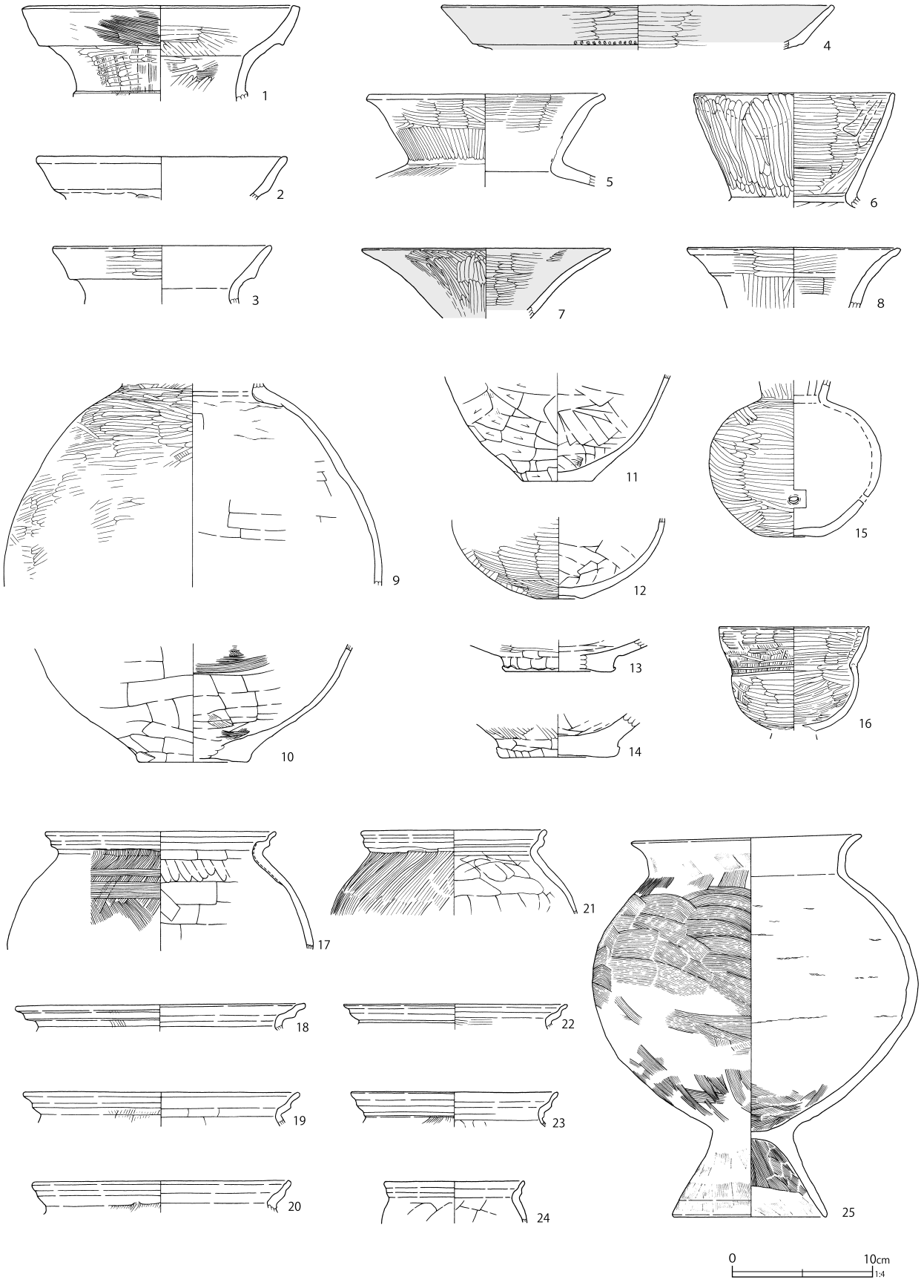
ピットは４基検出された。主柱穴と考えられる。規模は長径 0.37 ～ 0.50 m、短径 0.37 ～ 0.42 m、深さ 0.56 ～ 0.83 mである。柱は抜き取られており、覆土はローム土を含む褐色土、黒褐色土、褐色土、暗黄褐色土である。

壁周溝は幅 0.08 ～ 0.33 m、深さ 0.03 ～ 0.05 mで全周している。

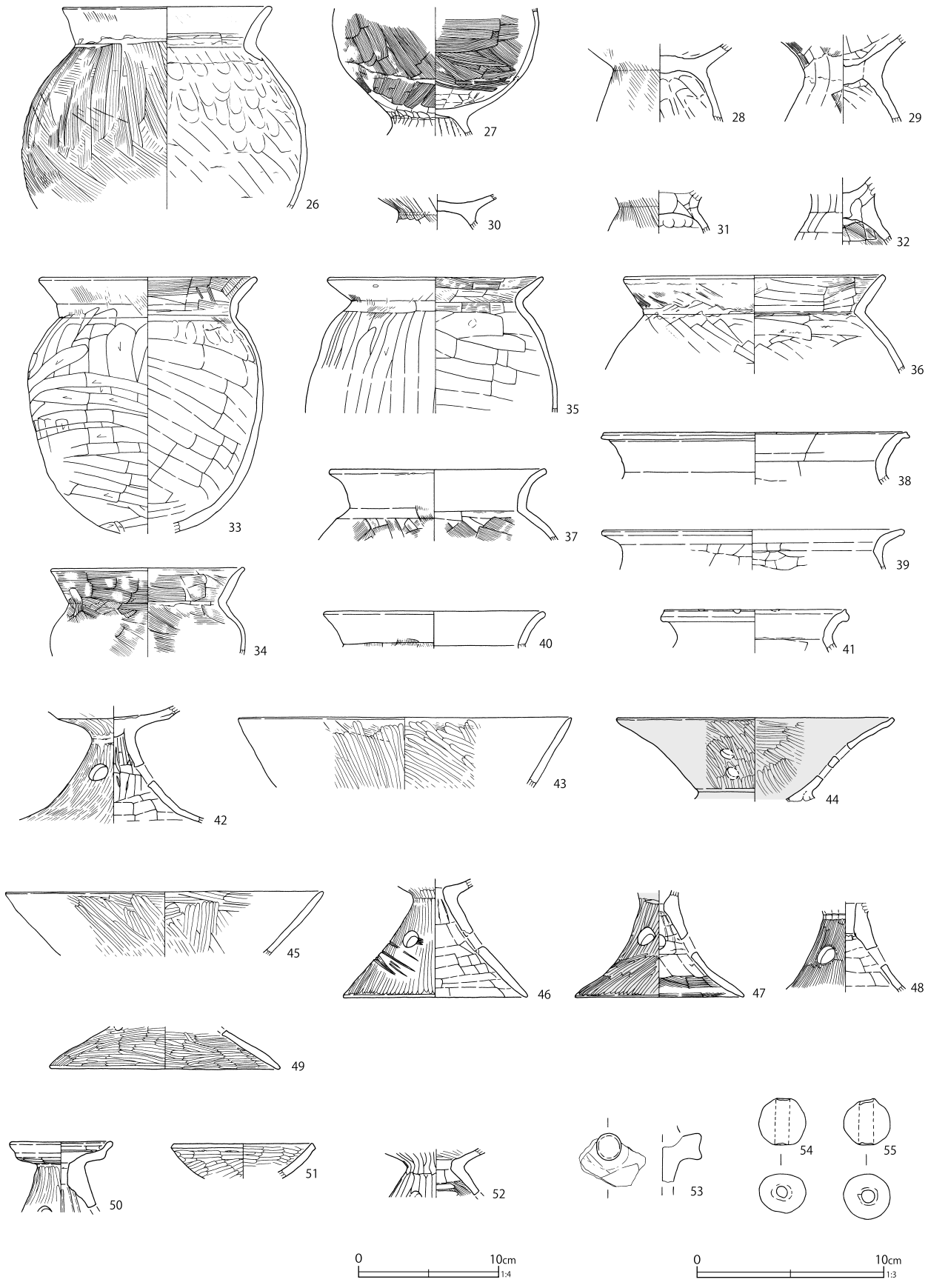
遺物はやや多く、床面近くを中心に出土している。特にＰ２周辺のものが多い。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、坩、土錘で、遺存率が高い。39 の高坏は第 67 号住居跡のものと接合関係がある。

１～ 14 は壺である。２は外面、５・９・14 は内外面に煤の付着がみられる。１～４は複合口縁の口縁部である。１は中位に段があり、頸部に突帯が貼付、東海地方の影響が窺える。刷毛目調整をベースにヘラ磨きが施されている。２は複合部にかけられた粘土が下位にまで及んでいる。ベースは刷毛目調整。３は風化が著しく、大粒の酸化鉄を含む。４は径が大きく、内外面ヘラ磨き。複合部の下端に刻み目が施され、更に赤彩が施されている。北陸系の口縁部と考えられる。

５～８は単口縁壺である。形態は様々である。５は上位が外側に折り返される。６は若干内湾気味に立ち上がる。７は外反しながら大きく開く。８は開いた上位が若干段を持っている。調整はい



第201図　第64号住居跡出土遺物（1）



第202図　第64号住居跡出土遺物（２）

第45表　第64号住居跡出土遺物観察表（第201・202図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(20.0)	[6.8]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	橙	№31	224-3
2	土師器	壺	(18.0)	[3.1]	－	ＣＥＨＩＫ	10	普通	灰褐	外面煤付着	
3	土師器	壺	(15.9)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	壺	(28.3)	[3.1]	－	ＨＩＫ	10	普通	赤褐	内外面赤彩	224-3
5	土師器	壺	(17.2)	[6.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№10	
6	土師器	壺	14.5	[8.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	灰黄		
7	土師器	壺	(18.0)	[4.9]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面赤彩　№12	
8	土師器	壺	(15.4)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	壺	－	[14.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№10・11	168-4
10	土師器	壺	－	[8.3]	(8.2)	ＡＣＥＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№９・11	168-5
11	土師器	壺	－	[7.5]	5.0	ＡＥＨＩＫ	30	普通	赤褐	内外面煤付着	168-2
12	土師器	壺	－	[5.6]	3.2	ＡＣＥＨＩ	40	良好	浅黄橙	№29	
13	土師器	壺	－	[2.2]	(8.1)	ＡＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№32	
14	土師器	壺	－	[3.1]	8.9	ＡＣＤＥＨＩＫ	55	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№３	
15	土師器	壺	－	[11.0]	4.2	ＡＣＥＨＩＪＫ	95	良好	にぶい赤褐	下半に穿孔あり　外面黒斑あり　№33	168-3
16	土師器	脚付坩	10.8	[7.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	100	普通	にぶい赤褐	内外面黒斑あり　№１・４	168-6
17	土師器	台付甕	(16.6)	[8.3]	－	ＣＥＨＩＪＫ	10	普通	褐灰	内外面煤付着	
18	土師器	台付甕	(21.0)	[1.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
19	土師器	台付甕	(20.0)	[2.4]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	褐灰	外面煤付着	
20	土師器	台付甕	(18.6)	[2.3]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	黒褐	外面煤付着	
21	土師器	台付甕	13.4	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№56	
22	土師器	台付甕	(16.0)	[1.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
23	土師器	台付甕	(15.0)	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
24	土師器	甕	(10.1)	[2.9]	－	ＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
25	土師器	台付甕	16.4	27.3	11.0	ＣＥＦＨ	80	良好	黒褐	№50	169-1
26	土師器	台付甕	15.2	[14.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	赤褐	内外面煤付着　№38・46	169-2
27	土師器	台付甕	－	[9.1]	－	ＣＨＩＫ	40	普通	にぶい赤褐	外面煤付着　№30	168-7
28	土師器	台付甕	－	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩ	70	普通	にぶい黄橙	№27	
29	土師器	台付甕	－	[6.2]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	60	普通	浅黄橙	外面煤付着	
30	土師器	台付甕	－	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	85	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
31	土師器	台付甕	－	[3.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄褐		
32	土師器	台付甕	－	[4.8]	－	ＡＣＥＧＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	脚部内面煤付着	
33	土師器	甕	(15.8)	[18.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	赤	№6・34・35・54	169-3
34	土師器	小型甕	(14.0)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
35	土師器	甕	(15.6)	[9.6]	－	ＣＥＨＩＫ	70	普通	褐灰	内外面煤付着　№39・41・50・52	169-4
36	土師器	甕	(18.9)	[7.0]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	20	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№46	
37	土師器	甕	(15.6)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐		
38	土師器	甕	(22.3)	[3.7]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
39	土師器	甕	(21.9)	[2.8]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	明褐	内外面煤付着　№54	
40	土師器	甕	(16.0)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	
41	土師器	甕	13.0	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
42	土師器	高坏	－	[8.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	40	普通	明赤褐	№21	170-1
43	土師器	高坏	(24.0)	[5.0]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
44	土師器	大型器台	(20.0)	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№40	
45	土師器	高坏	(22.8)	[4.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
46	土師器	器台	－	[8.3]	13.3	ＡＣＩＫ	45	普通	にぶい赤褐	№15・25	169-5
47	土師器	器台	－	[7.5]	12.2	ＡＣＥＨＩＪＫ	95	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩　№26	169-6
48	土師器	器台	－	[6.3]	－	ＡＣＨＩＫ	65	普通	浅黄橙	№８	170-2
49	土師器	高坏	－	[3.0]	(16.6)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	器台	(7.4)	[4.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№44	170-3
51	土師器	器台	(10.4)	[2.4]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№48	
52	土師器	器台	－	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	№17	
53	土製品	杷手付鉢	長さ2.8　幅3.5 重さ10.2ｇ			ＡＩＫ	－	普通	にぶい黄橙	つまみ径1.3×1.3　長さ1.1	169-7
54	土製品	土錘	径2.4×2.1　高さ2.5 孔径0.6×0.7 重さ10.7g			ＡＣＩ	100	普通	黒	土玉　№２	218-23
55	土製品	土錘	径2.45×2.4 高さ2.5　孔径0.7 重さ11.9g			ＣＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	土玉　№５	218-24

ずれもヘラ磨きで、６は下地の刷毛目と、焼きムラ状の黒斑が確認できる。８の上位は横方向ヘラ磨きで、複合部を意識していると考えられる。９は胴部上半で、ナデ肩になると考えられる。外面刷毛目後ヘラ磨き､肩部内面には開裂が見られる。内面剥離著しい。

10 ～ 12 は胴部下半である。外面の調整はまちまちで、10 がヘラナデ、11 がヘラケズリ、12 がヘラ磨きである。各々器形も異なり、調整との対応関係が考えられる。10・11 の内面は刷毛目後ヘラナデ、12 はヘラナデのみである。11 は赤変しており甕の可能性もある。

13・14 は突出する底部である。外周は 13 がナデ､14がヘラナデである｡14の底面は輪台状で、ヘラナデが施されている。

15 は小型壺で、胴部が完存する。外面全面ヘラ磨き、内面の調整は確認できなかった。下位に径５mm の焼成前穿孔が１箇所認められる。16 は底部に脚の剥離痕が見られ、脚付坩と考えられる。全体に刷毛目後細かなヘラ磨きが施されている。内外面黒斑。

17 ～ 23・25 ～ 32 は台付甕である。17 ～ 23 はＳ字状口縁台付甕、25・26 は単口縁の台付甕、27 ～ 32 は甕と脚部の接合部である。24 も小型のＳ字状口縁台付甕と考えられるが、平底になる場合もあり、ここでは甕とした。法量的には鉢とも言い得る。Ｓ字状口縁台付甕は、刷毛目が施された口縁部下段に上段の粘土が被る形で口縁部と胴部が接合され、上位からの横ナデが頸部に線上に爪の痕跡として認められる。外面は羽状の刷毛目が施され、17 は横刷毛が３段加えられている。内面に一枚粘土が被せられており、器肉がやや厚くなっている。

単口縁の甕は頸部がくの字状になり、いずれも端部は丸く収められている。口縁部接合の際に内外に粘土が被せられ、頸部の内外に不連続な面ができている。25 は口縁部が直立した後外反する球形胴、やや小型の脚台部という全形が明らかな唯一の個体である。全体に細かな刷毛目調整が施されており、胴部内面はヘラナデである。脚台部はホゾ接合である。26 の胴部内面には指オサエ、粘土の積み上げ痕が多く残り、ナデが加えられて平滑に整えられている。27 は胴部がやや小型になると考えられる。下位に大きな接合単位が認められ、上下で調整が不連続となる。胴部内外面刷毛目。脚台部はホゾ接合で、細かなヘラナデによって接合されている。

28・30・31 はＳ字状口縁台付甕の接合部である。接合箇所には砂を混ぜた粘土が充填されている。31 は胴部内面側が剥離しており、上下から粘土を充填して接合するＳ字状口縁台付甕独特の接合方法が確認された。29・32 は刷毛目台付甕の脚台部で、ホゾ接合である。29 の充填された臍は色調が異なり、白色微粒子を多く含む。外面は刷毛目後ヘラナデ、内面はヘラナデで、天井部は強くナデ込まれている。32 は中心付近から割

れており、臍の挿入方法が明瞭である。この破片からは筒状の脚台部に胴部が乗せられた後、胴部側から臍が挿入され、脚台部天井に粘土が充填されて強くナデつけられているのが分る。

33 ～ 40 は甕である。33・35 は長胴気味で外面ヘラケズリ、器面は凹凸が目立つ。口縁部は刷毛目後横ナデ、胴部内面はヘラナデである。35 は口縁部が歪んでいる。36 ～ 40 は口縁部の破片である。36 は径が大きく、やや大型になると思われる。内外面とも刷毛目後ヘラナデ。口縁部上位からの粘土が頸部内外面で不連続になっている。38 は端部が外側に引き延ばされ、面を持っている。34 は小型で刷毛目調整である。41 は内外面に煤が厚く付着し、２次被熱を受けることから甕としたが､径が小さく他器種の可能性もある。端部は直立する面を持ち、棒状の工具によると思われる押捺が見られる。

42 ～ 45・49 は高坏である。42・43・45 は坏部の下段に稜を持つ高坏と考えられる。43・45 はやや深身の坏部である。焼成が良く、刷毛目後内外面に丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土に金雲母を多く含む。42 は脚部で、坏部下位に段が認められる。ホゾ接合。外面はヘラ磨き、内面上位ヘラケズリ、下位ヘラナデである。44 は北陸系の高坏と考えたが､大型器台の可能性もある。坏部に２個一対の透孔が開けられている。下端は剥離しており、円板状の部位に接合すると考えられる。内外面赤彩。49 は小型高坏の脚部と考えられる。大きく直線的に開く。内外面ヘラ磨き。透孔は１箇所の半分しか遺存していない。

46 ～ 48・50 ～ 52 は器台である。46 ～ 48 は脚部である。裾は開かず、直線的に収まる。接合部は良く締まっており､内面に絞り目が見られる。外面ヘラ磨き、内面はヘラナデが施される。47 の内面には下地の刷毛目が残る。46 は外面に刃物痕が見られる。47 の脚部内面には部分的に赤彩が見られる。透孔は割り付けが等分でなく、片側に寄っている。48 の透孔は両側からの穿孔である。50 ～ 52 は器受部である。形態は様々である。52 は器受部と脚部の粘土が異なり、接合部が太い。X字状になる可能性がある。

53 は小型の鉢で把手に突起が貼付されている。胴部はヘラナデ後ナデ｡三韓系土器の可能性がある。

54･55 は土錘､所謂土玉である。全体ナデ調整。54 は黒色を呈し、55 は焼きムラがある。

本住居跡は４世紀後半､屋敷裏Ⅲ－４期である。

第 66 号住居跡（第 203 ～ 206 図）

Ｃ区の西側、Ｊ－ 12 グリッドに位置する。第 67・72・73 号住居跡と重複し、第 29 号土壙よりも古く、後者よりも新しい。全体に削平を受けており、地山の変色範囲と炉跡、遺物の分布から遺構の範囲を推定した。炉の位置から東西方向、Ｎ－ 68° －Ｗが主軸方位と考えられる。

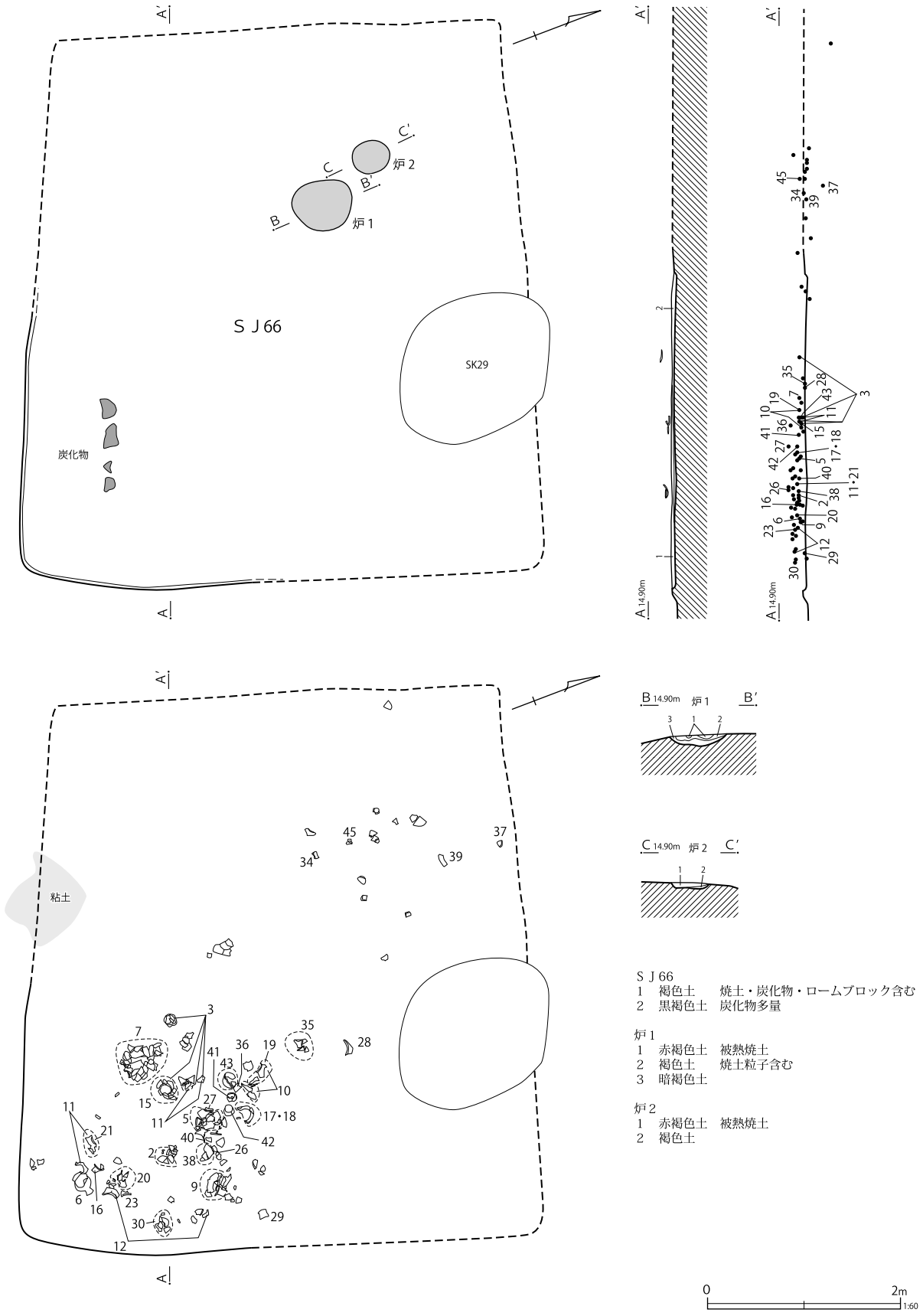
平面形は隅丸方形で、各辺は直線的になるものと推定される。規模は、主軸方向 5.70 ｍ、直交軸方向 5.40 ｍである。遺構の南東部は覆土が遺存し､深さ 0.05 ｍの掘り込みがある｡覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土の単層である。南東コーナー寄りでは炭化物がまとまって分布していた。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

炉跡は住居跡の中央、やや北西側で２箇所検出された。炉跡１は不整円形で長径 0.62 ｍ、短径 0.53 ｍ、深さ 0.10 ｍである。炉跡２は楕円形で長径 0.40 ｍ、短径 0.33 ｍ、深さ 0.05 ｍである。掘り方は褐色土、暗褐色土が充填され、上層に焼土層が形成されていた。

遺物は多く、遺構の南東側の床面近くを中心に出土した｡器種は古墳時代前期の完形率の高い壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台である。39 の高坏は第 67 号住居跡のものと接合関係がある。

１は壺の口縁部である。頸部はくの字状で、直線的に開く。

２・３は小型壺である。２は口縁部で直線的、

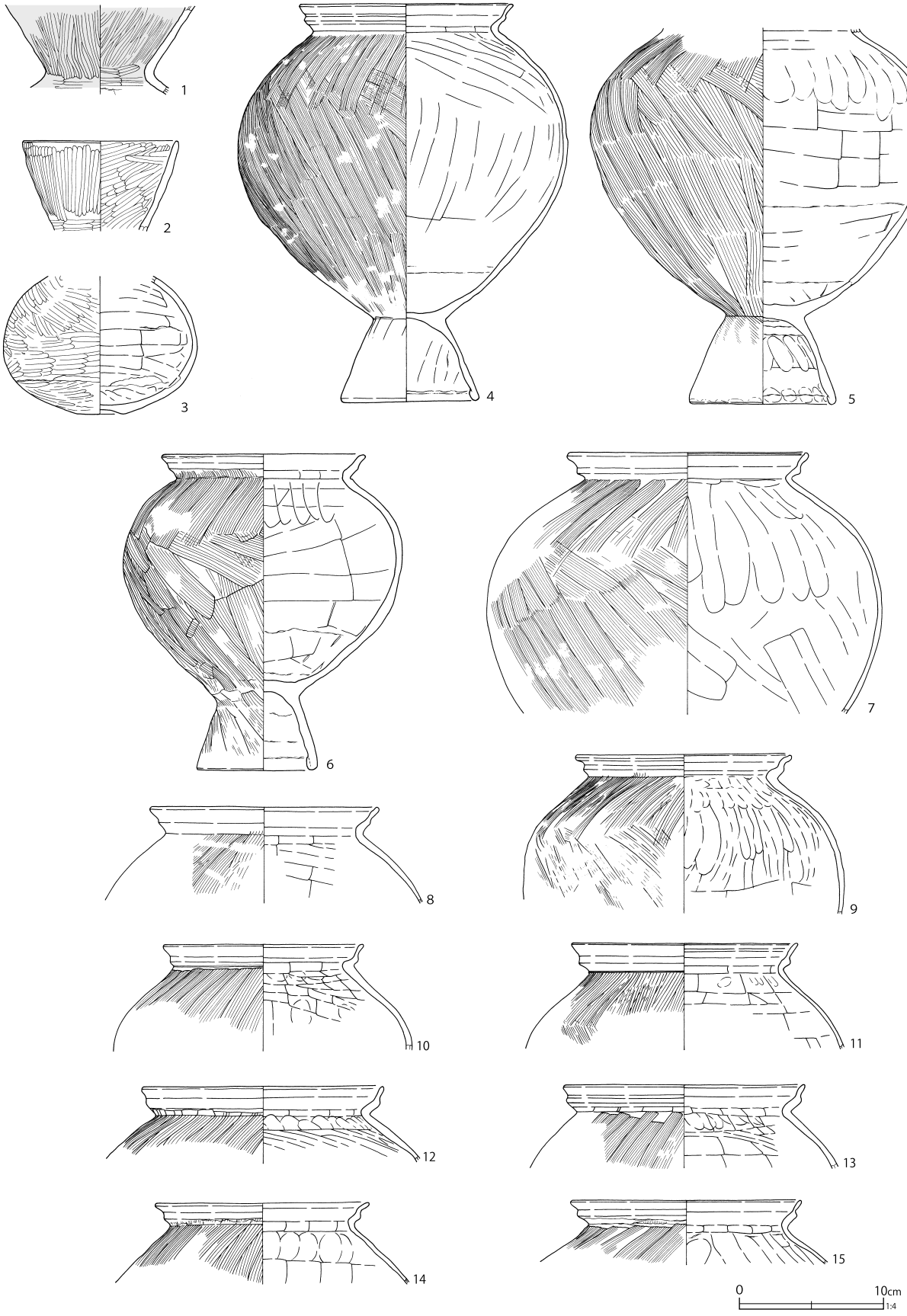


ＳＪ66
1　褐色土　　焼土・炭化物・ロームブロック含む
2　黒褐色土　炭化物多量

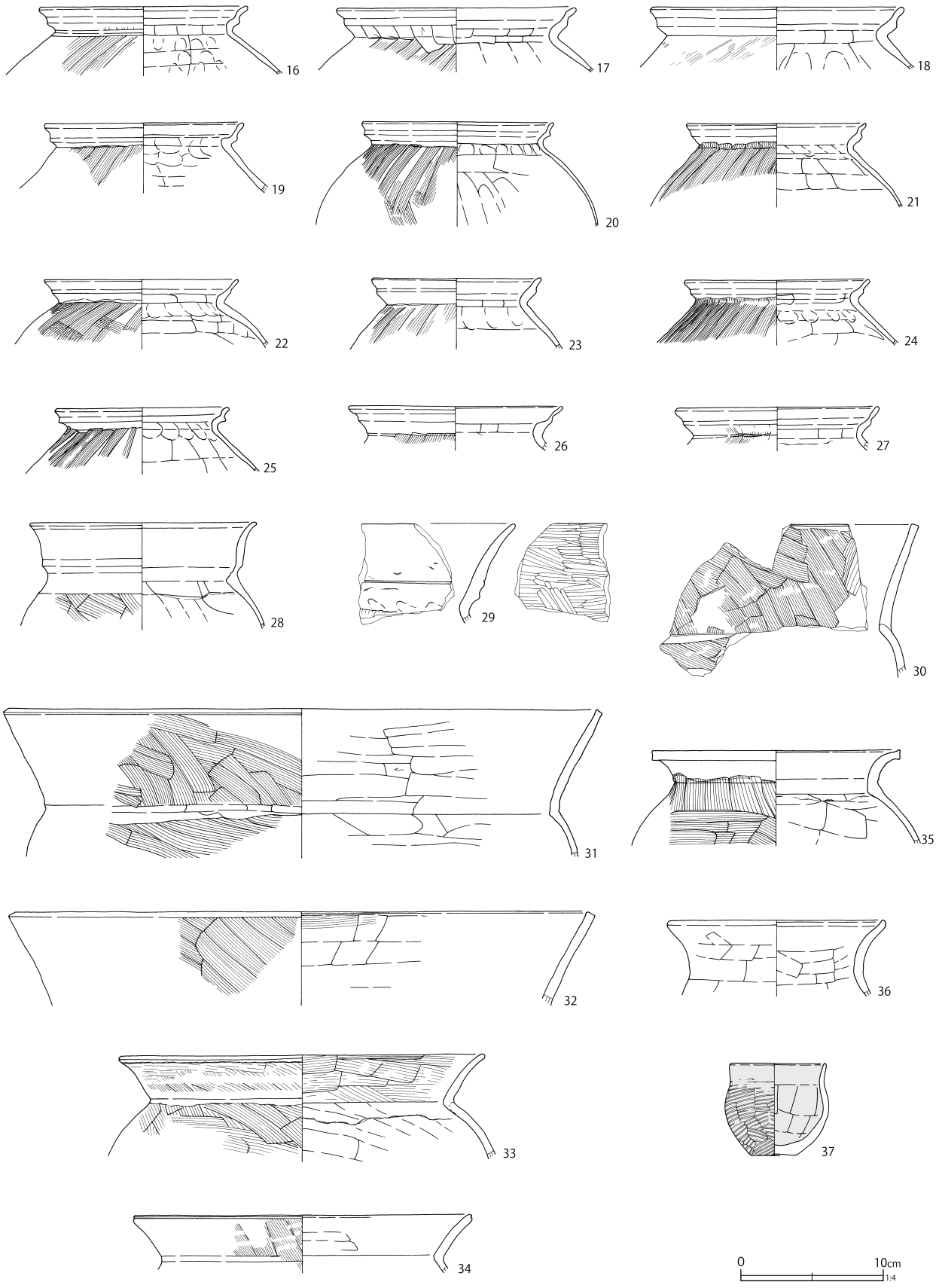
炉1
1　赤褐色土　被熱焼土
2　褐色土　　焼土粒子含む
3　暗褐色土

炉2
1　赤褐色土　被熱焼土
2　褐色土

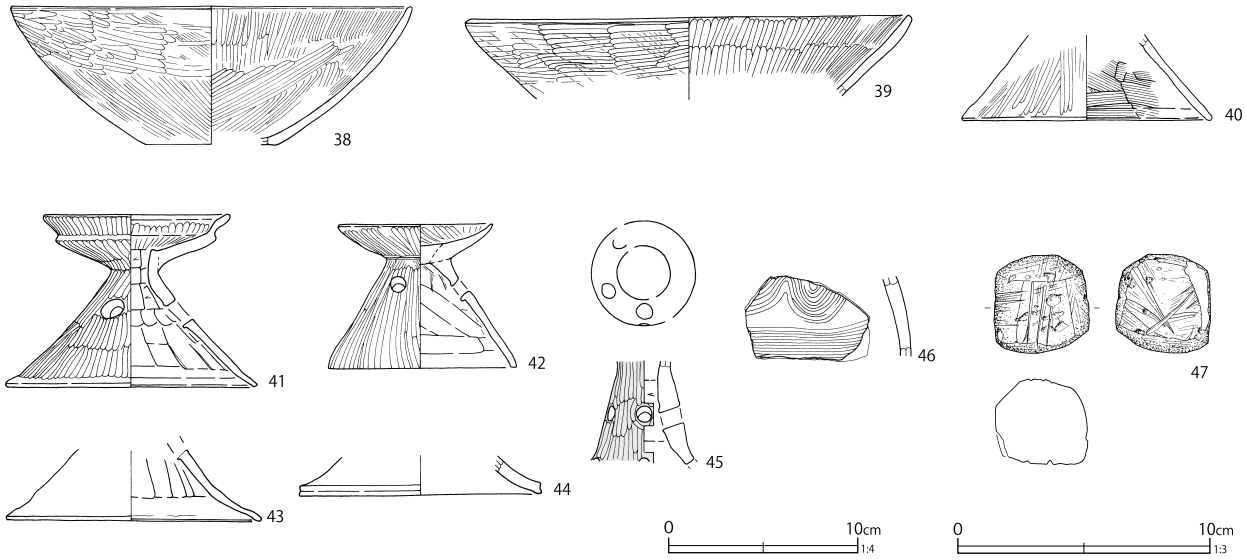
第203図　第66号住居跡



第204図　第66号住居跡出土遺物（1）



第205図　第66号住居跡出土遺物（２）



第206図　第66号住居跡出土遺物（３）

３は胴部でやや扁平である。外面全体ヘラ磨き、底面はヘラナデである。

４～27はＳ字状口縁台付甕である。刷毛目が施された口縁部下段に上段の粘土が被る形で胴部と接合され、上位からの横ナデが頸部に線状に爪の痕跡として認められる。口縁部下段から頸部までは刷毛目が基本だが、17はヘラケズリである。胴部外面は羽状の刷毛目が施され、やや乱れが見られる。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが加えられている。23・25はやや口縁部の径が小さい。16・20・25の刷毛目は鋭く深い。ほとんどの個体が灰白色を呈している。

28は５の字状口縁甕である。端部はやや外反する。頸部下位までのヘラナデと横ナデによって、５の字状口縁が作出されている。胴部外面刷毛目、内面ヘラナデ。白色微粒子を多く含む。色調は赤褐色である。

29～34は大型の甕の口縁部である。いずれも利根川流域の粘土で作られ、灰白色を呈する。頸部はくの字状で、端部は面を持つ。29は下位に段があり、５の字状を意識していると考えられる。上位には沈線が巡らされている。横ナデによって仕上げられ、内面はヘラ磨きである。30～34は刷毛目調整の単口縁甕で、30～32が超大型、33・34と順次小さくなる。基本的な調整は刷毛目で、30～32･34は刷毛目後内面ヘラナデ。33は刷毛目後口縁部内外面横ナデである。34の端部は沈線状に凹んでいる。35は口縁部が外反し、端面が直立する。北陸地方東北部系か。36はヘラナデ調整の甕で、頸部の湾曲は緩やかである。

37は鉢である。外面全体にタタキ目が施されている。口縁部横ナデ。底面と体部内面はヘラナデである。

38～40は高坏である。38・39はやや深身の坏部で、下段に稜を持つと考えられる。刷毛目後ヘラ磨きが施されている。38は40の坏部の可能性がある。40は直線的に開く脚部で、裾は広がらない。外面ヘラ磨き、内面刷毛目。

41～45は器台である。41・42はほぼ完形である。器受部は41が段を持って外側に開く。42は皿状で、穿孔されない。脚部は41・43・44が端部が若干開き、42は若干内湾する。45は柱状を呈する。透孔はいずれも３孔である。45は半分を欠失する現状で３孔だが、全体では５～６孔になると考えられる。43は風化のため調整不明。44の端面は面を持ち、中央が凹線状になってい

第46表　第66号住居跡出土遺物観察表(第204～206図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[6.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	明黄褐	外面・内面口縁部～頸部赤彩	
2	土師器	小型壺	(10.8)	[6.2]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	№61	170-4
3	土師器	小型壺	－	[9.6]	3.0	ＡＣＥＨＩＫ	65	普通	浅黄橙	№53・55・57・58	170-5
4	土師器	台付甕	14.7	28.0	9.6	ＣＨＩＫ	80	普通	灰褐	内外面煤付着	170-7
5	土師器	台付甕	－	[26.3]	10.2	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№41	170-6
6	土師器	台付甕	14.1	22.1	8.3	ＣＤＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	胴部外面煤付着　№30	170-8
7	土師器	台付甕	17.0	[18.0]	－	ＡＣＤＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	内面煤付着　№59	171-1
8	土師器	台付甕	(16.0)	[6.6]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	台付甕	(15.2)	[11.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	浅黄橙	外面煤付着　№９	171-2
10	土師器	台付甕	(14.0)	[7.3]	－	ＡＣＥＨＩ	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№48・49	171-3
11	土師器	台付甕	15.9	[7.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	褐灰	内外面煤付着　№31・35・55・57	171-4
12	土師器	台付甕	(17.0)	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№20・28	171-5
13	土師器	台付甕	(17.0)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩ	15	普通	灰白		
14	土師器	台付甕	(15.1)	[5.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
15	土師器	台付甕	16.2	[4.3]	－	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№58	171-6
16	土師器	台付甕	(14.8)	[4.8]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№32	171-7
17	土師器	台付甕	(17.0)	[4.4]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№47	
18	土師器	台付甕	(18.0)	[4.3]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	浅黄橙	№47	
19	土師器	台付甕	(14.1)	[4.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№49	
20	土師器	台付甕	(13.6)	[7.2]	－	ＣＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№27	
21	土師器	台付甕	12.8	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	内面煤付着　№35	171-8
22	土師器	台付甕	(13.8)	[4.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	外面煤付着	
23	土師器	台付甕	(12.0)	[4.9]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	№26	
24	土師器	台付甕	(13.2)	[4.6]	－	ＡＣＨＩＫ	35	普通	灰黄褐	外面煤付着	171-9
25	土師器	台付甕	(12.4)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
26	土師器	台付甕	(15.2)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	№13	
27	土師器	台付甕	(14.6)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	№40	
28	土師器	甕	(16.1)	[7.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	明赤褐	５の字甕　内外面煤付着　№73	
29	土師器	台付甕	－	[6.9]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　№１	172-1
30	土師器	甕	－	[10.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№25	224-3
31	土師器	甕	(42.0)	[10.5]	－	ＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	外面煤付着	224-3
32	土師器	甕	(41.0)	[6.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面煤付着	224-3
33	土師器	甕	(26.0)	[7.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	赤褐	内外面煤付着	172-2
34	土師器	甕	(24.0)	[4.1]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№78	
35	土師器	甕	(17.6)	[6.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	橙	内外面煤付着　№74	172-3
36	土師器	甕	(15.5)	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№44	
37	土師器	鉢	(6.8)	6.4	3.2	ＡＥＨＩＫ	60	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩　№63	172-5
38	土師器	高坏	(21.4)	[7.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	40の坏部か　外面煤付着　№15	172-4
39	土師器	高坏	(24.0)	[4.2]	－	ＣＨＩＫ	30	普通	灰褐	内外面煤付着　№64　SJ67と接合	
40	土師器	高坏	－	[4.5]	(13.3)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	明黄褐	38の脚部か　外面煤付着　№16	172-8
41	土師器	器台	9.8	9.1	13.2	ＡＣＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	№43	172-6
42	土師器	器台	8.3	7.5	10.1	ＡＣＥＨＩ	95	良好	にぶい黄橙	脚部外面・口縁端部黒斑あり　№42	172-7
43	土師器	器台	－	[3.7]	13.6	ＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№45	172-9
44	土師器	器台	－	[1.8]	(12.9)	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	装飾器台の脚部か	
45	土師器	器台	－	[5.5]	－	ＣＥＨＩＫ	40	普通	明赤褐	外面赤彩　№77	172-10
46	土師器	壺	－	[3.4]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	橙		173-1
47	石製品	砥石	長さ3.9　幅3.8　厚さ3.7　重さ21.6ｇ　軽石								

る。大型器台等の脚部の可能性もある。ヘラ磨きに横ナデが加えられている。

46は壺の胴部破片である。５条１単位の櫛描きで、横位の直線文とコンパス文が描かれている。内面風化。

47は軽石製の砥石である。断面「V」状の刃物痕が多数見られる。全ての面が使用されている。

本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

第67号住居跡（第207～211図）

Ｃ区の西側、Ｊ－12・13グリッドに位置する。第63・66号住居跡と重複し、いずれよりも古い。炉跡の位置から、東西方向、Ｓ－78°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸方形で、各辺は丸みを帯びている。規模は、主軸方向6.35ｍ、直交軸方向6.23ｍ、深さ0.30ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土、明褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、貯蔵穴、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の中央、やや北東寄りで検出された。不整楕円形で長径0.97ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.10ｍである。掘り方はロームブロックを多量に含む明褐色土が充填されている。中層に焼土層が形成され、上層は流れ込みと考えられる。地山も赤変、硬化していた。

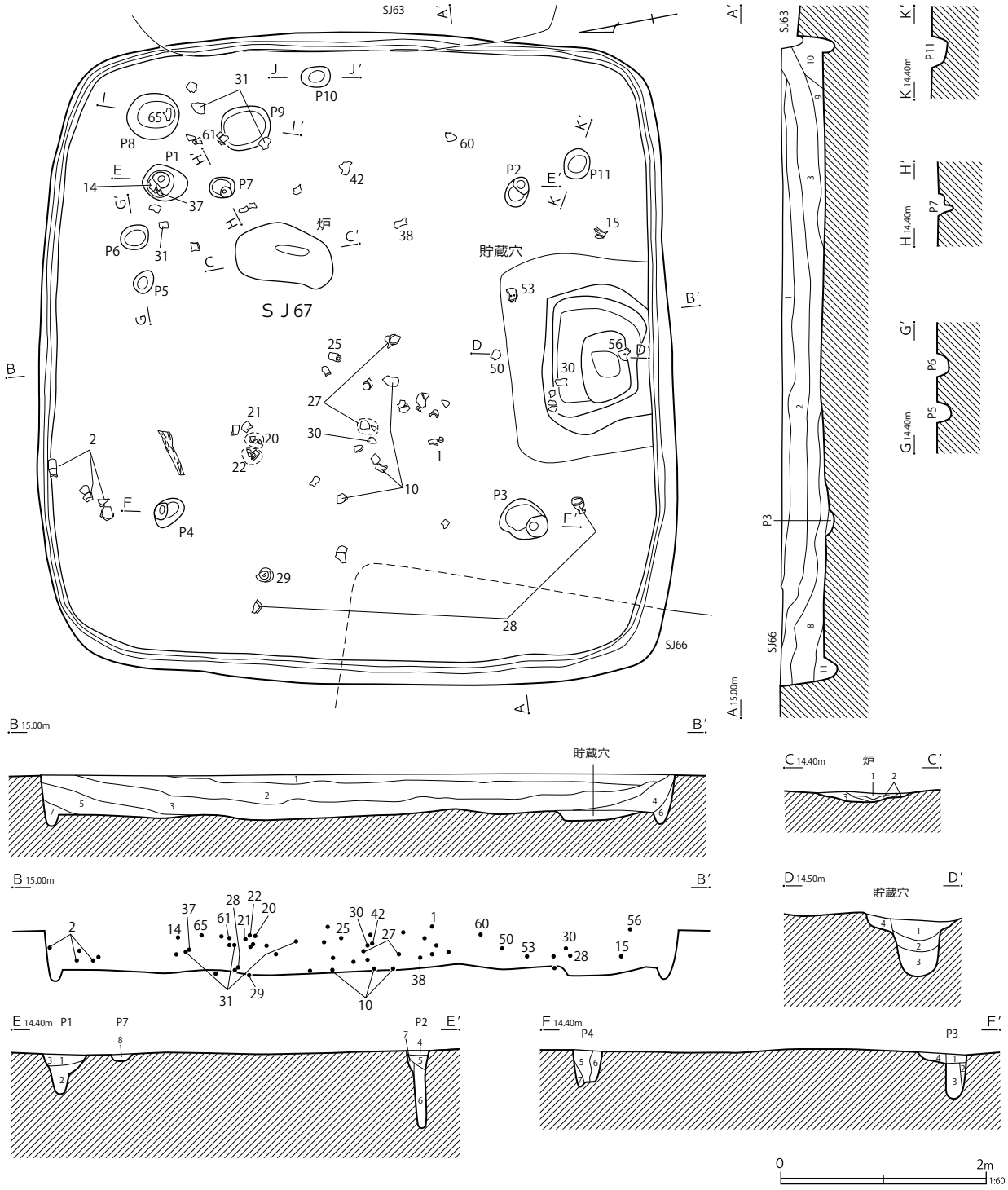
貯蔵穴は南壁中央で検出された。貯蔵穴は中心が柱穴状を呈しており、入口部の施設の可能性も考えられる。長辺2.03ｍ、短辺1.38ｍ、深さ３～５cmの浅い皿状の掘り込みが、長辺1.13ｍ、短辺0.83ｍ、深さ0.12ｍの範囲で一段掘り下げられ、更に柱穴状に長辺0.65ｍ、短辺0.55ｍ、深さ0.40ｍ掘り下げられている。最深部までの深さは床面から0.60ｍである。覆土はローム土を多く含む褐色土、暗黄褐色土で、埋戻しと考えられる。

ピットは11基検出された。位置的にはＰ１～４が主柱穴と考えられる。規模は長径0.33～0.46ｍ、短径0.22～0.38ｍ、深さ0.37～0.75ｍである。柱は抜き取られており、径0.15ｍほどの当たり状の柱痕が見られる。覆土はローム土を多く含む褐色土、明褐色土、明黄褐色土、暗黄褐色土である。それ以外のピットは径0.24～0.47ｍ、深さ0.10～0.15ｍで、性格は不明である。Ｐ５からは刷毛目甕の胴部破片、Ｐ６からは土錘が出土している。

壁周溝は幅0.10～0.30ｍ、深さ0.10～0.12ｍで全周している。

遺物は多く、覆土全体から出土した。特にＰ２周辺のものが多い。古墳時代前期の甕胴部破片が最も多い。出土器種は壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、土錘、土製円板である。

１～10は壺である。１は複合口縁壺で、端部の先端に丸みのある粘土帯が貼付されている。口縁部は短く、直線的に開く。胴部はやや下膨れ状になると推定される。口縁部は外面刷毛目、内面横ナデ。胴部は肩部に５条１単位の櫛歯状工具による横位の波状文と、その上下に直線文が描かれている。下位はヘラ磨き、内面ヘラナデ。風化のため調整は不明瞭である。２・３は二重口縁の口縁部である。２は小型で丁寧な横ナデ後ヘラ磨き。３はやや大型で、下端に右前からヘラによる刻み目が入れられている。４は箱状の器形を呈する。大型器台、高坏の可能性もあるが、径が小さく、ここでは壺としておきたい。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。下端に３箇所のヘラによる刻み目が入れられている。現状で確認できるのはこの３箇所のみで、左側には認められないため、これが一つの単位と考えられる。５は細頸壺の頸部付近から口縁下段にかけての破片である。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。内面は上位にヘラ磨きが認められ、その近辺まで赤彩されている。ヘラ磨き、赤彩が内面全体に及ばない点からも口縁部が長くなると考えられる。６は二重口縁壺の口縁下段である。



ＳＪ67
1　褐色土　　小粒ロームブロック・炭化物少量
2　暗褐色土　ロームブロック・炭化物含む　しまりあり
3　暗褐色土　ロームブロック・炭化物含む　よくしまる　２層に比して暗い
4　暗褐色土　ソフトローム多量　３層に比して暗い
5　褐色土　　ソフトローム多量　よくしまっている
6　暗褐色土　ソフトローム多量　しまりなく粘性も乏しい
7　暗褐色土　ソフトローム多量　６層に比して暗い
8　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック多量　よくしまっている
9　褐色土　　焼土・炭化物多量　粘性あり
10　明褐色土　ソフトローム・炭化物多量　粘性あり
11　暗褐色土　炭化物少量　粘性あり

第207図　第67号住居跡（１）

炉
1　黒褐色土　　ロームブロック（被熱）・焼土・炭化物含む
2　暗赤褐色土　赤化した焼土・ロームブロック多量
3　褐色土　　焼土・ロームブロック（被熱）多量　しまり良し

貯蔵穴
1　褐色土　　ソフトローム多量　しまりなし
2　褐色土　　ソフトローム・ロームブロック（大）少量　しまり弱い
3　暗黄褐色土　ソフトローム・ロームブロック（大）多量
4　暗黄褐色土　ソフトローム・ロームブロック（大）多量　よくしまる

P1・2・7
1　明褐色土　　ロームブロック（小）・ソフトローム多量
2　明褐色土　　ロームブロック（小）・ソフトローム多量　しまり良し
3　暗黄褐色土　ロームブロック・ソフトロームの混土層　よくしまる
4　褐色土　　ロームブロック少量
5　褐色土　　ソフトローム少量
6　褐色土　　ロームブロック（大）少量　粘性・しまり弱い
7　明褐色土　　ソフトローム・ロームブロックを密に含む
8　暗黄褐色土

P3・4
1　褐色土　　小粒ロームブロックを少量混入
2　褐色土　　ソフトロームを少量混入　しまり強い
3　暗褐色土　　大粒ロームブロックを少量混入　しまりなし
4　明黄褐色土　ソフトローム・ロームブロック
5　褐色土　　ソフトロームを少量混入
6　明褐色土　　ソフトローム・ロームブロック
7　明褐色土　　ソフトローム・ロームブロック　6層に比してやや暗い

第208図　第67号住居跡（2）

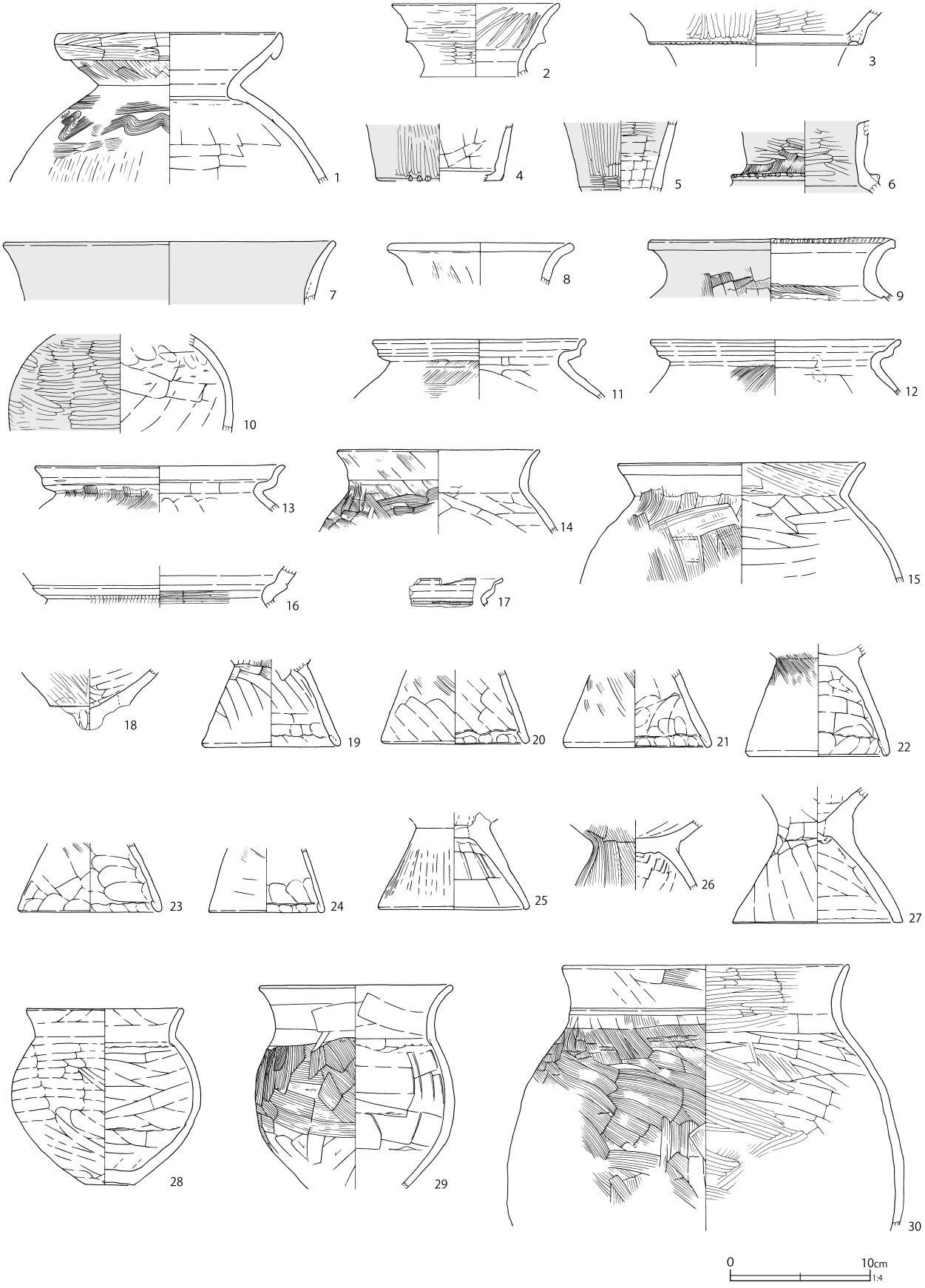
ほぼ直立する。頸部に突帯が貼付されており、刷毛目原体による刻み目が施されている。刷毛目調整をベースにヘラ磨きが施されている。7は口縁部上段である。横ナデで、暗褐色を呈する。煤付着。8・9は単口縁の壺で、9は広口である。8は端部が丸く収められ、色調が白い。9は器肉が厚く、大きく外反する口縁部で、端部に面を持つ。上端に断面が丸い工具による刻み目が施されている。刷毛目調整をベースに横ナデが施されている。

10は小型壺の胴部上半で、球形胴を呈する。外面ヘラ磨き、肩部内面指オサエ後ヘラナデが施されている。

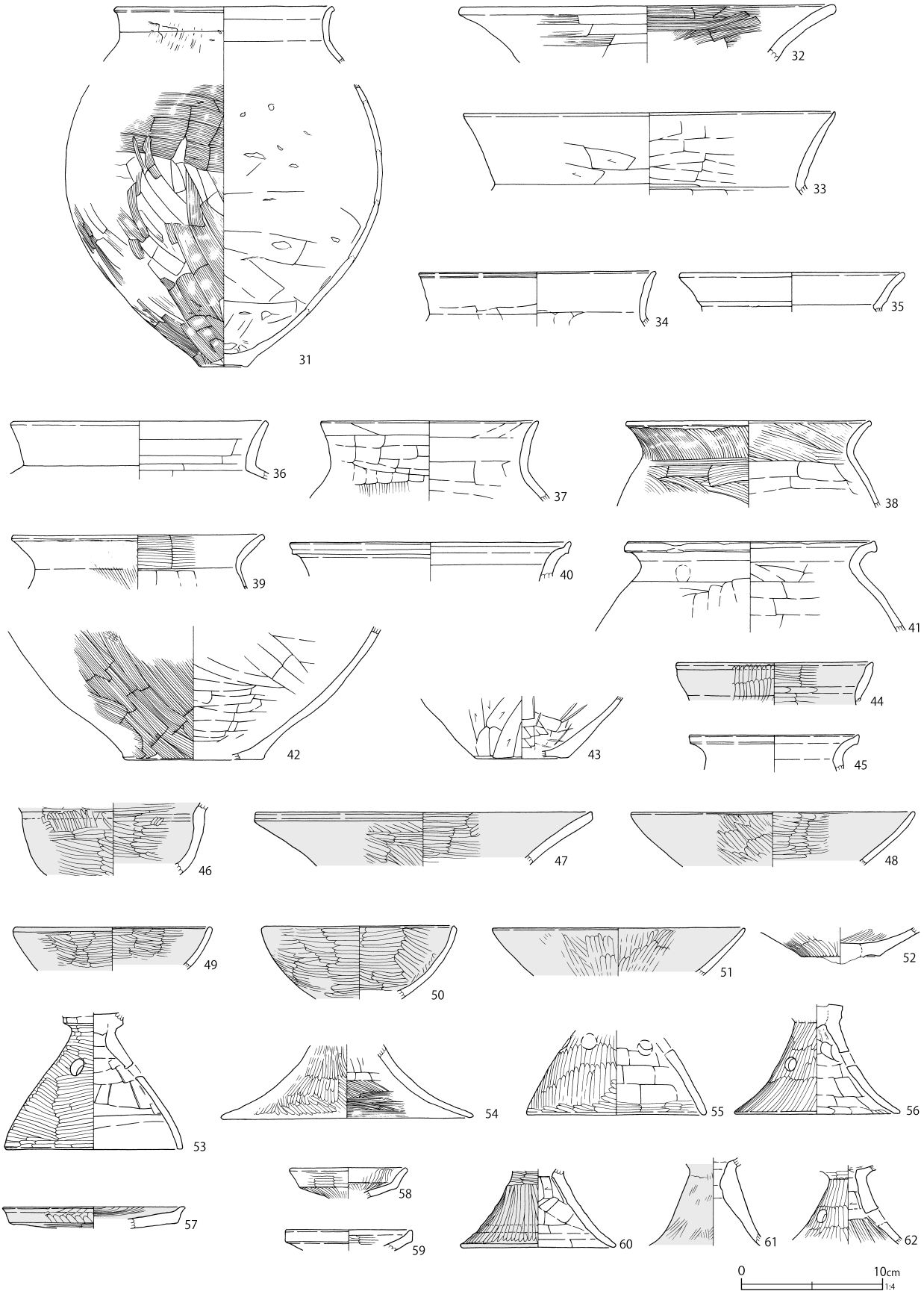
11～13・16～27は台付甕である。11～13・17・19～24はS字状口縁台付甕である。16は大型で山陰系口縁のS字状口縁台付甕と考えられる。頸部内面に細かなヘラ磨きが施されている。17は屈曲の強いタイプで、本遺跡では他に見られない。頸部には強く爪が入る。19～24は脚台部で箱形を呈する。上位は斜方向の刷毛目が縦にナデ消されている。その下位はヘラナデである。内面は指ナデ、もしくは指オサエにヘラナデが加えられている。端部は折り返され、指頭痕が多く残る。天井部は砂を混じた粘土がナデ込まれている。23はほとんど風化しておらず、未使用の可能性がある。18・25～27はホゾ接合の台付甕である。18は接合箇所から剥離しており、臍が露出している。内外面ヘラナデ。臍は指頭により強く摘まれ、指紋が残る。脚台部は小さめである。25は臍が脱落している。臍の下に充填された粘土が円板状に残る。25・27は内外面ともヘラナデである。26の外面は刷毛目である。

28は小型甕である。器面全体にヘラナデが施され、外面はやや光沢がある。広口壺の可能性も考えられる。

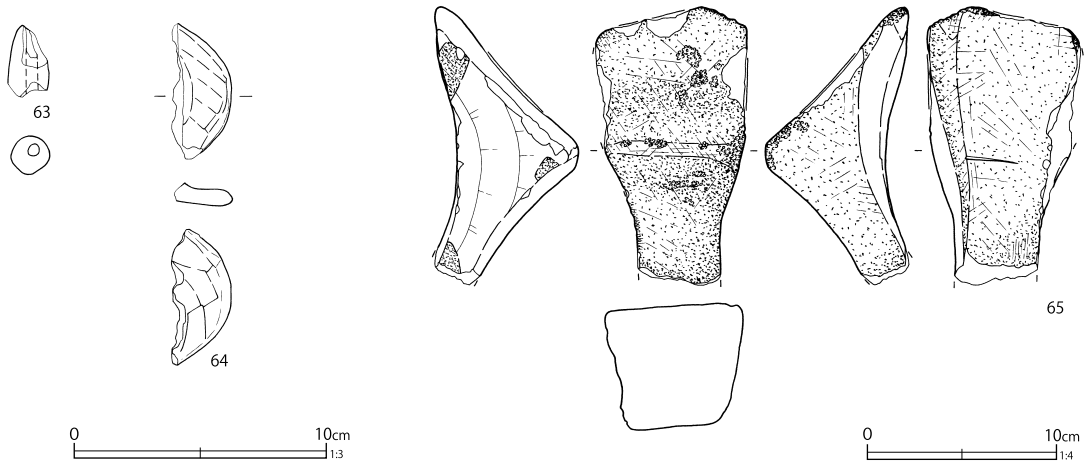
14・15・29～41は甕である。頸部は屈曲に強弱があり、29～31・34・37は屈曲が弱い。いずれも外面刷毛目後口縁部を中心に横ナデ、ヘラナデが施されている。15は口縁部に被せられた粘土に横ナデが施され、頸部で不連続になっている。内面は30がヘラ磨き、他はヘラナデである。31は長胴、平底になり、屈曲の弱い他の個体も同様の器形になると考えられる。口縁端部に面を持ち、胴部は外面ヘラナデ後刷毛目、内面ヘラナデ、底面はヘラケズリである。頸部がくの字状のその他の個体は、端部が丸く収められている。全体にヘラナデもしくは刷毛目の双方があり、いずれも横ナデによって仕上げられている。32・33は大型である。32は大きく外反し、他器種の可能性がある。内外面刷毛目後横ナデ。33は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。40は厚手で、端部が摘み上げられ、面を持つ。北陸地方東北部から北近畿地方の影響と考えられる。41の胴部は横方向ヘラナデ後縦方向のヘラナデが加えられており、光沢がある。42・43は底部である。42



第209図　第67号住居跡出土遺物（1）



第210図　第67号住居跡出土遺物（２）



第211図　第67号住居跡出土遺物（３）

は外面刷毛目、内面ヘラナデ、底面は刷毛目である。内面、見込み部分に煤が厚く付着している。43は外面、底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。赤変している。

44～46は鉢である。44・45は口縁部である。44は口縁部が肥厚し、内外面ヘラ磨きが施されている。45は外反して直立する面を持つ。風化のため調整は不明瞭である。46は体部で、器肉が非常に厚い。内外面ヘラ磨き。赤彩。

47～56は高坏である。47は緩く外反し、端部は中央が凹線状の面を持つ。北陸系の有段高坏の可能性がある。48・51は坏部の下段に稜を持つ高坏と考えられる。49・50は坏部が小さく、小型高坏の可能性がある。いずれも内外面ヘラ磨き。赤彩。52は坏部の下半で､接合箇所で剥離し、臍が露出している。53～56は脚部である。内湾する場合と裾広がりに大きく開く場合がある。ホゾ接合で、外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。54は刷毛目、55はヘラ磨きが端部に加えられている。56はヘラ磨きが丁寧に施され、端正である。

57～62は器台である。57は大型の皿状で、端部が広い面を持つ。60～62は脚部である。60の外面は接合部は横方向のヘラ磨きである。60は透孔が開けられていない。62は外からの穿孔後内側に再調整が加えられている。

63は土錘である。上下を欠失する。全体にナデ調整である。

64は円板状土製品である。径６cm、厚さ0.8cm前後で、調整はヘラナデである。

65は安山岩製の砥石である。平面形は長方形、側面形は三角形である。片側面は欠損後再利用されている。

本住居跡は３世紀中葉､屋敷裏Ⅲ－１期である。

第68号住居跡（第212・213図）

Ｃ区の中央やや東側、Ｋ・Ｌ－14、Ｌ－15グリッドに位置する。第69号住居跡と重複し、本住居跡が新しい｡覆土がほとんど削平されており、南壁は第69号住居跡覆土の変色箇所から推定した。炉跡の位置から、南北方向、Ｓ－８°－Ｗが主軸方位と考えられる。

平面形は不整な隅丸長方形で、西辺が長い。各辺は丸みを帯びている。規模は、主軸方向西辺5.70ｍ、東辺5.20ｍ、直交軸方向3.73ｍ、深さ0.08ｍである。覆土はローム土を含む褐色土、明褐色土で、自然堆積である。部分的に床面は凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、ピットが検出された。炉跡は住居跡の中央やや南側で検出された。不整楕円形で長径0.66ｍ､短径0.53ｍ､深さ0.03ｍである。掘り方は褐色土が充填され、上層に焼土層が形成

第47表　第67号住居跡出土遺物観察表（第209～211図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.2)	[10.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№39	173-2
2	土師器	壺	12.1	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	橙	口縁部内外面黒斑あり　№３・５・６	173-3
3	土師器	壺	－	[2.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内面黒斑あり	
4	土師器	壺	－	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	外面赤彩	225-1
5	土師器	長頸壺	－	[4.9]	－	ＡＣＥＩＫ	20	普通	橙	外面・内面一部赤彩	
6	土師器	壺	－	[5.1]	－	ＡＣＤＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	二重口縁壺　内外面赤彩	225-1
7	土師器	壺	(24.0)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着　内外面赤彩	
8	土師器	壺	(13.4)	[2.9]	－	ＥＨＩＫ	15	普通	浅黄橙		
9	土師器	広口壺	(17.8)	[4.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	褐灰	外面赤彩	173-4
10	土師器	小型壺	－	[6.9]	－	ＣＤＥＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	外面赤彩　№34・36・44	173-5
11	土師器	台付甕	(14.4)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	外面・内面口縁上段煤付着	
12	土師器	台付甕	(17.9)	[4.0]	－	ＡＥＩＫ	5	普通	灰黄褐	外面煤付着	
13	土師器	台付甕	(18.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
14	土師器	甕	(14.6)	[5.9]	－	ＤＥＨＩＫ	50	普通	にぶい橙	№15	173-6
15	土師器	甕	(17.8)	[8.5]	－	ＣＥＨＩＫ	20	良好	にぶい赤褐	外面煤付着　№57	
16	土師器	台付甕	－	[3.0]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい褐	山陰系口縁Ｓ字甕	
17	土師器	台付甕	－	[2.0]	－	ＣＨＩＫ	5	普通	浅黄橙		
18	土師器	台付甕	－	[4.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	内面煤付着か	
19	土師器	台付甕	－	[6.2]	(10.0)	ＡＣＤＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	外面煤付着	
20	土師器	台付甕	－	[5.2]	(10.6)	ＡＢＣＥＨＩ	20	普通	浅黄	№10	
21	土師器	台付甕	－	[5.5]	10.6	ＡＣＨＩＫ	90	普通	橙	№11	173-7
22	土師器	台付甕	－	[7.9]	(10.4)	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	外面煤付着　№８	173-8
23	土師器	台付甕	－	[4.9]	10.4	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	外面端部煤付着	
24	土師器	台付甕	－	[4.5]	8.4	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい赤褐		
25	土師器	台付甕	－	[6.8]	(10.4)	ＡＣＥＨＫ	50	普通	にぶい褐	№28	173-9
26	土師器	台付甕	－	[4.9]	－	ＡＣＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	脚部内面煤付着	
27	土師器	台付甕	－	[9.6]	(12.3)	ＡＣＥＩ	60	普通	灰白	№46・30	175-1
28	土師器	小型甕	11.3	12.5	3.5	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	外面煤付着　№１・55	174-1
29	土師器	甕	14.0	[14.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	外面煤付着　№２	174-2
30	土師器	甕	(20.8)	[18.9]	－	ＡＤＥＨＩＫ	40	普通	灰褐	№31・52	174-4
31	土師器	甕	(15.7)	[26.0]	3.2	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	外面煤付着　№13・21・24	174-5
32	土師器	甕	(26.8)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	大型甕口縁　外面煤付着	
33	土師器	甕	(26.4)	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰褐	大型甕口縁　内外面煤付着	225-1
34	土師器	甕	(17.0)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	外面煤付着	
35	土師器	甕	(16.0)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄褐	内外面端部黒斑あり	
36	土師器	甕	(18.4)	[4.1]	－	ＡＤＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
37	土師器	甕	(15.6)	[5.4]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	橙	№16	
38	土師器	甕	(17.6)	[6.1]	－	ＡＣＨＩ	30	良好	にぶい橙	内外面煤付着　№47	174-3
39	土師器	甕	(18.0)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
40	土師器	甕	(20.0)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
41	土師器	甕	(18.0)	[6.2]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
42	土師器	甕	－	[9.3]	(10.2)	ＡＣＤＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№48	
43	土師器	甕	－	[4.3]	(6.6)	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
44	土師器	鉢	(14.0)	[3.0]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	灰白	内外面赤彩	
45	土師器	鉢	(12.1)	[2.5]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
46	土師器	鉢	－	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
47	土師器	高坏	(23.9)	[3.8]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	
48	土師器	高坏	(20.2)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰褐	内外面赤彩　内外面端部黒斑あり	
49	土師器	高坏	(14.1)	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	高坏	(14.0)	[5.1]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№51	174-6
51	土師器	高坏	(18.0)	[3.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面赤彩	
52	土師器	高坏	－	[2.5]	－	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい黄橙		
53	土師器	高坏	－	[9.6]	(12.6)	ＡＣＥＩＫ	50	普通	にぶい赤褐	外面煤付着　№50	175-2
54	土師器	高坏	－	[5.1]	(18.0)	ＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	外面黒斑あり	
55	土師器	高坏	－	[5.9]	(12.8)	ＡＣＥＨＩ	30	普通	橙		174-7
56	土師器	高坏	－	[7.7]	(11.9)	ＡＣＨＩＫ	75	普通	明褐	内外面黒斑あり　№56	174-8
57	土師器	器台	(13.0)	[1.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	灰白	内外面赤彩	
58	土師器	器台	(8.4)	[2.1]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
59	土師器	器台	(9.0)	[1.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
60	土師器	器台	－	[5.5]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	外面赤彩　№49	174-9
61	土師器	器台	－	[6.1]	－	ＢＥＨＩＫ	80	普通	灰褐	外面赤彩　№19	175-3
62	土師器	器台	－	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	60	普通	橙		
63	土製品	土錘	長さ[2.8]　最大径1.5 孔径0.5　重さ5.3ｇ			ＩＪＫ	30	普通	橙	Ｐ６	218-25
64	土製品	円板	長さ5.4　幅2.3 厚さ0.8　重さ8.2ｇ			ＣＥＨＩＫ		普通	橙		218-30
65	石製品	砥石	長さ[14.7]　幅8.0　厚さ[7.6]　重さ572.9ｇ			安山岩				№17	219-3

されていた。

ピットは１基検出された。長径 0.63 ｍ、短径 0.52 ｍ、深さ 0.10 ｍの楕円形である。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土で、埋戻しの可能性がある。

遺物は少なく、床面から出土し、炉跡と西壁の間に集中していた。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏である。

１～３はＳ字状口縁台付甕である。１は頸部内面に面を持ち、ヘラナデが施されている。内面の調整は不明瞭である。多孔質で軽量である。３も頸部内面に同様の面を持つ。

４は大型で、山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕と考えられる。頸部内面に細かなヘラ磨きが施されている。

５・６は甕の口縁部である。５は頸部がくの字状で、端部が丸く収められている。刷毛目調整。６は大きく外反し、端部は面を持つ。刷毛目後ヘラナデが加えられている。

７・８は鉢である。７は口縁部が頸部に乗せられた形で接合している。内外面細かなヘラ磨きが施されている。８は底部である。平底にするために、底面に薄く粘土が貼付されている。内外面ともヘラナデ調整。底面ヘラケズリ。多孔質で軽い。

９・10 は高坏である。９はやや内湾する小型の坏部である。内外面ヘラ磨き。10 は脚部で八の字状に大きく開く。器台の可能性がある。

11 は器台の脚部である。裾はあまり開かず直線的である。外面ヘラ磨き、内面刷毛目。透孔は３孔で、径がやや小さい。

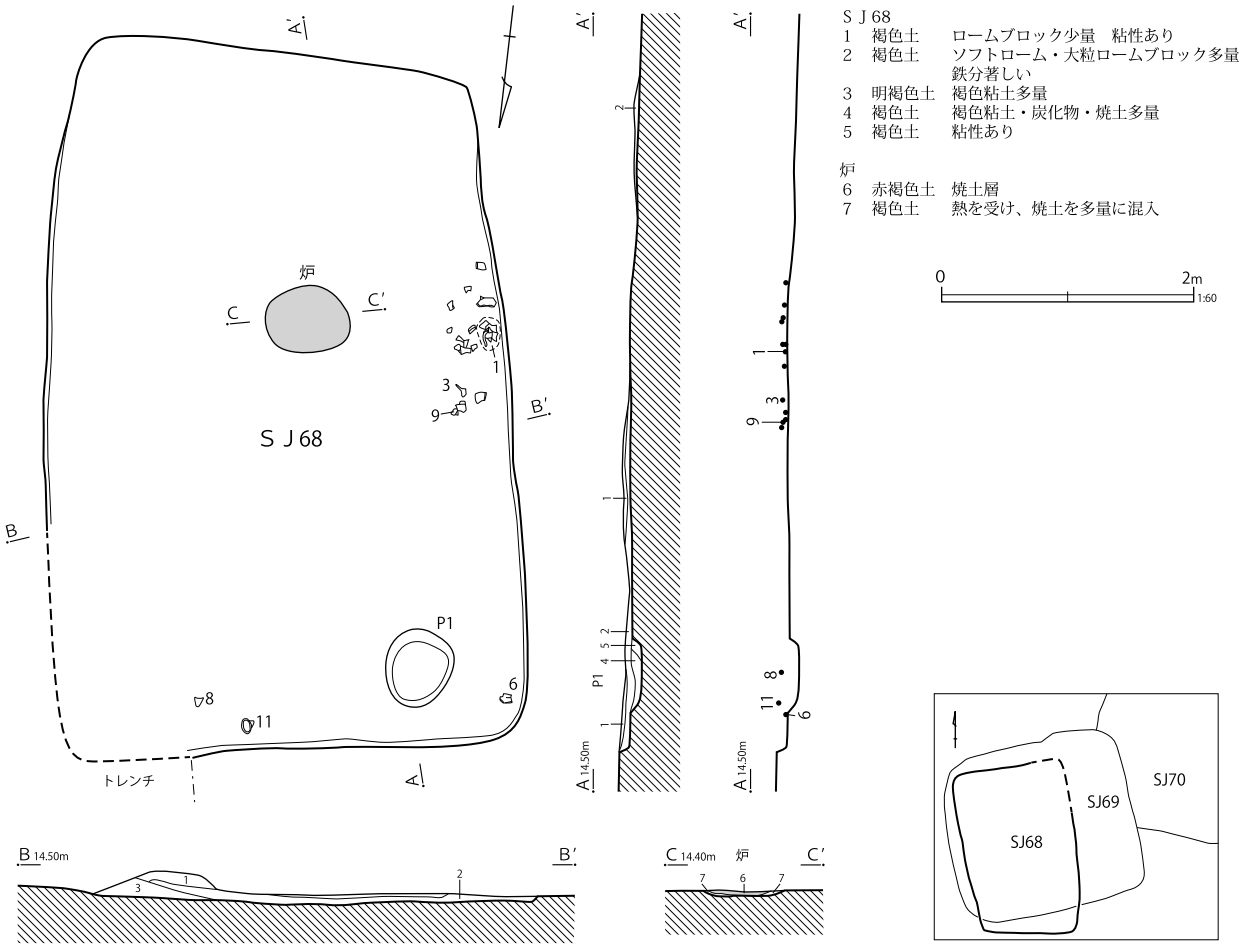
本住居跡は４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

第 69 号住居跡（第 214 ～ 217 図）

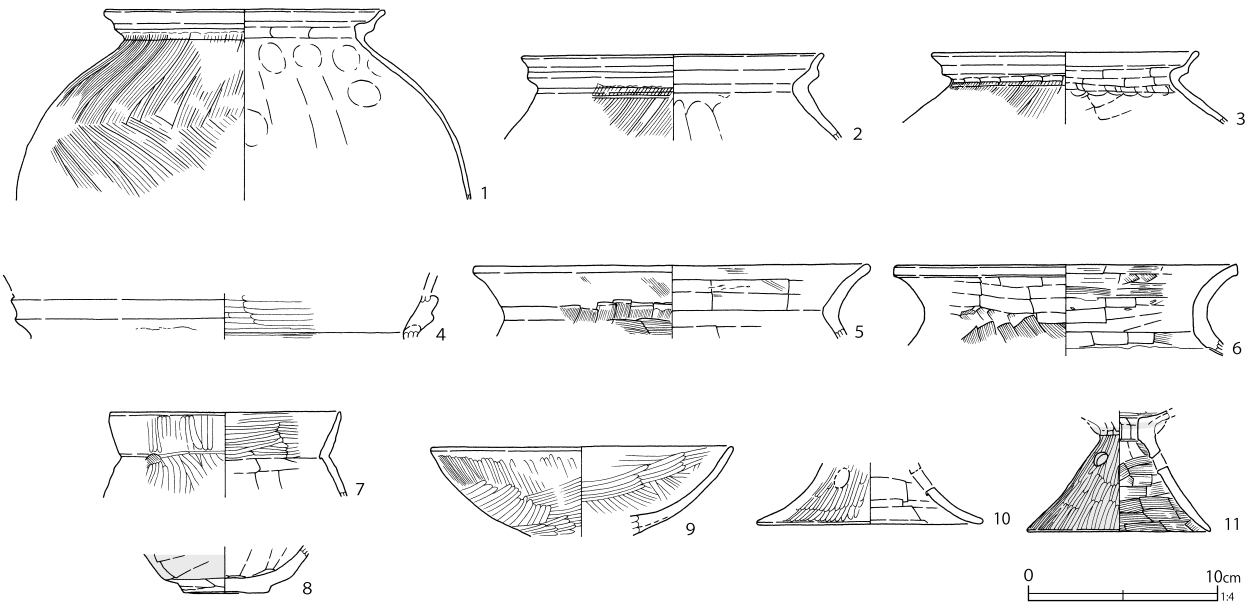
Ｃ区の中央やや東側、Ｋ・Ｌ－ 14・15 グリッドに位置する。第 68 号住居跡と重複し、本住居跡が古い。炉跡の位置から南北方向、Ｎ－ 13°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は隅丸方形で、各辺は丸みを帯びている。規模は、主軸方向 5.75 ｍ、直交軸方向 6.18 ｍ、深さ 0.35 ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、貯蔵穴、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の中央で、不整形な掘り込みの中央が焼土化した状態であった。掘り込みの規模は長軸 1.95 ｍ、短軸 1.11 ｍ、深さ 0.05 ｍである。北側が一段、0.05 ｍ下がったほぼ底面近くが焼土化していた。焼土化した部分は不整形



第212図　第68号住居跡



第213図　第68号住居跡出土遺物

第48表　第68号住居跡出土遺物観察表（第213図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(14.8)	[9.9]	－	ＡＤＥＨＫ	45	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№16	175-7
2	土師器	台付甕	(16.0)	[4.5]	－	ＤＥＨＩＫ	10	良好	にぶい橙	内外面煤付着	
3	土師器	台付甕	(14.2)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	浅黄橙	外面煤付着　№８	
4	土師器	台付甕	－	[2.4]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	灰褐	山陰系口縁Ｓ字甕　内外面煤付着	225-1
5	土師器	甕	(21.0)	[3.7]	－	ＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甕	(18.2)	[4.7]	－	ＡＣＤＥＨＩ	20	普通	灰褐	外面煤付着　№３	
7	土師器	鉢	(12.2)	[4.4]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰白	外面煤付着	
8	土師器	鉢	－	[2.4]	4.6	ＥＧＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	外面赤彩　№１	
9	土師器	高坏	(16.0)	[4.6]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№４	
10	土師器	高坏	－	[3.2]	(12.0)	ＡＢＣＨＫ	10	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	器台	－	[6.3]	9.7	ＡＤＥＨＩＫ	95	普通	明赤褐	外面・器受部内面赤彩　№２	175-4

で、長径1.05 m、短径0.36 mである。掘り込みには炭化物が充填され、その下層が焼土層になっていた。赤彩された壺、甕の胴部小破片が出土した。

貯蔵穴は南壁中央で検出された。貯蔵穴は中心が柱穴状を呈しており、入口部の施設の可能性も考えられる。長辺1.07 m、短辺0.74 m、深さ0.30 mの掘り込みの中央南寄りが、柱穴状に長径0.42 m、短径0.37 m、深さ0.15 m掘り下げられている。覆土は炭化物、ローム土を含む暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積と考えられる。赤彩された直口縁壺、高坏の小破片が出土した。

ピットは４基検出された。主柱穴と考えられる。規模は長径0.36 ～ 0.46 m、短径0.32 ～ 0.42 m、深さ0.56 ～ 0.61 mである。柱は抜き取られていた。覆土は炭化物、ローム土を含む明褐色土、暗褐色土、黒褐色土である。

壁周溝は幅0.15 ～ 0.33 m、深さ0.07 ～ 0.15 mで全周している。

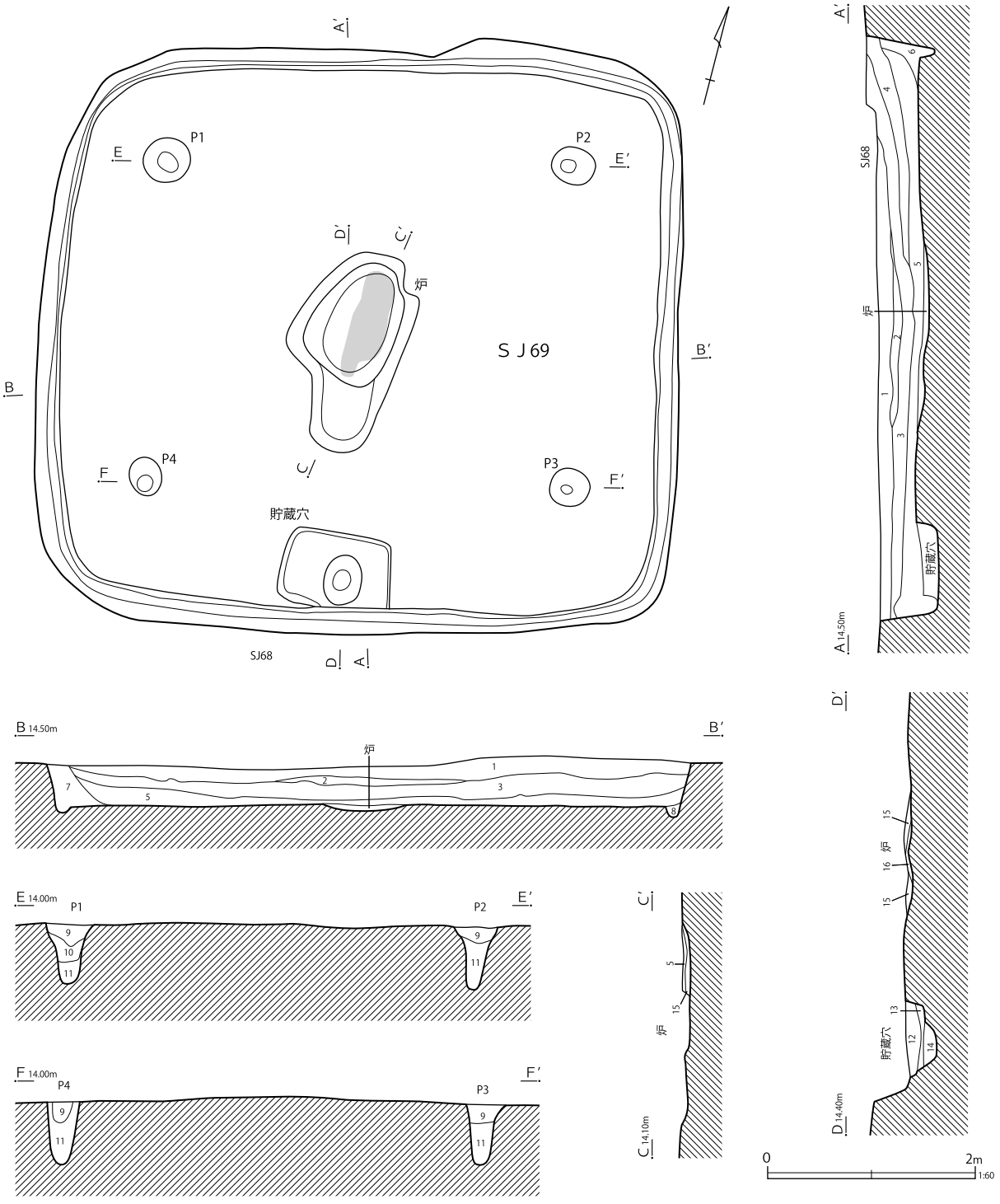
遺物は多く、東壁寄り南壁寄りの床面と覆土中から出土している。南壁際床面からは１の壺が胴部内面を上にして広がった状態で出土している。２の甕は横転して潰れた状態で、29の高坏はほぼ完形で、横転した状態で出土している。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、鉢である。大型品が多い。

１・３～10は壺である。１は特大の胴部である。長胴で底部は突出する。胴部は卵形で、粘土帯の接合痕が多く残り、８段に分かれて胴部が成形されている。外面は繰り返し化粧掛けされ、その境目が明瞭である。外面全体にヘラケズリ後刷毛目、更に不規則にヘラ磨きが施されている。内面はヘラナデで、見込み部分に強いヘラケズリが見られる。３・７は複合口縁壺である。口縁部下段に粘土が貼付されて複合部が作出されている。複合部外面には４条の沈線が入れられ、４本１単位の棒状浮文が貼付されている。内外面ヘラナデ。風化が進み、器表面はざらつく。東海地方の壺を意識していると思われるが、粘土は利根川流域のものである。７は径が大きく、複合部が狭い。他系統の壺の可能性がある。端部に粘土帯が付加されて複合部が作出されている。上端は面を持つ。内外面刷毛目後横ナデ。

４・５は単口縁の壺である。４はやや短めで、外反して開く。内外面刷毛目後横ナデ、内面にはヘラ磨きが加えられている。５は直線的に開き、器肉が厚い。内外面ヘラナデ後横ナデ。

６は大きく開き、端部が摘み上げられ、直立する面を持つ。二重口縁か。内外面ヘラ磨き。

８は球形の胴部である。肩部外面には口縁部にヘラ磨きが施された際についたと考えられるヘラ磨きの当たりが見られる。頸部の径が大きく、締りが弱い。胴部はややいびつな球形胴である。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。

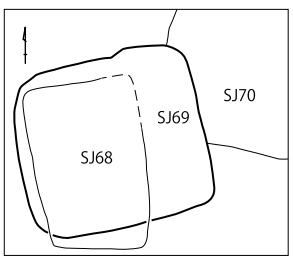


S J 69

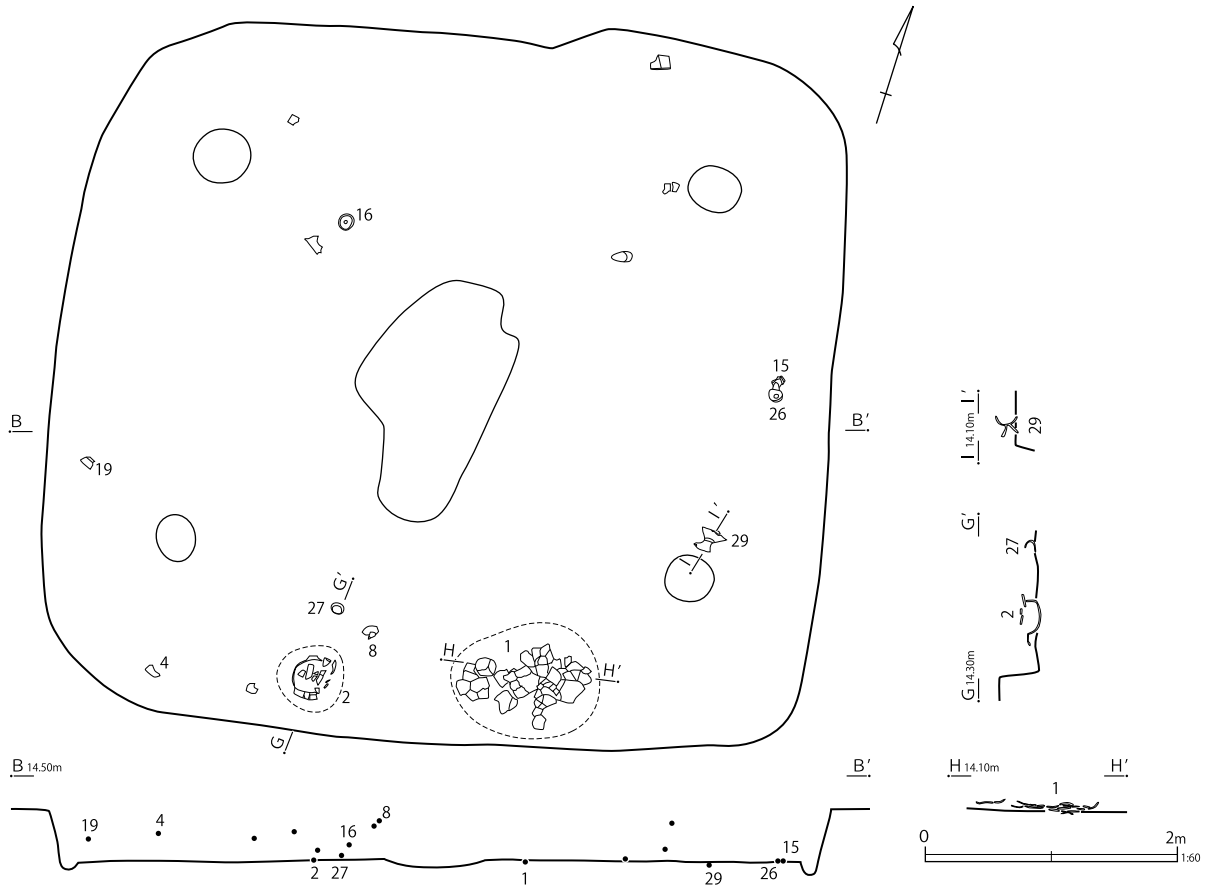
1	褐色土	ロームブロック（大）・炭化物少量	
2	褐色土	ロームブロック（大）・炭化物・焼土多量	
3	褐色土	ロームブロック（大）・鉄分を密に多量　しまり・粘性強い	
4	暗褐色土	ソフトロームを多量に混入　粘性強い	
5	褐色土	ロームブロック（大）・炭化物少量　粘性強い	
6	暗褐色土	ソフトローム・ロームブロック多量　粘性強い	
7	褐色土	褐色粘土ブロック多量　ソフトローム少量	
8	暗黄褐色土	ソフトローム・ロームブロックの混土層	
9	暗褐色土	ローム粒子・炭化物粒子少量	
10	明褐色土	ロームやや多	
11	黒褐色土		
12	黒褐色土	ローム粒子・炭化物粒子少量	
13	暗褐色土	ロームブロック混在	
14	黒褐色土	ローム粒子・炭化物少量	

炉跡

15	炭化物層	
16	焼土層	



第214図　第69号住居跡



第215図　第69号住居跡遺物分布

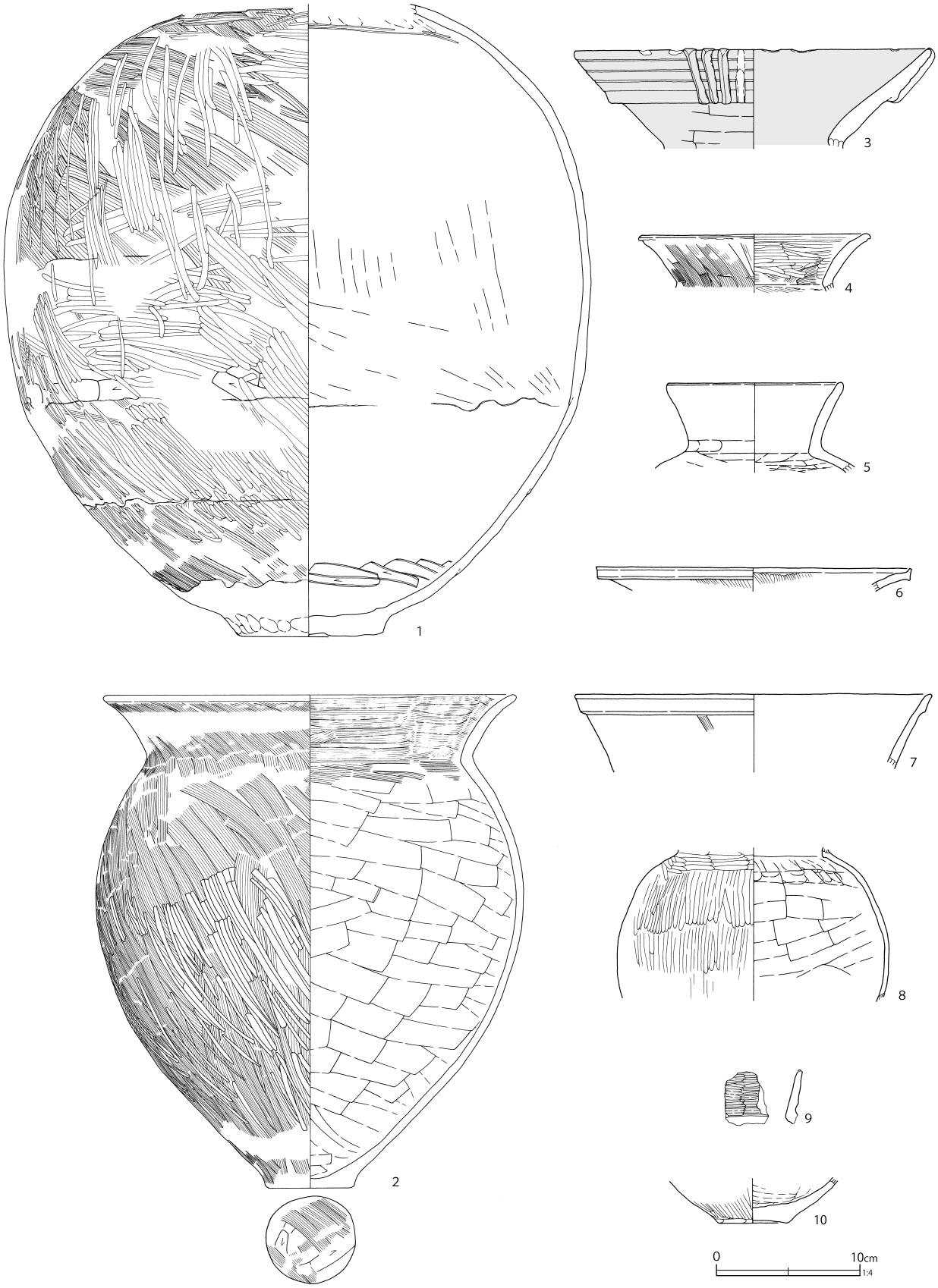
９は小破片だが５の字口縁になると考えられる。鉢の可能性もある。10 は底部である。外面全体ヘラ磨き。

２は特大サイズの甕である。大きく開口するくの字状口縁で、最大径がやや上位にある長胴である。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。胴部外面は刷毛目、内面は丁寧なヘラナデ。底面はヘラケズリ後刷毛目である。

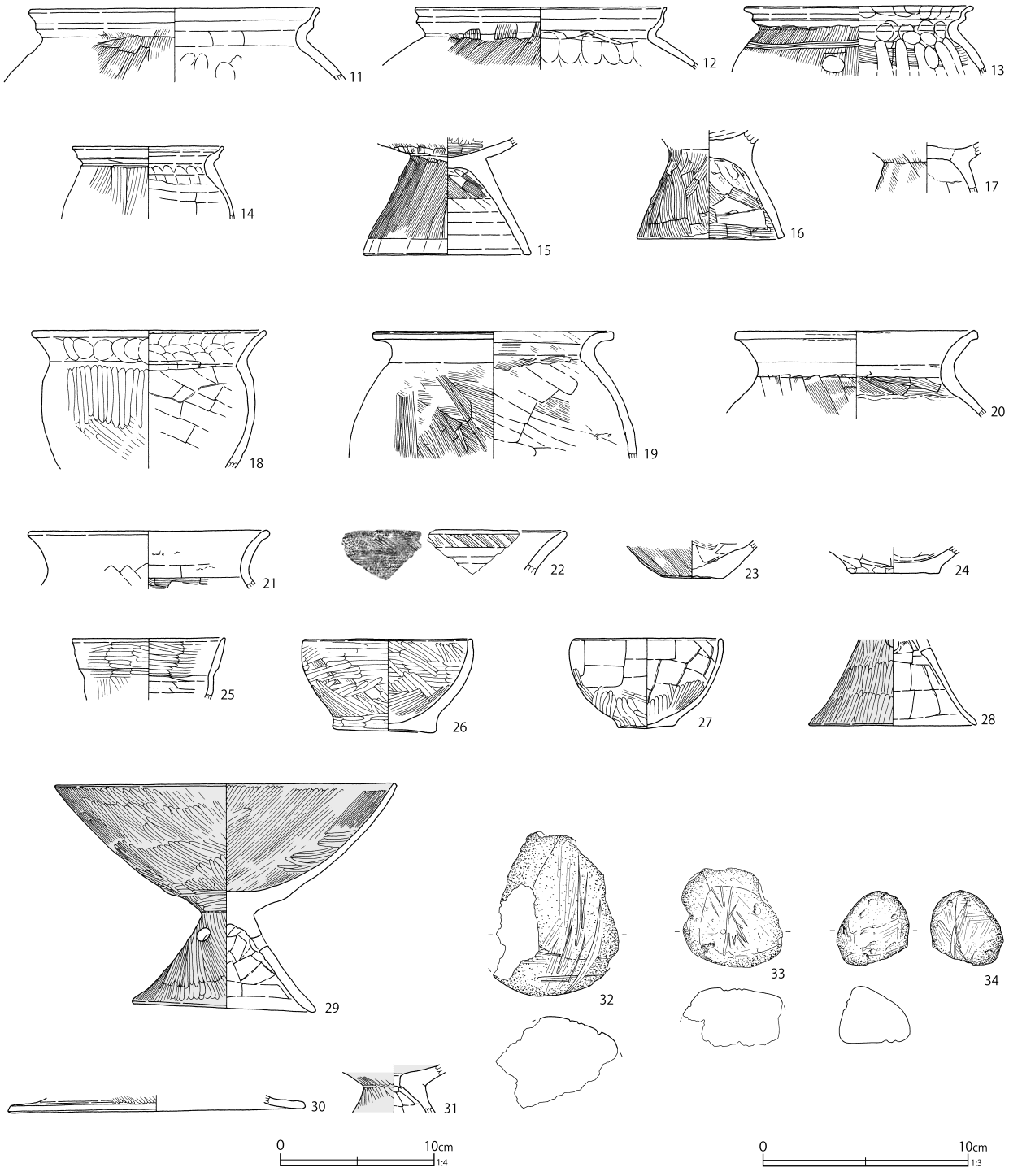
11 ～ 17 は台付甕である。11 ～ 14・17 はＳ字状口縁台付甕である。12 は口縁部上段からの粘土が頸部下にまで及んでいる。13 は器肉が厚く、他のＳ字甕とは様相を異にする。胴部の刷毛目はシャープさを欠く。肩部の横刷毛は３条１単位で、胴部に使用されている工具より幅が狭い。内面は明瞭な刷毛目後縦方向のナデが加えられている。14 は小型で平底の可能性がある。17 は胴部と脚台部の接合部で、円板をはめ込み、胴部見込み、脚台部天井に砂を混ぜた粘土が塗り込まれている。

15・16 は刷毛目台付甕の脚台部である。双方ともホゾ接合である。15 の胴部内面はヘラ磨き。16 は胴部見込み、脚台部天井に強いヘラナデが施されている。

18 ～ 24 は甕である。18 は小型で指頭痕が多く残る。口縁部内面指オサエ後横ナデ、胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデである。外面全体に煤付着。19 は口縁部が厚く、大きく外反する。端部は直立する面を持つ。北陸の影響を受けている可能性がある。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。胴部外面幅の狭い工具による刷毛目。内面刷毛目後ヘラナデ。煤が厚く付着する。20・21 は口縁部が短く外反する。20 は端部に面を持つ。21 は頸部



第216図　第69号住居跡出土遺物（1）



第217図　第69号住居跡出土遺物（２）

内面に重ねられた粘土に強めの刷毛目が施されており、接合の補強と思われる。22 は大型の口縁部である。刷毛目後強い横ナデが施されている。23・24 は底部である。23 は外面全体刷毛目。底面ヘラケズリ。24 は輪台状の底部である。底面ヘラケズリ後ヘラナデ。外周に粘土がダマ状に付着している。

25 ～ 27 は鉢である。25 は口縁部がやや肥厚している。26 は完形で、端正に仕上げられている。26 は刷毛目後ヘラ磨き、27 は刷毛目後ヘラ

第49表　第69号住居跡出土遺物観察表（第216・217図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	大型壺	－	[44.0]	10.2	ＡＤＥＧＨ	80	普通	にぶい黄橙	№11	175-9
2	土師器	甕	(28.6)	34.3	6.2	ＤＥＩ	60	良好	黒褐	№10	176-4
3	土師器	壺	(25.1)	[6.8]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	内外面赤彩	175-8
4	土師器	壺	(16.3)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	外面黒斑あり　№５	
5	土師器	壺	(12.5)	[6.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	壺	(22.2)	[1.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	橙		
7	土師器	壺	(25.0)	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	225-1
8	土師器	壺	－	[10.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい褐	外面煤付着　№７	
9	土師器	壺	－	[3.6]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	にぶい橙	内外面赤彩	225-1
10	土師器	壺	－	[3.1]	4.9	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙		
11	土師器	台付甕	(19.1)	[4.7]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
12	土師器	台付甕	(16.4)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄		
13	土師器	台付甕	(15.0)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
14	土師器	台付甕	(10.0)	[4.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	良好	にぶい黄橙	内外面黒斑あり	
15	土師器	台付甕	－	[7.5]	11.0	ＨＩＫ	45	普通	明黄褐	外面煤付着　№14	175-5
16	土師器	台付甕	－	[6.9]	9.7	ＤＥＨＩＪＫ	95	普通	にぶい赤褐	外面・割口煤付着　№２	175-6
17	土師器	台付甕	－	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	外面煤付着	
18	土師器	甕	(15.4)	[8.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰褐		
19	土師器	甕	(15.7)	[8.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	黒	内外面煤付着　№４	
20	土師器	甕	(16.0)	[5.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄褐	外面煤付着	
21	土師器	甕	(15.8)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	褐灰	内外面煤付着	
22	土師器	甕	－	[2.8]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	大型甕口縁部　内外面煤付着	225-1
23	土師器	甕	－	[2.4]	4.0	ＡＥＨＩＫ	70	普通	黒褐	外面煤付着	
24	土師器	甕	－	[1.7]	(6.0)	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	暗褐		
25	土師器	鉢	(10.0)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐		
26	土師器	鉢	11.1	6.0	6.8	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	№13	176-1
27	土師器	鉢	9.8	5.8	3.8	ＡＣＨＩＫ	95	普通	にぶい黄橙	№９	176-2
28	土師器	高坏	－	[5.5]	(11.0)	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	外面赤彩　貯蔵穴	
29	土師器	高坏	22.3	14.7	12.0	ＡＥＨＩＫ	95	普通	にぶい橙	外面・坏部内面赤彩　№12	176-5
30	土師器	高坏	－	[0.9]	(19.6)	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
31	土師器	器台	－	[3.1]	－	ＡＥＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	外面・器受部内面赤彩	
32	石製品	砥石	長さ[8.0]　幅[6.1]　厚さ[5.4]　重さ211.5ｇ　安山岩							被熱により赤色化　Ｖ字状の刃物痕あり	
33	石製品	砥石	長さ[4.9]　幅[4.9]　厚さ[3.1]　重さ26.9ｇ　軽石							刃物痕あり	
34	石製品	砥石	長さ3.7　幅3.6　厚さ2.9　重さ12.3ｇ　軽石							刃物痕あり	

ナデ、更にヘラ磨きが加えられている。26の底面は輪台状を呈す。27の底部はごく薄くなっており、欠損して穴が開いている。底面はヘラナデ。

28～30は高坏である。28は若干裾広がりに開く脚部である。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。透孔は4箇所である。29はほぼ完形である。若干坏部が曲って接合している。坏部の下段に稜を持つ。ホゾ接合。脚部は若干裾広がり状に開く。全体にヘラナデ後ヘラ磨き、脚部内面はヘラナデである。脚部の天井部は強くナデ込まれている。坏部、脚部ともに大きな黒斑が認められる。30は大きく開く裾部で、小型高坏の脚部と考えられる。端部は面を持つ。内外面横ナデ。外面はヘラ磨きが施されている。

31は器台の接合部である。やや太めで、器受部内外面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデである。

32は、安山岩製の砥石である。大部分が欠損し、被熱により部分的に赤色を呈する。断面Ｖ字状の刃物痕が多数見られる。

33・34は、軽石製の砥石である。33は大部分が欠損し、断面Ｖ字状の刃物痕が見られる。34は小型で、同様の刃物痕が見られ、。僅かに擦痕が認められる。

本住居跡は4世紀中葉､屋敷裏Ⅲ－4期である。

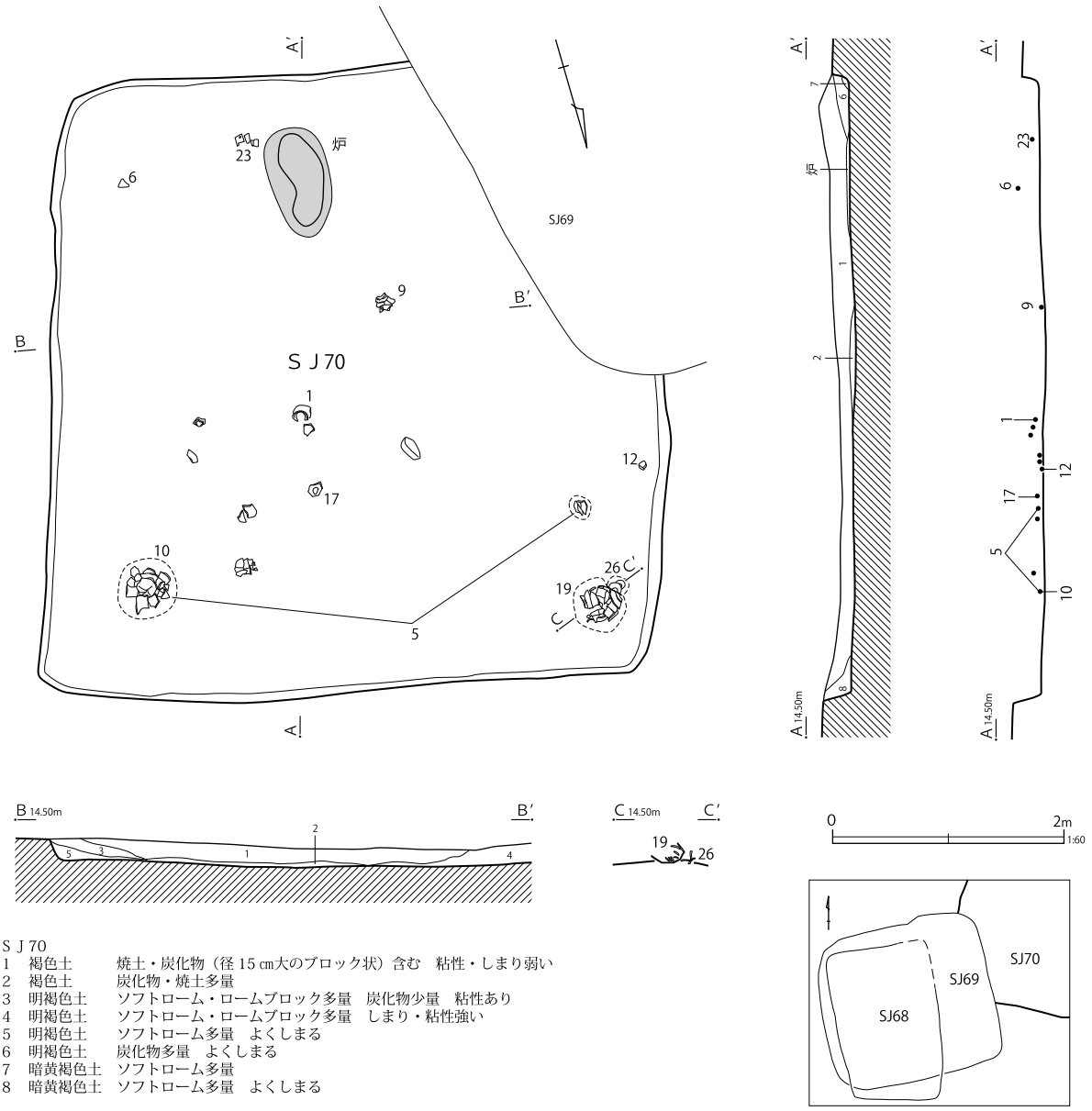
第70号住居跡（第218～220図）

Ｃ区の中央やや東側、Ｋ・Ｌ－15グリッドに位置する。第69号住居跡と重複し、本住居跡が古い。炉跡の位置から南北方向、Ｓ－13°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形はやや歪んだ方形で、各辺は直線的である。規模は､主軸方向5.43ｍ､直交軸方向5.35ｍ、深さ0.17ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を多く含む褐色土、明褐色土で、埋戻しと考えられる。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

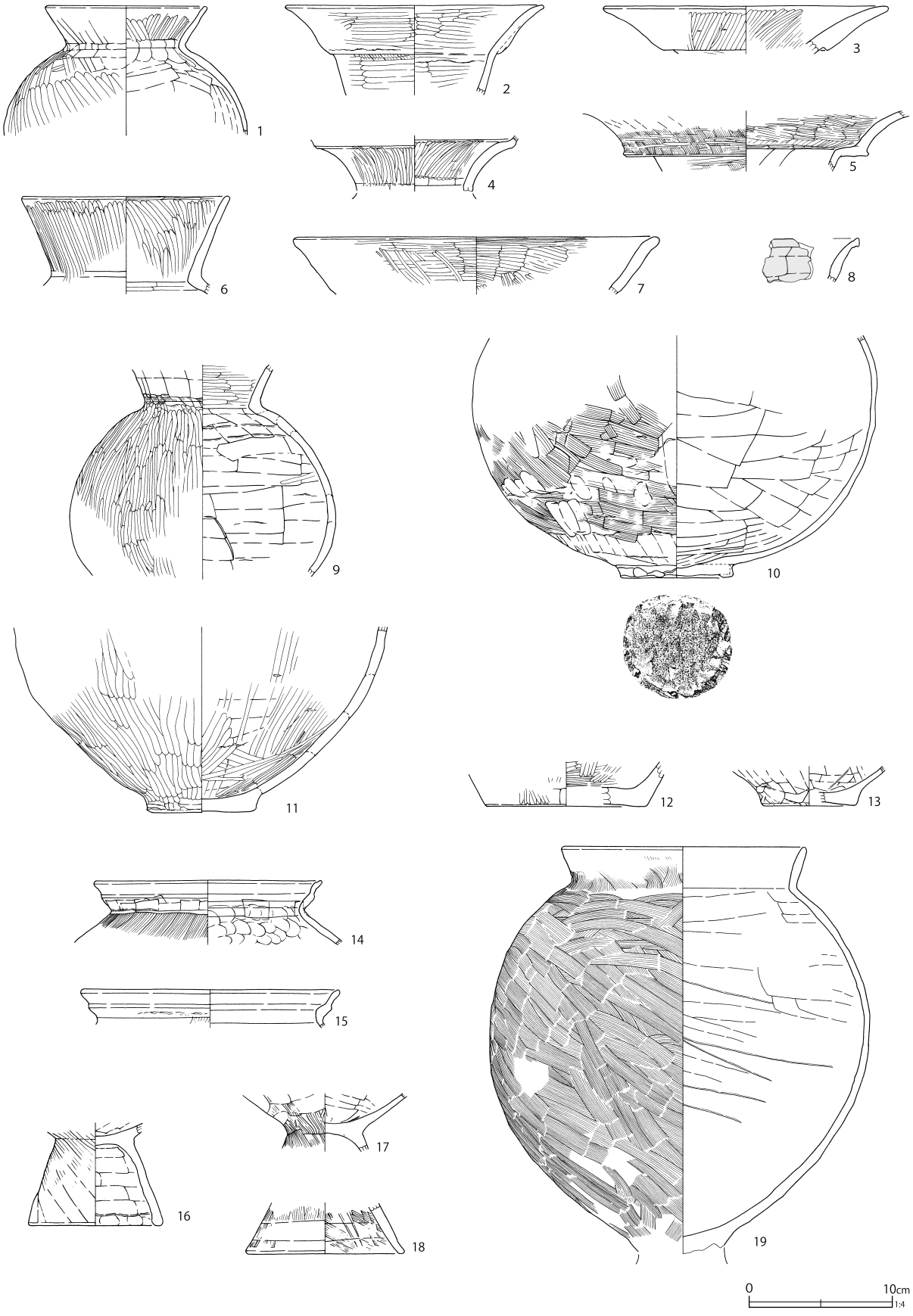
炉跡は南壁手前のほぼ中央で検出された。長径0.97ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.05ｍの楕円形で、焼土層が形成されている。

遺物はやや多く、床面から浮いた状態で出土し

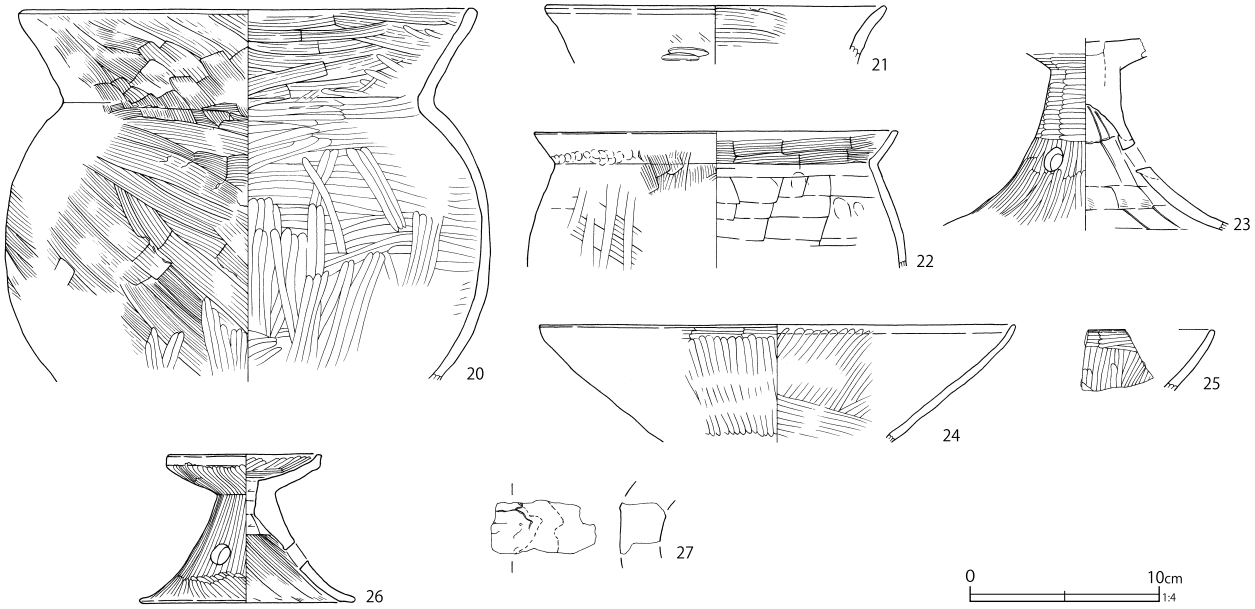


ＳＪ70
1　褐色土　　焼土・炭化物（径15㎝大のブロック状）含む　粘性・しまり弱い
2　褐色土　　炭化物・焼土多量
3　明褐色土　ソフトローム・ロームブロック多量　炭化物少量　粘性あり
4　明褐色土　ソフトローム・ロームブロック多量　しまり・粘性強い
5　明褐色土　ソフトローム多量　よくしまる
6　明褐色土　炭化物多量　よくしまる
7　暗黄褐色土　ソフトローム多量
8　暗黄褐色土　ソフトローム多量　よくしまる

第218図　第70号住居跡



第219図　第70号住居跡出土遺物（1）



第220図　第70号住居跡出土遺物（２）

第50表　第70号住居跡出土遺物観察表（第219・220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(11.2)	[9.0]	－	ＡＣＨＩＪＫ	35	普通	にぶい褐	№10	176-7
2	土師器	壺	(18.0)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙	二重口縁壺	
3	土師器	壺	(19.8)	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	橙		
4	土師器	壺	－	[3.9]	－	ＡＢＣＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	二重口縁壺	
5	土師器	壺	－	[4.3]	－	ＡＣＥＩＫ	60	普通	にぶい橙	内面黒斑あり　№12・14	176-6
6	土師器	壺	(14.4)	[6.8]	－	ＡＣＥＨＩ	15	普通	橙	№２	
7	土師器	壺	(25.4)	[4.0]	－	ＣＥＩＫ	15	普通	にぶい橙		
8	土師器	壺	－	[3.0]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	橙	外面赤彩	
9	土師器	壺	－	[14.7]	－	ＡＢＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	№３	176-8
10	土師器	壺	－	[16.9]	7.8	ＡＣＤＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄褐	№14	176-9
11	土師器	壺	－	[12.9]	7.6	ＣＨＩＫ	55	普通	灰褐	外面全体に黒斑あり	177-1
12	土師器	壺	－	[3.1]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№13	
13	土師器	壺	－	[2.7]	(6.6)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	外面黒斑あり	
14	土師器	台付甕	(15.8)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
15	土師器	台付甕	(18.0)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	灰黄褐		
16	土師器	台付甕	－	[7.1]	(9.2)	ＡＣＥＨＩ	95	普通	にぶい赤橙	内外面煤付着	176-3
17	土師器	台付甕	－	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№８	
18	土師器	台付甕	－	[3.5]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
19	土師器	台付甕	17.0	[28.6]	－	ＣＤＥＦＧＨ	90	普通	黒褐	№16	177-2
20	土師器	甕	(24.0)	[19.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	177-4
21	土師器	甕	(17.9)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
22	土師器	甕	(19.1)	[7.2]	－	ＣＩＫ	20	普通	褐灰	内外面煤付着	
23	土師器	高坏	－	[10.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	にぶい黄橙	№１	177-7
24	土師器	高坏	(25.0)	[6.2]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	10	普通	橙		
25	土師器	高坏	－	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰		
26	土師器	器台	8.1	7.8	11.3	ＡＣＤＥＨＩＫ	100	普通	橙	№15	177-8
27	土製品	羽口	長さ[4.1]　幅[2.1] 重さ11.2ｇ			Ｉ	20	普通	橙		225-1

た。炉跡南東の床面からは高坏の脚部（23）が割れた状態で、北東コーナー床面からは壺（10）が、北西コーナー床面からは大型の台付甕（19）が潰れた状態で出土している。出土器種は古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏、器台である。他に羽口の破片が出土している。

１～13は壺である。１・６は単口縁である。１は口縁部が短く、６は長い。いずれも直線的で、頸部はくの字で締る。１は外面ヘラナデ後ヘラ磨き、口縁部内面ヘラ磨き、胴部内面ヘラナデが施されている。頸部の内外面には指頭痕が多く残る。６は内外面丁寧なヘラ磨きが施されている。２・３は複合口縁壺である。いずれも複合部が広く、頸部からの下段に複合部が継ぎ足され、複合部が作成されている。複合部下端は凹凸がある。調整はいずれもヘラ磨きである。４・５・７は二重口縁壺である。頸部から大きく開く下段に上段が接合されている。５は更に中段として一段水平な面が作出されている。７は上段と考えられる。大型で器肉が厚い。４・７のベースはヘラナデ、５のベースは刷毛目で、更にヘラ磨きが施されている。８は二重口縁壺の上段、もしくは広口壺になると考えられる。硬質で、内外面ヘラナデ調整。赤彩。９～11は胴部である。９は小型で、胴部のやや下位に最大径がある。10・11も同様の球形胴である。いずれも底部が突出し、輪台状になる。10はやや潰れた感を受ける。器肉が薄く、器面に凹凸が著しい。粘土を被せながら刷毛目とヘラナデ、指オサエが繰り返されて、球形に作出されている。内面ヘラナデ。底部外周に指オサエ痕が顕著で、凹凸が著しい。11は内外面、底面ともヘラ磨きである。内面のベースはヘラナデである。12・13は底部である。12は円板状で、大きく分厚い。内外面ヘラ磨き。底面ヘラナデ。13は突出し、薄い輪台状である。内外面ヘラナデ。底面ヘラケズリ。

14～19は台付甕である。14～17はＳ字状口縁台付甕である。14・15は口縁部である。14の下段はベースの刷毛目調整後、粘土が盛り付けられ、横ナデが加えられている。内面は頸部以下に指頭痕が多く残り、頸部には横方向のヘラナデが加えられている。15は外面下段に上段から被せた粘土の亀裂が認められる。16は脚台部で、斜めに刷毛目が入れられ、上位は等間隔に下位は全体がナデ消されている。内面ヘラナデ。天井部と胴部見込みは砂を混ぜた粘土が充填されている。17は形態的には刷毛目甕だが、天井部と胴部見込みに砂を混ぜた粘土が充填されており、Ｓ字状口縁台付甕と考えたい。見込みに厚くオコゲが付着する。18は脚端部で、刷毛目後強い横ナデが施されている。

19は刷毛目台付甕である。口縁部は小さく、薄めである。胴部は長胴、ホゾ接合。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。胴部外面斜め方向刷毛目、内面ヘラナデが施されている。刷毛目は細かく、部分的に不明瞭である。

20～22は甕である。20は特大サイズで、器肉が厚い。口縁部は長く、端部は面を持つ。球形胴である。口縁部外面刷毛目後横ナデ。口縁部内面、胴部内外面刷毛目後ヘラ磨き。所謂甕磨き手法である。刷毛目は深く、シャープである。21は口縁端部で、刷毛目後横ナデ。頸部にヘラの当たりが残る。22は全体に作りが悪く、器面に刷毛目、ヘラナデが繰り返し施されている。特に口縁端部は凹凸が著しい。口縁部は内外面指オサエ後刷毛目、胴部は外面刷毛目後ナデ。内面指オサエ後ヘラナデである。

23～25は高坏である。23は脚部である。柱状の上位から下位は裾広がりに大きく開く。ホゾ接合で、接合部が厚く、重量感がある。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。坏部内面は臍の上位が剥離している。24は大きく直線的に開く坏部で、下段に稜を持つと考えられる。端部は若干折れるように内湾する。内外面ヘラ磨き。25は若干内

湾する坏部である。内外面ヘラ磨き。

26は、ほぼ完形の器台である。器受部は端部が短く立ち上がり、端部に面を持つ。ホゾ接合である。脚部は裾広がりに開く。端部の広がりは小さい。器受端部のみ横ナデが施される。外面はヘラ磨き、内面は器受部ヘラ磨き、脚部は刷毛目が施されている。透孔は３孔である。

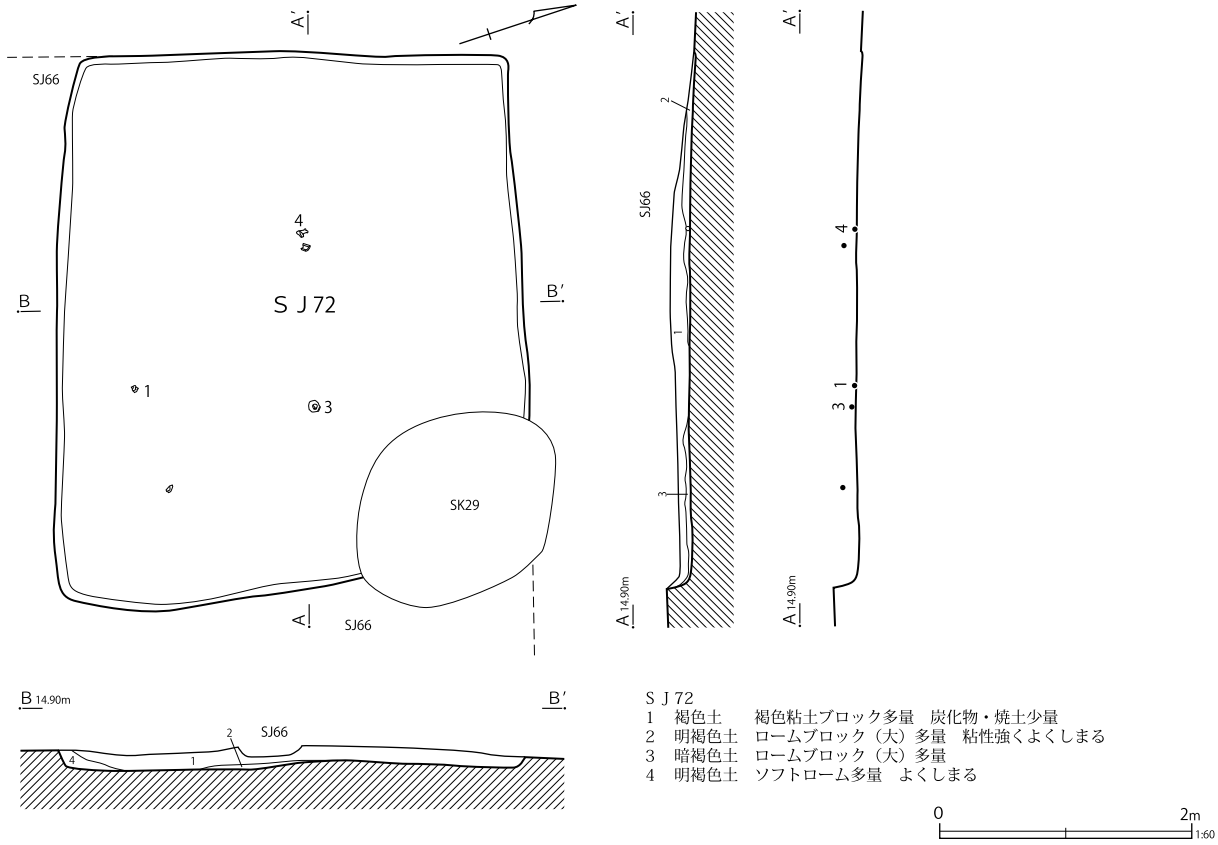
27は小口径羽口である。外面は還元、発泡し、一部ガラス化している。断面は赤化している。

本住居跡の時期は４世紀前半～中葉。屋敷裏Ⅲ－４期である。

第72号住居跡（第221・222図）

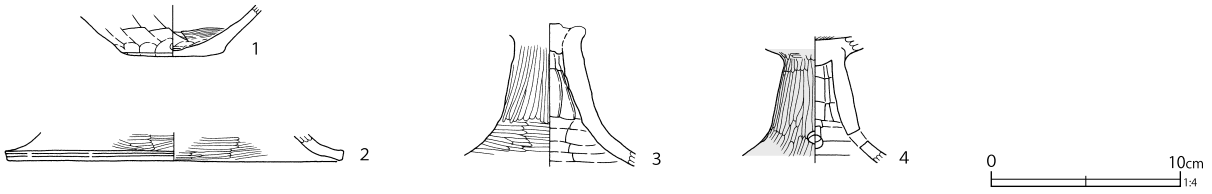
C区の西端、Ｊ－12グリッドに位置する。第66号住居跡、第29号土壙と重複し、両者より本住居跡が古い。第66号住居跡によって、かなり壊されている。長軸方向を軸方向とすると東西方向、N－80°－Wが主軸方位と考えられる。

平面形は南辺が長い長方形で、各辺は直線的である。規模は主軸方向4.43ｍ、直交軸方向3.75ｍ、深さ0.13ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を多く含む褐色土、明褐色土、暗褐色土で、埋戻しと考えられる。床面は凹凸があり、貼床、



ＳＪ72
1　褐色土　　褐色粘土ブロック多量　炭化物・焼土少量
2　明褐色土　ロームブロック（大）多量　粘性強くよくしまる
3　暗褐色土　ロームブロック（大）多量
4　明褐色土　ソフトローム多量　よくしまる

第221図　第72号住居跡



第222図　第72号住居跡出土遺物

第51表　第72号住居跡出土遺物観察表（第222図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[2.6]	5.5	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　№５	
2	土師器	高坏	－	[1.4]	(17.8)	ＡＣＤＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		
3	土師器	高坏	－	[7.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	明赤褐	№３	177-9
4	土師器	高坏	－	[6.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	外面・坏部内面赤彩　№１	177-10

掘り方は検出されなかった。

炉跡は検出されなかった。第 29 号土壙の重複箇所にあったと推定される。

遺物は少なく、覆土上～下層から出土した。出土器種は古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏、器台である。壺､甕の胴部破片がほとんどである。この他に平安時代の須恵器坏が混入している。

１は若干突出する小さめの壺底部である。外面ヘラナデ。底部外周に指頭痕が多く残り、内面見込み部分にも指頭痕が円形に巡る。

２～４は高坏である。２は大きく開く裾部である。端部は直立する面を持ち､中央が凹んでいる。内外面ヘラ磨き。３・４は脚部である。柱状の上位から裾広がりに大きく開く。ホゾ接合で、接合部が厚い。３は絞り込まれたため、脚台部側の臍は菊花状を呈する。両者とも内面上位の絞り目がヘラケズリによって消されている。調整は坏部内面、外面はヘラ磨き、脚部内面下半はヘラナデ。４の脚部には裾広がりに広がる箇所に４孔の透孔が開けられている。３は遺存範囲では透孔は認められなかった。４は脚部内面下半や透孔の半ばまで、部分的に赤彩が及んでいる。意図的ではないと推定される。

本住居跡は３世紀末、屋敷裏Ⅲ－２期である。

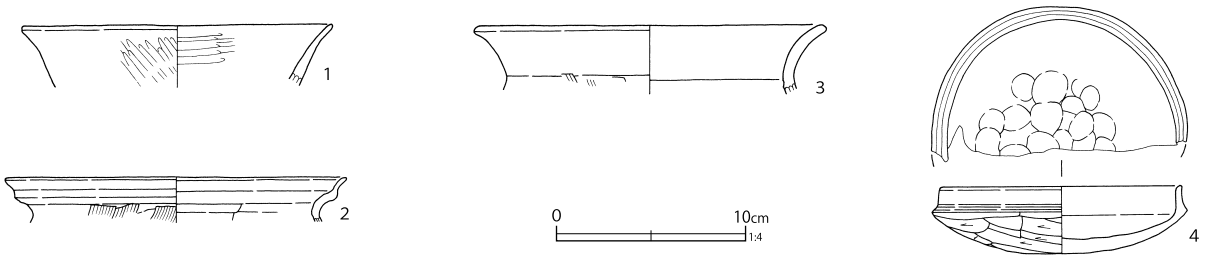
第 73 号住居跡（第 223・224 図）

Ｃ区の西端、Ｊ・Ｋ－ 12 グリッドに位置する。

遺構の大部分が調査区域外にかかる。長軸方向を軸方向とすると北西－南東方向、Ｎ－ 28° －Ｅが主軸方位となる。

平面形は方形もしくは隅丸方形と推定される。各辺は直線的である。検出範囲の規模は長軸 2.50 ｍ、直交軸方向 1.23 ｍ、深さ 0.17 ｍである。覆土は、ローム土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面上には黄灰白色粘土が認められるが、調査が部分的であるため性格は不明である。床面は平坦で、貼床、掘り方は検出されなかった。

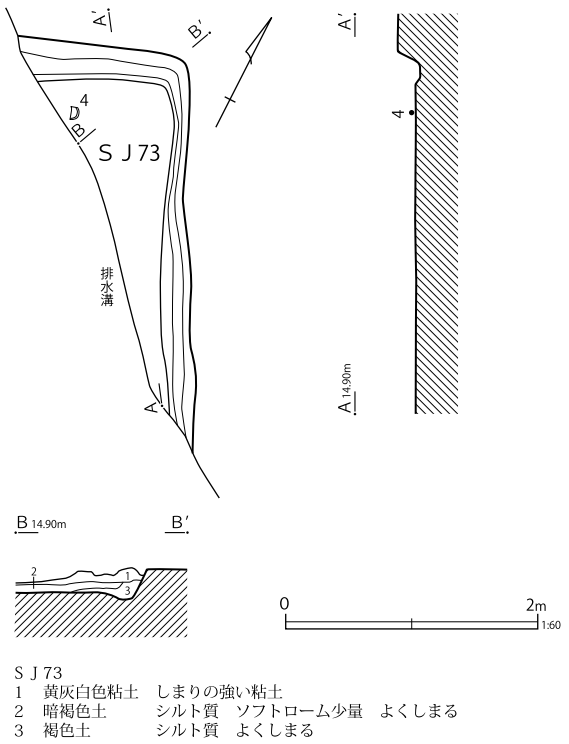
遺物は僅少で、古墳時代前期の壺、甕、Ｓ字状



第223図　第73号住居跡出土遺物

第52表　第73号住居跡出土遺物観察表（第223図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.3)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	浅黄橙		
2	土師器	台付甕	(18.0)	[2.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
3	土師器	甕	(18.1)	[3.6]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	灰褐	外面煤付着	
4	土師器	坏	12.5	3.5	－	ＡＣＥＨＩＫ	55	普通	にぶい黄橙	№１	177-3



SJ73
1　黄灰白色粘土　しまりの強い粘土
2　暗褐色土　　シルト質　ソフトローム少量　よくしまる
3　褐色土　　シルト質　よくしまる

第224図　第73号住居跡

口縁台付甕の小破片が出土したのみである。他に古墳時代後期の土師器坏が混入している。

１は単口縁の壺で、端部が若干外反する。内外面ヘラ磨き。風化のため、調整は不明瞭である。２はＳ字状口縁台付甕である。下段は刷毛目後横ナデ。角閃石を多く含む。３は刷毛目甕の口縁部である。刷毛目後横ナデ。微細な白色粒子を多く含む。４は古墳時代後期の坏身模倣坏である。見込み部分に指頭痕が多く認められる。

本住居跡は４世紀中葉､屋敷裏Ⅲ－４期である。

第 74 号住居跡（第 225 ～ 227 図）

Ｄ区の中央、Ｎ・Ｏ－ 19 グリッドに位置する。トレンチと排水溝に挟まれる状況で検出された。南東壁も削平を受けており、遺構の中央部分が検出できたのみである。第 78・83 号住居跡と重複し、両住居跡より新しい。炉跡の配置から北東方向、Ｎ－ 47°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は南東壁が削平されているため確実ではないが、南コーナーの様相から隅丸方形と推定される。規模は検出範囲で主軸方向 4.35 ｍ、直交軸方向 3.15 ｍ、深さ 0.25 ｍである。覆土は炭化物を含む黄灰色土、灰黄褐色土、明黄褐色土で、自然堆積である。床面は平坦で、焼土化している箇所や炭化物が分布する箇所が見られた。貼床、掘り方は検出されなかった。

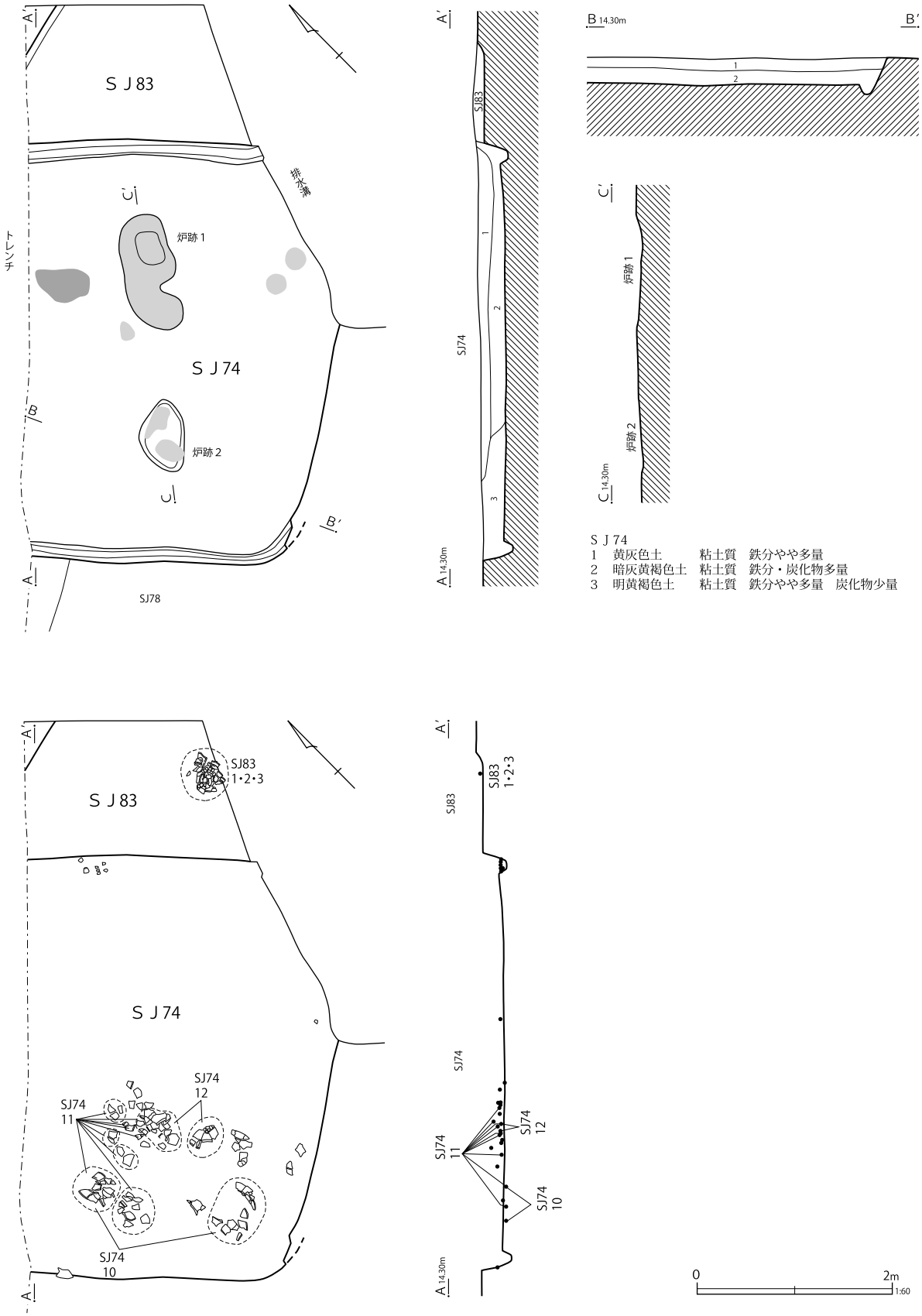
床面からは炉跡と壁周溝が検出された。炉跡は２箇所検出された。炉跡１は中央、北東寄りで検出された。不整形な掘り込みの底面が一面に焼土化した状態の炉跡である。掘り込みの規模は長軸 1.23 ｍ、短軸 0.50 ｍ、深さ 0.03 ～ 0.05 ｍである。炉跡２は不整楕円形の掘り込みの底面が焼土化した状態の炉跡である。掘り込みの規模は長軸 0.75 ｍ、短軸 0.45 ｍ、深さ 0.05 ｍである。南北２箇所に焼土化が著しい箇所があり、複数の炉跡とも考えられる。

壁周溝は幅 0.10 ～ 0.20 ｍ、深さ 0.10 ｍで全周している。

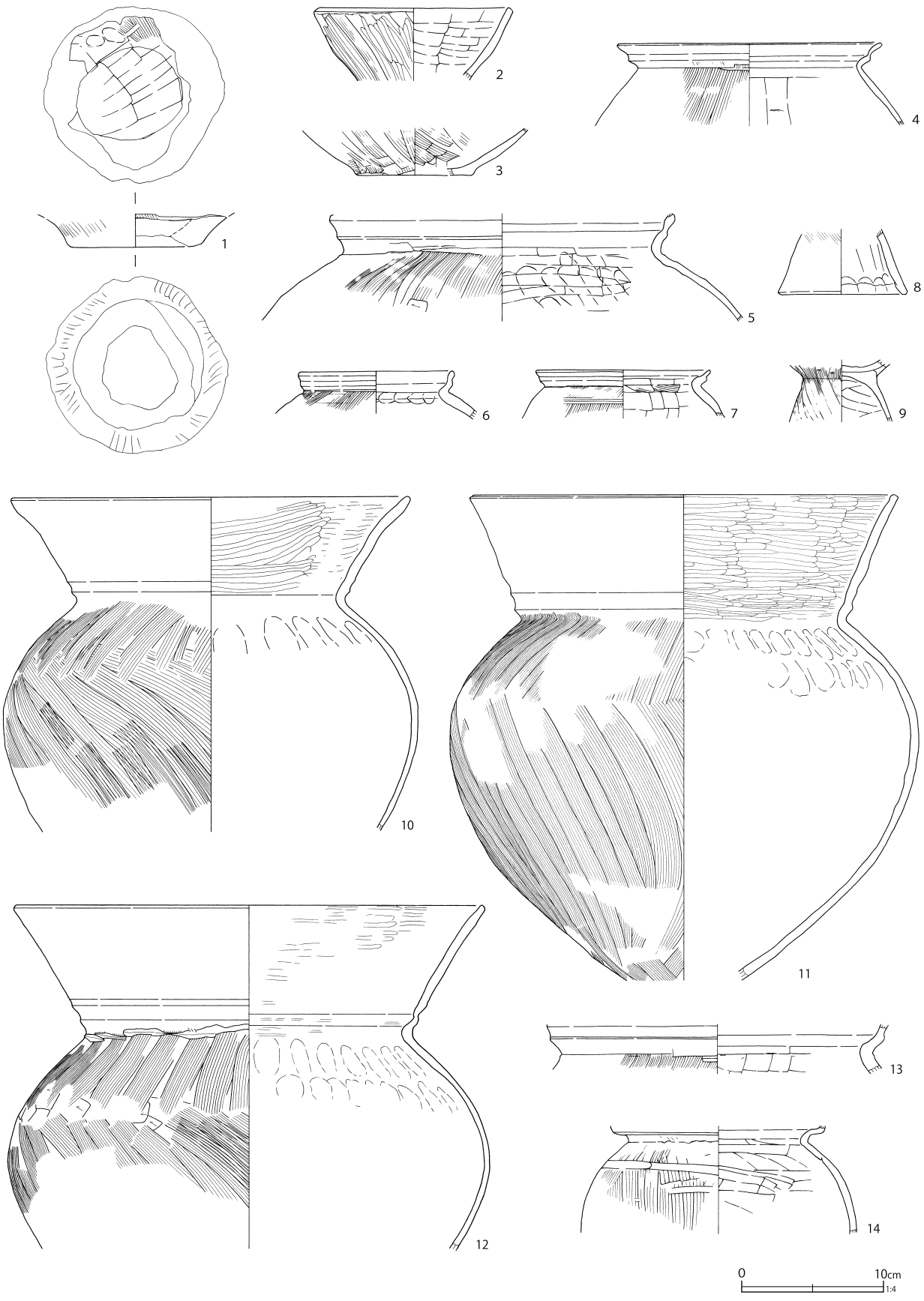
遺物は多く、炉跡２周辺、南西壁近くの床面から多く出土している。10 ～ 12 の山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕は、全体に破片が広がった状態で出土した。特に 11 は細片の状態であった。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、器台、鉢である。山陰系の大型Ｓ字状口縁台付甕が３点出土しており、特筆される。

１～３は壺である。１は壺の底部で、輪台状に成形される際に充填された粘土が、剥離により露出している。胴部の見込みには、その部分が盛り上がって確認できる。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ後刷毛目が施されている。２は単口縁の壺で、やや小型である。３は底部である。内外面刷毛目後ナデ。底面はヘラケズリである。４～９はＳ字状口縁台付甕である。

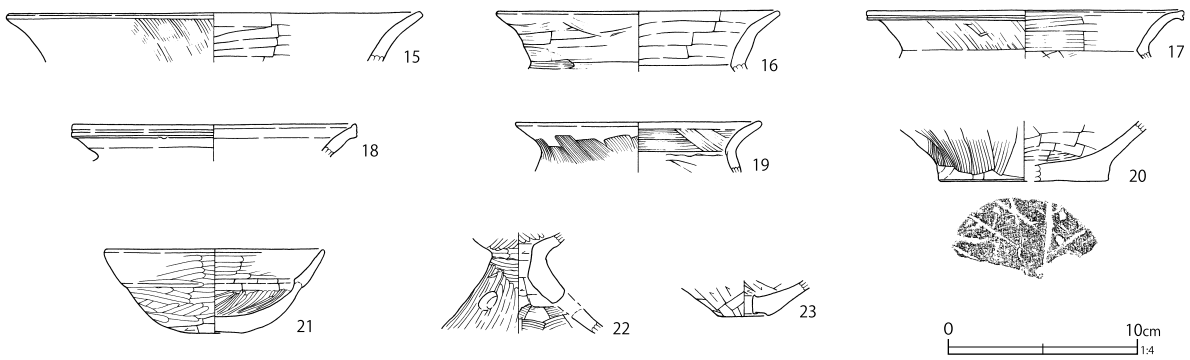
４～７は口縁部である。４は口縁部上段が長い。５は大型で上端が欠失しており、更に上部があると推定されるため、10 ～ 12 の山陰系口縁が接合する可能性がある。外面刷毛目、内面指ナデ後ヘ



第225図　第74･83号住居跡



第226図　第74号住居跡出土遺物（1）



第227図　第74号住居跡出土遺物（２）

第53表　第74号住居跡出土遺物観察表（第226・227図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[2.3]	(9.3)	ＡＣＤＥＩＫ	80	普通	灰白		177-5
2	土師器	壺	(14.0)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	壺	－	[3.3]	(8.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内面煤付着	
4	土師器	台付甕	(18.8)	[5.7]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
5	土師器	台付甕	－	[7.5]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	灰黄	内外面煤付着	178-1
6	土師器	台付甕	(11.0)	[3.4]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙	内外面煤付着	
7	土師器	台付甕	(12.4)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
8	土師器	台付甕	－	[4.5]	(9.1)	ＡＣＥＨＩ	65	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
9	土師器	台付甕	－	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	脚部内面煤付着	
10	土師器	台付甕	28.6	[23.5]	－	ＣＤＥ	60	普通	灰黄褐	山陰系口縁Ｓ字甕　№18・21	177-6
11	土師器	台付甕	30.2	34.3	－	ＡＣＤＥＨ	65	良好	灰黄褐	山陰系口縁S字甕　№1・8～12・14・21・22	178-2
12	土師器	台付甕	(33.2)	[24.7]	－	ＣＥＦＨ	50	普通	黒褐	山陰系口縁Ｓ字甕　№11・15	178-3
13	土師器	台付甕	－	[3.4]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	灰白	山陰系口縁Ｓ字甕	
14	土師器	甕	－	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	褐灰	内外面煤付着　SJ95の覆土出土破片と接合	
15	土師器	甕	(22.0)	[2.5]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
16	土師器	甕	(15.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
17	土師器	甕	(16.8)	[2.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
18	土師器	甕	(15.0)	[1.7]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
19	土師器	甕	(13.0)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐		
20	土師器	甕	－	[3.1]	(9.0)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	灰黄	底部木葉痕	
21	土師器	鉢	(11.6)	[4.4]	(2.8)	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		
22	土師器	器台	－	[5.3]	－	ＡＣＥＨＪ	60	普通	にぶい橙		
23	土師器	甑	－	[1.8]	2.8	ＡＥＨＩ	70	普通	にぶい褐	単孔	

ラナデ。風化による傷みが著しく、調整は不明瞭である。やや多孔質。６・７は小型で、口縁部が小さ目である。７は胴部の刷毛目工具が７条１単位、横刷毛は５条１単位で工具が異なる。８・９は脚台部である。斜めに刷毛目が入れられ、等間隔にナデ消されている。内面ヘラナデ。８は端部が折り返されている。９は天井部と胴部見込みに砂を混ぜた粘土が充填されている。

10 ～ 13 は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。特大サイズのＳ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。接合箇所はやや不連続になり、最上段からの化粧掛けの粘土がＳ字の下段にまでかけられ、全体に強い横ナデが施されている。そのため、11 のＳ字部分はやや丸みを帯びている。いずれも内側にも化粧掛けが施され、頸部まで横方向のヘラ磨きが施されている。11 のヘラ磨きは丁寧で、頸部には細かく施されている。

12 の内面は風化が進み、ヘラ磨きが不明瞭である。頸部より下位は一般的なＳ字状口縁台付甕と同様である。上位に最大径があり、外面羽状の刷毛目、内面はナデ調整が施されている。10 の胴部は上位の刷毛目に間隔が開く部分があり、下地のヘラケズリが確認できる。11 は何かで押さえたように刷毛目のない部分が見られる。12 は頸部に化粧掛けの粘土をヘラで取り除いた痕跡が残る。胴部の羽状の刷毛目は上下に間隔があり、下地のヘラケズリが確認できる。

13 は頸部である。７は最上段が接合する箇所で剥離している。全体に白く、風化が進んでいる。

14 は口縁部下段が大きく外反した後直立して立ち上がる。受口状口縁台付甕と考えられる。口縁部上位からの粘土が、頸部まで被せられている。胴部外面の刷毛目は浅め、肩部に横方向のヘラナデが入る。内面ヘラナデ。近江系か。

15 ～ 20 は甕である。15・16 は上位が外反する口縁部である。外面刷毛目後横ナデ、内面ヘラナデ。16 は胴部の刷毛目がごく一部だか確認できる。17・18 は端部が直立する面を持つ。17 は刷毛目後横ナデ、18 はヘラナデ後横ナデ。煤が厚く付着する。19 は小型の刷毛目甕である。あまり肩が張らない器形と考えられる。内外面で刷毛目工具が異なる。20 は底部である。壺の可能性もあるが、外面に厚く煤が付着しており、甕としておきたい。外面ヘラナデ後刷毛目、内面ヘラナデ。底面には木葉痕が認められる。

21 は鉢である。低平な体部に直線的な口縁部が取り付く。体部は分厚い。口縁部内外面は横ナデ後ヘラ磨き、体部は外面ヘラケズリ後ヘラ磨き、内面ヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。

22 は器台の器受部から脚部にかけての破片である。ホゾ接合。脚部は裾広がりに開く。外面はヘラ磨き、内面は器受部ヘラ磨き、脚部は刷毛目が施され、上位に粘土が足されてヘラケズリが施されている。透孔は３孔である。

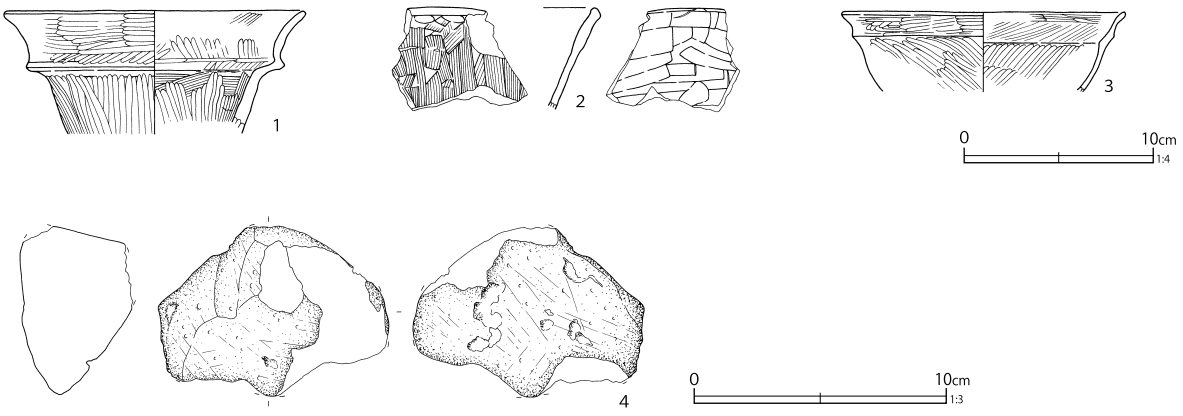
23 は単孔の甑である。底部中央に外側から穿孔され、工具は外側に引き抜かれている。底面を包むように胴部から粘土が着せられている。内外面ヘラケズリ。２次被熱により赤変している。

本住居跡は４世紀前半から中葉、屋敷裏Ⅲ－４期である。

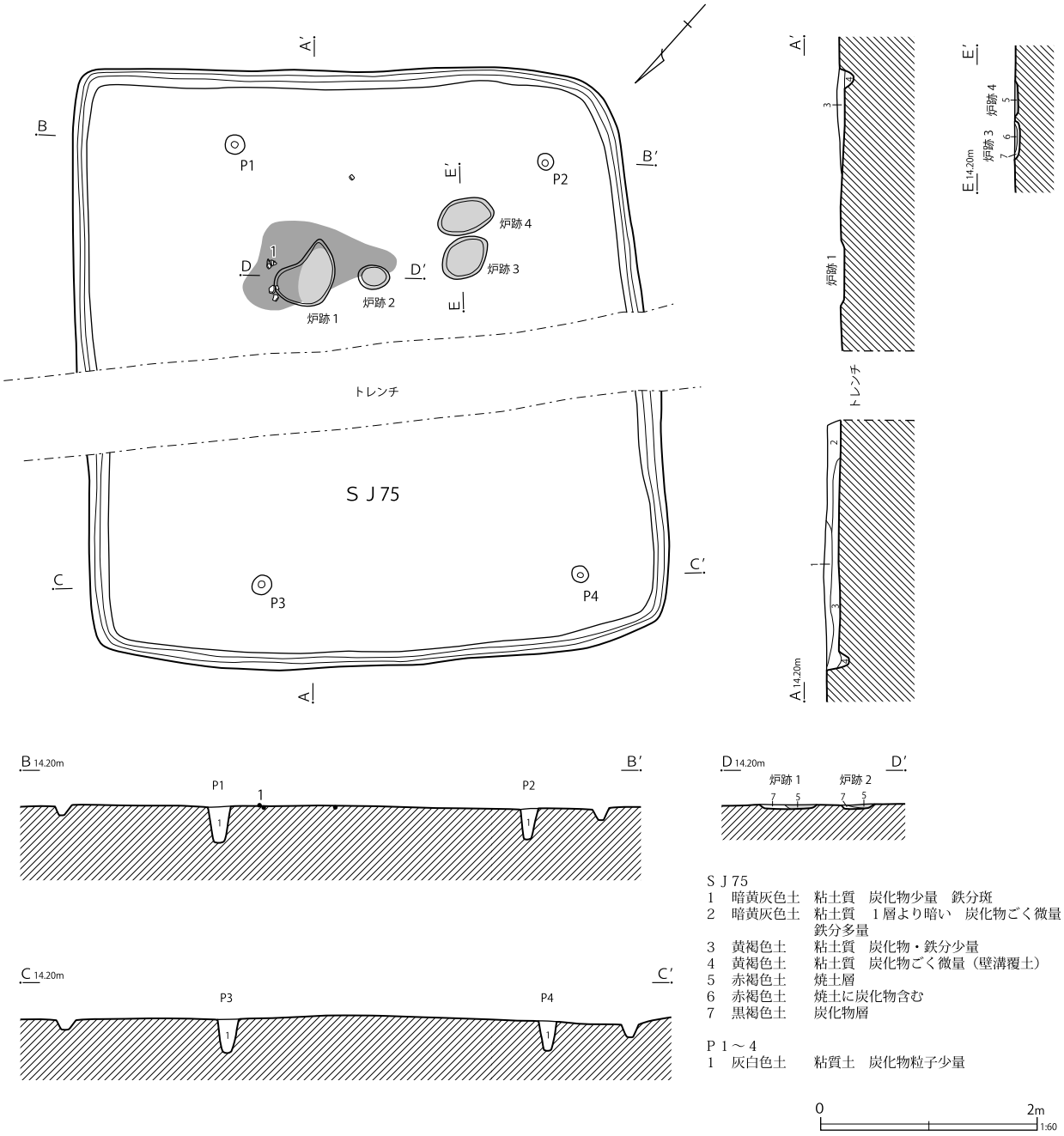
第 75 号住居跡（第 228・229 図）

Ｄ区中央、Ｎ・Ｏ－ 18・19 グリッドに位置する。遺構の中央を試掘トレンチによって壊されている。炉跡の位置から、南東方向、Ｓ－ 42°－Ｅが主軸方位と考えられる。

平面形は方形で、南コーナーは丸みを帯びている。各辺は直線的である。規模は、主軸方向 5.60 ｍ、直交軸方向 5.30 ｍ、深さ 0.15 ｍである。覆土は炭化物を含む粘土質の暗黄灰色土、暗黄褐



第228図　第75号住居跡出土遺物



第229図　第75号住居跡

第54表　第75号住居跡出土遺物観察表（第228図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.9)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№1	178-4
2	土師器	甕	－	[5.3]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	灰白	大型	
3	土師器	鉢	(15.0)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面黒斑あり	
4	石製品	砥石	長さ[6.8]　幅9.1　厚さ[4.7]　重さ87.4ｇ　軽石								

色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の南東側で４箇所検出された。いずれも掘り方に炭化物が充填され、その上層が焼土層になっていた。炉跡１から炉跡２にかけては全体に炭化物が分布していた。炉跡１は不整形な掘り込みで、上層に焼土層が形成されていた。掘り込みの規模は長軸 0.65 m、短軸 0.45 m、深さ 0.03 mである。炉跡２は長軸0.26 m、短軸0.23 m、深さ 0.03 mの楕円形で、炉跡１同様に上層に焼土層が形成されていた。炉跡３・４は連接して検出されている。炉跡３は長軸0.50 m、短軸0.35 m、深さ 0.03 m、炉跡４は長軸 0.55 m、短軸 0.30 m、深さ 0.03 mである。

ピットは４基検出された。小型だが、配置から主柱穴と考えられる。規模は長径 0.14 ～ 0.20 m、短径 0.12 ～ 0.16 m、深さ 0.25 ～ 0.35 mである。柱は抜き取られ、灰白色粘土によって埋め戻されている。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.35 m、深さ 0.05 mで、全周している。

遺物は少なく、覆土中から、古墳時代前期の壺、甕、台付甕、鉢の破片が出土した。山陰系Ｓ字状口縁台付甕と考えられる大型の甕口縁部の破片が出土している。

１は二重口縁壺である。頸部から直線的に開き、中段として一段水平な面が作出され、外反するように上段が接合されている。外面と内面上段は横ナデ後ヘラ磨き、下段は刷毛目後ヘラ磨きが施されている。

２は大型の甕の口縁部である。外面刷毛目、内面ヘラナデで、所々に指頭痕が認められる。横ナデは不明瞭である。山陰系などの大型甕の口縁部と考えられる。

３は鉢である。浅い体部に外面にが凸線状となる口縁部が取り付く。所謂Ｓ字状口縁の鉢に近い形態である。内外面ヘラ磨きが施されている。

４は軽石製の砥石である。使用により不整形になっている。僅かに擦痕が見られる。

本住居跡は３世紀後半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

第 76 号住居跡（第 230 ～ 232 図）

Ｄ区中央、Ｎ・Ｏ－ 17・18 グリッドに位置する。遺構の中央を試掘トレンチによって壊されている。炉跡の位置から、北方向、Ｎ－ 28° －Ｅが主軸方位と考えられる。

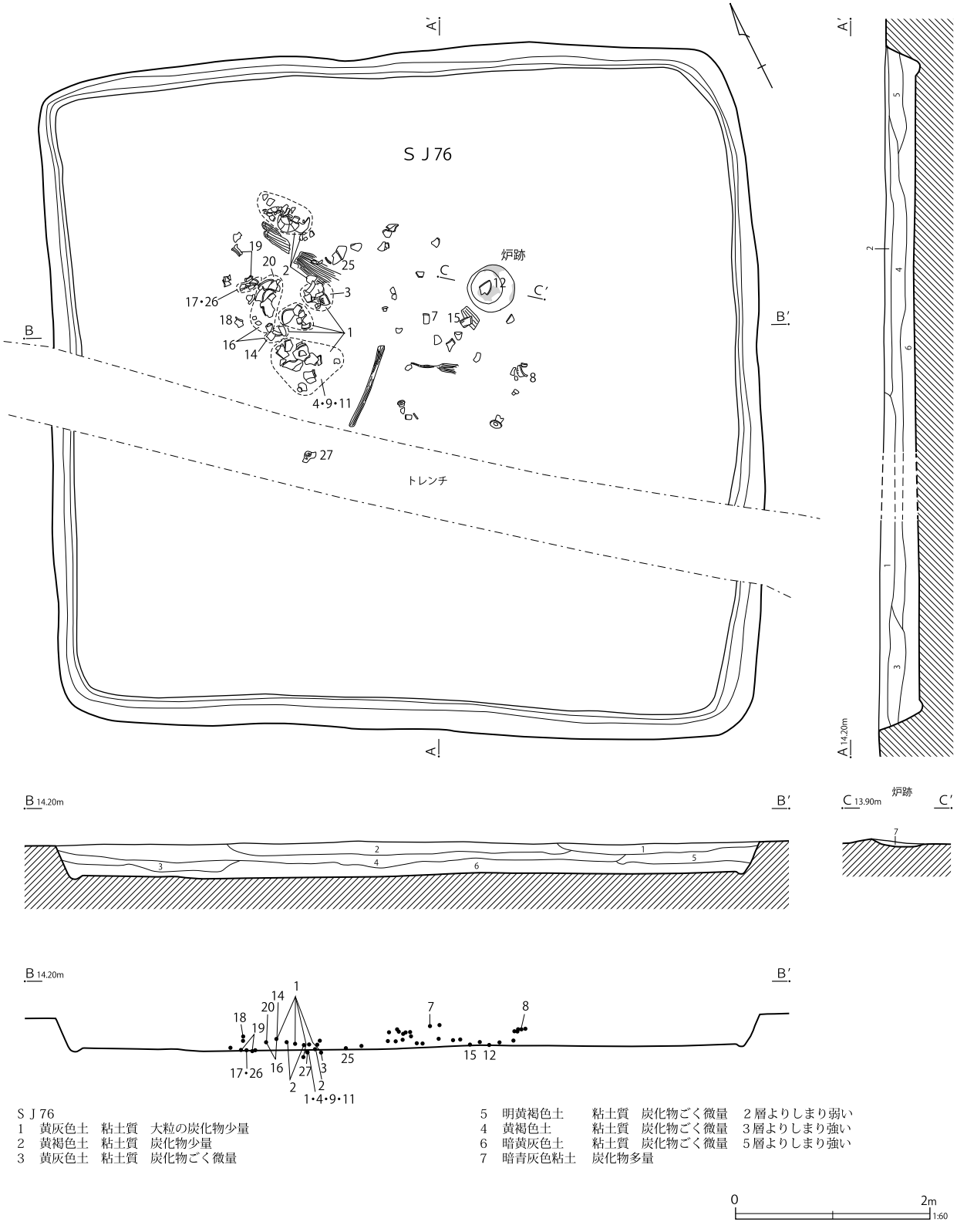
平面形は歪んだ方形で、北東コーナーは若干丸みを帯びている。各辺は直線的である。規模は、主軸方向 7.00 m、直交軸方向 7.26 m、深さ 0.30 mで、大型である。覆土は炭化物を含む粘土質の黄灰色土、暗黄灰色土、黄褐色土、明黄褐色土、暗黄褐色土で、自然堆積である。床面はほぼ平坦である。貼床、掘り方は検出されなかった。床面全体がグライ化し、暗青灰色を呈していた。炉跡の西側からは、板状、柱状の炭化材が出土した。北西寄りの炭化物は面状の広がりがあり、一部繊維状で、敷物等と考えられる。

床面からは炉跡、壁周溝が検出された。炉跡は中央北東寄りで検出された。径 0.50 m、深さ 0.05 mの略円形である。底面が焼土化し、上層に炭化物層が形成されている。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.35 m、深さ 0.05 mで、全周している。

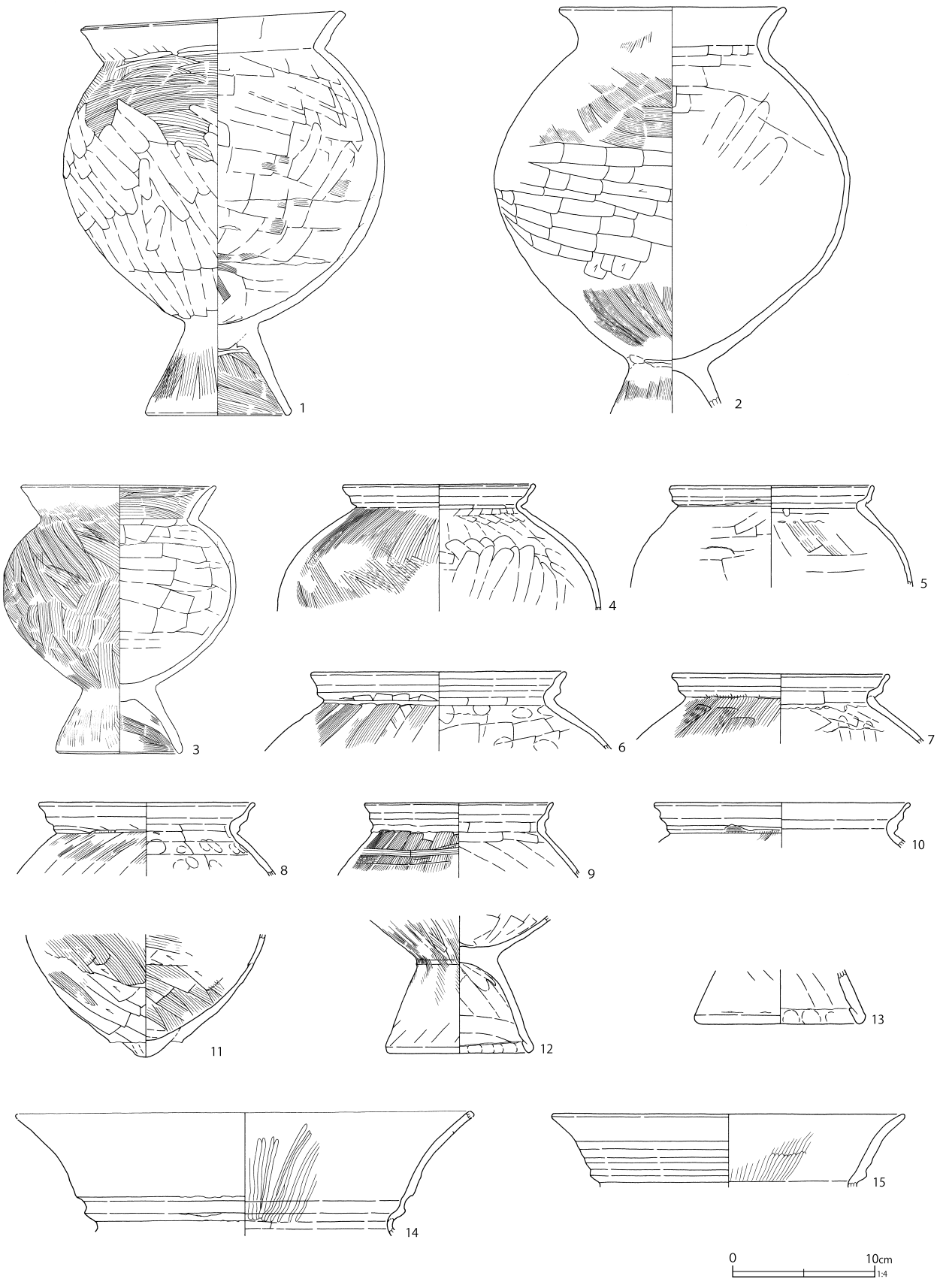
遺物は多く、炉跡の西側、住居跡の中央を中心に床面と覆土中から集中して出土した。山陰系Ｓ字状口縁台付甕の口縁部破片が出土した。

１～３は刷毛目台付甕である。３は小型である。２は全体に風化が進んでいる。口縁部は１・３が直線的で頸部はくの字、２は外反し頸部の屈曲はやや緩やかである。端部は丸く収められている。３の外面は剥離が進んでいる。前者は球形胴。後者は胴部中位に最大径があるやや長めの球形胴である。胴部の成形は５段階である。ホゾ接合で、脚台部はやや大きめである。口縁部内外面刷毛目

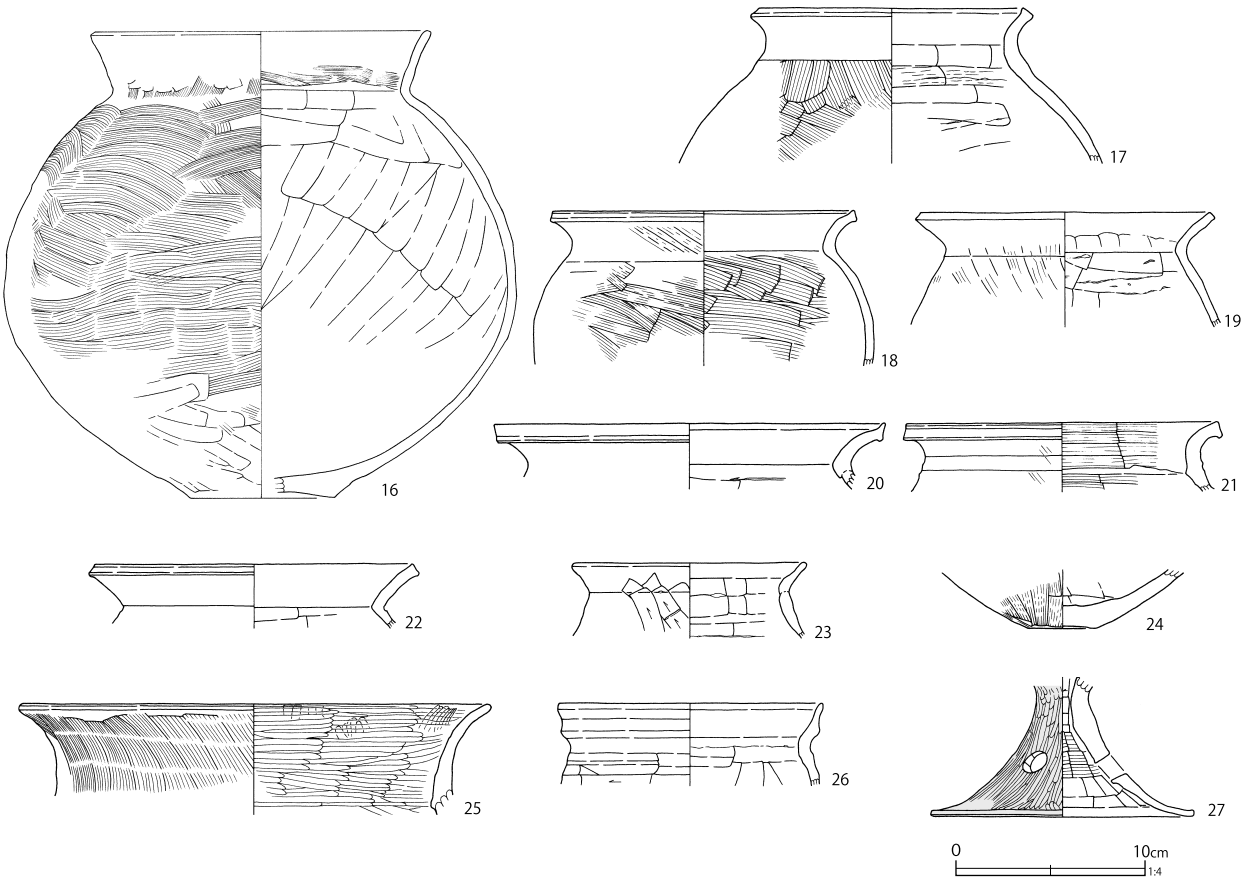


SJ76
1　黄灰色土　粘土質　大粒の炭化物少量
2　黄褐色土　粘土質　炭化物少量
3　黄灰色土　粘土質　炭化物ごく微量
5　明黄褐色土　粘土質　炭化物ごく微量　2層よりしまり弱い
4　黄褐色土　粘土質　炭化物ごく微量　3層よりしまり強い
6　暗黄灰色土　粘土質　炭化物ごく微量　5層よりしまり強い
7　暗青灰色粘土　炭化物多量

第230図　第76号住居跡



第231図　第76号住居跡出土遺物（１）



第232図　第76号住居跡出土遺物（２）

後横ナデ。３の内面は刷毛目が多く残る。胴部は１・２が横方向、斜め方向の刷毛目後ヘラケズリ、ヘラナデが加えられている。３の刷毛目は斜め主体でやや不規則である。内面は丁寧なヘラナデで、粘土帯の積み上げ痕が残る。２は不明瞭である。脚台部の外面はいずれも刷毛目、内面は１・３が刷毛目、２はヘラナデである。天井部はナデつけられているが、１・３は臍が突出している。

４～10、12・13はＳ字状口縁台付甕である。４～10は口縁部である。４は頸部内面に細かなヘラナデが施されている。５は外面全体が一枚剥離しており、下地のヘラナデが露出している。内面は刷毛目でナデが加えられている。６は器肉が厚く、口縁部下段にヘラによる再調整が見られる。内面は頸部以下に指頭痕が多く残り、頸部には横方向のヘラナデが加えられている。７は頸部外面に口縁部下段に横ナデが加えられた際の爪が入る。頸部内面には口縁部から被せた粘土の端部が不連続な面を形成している。８は口縁部下段に再調整が加えられている。９はやや小型で、唯一横刷毛が施されている。胴部に使用されている刷毛目工具とは異なり、４条１単位の幅の狭い工具が用いられている。10は風化が進み、調整は不明瞭である。12・13は脚台部である。12は箱形で、端部は折り返されている。胴部の刷毛目は粗く、間隔が開いている。内面はヘラナデ。脚台部は斜めに刷毛目が入れられ、上位は等間隔に下位は全体がナデ消されている。内面ヘラナデ。天井部と胴部見込みは砂を混ぜた粘土が充填され、天井部には花弁状の強いナデ痕が見られる。13は脚端部が、折り返されている。分厚く、斜め方向のナデ後横ナデが施されている。11はホゾ接合

第55表　第76号住居跡出土遺物観察表（第231・232図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	18.4	28.8	10.2	ＤＥＧ	80	良好	褐灰	№32～34・41・42	178-5
2	土師器	台付甕	15.9	[28.9]	－	ＣＤＥＨＫ	75	普通	にぶい黄橙	№１・２・40	178-6
3	土師器	台付甕	13.6	19.1	8.8	ＣＤＥＨ	80	普通	黒褐	№41	179-1
4	土師器	台付甕	(13.6)	[8.8]	－	ＡＣＤＩＫ	20	普通	黄灰	内外面煤付着　№34	179-4
5	土師器	台付甕	(14.4)	[7.0]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	灰褐	外面煤付着	
6	土師器	台付甕	(18.1)	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
7	土師器	台付甕	(15.4)	[4.8]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№13	
8	土師器	台付甕	(15.3)	[5.1]	－	ＡＣＤＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	№21	
9	土師器	台付甕	(13.4)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	灰白	内外面煤付着　№34	
10	土師器	台付甕	(18.0)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
11	土師器	台付甕	－	[8.5]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	見込み部分黒斑あり　№34	179-2
12	土師器	台付甕	－	[9.5]	10.4	ＡＣＥＨＩＫ	85	普通	にぶい黄橙	脚部内外面煤付着　№18	179-7
13	土師器	台付甕	－	[3.7]	(12.0)	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
14	土師器	台付甕	(32.3)	[8.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　内面黒斑あり　№32	225-1
15	土師器	台付甕	(25.0)	[5.1]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	山陰系口縁Ｓ字甕　外面煤付着　№37	225-1
16	土師器	甕	18.0	24.6	7.7	ＣＤＥ	60	良好	灰黄褐	№30・32	179-5
17	土師器	甕	(15.0)	[8.1]	－	ＡＣＥＩＫ	15	普通	灰褐	№45	
18	土師器	甕	(16.0)	[8.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	良好	赤	広口壺の可能性あり　№31	
19	土師器	甕	(15.8)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	浅黄橙	外面煤付着　№46・48	179-6
20	土師器	甕	(20.6)	[3.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	№30	
21	土師器	甕	(16.6)	[3.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	225-1
22	土師器	甕	(16.8)	[3.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	北陸系か	
23	土師器	甕	(12.4)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	橙		
24	土師器	甕	－	[3.0]	(3.6)	ＡＢＥＩＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着	
25	土師器	甕	(25.0)	[5.7]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	山陰系　外面煤付着　№39	179-3
26	土師器	鉢	(14.0)	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№45	225-1
27	土師器	器台	－	[7.3]	(14.0)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	橙	外面赤彩　№44	179-8

の台付甕の胴部下半である。脚台部が外れた状態で、臍が露出している。全体の器形はやや長胴になると考えられる。外面はヘラケズリが施された下地に、胴部上位から一枚粘土が被せられ、その上に刷毛目が施されている。内面は不規則だが、ヘラケズリ後刷毛目が加えられている。臍の外面にも皺が寄っており、胴部と脚台部の接合後、絞っている可能性がある。

14・15は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で、全体的に厚く、最上段は特に厚くなっている。特大サイズのＳ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。接合箇所はやや不連続になり、最上段からの化粧掛けの粘土がＳ字の下段にまでかけられ、全体に強い横ナデが施されている。そのため、両者ともＳ字部分はやや丸みを帯びている。口縁部の内側にも化粧掛けが施され、頸部まで縦方向のヘラ磨きが施されている。15は２次被熱のため赤変し、内外面全体の剥離が進んでいる。

16～25は甕である。16は直線的に開く口縁部で、頸部はくの字状、球形胴、平底である。口縁部内外面刷毛目後、内外面に化粧掛けを施し、横ナデが加えられている。頸部には粘土をヘラで押さえた箇所が見られる。胴部外面は、横方向の刷毛目後下位にヘラナデが加えられている。内面はヘラナデで、ヘラケズリに近い。底面ヘラケズリ。内外面とも胴部の下半に煤が付着する。

17・18・20・21は、口縁部が外反し、端部に広い面が作出されている。北陸地方の影響を受けていると考えられる。いずれも厚手で、焼成が良

く、硬質である。粘土が緻密で重量感がある。頸部はやや緩やかに胴部に至る17・21と、明瞭なくの字になるそれ以外に分かれる。前者が肩の張らない胴部、後者が球形胴になると思われる。口縁部はいずれも刷毛目後横ナデが施される。横ナデは強めに施されており、ベースの刷毛目は18・19・21で若干残るのみである。胴部は外面刷毛目、内面刷毛目もしくはヘラナデ。18は内外面の刷毛目工具が異なる。

19・22は、基本的には上述の17と同様だが、外反度が弱く直線的で、器肉はやや薄め、若干焼成が悪い。19の口縁部内面下段には、化粧掛けされた粘土がヘラで押さえられている。

23は小型で、口縁部が短い。肩の張らない胴部になると考えられる。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。口縁部には横ナデが加えられている。

24は厚手の底部である。２次被熱を受け傷みが著しい。外面はヘラナデに近い刷毛目、内面はヘラナデが施されている。底面無調整。

25は大型の甕の口縁部である。特大サイズになると考えられる。外面刷毛目、内面ヘラナデ後内外面に横ナデが施され、内面に横方向のヘラ磨きが加えられている。厚手で、焼成が良く、硬質である。粘土が緻密で重量感がある。外面は煤で黒色を呈する。

26は鉢である。Ｓ字、５の字の双方の可能性が考えられる口縁部の形態である。口縁部は強めの横ナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。やや焼成が甘く、手に付く感を受ける。

27は器台の脚部である。ホゾ接合。脚部は裾広がりに開く。外面はヘラ磨き、内面は穿孔部分がヘラケズリ、全体は刷毛目後下位にヘラナデ施されている。脚端部は横ナデである。

本住居跡は３世紀末から４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

第77号住居跡（第233・234図）

Ｃ区の東端、Ｌ－15･16グリッドに位置する。第79・81号住居跡と重複し、両者よりも本住居跡の方が新しい。炉跡の位置から北西方向、Ｎ－24°－Wが主軸方位と考えられる。

一辺6.70ｍの隅丸方形で、辺の南北は直線的、東西は丸みを帯びている。深さは0.23ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む明褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

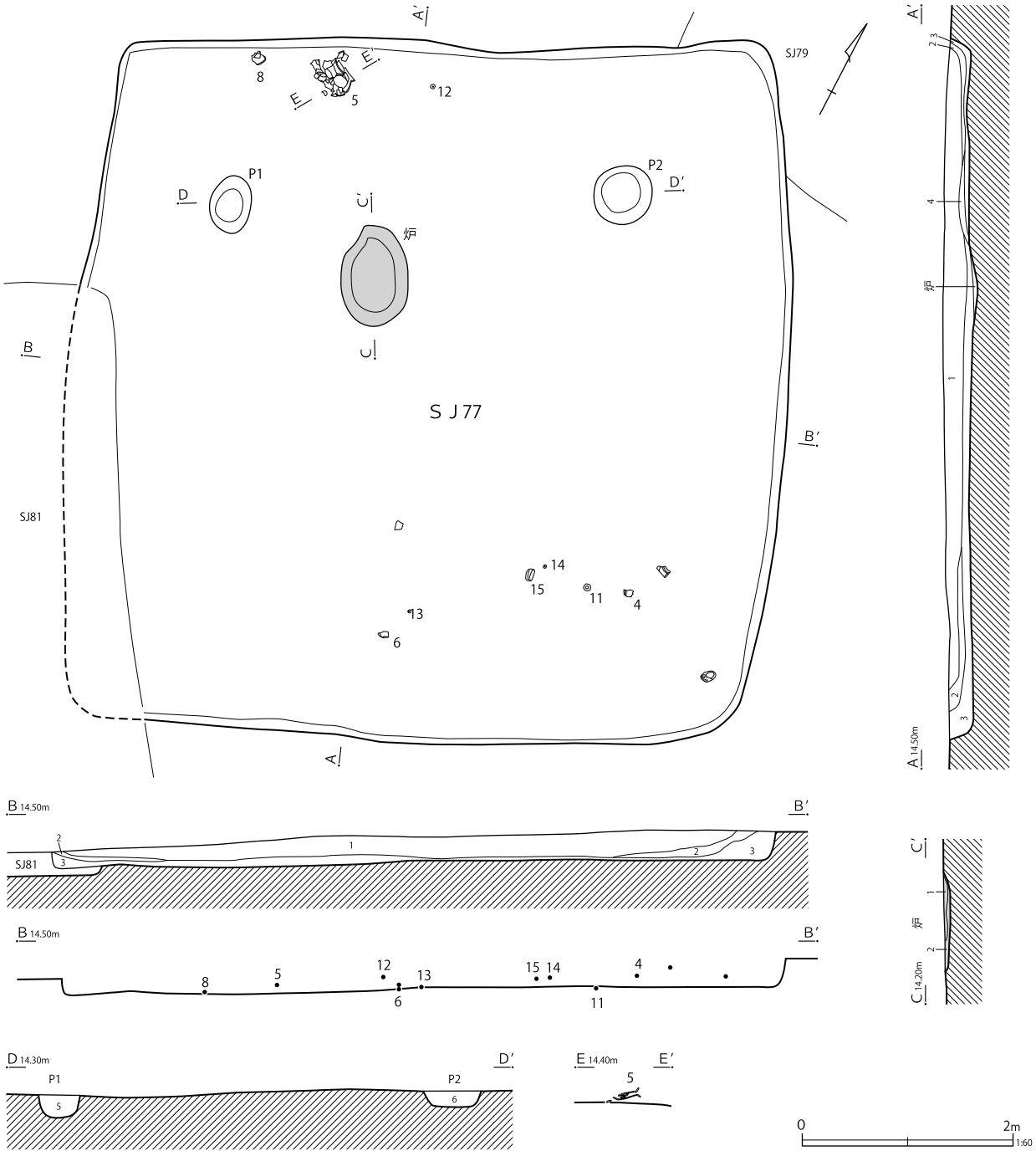
床面からは炉跡、柱穴が検出された。炉跡は住居跡の中央、北西寄りで検出された。掘り込みはなく、長径0.95ｍ、短径0.63ｍ、深さ0.05ｍの不整楕円形の範囲が焼土化された状態であった。上層が火床面、下層は被熱した地山である。

ピットは２基検出された。位置的には主柱穴だが、深度がなく、性格不明である。規模はＰ１が長径0.55ｍ、短径0.38ｍ、深さ0.20ｍ、Ｐ２が径0.55ｍ､深さ0.15ｍである。覆土は炭化物、ローム土を含む黒褐色土、暗灰褐色土である。

遺物は少量で、上層を中心に出土した。北壁際の床面からは甕（５）が潰れた状態で出土した。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、鉢、土錘である。

１・２は壺である。１は複合口縁である。口縁端部の外周に粘土を貼付して、複合が作出されている。複合部下端は凹凸がある。調整は内外面ともヘラ磨きである。２は単口縁で内湾する。大型の瓢壺になると考えられる。外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面ヘラ磨きが施されている。

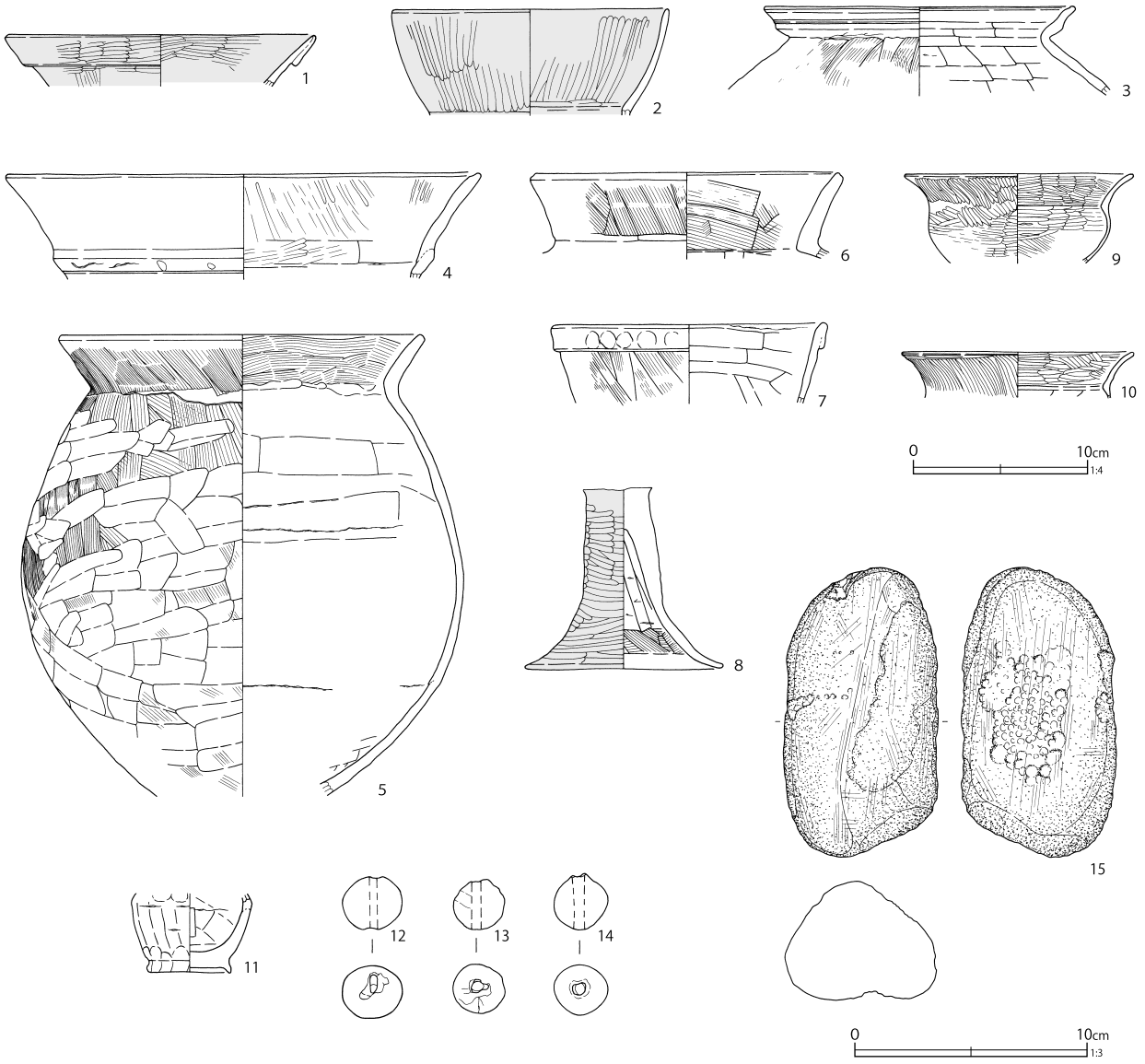
３はＳ字状口縁台付甕の口縁部である。器肉が厚く、やや重量感がある。胎土に角閃石を多く含む。４は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で全体的に厚く、最上段は特に厚くなっている。化粧掛けの粘土がＳ字の下段にまで被せられ、頸部に不連続な凹凸が見られる。外面横ナデ、内面ヘラ磨きが施されているが、全体に２次被熱による剥離が著しく、不明瞭である。全体に煤が付



ＳＪ77
1　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子少量　粘性強
2　暗褐色土　　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物粒子少量　一部焼土をブロック状に含む
3　明褐色土　　ロームブロックやや多
4　黒褐色土　　炭化物層　焼土粒子少量
5　黒褐色土　　ローム粒子少量
6　暗灰褐色土　炭化物粒子・ローム粒子少量

炉
1　赤褐色土　　焼土層　火床面
2　暗赤褐色土　地山が被熱により焼土化、赤色化

第233図　第77号住居跡



第234図　第77号住居跡出土遺物

着し、赤変している。

５・６は刷毛目台付甕である。口縁部は直線的で頸部はくの字である。いずれも口縁部内外面刷毛目後横ナデ。５は長胴で､成形は５段階である。外面は縦方向の刷毛目後ヘラナデが加えられている。内面は丁寧なヘラナデで、粘土帯の積み上げ痕が残る。下位のヘラナデは不明瞭で、ほとんど確認できない。６は粘土が緻密で器肉が厚く、重量感がある。端部は緩い面を持つ。

７は甑である。複合口縁で、鉢形になる。端部外周に粘土が付加されて複合部が作出されている。複合部外面には指頭痕が多く認められる。胴部外面刷毛目、内面ヘラナデ。黄白色を呈し、使用による２次被熱を受けていないと考えられる。

８は高坏の脚部で、柱状を呈し、裾部は外反している。柱状部は中空である。外面縦方向ヘラケズリ後、横方向のヘラ磨き。内面の上位はヘラケズリ。下位は刷毛目で、端部は横ナデが加えられている。

９・10は鉢である。両者とも器肉がごく薄い。９は外反する短い口縁部に低平な体部が取り付く。口縁部内外面横ナデ後丁寧なヘラ磨き、体部

第56表　第77号住居跡出土遺物観察表(第234図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(18.0)	[2.9]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
2	土師器	小型壺	(16.0)	[6.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	
3	土師器	台付甕	(18.0)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄褐		180-1
4	土師器	台付甕	(27.5)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	山陰系口縁Ｓ字甕　内外面黒斑あり　№2	180-2
5	土師器	甕	21.2	[26.4]	－	ＣＤＥＨ	75	普通	黒	№12	180-3
6	土師器	甕	(18.1)	[4.8]	－	ＡＣＥＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№9	
7	土師器	甑	(16.0)	[4.6]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	高坏	－	[10.4]	(11.4)	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	赤褐	外面赤彩　№11	180-7
9	土師器	鉢	(13.3)	[5.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい褐		
10	土師器	鉢	(13.4)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
11	土師器	ミニチュア	－	[3.4]	3.6	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	臼形　内面黒色　№3	179-9
12	土製品	土錘	径2.5×2.3　高さ2.3 孔径0.3～0.7 重さ12.7ｇ			ＡＣＤＨＩ	100	普通	にぶい黄橙	土玉　黒斑あり　№10	218-26
13	土製品	土錘	径2.2×2.1　高さ2.2 孔径0.5×0.4 重さ9.5ｇ			ＡＣＤＨＩ	100	普通	にぶい黄橙	土玉　黒斑あり　№8	218-27
14	土製品	土錘	径2.3×2.2　高さ2.4 孔径0.4×0.5 重さ10.4ｇ			ＡＣＤＨＩ	100	普通	にぶい橙	土玉　黒斑あり　№4	218-28
15	石製品	砥石	長さ12.5　幅6.8　厚さ5.4　重さ381.5　安山岩							側縁部に刃物痕あり　№6	

内外面ヘラナデ後ヘラ磨きである。10は口縁部が外反し、頸部はくの字状になる。9と同様の器形になる可能性が高い。口縁部内外面横ナデ後丁寧なヘラ磨き、頸部内面はヘラナデである。

11はミニチュアである。外面全体がナデ調整で、内面はヘラナデでである。底面はヘラナデ後ナデが加えられている。上部が欠失しており、口縁部が付くと考えられる。底面に粘土を貼付され、それを摘んで高台が作出されている。底部の外周には、その際の指頭痕が多く見られる。所謂臼形になると考えられる。

12～14は土錘、所謂土玉である。全体がナデ調整で、14は指頭痕や爪の痕跡が多く見られる。穿孔は12は両側から、13・14は片側から行われている。いずれにも黒斑が見られる。

15は、安山岩製の砥石である。形態から縄文時代の磨石を再利用したと考えられる。平坦面は中央が敲打されて窪み、その後使用による擦痕が見られる。上端部にはＶ字状の刃物痕が見られる。

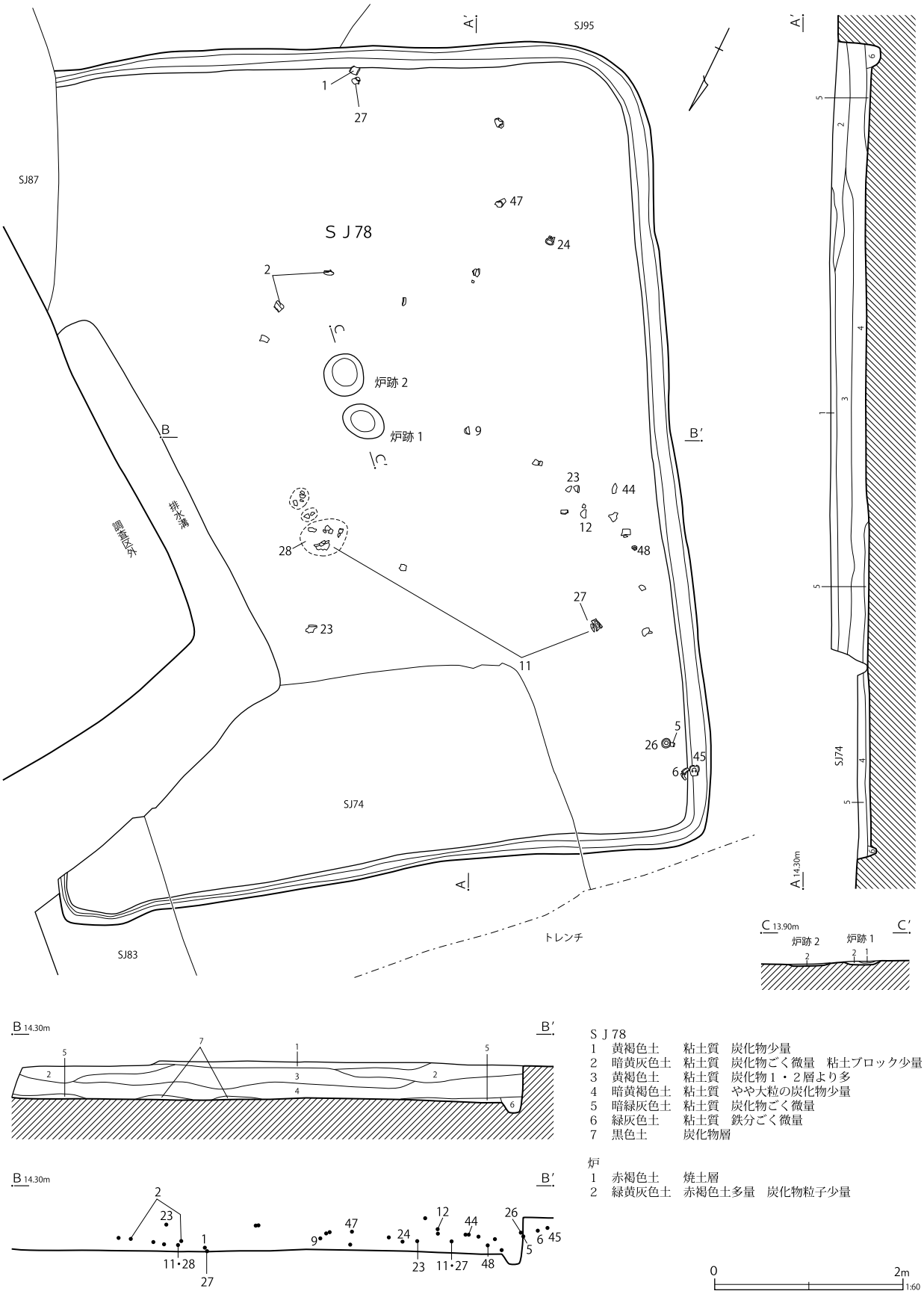
本住居跡は4世紀後半、屋敷裏Ⅲ－4期である。

第78号住居跡（第235～237図）

Ｄ区の東側、Ｎ・Ｏ－19、Ｏ－20グリッドに位置する。第74・83・87・95号住居跡と重複し、第95号住居跡より新しく、その他よりも古い。炉跡の位置から南東方向、Ｓ－32°－Ｅが主軸方位と考えられる。

主軸方向8.77ｍ、直交軸方向7.00ｍ、深さ0.40ｍの隅丸方形で、各辺は直線的である。覆土は炭化物、粘土ブロックを含む黄褐色土、暗黄褐色土、暗黄灰色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、第５層は貼床の可能性がある。床面近くは全体にグライ化し、青もしくは緑がかった色調を呈している。

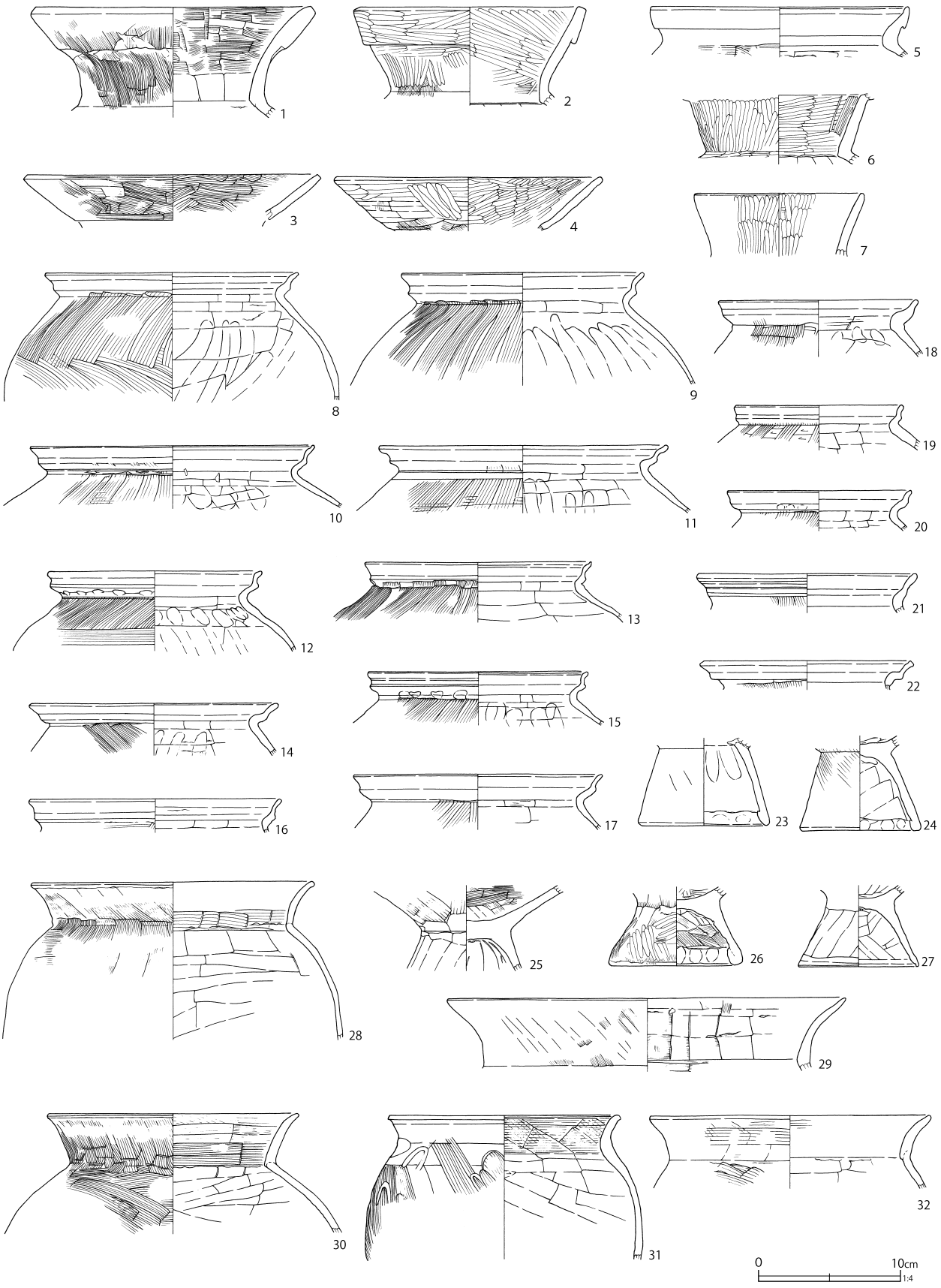
床面からは炉跡、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の中央、やや南東寄りの２箇所が検出された。双方とも楕円形で、炉跡１は長径0.45ｍ、短径0.30ｍ、深さ0.03ｍ、炉跡２は長径0.43ｍ、短径0.40ｍ、深さ0.02ｍである。掘り方は、焼土化した黄灰色土を多く含む緑黄灰色土(第２層)が充填されていた。上層（第１層）は焼土層が形



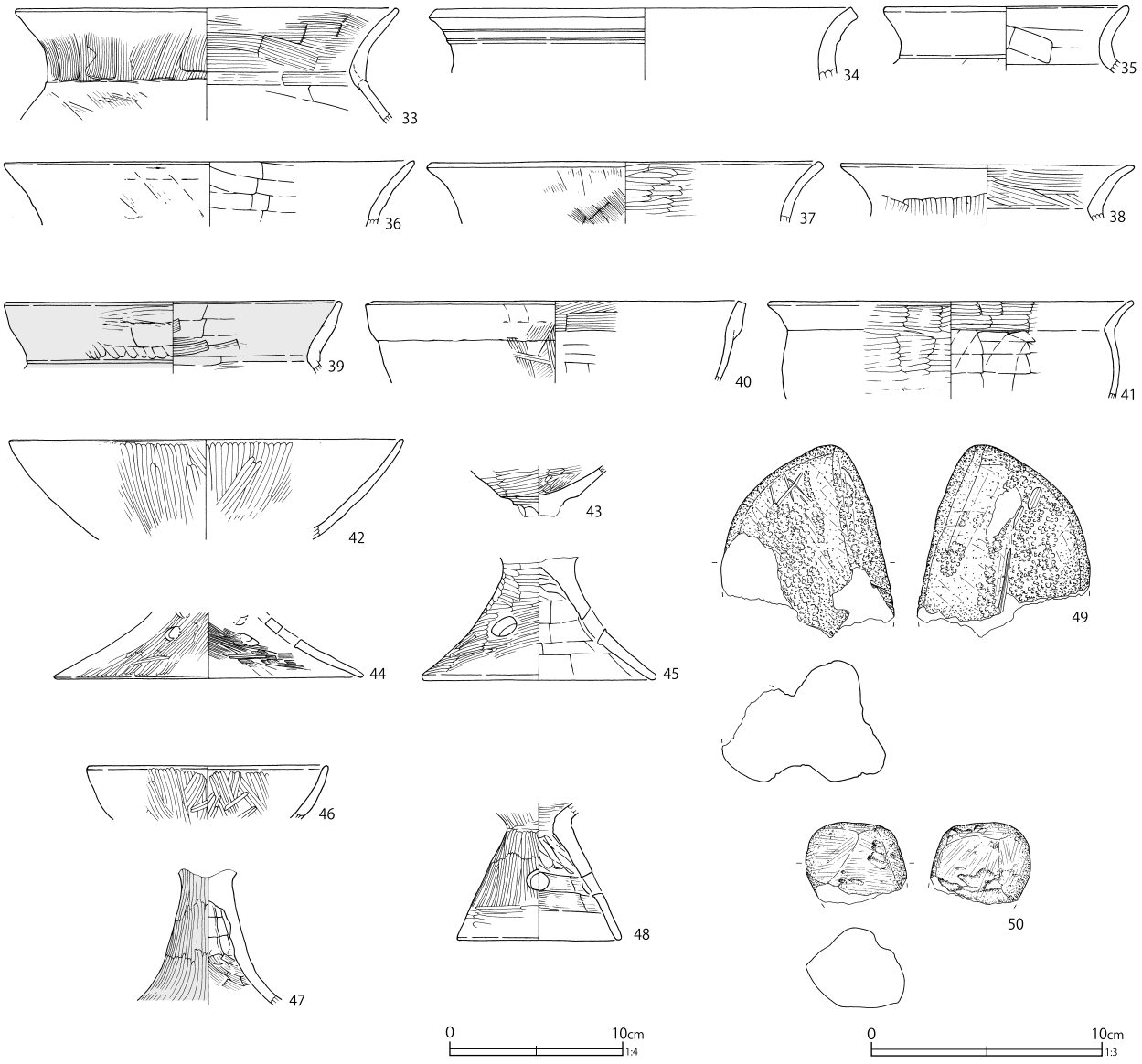
ＳＪ78
1　黄褐色土　粘土質　炭化物少量
2　暗黄灰色土　粘土質　炭化物ごく微量　粘土ブロック少量
3　黄褐色土　粘土質　炭化物１・２層より多
4　暗黄褐色土　粘土質　やや大粒の炭化物少量
5　暗緑灰色土　粘土質　炭化物ごく微量
6　緑灰色土　粘土質　鉄分ごく微量
7　黒色土　炭化物層

炉
1　赤褐色土　焼土層
2　緑黄灰色土　赤褐色土多量　炭化物粒子少量

第235図　第78号住居跡



第236図　第78号住居跡出土遺物（1）



第237図　第78号住居跡出土遺物（２）

成されていた。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.25 m、深さ 0.10 m で、全周している。覆土は単層で粘土質の緑灰色土である。

遺物はやや多く、上～中層を中心に出土した。器種は古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏、鉢、器台、甑である。甕の胴部破片が多い。

１～７は壺である。１～５は複合口縁壺である。１・２は口縁端部の外周に粘土が貼付される複合部である。複合部下端は凹凸がある。１の調整は内外面刷毛目、頸部内面ヘラナデ。２は複合部がヘラ磨き、その他は刷毛目後ヘラ磨きである。３・４は大きく開き、端部外側に粘土が貼付される複合部で、幅広である。３は内外面刷毛目後横ナデ。４は内外面刷毛目後ヘラ磨きである。５は広口壺で、端部に幅広の粘土が貼付される複合部である。外面に煤が付着し、甕としての使用も考えられる。口縁部は内外面横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラナデが施されている。

６は二重口縁壺の下段である。頸部から直線的に開く。内外面ヘラ磨き。頸部内面は指オサエ後ナデが加えられている。７は単口縁で、やや外反

第57表　第78号住居跡出土遺物観察表（第236・237図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(20.0)	[7.7]	－	ＡＣＥＨＩＫＬ	20	普通	にぶい橙	№13	180-4
2	土師器	壺	(16.4)	[6.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	褐	№７・８	180-5
3	土師器	壺	(21.0)	[3.1]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	褐灰		
4	土師器	壺	(19.0)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	有段口縁壺	
5	土師器	壺	(18.2)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№31	
6	土師器	壺	－	[4.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい褐	二重口縁壺の下段　外面煤付着　№33	
7	土師器	壺	(12.0)	[4.4]	－	ＡＥＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	台付甕	(18.0)	[8.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	内外面煤付着　SJ95と接合	180-6
9	土師器	台付甕	(17.2)	[7.8]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	№17	181-1
10	土師器	台付甕	(20.1)	[4.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄褐	内外面煤付着	
11	土師器	台付甕	(20.4)	[4.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№３・28	
12	土師器	台付甕	(15.1)	[5.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№21	
13	土師器	台付甕	(16.1)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
14	土師器	台付甕	(17.6)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	浅黄橙	内外面煤付着	
15	土師器	台付甕	(15.6)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
16	土師器	台付甕	(17.9)	[2.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐		
17	土師器	台付甕	(17.6)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		
18	土師器	台付甕	(14.2)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	橙		
19	土師器	台付甕	(12.0)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	明赤褐	内外面煤付着	
20	土師器	台付甕	(13.0)	[2.8]	－	ＡＢＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内面煤付着	
21	土師器	台付甕	(15.5)	[2.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
22	土師器	台付甕	(15.1)	[2.0]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	暗灰		
23	土師器	台付甕	－	[6.1]	9.3	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№１・19	181-6
24	土師器	台付甕	－	[6.6]	8.6	ＡＣＤＨＩＫ	95	普通	にぶい褐	外面煤付着　№16	181-7
25	土師器	台付甕	－	[6.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄褐	内外面煤付着	181-8
26	土師器	台付甕	－	[5.4]	(9.4)	ＣＥＨＩＪＫ	90	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№30	181-9
27	土師器	台付甕	－	[5.6]	8.4	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№12・28	181-10
28	土師器	甕	(20.0)	[11.1]	－	ＣＥＩＫ	20	普通	にぶい橙	外面煤付着　№3	181-2
29	土師器	甕	(28.1)	[5.2]	－	ＡＣＤＨＩＫ	15	普通	にぶい黄褐		225-1
30	土師器	甕	(17.8)	[8.3]	－	ＡＣＩＫ	25	普通	灰黄褐	SJ74・SJ95と接合	181-4
31	土師器	甕	(16.2)	[10.2]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着　SJ74と接合	
32	土師器	甕	(19.9)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
33	土師器	甕	(22.2)	[6.6]	－	ＣＩＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着	
34	土師器	甕	(24.8)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	黒褐		
35	土師器	甕	(14.2)	[3.8]	－	ＡＣＥＩ	15	普通	灰白	内面煤付着	
36	土師器	甕	(23.8)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
37	土師器	甕	(23.1)	[3.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
38	土師器	甕	(17.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩ	20	普通	灰白		
39	土師器	甕	(19.6)	[4.1]	－	ＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
40	土師器	甑	(22.0)	[4.6]	－	ＡＣＩＫＬ	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
41	土師器	鉢	(21.3)	[5.6]	－	ＡＣＨＩＫ	15	良好	明赤褐		
42	土師器	高坏	(22.8)	[5.7]	－	ＡＣＨＩＪＫ	10	普通	にぶい黄橙		
43	土師器	高坏	－	[2.9]	－	ＡＣＥＩＫ	30	普通	にぶい褐		
44	土師器	高坏	－	[3.8]	(18.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	2段透孔高坏　№24	
45	土師器	高坏	－	[7.1]	(13.4)	ＡＣＥＩＫＬ	70	普通	にぶい橙	№32	180-8
46	土師器	高坏	(14.0)	[3.1]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	黒	内外面黒斑状	
47	土師器	高坏	－	[7.8]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	80	普通	にぶい赤褐	外面赤彩　№15	180-9
48	土師器	器台	－	[7.8]	(9.4)	ＡＣＥＨＩ	50	普通	にぶい橙	№26	
49	石製品	砥石	長さ[8.4]　幅[7.5]　厚さ5.4　重さ228.0ｇ　安山岩							刃物痕あり	
50	石製品	砥石	長さ[3.6]　幅4.4　厚さ3.6　重さ18.7ｇ　軽石								

しながら開き、端部は直立する。内外面刷毛目後ヘラ磨きが施されている。

8～24はS字状口縁台付甕である。8・9は口縁部から胴部上半の破片である。全体の作りは他の住居跡出土資料と同様である。口縁部下段には上段からの粘土がかけられ、全体に横ナデが施されており、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面の刷毛目は羽状で、8の刷毛目工具は幅広である。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。

10～22は口縁部である。12・15・20は頸部外面に指頭痕が認められる。12の胴部には横刷毛が施されている。13の内面は凹凸が多く、器面が荒れている。17の頸部内面は亀裂が多く、粘土が浮いている。18はやや厚手で粘土が細かく、他の資料とはやや異なる感を受ける。頸部外面の刷毛目は2段、内面の指頭痕は深く、凹凸が著しい。19・20はやや小型である。19の外面は刷毛目が疎らで、ベースのヘラケズリが良く見える。

23・24はS字状口縁台付甕の脚台部である。いずれも箱形で、端部は折り返されている。天井部と胴部見込みは砂を混ぜた粘土が充填され、上下からナデつけられている。24は胴部見込み、脚台部と天井部の指オサエが上下で対応している。調整は外面の刷毛目がナデ消されている、内面は23が指ナデ、24がヘラナデである。

25～27はホゾ接合の台付甕の脚台部である。26は端部が折り返されているが、S字状口縁台付甕の脚台部とは異なり、分厚く、重量感がある。何度も内面に粘土が重ねられ、天井部とは段差がある。天井部は強くナデ込まれ、下半は刷毛目である。外面は荒れており、刷毛目後ヘラ磨きが施されている。28は端部が強い横ナデによって、細く尖ったような状態になっている。外面は刷毛目が丁寧にナデ消されている。内面は放射状のナデが施されている。

28～39は単口縁の甕である。いずれも口縁部が短めで端部は外反する。31・34・37を除いて、いずれも端部は丸く収められている。頸部はくの字状で、球形胴になると推定される。調整は口縁部内外面刷毛目後横ナデ、胴部外面縦もしくは斜め方向の刷毛目、内面ヘラナデを基本とする。

28は口縁端部が摘まれ、外周にきれいに線が入る。29は大型で、胴部内面は木口ナデ。凹凸が著しい。31・34は口縁部が短く、端部が面を持つ。31は頸部の締りが弱く、胴部外面に棒状工具による不規則なヘラ磨きが施されている。34は厚手で外面が黒色を呈す。35・36は口縁部内面にヘラナデが、37はヘラ磨きが施されている。39は頸部外面に粘土が足されて接合されており、その部分が段になり、指オサエの痕跡が明瞭である。凹凸著しく、内外面に赤彩か施されている。

40は甑である。複合口縁で、複合部はナデ後刷毛目、更に横ナデが加えられている。胴部外面の刷毛目は不規則である。内面は上位が刷毛目、下位はヘラナデである。

41は大型の鉢である。口縁部は短く外反する。口縁部には内外面に一枚粘土が被せられ、横ナデが加えられている。体部外面ヘラナデ、内面指ナデ後ヘラナデ。ヘラ磨きによって仕上げられている。

42～47は高坏である。42・46は坏部である。内外面ヘラ磨き。43は坏部下半で、ホゾ接合の臍がきれいに抜けている。臍の外面には指オサエの痕跡が明瞭である。44・45・47は裾広がりに開く脚部である。外面はヘラ磨き、内面上段は絞り目にナデが加えられている。下位は刷毛目、もしくはヘラナデである。44は2段の透孔が開けられている。部分的で確実ではないが千鳥状になる可能性もある。

48は器台の脚部である。ホゾ接合。脚部は直

線的に開く。外面はヘラ磨き、内面は穿孔部分がヘラケズリ、全体は木口ナデ後下位に横ナデが施されている。脚端部は横ナデである。

49・50は砥石である。49は安山岩製。縄文時代の凹石を再利用したと考えられる。平坦面は敲打により凹んでおり、V字状の刃物痕が見られる。50は軽石製。使用により多面体になっている。

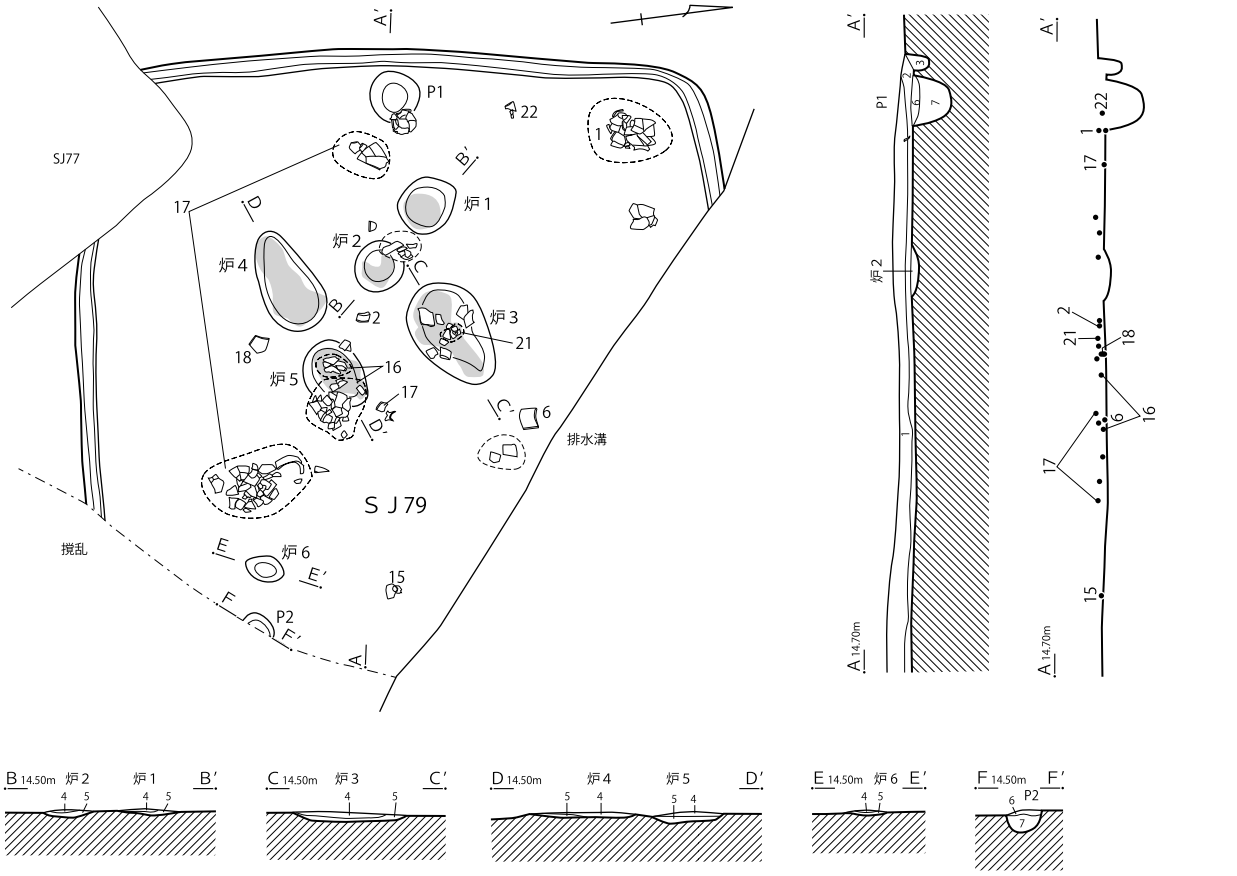
本住居跡は4世紀前半～中葉。屋敷裏Ⅲ－4期である。

第79号住居跡（第238～240図）

C区の東端、K・L－15・16グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかり、東側は撹乱によって壊されている。第77号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。炉跡の分布方向から西方向、N－82°－Wが主軸方位と考えられる。

主軸方向4.95 m、直交軸方向4.70 m、深さ0.13 mの隅丸方形で、各辺はやや丸みを帯びている。覆土は焼土、炭化物、黄白色粘土、黄褐色土を含む暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積である。黄白色粘土が壁際を中心に認められる。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の中央で6基が検出された。いずれも不整楕円形もしくは不整円形である。炉跡1は長径0.48 m、短径0.40 m、深さ0.04 m、炉跡2は長径0.40 m、短径0.38 m、深さ0.05 m、



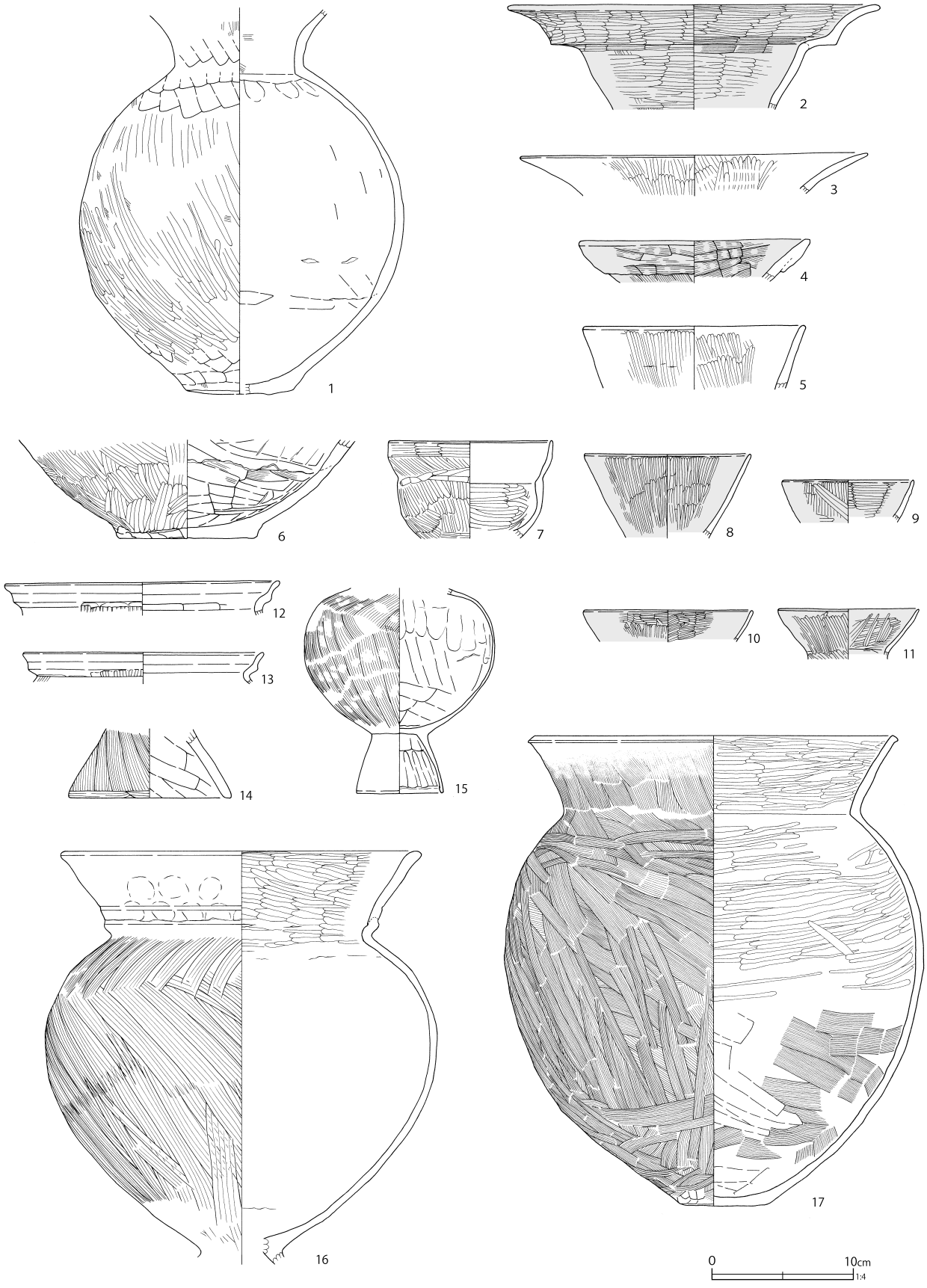
SJ79
1　黒褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・黄褐色土粒子少量
2　暗褐色土　黄白色粘土・炭化物粒子・焼土粒子・黄褐色土粒子少量
3　暗褐色土　炭化物粒子少量

炉跡
4　赤褐色土　焼土層
5　黄灰色土　焼土化した地山ブロック多量

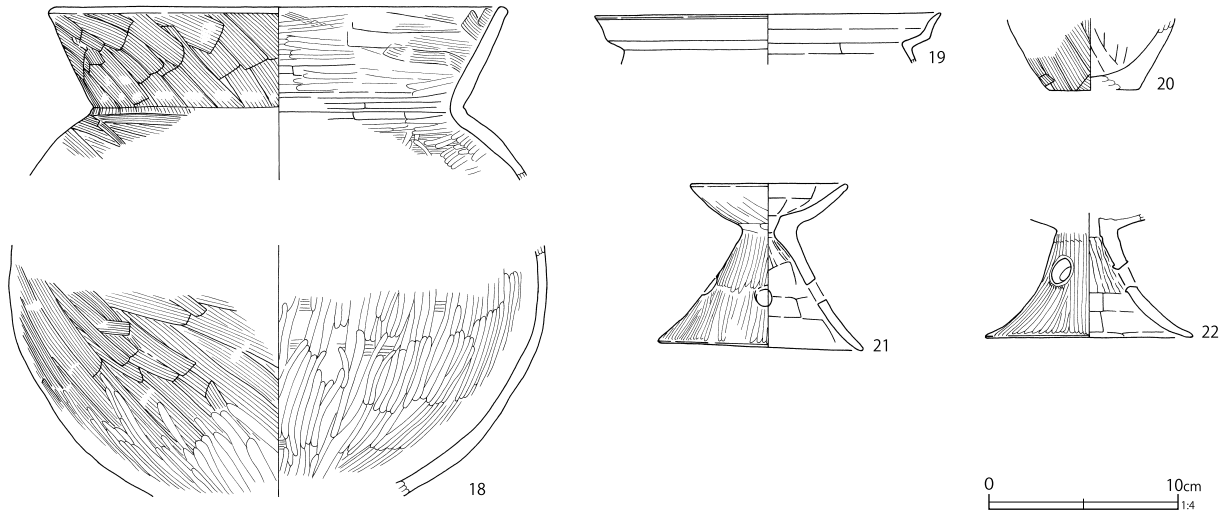
P1・2
6　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子やや多
7　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量

0　2m　1:60

第238図　第79号住居跡



第239図　第79号住居跡出土遺物（1）



第240図　第79号住居跡出土遺物（２）

第58表　第79号住居跡出土遺物観察表（第239･240図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[27.7]	(7.6)	ＣＤＥＦＨＫ	70	普通	にぶい褐	№1	181-5
2	土師器	壺	(26.0)	[7.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	浅黄橙	二重口縁壺　内外面赤彩　№16	225-2
3	土師器	壺	(24.4)	[2.8]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
4	土師器	壺	(16.1)	[2.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
5	土師器	壺	(15.9)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐		
6	土師器	壺	－	[6.9]	(10.0)	ＡＣＤＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	内面黒色　№23	181-3
7	土師器	坩	(11.6)	[6.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	坩	(11.7)	[5.9]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
9	土師器	坩	(9.4)	[3.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	暗灰黄	内外面赤彩	
10	土師器	坩	(12.0)	[2.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面赤彩	
11	土師器	坩	(10.0)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	
12	土師器	台付甕	(19.3)	[2.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	外面煤付着	
13	土師器	台付甕	(16.8)	[2.2]	－	ＡＣＨＩ	15	普通	淡黄	内外面煤付着	
14	土師器	台付甕	－	[4.8]	(11.4)	ＡＢＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
15	土師器	台付甕	－	[14.4]	(6.1)	ＡＣＤＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№25	182-1
16	土師器	台付甕	25.3	[29.5]	－	ＣＤＥＦＨ	60	良好	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　№19・20	182-3
17	土師器	甕	26.0	33.3	6.3	ＣＤＥＦＨ	80	普通	にぶい橙	№５・21・27	182-2
18	土師器	甕	(24.1)	[22.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№28	182-4
19	土師器	甕	(18.2)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	橙	北陸系　内外面煤付着	
20	土師器	甕	－	[3.7]	(4.9)	ＡＣＥＨＩ	50	普通	灰白		181-11
21	土師器	器台	8.4	8.7	10.9	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい褐	№８	182-6
22	土師器	器台	－	[6.5]	10.9	ＡＣＨＩＫ	80	普通	橙	外面黒斑あり　№３	182-7

炉跡３は長径 0.88 m、短径 0.59 m、深さ 0.06 m、炉跡４は長径 0.83 m、短径 0.42 m、深さ 0.02 m、炉跡５は長径 0.60 m、短径 0.45 m、深さ 0.08 m、炉跡６は長径 0.31 m、短径 0.22 m、深さ 0.04 mである。いずれも、掘り方に焼土化した黄灰色土ブロックを多量に含む明褐色土（第５層）が充填され、その上層に焼土層（第４層）が形成されていた。地山も赤変、硬化していた。

ピットは２基検出された。西壁際中央と遺構の南東側で検出された。深度がなく、柱穴ではないと考えられ、性格は不明である。規模はＰ１が径 0.40 m、深さ 0.27 m、Ｐ２が径 0.28 m、深さ

0.17 mである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む明褐色土、暗褐色土である。

遺物は多く、床面を中心に出土した。北西コーナー、炉跡周辺からは壺、大型の甕（1・16・17）が潰れた状態で出土した。器種は古墳時代前期の壺、坩、台付甕、甕、器台である。

1～6は壺である。1は口縁上部を欠失する長胴の壺である。全体に刷毛目調整され、頸部、胴部下半を中心にヘラケズリに近いヘラナデが施されている。底面も同様のヘラナデである。胴部の外面にはヘラ磨きが加えられている。口縁部内面刷毛目後ヘラナデ。胴部内面ヘラナデ。2・3は二重口縁である。頸部から大きく開く下段に水平方向の中段を接合し、更に外反する上段が付く。全体に内外面刷毛目後端部に横ナデが加えられ、最後に全体にヘラ磨きが施されている。3は上段のみである。内外面ヘラ磨き。風化が進む。4は複合口縁である。口縁端部の外周に粘土が貼付される。複合口縁部である。複合部下端は凹凸がある。内外面刷毛目後ナデ。5は単口縁で、直線的に開く。内外面ヘラ磨き。6は壺の胴部下半である。外面ヘラナデ後ヘラ磨き。内面ヘラナデ。内面には接合による大きな段ができている。

7～11は坩である。鉢との区別が不明瞭であるため、鉢の可能性も考えられる。7は低平な体部にやや内湾しながら開く短い口縁部が付く。全体に風化しており、調整は不明瞭である。内外面とも刷毛目後ヘラ磨き、口縁部内面はヘラ磨きと考えられるが確認できない。8～10は直線的に開く口縁部である。内外面とも横ナデ後密なヘラ磨きが施されている。11は僅かに体部が残る。肩部が口縁部から下方に延びるため、体部は小さめと考えられる。口縁部内外面刷毛目、端部は横ナデが施され、全体に密なヘラ磨きが加えられている。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデが施されている。

12・13・15はS字状口縁台付甕である。いずれも小破片で、風化が進んでいる。15は小型で、口縁部を欠失する。やや肩の張る球形胴で、器肉は薄い。脚台部の接合には、通常サイズと同様に砂を混ぜた粘土が充填されている。脚台部は箱形で、端部が折り返されている。全体に風化が進んでおり、調整は不明瞭である。胴部外面は羽状の刷毛目、内面は指ナデである。脚台部外面の調整は風化のため不明。内面は指ナデである。器面が荒れているため砂粒子が際立っている。

14は刷毛目台付甕の脚台部である。径はやや大きく、直線的に開く。外面刷毛目、内面ヘラナデ。器面は風化のため荒れている。

16は山陰系口縁のS字状口縁台付甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。特大サイズのS字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。接合箇所はやや不連続になり、最上段からの化粧掛けの粘土がS字の上段にまでかけられ、全体に指オサエ後強い横ナデが施されている。そのため、16のS字部分はやや丸みを帯び、内側にも化粧掛けが施され、頸部まで横方向のヘラ磨きが施されている。頸部より下位は、器肉が厚いものの、一般的なS字状口縁台付甕と同様である。上位に最大径があり、外面は粗い羽状の刷毛目、内面は丁寧なナデ調整が施されている。内面は平滑で調整痕がほとんど確認できない。脚台部との接合部には砂を混ぜた粘土が充填されている。黄白色を呈する。

17・18は大型の甕である。口縁部はくの字で端部は面を持つ。17の外面には細かい刷毛目が全体に施されている。口縁端部には横ナデが加えられている。内面は口縁部ヘラ磨き、胴部は刷毛目後ヘラナデが加えられ、更に胴部上半まで横方向のヘラ磨きが施されている。18は同一個体と考えられる口縁部から肩部、胴部下半の破片である。口縁部外面は刷毛目後横ナデ、内面はそれにヘラ磨きが加えられている。胴部外面は刷毛目後下半にヘラ磨きが加えられている。内面は刷毛目

後、上半は横方向、下半は縦方向のヘラ磨きが施されている。

19は口縁部半ばから段を持って開くもので、北陸系の影響を受けていると考えられる。口縁部は内外面横ナデ。頸部内面はヘラナデである。

20は甕の底部と考えたが、鉢等の可能性もある。外面刷毛目、内面指ナデ。内面は粘土が一枚被せられており、凹凸がある。

21・22は器台である。21は全体の７割ほどが遺存している。器受部は皿状に開き、端部は丸く収められている。ホゾ接合である。脚部は直線的に開き、裾はあまり広がらない。器受部は外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ、脚部は外面ヘラ磨き、内面は風化のため不明瞭である。透孔は４孔である。22は脚部である。器受部の内面は剥離している。ホゾ接合で、剥離面に臍の輪郭が確認できる。脚部は裾広がりに開く。外面はヘラケズリ後ヘラ磨き、内面は上位に絞り目が残り、ヘラナデが施されている。透孔は３孔である。

本住居跡は３世紀末から４世紀初頭、屋敷裏Ⅲ－３期である。

80号住居跡（第241～243図）

Ｄ区西側、Ｏ・Ｐ－17グリッドに位置する。遺構南側の大部分は調査区域外にかかる。第51号土壙と重複し、本住居跡が古い。検出された長軸の軸方向は北西方向、Ｎ－62°－Ｗである。

平面形は方形で、各辺は直線的である。東コーナーはやや角度が小さく、南西辺が短い可能性がある。規模は、検出範囲で長軸方向9.45ｍ、直交軸方向4.30ｍ、深さ0.40ｍである。覆土は炭化物、ローム土を含む黒褐色土、暗褐色土で自然堆積である。最上層の暗灰褐色土は、住居跡の外側から連続して堆積している。床面は若干凹凸があり、掘り方が検出された。

床面からは土壙１、壁周溝が検出された。土壙１は北コーナー手前で検出された。長径1.25ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.07ｍである。覆土は炭化物、ローム土を含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。第６・７層の層理面に薄い炭化物層が認められ、この炭化物層から16の甕が粉々に割れた状態で出土した。

壁周溝は幅0.10～0.15ｍ、深さ0.07ｍで、全周している。

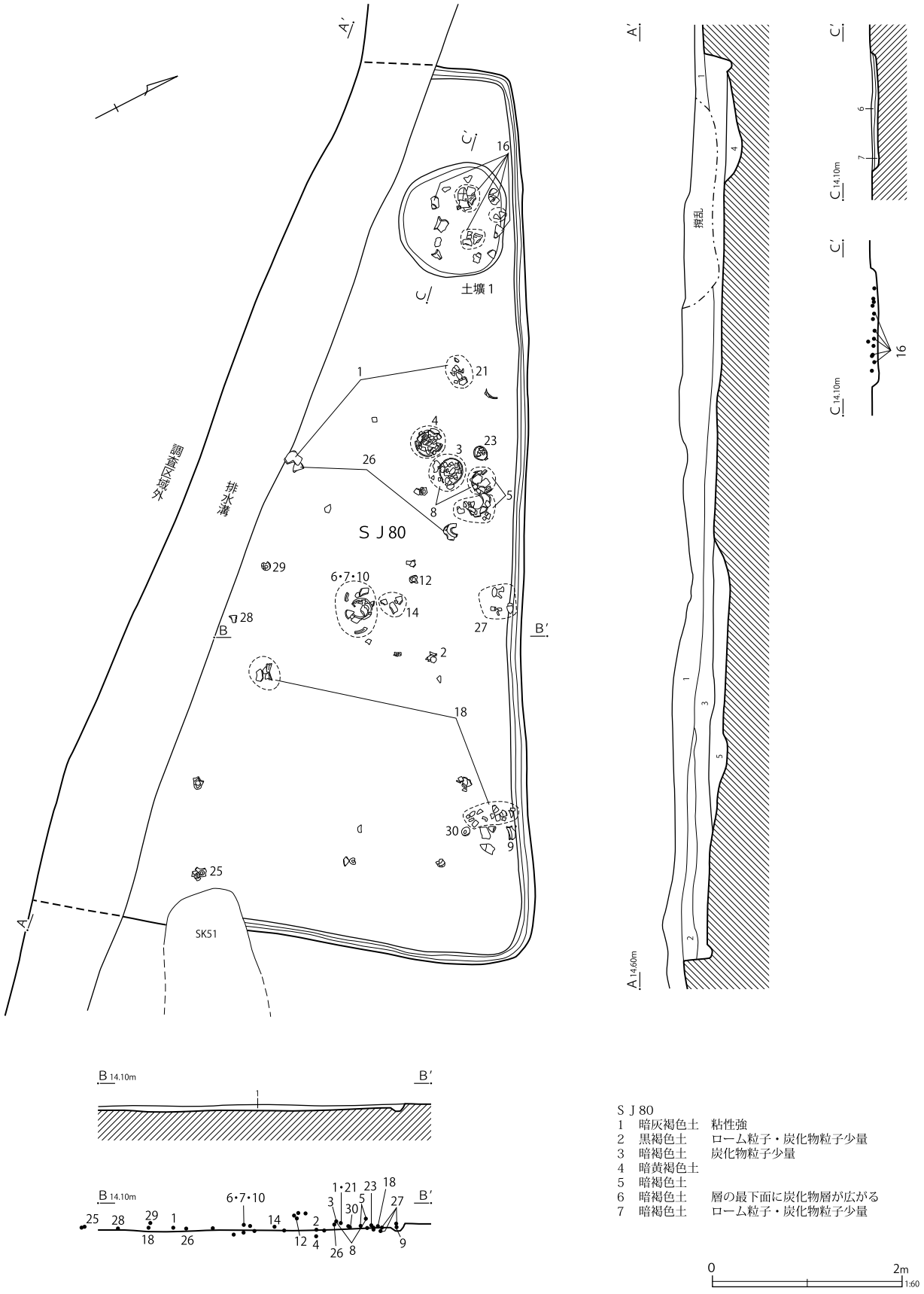
遺物は多く、特に北壁際の床面から形の分かるものが、つぶれた状態で、集中して出土した。器種は古墳時代前期の壺、台付甕、甕、鉢、高坏、器台、甑である。

１は複合口縁壺である。頸部から直線的に大きく開く。口縁端部の先端に粘土が付加される複合部である。複合部下端はやや凹凸がある。外面全体刷毛目後ヘラ磨き、口縁部内面は横ナデ後ヘラ磨きが施されている。頸部内面は上位からの粘土がナデつけられており、不連続になる。胴部内面はヘラナデである。

２は小型の刷毛目甕である。口縁部は大きく外反し、頸部はあまり締まらない。球形胴上位に最大径がある。口縁部は内外面横ナデである。胴部外面刷毛目、内面ヘラナデが施されている。

３～14はＳ字状口縁台付甕である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部の横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施されている。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。３・４は胴部までのほぼ全体が分かる資料である。３は外面の刷毛目がやや不規則である。４は軽量で、頸部直下に横刷毛が施されている。両者とも胴部内面はヘラナデである。

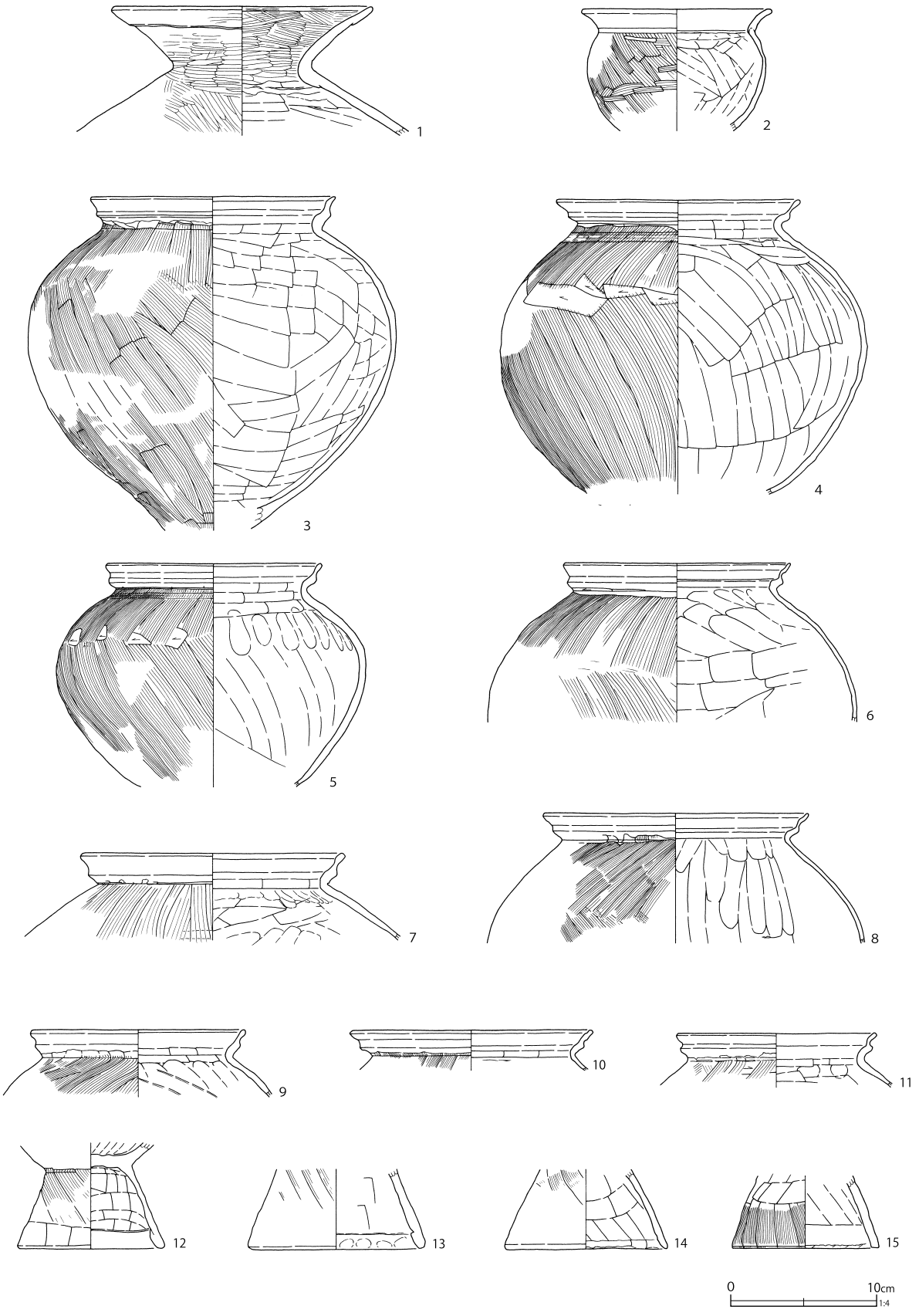
５～８は口縁部から胴部上半の破片である。５の胴部は羽状の刷毛目に間隔があり、ベースのヘラケズリが確認できる。６の頸部外面にはヘラナデが加えられている。７は口縁部が大きめで厚く、



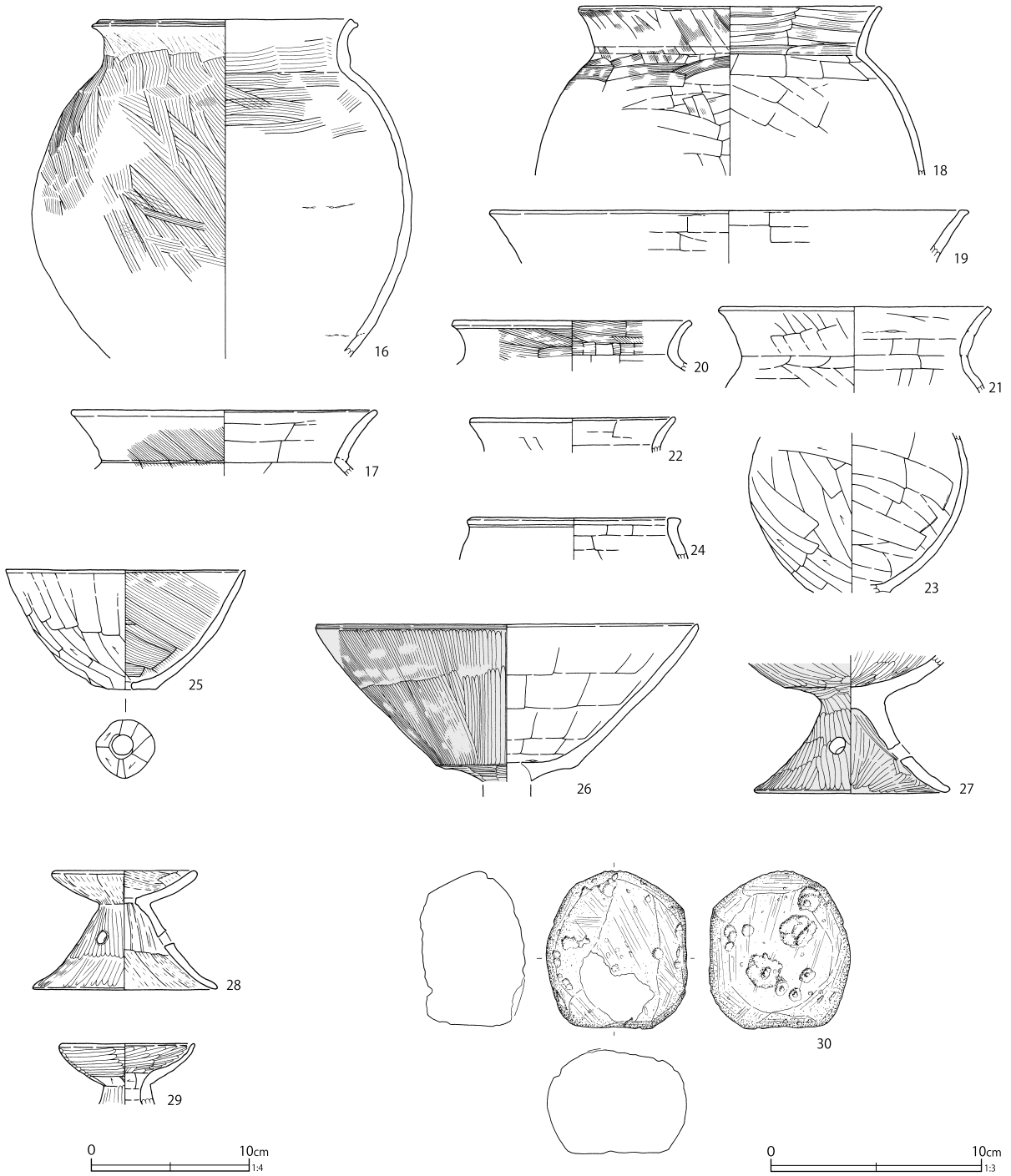
SＪ80
1　暗灰褐色土　粘性強
2　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量
3　暗褐色土　炭化物粒子少量
4　暗黄褐色土
5　暗褐色土
6　暗褐色土　層の最下面に炭化物層が広がる
7　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量

0　2m
1:60

第241図　第80号住居跡



第242図　第80号住居跡出土遺物（１）



第243図　第80号住居跡出土遺物（2）

重量感がある。頸部に垂れた粘土がヘラでかきとられたため、ダマや工具の当たりが見られる。刷毛目が粗い。9～11は口縁部である。10は上段の横ナデが強く、明瞭な段になっている。

12・13は脚台部である。いずれも箱形で、端部は折り返されている。天井部と胴部見込みは砂を混じた粘土が充填され、上下からナデつけられている。調整は斜め方向の刷毛目が等間隔にナデ消されている。内面は指ナデ後ヘラナデが加えられている。12は胴部下半が遺存している。胴部外面は風化が著しく、調整は不明である。見込みには放射状にヘラが入る。脚台部もかなり風化し

第59表　第80号住居跡出土遺物観察表(第242･243図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.7)	[8.7]	－	ＡＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	№15・29	
2	土師器	小型甕	(12.8)	[8.3]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	褐	内外面煤付着　№35	
3	土師器	台付甕	16.6	[22.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№37	183-1
4	土師器	台付甕	(16.6)	[20.1]	－	ＡＣＨＩＫ	60	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№36	183-2
5	土師器	台付甕	(14.7)	[15.2]	－	ＡＣＨＩＫ	80	普通	灰白	内外面煤付着　№39・40	183-3
6	土師器	台付甕	15.4	[10.8]	－	ＡＢＣＥＩＫ	60	普通	にぶい黄橙	№41	183-4
7	土師器	台付甕	(18.0)	[5.9]	－	ＡＢＣＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	内外面煤付着　№41	
8	土師器	台付甕	(18.0)	[8.9]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№37・39	
9	土師器	台付甕	(14.6)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	外面煤付着　№43	
10	土師器	台付甕	16.4	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	85	普通	灰白	外面煤付着　№41	182-5
11	土師器	台付甕	(13.6)	[3.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
12	土師器	台付甕	－	[7.2]	(10.0)	ＡＣＥＨＩＫ	65	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№18	182-8
13	土師器	台付甕	－	[5.5]	(12.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄	外面煤付着	
14	土師器	台付甕	－	[5.4]	(11.0)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№19	
15	土師器	台付甕	－	[4.9]	9.9	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
16	土師器	甕	17.0	[21.4]	－	ＣＥ	55	普通	褐灰	№１・５・７・９・10	183-5
17	土師器	甕	(19.2)	[4.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
18	土師器	甕	(19.1)	[10.6]	－	ＣＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№32・49	
19	土師器	甕	(30.1)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着	
20	土師器	甕	(15.0)	[3.1]	－	ＡＣＥＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
21	土師器	甕	(17.0)	[5.3]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№15	
22	土師器	小型甕	(12.9)	[2.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
23	土師器	小型甕	－	[10.0]	(4.8)	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	暗赤褐	内外面煤付着　№38	183-6
24	土師器	鉢	(13.3)	[2.6]	－	ＡＢＣＥＫ	10	普通	にぶい橙		
25	土師器	甑	(15.0)	7.5	(3.9)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	№47	184-1
26	土師器	高坏	(24.0)	[9.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	橙	外面赤彩　№22・52	184-2
27	土師器	高坏	－	[8.7]	12.2	ＡＤＥＨＩＪＫ	90	普通	明赤褐	外面・脚部内面赤彩　№20・21・51	184-6
28	土師器	器台	9.1	7.5	(11.5)	ＡＣＨＩＫ	75	普通	橙	№31	184-7
29	土師器	器台	8.4	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№30	184-8
30	石製品	砥石	長さ7.6　幅6.7　厚さ5.0　重さ81.7ｇ　軽石							№48	

ている。端部の折り返しが他に比べて厚い。

15 ～ 23 は甕である。15 は脚台部である。外面刷毛目後ヘラナデ、内面はヘラナデ後端部のみ横ナデが加えられている。

16 ～ 22 は単口縁の甕である。16 は口縁部が直立し､端部のみが外反する。頸部の屈曲は弱く、長胴で、胴部の成形は５段階である。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。胴部内面は刷毛目後、下半はヘラナデが加えられている。刷毛目は目が深く、明瞭である。

17 ～ 22 は、若干外反しながら開く口縁部である。端部は緩い面を持つ 20・21 と、丸く収められる 17･18･22 がある。頸部はくの字状である。調整は口縁部内外面刷毛目後横ナデ､胴部外面は、横方向の刷毛目、内面はヘラナデを基本とする。17・21 は口縁部内面にヘラナデが施されている。19 は大型で、口縁部内外面ヘラナデ後横ナデが施されている。端部は明瞭な面を持たない。21 は全体にヘラナデが施されている。22 は小型で、ヘラナデ後横ナデが施されている。

23 は小型甕の胴部である。長胴気味で、下端は剥離し、脚台部が付く可能性がある。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。

24 は無頸の鉢である。無頸壺の可能性もある。端部は垂直に立ち上がり、水平な面を持つ。口縁部は内外面ともヘラナデが施されている。体部外

面は風化が進み調整不明。内面はヘラナデである。

25は単孔の甑である。鉢と同様に、底面から大きく開く。外面全体にヘラケズリが、内面は刷毛目後、口縁部に横ナデが加えられている。底面はヘラケズリ、孔は底面の中央に、内側から開けられている。

26・27は高坏である。26は坏部である。ホゾ接合の臍がきれいに抜けている。外面はヘラ磨きが施されている。内面は風化が著しく、ヘラナデが確認できるのみである。本来はヘラ磨きが施されている可能性が高い。外面は赤彩され、内面にも赤彩が若干残る。27は坏部上半を欠失する。坏部は下半に段がある。ホゾ接合で脚部は裾広がりに開く。透孔は３孔である。脚部全体に内外面ヘラ磨きが施されている。内面にもヘラ磨きが加えられている。坏部の内面は黒色を呈する。全体に赤彩され、透孔の中まで赤彩が見られる。

28・29は器台である。28は器受部が大きく、全体に低平である。脚部は直線的に開き、端部が若干外側に広げられている。ホゾ接合である。風化が著しく、調整は不明瞭である。器受部は内外面とも刷毛目後横ナデが施されている。脚部外面はヘラ磨き、内面は上半に絞り目が残り、下半は刷毛目である。透孔は３孔である。29は器受部の破片である。やや深身でしっかりしている。孔径が上端で３cmほどあり大きい。外面ヘラケズリ後ヘラ磨き、内面上半ヘラ磨き、下半はヘラケズリである。

30は軽石製の砥石である。使用により多面体になっている。

本住居跡は3世紀末から4世紀前半。屋敷裏Ⅲ－２期である。

第81号住居跡（第244・245図）

C区の東側、L・M－15グリッドに位置する。第77・82号住居跡と重複し、前者より古く、後者より新しい。炉跡の位置から北西方向、N－36°－Wが主軸方位と考えられる。

平面形は方形で、各辺は直線的である。規模は主軸方向6.15ｍ、直交軸方向6.13ｍ、深さ0.15ｍである。覆土は炭化物、灰色粘土、ローム土を含む褐色土、暗褐色土、黄灰色土、黄褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは炉跡、貯蔵穴、柱穴、壁周溝が検出された。炉跡は住居跡の中央で、不整形な掘り込みに炭化物と焼土が混在する状態で検出された。掘り込みの規模は長軸0.90ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.05ｍである。形態からは２基の重複とも考えられるが、分離できなかった。上層は炭化物と焼土の混土層、下層に焼土層が形成されていた。

貯蔵穴は北西壁中央で検出された。一辺1.05ｍの方形で、深さは0.16ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

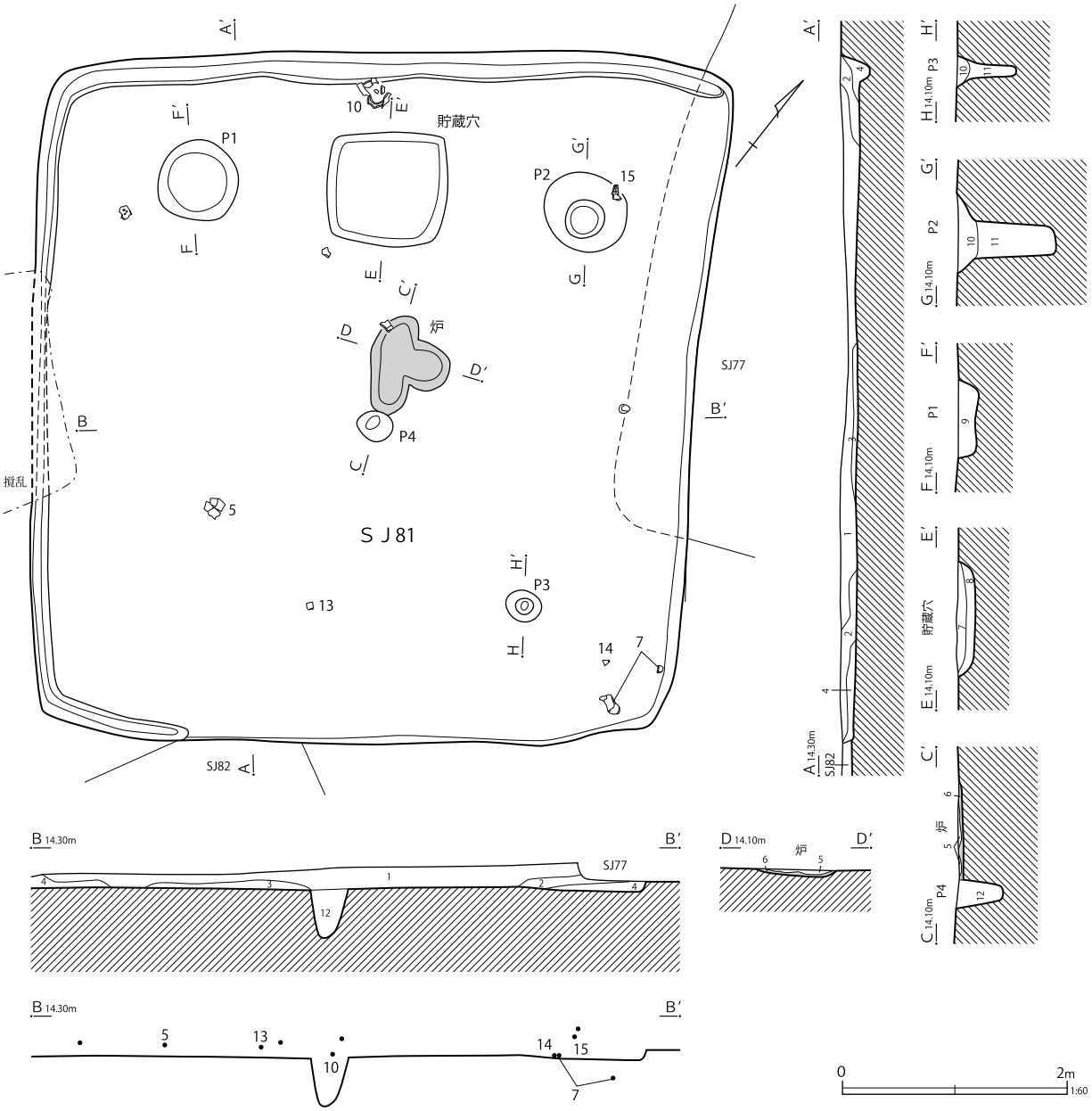
ピットは４基検出された。平面形は円形もしくは楕円形である。

Ｐ１は径0.72ｍ、深さ0.16ｍで、覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む暗褐色土である。主柱穴の位置にあるが、性格は不明である。Ｐ２・３は、規模が異なるが、位置的にも主柱穴と考えられる。規模はＰ２が径0.75ｍ、深さ0.87ｍ、Ｐ３が長径0.33ｍ、短径0.27ｍ、深さ0.53ｍである。柱は抜き取られている。覆土はローム土を含む暗褐色土である。Ｐ４は炉跡の南側に接して造られている。長径0.33ｍ、短径0.27ｍ、深さ0.40ｍである。覆土は炭化物を含む暗褐色土である。

壁周溝は幅0.15～0.33ｍ、深さ0.10ｍで、北西壁から南東壁まで連続している。

遺物は少なく、上層を中心に出土した。北壁際床からは甕（10）が出土した。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏である。

１～３は壺である。１は複合口縁壺である。口縁外周に粘土が貼付される複合口縁である。複合部下端はきれいにナデ付けられている。内外面全



ＳＪ81
1　黄灰色土　灰色粘土ブロック少量　しまり強い
2　褐色土　　ロームブロック少量　しまり強い
3　黄褐色土　ロームブロックやや多量　しまり弱い
4　暗褐色土　炭化物ごく微量　しまり弱い

炉跡
5　黒褐色土　炭化物層　焼土粒子多量
6　赤褐色土　焼土層　火床面と考えられる

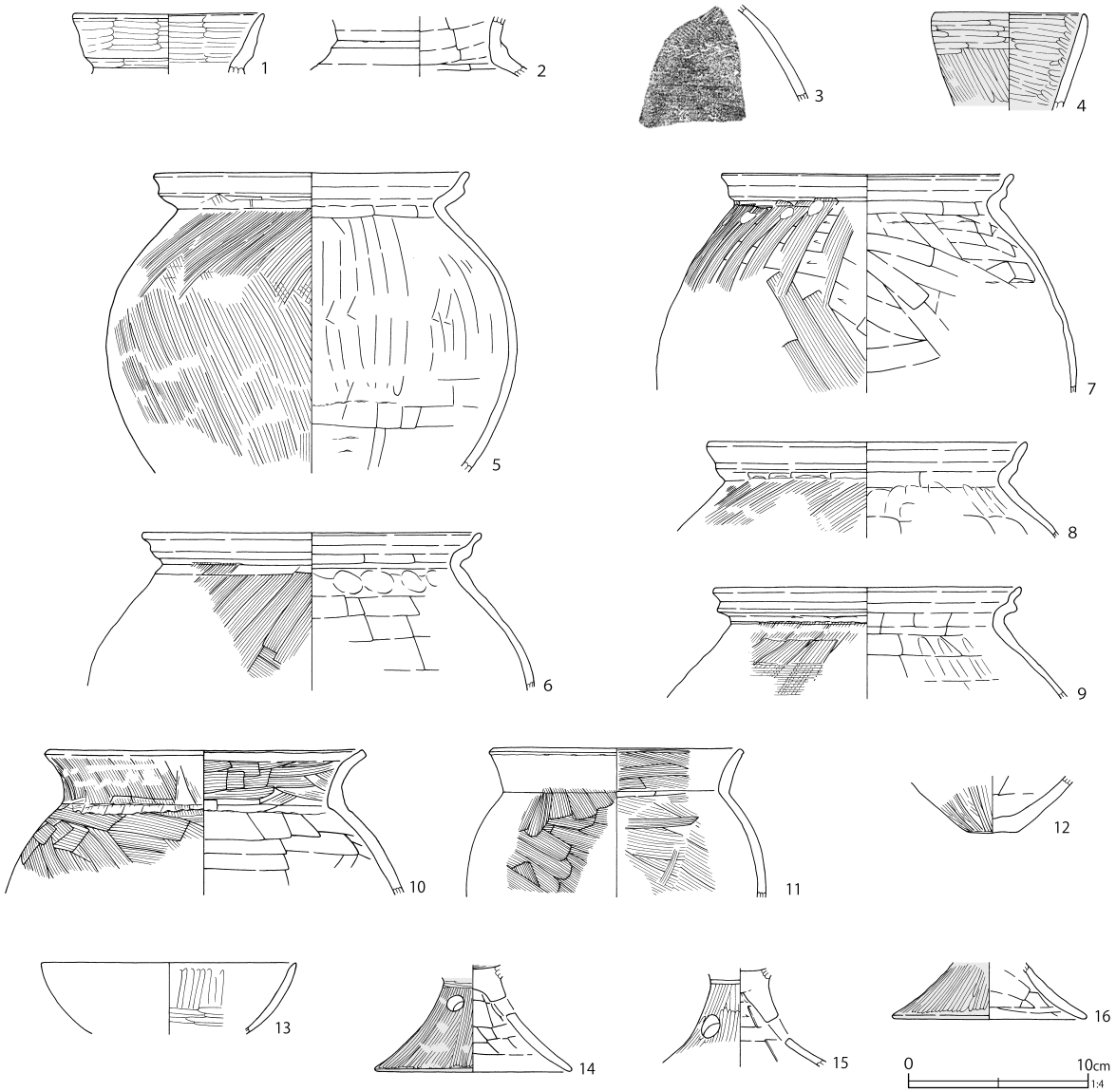
貯蔵穴
7　暗褐色土　　炭化物粒子・焼土粒子少量
8　暗褐色土　　ローム粒子少量

Ｐ１～４
9　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
10　暗褐色土　　ローム粒子多量　最下にローム粒子が層状に堆積
11　暗褐色土　　ローム粒子少量　しまり弱い　柱痕部の埋土
12　暗褐色土　　炭化物粒子少量　粘性強

第244図　第81号住居跡

体にヘラ磨きが施されている。２は突帯が付く頸部である。器肉が厚い。外面はきれいに横ナデが施されている。内面は上位からの粘土がナデつけられており、不連続になっている。内面全体ヘラナデ。３は肩部である。単節ＬＲ－ＲＬの羽状縄文で下端には２段のＳ字状結節文が施されている。文様帯より下位は赤彩、ヘラ磨き。内面は風化しており、調整は不明である。

４は直口縁の小型壺である。遺存している部分は直線的で器肉が厚く、更に下位まで延びる可能



第245図　第81号住居跡出土遺物

性がある。内外面ヘラ磨き。

５～９はＳ字状口縁台付甕である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施される。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。５～７は口縁部から胴部中位までが分かる資料である。５は全体に厚めで、やや重量感がある。胎土には角閃石を多く含む。６は外面の刷毛目が細かい。７は刷毛目に間隔があり、ベースのヘラケズリが確認できる。器面が全体に荒れており、砂粒子が際立つ。８・９は肩部までの破片である。８は口縁部が分厚く、重量感がある。９は３条１単位の細い工具により、３段以上の横刷毛が施されている。

10 ～ 12 は甕である。口縁部は短めで、外反しながら開く。端部はいずれも面を持つ。頸部はくの字状である。口縁部内外面、胴部外面刷毛目。口縁部は横ナデが加えられている。胴部内面は 10 がヘラナデ、11 が刷毛目である。11 は内外

第60表　第81号住居跡出土遺物観察表（第245図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(10.5)	[3.4]	－	ＡＣＥＨＫ	10	普通	にぶい橙		
2	土師器	壺	－	[3.4]	－	ＡＥＨＫ	10	普通	浅黄橙		
3	土師器	壺	－	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	外面赤彩	
4	土師器	小型壺	(8.6)	[5.4]	－	ＡＣＨＩ	30	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　SJ77と接合	
5	土師器	台付甕	(17.4)	[16.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰褐	外面煤付着　№11	
6	土師器	台付甕	(18.8)	[8.7]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着	184-4
7	土師器	台付甕	(16.1)	[12.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	内面煤付着　№５・６	184-5
8	土師器	台付甕	(17.6)	[5.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰褐	外面煤付着	
9	土師器	台付甕	(17.0)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
10	土師器	甕	17.8	[8.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	№10	184-3
11	土師器	甕	(14.0)	[8.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	10	普通	橙	内外面煤付着	
12	土師器	甕	－	[3.1]	(2.8)	ＡＣＥＩＫ	20	普通	にぶい褐	内外面煤付着	
13	土師器	高坏	(14.0)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	淡黄	№12	
14	土師器	高坏	－	[5.9]	(10.9)	ＡＣＨＩＪＫ	90	普通	浅黄橙	外面・坏部内面赤彩　№４	184-9
15	土師器	高坏	－	[5.5]	－	ＡＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	№１	184-10
16	土師器	高坏	－	[3.1]	(10.7)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面赤彩	

で使われている刷毛目工具が異なる。12は底部である。外面刷毛目、内面ヘラナデ。底面はヘラケズリである。

13～16は高坏である。13は埦状の坏部である。風化が進み、僅かに内面のヘラ磨きが残るのみである。14～16は裾広がりに開く脚部である。ホゾ接合。透孔は３孔である。外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。13・16の端部には横ナデが加えられている。15の上位には絞り目が見られ、ヘラケズリが施されている。

本住居跡は３世紀末から４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－４期である。

第82号住居跡（第246・247図）

Ｃ区の東端、Ｍ－15・16グリッドに位置する。遺構の南側と東側の大部分が調査区域外にかかり、調査できたのは、遺構の北側のみである。第81号住居跡と重複し、本遺構が古い。検出された長軸の軸方向は北西方向、Ｎ－62°－Ｗである。

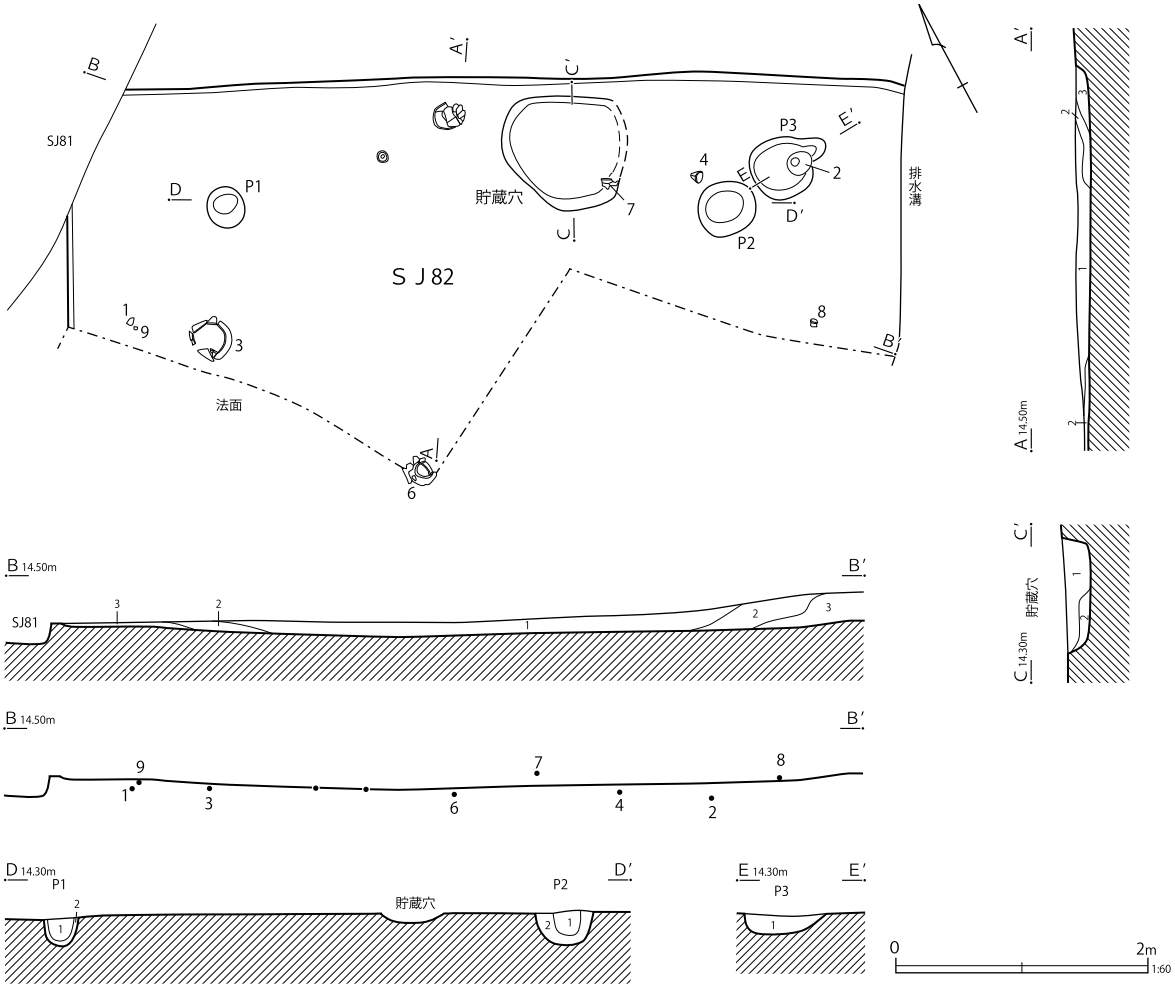
平面形は方形で、北壁、西壁は直線的である。検出範囲の規模は長軸方向6.60ｍ、直交軸方向3.20ｍ、深さ0.10ｍである。覆土は炭化物、灰白色粘土を含む黄褐色土、明黄褐色土、暗黄褐色土で、自然堆積である。床面は中央部分が若干凹んでいた。貼床、掘り方は検出されなかった。

床面からは、貯蔵穴、柱穴が検出された。貯蔵穴は北壁中央の東寄りで検出された。径0.90～1.00ｍの不整円形で、深さは0.20ｍである。覆土は炭化物、ローム土、黄白色粘土を含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

ピットは３基検出された。平面形は円形である。Ｐ１・２は主柱穴と考えられる。規模はＰ１が径0.33ｍ、深さ0.25ｍ、Ｐ２が径0.46ｍ、深さ0.27ｍである。柱は抜き取られていた。覆土は炭化物、灰白色粘土を含む黄褐色土、褐色土である。Ｐ３は径0.50ｍ、深さ0.15ｍで、東側に0.15ｍほどの突出部が取り付く。性格は不明である。

遺物は少なく、床面を中心に出土した。
南壁法面際の床面からは、３の山陰系口縁Ｓ字状口縁台付甕の口縁部、６の甕が出土している。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、土錘である。

１・２は小型壺である。１は内湾しながら立ち上がる口縁部である。内外面ヘラ磨きと考えられるが、風化著しく不明瞭である。２はやや下膨れ



ＳＪ82
1　黄褐色土　　粘土質　炭化物少量　しまりやや強い
2　暗黄褐色土　粘土質　炭化物少量　灰白色粘土ブロック少量
　　１層に比べしまり弱い
3　明黄褐色土　粘土質　炭化物少量　鉄分少量

貯蔵穴
1　暗褐色土　　炭化物粒子・ローム粒子少量　黄白色粘土やや多量
2　暗褐色土　　炭化物粒子・焼土粒子少量

Ｐ1・2
1　黄褐色土　粘土質　炭化物少量　灰白色粘土ブロック少量　柱の抜取り後の埋土
2　褐色土　　粘土質　炭化物少量　しまり強い

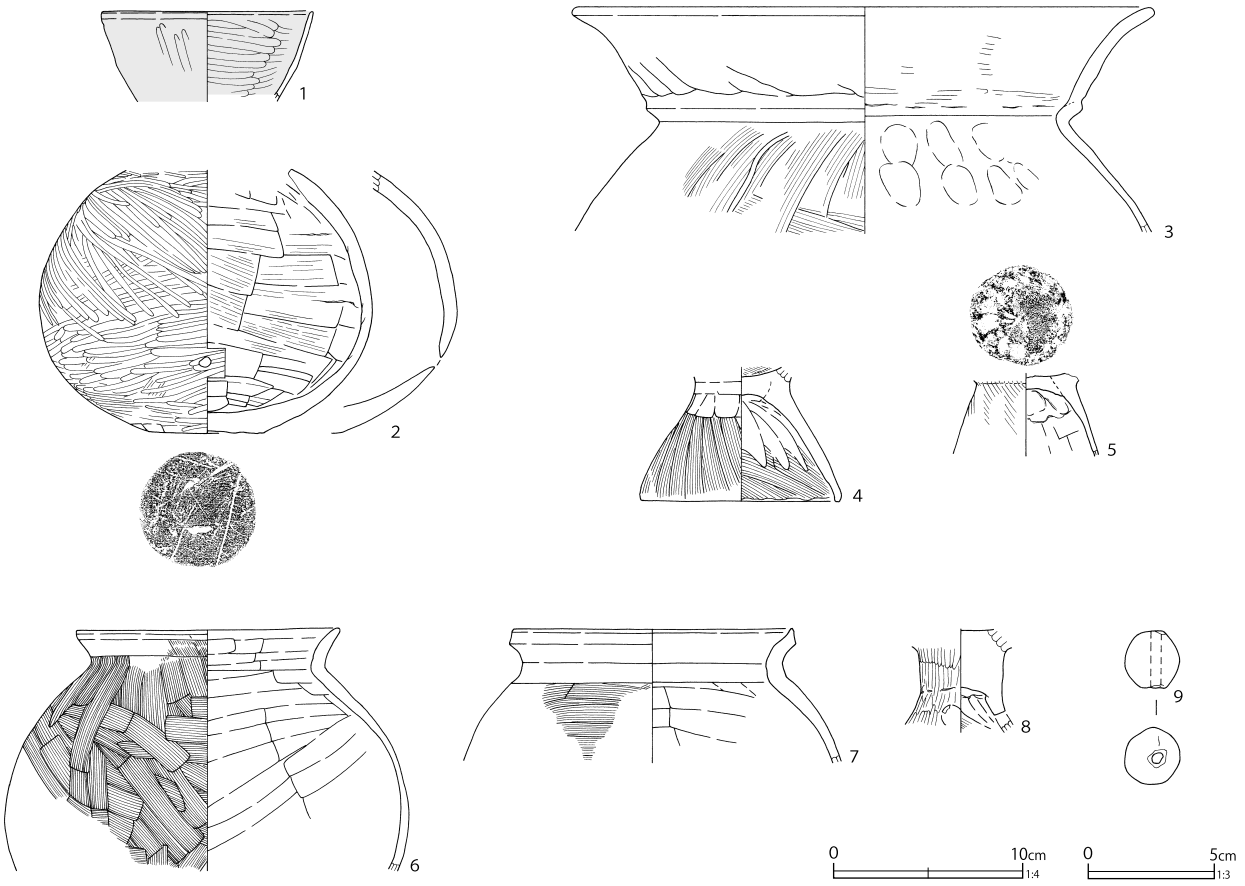
Ｐ3
1　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子少量　ロームブロック・ローム粒子多量

第246図　第82号住居跡

の胴部である。内面には粘土の積み上げ単位が段状になって残る。５段階成形。下半に焼成後に外側から開けられた径 0.5mm ほどの穿孔が見られる。外面は刷毛目後ヘラ磨き、底部外周にはヘラナデが加えられている。底面木葉痕。内面は木口状工具によるナデが施されている。

３は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。特大サイズのＳ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。接合箇所はやや不連続になり、最上段からの化粧掛けの粘土がＳ字の上段にまでかけられ、全体に指オサエ後強い横ナデが施されている。そのため、Ｓ字部分は厚く、やや丸みを帯びている。内側にも化粧掛けが施され、頸部まで横方向のヘラ磨きが施されているが、風化のため不明瞭である。頸部より下位は、器肉が厚いが、一般的なＳ字状口縁台付甕と同様である。外面は粗い羽状の刷毛目、内面はナデ調整が施されている。黄白色を呈する。

４・５は脚台部である。４は刷毛目台付甕の脚



第247図　第82号住居跡出土遺物

第61表　第82号住居跡出土遺物観察表（第247図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(11.0)	[4.8]	－	ＡＣＥＧＨＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№９	
2	土師器	小型壺	－	[13.9]	(6.0)	ＡＣＥＨＩＫ	95	普通	浅黄橙	底部木葉痕　外面黒斑あり　№３	185-1
3	土師器	台付甕	31.2	[11.8]	－	ＣＤＥＨ	50	良好	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　№８	185-2
4	土師器	台付甕	－	[7.1]	10.5	ＡＣＥＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№１	184-11
5	土師器	台付甕	－	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩ	60	普通	にぶい橙	外面煤付着	
6	土師器	甕	(13.8)	[12.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	65	良好	橙	内外面煤付着　№７	185-3
7	土師器	甕	(15.0)	[7.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	橙	№４	
8	土師器	高坏	－	[5.6]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	80	普通	浅黄橙	№２	
9	土製品	土錘	径2.1×2.3　高さ2.3 孔径0.4×0.5 重さ9.0ｇ			ＡＣＤＨＩ	100	普通	褐灰	土玉　黒斑あり　№10	218-29

台部である。やや小型で、ホゾ接合。端部は内湾し、面を持つ。胴部の見込み部分のみが遺存し、刷毛目が施されている。外面は刷毛目後接合部はナデ、内面は刷毛目後、上位から天井部にかけてナデ付けられている。５はＳ字状口縁台付甕である。箱形で、端部を欠く。胴部側は砂を混ぜた粘土か剥離しており、脚台部が圧着される際につけられたヘラと外周の指頭痕が観察できる。脚台部の天井部には砂を混ぜた粘土が充填されている。調整は斜め方向の刷毛目が等間隔にナデ消されている。内面ヘラナデである。

６・７は甕である。口縁部は短めで、外反しながら開く。頸部はくの字状で、球形胴になると考えられる。６は外面全体に非常に細かい刷毛目が

施され、口縁端部のみ横ナデが加えられている。内面はヘラナデである。７は全体に厚めで、口縁部は特に厚くなっている。口縁端部は摘み上げられ、広い面を持っている。口縁部内外面に強い横ナデが加えられ、肩部は段になっている。胴部外面刷毛目、内面ヘラナデが施されている。

８は高坏の脚部である。接合部が中実の柱状で、それより下位は裾広がりに開くと考えられる。ホゾ接合で接合部が分厚い。脚台部の天井部に段差があり、こちら側から粘土を充填したと考えられる。透孔は４孔としたが、遺存している部分の透孔は平面的な間隔が短く、それ以上の数になる可能性がある。坏部内面ヘラ磨き。脚部外面は全体にヘラ磨きが施されている。脚部内面中位は刷毛目後ナデが加えられている。

９は土錘、所謂土玉である。全体にナデ調整で、孔の部分のみが若干赤変している。

本住居跡は４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－３期である。

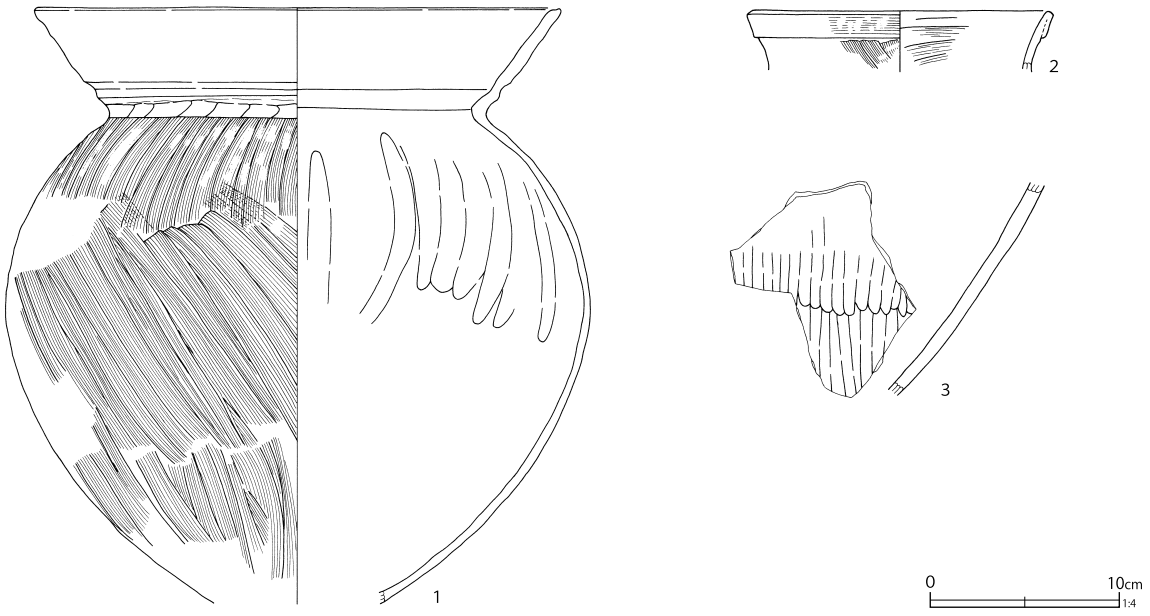
第 83 号住居跡（第 225・248 図）

Ｄ区の中央、Ｎ・Ｏ－ 19 グリッドに位置する。トレンチと排水溝に挟まれる状況で検出され、南西側も第 74 号住居跡と重複しているため、遺構の北側のごく一部が検出できたのみである。検出できた北壁の軸方位はＮ－ 78°－Ｅである。

検出できた規模は東西方向 2.25 ｍ、南北方向 2.50 ｍ、深さ 0.10 ｍである。覆土は確認できなかった。床面は平坦で、貼床、掘り方は検出されなかった。

遺物は少量で、古墳時代前期の壺・台付甕の破片のみである。いずれも排水溝際の床面から出土した。他に６世紀の須恵器瓶類の破片が混入している。

１は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。特大サイズ



第248図　第83号住居跡出土遺物

第62表　第83号住居跡出土遺物観察表（第248図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(27.8)	[31.3]	－	ＡＨＩＫ	30	普通	にぶい黄褐	山陰系口縁Ｓ字甕　外面煤付着　№１	185-5
2	土師器	広口壺	(15.9)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	№１	
3	土師器	壺	－	[11.2]	－	ＡＥＦＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	大廓式　№１	

のＳ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。最上段からの化粧掛けの粘土がＳ字の下段にまでかけられ、それが強くナデつけられている。そのため、Ｓ字部分は厚く、やや丸みを帯びる。内側にも化粧掛けが施されている。風化のため、口縁部の調整は不明瞭である。頸部より下位は、器肉が厚いが、一般的なＳ字状口縁台付甕と同様である。外面は粗い羽状の刷毛目、内面は風化のためナデ調整しか確認できない。黄白色を呈する。

２は複合口縁の壺である。傾きがなく、広口壺の可能性がある。端部の外周に粘土が貼付される、複合口縁である。複合部下端は凹凸がある。内外面全体刷毛目、端部横ナデ。

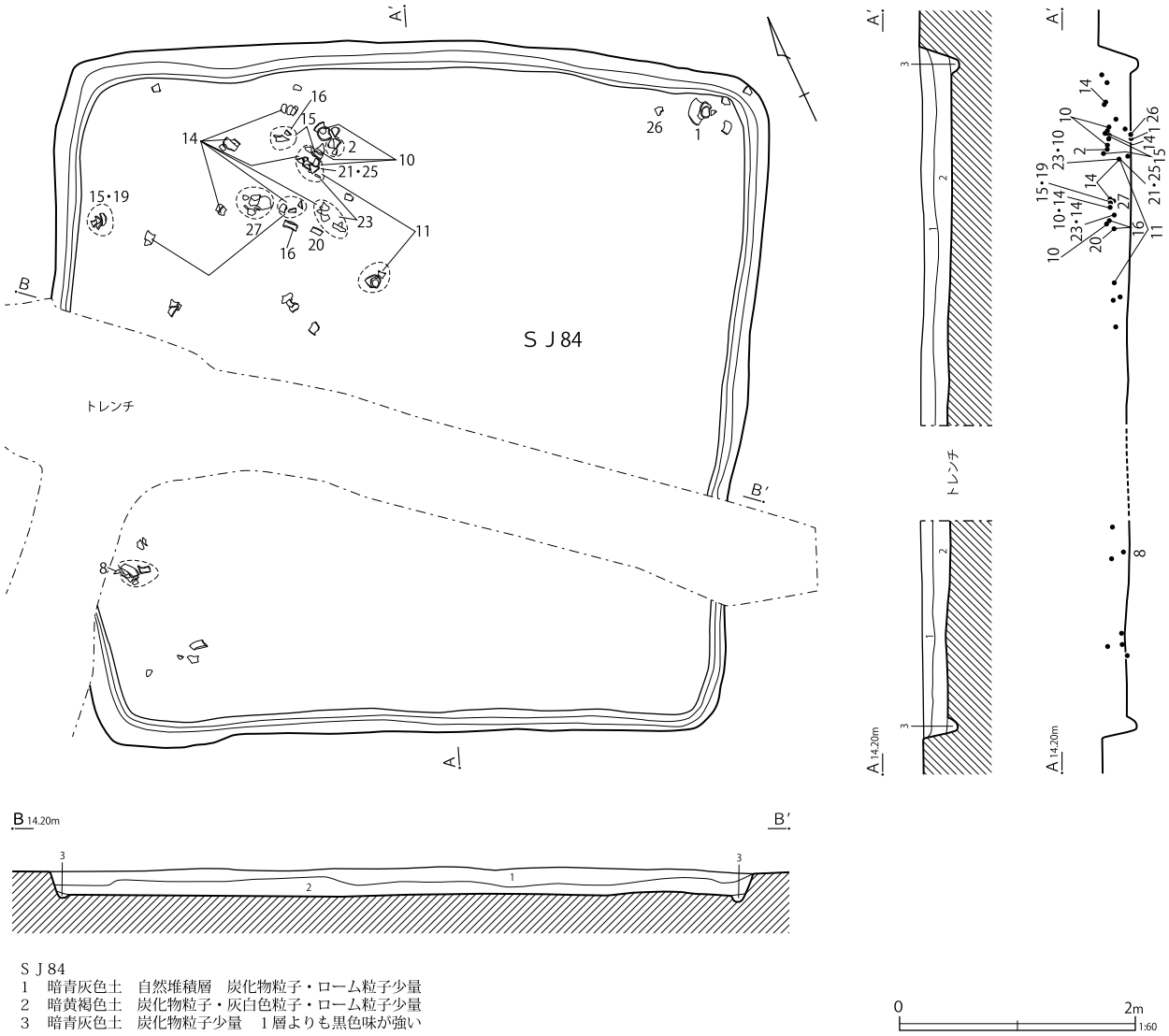
３は大廓式の壺の胴部である。外面ヘラ磨き、内面は風化のため調整は不明である。白色のパミスを多量に含む。搬入品。

本住居は４世紀中葉、屋敷裏Ⅲ－４期である。

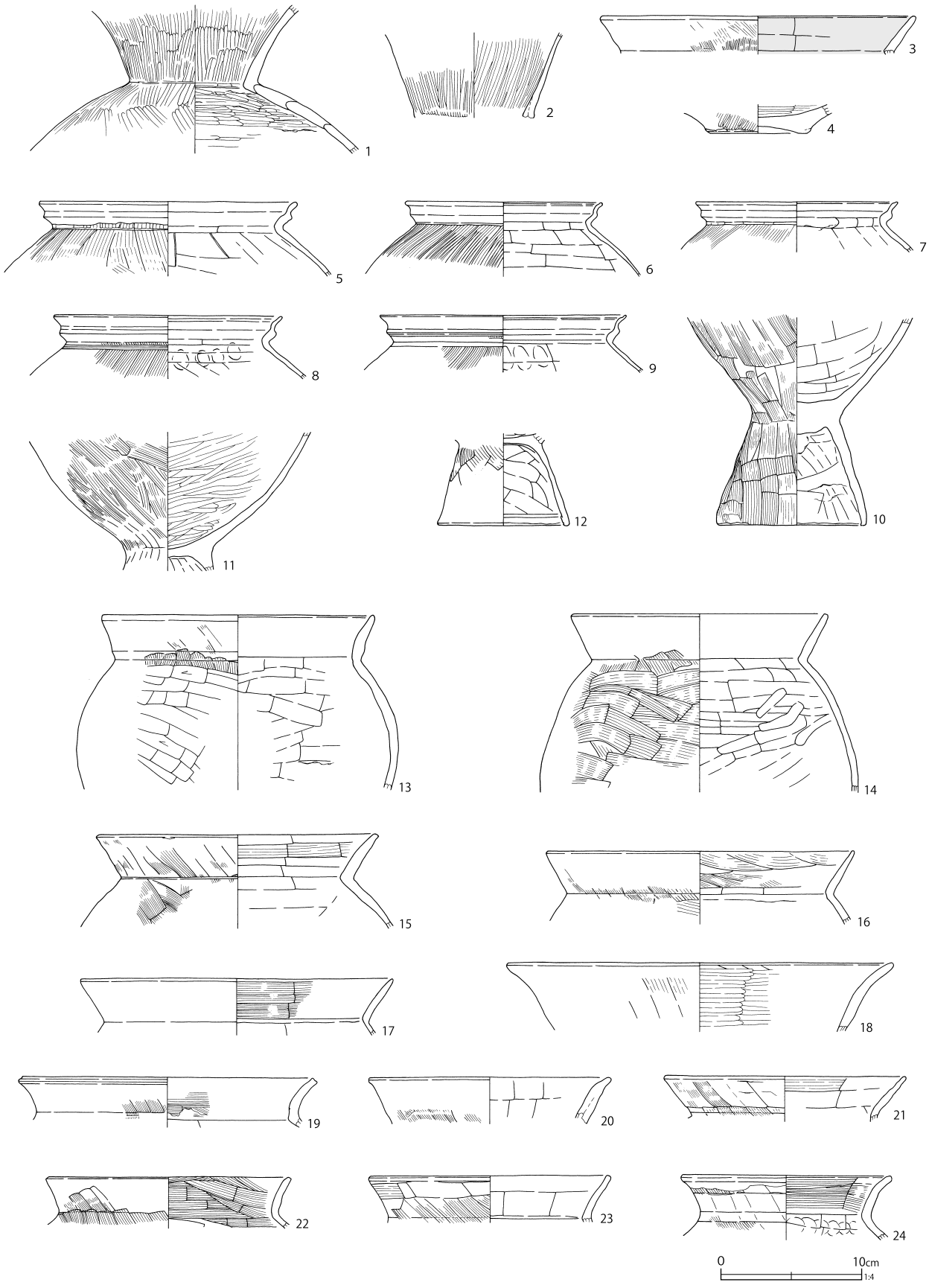
第 84 号住居跡（第 249 ～ 251 図）

Ｄ区の中央、Ｏ・Ｐ－ 18 グリッドに位置する。第 88 号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北東方向を主軸と仮定すると、Ｎ－ 26°－Ｅが主軸方位となる。

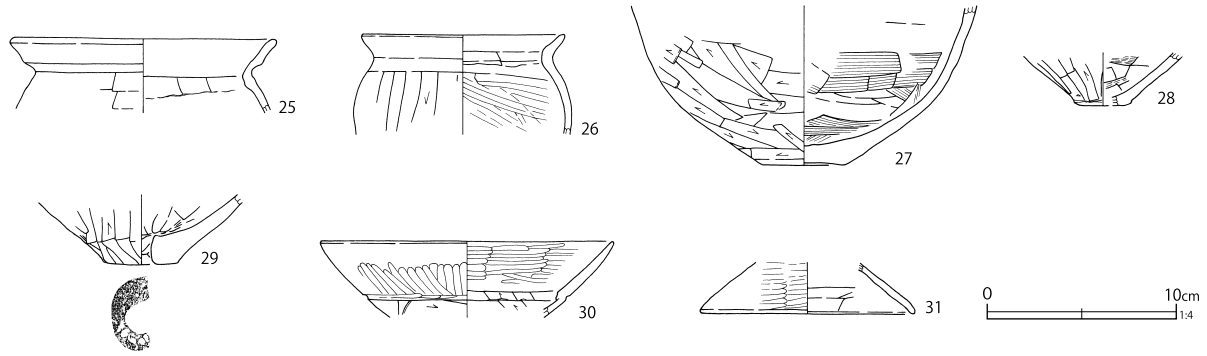
一辺 5.95 ｍの方形で、北辺、西辺はやや丸み



第249図　第84号住居跡



第250図　第84号住居跡出土遺物（1）



第251図　第84号住居跡出土遺物（２）

第63表　第84号住居跡出土遺物観察表（第250･251図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[10.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	65	普通	にぶい橙	№27	185-6
2	土師器	壺	－	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	不良	褐灰	内外面黒斑あり　№15	
3	土師器	壺	(22.2)	[2.7]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	灰褐	外面煤付着　内面赤彩	
4	土師器	壺	－	[2.0]	7.5	ＡＨＩＫ	70	普通	淡黄		
5	土師器	台付甕	(18.2)	[5.3]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄	内外面煤付着　SJ85と接合	
6	土師器	台付甕	(13.9)	[5.2]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	内外面煤付着	185-7
7	土師器	台付甕	(14.2)	[3.5]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	褐灰	内外面煤付着	
8	土師器	台付甕	(16.0)	[4.5]	－	ＡＣＥＨＩ	40	普通	淡黄	外面煤付着　№36	185-4
9	土師器	台付甕	(17.4)	[4.1]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰黄	内外面煤付着	185-8
10	土師器	台付甕	－	[14.7]	(10.5)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	№2・９・13・17・18	186-1
11	土師器	台付甕	－	[9.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№12・18	
12	土師器	台付甕	－	[6.4]	9.2	ＡＥＧＨＩＫ	60	普通	灰褐	内外面煤付着	186-2
13	土師器	甕	(19.2)	[12.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
14	土師器	甕	(18.1)	[12.7]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№６・９・11・18・21・23	
15	土師器	甕	(19.8)	[6.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№１・16・19	186-4
16	土師器	甕	(21.6)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№８・19	
17	土師器	甕	(22.0)	[4.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	外面煤付着	
18	土師器	甕	(27.2)	[4.9]	－	ＡＢＣＥＨＩＫ	10	普通	橙		
19	土師器	甕	(21.0)	[3.5]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	灰黄褐	№１	
20	土師器	甕	(17.0)	[3.2]	－	ＡＣＤＥＦＩＫ	15	普通	にぶい褐	外面煤付着　№10	
21	土師器	甕	(17.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい褐	№18	
22	土師器	甕	(17.2)	[3.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	暗赤褐	外面煤付着	
23	土師器	甕	(17.0)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№11・18	
24	土師器	甕	(14.8)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	灰黄褐		
25	土師器	小型甕	(14.0)	[3.9]	－	ＡＥＨＩＪＫ	20	普通	褐灰	５の字口縁甕　内外面煤付着　№18	
26	土師器	小型甕	(10.6)	[5.3]	－	ＡＣＥＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№26	
27	土師器	甕	－	[8.4]	4.4	ＡＤＥＨＩＫ	15	普通	黒褐	内外面煤付着　№7	
28	土師器	甕	－	[2.8]	(3.0)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい赤褐		
29	土師器	甑	－	[3.6]	3.9	ＡＣＥＩＫ	30	普通	橙		
30	土師器	鉢	(15.3)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
31	土師器	器台	－	[2.7]	(11.2)	ＡＨＩＫ	10	普通	浅黄橙		

を帯びる。深さ 0.25 ｍで、覆土は炭化物、灰白色粘土、ローム土を含む自然堆積である。全体にグライ化しており、色調は青もしくは緑がかっているため暗青灰色、暗黄褐色を呈する。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。床面からは壁周溝が検出されたのみである。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.30 m、深さ 0.05 m で、全周する。

遺物は多く、上～中層を中心に出土した。大部分が北西側の上層から出土である。器種は古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏、器台、鉢、甑である。

１～４は壺である。１は口縁下段から肩部までの破片である。頸部から外反して開き、頸部はくの字状､胴部は肩が張り球形になると考えられる。内外面ヘラ磨き。胴部内面も上半までヘラ磨きが施されている。２は口縁部下段である。器肉が薄く、上方まで延びずに直口縁になると思われる。全体に焼成が悪く､いぶされたような色調である。３は広口壺である。口縁部は短く、甕と同様である。外面刷毛目、内面ヘラナデ後横ナデが加えられている。赤彩は内面のみが確認できるが、本来は外面にも施されていると考えられる。４は薄い輪台状の底部である。内外面ヘラ磨き、底面はヘラナデ後ヘラ磨き。

５～９・12 はＳ字状口縁台付甕である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている｡頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施されている。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。５～８は口縁部から胴部上半の破片である。５の外面は粗い刷毛目工具が用いられている。７は２次被熱によって器面が若干発泡している。８は頸部下位に４条１単位の細い工具による横刷毛が施されている。９の頸部外面は、凹みに合わせて、別にナデが加えられている。12 は脚台部である。箱形で、端部は折り返されている。天井部と胴部見込みは砂を混ぜた粘土が充填され、上下からナデつけられている。調整は斜め方向の刷毛目が等間隔にナデ消されているが消しきれておらず、不規則に残る。内面は指ナデ。端部の折り返しの上位は、横ナデによって沈線状になっている。

10・11 は、刷毛目台付甕の胴部下半から脚台部である。脚台部は大きめである。いずれもホゾ接合である。調整は外面全体に双方とも刷毛目が施されている。胴部内面は 10 がヘラナデ、11 がヘラ磨きである。脚台部内面は基本的にヘラナデである。10 は天井部に粘土が付加されナデつけられ、中位に横位のナデが加えられている。11 は天井部の粘土が赤変し、傷んでいる。

13 ～ 28 は単口縁の甕である。13・14 は全体の器形が窺える。13 は球形、14 はやや長胴気味になると考えられる。15 ～ 24 は口縁部である。18 は山陰系口縁等の特大サイズの甕、その他は刷毛目甕の口縁部である。頸部から直線的に開くものと若干外反しながら開くものがある。頸部はいずれもくの字状である。端部は基本的に丸く収められているが、15・19・22 は面を持つ。口縁部の調整は内外面刷毛目後横ナデ。24 は刷毛目後、端部に更に粘土がかけられた上に横ナデが施されている。胴部外面は 13 がヘラケズリ、14 ～ 16・22・24 は刷毛目である。内面はヘラナデで、24 は指頭痕が多く残る。18 は口縁部が大きく外反しながら開く。内外面刷毛目後横ナデ、内面には更にヘラ磨きが加えられている。

25･26 は小型の甕で、25 は５の字状を呈する。いずれも口縁部は横ナデである。胴部は 25 が内外面ヘラナデ、26 が外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。

27 は胴部下半から底部、28 は底部である。いずれも胴部下半へ大きく開くことから、球形胴になると考えられる。外面、底面はヘラケズリ、27 の内面はヘラナデ後刷毛目、内面は木口ナデが施されている。

29 は単孔の甑である。底部の穿孔は上下から施されている。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。底面は多少ナデが施されているが無調整に近

く、植物の種子が抜け落ちた痕跡がある。

30は鉢である。大きく開く直線的な口縁部に低平な体部が付く。口縁部内外面ヘラ磨き、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。

31は器台の脚部である。直線的に開き、裾部は広がらない。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。ほとんど白に近い色調である。

本住居跡は３世紀後半。屋敷裏Ⅲ－４期である。

第85号住居跡（第252～255図）

D区の中央、P－18･19グリッドに位置する。第88号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける。長軸の方位はN－65°－Eである。

平面形は長方形で、規模は長軸方向7.38ｍ、短軸方向6.50ｍである。深さは0.10～0.23ｍである。床面は東側へ向かって傾斜していた。覆土は炭化物を含む黄褐色土、暗黄褐色土、黄灰色土で、自然堆積である。全体にシルト質である。貼床、掘り方は検出されなかった。

壁周溝は幅0.10～0.25ｍ、深さ0.05ｍで、全周する。

遺物は多く、中～下層を中心に出土している。北西コーナーからは、壺（２）、台付甕（13～20）、高坏（41）、器台（42～45）が潰れた状態で、床面から第２層にかけて出土している。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、鉢である。完形に近い器台が、北壁沿いの北西コーナー寄りからまとまって出土しているのが特徴的である。

１～７は壺である。１は複合口縁である。頸部から直立し、中位に段を持ち、更に複合口縁となる上段が接合されている。頸部はあまり締まらない。複合口縁と二重口縁との折衷的な口縁とでも言い得る形態である。口縁端部の外周に粘土が貼付された複合口縁である。複合部下端は凹凸があり、更に補強のため粘土が足されている。調整は風化のため剥離が多く、器面が荒れており、不明瞭である。口縁部内外面ヘラ磨き、胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。２・３は単口縁である。球形胴から短めの口縁部が外反して開く。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。内面には更にヘラ磨きが加えられている。頸部内面は上位からの粘土がナデつけられている。胴部外面刷毛目後ヘラ磨き、内面ヘラナデで指頭痕が残る。粘土がきめ細かく、器面が滑らかである。３は端部のみの破片で、面を持つ。大きく開くため、あるいは二重口縁壺の端部である可能性もある。全体に剥離が進んでおり、調整は不明瞭である。４～７は胴部下半から底部である。４・７の底部は輪台状である。４は外面刷毛目後ヘラ磨き。内面ヘラケズリに近いヘラナデ。風化が進み荒れている。底面は中心部分のみヘラナデが確認できるが、その他の部分は無調整で、棒状の圧痕が見られる。５の外面は刷毛目後ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。粘土が緻密で焼成が良い。６の外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面は非常に細かい刷毛目、底面は無調整である。全体に黒褐色を呈する。７の外面はヘラ磨き、内面刷毛目。底面は無調整である。

８～10は小型壺である。いずれも胴部の破片である。８・10は頸部が締まらず、鉢や坩等の可能性もある。８は外面上位刷毛目後ヘラ磨き、下位はヘラケズリ後ヘラ磨き、内面は刷毛目で頸部には指頭痕が残る。９はやや扁平な胴部で頸部はあまり屈曲しない。口縁部外面ヘラナデ、内面ヘラ磨き。胴部外面はヘラ磨きだが、風化のためほとんど確認できない。内面の上位はヘラが押し付けられており、更にヘラナデが加えられている。10は口縁部外面ヘラナデ、内面刷毛目後ヘラ磨き。胴部外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面刷毛目。

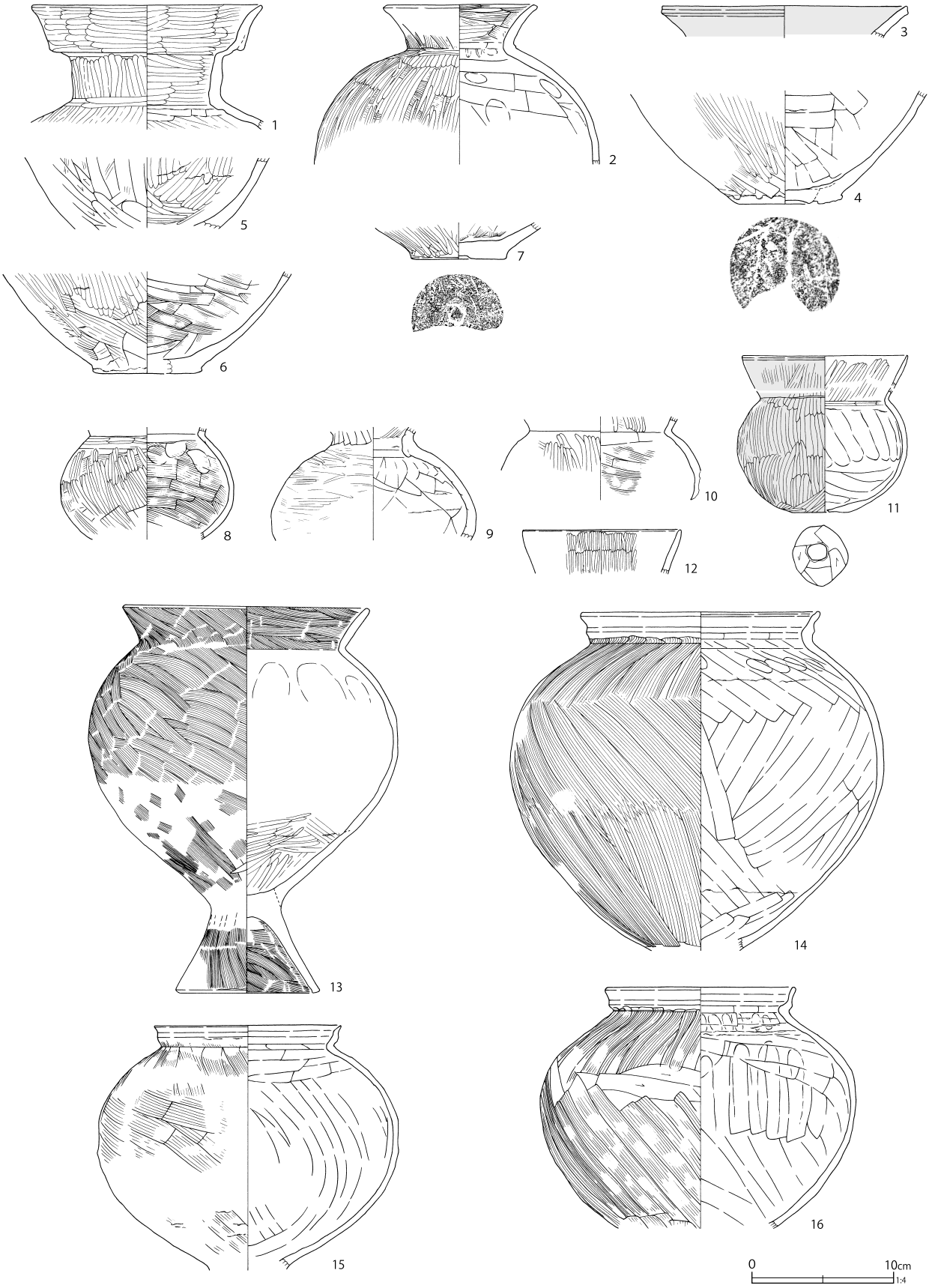
11・12は坩である。11は球形胴に直線的に開く口縁部が付く。口縁の上下は接点がない。口縁部は内外面刷毛目後横ナデ、更にヘラ磨きが加えられている。胴部外面ヘラ磨き、内面上位ナデ、



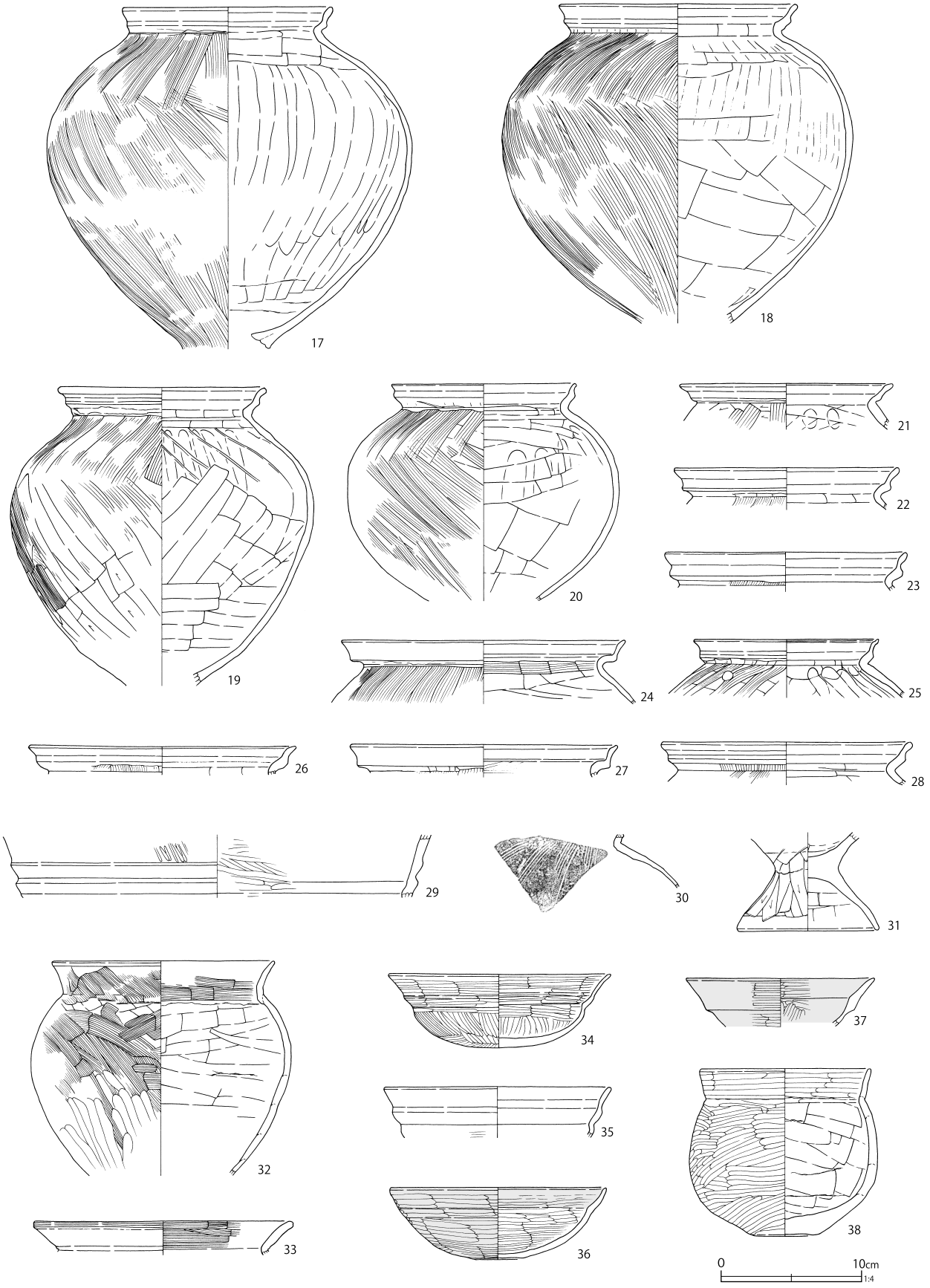
第252図　第85号住居跡

下半はヘラナデが加えられている。底面はヘラケズリ後ヘラ磨が施され、中央に内側からの底部穿孔が認められる。12は口縁端部のみの破片である。外面刷毛目後横ナデ、ヘラ磨きが加えられる。指頭痕が残り、指紋が一部確認できる。内面横ナデ後ヘラ磨き。粘土は精選されており、ほとんど含有物が見えない。

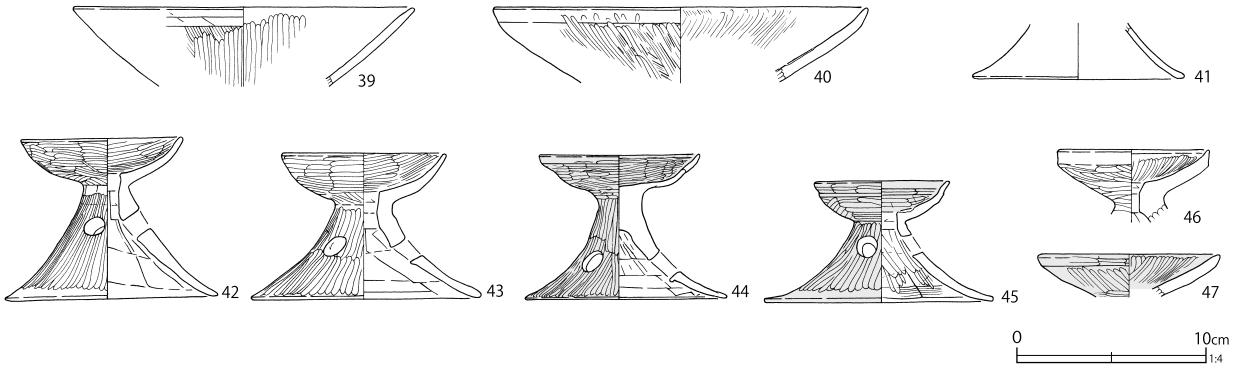
13は刷毛目台付甕である。やや上位に最大径のある球形胴で、頸部はくの字、口縁部は直線的に開く。ホゾ接合。脚台部はやや小さめである。



第253図　第85号住居跡出土遺物（1）



第254図　第85号住居跡出土遺物（２）



第255図　第85号住居跡出土遺物（３）

口縁部内外面刷毛目後横ナデ。端部は丸く収められている。胴部外面斜め方向刷毛目、刷毛目は細かく、部分的に不明瞭である。接合部付近はナデが加えられている。内面ナデ後ヘラナデ、下半にはヘラ磨きが施されている。脚台部は内外面刷毛目が施されているが、部分的に不明瞭である。

14 ～ 28 はＳ字状口縁台付甕である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部の横ナデの際に爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施される。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。14 ～ 20 は口縁部から胴部全体が分かる資料である。14 は口縁端部の内面が凹み、若干の段がある。全体に厚めで、やや重量感がある。15 は横長の胴部に復元できたが、歪みが著しく確実ではない。刷毛目は上段と中・下段で刷毛目工具が異なり、中位の刷毛目は横方向に近い。内面ナデ後ヘラナデ。２次被熱著しく、全体に赤変している。16 は羽状の部分の刷毛目が疎らで、ベースの刷毛目が確認できる。頸部内面は指オサエ後ヘラナデ。17 は器肉が薄く、軽量である。脚台部が接合部充填の粘土を境にきれいに剥離し、接合方法が確認できる。刷毛目は鋭く、櫛目に近い。19 は軽量である。下半がヘラケズリである。内面にヘラナデの当たりが明瞭に残る。２次被熱により相当傷んでいる。20 は頸部の下位まで口縁部からの化粧掛けが及んでいる。下端はヘラでナデ付けられている。羽状の刷毛目は工具の片側のみが深く入っている。21 ～ 28 は口縁部である。24・27 は下段が大きく外反して、上段がほぼ立つように接合されている。製作方法は他のＳ字状口縁台付甕と同様だか、形態はＳ字というより受口状とでも言い得ようか。24 の胴部の刷毛目は単一の斜め方向で、羽状になると考えられる。遺存部分の下端に横刷毛が若干残る。頸部内面は刷毛目である。25 の胴部外面には指頭痕が残る。27 の外面下段には縦方向のヘラナデが加えられている。28 は口縁部下段の刷毛目と、胴部の刷毛目が区別して施されている。全体に分厚く、重量感がある。

29 は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。大型で、口縁部は特に厚くなっている。特大サイズのＳ字状口縁台付甕の上段に、長く厚い口縁部が接がれている。最上段からの化粧掛けの粘土がＳ字の上段にまでかけられ、全体に強い横ナデが施されている。最上段には更に細い工具によるヘラ磨きが加えられている。内側にも化粧掛けが施され、頸部まで横方向のヘラ磨きが施されている。黄白色を呈する。

30 はＳ字状口縁台付甕の胴部と考えられる。ヘラケズリ後間隔が開く刷毛目が施されている。内面ヘラナデ。

第64表　第85号住居跡出土遺物観察表(第253～255図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.1)	[8.7]	－	ＡＥＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№15～18	
2	土師器	壺	10.7	[11.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	№28	186-5
3	土師器	壺	(17.2)	[2.2]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	
4	土師器	壺	－	[7.9]	7.5	ＡＣＥＨＩ	50	普通	橙	SJ84と接合	
5	土師器	壺	－	[5.0]	－	ＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№13	
6	土師器	壺	－	[7.2]	(7.6)	ＡＥＨＩＫ	20	普通	灰褐	№31	
7	土師器	壺	－	[2.5]	6.7	ＡＣＤＥＨＩＫ	40	普通	灰褐	№11	
8	土師器	小型壺	－	[7.8]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい黄褐	外面黒斑あり	
9	土師器	小型壺	12.1	11.9	4.9	ＡＣＨＩＫ	75	普通	褐灰	内外面煤付着　№34	
10	土師器	小型壺	－	[5.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙		
11	土師器	坩	(11.6)	[11.0]	(4.0)	ＡＢＤＥＨＩＫ	85	普通	にぶい橙	外面赤彩　底部穿孔　№38	186-7
12	土師器	坩	(11.0)	[3.1]	－	ＩＫ	10	普通	橙		
13	土師器	台付甕	17.4	27.7	10.2	ＣＤＥＨ	80	良好	黒褐	№26	186-8
14	土師器	台付甕	16.8	23.8	－	ＡＣＥＩ	80	普通	浅黄橙	内外面煤付着　№28・29	187-1
15	土師器	台付甕	13.0	[17.2]	－	ＡＥＨＩＫ	60	普通	灰赤	内外面煤付着　№29・35・37	187-2
16	土師器	台付甕	13.3	[17.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№29・30	187-5
17	土師器	台付甕	14.9	[24.2]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№42～44	187-3
18	土師器	台付甕	16.8	[22.7]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№27・28・32	187-4
19	土師器	台付甕	14.7	[21.2]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	70	普通	褐灰	内外面煤付着　№28・29・33・46	187-6
20	土師器	台付甕	13.0	[15.5]	－	ＡＣＨＩＫ	75	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№35・36	188-1
21	土師器	台付甕	(15.0)	[3.2]	－	ＡＣＥＩ	10	普通	灰白	外面煤付着	
22	土師器	台付甕	(16.0)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰褐		
23	土師器	台付甕	(17.0)	[2.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№29	
24	土師器	台付甕	(20.0)	[4.5]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰黄	受口状口縁　外面煤付着	188-3
25	土師器	台付甕	(13.0)	[4.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	外面煤付着　№32	
26	土師器	台付甕	(18.9)	[2.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
27	土師器	台付甕	(18.9)	[2.3]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	受口状口縁　外面煤付着	
28	土師器	台付甕	(17.8)	[3.0]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	褐灰	外面煤付着	
29	土師器	台付甕	－	[4.4]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	山陰系口縁Ｓ字甕　内外面煤付着	225-2
30	土師器	台付甕	－	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰黄	外面煤付着	
31	土師器	台付甕	－	[7.0]	10.0	ＡＣＨＩＫ	90	普通	灰褐	№28	186-3
32	土師器	甕	(15.7)	[15.3]	－	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№28・46・47	188-2
33	土師器	甕	(18.2)	[2.3]	－	ＡＣＥＨ	10	普通	橙	外面煤付着	
34	土師器	鉢	15.6	5.2	－	ＡＣＥＨＩ	95	普通	灰白	№38	188-4
35	土師器	鉢	(16.0)	[3.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	灰白		225-2
36	土師器	鉢	15.2	5.0	3.5	ＡＣＨＩＫ	75	普通	明褐灰	外面・口縁部内面赤彩　№42	188-5
37	土師器	鉢	(13.2)	[3.4]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい赤橙	内外面赤彩	
38	土師器	鉢	－	[8.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	№２	186-6
39	土師器	高坏	(18.0)	[4.2]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
40	土師器	高坏	(19.6)	[3.9]	－	ＢＣＤＨＩＫ	15	普通	明赤褐		
41	土師器	高坏	－	[2.9]	11.1	ＡＣＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	№42	
42	土師器	器台	8.4	8.5	11.1	ＡＣＨＩＫ	95	普通	橙	№40	188-7
43	土師器	器台	8.6	7.7	12.0	ＡＣＨＩＫ	80	普通	橙	№38・39	188-8
44	土師器	器台	8.4	7.6	10.6	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい黄褐	外面・坏部内面赤彩　№42	188-9
45	土師器	器台	7.1	6.3	12.0	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	灰白	外面・坏部内面赤彩　№37・38	188-6
46	土師器	器台	(8.0)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＪＫ	70	普通	にぶい褐	№６	
47	土師器	器台	(9.5)	[2.2]	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	

31 はナデ調整の台付甕の脚台部である。やや小型で、ホゾ接合。端部は若干内湾し、面を持つ。胴部は見込み部分のみが遺存し、ヘラナデが施されている。外面全体ヘラケズリ、内面ヘラナデ。端部には横ナデが加えられている。脚端部には砂が付着している。

32・33 は甕である。口縁部は短めで、若干外反しながら開く。32 は頸部が面を持ち、屈曲が弱い。胴部は最大径を上位に持ち、やや長胴気味である。ヘラナデ後外面全体、口縁部内面に非常に細かい刷毛目が施され、口縁端部のみ横ナデが加えられている。下半は幅広の工具による境目が不明瞭な磨き、所謂ナデ磨きが施されている。内面はヘラナデで、下位はコゲが多く付着し不明瞭である。

34 ～ 38 は鉢である。34・35 は所謂二重口縁鉢である。34 は丸底で、ほぼ完形である。内外面丁寧なヘラ磨きが施されている。黄白色を呈する。35 は口縁部内外面横ナデ、体部外面はごく一部のみの遺存だがヘラ磨きが確認できる。36 は低平な体部に、若干内湾しながら開く短い口縁部が付く。平底でほぼ完形である。内外面、底面ともヘラケズリ後丁寧なヘラ磨きが施されている。灰白色を呈する。37 は内外面に段がある。内外面ヘラ磨きが施され、赤彩されている。38 は球形胴に近い胴部に直立する口縁部が付く。口縁部内外面、体部外面横方向ヘラ磨き、内面ヘラナデ。底面にもヘラ磨きが施されている。全体に煤が付着し、胴部下半は２次被熱によって荒れている。底面赤変。

39 ～ 41 は高坏である。39・40 は直線的に大きく開く坏部である。両者とも、刷毛目後端部に強い横ナデが加えられ、その上にヘラ磨きが施されている。41 は裾広がりに開く脚部である。風化のため調整は不明である。

42 ～ 45 は器台である。いずれも器受部は内湾する皿状で、脚部は裾広がりである。接合はホゾ接合で、透孔は３孔である。基本的な調整は器受部が内外面ヘラ磨き、脚部外面がヘラ磨き、内面がヘラナデである。器受部の穿孔は、42 が上下から、43 が上から行われている。45 は不明である。いずれも孔内にヘラケズリが施されている。44 は器受部の端部に粘土が付加され、肥厚した口縁部になっている。器受部の穿孔が施されておらず、接合部が細く長い。内面は上半に絞り目が残り、ナデが加えられている。下半はヘラナデである。45 はやはり粘土が付加されて口縁部が作出されている。内面は絞り目にヘラナデが加えられ、下半は刷毛目である。更に全体に不規則なヘラ磨きが加えられている。

46・47 は器受部の破片である。46 は器肉が厚く、上端に横ナデにより面が作出され、口縁部状になっている。内外面ヘラ磨き、穿孔は上から行われ、ヘラケズリが施されている。風化のため調整は不明瞭である。47 は端部に横ナデが施され、不明瞭だが口縁部が作出されている。内外面ヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。

本住居跡は３世紀末から４世紀前半、屋敷裏Ⅲ－２期である。

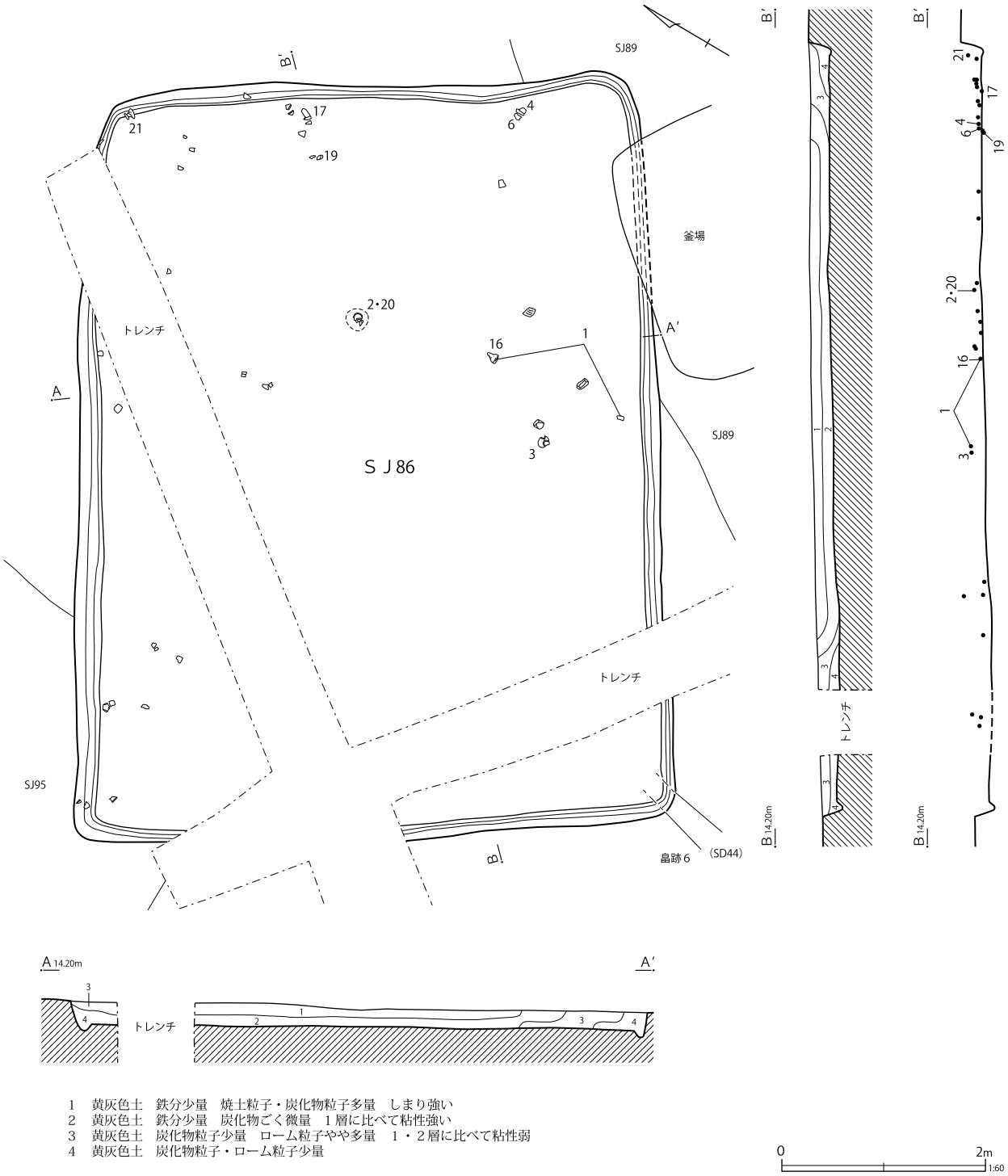
第 86 号住居跡（第 256・257 図）

Ｄ区の東側、Ｏ・Ｐ－ 19・20 グリッドに位置する。第 89・95 号住居跡、第６号畠跡と重複し、両住居跡より新しく、畠跡より古い。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける。長軸方位はＮ－ 58°－Ｅである。

平面形は長方形で、規模は長軸方向 7.38 ｍ、短軸方向 5.75 ｍである。検出された深さは 0.20 ｍで一定だが、床面は南西側へ向かって傾斜していた。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む黄灰色土で、自然堆積である。全体に粘土質である。貼床、掘り方は検出されなかった。

壁周溝は幅 0.10 ～ 0.25 ｍ、深さ 0.06 ｍで、全周する。

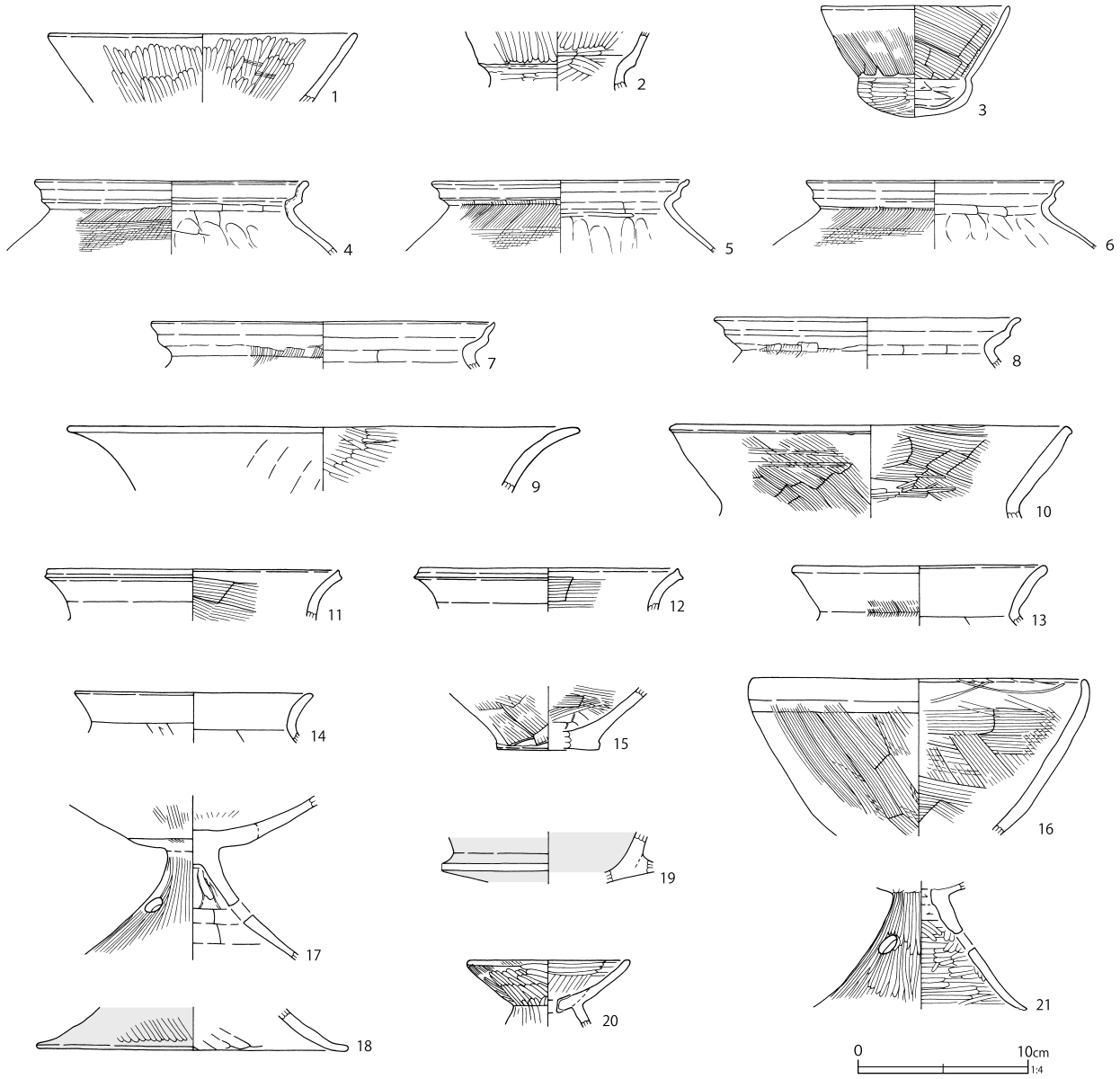
遺物は少なく、住居跡全体から下層を中心に出



第256図　第86号住居跡

土した。器種は古墳時代前期の壺、坩、甕、台付甕、高坏、器台である。本住居跡出土の３は、第85号住居跡出土18と同一箇所の破片と接合関係がある。

１・２は壺である。１は単口縁である。頸部から直線的に開く。大型坩のような器形である可能性もある。内外面刷毛目後横ナデが施され、ヘラ磨きが加えられている。２は二重口縁壺下段の破片である。直立する下段の端部外側に中段以上が接合されている。内外面ヘラ磨き。内面は全体が



第257図　第86号住居跡出土遺物

黒斑で、光沢がある。

３は坩である。大きく直線的に開く口縁部に小さな体部が付く。口縁部内外面横ナデ後刷毛目、内外で工具が異なり、外面の刷毛目の方が細かい。内面の刷毛目は斜めにきれいに揃えられている。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。

４～８はＳ字状口縁台付甕の口縁部である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施される。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。４は外面下段に横方向のヘラナデが入れられている。内面は一枚剥離し、化粧掛けの単位が分かる。４～６の胴部外面には、縦方向の刷毛目工具とは異なる６条１単位の櫛目に近い工具による横刷毛が施されている。破片の下端にまで認められ、数段施されていると考えられる。

第65表　第86号住居跡出土遺物観察表（第257図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(18.1)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	№２・５	
2	土師器	壺	－	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	褐灰	内面黒斑あり　№１	
3	土師器	坩	11.0	6.5	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	橙	№４	189-1
4	土師器	台付甕	(16.0)	[4.3]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№８	
5	土師器	台付甕	(15.0)	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	台付甕	(15.0)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	浅黄	内外面煤付着　№７	
7	土師器	台付甕	(20.0)	[2.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰白	内外面煤付着	
8	土師器	台付甕	(17.9)	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着	
9	土師器	甕	(30.0)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩ	5	普通	灰白	外面煤付着	
10	土師器	甕	(23.6)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	黒褐	外面煤付着	
11	土師器	甕	(17.5)	[3.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	褐灰	内外面煤付着	
12	土師器	甕	(15.7)	[2.5]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		
13	土師器	甕	(14.9)	[3.5]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	黒褐	外面煤付着	
14	土師器	甕	(14.0)	[2.9]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
15	土師器	甕	－	[3.6]	(6.1)	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
16	土師器	鉢	(20.0)	[9.2]	－	ＡＣＥＩ	20	普通	灰黄褐	外面煤付着　№２	
17	土師器	高坏	－	[9.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	65	普通	にぶい橙	№23	189-2
18	土師器	高坏	－	[2.4]	(18.4)	ＡＣＥＨ	10	普通	橙	内面煤付着　外面赤彩	
19	土師器	器台	－	[2.9]	－	ＡＥＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩　№25	
20	土師器	器台	(9.5)	[4.0]	－	ＡＣＥＩＪＫ	50	普通	褐灰	内外面黒斑あり　№１	
21	土師器	器台	－	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	浅黄橙	内外面黒斑あり　№15	189-3

９～14は単口縁の甕の口縁部である。９・10は山陰系口縁等の特大サイズの甕である。９は大きく外反しながら開く。外面ヘラナデ後横ナデ、内面は横ナデ後ヘラ磨きである。10は内外面刷毛目後横ナデ、内面には部分的にヘラ磨きが加えられている。外面には煤が厚く付着する。11・12は大きく外反して開く。端部に広めの面が作出されており、北陸系の影響と考えられる。双方とも外面横ナデ、内面刷毛目が施されている。13・14は刷毛目甕の口縁部である。若干外反しながら開く。端部は丸く収められている。調整は、内外面刷毛目後横ナデ。胴部外面は13が刷毛目、14がヘラケズリである。内面はヘラナデである。13の外面には煤が厚く付着する。

15は甕の底部である。外面は刷毛目後ナデ。内面は刷毛目後ヘラナデが施されている。底面はヘラケズリである。

16は大型の鉢である。直線的に開き、端部は内湾する。刷毛目後端部に横ナデが加えられている。口縁部内面には太い沈線状の凹線が認められる。調整とは直接関係しておらず、文様を意識している可能性もある。焼成良く、堅緻。重量感がある。

17・18は高坏である。17は坏部下半から脚部中位までの破片である。全体に２次被熱を受け剥離が進んでいる。坏部は粘土の積み上げ単位で大きく割れ、僅かにヘラ磨きが確認できるのみである。接合はホゾ接合で、裾広がりの脚部になっている。透孔は３孔である。外面はヘラ磨き。内面は上半に絞り目が残り、ナデが加えられている。下半はヘラナデである。18は裾広がりの脚部である。端部が更に外側に広げられている。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。

19は大型器台の器受部下段である。鍔の先端を欠失する。剥離が著しく、調整は不明である。

20・21は器台である。20は若干内湾して開く皿状の器受部である。接合はホゾ接合で、孔の内側から接合された脚部の内面までが剥離しており、接合の様相が良くわかる。調整は器受部が内外面ヘラ磨きである。脚部外面ヘラ磨き、内面は

剥離のため不明である。21は裾広がりの脚部で、透孔は３孔である。坏部の内面と脚端部を欠失する。接合はホゾ接合で、上下から穿孔され、孔内にヘラケズリが施されている。脚部内外面にヘラ磨きが施されている。

本住居跡は４世紀中葉､屋敷裏Ⅲ－４期である。

第87号住居跡（第258・259図）

Ｄ区の東側、Ｏ－19･20グリッドに位置する。遺構の北側の大部分が調査区域外にかかり、南コーナーは試掘トレンチによって壊されている。調査できたものは住居跡の南側の部分のみである。第56・78号住居跡、第18号井戸跡と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける｡調査範囲の長軸方位はＮ－28°－Ｗである。

平面形は隅丸方形、もしくは隅丸長方形と推定される。各辺はやや丸みを帯びている。規模は、検出範囲で長軸方向3.15ｍ、短軸方向1.60ｍである。法面で検出された深さは0.35ｍである。覆土は自然堆積である。炭化物、ローム土を含む暗褐色土、暗黄灰色土で、下層はグライ化し青みがかっている。床面全体に薄く炭化物層が分布していた。貼床、掘り方は検出されなかった。

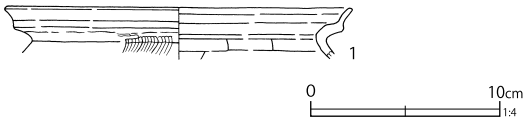
壁周溝は幅0.10～0.20ｍ、深さ0.05ｍで、検出範囲では全周している。

遺物はごく少なく、古墳時代前期の壺、台付甕、高坏の破片が床面から出土している。

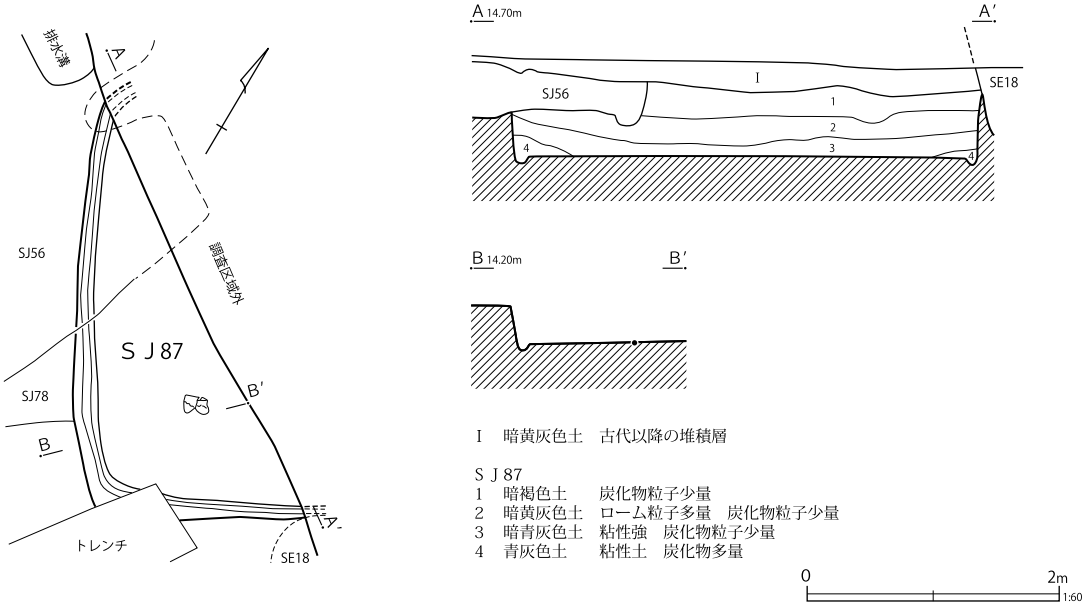
１はＳ字状口縁台付甕である。口縁部下段に上段からの粘土がかけられた後に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部内面ヘラナデ。胴部外面ヘラケズリ後刷毛目。内面はナデが施されている。

本住居跡は４世紀中葉､屋敷裏Ⅲ－４期である。

第88号住居跡（第260・261図）



第258図　第87号住居跡出土遺物



第259図　第87号住居跡

第66表　第87号住居跡出土遺物観察表(第258図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(18.4)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	良好	明赤褐	内面煤付着	

D区の中央、O・P－18・19グリッドに位置する。第84・85・95号住居跡と重複し、第95号住居跡より新しく、その他の遺構より古い。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける。長軸方位はN－72°－Wである。

平面形は不整な長方形で、各辺とも凹凸が著しい。規模は長軸方向6.85 m、短軸方向6.15 mである。検出された深さは0.50 mで、床面は中央がやや凹んでいた。覆土は炭化物、灰白色粘土を含む黄褐色土、暗黄褐色土、黄灰色土、暗黄灰色土である。自然堆積で、全体に粘土質である。貼床、掘り方は検出されなかった。

壁周溝は幅0.15 m、深さ0.05 mで、西壁のみで検出された。

遺物はやや少なく、住居跡全体から上層を中心に出土した。器種は古墳時代前期の壺、坩、甕、台付甕、器台、甑である。

１～３は壺である。１は受口状の口縁部である。東海地方の影響を受けていると考えられる。頸部から下段が短く外反し、若干外側に開く上段に接合する。上段は内外面刷毛目後横ナデ、下段は外面横ナデ、内面は上段と同様である。胴部内外面ヘラナデ。全体に風化が進み、黄白色を呈する。２は単口縁で、直線的に開く。厚手で、二重口縁壺の上段等の可能性も考えられる。内外面ヘラナデ後横ナデ。３は縄文施文の肩部である。単節ＬＲで下端は無区画である。文様帯を除いた部分はヘラ磨きが施され、赤彩されている。内面ヘラナデ。

４は坩である。若干内湾しながら大きく開く口縁部である。内外面刷毛目後横ナデが施され、更にヘラ磨きが加えられている。

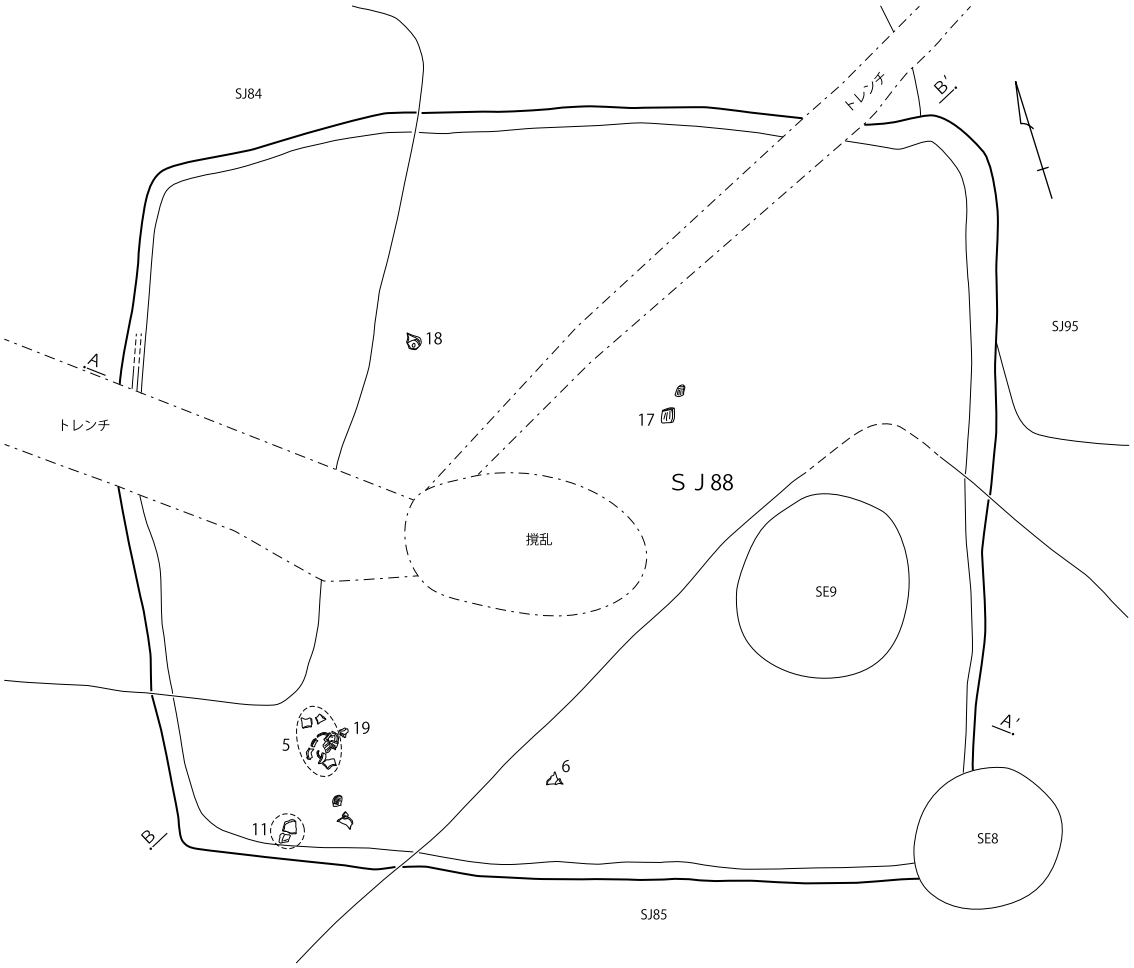
５～10はＳ字状口縁台付甕である。全体の作りはほぼ共通している。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目が羽状に施されている。内面は指ナデ、もしくはその上にヘラナデが施されている。５は口縁部が胴部に比して小さめである。胴部は器肉が厚く、重量感がある。外面の刷毛目は間隔が開いており、ベースのヘラケズリが確認できる。下端の割れ口は脚台部がきれいに外れた状態である。６の外面の刷毛目は、幅広で条が深い工具が用いられている。焼成良く、堅緻。７は胴部内面のヘラナデが丁寧に行われている。９は内面の剥離が著しい。10の刷毛目は６と同様の工具である。頸部は細かく指頭痕が残る。焼成良く、堅緻。

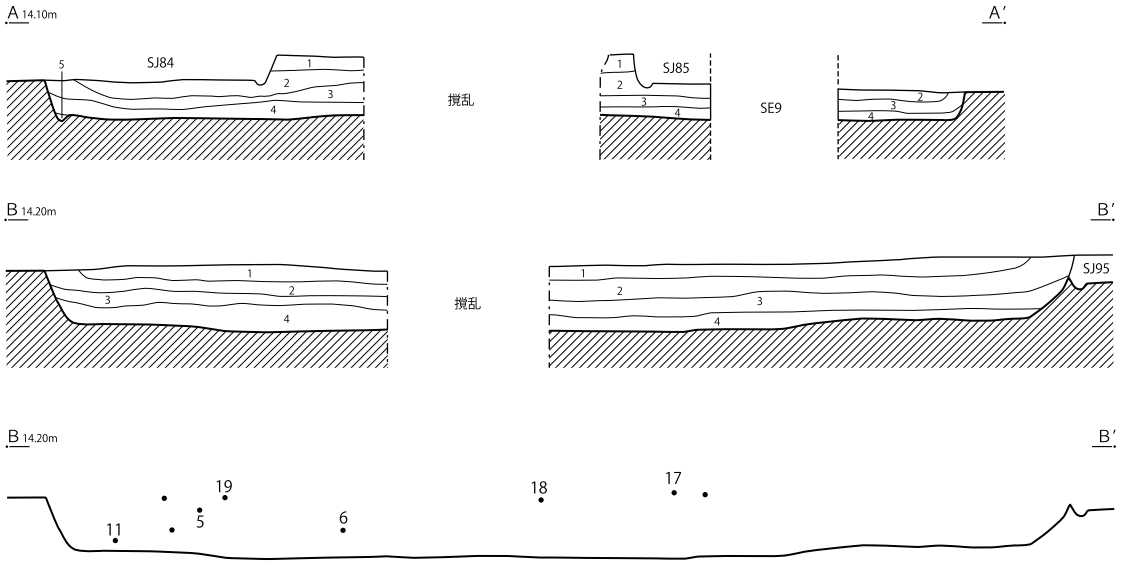
11～14は単口縁の甕の口縁部である。いずれも頸部はくの字で、口縁部が若干外反しながら開く。端部は丸く収められている。11は胴部上半までの破片である。胴部はやや長めになると考えられる。口縁部内外面刷毛目後横ナデ、胴部外面刷毛目、内面ヘラナデ。焼成良く、堅緻。12・13は全体に内外面ヘラナデ調整で、口縁部には横ナデが加えられている。13は口縁部内面に粘土が付加されて厚くなる。14は内外面刷毛目後横ナデである。

15・16は甕の底部である。15はやや突出し、16は胴部から連続する。15は外面刷毛目後ナデ、内面ヘラナデ。底面はヘラケズリで、繊維状の圧痕が見られる。外面に煤が厚く付着する。16は外面ヘラケズリ、内面刷毛目。底面はナデか。外面に煤が厚く付着し、一部赤変している。

17は甑である。器肉が厚く、重量感がある。底部は丸みを持ち、底面中央に径3.5cmの円形の孔が穿たれている。見込み部分に底部と胴部の接合痕が残る。調整は内外面刷毛目。外面は風化のため不明瞭である。底面には木葉痕が残る。孔の周辺は風化し、調整は不明である。

18・19は器台である。双方とも器受部最下端から脚部中位までの破片である。18の器受部は

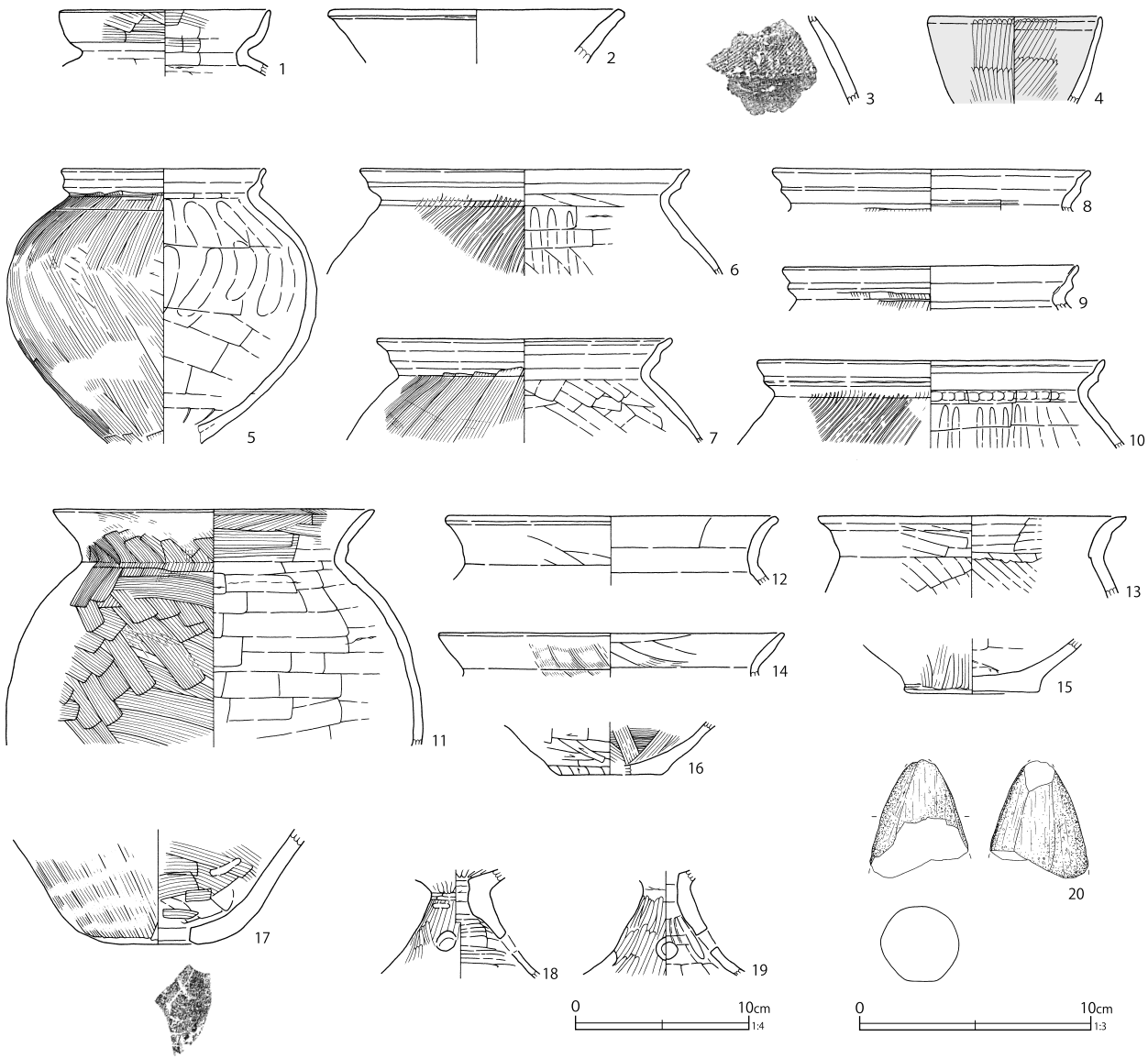




ＳＪ88
1　暗黄褐色土　粘土質　炭化物・鉄分少量　しまり強い
2　暗黄灰色土　粘土質　炭化物ごく微量　１層に比べしまり弱い
3　黄褐色土　　粘土質　炭化物・灰白色粘土ブロック少量　粘性強い
4　黄灰色土　　粘土質　炭化物少量　粘性強い
5　黄灰色土　　粘土質　粘性強　壁溝覆土

0　2m
1:60

第260図　第88号住居跡



第261図　第88号住居跡出土遺物

は僅かにヘラ磨きが確認できる。19の器受部はごく部分的にしか遺存していない。接合はホゾ接合で、18は上下から、19は上から穿孔されている。孔の中はヘラケズリである。脚部は裾広がりである。透孔は18が3孔、19が4孔である。外面ヘラ磨き。内面は18が細い工具によるナデ。19が上半に絞り目が残り、ヘラナデが加えられている。

20は軽石製の砥石である。上端部のみが遺存している。使用により多面体になり、僅かに擦痕が残る。

本住居跡は4世紀前半、屋敷裏Ⅲ－4期である。

第89号住居跡（第262・263図）

D区の東端、O・P－20グリッドに位置する。遺構の東側の大部分が調査区域外にかかり、南側は試掘トレンチによって壊されている。その他の部分も撹乱、ポンプ設置用の釜場によって撹乱されている。第86号住居跡と重複し、本住居跡が古い。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける。長軸方位はN－36°－Eである。

平面形は方形、もしくは長方形と推定される。各辺は直線的である。規模は、検出範囲で長軸方

第67表　第88号住居跡出土遺物観察表（第261図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	壺	(17.0)	[3.0]	－	ＡＣＩＫ	10	普通	浅黄橙		
3	土師器	壺	－	[5.1]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	浅黄橙	外面下半赤彩	
4	土師器	坩	(10.0)	[5.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	内外面赤彩・煤付着	
5	土師器	台付甕	11.7	[15.8]	－	ＡＣＨＩＫ	65	普通	灰黄	外面煤付着　№５	189-4
6	土師器	台付甕	(18.9)	[6.0]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	灰黄褐	外面煤付着　№９	
7	土師器	台付甕	(17.0)	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩ	25	普通	灰白		
8	土師器	台付甕	(18.2)	[2.4]	－	ＡＩＫ	10	普通	浅黄	外面煤付着	
9	土師器	台付甕	(17.0)	[2.5]	－	ＣＫ	20	普通	黒褐	外面煤付着	
10	土師器	台付甕	(20.0)	[5.0]	－	ＡＣＨＩＫ	20	良好	灰黄褐	外面煤付着	189-5
11	土師器	甕	(18.4)	[13.6]	－	ＡＣＥＨＩ	35	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№８	189-6
12	土師器	甕	(19.1)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
13	土師器	甕	(17.7)	[4.6]	－	ＡＢＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
14	土師器	甕	(19.9)	[2.4]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	灰褐	内外面煤付着	
15	土師器	甕	－	[3.1]	(7.8)	ＡＥＩＫ	20	普通	黒褐	外面煤付着	
16	土師器	甕	－	[3.0]	(6.0)	ＡＥＨＩＫ	20	普通	褐灰	内外面煤付着	
17	土師器	甑	－	[6.6]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	底部木葉痕　№２	
18	土師器	器台	－	[6.3]	－	ＡＥＨＩＫ	70	普通	浅黄橙	№３	
19	土師器	器台	－	[6.2]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	60	普通	にぶい黄橙	№４	
20	石製品	砥石	長さ[5.1]　幅[4.2]　厚さ3.7　重さ30.1ｇ　軽石								

向 7.10 ｍ、短軸方向 3.55 ｍ、深さ 0.30 ｍである。覆土は炭化物を含む黄褐色土、黄灰色土で、自然堆積である。貼床、壁周溝、掘り方は検出されなかった。

遺物はごく少なく、中層から出土している。器種は古墳時代前期の壺、小型壺、甕、台付甕、高坏、器台、鉢である。

１は単口縁壺の口縁部である。直線的に開き、端部が若干外反する。内外面横ナデ後ヘラ磨き。

２はＳ字状口縁台付甕である。口縁部下段には上段からの粘土がかけられた後に、全体に横ナデが施され、口縁部接合時に施された刷毛目がナデ消されている。頸部には口縁部横ナデの際の爪が入る。頸部の内面はヘラナデである。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目。肩部に胴部調整とは異なる５条１単位ほどの細い工具による横刷毛が２段施されている。内面は指ナデ後ヘラナデが施されている。多孔質で軽量である。

３は甕の底部である。外面、底面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。全体に２次被熱を受け、赤変している。焼成良く、堅緻。

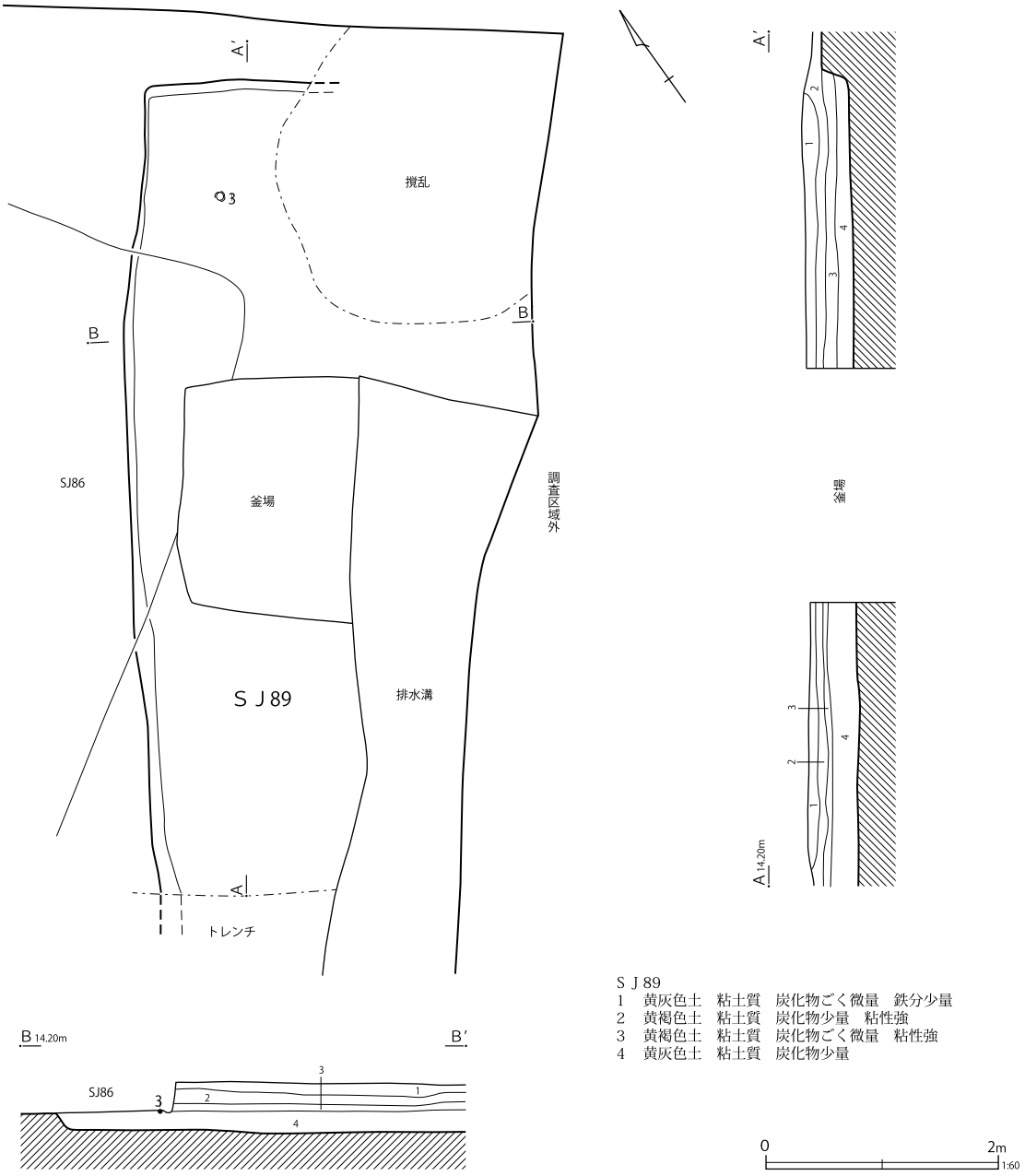
４はＳ字状口縁の鉢である。器肉が薄い。口縁部内外面横ナデ、体部は内外面ナデ調整である。

５は高坏の坏部下半から脚部中位までの破片である。坏部は下段に稜があり、内外面ヘラ磨き。接合はホゾ接合で、裾広がりの脚部になっている。透孔は３孔として図化したが、１か所の上半のみしか確認できない。外面全体はヘラ磨き。内面は上半に絞り目が残り、ナデが加えられている。下半は刷毛目である。全体に白色粒子が多い。

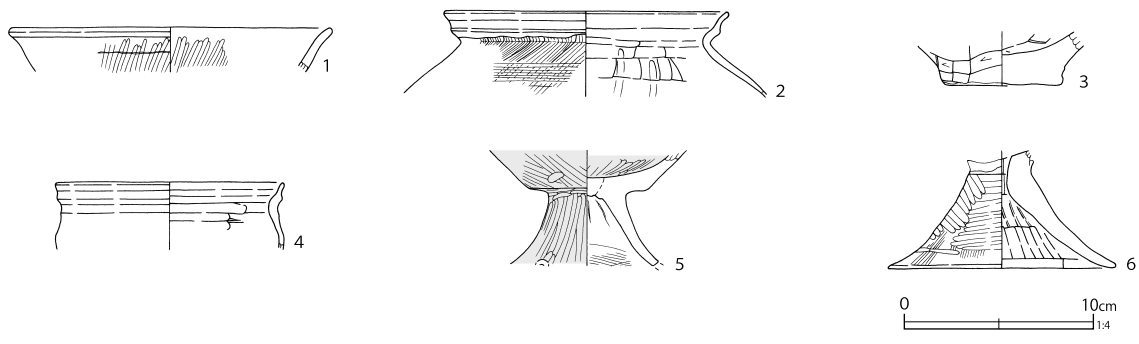
６は器台である。器受部最下端から脚部までの破片である。器受部は全体に剥離し、一部に胴が露出している。明瞭なホゾ接合である。穿孔は上位から行われ、孔の中はヘラケズリである。脚部は裾広がりである。透孔は開けられていない。外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラナデが施され、内外面とも端部には横ナデが加えられている。上半に絞り目が残る。

本住居跡は４世紀中葉、屋敷裏Ⅲ－４期である。

第 95 号住居跡（第 264・265 図）



第262図　第89号住居跡



第263図　第89号住居跡出土遺物

第68表　第89号住居跡出土遺物観察表(第263図)

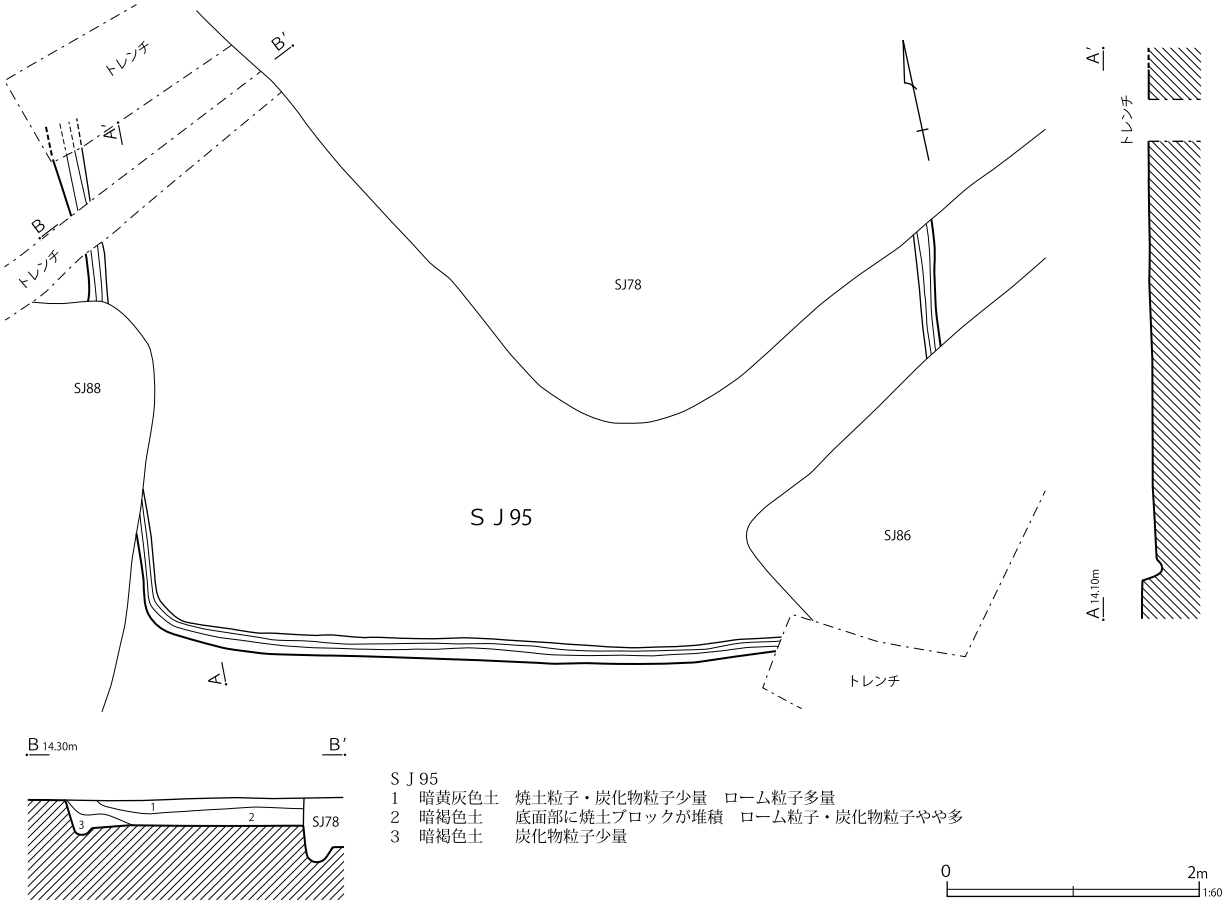
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.0)	[2.3]	－	ＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
2	土師器	台付甕	(15.0)	[4.4]	－	ＡＣＩＫ	20	普通	灰黄	内面煤付着	
3	土師器	甕	－	[2.8]	6.4	ＡＣＥＩＫ	80	普通	にぶい赤褐	№１	
4	土師器	鉢	(12.0)	[3.5]	－	ＣＩＫ	10	普通	灰黄	Ｓ字鉢　内面煤付着	225-2
5	土師器	高坏	－	[6.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	外面・坏部内面赤彩	
6	土師器	器台	－	[6.2]	12.0	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	橙		189-7

Ｄ区の中央、Ｏ・Ｐ－19グリッドに位置する。遺構の北側は削平されている。第78・86・88号住居跡と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。炉跡、柱穴等の施設が検出されておらず、主軸を特定する要素に欠ける。長軸方位はＮ－77°－Ｗである。

平面形は隅丸方形、もしくは隅丸長方形と推定される。各辺はやや丸みを帯びている。規模は、検出範囲で長軸方向6.70ｍ、短軸方向4.00ｍ、深さ0.25ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む暗褐色土、暗黄灰色土で、自然堆積である。床面全体に薄く炭化物層が分布していた。貼床、掘り方は検出されなかった。

壁周溝は幅0.10～0.20ｍ、深さ0.05ｍで、検出範囲では全周している。

遺物は多く、覆土中から出土した。器種は古墳時代前期の壺、甕、台付甕、高坏、坩、鉢で、弥生時代中期の壺の破片が混入している。
出土量は230点と多いが、実測可能な個体は少ない。



第264図　第95号住居跡

１は複合口縁の壺である。端部の外周に粘土が付加されて複合部が作出されている。端部は面を持ち、複合部下端は凹凸がある。内外面全体に刷毛目が施され、端部には横ナデが加えられている。

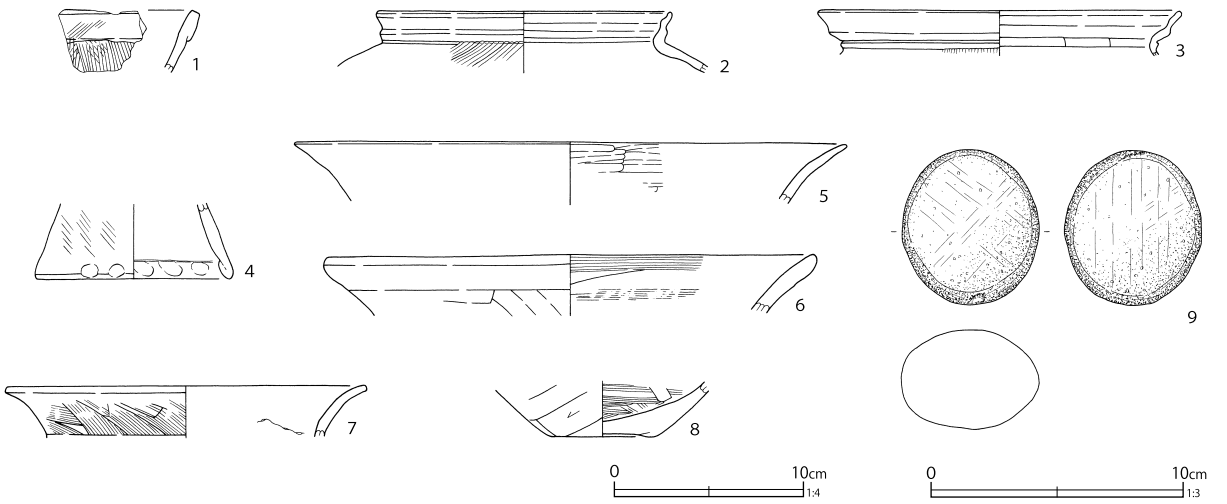
２～４はＳ字状口縁台付甕の口縁部である。２は２次被熱のため全体が赤変し、調整が不明瞭である。胴部外面はヘラケズリ後刷毛目。内面は風化のため不明である。３は口縁部上段からの粘土が頸部の下にまで及んでいる。口縁部全体横ナデ、頸部内面はヘラナデである。４は脚台部の下半である。全体に器肉が厚く、折り返された端部は丸みを持っている。全体に風化が進み、調整は不明瞭である。外面は斜め方向の刷毛目が等間隔にナデ消されている。内面は折り返し部に指頭痕が認められる。調整は不明である。

５～７は単口縁の甕の口縁部である。５・６は山陰系口縁等の特大サイズの甕である。５は大きく外反しながら開く。外面ヘラナデ後横ナデ、内面はヘラナデ後横ナデ、更にヘラ磨きが加えられている。６は端部が肥厚し、全体に厚めで重量感がある。内外面刷毛目後横ナデ。７は大きく外反して開く。端部に弱い面が作出されている。内外面刷毛目後横ナデ。２次被熱のため、内面は変色し、一部赤変している。

８は甕の底部である。薄い輪台状を呈する。風化著しく、調整不明稜。外面ヘラケズリ。底面はヘラナデと考えられるが不明瞭である。内面刷毛目。全体に２次被熱を受け、赤変している。

９は軽石製の砥石である。円礫をそのまま利用している。僅かに擦痕が見られる。

本住居跡は４世紀中葉、屋敷裏Ⅲ－４期である。



第265図　第95号住居跡出土遺物

第69表　第95号住居跡出土遺物観察表（第265図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	広口壺	－	[3.3]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	台付甕	(15.6)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐		
3	土師器	台付甕	(19.2)	[2.4]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	灰黄		
4	土師器	台付甕	－	[3.9]	(10.4)	ＡＣＨＩＫ	15	普通	灰黄褐		
5	土師器	甕	(29.2)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩ	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
6	土師器	甕	(26.0)	[3.0]	－	ＡＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
7	土師器	甕	(19.0)	[2.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内面煤付着	
8	土師器	甕	－	[2.9]	(5.7)	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	橙		
9	石製品	砥石	長さ6.2　幅5.4　厚さ4.1　重さ79.4ｇ　軽石								

（2）掘立柱建物跡

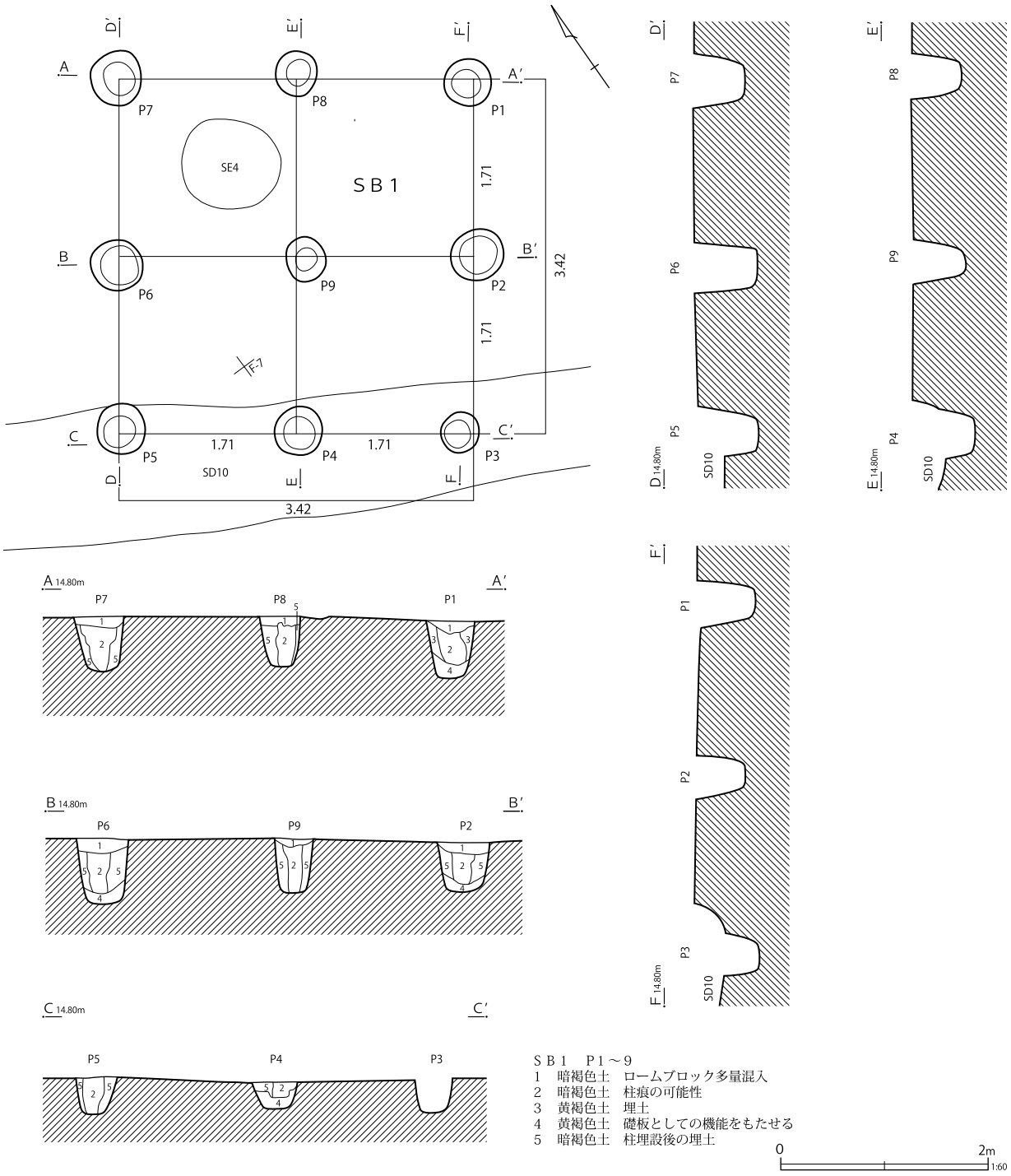
古墳時代の掘立柱建物跡は、前期１棟、後期１棟の計２棟を検出した。

第１号掘立柱建物跡（第 266 図）

A区の中央やや東寄り、E・F－6・7グリッドに位置する。周辺には同時期の掘立柱建物跡は認められない。重複する第 10 号溝跡より古く、第４号井戸跡より古い。

２×２間の総柱建物跡で、規模は桁行長、梁行長ともに 3.42 m、平面積は 11.69 ㎡である。主軸方位はN－35°－Wである。

柱間は桁行、梁行とも 1.71 mの等間隔で、柱



第266図　第1号掘立柱建物跡

筋も通っている。

個々の柱穴は円形で、径 0.38 ～ 0.50 m、深さは 0.48 ～ 0.62 mである。Ｐ３～５は第 10 号溝跡によって上部を削平されているため、現状では 0.25 ～ 0.35 mほどの深さであるが、柱穴底面のレベルは一致しており、本来は相当の深さがあったと考えられる。

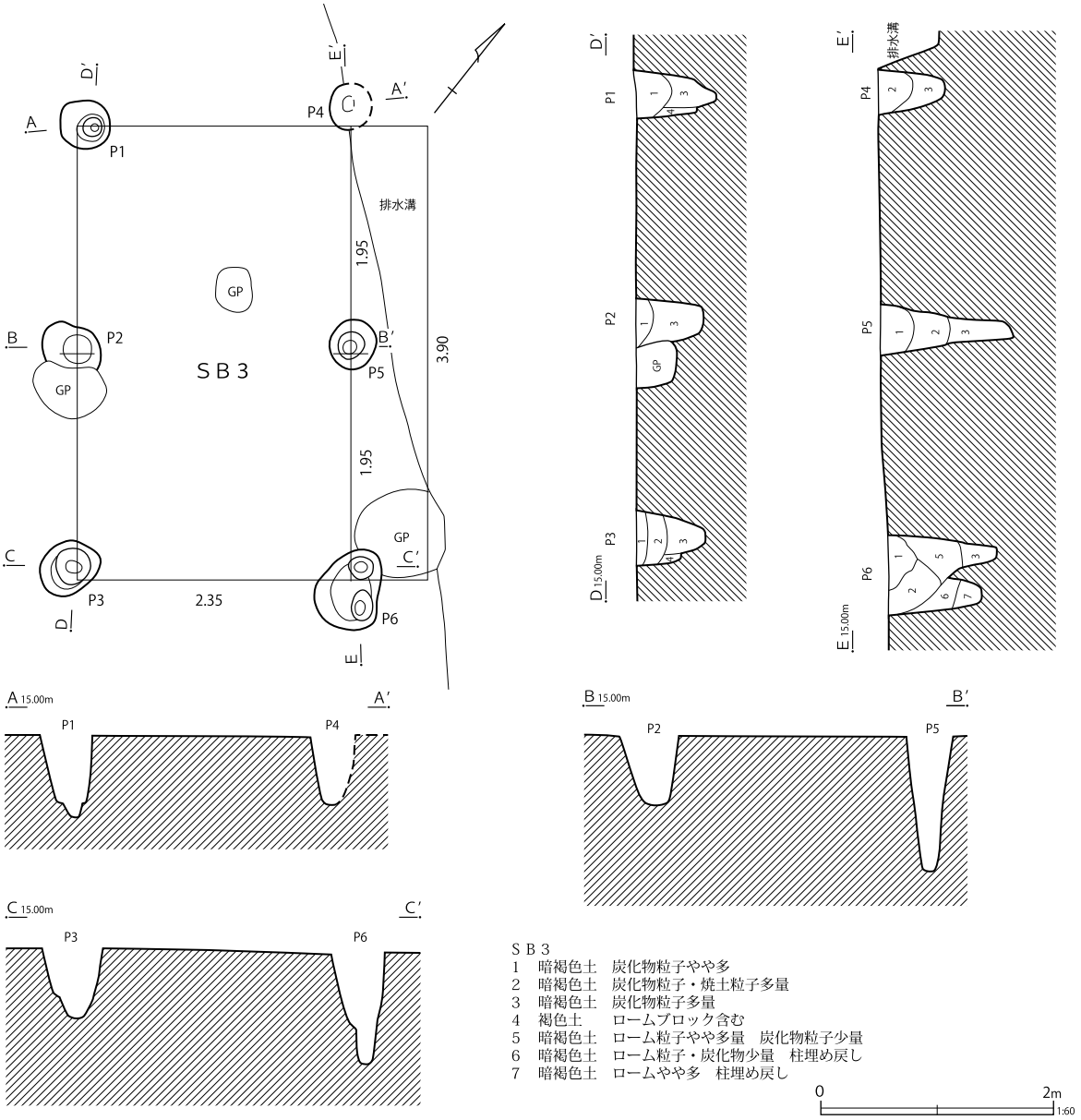
土層断面ではすべての柱穴に柱痕（２層）が認められた。Ｐ１・２・４・６では底面に暗黄褐色土（４層）が充填され、礎板としての機能があったと推定される。

遺物は少なく、古墳時代後期の土師器坏、甕の破片が出土したのみである。

第３号掘立柱建物跡（第 267・268 図）

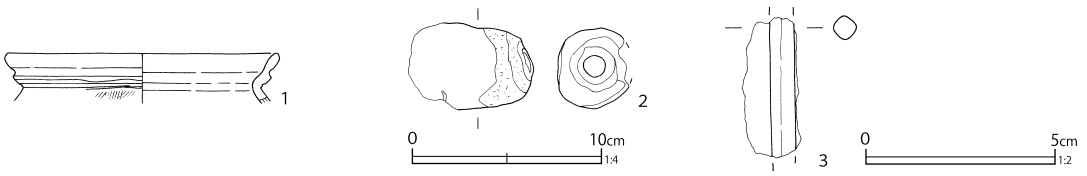
Ｃ区北西の、Ｉ・Ｊ－ 13・14 グリッドに位置する。Ｐ４は調査区域外にかかる。周辺には同時期の掘立柱建物跡は認められない。

現状では１×２間の側柱建物跡であるが、調査区東側に更に範囲が広がり、２×２間の総柱建物跡となる可能性がある。規模は桁行長3.90ｍ、梁



SB3
1　暗褐色土　炭化物粒子やや多
2　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子多量
3　暗褐色土　炭化物粒子多量
4　褐色土　　ロームブロック含む
5　暗褐色土　ローム粒子やや多量　炭化物粒子少量
6　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　柱埋め戻し
7　暗褐色土　ロームやや多　柱埋め戻し

第267図　第３号掘立柱建物跡



第268図　第３号掘立柱建物跡出土遺物

第70表　第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第268図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(14.4)	[2.6]	－	ＣＨＩＫ	10	普通	橙	SB3P1	
2	土製品	羽口	長さ[6.6]　幅4.6 内径1.2×1.5 外径(3.9)×4.2 重さ6.67ｇ			ＡＣＩ	80	普通	にぶい黄橙	SB3P1	225-3
3	鉄製品	棒状品	長さ[3.7]㎝　幅0.6㎝　厚さ0.6㎝　重さ9.4ｇ							SB3P4	222-2

行長2.35ｍ、平面積は9.16㎡である。主軸方位はＮ－40°－Ｗである。柱間は桁行1.95ｍ、梁行2.35ｍで、柱筋も通っている。

個々の柱穴は略円形で、径0.40～0.68ｍ、深さ0.58～1.15ｍである。Ｐ５・６は深さ0.95、1.15ｍと深く、その他は0.60ｍほどである。

土層断面からは、すべての柱穴で柱が抜き取られていたと考えられる（１・２層）。Ｐ６は重複関係があり、建て替えが行われたと考えられる。

遺物は、古墳時代前期の土師器壺、甕、Ｓ字状口縁台付甕の破片が出土した。また、Ｐ１・２・４・５からは羽口の破片が出土したが、周辺の古墳時代後期、平安時代の住居跡からも鉄滓、羽口の出土があり、それらの遺構からもたらされたと考えられる。

（3）土　壙

本調査では古墳時代の土壙が前期19基、後期９基、計28基が検出されてた。Ａ区に12基、Ｂ区に４基、Ｃ区に10基、Ｄ区に２基が分布し、Ａ区の７基、Ｂ区の２基が後期である。

各土壙の概要については、第71表に示した。軸方向は東西、南北軸に近い例が多く、規模は長軸0.8～1.3ｍ、短軸0.5～0.9ｍ、深さ0.3ｍ未満の例が多い。平面形は円形基調だか、第16号土壙は不定形八つ手状である。断面形は大部分が逆台形、鍋底形である。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土、炭化物、ローム土を含み、第10・13・14・19・42号が埋戻しと考えられるほかは自然堆積である。

以下、特に注意される例について各説する。

第16号土壙（第272・273図）

Ａ区の東端、Ｆ－８グリッドに位置する。第20号住居跡、第10号溝跡と重複し、双方より本遺構が古い。平面形は土壙が重複した八つ手状である。南北3.00ｍ、東西5.50ｍの範囲に広がっている。一つ一つの土壙は、長軸0.95～2.10ｍ、短軸0.65～1.30ｍ、深さ0.1～0.5ｍの不整な楕円形である。断面形はまちまちだが、壁は急角度に立ち上がっている。底面は凹凸がある。覆土は明褐色土を主体とし、暗褐色土ブロックが多く含まれている。埋戻しと考えられる。形態的には粘土採掘抗の可能性があるが、周辺から粘土を採取することができないことから、土取りを行った可能性を考えておきたい。

遺物は古墳時代前期・後期の土師器壺、甕が上～下層から出土している。

第45号土壙（第269図）

Ｃ区の西端、Ｉ・Ｊ－12グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかる。調査区内の平面

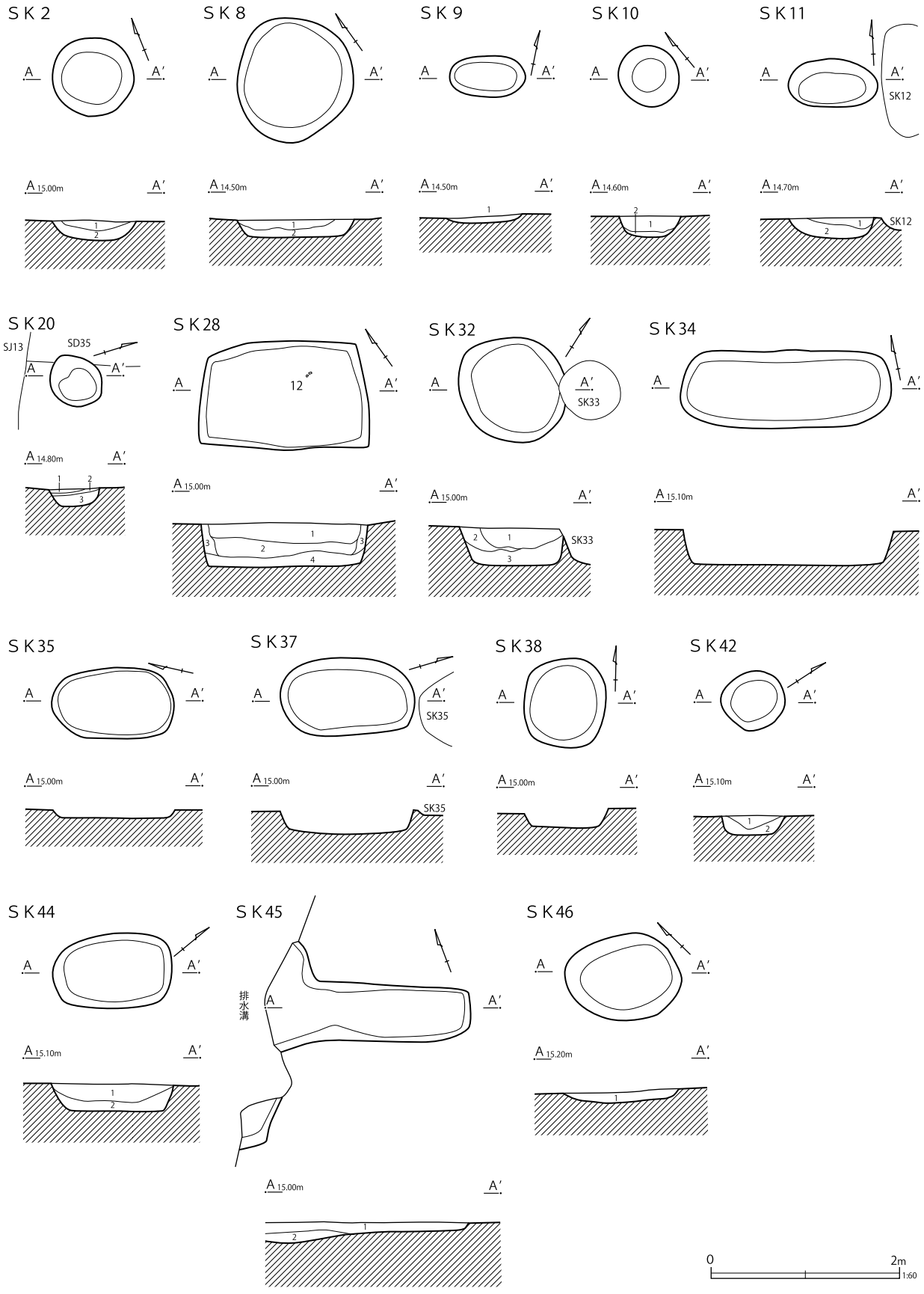
第71表　１次古墳土壙一覧表(第269～272図)　　単位:m

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
2号土壙	古前	Ｊ－11	－	－	0.85	―	0.21	鍋底形	円形	壺　甕　高坏　ロクロ土師	B区
3号土壙	古後	Ｉ・Ｊ－11	－	－	0.84	―	0.46	逆台形	円形	壺　甕	B区
4号土壙	古後	Ｈ－11	SJ7(新)	Ｎ－75°－Ｗ	1.10	0.70	0.08	皿形	楕円形		B区
7号土壙	古前	Ｈ－11	SJ34(旧)	－	0.60	－	0.14	皿形	不明	壺	B区
8号土壙	古前	Ｃ－4	－	Ｎ－54°－Ｗ	1.30	1.28	0.19	逆台形	円形	甕	A区
9号土壙	古前	Ｃ－4	－	Ｎ－79°－Ｅ	0.80	0.43	0.07	皿形	楕円形		A区
10号土壙	古前	Ｄ－5	－	－	0.64	―	0.22	逆台形	円形	壺　台付甕	A区　埋戻し
11号土壙	古前	Ｄ－5	－	Ｎ－83°－Ｗ	0.95	0.52	0.22	逆台形	楕円形	壺　甕　高坏	A区
12号土壙	古後	Ｄ－6	－	Ｎ－83°－Ｗ	1.20	0.55	0.13	鍋底形	楕円形	坏	A区
13号土壙	古後	Ｅ・Ｆ－6	－	－	0.80	―	0.15	逆台形	円形		A区　埋戻し
14号土壙	古後	Ｆ－6	－	Ｎ－77°－Ｗ	0.60	0.54	0.14	鍋底形	楕円形		A区　埋戻し
15号土壙	古後	Ｆ－6	－	－	0.63	0.60	0.23	鍋底形	円形		A区
16号土壙	古後	Ｆ－8	SJ20(新) SD10(新)	－	0.95～2.10	0.65～1.30	0.10～0.50	不明	不定形	壺　甕	A区
18号土壙	古後	Ｃ－5・6	－	－	0.82	0.80	0.22	逆台形	円形		A区
19号土壙	古後	Ｆ－9	SJ21(新)	Ｎ－74°－Ｅ	[1.60]	[0.66]	0.19	皿形	楕円形		A区　埋戻し
20号土壙	古前	Ｄ・Ｅ－7	SD35(旧)	Ｎ－58°－Ｅ	0.60	0.50	0.18	逆台形	楕円形	壺　甕	A区
28号土壙	古前	Ｊ・Ｋ－14・15	－	Ｎ－54°－Ｗ	1.72	1.15	0.45	箱形	長方形	甕　黒曜石　壺　土玉	C区
32号土壙	古前	Ｋ－14	SK33(新)	－	1.10		0.40	逆台形	円形	小壺　甕　台付甕	C区
34号土壙	古前	Ｊ－13	－	Ｎ－80°－Ｗ	2.20	0.83	0.36	逆台形	楕円形	台付甕　壺　羽口	C区
35号土壙	古前	Ｊ－13	－	Ｎ－16°－Ｗ	1.28	0.76	0.09	皿形	楕円形	甕　台付甕　ロクロ土師	C区
37号土壙	古前	Ｊ－13	－	Ｎ－15°－Ｅ	1.40	0.82	0.25	鍋底形	楕円形	壺　台付甕	C区
38号土壙	古前	Ｊ－12	－	－	0.95		0.19	逆台形	円形	台付甕　壺　甕　高坏	C区
42号土壙	古前	Ｊ－13	－	－	0.65		0.20	逆台形	円形	Ｓ字甕	C区　埋戻し
44号土壙	古前	Ｊ－12	－	Ｎ－38°－Ｅ	1.26	0.79	0.30	逆台形	隅丸長方形	壺　台付甕　甕　ロクロ土師器	C区
45号土壙	古前	Ｉ・Ｊ－12	－	Ｎ－68°－Ｗ	[2.15]	0.60	0.21	皿形	Ｔ字形		C区
46号土壙	古前	Ｊ－12	－	Ｎ－42°－Ｗ	1.20	0.90	0.10	皿形	円形	Ｓ字甕	C区
51号土壙	古前	Ｏ・Ｐ－17・18	SJ80(旧)	Ｎ－70°－Ｗ	4.66	0.86	0.20	逆台形	隅丸長方形	甕 平安土師器坏・甕	D区　２面
58号土壙	古前	Ｐ－17	－	Ｎ－47°－Ｗ	[2.16]	[0.62]	0.12	皿形	隅丸長方形	壺　甕　平安甕	D区　２面

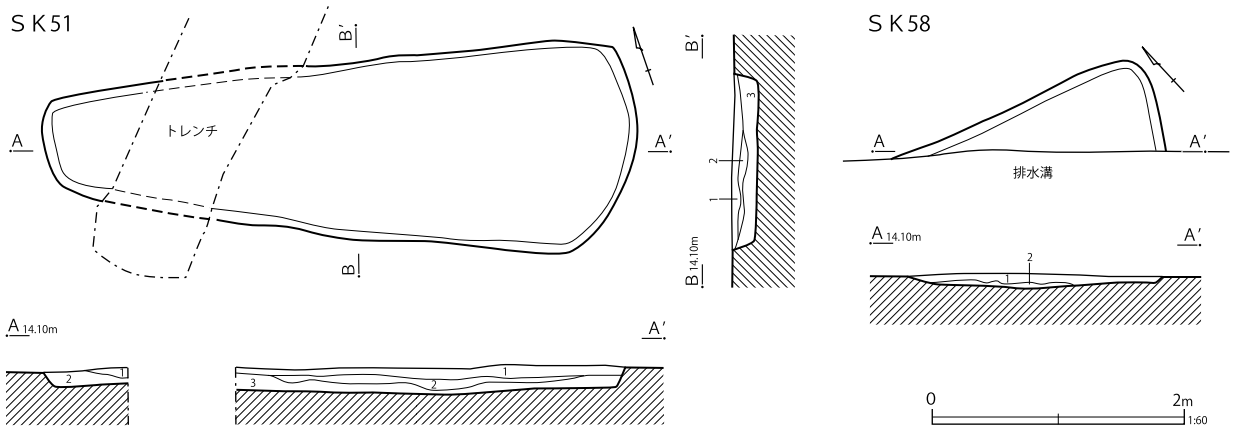
形はＴ字形を呈している。検出範囲の規模は、南北方向2.25ｍ、東西方向2.15ｍ、深さ0.10～0.20ｍである。各辺はやや直線的である。東西方向の軸方位はＮ－38°－Ｅである。断面形は皿形で、底面は西側が一段深くなっている。覆土は１層が炭化物、焼土、暗灰色粘土を含む灰褐色土、焼土、炭化物、灰を含む暗褐色土である。カマドの覆土の可能性があるが、調査区内の様相のみでは不明瞭である。遺物は出土していない。

第51号土壙（第270・273図）

Ｄ区中央の南西寄り、Ｏ・Ｐ－17・18グリッドに位置する。平安時代の遺物が出土しているが、２面からの検出であるため、古墳時代前期の遺構と判断した。第80号住居跡と重複し、それより新しい。長軸方向で最大4.66ｍ、短軸方向で最大1.70ｍ、深さ0.20ｍの三角形に近い隅丸長方形形である。主軸方位はＮ－70°－Ｗである。断面形は逆台形で、底面は凹凸があり、東側へ向かって低くなっている。覆土はグライ化しており、ローム土、炭化物を含む粘性の強い暗灰色土、暗青灰色土、黒褐色土で、自然堆積と考えられる。



第269図　第２・８～11・20・28・32・34・35・37・38・42・44～46号土壙



ＳＫ２
1　暗褐色土　砂質粘土・ローム少量　しまり粘性共にあり
2　暗褐色土　ロームブロック少量　粘性強い

ＳＫ８
1　暗褐色土　ロームブロック・灰白色粘質土混入　しまりあり
2　暗褐色土　ロームブロック・灰白色粘質土を密に多量に混入

ＳＫ９
1　暗褐色土　ロームブロック・灰白色粘質土を密に混入　粘性強い

ＳＫ10
1　暗褐色土　灰白色粘質土多量　酸化鉄・ロームブロック少量
　　しまりあり
2　暗褐色土　灰白色粘質土多量　酸化鉄・ロームブロック少量
　　しまり強い　１層に比して暗い

ＳＫ11
1　暗褐色土　炭化物・鉄分多量　地山に近い
2　暗褐色土　炭化物・鉄分多量　１層より明るい　地山に近い

ＳＫ20
1　褐色土　焼土・炭化物少量
2　褐色土　焼土・炭化物を混入（面としての分布はない）
3　褐色土　炭化物少量

ＳＫ21
1　暗褐色土　鉄分を密に焼土・炭化物を粗に少量混入　よくしまる
　　地山に近似
2　暗褐色土　鉄分を密に炭化物を少量混入　地山に極めて近似

ＳＫ28
1　暗褐色土　小粒ローム・褐色土（地山）少量
2　暗褐色土　小粒ローム・炭化物少量　１層に比して暗い
3　明褐色土　小粒ローム・褐色土ブロック多量　よくしまっている
4　暗褐色土　ソフトローム少量　粘性・しまり共に強い

ＳＫ32
1　暗褐色土　褐色粘質土ブロック・ソフトローム少量
2　明褐色土　褐色粘質土ブロック・鉄分多量
3　明褐色土　ソフトローム・小粒ロームブロック少量
　　２層に比して明るい

ＳＫ42
1　黒褐色土　炭化物粒子多量　焼土粒子少量
2　褐色土　暗褐色土ブロック多量

ＳＫ44
1　黒褐色土　炭化物・焼土少量　遺物含む　粘質土
2　暗褐色土　遺物含む　粘性強い

ＳＫ45
1　灰褐色土　粘質土　炭化物粒子・焼土粒子少量　暗灰色粘土多量
2　暗褐色土　焼土・炭化物・灰を含む　しまりに欠ける

ＳＫ46
1　暗褐色土　粘質土　炭化物粒子少量

ＳＫ51
1　暗灰色土　粘性強　炭化物粒子・ローム粒子少量
2　暗青灰色土　粘性強　炭化物少量　本来はロームブロック層か？
3　黒褐色土　粘性強　炭化物粒子・ローム粒子少量

ＳＫ58
1　暗灰色土　粘性強　ローム粒子・炭化物粒子少量
2　黒褐色土　粘性強　炭化物粒子・ローム粒子少量

第270図　第51･58号土壙

遺物は少量で、古墳時代前期の甕の破片が出土し、平安時代のロクロ土師器の坏、甕が混入している。

以下は、土壙出土遺物である。

第２号土壙出土遺物（第273図）

１は古墳時代前期の高坏である。透孔は４孔としたが、３孔の可能性がある。破片の状態で下位からスリット状に何らかの工具で切り込みが入れられている。透孔の部分も縦に長く、何らかの加工が施されている可能性がある。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。外面赤彩。２はロクロ土師器の坏口縁部である。土師質で淡赤橙色を呈する。

第３号土壙出土遺物（第273図）

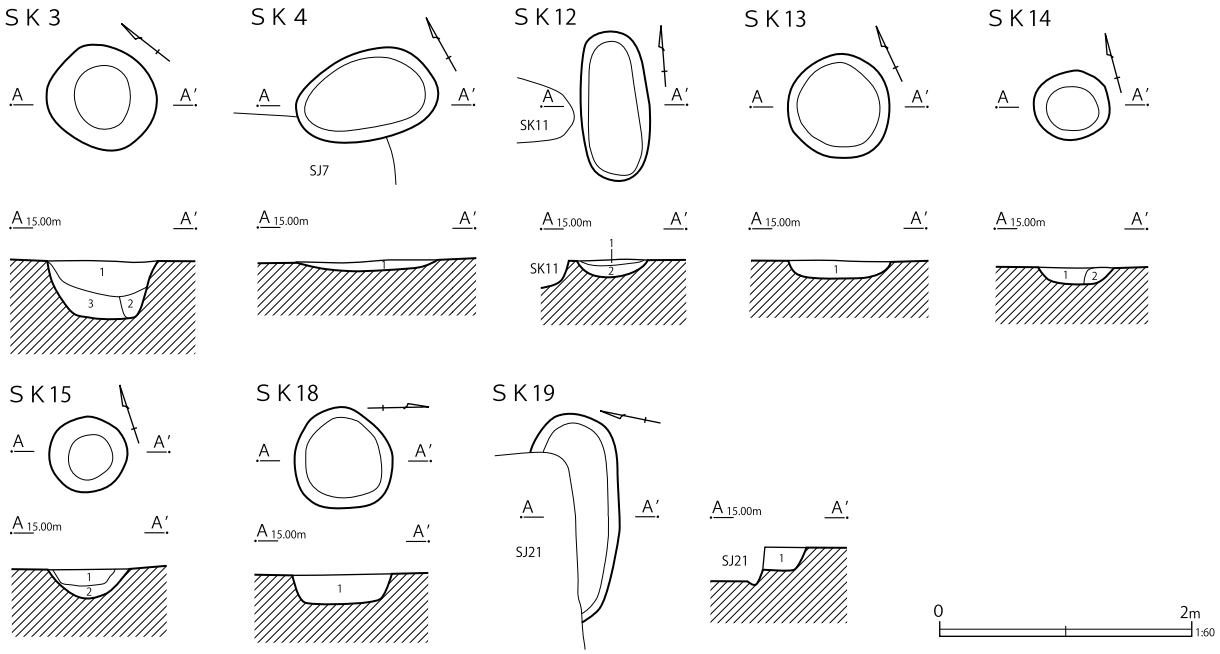
３は甕の底部である。薄いドーナツ状を呈する。外面ヘラケズリ、内面刷毛目、底面は平滑でナデが施されている。

第10号土壙出土遺物（第273図）

４は壺の頸部である。内外面赤彩される。５は台付甕の胴部と脚台部の接合部である。ホゾ接合に用いられる所謂臍である。上面ヘラナデ、下面は指頭痕が著しく、下からの強い押圧が窺える。

第12号土壙出土遺物（第273図）

６は坏身模倣坏である。内外面黒色処理が施さ



ＳＫ３
1　黒褐色土　ローム粒子（φ５㎜）少量　しまりあり
2　黒褐色土　ローム粒子（φ５㎜）多量　しまり強い
3　暗褐色土　大粒のロームブロック（φ１㎝）多量　しまり粘性強い

ＳＫ４
Ｉ　暗褐色土　小粒ロームブロック（φ１㎜）少量　よくしまる

ＳＫ12
1　暗褐色土　炭化物・鉄分少量　地山に近い
2　暗褐色土　炭化物・鉄分少量　１層に比して明るい　地山に近い

ＳＫ13
Ｉ　暗褐色土　明褐色土ブロック多量混在

ＳＫ14
1　暗褐色土　明褐色土ブロック多量
2　明褐色土

ＳＫ15
1　暗褐色土　白色粒子少量
2　暗褐色土　明褐色土ブロック含む

ＳＫ18
1　暗褐色土　酸化鉄をブロック状に含む　白色粒子微量

ＳＫ19
1　灰褐色土　シルト質　白色粘土ブロック含む

第271図　第３・４・12 ～ 15・18・19号土壙

れている。

第16号土壙出土遺物（第273図）

７・８は古墳時代前期の甕である。７はくの字口縁で頸部の屈曲が強い。口縁部は平滑で光沢があり、ヘラ磨きの可能性があるが、単位を認識できない。胴部外面は、ベースの刷毛目に一枚着せた状態でヘラナデが施されている。内面はヘラナデである。２次被熱により赤変。２は特異な形態の甕である。大型で、口縁部が短く直立する。大廓式の大甕の模倣品か。口縁部はヘラナデ後横ナデ、胴部は内外面ヘラナデが施されている。全体に煤けており、外面の一部は２次被熱により赤変している。３は古墳時代後期の甕である。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。２次被熱により内外面煤付着、赤変。

第28号土壙出土遺物（第273図）

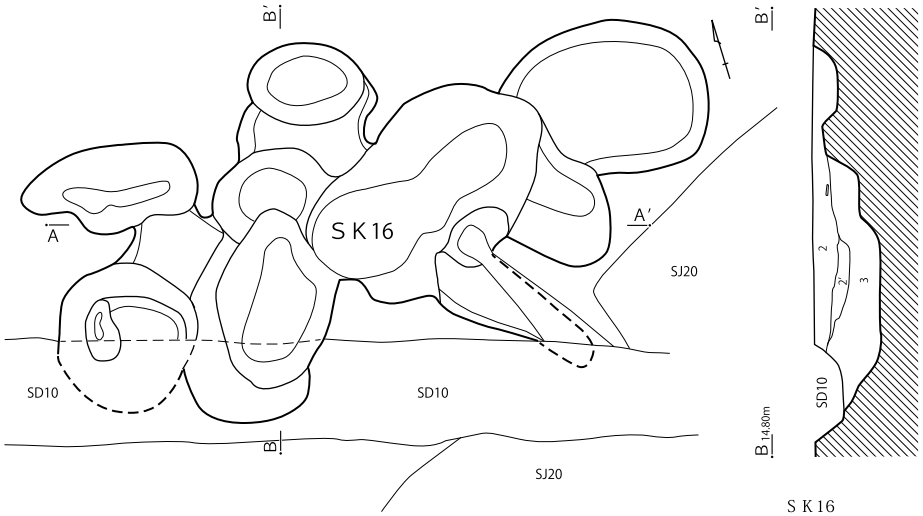
10は二重口縁壺の上段である。内外面ヘラナデ後横ナデが施されている。内面に黒班が見られる。11はＳ字状口縁台付甕の口縁部である。端部内面に若干の段がある。外面煤付着。12は土玉である。ナデ調整で、粘土の捩れが認められる。

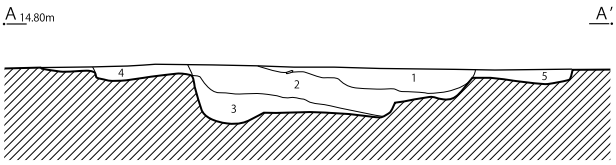
第34号土壙出土遺物（第273図）

13は甕の口縁部である。外面はベースの刷毛目後粘土を被せ、横ナデが施されている。内面刷毛目後横ナデ。14は羽口である。小破片のため判然としないが、小口径の羽口と考えられる。溶融のため調整は不明瞭である。内面は還元状態となり、発泡している。

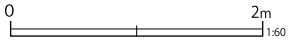
第38号土壙出土遺物（第273図）

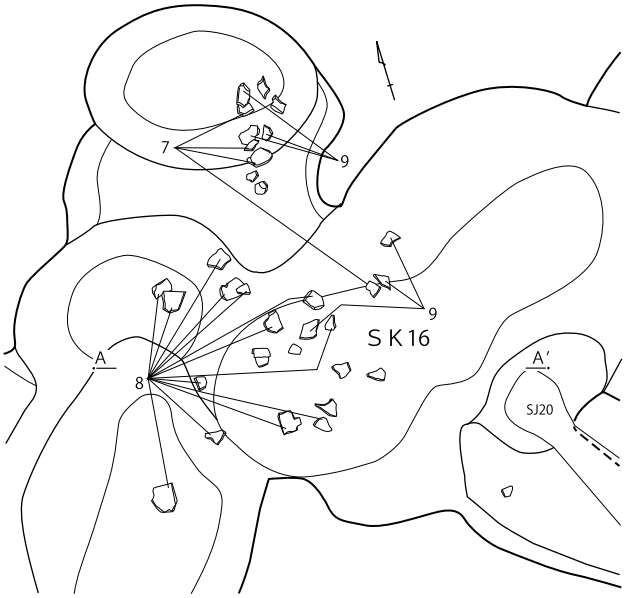
15は甕の口縁部である。端部は面を持つ。口縁部内外面刷毛目後横ナデ、胴部は外面が刷毛

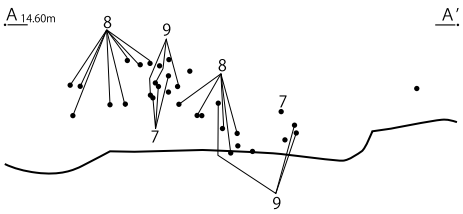


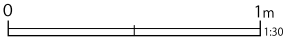


SK16
1　暗褐色土　ローム質の明褐色土を含む
2　明褐色土　暗褐色土との混土層（明褐色土主体）
2′明褐色土　暗褐色土との混土層（明褐色土主体）
3　暗褐色土　明褐色土ブロックやや多く含む
4　暗褐色土
5　暗褐色土

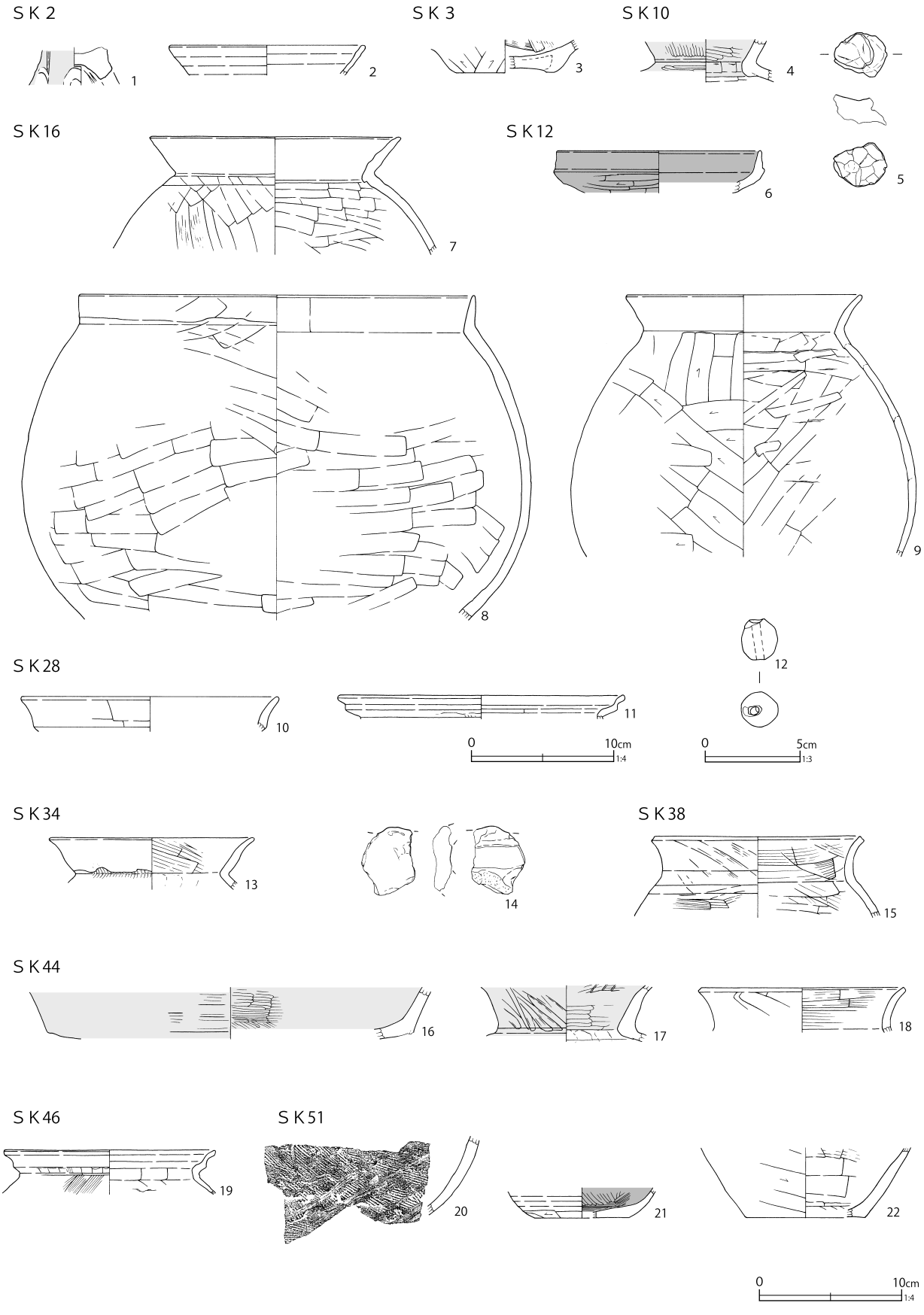








第272図　第16号土壙



第273図　1次古墳土壙出土遺物

第72表　１次古墳土壙出土遺物観察表（第273図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	－	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	SK２　J-11G　外面赤彩	194-3
2	ロクロ土師	坏	(13.2)	[2.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	SK２　J-11G	
3	土師器	甕	－	[2.3]	(6.8)	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	SK３　I-11G　内外面煤付着	
4	土師器	壺	－	[3.0]	－	ＡＥＩＫ	20	普通	にぶい橙	SK10　内外面赤彩	
5	土師器	台付甕	縦[3.1]　横[3.6] 厚さ[2.1] 重さ14.0ｇ			ＡＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	SK10	225-2
6	土師器	坏	(14.0)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	SK12　内外面黒色処理	
7	土師器	甕	(17.2)	[8.2]	－	ＡＣＩＫ	25	普通	明赤褐	SK16№２・７・８・31　内外面煤付着	
8	土師器	甕	(27.6)	[22.7]	－	ＡＣＥＨＩ	25	普通	橙	SK16№11～19・21・23・28・29 内外面煤付着	194-4
9	土師器	甕	(16.2)	[18.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	SK16№１・５・６・22・30・32　内外面煤付着	
10	土師器	壺	(18.0)	[2.4]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	浅黄橙	SK28	
11	土師器	台付甕	(20.0)	[1.7]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	暗灰黄	SK28　外面煤付着	
12	土製品	土玉	径1.9×1.9　高さ2.1 孔径0.7×0.5 重さ5.9ｇ			ＡＥＨＩ	100	普通	明赤褐	SK28№２	219-1
13	土師器	甕	(14.3)	[3.6]	－	ＡＣＥＨＫ	10	普通	浅黄橙	SK34　外面煤付着	
14	土製品	羽口	長さ[3.8]　幅[4.7] 重さ130ｇ			ＥＩ	10	普通	橙	SK34	225-2
15	土師器	甕	(14.8)	[5.7]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	明赤褐	SK38	
16	土師器	壺	－	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	SK44　内外面赤彩	225-2
17	土師器	壺	－	[4.0]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	淡黄	SK44　内外面赤彩	
18	土師器	甕	(14.4)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	赤褐	SK44　内面煤付着	
19	土師器	台付甕	(14.7)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	SK46　外面煤付着	
20	土師器	甕	－	[5.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄褐	SK51	
21	ロクロ土師	坏	－	[2.1]	(6.6)	ＡＣＥＩＫ	25	普通	にぶい褐	SK51　内面黒色処理	
22	土師器	甕	－	[4.9]	(8.4)	ＨＩＫ	10	普通	灰黄	SK51　外面煤付着	

目、内面はヘラナデが施されている。全体に暗い赤褐色を呈する。

第44号土壙出土遺物（第273図）

16は大型の有段口縁壺の口縁部である。北陸系と考えられる。前面にヘラ磨きが施され、赤彩されている。屈曲部分が欠けており、鍔状の突出があると考えられる。17は壺の頸部である。口縁部外面太いヘラ磨き状の強いヘラナデ、内面刷毛目後ヘラ磨きが施されている。頸部の内面は指オサエ後ナデが加えられている。18は甕の口縁部である。端部は面を持つ。口縁部内外面刷毛目後横ナデ。外面は２次被熱により赤変し、全体に暗い橙色を呈する。

第46号土壙出土遺物（第273図）

19はＳ字状口縁台付甕の口縁部である。外面下段は刷毛目後一枚着せた後にナデを加えている。

第51号土壙出土遺物（第273図）

20は古墳時代前期の土師器甕の胴部下半である。外面刷毛目後太い工具によるヘラ磨き、内面ヘラナデが施されている。

21は平安時代のロクロ土師器坏底部である。利根川流域の粘土が用いられ、内面が黒色処理されている。底部外周はヘラケズリ、底面は手持ちヘラケズリ、内面はヘラ磨きが施されている。22は上総型の甕である。外面ヘラケズリ、内面刷毛目後ヘラナデ、見込み部分は強いヘラナデが施されている。灰黄色を呈し、やや多孔質である。

（4）井戸跡

古墳時代の井戸跡はA～C区にかけて、間隔をあけて分布している。第６号井戸跡が前期と考えられる他は後期に帰属する。

第１号井戸跡（第274図）

B区の中央、H－10グリッドに位置する。長径1.80ｍ、短径1.49ｍの不整楕円形で、断面形は上段が漏斗形、下段が長径1.15ｍ、短径0.75ｍの円筒形である。確認面から1.0ｍ程度まで掘削したが底面には達せず、さらに１ｍのピンポールを刺し込んだが底面には至らなかった。安全上の配慮から、この時点で下層の調査を断念した。覆土は、ロームブロック、褐色土ブロックを含む明褐色土、暗褐色土で、埋め戻されている。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器坏が出土した。古墳時代前期の甕、高坏、弥生時代の壺の破片が混入している。

第２号井戸跡（第274・275図）

A区の東側、E・F－７グリッドに位置する。長径0.75ｍ、短径0.55ｍの略円形で、断面形は円筒形である。覆土は暗黄褐色土を多く含む褐色土、暗褐色土、黄褐色土で、自然堆積である。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器坏、甕が出土した。

１は有段口縁坏である。器壁がやや厚く、内面が黒色処理されている。

第３号井戸跡（第274・275図）

A区の東側、E－６・７グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は漏斗形である。上端径1.14ｍ、底径0.57ｍ、深さ1.02ｍである。底面は平坦である。深さから溜井の可能性も考えられる。覆土は焼土、炭化物、明褐色土ブロックを含む褐色土、暗褐色土で、埋め戻されている。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器坏、甕が出土した。２は坏身模倣坏である。外面に大きな黒斑が見られる。胎土は精選され、きめ細かい。３は有段口縁坏である。内外面黒色処理が施されている。

第６号井戸跡（第274・275図）

C区の中央、J－14グリッドに位置する。径0.82ｍの不整円形で、断面形は上段が漏斗形、下段が径0.40ｍの円筒形で、径がかなり小さい印象を受ける。覆土は炭化物、ロームブロックを含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられるが、第２層は炭化物、ロームブロックを多く含み、埋め戻しの可能性がある。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の台付甕が出土した。６はS字状口縁台付甕である。風化が進んでいる。古墳時代前期である。

第７号井戸跡（第274図）

B区の西側、H－９グリッドに位置する。径1.14ｍの略円形で、断面形は上段が漏斗形、下段が径0.85ｍの円筒形である。確認面から0.8ｍ程度まで掘削したが底面には達せず、さらに１ｍのピンポールを刺し込んだが底面には至らなかった。安全上の配慮から、この時点で下層の調査を断念した。覆土は崩落のため確認できなかった。

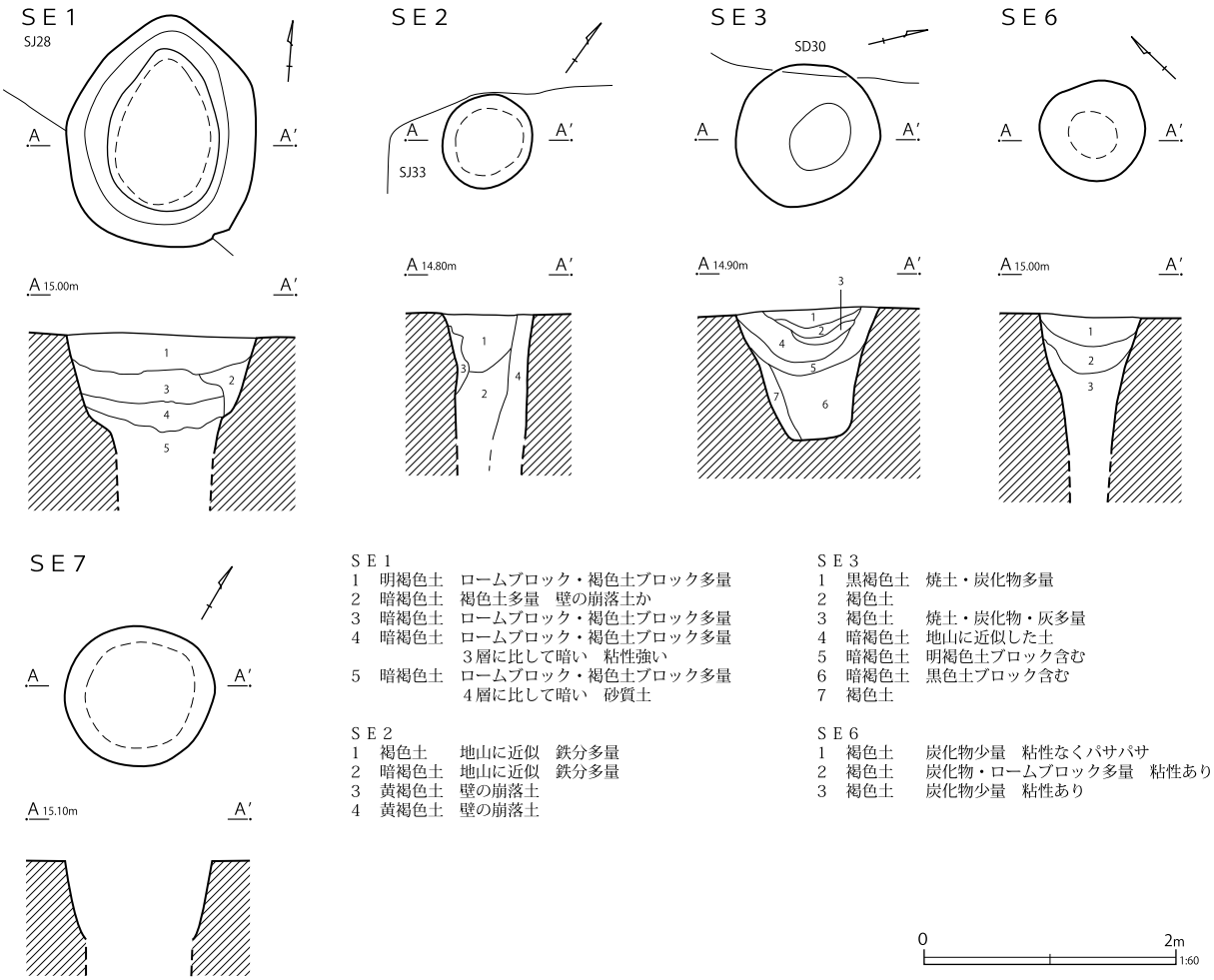
遺物は出土していないが、周辺に古墳時代後期の遺構が密集しており、それらと重複しないことから同時期と考えられる。

（5）溝跡

古墳時代の溝跡は第６・８～10・12～20・22～24・27・29・34・36号溝跡である。この内13～20・27・36号溝跡は第１号畠跡、第22～24号溝跡が第２号畠跡になる。溝跡はいずれもA・B区のみに分布している。

第６号溝跡（第276・282図）

B区の北側、G－９～11、H－11グリッドに位置する。調査区の北端を切り取る形で、調査区外の東西に延びている。A区の第29号溝跡に接続する可能性がある。第29・32・39号住居跡と重複し、いずれよりも新しい。軸方位はN―78°―Wである。検出された長さは24.30mにと



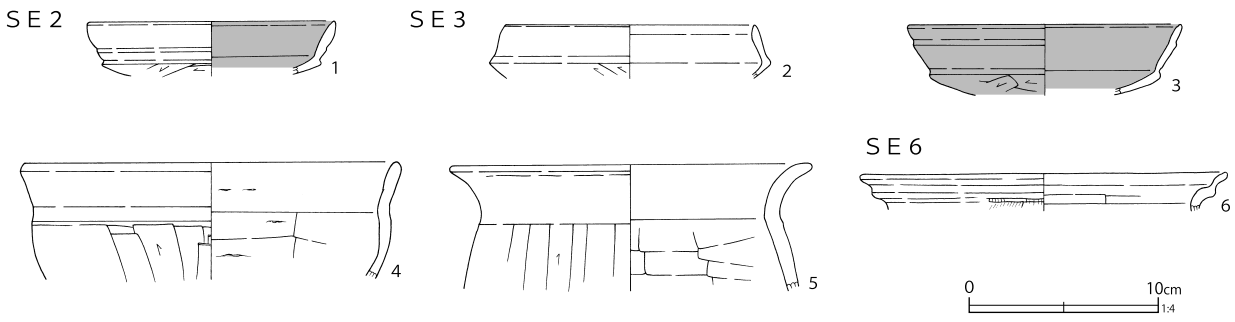
ＳＥ１
1　明褐色土　ロームブロック・褐色土ブロック多量
2　暗褐色土　褐色土多量　壁の崩落土か
3　暗褐色土　ロームブロック・褐色土ブロック多量
4　暗褐色土　ロームブロック・褐色土ブロック多量
　　３層に比して暗い　粘性強い
5　暗褐色土　ロームブロック・褐色土ブロック多量
　　４層に比して暗い　砂質土

ＳＥ２
1　褐色土　　地山に近似　鉄分多量
2　暗褐色土　地山に近似　鉄分多量
3　黄褐色土　壁の崩落土
4　黄褐色土　壁の崩落土

ＳＥ３
1　黒褐色土　焼土・炭化物多量
2　褐色土
3　褐色土　　焼土・炭化物・灰多量
4　暗褐色土　地山に近似した土
5　暗褐色土　明褐色土ブロック含む
6　暗褐色土　黒色土ブロック含む
7　褐色土

ＳＥ６
1　褐色土　　炭化物少量　粘性なくパサパサ
2　褐色土　　炭化物・ロームブロック多量　粘性あり
3　褐色土　　炭化物少量　粘性あり

第274図　第１～３・６・７号井戸跡



第275図　第２・３・６号井戸跡出土遺物

第73表　第２・３・６号井戸跡出土遺物観察表（第275図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	[2.8]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	ＳＥ２　Ｅ-７Ｇ　内面黒色処理	
2	土師器	坏	(13.0)	[2.8]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	明赤褐	ＳＥ３　坏身模倣坏　外面黒斑あり	
3	土師器	坏	(14.2)	[3.7]	－	ＡＩＫ	15	普通	にぶい褐	ＳＥ３　有段口縁坏　内外黒色処理	
4	土師器	鉢	(19.5)	[6.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	ＳＥ３　外面煤付着	
5	土師器	甕	(18.7)	[6.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	明赤褐	ＳＥ３　内外面煤付着	
6	土師器	台付甕	(19.1)	[2.1]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	ＳＥ６　外面煤付着	

どまる。幅0.65～1.20ｍ、深さは0.15～0.30ｍである。断面形は鍋底形で、底面は平坦で、中央が高く、東西が低くなっていた。覆土はローム土、灰白色粘土、褐色土を含む暗褐色土、明褐色土で、埋戻しの可能性がある。

遺物はやや多く、古墳時代前期の壺、台付甕、後期の須恵器甕、土師器坏、壺が出土した。前期と後期の土器はほぼ半々である。

１・２は古墳時代後期のものである。１は坏身模倣坏で、低平な器形と考えられる。２は有段口縁坏で、風化が進んでいる。

３～５は古墳時代前期のものである。３は壺の口縁部である。端部は面を持ち、下端が突出している。内外面とも幅の狭い工具によるヘラナデが施されている。外面はヘラ磨き状である。

４は受口状口縁の台付甕である。頸部内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。

５はＳ字状口縁台付甕の脚台部である。箱形で端部は折り返されている。胴部と脚台部は刷毛目工具が異なっており、胴部の刷毛目後粘土を盛り付けて接合し、更に刷毛目を施した工程が窺える。接合部には砂を混ぜた粘土が充填されている。

第８号溝跡（第277・282図）

Ｂ区の西側、Ｈ－９グリッドに位置する。重複する第６号住居跡より新しい。東端は削平されており、検出できなかった。平面形はほぼ直線的で、軸方位はＮ－67°－Ｗである。第９号溝とほぼ平行する。検出された長さは4.95ｍにとどまり、幅0.29～0.47ｍ、深さは0.05～0.21ｍである。断面形は鍋底形で、底面は平坦。中央が低く、東西がやや高くなっていた。覆土はローム土、灰白色粘土を含む暗褐色土で自然堆積である。

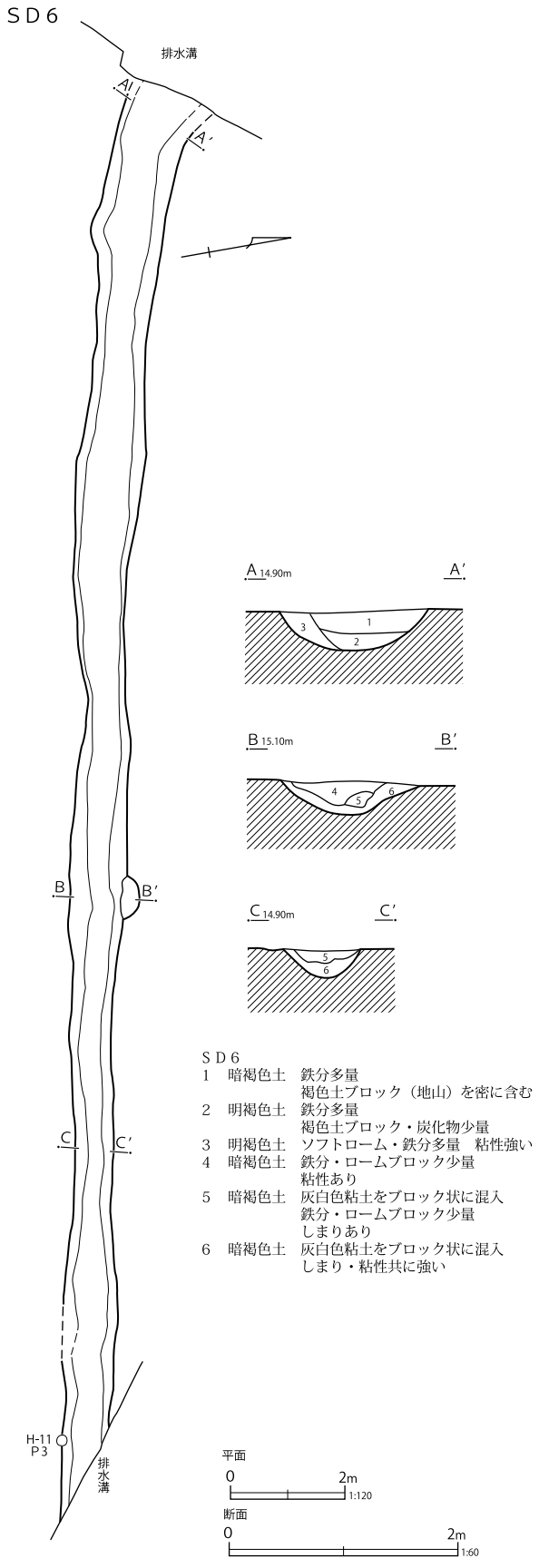
遺物はやや多く、古墳時代前期の壺、台付甕、甕の破片が出土した。

６は特大サイズの甕の口縁部である。口径30cmを超え、外面刷毛目後横ナデ、内面刷毛目後ヘラ磨きが施されている。７は底部である。外面刷毛目後ナデ、内面ヘラナデ。底面はヘラケズリ後ナデが施されている。

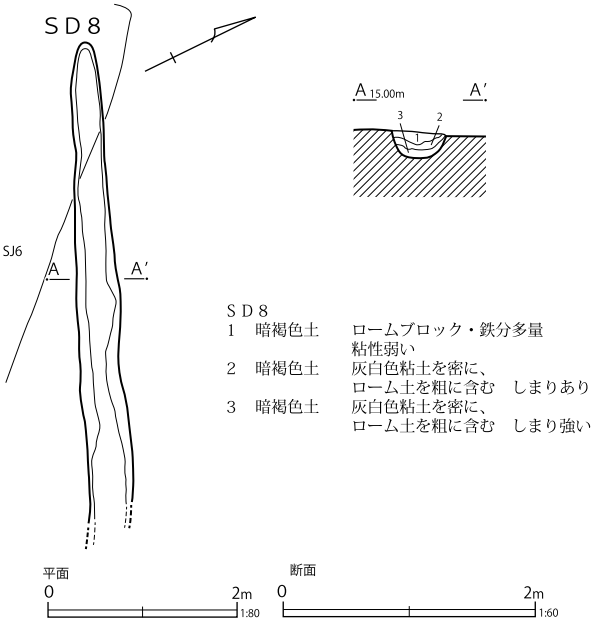
遺物は古墳時代前期のものみだが、重複関係から後期に帰属すると考えられる。

第74表　１次古墳溝跡一覧表（第276～278・280・281・283図）　　単位：m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
６号溝	古後	Ｇ－9～11 Ｈ－11	SJ29・32・ 39（旧）	Ｎ－78°－Ｗ	[24.30]	0.66～ 1.22	0.13～ 0.30	鍋底形	前期と後期の土器半々　Ｓ字甕　後期坏身　壺　須恵器甕	Ｂ区
８号溝	古後	Ｈ－39	―	Ｎ－67°－Ｅ	(4.95)	0.29～ 0.47	0.05～ 0.21	鍋底形	壺　甕	Ｂ区
９号溝	古後	Ｇ－10	―	Ｎ－66°－Ｗ	7.47	0.37～ 0.45	0.02～ 0.05	皿形		Ｂ区
10号溝	古後	Ｃ・Ｄ・Ｅ－5 Ｅ・Ｆ－6 Ｆ－7～9 Ｇ－10	SJ12・18・ 20・22（旧） ＳＢ１（旧） SK16（旧）	Ｎ－66°－Ｗ	(38.50)	0.76～ 2.38	0.22～ 0.39	逆台形 鍋底形 皿形	壺　甕　坏　須恵器　蓋	Ａ区～Ｂ区へ続く
12号溝	古後	Ｈ－9	SJ6（旧）	Ｎ－40°－Ｅ	[4.15]	0.32～ 0.35	0.05～ 0.10	皿形	後期坏　甕　近世瓦　前期壺	Ｂ区
29号溝	古後	Ｆ－5・6・7 Ｇ－7・8	SD32（新） 1号円形（旧） SD34（旧）	Ｎ－69°－Ｗ	[33.52]	0.41～ 1.31	0.17～ 0.41	鍋底形	古墳後期坏　甕　須恵器　高坏　大型器台	Ａ区
34号溝	古後	Ｇ－8	SD29（新）	Ｎ－85°－Ｗ	[2.28]	0.28～ 0.34	0.12～ 0.15	逆台形		Ａ区



第276図　第６号溝跡



第277図　第８号溝跡

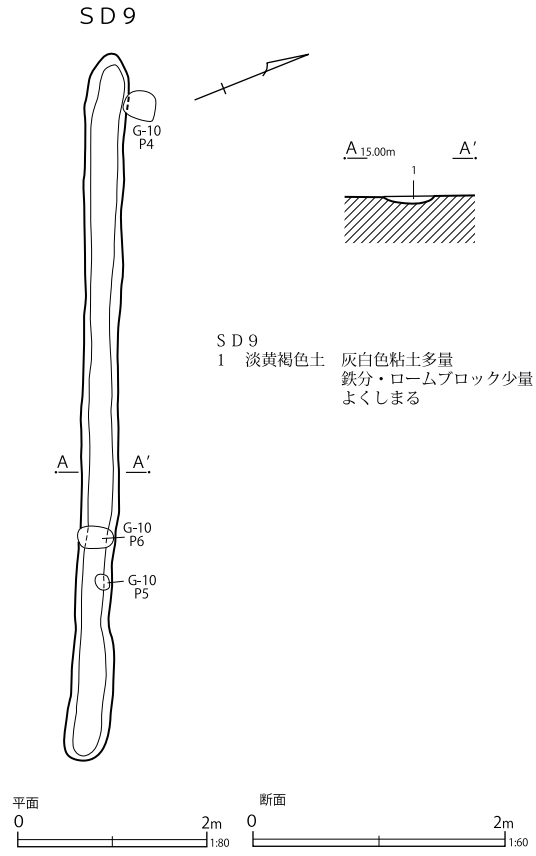
第９号溝跡（第278図）

Ｂ区の北側、Ｇ－10グリッドに位置する。平面形はほぼ直線的である。軸方位はＮ－66°－Ｗで、第８号溝跡とほぼ平行である。長さ7.47ｍ、幅0.37～0.45ｍ、深さはごく浅く0.02～0.05ｍである。断面形は皿形、底面は平坦で、ほとんど高低差がない。覆土はローム土、灰白色粘土を含む淡黄褐色土の単層である。

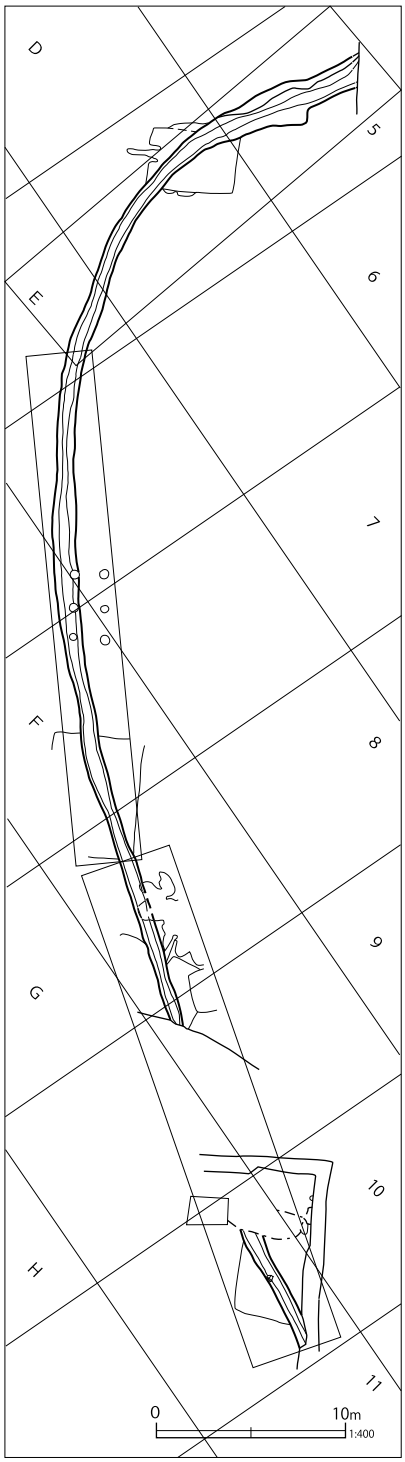
遺物は出土していないが、検出面が他の古墳時代の溝跡と共通し、覆土も同様であることから、古墳時代に帰属すると考えられる。

第10号溝跡（第279・280・282図）

Ａ～Ｂ区のＣ～Ｅ－５、Ｅ・Ｆ－６、Ｆ－７～９グリッドにかけて、調査区の北側へ向かって弧を描き、調査区域外の北側、東側に延びている。表揚出の多くの遺構と重複するが、いずれの遺構よりも新しい。平面形は北側でやや幅の広い部分がある他は、ほぼ直線的である。軸方位はＮ－66°－Ｗから大きく北へ曲がる。検出できた長さは38.50ｍに留まる。Ａ区北側に幅2.38ｍの幅広の部分があるが、全体的にはおおよそ幅1.0～1.2ｍである。幅は東へ行くほど狭くなり、Ａ区



第278図　第９号溝跡

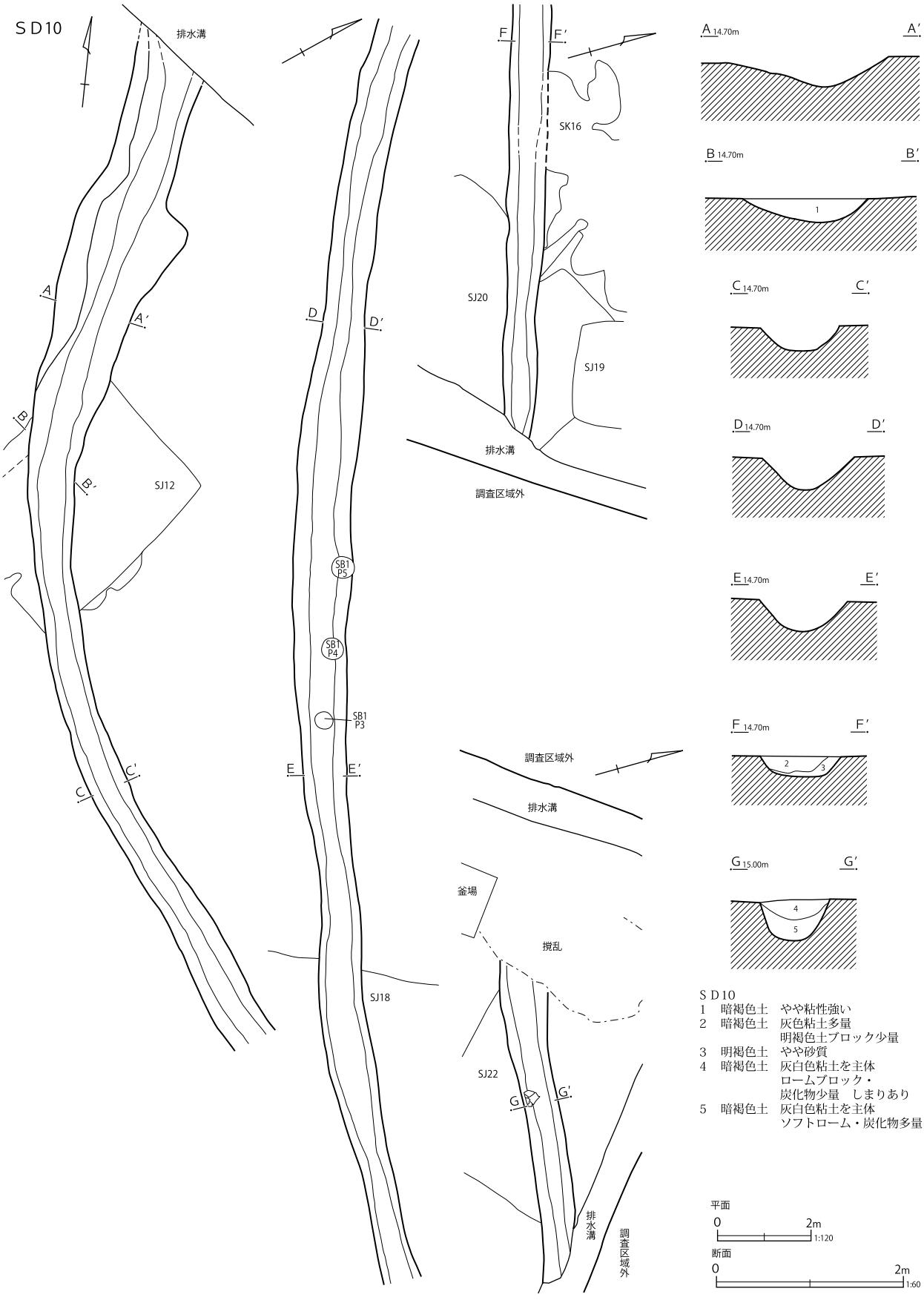


第279図　第10号溝跡全景

東端、Ｂ区では幅0.6～0.8ｍになる。深さは0.22～0.39ｍで、断面形は部位ごとに異なり、皿形、鍋底形、逆台形になっていた。底面は平坦で、Ｂ区へ向かって高くなっていた。覆土はローム土、灰白色粘土、炭化物を含む明褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物は多く、古墳時代後期の須恵器甑、坏、坏蓋、土師器壺、甕、坏の破片が出土した。他に古墳時代前期の壺、甕が混入している。８が須恵器、他は土師器である。８は須恵器の坏蓋である。端部は若干外反し、面を持つ。色調は赤みの強い暗褐色を呈する。南比企産か。10は小型壺の口縁部で、外面上段に段差があり、甑模倣と考えられる。

11～13は古墳時代前期の甕の口縁部である。11は大型の甕である。全体に黒色を呈する。内外面とも刷毛目後横ナデが施されている。12は外反して開くもので、端部に広い面を持つ。外面刷毛目後横ナデ、内面ヘラナデ後横ナデが施されている。13は小型の甕である。口縁部の接合に不具合があり、何度も刷毛目調整を繰り返している。ほぼ完結した擬口縁状になっている頸部に、



ＳＤ10
1　暗褐色土　やや粘性強い
2　暗褐色土　灰色粘土多量
　　明褐色土ブロック少量
3　明褐色土　やや砂質
4　暗褐色土　灰白色粘土を主体
　　ロームブロック・
　　炭化物少量　しまりあり
5　暗褐色土　灰白色粘土を主体
　　ソフトローム・炭化物多量

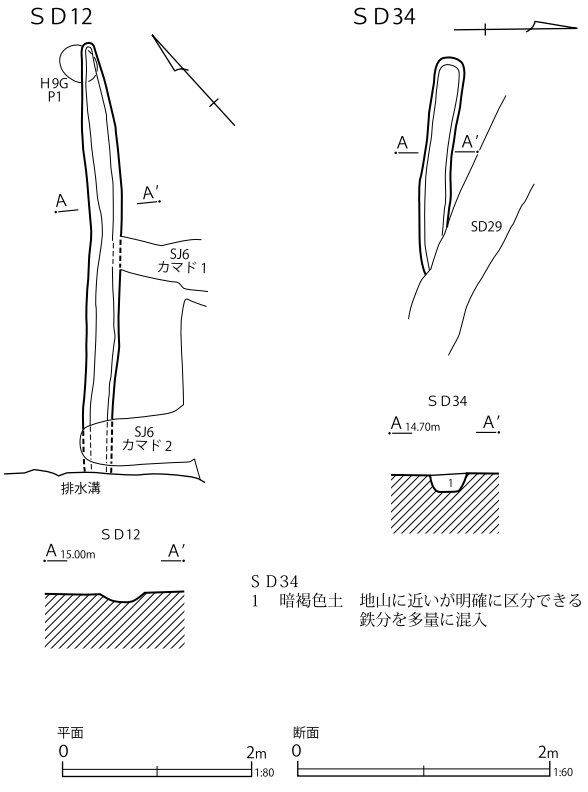
第280図　第10号溝跡

一段粘土帯が乗せられ粘土が盛り付けられて接合されている。胴部は内外面とも刷毛目後ヘラケズリが施されている。胎土に大粒の酸化鉄を含む。

第12号溝跡（第281・282図）

B区の西端、H－９グリッドに位置し、南側は調査区域外に延びる。第６号住居跡と重複し、それより新しい。平面形はほぼ直線的である。軸方位はN－40°－Eである。調査区内の長さ4.15ｍ、幅0.30～0.35ｍ、深さはごく浅く0.05～0.10ｍである。断面形は皿形で、底面は平坦で、ほとんど高低差がない。覆土は確認できなかった。

遺物は多く、古墳時代後期の土師器甕、坏の破片が出土した。古墳時代前期の小型壺、近世の瓦が混入している。14・15は古墳時代後期の坏である。いずれも内外面黒色処理されている。14は坏身模倣坏、15は坏蓋模倣坏である。16は古墳時代前期の直口縁の小型壺である。所謂細頸壺になる可能性がある。内外面ヘラ磨き後赤彩されている。17は鉄製容器の破片である。口縁端部



第281図　第12･34号溝跡

は内側に折り返され、玉縁状になっている。本遺構に伴うものか不明である。

第29号溝跡（第283・284図）

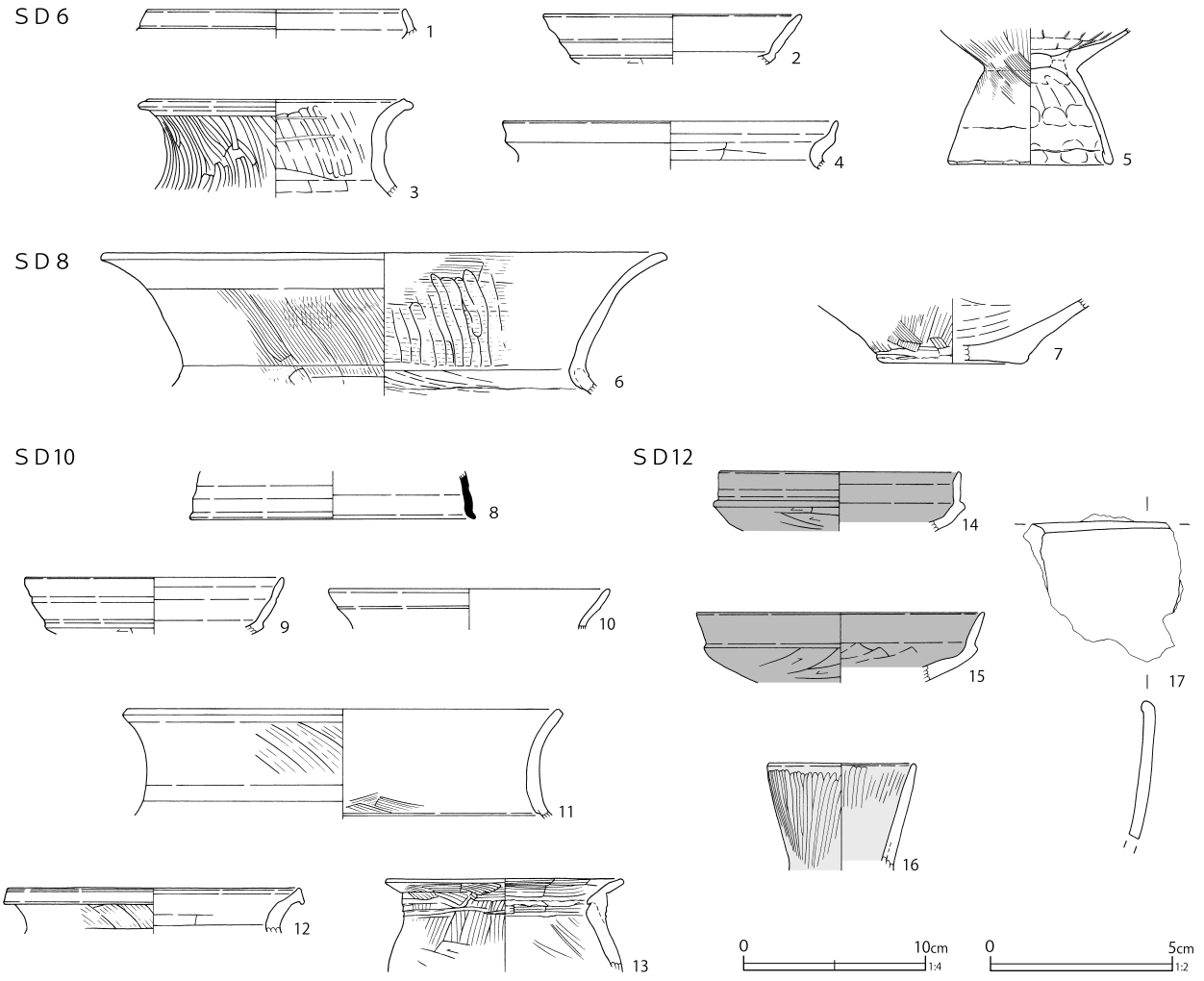
A区のF－５～７、G－７・８グリッドにかけて検出された。東側の延長線上に第６号溝跡があり、あるいは連続する可能性が考えられる。重複する古墳時代後期の第１号円形周溝状遺構、第34号溝跡より新しく、近世の第32号溝跡より古い。調査区内ではほぼ直線的で、東側で若干北へ曲がる。東西は調査区域外に延びる。軸方位はN－69°－Wである。検出できた長さは33.52ｍに留まる。南側の法面際は1.30ｍと幅広だが、東側に向かって徐々に細くなり、西側法面際では0.40ｍほどになっている。全体的にはおおよそ幅0.7～1.0ｍである。深さは0.15～0.40ｍ、底面は平坦で、東側へ向かって低くなっていた。断面形は部位ごとに異なり、西側は薬研に近い部分があるが、東側は鍋底形である。覆土は火山灰の可能性がある白色微粒子、灰色粘土、明褐色土ブロックを含む明褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物は多く遺構西側の幅広の部分に集中する傾向が見られた。上下層いずれからも出土している。

器種は古墳時代後期の須恵器大型器台、小型甕、坏、高坏、土師器坏、壺、甕である。古墳時代前期の高坏が混入している。

１・２は古墳時代後期の須恵器である。太田金山窯産。粘土が緻密で重量感がある。１は大型器台である。部分的だが、同一個体と考えられる。上部には円形の、下位にはスリット状の透孔が開けられている。外面は突帯で区画され、横位の波状文が充填されている。２は長脚２段高坏と考えられる。坏部は底部回転ヘラケズリ。筋状の細い透孔が３箇所開けられている。

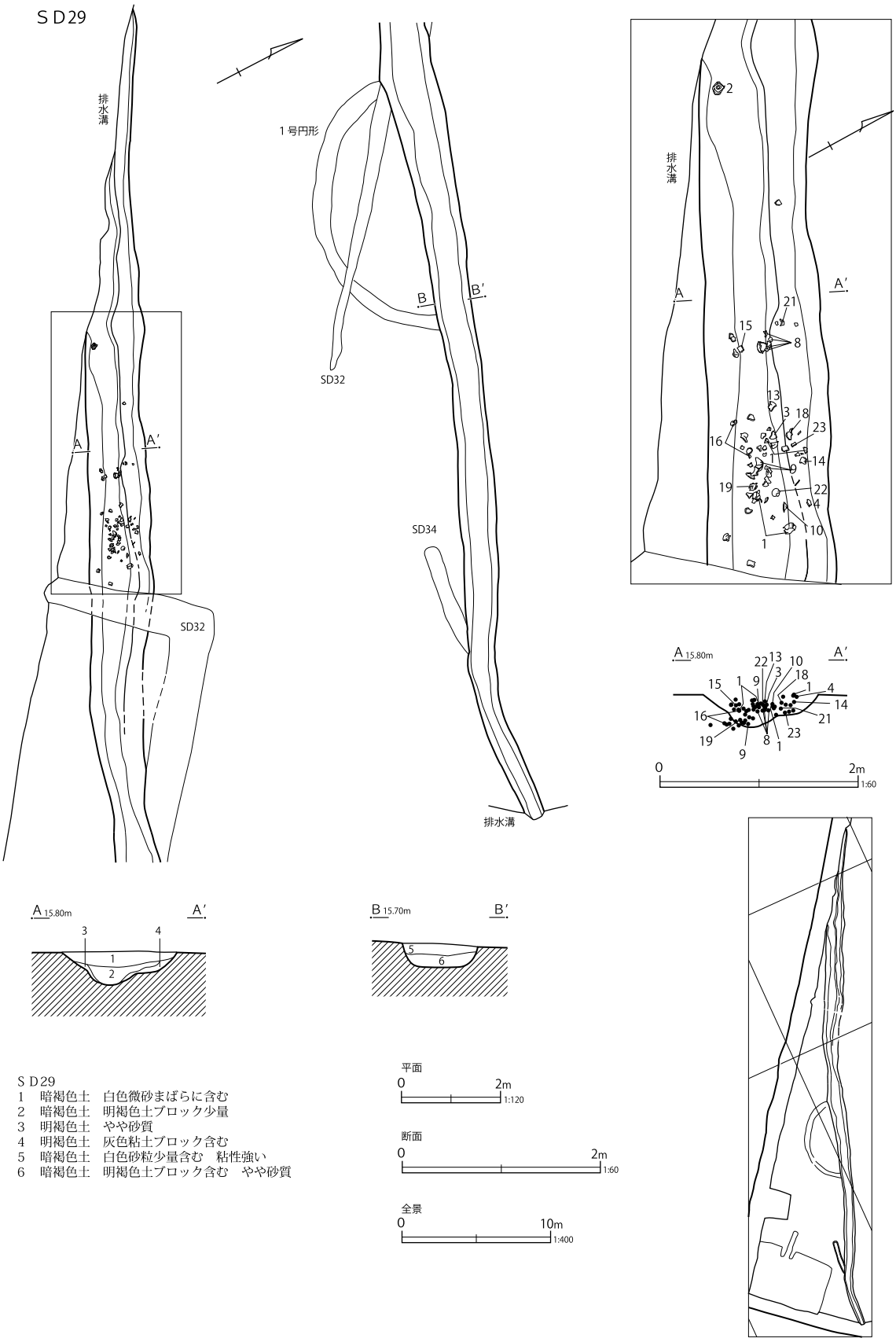
３～６は坏身模倣坏である。３・５・６は黒色処理され、３は放射暗文が施されている。7～10



第282図　第６・８・10・12号溝跡出土遺物

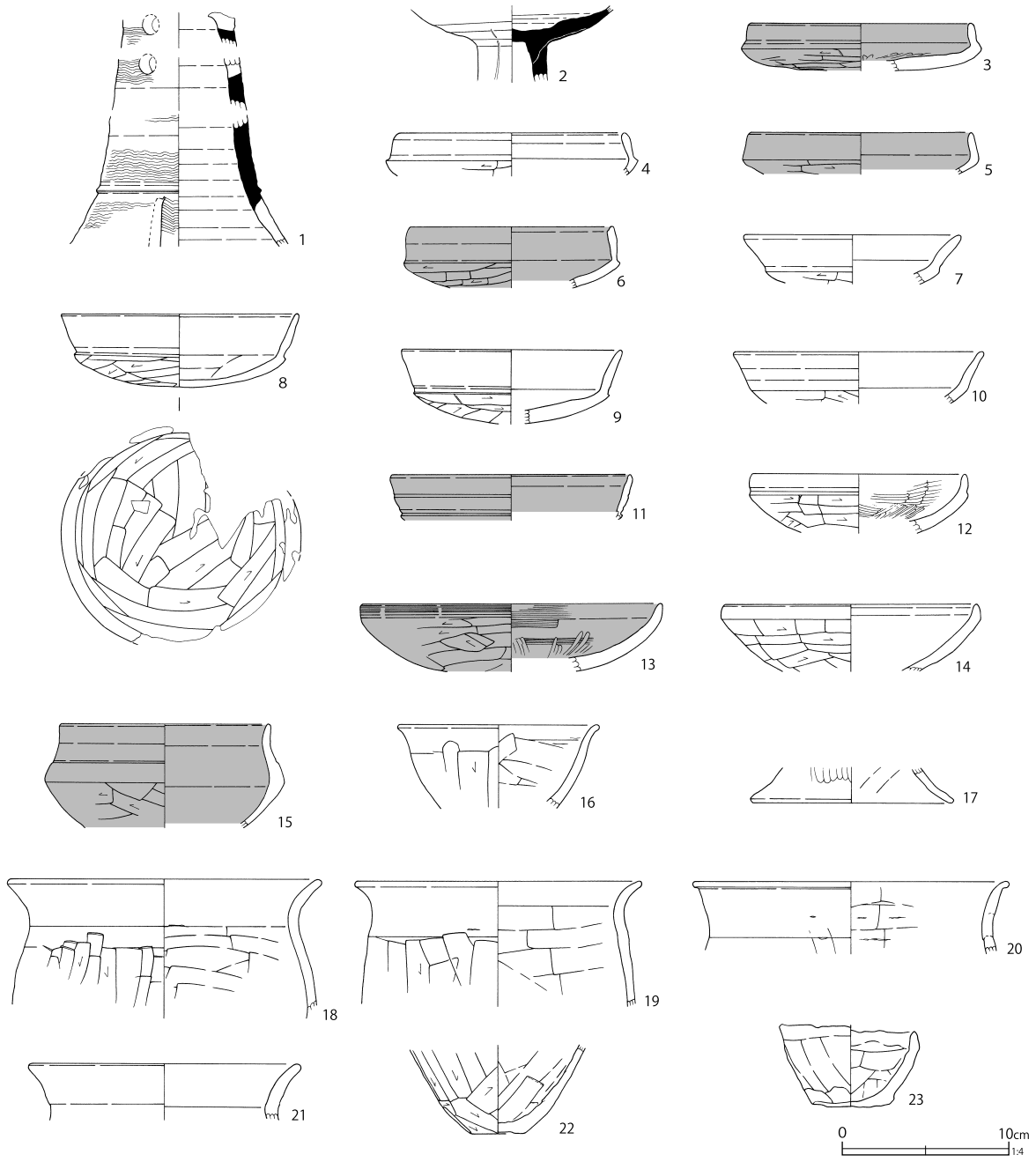
第75表　第６・８・10・12号溝跡出土遺物観察表(第282図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	[1.6]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	赤褐	SD６	
2	土師器	坏	(14.0)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	明赤褐	SD６	
3	土師器	甕	(14.0)	[5.3]	－	ＡＣＩＫ	25	普通	明赤褐	SD６	
4	土師器	台付甕	(18.2)	[2.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい赤褐	SD６　外面煤付着	
5	土師器	台付甕	－	[7.4]	(9.0)	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	灰黄褐	SD６　内外面煤付着	
6	土師器	甕	(31.0)	[7.8]	－	ＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	SD８	
7	土師器	甕	－	[3.5]	(8.3)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	SD８	
8	須恵器	蓋	(15.4)	[2.6]	－	ＡＥＪＫ	5	普通	にぶい赤褐	SD10　F-８G　南比企産	225-2
9	土師器	坏	(13.9)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙	SD10　有段口縁坏	
10	土師器	小型壺	(15.2)	[2.3]	－	ＡＣＥＨＩ	5	普通	明赤褐	SD10	
11	土師器	甕	(23.5)	[6.0]	－	ＡＩＫ	5	普通	黒	SD10	
12	土師器	甕	(15.8)	[2.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい赤褐	SD10　D-５G	
13	土師器	甕	(12.8)	[5.1]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	明赤褐	SD10　D-５G	
14	土師器	坏	(13.0)	[3.3]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰褐	SD12　坏身模倣坏　内外面黒色処理	
15	土師器	坏	(15.5)	[3.8]	－	ＡＣＥＩ	15	普通	灰褐	SD12　坏蓋模倣坏　内外面黒色処理	
16	土師器	壺	(8.0)	[5.9]	－	ＡＣＥＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	SD12　内外面赤彩	
17	鉄製品	容器破片	長さ[3.8]㎝　幅[4.2]㎝　厚さ0.3㎝　重さ21.7ｇ							SD12	222-2



ＳＤ29
1　暗褐色土　白色微砂まばらに含む
2　暗褐色土　明褐色土ブロック少量
3　明褐色土　やや砂質
4　明褐色土　灰色粘土ブロック含む
5　暗褐色土　白色砂粒少量含む　粘性強い
6　暗褐色土　明褐色土ブロック含む　やや砂質

第283図　第29号溝跡



第284図　第29号溝跡出土遺物

は坏蓋模倣坏である。９は焼成が良く、器面が平滑で、硬質である。11は有段口縁坏である。内外面黒色処理されている。

12～14は口縁部が短く、胴部が丸みを帯びた坏である。12・13は内面にヘラ磨きが施され、13は内外面黒色処理されている。14は第32号溝跡出土の破片と接合する。粘土は精選され、器面はなめらかである。12は褐色、13・14は灰白色を呈する。15・16は鉢である。15は黒色処理されている。両者とも体部下半はヘラケズリである。17は高坏の裾部である。一部にヘラ磨きが残る。古墳時代前期のものである可能性もある。

18～22は甕である。口縁部内外面横ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。22の底面は手持ちヘラケズリである。22は長石粒を多く含む常陸産か。23は手捏ねで、

第76表　第29号溝跡出土遺物観察表（第284図）

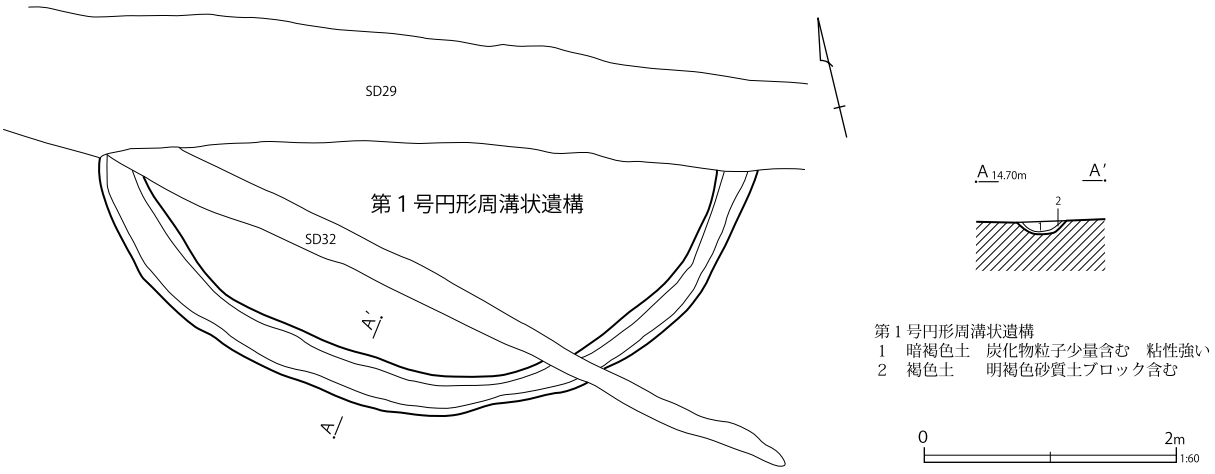
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	大型器台	－	[12.9]	－	ＥＩＫ	10	良好	灰	№２・３・４・64	196-5
2	須恵器	高坏	－	[4.4]	－	ＡＣＤＥＨＩＪＫ	70	普通	灰	末野産か　№１	196-6
3	土師器	坏	(12.9)	[2.8]	－	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理　放射暗文　№26　F-6G	196-7
4	土師器	坏	(13.3)	[2.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	外面煤付着　№55	
5	土師器	坏	(13.0)	[2.5]	－	ＩＫ	10	普通	灰黄褐	内外面黒色処理　F-６G	
6	土師器	坏	(12.0)	[3.6]	－	ＡＣＨＩ	10	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理　F-６G	
7	土師器	坏	(12.7)	[2.9]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	橙	F-６G	
8	土師器	坏	14.0	4.4	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	橙	№９・10・12・14　F-６G	197-4
9	土師器	坏	(13.0)	[4.4]	－	ＡＨＩＫ	35	良好	橙	№38・40	197-5
10	土師器	坏	(14.7)	[3.1]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	橙	№53	
11	土師器	坏	(14.1)	[2.7]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	有段口縁坏　内外面黒色処理　F-６G	
12	土師器	坏	(12.6)	[3.6]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい黄褐	SK17と接合	
13	土師器	坏	(17.7)	[4.0]	－	ＡＨＫ	15	普通	浅黄橙	内外面黒色処理　№21　F-６G	
14	土師器	坏	(14.9)	[4.0]	－	ＡＣＩＫ	25	普通	浅黄橙	№57　F-６G　SD32と接合	
15	土師器	鉢	(12.3)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	内外面黒色処理　№15	
16	土師器	鉢	(11.6)	[5.0]	－	ＡＣＦＨＩ	10	普通	暗褐	№19・35	
17	土師器	高坏	(11.6)	[2.1]	－	ＡＣＦＨＩＫ	25	普通	橙	F-６G	
18	土師器	甕	(18.3)	[8.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	橙	№22	
19	土師器	甕	(16.7)	[7.5]	－	ＡＥＨＩ	20	普通	褐灰	外面煤付着　№47　F-６G	
20	土師器	甕	(18.6)	[4.3]	－	ＡＤＦＨＩＫ	5	普通	黒褐	内外面煤付着　F-６G	
21	土師器	甕	(15.8)	[3.4]	－	ＡＣＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	№７　F-６G	
22	土師器	甕	－	[5.3]	(3.0)	ＡＣＤＦＨＩＫ	50	普通	赤褐	№52　F-６G　SD33と接合	
23	土師器	手捏ね	(8.0)	4.9	5.0	ＡＣＦＨＩ	70	普通	にぶい黄褐	№63　SK17と接合	197-1

器面が風化によって荒れている。外面ナデ、内面にヘラナデが施されている。底面手持ちヘラケズリ。

第34号溝跡（第281図）

Ａ区の東端、Ｇ－８グリッドで検出された。重複する第29号溝跡より古い。軸方位はほぼ東西方向で、検出できた長さは2.28ｍに留まる。幅は、おおよそ0.30ｍ、深さは0.12～0.15ｍである。断面形は逆台形で、底面は平坦であった。覆土は暗褐色土で鉄分の集積が見られる。

遺物は出土していないが、重複関係から古墳時代に帰属するものと判断した。



第285図　第１号円形周溝状遺構

（6）円形周溝状遺構

第１号円形周溝状遺構（第285図）

A区のF・G－7グリッドに位置する。調査は第33号溝跡として行った。重複する第29・32号溝跡より古い。平面形は北側へ向かって開く半円形である。第29号溝跡より北側では検出されていないが、削平されており、本来は全周すると考えられる。検出できた範囲の外側上端径は最大5.25ｍ、内側上端径は最大4.55ｍで、この先更に径を増すと思われる。溝幅は0.20～0.42ｍで、西側が広め、東側が狭い。深さはごく浅く、0.1ｍほどしかない。底面はほぼ平坦で、高低差は認められない。断面形は鍋底形である。覆土は炭化物、明褐色砂質土ブロックを含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物は土師器甕の破片が出土したのみである。

（7）畠跡

古墳時代の畠跡はA区から２箇所検出されている。調査時には、さく跡それぞれに溝番号を付して調査したため、ここでもそれに準拠して取り扱う。溝跡の内13～20・27・36号溝跡が第１号畠跡、第22～24号溝跡が第２号畠跡になる。

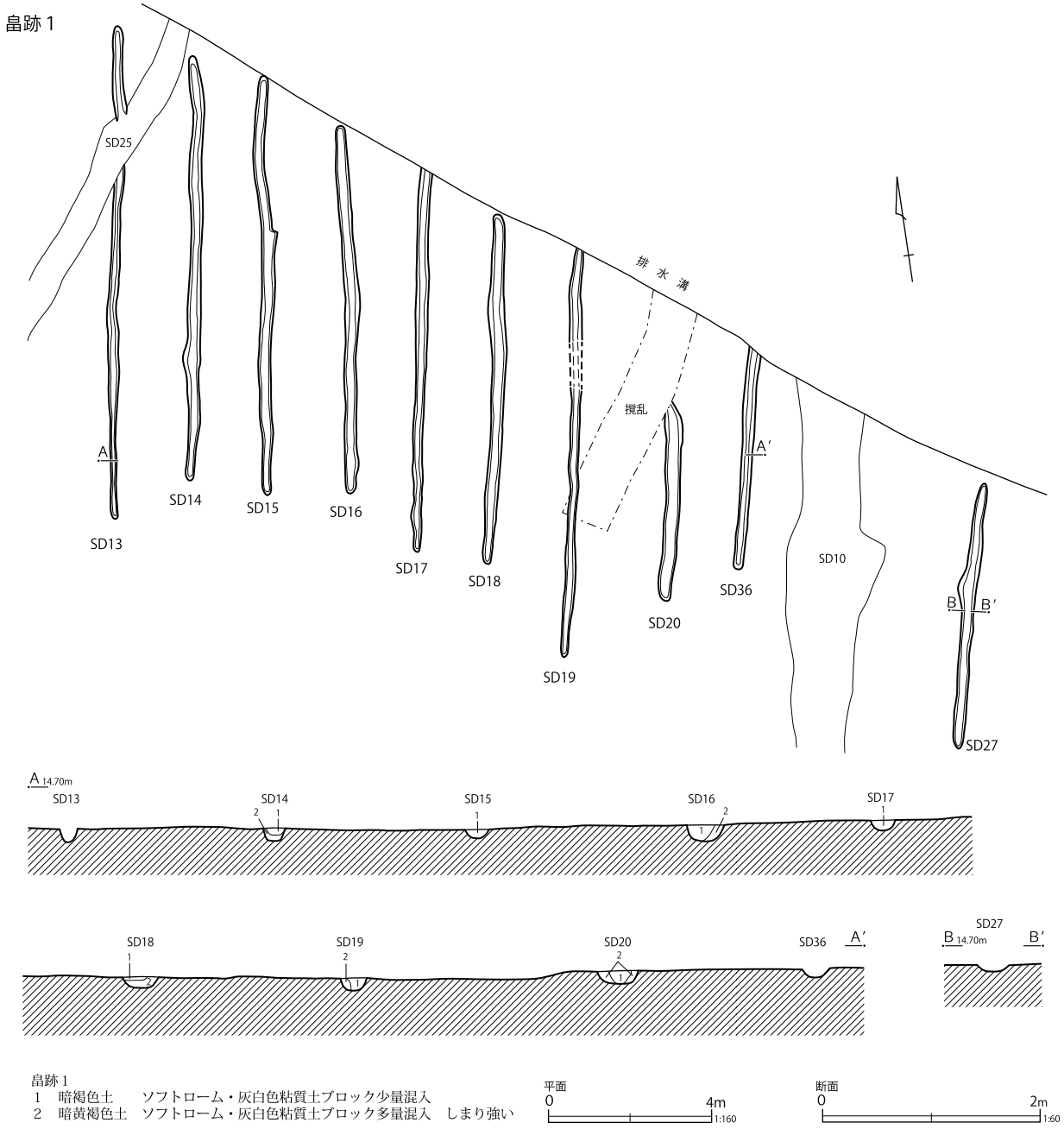
第１号畠跡（第286・287図）

A区の中央、B～D－３～５グリッドに位置する。第17号溝跡より東側は、遺構の北側が調査区域外にかかる。重複する第25号溝跡より古い。南側の延長線上8.5ｍに第２号畠跡があり、一連の遺構の可能性がある。さく跡の走行方向は、N－8°－Eで、1.4～1.7ｍの一定の間隔で掘り込まれている。第19・20号溝跡間は2.08ｍ、第36・27号溝跡間は5.44ｍと幅広である。

長さは第13号溝跡が12.10ｍで最長、第20号溝跡が最短で4.78ｍである。幅は0.13～0.45ｍだが、0.2～0.3ｍ程度がほとんどである。深さはいずれも浅く、0.02～0.18ｍである。覆土はローム土、灰白色粘土を含む暗褐色土、暗黄褐色土である。

第77表　１次古墳畠跡一覧表（第286･288図）　　単位：m

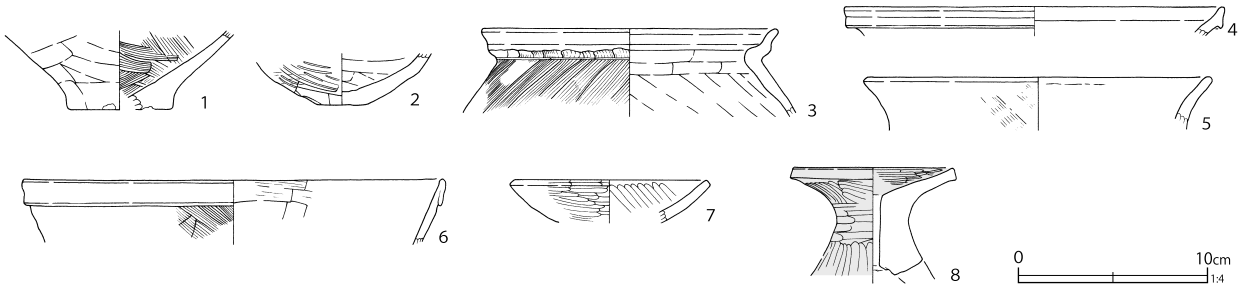
遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
畠跡１	古後	B・C－3	SD25（新）	N－8°－E	12.10	0.13～0.28	0.04～0.10	U字形	壺	13号溝跡
	古後	B－3・4 C－3	－	N－8°－E	10.34	0.25～0.43	0.09～0.18	逆台形	壺	14号溝跡
	古後	B・C－4	－	N－8°－E	10.22	0.22～0.40	0.06～0.11	鍋底形	高坏　小壺　器台	15号溝跡
	古後	B・C－4	－	N－7°－E	8.98	0.29～0.36	0.12～0.18	鍋底形		16号溝跡
	古後	B・C－4	－	N－9°－E	[9.26]	0.17～0.32	0.07～0.12	鍋底形	壺	17号溝跡
	古後	B・C－4	－	N－10°－E	8.51	0.23～0.42	0.05～013	鍋底形	壺	18号溝跡
	古後	B・C－4	－	N－12°－E	[9.98]	0.19～0.29	0.07～0.13	鍋底形		19号溝跡
	古後	C－5	－	N－9°－E	[4.78]	0.32～0.42	0.02～0.11	鍋底形		20号溝跡
	古後	C・D－5	－	N－15°－E	6.48	0.25～0.45	0.05～0.08	皿形	甕胴	27号溝跡
	古後	C－5	－	N－10°－E	[5.33]	0.21～0.29	0.05～0.08	鍋底形	甕	36号溝跡
畠跡２	古後	D－3	－	N－7°－E	[3.63]	0.10～0.16	0.02～0.08	鍋底形		22号溝跡
	古後	D－3	－	N－6°－E	[4.48]	0.15～0.35	0.04～0.05	鍋底形		23号溝跡
	古後	D－3	SD26（新）	N－8°－E	[3.15]	0.18～0.32	0.05～007	皿形		24号溝跡



第286図　第１号畠跡

第78表　第１号畠跡出土遺物観察表（第287図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	[4.1]	(5.4)	ＡＣＨＩ	25	普通	浅黄橙	SD15	
2	土師器	小型壺	－	[2.5]	2.5	ＡＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤	SD18　内外面煤付着	
3	土師器	台付甕	(15.4)	[4.6]	－	ＡＣＤＥＨＩ	30	普通	灰褐	外面煤付着	
4	土師器	甕	(20.0)	[1.5]	－	ＡＥＩＫ	5	普通	褐灰	SD17　内外面煤付着	
5	土師器	甕	(18.3)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰褐		
6	土師器	壺	(22.2)	[3.5]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	黒褐	内外面煤付着	
7	土師器	器台	(10.4)	[2.3]	－	ＡＣＥＩ	10	普通	明赤褐	SD16	
8	土師器	器台	(8.6)	[6.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	SD15　外面・器受部内面赤彩	



第287図　第１号畠跡出土遺物

畠跡を構成する各溝からの遺物の出土は僅少で、古墳時代後期の土師器模倣坏、甕、前期の壺、小型壺、広口壺、台付甕、甕、鉢、高坏、器台の小破片が出土しているのみである。掲出できたのは古墳時代前期のもののみである。

１は壺の底部である。胎土は精選され、なめらかである。輪台状の底部で、底面はナデである。

２は小型壺の底部である。器肉が厚く、底部は平坦である。

４・５は甕の口縁部である。４は端部に直立する面を持つ。北陸地方の影響か。

６は広口壺である。端部の外側に粘土を貼付され、複合部が作出されている。外面刷毛目、内面刷毛目後横ナデが施されている。

７は器台の器受部である。内外面ヘラ磨きが施されている。外面に煤が付着し、２次被熱を受けた可能性がある。

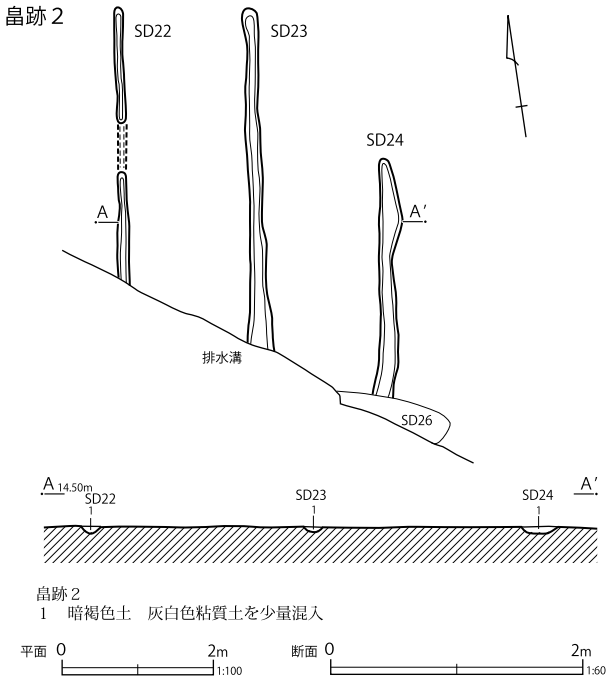
８は器台である。全体に分厚く、特に接合部が厚くなっている。脚部の透孔は４孔である。全体に赤彩され、脚部の内面も赤彩されている。

第２号畠跡（第288図）

A区の北側、D－３グリッドに位する。南側は調査区域外にかかる。北側の延長線上8.5ｍに第１号畠跡があり、一連の遺構の可能性がある。

さく跡の走行方向は、N－7°－Eである。さく跡の間隔は第23・24号溝跡間で1.4ｍ、第22・23号溝跡間で1.7ｍである。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。検出できた長さは3.15～4.48ｍ、幅は0.10～0.35



第288図　第２号畠跡

ｍだが、概ね0.2～0.3ｍである。深さはいずれも浅く、0.02～0.08ｍほどである。覆土は灰白色粘土を含む暗褐色土である。

遺物は出土していないが、検出時の状況が第１号畠跡と同様であること、覆土が共通であることから古墳時代後期に帰属するものとした。

（８）グリッド出土遺物（第289・290図）

遺構に帰属させることのできない遺物は調査区全体に分布するが、11～17の山陰系口縁をはじめとする特大サイズの甕口縁はＩ・Ｊ－12グリッドから集中して出土している。

１～45は古墳時代前期の土師器である。１～

８は壺である。２は外面にカナムグラによる擬縄文が羽状に施文されている。内面赤彩。３は北陸系の装飾壺である。口縁部の下に段が作出されている。段の下に太い沈線が３条入れられ、ヘラによる刻みが施される。雲母を多く含む。４・５は頸部に突帯が付される壺で、５の突帯は断面が四角く、太い棒状工具で押捺されている。６は端部に、複合部が作出されている。広口壺か。８は直口縁の所謂大型坩である。外面全体、口縁部内面ヘラ磨き。底面には砂が付着する。

９・10はＳ字状口縁台付甕である。９の脚台部外面の擦り消しは規則性をやや欠いている。

11・12・14～17は特大サイズの甕である。11は山陰系口縁のＳ字状口縁台付甕である。最上段の外面はヘラナデ、内面は横ナデ後ヘラ磨きである。12は刷毛目が明瞭である。内面に部分的にヘラ磨きが残る。下位に稜があり、山陰系口縁の可能性がある。14・16は単口縁で端部が若干外反する。内外面ヘラナデ後横ナデ。17の外面は強い横ナデで、沈線状の当たりが認められる。

20は受口状口縁である。近江系の影響と考えられる。胴部外面ヘラケズリ。

19～29は北陸系口縁の甕である。頸部から大きく外反し、端部に明瞭な面を作出している。幅広の面を持つもの（19・23・24・28）と、若干摘み上げ状になるもの（21・22・25～27・29）がある。22は粘土が付加されて直立する面が作出されている。口縁部の調整は強い横ナデだが、25は刷毛目が認められる。胴部の調整はヘラナデだが、25・27は刷毛目、28はヘラ磨きが認められる。

30は小型の甑である。鉢の底部に外側から径1.3cmの孔が穿たれている。内外面ヘラナデ。

31は大型の鉢である。口縁部は内湾して立ち上がり、体部は低平になると考えられる。内外面ヘラナデ。越前・加賀等の影響か。

32・34・35は５の字口縁の鉢である。形態が各々異なる。32は厚手で小型、34・35は径が大きく、低平。34は薄手で受口状である。35はヘラケズリが施されている。33は端部が摘まれ横ナデが加えられている。北陸、北近畿の影響か。

36は柱状脚の高坏である。柱状部は中実で、下位から入れられたヘラが何度も刺された痕跡が残る。

37・38は高坏である。37は口縁端部が水平に開く。内外面に条の深い刷毛目が施されている。胎土に角閃石を多く含む。信州系と考えられる。38は大型の高坏の脚部である。東海系か。

42は脚付壺の脚部である。上面の剥離箇所に壺等が乗ると考えられる。透孔は３孔である。

44は手捏ねである。全体に指オサエが施され、口縁部には砂が多く付着する。

46～48は古墳時代後期の須恵器である。46・47は須恵器坏蓋である。46は針状物質を含み、南比企窯産の可能性がある。47は白色粒子を多く含む。黒色を呈し、重量感がある。東毛産か。48は須恵器大甕胴部である。格子状タタキが施され、内面の当て具痕はナデ消されている。太田金山窯産。

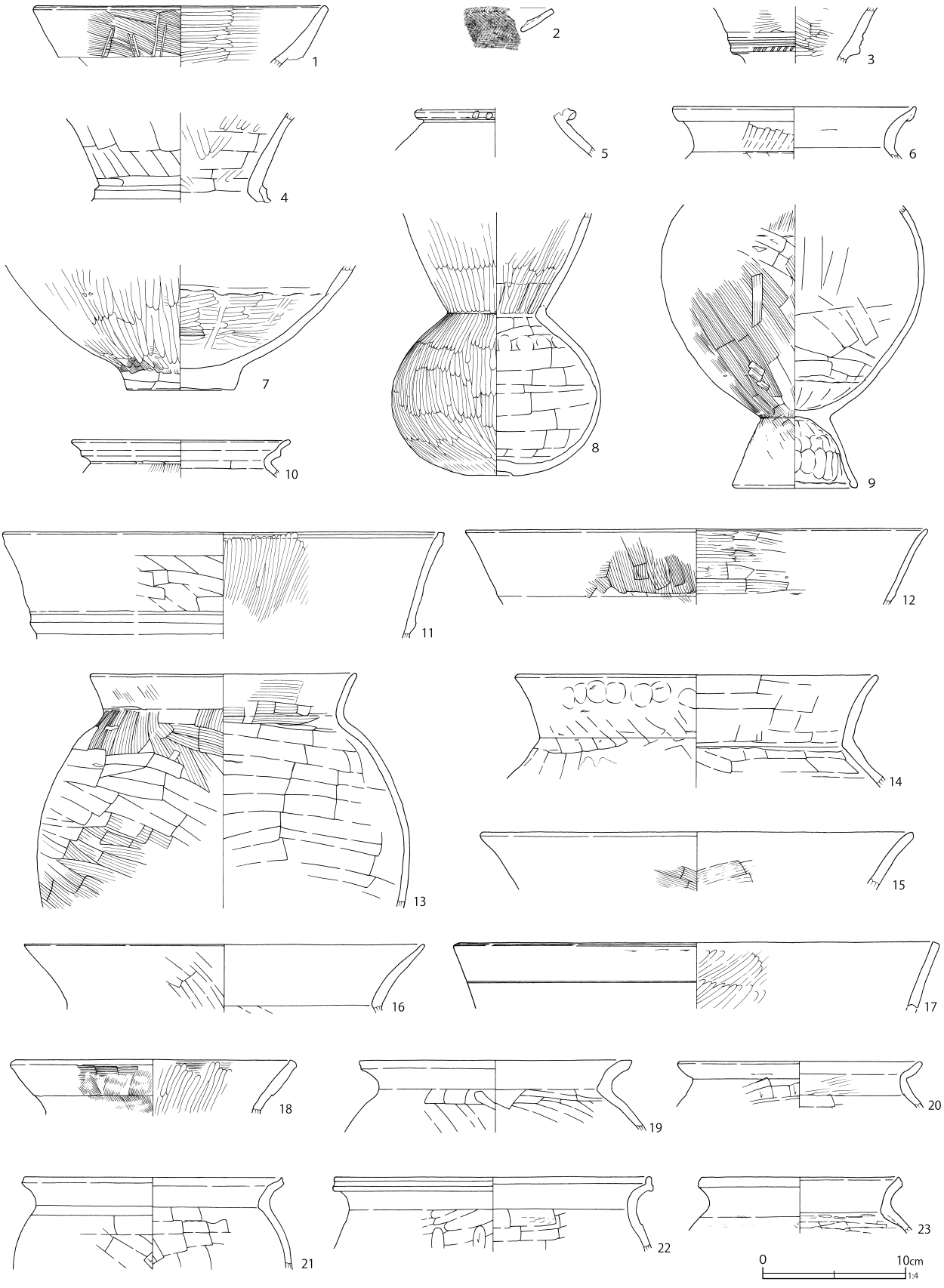
49は小口径羽口である。溶融のため調整は不明瞭である。外面は亀裂が多く、部分的に還元し、発泡。内面は２次被熱により赤変する。

50は完形の８世紀初頭の北武蔵型坏である。内外面漆塗りの可能性がある。

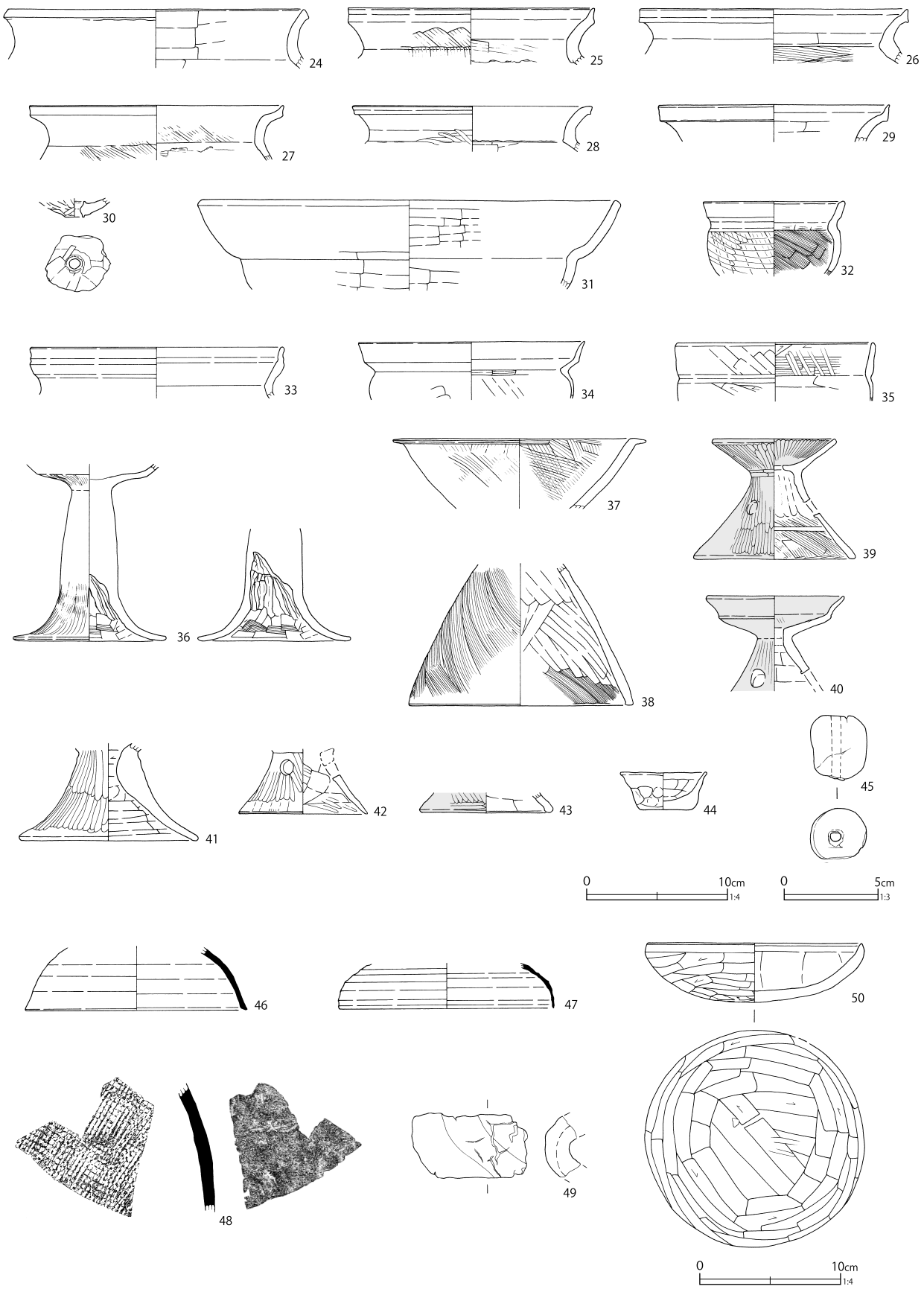
第79表　１次グリッド出土古墳遺物観察表（第289･290図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(20.6)	[4.3]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	H-９Ｇ	
2	土師器	壺	－	[1.7]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	M-16Ｇ　内面赤彩	
3	土師器	壺	－	[3.9]	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	H-９Ｇ	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
4	土師器	壺	－	[6.3]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	L-15G	
5	土師器	壺	－	[3.4]	－	ＡＣＥＧＨＩＫ	15	普通	橙	L-15G	226-1
6	土師器	広口壺	(17.0)	[3.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	黒褐	C-４G	
7	土師器	壺	－	[8.7]	7.4	ＡＣＤＥＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	N-19G	203-2
8	土師器	坩	－	[18.3]	2.6	ＡＣＥＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	O-18G	203-3
9	土師器	台付甕	－	[19.8]	8.7	ＡＣＤＧＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	P-19G　内外面煤付着	203-5
10	土師器	台付甕	(15.2)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	にぶい黄橙	SK５№１　外面煤付着	
11	土師器	台付甕	(30.8)	[7.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	J-12G　山陰系口縁Ｓ字甕　外面煤付着	226-1
12	土師器	台付甕	(32.4)	[5.3]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	H-９G　山陰系口縁Ｓ字甕か　内外面煤付着	226-1
13	土師器	甕	(18.6)	[16.4]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	I-12G　外面煤付着	203-6
14	土師器	甕	(25.4)	[7.8]	－	ＥＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	J-12GP３　外面煤付着	203-4
15	土師器	甕	(30.2)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	J-12G　外面煤付着	
16	土師器	甕	(28.0)	[4.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	J-12G　外面煤付着	226-1
17	土師器	甕	(34.0)	[4.6]	－	ＡＣＥＩＫ	5	普通	褐灰	N-19G	
18	土師器	甕	(20.0)	[3.8]	－	ＡＣＨＫ	10	普通	にぶい黄橙	D-４G　外面煤付着	
19	土師器	甕	(19.0)	[4.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	良好	灰白	F-６G	203-7
20	土師器	甕	(17.0)	[3.2]	－	ＡＣＩＫ	5	普通	明赤褐	L-16G　内外面煤付着	
21	土師器	甕	(18.3)	[6.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	浅黄橙	E-７G　外面煤付着	226-1
22	土師器	甕	(22.4)	[5.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	L-16G　北近畿～山陰系か	226-1
23	土師器	甕	(14.2)	[3.9]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	橙	南溝　外面煤付着	226-1
24	土師器	甕	(21.6)	[4.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	B-３G	226-1
25	土師器	甕	(17.4)	[3.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	橙	C-５G　外面煤付着	226-1
26	土師器	甕	(19.1)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	橙	O-18G　外面煤付着	226-1
27	土師器	甕	(18.0)	[3.9]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	C-４G	226-1
28	土師器	甕	(17.0)	[3.2]	－	ＡＥＨＩＫ	20	良好	にぶい黄橙	F-６G	226-2
29	土師器	甕	(16.3)	[2.6]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	K-14G　内外面煤付着	226-2
30	土師器	甑	－	[1.3]	1.4	ＡＨＩＫ	85	普通	にぶい橙	L-15G　内外面煤付着　単孔	226-2
31	土師器	鉢	(30.0)	[6.3]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	浅黄橙	C-５G	226-2
32	土師器	鉢	(10.0)	[5.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	E-７G　５の字鉢　北近畿～山陰系	204-1
33	土師器	鉢	(18.0)	[3.6]	－	ＡＣＨＫ	10	普通	にぶい橙	O-18G	226-2
34	土師器	鉢	(16.0)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	N-18G　山陰系か	226-2
35	土師器	鉢	(14.2)	[4.1]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	明赤褐	I-13G　５の字鉢か	226-2
36	土師器	高坏	－	[12.5]	10.8	ＡＣＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	O-20G№１　P-20G　内外面煤付着	204-4
37	土師器	高坏	(18.0)	[5.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	D区一括	
38	土師器	高坏	－	[10.0]	(15.9)	ＡＥＨＩＫ	20	良好	明赤褐	I-10G　大型高坏脚部　欠山系か	
39	土師器	器台	8.8	8.5	(11.4)	ＡＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	H-10G　外面・器受部内面赤彩	204-5
40	土師器	器台	(9.7)	[6.7]	－	ＡＣＨＩＫ	45	普通	にぶい橙	J-12G　外面・器受部内面赤彩	204-6
41	土師器	器台	－	[6.9]	12.7	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	K-15G	204-2
42	土師器	脚付壺	－	[4.6]	(9.1)	ＡＣＥＩＫ	60	普通	にぶい橙	H･I-12G	
43	土師器	器台	－	[1.5]	(9.4)	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい橙	SK6　外面赤彩	
44	土師器	手捏ね	(6.1)	2.6	3.3	ＡＣＥＧＨＩＫ	80	普通	褐灰	L-15G	204-3
45	土製品	土錘	長さ3.4　最大径2.9 孔径0.5×0.4 重さ29.7ｇ			ＡＣＨＩＫ	95	普通	灰黄褐	L-15G　外面煤付着	219-2
46	須恵器	蓋	(16.6)	[4.4]	－	ＥＨＩＪＫ	10	良好	灰	Ａ区表採　南比企産	226-2
47	須恵器	蓋	(15.3)	[3.1]	－	ＨＩ	15	普通	灰	G-10・11G	226-2
48	須恵器	甕	－	[9.0]	－	ＥＨＩＫ	5	良好	黄灰	南溝　外面格子タタキ	
49	土製品	羽口	長さ8.1　幅4.6 内径[0.8]×[1.7] 重さ6.16g			ＣＩ	30	普通	にぶい黄橙	J-13GP2	
50	土師器	坏	15.2	4.2	－	ＡＣＩ	95	普通	にぶい橙	試掘T29　北武蔵型坏　内外面黒色処理	204-7



第289図　１次グリッド出土古墳遺物（１）



第290図　１次グリッド出土古墳遺物（２）

４．平安時代

（１）住居跡

第３号住居跡（第 291・292 図）

Ｂ区の東側、Ｉ－12 グリッドに位置する。攪乱によって東壁のカマド付設部分と北西コーナーが壊されていた。東カマドで、主軸方位はＳ－86°－Ｅである。

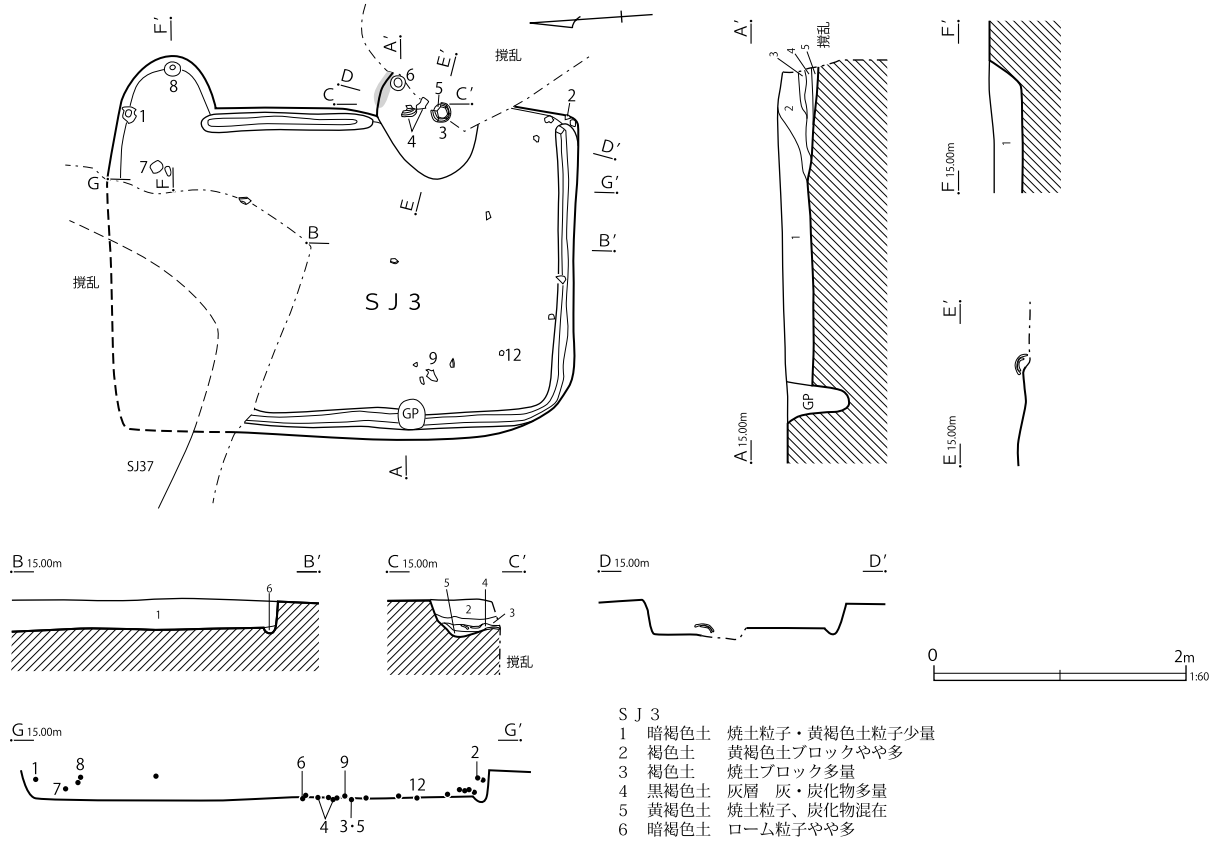
平面形は横長の長方形で、北東コーナーには東向きの突出部が認められる。規模は、主軸方向 2.60 ｍ、直交軸方向 3.70 ｍである。深さは 0.25 ｍで、床面はほぼ平坦であった。覆土は焼土・黄褐色土を含む褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。貼床、掘り方等は検出されなかった。

カマドは東壁中央やや南寄りで検出された。燃焼部の一部と煙道部が攪乱により壊されていた。燃焼部は壁から突出し、残存する東西の長さは 0.90 ｍ、南北の幅 0.80 ｍ、深さ 0.10 ｍである。覆土は２層がカマド崩落後の流入土、３層が天井部崩落土、４層が灰層、５層が掘り方の埋土と考えられる。火床面、壁面はあまり焼けていなかった。中央に支脚として、ロクロ土師器高台付埦・坏（３～５）が据えられていた。

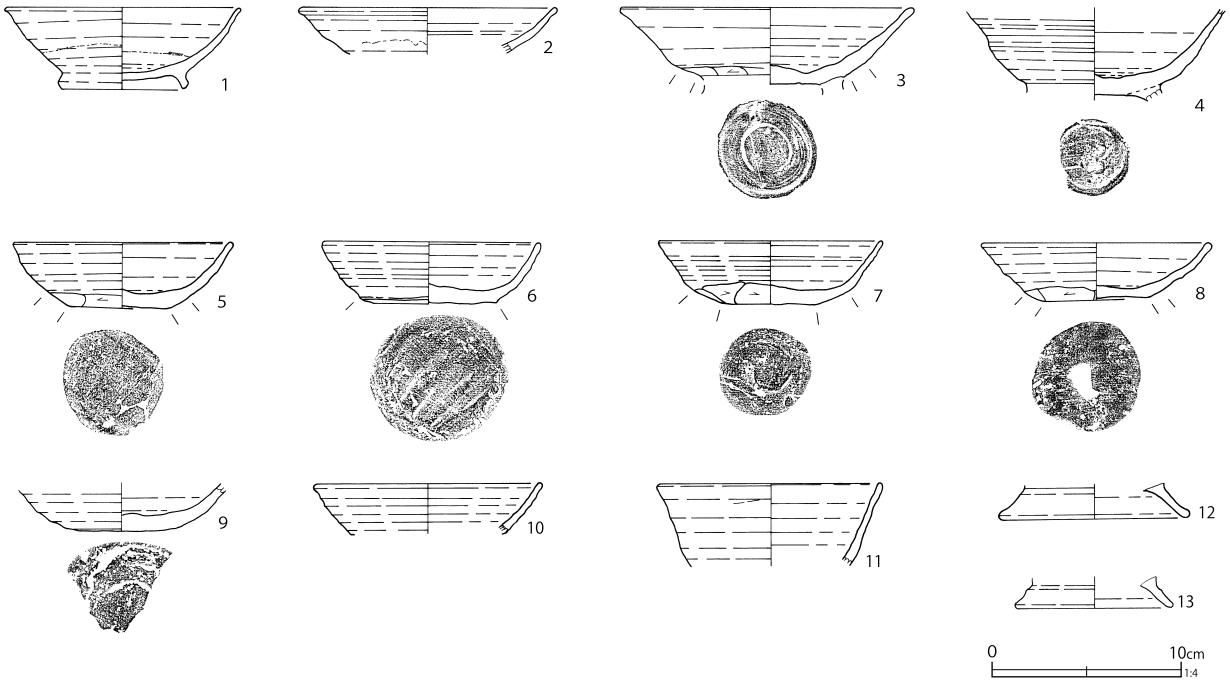
北東コーナーの突出部は、幅 0.75 ｍ、長さ 0.50 ｍの半円形である。覆土は竪穴本体と同様である。壁溝が途切れることから施設としての利用は確実であるが、性格は不明である。

遺物は少なく、床面から出土した器種は灰釉陶器碗・皿、ロクロ土師器の坏、高台付坏、土師器甕である。

１・２は灰釉陶器である。１は高台付碗、２は皿である。いずれも釉は漬けがけで東濃窯産。虎



第291図　第３号住居跡



第292図　第３号住居跡出土遺物

第80表　第３号住居跡出土遺物観察表（第292図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	高台付碗	12.4	4.2	6.3	ＥＩＫ	70	良好	灰白	東濃産　重ね焼き痕　№６	107-3
2	灰釉陶器	皿	(13.4)	[2.4]	－	ＨＫ	10	普通	灰白	№22	
3	ロクロ土師	高台付埦	(15.4)	[4.0]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	内面煤付着　カマド№４	107-4
4	ロクロ土師	高台付埦	－	[4.8]	－	ＡＣＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	カマド№２・３	107-5
5	ロクロ土師	坏	11.5	3.4	5.3	ＡＣＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	カマド№24	107-6
6	ロクロ土師	坏	(11.6)	3.2	7.3	ＡＣＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	内外面煤付着　カマド№１	
7	ロクロ土師	坏	(11.8)	4.3	5.0	ＡＣＨＩ	50	普通	にぶい橙	№７	107-7
8	ロクロ土師	坏	11.8	3.0	5.5	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい橙	№５	107-8
9	ロクロ土師	坏	－	[2.5]	(6.0)	ＡＥＨＩＫ	25	普通	橙	№13	
10	ロクロ土師	坏	(12.0)	[2.6]	－	ＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		
11	ロクロ土師	坏	(11.8)	[4.3]	－	ＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	カマド	
12	ロクロ土師	高台付坏	－	[1.7]	(9.6)	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙	№15	
13	ロクロ土師	高台付坏	－	[1.6]	(8.2)	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙		

渓山１号窯段階である。

以下はロクロ土師器である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。３・４は高台付埦である。３は浅めで器肉が厚い。底部外周ヘラケズリ。高台が剥離している。内面黒色処理の可能性がある。４は深身で中位に段がある。底面手持ちヘラケズリ。胎土に白色粒子を点々と含む。

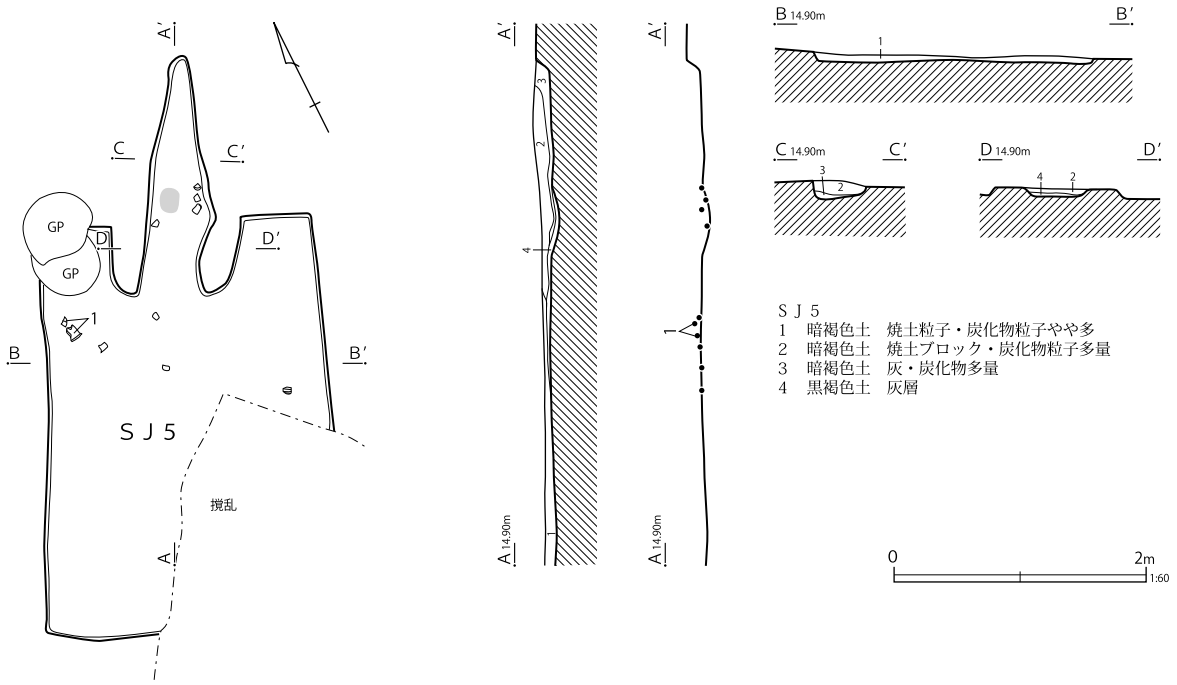
５～11は坏である。５・７・８は底部外周ヘラケズリである。いずれも底面は手持ちヘラケズリである。８は粒子が粗い。11は径が小さく深身である。胎土に白色粒子を点々と含む。

12・13は高台である。両者とも坏部との接合面できれいに剥がれている。

本住居は10世紀前半、屋敷裏Ⅵ－２期である。

第５号住居跡（第293・294図）

Ｂ区の中央やや東側、Ｉ－11・12グリッドに位置する。遺構の北西側を中近世のピットによって、南東側を攪乱によって大きく壊されていた。



第293図　第５号住居跡

第81表　第５号住居跡出土遺物観察表(第294図)

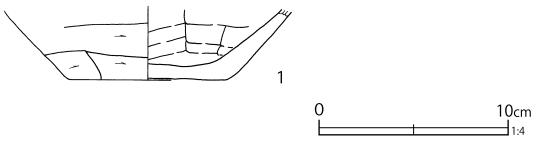
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	－	[3.8]	(8.4)	ＡＣＨＩＫ	40	良好	にぶい褐	外面煤付着　№１・２	

北カマドで、主軸方位はＮ－28°－Ｅである。竪穴本体に対してカマドが大きい。

平面形は縦長の長方形である。規模は、主軸方向3.30 m、直交軸方向2.20 mである。深さは0.05 mで､床面はやや凹凸があった。覆土は焼土･炭化物を含む暗褐色土で､自然堆積である。貼床、掘り方等は検出されなかった。

カマドは北壁中央で検出された。燃焼部は壁から大きく突出している。袖を含む長さは1.90 m、幅0.50 m、深さ0.15 mである。覆土は２層がカマド天井部崩落土、３･４層が灰層と考えられる。火床面、壁面は、燃焼部から煙道にかかる箇所で一部焼土化していたほかは、あまり焼けていなかった。袖は基底面のみの検出だが、地山の削り出しである。壁周溝、柱穴は検出されなかった。

遺物は少なく、床面に散らばった状態で出土した。本住居跡に伴うものとしては、平安時代の土師器甕があるのみである｡他に古墳時代後期の壺、甕の破片が混入している。１は土師器甕の底部である。上総型か。全体に器肉が厚く、外面・底面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。



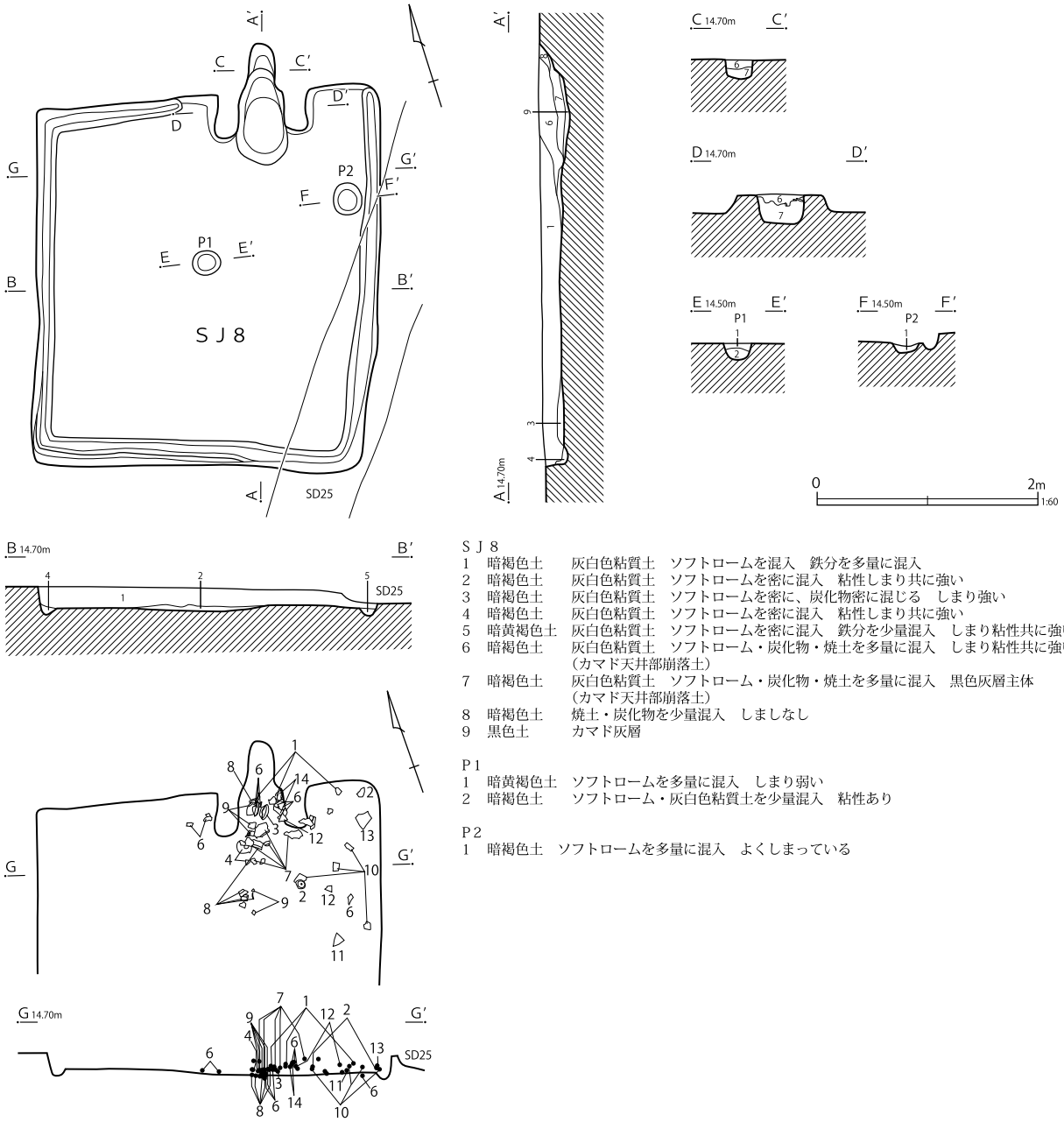
第294図　第５号住居跡出土遺物2

本住居は10世紀前半、屋敷裏Ⅵ－２期である。

第８号住居跡（第295・296図）

Ａ区の北側、Ｂ・Ｃ－３グリッドに位置する。第25号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。北カマドで、主軸方位はＮ－20°－Ｅである。

平面形は横長の長方形である。規模は、主軸方向3.50 m、直交軸方向3.10 mである。深さは



SＪ８
1　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトロームを混入　鉄分を多量に混入
2　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトロームを密に混入　粘性しまり共に強い
3　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトロームを密に、炭化物密に混じる　しまり強い
4　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトロームを密に混入　粘性しまり共に強い
5　暗黄褐色土　灰白色粘質土　ソフトロームを密に混入　鉄分を少量混入　しまり粘性共に強い
6　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトローム・炭化物・焼土を多量に混入　しまり粘性共に強い
　　（カマド天井部崩落土）
7　暗褐色土　　灰白色粘質土　ソフトローム・炭化物・焼土を多量に混入　黒色灰層主体
　　（カマド天井部崩落土）
8　暗褐色土　　焼土・炭化物を少量混入　しましなし
9　黒色土　　カマド灰層

Ｐ１
1　暗黄褐色土　ソフトロームを多量に混入　しまり弱い
2　暗褐色土　　ソフトローム・灰白色粘質土を少量混入　粘性あり

Ｐ２
1　暗褐色土　ソフトロームを多量に混入　よくしまっている

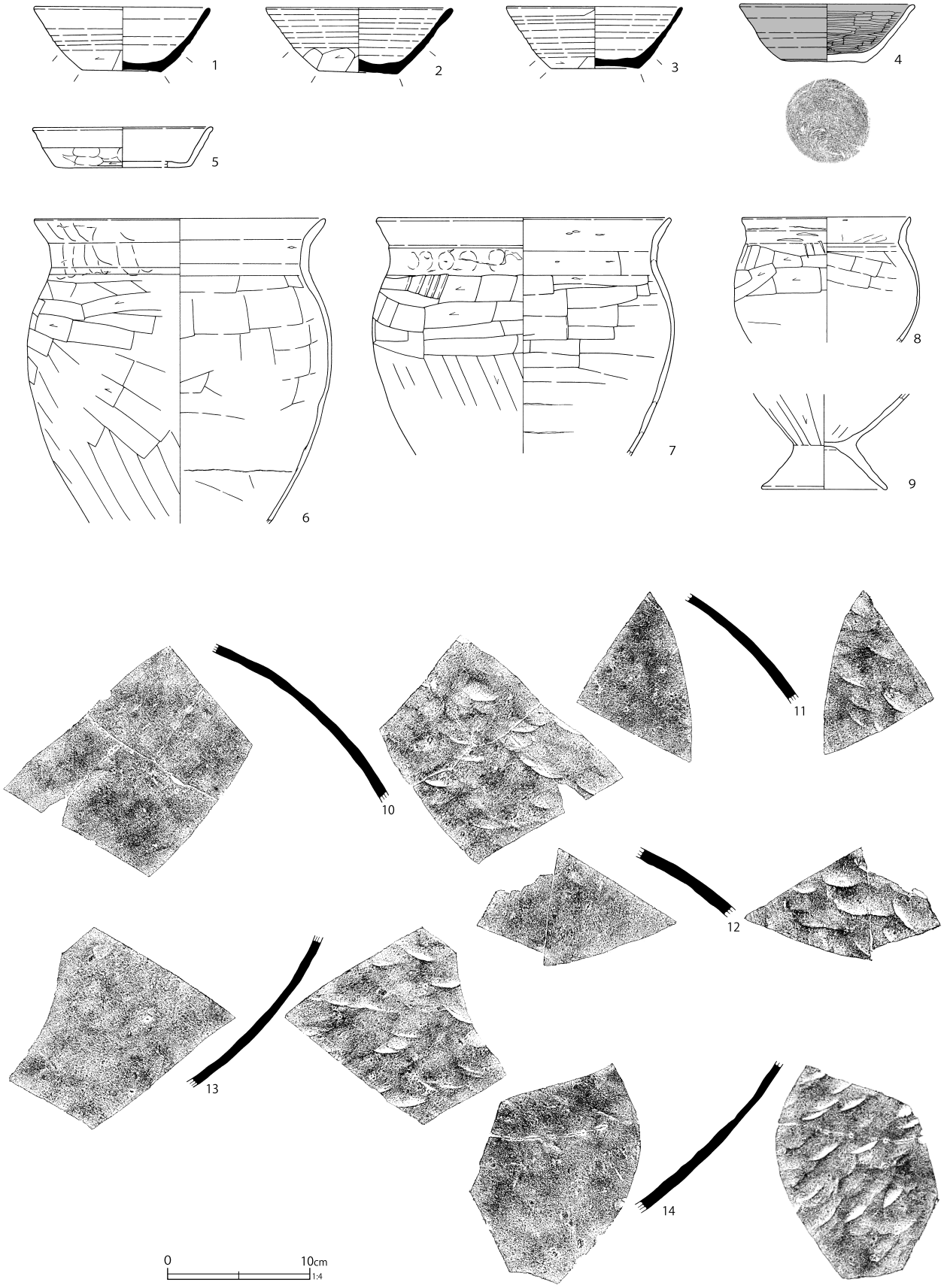
第295図　第８号住居跡

0.15 ～ 0.20 ｍで、床面はやや凹凸があり、遺構の東側が若干高い。覆土は灰白色粘土、ロームブロックを多く含む暗褐色土、暗黄褐色土で自然堆積である。貼床、掘り方等は検出されなかった。

カマドは北壁のやや東寄りで検出された。燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道が壁から大きく突出している。袖を含む長さは 1.05 ｍ、幅 0.45 ｍである。焚口部の手前は段状に５cm ほど浅くなり、カマド本体は焚口部と燃焼部が深さ 10cm ほどの浅い土壙状に下がっている。覆土は７・８層が天井部崩落土、９層が灰層と考えられる。火床面はあまり焼けておらず、左右両方の壁面が良く焼けていた。袖は削り出しである。

柱穴は２基確認された。規模は径 0.25 ｍ前後、深さ 0.10 ～ 0.15 ｍである。覆土はソフトロームを多量に含む暗褐色土、黄褐色土である。

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.25 ｍ、深さ 0.05 ｍで、北東コーナーを除き、ほぼ全周する。



第296図　第８号住居跡出土遺物

第82表　第８号住居跡出土遺物観察表（第296図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.2	4.5	5.6	ＥＨＩＫ	60	普通	灰	三和窯か　№２・30・51	116-4
2	須恵器	坏	13.0	4.5	5.5	ＡＤＥＩＫ	80	普通	灰白	三和窯か　№31・39	116-5
3	須恵器	坏	12.2	4.4	6.1	ＡＣＤＥＧＨＩ	70	普通	淡黄	三和窯　９Ｃ2/4　№５	116-6
4	ロクロ土師	坏	12.0	4.1	6.0	ＡＣＥＨＩＪ	70	良好	にぶい橙	内外面黒色処理　№19・22	116-7
5	土師器	坏	(12.6)	[2.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい褐		
6	土師器	甕	(20.5)	[21.4]	－	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	橙	内外面煤付着　№13・35・47・48　カマド№３・４・７・９・10・50	117-1
7	土師器	甕	(20.6)	[16.6]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　カマド№14・18・21・23・25	117-2
8	土師器	小型甕	11.9	[8.8]	－	ＣＥＨＩＫ	65	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　９Ｃ中　№42・44・45　カマド№6・20	117-3
9	土師器	台付甕	－	[6.7]	8.8	ＣＤＥＨＩＪＫ	80	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着　№41・43　カマド№15・16・49	116-8
10	須恵器	大甕	－	[11.0]	－	ＥＩＪＫ	5	良好	灰	№33・34・36・40	223-1
11	須恵器	大甕	－	[7.7]	－	ＥＩＪＫ	5	良好	灰白	南比企産　№37	223-1
12	須恵器	大甕	－	[4.9]	－	ＥＩＪＫ	5	良好	灰	№38　カマド№12	223-1
13	須恵器	大甕	－	[10.8]	－	ＥＩＪＫ	5	良好	灰	№32	223-1
14	須恵器	大甕	－	[10.5]	－	ＤＥＨＩＪＫ	5	良好	灰	南比企産　カマド№８・11	223-1

遺物は少なくカマド周辺から集中して出土した。器種は平安時代の須恵器坏、須恵器大甕、ロクロ土師器坏、土師器甕である。

１～３は須恵器の坏である。１は底部外周、底面手持ヘラケズリ。長石粒を多く含む。三和窯産。３は破片の状態で被熱しており、破片ごとに色調が異なる。

４はロクロ土師器の坏である。内外面黒色処理され、内面は密にヘラ磨きが施されている。底面回転糸切り。

５～８は土師器である。５は坏である。低平な器形で平底である。坏部下半は指オサエ痕が明瞭に残る。底面手持ちヘラケズリ。６～８は甕である。８は小型のため台付甕の可能性がある。所謂コの字甕で、口縁部下位には指オサエ痕が明瞭に残る。８は小型で、明瞭なコの字甕ではなく、口縁部が短めである。口縁部に接合痕、工具痕が認められる。

９は台付甕である。胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、脚台部は横ナデが施されている。

10～14は大甕の胴部である。いずれも外面平行タタキ後ヘラナデ、内面には径３cmの当て具痕が認められ、ナデ消されている。

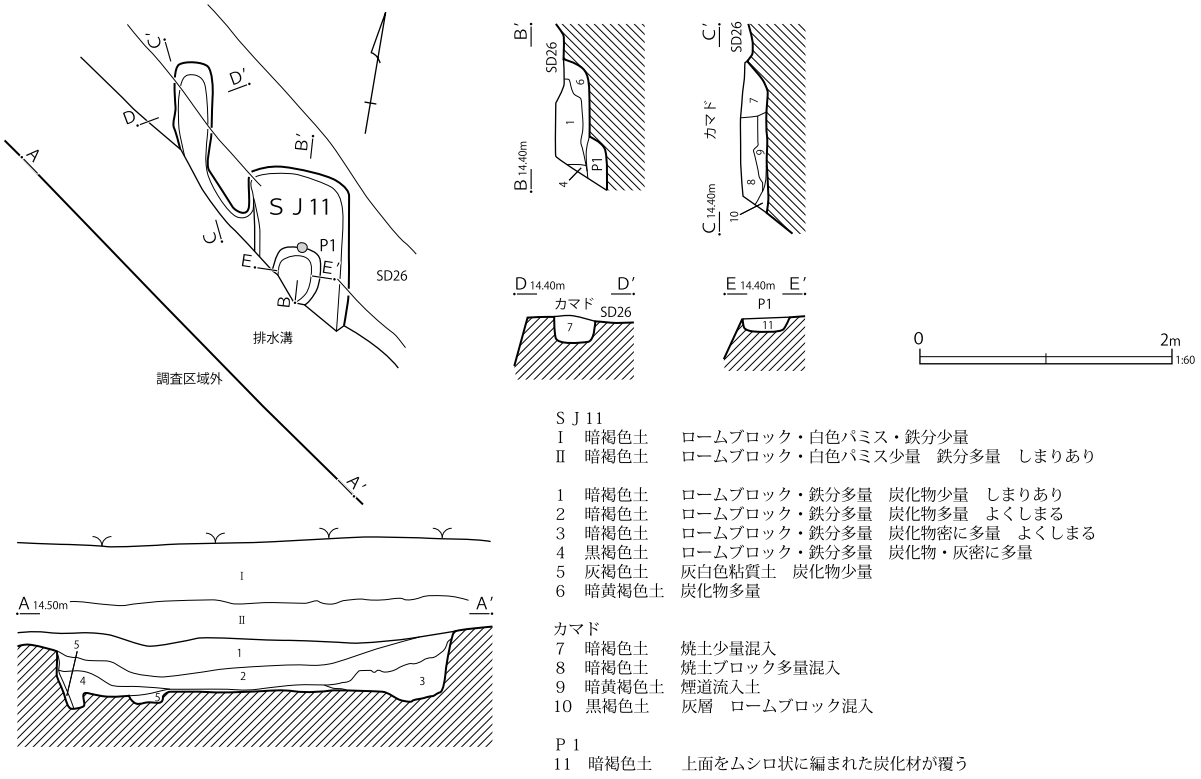
本住居跡は９世紀第２～３四半期、屋敷裏Ⅵ－１期である。

第 11 号住居跡（第 297 図）

Ａ区の中央、Ｄ・Ｅ－４グリッドに位置する。遺構の南西側の大部分が調査区域外にかかる。第 26 号溝跡と重複し、本遺構が古い。北カマドで、主軸方位はＮ－10°－Ｗである。

竪穴本体のほとんどの部分が調査区域外となるため詳細は不明だが、平面形は方形もしくは長方形と推定される。遺存している規模は南北方向 1.3 ｍ、東西方向 1.4 ｍである。深さは 0.35 ｍである。覆土はロームブロック、炭化物を多く含む暗褐色土で自然堆積である。最下層（４層）は灰を多く含む炭化物層である。５層は灰白色粘土の貼床である。

カマドは燃焼部の右側と煙道が検出された。燃焼部は壁内に収まり、煙道が突出する形態と推定される。袖を含む現存長は 1.30 ｍ、幅は不明だが右袖の位置から、0.30 ～ 0.40 ｍと推定される。覆土は第８層がカマド天井部崩落土、第 10 層が灰層と考えられる。壁面は若干焼けているが、火床面はあまり焼けていなかった。袖は基底面近くしか遺存していなかった。黄灰色粘土の削り出し



SJ11
Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック・白色パミス・鉄分少量
Ⅱ　暗褐色土　ロームブロック・白色パミス少量　鉄分多量　しまりあり

1　暗褐色土　ロームブロック・鉄分多量　炭化物少量　しまりあり
2　暗褐色土　ロームブロック・鉄分多量　炭化物多量　よくしまる
3　暗褐色土　ロームブロック・鉄分多量　炭化物密に多量　よくしまる
4　黒褐色土　ロームブロック・鉄分多量　炭化物・灰密に多量
5　灰褐色土　灰白色粘質土　炭化物少量
6　暗黄褐色土　炭化物多量

カマド
7　暗褐色土　焼土少量混入
8　暗褐色土　焼土ブロック多量混入
9　暗黄褐色土　煙道流入土
10　黒褐色土　灰層　ロームブロック混入

P1
11　暗褐色土　上面をムシロ状に編まれた炭化材が覆う

第297図　第11号住居跡

である。

床面からはピット１基が検出された。長辺0.45 m、短辺0.35 m、深さ0.10 mの隅丸長方形である。覆土は暗褐色土で、上面がムシロ状の炭化物で覆われ、北端からは焼土塊が出土した。位置的には貯蔵穴と考えられるが、深度が浅く確実ではない。

柱穴、壁周溝は検出されなかった。

遺物は出土していないが、軸方向、遺構の形態から平安時代に帰属するものと判断した。屋敷裏Ⅵ－１期としておきたい。

第16号住居跡（第298・299図）

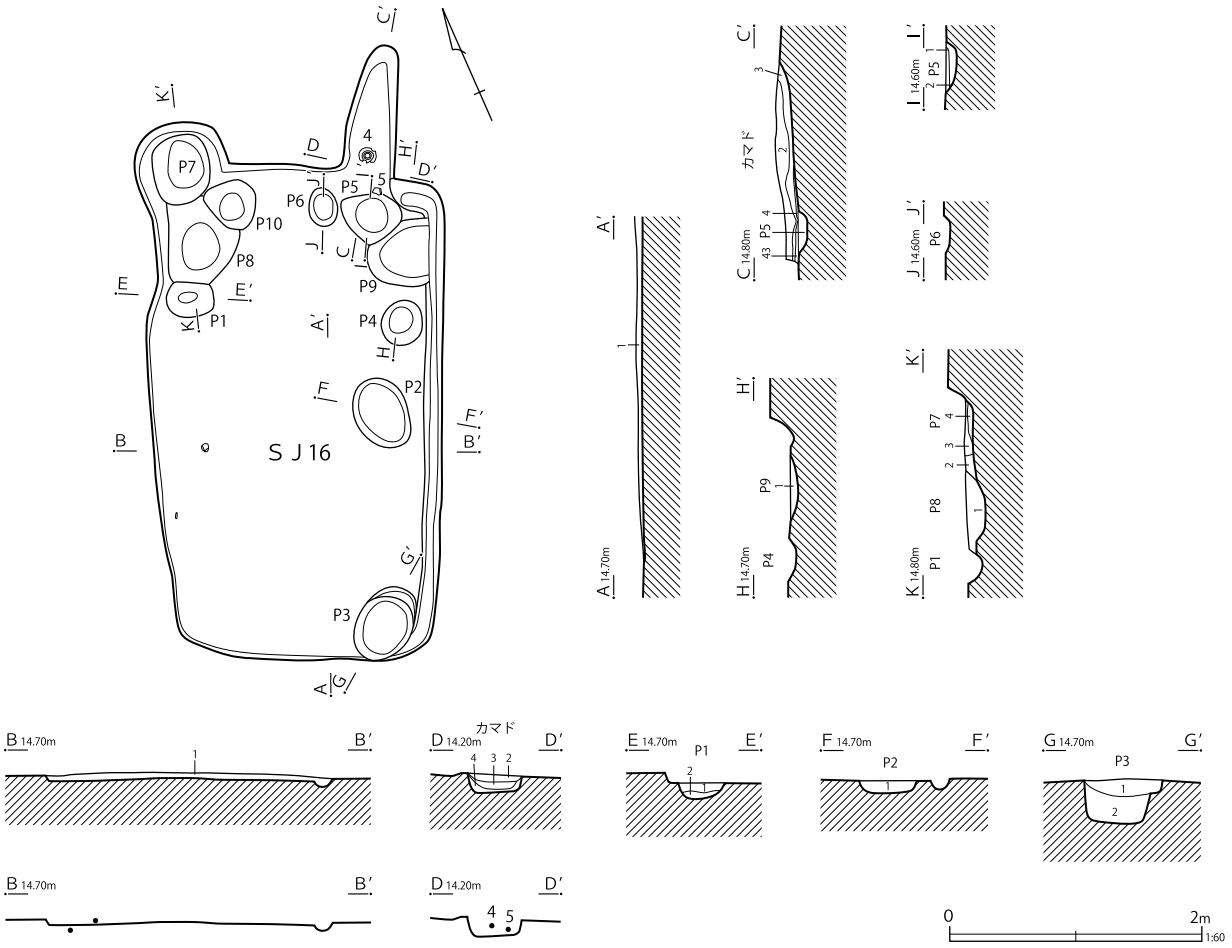
A区の中央やや東側、Ｅ－７・８グリッドに位置する。北カマドで、主軸方位はＮ－27°－Ｗである。

平面形は縦長の長方形である。規模は、主軸方向3.85 m、直交軸方向2.35 mである。深さは0.05 mで、床面はほぼ平坦であった。覆土は酸化鉄を多く含む褐色土の単層である。貼床、掘り方等は検出されなかった。

カマドは北壁の東寄りで検出された。燃焼部は壁の外側に若干広がり、煙道は壁から大きく突出している。袖を含む長さは1.00 m、幅0.40 mである。焚口部の手前のＰ５は炭化物、焼土、灰を多く含む褐色土が覆土で、焚口部と考えられる。袖が検出されず、カマド内燃焼部とその外側は連続している。燃焼部覆土は２層が天井部崩落土、３層が灰層と考えられる。火床面はあまり焼けておらず、煙道部の左右両方の壁面が良く焼けていた。中央に支脚がわりのロクロ土師器高台付埦が据えられていた。

ピットは10基を確認したが、前述のＰ５を除いて柱穴、貯蔵穴等の用途を特定できるものはない。規模は径0.35 m前後、0.50 m前後、0.65 m前後の３者がある。深さは0.05～0.33 mで、覆土は地山土を含む褐色土、暗褐色土である。

壁周溝は幅0.15～0.25 m、深さ0.05 mで、東辺のみに認められた。



SＪ16
1　褐色土　　地山に近似　酸化鉄多量
2　暗褐色土　焼土ブロック含む
3　黒褐色土　灰層　炭化物密に多量　焼土少量
4　褐色土　　粘性のある褐色土　混入物は含まない

P1
1　褐色土　　炭化物粒子・灰色粒子含む
2　明褐色土

P2
1　暗褐色土　明褐色土ブロック含む

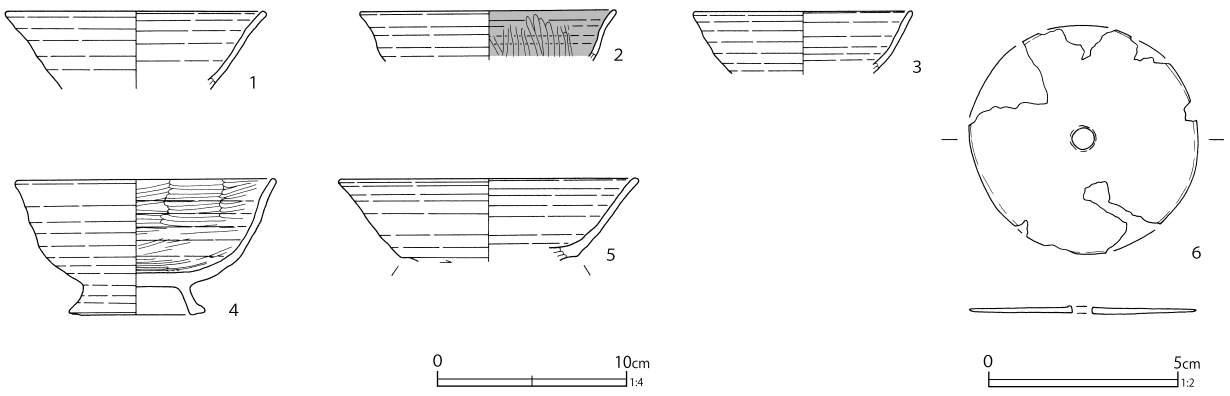
P3
1　暗褐色土　明褐色土ブロック含む
2　褐色土　　砂質土

P5
1　褐色土　　炭化物・焼土を多量
2　明褐色土　炭化物少量　よくしまる

P７・８
1　褐色土　　明褐色ブロック含む
2　暗褐色土　地山に近似　粘性・しまり強い
3　暗褐色土　炭化物密に混入
4　褐色土　　地山に近似　しまり強い

P９
1　褐色土　　褐色シルトブロック少量

第298図　第16号住居跡



第299図　第16号住居跡出土遺物

第83表　第16号住居跡出土遺物観察表（第299図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(13.8)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	浅黄橙		
2	ロクロ土師	坏	(13.6)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	にぶい橙	内面黒色処理	
3	ロクロ土師	坏	(11.7)	[3.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	明褐灰		
4	ロクロ土師	高台付埦	(13.8)	6.1	5.8	ＡＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	カマドNo.３	131-6
5	ロクロ土師	高台付埦	(15.8)	[4.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	橙	カマドNo.４	
6	鉄製品	紡錘車	直径6.0　孔径0.6　厚さ0.2　重さ22.9ｇ								222-1

遺物は少なく、覆土中から平安時代の須恵器坏、ロクロ土師器坏、土師器甕の破片が出土している。

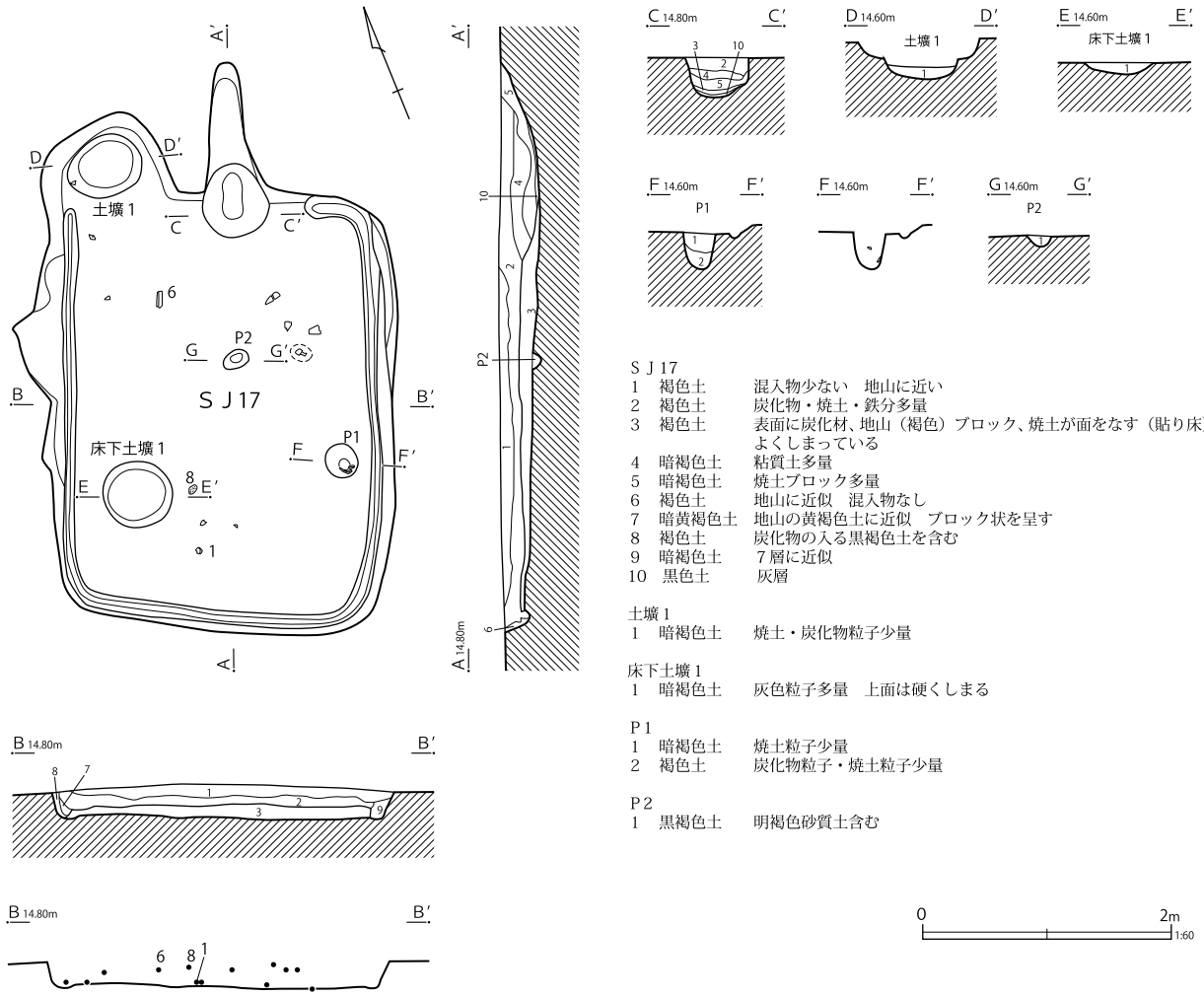
１～５はロクロ土師器である。いずれも利根川流域産。１～３は坏である。１は角閃石を多く含む。２は内面が黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。４・５は高台付埦である。４の内面はヘラ磨きが施されている。高台は高めである。５は底面周辺のヘラケズリが認められるのみである。

６は鉄製の紡錘車である。全体の４分の３ほどが遺存している。

本住居跡の時期は10世紀第１四半期、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第17号住居跡（第300・301図）

Ａ区の中央やや東側、Ｅ・Ｆ－８グリッドに位



ＳＪ17
1　褐色土　　混入物少ない　地山に近い
2　褐色土　　炭化物・焼土・鉄分多量
3　褐色土　　表面に炭化材、地山（褐色）ブロック、焼土が面をなす（貼り床）よくしまっている
4　暗褐色土　粘質土多量
5　暗褐色土　焼土ブロック多量
6　褐色土　　地山に近似　混入物なし
7　暗黄褐色土　地山の黄褐色土に近似　ブロック状を呈す
8　褐色土　　炭化物の入る黒褐色土を含む
9　暗褐色土　７層に近似
10　黒色土　　灰層

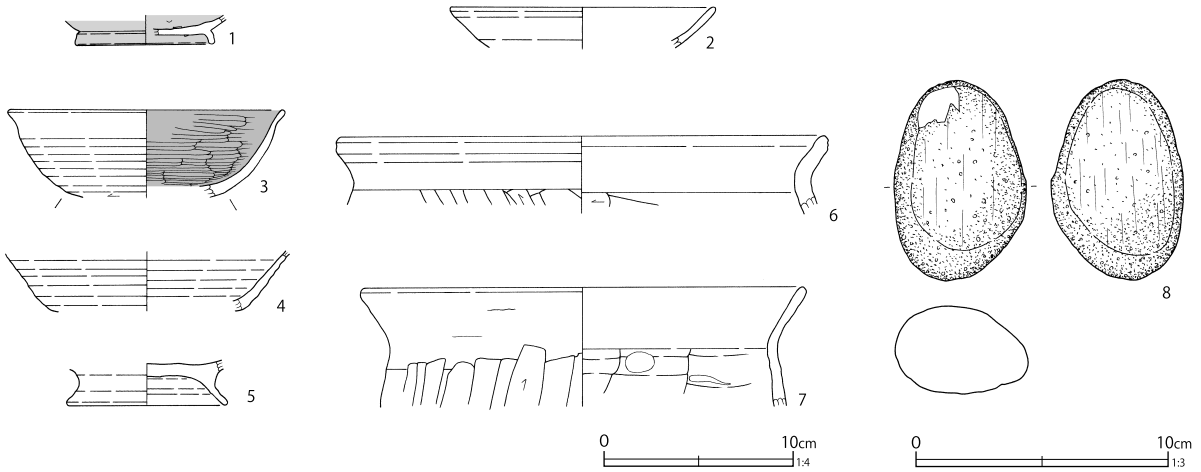
土壙１
1　暗褐色土　焼土・炭化物粒子少量

床下土壙１
1　暗褐色土　灰色粒子多量　上面は硬くしまる

Ｐ１
1　暗褐色土　焼土粒子少量
2　褐色土　　炭化物粒子・焼土粒子少量

Ｐ２
1　黒褐色土　明褐色砂質土含む

第300図　第17号住居跡



第301図　第17号住居跡出土遺物

第84表　第17号住居跡出土遺物観察表（第301図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	緑釉陶器	皿	－	[1.5]	(7.3)	ＩＫ	25	良好	灰オリーブ	多治見産か　№13	
2	灰釉陶器	碗	(14.0)	[2.1]	－	ＩＫ	10	良好	灰白	猿投産か	
3	ロクロ土師	坏	(14.2)	[4.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	橙	内面黒色処理　№２　Ｐ１	
4	ロクロ土師	坏	－	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理の可能性あり	
5	ロクロ土師	高台付坏	－	[2.3]	(8.4)	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甕	(26.0)	[4.0]	－	ＡＣＥＨＩＪＫ	10	普通	橙	№４	
7	土師器	甕	(23.6)	[6.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	褐灰	外面煤付着	
8	石製品	砥石	長さ8.0　幅5.3　厚さ3.7　重さ74.2ｇ　安山岩							№10	

置する。北カマドで、主軸方位はＮ－25°－Ｅである。

平面形は縦長の長方形である。北西コーナーが東西1.1ｍ、南北0.8ｍの土壙状に突出している。規模は、主軸方向3.05ｍ、直交軸方向2.75ｍである。深さは0.20ｍで、床面はほぼ平坦であった。覆土は炭化物、焼土、酸化鉄を含む褐色土で、自然堆積である。床面には全体に地山ブロック、焼土、炭化物が面として広がっていた。貼床は床面全体に施され、硬質の褐色土が充填されていた。床面からの深さは0.10ｍほどで、底面は東側と北側へ向かって若干深くなっていた。

カマドは北壁の中央で検出された。燃焼部は土壙状を呈し、壁の外側まで広がっている。煙道は壁から大きく突出している。長さ1.90ｍ、幅0.40ｍである。袖が検出されず、カマド内燃焼部とその外側は連続して灰層が広がる。燃焼部の覆土は第４・５層が天井部崩落土、第10層が灰層と考えられる。火床面はあまり焼けておらず、煙道部の左右両方の壁面が良く焼けていた。

北西コーナーの北西側突出箇所には土壙１が設けられていた。長軸0.60ｍ、短軸0.50ｍ、深さ0.15ｍ、覆土は暗褐色土の単層である。

ピットは２基を検出されたが柱穴とは判断し難い。Ｐ１は東壁沿いにあり、径0.30ｍ、深さ0.30ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土、暗褐色土である。中層からロクロ土師器坏（３）が出土している。Ｐ２は住居のほぼ中央に設けられており、長径0.20ｍ、短径0.15ｍ、深さ0.10ｍである。覆土は砂を含む黒褐色土の単層である。

壁周溝は幅0.15～0.35ｍ、深さ0.05～0.10ｍで、北西コーナーを除き、全周する。

床下土壙１は、南西コーナー手前に設けられて

いた。長軸 0.55 m、短軸 0.50 m、深さ 0.10 m である。覆土は灰色粒子を多く含む暗褐色土の単層で、上面が硬化してた。

遺物は少なく、平安時代の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器坏、ロクロ土師器坏、土師器甕の破片が床面、貼り床中から出土している。古墳時代後期の甕が混入している。

１は緑釉陶器の皿である。内外面にトチン痕が見られる。東濃産。虎渓山１号窯段階。２は灰釉陶器の碗である。内面は剥離が進み、外面のみに釉が残っている。東濃産。虎渓山１号窯段階。３・４はロクロ土師器の坏である。利根川流域産。３は口径が大きく、低平な器形である。内面ヘラ磨き。底面回転糸切り。４は上下を欠失するが、大型になると考えられる。外面のロクロ目が明瞭である。黒色処理の可能性があるが、判然としない。

６は土師器の甕である。厚手で径が大きい。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。常陸系。７は胎土に細かな白色粒子を多く含む。下野産か。

８は、安山岩製の砥石である。楕円形で、僅かに擦痕が認められる。

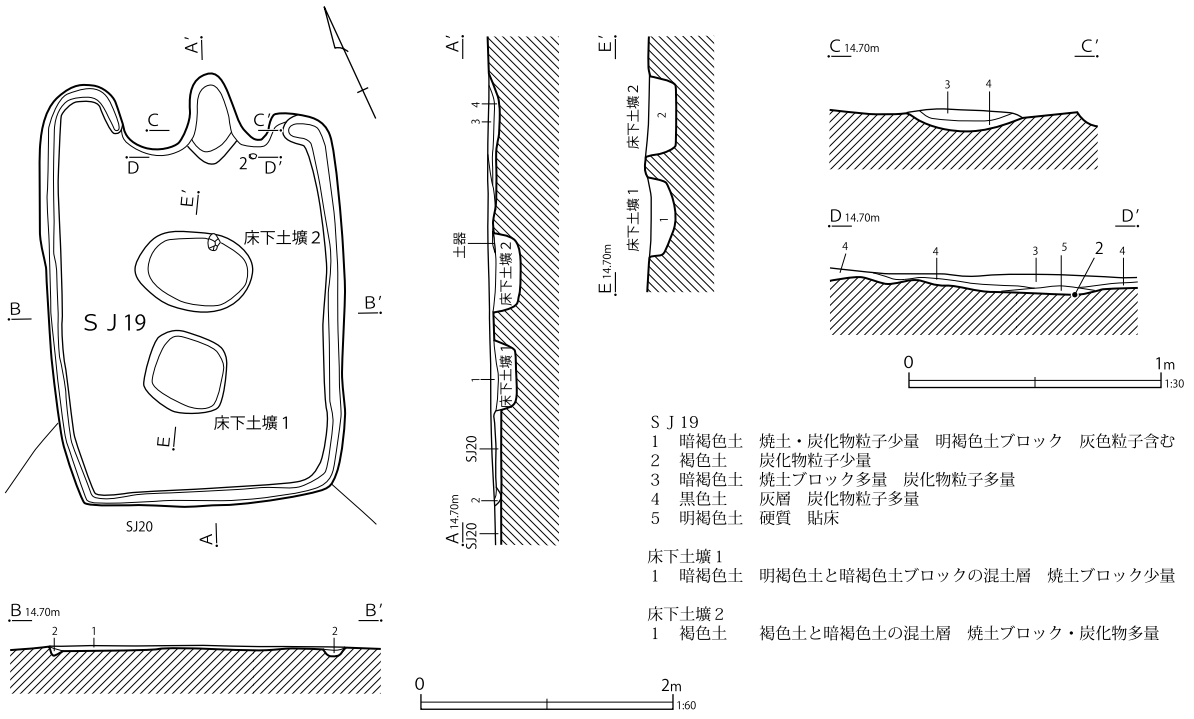
本住居は 10 世紀前半、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第 19 号住居跡（第 302・303 図）

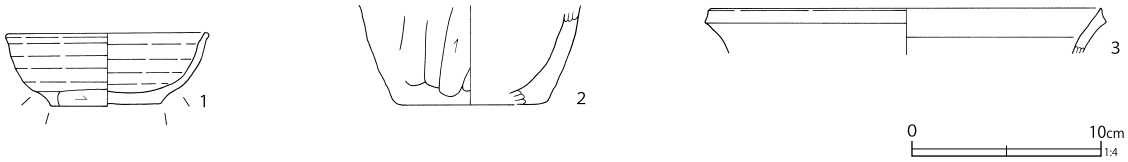
A区東端、Ｆ－８・９グリッドに位置する。第 20 号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北カマドで、主軸方位はＮ－ 24° －Ｅである。

平面形は縦長の長方形である。北西コーナーが半円形に、東西 0.65 m、南北 0.50 m 突出している。規模は、主軸方向 3.10 m、直交軸方向 2.40 m である。深さは 0.05 m で、床面はほぼ平坦であった。覆土は焼土、炭化物、明褐色土、灰色粒子を含む暗褐色土の単層である。貼床は検出されなかったが床下土壙２基が認められた。

カマドは北壁の中央で検出された。燃焼部は土壙状を呈し、壁の外側に突出している。煙道は検出されなかった。長さ 0.70 m、幅 0.40 m である。袖が検出されず、カマド内燃焼部とその外側は連続して灰層が広がっていた。燃焼部の覆土は３層が天井部崩落土、４層が灰層である。５層は硬質



第302図　第19号住居跡



第303図　第19号住居跡出土遺物

第85表　第19号住居跡出土遺物観察表（第303図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(10.9)	3.8	6.0	ＡＣＨＩＫ	70	普通	浅黄橙	床下SK２	
2	土師器	甕	－	[4.2]	(8.0)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	外面煤付着　№２	
3	土師器	甕	(21.0)	[2.4]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	灰白	内面煤付着	

で掘り方の充填土と考えられる。火床面はあまり焼けておらず、煙道部の左右両方の壁面が良く焼けていた。

壁周溝は幅 0.10 ～ 0.15 m、深さ 0.05 m で、全周する。他の住居跡と異なり、北西コーナーの突出部にも周溝が巡っている。

床下土壙は床面の中央から２基検出された。床下土壙１は、一辺 0.60 m の不整方形で、深さ 0.15 m である。覆土は焼土を含む暗褐色土と明褐色土の混土層で、埋戻しである。床下土壙２は、長軸 0.90 m、短軸 0.65 m、深さ 0.20 m の楕円形ある。覆土は焼土、炭化物を多く含む褐色土と暗褐色土の混土層で、埋戻しである。

遺物は少なく、平安時代のロクロ土師器坏、土師器甕の破片が出土している。１はロクロ土師器の坏である。底部外周、底面へラケズリ。風化のため、調整は非常に不明瞭である。利根川流域産。

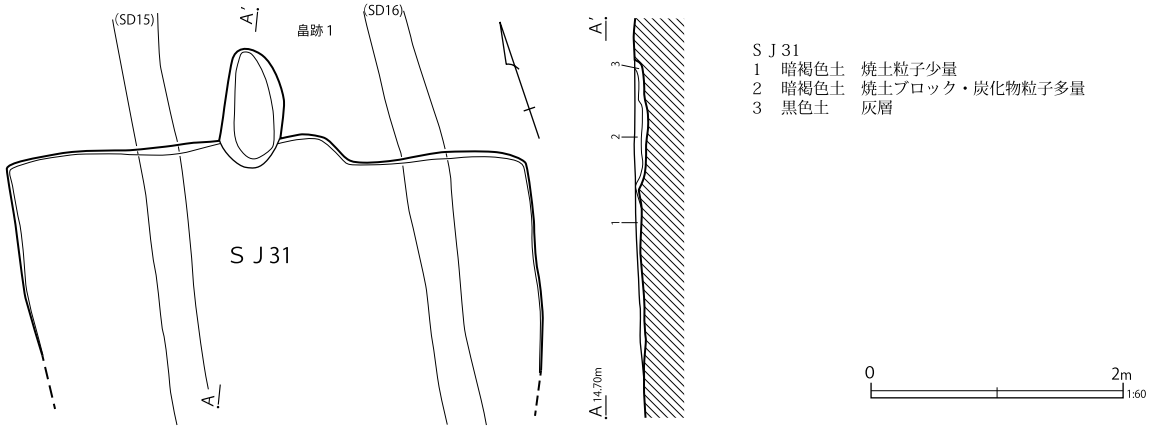
２は土師器の甕である。外面には煤と炭化物が付着する。風化のため内面の調整は不明である。３は径が大きな甕である。端部は面を持ち、内外面横ナデが施されている。

本住居は 10 世紀前半、屋敷裏Ⅵ－４期である。

第 31 号住居跡（第 304・305 図）

Ａ区西側、Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置する。第１号畠跡と重複し、本住居跡が新しい。ごく浅いため、遺構の南側は検出されなかった。北カマドで、主軸方位はＮ－ 18°－Ｅである。

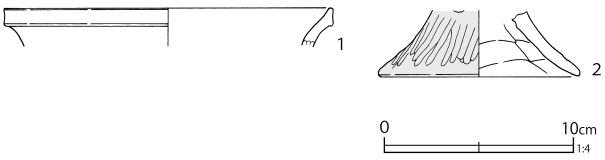
検出範囲の平面形は方形で、主軸方向 1.75 m、直交軸方向 4.10 m である。深さは 0.03 m で、床面はほぼ平坦であった。覆土は焼土を含む暗褐色



第304図　第31号住居跡

第86表　第31号住居跡出土遺物観察表（第305図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(17.4)	[2.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	褐灰	内外面煤付着	
2	土師器	高坏	－	[3.3]	(10.8)	ＡＤＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	外面赤彩	



第305図　第31号住居跡出土遺物

土の単層である。貼床は検出されなかった。

カマドは北壁の中央で検出された。燃焼部は土壙状を呈し、壁の外側に突出している。煙道は検出されなかった。長さは0.70 m、幅0.40 mである。袖は検出できず、住居跡廃絶時に壊されたと考えられる。燃焼部の覆土は、第２層が天井部崩落土、３層が灰層である。火床面、壁面は良く焼けていた。壁周溝や柱穴は検出されなかった。

遺物は少なく、平安時代の土師器甕の破片が出土した。混入品で古墳時代後期の高坏が出土している。

１は土師器の甕である。端部は面を持つ。他地域系統の可能性もあるが、小破片のため確実ではない。

２は混入の古墳時代前期の高坏である。八の字状に開く。透孔が開けられているが、孔数は不明である。

出土遺物が少なく、確定しがたいが、軸方向や掘削の様相から、本住居跡の時期は９世紀後半、屋敷裏Ⅵ－１期と考えられる。

第 41 号住居跡（第 306 ～ 308 図）

Ｃ区の西端、Ｉ・Ｊ－13 グリッドに位置する。竪穴本体が全く同位置で建て替えられ、上下関係になっている。以下では上層部分を新段階、下層部分を古段階として記述する。

新段階は西カマドで、主軸方向はカマド１の付設方向、Ｓ－59°－Ｅである。古段階の床面を半ばまで埋め戻して新段階の床面としている。

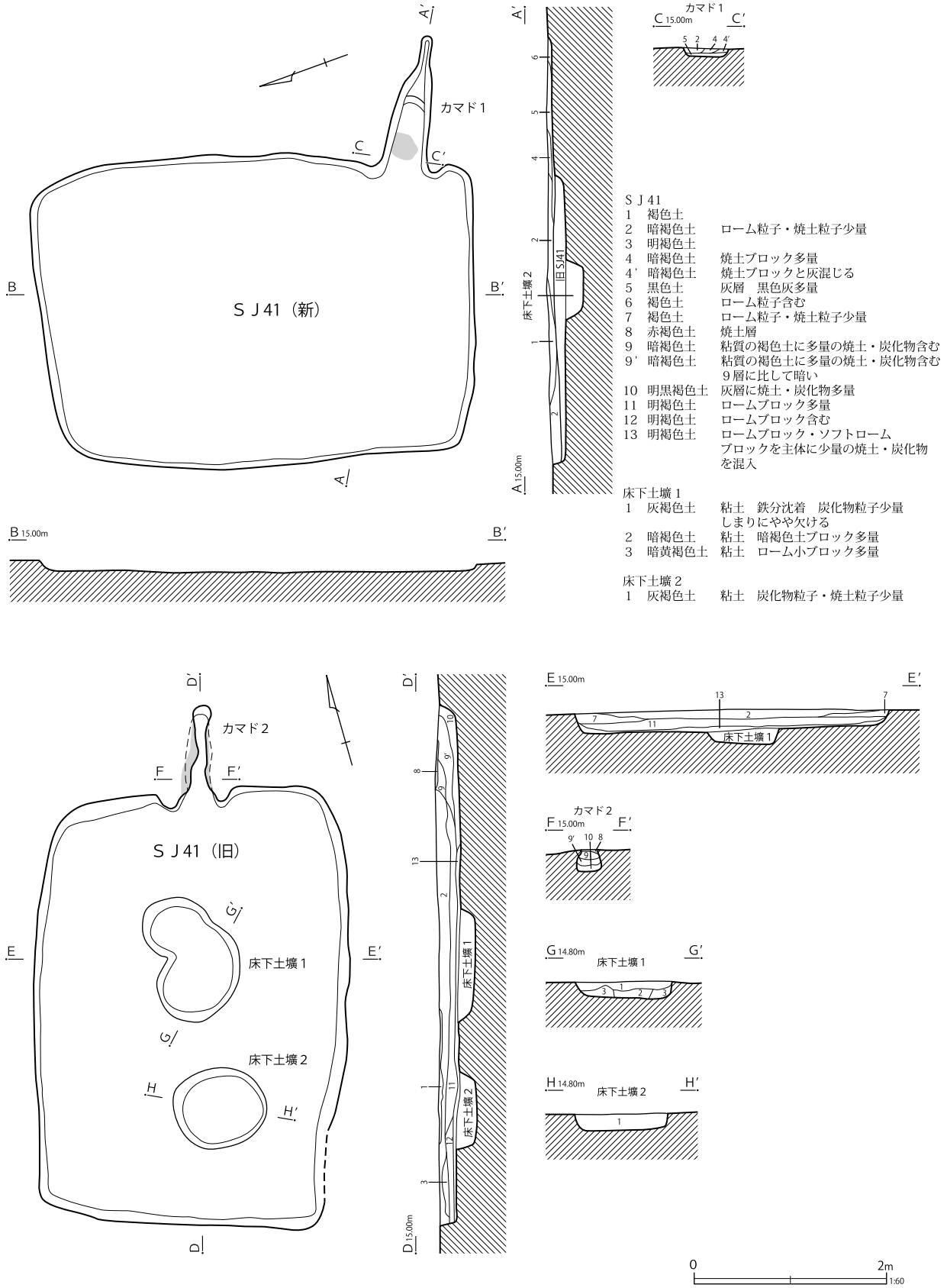
平面形はやや不整な長方形である。規模は主軸方向3.30 m、直交軸方向4.50 mである。深さは0.10 mで、覆土は焼土、ローム土を含む暗褐色土、明褐色土で、自然堆積である。床面は平坦で、貼床は検出されなかった。

カマドは西壁の南西コーナーに近い位置から検出された。燃焼部は壁から突出し、袖が短い。袖を含む規模は長さ1.55 m、幅0.45 mである。床面からそのまま燃焼部に至る。覆土は４・４’層がカマド天井部崩落土、５層が灰層である。壁面、火床面ともよく焼けていた。袖は削り出しである。焚口から0.9 mで奥壁となり、緩い段をもって煙道部となる。煙道部は長さ0.65 m、幅0.30 mだが、先端部は細くなり、幅0.13 mとなっている。奥壁は緩やかに立ち上がる。

古段階は北カマドで、主軸方向はカマド２の付設方向、Ｎ－18°－Ｅである。新段階の竪穴より一段深く、古段階の竪穴が半ばまで埋め戻されて新段階の竪穴の床面が造出されている。

平面形は不整な長方形である。規模は主軸方向4.45 m、直交軸方向3.30 mである。深さは0.20 mである。上層の覆土は新段階の覆土、下層の覆土はローム土を含む明褐色土で、埋戻しである。床面は平坦で、貼床が施されていた。

カマドは北壁の中央で検出された。燃焼部は壁から突出し、袖が短い。壁から外側は一部天井部が遺存していた。袖を含む規模は長さ1.05 m、幅0.25 mである。床面からそのまま燃焼部、煙道部に至る。覆土は第８層がカマド天井部、９・９’層がカマド天井部崩落土、10層が灰層である。灰層はカマド焚口部から煙道まで連続して形成されていた。天井、壁面、火床面ともよく焼け、焼

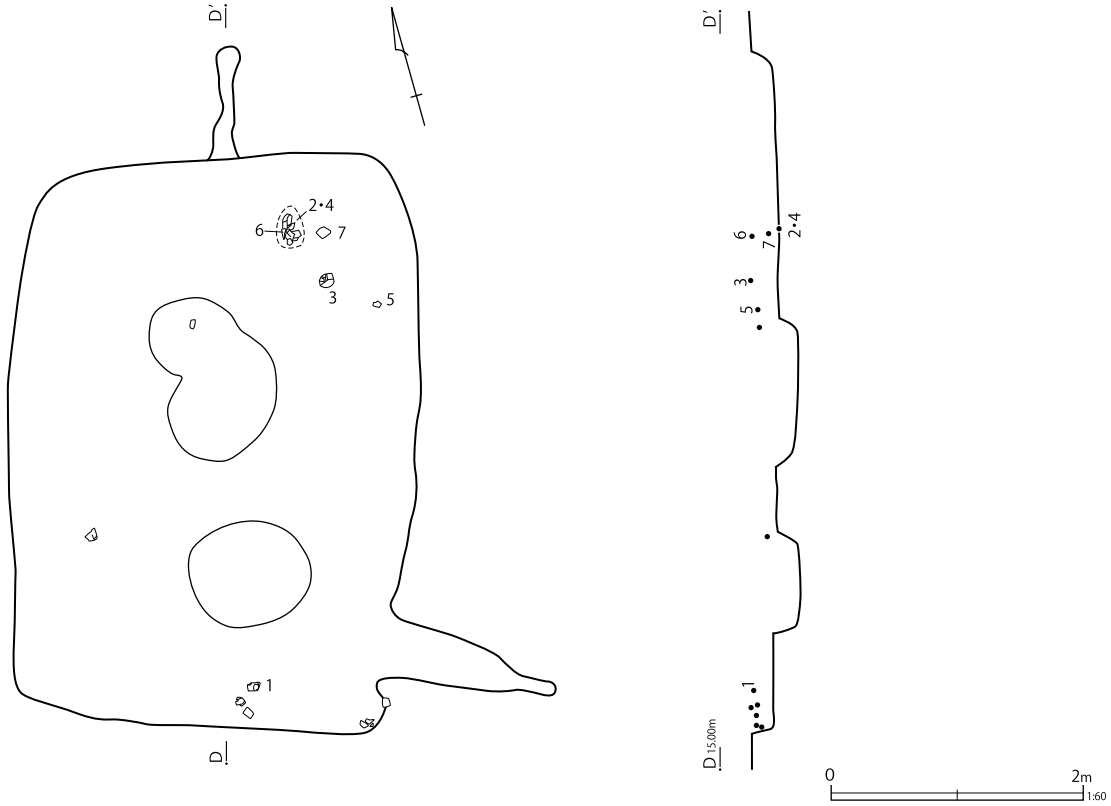


ＳＪ41
1　褐色土
2　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
3　明褐色土
4　暗褐色土　焼土ブロック多量
4’暗褐色土　焼土ブロックと灰混じる
5　黒色土　灰層　黒色灰多量
6　褐色土　ローム粒子含む
7　褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
8　赤褐色土　焼土層
9　暗褐色土　粘質の褐色土に多量の焼土・炭化物含む
9’暗褐色土　粘質の褐色土に多量の焼土・炭化物含む
９層に比して暗い
10　明黒褐色土　灰層に焼土・炭化物多量
11　明褐色土　ロームブロック多量
12　明褐色土　ロームブロック含む
13　明褐色土　ロームブロック・ソフトローム
ブロックを主体に少量の焼土・炭化物
を混入

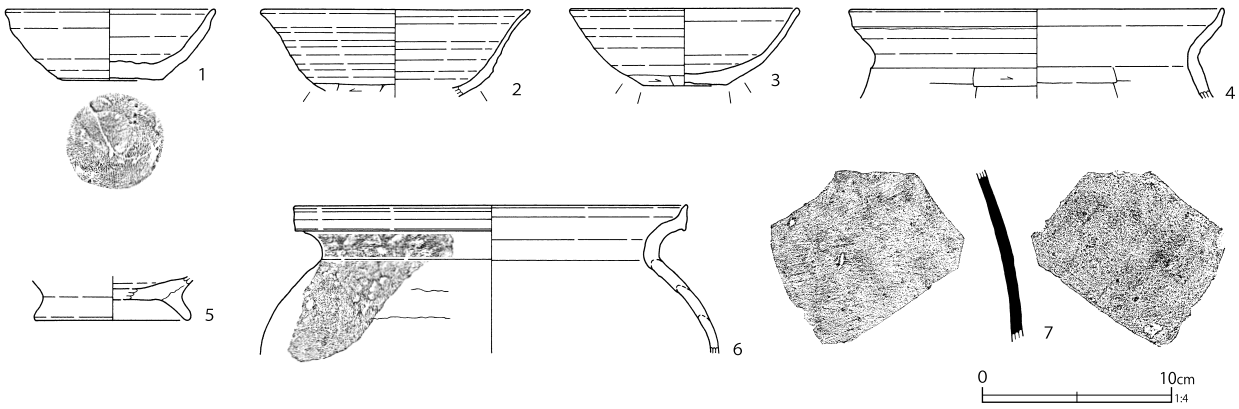
床下土壙１
1　灰褐色土　粘土　鉄分沈着　炭化物粒子少量
しまりにやや欠ける
2　暗褐色土　粘土　暗褐色土ブロック多量
3　暗黄褐色土　粘土　ローム小ブロック多量

床下土壙２
1　灰褐色土　粘土　炭化物粒子・焼土粒子少量

第306図　第41号住居跡



第307図　第41号住居跡遺物分布



第308図　第41号住居跡出土遺物

第87表　第41号住居跡出土遺物観察表(第308図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(11.1)	3.7	5.7	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	にぶい橙	№６	159-5
2	ロクロ土師	坏	14.1	[4.6]	－	ＡＣＥＩＫ	60	普通	にぶい橙	外面煤付着　№13	159-6
3	ロクロ土師	坏	(12.1)	4.0	4.4	ＡＣＨＩ	40	普通	にぶい橙	№10	159-7
4	土師器	甕	(19.9)	[4.6]	－	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	②№13	
5	ロクロ土師	高台付坏	－	[2.3]	(8.2)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№11	
6	土師器	甕	(20.8)	[7.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	№９	
7	須恵器	甕	－	[9.0]	－	ＥＨＩＪＫ	5	良好	灰	南比企産　②№12	

土化していた。袖は削り出しである。煙道部は幅が徐々に狭くなり、煙出しは径 0.2 mのピット状で、奥壁は緩やかに立ち上がる。

床下土壙は住居跡の中央から２基検出された。床下土壙１は土壙２基が連続したような平面形である。規模は長軸 1.30 m、短辺 0.95 m、深さ 0.20 mである。覆土はロームブロックを多量に含む灰褐色土、暗褐色土で埋戻しである。

床下土壙２は、長軸 1.00 m、短軸 0.85 m、深さ 0.15 mである。覆土は炭化物、焼土を含む灰褐色粘土で埋戻しである。

遺物は少なく、南東、北西各コーナー近辺の新段階の床面から出土した。

平安時代のロクロ土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、甕、灰釉陶器、羽口の破片が出土した。古墳時代前期の台付甕の破片が混入している。

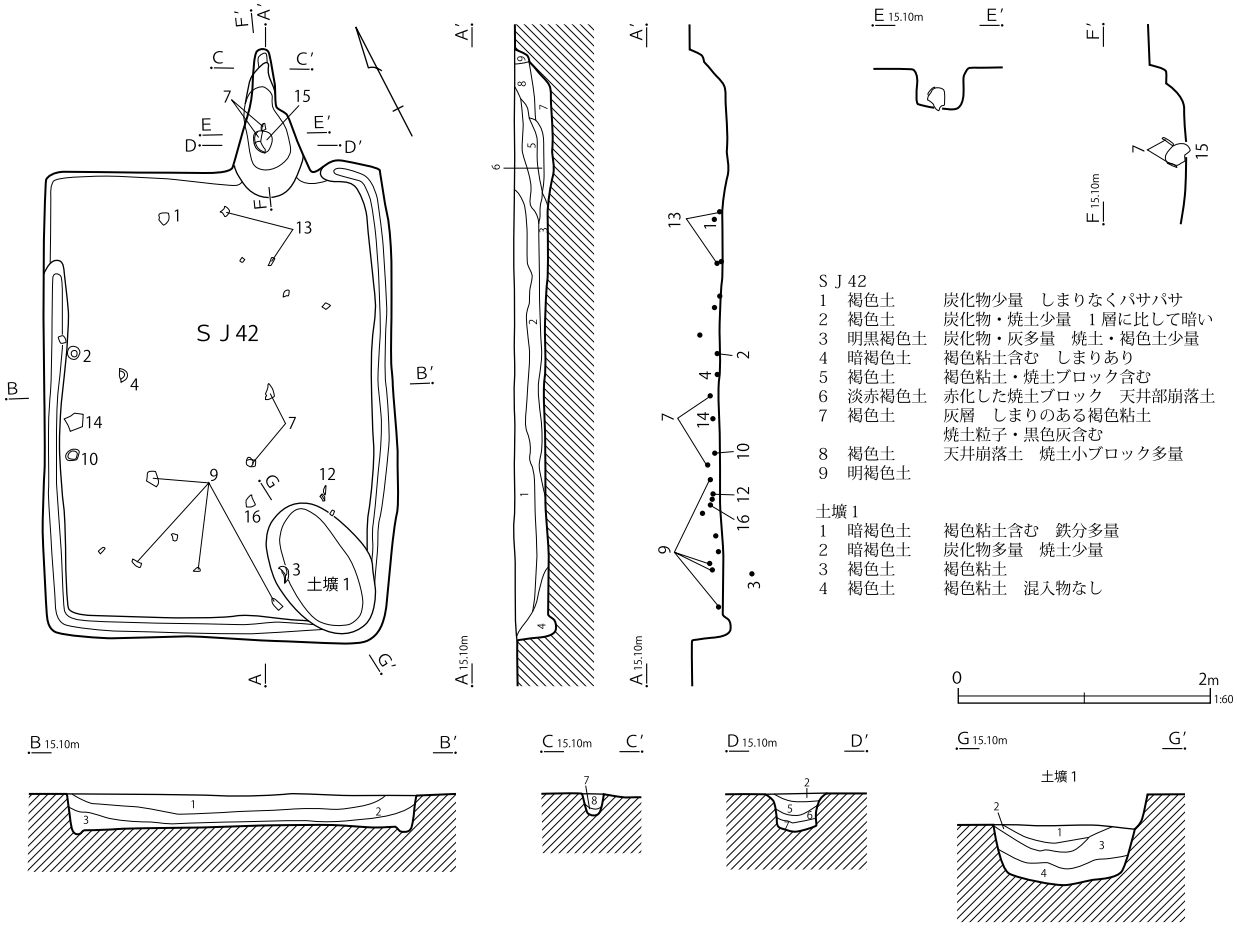
１～３・５はロクロ土師器である。利根川流域産。１～３は坏である。径はまちまちである。１は口径が 11.1cm とごく小さい。黄橙色を呈する。底面回転糸切り。２・３は底部外周ヘラケズリ。２は橙色と黒色の斑になっており、黒色処理の可能性がある。５はロクロ土師器の高台付坏である。胎土は粒子が粗い。

４・６は土師器の甕である。器肉が厚く、口縁部が受け口状を呈する。在地の粘土が用いられているが、常陸型甕の影響と考えられる。６は外面全体が剥離している。

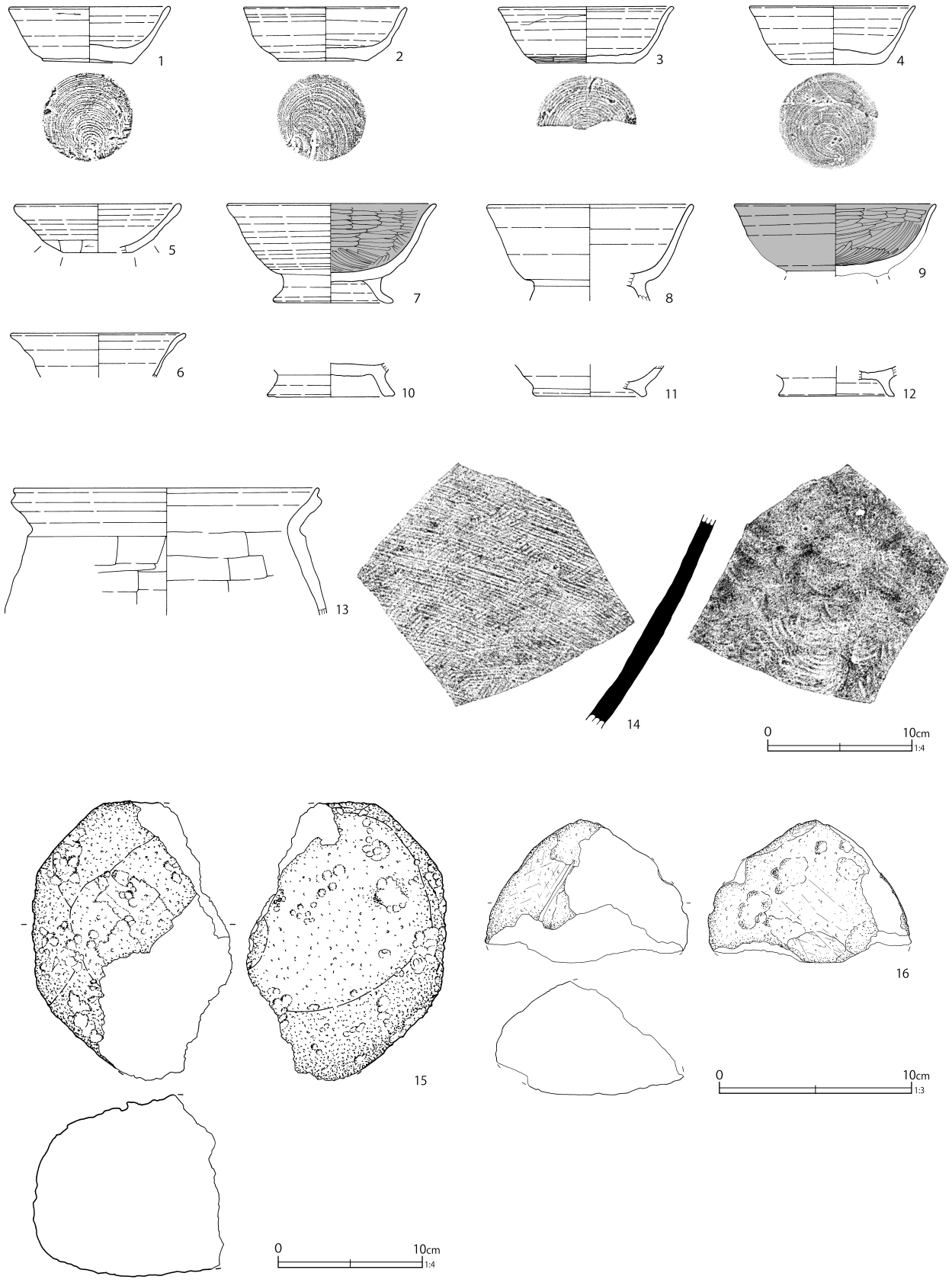
７は須恵器大甕の破片で、南比企産である。

本住居は 10 世紀初頭、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第 42 号住居跡（第 309・310 図）



第309図　第42号住居跡



第310図　第42号住居跡出土遺物

第88表　第42号住居跡出土遺物観察表（第310図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(11.0)	3.9	6.1	ＡＣＥＨＩＪＫ	65	普通	にぶい橙	№３	159-8
2	ロクロ土師	坏	11.2	3.7	6.0	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	№19	159-9
3	ロクロ土師	坏	(12.0)	3.8	6.8	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい橙	SK１№１	
4	ロクロ土師	坏	(11.4)	4.0	7.0	ＡＣＨＩ	70	普通	にぶい黄橙	№17	159-10
5	ロクロ土師	坏	(11.3)	[3.4]	(4.9)	ＡＣＨＩ	30	普通	にぶい橙		
6	ロクロ土師	坏	(12.0)	3.0	－	ＡＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	内面煤付着	
7	ロクロ土師	高台付埦	14.3	6.8	8.2	ＡＣＨＩＫ	80	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理　カマド№１・２　№７・８	160-1
8	ロクロ土師	高台付埦	(14.1)	[6.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
9	ロクロ土師	高台付埦	14.0	[5.0]	－	ＡＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理　№12・14・16・23	160-2
10	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.3]	8.5	ＡＣＨＩ	95	普通	にぶい黄橙	№21	160-3
11	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.1]	(7.4)	ＡＣＩＫ	5	普通	にぶい赤褐		
12	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.1]	(7.8)	ＡＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№９	
13	土師器	甕	(21.1)	[8.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№２・５	
14	須恵器	甕	－	[14.8]	－	ＡＥＩＫ	5	良好	灰	東毛産か　№20	
15	石製品	支脚	長さ[19.5]　幅[13.9]　厚さ13.0　重さ2174.4ｇ　安山岩							カマド№３　被熱により一部赤色化	
16	石製品	砥石	長さ[7.4]　幅[10.6]　厚さ[6.6]　重さ211.4ｇ　軽石							№13	

Ｃ区の中央、Ｊ－13･14グリッドに位置する。北カマドで、主軸方向はＮ－17°－Ｅである。

平面形は縦長の長方形である。規模は長辺3.65ｍ、短辺2.80ｍで、深さ0.30ｍである。覆土は焼土、炭化物を含む暗褐色土、褐色土で、自然堆積である。床面は平坦で灰層（３層）が広がっていた。貼床､掘り方等は検出されなかった。

カマドは北壁の中央やや東寄りから検出された。燃焼部は壁から突出し、袖はごく短い形でしか検出されなかった。袖を含む規模は長さ1.20ｍ、幅0.55ｍである。焚口部から燃焼部は浅い土壙状を呈し、燃焼部の中央には支脚替わりの礫とロクロ土師器の高台付埦（７）が据えられていた。覆土は第６層がカマド天井部崩落土、第７層が灰層と考えられる。壁面、火床面ともよく焼けていた。袖は削り出しである。燃焼部から段を持たず緩やかに煙道となる。燃焼部と煙道部の境は不明瞭である。奥壁は斜めに立ち上がるが、先端部は直立する。

土壙１は南東コーナーで検出された。長軸1.25ｍ､短軸0.75ｍ､深さ0.50ｍの楕円形である。覆土は焼土、炭化物を含む明褐色土、暗褐色土で、埋め戻しと考えられる。第３層中からは多量の土器が出土した。

壁周溝は幅0.13～0.20ｍ、深さ0.05ｍで、北西コーナーを除いて全周する。

遺物は少なく、住居跡全体の床面から中層にかけて出土した。

平安時代のロクロ土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、甕の破片が出土したほか、古墳時代前期の壺、甕、台付甕破片が混入している。

１～12はロクロ土師器である。いずれも角閃石を多く含む利根川流域の粘土が使われている。１～６は坏である。３は底部外周刷毛目状のヘラケズリである。底面は１～４が回転糸切り。５は部分的で判然としないが、ヘラケズリの可能性がある。４は白色の微粒子が入り、下野産の可能性がある。６はごく薄く、外反が強い。

７～12は高台付埦である。７・９は内面にヘラ磨きが施され、黒色処理されている。８は風化のため調整がほとんど見えない。７・８の素地は淡橙色を呈する。９は外面が一部被熱している。10～12は高台である。10･12は底面回転糸切り。平坦な底面に高めの高台が貼付されている。色調は白みがかっている。11は風化のため調整は不明瞭である。高台は低く、濃橙色を呈する。

13は常陸系の土師器甕である。利根川流域の粘土が使用されている。分厚く重量感がある。口縁部は強い横ナデが施され、端部は摘まみ上げられている。胴部は横方向のヘラナデである。

14は須恵器大甕の破片で、混入品である。外面は平行タタキ後カキ目、内面は青海波文かナデ消されている。太田金山窯産。

15は安山岩製の支脚で、被熱により一部赤変している。

16は軽石製の砥石で、大部分が欠失している。平坦面に僅かに擦痕が見られる。

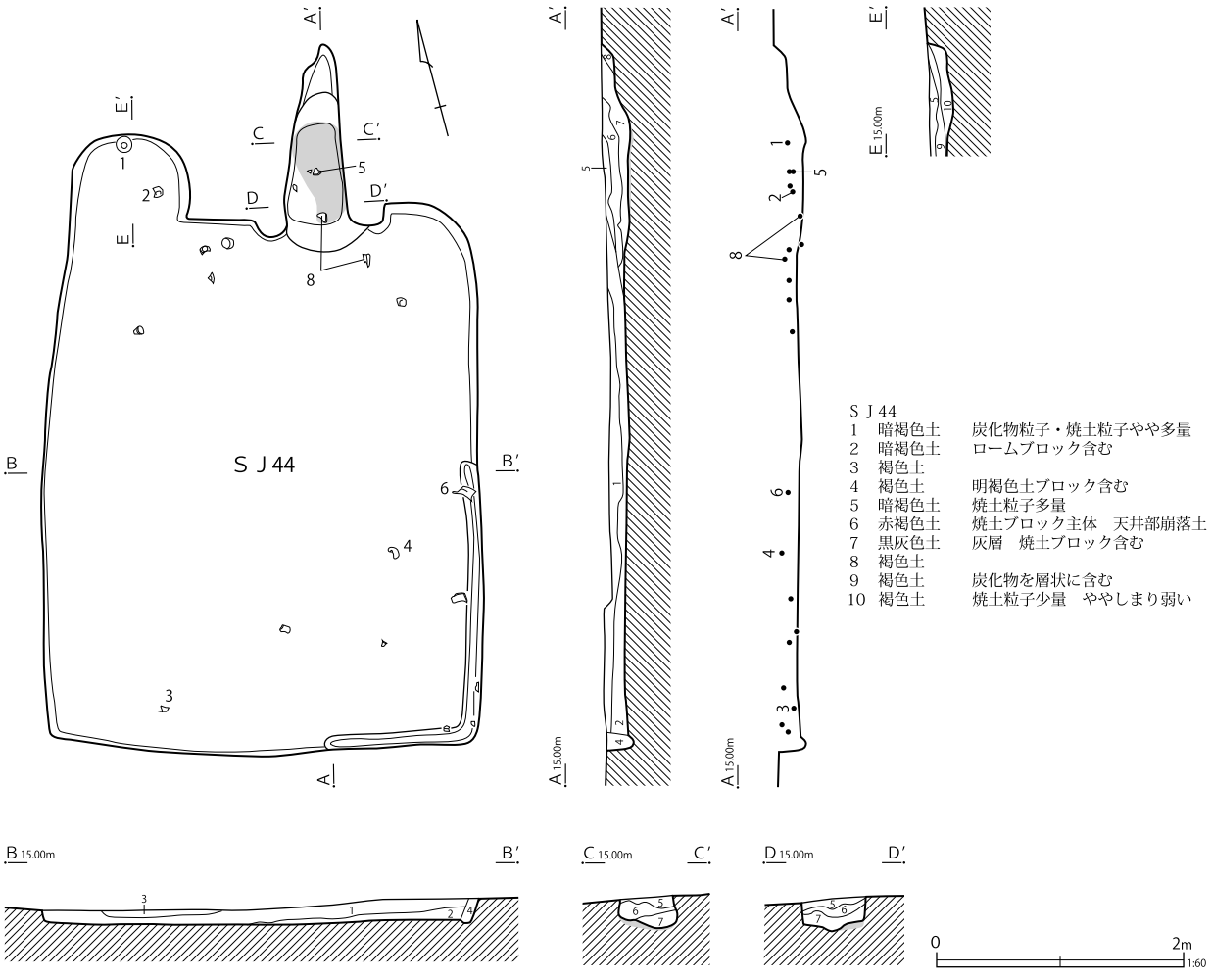
本住居跡の時期は10世紀第1四半期、屋敷裏Ⅵ－3期である。

第44号住居跡（第311・312図）

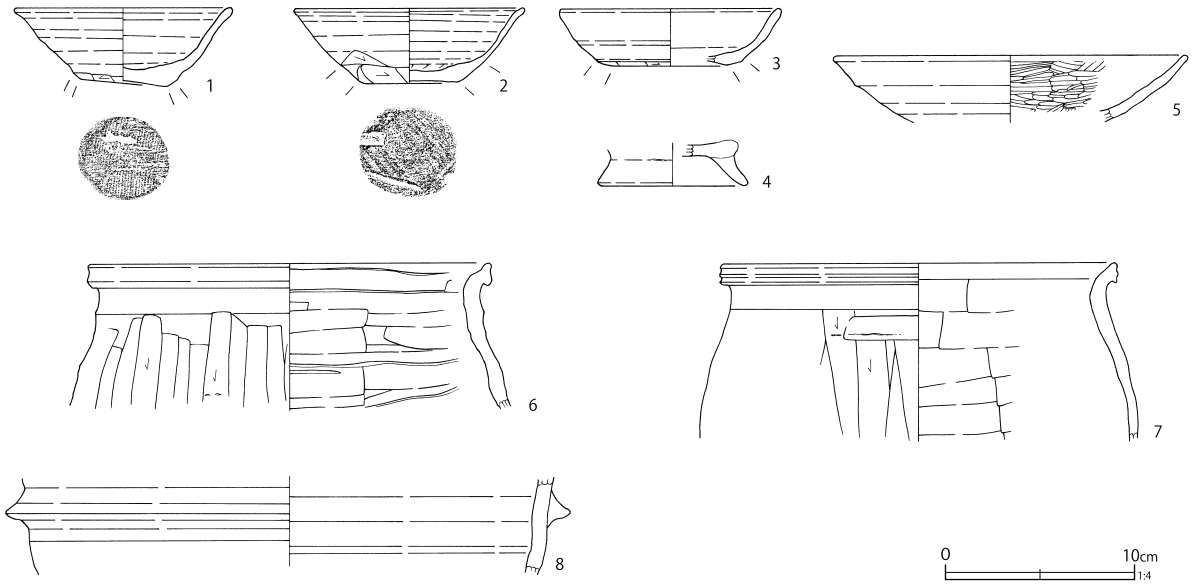
C区の中央、K－13･14グリッドに位置する。北カマドで、主軸方位はN－17°－Eである。

平面形は縦長の長方形である。北西コーナーが東西0.95 m、南北0.65 mの半円形に突出している。規模は、主軸方向4.30 m、直交軸方向3.50 m、深さは0.15 mである。覆土は炭化物、焼土、ローム土を含む暗褐色土、褐色土で、自然堆積である。床面はほぼ平坦で、貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁の中央､やや東寄りで検出された。燃焼部は土壙状を呈し、壁の外側に突出し、袖がごく短い。煙道は燃焼部にそのまま取り付き、煙出しは細くなっている。袖を含んだ長さは1.70 m、幅は0.50 mである。燃焼部の覆土は第5・



第311図 第44号住居跡



第312図　第44号住居跡出土遺物

第89表　第44号住居跡出土遺物観察表(第312図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	11.3	3.8	4.7	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	№17	162-8
2	ロクロ土師	坏	12.0	3.8	4.9	ＡＣＥＨＩＫ	70	普通	褐灰	№16	162-9
3	ロクロ土師	坏	(11.6)	2.9	(6.0)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	№５	
4	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.4]	(7.6)	ＡＣＥＨＩＫ	60	普通	にぶい橙	№13	
5	ロクロ土師	皿	(18.7)	[3.4]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	明褐	№21	
6	土師器	甕	(21.4)	[7.6]	－	ＡＣＨＩＫ	25	普通	褐	内外面煤付着　№12	223-3
7	土師器	甕	(20.9)	[9.3]	－	ＡＢＥＨＩＫ	5	普通	明赤褐		223-3
8	土師器	羽釜	－	[5.2]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	灰黄	№14　カマド№18	223-3

６層が天井部崩落土、第７層が灰層である。火床面、左右両壁面、奥壁が良く焼け、焼土化していた。袖は地山の削り出しである。

北西コーナーの突出部は、竪穴本体の床面からそのまま連続している。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土で､部分的に炭化物が縞状になっていた。

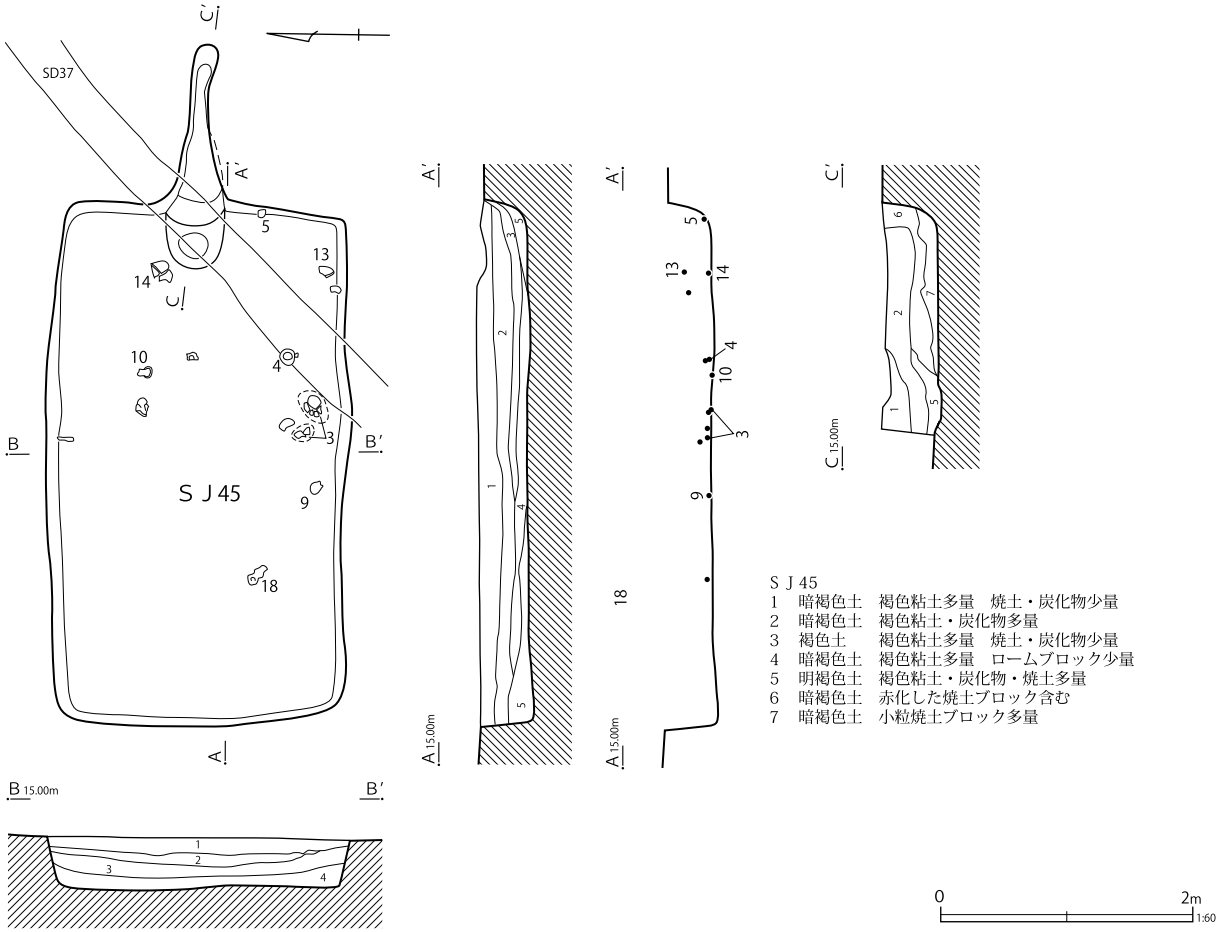
壁周溝は幅 0.10 ～ 0.15 ｍ、深さ 0.05 ｍで、南東コーナーのみに設けられていた。

遺物は少なく、床面からやや浮いて出土した。平安時代の須恵器坏、甕、ロクロ土師器坏、甕、土師器甕、羽釜の破片が出土し、古墳時代前期の台付甕、高坏、小型高坏、弥生時代の壺が混入している。

１～５はロクロ土師器である。いずれも角閃石を多く含む利根川流域の粘土が使われている。１～３は坏である。粘土はやや粒子が粗くざらつく感を受ける。底部外周、底面ヘラケズリ。２は見込み部分に指オサエが見られる。３はごく浅い。４は高台付埦の高台である。風化のため調整は不明瞭である。５は皿である。内面にヘラ磨きが施されている。

６・７は常陸系の土師器甕である。利根川流域の粘土が使用されている。分厚く重量感がある。口縁部は強い横ナデが施され、端部は面を持つ。胴部は外面縦方向のヘラケズリ、内面は強いヘラナデである。８は羽釜である。灰白色を呈し、上下を欠失する。利根川流域の粘土を使用。

本住居跡の時期は９世紀末、屋敷裏Ⅵ－２期で



第313図　第45号住居跡

ある。

第 45 号住居跡（第 313 ～ 315 図）

C区の中央やや東側、K・L－14 グリッドに位置する。第５号畠跡（第 37 号溝跡）と重複し、本住居跡が古い。北カマドで、主軸方位はＮ－90°－E、東西方向である。

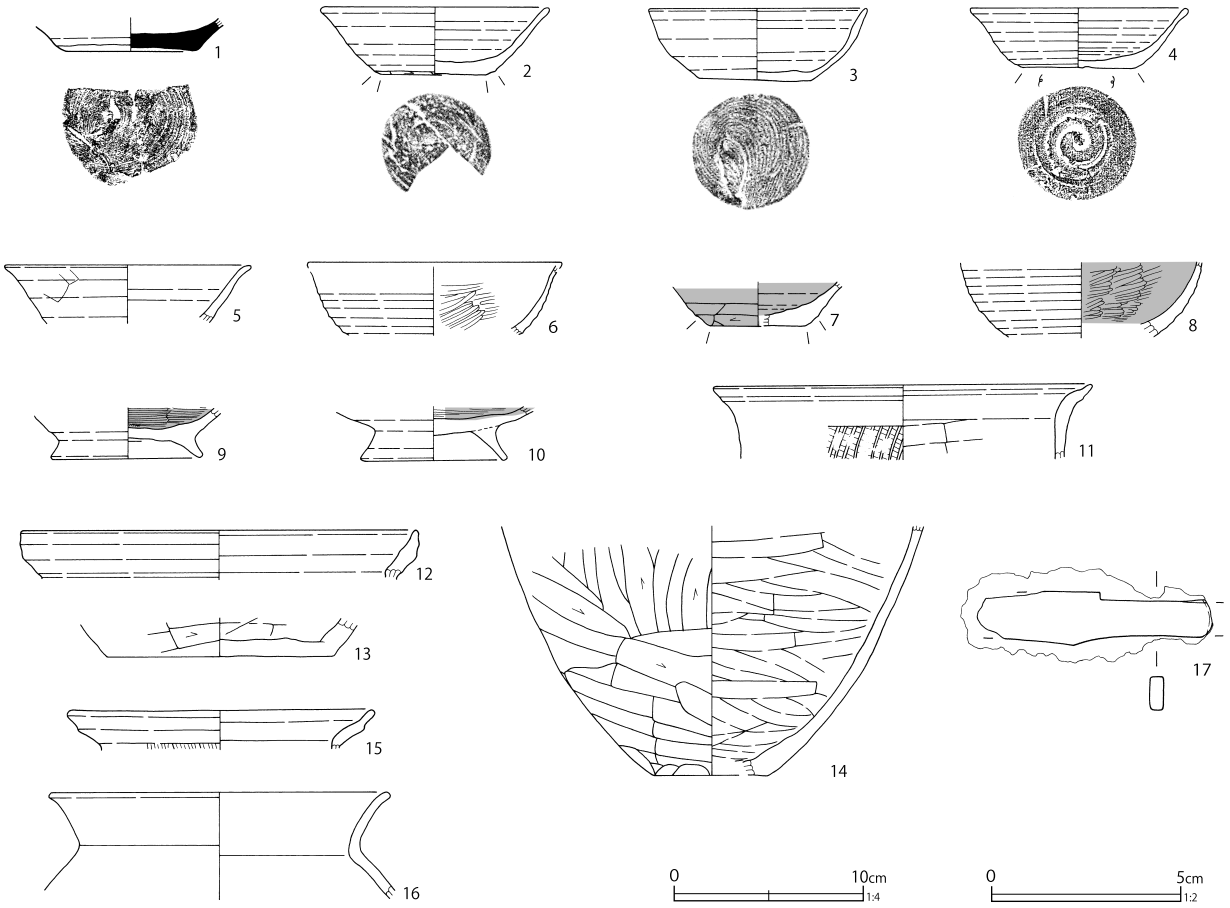
平面形は縦長の長方形である。規模は、主軸方向 4.05 m、直交軸方向 2.40 m、深さ 0.40 m である。床面はやや凹凸がある。覆土は炭化物、焼土、ローム土を含む暗褐色土、褐色土で、自然堆積である。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁の中央で検出された。壁から大きく突出している。手前の浅い土壙状の部分は焚口であろうか。袖は検出されず、燃焼部は壁の外側が相当すると考えられる。規模は壁からの長さ 1.80 m、幅 0.30 m である。燃焼部の覆土は第６層が天井部崩落土、第７層が煙道からの流入土と考えられる。灰層は認められなかった。壁の外側手前の燃焼部から、そのまま煙道部に連続すると考えられる。火床面、燃焼部、煙道部の左右両方の壁面が良く焼け、焼土化していた。床面に施設は認められなかった。

遺物は少なく、平安時代の須恵器坏、ロクロ土師器坏、甕、土師器甕の破片、口琴が床面近くから出土した。古墳時代前期の甕が混入している。

１は須恵器である。灰白色の色調を呈する。底面回転糸切り。多孔質で、白色針状物質を含む。下総産か。

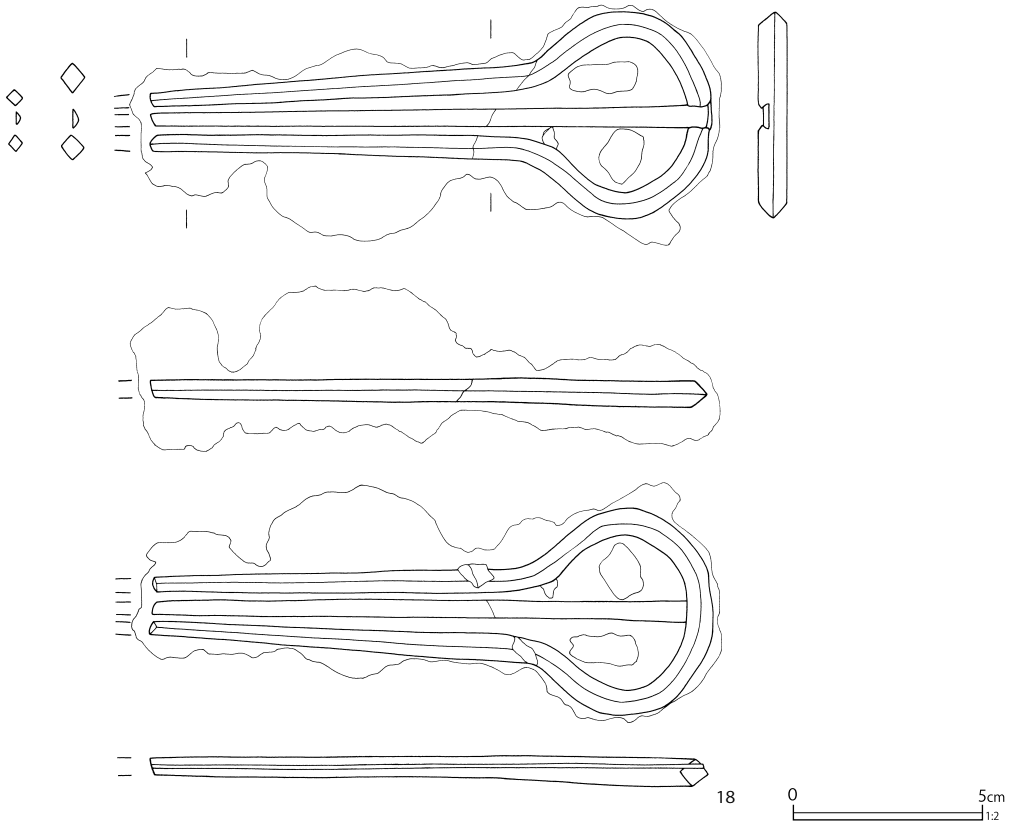
２～ 10 はロクロ土師器である。利根川流域の粘土である。２～５・７は坏である。２・７は底



第314図　第45号住居跡出土遺物（1）

第90表　第45号住居跡出土遺物観察表（第314・315図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	埦	—	[1.6]	6.9	ＡＩＪＫ	40	普通	灰白	南比企産か千葉産	224-1
2	ロクロ土師	坏	(11.9)	3.5	5.6	ＡＣＨＩＫ	50	普通	にぶい橙		224-1
3	ロクロ土師	坏	11.6	3.7	5.9	ＡＣＨＩＫ	100	普通	にぶい赤褐	№5・7	163-1
4	ロクロ土師	坏	11.5	3.1	6.0	ＡＤＥＨＩＫ	100	普通	にぶい黄橙	№4	163-2
5	ロクロ土師	坏	(12.8)	[3.0]	—	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	橙	№1	224-1
6	ロクロ土師	高台付埦	—	[3.6]	—	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい橙		224-1
7	ロクロ土師	坏	—	[2.3]	(5.0)	ＡＣＥＩＫ	35	普通	にぶい褐	内外面黒色処理	224-1
8	ロクロ土師	高台付埦	—	[4.5]	—	ＡＣＤＥＨＫ	15	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理	224-1
9	ロクロ土師	高台付埦	—	[2.6]	7.7	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	内面黒色処理　№8	224-1
10	ロクロ土師	高台付埦	—	[2.8]	7.3	ＡＨＩＫ	85	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理　№12	224-1
11	土師器	甕	(19.8)	[3.9]	—	ＡＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		224-2
12	土師器	甕	(20.6)	[2.6]	—	ＡＣＨＫ	10	普通	にぶい黄橙		224-2
13	土師器	甕	—	[2.0]	(11.8)	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	№2	224-1
14	土師器	甕	—	[13.2]	(6.0)	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	灰褐	内外面煤付着　№11　カマド	224-2
15	土師器	甕	(15.8)	[2.1]	—	ＡＣＤＩＪ	10	普通	灰白		224-2
16	土師器	甕	(17.5)	[5.6]	—	ＡＣＥＨＫ	15	普通	橙		224-2
17	鉄製品	刀子	長さ[6.2]　刃幅1.4　幅0.4　重さ20.9ｇ								222-2
18	鉄製品	口琴	枠部全長14.9　環部幅5.5　直線部幅2.5～1.7　振動弁幅0.6～0.3　重さ177.6ｇ							№9	220-5



第315図　第45号住居跡出土遺物（２）

部外周ヘラケズリが施されている。２・４の底面は回転糸切り後手持ちヘラケズリ。３の底面は回転糸切り、４は底面回転糸切後手持ちヘラケズリである。６・８～10は腰が張る器形のため高台付埦と考えられる。いずれも体部内面にはヘラ磨きが施され、９・10は高台端部が丸く収められている。黒色処理されている。

11～14は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。11は口縁端部が若干受口状となる。外面タタキ目後ナデ、内面ヘラナデ。第44号住居跡１・２と同様の粘土である。12は厚手で若干受け口状になっている。13は底部の破片で、径が大きく、底面無調整である。在地生産の常陸系甕と考えられる。14は外面に上位縦方向、下位横方向のヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。底面ヘラケズリ。武蔵型甕の系譜と考えられる。

15・16は混入の古墳時代前期の甕である。15はＳ字状口縁台付甕、16は単口縁の甕である。

17は刀子である。刃部から茎にかけての破片で、両関である。背関は段を持ち、刃関はなだらかである。

18は鉄製の口琴である。全体が錆瘤に覆われ、持ち手と腕の境目で折れている。錆がひどく、先端が遺存しているかを明確に確認することはできなかった。鉄製の角棒を柄鏡形に曲げて作った枠の内側に、鉄製の細長い振動弁が取り付けられている。枠は環状の持ち手と直線的に延びる腕によって構成されている。現存長14.8cm、最大幅5.4cm、環状の括れ部の幅2.6cm、先端部の幅1.8cmである。枠は幅５～８mmの両端が細くなる断面正方形の鉄製の角棒で、環状部の背に当たる中央部分が最も太い。鉄棒は斜め45度、各々の角が上下左右になるように曲げられている。環状部の最も太い箇所の上下幅が８mm、腕部の先端箇所で６mmとなる。側面からみると腕のセン

ターに振動弁が来るように緩くへの字形に曲げられている。

持ち手の中央に厚さ 1.5mm の鉄製の振動弁が取り付けられている。鋼の可能性が高い。枠に所謂蟻臍を掘り込み、弁を入れてから周辺を叩いて延ばし固定されている。先端は錆瘤状になっており、形状は不明である。やはり持ち手側から腕に向かって徐々に幅を減じており、枠との接合箇所が幅６mm、先端が３mm ほどである。断面形が蒲鉾形で、その両角が枠の内側の角に合うように枠が調整されている。

楽器としては腕の内側と振動弁がかなり離れており、この状態では鳴らない。本来、毛筋ほどで隣接していたと考えられるが、それが開いてしまった要因は不明である。

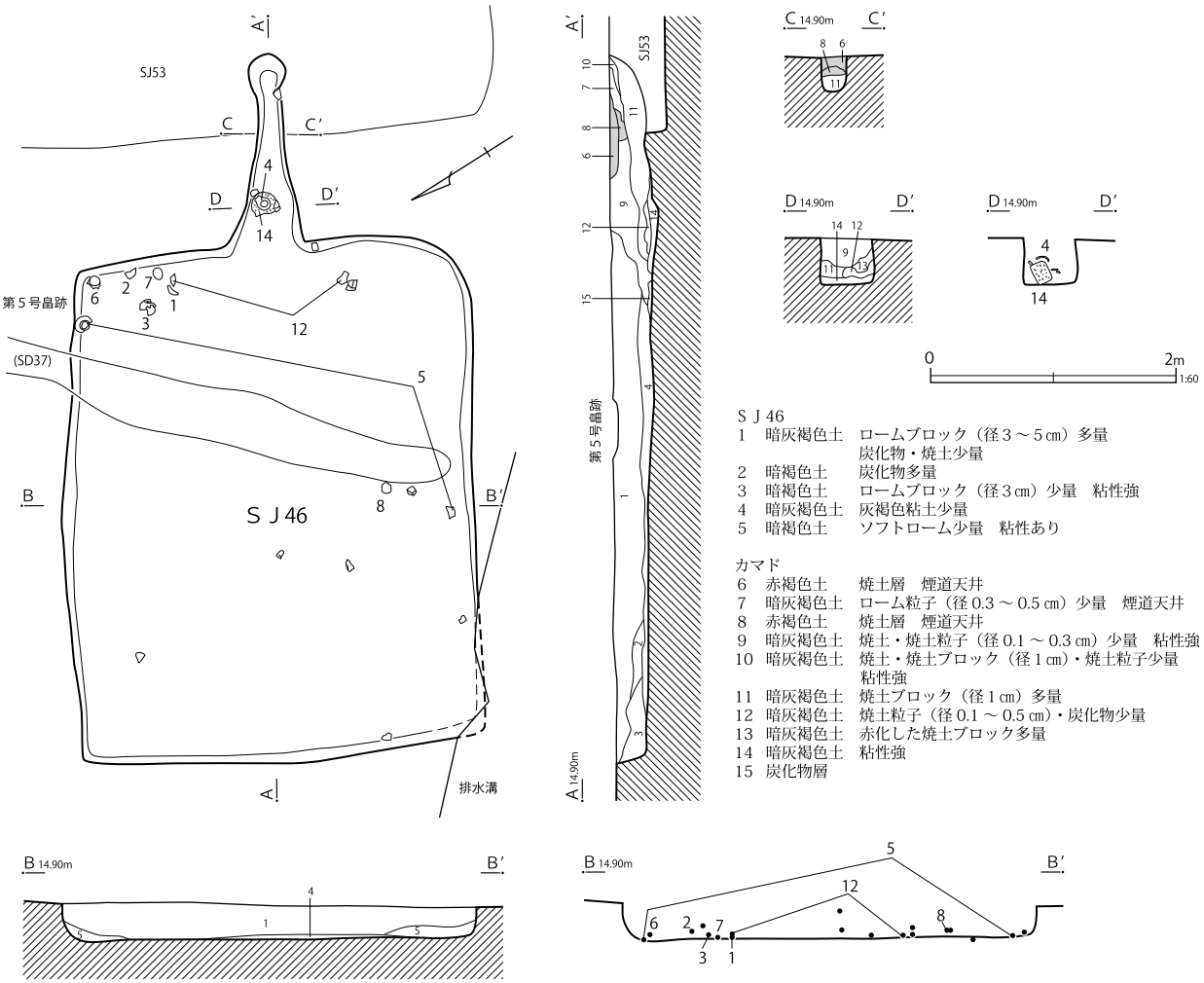
本住居跡は 10 世紀第１四半期、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第 46 号住居跡（第 316・317 図）

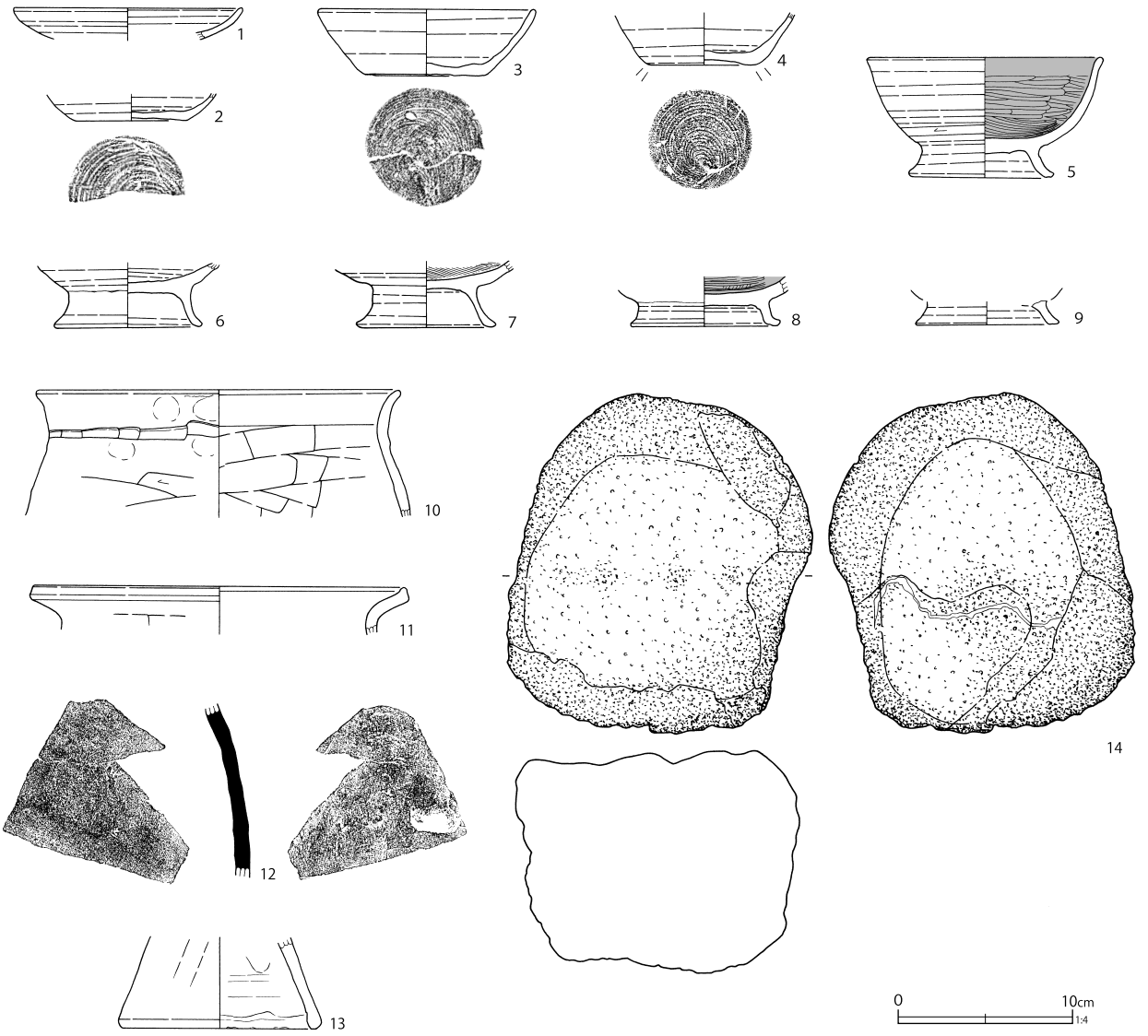
Ｃ区の中央やや東側、Ｌ－ 14 グリッドに位置する。第 53 号住居跡､第５号畠跡（第 37 号溝跡）と重複し、前者より新しく、後者より古い。東カマドで、主軸方位はＳ－ 60°－Ｅである。

平面形は縦長の長方形である。規模は、主軸方向 4.10 ｍ、直交軸方向 3.35 ｍである。深さは 0.30 ｍで、壁の立ち上がりがやや緩やかである。

覆土は炭化物、焼土、ローム土、灰褐色粘土を含む暗褐色土、暗灰褐色土で、自然堆積である。床面は若干凹凸があり、暗灰褐色粘土が全面に広



第316図　第46号住居跡



第317図　第46号住居跡出土遺物

第91表　第46号住居跡出土遺物観察表(第317図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	(12.9)	[1.8]	－	ＩＫ	25	良好	灰白	猿投産か　№９	
2	ロクロ土師	坏	－	[1.5]	(6.4)	ＡＣＥＨＩＫ	45	普通	浅黄橙	№13	
3	ロクロ土師	坏	12.1	3.8	6.9	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	橙	№12	163-3
4	ロクロ土師	坏	－	[3.0]	6.0	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№１　カマド	
5	ロクロ土師	高台付埦	(13.3)	6.9	8.0	ＡＣＨＩＫ	90	普通	明褐灰	内面黒色処理　№15・21	163-4
6	ロクロ土師	高台付埦	－	[3.6]	8.2	ＡＣＨＩＫ	90	普通	にぶい黄橙	№14	163-9
7	ロクロ土師	高台付埦	－	[3.7]	7.5	ＡＣＨＩＫ	85	普通	にぶい橙	№11	163-10
8	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.8]	8.2	ＡＣＨＩ	80	普通	にぶい黄褐	内面黒色処理　№19	163-11
9	ロクロ土師	高台付埦	－	[1.3]	(8.0)	ＡＨＩＫ	30	普通	灰黄褐		
10	土師器	甕	(20.6)	[7.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	25	良好	にぶい黄橙	内外面煤付着	163-5
11	土師器	甕	(21.0)	[2.7]	－	ＡＢＨＩＫ	5	普通	暗灰黄	内外面煤付着	
12	須恵器	甕	－	[10.0]	－	ＡＥＩＪＫ	5	良好	灰	南比企産か　№７・10	223-2
13	土師器	台付甕	－	[5.2]	(11.0)	ＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	Ｓ字甕の可能性あり	
14	石製品	支脚	長さ19.6　幅17.5　厚さ13.3　重さ3454.5ｇ　安山岩							被熱により一部黒色化　№２	

がっていた。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは東壁の中央で検出された。壁から大きく突出している。竪穴本体からそのまま燃焼部に至る。袖は検出されず、燃焼部は壁の外側が相当すると考えられる。規模は壁からの長さ 1.20 m、幅 0.40 mである。燃焼部は断面形が箱形である。覆土は第 11 ～ 13 層が天井部崩落土と考えられる。灰層は認められなかった。火床面、燃焼部、煙道部の左右両方の壁面が良く焼け、焼土化していた。燃焼部の中央には大型の礫（14）と坏（4）が据えられており、支脚替わりと考えられる。燃焼部と煙道は境目なく連続している。煙道の天井は一部遺存しており（第６～８層）、高さは 0.10 ～ 0.15 mほどである。

床面に施設は認められなかった。

遺物は少なく、北東コーナーを中心に完形率の高い遺物が出土した。器種は平安時代の灰釉陶器皿、須恵器坏、甕、ロクロ土師器坏、高台付坏、甕、土師器甕である。古墳時代前期の甕が混入している。

１は灰釉陶器の皿である。釉薬は刷毛塗り。東濃産。虎渕山１号窯段階である。

２～９はロクロ土師器である。いずれも利根川流域の粘土を用いている。２～４は坏である。４は底部外周から底面にかけてヘラケズリが施されている。２・３の底面は回転糸切り。５～９は高台付椀である。高台は高脚高台に近い。５は端部が若干外反する体部にやや高足気味の高台が貼付されている。内面は黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。７・８の坏部内面にはヘラ磨きが施されている。５は内面が黒色処理されている。

10・11 は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。10 は北武蔵系の甕で、コの字の形態が崩れている。11 は口縁端部が若干受け口状となる。

12・13 は混入の古墳時代の土器である。12 は須恵器甕の胴部破片である。白色微粒子を全体に含む。産地不明。外面の平行タタキ、内面の当て具痕がナデ消されている。13 は前期のＳ字状台付甕の脚台部である。器肉が厚い。

14 は安山岩製のカマドの支脚である。全体が剝落している。煤付着。

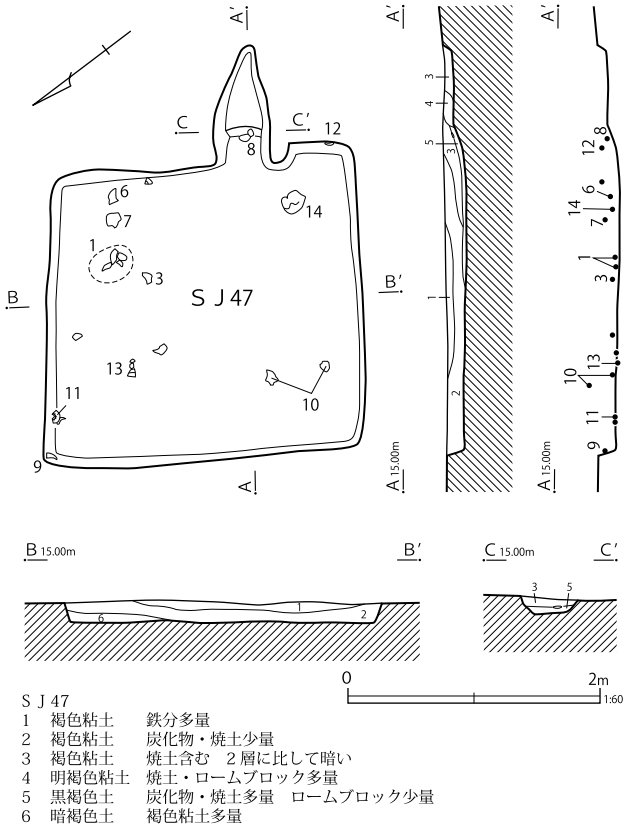
本住居跡の時期は 10 世紀第１四半期、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第 47 号住居跡（第 318・319 図）

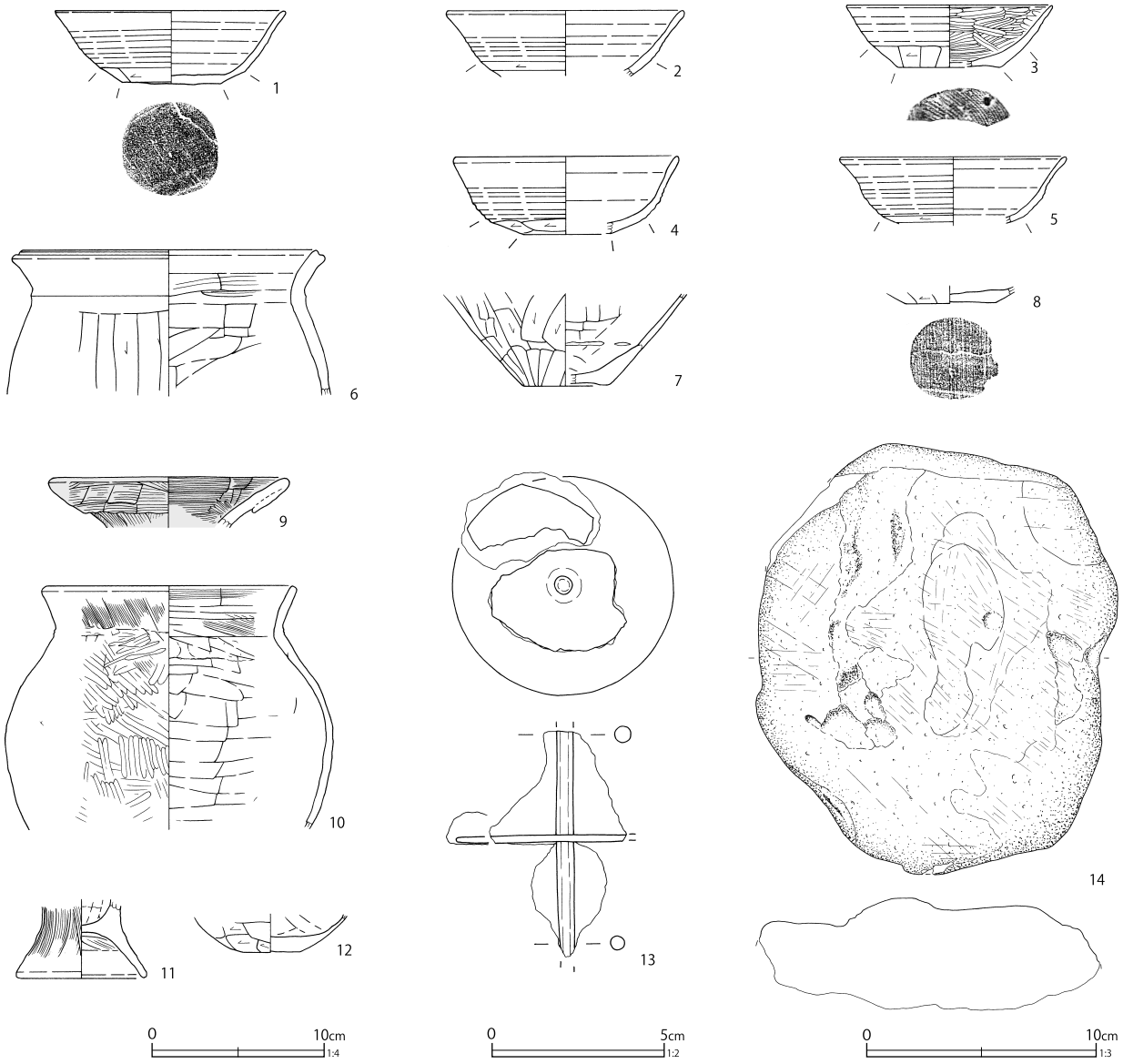
Ｃ区の東側、Ｋ－ 15・16 グリッドに位置する。東カマドで、主軸方位はＳ－ 53° －Ｅである。

平面形は方形である。規模は主軸方向 2.33 m、直交軸方向 2.53 m、深さ 0.15 mである。覆土は最下層以外は粘土質で、炭化物、焼土を含む褐色粘土、褐色粘土を含む暗褐色土である。床面は若干凹凸があり、東半分に炭化物層（５層）が広がっていた。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは東壁の中央やや南側で検出された。壁



第318図　第47号住居跡



第319図　第47号住居跡出土遺物

から大きく突出する。竪穴本体から段を持たずにそのまま燃焼部に至る。袖は右側の袖が、短く検出されたのみである。削り出しである。燃焼部は奥の段までの空間が相当すると考えられる。袖を含む規模は長さ1.00 m、幅0.45 mである。覆土は第３層が煙道からの流入土、第４層が天井部崩落土と考えられる。灰層は認められなかった。火床面、燃焼部、煙道部の左右両方の壁面が良く焼け、焼土化していた。燃焼部の中央には支脚替わりの大型の礫と甕（８）が据えられていた。燃焼部から緩い段をもって煙道になる。煙道の深さは0.10 mほどである。

床面に施設は認められなかった。

遺物は遺構全体の２層を中心に出土した。平安時代のロクロ土師器坏、土師器甕、台付甕の破片が出土し、古墳時代前期の壺、甕、台付甕、小型壺が混入している。

１～５はロクロ土師器の坏である。いずれも利根川流域の粘土が使われ、底部外周にヘラケズリが施されている。１の底面は手持ちヘラケズリである。３は内面にヘラ磨きが施されている。底面回転糸切り。破片の出土だが、破片ごとに色調が

第92表　第47号住居跡出土遺物観察表（第319図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	13.4	4.2	5.9	ＡＥＨＩＪＫ	60	普通	灰白	№６・７	163-6
2	ロクロ土師	坏	(13.7)	[3.8]	－	Ｅ	5	良好	灰白		
3	ロクロ土師	坏	(12.0)	3.5	(6.0)	ＡＣＨＩＫ	35	普通	にぶい橙	№８	163-7
4	ロクロ土師	坏	(13.0)	[4.4]	(5.2)	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
5	ロクロ土師	坏	(13.0)	[3.8]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甕	(17.3)	[8.3]	－	ＡＣＥＩＫ	10	普通	灰褐	外面煤付着　№４	
7	土師器	甕	－	[5.2]	(5.0)	ＡＣＨＩＫ	30	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№５	
8	土師器	甕	－	[0.8]	5.3	ＡＣＥＩＫ	80	普通	にぶい褐	内外面煤付着　№１カマド	163-8
9	土師器	壺	(13.6)	[2.7]	－	ＡＥＨＩＪＫ	15	普通	赤褐	内外面赤彩　№14	
10	土師器	甕	(14.6)	[14.0]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№15・16	164-1
11	土師器	台付甕	－	[4.5]	(7.2)	ＡＣＥＨＩＫ	30	良好	にぶい黄橙	№12	164-2
12	土師器	小型甕	－	[2.2]	3.4	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	橙	№17	
13	鉄製品	紡錘車	径(6.4)　厚さ0.2　軸径0.5　重さ46.5ｇ							№11	220-2
14	石製品	砥石	長さ[18.6]　幅[15.4]　厚さ[5.8]　重さ606.0ｇ　軽石							№２	

異なっていた。

６～８は土師器の甕である。利根川流域の粘土が用いられている。６は器肉が厚く、端部に面を持つ。端面は外側から摘まれ、中央が凹んでいる。外面縦方向ヘラケズリ。常陸系の甕と考えられる。

７は武蔵型甕の胴部下半である。薄手で、外面は縦方向のヘラケズリである。８は薄手で、底面は手持ちヘラケズリである。

９～12は混入の古墳時代前期の土師器である。９は複合口縁壺の口縁部である。全体が刷毛目で仕上げられ、内面に部分的にヘラ磨きが施されている。10は甕である。胴部の外面全体にヘラ磨きが施されており、広口壺である可能性がある。11は小型の台付甕の脚台部である。外面と脚台部内面は刷毛目後端部に横ナデが加えられている。胴部内面ヘラナデ。12は小型甕の底部である。外面ヘラケズリ。風化が進み、大粒の酸化鉄が認められる。

13は鉄製の紡錘車である。車輪部に軸部が取り付けられた状態だが、全体が大きな錆瘤になっている。車輪部は外側の破片があるが、部分的に遺存するのみで接合しない。軸部は断面円形、上下を欠失する。

14は軽石製の砥石である。風化が進み、僅かに擦痕が見られるのみである。大部分欠失する。

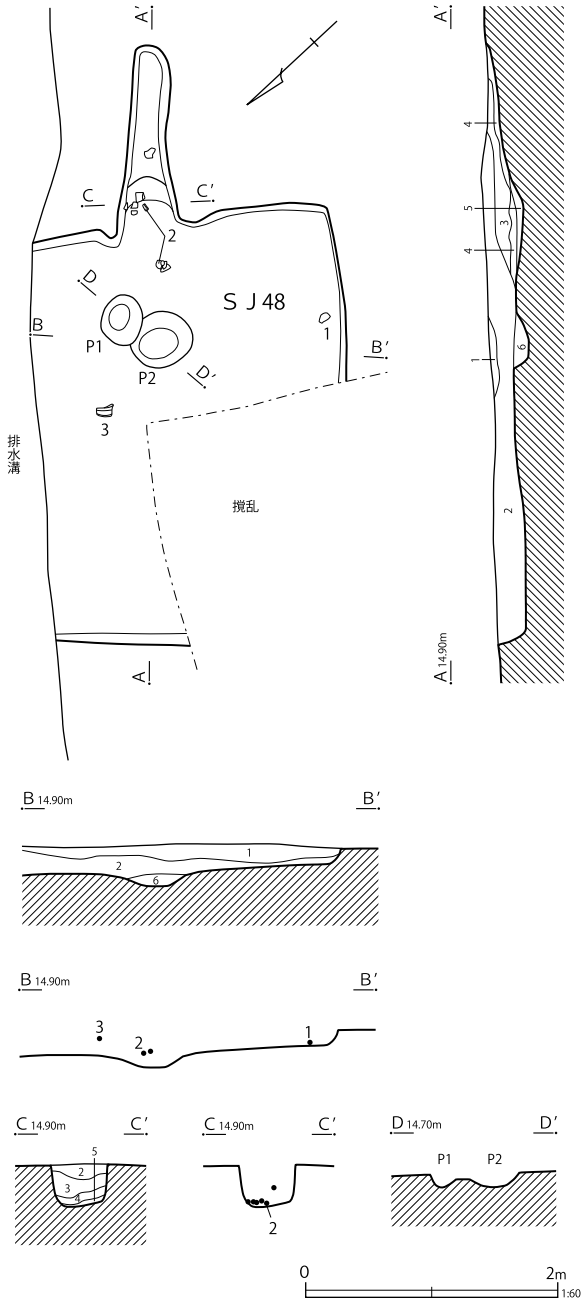
本住居跡は９世紀第４四半期、屋敷裏Ⅵ－２期である。

第 48 号住居跡（第 320・321 図）

Ｄ区の西側、Ｍ・Ｎ－18 グリッドに位置する。遺構の北東側は調査区域外にかかり、西側は攪乱により壊されている。東カマドで、主軸方位はＳ－48°－Ｅである。

平面形は、カマドが中央に付設されていると仮定すると長方形と推定される。規模は主軸方向 3.25 ｍ、直交軸方向は検出範囲で 2.45 ｍ、深さ 0.25 ｍである。覆土は炭化物、焼土を含む褐色土である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは南東壁のほぼ中央と推定される箇所で検出された。壁から大きく突出している。竪穴本体から段を持たずに、そのまま燃焼部に至る。袖は短く検出されたのみである。削り出しである。燃焼部は袖から奥の段までの空間が相当すると考えられる。袖を含む規模は長さ 1.10 ｍ、幅 0.40 ｍである。覆土は３・４層が天井部の崩落土、５層が灰層である。火床面、燃焼部、煙道部の左右両壁面、奥壁が良く焼け、焼土化していた。燃焼部からはロクロ土師器高台付埦の破片が分かれて



ＳＪ48
1　褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子少量
2　褐色土　　焼土少量　炭化物やや多
3　暗褐色土　黄褐色土ブロック・焼土ブロック含む　天井部崩落土
4　暗褐色土　焼土ブロック多量　天井部崩落土
5　黒灰色土　灰層　焼土粒子混じる
6　黒色土　　焼土ブロック・炭化物粒子多量　灰溜状

第320図　第48号住居跡

出土した。

燃焼部からは緩い段をもって煙道となる。煙道の深さは0.10 mほどだが、徐々に浅くなって奥壁が立ち上がる。他の住居と異なり、先細りしていない。

床面からは、カマド手前でピット２基が検出された。

Ｐ１は径0.30 m、深さ0.08 m、Ｐ２は径0.45 m、深さ0.10 mである。覆土は焼土、炭化物を多量に含む黒色土で、灰溜り状である。

遺物は少なく、カマドと第２層から出土した。平安時代の灰釉陶器皿、須恵器坏、ロクロ土師器坏、高台付坏、土師器甕の破片が出土し、古墳時代前期の台付甕が混入している。

１は灰釉陶器の皿である。釉薬は漬け掛け。東濃窯産。径がやや大きく大原窯式段階の可能性がある。２はロクロ土師器の高台付椀である。風化が進み調整は不明である。利根川流域の粘土が使われ、角閃石を多く含む。

３・４は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。厚手で、ヘラケズリが緩く、常総型甕系と考えられる。３は指オサエが顕著である。

５は刀子である。刃部から茎にかけての破片で、両関と考えられる。背関は段を持ち、刃関に当たる部分は抉れている。

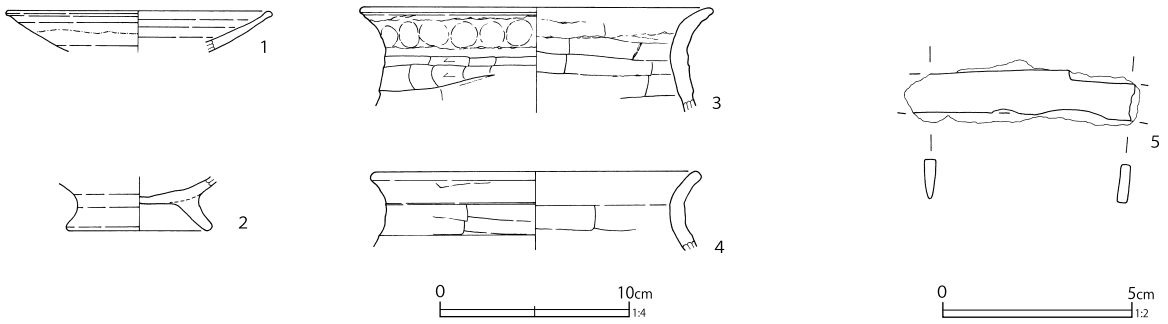
本住居跡の時期は９世紀第４四半期、屋敷裏Ⅵ－２期である。

第49号住居跡（第322・323図）

Ｄ区の中央やや西側、Ｏ－18グリッドに位置する。北東カマドで、主軸方位はＮ－43°－Ｅである。

平面形は北東－南西方向がやや長い長方形である。規模は主軸方向3.30 m、直交軸方向3.00 m、深さ0.10 mで、小型である。覆土は炭化物、焼土を含む褐色土、暗褐色土である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

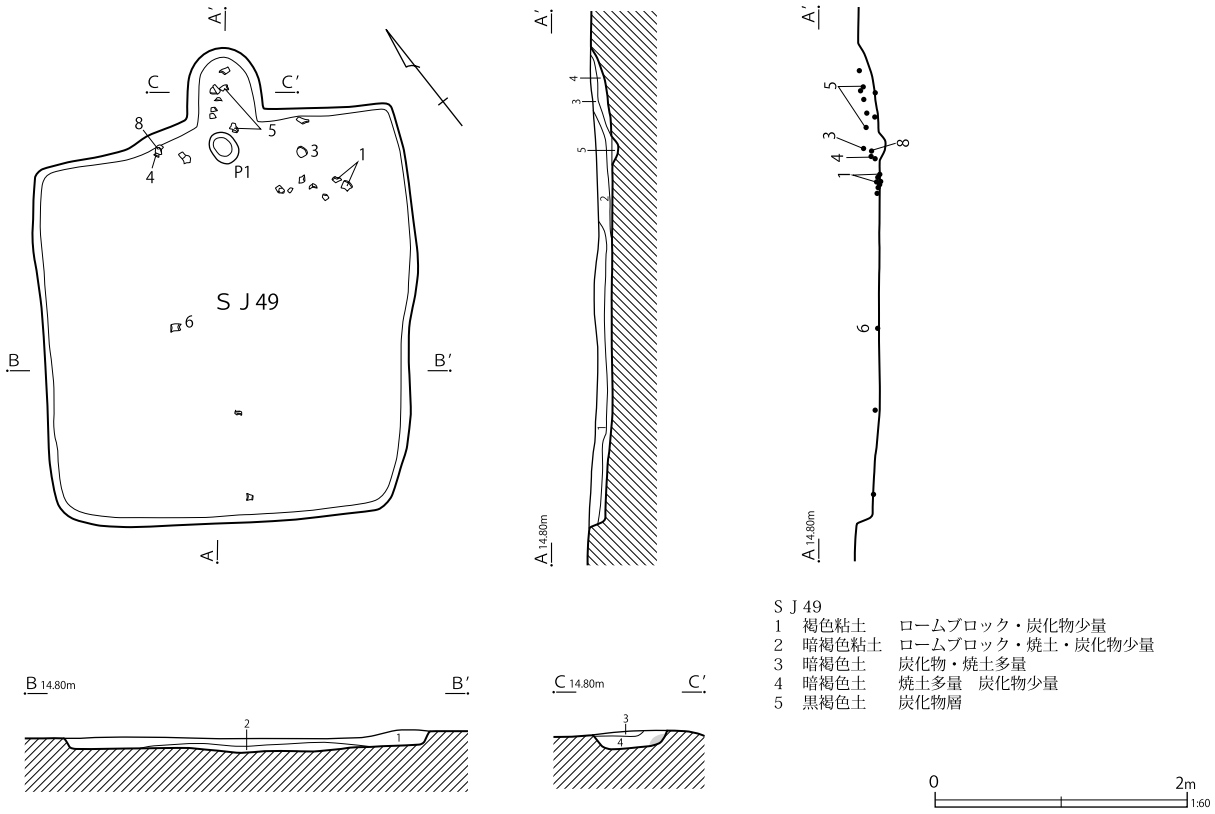
カマドは北東壁の中央で検出された。壁から大きく突出している。竪穴本体から段を持たずに、そのまま燃焼部に至る。袖は検出されず、突出部が燃焼部と考えられる。煙道は検出されなかった。突出する規模は長さ0.90 m、幅0.60 mであ



第321図　第48号住居跡出土遺物

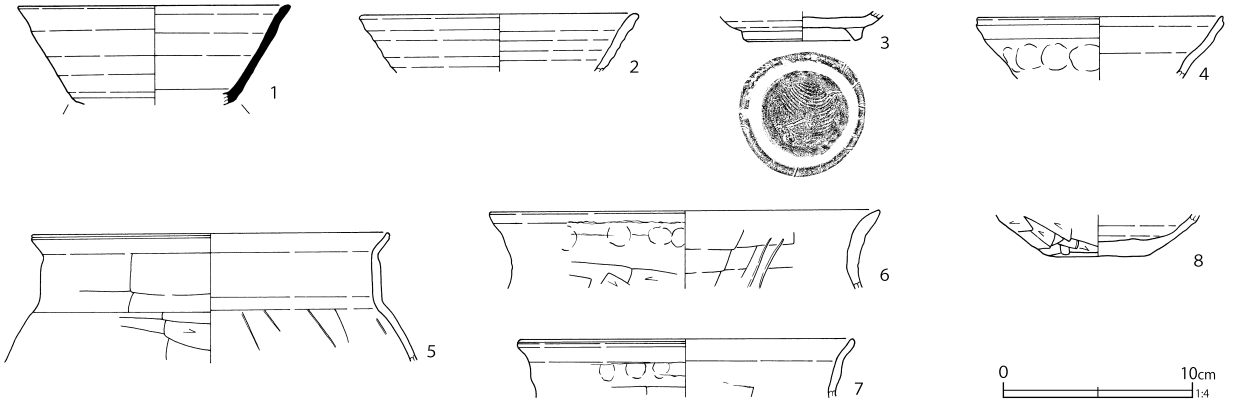
第93表　第48号住居跡出土遺物観察表(第321図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	(13.8)	[2.1]	－	ＡＩＫ	20	良好	灰白	東濃産か　№4	
2	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.8]	7.4	ＡＣＥＨＩＫ	80	普通	にぶい橙	№2　カマド№6	
3	土師器	甕	(18.5)	[5.5]	－	ＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№1	
4	土師器	甕	(17.0)	[4.1]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		
5	鉄製品	刀子	長さ[6.1]　刃幅1.2　背幅0.3　重さ10.2ｇ								222-2



第322図　第49号住居跡

る。覆土は第３・４層が天井部崩落土と考えられる。焚口部には長径 0.25 m、短径 0.20 m、深さ 0.05 mのＰ１がある。覆土は炭化物であり、これが灰層に相当する可能性がある。またカマド手前から東側に炭化物が若干分布しており、灰層に相当する可能性がある。火床面、燃焼部の左右両



第323図　第49号住居跡出土遺物

第94表　第49号住居跡出土遺物観察表(第323図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付埦	14.4	5.2	－	ＡＨＩＫ	30	普通	灰白	内面煤付着　№17・18	
2	ロクロ土師	埦	(14.6)	[3.0]	－	ＡＥＨＩ	10	普通	灰白		
3	ロクロ土師	高台付埦	－	[1.5]	5.6	ＡＥＨＩＫ	85	普通	灰黄褐	№11	
4	土師器	坏	(12.9)	[3.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	40	普通	にぶい黄橙	№９	
5	土師器	甕	(18.9)	[6.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	15	普通	灰褐	内外面煤付着　№２・６	
6	土師器	甕	(20.9)	[4.2]	－	ＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№19	
7	土師器	甕	(17.8)	[3.1]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
8	土師器	甕	－	[2.2]	(5.6)	ＡＣＨＩ	30	普通	黒褐	内外面煤付着　№8	

方の壁面が良く焼け、焼土化していた。

床面に、施設は認められなかった。

遺物は少なく、カマド中層と東コーナー手前の床面から若干浮いた状態で出土した。平安時代の須恵器坏、高台付坏、ロクロ土師器坏、土師器甕の破片が出土している。

１は須恵器の高台付埦である。被熱し、外面の一部が赤化し、内面に煤が付着する。産地不明だが粘土は利根川流域と同様である。東毛産か。

２・３はロクロ土師器の埦、高台付埦である。利根川流域の粘土が用いられている。２は坏に比してやや径が大きく、埦と考えた。３の底面は回転糸切り。高台は低い。

４は武蔵型の土師器坏である。被熱し赤変。体部外面には指オサエが残る。利根川流域の粘土である。

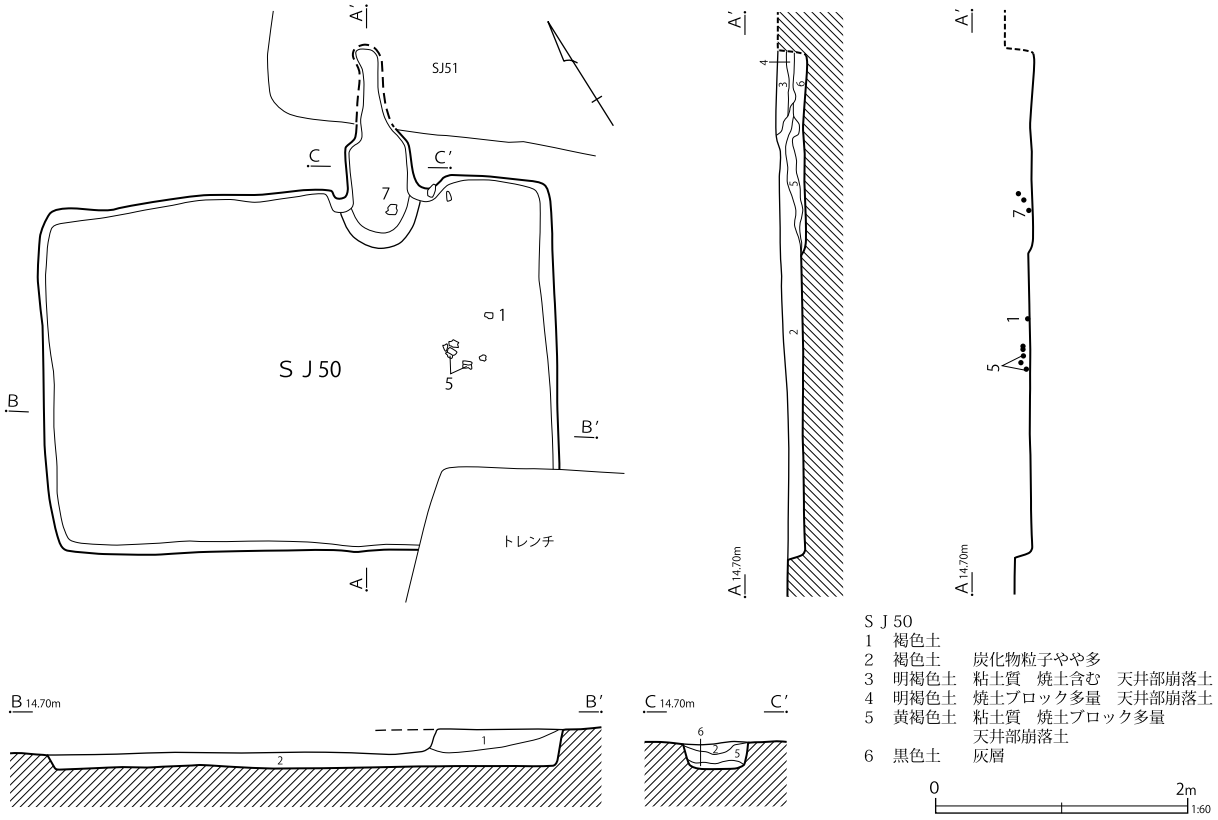
５～８は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。５は所謂コの字甕、６・７はそれが崩れた形態である。８は武蔵型甕の底部と考えられる。

本住居跡は９世紀前半、屋敷裏Ⅵ－１期である。

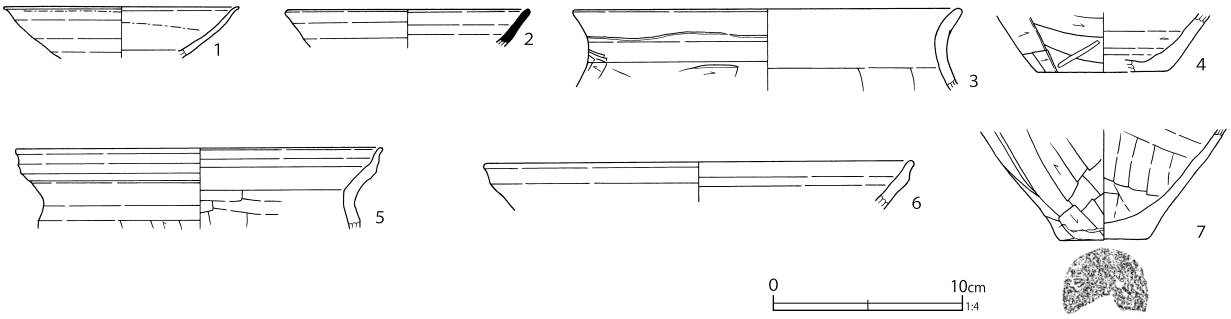
第 50 号住居跡（第 324・325 図）

Ｄ区の中央やや西側、Ｏ－ 18 グリッドに位置する。第51号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北東カマドで、主軸方位はＮ－ 30°－Ｅである。平面形は横長の長方形である。規模は主軸方向 2.85 ｍ、直交軸方向 4.10 ｍ、深さ 0.30 ｍである。覆土は炭化物を含む褐色土である。床面は若干凹凸があり、貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁のやや東寄りで検出された。壁から大きく突出し、煙道は幅が狭く細長い。袖を含む規模は、長さ 1.10 ｍ、幅 0.50 ｍである。覆土は３～５層が天井部崩落土、６層が灰層と考えられる。竪穴本体から段を持って燃焼部に至る。袖は短く、突出部が燃焼部と考えられる。袖は削り出しである。燃焼部から煙道へは、段を持たずに



第324図　第50号住居跡



第325図　第50号住居跡出土遺物

第95表　第50号住居跡出土遺物観察表(第325図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	(12.3)	[2.7]	－	ＡＩＫ	20	良好	灰	猿投産か　№４	
2	須恵器	坏	(12.8)	[2.0]	－	ＡＤＥＩＪＫ	20	良好	黄灰	南比企産	
3	土師器	甕	(20.6)	[4.3]	－	ＡＣＤＨＩＫ	20	普通	灰黄褐	外面煤付着	
4	土師器	甕	－	[3.0]	(6.8)	ＡＣＥＨＩＫ	25	普通	褐灰	内外面煤付着	
5	土師器	甕	(19.5)	[4.2]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	№６・７	
6	土師器	甕	(22.8)	[2.5]	－	ＡＣＨＩＫ	10	普通	にぶい褐	内面煤付着	
7	土師器	甕	－	[5.8]	4.7	ＡＣＤＥＨＩＫ	40	普通	灰黄褐	外面煤付着　底部敷物圧痕か　№１	164-3

そのまま移行する。煙道は幅0.15 mで、奥壁は垂直に立ち上がる。火床面はあまり焼けておらず、燃焼部、煙道の左右両方の壁面が良く焼け、焼土化していた。

床面に施設は認められなかった。

遺物はごく少なく、カマド右側の中層と東壁手前の中層から出土した。平安時代の灰釉陶器、須恵器坏、土師器甕の破片が出土している。

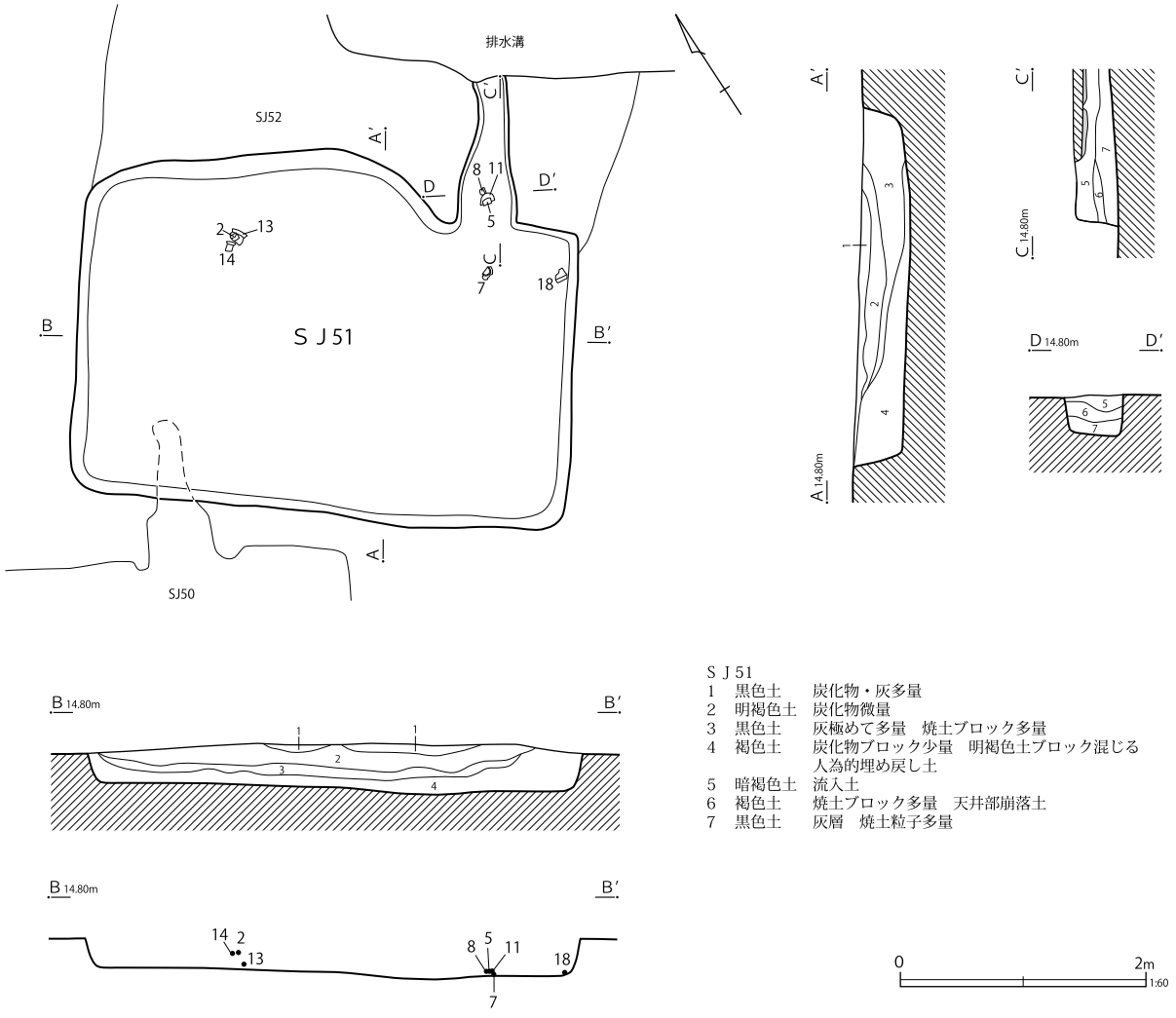
1は灰釉陶器の皿である。釉薬は刷毛塗りである。東濃産。虎渓山1号窯段階。2は須恵器坏の口縁部である。針状物質を含む。南比企産か。

3～7は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。3のみが含有物が少なく、白みがかった色調である。いずれも厚手である。3はコの字甕が崩れた形態で、接合痕が認められる。5・6は口縁端部が摘み上げられる常陸系の甕である。4・7は底部が小さく、ヘラケズリによって仕上げられており、武蔵型甕と考えられる。7の底面には敷物状の圧痕が見られる。

本住居跡は9世紀末、屋敷裏Ⅵ－3期である。

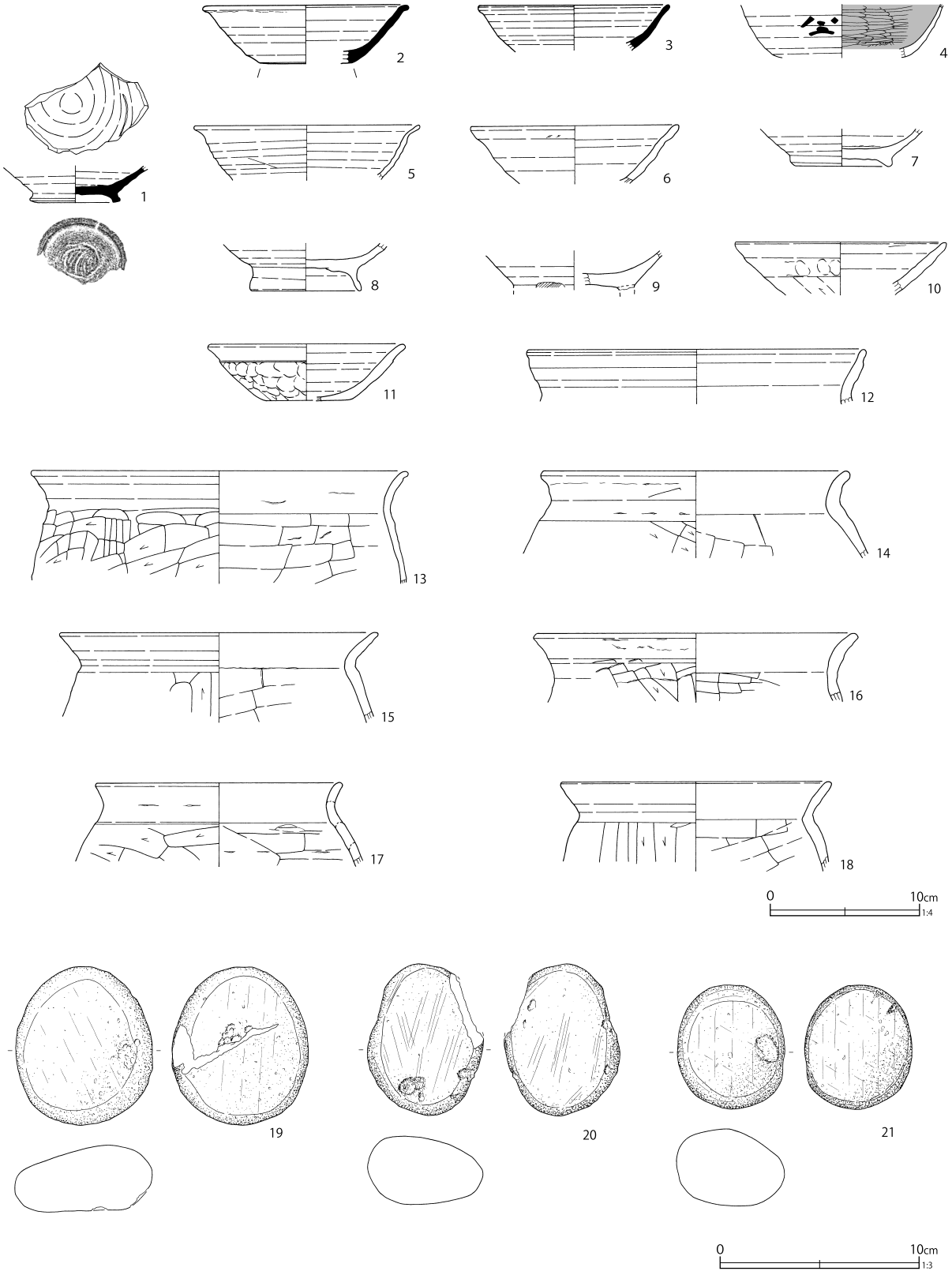
第51号住居跡（第326・327図）

D区の中央、O－19グリッドに位置する。第50・52号住居跡と重複し、前者より古く、後者より新しい。煙道の先端部は排水溝にかかり、壊されている。北東カマドで、主軸方位はN－40°－Eである。



SJ51
1　黒色土　炭化物・灰多量
2　明褐色土　炭化物微量
3　黒色土　灰極めて多量　焼土ブロック多量
4　褐色土　炭化物ブロック少量　明褐色土ブロック混じる人為的埋め戻し土
5　暗褐色土　流入土
6　褐色土　焼土ブロック多量　天井部崩落土
7　黒色土　灰層　焼土粒子多量

第326図　第51号住居跡



第327図　第51号住居跡出土遺物

第96表　第51号住居跡出土遺物観察表（第327図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付埦	－	[2.5]	5.0	ＢＥＨＩＪＫ	45	良好	黄灰	末野産	164-5
2	須恵器	坏	(18.5)	[3.8]	(6.2)	ＡＣＥＨＩＫ	20	良好	灰白	№７	
3	須恵器	坏	(12.8)	[3.0]	－	ＣＥＨＩＫ	20	良好	灰	末野産	
4	ロクロ土師	高台付埦	－	[3.6]	－	ＡＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理　外面墨書	164-4
5	ロクロ土師	高台付埦	(14.8)	[3.6]	－	ＡＣＥＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	№１	
6	ロクロ土師	高台付埦	(13.6)	[3.9]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙		
7	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.5]	6.2	ＡＣＥＨＩＫ	50	普通	にぶい黄橙	№４	164-6
8	ロクロ土師	高台付埦	－	[3.2]	7.1	ＡＣＨＩＫ	75	普通	灰黄褐	内外面黒色処理の可能性あり　№３	164-7
9	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.6]	－	ＡＣＨＩＫ	40	普通	灰黄		
10	土師器	坏	(13.9)	[3.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	坏	(12.5)	3.7	(6.0)	ＡＣＨＩ	50	普通	灰白	№２	164-8
12	土師器	甕	(22.2)	[3.7]	－	ＣＨＩ	20	普通	橙		223-3
13	土師器	甕	(24.8)	[7.5]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	明黄褐	外面煤付着　№８	
14	土師器	甕	(20.0)	[5.8]	－	ＣＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　№６	
15	土師器	甕	(21.0)	[6.1]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	普通	灰黄褐		
16	土師器	甕	(21.2)	[4.6]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
17	土師器	甕	(16.1)	[5.6]	－	ＡＣＨＩＫ	20	普通	にぶい橙		
18	土師器	甕	(17.7)	[6.0]	－	ＡＣＨＩＫ	15	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№５	
19	石製品	砥石	長さ8.1　幅6.8　厚さ3.5　重さ95.5ｇ　軽石								
20	石製品	砥石	長さ7.7　幅5.8　厚さ3.6　重さ88.7ｇ　軽石								
21	石製品	砥石	長さ6.3　幅5.4　厚さ3.9　重さ79.9ｇ　軽石							被熱により裏面黒色化	

平面形は横長の不整な長方形である。規模は主軸方向2.96 m、直交軸方向4.00 m、深さ0.40 mである。覆土は炭化物、灰を含む黒色土、明褐色土、褐色土である。３・４層は埋戻しと考えられる。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北東壁の東コーナー寄りで検出された。壁から大きく突出し、煙道は幅が狭く細長い。袖を含む規模は、検出範囲で長さ1.35 m、幅0.50 mである。煙道部は一部天井が遺存しており、高さは0.25 mほどである。覆土は７層が煙道からの流入土、８層が天井部崩落土、９層が灰層と考えられる。竪穴本体からそのまま燃焼部に至る。袖は短く、突出部の幅広の部分が燃焼部と考えられる。袖は削り出しである。燃焼部から煙道へは、段を持たずにそのまま移行する。煙道は幅0.15 mである。火床面はあまり焼けておらず、燃焼部、煙道の左右両方の壁面が良く焼け、焼土化していた。

床面に施設は認められなかった。

遺物はごく少なく、カマドの中層と東壁手前の中層から出土した。平安時代の須恵器坏、高台付坏、ロクロ土師器坏、高台付坏、土師器甕、小型甕の破片が出土している。古墳時代前期の北陸系５の字状口縁甕、近江系受口状口縁甕、在来の刷毛目台付甕の破片が混入している。

１～３は須恵器である。１は高台付埦である。内面に重ね焼きの際に溶着した高台端部が付着している。底面回転糸切り。長石粒を多く含む。三和窯産。２・３は坏である。角閃石を含み、利根川流域で生産された可能性がある。２は多孔質で、底面手持ちヘラケズリである。

４～９はロクロ土師器である。高台が付かない個体も下位に腰があり、高台付埦になると考えられる。利根川流域産。４は外面に「金」の墨書が認められる。内面黒色処理、ヘラ磨き。５はややざらつく感を受ける粘土である。６はやや厚手で、中位以下に指頭痕が多く残る。８・９は高台である。８は黒色処理の可能性がある。高台が強くナデつけられており、平面形が楕円形になる。

10・11は土師器の坏である。10は口縁部横ナ

デ、中位は指頭痕が認められるが無調整、下位はヘラケズリである。下位の剥離箇所から下地の刷毛目が見えている。11も同様だが、最下段のヘラケズリが不明瞭である。底面手持ちヘラケズリ。

12～18は土師器の甕である。いずれも利根川流域の粘土が用いられている。13は薄手でコの字甕の系譜を引くと考えられる。他は厚手で肩に張りがあり、ヘラケズリが弱い。常陸系の甕と考えられ、色調も白みがかっている。12は端部が摘まれている。

19～21は、軽石製の砥石である。平面形は円形もしくは楕円形で、僅かに擦痕が見られる。21は被熱によって黒色化している。

本住居跡は9世紀末、屋敷裏Ⅵ－2期である。

第52号住居跡（第328・329図）

D区の中央、O－19グリッドに位置する。第51・56号住居跡と重複し、前者より古く、後者より新しい。煙道の先端部は排水溝にかかり、壊されている。北東カマドで主軸方位はN－38°－Wである。

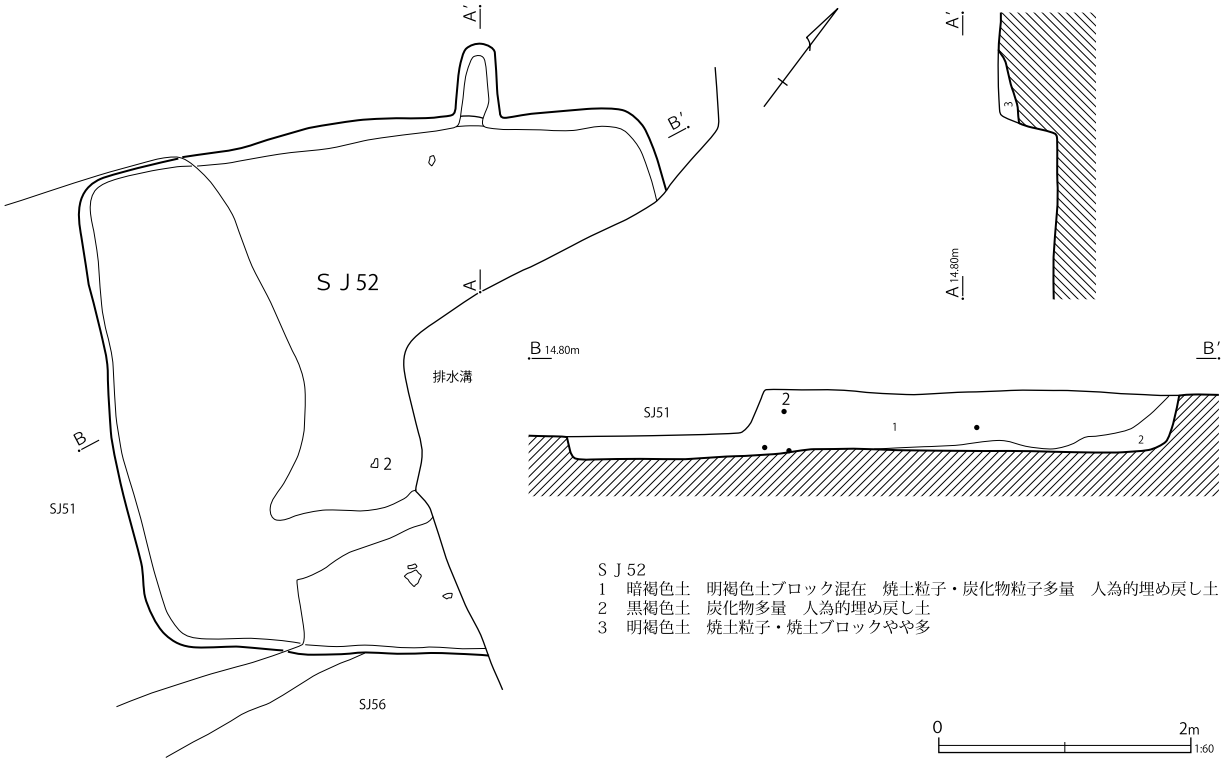
平面形は不整な方形である。規模は主軸方向4.25 m、直交軸方向4.60 m、深さ0.50 mである。覆土は焼土、炭化物、明褐色土ブロックを含む暗褐色土、黒褐色土で、埋戻しと考えられる。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北西壁の北コーナー寄りで検出された。排水溝設置時に削平したために、壁から短く突出した煙道の一部を検出できたのみである。規模は検出範囲で長さ0.65 m、幅0.35 mである。燃焼部の様相は不明である。覆土は3層が煙道覆土と考えられる。

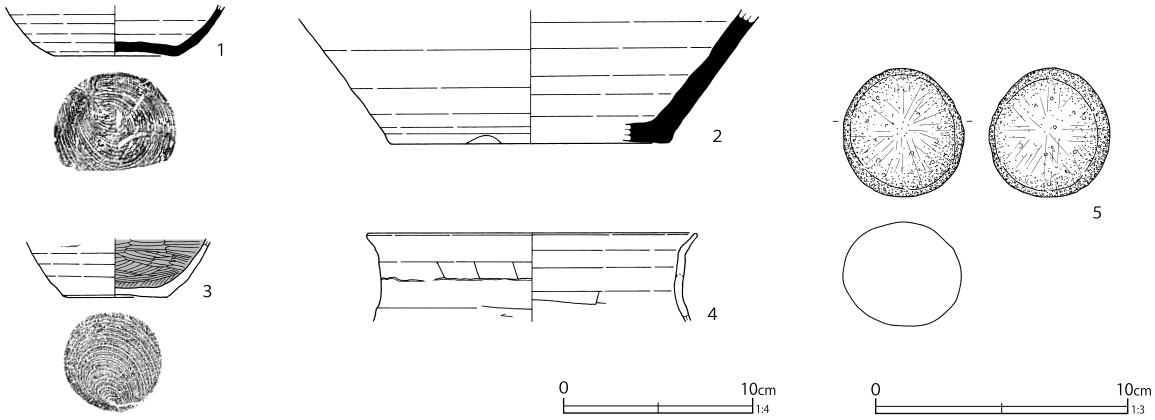
床面に施設は認められなかった。

遺物はごく少なく、1層中から分散して出土した。平安時代の灰釉陶器皿細片、須恵器坏、甕、土師器甕の破片が出土している。

1・2は須恵器である。1は坏である。底面回



第328図　第52号住居跡



第329図　第52号住居跡出土遺物

第97表　第52号住居跡出土遺物観察表(第329図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	－	[2.6]	6.4	ＥＩＪＫ	45	良好	灰	南比企産	
2	須恵器	甕	－	[7.0]	(15.0)	ＥＩＫ	15	良好	灰	№２	165-1
3	ロクロ土師	坏	－	[3.0]	5.4	ＡＣＤＥＨＩＫ	70	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　内面黒色処理	
4	土師器	甕	(17.4)	[4.7]	－	ＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	外面煤付着	
5	石製品	砥石	長さ5.1　幅4.8　厚さ4.2　重さ50.6ｇ　軽石								

転糸切り。南比企産。２は甕の底部である。器面は滑らかで含有物が少ない。産地不明。

３はロクロ土師器である。底面回転糸切。内面は黒色処理、ヘラ磨きが施されている。利根川流域の粘土が用いられている。

４は土師器のコの字甕である。利根川流域の粘土が用いられている。風化が進む。

５は、軽石製の砥石である。小型で僅かに擦痕が見られる。

本住居跡は９世紀中葉､屋敷裏Ⅵ－１期である。

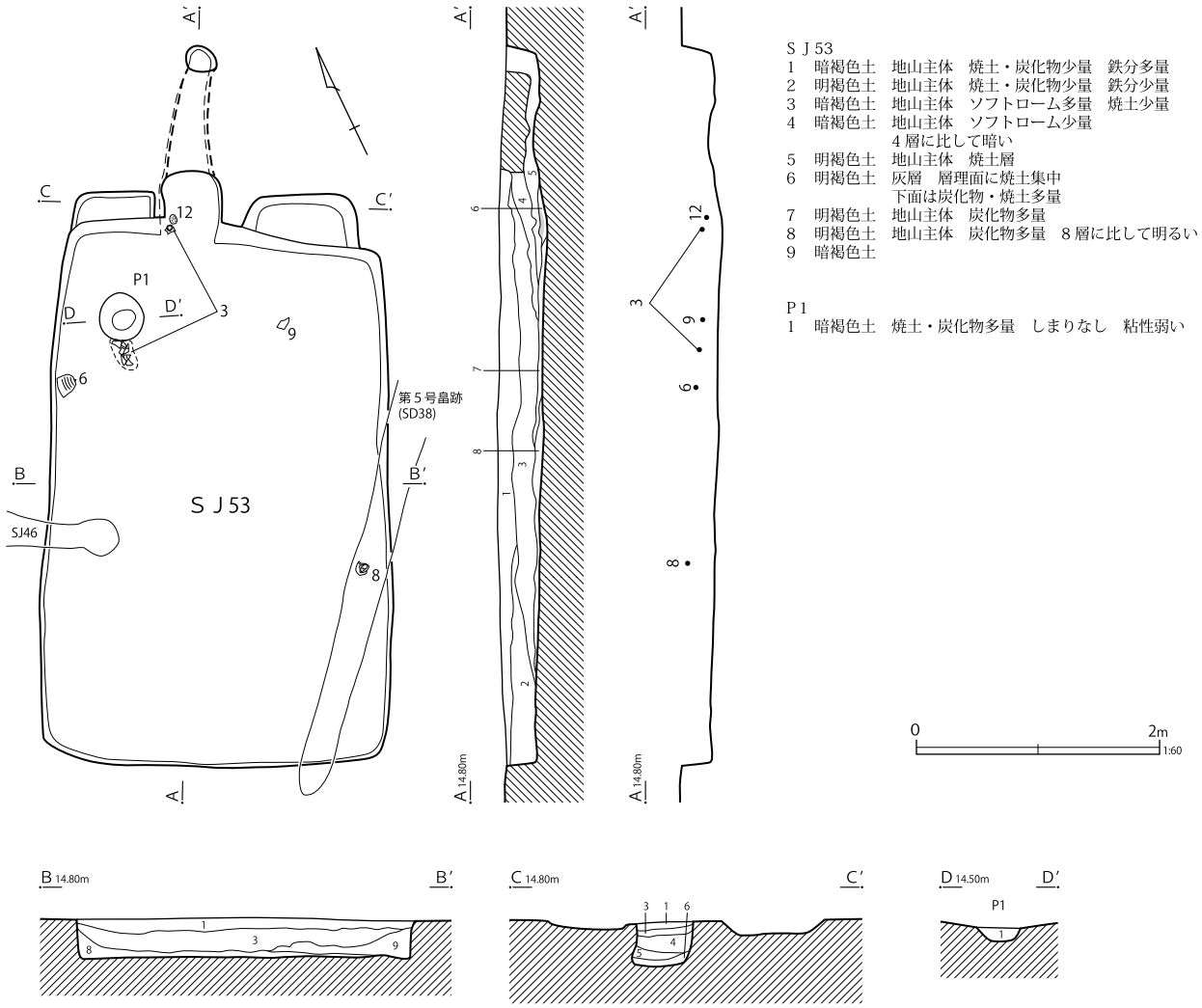
第 53 号住居跡（第 330・331 図）

Ｃ区の東側、Ｌ－14･15 グリッドに位置する。第 46 号住居跡、第５号畠跡と重複し、いずれよりも古い。北カマドで、主軸方位はＮ－19°－Ｅである。

平面形は縦長の不整な長方形である。規模は主軸方向 4.70 ｍ、直交軸方向 2.78 ｍ、深さ 0.40 ｍである。覆土は焼土、炭化物、ローム土を含む、明褐色土、暗褐色土で自然堆積と考えられる。床面には、中央を中心に地山の明褐色土と炭化物の混土層（７～９層）が貼床状に広がっていた。掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁の東寄りで検出された。壁から大きく突出し、煙道は天井が遺存していた。袖は検出されなかった。壁からの規模は、長さ 1.62 ｍ、幅 0.50 ｍである。煙道の高さは 0.10 ｍほどである。覆土は４層がカマドの流出土、５層が天井部崩落土、６層が灰層と考えられる。竪穴本体からそのまま燃焼部に至るが、７層を貼床とすると６層相当部分が皿状に凹むことになる。袖はなく、突出部の幅広の部分が燃焼部と考えられる。燃焼部の灰層層理面には焼土の集積が見られる。燃焼部から奥壁、煙道へと徐々に浅くなり、煙出し部分は、再度深くなっている。天井と床面が上がった位置の高さは５cm ほどの隙間しかない。煙道は幅 0.20 ｍほどである。燃焼部、煙道の左右の壁面が良く焼け、焼土化していた。

カマドの両脇には棚状施設が設けられていた。規模はカマドの西側がカマドから壁までの幅 0.65 ｍ、深さ 0.05 ｍ、カマドの東側が幅 0.95 ｍ、



第330図　第53号住居跡

深さ 0.10 ｍである。奥壁が揃えられており、壁の範囲を示すと考えられる。

Ｐ１は北西コーナーで検出された。径 0.40 ｍ、深さ 0.10 ｍである。覆土は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土で灰溜りの可能性がある。

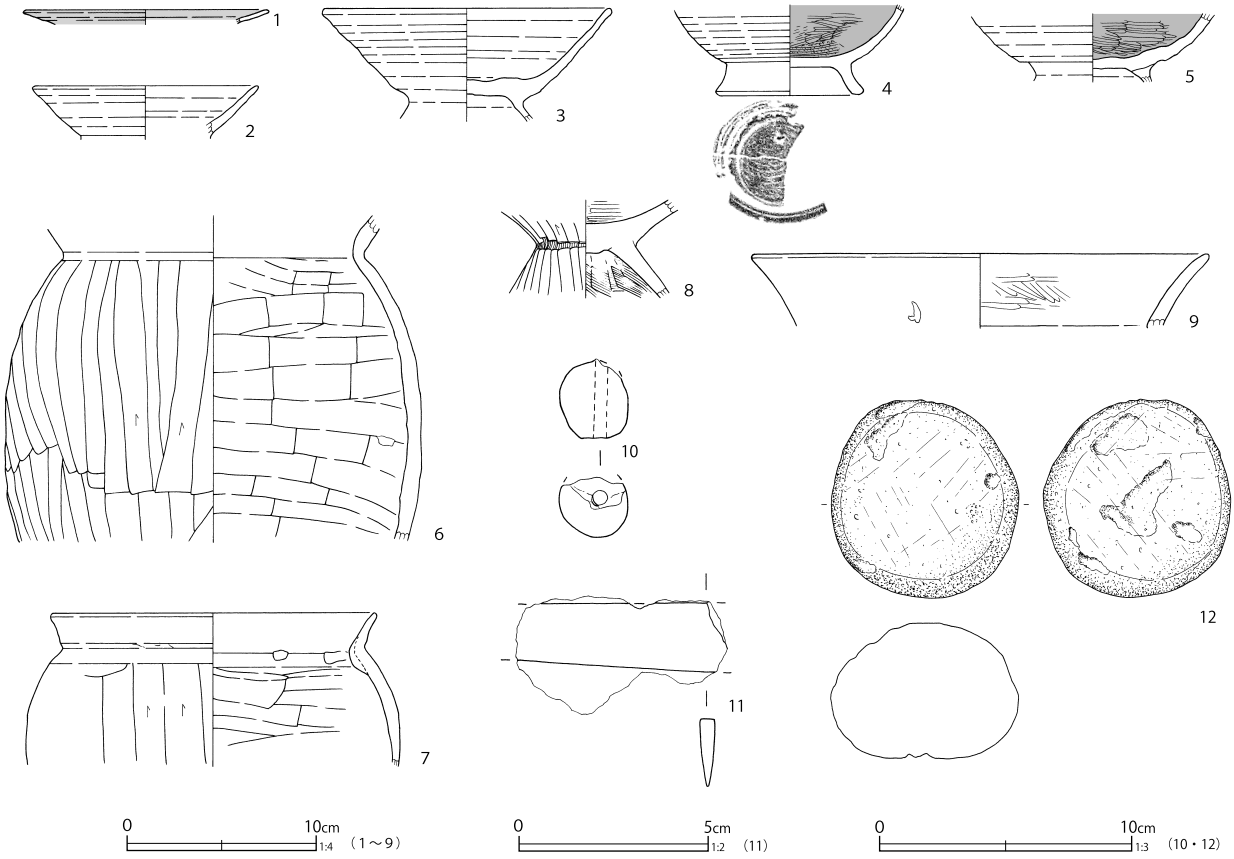
遺物はごく少なく、カマド、竪穴の中層から出土した。平安時代の灰釉陶器皿、須恵器坏、ロクロ土師器高台付坏、土師器甕、土錘の破片が出土している。ほかに古墳時代前期の台付甕、高坏が混入している。

１は緑釉陶器の皿である。東濃産。虎渓山１号窯段階。２は灰釉陶器の碗である。釉薬は漬け掛け。東濃産。虎渓山１号窯段階。いずれも底部、脚部を欠失している。

３～５はロクロ土師器の高台付埦である。４・５は内面が黒色処理され密にヘラ磨きが施されている。４は高台剥離箇所に高台貼付の際に施された線状の凹凸が認められる。５の底面はヘラケズリである。

６は胴部がやや膨らむ土師器甕で､厚手である。常陸系と考えられる。

７～９は混入の古墳時代前期の土師器である。７は球形胴の甕である。外面ヘラケズリ。８は台付甕の接合部である。ホゾ接合。９は若干外反しながら長く延びる甕の口縁部である｡外面横ナデ、内面ヘラ磨き。



第331図　第53号住居跡出土遺物

第98表　第53号住居跡出土遺物観察表（第331図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	緑釉陶器	皿	(12.8)	[0.7]	－	ＩＫ	5	良好	灰オリーブ		
2	灰釉陶器	碗	(11.9)	[2.7]	－	ＥＨＩＫ	10	良好	灰白	猿投産か	
3	ロクロ土師	高台付埦	15.2	[5.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	にぶい橙	№2・4	165-2
4	ロクロ土師	高台付埦	－	[4.7]	(7.9)	ＡＣＨＩＪＫ	20	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理	
5	ロクロ土師	高台付埦	－	[3.7]	－	ＡＣＩ	40	普通	灰褐	内面黒色処理	
6	土師器	甕	－	[17.2]	－	ＡＤＥＨＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№3	
7	土師器	甕	(17.2)	[8.0]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
8	土師器	台付甕	－	[5.2]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	75	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№6	165-3
9	土師器	甕	(24.0)	[3.8]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	灰黄褐	外面煤付着　№5	
10	土製品	土錘	径2.7×[2.3] 高さ3.1 孔径0.5×0.6 重さ16.5g			ＣＨＩＫ	65	普通	にぶい黄橙	土玉	218-22
11	鉄製品	刀子	長さ[5.5]　刃幅1.8　背幅0.4　重さ31.8ｇ								222-2
12	石製品	砥石	長さ8.0　幅7.4　厚さ5.4　重さ169.3ｇ　軽石							№1	

10は土錘である。やや細長い球形の所謂土玉である。片側の小口面を欠失している。全体にナデ調整である。

11は刀子である。刃部の破片で、刃幅が1.8cmあり、大型になると考えられる。

12は軽石製の砥石で、僅かに擦痕が見られる。

本住居跡の時期は10世紀前半、屋敷裏Ⅵ－３期である。

第55・71号住居跡（第332～334図）

D区の西側、N・O－17・18グリッドに位置

する。第55・71号住居跡は入れ子状になり、第71号住居跡を建て替えて、第55号住居跡が造られている。

まず先行する第71号住居跡について述べる。

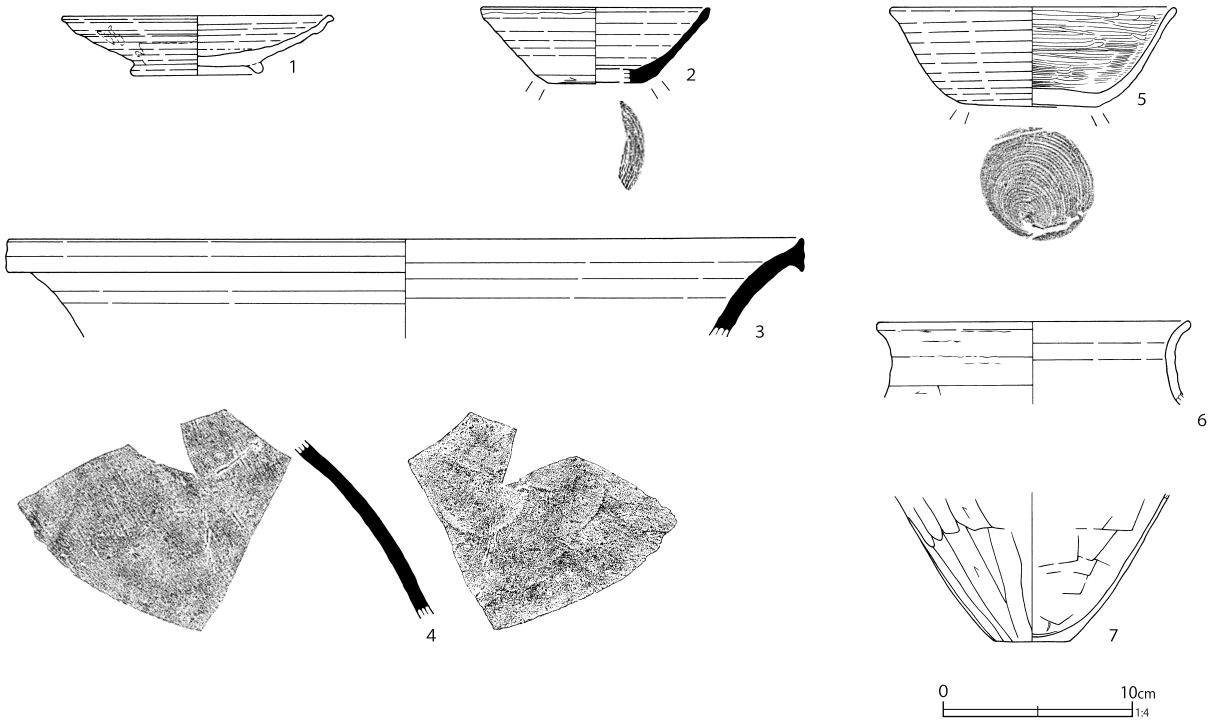
北カマドで、主軸方位はＮ－30°－Ｅである。横長の長方形で、規模は主軸方向4.30ｍ、直交軸方向4.80ｍ、深さ0.13ｍである。覆土は炭化物を含む灰褐色土、褐色粘土で、埋戻しと考えられる。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁の東寄りで検出された。壁から短く突出している。袖が検出されず、壁内に焼土の検出など燃焼部らしい痕跡が見られないことから、この突出部分が燃焼部と考えられる。煙道部は検出されなかった。壁からの規模は、長さ0.55ｍ、幅0.35ｍである。竪穴本体からそのまま燃焼部に至る。徐々に浅くなり、奥壁の深さは0.10ｍほどである。覆土は第１層が天井部崩落土で、明瞭な灰層は認められない。第５・６層が該当するのであろうか。燃焼部底面､左右両壁面､奥壁が良く焼け、焼土化していた。

床面には施設が認められなかった。

遺物は僅少で、平安時代の須恵器大甕、土師器甕の破片が出土している。

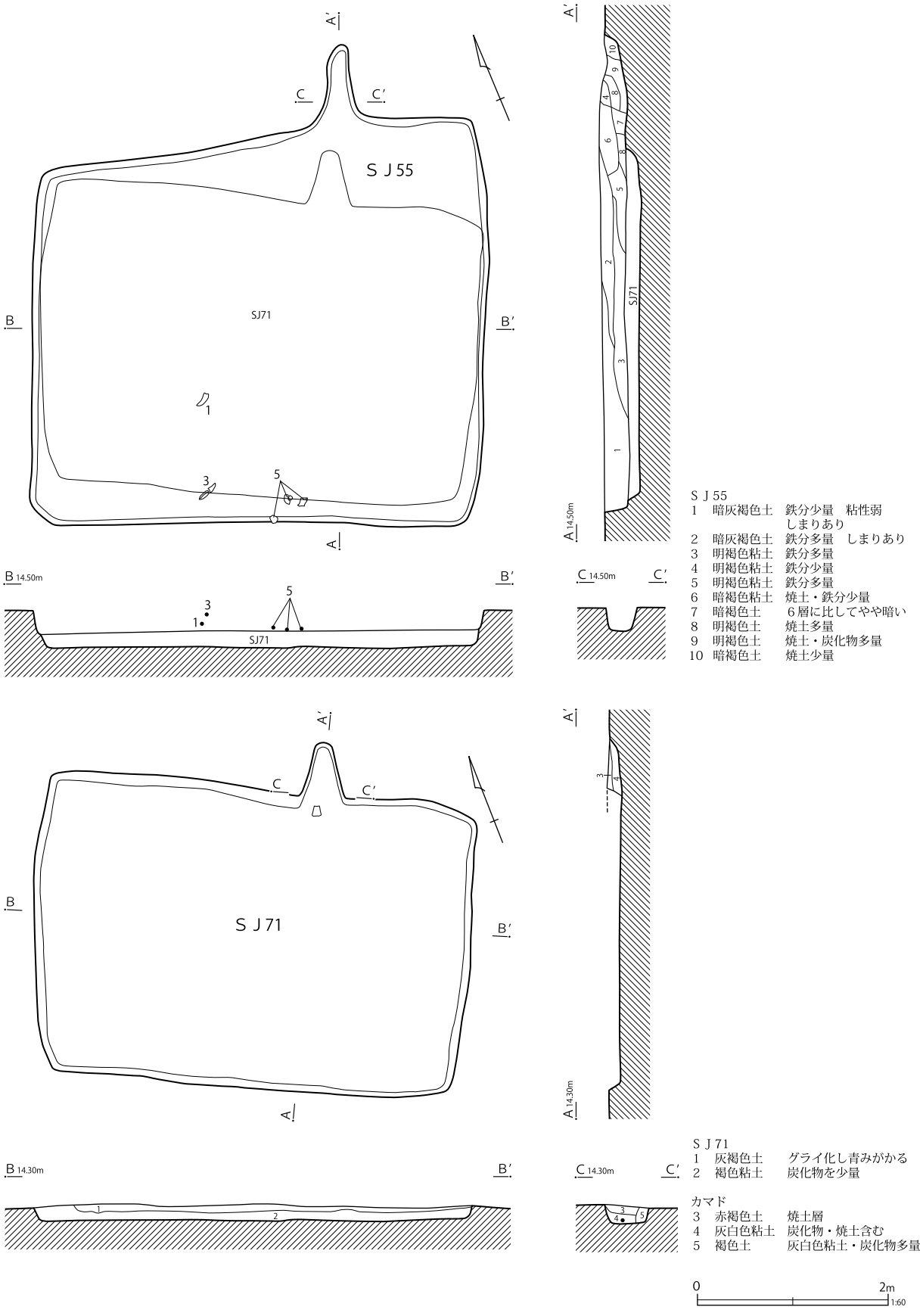
２は武蔵型甕の胴部下位である｡底部は小さく、器肉が薄い。外面、底面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。第55号住居跡の破片と接合する。



第332図　第55号住居跡出土遺物

第99表　第55号住居跡出土遺物観察表(第332図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	皿	(14.3)	3.1	6.6	ＡＨＩＫ	40	良好	灰白	№１	166-4
2	須恵器	坏	(12.2)	3.9	(5.0)	ＡＥＧＨＩＪ	25	普通	灰	南北企産　鳩山Ⅷ期	166-5
3	須恵器	甕	(41.8)	[5.2]	－	ＡＢＥＨＩＫ	20	良好	灰	上野産　№２	
4	須恵器	甕	－	[9.3]	－	ＥＨＩＫ	5	良好	灰	太田産か	
5	ﾛｸﾛ土師	埦	15.0	5.2	7.4	ＡＣＨＩ	80	普通	灰白	№３～５	166-6
6	土師器	甕	(16.6)	[4.4]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	20	普通	橙	外面煤付着	
7	土師器	甕	－	[7.7]	4.0	ＡＣＥＨＩＫ	30	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	166-7

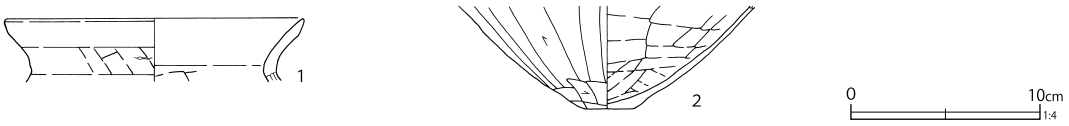


ＳＪ55
1　暗灰褐色土　鉄分少量　粘性弱
　　しまりあり
2　暗灰褐色土　鉄分多量　しまりあり
3　明褐色粘土　鉄分多量
4　明褐色粘土　鉄分少量
5　明褐色粘土　鉄分多量
6　暗褐色粘土　焼土・鉄分少量
7　暗褐色土　　６層に比してやや暗い
8　明褐色土　　焼土多量
9　明褐色土　　焼土・炭化物多量
10　暗褐色土　　焼土少量

ＳＪ71
1　灰褐色土　　グライ化し青みがかる
2　褐色粘土　　炭化物を少量

カマド
3　赤褐色土　　焼土層
4　灰白色粘土　炭化物・焼土含む
5　褐色土　　灰白色粘土・炭化物多量

第333図　第55･71号住居跡



第334図　第71号住居跡出土遺物

第100表　第71号住居跡出土遺物観察表(第334図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(15.9)	[3.3]	－	ＡＣＤＥＨＩＫ	10	普通	にぶい橙		
2	土師器	甕	－	[5.4]	3.0	ＡＣＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	内外面煤付着　SJ55と接合	

第55号住居跡は第71号住居跡を埋め戻して造られている。

北カマドで、主軸方位はＮ－19°－Ｅである。平面形は東辺の長い長方形である。規模は主軸方向4.30ｍ、直交軸方向4.80ｍ、深さ0.25ｍである。覆土は酸化鉄の多い暗灰褐色土､明褐色土、暗褐色土で自然堆積と考えられる。貼床、掘り方は検出されなかった。

カマドは北壁の東寄りで検出された。壁から短く突出している。袖が検出されず、土層断面でも壁の外側のみにカマド相当の土層が認められることから、この突出部分が燃焼部と考えられる。煙道部は検出されなかった。壁からの規模は、長さ0.90ｍ、幅0.35ｍである。竪穴本体からそのまま燃焼部に至る。徐々に浅くなり、奥壁の深さは0.15ｍほどである。覆土は第４層がカマドの流出土、第８層が天井部崩落土で、明瞭な灰層はないが第９・10層が該当すると考えられる。燃焼部底面、左右両壁面、奥壁が良く焼け、焼土化していた。床面には施設が認められなかった。

遺物は少なく、住居跡南側の床面近くから出土した。平安時代の灰釉陶器皿、須恵器坏、甕、ロクロ土師器埦、土師器甕の破片が出土している。ほかに古墳時代前期の台付甕胴部破片が混入している。

１は灰釉陶器の皿で、釉は刷毛塗りある。東濃産。径が大きく、大原窯段階の可能性がある。２は須恵器坏である。底部外周ヘラケズリ、底面回転糸切り。南比企産である。

３・４は須恵器大甕である。３は外面全体が平滑で灰がかかる。上野産と思われる。

５はロクロ土師器の埦である。利根川流域の粘土が用いられている。粒径が細かく、手につく。底部外周ヘラケズリ、底面回転糸切り。

６・７は土師器の武蔵型甕である。風化が進んでいる。６はコの字甕が崩れた形態である。７は器肉が薄く、底径が小さい。底面ヘラケズリ。

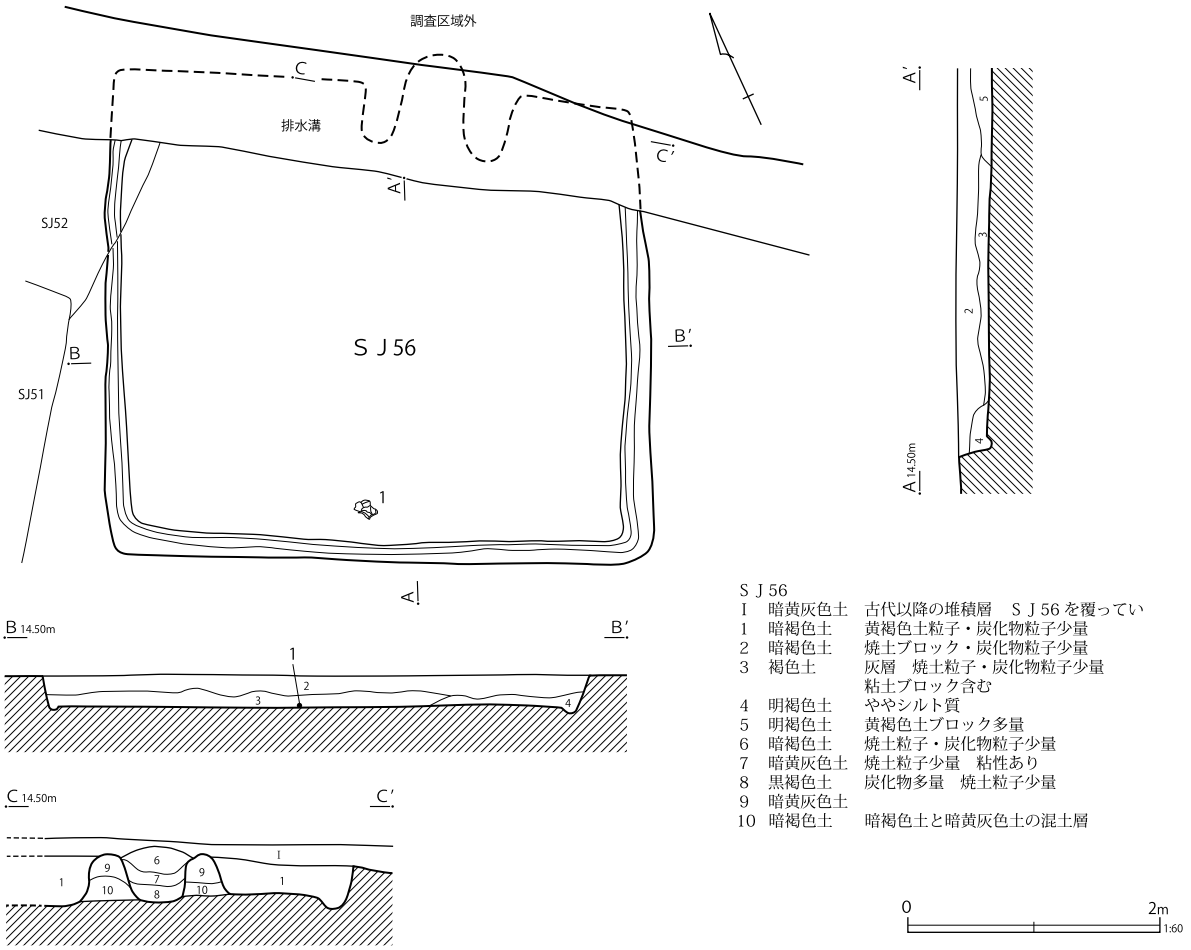
本住居跡は９世紀後半､屋敷裏Ⅵ－２期である。

第56号住居跡（第335・336図）

Ｄ区の中央、Ｏ－19グリッドに位置する。第52号住居跡と重複し、本住居跡が古い。遺構の北側は調査区域外にかかり、法面にカマドの土層断面が認められた。北カマドで、主軸方位はＮ－24°－Ｅである。

検出範囲と法面の断面から、平面形は方形と推定される。規模は主軸方向が検出範囲で3.30ｍ、直交軸方向4.30ｍ、深さ0.25ｍである。覆土は焼土、炭化物、黄褐色土を含む暗褐色土、明褐色土、褐色土で自然堆積と考えられる。３層は灰層である。貼床、掘り方は検出されなかった。

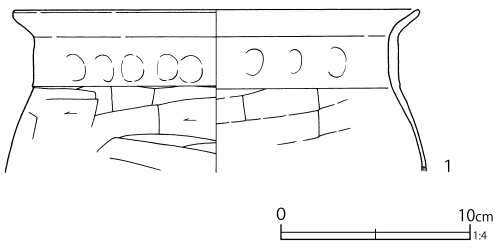
カマドは法面断面で検出されたのみである。北壁中央東寄りに造られたと推定される。幅は0.45ｍである。袖は暗黄灰色土、暗褐色土の貼り付けである。焚口部や燃焼部の様相は不明である。覆土は６層がカマドの流出土、７層が天井部崩落土、明瞭な灰層はないが８層が該当すると考



第335図　第56号住居跡

第101表　第56号住居跡出土遺物観察表(第336図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(21.4)	[8.5]	－	ＡＣＨＩＫ	30	普通	明赤褐	№1	166-8



第336図　第56号住居跡出土遺物

えられる。燃焼部底面、左右両壁面、奥壁が良く焼け、焼土化していた。

壁周溝は幅0.10～0.25ｍ、深さ0.05ｍで、検出範囲では全周している。

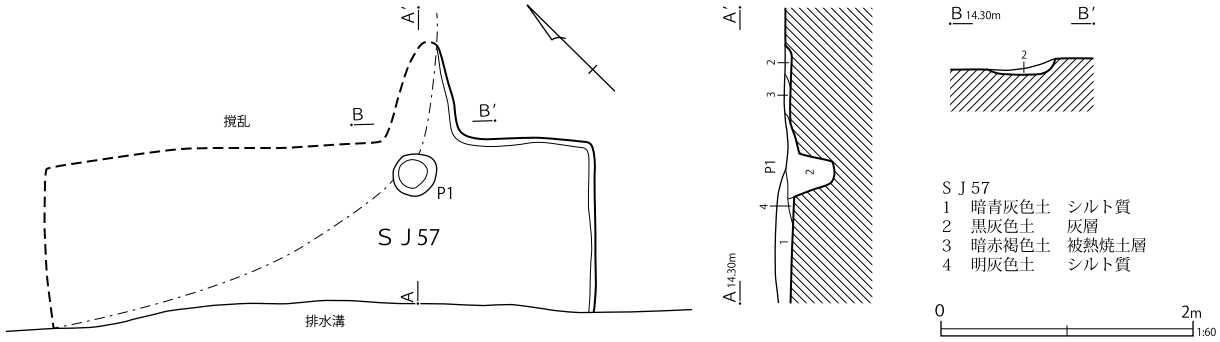
遺物はごく少なく、住居跡南側の床面から平安時代の須恵器坏、土師器甕が出土した。ほかに古墳時代前期の台付甕胴部破片が混入している。

１は土師器の所謂コの字甕である。口縁部中段に指頭痕が多く残る。

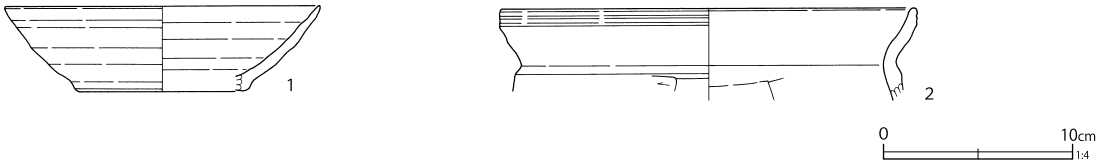
本住居跡の時期は９世紀中葉、屋敷裏Ⅵ－１期である。

第57号住居跡（第337・338図）

Ｄ区の中央、Ｐ－17･18グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。遺構の北西側も攪乱により大幅に削平されている。北カマドで、



第337図　第57号住居跡



第338図　第57号住居跡出土遺物

第102表　第57号住居跡出土遺物観察表（第338図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	坏	(16.7)	4.4	(8.8)	ＣＥＩＫ	10	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	甕	(22.0)	[4.9]	－	ＡＣＥＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙		

主軸方位はＮ－46°－Ｅである。

平面形は方形もしくは横長の長方形と推定される。規模は主軸方向が検出範囲で1.30 m、直交軸方向4.35 mである。覆土上部は削平されており、最大0.15 mの厚さで確認できたのみである。周辺はグライ化しており、全体に覆土は暗青灰色である。第４層が貼床の可能性があるが、部分的であり確実ではない。掘り方は検出されなかった。

カマドは北東壁の東寄りで検出された。壁から大きく突出し、竪穴本体から段を持たずに、そのまま燃焼部に至る。袖は検出されず、突出部が燃焼部と考えられる。煙道は検出されなかった。突出する規模は長さ0.80 m、幅0.65 mである。覆土は３層が燃焼部被熱箇所と考えられる。火床面、燃焼部右側の壁面が良く焼け、焼土化していた。焚口部には径0.35 m、深さ0.35 mのＰ１があり、覆土が灰層のため、灰溜りと考えられる。

床面に施設は認められなかった。

遺物は僅少で、平安時代の須恵器坏、ロクロ土師器坏、土師器甕が出土した。

１はロクロ土師器の坏である。若干腰があるため高台付埦の可能性がある。風化著しい。内面黒色処理か。２は土師器甕の口縁部である。端部が直立し、器肉が厚い。常陸系の甕である。利根川流域の粘土が用いられている。

本住居跡は10世紀初頭、屋敷裏Ⅵ－３期である。

（2）掘立柱建物跡

本調査では、平安時代の掘立柱建物跡１棟が検出された。

第２号掘立柱建物跡（第 339 図）

Ａ区の中央、Ｄ－５・６グリッドに位置する。重複する第 15 号住居跡より新しい。

２×２間の総柱建物跡で、規模は桁行長 5.82 ｍ、梁行長 4.44 ｍ、平面積は 25.84 ㎡である。主軸方位はＮ－ 62° －Ｗである。

柱間は桁行 2.91 ｍ、梁行 2.22 ｍで、柱筋も通っている。

個々の柱穴は円形で、径 0.35 ～ 0.48 ｍ、深さは 0.35 ～ 0.75 ｍである。束柱であるＰ９は径 0.25 ｍ、深さ 0.12 ｍである。Ｐ１・８は第 15 号住居跡と重複しているが、いずれも他の柱穴の底面レベルとほぼ同じになっている。

土層断面ではＰ１～３・８に柱痕（３層）が認められた。Ｐ５は柱が抜き取られていた。

遺物は少なく、平安時代の土師器甕の破片が出土したのみである。

（3）土　壙

平安時代の土壙は 12 基で、いずれもＣ区に分布している。各土壙の概要は、第 103 表に示した。円形基調で、規模は径 0.6 ～ 0.9 ｍ、深さ 0.3 ｍ未満の例が多い。断面形は大部分が逆台形、鍋底形である。覆土は明褐色土、暗褐色土を主体とし、焼土、炭化物、ローム土、褐色粘土を含む。第 30・31・48 号が埋戻しと考えられるほかは自然堆積である。

以下、特に注意される例について各説する。

第 27 号土壙（第 340 図）

Ｃ区の中央北側、Ｋ－ 15 グリッドに位置する。重複する第 59・61 号住居跡より新しい。長軸 1.79 ｍ、短軸 1.15 ｍ、深さ 0.47 ｍの隅丸長方形である。東側にスロープ状の突出部が取り付いている。長軸の方位はＮ－ 60° －Ｗである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。覆土は炭化物、ローム土を含む褐色土、暗褐色土、灰褐色土、黄褐色土で、自然堆積である。

遺物量は多く、平安時代のロクロ土師器の坏、高台付坏、古墳時代前期の小型壺、高坏の破片が出土した。

第 36 号土壙（第 340 図）

Ｃ区の西側、Ｊ－ 13 グリッドに位置する。重複する第 67 号住居跡より新しい。長軸 1.34 ｍ、短軸 0.88 ｍ、深さ 0.09 ｍの楕円形である。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦であった。

遺物量はやや多く、平安時代の灰釉陶器瓶類、須恵器坏、ロクロ土師器坏が出土し、縄文土器の破片が混入している。

第 39 号土壙（第 340 図）

Ｃ区の西側、Ｉ・Ｊ－ 12 グリッドに位置する。径 0.85 ｍ、深さ 0.25 ｍの円形である。断面形は鍋底形で、底面は凹凸があった。覆土は赤褐色土の単層で、焼土、炭化物、灰の混土層である。

遺物は平安時代の土師器甕の胴部片が出土したのみである。

第 43 号土壙（第 340 図）

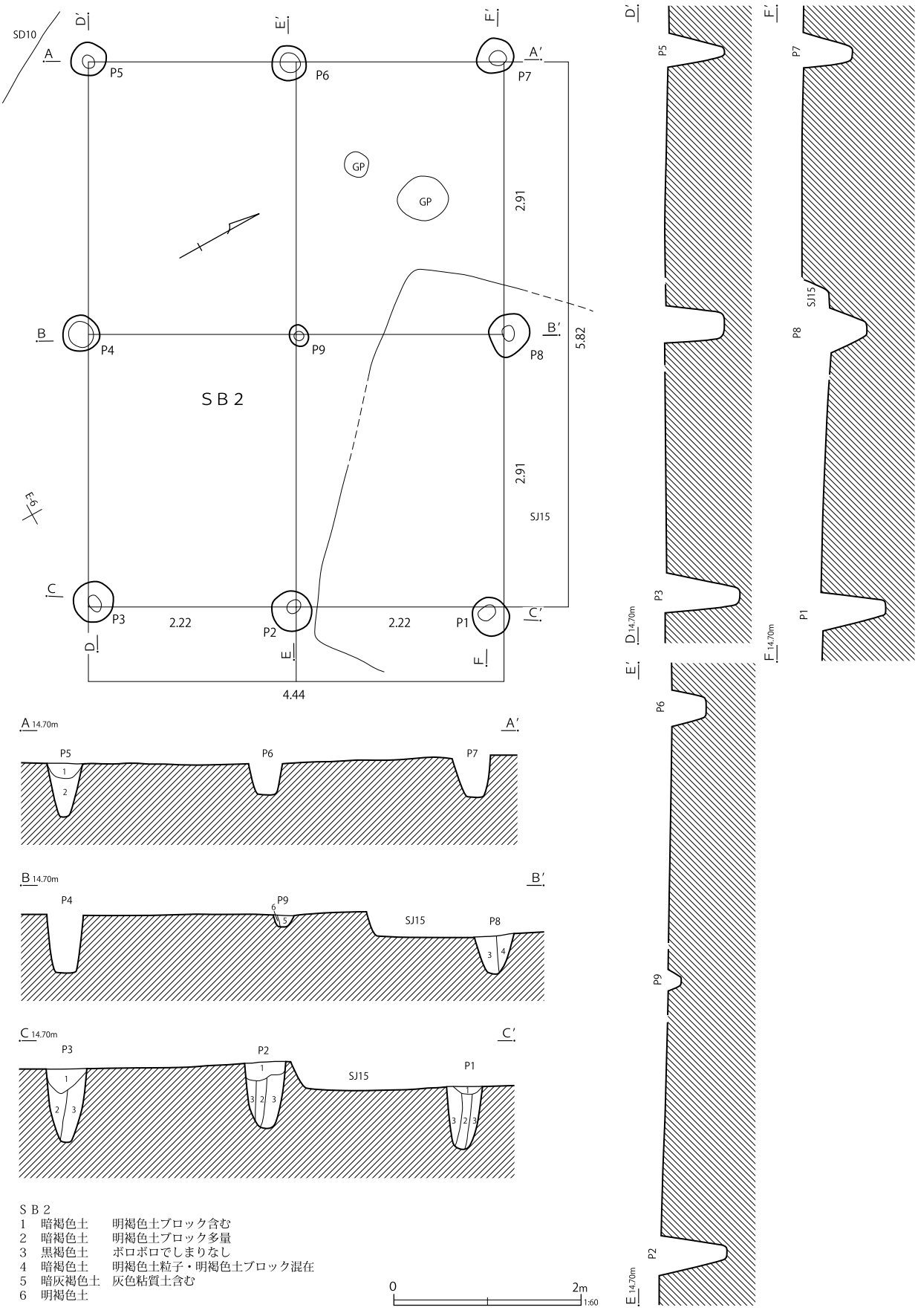
Ｃ区の西側、Ｊ－ 13 グリッドに位置する。径 0.95 ｍ、深さ 0.40 ｍの円形である。断面形は鍋底形で、底面は北側が低くなっていた。覆土は炭化物、焼土を含む黒褐色土、灰褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。

床面下に径 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍの縄文時代の柱穴が重複しており、柱痕が認められる。

遺物量は僅少で、ロクロ土師器高台付坏、土師器甕が出土した。

第 47 号土壙（第 340 図）

Ｃ区の西側、Ｊ－ 13 グリッドに位置する。径 0.75 ｍ、深さ 0.19 ｍの円形である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。覆土は炭化物、焼土、灰を多く含む上層と、粘土を多く含む下層からなり、あるいは灰溜りのような施設である可



SB2
1　暗褐色土　　明褐色土ブロック含む
2　暗褐色土　　明褐色土ブロック多量
3　黒褐色土　　ボロボロでしまりなし
4　暗褐色土　　明褐色土粒子・明褐色土ブロック混在
5　暗灰褐色土　灰色粘質土含む
6　明褐色土

第339図　第２号掘立柱建物跡

第103表　１次平安土壙一覧表(第340図)　　単位:m

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
27号土壙	平安	K－15	SJ59の中	N－60° －W	1.79	1.15	0.47	逆台形	隅丸長方形	高台付埦	C区
29号土壙	平安	J－12	－	N－37° －W	1.85	1.60	0.49	鍋底形	円形？	灰釉碗　高台付埦 甕　ロクロ土師器	C区
30号土壙	平安	K－13	－	－	0.85		0.57	逆台形	円形	五領S字　ロクロ土師器　古代甕	C区　埋戻し
31号土壙	平安	K－13・14	－	－	0.82		0.44	鍋底形	円形	土師器甕　ロクロ坏	C区　埋戻し
33号土壙	平安	K－14	SK32(旧)	－	0.60		0.39	鍋底形	円形	ロクロ高台付坏　五領壺　小壺	C区
36号土壙	平安	J－13	－	N－14° －E	1.34	0.88	0.10	皿形	楕円形	灰釉瓶　ロクロ坏 須恵器坏　縄文	C区
39号土壙	平安	I・J－12	－	－	0.85		0.25	逆台形	円形	土師器甕	C区
40号土壙	平安	K－14	－	－	0.85		0.14	皿形	円形	ロクロ高台付坏	C区
41号土壙	平安	K－14	－	－	0.80		0.20	逆台形	円形	ロクロ坏　土師器甕	C区
43号土壙	平安	J－13	－	－	0.95		0.40	鍋底形	円形	ロクロ高台付坏　甕	C区
47号土壙	平安	J－12	－	－	0.75		0.20	逆台形	円形	ロクロ坏　五領台付甕	C区
48号土壙	平安	J－13	－	－	0.62		0.28	鍋底形	略円形	土師器甕　五領高坏	C区　埋戻し

能性がある。

遺物は僅少で、平安時代のロクロ土師器坏が出土し、古墳時代前期の台付甕が混入している。

第 48 号土壙（第 340 図）

C区の西側、J－13 グリッドに位置する。径 0.62 m、深さ 0.28 mの略円形である。断面形は鍋底形で、底面には径 10cm ほどの掘り込みが認められる。柱痕等は認められず、底面全体も柱掘り方としては不自然なことから、柱穴ではないと考えられる。覆土は炭化物、焼土、暗褐色土ブロックを多く含み、埋戻しと考えられる。

遺物は少なく、平安時代の土師器甕、古墳時代前期の高坏が出土している。

以下は、土壙出土遺物である（第 341 図)。

第 27 号土壙出土遺物

１～３は平安時代のロクロ土師器である。１は高台付埦である。所謂高足高台である。全体にオレンジ色に近い赤褐色の色調である。底面回転糸切り後ナデ。２は坏の口縁部である。内面は黒色処理され、横位のヘラ磨きが施されている。全体の色調は灰白色で、胎土はきめ細かい。３は高台付埦の高台である。きれいに接合部から剥がれた状態である。外面に不自然な黒色の部分があり、黒色処理されている可能性がある。薄い黄橙色を呈する。

４・５は古墳時代前期の土師器である。４は所謂直口縁の小型壺である。口縁部はやや長めで直線的に開き、内外面ヘラ磨き。５は高坏の脚部である。４孔としたが、破片のため３孔の可能性がある。外面ヘラ磨き、内面刷毛目。

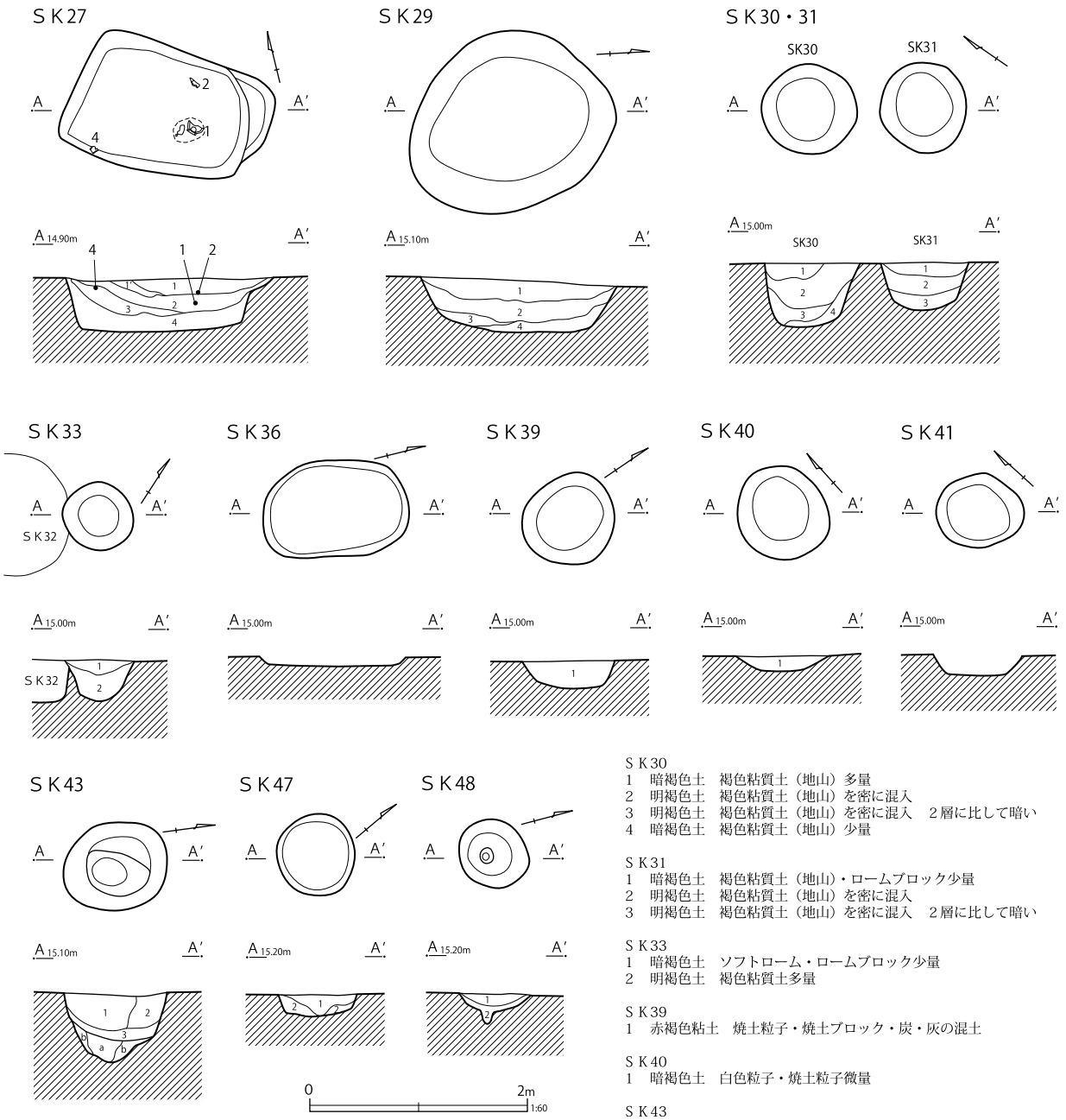
第 29 号土壙出土遺物

６・７は灰釉陶器の皿である。いずれも東濃産。６は大原窯段階、７は虎渓山１号窯段階である。

８～10 はロクロ土師器である。８は高台付埦の高台である。薄い褐色を呈する。９・10 は坏である。両者とも調整、胎土、色調とも共通している。底部外周ヘラケズリ、底面手持ちヘラケズリである。外面は淡い黄橙色で、内面は橙色に近い。胎土に長石と考えられる白色微粒子が多く含まれている。

11 は土師器甕の口縁端部である。焼成が非常に良く、硬質である。端面が面を持ち、中央が大きく凹んでいる。

12 は古墳時代後期の土師器有段口縁坏である。



ＳＫ27
1　褐色土　　ローム小ブロックやや多
1′褐色土　　ローム小ブロック少量
2　灰褐色土　ローム小ブロック少量
3　黄褐色土　ローム小ブロックを均一に含む　炭化物粒子少量
4　暗褐色土　砂質で粘性の乏しいロームブロック少量

ＳＫ29
1　暗褐色土　ソフトローム少量
2　暗褐色土　ソフトローム少量　１層に比して暗い
3　明褐色土　ソフトローム少量
4　明褐色土　ソフトローム・ロームブロックを多量に混入　３層に比して明るい

ＳＫ30
1　暗褐色土　褐色粘質土（地山）多量
2　明褐色土　褐色粘質土（地山）を密に混入
3　明褐色土　褐色粘質土（地山）を密に混入　２層に比して暗い
4　暗褐色土　褐色粘質土（地山）少量

ＳＫ31
1　暗褐色土　褐色粘質土（地山）・ロームブロック少量
2　明褐色土　褐色粘質土（地山）を密に混入
3　明褐色土　褐色粘質土（地山）を密に混入　２層に比して暗い

ＳＫ33
1　暗褐色土　ソフトローム・ロームブロック少量
2　明褐色土　褐色粘質土多量

ＳＫ39
1　赤褐色粘土　焼土粒子・焼土ブロック・炭・灰の混土

ＳＫ40
1　暗褐色土　白色粒子・焼土粒子微量

ＳＫ43
1　黒褐色土　　粘質土　炭化物粒子少量
2　灰褐色土　　粘質土　炭化物粒子・焼土粒子少量
3　暗褐色土　　粘質土　鉄分沈着　しまりに欠ける
a　暗褐色土　　炭化物粒子少量　縄文柱穴
b　暗黄褐色土　ローム小ブロック少量　縄文柱穴

ＳＫ47
1　黒褐色土　　粘質土　焼土・炭化物・灰多量
2　暗灰褐色土　粘質土　灰色粘土多量

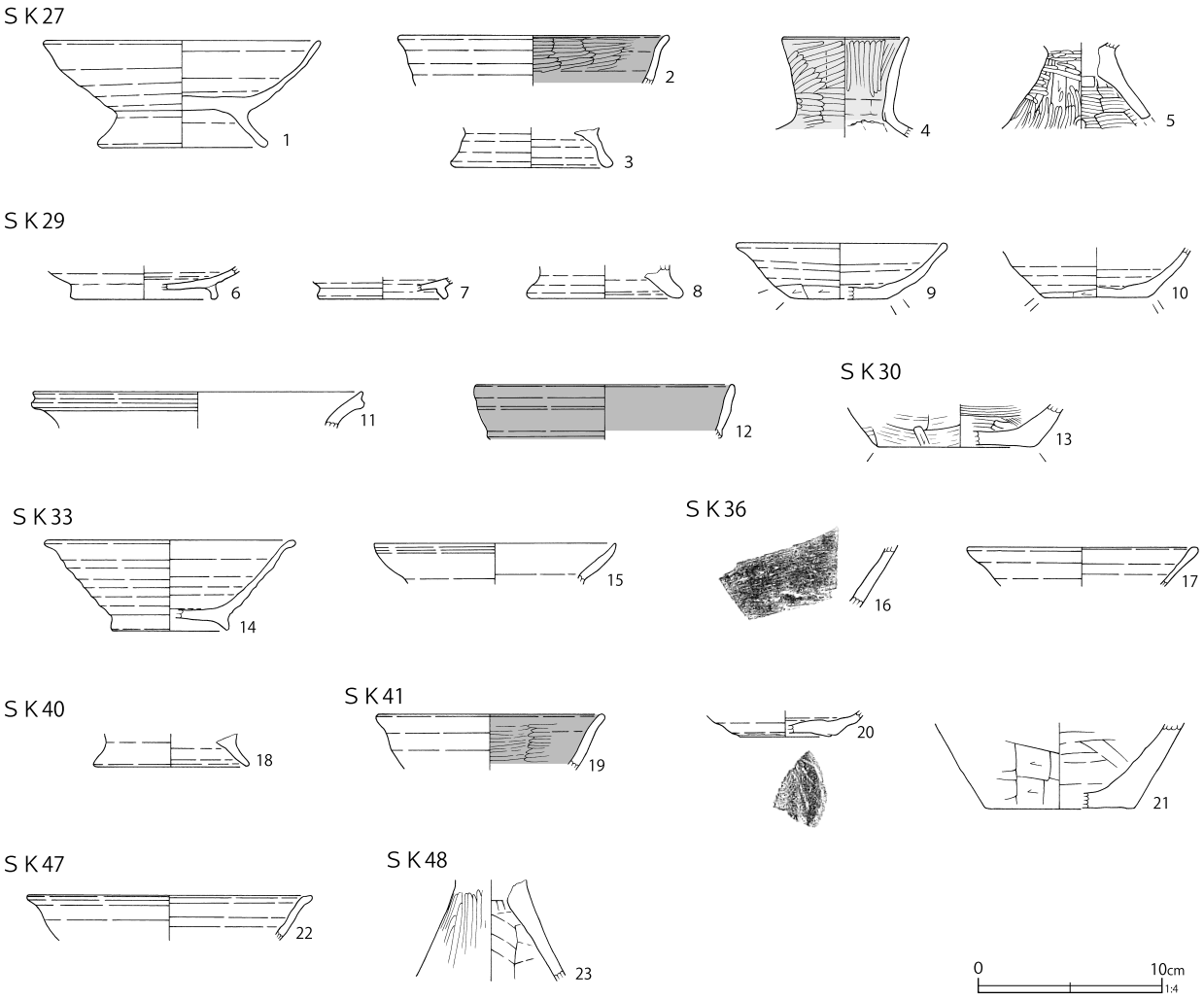
ＳＫ48
1　黒褐色土　粘質土　焼土・炭化物多量
2　灰褐色土　粘質土　暗褐色土ブロック多量

第340図　第27･29 ～ 31･33･36･39 ～ 41･43･47･48号土壙

内外面黒色処理されている。

第 30 号土壙出土遺物

13 は上総系の甕の下半である。厚めで、淡い黄橙色を呈する。外面ヘラナデ後ヘラケズリ、内面刷毛目後ヘラナデ、底面は手持ちヘラケズリである。



第341図　１次土壙出土平安遺物

第 33 号土壙出土遺物

14 はロクロ土師器の高台付埦である。全体にオレンジ色に近い赤褐色の色調である。利根川流域産。底面回転糸切り。風化が進む。

15 は古墳時代前期の小型壺の口縁部である。

第 36 号土壙出土遺物

16 は灰釉陶器瓶類の胴部破片である。外面全体に釉がかかる。東濃産、時期不詳。17 はロクロ土師器の坏である。暗橙色で、白色針状物質を含む。

第 40 号土壙出土遺物

18 は高台付埦の高台である。坏部底面の接合箇所からきれいに剥がれている。淡黄橙色を呈する。

第 41 号土壙出土遺物

19・20 はロクロ土師器の坏である。19 の内面は黒色処理、ヘラ磨き。薄い橙色から褐色を呈する。20 の底面は周辺ヘラケズリである。

21 は土師器の上総型甕である。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。底面は無調整である。外面は灰白色、内面は暗褐色を呈する。

第 47 号土壙出土遺物

22 はロクロ土師器の坏である。風化が進む。暗橙色を呈する。

第 48 号土壙出土遺物

23 は古墳時代前期の高坏である。ホゾ接合で接合部の脚が抜けた状態である。灰白色を呈する。

第104表　１次平安土壙出土遺物観察表（第341図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師	高台付埦	14.6	5.8	8.8	ＡＣＥＨＩＫ	90	普通	橙	SK27№２	196-2
2	ロクロ土師	坏	(14.4)	[2.7]	－	ＡＣＨＩ	20	普通	灰白	SK27№１　内面黒色処理	
3	ロクロ土師	高台付埦	－	[2.1]	(8.2)	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	SK27	
4	土師器	小型壺	(6.8)	[5.4]	－	ＡＣＥＨＩ	30	普通	にぶい橙	SK27№３　内外面赤彩	
5	土師器	高坏	－	[4.6]	－	ＡＨＩＫ	25	普通	にぶい橙	SK27	
6	灰釉陶器	皿	－	[1.7]	(7.8)	ＥＨＩＫ	25	良好	灰白	SK29	
7	灰釉陶器	皿	－	[1.1]	(7.0)	ＡＨＩＫ	15	普通	灰白	SK29	
8	ロクロ土師	高台付埦	－	[1.8]	(8.0)	ＡＣＨＩＫ	25	普通	灰黄褐	SK29	
9	ロクロ土師	坏	－	[2.7]	(5.6)	ＡＣＥＨＩＫ	35	普通	にぶい黄橙	SK29	
10	ロクロ土師	坏	(11.1)	[3.0]	(5.0)	ＡＤＥＨＩＫ	40	普通	橙	SK29	
11	ロクロ土師	甕	(17.6)	[2.0]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	SK29　口縁端部に炭化物付着	
12	土師器	坏	(13.7)	[2.9]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	黒褐	SK29　有段口縁坏　内外面黒色処理	
13	土師器	甕	－	[2.3]	(8.5)	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	にぶい褐	SK30	
14	ロクロ土師	高台付埦	(13.2)	4.9	(6.1)	ＡＣＩＫ	15	普通	黄橙	SK33	
15	土師器	小型壺	(13.0)	[2.2]	－	ＡＣＥＨＩＫ	10	普通	橙	SK33	
16	灰釉陶器	瓶	－	[3.3]	－	ＥＨＩＫ	5	良好	灰白	SK36	
17	ロクロ土師	坏	(12.2)	[2.1]	－	ＡＨＩＪＫ	10	普通	にぶい黄橙	SK36	
18	ロクロ土師	高台付埦	－	[1.8]	(8.2)	ＡＣＨＩＫ	30	普通	にぶい橙	SK40	
19	ロクロ土師	坏	(12.0)	[3.0]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	にぶい褐	SK41　内面黒色処理	
20	ロクロ土師	坏	－	[1.3]	(4.8)	ＣＥＨＩＫ	25	普通	浅黄橙	SK41	
21	土師器	甕	－	[4.6]	(8.0)	ＡＣＤＥＨＩＫ	15	良好	灰黄	SK41　上総型	
22	ロクロ土師	坏	(15.2)	[2.4]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	SK47	
23	土師器	高坏	－	[5.5]	－	ＡＥＨＩＫ	20	普通	にぶい黄橙	SK48	

（4）井戸跡

平安時代の井戸跡はA区、C区に各１基、D区に３基分布している。第４号が浅く、溜井の可能性が考えられる。その他は、確認面から 0.8 m程度まで掘削したが底面には達せず、さらに１mのピンポールを刺し込んだが底面には至らなかった。安全確保のため、それより下層の調査は断念した。

第４号井戸跡（第 342・343 図）

A区の中央東寄り、Ｅ－７グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形は最上段に段がある筒形である。上端は長径 0.97 m、短径 0.90 m、下端は長径 0.85 m、短径 0.80 m、深さ 0.90 mである。深度がないことから溜井の可能性が考えられる。覆土は埋め戻しである。

遺物は、覆土中から平安時代の土師器甕の破片が出土した。他に古墳時代前期の甕が混入する。

１は古墳時代前期の土師器甕の口縁部である。内外面とも刷毛目後横ナデ。

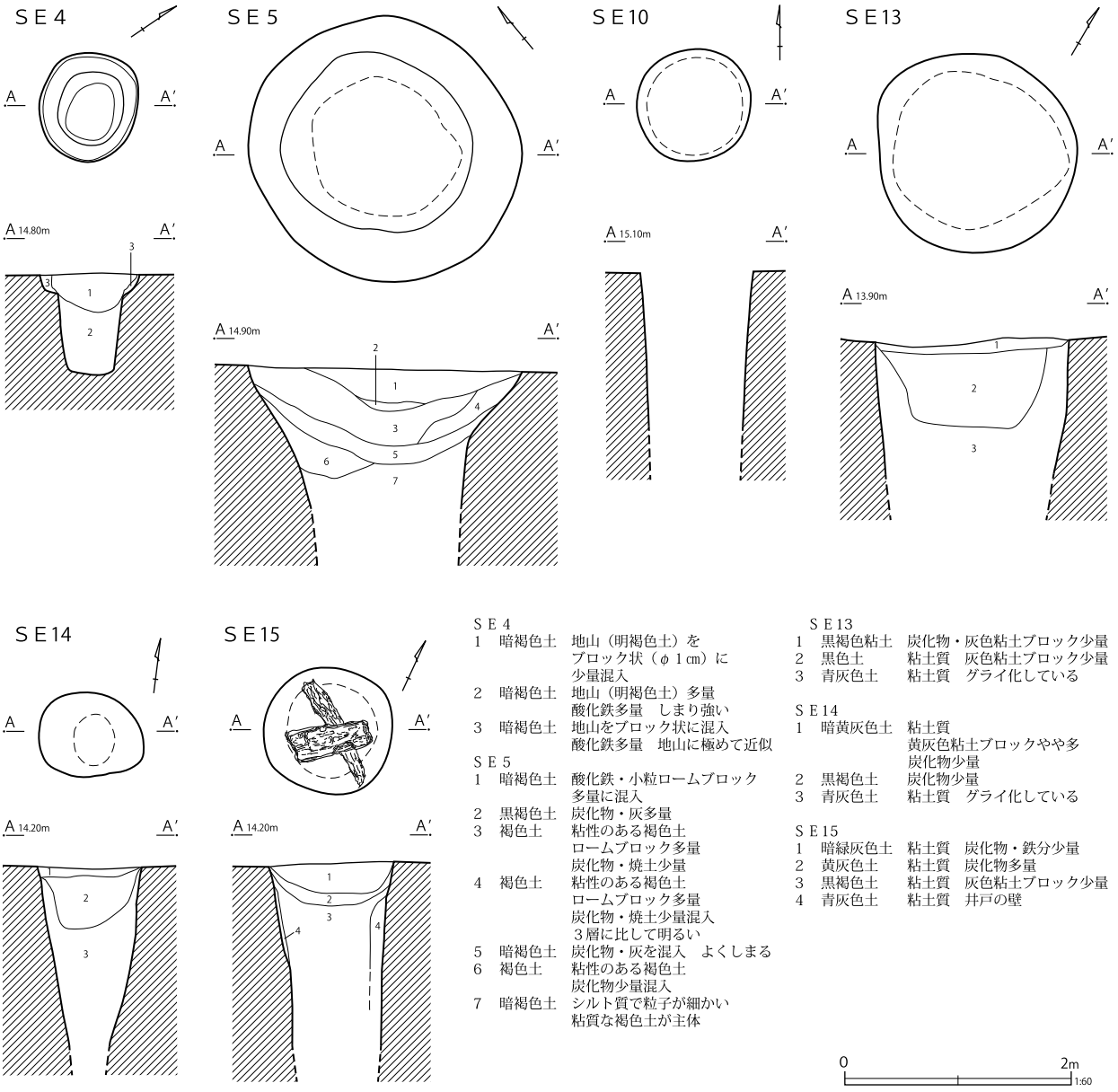
第５号井戸跡（第 342・343 図）

C区のほぼ中央、Ｊ・Ｋ－ 14 グリッドに位置する。やや歪んだ円形で、上端の長径 2.39 m、短径 2.33 mの略円形で、断面形は漏斗形である。覆土は１～５層が埋戻し、６・７層は自然堆積である。

遺物は、覆土中から平安時代のロクロ土師器坏が出土し、須恵器甕、古墳時代前期の壺、台付甕、甕の破片が混入している。

２～４はロクロ土師器の坏である。いずれも風化が進み、表面が融けている。２は長石粒を多く含む。底面手持ちヘラケズリ。

５は須恵器の甕で、格子目タタキが施されてい



SE4
1 暗褐色土 地山（明褐色土）をブロック状（φ1㎝）に少量混入
2 暗褐色土 地山（明褐色土）多量 酸化鉄多量 しまり強い
3 暗褐色土 地山をブロック状に混入 酸化鉄多量 地山に極めて近似

SE5
1 暗褐色土 酸化鉄・小粒ロームブロック多量に混入
2 黒褐色土 炭化物・灰多量
3 褐色土 粘性のある褐色土 ロームブロック多量 炭化物・焼土少量
4 褐色土 粘性のある褐色土 ロームブロック多量 炭化物・焼土少量混入 3層に比して明るい
5 暗褐色土 炭化物・灰を混入 よくしまる
6 褐色土 粘性のある褐色土 炭化物少量混入
7 暗褐色土 シルト質で粒子が細かい 粘質な褐色土が主体

SE13
1 黒褐色粘土 炭化物・灰色粘土ブロック少量
2 黒色土 粘土質 灰色粘土ブロック少量
3 青灰色土 粘土質 グライ化している

SE14
1 暗黄灰色土 粘土質 黄灰色粘土ブロックやや多 炭化物少量
2 黒褐色土 炭化物少量
3 青灰色土 粘土質 グライ化している

SE15
1 暗緑灰色土 粘土質 炭化物・鉄分少量
2 黄灰色土 粘土質 炭化物多量
3 黒褐色土 粘土質 灰色粘土ブロック少量
4 青灰色土 粘土質 井戸の壁

第342図　第4・5・10・13 ～ 15号井戸跡

る。6はS字状口縁台付甕である。7は大型の甕の口縁部である。内外面ともヘラ磨きである。

第10号井戸跡（第342図）

D区の東側、E－6・7グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は筒形である。上端径は1.00 m。掘削中に土層断面が崩落したため覆土は観察できなかった。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土師器甕の破片が出土したのみである。

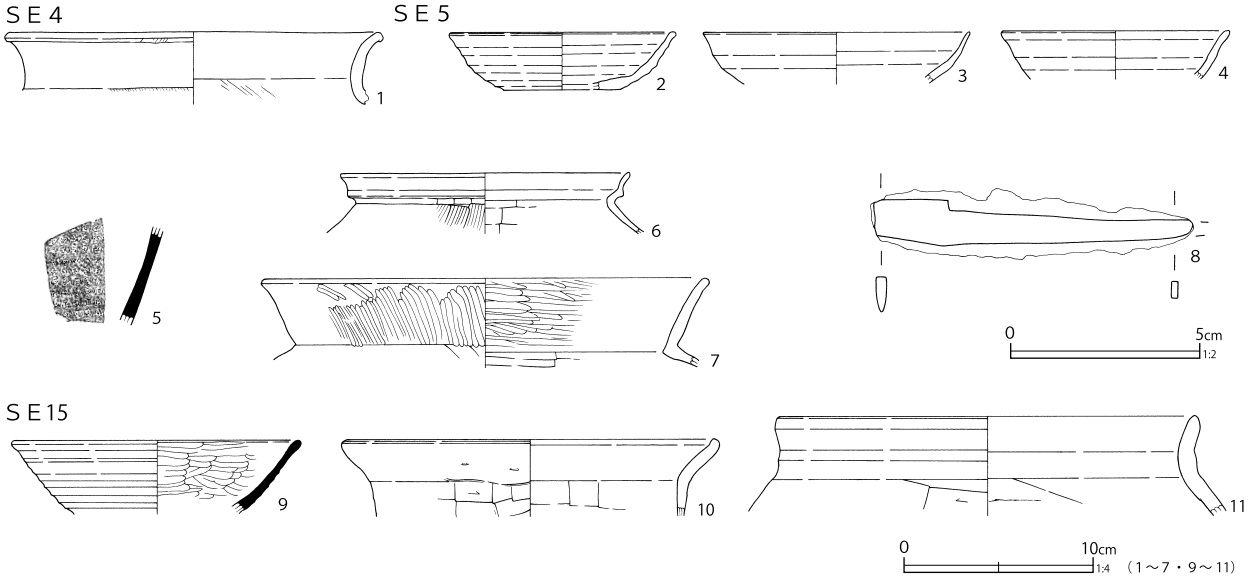
第13号井戸跡（第342図）

D区の東側、O－18・19グリッドに位置する。径1.73 mの不整円形で、断面形は筒形である。覆土は下層が壁の崩落土、その上位は自然堆積と考えられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土師器甕の破片が出土したのみである。

第14号井戸跡（第342図）

D区の中央西寄り、N－18グリッドに位置する。長径0.90 m、短径0.75 mの楕円形で、断面



第343図　第４・５・15号井戸跡出土遺物

第105表　第４・５・15号井戸跡出土遺物観察表（第343図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.5)	[3.7]	－	ＡＥＨＩＫ	5	普通	黒褐	SE４　外面煤付着	
2	ロクロ土師	坏	(11.6)	3.0	(6.2)	ＣＨＩＫ	30	普通	にぶい黄橙	SE５	
3	ロクロ土師	坏	(13.9)	[2.7]	－	ＡＣＨＩ	10	普通	浅黄橙	SE５	
4	ロクロ土師	坏	(11.9)	[2.6]	－	ＡＣＥＨＩ	10	普通	灰	SE５	
5	須恵器	甕	－	[5.2]	－	ＨＩＫ	5	普通	灰白	SE５	
6	土師器	台付甕	(15.1)	[3.2]	－	ＡＥＨＩ	5	普通	にぶい黄橙	SE５　外面煤付着	
7	土師器	甕	(23.5)	[4.7]	－	ＡＣＥＨＩＫ	20	普通	褐灰	SE５　外面煤付着	
8	鉄製品	刀子	長さ[8.5]㎝　重さ16.1ｇ							SE５	222-2
9	須恵器	坏	(15.4)	[3.9]	－	ＡＣＩＫ	15	普通	灰黄	SE15　末野産	
10	土師器	甕	(19.4)	[4.0]	－	ＡＣＥＩＫ	25	普通	にぶい黄橙	SE15　コの字甕　内外面煤付着	
11	土師器	甕	(21.7)	[5.2]	－	ＡＨＩＫ	5	普通	にぶい橙	SE15　上総型甕　内外面煤付着	

形は漏斗形である。東側はやや膨らんでおり壁が崩落したと考えられる。覆土は、３層が壁の崩落土で、その上位は自然堆積と考えられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土師器甕の破片が出土したのみである。

第 15 号井戸跡（第 342・343 図）

Ｄ区の西側、Ｎ－18 グリッドに位置する。径 1.10 ｍの略円形で、断面形は筒形である。４層が壁面の崩落に由来するため、本来は漏斗状であった可能性がある。覆土は４層が壁の崩落土で、その後に３層が堆積し、その上位に１・２層が自然堆積により流入したと考えられる。

レンズ状堆積の２層中には多量の炭化材、炭化物が含まれるため、図中の炭化材も周辺からもたらされたと考えられる。

遺物は、覆土中から、平安時代の須恵器坏、土師器の甕が出土している。

９は須恵器の坏である。内面はヘラ磨きが施されている。10 は土師器の甕である。頸部外面に横位のヘラケズリが施されている。口縁端部は面を持ち、内側に若干折り返されている。砂質が強い。11 は上総型の甕で、分厚く、焼成が良い。乳白色を呈する。胴部は外面横位ヘラケズリ、内面横位ヘラナデである。

（5）畠跡

平安時代の畠跡はA～D区の各調査区から１箇所ずつ、計４箇所検出されている。古墳時代同様に、さく跡それぞれに溝番号を付して調査したため、ここでもそれに準拠して取り扱う。溝跡の内30・31・35号溝跡が第３号畠跡、第１～５号溝跡が第４号畠跡､第37～39号溝跡が第５号畠跡、第40～45号溝跡が第６号畠跡である。

第３号畠跡（第344・345図）

A区のほぼ中央、D・E－６・７グリッドに位置する。第35号溝跡より東側は非常に不明瞭で、本来は更に東側に広がると考えられる。重複する第３号井戸跡、第20号土壙より新しい。さく跡の走行方向は、N－10°－Eである。さく跡の間隔は第30－31号溝跡間で1.4ｍ、第31－35号溝跡間で2.2ｍである。

各々の形態は、先端の丸い溝状である。長さは第30号溝跡7.55ｍ､第31号溝跡が6.15ｍあり、本来は６～８ｍの単位であったと考えられる。幅は0.20～0.42ｍ、深さは浅く、0.02～0.17ｍほどである。覆土は確認できなかった。

畠跡を構成する各溝からの遺物は僅少で、古墳時代後期の模倣坏、甕、平安時代の甕の小破片が出土してたのみである。

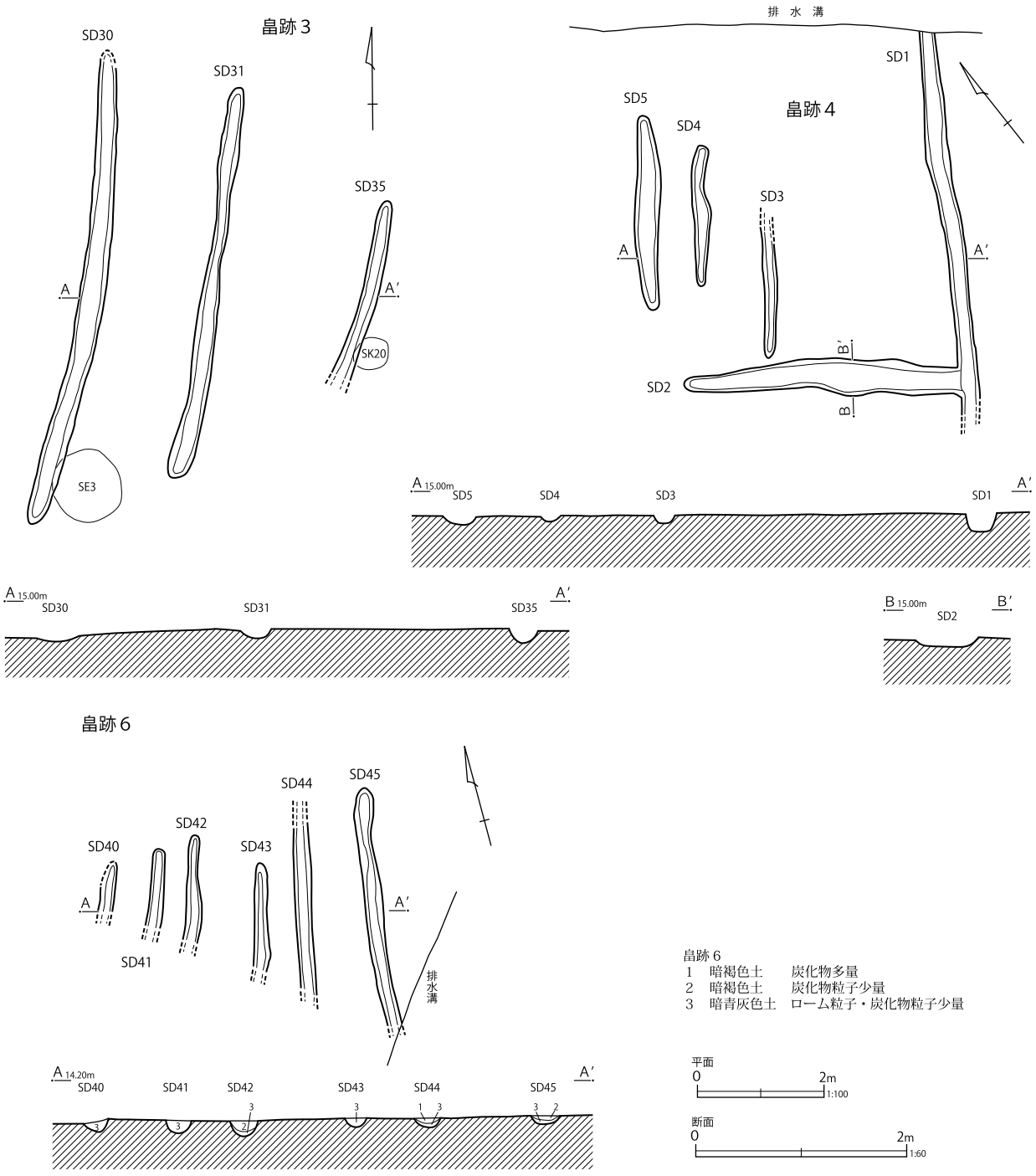
１は古墳時代後期の甕である。端部は外反し、若干面を持つ。風化が進んでいる。

第４号畠跡（第344・345図）

B区中央のやや西側、H－11・12グリッドに

第106表　1次平安畠跡一覧表(第344･346図)

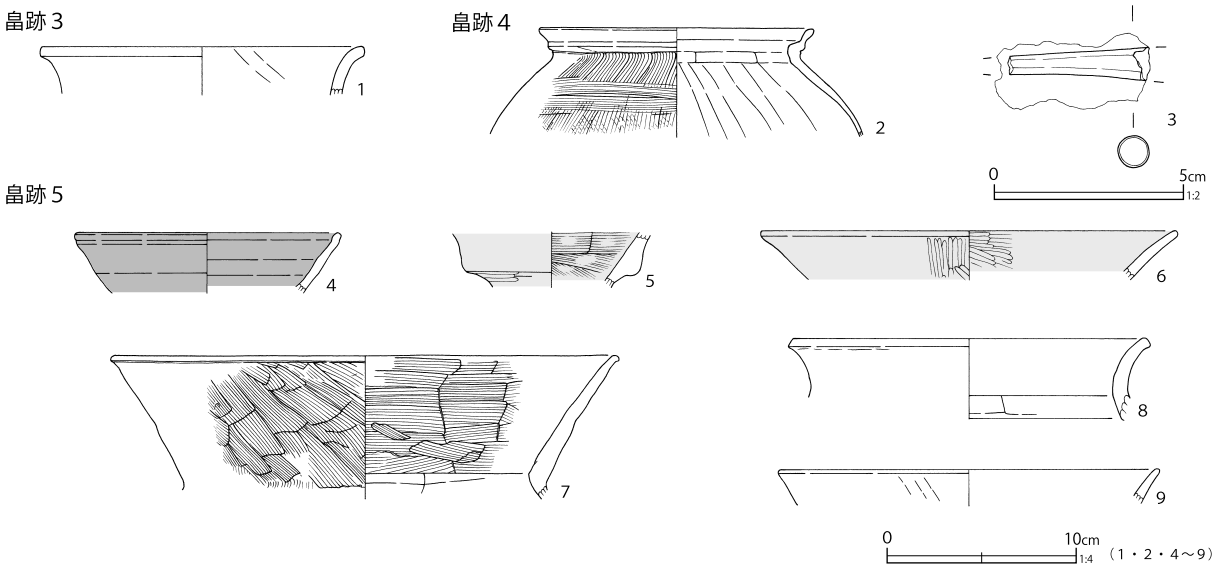
遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
畠跡３	平安	D－7 E－6・7	SE3(旧)	N－10°－E	(7.55)	0.28～ 0.38	0.05～ 0.11	皿形		30号溝跡
	平安	D・E－7	—	N－９°－E	6.15	0.19～ 0.38	0.02～ 0.11	鍋底形	甕胴	31号溝跡
	平安	D・E－7	SK20(旧)	N－14°－E	(2.87)	0.22～ 0.31	0.07～ 0.13	鍋底形	甕	35号溝跡
畠跡４	平安	H－12	SD2	N－32°－E	(6.21)	0.28～ 0.38	0.11～ 0.16	逆台形	土師器甕　須恵器甕	１号溝跡
	平安	H－11・12	SD1	N－55°－W	[4.35]	0.24～ 0.58	0.04～ 0.08	逆台形		２号溝跡
	平安	H－11	—	N－38°－E	(1.95)	0.17～ 0.21	0.05～ 0.06	逆台形		３号溝跡
	平安	H－11	—	N－35°－E	2.25	0.18～ 0.28	0.03～ 0.05	鍋底形	五領甕　壺　縄文網代底	４号溝跡
	平安	H－11	—	N－36°－E	3.08	0.27～ 0.37	0.03～ 0.05	鍋底形	S字甕　壺	５号溝跡
畠跡５	平安	K・L－14 K－15	—	N－46°－E	11.21	0.24～ 0.42	0.04～ 0.09	鍋底形	甕　壺　ロクロ土師器	37号溝跡
	平安	K－15 L－14・15	—	N－43°－E	12.66	0.22～ 040	0.05～ 0.08	鍋底形	五領台付甕　壺 鬼高甕　坏	38号溝跡
	平安	K－15・16 L－14・15	—	N－43°－E	[17.62]	0.17～ 0.38	0.03～ 0.10	逆台形	五領山陰系壺　壺 甕　S字鬼高甕	39号溝跡
畠跡６	平安	P－19	—	N－23°－E	(0.83)	0.22～ 0.24	0.07～ 0.12	鍋底形		40号溝跡
	平安	P－19	—	N－21°－E	(1.26)	0.19～ 0.23	0.06～ 0.12	鍋底形		41号溝跡
	平安	P－19	—	N－17°－E	(1.70)	015～ 0.25	0.15～ 0.20	鍋底形		42号溝跡
	平安	P－19	—	N－15°－E	(1.72)	0.18～ 0.25	0.05～ 0.13	鍋底形		43号溝跡
	平安	P－19	—	N－11°－E	(2.65)	0.22～ 0.27	0.04～ 0.08	鍋底形		44号溝跡
	平安	P－19・20	—	N－９°－E	(3.82)	0.21～ 0.32	0.05～ 0.08	鍋底形		45号溝跡跡



第344図　第３・４・６号畠跡

位置する。重複する古墳時代前期の第 34 号住居跡より新しい。第１号溝跡より東側は撹乱等で大きく壊されており、本来は更に東側に広がる可能性がある。第１・２号溝跡は、T字形に接合しており、畠の区画溝と考えられる。さく跡の走行方向は、N－35°～ 38°－Eである。間隔は狭く、第４－５号溝跡間で 0.5 m、第３－４号溝跡間で 0.7 mである。

各々の形態は、先端の丸い溝状である。長さは第４号溝跡 2.50 m、第５号溝跡が 3.08 mである。



第345図　第３・４・５号畠跡出土遺物

第107表　第３～５号畠跡出土遺物観察表（第345図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(16.6)	[2.6]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	橙	畠跡３（SD35）	
2	土師器	台付甕	(14.4)	[5.7]	－	ＡＣＩＫ	20	普通	黄灰	畠跡４（SD５）　H-11G　内外面煤付着	197-7
3	鉄製品	煙管	長さ[3.8]　径0.8×0.8　重さ12.5ｇ							畠跡４（SD１）	222-2
4	ロクロ土師	坏	(13.6)	[3.2]	－	ＡＣＩＫ	30	普通	褐	畠跡５（SD37）　内外面黒色処理	
5	土師器	壺	－	[2.9]	－	ＡＣＥＩ	15	普通	灰白	畠跡５（SD38）　内外面赤彩	
6	土師器	壺	(22.0)	[2.6]	－	ＡＥＩＫ	5	普通	にぶい橙	畠跡５（SD39）　内外面赤彩	
7	土師器	甕	(26.6)	[7.6]	－	ＡＨＩＫ	10	普通	にぶい橙	畠跡５（SD39）　外面煤付着	
8	土師器	甕	(19.0)	[4.3]	－	ＡＣＥＨＩ	5	良好	にぶい黄橙	畠跡５（SD38）　外面煤付着	
9	土師器	甕	(20.0)	[1.8]	－	ＡＣＨＩＫ	5	普通	にぶい黄橙	畠跡５（SD39）	

第３号溝跡は1.95ｍが検出されたのみで、北側が削平されている。第１・２号溝跡が幅0.30～0.60ｍ、深さ0.04～0.16ｍ、第３～５号溝跡が幅0.17～0.37ｍ、深さ0.03～0.05ｍである。覆土は確認できなかった。

畠跡を構成する各溝からの遺物は僅少である。平安時代のロクロ土師器坏、須恵器甕、土師器甕の破片が出土した。縄文時代の深鉢底部、古墳時代前期の土師器壺、台付甕、甕、近世の煙管の破片が混入している。

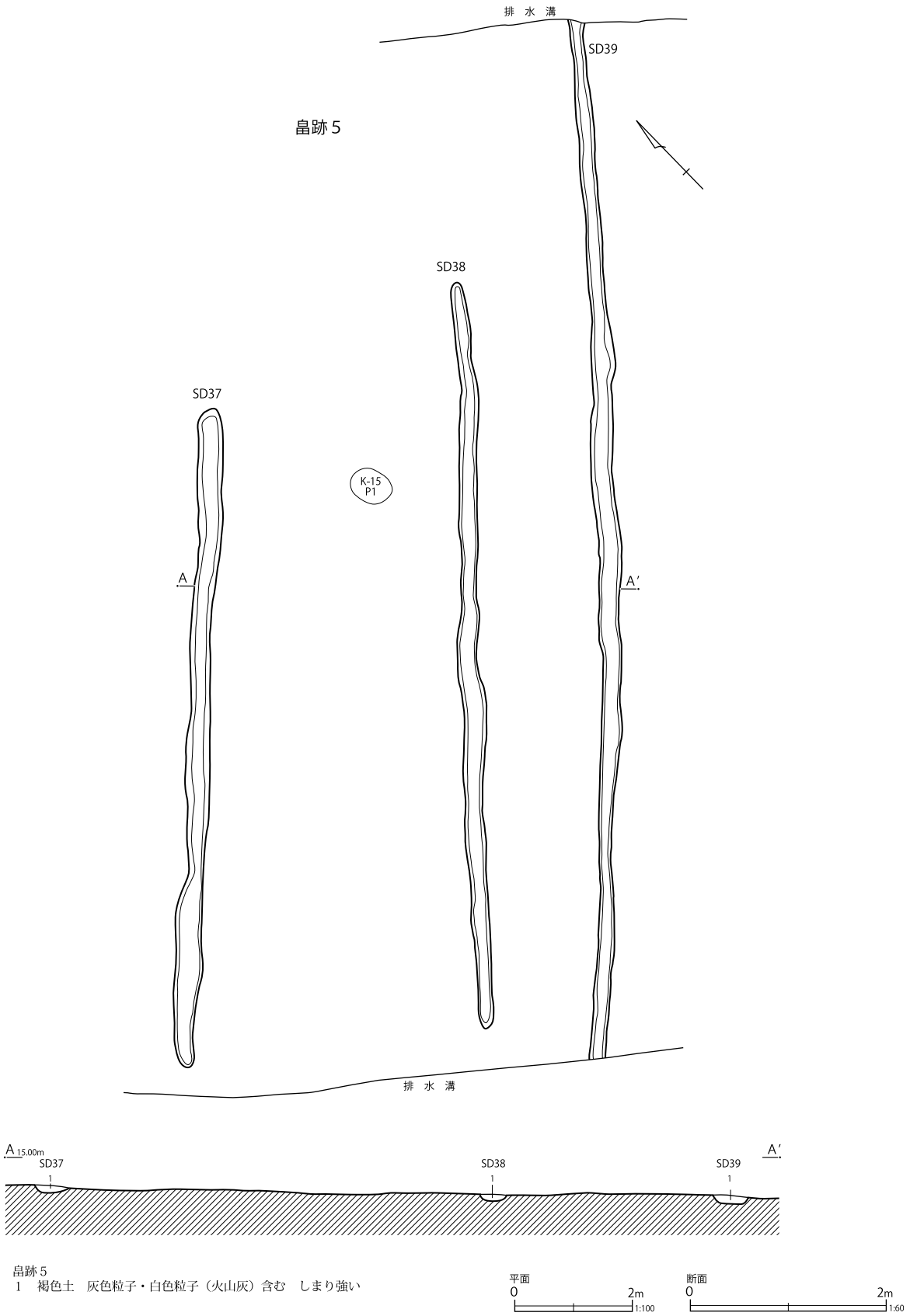
２はＳ字状口縁台付甕である。口縁部全体に横ナデが施されている。胴部外面刷毛目、内面指オサエ後ナデ。肩部に５条１単位の横刷毛が３周巡らされている。外面は煤により黒褐色を呈する。

３は煙管で、雁首の首部の破片である。

第５号畠跡（第345・346図）

Ｃ区の東側、Ｋ・Ｌ－14～16グリッドに位置する。重複する古墳時代の第68～70･77住居跡、平安時代の45～47・52号住居跡のいずれよりも新しい。さく跡の走行方向は、Ｎ－43°－Ｅである。さく跡の間隔は第37－38号溝跡間で4.0～4.5ｍ、第38－39号溝跡間で1.8～2.0ｍである。第39号溝跡は両端が調査区域外にかかり、他の性格の遺構である可能性も考えられる。

各々の形態は、先端の丸い溝状である。長さは第37号溝跡11.21ｍ、第38号溝跡が12.66ｍ、


排　水　溝
SD39
畠跡５
SD38
SD37
K-15
P1
A
A′
排　水　溝
A 15.00m
SD37
SD38
SD39
A′
1
1
1
畠跡５
1　褐色土　灰色粒子・白色粒子（火山灰）含む　しまり強い
平面
0
2m
1:100
断面
0
2m
1:60

第346図　第５号畠跡

第 39 号溝跡が 17.62 m である。幅は 0.17 ～ 0.42 m、深さは浅く、0.03 ～ 0.10 mほどである。覆土は火山灰と考えられる灰色、白色粒子を含む褐色土の単層である。

畠跡を構成する各溝からの遺物は僅少である。平安時代のロクロ土師器坏、土師器甕の破片が出土している。古墳時代前期の土師器壺、台付甕、甕、高坏、古墳時代後期の坏、甕の破片が混入する。

４は平安時代のロクロ土師器の坏である。内外面黒褐色を呈する。黒色処理か。５～９は古墳時代前期のものである。５は二重口縁状の口縁部で、分厚くなっている。径が小さく、口縁上段が更に直立して長く延びるようであれば、北陸系の有段口縁の細頸壺になる可能性がある。灰白色のベースに赤彩が施されている。調整は風化のため不明瞭だが、外面ヘラ磨き、内面刷毛目が確認できる。６は壺の口縁端部である。大きく外反し、二重口縁壺の上段になる可能性がある。内外面ヘラ磨き、赤彩が施されている。７は頸部から直線的に開く大型の甕の口縁部である。内外面刷毛目、口縁部接合時についたと考えられる凹凸が著しい。頸部の内面はヘラナデが施されている。２次被熱により、外面煤付着、赤変。８・９は甕の口縁部である。８はヘラナデ後横ナデ。頸部内面ヘラナデが施されている。淡黄橙色で焼成が良い。９は甕の口縁部である。ヘラナデ後横ナデが施されている。灰白色を呈する。

第６号畠跡（第 344 図）

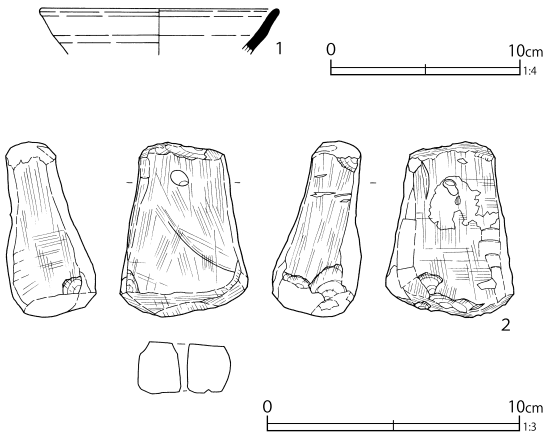
D区の東端、P－19･20 グリッドに位置する。南側は削平を受けており、不明瞭である。さく跡の走行方向は、N－9°－EからN－23°－Eまでやや幅がある。さく跡の間隔はまちまちで 0.3 ～ 0.9 mだが、広狭の間隔が交互であるようにも見受けられる。

各々の形態は、先端の丸い溝状である。いずれも削平のため、全体が検出できなかった。断面形は鍋底形である。長さは検出範囲で、0.83 ～ 3.82 mである。幅は 0.15 ～ 0.32 m、深さは浅く、0.06 ～ 0.13 mほどである。覆土は炭化物、ローム土を含む暗褐色土で、最下層はグライ化して青灰色を呈す。遺物は出土していない。

（６）グリッド出土遺物

遺構に帰属しない資料を、グリッド出土として取り上げた。A～C区からはほとんど出土せず、D区のO－19、T－20 グリッドから集中して出土した。器種は須恵器坏、甕、ロクロ土師器坏、高台付埦、土師器甕、砥石である。いずれも小破片である（第 347 図）。

２は、凝灰岩製の砥石である。上部中央に表裏両面から穿孔されている。砥面は６面で、整形時の平ノミ痕が認められる。２次被熱のため、全体が褐色を呈している。



第347図　１次グリッド出土平安遺物

第108表　１次グリッド出土平安遺物観察表（第347図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.4)	[2.4]	－	ＩＫ	15	良好	灰	T-20G　群馬県産か	
2	石製品	砥石	長さ7.0　幅5.1　厚さ3.5　重さ143.3ｇ			凝灰岩				SJ43№5 被熱により褐色 平ノミ痕あり　砥面6面	

報 告 書 抄 録

ふ り が な	やしきうらいせき
書 名	屋敷裏遺跡
副 書 名	首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における埋蔵文化財発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第422集
編 著 者 名	福田 聖
編 集 機 関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１ TEL 0493-39-3955
発 行 年 月 日	西暦2016（平成28）年３月23日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
やしきうらいせき 屋敷裏遺跡	さいたまけんはにゅうしみょう 埼玉県羽生市名 789－１他	112160	078	36° 12′ 11″	139° 35′ 49″	20110401～ 20120331 20131001～ 20140325	9,733.5	堤防強化

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屋敷裏遺跡	集落跡	縄文	住居跡 ５軒 ピット群 11基 土壙 39基 ピット 124基	縄文土器 石器	弥生時代の方形周溝墓は、東日本の太平洋側で最北端の例である。 古墳時代前期では住居跡から山陰、北陸、東海系の遺物が多く出土した。 古墳時代後期では、住居跡から脚付長頸壺などの完形の須恵器がまとまって出土した。 平安時代では、住居跡から国内最古級の金属口琴が出土した。
		弥生	住居跡 １軒 方形周溝墓 １基 土壙 ９基	弥生土器	
		古墳	住居跡 68軒 掘立柱建物跡 ２棟 土壙 28基 井戸跡 5基 円形周溝状遺構 １基 溝跡 ７条 畠跡 ２箇所	土師器、須恵器、鉄製品、石製品	
		平安	住居跡 26軒 掘立柱建物跡 １棟 土壙 12基 井戸跡 ６基 畠跡 ４箇所	土師器、須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品、石製品	
		中近世	土壙 ６基 井戸跡 ８基 溝跡 ８条 ピット 103基	陶器、中世土器、磁器、かわらけ、鉄製品、石製品	

要 約

屋敷裏遺跡は利根川右岸の自然堤防上に立地している。調査では、縄文～古墳時代、平安時代の集落跡が発見され、夥しい量の遺物が出土した。古墳時代後期の住居跡からは、完形の脚付長頸壺、短頸壺などが出土し、首長層との密接な関係が推定される。平安時代の住居跡からは国内最古級の金属口琴が出土し、国境の遺跡周辺における活発な物流を窺わせる。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第422集

屋敷裏遺跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第１分冊）

平成28年３月14日　印刷
平成28年３月23日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１
電話0493(39)3955
http://www.saimaibun.or.jp

印刷／株式会社 文化新聞社